Second Real/Virtual

鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

【Ｎコード】
Ｎ６７６３Ａ

【作者名】
鳥

【あらすじ】
『世界のもうひとつの姿』……意味不明なことを言う男と引き篭りゲーム大好き人間：色世時（シキヨトキ）は出会った。会話の流れからいっても怪しい以外の言葉が見つからないけど、しかし、気付いたときには手遅れで！　引き返せなくて！
刺激は欲しいけど、欲しかったけど……！
現実とはどこか、理想はどこか。彼らに出会ってそれまで浮ついていたトキの心は次第に“Ｒｅａｌ　ｏｒ　Ｖｉｒｔｕａｌ”へと近づいて行く。

第0話ー引きこもり　色世　時！ー（前書き）

初めまして、鳥です。よろしくお願いします。
初投稿作品です。
意味不明且つ稚拙な表現が多々見られます……書き漏らしや誤謬、それらの修正見落としも含め、素人丸出しです。
少しずつ勉強して、娯楽作品を提供できるように頑張っていこうと考えています故、なにとぞ宜しくお願いします。

第0話ー引きこもり　色世　時！ー

解っていてもどうしようもない。
求めたところでそれは夢想。
現実からの逃避が生み出す虚像。

しかし、望めばそれはきっと、どこかに存在するはずだ。

人生で知りえる情報には限りがある。
広い世界でそれら全てを知ることは不可能で、機会が訪ねてくる可能性が低いだけだ。

だからきっと、夢や妄想や想像を満たしてくれる現実はこの世界のどこかに存在しているのだ。
出会いがないだけで、機会がないだけで、それ以外にその現実を否定する理由はない。

そう。
だからきっと、世の中そんなもので溢れている……わけが無い。

人はただ憧れているだけだ。
実在しないものに――

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第０話－

－引き篭もり　色世時！－

遠くない未来。

どれだけ遠くないかを説明するとしよう。

まず、地上には人類が未だに繁栄している。

文明だって１０年や２０年で急激な発達を見せるわけでもないし、地球外生命体とグローバル関係を築いているわけでもない。

誰もが容易に想像できる世界だ。

素直に白状してしまえば、人類の文明は２１世紀初頭からほとんど進歩していない。

厳密に言えば、どうでもいいような技術力や、不要な物に対する進歩があったくらいで、これといった歴史的旋風を巻き起こすような変化は無いに等しかった。
社会的にも、技術的にも、文明的にも、だ。
どうでもいい事ばかりが多い。

……

……

何故かそういうものを考えていると、鬱陶しくなってしょうがない。

日本。

白州唯（しらすい）という場所があった。
ビジネス街と繁華街が隣接し、住宅街とは川で隔てられた人口１５万人前後の都市である。

都市部から住宅街へと伸びる路。
人ごみに紛れ、彼は暗い空を見上げながら心の中で憂鬱を白状した。

「……」

絶句。

理由を教えよう。
現在時刻は午前１１時１５分。本日の降水確率、０％
そう。

２０分ほど前は天気なんて気にしなくても済んだ。
なんせ、月並みの言葉を借りて表現しても違和感を覚えないほどの『澄み切った青空』『清々しい快晴』が、しっかりとその姿を見せていたからである。
それが今はこの様子。予告もなしに突然雨雲が頭上に発生し、いつ降り出してもおかしくない色合いを見せいてた。

しかも、季節は夏。
降雨によって、今以上に蒸し暑くなる可能性がある。
この際だから文句のひとつでも言っておかなくては気がすまない。
言ったところで気が晴れるわけでも、雨雲が消えるわけでもないが、現在軽装備に加え、空けてきた家の寝室の窓はフルオープン状態である。そんな状態で外出してきたのだ。

「……降るじゃん」

誰に聞かせるわけでもなく愚痴る。
珍しく天気予報を信用して外出してきたのにこれである。
目的は、予約していたゲームソフトの入手と、掘り出し物がないかという中古探索。

探索は全て無為に終わり、一時帰宅。その途中で雨雲に気付き、つまりそれが数秒前のことで、それから今につながる。

「……」

しかし、走って帰る気など起こらない。

（まぁ、引きこもりに回ってくる運なんてこんなもんだろうな）

自分を納得させた。

それが、納得を得ようとも空しさを残してしまう手段であることを黙殺しつつ、少年：色世時（しきよ　とき）は降り始めた雨から身を隠そうともせず、自宅へ向けて人間の平均的歩行速度約４ｋｍ前後で、いつもと変わらぬペースの足取りで歩き始めたのだった。

雨が強さを増した頃、トキの移動速度はほんの少しだけ上がっていた。

無意識に。

気分が良いわけでも、機嫌が戻ったわけでもない。

理由を考えるどころか、トキ自身は逃げるように家へと向かう自分に気付きすらしなかった。

これが現実なのだと、自分を取り巻く現実を横目で確認しながらゲームの攻略法を頭の中で捜索し始める。

色世トキが持つ現実に、もうひとつの、しかし初見であれば現実と認めがたいであろうが世界が迫っていた。

「彼女たちが来よ～」

デパートの2階に設えてあるカフェに3人は腰を下ろしていた。
成人男性ひとりと、女子2人。
家族でなければ交際関係にあるわけでもない。一口に言うなら仕事仲間である。

その内の1人、金髪が特徴の小さな子がガラス越しに曇り空を見上げて言った。

「彼女って？」

女の子の向かいに座る男性が聞く。
少女は外見的特長から日本人でないことは一目瞭然であったが、使う言語は紛れもない日本語であり、しかも流暢というレベルではない。一切の訛りが混じっていない日本語であった。

男性は純日本人だが、ハーフのようにも捉えられる顔立ちをしていた。

「ディマの事？」

3人目、黒のロングヘアーが特徴の少女が男性の疑問を解消してくれる。

「まさか、ディマたちまで彼を狙っているとはな……」

男性が溜息混じりに言ってから面倒にならないことを祈り、コーヒーを流し込む。

「パル。相手の細かい人数は判るか？」

男性の質問に女の子は目を閉じる。

店内に流れるスウィングジャズを楽しみながら、少女は自分達と同じ目的で色世トキに近づいているそいつらの状況把握に努めた。

「ディマがいる……それから、クワニーとハンズも」

それを聞いたロングヘアーの持ち主は微かに指を動かした。

「やっぱり生きていたのか」

男性が言い、少女の方に目をむける。

「あ……」

「あの男は私の獲物よ？
奪う気なら芹真さんでも容赦しないわ」

男性が言おうとするのを女性が遮った。それは暗黙の了解であり、説明は不要のはずだった。

「落ち着けよ藍。判っているだろ？
俺にあいつは殺せない。
お前かパルじゃなきゃ消し去れない」

パルと呼ばれる小さな少女はそんな2人を意に介さず、ひとりミートスパゲティを貪っていた。
そこへ新たなメニューが運ばれる。

「……とにかく、パルが喰い終わったらトキに接触を試みようと思う」

それに反応したパルの喉にパスタが引っ掛かったのを見て、藍は呆れて目を外に向けた。濡れたガラス越しに見える街は酷く歪み、汚れていた。

（まだ止まないのかしら）

雨を気にする藍の頭の片隅には色世トキの顔写真が浮かび、同時にあらゆる不安が心の内を締めていた。

同時刻。

ずぶ濡れた衣服に涼しさを覚えたトキは、半ば投げやりに雨の中を無言で進んでいた。

（あそこをBの連打――って、これはもう使った手段だ）

早足での帰宅途中。

いつものことであるが、トキの頭の中はゲームのことで一杯だった。

（買ったばかりのこれの攻略法出てたか？）

その時、雨音が減った。

（ぅん？）

トキは足を止め、状況の把握に意識を総動員した。

雨の感触がなくなったのである。

不快を覚える傍ら、清涼感を覚えていたのも事実であったからだ。

（傘？）

頭上に現れたそれ。

振り返ると、背後に１人の女性が立っていた。

（誰？）

「あなたは自分が濡れていることを自覚していないのかしら？」

外見から察するに２０代後半を目前にしたという感じのお姉さんだが……正直、何かのイベントですか、と聞きたい。

この蒸し暑い日に冬物のコート。いくら雨が降っているとはいっても、過剰すぎる降水対策。しかも、見た目から防水性があるとは思わせない生地のコートだった。

それに日本人でないことも判る。

「何か用ですか？」

彼女の質問には答えず、逆に質問を返す。

「用があるのは確かよ。

じゃあ、早速。　献血、する気は無いかしら？」

彼女は笑顔を見せて言った。

「実は、赤十字で献血をやっているのよ」

トキは周囲を見渡した。
ここは住宅街のど真ん中である。

（普通そういうのって、街中とかでやるもんじゃないのか？）

それを気取られたか、彼女は、

「もしかして疑っている？」

溜息が漏れた。
確かに、目の前のお姉さんは怪しい。
こんなところで献血どうのこうのよりも、なぜコート姿で仕事しているのか。

（早く帰りてぇ～）

「私の担当地区に別の人が入っていて、私がおこぼれになったのよ」

（つまり、担当地区を取られたんだ……）

「それで、ここまで足を運んだの」

トキはもう一度周囲を見渡す。

（なるほど。仲間はあそこか）

白い車体に緑色のラインが一本横に走った簡易献血車。バスでなく、大型のワゴン車を改良したものである。それがトキの左後方に待機していた。

「すいません。
一時的にでも雨を凌げたことに感謝します。
でも、献血は出来ません」

トキはきっぱりと断りを入れた。

「貧血気味、とか？
それから数時間以内に何か強いクスリを服用したとか？」

否定する。

（帰ってゲームがしたい）

それだけだった。
直ちに解放されたい。

そうすれば……

（あれ？）

そうすれば、どうなる？

ふとした疑問が浮かんだ。
毎日浮かんでいる気もする疑問。しかし、晴れない心の雲。

満たされることのない毎日。
トキの体中にその感覚が行き渡った。
見えない欠乏感。
それともこれは落胆なのか、虚脱感否めない何かと何かが確かに内にあった。
浮遊感をもたらすそれらを知る術を持たない故、疑問はいつまでも疑問のままである。

（不安か？）

トキの中に本物の不安が生まれた。
献血。
確かに注射は昔から苦手だった。
というか、得意な奴の方がおかしいと思っている。居るかどうかは定かではないが。

「どうしたの？」

再び彼女に気取られ、トキは戸惑った。

（何が不安なんだろう？）

自分のことを他人事のように考え、見直してみる。が、原因はわからない。
心此処にに在らず、とも違う気がする。
何かが自分に足りていない。
自分の求めるものは解放などではなく、もちろん献血でもない。

ここまで考えたトキの頭から帰宅の意思は半ばほど消えていた。

トキの肩に彼女の手が置かれる。

「大丈夫？」

顔色を確かめるように覗き込んでくるが、我に返ったトキは彼女に背を向けて歩き始めた。

「ねぇ、トキ君」

動かし始めた足を再び止め、トキは振り返る。
状況がだんだん悪化しているのをいま、しかと感じ取った。
名乗ってもいないのに自分の名前が相手に知られているのは何故か。

（俺の名前？
初対面――なのに、何で？）

言い知れぬ不安と背筋が凍りついたという錯覚を覚えるほどの恐怖。
感じるは彼女の視線。
冷たい何かが突き刺さる。

（調べられた？
何のため？
ていうか、誰だよ……）

直後、目に付く異変が起こった。

衝突音が雨音に混じる。

突然響いた轟音は異変の1つに過ぎなかった。　意表を突くように耳に障った轟音よりも、トキは降り続ける雨が止まったことに驚き、自分の目を疑った。

「何だ――っ!?」

僅かに冷静を保ちつつ、トキは轟音の原因に目をむけた。

そこで目に飛び込んできたものは、無惨に変形した献血車。頑丈な車体がひしゃげ、内側の搭乗者を圧死に追い込んでいる様が垣間見えた。

（雨が止まっているのに献血車の残骸は動いている?）

バウンドする残骸、砕け散るガラス達。

舞い踊るは破片。

上がる悲鳴は金切り。

ふと思いついたトキは振り返り、しかし、トキの予想は外れて彼女はしっかりと動いていた。何が原因で雨が一時停止したのか。雨だけが停止し、車の残骸は動いているのか。その原因が出会ったばかりのこの女性による何らかのトリックではないかと疑っていたのだ。

（時間が止まったわけじゃないのか……じゃあ、一体どうして雨が止まった！？）

思考を巡らせる。

腑に落ちないこと、納得できないこと、理解できないことが一斉に起こったために頭は僅かに混乱していたが、整理はできた。

何故、彼女は自分の名前を知っているのか？

雨が止まる現象が自然界にあったか？

１１０番……１１９だっけ？

現実か？　しかし、血も流れているし、どう見ても演技じゃないのはわかる。

「ディマ！」

トキが携帯電話を取り出した時、１人の男がトキの目の前に降り立った。

そいつが一瞥をくれると、

「こっちに問題発生か？
こんな奴早く連れて行けば良いだろ」

「彼らが来たの？」

初対面でかなり失礼な物言いの男は相当焦り、それに対して女性：ディマは冷静だった。

「ん？」

ディマとトキの顔が合った――その瞬間――高速で何かがトキの右耳を掠めた。

背後で飛来してきたがコンクリートブロックに突き刺さる。

目で、飛来し突き刺さったそれを追う。

どう見ても日本刀でしかなく、もちろん、刀身が掠っていった部分は切れていた。とても小さい掠り傷だが、痛みがあるのは確かで、しかもそれは予期せぬ攻撃の部類に入ったため、覚えた衝撃は先の轟音よりも僅かに大きい。

「痛っ――！」

トキは振り返り、日本刀が飛んできた方へ顔を向ける。

そこにはまたしても見覚えの無い連中が立っていた。

「今日は厄日か……！？」

面識のない人間からこれだけ声をかけられる日はそうそうない。

しかし、ディマたちは彼らを知っているようだった。

「真ん中のあの男は……」

ディマの確認に男がうなずく。

「ああ、あいつだ。
“デストロイ・マーチ”の芹真（せりま）だ」

「やはり。
左右の彼女たちは分かるわ。
右側に立つ娘が、元鬼の姫よ。
反対側の餓鬼は光の魔女」

「光の魔女ってことは、ボルト・パルダンか？」

トキはそこまで聞いて割り切った。

（頭のネジがゆるい連中なんだぁ）

鬼に魔女。
それを知っていると公言する偽献血事業者のディマたち。

トキは一刻も早くこの場を去りたい一心を取り戻し、見知らぬ連中の合間を縫うように避難を始めた。

（ゲームか映画かテレビか、いずれかの影響を受け過ぎたんだろな、アレは……）

新たに現れた3人はトキの動きをしっかりと見守っていた。
悪い印象を与えたとも知らずに、芹真は長袖を捲り上げ、左右の2人に確認を取る。

「じゃあ、打ち合わせ通りパルはディマ、藍（あい）は……」
「あの呪術師を完全に殺す。それでいいでしょ？」

芹真は頷き、同時にトキがこの場から逃げ出そうとしている事に気付いた。

（じゃあ、説得するとしますか）

合図の直後、まず藍が走った。
強烈過ぎるスタートダッシュ。あまりにも強すぎて地面が抉れるほどの突撃。
藍は真っ直ぐクワニーに向かい、その途中で警棒を取り出した。

トキがこの場から少しでも離れたことを確認したボルトは、その場で光を集め始めディマに突っ込んだ。

「トキは渡さないよ～！」

芹真はトキを追った。
追った、と言っても芹真にとってその行動は跳躍でしかなく、現に1回飛んだだけでトキの目の前に降り立つことに成功した。

「やあ、色世トキ君。
はじめまして」

突然目の前に降り立った芹真に、

「どうも」

と、トキは素早く短い返事を返すのみで足は止めない。
すぐさま進路（しせん）を芹真の真横、左脇に変え、体を振る。

芹真はそれを塞ごうと横へ飛び出し、トキの前に立つ。
だが、それはトキの望んだ反応。
そこから切り替えして芹真の右脇を抜けるためのフェイントであった。

残念ながら、フェイントは芹真にとって予想の範囲内でしかない。
トキが予測してそれをやったように、芹真もまた予測してトキを試していた。

「結構、運動能力はわかった。
それで、トキ君はそれっぽっちの力で俺達から逃げられると思っているのか？」

芹真の手がトキの右腕を掴んだ。

「あんたも俺に用なのか？」

反撃の質問に芹真は頷く。
大切な用件がある。
回りくどい説明でトキを説得できないのは、ディマの会話を盗み聞いていたから分かる。

「俺の事務所でバイトしないか？」

芹真は掴んだトキの右腕を解放した。
脅しも禁物。
あくまでこれは説得なのだ。

「いいです。遠慮します。
金は要らないし、それに働くなんて俺には向いていない」

踵を返し、早々に立ち去ろうと足を持ち上げる。
言って聞かせたい芹真と何も聞きたくないトキ。
その背中に芹真は言葉をぶつけた。

「仕事の内容を聞いてもいないのにツレないこと言うなよ。
少なくとも、あいつらも君をスカウトしたくて君の前に現れたんだぜ？」

コート姿の女性が頭に浮かび上がった。ディマと言う変わった名前の持ち主が。

（あの明らかに嘘を言っている赤十字のことか？）

早足のトキを追いながら芹真は続けた。

「あいつらのところで働くのはつまらないぞ」

「いや、働く気なんか……」

「俺の事務所なんて滅多にやることはないが、しっかり金は出す」

「金が全てだと思っている人ですか？
じゃあ、尚更お断りです」

金には困らないし、当分使う予定もない。
飯だって充実している。携帯電話だってほとんど使わないから金がかからない。
電気も止まっているわけじゃないし、ガスも通っている。それでも不自由はないし、資金的不足には当分なれそうにない。

「じゃあ、こんなのはどうだ？」

改めて芹真が言う。

「新しい刺激。新鮮な世界。
目に見える世界で展開されている、もうひとつの、普通なら見せられることのない世界」

その一言にトキの足は止まった。

「俺の事務所はそのためにあるようなものと言っても過言じゃない。
まさしく君のように刺激を求める人を雇っていたりもするんだよ」

一瞬目の前の男の正気を疑ったが、疑問よりも好奇心が先行し、
ノーとイエスのどちらかを選ぶ前に質問が口から零れ出た。

「どんな事務所なんですか？」

芹真は大まかな概要から説明した。

「全万事務所だ」

「は？」

どんな仕事かを教えて貰いたかったトキにとって、それは理解に時間を要する回答だった。が、芹真はそれを予想し、答えを用意していた。

「文字通りさ。頼まれれば何でもする。で、頼まれなければ何もしない。そういう事務所」

（何でもって……）

非常識な仕事が舞い込んできたらどうするのだろうか。

懸念。

しかし、どうしてか浮遊感が消えた。

「君には才能がある。

俺の事務所だったら自分の才能に気付くことも、磨くことも出来る。暇な人生にオサラバできる可能性もあるんだ」

瞬間、コンクリートの破砕音が響く。
いま来た道の方から土煙が立ち登っていた。瞬間、宙に何かが浮いたソレは、色合いから先ほどひしゃげ転げたワゴン車の残骸と推測できた。

「新しい刺激って、あんまり仕事がないのに？」

「刺激は保障しよう。
何も依頼が来たときだけが刺激に出会える方法ではないんだ」

正直、意味不明。

それはただ単に考えるのが面倒だからだろうか。或いは、後戻りの出来ない選択肢に直面しているからだろうか？

芹真という人物の話が気になる反面、まともに取り合いたくないと心構えている自分も僅かながらに存在していた。
加えてトキには“何もない＝暇”という方程式が既存していた。そらら時間的空白の埋め合わせにゲームをする、本を読む、映画を見るなど、メディアに触れる時間とそれを提供する娯楽が存在する。
それゆえに依頼がなくても刺激的な事務所でのバイトというものがどうにもイメージできず、理解できない。

（軽く混乱しているのか、俺？）

芹真が微笑む。
何が愉快なのか、芹真の機嫌は声に現れるほど良くなった。

「そうか、来るんだな」

（はっ？）

芹真が放った言葉にトキは動揺を隠せなかった。
何を根拠に断言したのか。
心の中でまだ迷っているにも関わらず、どうして決め付けるのか。

「トキ。
君はいま、どんな顔をしているか自分でわかるか？」

その台詞を聞き、嫌な予感に見舞われた。
右手の指が頬に伸び、引きつり気味の頬に触れ、それを確かめる。

（……もしかして）

「嬉しそうな面しているぞ？」

実際に表情というものを意識し、顔がどうなっているかを知った。
確かに綻んでいた。

どうしてか、笑顔に分類される満面でないにしろ喜びを象ったものが現れている。

「ようこそ新世界へ」

またしても“理路整然”と言う言葉とはかけ離れているとしか思えない言葉を放つ芹真。

「新世界？」

「悪いが、俺の事務所に来たら、今までの人生の中に戻っていくことは出来ないぜ？
あ、待てよ。
出来なくはないが、色々面倒なだけだ。
それでも、トキは自分の欲望を果たしたいと思わないか？」

「……」

沈黙。

人生がどれだけ予測不可能だろうと、結局は自分が望んだ通りにならない。
故に結局はつまらないものでしかない。

欲張りだ。

刺激があれば良いというものではない。
自分が欲する刺激がないというのは言い訳に過ぎない。

トキは今までの自分を改めて思い出した。
他力本願、優柔不断、自己中心的かつ矛盾三昧。
もし、新しい刺激に出会えることでそんな自分を変えることができるなら――

瞬間。
耳元を強い気流が通過し、一瞬後に背後から何かを叩きつけたような音が伝わる。
トキは、芹真の右腕が伸びていたことに気付いた。

拳は丁度トキの左耳の真横で止まっていることから、空気の流れの正体は芹真の拳だと納得できた。

問題は、その後。

何かが芹真の拳で高速移動し、この場に存在する何かにぶつかった。
確か後ろはブロック塀だったような……

「どうする？
トキ君」

行くか、行かないか？

しかし、トキにとって拒む事の方が難しい問いかけだった。

その理由が、先ほどから話題の刺激。
そして、もうひとつ、引き篭もりからの脱出。
この2つが大きかった。

（この人、普通じゃねぇ……）

どう考えても変人。
そんな奴が目の前に現れる世界が存在するのだろうか。

否定したくはなる。
だが、これも理不尽な世の中では有り得ないと言い切ることは出来ない。

それを知っているトキは、自らに言い聞かせて納得し、興奮に発熱した頭に冷静を呼び戻した。

（そうか、どこにも無いからこの世界にあるのか……って、何かのゲームであったな！
でもこれは現実だ！）

雑念交えて考えつつ、芹真への答えを用意した。

「本当に……」

「期待してくれ。
君には才能があって、俺達には君の才能を芽吹かせるだけの才能と理由、それから必要がある」

トキの言葉を遮り、芹真は言う。

「大きな可能性を持っているんだ。君は」
「可能性？」

芹真の口から度々発せられる『可能性』というワード。
それが何を示すのか、トキは疑った。

一体、自分のどういった可能性に期待しているのか。
そもそも何をどのように考えて自分を必要としているのか。

「そうだ。可能性だ。
自分に与えられる選択肢のことだよ」

よくは理解できない。
理解はできないが、心の中ではおぼろげなイメージが組みあがり、感覚的には頷けた。

もしかしたら、自分が最も欲するものが“可能性”だったら？

先の見える人生より、先の見えない人生を歩みたい。

選択肢の残っていない現実に、新たな選択肢を加えることが出来たなら。

彼がそれを与えてくれるかもしれない。

もし、それを拒んだらどうなる。

聞き入れたらどうなる。

（でも……話がウマすぎないか？）

冷静さを取り戻してから考えてみた結果、不安がよぎった。

ずん、と再び重い音が響いた。

地面を走る振動。

揺れる電線。

それでも静かな住宅街が、どうにも不自然な気がしてならなかった。

芹真はそれを気にせず続ける。

「トキ君が引きこもっていた理由は、現実逃避。

それから、存在しないものへの憧れ。

違うかな？」

何度目かの質問に、嫌気を感じずには居られない。

しかし、的を射ていた。
言い逃れようと目論んでいた矢先、芹真は突如として急所に触れてきたのだ。

「それを知っているからこそ、君に新しい現実を教え、与えてあげるというんだ」

――現実。
さんざんに言われ、トキは決心した。

「面白そうな話でしたが、お断りしますんで。
それじゃ」

それ以降振り返ることも立ち止まることもせず、トキは全力で走り去った。

芹真という男が放った最後の最後、その台詞で踏ん切りがついた。
現実とは、人が与えることのできる範囲に限界がある。
それを軽々しく与えるなんて言える奴はそうそういない。否、いていい筈がない。

（あいつはやばい！
あんな危なそうな奴のところで働く人の気持ちが知れねぇ！）

さっきは突然すぎて混乱していたが、冷静になればおかしなことが一気に起こり過ぎであった。

雨に、謎の騒音。
偽赤十字に、芹真。
それからバイト勧誘。

（やってらんねぇ、この国も末期か？
危ないバイトなんてやってられっか！）

内心で叫び放題叫び、力の限り走り続けると、気がつけば家は目の前だった。
帰宅と同時に意を固める。

（当分、外出は控えよう……）

ただでさえ外出数が少ないのに、である。

あまり関わりたくない奴を完全に振り切ったと、この時は思っていた。
２度と会いたくないとも小声で呟いた。

しかし、そんなトキの決意も虚しく、この後、彼等からトキに関わってきたのだった。

第1話－Raid & Escape－

台風が過ぎ去った空に私は憧れた。

純粋になれない。
だから願う。

純粋になりたい――

この空のように
どこまでも澄み切った青。

雲。
それは青を引き立てる存在（モノ）なのか……
それとも、青がその白い雲を引き立てているのか。

私にはわからない。

それでも……

ＰＭ１８：４４

色世トキの家は住宅街の至って物静かな場所にあった。

二階建てで、比較的に大きな家。そこで1人暮らし。

必要もないのに実家から送られてくる多額の金。

平均で月10万も送られてくるのだった。

いやはや……

右の頬を指先で軽くかき、まだ少し水気が残る短髪の黒髪と、眠気に支配されつつある空ろな眼でこの家で唯一の住居人であり家主である色世時（シキヨトキ）は乾燥機の前に立っていた。

今日の出来事を思い返してみる。

まず、部屋の窓を全開にして外出。

新鮮な風を室内に入れるためだったのだが、これが後の災厄に繋がる。

街での探索中に突然の雨。

降水確率は0%だったハズなのに……

走るのも鬱になったので、ゲームの攻略を考えながら帰宅途中、変な連中に遭遇。

そいつらは俺を何らかの会員にしたかったらしく、色々言ってきた。

途中で首を縦に振りそうになったけど、そこは冷静になって切り抜けてきた。

雨の中を傘も差さずに走ってきたものだから全身ずぶ濡れ。
加えて、部屋の中は軽く水浸しで貴重なゲーム機がオシャカ。

「……」

そして現在に至る。
何故か知らないが、ブレーカーまで落ちているし。
よって、冷蔵庫が機能停止。
賞味期限の危ういものはゴミ箱行き。

再び買い物に行って、帰宅。
今度は傘を持って行った。

帰宅して間もなく、風呂場の窓が開いていることに気付いて、泥棒が入っていないかを確認。
そういった類は家中探していなかった。
風呂場に戻って窓を閉めようとしたところ……

服の一部が蛇口の長い取っ手に引っかかり、再び全身ずぶ濡れ。

「……やってらんねぇ」

そして、ひとり呟く現在に至る。

ちなみに、2分前。
トキは乾燥機の隣に置いてある身長計で自分のサイズを測定。

結果――
――縮んでた。

（厄日だ……）

ピンポーン

と、珍しく家のチャイムが作動する。
突然のチャイムにトキはビクついた。

誰かが我が家のチャイムを押したのであり、それに応えないワケにはいかない。
だって、留守じゃないだからさ。

それにしても、久々の来客だった。

―第1話―

―Raid & Escape!―

トキは玄関の扉を開け、その先にいたのが――

（中学生？）

か、どうかさえ微妙なラインの身長と体格の女の子。

艶のある金髪に顔立ちからいって、外国人であることは明確だ。

正直、トキは安心した。なぜなら、この近所の治安は良くない。

「色世トキさんですか？」

挨拶もなしに体育系の服装（上着に水色のTシャツとスパッツと

いう組み合わせ）の少女はいきなり質問してきた。

「そうだけど」

「上がっていいですか？」

トキが答えを返した直後、更にいきなりな申し出がきた。

「は？
待った。君は何だ？迷子か？
悪いが……」

「迷子じゃないよ」

事情を聞こうとしたトキを遮り、少女は説明する。

「お仕事で来たんだよ、トキ」

笑顔。
そして気付けば溜め口。
まぁ、どうでもいいけどさ。

（仕事？）

一体どんな仕事があってこの家を訪れてきたのか、トキは考えた。
人違い……じゃなくて、場所違い？
とにかく、どこぞかの業者に依頼を出した覚えは皆無だった。

「仕事って、何の？」

「ん～。
教えていいのかなぁ？」

真剣に悩んでいた。
やはり、どこかに依頼した覚えは無い。

「ま、いっか。
私はトキの護衛と勧誘で来たんだよー！」

ハイテンションの少女と逆にローテンションのトキ。
しかし、会話はまともに繋がった。

「何から俺を護衛するんだ？」

アホ臭さのパラメーターが画面上に表示されていたのなら、すで

に上限を超していただろう。

「昼に会った人たち覚えている？
ディマって人」

いちいち覚えている奴なんてまず居ないだろ――　なんて言えるはずもない。
さすがに子供相手にそれは大人気ない。（ってか、俺も未成年だけど）

「えーと、身長が高いオバさんだよ」

「……もしかして、自称赤十字の？」

辛うじて思い出した気がする。

「――？

そう、その人だよ！」

「当たりかよ……
で、何で俺が襲われなきゃならないんだ？」

まず、第一の疑問だ。
というか、こんな少女の話しをまともに取り合っている俺は何な

んだ……

暇人？
もしくは変なものに理想を抱く人間か？

「え？
それは、トキの才能が類稀すぎて、誰もが欲しがるようなものだからだよ」

玄関の扉はいつの間にか閉まっている。
少女は扉に背を預けて説明したのだ。

「……何でテストもしていないのに俺の才能とかがわかるんだ？」

テキトウな質問。
正直、会話に飽きてきた。

「だって、そういう世界だもん」

（アホか。どういう世界だよ……）

これ以上どうでもいい話をしてもキリがない。
そこでトキは切り出すことに。

「依頼人は？」

第２の質問。
ちなみに、トキにはまったく依頼をした記憶が無い。

よって、第三の者の仕業だろうと予測を立てた。

「じゃあ、上がっていいですか？」

「上げたら教えてくれるんだな？」

少女の話しを信じているわけではないが、暇つぶしにはなる。

「教えるよ」

再び笑顔。
コイツ、俺で遊んでいるんじゃないだろうな？

「あの子供は？」

展望台の上で男が聞いた。
その隣にはディマが居て、それからもう1人、呪術師のクワニーがいた。

「ボルトよ。ボルト・パルダン」

「あの光の魔女か？」

迷彩のバンダナに黒い特攻服を纏った男が聞いた。

「そうよ」

タンクトップに黒ジーンズ姿のクワニーが別の質問をする。

「ボルトって、農村でクレムリンの一族を追い詰めた――
あのボルト？」

「それだけじゃないわ。
この国でも赤鬼族を壊滅に追い込んだこともあるし、
玄武一族。
ドラキュラ伯爵。
アヌビス部隊等。
それらを襲い、壊滅もしくは敗走させたのも全てボルトの仕業よ」

語るディマの話を受けきれないバンダナ男。

「まさか……あんな餓鬼にチームアヌビスが？
有り得なねぇだろ？」

クワニーも認めたくはない。
だが、今の話の中にはディマ自身、その場に居合わせた話だってある。

武闘派でよく耳にする玄武一族。
そいつら主催の社交会でボルトは会場を火の海にした。

「信じられないのならそれでもいいでしょうけど、いざ戦闘となった時に後悔するのはアナタだから」

棘のある言葉を放ち、バンダナ男を黙らせる。

「ハンズ、確かにあの子供は危険だ」

「でも、昼間の戦闘でも閃光を出すくらいしかできなかった奴っすよ？」

バンダナ男：ハンズは反抗するように言う。
そんなハンズを置いて、クワニーには気がかりなことがあった。

「確かにハンズの言うことにも一理ある」

「まさか、あなたも彼女の力が信じられないの？」

「あの餓鬼の力を疑っているわけじゃない」

「じゃあ、何？」

「俺が以前遭遇したボルトの力は、昼間の戦闘の時とは比べ物にならないものだった」

「それで？」

「どうして、昼間の戦闘で本気を出さなかったのか気になる。
本気を出していれば、俺たちなんて一瞬で殺れたハズ」

「そうなのか？」

クワニーの説明を聞いて、ハンズの質問がディマに飛ぶ。

「ええ。確かに、不自然だったわね。
あのボルトが、あれだけしか力を使わないなんて」

「つまり、２人はあの餓鬼が本気を出していないのを知っているん

だな？」

ハンズが聞く。
３人の中で最も若いのがハンズだった。
ちなみに、いま３人がいる場所は都市部にあるビルの中に設けられた展望台で、３人の向く方角は北の住宅街が見渡せる場所だった。
しかも、標的である色世トキの家はほとんど障害物なしで見える。
絶好の観察ポジションを確保してから早４時間。

「知っているからこそ、下手に動くことが出来ない」

警戒しているからこそ、すぐに接触しなかった。
昼間もそうだった。事前に準備していたことを実行したまで。
ただ、邪魔が入ったのは計算外だった。

「それに、芹真の事だ。
すでに誰かに張らせている」

クワニーとディマが最も心配することだ。

「張るって？
あの餓鬼が現れたことか？」

ハンズはボルトのことを良く知らない。
だが、ボルトと同じ事務所の芹真の事なら知っている。

「いえ、下手すれば鬼の姫が――
藍が来ていたかもしれない」

「藍？」

ちなみに、ハンズが知っているのは芹真だけで、他の事務所員は知らない。

「おい、一体芹真の事務所は何人いるんだ！？」

これ以上新しい名前が出てきたとして、ハンズは覚えきる自信がない。生まれつき記憶力には自信がないのだ。

「3人だ」

「……3人だと！？」

「ハンズ、お前は芹真事務所に関する情報を耳にしなかったのか？」

呆れるクワニー。
その横でディマが懐中時計を確認している。

「いや、何ていうか、凄い奴らが集まっているって話だろ？
それなら聞いたけど……
けど！３人だろ！？」

クワニーが頭を振った。
相当呆れているということが察知できる。

「凄い３人じゃない。
セカンドリアルの中でも、飛び切りぶっ飛んだヤバイ連中なんだよ！」

語尾を強調して、叱責するように言った。

「はぁ？」

「芹真はショボイ奴なのか？
考えてみろ！協会の本隊でさえ手を出そうとしない奴だろ？」

「あぁ、た……確かに」

「あの餓鬼だってそうだ。
さっきのディマの話を聞いていなかったのか！？」

（クワニーが警戒状態に入ったわね）

激情したクワニーを見て、ディマはあることを確認する。
気付けば周囲の客は自分たちを残し、ゼロ。

私達の位置を発見したか……

時間の関係もあるのだろうが、ここも一応は観光スポットとしてある程度知られている方だ。
それなのに突然この場所から一切の人が去り自分達だけが残っているというのはあまりにも奇妙。
人払いの術でも使ったのだろう。

「ハンズは行きなさい。
クワニー、ここを任せられる？」

「え、何だ？
どうしたんだよいきなり？」

ディマが入ってきたことに少し驚くハンズ。
逆に、クワニーはその一言を聞きハンズを叱るのを止めた。

「ディマは？」

「私とハンズは接触してみる。

それで、先にハンズを行かせるわ」

「本気か！？」

「俺に何させる気だ？」

クワニーが顔を向け、再び口を開く。

「お前がディマより先にトキに接触するんだよ」

「え！？だって、魔女が……」

「大丈夫」

不安を隠しきれないハンズの言葉を遮り、ディマは告げた。

「仮にも、あなたは芹真に挑むつもりなのでしょ？」

穏やかな口調で言うディマ。

クワニーは出入り口の方に顔を向ける。

「芹真に挑む時、そんな弱気で勝てるの？」

「……言われてみれば。確かにそうだな！」

ハンズの顔が不敵な笑みで彩られていく。

「それに、あなたのお兄さんはあなたを高く評価している（らしい）んだから。もっと自身を持ちなさい」

「へっ、言われるまでもねぇ！
先に行ってりゃいいんだろ？」

「2人とも急げ」

意気込むハンズをよそに、重い口調でクワニーが言う。
その時、広い空間にエレベーターの到着を告げる短い音が響いた。

「来たぞ」

「意外と早かったのね。
ハンズ、ボルトは任せたわ。引き付けておくだけでも上出来よ」

ディマが言い終える前にハンズは展望台の壁をすり抜け、眼下の景色へと落ちていった。

「つまり、養父からの依頼だということか？」

ＰＭ１９：１３

金髪の子供が自宅に上がってから早３０分が経過したところ、やっとのことで依頼人が判明。

「うん。まぁ、そうだけど」

「で、俺をお前たちと同じ事務所で働くようにするのも依頼の内だと？」

「そういうことになるね」

誤魔化そうとしているのか、少女は笑顔を向けてくる。

「えーっと、ボルトだっけ？」

「覚えてくれたの？」

「あのなぁ～

一対一で向き合って会話して、しかも３０分かそこらで名前忘れる奴なんていないって」

「え、でもかなり名前覚えるのが苦手な人だってデータの中にあっ

たから」

どんなデータなのかツッコミはしない。
ツッコミはしないが、かなり気になる。

「大体、危ない仕事なんだろ？」

「うん」

こういうところを素直に答えてくれるなんて……
親切なんだか、無神経なんだか。

「俺を勧誘するのはいいけど、俺に仕事はあるのかよ？」

「あったら来るの？」

「行かん」

断言。
それに対してボルトは頬を膨らませる。

「何それーっ！
聞いておいてそれはないじゃん！」

「普通行かないって！」

「トキは普通じゃないじゃん！」

かなり失礼な単語オンパレード。

正直、これが十何分も前から続いている。

質問してはキレ、回答が来ては不愉快になる。

「それに、お前は一体何年生だ？

中学か？それとも小学生？そんな歳でバイトなんてして大丈夫なのかよ」

どっちにしろ、子供がうろついている時間にしては遅い。

そんな心配も兼ねて悩むトキの目の前に、ボルトは両手の人差し指だけを立てて示した。

「今年で１２歳になる！」

「これからか？」

笑顔で頷くボルト。

何が嬉しいのか――はてまた楽しいのか、トキには理解できない。

（待てよ、これも商売戦略（？）なのか？）

などとワケのわからないことを考えているうちに、

「じゃあ、もう1人の依頼人を教えたら一回くらい事務所に来てくれる？」

上げたら教えてくれるんじゃないのか？
ていうか、もう1人いるのか！？

言いたくても呆れて声が出ない。改めて時計を確認する。ＰＭ１９：２１
明らかに飯時だ。

「……考えとくよ」

仕方なくトキは口を開き、そう言った。

「え？」

「考える時間が欲しい」

「来てくれるの！？」

「考えとく。

どうでもいいが、お前は1人で帰れるのか？」

さすがにこの時間。
子供を1人で歩かせるわけにはいかない。

かなり面倒な事だが、ちゃんと聞いとかないと。もし、送りが必要なら送るつもりだった。
ささやかながら、トキなりの心配の現われでもある。

「大丈夫だよ。泊まっていくから」

……
言語道断、即絶句。
本気でしか会話を進めない子供相手に、こんな冗談はアリだろうか？

「……なぁ、眠いんなら早く家に帰った方がいいぞ？」

「え～？
別に寝言いっているわけじゃないよ。シャワーだってまだだし……？」

「お前、明日学校とかないのか？」

行く場所がないのだろうか？

明日の予定とかもないのだろうか？

「トキは？」

このタイミングでボルトはカウンター。

しかも反論不可能、一撃ＫＯクラス威力のある一言。

トキは立ち上がってテーブルの上の皿を下ろした。

「私は学校に行ってないし、家族だってもういないんだよ？

だから、誰にも心配かけないし」

「俺が心配なんだよ」

帰り道で何か事件に巻き込まれたとして、とばっちりを喰らうのは御免だ。

だから送ろうか聞いたのに……

「本気で泊まる気なのか？」

「信じてないの？」

「信じるとか、そういう前に意味が解らない」

「だって護衛って、いつでも傍に居るのが基本でしょ？」

もちろん、トキはプロじゃないからそれが正しいかなんて判断できない。
ボルトも立ち上がり、トキの前に立った。
トキの口から溜息が漏れる。

「あのなぁ……」

本気で止まると言っているボルト。
さすがに追い返さないとまずいことになりかねない。

そう思って口を開いた時――
いきなりテーブルのグラスが弾け飛んだ。

「トキ！」

直後、ボルトはトキを物陰へと引っ張った。

ダガガガッガガガガガガガガッ！！

けたたましい轟音が響いた。
この日本では聞くことのない音。

銃声！

それも、重火器による連射。

（はぁっ！？銃げ……！）

暗闇に染まりつつある景色を、マズルフラッシュが照らす。

襲撃者は外だ！

テーブルの足が吹き飛び、バランスを崩す。

外からこの家に向かって容赦なく銃弾をぶち込んでいるんだ！

壁や床、天井に着弾しては破片が飛び散り、食器棚の方からは盛大なガラス独特の破砕音が響いてくる。

トキは混乱する頭を振り、階段へと移動した。

それまで座っていたイスも最早使い物にならないほど変形している。

移動を始めたときに蛍光灯が破壊され、破片が降りかかった。

「気をつけて！

アサルトライフルか、それ以上だよ！」

解りにくい説明をするボルト。

リビングを出て、右に玄関。左に階段がある。

穴の開いた靴棚。
目の前で穿たれる壁面。

運良く無傷で2人は階段の前に来た。
手すりに着弾し、振動が手から伝わってくる。

階段を昇り始めた時、玄関の扉に無数の弾痕が出来る。

襲撃者が迫っている。
逃げないと！

石灰が砕け散る。
床板にも穴が穿ち、壁に掛かった絵やライトはことごとく撃ち落されていた。

「一体何なんだよ！？」

トキの憤怒を聞き、ボルトも銃声に負けないくらい大きな声で説明した。

「多分、ハンズが来ているんだよ！」

「じゃあサルもいんのかよぉっ！？」

「そうじゃなくて！
ハンズ・ブリジスタス！錬金術師だよ！！」

ズガンッッ！

直後、ドアノブとその周りが異常な形に変形した。

至近距離ショットガン。

ボルトは説明をやめ、頼りない力でトキの手を引っ張り階段を駆け上がっていく。

2階のすぐ近くにあった部屋へ2人は駆け込むと同時、銃撃が止む。

「何なんだよ！一体！？」

「しぃーっ！

あの人達からトキを護るのが、今日の私の仕事だよ」

ボルトに注意されてトキも声のボリュームを落とす。

「どうでもいい！

それより、何で銃なんて持っていやがるんだ？」

「ハンズ・ブリジスタス。

いまハッキリしたけど、彼で間違いないよ」

「知り合いか？」

怒気を含ませた声でいい、ボルトは少し驚いた。

「まぁ、名前とどういう人かくらいは……」

「お―」

（―前の仲間じゃないよな。
仲間なら撃つはずないもんな）

口に出しかけた言葉が心の中で響く。

敵が来た。

認めたくないが、その表現が今の状況に当てはまる。というか、それしかない。

「あいつは密輸業者なのか？
それとも警察関係か、軍人か？」

銃器が手に入る可能性のあるものを口にしていく。
それでもあそこまで連射が利き、且つ火力に優れた銃器を所持していることから、警察ではないという推理に自信はあった。

「錬金術師よ」

ボルトの言葉でトキの思考回路がぶっ飛びそうになる。
なにもこんな時に……

「ふざけてはいないよ」

いまのボルトがトキには別人に見えた。

「ハンズに金属探知機は通用しないよ。
どんな時、どんな場所でも物質を変換して他の物を生成する力を持っているから。
それが、錬金術師であるハンズの特徴よ」

ボルトの話はトキの耳に届きそうで届いていなかった。
急に大人びた雰囲気をかもし出すボルトに魅せられたのだ。

（……カッコイ）

「トキ？」

ボルトが顔を覗き込んでくる。そのおかげで我に返る。

「あ、じゃあ、急いで逃げなきゃ！」
「ちょっと待ってよ！」

ボルトがトキを止める。
どこか怪我したのかとトキは心配そうにボルトの体を見回した。

無傷である。
その間、ボルトは目を瞑っていた。

（やっぱ眠いのか？
いや、違うか……何だ？）

そして急に目を開いた。
瞬間、

「トキ！」

ボルトが肩を掴み、力の限り引っ張る。
トキの体が前方へと転がった。

直後――
フローリングの床を無数の散弾が貫いた。

2人は立ち上がり――
同時、銃撃が再開された。

ドッ！ドッ！ドッ！ドッ！ドッ！ドッ！ドッ！

2階の廊下はコの字構造になっている。
今度は2階への銃撃が始まったのだ。

手すりが外れる。
2人は角を右へと走っていく。

部屋のドアにも無数の銃弾が叩き込まれている。

「急い……！」

「俺の家がぁっ！」

「諦めて！」

破壊は続き、建材から破片が生み出され続ける。
床、天井、ドア。

見慣れているハズの家が、見知らぬ廃墟のように見えてくる錯覚。

ダガガガガガッ！

（銃声が変わった！？）

軽いパニックに陥りながらも、トキはそのことに気付いた。
銃撃が自分たちから遠ざかる。

（他の部屋へ銃撃がいっているのか！？）

天井を透かしてモノを見る人間なんて居るはずがない。居てたまるか！
ボルトは突然最寄のドアを開き、その中へ飛び込み、トキも続く。
そこは寝室であり、トキの部屋でもあった。
勉強や引きこもるのもこの場所。

「……」

玄関でハンズは天井を見ながら首をかしげていた。
その右手には８．８ｋｇもあるブローニング・オートマチック・ライフル、通称：ＢＡＲが握られていた。

左手にはＸＭ８と呼ばれるアサルトライフルのシャープシューターイプが収められて、両手がふさがった状態でいる。

２階での声や足音が聞こえなくなったのだ。

（まさか、間違ってトキって奴まで殺しちゃぁないよなぁ？）

自問自答。

ただし、答えはこれから確認に向かうため、自問の状態で止まっている。

間違って殺してたら何と怒られるだろか。

ハンズは、フルオート（連射）でなくセミオート（単発）でＢＡＲを撃ちまくった。

一応、捕獲対象であるトキに当てないための心遣いだったのだが――

（ハハッ！意味ねぇな）

しかし、反省している暇はなかった。

弾切れになったＢＡＲに自分の力を流し込んでいく。

（この質量から創り出せるものは……よし、これだ！）

決定と同時にもう1つの武器にも、残弾を確認することもなく力を流していく。

（こっちは、ナイフだな）

ハンズから流し込まれる不可視の力が、2つの得物を別の得物へと変化させていく。

（あいつらが生きていたとして）

静かであることから、すぐには動かないことが予想される。
そう考えハンズは――

（錬度を最大に出来る時間はあるな）

例えば、ナイフ。
錬金術師であるハンズでも、錬金を大雑把に行えばロクな物を生成できない。

ナイフなどの場合、刃毀れがしやすい、折れやすい、切れ味が悪い、などの悪要素を伴い戦闘に支障をきたすのである。

この力に慣れていなかった頃は、何度かそういうミスで死にかけた。

今のハンズには、2~3秒の時間さえあれば、最硬質のナイフを生み出すことが出来る。

「……」

改めて家のつくりを見る。　外から見た感じよりも広い。
ハンズの手にはプラスティック主体のセミ／フル切り替え可能なハンドガン。

パリッ

一瞬で銃全身を包んでいた膜のようなものが剥がれ落ち……
グロック１８Ｃが握られていた。

「それで、どうするんだよ?」

小声でトキとボルトは会話を続けていた。
ハンズの銃撃が止み、ボルトは再び目を閉じた。

（またか……）

何故、目をつむるのか理解できないトキは苛立った。
いつ銃撃が再開されてもおかしくないというのに、何故目を瞑っていられるのか。
ボルトという少女にこの状況を打開する力があるのか？

（そもそも、コイツは俺を護衛しに来たって言うけど……）

「近付いてくる」

いきなり目を開いたボルトが口にしたのはそれだった。

「接近戦で来る気ね」

ボルトの目がトキへと向く。

（ディマが来たら勝ち目がないしなぁ……）

ボルトは悩みながら自分の力を確かめる。
トキは苛立たしげな表情でボルトを見つめていた。

「ねぇ、トキは走るの速い方？」

「まぁまぁだ」

最後の最後までボルトは思案し、告げた。

「楼塔病院って知っている？」

「ああ」

ボルトは自分の時計を確認する。

ＰＭ１９：１７

「いますぐ、そこまで避難して」

「どうして？」

「私がハンズを止めておくから、トキはそこまで行って、芹真さんに合流して」

芹真（せりま）。

その名前を聞いて昼間のスーツ男の顔がぼんやり浮かんでくる。

「でも、あいつは銃を持っているんだぞ？」

お前こそ逃げろという直前、ボルトの手から光を放つ球が現れた。

「私も、武器くらい持っているよ」

「え…なん？」

「ここで1番弱いのはトキだよ？
わかってる？」

邪気の無い笑み。
深く突き刺さる言葉。

無力、非力。

「目を閉じて」

ボルトは時の肩に手を置いた。
トキはそれを振り払う。

「何する気だ？」

「トキに死なれたくないから」

「俺はお前が死ぬのも御免だ」

「私は、トキを逃がしたい。
それだけなのに……」

俯くボルトを前にして、トキまで俯きたい気分になってくる。
ここは、従うしかないのか？

パリッ

微かな音がボルトの耳に届く。

（もう時間が……）

「芹真に会えばいいんだな？」

ボルトはトキの顔を見つめ頷く。

「そこに行けば芹真は居るのか？」

「わからない」

決意をしたトキにとって、この回答は拍子抜けなものだった。

「これは、可能性でしかないけど、せり……！」

途端、ボルトは言うのを止め、トキの額に光の球を押し付けた。
それを喰らったトキは目を閉じる。

「走って！」

トキは瞬き、いきなり体勢が崩れたことに驚いた。

「おわっ……え！？」

トキはコンクリートの上に居た。
周囲を確認する。
どう見ても見慣れた自分の家の前と、その周辺の景色だった。

何が起こったのか混乱する頭を回している最中、再び銃撃音が響いた。

「アイツ……！」

悔しさを押し殺し、トキは走り出した。
芹真という男さえ連れてくれば何とかなる。

走り続けるしかない。
あまり体力に自身がないトキだが、いまはそんなことを言っている場合じゃない！

自分に何度も言い聞かせる。
ボルトには内緒だったが、一発の銃弾がトキの腿を掠っていた。

（マジ物かよ！）

徐々にこみ上げてくる恐怖と不安。

「やってらんねぇ！」

自分の不運さに毒付くトキ。
あの娘が死んだら、自分の責任なのか？

それすらハッキリ解らないまま、トキは走り続けた。

闇の中をただ1人、あの娘を救うため。
そして自分を救うために。

第2話ー降臨！両義使い　藍！ー

誰もが　この空を愛した
もし
夢に色があるのなら、人々はどんな色を好むのだろうか？

私は　あの空のような青色を好み
溶けてみたいと思うだろう

晴れ渡る空
清々しき　青

でも
どこか悲しい、蒼

同じ青が
違う蒼になる　何故だろう？

わからないけど
世界は素晴らしい

そんな世界を包むアオも　きっと素晴らしい
きっと……

「ハァッ　ハァッ！」

胸が苦しい。
運動を怠らなければよかったと今更になって後悔する。
自分の引きこもり生活を恨みつつ、色世時（シキヨトキ）は走り続けていた。

短髪の黒髪は今まで一度も染めたことはない。
瞳の色は翡翠。　そのせいで小さいときはよくからかわれていた。
身長は１７０クラス。
体重は……

（って、それどころじゃないだろ！？）

そんな身体的特徴を持つトキは全力で走り続けた。
混乱する頭を振って少しでも状況を整理しようとする。

十数分前、体育系の服装をした見知らぬ外国人の金髪少女（１１）がトキの家を訪れた。
目的はトキの護衛。
少女の話を信じきれないうちに襲撃を受けたのである。
しかも、襲撃者はここが日本であるにも関わらず、ハイパワーな銃火器を使用していた。

［　芹真さんに…！］

少女：ボルトはある病院を指名してきた。
そこへ行けば、助かる。
同時に、ボルトを助けることも出来る。

（楼塔病院！）

それが目的地の名前だった。
闇の中、トキは止まることなく走り続ける。
そんなトキを1人の人物が見下ろしていた。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第２話－

－降臨！両義使い藍！－

（アレがトキ）

ダイバースーツの両肩にパッドをつけたような服装のソイツは、高いビルの屋上から走るトキを見ていた。

（完全に目覚めてはいないわけか）

そいつの顔が走ってきた方、トキの家へと向く。

（ハンズ、魔女に手こずっているのか？）

闇に染まっているとはいえ、そいつの目でもしっかりとその様子を窺うことは出来ない。

今現在、トキの家ではどのような戦闘が行われているのか。

（また、透視が難しくなってきたか……）

再びトキに目をむける。
呼吸は乱れに乱れているのにスピードは全く落ちていない。トキ本人はそれに気付いていないようだった。

（速いな。
力に目覚めかけているのか？）

そう考えながらソイツはトキの後を追った。

走り続けてきたトキに限界が訪れた。

「ハァ、ハッ、ハァッ！」

荒い息を整えながら、ゆっくりと足を進めた。
すでに病院までの道のりの３／５を経過したのである。

トキの家がある住宅街からそのまま商店街、街を抜け、緩く長い坂道を登ったところに目的の病院はあった。
住宅街を抜け、商店街も抜けた。

街の中心部に突いた時、大きな不安と疑問と僅かな恐怖が湧いた。

「何なんだ？」

いつも騒がしいはずの、この時間でも人の流れたあるはずのこの街に――

一切の人影がない。
全くと言っていいほど閑散としていた。
人の気配が皆無なのだ。

まるでゴーストタウン。トキはそれでも移動を続けた。

信号はちゃんと働いているものの、車はあちこちで路上駐車されており、動いている車は一台も見えない。
所々消えかけている街灯が不気味だった。
屋内の建物からこぼれる光さえない。

おかしい。
昼間は昼間でおかしかったし、
さっきもそうだ。おかしいというか、明確に異常だ。

そして今。
どうして街に人がいないのか？

（有り得ねぇ！
これも、ボルトが言っていた女の仕業か！？）

「ディマにこんな真似はできないさ」

恐怖に負けじと自問自答を繰返すトキに声がかかった。
その太い声にトキは足を止める。
振り返ったその先には、昼間と同じ格好をした男が立っていた。

（あの女の仲間か！）

昼間ディマに話しかけていた相手の姿を思い出し、そういう結論が導き出される。

「トキ君。我らの店に来ないか？」

意外な質問にトキは耳を疑った。
もし、襲ってきたらすぐにまた走りだすつもりだったのだが……

「事務所？」

正直、頭にきている。

「何なんだよ！

あんたといい、あのボルトや芹真とかいう奴といい、何で俺を事務所に誘おうとするんだよ！？」

「必要だからだ」

「同じ事務所でも、まだ芹真とかの方が誘い方知っていたぞ？」

一応、嫌味のつもりだったが通じていなかった。

２人の距離は約７メートル。

左右に建物と道路。

道路には路上駐車の車が列を成していた。

「誘い方がどうであれ、我々も芹真も同じ目的のために君を仲間として迎え入れようとしているだけのこと。大差はない」

「俺を仲間に迎え入れて何があるって言うんだよ！？」

反論。

人気が全くないから言いたい放題に近い。

「君はこちらの世界へ来たくないか？」

「話を逸らすなよ！」

「逸らしてはいない。君の質問に答えるために必要な質問を君にし

ただけだ」

「ムツかしい奴だな！」

「何とでも言え。
だが、埒が明かない可能性があるな……」

「はっきり喋れ！」

引きこもりにあるまじき声のでかさ。

「我々はセカンドリアルと呼ばれる“世界／力”の持ち主」

「はぁ？」

「色世トキ！
お前もその世界を持つ人間だ！」

「知るか！！」

「知らぬか！」

「知らんわぁ！！」

そりゃそうか――
と、男はどこか納得したような顔になり、

「キサマの……」
「とにかく俺は知らん！！」

何かを言いかけた男。
そんな男を放っておいてトキは背中を向け走り出そうとした。

「致し方ないな。
来い！」

男が叫ぶと、曲がり角から夥しい数の人影が現れ、トキの進路がふさがれる。
その人数に圧倒され、トキは足を止めた。

全員、目を開いたまま瞬きすらせずトキを見つめていた。

「なっ！
街の連中全員がグルだったのか！」

「ほぅ？
全員がグルだったらどれだけ楽だったことやら」

男は近付きながら話した。
グルではないにしても、それに近いことは間違いない。

「彼らは私の術中にある。
故に、この場で君に逃げ場はない」

「意味がわかんないんだよ！
何なんだよ！セカンドリアルとか、事務所とか！」

「ボルトから聞いていないのか？」

２人を囲むようにその場に大きな輪が形作られる。

「何？」

「あの子供は、魔女だ。
それも超高度かつ高級な魔力を持った……おそらく、人類史上最大であるだろうクラスのな」

言われて思い当たる節がある。
家の中から、気付けばコンクリートの上に立っていた、あの時。

「魔女？」

「そして、君のところに向かったであろう男、ハンズは錬金術師だ」

「いるわけないだろそんなん……！」

断固否定。
歴史の進化、科学の進化が淘汰してきた存在だという考えあっての意見だった。
もし、そんなものが存在するなら人々が築き上げてきたものはどうなる。

「だから、我々はSR（セカンドリアル）と呼ばれているんだよ」

男の手が動き、2人を囲む輪が縮まる。

「くっ！」

トキは周囲を見渡し逃げ道を探ったが、包囲網に隙はなかった。

「あの娘……
ボルトが魔女で、襲ってきた奴が錬金術師なら――」

「ん？」

「お前は何なんだ！？」

（ほぅ。
相手を知ろうという思考は混乱していないか……
意外と冷静なタイプになったのか？）

考えながら、男は笑う。

「私は呪術師のＳＲ、クワニー・トロス・ウィトナ。
協会の実働部隊の１人だ」

「呪術師？」

「如何にも」

「じゃあ、この人たちは……」

「言っただろ術中にある、と。
私の力は、罪を持つ者を配下に加えて操作する、というもの」

「“罪を持つ”って……こんなにいるのかよ！？」

また周囲に目を配る。１００人どころじゃない。
確実に１０００人以上は居る。

「君は罪を何だと思っている？
犯罪だけが罪ではない。些細な事でも気にしていれば罪になるかもしれないものだぞ？」

「いちいち訳がわからないんだよ！」

「理解する必要はない。
君は自分の力を知る必要があるんだからな。他の事を気にしている暇などない」

「今度は命令口調かよ……」

（会話のレベルは低いのか）

呆れるクワニー。
しかし、表情にこれといった変化がないためトキは気付いていない。

「その前に、何でお前らは俺に力とか才能があるとか……」

「わかるものはわかる。それ以外の説明は要るまい」

「要るっつうの！！」

2人を囲む輪が更に縮む。
ますます逃げ場がない。

「俺をどうする気だ！」

「連れて帰る」

「いや、何で俺なんだ！？」

「だから、君には力がある。　君以上にその世界を望んだ者はいない」

「俺は何も望んで……！」

強いて言うなら、そろそろ“脱・引きこもり”をしたい……

そんなトキにお構いなく、輪は確実に縮まっている。

（やべぇ）

今更だが、よく見ると数人凶器所持を確認。

バットやチェーンの他に、ナイフまで持っている。

「大人しくしてくれれば無傷を保障しよう？」

それは警告だった。

だが、その前にトキはこの状況を打破する方法を知らない。

立ち向かう勇気さえ持ち合わせていないのだ。

（最初からこうしていれば良かったものを……）

クワニーには、何故ディマがハンズを先行させたのか理解できな

かった。
大体ディマは何処へ行った？
自分達に指示しておきながら肝心のディマはどこに行ったのか全くわからない状態だ。
目の前で戸惑っているトキを見ながら考えた。

（まさか、ハンズと一緒にあの魔女を倒そうとしているのか？）

考えてみるものの、やはり検討がつかない。
ディマと知り合って数年になるが、未だにディマの行動は予測不可能なものが多い。

（まぁいい。
コイツさえ捕まえてお……！）

咄嗟にクワニーは本能に従って後ろへ飛んだ。

その直後――
クワニーのいた場所にコンクリートの破片と粉塵による柱が立った。

「うあっ！？」

飛び跳ねる無数の小石から顔面を護るように防御する。
それでもトキはその場に倒れた。

撥ね飛ぶ破片が痛い。
全てを防ぎきれなかったのはクワニーも同じだった。

「何っ！」

「やっと見つけた」

煙の中から――
静かで力強く、それでいて流麗な女性の声が響いた。

「女？」

その状況にトキは驚いた。

（この街の人間全部が奴の支配下にあるんじゃないのかよ！？）

「華創実誕幻」

煙の中で、女の声が続いた。
そちらに気を取られているうちに2人の男がトキを脇からおさえる。

「いっ！」

「悪いがコイツは我らがもらう！」

誰が煙の中に立っているのか、トキには見えない。
クワニーは女性を知っているようだった。

無理矢理抑えられたトキの肩関節が軋む。

「一段‥――」

トキの体を抑え、男たちは輪の外へと向かっていく。
誘拐。
その最中、

「茨（いばら）」

女性の声が告げる、自慢の術。

瞬間――
風圧が僅かに髪をさらう。

目にも止まらぬ何かが、高速でトキの頭上を通過し、直後トキの

目の前に転がったそれは2つの首だった。

トキは、クワニーの術にかかった全ての人も同じ方向を向く。

その先――

晴れた煙の中で自分に指を向ける、1人の少女がいた。

「菫（すみれ）」

落ち着いた口調で言う、何か。

少女は、再びクワニーへと顔を向ける。

「二段、上段」

それが何を意味するものなのか、トキは直感した。

「紅葉（もみじ）」

「連れて行け！！」

クワニーが叫ぶ。

それに呼応し、新たにトキの横に2人立つ。

今度は背中にもう1人ついた。

（しまっ……！）

少女に見とれていたことを後悔するトキ。
だが、思ってもいない事態が起こった。

トキの脇を抱えて連れ去ろうとする奴らは、トキを持つことが出来ない。
そんな異常な光景にトキ自身が1番驚いて、自分の体重を思い出す。

「藍！
貴様、何をした！！」

「思い通りに行かないとすぐに怒る。
だから、あなたは殺されやすいの？」

檄を飛ばすクワニーに少女は言った。

「あなたにはまだ見せてない術のひとつ、『菫』。
特別教えるけど、効果は〔重量変化〕」

「……わかっているのか？
そいつが……」

「メイトスを殺す者、でしょ？」

「かかれっ！」

クワニーの掌が少女へと向く。
術中に落ちている人々がその合図を待っていたかのように、一斉に藍へと襲い掛かる。

「うわっ！！」

その号令に少女よりトキが驚いた。
何人かが自分の体を踏み台にしていく。動かせないからまず目の前の障害を排除してから煮るなり焼くなりする心づもりだ。

「イテッ！痛痛痛痛テェって！！！」

文句を言おうにも、怒涛の如く押し寄せるその勢いで声も届かない。

全員が1人の少女めがけて襲い掛かる。
そんな状況下で少女はどこからともなく黒い符を取り出し、クワニーは彼女の姿勢を知った。

（2枚？
まさか……）

クワニーは思い出す。
一瞬にして――
黒い符は彼女の両手の中で2本の金棒と化した。
多数の細かな棘状の突起に、１m以上の長さをもつ棍棒。

「理壊双焔破界（リカイ　ソウエン　ハカイ）」

最初の1人が、少女に飛びかかり……

横一閃。
少女は軽々と棍棒を振り回し、飛びかかったソイツの上半身を消し飛ばした。
クワニーはやはりと確信し、トキは驚異に襲われていた。

再び襲い掛かる。今度は背後から。
しかし、奇襲は失敗に終わる。
振り返りざまに首から上がどこかへ消えたのだ。

「うそ……」

あまりにも信じられない光景。
次々と襲い掛かる人々を少女は軽く薙ぎ払っている。

（振り終えてから見える……
それだけ早いスピードで振り回しているのか）

驚きなのは、少女の戦闘能力の高さ。
無数の敵にただ1人で向かい、どんな死角から襲い掛かってくる敵も必ず仕留める。

もうひとつ驚いたのが、２つの金棒を振る速度の異常さ。
敵に当たって、僅かに止まるその一瞬しか金棒が見えない。
しかも、振り回される2本の金棒は、襲ってきた奴の体に当たって盛大に火の粉を撒き散らしていた。

その火の粉が大きくなり、本格的な炎と化す。
それで何人かが燃えた。

自分と同じくらいの少女。
トキは改めて少女の姿を確認した。

（黒いロング、碧の瞳……何だ？
タンコブ？
いや……）

少女の額。そこに異常な膨らみがあった。

正直、トキはいま自分の体を上手く動かせないでいた。
重い……

否！
重すぎる！！

しかも姿勢が正座。
滅茶苦茶な痺れと、重圧がいっぺんに足へと圧し掛かってきた。

少女に対する疑問も痛さで吹き飛び、

（早く病院行かないとぉぉぉぉ！！）

少女は軽々とクワニーの支配部下たちを消し飛ばしていく。
その一方で、トキは足の痺れなどと戦いながら願った。

―楼塔病院―

「また明日もくるから」

そう言って男は病室の扉を閉めた。
オールバックの茶髪をなで、それからYシャツの腕を捲った。

トイレに寄り、髪を整える。

鏡には見慣れた自分の顔が映っていた。
決して不細工ではない。むしろ整った顔をしている。
単刀直入に美形といっても過言ではない。

が、モテたことはないし、モテたいという気もない。
時間を確認し、病院の異様は静けさを気にしているうちに玄関に辿り着いていた。

（全く……病院てのは、どうも好きになれん）

薬品の匂いが苦手であることが、この男の悩みでもあった。
外に出れば染み付いた嫌な匂いもいくらか取れるだろう。

しかし、外は外で異常だった。

この時間帯で人影が皆無。
一応、地方都市の都市として分類されるのだが…

（はて？）

どうしたものかと言いたいところだが――
原因があろうがなかろうが、分からないうちは何とも言えないし、何にも出来ない。

空を見上げる。
見事な半月。僅かな風。

それに雲の量もバランス良く、色もいい。

男、又は彼：芹真は、いまの風景を写真に収めたい衝動に駆られた。

（まぁ、静かな夜も悪くないか）

そんな心境と同時に、芹真の本能は異常を感じ取っていた。

僅かに流れる夜風。
それに乗って漂う僅かな火薬臭。
焦げた空気の匂い。

何よりも多く、そして濃く漂う血の芳香。
芹真は嗅覚を最大限にまで活用し、探った。

（正規の火薬じゃない……構成成分は土、コンクリート……ｅｔｃ粉塵爆発を利用したものか？）

その匂いから芹真はディマたちが仕掛けてきた事を悟り、ハンズがどこかで戦闘を繰り広げていることを知った。

「トキを狙ってか……」

再び嗅覚を最大まで感度を上げる。

（火薬と交じる焦げた空気の匂い、ボルトのビームだな）

慣れている匂いなのですぐにわかった。

次に、

（何だ、この大量の血の匂いは？

え～。金属との瞬間摩擦。この匂い、肉骨粉状態が半数……

それから肉の焼ける匂い……）

「……藍か」

額に手を当てて芹真は溜息をつく。

「ん？」

そこで芹真は気付いた。

僅かだが、他の血の匂いとは異なる血の匂いを嗅ぎ取った。

嗅覚をもっと丁寧に使い、嗅ぎ別ける。

（もしかして、トキが負傷しているのか？）

丁寧に使う努力をする前に頭でそういう結論が導き出された。
思い立ったら吉、というか何というか……

芹真は一瞬にしてその場から飛び去った。
もしかしたら、トキを今すぐ引き取ることが出来るチャンスかもしれない。

「静かな夜だが」

ちょっと本音を言いつつ地面を蹴り、飛翔する。
地面の次にビルの壁を蹴り、さらに次の足場へと飛翔する。

（あ……）

戦いの最中、藍はあることを思い出してトキへと体を向ける。

「菫！」

「くそぉぉ！」

すると、一瞬で体が軽くなった。
というより、『重量変化＋』に『重量変化－』をかけて『±０』にしたのだ。
だが、すでにトキの足の痺れは最高潮に達しており、立ち上がるのもやっとな状態だった。
少女は再び戦いへと戻っていく。

「走って逃げなさい！」

かなり無茶なことを言う。
藍が複数の敵を倒したことで、簡単に逃走経路を見つけることが出来た。

その時点で藍は１００人目の敵を撃破していた。
トキは再び病院の方へと走り出したが、足の痺れもあって自然と走り格好は変なものになっていた。
遠ざかるトキをクワニーは追おうとしなかった。
疑問が残っていた。

藍と距離をとるゾンビ（罪人予定死者）たち。
クワニーはゾンビたちよりも一歩だけ前に出ていた。

「何故、私を相手にしたがる？」

「……ふぅ。
忘れたとは言わせないわよ」

「ほぅ？」

「憂さ晴らし……
それから復讐よ」

同じ頃、夜風を堪能しながら飛び続ける芹真の視界にあるものが飛び込んだ。

「ん？」

地面に降りる。
向かってくる人影の足元がおぼつかない。

（痺れてるのか―「―」ってトキじゃないか！
どうしたんだこんな所で？」

「あんたは！？」

お互いに予想外の遭遇だった。

「よかった！
ボルトを助けてやってくれ！」

急いで芹真に詰めより、トキは事情を話した。
突然襲われ、ボルトが自分を逃がしてくれた。
逃げる先はこの先の病院。
芹真に助けを頼めと。そう言われた。

その話を聞いた芹真は、

「おかしいな……」

「おかしい？」

「トキはボルトの――
う～ん。魔法は見たか？」

「は？
いえ」

「じゃあ、僅かにでも見たか？」

「まぁ、僅かなら」

「どんな？」

「瞬きしたら家の中から道路にいたってだけですけど」

「そうか……とすると」

Yシャツのネクタイを緩めながら芹真は1人思索する。

「よし。じゃあ、助けに行こう」

（言うの遅くない？）

助けに行くのであれば、もっと早く決断するべきだ。
特に、人の命が懸かっているときは。
そう思いながら、スーツに身を包んだ芹真が信用できるかトキは考えた。

「1つ、聞いてもいいですか？」

あくまで敬語を使い、トキは質問した。
芹真は聞こうと顔を向ける。

「セカンドリアルって、一体何ですか？」

その質問で、どれだけ心のうちの疑問を解消できる要素が含まれているかわからない。
だが、聞いて損はないことは確かだ。

「第2現実。以上」

「そうじゃないだろ?他にもあるんだろ?」

「誰から聞いた?ボルトか?」

「変な外人。クワ…なんとか」

「クワニーか?」

「とにかく、街中の連中とグルになっている奴だ!
そいつが言っていたんだよ!」

「OK。教えるよ」

大げさな仕草で芹真は降伏したように両手を挙げる。

「その前に、ちょっとした誤解を解いておこう。
街の連中はグルってわけじゃない」

「グルじゃないって?」

「呪術師のクワニーが操ることが出来るのは“ゾンビ”だけだ。
故にあれは、人であって人じゃない」

絶句。
こんな話をどう信じていいのやら…
でも、心のどこかで面白いと思っている自分がいる。
トキはそれを確かに感じた。

「わかったか？
じゃあ、助けに行こうか。説明は途……」

言いながら芹真は背中を向ける。
が、

「その必要はないぜ」

新たな声がその場に響いた。
人のいない街とは、こうも声が聞き取りやすいものだと改めて思った。

「へぇ、ハンズか」

「かっ、て何だよ？
喧嘩売ってるんだぜ？買えよ」

「トキ」

呼ばれ、トキは我に返る。

「お前たちを襲ったのはコイツだ」

静かに芹真から告げられる。

襲った。

そこから思い出される我が家での襲撃。トキの心の内に怒りが湧き上がり、耐えかねなくなったトキは――

「俺の家（と、ゲーム）返せぇ！！」

「はぁ？

本当にお前がセカンドリアルなのかよ？

ただの引き篭もりじゃねえか。

らしくねぇ、どっかに引っ込んでやがれ！」

2人の会話をあえてスルーし、芹真が質問を投げつけた。

「ハンズ……ボルトはどうした？」

「ボルト……ああ」

笑うハンズ。

凶悪な笑みを見せた後、高々と上げられるハンズの左手に――

「殺したぜ♪」

全身が紅で染まったボルトの姿があった。

クワニーが操るゾンビをなぎ倒している途中、藍は気付いた。

（……別な方がいったか）

質は悪くても、圧倒的な量に少々手間取っている藍。
色々考えながら数人分の上半身を薙ぎ飛ばす。

「そうだ」

1人で言い、藍は地面を蹴って上空へと舞い踊る。
金棒：理壊双焔破界を空中で交差。

「華創実誕幻
獄段：八重捕覆（やえとり）！」

そう唱えた直後、藍が空中で８人に増える。
そして――それぞれが着地と同時に　戦闘を開始する。
改めて、７対多の戦闘が始まった。

「聞いていたより弱かったな。コイツ」

首を鷲づかみし、ハンズは言った。

ボルトの体には無数の穴が見え、左足・右手首・左脇・左側頭部が見えなかった。
無くなっている。
トキは吐き気をこらえ、それでも目をそらそうとしなかった。

「ハンズ……自分が何をしたのか解っているのか？」

「障害の排除だよ」

悪びれた様子が皆無のハンズは、２人の目の前にボルトの死体を投げる。
トキは駆け寄り、確認した。

間違いなく、彼女だ。
認めたくない……　初めて会う女の子。それもまだ幼い。頼りになる・ならないの前に本気で自分を護ってくれようとしていた。

（死んだ？
俺が……足を引っ張ったから？）

「トキ」

ハンズに目を向けたまま芹真は口を開いた。
が、トキの耳に届いていなかった。

トキの鼓動が速くなる。
同時に息も荒くなり、めまいに似た感覚が湧き上がる。

自分へ圧し掛かる責任感。同時に起こる自分の所為にしたくないという矛盾。
他の人間が感じるかどうかわからない。
とにかく、震えが止まらない。

初めて目にする――本物の『死』の重圧。

「お前にはボルトを生き返らせる力がある」

そんな時に発せられる冗談は、冗談に思いたくないものだった。
トキは顔を上げる。

「俺に？」

聞き返す。

思ってもいなかった一言。それはまさに藁にでもすがる思い。

「正確には、お前と藍が組めば……」

「本当に助けられるのか？」

「無理ね」

全員の目が同じ方へ向く。

すがるべき藁を目の前に、トキは固まった。

その先に、あの女がいた。

「……ディマ」

黒衣に身を包んだディマ。

黒Tシャツに、黒いスーツ地のズボンという姿の彼女は、闇を連想させた。

「絶対の摂理《死》。

それはいかなる魔法、術、奇跡をもってしても覆すことは不可能。
誰もがわかっていながら、認めようとしない。
逆に、わかっていながら奇跡を信じ、それでも心の中ではすでに諦めがついている」

歩み寄りながらディマはそう言った。

「人と死の関係なんて、そんなものよ。
どんな特別な人間だろうといつかは死ぬ」

「だが、そうでもない奴らがいるんだよ。トキ」

トキはボルトの手を握っていた。
生き返ることは――出来ない……

「どんなに高度な魔法を使えても、所詮は子供。
殺せは出来なくとも倒すのに難くなかったわ」

「妙な動きはするなよ！」

ＭＡＣ１１サブマシンガンを手に取り、銃口を向けるハンズ。
芹真にではなく、トキに。

「芹真。あなたなら解るでしょ？

夜は私の独壇場。あなたでも勝ち目は薄いのよ？」

「下手に動くんじゃねぇ」

（完全に囲まれたか・・）

ディマとハンズに睨まれた状況で街中のゾンビが集まってきた。
冷静さだけは失わず、芹真は置かれた状況を飲み込んだ。
傍では、トキがボルトの手を強く握っている。

（あちゃぁ～……
実験失敗ってとこかな）

改めてボルトの姿を見て芹真は思った。
この包囲網を抜けるための良い方法がない。

トキをディマたちに渡すか、戦って切り抜けるか。
どちらが最悪の選択なのか難しいところだった。

「逃げ場はない。投降しな」

勝ち誇ったような笑みを浮かべ、ハンズが言う。
事実、この状況は最悪だ。
トキとボルトを抱えての戦闘は不可能。
ディマがいる。

ハンズは……どうにでも出来るからいい。3人を囲んでいるゾンビ達も問題ない。

「ちくしょう」

ディマが足を進める。
ハンズは周りのゾンビ達に作り出した銃器を渡し、無数の銃口が2人に向いた。
余計に脱出が難しくなった。

（どうしようもないな。こりゃ）

その瞬間、誰の目にも留まることなくトキは駆け出した。
全員の目が、動きだしたトキを追う。

拳打。

ハンズは呆気にとたれた。

（何！？）

一瞬パニックを起こし、何が起きたか解らない。
混乱から脱した時、頬に痛みがあった。

口の中で鉄の味が広がる。
トキはハンズを殴ったのだ。

「ふざけんな！」

（見えなかった……）

（目覚めかけているのね！？）

芹真とディマはその光景に驚き、ディマは同時に脅威を覚えた。
立ち上がり、地面を蹴る音が聞こえた瞬間にハンズは殴られていたのだ。
倒れてはいないものの、ハンズは衝撃を受けた。
我に返ったハンズに怒りが漲る。

「テ　ンメェ……！！」

怒りに震えたハンズは３２口径の銃弾をトキ撃ち込んだ。
芹真とディマが同時に叫ぶ。
撃たれたのは左の太腿の外側。

（２発目を撃ち込むつもりだ！）

「影槍！」

芹真よりディマが先に動いた。
一瞬で魔力の充填が終わり、ディマの魔力が形を作り上げる。
―闇・影の物質化―
形成された影の槍がハンズのハンドガンを破壊する。

「勝手な真似はしないでほしいわ」

「でもよぉ！」

「何か文句でもあるのかしら？
自分より力のない者を痛めつけるのがあなたの趣味だっけ？」

「ディマ。お前達にトキを預けるわけにはいかない」

「芹真。同じ言葉、そっくりそのまま返すわ。
あなた達は目標に辿り着くまでが長すぎるのよ」

「あんた何時からそんな馬鹿になった？
俺達は必要な経験を手にしてから戦いに臨んでいるんだ」

そうじゃない時のほうが断然多いけど……と、心の中で本心が木霊する。
そんな芹真をよそに、ディマはトキの右腕を掴んだ。

「大丈夫？」

「何なんだよお前らは！？
殺したいんなら殺せよ！！」

「それが一番最悪の選択なのよ」

「人殺しじゃないか！」

「そうだけど、ボルトは死なない。死ねない。それは私が一番良く知っているから安心しなさい。一時の死なんて無意味よ」

（死んでも死に切れない？）

ハンズはトキに対する怒りが疑問よりも強かったため、疑問もすぐに吹き飛んだ。

「トキ！」

「無駄よ芹真。
この子のＳＲは私達が完全に目覚めさせる」

芹真が何かを言うより早く、ディマがそう言って遮る。

「いや、そうじゃなくて！！」

芹真の口調の異変に、ディマとハンズは全神経を研ぎ澄まし――
ディマが……
そしてハンズが気付いた。

「上かぁ！」

「トキ！逃げろ！！」

トキはディマに突き飛ばされた。
空中に向けてハンズのサブマシンガンが火を噴く。

対空防御に備えたディマの隙を突き、芹真は自分のＳＲを解放する。

「しまっ…！！」

直後、ディマの目の前からハンズが消える。
拳ひとつでハンズは吹き飛ばされた。距離にして軽く２００メートルＯＶＥＲ。

「……誕幻」

上空から迫った彼女は、地面に着地したと同時に攻撃に出た。
着地後すぐに何かをディマに向かって投げる。
その隙に芹真がボルトとトキを回収し、その場を離れる。

（黄色と、赤い符!?）

ディマもその光景に凍った。
視界に入った二枚の符により、これから何が起こるのかを知っている。

「これは…」

「二段、上：紅葉（もみじ）」

芹真は人の輪を飛び越える。
いそがなければ巻き込まれる！

直後――
強烈な閃光と、鼓膜を破らんばかりの騒音が闇を照らして静寂を裂く。
トキは今まで遭ったことない騒音と閃光に視覚と聴覚を奪われた。

「う・　・…ぁ・　・・！！」

声をあげようにも響かない。
２つの感覚が麻痺している最中、全身に浮遊感を覚えた。
肌で空中にいる事を理解し、トキは鳥肌が立った。

トキが空中にいるのだと感じてから数秒後、突然腹部に衝撃が走る。
墜落したのだという錯覚が起こった。

「―地したぞトキ」

言われて、混乱するトキの頭は着地したという結論にたどり着いた。
先ほどまでいた場所とは随分違う場所に来ている。

「コレで邪魔者はいなくなった、とでも言いたそうな顔ね」

「ディマ……魔術師としてあなたがやってきたことは尊敬に値するけど、トキの身柄は私達が預かるわ」

閃光と音響が消えた空間。
道路にできた小さなクレーターを挟み、２人は対峙した。

「なぁ、芹真さん！あの女の人は大丈夫なのか！？」

「ボルトじゃなくてか？」

「この娘も心配だけど、もう1人いたあの娘はどうするんだよ！助けに行かなくて……」

「大丈夫だ。なんたって、藍は――」

「アイ？それが彼女の！？助けに行かないのかよ？」

「だから、心配するな。藍は……」

「彼女は何なんだ？そう言えば、ボルトは魔女だろ？ディマもそうなのか！？」

「そう。でも、藍が何のSRなのかは、自分で聞け。下手に怒られたくないし」

「とにかく助けに行かないのかよ！？」

「だから必要ないって！」

「何でだよ!?」

いい加減に同じようなやり取りが腹立たしくなってきたトキは芹真の襟元を掴んだ。

それを払いながら芹真は教えた。

ディマの作り出す影で出来た無数の槍を叩き壊しながら、藍は次の術の準備をしていた。

使う術は、華創実誕幻〔カソウジッタンゲン〕

その――天段――

準備を整えている間も影が襲い掛かってくる。

『影槍』はディマの魔術で『影人形』へと形を変え、襲い掛かってきたのだ。

「俺でさえ藍に敵うかどうかわからないんだぜ?

藍より弱い俺が助けに行って、何になると思うか?」

「いや、個人の差とかじゃなくて……」

「数で、って言いたいのか？
残念ながら藍はチーム戦とか拒んでいるんだから」

「それでも、こっちは！」

「遊びで藍がチーム戦を拒んでいるわけじゃない」

「聞けよっ！！」

「それに、俺はディマと相性が悪い。
でも藍は相性いいんだよ。ボルトもな」

「……」

「……ＯＫ？」

睨み合いが続く。
あからさまに疑っている。

「じゃあ、コレだけは教える」

「何だよ？」

「藍は……」

上空から三つの影が迫った。
藍はそれを迎え撃つ。

「一段・茨！」

対空防御に藍が発動した術は、個人戦、複数戦を問わずに使える便利な術だ。
無数の茨状の鞭が自分の足元から発生し、敵意を持って近づくモノを薙ぎ払う。
その他に、がら空きになった後方や側面をカバーすることもできる。

それが空中から襲い掛かった3人の体に触れた瞬間、上半身と下半身を別離させた。

（影人形に、クワニーのゾンビまで加わりはじめたわね）

状況を冷静に読み取りながら、次々と襲い掛かるそいつらを薙ぎ倒していく。
飛来するナイフ。
藍はすかさず叩き落す。

理壊双焔破界をタテに振り下ろし、頭を潰す。
そこから力任せに横薙ぎモーションへともっていく。

力任せの戦闘！

ゾンビの中の1人が、手にしている日本刀を攻撃軌道上に置く。
防御の姿勢。
双焔の打撃を防ごうとする。

が、意味なし！

まるでガラス細工をハンマーで打ち砕くかのように、日本刀はいとも簡単に砕けた。
その後に持ち主の頭も吹き飛ぶ。

その隙を突こうと背後から敵が迫る。
もう片方の双焔を振り、押し寄せるゾンビ数体を殴り飛ばす。

同時に、茨に引っかかった何人かの首や腕、足が宙を舞う。
火の粉が地面に溜まり、引火。何体かのゾンビを焼き焦げて戦闘不能となる。

炎の光で闇がわずか朱色に染まる。
藍は別の術の準備を始める。

理壊双焔破界を空中に投げ、

「一段」

術文を唱える。
藍のリーチが短くなった瞬間を見逃さず、十数人が多方向から襲

い掛かった。

「椿（ツバキ）！」

直後、全員の視界から藍が消えた。
隙が出来ることを知っている。だから藍はそれを補う術を使ったまでだ。

それは、ディマも例外でない。
完全に見失ったのだ。

（椿……
確か、瞬速添付効果の術ね）

その時、ディマの影人形十数体と、クワニーのゾンビ多数が空中へと舞い上がる。
藍の攻撃によるものだ。
全員を全員殴り上げたらしい。

気付けば空中で回転していた理壊双焔破界も消えている。
しかし、ディマも見ているだけではなかった。

「夜にこの術から逃れる事はできない」

言って、ディマは右手を上げる。
その間も多くの影人形やゾンビが吹き飛ばされる。
空中に上げて何かをする気だ。
なら、それなりの準備が整う前に藍の動きを止める必要がある。

「影送り」

直後、全ての物体が月夜を覆う雲の如く、空に浮いた。
ー影送りー
それは、ディマが得意とする捕縛魔術のひとつ。
物体は輪郭を持たなければ物体ではない。物質とカテゴリーされる。
影送りは輪郭と共に発生する影という概念を操作し、自由に身動きできない空中へと影ごと持ってゆくものである。

(足場をなくせば人は皆無力)

重力を無視した現象。
ワイヤーも仕掛けもなく、ただ純粋なディマの魔法でゾンビや自分の影人形が宙へ浮く。
足場を失った影人形やゾンビが空中でもがいている。
ディマはその中から藍を見つけた。

「いくら瞬速で動こうと、足場さえ奪えば……」

だが、それ以上言葉が続かない

（理壊双焔がすでになくなっている！）

2人は東洋こそ違えど、何らかの術使いであることに違いはない。
ディマは過去に藍と交戦した事があり、その戦いの中で自分と藍の戦闘方式には共通した点があったことに気付いた。

膨大で使い切れない魔力で武器を作り出すこと。
切り札のような術を使うとき、それら武器は媒体として使う。

（藍は既に……）

「華創実誕幻」

術の用意を完了していた。

「天段：瞳断銃矢（ドウダンツツジ）！」

「“陰陽師”だ」

「陰陽師ぃ？」

「正確には、陰陽師の属性も合わせ持っている。後は本人に聞け。言えばヤバイから」

芹真はトキを迎え入れたことを前提に喋り、トキはその意図に気付かなかった。

藍の左手に光球が発生し、その光景を目の当たりにしたディマは自分の死を予感した。

「冗談じゃない！」

ディマは急いで影人形何体かを媒体に使い、自分の体を影で包んだ。

光球から一条の光が放たれる。
その形状はまるで巨大な矢。

銃弾と同等の速度で迫る！

脱出の術を間に合わせる為、ディマは魔力を集中し、光の矢の先端めがけ、特大の影槍を突き立てた。
脱出の術を作り上げる時間を得るためだ。

ぶつかり合う光と影。
電光が生じ、光と影による競演は強烈なコントラストを生み出し周囲を飾った。

２人の術が押し合う最中にディマの術は完成し、すぐに発動する。

（反転影光！！）

瞬間――
一瞬でディマの全身は影に包まれ、縮小した。

遠くに聞こえる轟音と立ち上る爆煙。
そちらに顔を向け、芹真は言った。

「ほら。勝負アリだ」

言われたところで、トキは呆然。聞いていない。
何を根拠に勝利だと断定しているのか不明だった。

「ディマは逃げたみたいだし――
ハンズも逃げたな」

耳を澄まし、遥か遠くへと去っていく足音を確かめる。

（野戦用ブーツの音だからハンズで間違いないとして…）

ディマがどこへ逃げたのかが気になった。

―数分後―

藍は先に逃げた3人と無事合流した。
そして到着してからの第一声が……

「芹真さん。ボルトはずっと≪死体ゴッコ≫しているの？」

「はい？」

「……」

絶句＆理解不能。
トキは唖然。

「起きなさい。さもなくば――」

ボルトの死体に歩み寄りながら藍は宣言した。
その手元には、

「中華料理は無しよ」

見覚えのある、料理店の割引券が握られていた。
しかも、この場にいる全員分。
直後、ボルトの体がまばゆい光に包まれ、

「いやだ～！！」

「うわっ！生き返った！？」

跳ね起きたボルトに驚き、トキは引いた。
全くの理解不能。それは芹真も同様だったらしい。

「やっぱり実験中だったのか……
でもどうやったんだ、一体？」

「ちゃんと起きたんだから、中華に連れて行ってよ～！」

芹真の質問を無視して駄々こねて、藍に懇願していた。

「ちゃんと原理を説明したら連れて行くわよ」

「あ～、あれは！
光を全部散らしていただけだよ！」

簡単に説明するボルト。
もちろん、トキは理解できずにいる。
それを見て、

「この場の全員が理解できるように説明して」

「あ、ごめん！」

頭の中が混乱中のトキに、何らかのリアクションを取る余裕はな

かった。

「本当は、もっと早く起きようとしたんだよ？
でも、トキが何か頑張っているから起きようにも起きにくくて…
…！」

そこまで言われてトキの頭の混乱が少しずつ沈静化していく。

「生きているんだよな？」

「うん！私が死んだら形は残らないから、形がある以上私は死なないよ！」

などと言い、サラッと何か大事なことを言ったことにトキは気付かなかった。
ちゃっかり矛盾したことを言っていることに気付かなかったのは藍も同じだ。

「どう…」

「どうやってわざと死んでいたかというと～っ！
自分の纏っている光をほぼ全部散らしたんだよ！」

気のせいか、起き上がってからというもの、テンションが高い。

芹真にとっては耳障りでもあった。

「トキは知っている？
生き物って、光がなくちゃ死んじゃうんだよ？」

知らね～。
なんて、言いたくても思考が追いつかない。　いや、頭じゃなく口か……
とにかくリアクションが追いつかない。

「私ね、その光を散らしてもっかい集めることが出来るんだよ！」

「なるほど。
擬態にはもってこい……いや、待てよ」

疑問発覚。
芹真は改めてボルトの体を見回した。

「ボルト。お前ダメージは無いのか？」

ボルトの顔が振られる。
全く、なし。

「撃たれたりしてなくなった部分も、光から作り出すことができるようになったんだよ！」

誉めてくれと言わんばかりの笑顔と態度。
芹真は頭を撫でてやる。
いまの説明でトキも納得した。

うん。

「有り得ねぇ～」

歩んできた人生で最大の溜息と共にトキはそう言った。

愚痴を言っても意味が無く、
抵抗しようにも暴力を受けているわけでもないし……
愚痴を言う前に頭の混乱が完全に収まったわけでもない……

よって。
そんなトキに、目の前で起こっている事実を認めろというのは難しかった。

これが夢なら、どれだけ気が楽だったか……
その後、襲撃も無く４人は真っ直ぐに中華料理店に向かった。

第3話－Ｒｅｔｕｒｎ　ｔｏ　Ｓｃｈｏｏｌ　？－（前書き）

学校編の始まりです！！でも、今回、かなり長くなってしまいました・・・申し訳ございません。それと、毎度の事ながら字の誤りを見落としているかもしれません・・・

第3話－Ｒｅｔｕｒｎ　ｔｏ　Ｓｃｈｏｏｌ　？－

何もない空間に私がいる。

音も。色も無く。生き物の気配さえ感じさせない。

感覚がない。

それが一番適切な言い方かもしれない。

――私だけ

誰か知らない人が来る。

見えるわけじゃないし、感じ取っているわけでもない。

それでも。

確かにわかる。

誰かが来る。

私は、それが何なのか知った。

そうすれば――

そう思えば――

知らない、見えないはずの誰かが、私に会いにくることが解る。

その理由になる。

そうか……

これが、運命なんだ。

気がつけば自分が眠りの中に居た。
それを自覚したのは夢から覚めてからだ。

そして、それはまさしくたった今のことだ。
頭痛を伴う起床ほど不愉快な朝はないだろう。
頭痛に苛まれる頭を手で押さえ、上半身を起こす。

静寂に包まれた空間。
今が何時なのか関係ない。

静寂に包まれる時間帯。
カーテンの生地からうっすら差し込む光。
適度な暗さ。
その空間を独占しているのだと思うと、どこか新鮮な気持ちになる。

この頭痛さえなければ、とう話だが。

（……5時）

時計を確認し、短髪で黒い髪の少年：色世時（シキヨトキ）は、もう一度ベッドに背中から倒れこんだ。

Ｌｅｔ'ｓ　２度寝～！

…

……

……

――どころじゃない！

トキは慌てて上半身を起こし、周囲を見渡した。

時計、ベッド、カーテン、壁紙、蛍光灯、タンス……ｅｔｃ

「ドコだよ？」

静かな朝も、見知らぬ光景の前には小さきこと。

朝を堪能する余裕もなく、トキは焦った。

見知らぬ部屋で寝ていたのだ。

そこで、トキはいくらか考えてみた。

昨日何があったか？

ここに寝ている原因は何なのか。

「……酒？」

ふと思いつき、それを機に１つ思い出す。

（そういや、昨日は中華料理店に連れて行かれたんだっけ？）

まだ完全に目覚めていない頭の中のスクリーンに、その光景が浮かび上がる。
飲んだ気がする……気がする。

「飲まされたんだっけ」

ぼ〜っとしながらトキは記憶の発掘を続ける。
が、それ以降の記憶が出てこない。
それもそのはず。

トキは覚えていない。
料理店で出された酒を飲んで、誰よりも早く撃沈したのがトキだったのだから。

同時刻、台所に1人の女性が立っていた。
朝日を受けるその背中で、後ろ手に愛用のエプロンの紐を結ぶ。

黒い長髪は綺麗に整い、腰に届きそうなほど伸びていた。

目の前には調理台。
その後ろ側にガス台。
ガス台の左側には数々の食材&まな板と調理スペース。

「……」

静寂の中――

彼女は振り返り、まな板の隣に置いているバンダナを手に取った。

三角に折り、額にあて、後頭部できつく結び止める。

「よしっ」

太陽の光を正面から浴び、彼女：藍（アイ）は手に包丁を握った。

目を閉じ、手首を包む黒い符を出現させる。

開眼！

それと同時に、包丁が日本刀へと変化する。

それも二刀流。

（華創実誕幻）

次に、オリジナル陰陽術を発動する。

「一段：椿」

藍の瞬速クッキングが始まった。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第３話－

－Ｒｅｔｕｒｎ　ｔｏ　Ｓｃｈｏｏｌ　？－

ＡＭ　０６：５８

トキは応接用の席に着いていた。

現在、トキは頭痛に苛まれて蹲（うずくま）るようにソファに腰掛けている。

しかし、それはトキだけじゃなく――

「ぬぅ……」

トキの真正面に座る男も同じだった。
彼は芹真といい、トキをココまで連れてきた本人である。

そして、ここは彼の事務所だ。

目の前のテーブルには様々な食器が並べられ、その上には様々な料理が乗せられていた。
見た目だけで判断するなら、どれもこれもウマそうだ。

頭痛さえなければ自然と食も進んだであろう。
しかし、今は飯よりも頭痛薬が欲しいところだ。

「トキ食べないの！？」

苛まれるトキに話しかける必要以上に元気な子供。
メチャクチャ頭に響く声で元気に質問したのはこの事務所に住む一番小さな女の子。
名前をボルト……
え～、確か、パルダンって言ったな。
聞かれたトキは名前を思い出しながら首を振った。

「頭痛が治まったら食べるよ」

小声で返す。

頭痛に苛まれる2人をおいて、ボルトは次々と食べ物を口に運んでいる。
気がつけば、テーブルの上にあった焼きそば、野菜炒め、ハムサンド、水餃子、トーストがなくなっている。
卓についてまだ10分も経っていない。
ボルトの消費スピードには驚いた。

トキと芹真が頭痛に苛まれ、ボルトは手を休めず食べ続ける。
その横で、テレビからのニュースが流れてくる。

芹真はわずかにそっちへ顔を向けた。ボルトの視線も釣られてそちらに注がれる。
僅かな沈黙が訪れる。

「昨日のアレは、現実なんだな……」

トキがそうこぼし、ボルトが再びテーブルの料理に集中する。
頭痛の中、昨日の映像が蘇ってくる。

ディマたちとの戦闘を終えた後、芹真事務所の3人とトキは中華料理店に直行した。

「ここに来たことはあるか？」

場所は3つ離れた街にある繁華街。
その店は見た目でわかることがいくつかあった。

まず、中華料理店で間違いない。
看板にはデカデカと日本にはない組み合わせで漢字が並び、ドアには四聖獣か何かのレリーフが見られた。
そして朱色がメイン。

「……屋敷みたいだ」

「ははっ！
確かに、その表現は間違いじゃないな」

「芹真さん。
トキはココに来たことが無いんじゃないかなぁ？」

トキの反応を見てボルトが言う。
この金髪っ子は、ついさっきまで死んでいた（ように見せていたらしい……）にも関わらず、この場所に行くと決まった瞬間から、誰よりもテンションが高い。

（有りかよ……）

それも問題だが、他にも多くの不安や疑問が頭の中に浮かび上がっていた。

「いいの？芹真さん」

藍も不安を抱いている様だった。

「何が？」

「この店って、孫（ソン）の店の１つじゃ……」

誰だ？

トキが疑問を浮かべた瞬間、ボルトが答えを返した。

「孫ってのはねぇ、中国とかインドの方で有名なＳＲ（セカンドリアル）なんだよ」

「有名人なんだ」

浮かんだ感想を言う。

そこに芹真が一言。

「日本人も知っている奴は多いぞ」

「へぇ〜、そうなの？」

今度はボルトが聞き返した。

「最も……
多くの人間が物語で出会う孫と、いまこの世に存在している孫は天と地ほどの差があるからなぁ」

日本人でも知っている者は多く……
中国・インド方面でも有名人。
で、物語が存在して、そこに出てくる人物。

「誰だろう？」

店の前に立っているにもかかわらず、４人は会話を続けた。
軽い営業妨害になりつつある。

「“ソンゴクウ”って読むんだっけ？」

「え？孫悟空？」

それを聞いたトキが思わず笑いそうになってしまった。
有りえねぇ〜。

「漢字が苦手なボルトにしてはよく出来ました。この店はその息子が営業している。肝心の親はというと、あれだ」

半ば自暴自棄に近い状態でもトキの耳はしっかり傾き機能していた。

「職業マフィアだ」

更に笑えない……

ボルトの答えも、芹真の説明も本当に笑えない。

（ひょっとして、ギャグか？）

そう願いたいものだった。こんな話を誰が信じる？

しかし、そんなトキにかまわず説明が続いた。

「密輸ルートを幾つも仕切っているし、バラし・ヤク、他に何やってたっけ？」

芹真から質問を受けた藍は肩をすくめ、仕方なさそうに答える。

「誘拐・暗殺・人身売買・武器の大量所持など諸々よ」

説明の終わりと同時に、芹真は再びトキに顔を向けた。

「と、まぁ――
そんな奴でも息子にまで同じ事をさせているとは限らんから安心しろ。
それに息子とは面識があるんだ。
だから、安心して入れるさ」

「それは知っているよ～ていうか、前にも来たじゃん」

「……あれ？
そうだっけ？」

既知であることを告げるボルト。
ボルトは一刻も早く入店したいらしい。

が、逆にトキは乗り気じゃなかった。

ついさっきまで、生死に――
人生に関わるような事件に巻き込まれていたのに、どうして芹真やボルトは、平然としていられるのか？
その疑問が心の内に晴れない雲を作っていた。

「トキ。
もう終わったことだよ」

横からTシャツの端を引っ張るボルトに言われる。
そこで思うことがあった。

こいつは心が読めるのか？
そう思った矢先――

「読めるよ」

元気に宣言。
当然じゃんと言わんばかりに胸をそらして。

「嘘だろ？」

「本当だよ！」

たまらず聞き返すが、ボルトは頬を膨らませて答えた。

改め……
諦めて、ボルトが心を読めるんだとトキは自分に納得がいくまで言い聞かせた。

無性に疲労感を感じる。

考えてみれば、今日一日変わったことが多すぎた。

出会っては襲われ、逃げても襲われ、というか拉致・勧誘されたと言ったほうがいいのだろうか？

とにかく、疲れた。

「だから、ここでご飯食べようよ！」

勝手に心の内を読み、ボルトが励ましの言葉をかけてくる。

プライバシーとか皆無に等しい。

「ここのホイコーローは旨いぞ」

メニューを勧めてくる芹真さん。

乗り気じゃないのはトキと藍だけだった。

「大丈夫なの？」

「大丈夫さ。藍は知らなかったっけ？

息子のほうはまだセカンドリアルとして目覚めていない」

藍も黙ったままでいた。

正直、トキも不安でいっぱいだ。

「またアイツらが襲ってきたりするんじゃないか？」

「大丈夫だよ！
ディマたちはもう来ないよ！」

何を根拠に言っているのか理解できずにいると、

「だって、周りに人がいるじゃん！」

ボルトに指摘され、トキは自分の目でそれを確かめてみた。
数十分前まで静寂に染まった街にいたのだが、

「言われてみれば、人気が戻ったって言うか……」

「クワニーが術を解いたんだな」

芹真が説明する。

「ＳＲの力は……」

「芹真さ～ん！！」

突然開かれた正面扉。
説明しようとした芹真の言葉が途切れる。
姿を現したのは、中華風の衣服に身を包んだ男性だった。

「……コイツが孫の息子だ」

「お久しぶりですね！
藍さんに、ボルトさんも！」

満面笑顔で言う彼の特徴は、蒼みがかった髪と、細い目。それから左の頬から首まで伸びている大きな傷。
白い肌にはつやがあり、何とも笑顔の眩しい御方だ。
ボルトは挨拶を返し、藍は合ったことがあったのか記憶を掘り返してみる。
ふむ、記憶にない。

「連絡をしてもらえれば、すぐにでも迎えにいきましたのに！」

「いや、お前は相変わらずだなパイロン」

「はい！
ところで芹真さん……彼は？」

「こいつがトキだ」

「彼がですか！？」

驚き、トキを上から下まで見回す。

「立場的にはお前と同じだよ」

興味津々にトキを見回すパイロンに芹真は説明した。

「トキ、こいつが孫の息子のパイロンだ」

「“白龍”と書いてパイロンです！
よろしくお願いします」

「……あ、日本語うまいですね」

何とか出てきた言葉がそれだった。

「どうも。
日本語は修行のために必要だったから何とか覚えました」

２人の会話を聞きながら、藍は２人の身長がだいたい同じであることに気付いた。

「俺は、シキヨ　トキ。
“色”に世界の“世”書いて色世。
トキは時間の“時”」

「そうか。そのまんまなんですね！
覚え易くていいです」

そう言って、パイロンは再び芹真の方を向く。

「芹真さん。いつもの部屋でいいですよね？」

「ああ」

「では、どうぞこちらに！」

そうして４人は入店を果たした。

店の中は大いに賑わっていた。
正面玄関から少し進み、また大きな扉が３つ隣接している。

そこをくぐり、５人は大食堂に入った。
多くの丸テーブルが大小さまざま用意され、それを取り囲むみ食

事をとる様々なお客達。

来客には外国人が多かった。

店内も朱色がほとんどで、柱、床、天井など、何処を見ても同じか似たような色で『装色』されていた。

「繁盛しているな！」

まわりのざわめきに負けない声で芹真が言う。

5人は中央の通路を奥へ奥へと向かって進んだ。

「はい！今日も満員ですよ！」

（すげぇ……）

「～♪」

トキはムードに飲み込まれていた。

天井を見上げ、そこから見える天井絵もかなり凝っているモノだと直感した。

店内の所々に置かれている彫刻や置物も、美術の教科書で見たことがあるようなモノもある。

「ねぇ、トキ。

そんなにキョロキョロしなくても大丈夫だよ～♪」

「ボルトはここに何度も来ているのか？」

「ううん。あんまり」

「俺はこういう高そうな店には入ったことがないから慣れてないんだよ」

溜息混じりに説明するトキ。
その台詞を聞いたパイロンは、

「大丈夫ですよ。ここは金持ちも来ますが、お金のない人たちも大勢、気軽にお越しくださりますからから」

笑顔で説明。
何でも、安い料理は１００円出せば食べられるらしい。

５人は２階へ続く階段に差し掛かり、昇り終えると目の前には正面玄関以上に立派な扉が現れた。
その扉をくぐると扉は閉められた。

「こんな所もあるんだ……」

「ここは個室での食事も出来るのよ」

トキの隣を歩く藍が説明した。
5人はまた少し進んだ。
通路の所々に煌(きら)びやかな装飾の黒い扉がある。
それが、個室の出入り口だ。
5人は数多くある扉の1つの前で止まった。

「では、いつも通りこちらで！」

扉を開け、パイロンが4人を中へと導く。
部屋の中も朱色がほとんど。
中央に6人掛けのテーブルがあり、部屋の隅にはソファ。
電灯が数種類設けられ、空調もある。

「メニューはどうなされます？」

「全部のメニュー持って来てくれ。
トキの好き嫌いまでは知らないからな」

「わかりました！少々お待ち下さい！」

手っ取り早いやり取りが終わり、パイロンはジェット機にも負けないくらいの早さで部屋を出て行った。

「さて、トキ。
俺達に聞きたいこととかあるだろ？」

４人だけの個室で最初に芹真が口を開いた。
ボルトの視線もトキに向く。
藍はひとりで瞑想していた。

（無いって答えたらどうな……）

「どうにもならないよ」

またもボルトの読心術……

「じゃあ、聞かせてくれ。
あんたたちは一体何なんだ？」

これが一番の問題だろうとトキは思った。

「俺達は、『芹真相談事務所』或いは『芹真万全事務所』だ」

「何でも受け付ける万全事務所だよ」

芹真の説明にボルトが加わる。
再び、芹真の説明。

「で、俺が社長の芹真だ」
「私はお留守番係の～！」
「＋残飯処理係」
「ボルトだよ～！」

芹真の簡単な自己紹介に続き、ボルトが挙手して自分を示す。
藍の小声は、ボルトに届いていなかったらしいが……

「藍です」

仕方なさそうに、丁寧なあいさつ。

「事務所って、なんで相談事務所がマフィアと繋がりあるんだよ！？」
「孫のことか？」

新たに質問するトキと、答えを返すため確認をとる芹真。

「最初は全くといっていいほど――
ってわけじゃないけど、仲が良かったわけじゃないんだが……」

「パイロンね～、芹真さんの熱烈なファンなんだよ！」

ボルトから元気な声で答えが飛んできた。

「ファンって？」

「孫は武闘派過激勢力で有名な密輸カルテルなのよ。
その息子のパイロンが色濃く影響を受けるのは当たり前。だから、近接戦闘の強さの一念においても、芹真は彼にとって憧れの的なのよ」

今度は藍からの説明。
ゴメン。せっかくの説明だがワケ解らない……

「芹真さんが強いからパイロンは憧れているんだよ～！」

「メニューを持ってきましたぁ！！」

勢いよくドアが開かれパイロンが突入してきた。
それでボルトの説明と突然入室したパイロンの台詞が重なる。

噂をすれば何とやら……

「さて、メニューが来たところで」

「わたし焼売と炸醤麺（＝ジャージャー麺）！」

早くもメニューが決定するボルト。
おい、かき消された台詞は気にならないのか！？

「それから、川丸子湯と油淋鶏！！」

「相変わらずですね！
かしこまりました！」

ボルトに負けないくらいの威勢で注文を書き込んでいく。

（北京ばっか……）

藍は内心呟いた。

「芹真さんは？」

「じゃあ、福建炒飯」

「かしこまりました！」

「私は麻婆豆腐で」

ボルト、芹真、藍と、次々とメニューが決定していく。

「トキは？」

藍を覗いた3人の視線が浴びせられる。
早く選ばないと視線が痛い。

「ホ、回鍋肉……」

雰囲気に呑まれ、芹真が入り口前で言った言葉を思い出し、口にする。
それをすぐに書き込み、

「了解しました！
では、少々お待ちください！」

そう言って、電光石火のごとくスピードで部屋を出て行くパイロン。

メニュー全部持ってきた意味ねぇ……

「さて、続きだ」

パイロンが出て行ったのを見計らい、芹真は切り出してきた。

「事務所と孫の密輸カルテルとの関係はわかったろ？
それじゃ、今度はこちらから質問がある」

「どうしてトキは引き篭もったの？
ねぇ、どうして？」

そんな芹真に気付かず、あどけない表情でトキに尋ねてくる。

「どうしてって……」

「自分でもわからないの？」

「クラスが嫌になったのかもしれないわよ？」

否定しようか迷っているトキに、藍が言葉をかけた。
ボルトは藍の意見に首をかしげていた。

「パルも嫌な思い出くらいあるでしょう？
トキにもあるんだと思うの」

聞いていたトキは内心で藍を疑っていた。
コイツも心を読めるのか？

「藍ちゃんは読めないよ」

ボルトが読むし……

「人の理由を勝手に決めるなよ。
つか、その前に勝手に心の内読むなよ！」

「だってぇ、トキって答えるの遅いじゃん！」

キッパリ言いやがるボルトと睨み合い、

「認めたくないけど……半分当たりだ！」

ボリュームを上げてボルトに向かって言う。
次に藍にも顔を向ける。

「何で知っているかのように答えるんだよ!?
これは俺からあんたへの質問だ」

「知っていて当然だからよ」

「当然って、何でそう言いきれるんだよ?」

「これから迎え入れるトキという人間を追っていたからよ。
入試でも履歴書の提出は当たり前でしょ?」

ずだん、とトキがテーブルに手を着いて身を乗り出す。

「ストーカーかテメェは!?」

「初対面の人にストーカー呼ばわりされるのは初めてなんだけど。
喧嘩売っているのかしら?」

怒りで声が震えるトキ。
藍も立ち上がる。
珍しく激情している藍を見て……

《へぇ〜
機嫌の良い日だ》

ボルトと芹真は同時に思うのだった。

途端、頭が揺れる。
トキの脳天に衝撃が走り、回想がストップして現実時間に戻ってくる。

「しっかりと食べなさい」

衝撃を与えたのは藍で、その手には目玉焼きが乗った皿があった。

「いらないんなら、ちょうだい？」

ボルトの提案をジェスチャーで却下したトキは、頭痛の中なんとか箸を手に取る。
芹真はまだ箸さえ握っていない。

「昨日、酒飲んだっけ？」

誰にともなく呟く芹真。

「お酒に弱いのに無理して飲むからそうなるのよ」

「藍……俺は、弱いわけじゃないんだぞ？」

「そうだったっけ？」

ボルトの目も藍に向く。

「藍が強すぎるだけなんだって……」

それにはトキも同情。

ボルトは声を上げて笑っている。何が可笑しい？

逆に藍の顔が少し赤くなった。

「ち、芹真さんが弱いからよ！」

「ううん！

藍ちゃんが強すぎるんだよ」

ボルトも芹真の意見に納得。

「な――！

じゃあ、私は次の仕事に行く準備をするから！」

半ば機嫌を損ねたまま藍は振り返り、自分の部屋へと入っていく。

「トキも今日から学校に行くんでしょ？」

「え？」

みそ汁を口に運ぼうとした途端、ボルトが聞いてきた。

「学校だよ。もうサボらないんでしょ？」

芹真もトキに目を向けていた。

痛い質問。

そして、視線。

いや、死線。

引きこもりから脱出するためには学校へ行くようにならねばならない！

だが……

「行けるかなぁ……」

メチャクチャで壮大な不安を拭いきれない。

圧し掛かるプレッシャー。それが時間の経過と共に強くなってい

く。

「大丈夫だって」

励まそうとしているのか、芹真がそんな言葉をかけてくる。
ボルトは再び食事に専念した。
何を根拠に大丈夫だと言っているのか、聞きたい所だっ……

「大丈夫だって、ホラ」

芹真の指差す方向を向き――

「……」

絶句。
その先に藍がいて――

「何よ？」

見慣れた制服に身を包んでたたずんでいた。

悩み恐れているうちに学校へ行く時間になり、強制連行されるハメとなったトキ。
そして、トキを引っ張る藍。

何でか、昨日のことを思い出してしまう。
藍は、店では中華料理を僅か口にしただけで、後は酒。彼女の行動が酒豪だと自ら暴露していた。

しかし、あれだけ大量に飲んでいたにもかかわらずピンピンしている。

その前はひとりでゾンビの集団を相手にしていた。疲れていないのか甚だ疑問である。
そのおかげでトキは助かっているワケだが。
改めて、彼女に救われたことを意識した。

トキには打開出来なかった状況を、藍は打開して見せたのだ。

（認めざるを得ないのだろうか？）

自らの非力。
自分が知らない力の世界を……

「トキ」

通学路の半分を消化したところで、藍が話した。

「何を悩んでいるかわからないけど――
私でいいなら相談に乗ってあげるから、あまり無理しないように」

「別に我慢はしていないよ。
まぁ、心配事って言ったら、いま登校しているってことかな……」

「私もよ」

目を合わせないで会話は続いた。

「昨日はありがとう」

「え？何？」

突然の話に僅かな混乱を見せる藍。

「昨日、助けてくれて」

「ああ……あれ。
クワニーの時のことでしょ？」

「名前覚えてないけど、呪術師とかいう……」
「クワニー・トロス・ウィトナ。
とても有能なＳＲよ」
「でも、クワニーは俺を襲ってきた。
で、藍はそんな時助けに来た」
やっと顔を合わせての会話が展開された。
「まぁ、結果としては助けたということになるけど……」
「違うのか？」
「昨日の私の仕事は午前中にトキの尾行、午後はクワニーの足止め」
昼にディマたちがコンタクトしてきた瞬間から尾行の任は変更された。
相手がクワニー達とわかっているのならば、対応策がある。
とは言っても、芹真事務所でまともに対応できるのは藍（わたし）しかいない。
「尾行って……
やっぱりストーカーと変わりないじゃん」

「あのねぇ……多くの人間に『死』が迫っているのよ？
あなたはそれを知らないだけで……」

「どうしてそんな事がわかるんだ？
何を根拠に言っているんだよ？」

残念ながら、藍が思っているほどトキは藍たちの世界を認めていない。
まだ、冗談か夢だと思い込んでいる節がある。

「じゃあ、これから私が言うことを良く聞いていて」

歩きながら藍は言った。

「ＳＲの世界には大きな組織が１つと、無所属の者達、それから小さな集団、とに分類されるのよ」

「組織ってのは？」

「組織のことを多くの者は『協会』と呼んでいる」

「何協会？」

「何もない、ただ“協会”とだけ呼ばれているの」

藍の説明は続いた。
協会は、世界中で局地的に起こるＳＲによる事件を解決するために組織された。
それが協会と呼ばれる一大組織だ。

「人員のすべてがＳＲで、そこに一般人は一人もない」

「じゃあ、芹真さんや藍たちも？」

「残念ながら、属していないわ。
私達は、小規模集団よ」

小規模集団であり協会に無所属であることは、協会と従わないという意味を示している。
藍は無所属の意味をトキに教えた。

「そういや、ゾンビ野郎が言ってたけど……」

（クワニーの事ね）

「協会の実行だったか、行動だったか……
とにかく何とか部隊みたいなこと言っていたから、あいつらは協会側なんだろ？」

「そうよ。
ホート・クリーニング店。
それがディマたちの拠点よ」

そのことを少しだけトキに教えてから、

「話を戻すわよ」

2人は僅かに歩行速度を落とした。

「私達の事務所も、協会も、ある人物2人を探しているのよ」

トキがつまずく。
藍はトキの腕を掴んで支えた。

「サンキュ」

「1人はメイトスという男」

向き合いながら藍は続けた。
幸い通学者は2人を除いて皆無だ。

「その男も、やっぱSRなのか？」

「そう。そして、彼の力の前ではSRであろうが何であろうが、無

意味なの」

「無意味？」

トキの腕を放し、再び歩き始める。

「メイトス・シュラヴァイトフ・ジヴィア彼のＳＲは」

「ちょっと待て……」

気になったことがあった。
もっと早くにツッコミたかったが。

「えーと、藍さん。
キミは転入手続きしているのかい？」

本当に今更気付いた。
同じ場所を目指しているのはいいが

いや、良くない…
トキの頭を支配しているキーワード。

それが、尾行。芹真からの勧誘。
ディマたちの拉致未遂。

ボルトの護衛。それから、今一緒にいる藍。
そこから生まれてきたトキなりの予想。

（まさか、すでに学校に馴染んでいるとか……）

「しているわよ」

悪い予感的中。

「何日前からだ？」

「２０日前から」

淡々と言う藍と、今にも不安のパラメータが振り切れそうなトキ。

「お話戻していいかしら？」

ジェスチャーで応える。
どうぞ……

「ワンシーズン前、彼らを追う私達はあることに気付いたのよ」

再び歩き出そうとしたトキに、

「あなたが彼らの目的だってことに」

言われて、トキは藍の目を見た。
本気であることが一瞬で窺えた。

（やってらんねぇ……）

え、俺？
そんなリアクションを取る暇もなく、

「メイトスは、『完全否定』のＳＲ」

完全否定。
Ｎｏ、と言う勇気。
とは良く聞くものの、そんなものが役に立つのでしょうか？
甚だ疑問だった。
思わず心の中で静かに叫んだ。

「２人目は、老若男女さえわかっていないうえに、名前さえ知らない。
わかっているのは能力だけは耳にしたの」

「で、どんな力？」

何で朝からこんなうんざりするような話を聞かされなきゃならないのだろうか？

言ったら負ける気がする故に、トキには口を出さないようにした。

「２人目は『完全支配』のセカンドリアル」

「完全“否定”に続いて今度は“支配”かよ」

「私は知らないけど、トキ。

あなたには彼らに対抗できる力があるらしいわ」

突然話題を振られるトキ。

「あー、無い無い。俺そういうの皆無。

そんな力があったら、とっくに使ってますってのの」

「ＳＲの力が発現する条件はいまだに不明とされているけど、確率的には世界の誰よりも強く『思う／想う』ことで発現するらしいの。

それがいつ発現するかわからない。だから……」

「俺もこれから力に目覚めるってか？

そうかそうか、良かったね。

で、俺には何の力があるっていうんですか？」

あきらかに舐めているその態度に――
青筋が1本。

藍は片手でトキの襟元を掴み上げ、背中を道路脇のコンクリート塀に押し付ける。

「礼儀を知らないのね」

更に、何処からとも無く取り出された日本刀がトキの首を掠めてコンクリート塀に突き刺さっていた。

「何すんだよ！」

「まともに話を聞かないから説得しようと思って」

「これじゃ脅迫だろ！？
藍には感謝しているけど、もう終わりじゃないのかよ！？」

「終わり？」

「とぼけんなよ！
俺をあんた達の追跡劇に巻き込むんじゃねぇよ！」

「巻き込むつもりはないわ。
それにどう足掻いたって、あなたは確実に巻き込まれる運命にあ

るのよ？」

「何だと！」

「さっき言ったメイトスともう1人は、ずっと何らかのＳＲを探しているわ」

「何のＳＲだよ！？」

「言ったでしょ？
私は知らない。知っていることはあまりない。
だから、出来る範囲でトキを護ってあげたいの」

「どうして！？」

「2人が求めている力の持ち主。
それがトキの中にあるのよ」

「認めろって言うのかよ！」

「無理だと思うわ。いまの調子だと」

藍の手から日本刀が消える。

「だったら、どうして……？」

「気休めになるから」

「気休め？」

「私達の目的はトキが彼らに殺される前に、力に目覚めさせてあげることだった」

「俺が狙われる理由は何だ？」

落ち着いたのか、受け入れたのか……

とにかくトキの表情が変わった。

実際のところは、気休めとは何も関係ないことに気付いて諦めただけなのだが。

「メイトスの場合は、唯一の障害になる可能性を秘めているトキの抹殺。

……らしいわ」

聞かなきゃ良かった。

「だから、私達が護ってあげる」

そう。

手遅れだ……

「あいつ、３組のトキじゃないか？」

学校に到着して早々――
トキの顔を覚えている奴らによる噂が始まった。
ネタにされる側のことを考えもしない、どこにだっている迷惑な連中だ。

「不登校だったって言う？」

校門をくぐり、真正面に校舎。　右側に野球部のグラウンド。
左側はサッカー部のグラウンド。
とにかく、トキは久々にこの無駄に広い面積の土地を所有する学校に登校したのである。

―私立　白州唯高等学校―

２人は校舎へと真っ直ぐに伸びる通路を進んでいた。

（朝練の連中の視線が痛い）

まだ時刻は　ＡＭ０７：２２
この学校の連中の平均登校時間からすれば、かなり早い方だ。

原則、０８：３５までに教室に入ればセーフ。
それ以降はアウト。
自慢じゃないが、トキは引き篭もる直前まで遅刻ゼロだった。
自分の記録とも言えない記録を思い出している間も……

あれって、色世じゃない？
３組の？
引き篭もってたって言う？
何しに来たんだろう？
つうか隣のって、同じクラスの藍ってヤツじゃないか？
転入してきた人だっけ？
何で色世と一緒なんだ？

注目を浴びつつ何とか玄関へ到着。
ふっ、と一息おいて、

「お前、俺と同じクラスなんだ」

「そうよ」

「そうか……」

即答、諦観。
校内にはあまり人が居なかった。
たまに見かける生徒は、例の如く噂するか、疑問を抱いたような表情つくるか、我関せずと言わんばかり素通りするか。

（まぁ、素通りされたほうが助かるんだがな）

滞りなく2人は自分達の教室へ。
2年3組。

（あ～、久々に来ちゃったよ……
この異界に）

曰く、変人の集まり。
曰く、白州唯の激戦区。
……ｅｔｃ

何故そう呼ばれているか説明すると――

トキのクラスで委員長を務めているのがヤクザの息子。
それと対立するように、裏クラス委員長というものが存在する。

やがて2人の委員長によって『派閥』が生まれた。

正クラス委員長：ミツル派
裏クラス委員長：マイコ派

クラスが二分しているのだ。
教室の入り口から少し離れたところでトキは立ち止まり、心を落ち着かせる。
不安が大きい。
それを拭うための勇気を振り絞らなくてはならない。

「大丈夫？」

「緊張してる……」

一度大きく深呼吸する。

（落ち着けぇ…）

自分に言い聞かせた。

瞬間――

２人の前で、教室の盛大にドアが破損。

同時に吹き飛ばされた生徒が、廊下の壁に頭を打った。

「野郎ォ！」

怒声と共に、男子生徒は立ち上がって教室に突っ込んでいった。

「こんな朝からケンカって……」

冷静を取り戻そうとしていたトキと、大抵は冷静でいる藍。
登校して早々、ミツル派とマイコ派の喧嘩に遭遇した。
今の男はマイコ派の1人だ。

（不曲の宮原……）

トキはそいつの名前を思い出した。
宮原という男は絶対に自分のやり方や信念を曲げない。
だから、『不曲』と呼ばれるようになった。

すると――
再び宮原が教室から弾き出され、地面を滑りながら頭を廊下の壁にぶつけるという行動をリプレイ。

まぁ、やり方を変えない。
つまり、ケンカの時、リアルであろうが台本であろうがほとんど同じパターンの攻撃。
負け続けて当然である。

宮原の顔に出来た新しいアザを見て思った。

（コイツ、いまだ変化なしかよ……）

「まだだぁ……」

トキと藍に気付かず、宮原は立ち上がった。

その直後――
教室内から蹴り飛ばされたイスが、地面を滑って宮原に向かってきた。

「何の！」

宮原はそれを飛び越える。
しかし、それが相手の戦略であったと気付いたときには――

「アホか」

教室の中から助走をつけて、飛び蹴りを繰り出す男子生徒。
見事に宮原の腹部を捉えた。

「グエッ！」

再び宮原は壁に叩きつけられる。
痛みにもがき苦しむクラスメイトを見下ろし、

「いい加減に諦めろよ」

そう言って勧めた。

（相手はやっぱり――
キリングマシーン・岩井か……）

トキの知る限り、岩井がクラス――どころか、この学校での実質ナンバー1である。

ちなみに、宮原は黒髪の角刈り。
岩井は赤髪でポニーテール。

「おっ！」

トキと岩井の目が合った。

「トキか？」

「あ、まぁ……」

「よぉ！
久しぶりじゃないか」

笑顔を向けて言葉をかけてくる岩井。

「あれ？　お前、橙空と一緒か？」

「まぁ」

「まっ、いままで通りよろしくやろうじゃん？」

その言葉が何を意味するのか、トキは知っていた。

「はぁ、どうも」

こうした

――岩井ｖｓ宮原――

みたいなことが日常的に起こることから、戦場などと呼ばれているのだ。

ちなみに、岩井の言葉には威嚇も含まれていた。

下手すれば、ああなると。

もちろんその対象は宮原だ。

岩井は２人に背を向け、破損したドアを元の位置に戻し、律儀に割れたガラスを回収した。

その間、宮原は気を失ったままだった。

２人は教室に入り、ホームルームが始まるまで小声で質問と回答を繰返した。

同時刻　芹真相談事務所。
食器を片付ける芹真の背中にボルトが質問を浴びせていた。

「トキのＳＲって、何～？」

危うく皿を落としそうになった芹真は、質問に答える。

「確定は出来ないが、今のところ……
アレの一番確立が高い」

「意味が分からないし、答えになってないよ？」

「トキのＳＲとして目覚めようとしている力は、他にも何人か候補者がいるんだよ」

「じゃあ、トキじゃなくて、他の人たちにその力が目覚めるかもしれないの？」

「可能性としてはそれも有りなんだが……」

「じゃあ、トキが力に目覚めなかった時はどうするの？」

いきなり芹真の手元の皿が割れる。

「それは……」

割れた皿の破片を集めながら芹真が口を濁す。

「もしかして、考えていないの～？」

「いや」

ボルトに話していいのか悩んでいるところだった。
説明が難しいわけではない。
が、ボルトだけには話せない理由がある。

「とにかく、本人は気付いていないけど、トキの力は目覚めかけているんだよ。
昨日見たろ？」

「パイロンのお店で？」

「いや、それより前だ」

「そうなの？
私は夕方からだったけど、それっぽいの見ていないよ～？」

「言うと思っていたよ。

安心しろ、その時じゃない」

「え～？いつ～？」

「……覚えてるか？
昨日の昼、ディマたちがトキに接触した時の事を」

ボルトは少し頭を働かせ、その時のことを思い出した。

「ああ、昼間のあの時～！」

「その時、何かおかしいと思ったことはないか？」

食器洗いを何とか終えた芹真がボルトの方を向く。

「もしかして、いきなり止まった雨……！？」

「そう。あの止まった雨こそ――
トキの力によるものだ」

「でも、メイトスが狙うほどの力とは思えないけど」

「俺も、それが気になっているんだよ。
だから確信が持てない」

そんなやり取りをしている一方、トキは……

４時限目のちょうど半分を過ぎた頃、トキは教室に戻ってきた。

これまで何をしていたか？

簡単なことだ。

職員室へ呼び出されて説教および進路相談。

ホームルーム終了直後、呼び出されてから今まで職員室にいたのだ。

開放されて教室に戻ったトキに、クラス中から異様な眼差しの集中砲火が浴びせられた。

（アイタタタッ……）

正直、昨日銃で撃たれたのに比べればどうってことない。

が、精神的ダメージはこちらの方が遥かにでかい。

今すぐにでも逃げ出したい。

（いまの時間は――英語の授業か）

痛い視線を出来る限り無視し、教室に漂う雰囲気を把握。

黒板を埋め尽くす英単語の羅列。
見慣れた女性英語教諭。
見知らぬ男性外国人。
ＡＬＴという奴か？

「トキ君。いままで職員室ですか？」
「はい。スミマセン」

質問に手早く答え、自分の席に着く。
トキの席は、廊下側から２列目の一番後ろ。
ちなみに、藍は窓側２列目の一番後ろ。
着席を確認した女性教諭は、

「では、説明します。
彼は……」

そう言って隣の外人を指す。
ＡＬＴだろ？

「やほー、久しぶり」

小声で隣人が囁いた。
それに軽い会釈で答える。
教諭の説明は続く。

「Ｍｒ．ワルクスです。
カナダから……」

説明を続けようとした教諭は口をつぐんだ。
説明が終わる前にＭｒ．ワルクスが動き出していた。

「ヨロシク」

その男、ワルクスは白人で背が高く、顔は細長くて大人しそうに見えるが、筋肉の付いた体がひ弱い男性というイメージを軽く吹き飛ばしている。

そんなワルクスから、トキの前に立つや否や、片言の日本語による挨拶が発せられた。
トキにとっては都合がいい。
何故なら、英語はどちらかというと苦手だからだ。

「……」

有難くとも――

英語の時間に日本語使う外人ってのに違和感を感じる。
1人、心で呟いて放心しかけるトキ。
まさか初対面で日本語を使ってくるとは。

「トキ……イロセ？」

気付かなかったが、Ｍｒ．ワルクスの手には席配置の表が握られていた。
そこに載せられた名前と位置を確認したらしい。

「あ――
マ、マイ　ネーム　イズ　トキ　シキヨ」

「シキヨ……Ｓｏｒｒｙ」

そんなやり取りが続いた。
周りからは、

『久々に来て人気者だな』

罵倒ともとれる言葉が飛んでくる。
ワルクスはトキの顔を見回した。

「メ、ワルイデスネ？」

何の前触れもなしに、いきなり痛いトコ突いてきやがった。
どうも昨日から失礼な連中＆痛いとこばかり突く連中と多数遭遇していることが、気がかりだった。

「さ、サンキュ……」

それだけ言い返したところ、ワルクスは黒板の横へと戻っていった。
それから十数分で４時限目は終わりを迎え……

最も危険な時間帯。
飯時がやってくるのだった。

弁当＝＜　スタンバイ
アイコンタクト＝＜　久しぶりなのに良好
目標地点＝＜　変わりなし

自分に言い聞かせる。

Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ？

英語女教諭が教室を出て行った瞬間――

「かかって来いオラァ！！」
「うるせェー！！！」
「なめんなぁ！」
「やかましんじゃゴルァ！！！」
「やめとけって、じゃなきゃ殺すぞ♪」

毎日恒例、昼休み抗争！

いい加減に飽きろっての！

しかし、そんな事言える勇気も実力もなく――
トキとその仲間、計5人はいち早く教室から脱出した。

背後に教室の喧騒が伝わってくる。

どれだけ騒がしいか？
下手すれば野球の乱闘時の騒がしさに匹敵する。
つうか、よく注意されないよなぁ、うちのクラス……

そんなクラスから脱出した5人。

「トキ、お前本当に引きこもっていたのかよ？」

走って3分後。
2階にある渡り廊下を通過し、特別棟の階段。

そこが、彼らの溜まり場だった。
2階の踊り場から3階へ続く階段。
そこに腰を落ち着かせて持参した昼食を堪能していた。

「ああ」

ここにいる5人は、クラス内で起こっている現象から逃げ延びている者達だった。
ミツル派でも、マイコ派でもない5人。

他の生徒は5人を『中立派』と呼んでいる。

その、他人曰く中立派のリーダー格：北島幸哉（きたじま こうや）の質問にトキは即答した。
幸哉は髪を染める事も、ピアスをつけることもなく、喧嘩だってしたことが無い。
学校の規定どおりに髪も短く切ってある、外見はいたって真面目な男子生徒だ。

ただ――
過去に何度かカラーコンタクトを使っている、と疑惑をかけられたことで揉めた事がある。
が、彼は視力矯正とも無縁な為、コンタクトは未使用。
生まれつき彼は淡い緑色の瞳を持っているのだ。

そして極度に年上を嫌う。
幸哉はいま、5人のなかで最も高い位置に腰を据えている。
ちなみに、あだ名は『コウボウ』。

「でも、その割りにちゃんと走れたわね」

今度質問を投げてきたのは、トキより下の段に座る女子だった。
彼女は崎島恵理（さきしまえり）と言い、５人の中の相談役みたいなものである。

水色の眼鏡に、肩まで届く茶色混じりのストレートにおろされた髪が特徴の女子だ。５人の中で一番頭がいいのも崎島だった。
彼女のあだ名は『スズメバチ』

「私も同感」

次に、トキよりも少し上の段に座っているもう１人の女子が、弱々しい口調でそう言った。
秋森智明（あきもりちあき）。

崎島よりも髪の長い彼女は、５人の中で最も平均的に何でもこなしてしまう人間の１人だ。
勉強、スポーツ、家事……ｅｔｃ
どれもが平均並みか、それ以上の結果を生み出す。

性格はお人好しで騙されやすいが、ハイレベルなプラス思考というアビリティも兼ねている。
そして、典型的な《キレると何をしでかすか分からない》タイプの人物だ。
これはトキも認めている。

そして、全校生徒が知っている。

彼女のあだ名は――放火魔――であった。

過去に起こった夜間学校での大火災。

唯一、の生還者が彼女だった。

焼死体が指の数以上発見された大事件で長い期間話題になった。

彼女が火を放ったのを目撃したという者がいて、それがあだ名の原因となった。

しかし、彼女は身に覚えがないと否定を続けている。

とてもじゃないが、トキはそれがデマだとしか思えなかった。

智明はそんなことが出来る性格じゃないし、第一に臆病者（チキン）だ。

「ほら、智明も認めたよ」

「でも、すごいよな。

引きこもっていたのに体力が落ちてないんだから」

今度は小柄でタイガーヘッドの男子。

最も低い位置に座っている男子生徒、大橋友樹（おおはしともき）。

（髪型を抜いて）体格と口調に似合わず、５人のなかで最も喧嘩っ早いのがコイツだ。

大人数で群れる事を好まない性格上、このグループにいる。

いざ喧嘩となれば、朝から喧嘩していた宮原と似ている。

猪突猛進。困難上等。
これは他人から聞いた話だが、友樹は相手が２０人で、味方がいなくても突っ込んだらしい。
そんな彼のあだ名は『バッファロー』。
バッファローって、猪突猛進だったっけ？
誰がそんなあだ名をつけたかトキは知らないが、毎回疑問に思っていた。

とにかく――
このメンバーでの昼食も久しぶりだった。

この瞬間だけをいうなら、学校に来て良かったと思える。

（藍は何してるんだろ？）

ふと、今朝から行動を共にしてきた彼女の事を思い出す。

「そういやトキ」

幸哉が話題を持ちかけた。

「ここら辺さぁ、最近不審者とか多いから見回りを今まで以上に強化しているんだよ」

「不審者？」

「ええ。上級生と同級生の引ったくりや恐喝の報告が何件かあるわ」

崎島が簡単な説明を入れる。

「それって、やっているのか？
やられているのか？」

大事な質問だ。
問題を起こしているのがクラスメイトだったら厄介だ。
ホームルームが長くなって、帰るのが遅くなる。

「やられているのよ」

「怖いよね」

（切れた智明の方が怖い気が……）

「だから、夜はあまり出歩かない方がいいぞ？」

そう言って注意を促す幸哉と、

「でも、トキなら大丈夫だろ？
引きこもるの慣れてるだろうし？」

それに続いておちょくってくる友樹。
そんな、ドコにでもあるような日常が流れた。

昼休みの終わりを告げるチャイム。
それも久々だった。
教室には何時もどおりの光景があり、新しく加わったクラスメイト：藍の姿がある。

校内に響いていた活気溢れる声も静まり返った頃、トキは疑問に思ったことがある。

『どうして自分は引きこもったのだろう?』

改めて、自分がやってきた事を振り返る。
引き篭もった動機が分からない。

思い出せない。

このクラスが嫌なのは確かだが、大した理由にならない気がしてきた。
気付けば、５時限目は終わりを迎えていた。

何事も無く放課後を迎えたトキは別のことで悩み始めた。

部活に行くか否か。
トキの所属している部活に大会は無い。

だが、面白いしタメになる部活だ。
そんなトキに、幸哉が声をかけてきた。

「またあの部活に行くのか？」

明確な部室が無いため、その都度部活動専用の連絡板を確認しなければいけない。
トキの目の先に映っている文字は――

『実践術部　本日　中庭！』

顧問は蓮雅（レンガ）さんという、クラス担任であり元傭兵という噂つきの女性だった。
毎回教える内容が違うから出てみる価値はある。

だが、強制参加じゃない上に今日はあまり関わりたくないという気分なので……
トキは帰宅を決意。
が、決意した矢先、

「一緒に帰りましょ」

藍に掴まれ、芹真事務所へ……

「どうしてまたココに来たんだろ……」

「嫌だった？」

呟くトキにボルトは聞き返した。
精神的に参っているのだ。

久しぶりの登校であったのだ。
下校して戻ってきた藍とトキを迎えた芹真は、２人にコーヒーを差し出した。

「いや、嫌って言うか……
ほら、あるだろ？
自分の慣れた空間に居心地のよさを感じるってヤツが」

「理屈はわかるけど、あなたが１人になった時に昨日みたいな状況から生き延び自信はあるの？」

これまた痛いところを突いてきた。
無理です。
即死でしょう。

「でしょう？

だから私や藍ちゃんが護ってあげるんだよ！」

元気に言ってボルトがココアを飲み干す。
その後ろで芹真さんが、俺は？と言いたげに自分を指差している。

「だって芹真さん何にもしないじゃん！」

「すいませんね」

「芹真さんがマトモに戦うところだって見たことないよ！」

そこまではっきり言われたら、さすがの芹真も文句を返さなければ居心地が悪い。

「あのなぁ、お前の攻撃が派手すぎて俺が見えないだけだろうが！」

「それに芹真さん事務所にいても食器洗いと掃除機しかやらないじゃん！」

「買い物にも行ってくれないものね」

藍が追い討ちをかける。
が……

「でも、芹真をボルトの攻撃の眩しさのあまりに見失うってことはよくあるわね」

「ぅ……」

言葉に詰まるボルトと、沈黙する芹真。

「それより、一番よく食べるボルトが芹真さんか私の食器洗いを手伝ったことあった？」

「さ、3回くらいは……」

くらい、の辺りからボルトの声が小さくなっていった。

「人のことを言うなら、自分に非が無いようにしてからにしなさい」

『はい』

芹真とボルトが同時に頭を下げる。

「――藍。

お前、部活入っているだろ？」

思わず芹真たちの会話を聞きながらコーヒーを啜っていたトキの口からそんな言葉が漏れた。

「ええ。入っているけど？」

「何部に？」

嫌な予感は見事、

「実践術部よ」

ど真ん中に的中したのである。

「やっぱり……」

「誰から聞いたの？」

「いま聞きました」

「私は言ってない」

そこで今のトキの心を読んだボルトが答える。

「実践術部ってとこで、顧問の人の口癖を藍ちゃんが言ったからだって」

「え、私が？」

驚いて自分の言った言葉を必死に探ろうとする藍。

「“人の事言うなら、自分に非が無いようにしてからにしなさい”って台詞だ。

篭る前に蓮さんから聞かされた口癖だよ」

「蓮さんって？」

今度は芹真がトキに聞いた。

ボルトはそれが下心による質問だったのか疑問に抱いた。

「登龍寺蓮雅（とうりゅうじれんが）。

今年で25だったはず」

「実践術部って言うからには、格闘とか強いんだろ？」

その質問には簡単に答えられた。

「はい。

何でも元傭兵だって噂もありますけど……」

それを聞いて芹真は納得した。

「アイツか」

「知ってるんですか!?」

「知っているも何も、俺も同じ部隊にいた」

その話に藍とトキが驚きを隠せなかった。

「芹真さんが学校の人と関係を持っていたなんて……」

初めてその話を聞いた藍の頬は引きつり、トキはそのまんまの感想を漏らした。

「それはそうと……」

藍は芹真に聞きたかった事を思い出した。

「あれは何なのよ?」

「あれって？」

「とぼけないでよ……
どうして彼が学校に来ているの？」

一瞬、俺のことか、と不安になったトキ。
そのトキの心を読んだボルトは笑いを堪えていた。

と、その時。
事務所の扉が開いた。

「こんばんわ～！」

そこには岡持ち片手に笑顔満面のパイロンが――もう1人、見覚えのある顔がもうひとつ。肩を並べて立っていた。

「よぉ、どうしたんだパイロン？」

芹真の目がパイロンの斜め後ろで改まっている男に向いた。

「どうしてお前がハンズと一緒にいるんだ？」

トキは思い切り後退していた。
藍の目付きも戦闘モードへ変わり、ボルトはノーリアクションで2杯目のココアの用意を進めた。
芹真も微動だにしなかった。

「昨日、藍さんに頼まれたレシピを届けにそこまで来たところ、彼が事務所に入りにくそうにしていたので一緒に来たんですよ～！」

「違う！
わざわざライバルである芹真のヤツの所にいかなきゃならんというこの屈じょ……」

「えぇ！！
あなたが芹真さんのライバル！？」

「だから、俺に言わせろ！！」

芹真は前々思っていたことがある。
自分を慕うパイロンと、自分をライバルとして嫌うハンズ。
並べて会話させたらどうなるだろうか？

「漫才には程遠いか……」

そんなアホみたいなことを言いつつ、

「パイロンの用事は分かった。
それで、ハンズの用事は何だ？」

これは早急に用件を聞いた方が良さそうだ。
決意したのか、一度苦い顔をしたハンズが用件を口にした。

「ディマからの伝言だよ」

仕方なさそうな話し方でハンズが言った。

「俺たちも協会から抜けた」

「協会から抜けただと！？」

「え～、どうして～？」

「俺も理由は知らん……
それから、質問をひとつ預かっている」

「ディマからの質問？」

再びボルトが聞いた。

「ああ、ディマからの質問だ。

絶対芹真に聞いて来いって」

「早速聞かせてくれ」

「……協会のトップはオウル・バースヤードと名乗っているＳＲで間違いないのか？」

芹真は質問を聞き終え、納得した。

「なるほど。
今ごろ気付けたのには何か原因がありそうだな……」

「一体何のこと？」

状況を理解しているのはおそらく芹真とディマの２人だけだ。
トキはそう確信した。
ほとんどの者が理解していないのがこの場の現状だ。

「時期が来たら教える。
だから今後は、皆で打倒メイトスに集中するべきだ」

「俺にも教えれねぇのかよ？」

「自分で気付いた人間以外に話す気はない」

「まるで数学の問題ですね～」

数学じゃなくても問題のようなものだ。
自分の力でその答えに辿りつくしかない。

「で、ディマは？」

「はぁっ？」

「他に何か言ってなかったのか？」

「……」

「私達と組まないか～、だってぇ」

沈黙していたハンズの心を読み、ボルトが皆に聞こえるように言った。

「テメェ！
何で……！」

「いいぞ」

即答が芹真の口から告げられた。が――

「クソォ！　俺は認めねぇ！
何で芹真なんかと組まなきゃいけないんだよ！」

本音を聞いたところで芹真は藍に食事の支度を頼み、藍はそれを受け入れた。
ハンズやパイロンにも夕食を一緒しないか聞いた。
返ってきた返事は２つ。
ＮｏとＹｅｓ。
どちらがＮｏで、どちらがＹｅｓかは説明するまでも無い。

騒がしい一日がまた終わろうとしていた。

そんな何事もない日々が続いた。

トキと藍は学校へ。
芹真は洗濯を出来るように練習し、ボルトは相変わらず。

トキは当分、芹真事務所に住むことになった。
ときどき事務所を訪れるディマたちと話し合い。

騒がしい学校生活に振り回されるトキ。

気が付けば、トキは自分が引き篭もった理由を忘れた。
でも、これでよかったのかもしれない。

過去にこだわりすぎて未来を見失う。
それは、忘却から見出したトキなりの生きていく標のようなものだった。

前向きに生きよう。
せっかく、面白（が、現実離れしているのがかなり傷）い連中が自分の周りにいるのに。

ありきたりな現実じゃない分、性質が悪く――
でも貴重で面白い体験ができるかもしれない。

だから、もう少し……
こんな生活が続けばいいと思えるようになってきた。

第４話－確実に迫る影／Ｔｈｅ　ｎｉｎｅ　ｄａｙｓ　ａｆｔｅｒ……ｒａｉｄ

目標を見失った人間は何を目印に生きていけばいい？
そんなことを言っていたのが誰だったか私は覚えていない。
ただ、私は目標があってもそれに向って自ら動くことが出来ない。

そんな時こそ、どうすればいい？
夢を持ち――
憧れを抱き――
それでもそれが叶うのこと無いモノと知ってしまったら？

数日前。
その話を人に打ち明け、私は泣いてしまった。

そんな私に、彼は――
希望の言葉を残してくれた。

“歩ける頃の君を取り戻す方法を見つけたから、ちょっとだけ待っていて欲しい”

歩くことの出来ない私。
そんな私に“治る”と言い続ける人。
どうして彼は、私のことを知っていたのだろうか？

人助けをしたい。
小さい頃からの夢がそれだと言った日から、その人に勧誘された。
歩けるようになったら、人を助ける仕事に就きたい。
その為に勉強をしたい。

“君なら　なれる”

彼が言った言葉がどれだけの希望を与えてくれただろうか。
嘘偽りの無い彼の眼は、私に失ったと思っていた希望を思い出させてくれた。

月明かりに照らされる病室。
上体を起こし、彼女は窓の外に顔を向けた。

「芹真さん……」

それが、希望を分けてくれるその人の名。
今日は、月は出ているのだろうか。

（明日も来てくれるかな……）

―第４話―

―確実に迫る影！／Ｔｈｅ　ｎｉｎｅ　ｄａｙｓ　ａｆｔｅｒ……ｒａｉｄ―

「最近変わったこと？」

いきなりトキは質問された。

「どうしたんだよ？
急に……」

昼休み。
場所は、学校でダントツ人気の無い特別棟の２階と３階をつなぐ階段。
何故、自分達のクラスで食べないか？
理由は簡単だ。

昼休み、あの場所は“戦場”と化す。

そんな場所でランチタイムを邪魔されたくないし、クラス内の抗争を止めることも出来ないトキら5人はいつもここまで避難して昼食を取っているのだ。

定番になっている平和な場所。

あまり大きな理由がない限り場所を変える気はない。

「ああ。変わったことは無かったか？」

回答を求められたトキは悩むそぶりを見せ――

（ありすぎるが……

話せる内容のもの1つもなんて無い）

変な集団に襲われて――

勧誘されて――

巻き込まれて――

家を破壊されて――

学校生活にまで関わって――

住所変わって――

「何でそんなこと聞くんだよ？」

「別に聞いたって良いじゃん？」

「ダメだ。今の俺はとても神経質になっているため、理由を教えなきゃ口を開かないぞ」

軽いノリの友樹に対し、トキは硬い頭の人間を演じてみせた。

「アハハッ！
トキが馬鹿になったよ！」

そのトキを見て、自分より上の段に腰を下ろしている幸哉は、腹の底から笑っていた。
トキは沈黙。
墓穴を掘った気分だ。
同じ空間にいる女子2名は見事に無反応。

「かなわねぇな……」

友樹は理由を話す気になったらしい。

「最近クラス内でトキのあだ名が変わってきたからだよ」

「俺の？」

「あ、それ私も気になった」

智明が話しに加わる。

「え？　変わってた？」

トキのいるクラスは、変人の集まりだとか、戦場、異世界なんて呼ばれるほどオカシナ連中が押し込められたクラスだ。
笑えないことに、全員にあだ名が付いている。
ここにいる5人も例外でない。

階段の一番上にいる幸哉（コウヤ）は、『コウボウ』
幸哉の場合はまだスタンダードなあだ名だから良いが、秋森　智（チ）明（アキ）さんの場合、あだ名が、『放火魔』である。
メガネかけた崎島（サキシマ）さんは、『スズメバチ』
友樹（トモキ）は、『バッファロー』

で、俺。
色世　時（トキ）のあだ名は……

『Ｍｒ．バーチャル』

これは、俺がゲームやマンガ――
つまり、俗に言う2次元に詳しかったりする（といってもジャンルはかなり偏っている）からだ。

一応言っておこう。
俺よりも数段ディープな奴が同じクラスにいる。

とにかく、あだ名が変わったとして……
一体何に変わったっていうんだ？

「俺はまだ聞いていないな」

トキ本人はもちろん。幸哉と崎島さんも知らないようだ。
すでに新しいあだ名を知っているのは、友樹と智明の2人だけ。

「で、どう変わったんだ？」

ふと、予想がついた。

（もしかして…）

「“引きこもり”だってさ！」

予感的中だよ、チクショウ……
それに変な出来事のオンパレードだったから、自分が引き篭もっていた事すら忘れかけている始末だ。

「そりゃピッタリだ～」

「お似合いじゃん！」

いや……
お似合いっつぅか、まんまじゃん？
いや、まんまじゃんとか、その前に、もう引き篭もってねぇじゃん！

「ハッハッハッハッハッ！！」

「クスッ
何の捻りもなしね。ニックネームセンスを問わないと」

「何もそんなに笑うほどじゃねぇだろうが！！」

みんな馬鹿にしやがって……
チャッカリ何言っているんだ崎島さん！？

「マジかよぉ、引き篭んなきゃよかった……」

今更になって後悔しまくるトキ。
その間、崎島さんは黙々と弁当を頬張ることを再開した。

昼休みが終わる頃、話題はすっかり別の話に変わっていた。
いつものように昼休みの喧騒が残る５時間目。

トキの席から見える光景を一言で言うなら――

『消しゴム合戦』

文字通り、消しカス、消しゴムの破片が飛び交っていた。
写真でよくみる湾岸戦争の光景にも匹敵する量の消しゴムが飛んだ時があった。

ちなみにどの写真かというと、トキは詳しく知らないからこれしかいえない。

“夜空を飛び交う緑のレーザーか何か……”

皆さん経済的余裕を持て余しているのだろうか？
さすがに教師からの説教を喰らい――

あっさりカウンター。
クラスの知能派４人（その中に崎島さんも入っている）で、教師を丸め込んでしまった。

（さすがにヤベぇだろ？）

今回が１１回目だけど。

生徒と教師の問題を抱えたまま5時間目終了。

6時間目を迎えるまでの休み時間。

不曲の宮原と、キリングマシーン岩井のケンカが始まり、結果は岩井のパーフェクト勝ち。

宮原はいつも通り、1Hitも入れること出来ずにブチのめされた。

懲りないヤツめ……

6時間目、担任の登龍寺　蓮雅（レンガ）先生によるロングホームルーム。

やはり、先ほどの5時間目のことで話し合いになり、抗議した生徒4人も蓮雅さんによって簡単に丸められた。

「担任の私から言えることは一つ」

ジャージに身を包み、長いポニーテールにまとめられた赤茶けた髪を後ろでまとめている。それが蓮雅先生の外見的特長だ。

「そんなに体力を持て余しているのなら――」

その一言でクラスに漂う雰囲気がガラリと変わった。

説教を喰らってダンマリが続く雰囲気が、一瞬のうちに闘気で充満したのである。

（ああもう、またかっ！？
このクラスになってから何度目だよ？）

次に発せられる言葉が、大体予想できたトキ。
トキだけじゃない。クラス全員がそれを理解している。
そして予想通りその言葉は発せられた。

「全員、机を寄せなさい」

『いよぉぉっしゃぁ！！』
「早く行け！」
「るせェ　馬鹿！」

待ってましたと言わんばかりに動き出す生徒達。
ほぼ男子全員が机を教室の両サイドと前後へ綺麗に寄せる。
ちょうど教室の真ん中がぽっかりと開いた状態になる。

はぁ～っ、皆さん血の気の多いこと……って！
いや、ダメだろ！？
さっきのこと反省しろよ！

「玄路君、これをドアに張って」

そういって男子生徒：玄路が受け取った真っ黒の画用紙には黄色

い文字で――
『体育祭について作戦会議中。覗いたら通報！』
――なんて書かれている。

ちなみに、この学校の最高権力者である校長は担任の蓮雅さんによって丸められている。
決して脅しているわけじゃないらしい……
が、実際のところは怪しいもんだ。

だって、未だにこのクラスへの苦情、学校側からは0件らしいんだから。
クラスの中央に早くも1人の男子が立つ。

「リベンジだ！
前に出ろ岩井！！」

宮原……

『さっきブチのめされたばかりじゃん？』

と、ギャラリーから苦情が飛んでくる。
例によって例の如く、指名された岩井も宮原を叩きのめすために出て行く。絶対の確率で。
売られた喧嘩は絶対買う、それが岩井だ。

ちなみにこの闘い、6時間目が終わるまで続く。

戦いとか、血が苦手な生徒は参加できるはずもなく――

「それじゃあ今日は、社会に出てから書類に書き込む時に役立つ実践術を……」

戦りたいヤツは教室の真ん中で、戦り合い――

戦りたくない生徒は、教室の横で蓮雅さんの実践術講座を聞く。

どちらも嫌な人は自主勉強（つっても、遊んでいる奴が大半）。

（明らかに学級崩壊ってやつだと……）

毎回思う。

つうか、もっと説教するべきじゃないの？

そんなことを思いつつも、トキは宮原と岩井の決闘（というか一方的で、いじめにも見えなくはない）を眺めていた。

宮原の左正拳に合わせたカウンターが見事に入ったところで、藍が隣にやってきた。

「ねぇ、ここ本当に学校よね？」

「あぁ。学校さ。

白州唯高校の2年3組のいつもの光景」

約１ヵ月前。
トキが引きこもっている間に、転入生としてこの学校にやってきた藍。

それでも、この光景を目にするのは今回が２回目。
どうも落ち着かないらしい。
まぁ、本当にこれが授業の光景なのかと聞かれ、自信を持って首を縦には振れない。

だって半・学級崩壊じゃん？

「これだけ騒いでよく苦情が来ないものね」

「蓮雅さんの仕業だよ」

「蓮雅先生の？」

寄せられた机の上に腰掛けて２人は蓮雅の方に顔を向けた。

「去年もそうだったけど、かなり音響対策しているんだよ」

トキの説明の最中、早くも岩井と宮原の対決に決着がした。
右ハイキック。
またしても１Ｈｉｔ入れることもなく、宮原は撃沈した。

「ところでさ」

トキは藍に聞いた。

「10日くらい前だっけ？中華料理屋でさぁ……」

「パイロンの店のこと？」

「そう。あの時言っていたことで聞きたいことがあるんだけど」

―9日前―

パイロンが部屋に戻ってきた時、持ってきたお盆に人数分の飲茶が乗せられていた。

芹真は再びパイロンが出て行くのを見計らい、

「じゃあ、信じるかどうか分からないが、俺達の詳細を教えよう」

「詳細って、私達のSRを教えるってこと？」

思わずそう聞き返したのは藍だった。

芹真はそれに頷く。
藍が自分の力を明かすことを嫌っているのを知っていての言動だ。

「俺達が正直になれば、トキも素直になるさ」

根拠無き自信。
いや、心のどこかに根拠の欠片があるのだろう。
ボルトは料理が食べられるのなら何でも話すだろう。
それらを計算に入れて芹真はパイロンの店を選んだのである。

（まぁ、まさか藍がここの割引券拾ってくるとは思わなかったが……）

「あんたらが詳しいことを俺に教えたとして――で？」

「……で、ってのは？」

話の要点をつかめない芹真。

「まだ俺に用事があるのか？」

「トキ、もう忘れたの～？」

ボルトが2人の会話に入ってきた。

「トキを私達の事務所で働かせることが、第1の依頼でもあるんだよ。
それで、ついでに引き篭もりからやめさせる、っていう……」

淡々と説明するボルトを、

「わかったから！
じゃあ、始めてくれ！」

トキは大声で遮る。
当然、ボルトは頬を膨らませてトキを睨む。

「じゃあ、俺は相談事務所の社長の芹真。
俺のSRは―（―」コイツ、聞いてんのかよ？）

「一応聞いているみたいだよ」

トキと芹真の心の内を読み取ったボルトが説明する。
ボルトとにらみ合っているトキだが、耳は芹真の方へ向いているようだ。

「“人狼”だ」

「ジンロウ？」

「そう。
狼人間。狼男」

「狼男って、あれか？
満月見て興奮するような？」

トキが知る人狼。
映画や本で見聞きした情報を口にする。
どれかの情報が当たるかもしれない。

「銀の弾丸で死ぬとか、二足歩行の半人半狼になれるとか？」

とは言ったものの、オカルト方面に関してはゲームで触れた分の情報しか持ち合わせていないトキである。

「当たりが1点ある」

それでも当たりはあった。

「二足歩行の狼に化けることくらいはできる」

ｆｏｏｎ。
へェ～。
もっかい、ふ～ん。

その時、破れんばかりの勢いでドアが開く。

「川丸子湯と福建炒飯で～す！！」

扉を破壊しかねない勢いで部屋に突入してきたパイロン。
これでよく店を任されているもんだ。

「待ってたよ～っ！♪」

機嫌を損ねていたボルトの顔に笑顔が戻る。

「いつもに増して早いな……」

「はい！
自分でも作れるメニューが増えましたから！」

改めて――
凶悪そうなイメージのマフィアの息子：パイロン。

彼のその言葉遣いと容姿のギャップに驚いた。

見た目異常に丁寧な言葉遣い。

芹真とパイロンのやり取りをよそに、ボルトは誰よりも早く料理に手をつけていた。

「いただきます」

芹真も手を合わせ、食前の儀式を済ます。

「では！」

それだけ言って再びパイロンが退室。

入れ替わるようにボルトが挙手し、

「私のＳＲは“魔女”だよ！」

これまた元気ハツラツと宣言。

次に、トキと芹真の目が藍に向く。

「言わなきゃダメなの？」

つい先ほど言い争ったばかりの藍とトキ。面と向かって話しにくいのはお互い様。
付け加え、藍は元々自分のＳＲを話そうとしない。

「今日ぐらいいいだろう？」

芹真の一言で藍から溜息が漏れる。
話す気を完全に失ったか？

「“陰陽師もどき”のＳＲ」

短く、それだけ言った。
よって、トキは肝心な部分しか聞いてなかった。

元々まともに取り合いたくない気持ちで一杯だったから仕方がないと言ったら仕方ない。

「まぁ、他にも色々あるけど――
簡単な説明はこれくらいでいいだろ？」

いいワケが無い。
が、今のトキにそれを突っ込む気力、精神的余裕はない。

「……人狼」

トキはもう一度確かめるため、芹真に軽く人差し指を向けて言う。

「魔女？」

次にボルト。それから……

「陰陽師」

「そうよ」

「じゃあ、魔法とか陰陽術みたいなのが使えるのかよ？」

聞いてみた。こればかりはなぁ……

論より証拠という奴だ。

この目で見たら認めてやろうと心に決めたトキ。

「無理だよ～」

間髪入れずボルトは答えた。

「だって、私も藍ちゃんもさっきの戦いで意外と消費したんだよ？」

「してない」

「あっそ」

ボルトの解説を否定する藍と、その解説を聞いてやっぱりなと思うトキ。

「どうせ、口だけのでまかせだ。と思ったら大間違いだよ～」

いきなり心を読むボルト。言いながらトキに人差し指を向ける。

図星のトキは一瞬フリーズ。

芹真はそんな事態を予測済みだったらしく、黙々と炒飯を口に運んでいる。

トキが芹真たちの説明を信じないのは何故か？

“自分は神だ”と言って、周りにそれを本気で信じる人間はいるだろうか？

まず、いない。

これは絶対間違いないとトキは思っている。

それが常識だろう。だから信じない。

「信じてよ～」

箸で肉団子を4個の肉片にしながら、ボルトが困った風な口調で言う。
が、そのボルトの表情は料理の所為かわからないが、綻んでいる。
そんなに美味いか、肉団子。

「華創実誕幻」

ふと、トキの顔が聞いたことのない単語を発している藍へと向く。

「一段：菖（しょうぶ）」

「何それ？」

トキより早く、ボルトが聞いた。

「あ～、初めて見る術だね」

ボルトの視線が自分……
正確には、自分の背後に注がれていることに気付き、トキは自分の背のほうへと顔を向ける。
そこには藍が居た。

「あ……れ？」

２人……

再びトキは卓に座っていた藍へと目を向け、

「あれ？」

紛れもなく、藍本人はその席に座ってトキの反応を堪能していた。

「菖の効果は、虚像」

「あ、なるほど」

「菖」

もう一度術を発動し、虚像が４体に増えた。

その時のことを思い出しながら、トキは質問した。

「カソウジツ何とかって、……術？」

最後の方をまわりに聞こえないように小声で説明する。

「華創実誕幻（かそうじったんげん）」

藍の手がトキの肩に置かれる。

「一段：椿」

その瞬間、トキと藍の周りに流れる時間の早さが変わった。
瞬速効果の添付である。

「おっ、何だこれ？」

周りの光景が全てスローモーションになる。
オレンジの光が差し込む教室から、全ての声が消えた。

その光景に驚くトキの横で、藍は掌をクラスの中央に向ける。

「一段：薄（すすき）」

もう一つの術で、スローモーションで動いていた光景が更に遅くなる。
それはまるで止まっているかのようにも見えるが、僅かに動いているのが見て取れる。

「何なんだこれ!?」

「トキが疑問に抱いていたモノでしょ?」

驚くトキに説明する藍。
周りに2人の会話が伝わらない為にこの術を発動したのだ。

「じゃあ、これが藍の陰陽術?」

「クワニーとの戦闘中、トキにかけた“菫”
パイロンの店で見せた“菖”
それから、いま使っている“椿”と“薄”
これが私の使う術の一部よ」

教室全体に目を配る。
やはり、誰もが止まっているようにしか見えない。

「それじゃあ、誤解を解いておきましょう」

「誤解？」

机に座ったままのトキに、同じく机に座ったまま藍は説明した。

「私の華創実誕幻は、陰陽術じゃないの。
あくまで　陰陽術－もどき－　」

「陰陽術と違うのか？」

「私は陰陽術を身につけることが出来ないのよ」

「へぇ、それでも陰陽師のＳＲって名乗っているんだ？」

「正確には全然違うけど」

即答、否定。

「え？違うの？だって、パイロンの店では……」

「ええ。
陰陽師もどきと言ったわ」

トキには理解できない。というか、出来るはずがない。
言葉に脈絡というか、道筋というか、順序というか……
自信はもてないが、藍の話し方にそう言うのが無いから理解に困

るのかもしれない。
それ以前に、トキはあの時ちゃんと話を聞いていなかったのも原因である。

「この“陰陽術もどき”は、今は私だけの力。
一般人にも正統陰陽師にも使えないオリジナルの術よ」

「へぇ。あの時見せられた残像も驚いたけど、これはこれで新鮮――というか、不気味だな」

トキの目は静寂に包まれた教室中へと向いていた。
極度のスローモーションのおかげで、動いているのかどうかさえ分からなくなってくる。
いっそスローモーションじゃなく、完全に時間を止めてしまえばいい気もするが。

「あまりにも騒がしいと時は、これで半現実逃避できるわよ」

便利なのかどうか判断が難しい。
藍の術は、端から聞けば現実離れしている。
実際に目で見て体で体験すればより現実離れしている。しかし、認めざるを得ないのも確かだが。

（改めて……本物だな）

トキが藍の力を認めたところで、藍は少し自慢げに、

「こんなことも出来るわ」

掌を見せるように左手を差し出す藍。

「二段：紅葉」

もみじ。
トキの頭の中に紅一色に染まる山の風景が浮かんだ。
と、掌から熱が零れてくる。

「：朝顔」

藍はトキの前で2つの術を同時発動させ、掌に炎を生み出す。
トキは目を丸くした。

「わっ！
……炎も出せるのか」

「正確には紅葉で熱を生み、朝顔で光を放ったの。

理論的に炎を作った、と言っていいのかしら」

藍は掌を握り、炎を消した。

「何か、術を唱える時、何段とかって言うけど、全部で何段あるんだ？」

「あまり人には教えたくないけど……いいわ。
今日だけ特別に教えるけど、他言は禁物よ」

特にクワニー。
言ってから、それを付け加えて言おうか悩み、とどめた。

「分かってるって」

「約束よ」

念を押し、藍は説明に入った。

「華創実誕幻は、私ともう1人の陰陽師もどきが作ったオリジナルの戦闘陰陽術よ」

藍の真剣な眼差しがトキに注がれる。

「基本は一段。
この段から術は始まって、次に二段、三段と続くの」

「どう違うんだ？」

「一段は主に効果。
二段は属性（二段の下段は特別だけど）
それで、三段は特殊な攻撃と効果」

「始めから三段目は出せないのか？」

「出せなくは無いけど――
強力な術は一段目を発動させてからじゃないと無理よ。
三段目と天段は、一段と二段の効果と属性の複合強化版だから特に。
獄段は例外だけど……」

段々ややこしくなってきたところ――
実際はそうややこしい話ではないが、午後という一番眠くなる時間帯もあって話を聞くだけでは頭で整理ができなくなっているのだ。

ほら、結構眠くなる時間帯じゃん？
トキは頭を整理するため時間をもらった。

（えーっと、つまり――
ゲーム的な感覚でいけばこうなるんだな……

一段が基本攻撃。
二段が効果。
三段が……一段と二段の術の強化版で）

「天段と獄段？」

藍はその質問にもすぐに答えた。

「天段は切り札よ」

「すごい術なんだ」

「華創実誕幻の中でも最高威力と効果を持っているのが天段よ。
基本的には三段の後にしか発動できないけど例外もあるわ。
獄段は天段とも……ちょっと違うかな」

獄段の説明に困る藍。
当然、トキは疑問に抱いた。

「やっぱり違うんだ。
で、今度はどう違うんだ？」

「獄段は……回数制限みたいなものがあるのよ。
それに対して、天段は回数制限は無いと言ったら無いわ」

「どっちも回数制限はあるんだな？」

「……1日の内に発動できる回数に制限のある方が天段。
もう一方の獄段は、一生の内で使える回数が決まっているもの。
ええ。今の表現の方が正確ね」

自分でも納得し、藍は念を押す。

「1日の内に回数制限がある術が、天段。
人生で使用回数に制限のある方が、獄段よ」

分かりにくい表現に少し戸惑ったものの、トキも納得した。
切り札のような術であることは同じで、ただ、使える回数が違うだけだ。

「華創実誕幻について他に聞きたいことはある？」

「いや、ない」

「じゃあ、それ以外で聞きたいことは？」

「……ぁ。
ある！」

質問を思い出し、藍に投げる。

「今の俺達の立場、ってのが気になるんだ」

「立場？」

話の糸口をつかめない藍に砕いて説明できるようにトキは頭を回す。

「それは、私達、芹真事務所全員にいえること？」

トキが言葉を選び抜く前に藍は聞いた。

まさしく、当たりである。

「そう。協会がどうのこうのって話とかしているじゃん」

芹真とディマが話している場面を思い出す。

ディマたちも協会を抜けた、と言っていた。

『も』ってことは、芹真さんらは既に抜けていると解釈できる。

もちろん。

芹真さんはそれに頷いた。

とっくの昔に抜けた、と。

芹真さんやディマの会話を聞いてそう解釈する前にその話は聞い

ていたし。

「協会ってのは敵なんだろ？」

「世界中の全ＳＲのうち、約７０％が協会の側にいるわ」

「残りの３０％は？」

「無所属の者達を協会はテロリストと呼んでいるわ」

あらかじめ前置きを言っておく。
重要なところを説明しているからだ。

「残り３０％中、２６％の割合を無所属者たちが占めているわ」

「俺達は無所属に入るのか？」

「いいえ。私達は協会でも無所属でもない、小規模集団。
全体の４％くらい、最も割合の少ない立場にカウントされているわ」

「４％って……」

協会とは一体何なのか？
それは芹真に聞いた。

ＳＲによる犯罪を防ぐための組織。
無所属の者ほど、何モノにも束縛されずに自分のセカンドリアルとしての力を自由に開放できる。
だから、無所属の者をテロリストと呼ぶということも聞いた。

「小規模集団のほとんどが、弱小で脆弱なＳＲの集まりだからよ」

その中で、芹真事務所がどれだけ異色の存在なのか、トキはまだ気付いていない。

「どっちかというと、小規模集団のほうがテロに繋がりやすいんじゃないか？」

テロリズムや犯罪心理に詳しいわけじゃない為あまりハッキリしたことは言えないが、集団の方が“皆で行けば恐くない”の理論で行動し易いんじゃないだろうか？

（集団心理もよくわからないなぁ……）

「どれだけ束になろうと、弱小であることに変わりはないのよ。
ＳＲだけの世界情勢で言うなら、完全に協会側が優位な立場にあるわ」

圧倒的人数。

その全員がＳＲに目覚めた者達だ。
中には軍隊にだって手におえないＳＲがいる。

「そろそろ術を解こうと思うんだけど？」

藍の言葉を聞き、トキは教室の時計に目をやる。
密かにカウントしていた。
これくらい話をして、３秒も経っていない。

（便利な術だなぁ……）

術を解くことに頷いたトキを横目で見ながら藍は中央へと体を向けた。
少し、後悔する。

（嘘をついた）

自分に言い聞かせる。これでいいのか、と。

４％……

確かに、弱者同士の組合が４％の内、３％を占めている。
しかし、正確な情報を教えるならこうなる。
“協会すら手出しできない連中の集まりこそ小規模集団の本質で

あり、弱者もそういう厄介なＳＲと強い繋がりを持っている厄介者たち”

それが、小規模集団だ。
テロリスト撲滅のために組織された協会。

“協会からテロリスト扱いされないテロリスト”

パイロンもそうだ。これからＳＲとして目覚めるだろう彼。
そして、その父親の孫悟空も。
世界で十指に数えられる強者だ。

……それでも。

パイロンはもとより、小規模集団はＳＲな力を使って事件を起こす気はない。
だから、小規模集団と呼ばれる。
テロリストとしてカウントされないのもその為だ。
群れるだけで直接的な脅威ではない。

その後、藍は誰かに聞かれたらまずい説明も、聞かれても大丈夫な説明もなかった。
ただトキと並んで、目の前の決闘を６時間目の終わりまで観戦しるだけだった。

１時間後

夕焼けに染まる街。
街の中心部から少し離れた地域に『芹真事務所』は建っていた。
１階が事務所。２階は物置。３階には、いつの間にか住みついた人が何人か居るらしい。
４階だけ未だ謎。
屋上には、物干し竿とテレビアンテナ。
芹真事務所を簡単に説明すればこうなるのだ。

それが、肉親から送られた情報。
特殊なスーツに身を包み、景色に溶け込んで事務所を見下ろしている者がいた。

（芹真事務所の周辺に特殊な視覚結界か……）

明らかに異常が発生している。
その状況に男は溜息をつく。

（芹真事務所……
全員が手練れと聞いていたが、嘘のようだな）

男が耳にした情報と、いま男の眼下に映る光景。
そこには大きな差があった。
平和な日常生活が事務所のメンバーを変えたのだと思う。

そうでなければ、何故芹真は動かない。

あの光の魔女は気付かないフリでもしているのか。

（社長の芹真は人狼としてトップクラスの猛者。
同じく同居するボルトも外見は大分変わっているが、最近見せた戦闘能力の高さから見て、どの魔女よりもズバ抜けて高度・特異極まるものだ……
それに――）

そして、何故これほどの異常事態に芹真事務所“ナンバー1”の実力を誇るSRが気付かないのか？

（陰陽師もどき・符術師……そして）

彼女のことは聞かずとも少しは知っている。
だから、男は落胆しているのだ。

（何故この事態に気付かない？
……藍！）

男の目には、トキと肩を並べ何事もないように事務所へと帰宅を続ける藍の姿が映っていた。

事務所に帰ってきた藍とトキを、いつも出迎えてくれるはずのボルトが、今日は現れなかった。

「誰もいないのか？」

静寂に包まれた事務所内は、いつも誰かがいる騒がしい事務所の雰囲気からは想像も出来ないくらい寂しいものだった。

「出かけたみたいね」

藍は綺麗に片付けられた台所を確認して、確信した。
芹真とボルトが一緒に出かけるときは、決まって事務所を清潔にしてから出かける。

「買い物かな？」

ソファに鞄を置きながらトキは言った。

「書置きも無いみたいだな」

藍も鞄を置き――
テーブルの上にたたんで置かれている新聞に気付いた。付箋が張ってあることにも気付く。
時折、芹真はこうして自分がドコに出かけるのかを、直接紙に書かずにヒントだけを残して出かけることがある。

（夕刊？）

一度は新聞が開かれた形跡がある。

「コーヒー飲む？」

トキの質問に耳を貸さず、藍は付箋の貼ってあるページを開いた。

「勝手に淹れとくよ？」

藍からの返事が無いことを確認し、トキはカップにコーヒーの粉を入れ始めた。

「……」

藍の目が、付箋の貼ってあるページ内の記事を転々と移り読んで

いく。

（中国でテロ。
ケニアで新種の感染症の疑い。
フランスの航空機がトラブル。空港が乗客で溢れかえった。
世界の警察検挙率、堂々の1位は――
……）

藍が新聞に目を通している間、トキは給湯ポットの中身を調べていた。
中は全く冷めていない熱湯でいっぱいだった。
きっと、出かける前に芹真さんかボルトが入れてくれたのだろう。
いつも学校から帰ってきた藍とトキを出迎えてくれるのはボルトで、間髪入れずに芹真さんがコーヒーを差し出してくれるのだ。

まだ1週間とちょっとの共同生活だが、トキはそのパターンを覚えた。
出迎えはボルト。
で、間髪入れずに芹真さんがコーヒーを淹れてくれる。

有難いけど――

（俺はブラック飲めないんだよなぁ……）

芹真さんが淹れるコーヒーはやたらと濃い。
コーヒーに限らず、紅茶や緑茶まで全ての味が濃い！

トキはコーヒーカップに熱湯を注いでいく。

（え！？）

藍の目がある記事で止まった。
芹真が残したヒントが見つかったのだ。

「そんな……」

「どうしたんだ？」

２人分のカップを運びながらトキは藍に聞いた。

「芹真さんたちはパイロンの店に行ったみたいね」

「あの中華料理屋に？」

「そう。この記事を見て」

テーブルに新聞を置き、両手をついて藍は説明を始めた。
トキの目がその記事へと向く。
そのページに載っているのは全て外国の出来事だった。

「イングランドの孤児院施設で火事？」

「私やボルト。それからディマもお世話になった場所なのよ」

そこに載っている記事の内容を簡潔に言えばこうなる。

“現地時間のＰＭ　２３：５８にイングランドの孤児院で火災が発生。

出火所は台所である可能性が高く、現在も調査中。

当時、院内には１００人近くの孤児たちが就寝していた。

児童指導員や保育士たちの対処が遅れたことが原因か？　生存者ー０人ー”

トキは首を横に振る。

（ひでぇ事故だ……）

哀れむトキを気にとめず、藍は新たに説明する。

「この施設、表向きはちゃんとした孤児院だけど、裏の顔はＳＲの――

特に魔法使い達の隠れ家なのよ」

トキは自分の耳を疑った。

「魔法使い？」

「そう。１７世紀あたりから存在している歴史ある隠れ家なのよ」

当時の魔女狩りから逃れた者達の最後の隠れ家。
なぜ孤児院なのか、その理由は藍も知らない。

「今も、この孤児院は魔法使い達にとって隠れ家であった……」

「ＳＲの家」

「ここに名前は載っていないけど、保育士や児童指導員もＳＲなのよ」

「もしかして、全員がＳＲ――とか？」

「指導者たちは全員そうよ。
でも子供達は違う。すでに力を発現しているか、これから発現しうる子供たちよ。
ただの人間もいたハズ」

トキは手に持ったコーヒーのことを思い出し、藍に差し出す。

「ありがとう」

「じゃあ、ほぼ全員が魔法使いであったにも関わらず、火事になっちまったってのか？」

何とも間抜けな……

「違うわ」

藍はそれの否定した。

危うくトキはコーヒーをこぼしそうになった。

「私が知っている限りだと、あの施設には火の特性を持った魔法使いがいた。

それでも火事が起こり、なおかつ生存者が皆無……

いくらなんでも有り得ないわ。

つまり、そこから出てくる結論は一つよ」

生存者ゼロ。

火災対策が万全かは知らないが、藍の口調を聞く限りだと充分に対応できる人材は揃っていたようだ。

だが、それでも火事になった。

魔法使いは何もしなかったのか？

いや……

トキも藍と同じ結論に辿り着いた。

「襲われたとしか考えられない。あの施設にいた魔法使い達を凌駕するＳＲの持ち主に……」

「そんな……」

信じられなかった。

これが事故ではなく、事情を知る者だけに分かる無差別殺人だと言うことに。

それから、ＳＲ同士が殺し合う理由。

今回殺されたのはほとんどが子供だ。

何故、孤児院を狙った。全員がＳＲだからか？

いや。

「――そう、思い出したわ。

この孤児院は、協会の側についている」

「協会に？」

トキの頭にセカンドリアルの勢力と関係図が思い出し、投影される。

「ってことは、相手はテロリストか？」

「その中でまともに魔法使いの集団を相手に出来る――

且つ、協会に喧嘩を売る人物なんてごく限られている」

藍の頭にそいつの名前が浮かぶ。

一時期とは言え、自分に大きな希望と力を与えてくれた孤児院の焼け崩れた写真を見ながら、藍は言った。

「テロリストの筆頭と言われる男……

メイトスの仕業である可能性が高い」

「な！？」

その名を聞いてトキは驚いた。

（芹真さんが言っていた倒すべき目標――

その１人目の！？）

完全否定のＳＲ。メイトス。

「ここまでやったということは、トキのことを知るのも時間の問題ね」

「な、どうして！？」

何故、孤児院の事件でトキのことを知ることができるのか？
どうして存在を知られるのが時間の問題なのか、トキには理解できなかった。

「トキがこれから目覚める力の候補者があの孤児院にもいたからよ」

「候補者？
俺の……他にも？」

「ええ。いるわ。
ＳＲの候補者は」

芹真、ボルト、藍はすでに知っている話ではあるが、トキにとってそれは初めて聞く話だった。

「何だよ、候補者って？
何で――」

「トキの他にも、同じ力に目覚める可能性がある人間は何人かいたわ」

「いるのか？」

「ちゃんと聞いて。“いたの”よ。
でも、もうトキを残して他は殺された」

僅かに噛みしめながら藍は言った。

「あの孤児院にいた子を含めて残り2人。残るはトキだけのハズよ」

「え……俺だけ？」

藍が本気で言っていることは間違いない。
冗談を言うタイプじゃないし。
だからこそ、本格的な恐怖が腹の底から湧いてくるのだ。

（俺が？狙われている……）

次に殺されるのは自分か？
それは確かなのか？
そうだと分かったとしても逃げ出すことしか出来ないのが、今の自分だ。

「次はトキの前に現れる可能性が極めて高いわ」

そんなトキの心境を知ってから知らずか、藍は決定打を打った。

やべぇ。
今のうち警備会社にコネでも作って……

（って、そんな金があるか！）

パニックに陥った。
それを察した藍は、

（言わないほうが良かったみたいね……）

ちょっとだけ後悔した。

「芹真さん、父の携帯に繋がりました！」

同時刻。
芹真とボルト、それからディマの3人＋1人はパイロンの店に来ていた。

「サンキュー」

芹真がいつも使う個室に5人はいた。

「一体孫に何の用事なんだ?」

白人の男が芹真に聞いた。

「ちょっと黙ってな、ワル」

「おそらく、銃器の注文だと思います」

回答を拒否した芹真に代わって、ワルと呼ばれる白人に説明した。

「久しぶりだな孫さん」

会話が始まり、パイロンも口をつぐんだ。

「その話は互いにナシだろ?」

どんな会話なのかパイロンは気になって仕方がない。
自分の父:孫悟空と、憧れの先生的先輩的存在である芹真。
付き人や、父の仕事仲間からも2人の関係は聞いたことがある。
世界一の怪猿と世界最速の人狼。

（協会が傍観することすら出来なかったと言われる2人の戦い……）

「ああ。小さいのがいいな」

「ねぇ、ワルクス。今日も学校でトキに変化はなかったの～？」

勢い良く料理を頬張るボルト。

「いいや」

ワルクスは否定する。

「まだだよ。
ただ、それらしい力の放出――のようなものをたまに感じることはある」

「ホムッ。放出～？」

「英語の授業の時しか近付く機会がなくてな」

「ハムッ。それでも“完璧”のＳＲなの～？」

話し方と表情から、ボルトが上機嫌だということは分かる。
だからこそ……

（どこかムカつく餓鬼だ）

「ディマにもよく言われるよ～」

勝手に心を読むことも、ボルトの得意技だ。

「分かってて、そういう風に思った」

「むっ」

大人気なく喧嘩を売るワルクスとその原因であるボルトに目を向け、芹真は孫の話に耳を傾け続けた。

『じゃあ、ワルサーでどうだ？』

「スプリングフィールドＸＤあったろ？　そうだな、サブコンパクト」

『そいつは在庫が少なくてな』

「ＰＰＫじゃダメだ」

『弾数か？』

「それが大きいな。
なんたって、学生に持たせるんだからな」

『学生？トキって奴か？』

「知っているのか？」

『そこにいる息子から聞いたんだよ』

電話の向こうの孫は、同じ空間にパイロンがいることを見通している様だった。
考えてみればコレ、パイロンの携帯電話だし……

「パイロンから聞いたわけだ」

『別に減るもんじゃねぇだろ？』

「別に買う気が失せた訳じゃねぇ。
ただ、下手に話しすぎると長生きできないぞ？」

『分かってる。言っておくよ。
で、ＸＤのコンパクトだな？いくらで買う？』

「ん～、デカ過ぎて見失っちまうほどの借りがあるから……」

『あったか？』

「俺が渡来した時、助けてくれただろ、族の時の。

それからトチった時もぶっ放しにきてくれたろ？」

『まぁ、結果的に助けたことにはなるか。
で、いくらだ？』

芹真は考えに考えて、

「１００万」

言い放った芹真の額に、一同は驚きを隠せなかった。

『単価は？』

「何が一番だ好きだ？」

『焦らすなよ。ドルだ、ドル』

不敵な笑みに彩られる芹真の顔。それは話し相手の孫も同じだろう。

ディマはどこにそんな資金が転がっているのか疑問に思った。

「ＯＫ。じゃあ、ドルな。店の方に投資しとくよ」

『店？おい、そりゃ無いだろ！？

せめて口座に振り込むくら……って、おい。
まさか――』

孫の口調が変わる。

「すまん！
銀行のあの機械、未だに使い方がわからないんだ！」

深い溜息が出てくる。
芹真じゃなく、ワルクスの方が。

『……仕方ねぇ。哀れな人狼にオマケ付けてやるよ』

「お！助かるよぉ。何せ、いまは俺も丸腰だからさ！」

『恩を作っとくのがこの商売だ』

そこから先、2人の会話は弾み――ズレていった。

「ねぇ、ボルト。
芹真は私達にも金を出せと言いそうかしら？」

音量をセーブし、小声でディマが聞いた。

「ううん。でも――
確実に誰かからお金を取る気だよ」

普段から敵対関係にある2人の会話を聞きながら、パイロンは緊張した。

（この2人の仲の悪さは、犬猿以上だと聞くけど……）

いまの2人からそんな険悪な雰囲気は漂っていない。
むしろ、母と娘みたいにも見える。
身長に差がありすぎるのも原因だが、まず、性格にも差がありすぎる。

「芹真。俺の武器も頼めるか？」

ワルクスが電話中の芹真に注文した。
その突然の注文に芹真は――
――悟った。

同時に、パイロン。
ワンテンポ遅れて、ディマとボルトも気付く。

「孫。追加注文だ。
８７０のエントリーガン」

『レミントンだな？』

「ああ。とにかく送ってくれ、後払いで。それじゃ」

『敵か？頑張れよ。
明日には届くだろうから』

芹真が電話を切った直後、従業員が部屋へ飛び込んで来る。

「オーナー！敵襲です！」

全員が戦闘準備を始めた。

第5話－急襲！ｖｓアヌビス！－

音が聞こえる。

それはとても大きな音。

耳を塞いでいても届く、何者にも遮れない不思議な音。

これは何の音？

ドコから届いてくるの？

――――

残響。

まるで、頭の中に直接響いているような音。

（ああ。これが、いつか私を救ってくれる力……）

そう直感が告げ、また音が響く。

これが。

同時刻……

夕刻の中、彼は全力で走り続けた。
後ろを振り返る余裕はない。

追跡者…がいる。
そう。
確かにいるのだが、目的がわからない。

（……者っつうか、バケモノだしな）

追跡者複数を相手に、自分1人で立ち向かうのは厳しい。
仮に、立ち向かったとして、生き延びることは出来ないだろう。

それらを頭の隅で考えながら走り続けた。
やがて目的地が目に入る。

それと同時に妙な疲労感に見舞われる。

体力に自信はある。なら、これは憂鬱からくる疲労感なのだろう。
最も、何で憂鬱になるのか自分でもわからないが。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第５話－

－急襲！ＶＳアヌビス！－

芹真事務所。

藍の説明を聞いたトキは、自分を落ち着かせようとコーヒーを啜った。

自分を落ち着かせる理由は何か？

それは、藍の説明に出てきた男：メイトス。

そして、新聞の海外記事。

そこにはＳＲ（セカンドリアル）になら理解できる事件が載っていた。

孤児院で火事。
その真相が魔法使いの施設を破壊だ。
しかも、メイトスという男、たった1人で。
ソイツに自分の命が狙われている。

（狙われている…
……のか）

少しずつ冷静を取り戻し、落ち着いて考えてみる。
今すぐ、その男が殺しに来るわけじゃない。
藍や芹真さん。それにボルトだっている。簡単に殺されはしないだろう。

（……）

他力本願はいけないが、自分ひとりの力じゃどうしようも出来ないこともある。
が、やはりわかっていてもドコか嫌になる。

「ハァ……」

とにかく、今の自分ではどうしようも出来ないことは確かだろう。

小学生が巨漢レスラーをリアルで倒せないように。
あるいは、それ以上の実力差が自分とメイトスの間にあるんだろうとトキは考えていた。

（それまでに俺が力をつければいいんだ……）

大分落ち着きを取り戻したトキは改めて自分に言い聞かせる。

（大丈夫だ。それまでに力をつければ。
それまで護ってもらうにしても、一生懸命になれば…）

ところで――
ＳＲの力って、どうやってつけるんだ??

（……）

重要な問題点に差し掛かり、思考が滞る。
“どうすれば、ＳＲの力は養われるんだ?”
考えに考え、

（後で、聞こう）

早速壁にぶち当たった。
いや、これくらいの壁、当たって当然！なら、前向きに考えよう！
まず、コーヒーで頭の回転を――

（ァッ、うめぇ～…）

と、久々に飲むブラック以外のコーヒーを口の中で存分に堪能するトキ。

そしてそれは突然やってきた。
何の前触れもなく、破れんばかりの勢いで開く事務所の扉！
静寂空間に響く騒音。

「ブふぉッ！」

驚き、口に含んだ分のコーヒーを吹き出してしまう。

（な、何！？）

吹き出したコーヒーの直撃を受け――る直前で咄嗟に躱わす藍。
彼女が眼中に入らないほど、トキは焦り、ビビった。

「……」

藍は何も言わず。
何もせず――

（こ、の……！）

心の中で声を震わせ、額に青筋浮かべていた。
幸い、コーヒーは1滴もかかっていない。

「は、ハンズ……！？」

開いた扉の向こうには、鉄パイプ両手に持ち、険しい表情の浮かべているハンズの姿が見えた。
それを確認し、藍は制服の上だけを脱ぎ、投げ捨てる。
表情が変わる。

（敵ね！）

「気をつけろ……来るぞ！」

扉を閉め、ハンズはトキの前まで移動する。
何が来るのか理解できないトキ。

「お前らを狙ってるのかもしれない」

ハンズは入り口の方を確認し、再び2人に向き直る。
その間、藍の手に何枚かの符と、1本の大きな金棒が握られた。

「俺達？じゃあ、メ……！？」

「アヌビスの奴等だ」

遮り、説明するハンズ。
ちなみに、ハンズの服装はいつも同じだ。
迷彩のバンダナに、黒い特攻服。どうやっても見た目が――
街中をそんな格好で歩いていたから見つかったんじゃないかと、
トキは思った。

「何体？」

藍の質問にハンズは左手の指を4本立てた。

（4体も……）

ハンズも持参したらしい鉄パイプを錬金術で銃器とナイフに変え

た。

（アイツら相手なら、サブマシンガンの方がいいか）

鉄パイプが形を変え、ハンズがイメージしたものを形作る。

「ここじゃ狭すぎる」

ハンズの注文に藍は準備を続けながら答えた。

「屋上は？」

ハンズは頷いた。
了承。
すぐ行こう、そういう意味で。

「おしっ！急げ！」

藍はトキを引っ張り、裏の扉を開いた。
芹真事務所には、建物の裏路地へと繋がる裏口がある。
裏路地は車一台なら余裕で通行できるほどの広さだ。

裏口をくぐり、すぐ右側に階段がある。
時計回りの構造。
階段の幅は大人2人が悠々と歩けるだけのスペースを有していた。

「おい！」

階段を目の前にし、ハンズから声がかかる。
引っ張って先行する藍と、引っ張られるトキは足を止めて振り返った。

「持っていけ」

ハンズはトキに向ってある物を投げた。
そう言われ、投げ渡された物は、

「銃……」

リボルバーだった。
受け取った時、バレルを握っていた。グリップを握り持ち直す。

「行くわよトキ」

少しでも装備しておけば気休めになるだろうというハンズの心遣い。
藍は再びトキを引っ張って行こうとした。
が、トキはそれを拒み、今度は自分ひとりの力で屋上を目指した。
実のところ、藍の握力が強すぎたのもある。
痛くてたまらない。

「行こう」

言って、階段を上り始める。
ハンズは2人が進み始めたのを確認し、事務所内へと目を向ける。

（ゲッ……見誤った）

階段を踏みつける乾いた音が少しずつ小さくなっていく。
そのことから、今のところ順調に進んでいることがわかるが――

（いやべっぇ…！）

藍は階段の折り返しまで進んでいた。

トキも必死になって藍の後を追う。

（どうしてだ？）

それはいきなり訪れた。
階段を駆け上がり始めてすぐ、トキの頭に疑問が浮かぶ。

（本当に、敵が来ているのか？）

実感が湧かない。

（敵の姿が見えないから？）

移動速度がやや下がり、トキの目が周囲の建物や裏路地、建物の合間から見える景色へと移ってゆく。
人の姿が無い。気配さえしない。
今のハンズや、前のボルトにしてもそうだが――

（流されっぱなしだな、オレ）

本当に敵が来ているのか？
藍とハンズはそうだと言っている。

が、それがもし、間違いだったら？

しかし、それがトキと藍たちの間にある経験の差だった。
トキは気付いていない。致命的な実戦経験不足だということに。
だから“戦い”がもつ独特の雰囲気を読めない。

しかし、さすがのトキもハンズの姿が裏口に見えたと同時に、闘いの始まりを認識した。

サブマシンガン：マイクロＵＺＩを事務所内に向かって乱射するハンズ。
激しいマズルフラッシュ。
作り出すされる閃光。
同じく生まれる影。

「マジ急げっ！！」

向きを変え、ハンズは叫んだ。
階段全体の中間まで来たトキが足を止め、ハンズの方に目を向けていたからだ。

「トキ！」

服を引っ張られ、トキは再び走り出す。
周囲が闇に染まっていく。
すでに夕日はほとんど見えないが、空はまだ明るさを残している。

建物の影に位置するこの場所。
直接夕日が見えない。
どれだけ暮れているのか、頭上の空で判断するしかない。
電気の灯り始める周囲のビル。
ほとんど漆黒に染まった裏路地。

ふと、奇妙なひっかかりを覚えた。

（あれ？何か…）

いま、裏路地で何か――光った？
そんな疑問を抱いたのも一瞬。
銃声で我に返った。音が近付いている。

（ハンズも昇ってきたんだ！）

再び昇りだす。
トキはつまづかないように注意し、出来る限り全力で階段を駆け上った。

「一段：」

その時だった。
折り返しを通過した時だった。
突如、トキの方へと振り返り、藍は術を唱えた。

「薄！」

「え！？」

訳も分からないトキは走り続け、途中で僅かに振り返る。
そこには、

（な！）

黒ずむ夕空。
溶けていくような薄闇に紛れ、漆黒の衣装に身を包んだソイツは居た。

数秒前にトキが通り過ぎた場所へとカトラスを振り下ろそうとしていた。
カトラスとは、海賊や船乗りが使ったとされるサーベルのことだ。

いま、ソイツがスローモーションで動いているのは、藍の術のおかげだ。

「なんだ！？」

わめきながらもトキは再び走り出した。
ふと、藍の術はソイツを対象に発動されたものだと理解する。
もし、藍が術を発動しなかったら――

「ボゥっとしないで！」

一喝を喰らい、トキは考えるのをやめた。
そうだ。振り返っている暇は無い。立ち止まっている場合ではない！
一刻も早く、屋上へ！

（敵が追いついてきている！）

最後の折り返しを通過し、駆け上がる。
自然と前へ進む足が速くなる。

（こんな狭い所じゃ……！）

いざとなったら逃げる場所がない。
そうなれば本当に終わりだ。

急げ。
もう少し、あと少し――

（広い場所なら、藍だって有利に戦えるはず！）

そして、トキは屋上の足場を最初の一歩が踏みしめる。
到着。
――と同時だった。

「飛べ！」
「飛んで！！」

２人の声がトキに浴びせられる。
トキは咄嗟の指示に反応できなかった。

自己判断しか残されてない！
急ぎ横へとサイドステップ。

（何なんっ……！？）

自分のとった判断が正しかったのか確かめる暇は無い。

直後――
金属同士がぶつかり合う音と――

サンドバックか何かを思い切り殴りつけたような音が響いた。

《間に合った！》

そして判断は正しかった。

トキの場合、負傷を免れたことがその証拠。

藍の場合、ナイフを打ち落とせたことと、前に出ていたこと。
そうでなければ、上から襲い掛かってきた奴の攻撃をまともに喰らうところだった。

２人は急いでその場から離れた。
屋上の中央。
そこで足を止める。

後ろから追ってきたハンズは２人のそばへと急ぎ――
３人は屋上の中央で足を止め、互いに背中を向け合う形となっていた。

「ハンズ……本当に４体だったの？」

ハンズは昇ってきた階段の方にいる敵へ。
藍はハンズの左後方。
トキは右後方へ背中を預けていた。

「ルせぇよ。俺の眼には４つしか映らなかったんだ」
「明らかに……１０体はいるわよ？」
（囲まれた！？）
リボルバーのグリップを両手で握り、トキは銃を構える。
不安がないハズはない。
「何なんだコイツ等！？」
トキの嘆きを２人は黙殺し――
２人に代わりに、敵のリーダー格が１歩前へ出て自らの正体を口にした。
「我々はアヌビス。
お前達に用があって来た」
褐色の肌。
黒いボロキレのようなマント。
体のあちこちに見える刺青。スキンヘッドの頭にもそれが彫られている。
全員が同じ格好、同じ刺青をしていた。

唯一、所持している武器だけがそれぞれ違う。

「お前等の正体なんざブッ倒してから教えてやろうと思ってたのに、手間省いてくれて助かったよ」

「目的は何？」

（今度はアヌビスかよ……）

自称（本当かどうか知らないのはトキだけだが）アヌビスを前にした3人の感想がそれらだった。

リーダー格の男が両手に持っている武器はキングコブラナイフという物で――

それは見た目でわかる程凶暴そうなナイフなのだ。

そんな物を持つ男に嫌味同伴で言葉を返すハンズ、単刀直入に質問する藍。

トキは呆れ半分、現実逃避半分……

正直、トキが想像していたアヌビスとは大分違う。

どう見ても外国人――にしか見えない。

リーダー格の説明をトキがどう受け止めたのか、藍は気になっていた。

（ショーテル、ファルシオン、モーニングスターに……）

ハンズの目がアヌビスたちの装備へと映る。
ショーテルとは、大きく弧を描いたよう刀身の武器。
ファルシオンは、“中国で言う青竜刀”の西洋版。
モーニングスターは棍棒トゲ鉄球のことだ。

同じく、藍も敵の装備を観察してゆく。

（マチェット、カトラス、シィアー、スローイングナイフ、スピア）

更に同じく、トキの目もそれらの装備へ向いてしまい、

「ナイフに、ボウガンまで……」

刀剣系が5　遠距離系が2。
鈍器が1　そして長物が2。

「大人しくしていれば苦しまずに逝けるだろうし、居られるだろう」

1体……いや、1人の男が言う。
それに対して、またしてもハンズが…

「生憎、俺は死ぬ気がしねぇんだよ」

強気な態度で言い返す。

正直、いつも強気な奴だ。

ここ数日でそれを知ったトキは、知ったばかり故に軽く驚いていた。

この状況でも虚勢でなく、本心から胸を張って言い返している。

今のトキには到底出来ない行為だ。

「貴様は存分に苦しめてから殺す予定だ。安心しておけ」

「ぁんだとこの――」

「もう一度聞くけど、目的は何？」

完全に無視されていた藍が再び質問する。

その質問にはスピアを持った男が答えた。

トキは息を呑んだ。

いつ襲い掛かってくるかもわからない緊張。

（まさか、俺？）

メイトスの話を聞いたばかりのトキはそう思った。

アヌビスたちにも狙われている？
いや、メイトス以外の奴らにも狙われているんじゃないか、と。

「ひとつは、藍。貴様だ」

「……私？」

「ふたつ」

疑問を浮かべ、呆気に取られた藍を放って置き、今度はショーテルを持った女が口を開いた。
ハンズの視線がその女とぶつかり合う。

「色世　時の拘束　あるいは殺害」

つうか、捕まえるか殺すかハッキリしろよ。
トキは、自分の率直な考えに対し、その殺害対象が自分であることを思い出して震えた。
自分から死のうとしてどうするんだよ！
アホかオレ！

そんなトキの心境が誰かに伝わることはなく――

3人目。
ボウガンをトキに向けている男が言う。

「みっつ、お前らの足止めだ」

（足止め？）

トキとハンズが疑問を浮かべている時、藍は1人、ある方角へと慌てて顔を向けていた。

頭の中に考えうる限り、最悪のシナリオが描かれていく。

藍が見つめるその先にあるものは――

（まさか！）

そう、病院。

「私に、何の用なの！？」

顔を向け直し、藍は質問した。

「分からないのか？」

マチェット。

一番距離が近い敵が、それを持ったアヌビスだ。

「例のサムライソードを――」

「断るわ」

即答。

トキの頭の中、サムライソード＝日本刀と繋がった。

「ならば殺して奪うしか……」

「それは無理よ」

藍は即座に否定した。

２人の会話を聞きながらハンズは苛立っていた。

「“生死繋綴（せいしけいてい）”を使いこなせる者は、この世に存在しない」

「ならば何故、お前が持ち、使い続けている？」

トキに今の会話を理解するだけの余裕は無い。

目の前にはボウガン構えた奴がいるんだ。

いつ撃たれるかわからない。

余裕をもてないのが当然だろう？

藍はリーダー格アヌビスの質問に答えをつまらせていた。

「それは――」

「おい！
今日は女みてぇによく喋るじゃねぇか！？　えぇ？」

ハンズが叫び、会話を中断させた。

（チッ！何だかんだ結界まで張ってやがる！）

アヌビスたちの背後を見て、それを確認する。

「足止めも任務のうちだからな」

リーダー格の放った一言を聞き、ハンズは完全に口を閉じた。
――足止めが目的。
藍もハンズに倣い、口をつぐむ。

（そうだ。理由なんてどうでもいい。
それに、彼女が目的なら急がないと）

頭の中を整理する。

敵はアヌビス。

まだ、力を解放していないようが、チームワークに手こずることは必死だろう。

（“生死繋綴”は使えない……）

奪われるわけにはいかない。

仮に、奪われたとしたらのなら、命に代えても取り返さなければいけない。

だが、戦いながらトキを護ることも同時に出来るか？

（戦いながら、全てを護ることが、本当に今の私に出来るのか？）

いや、出来ることをすればいい。

いつも通り、全力で。

「そう。それなら、終わりの音を聞かせてあげる」

言い終えると同時に、藍が右手に握る棍棒：理壊双焔破界（リカイ　ソウエン　ハカイ）に黒い符を張る。

それを垣間見たハンズは……

（へぇ～、やる気満々じゃん～♪）

軽く驚いた。

その瞬間――

アヌビス全員が仕掛けてきた。

（戦闘開始ぃ！！）

真っ先にクロスボウの矢が放たれ、真っ直ぐトキに向かう。

更に同時。

複数のスローイングナイフがハンズに襲い掛かった。

「なめんよ！！」

飛来したナイフを全てナイフ1本で捌き、マイクロUZIの引き金を絞る。

銃声！

ファルシオンという反り返った刀身の剣を持ったアヌビスが、正面からハンズの銃撃をまともに受け、崩れていく。

「理壊“奏淵”破界（リカイ　ソウエン　ハカイ）」

戦闘開始直前――藍は理壊双焔破界を変化させた。

“双焔”から“奏淵”
炎から、崩壊音詩へ。

“理壊奏淵破界”を形成し、1本の奏淵を2本へと分割。

「華創実誕幻。一段：茨！」

藍の足元から10本のツルが生える。
死角防御と対空迎撃、援護の時によく使う術だ。

（トキを護って！）

トキめがけて放たれたクロスボウの矢は、間一髪のところでツルに突き刺さり、トキへの直撃を妨げる。

茨の発生するサークルがトキの足元へと移動する。

「トキ、ココを動かないで！」

理壊奏淵破界の片方をトキの背後に突き刺し、藍はアヌビスの群れに走っていく。

「はぁ！？ちょっ」

「大丈夫！私の術が護るから！」

「護るって、無理ねぇか！？」

トキの背後に刺さっている理壊奏淵破界ならともかく……

足元に描かれるサークル。

そしてサークルを作り出している線から生えるツル１０本。

対峙している敵はアヌビス。

強さの程は分からないが、間違いなくハンズや藍のような力を持っているだろう。

アヌビスのＳＲとか言っていたし。

それを護ってくれるって……

ツル１０本で？

（無理じゃねぇ？）

と、その矢先。
何かがツルに弾かれた。

（え？トゲ鉄球……？）

モーニングスターという武器（“柄に鎖でつながれた、トゲ付き鉄球”）を持ったアヌビスだ。
ジャンルは鈍器。

そのアヌビスを弾いたのはツルだった。
うち1本のツルがトキの方に先端を向ける。
もし、ツルに口というものがあったのなら、『これでもか？』と言っていただろう。

「うおらぁぁぁ！！」

マイクロＵＺＩを乱射するハンズは、スピアとシィアーを持った2人のアヌビスを相手にしていた。

（弾切れ！）

ＵＺＩが弾切れを告げる。
が、長物の近接武器のスピアとシィアーが一定の距離から同時に襲い掛かってくるため、錬金術を使う余裕が無い。

（……隙が）

変則的攻撃パターンとコンビネーション。
だが、

（そうでもねぇか！！）

ハンズの手の中で、マイクロＵＺＩが形を変えていく。
マシンガンにこだわる事は無い。
手元にあるものだけで道を切り拓く！

（芹真に出来て、オレにできねぇことは……！！）

錬金と同時に、スピアが心臓狙いの一突き。
回避、ナイフでスピアの軌道を左に反らし…
同時。

シィアーが横薙ぎで襲い掛かってくる。

シィアーは薙刀に形状が似ている武器であり、薙刀との違いと言ったら、シィアーの方は刃の反り返っている側で斬撃を加える武器だ。

ジャンルでいうなら『長鎌』。

内側が刃物。

ハンズはその斬撃も後ろへステップし、躱わす。

スピア、顔面狙い。

上半身を左へ。

躱わす。

シィアー、右肩狙い。

（クソ！前言撤回！やっぱ隙が少ねえ！）

身を屈める。

ギリギリのところでシィアーを躱わす。

ハンズが2人を相手にしている時、藍は1人でナイフ、カトラス、

ショーテル、クロスボウのアヌビスを相手にしていた。

藍の攻撃は一つ一つが一撃必殺級の威力に限りなく近い。
下手な攻撃を仕掛けることが出来ないアヌビス（×４）は、コンビネーション変則一撃離脱戦法をとり、入れ替わり立ち代り、藍に攻撃を加え続けている。

正面、クロスボウ。

狙いは、心臓。

理壊奏淵破界でクロスボウの矢を弾く。

左、ナイフ。
がら空きの左肩に斬撃を受ける。

が、ダメージは無い。

奏淵、横薙ぎ！
空振り。

（――後ろ！）

「……」

カトラスの振り下ろし。

理壊奏淵破界で防御、反撃。

また空振り。

休む間もなくショーテルが続けざまに襲い掛かる。

足元から腰部めがけての斬撃。

奏淵の防御が斬撃を防ぎきった。

（結界か何かが――

あれ、この角度……）

ちょっとしたことに気付き、藍はすぐさま行動に出た。

それは、僅かなチャンス。

「薄！」

ショーテルのアヌビスは横っ飛びでそれを回避する。

一瞬の隙を利用し、藍は遅滞効果のある『薄』をかけた。

が、その対象はショーテルのアヌビスじゃない！

――シィアーの刃が掠める。

ハンズの目に、次の攻撃を仕掛けてくるアヌビスが写った。

スピア、狙いは頚動脈！

（く！スピ…あ？
動かない？
遅……藍か！！）

ハンズの左脇を突こうとしたアヌビスの動きが止まっていた。

それは、藍がかけた薄を受けた所為だ。
ショーテルのアヌビスの斬撃を防いだ藍は、ショーテルとスピアのアヌビスが偶然にも一直線上に位置していることに気付いた。

それをやった藍は、再び４体の相手に戻った。

ペアを組んでいるシィアーのアヌビスも驚き、何とかその埋め合わせをしようと猛攻をしかけてくる。

「遅ぇんだよ！」

同時に、マイクロＵＺＩの錬金が終わる。

左手で新たに創生したナイフを、逆にスピアを持ったアヌビスの頚動脈に突き立て、

シィアーの斬撃を右手のナイフでいなす。
体勢を崩したアヌビスの脇腹を蹴り・・・
その一瞬。
ハンズの集中力は極限に達し、右手で最高の錬金術に成功した。
それにより生まれたものは、最強靭・最硬質の――
バタフライナイフ。
「そらぁ！」
横薙ぎにナイフを滑らせ、シィアーの柄を切断。
落ちたシィアーの先端が独特の落下音を響かせ――
同時。
銃声が響いた。
「いっ！」

藍とハンズがそれぞれ戦っている一方で――

スローイングナイフ、マチェット、モーニングスターを持ったアヌビスは、トキをなるだけ無傷で手に入れようと必死に（ツルと）奮闘していた。

トキは、ハンズに渡されたリボルバーを使った。
狙いを定め、引き金を引く。

藍の言ったとおり、トキはしっかりツルに護られている。
おかげで慎重にと狙いをつけることが出来た。
が、しかし……

（なんて、反動だ！）

1発。
たった、一度の銃撃の反動・音・衝撃に戸惑っていた。

銃撃を甘く見ていた。

（でも、俺だけが……）

1人、足手纏いになりたくない。
その思いがトキの中にあった。

いつも、除け者にされているような感覚があった。

喧嘩が起こっても“結局自分に関係の無い”と自分に言い続けてきた。

他人が倒れている。
泣いている。
叫んでいる。
睨む。
困っている。
笑う。

知ったこっちゃない。

――どうせ、他人事。

弾は真っ直ぐアヌビスへ。

しかし、構えられたマチェットの厚い刀身によって簡単に防がれてしまう。

衝撃で手が痺れる。

（くそっ！あと、何発撃てる！？）

全弾撃ち切る自信は無い。
たった6発のリボルバーなのに。

――カチ

生活の中に何かが足りないと感じ、閉じ篭った。
自分を見つめ返せば、何かが見つかるかもしれない、と。
だが、

「くそっ！」

引き篭もっても、何かを見つけることは出来なかった。
アヌビスたちは余裕を持って死角を探っている。

（後、４発）

すでに手が震えて止まらない。
痛い。
自分の非力さを克明に感じる瞬間。

（ここでもか？）

手に伝わる衝撃で汗が滲み出した。

トキの手に握られているリボルバーは、威力が高い。
故に、反動も強い。

（銃さえロクに使えないなんて）

ふいに、脳裏に自分のクラスが浮かんだ。
クラス内での決闘。
引き篭もる前にトキも一度はあの場に立っている。
自分が『主役／決闘者』になれるその瞬間、何かが見えそうな気がした。

こうなりたかったのか？

――違う。

自分に言い聞かせた。そうじゃないハズだ、と。
どこかズレている。
自分の中のもどかしさが増す。

瞬間、アヌビスが立ち止まった。

（止まっ、今なら！）

痺れる両の手。
全神経を指に集中し、引き金を絞る。

銃撃！

しかし、フェイント。
余裕を持て余したアヌビスの1人が、トキに銃撃をさせるためわざと止まったのだった。

（ちくしょう……）

クラス内での決闘。
結果はトキの完敗だった。
相手はクラスのナンバー4、“ジェイソン”こと：佐野代悠弥（さのしろゆうや）。

《戦いを理解できてねぇ奴がしゃしゃり出るな》

今でも、その一言が頭のどこかで渦巻いている。
そう。

（戦い……）

改めて、これが本当の戦いなのかと考える。

指が震える。
動かない。

正直、何十秒かは引き金を引きたくない。

（生死を賭けた戦い）

それが目の前――
自分の周囲で繰り広げられている。自分を巻き込んで。

全員の目に灯る殺意。

何がそれを灯し続ける原動になっているのか？
場の雰囲気に当てられたトキに理解するのは不可能だった。

まして、つい最近セカンドリアルの世界を知ったばかりのトキには。

（来る！右、いや！
左か！？）

アヌビスたちの動きを目で追う。
が、すぐに見失ってしまう。

（疾い！）

アヌビスたちはフットワークを駆使して茨の隙を作ろうと考えていた。
トキを護る茨。
トキの手にあるリボルバー。
ガンナーとして、トキの腕は素人。
だが銃は一級品。
そのためアヌビスたちは迂闊に踏み込めない。止まらない。
――もう、やめたい。
再びツルによってアヌビスが弾かれる。
が、あらかじめ防御の姿勢で向かってきたらしく、弾かれた後すぐ体勢を直した。
――頃合か。
ナイフ、リーダー格のアヌビスが、場の状況からそう判断した。
「全員、解放せよ！」

宣言し、それと同時……
倒れたはずのアヌビス達は復活した。

（マジかっ！？）

ハンズがシィアーのアヌビスを仕留めたのと同時にその宣言がされた。

セカンドリアルの開放。
最悪の展開。

全てのアヌビスが纏っていたマントを取る。

そこにしなやかな筋肉が見られたのも束の間・・・
次の瞬間、三人が相手するアヌビスに異変が起こった。

（何なんだよ！？）

トキの目の前で、一体のアヌビスが変態していく。

筋肉は盛り上がり、次第に漆黒の肌へと変わってゆく。
顔は人間のものではなく・・・犬や狼のような形を作っていた。

（二脚の狼……いや、犬！？）

どちらも似たようなものだと感じた瞬間、そいつらの変態は完了していた。

暗闇に溶ける漆黒の肌。
異常に膨らむ筋肉。
人間離れした作り、体躯。

（アヌビス――この形態相手だと厄介なんてものじゃねぇ！）

ハンズは焦りを感じる以外なかった。
藍も舌打ちする。

「改めて言い渡そう。
我々は協会の“死魂管理局担当者”アヌビス」

最初にナイフを持っていたアヌビスが言う。
姿形は変わったものの、声や話し方に変化は無かった。

「ひとつ。元哭き鬼族の藍。
貴様の持つ刀：生死繋綴は『死』の定理を覆す。
“重罪”

よって、力尽くで奪取させてもらう」

藍の眉がピクリと反応を示した。
続いて、ショーテルの女。

「ふたつ。色世　時のテロリスト加担・加入を防止。
よって、捕獲あるいは抹殺」

（テロリスト？）

その単語を聞き、藍の言っていたことを思い出し、ふと思う。
コイツ等はテロリストを恐れているのか、と。

藍から聞かされたテロリストの割合はごく僅かなもの。
それに対する協会の割合は非常に多い。

結局、数だけの集団なのか？

「現時点でテロリストと共に戦っている。
有罪――
だが、存在価値は大いにある」

「色世　時を捕まえる？」

「いや、殺そう」

「だが、価値はある」

アヌビス達だけの会話が飛び交った。
その間、ハンズと藍は初期位置……トキの傍まで戻ってきた。

「捕まえよう」

「ツルが厄介だ」

「問題ない」

「問題は――」

結果が出るまでそうかからない。

相手はアヌビス。
統一されたかのような意志の持ち主たち。

故に、セカンドリアルの世界では群を抜いて連係プレーに長けている者達だ。

『鬼の姫』

最初の標的が決定する。

アヌビスが動いたことを五感で悟った瞬間――
正面から強力な衝撃が藍に襲い掛かる。

「うっ！！」

辛うじてガードが間に合った。
というより、勘で行ったガードが的中した。

速い――見えない！

どのアヌビスがやったのかさえ検討がつかない。

今のが『打撃』であることはわかる。
が、何による打撃なのかはわからない。見えなかった。

「おい！」

ハンズが声をかける。

まだ、トキの手から痺れが取れていない。
付け加え、変態したアヌビスの姿に軽く動揺している。

引き金を引こうにも引けない。

「クソッ」

小声でそんなことを漏らしても、痺れが早く抜けてくれるわけじゃない。

止まっていたアヌビスも銃声と共に動き出す。
ハンズは新しく作ったサブマシンガンで弾をばら撒く。

「舐めんじゃねぇ！！」

が、それより早く、何かが顔の高さを横切る。

ハンズの側頭部へ何かが一撃。
何が打たれたのか分からない……

アヌビスによる何らかの一撃は、ハンズの意識を夢の彼方へと持っていき――
藍とトキが残された。

背中を合わせ、それぞれアヌビスに目を向ける。
向き合わなければ負ける。そんな気がした。

そんな2人を見てリーダー格が言う。

「少し順番が変わったが――
次は貴様だ」

宣言と同時に、リーダー格を抜く全てのアヌビスが2人に襲い掛かった。

「二段、下：紫苑(しおん)！」

ツルが複数のアヌビスを弾く。

同時に藍の術で2体のアヌビスの動きが緩やかになり、術が成功したことが分かる。

二段、下：紫苑の効果は、視覚奪取。

術をまともに受けた者は視覚を奪われ、闇の中を彷徨うことになる。

ある意味藍の中では獄段と同じ、便利かつ凶悪な印象を持つ術なのだ。

が、それだけで止められるアヌビスではない。

（いや、諦めんの早ぇって……）

藍に背中をあずけたままトキは怯えていた。

数秒前、アヌビスの変態を目の当たりにしたトキは自分の死を想像してしまった。

まだ、何もしていない、何もされていないのに震え上がる自分。

（藍が戦ってる……）

背中合わせの状態。
藍と藍の術がトキを護ってくれる。

護られている。

ハンズには錬金術があり、
藍は、陰陽術。
敵のアヌビスの力がある。

（オレには何も無い）

渡された銃一丁に頼るしかない現実。

非力。
歴然とした力の差。

ただの人間である自分がここにいる理由。

（わからない）

もはや自分以外の者は、人の域に留まることをやめたものだとし

か思えない。
ふと、そんな思考が湧いた。

とにかく――
とにかく、恐い。

全員の殺気が。
その場の空気が。

自分ことは自分が一番良くわかる。
震えが止まらない。

（これが実戦！？）

自分の取る行動ひとつひとつが、死に直結する。

そう考え下手な行動が出来なくなる。
慎重に考えようとしても、頭がうまく働いてくれない。

しかし、トキが縮こまっている間も時間は流れ続ける。
それが現実。

早く終わってしまえと願いたくなる。
いや、すでに望んでいる。

（もう少しで）

痺れがだいぶ引いていた。
何とか自分を持ち直す。
それでも――恐くてもやらなきゃいけない時がある。
それが今だ。
次にアヌビスが隙を見せたら、迷わず引き金を引こう！
運良く当たるかもしれない。
そう決意した時だった。
「くっ！」
ふと気付く、自分のものじゃない呻き声。
自分が安心して前を向いていられる理由。それが藍の存在。
背中をあずけられる確かな人間。
その藍が片膝をついた。
（やばくないか！？）
いくら藍が強くても、超高速移動中のアヌビスたちの攻撃を凌ぎきれない。
数の利、力の差。

集団戦術に長けているのは一目瞭然。

そんな奴らを相手に、藍はたった一人で立ち向かっている。

ツルの動きが、僅かに緩んだ。

カチッ

「やめろよ」

ほとんど無意識的に、つぶやいていた。

これ以上……

震える肩。

こみ上げる怒り。

誰に対する怒りなのか、時々わからなくなる。

ただ、黙ってはいたくなかった。

「トキ」

藍は、トキに自分の心配をしないよう言おうとした瞬間だった。

藍の目に、トキの肩越しにそれが見えた。

（クロスボウ！）

トキは気付いていない。

茨――弱っている。

間に合わない！

反応できない、大きな隙。

一瞬、藍の頭の中は後悔で溢れそうになった。

ココでトキに死なれたら、自分はどう償えばいい？

まだ、目標を果たしていない。

また、誰かの死に立ち会うことになるのか？

記憶の中で最も親しかった者。

その者と瓜二つのトキ。

また、何も出来ないの？

（いや、何とかしろっ！）

藍は自分に言い聞かす。

死んでほしくない。

どんな状況に陥っても、どんな奴と組もうと、どんな事になろうと……

とにかくトキには死なないでほしい。

死なせるものか。

（動け！）

何故か利かなくなってきた腕に意識を集中させ――

一瞬後、藍は混乱した。
命中。

（ト……キ？）

その事態に驚くトキと藍。
両者にとって、予想外。

（いや、私……）

深く突き刺さった矢。
文字通り痛感した。

左肩。
そこから伝わる痛み。

気付けば、ほぼ一直線上に2人は位置している。

クロスボウの矢先が、トキの背中向いているように見えたのだ。

（見誤った――？）

らしくもない自分に違和感を覚える藍。
いつもなら、こんな仕掛けを見破るのは造作ないハズ……

「叩き伏せろ」

リーダーアヌビスがトキを睨み、他のアヌビスに号令を下す。
藍の右手が左肩に刺さった矢にかかる。

同時だった。
動揺している所につけこまれ、藍は矢を引き抜く時間を奪われた。

――スターフレイル。
藍の右足首の骨が砕ける音が響き、バランスを崩す。
が、何とか腕で持ちこたえたところに、

――ショーテル。
背中に切り傷が生まれる。
電撃に似た鋭い感触。　それが痛みとなって体を走り抜けた。

――スピア。
藍の左肘を骨ごと貫通。

――再び、スターフレイル。
鈍く、重たい衝撃が右脇に走る。

「やめろよお前らっ！！」

叫んだ。
だが、

――スローイングナイフ。
複数の鋭い刃のナイフが藍の背中に突き刺さる。

叫びながらもトキの目にはしっかりと藍の姿が映っていた。
立て続けに喰らう斬撃と打撃。
体中を染めていく流血。

――マチェット。
左アキレス腱、切断。
両足に深刻なダメージを貰ってしまう。

（死ん…じまうのか？）

周囲に飛び散った血の量。制服に滲む血の量。どれもが致命的だ。
トキは、自分だけが無傷であることに気付いた。

切り傷から覗く肉はとても痛々しく、初めてそれに気付いたトキは目を反らした。

藍は声を出さず、アヌビスの攻撃に耐え続けている。

（やばい……かも）

見えない攻撃が容赦なく続いた。

藍ひとりに。

集中して、連続的に。

同時にトキは連続的に痛感した。　自分の無力さを。

「そこまでやる必要ねぇだろ！？」

少しでも、この現実に抗議せずにはいられなかった。

自分の目の前で展開されている一方的な戦闘。

最早、弱い者いじめや私刑のようにしか見えない。

胸糞悪い……

アヌビスの取る行動、それ以上に苛立つ自分の非力さ。

「わたし達からも聞きたい」

トキの叫びに、ショーテルとリーダーアヌビスが応えた。

「どうしてアナタは一歩も踏み出そうとしない？」

（一歩……）

「何故いま引き金を引かないの？」

「叫ぶだけのキサマに我々の行為を止める術は無い」

ツルがギリギリ届かない場所まで歩み寄った2体のアヌビス。
対峙した瞬間、トキはまともに目を合わせて睨み合うことが出来なかった。

――恐い。

「何故、口で抗議しかできない？」

（何だ……なにを言いたい？）

疑問を抱きながらも、トキは震え続けた。
この距離なら、弾は当たるんじゃないか？

引き金を引け！
今しかないだろう？

……だが、体が言うことを聞いてくれない。

「安心しろ。震えるだけのキサマは一番最後だ」

言い終えて振り返るリーダーアヌビス。
それと同時だった。

――藍が地面に伏す。

「……大した生命力だ」

アヌビス全員の動きが止まっていた。
藍は生きているが、立つことさえ出来ない重傷を負っている。

逃げ場もない。
この状況を打開する知識も、力もない。

「――キ」

声が届いた。
首にまで矢が刺さり、力なく弱った藍の声が。

「――となしく――てーば」

大人しくすれば傷つくことは無い。
そう言いたい。　そう伝えたい。

だが、言えない。
伝わらない。

ノドに斬撃をくらっていた。その所為でうまく声が出ない。

（やっぱり、ダメか……
この結界内だと解放もできない）

思っていた以上のダメージを受けた藍は、アヌビスの実力を思い改めた。

「さぁ、その状態では何も出来まい。
刀を渡せ」

両手両足をつぶされた藍は立ち上がることも出来ずに、地面に伏している。
1体のアヌビスが屈み、藍の体を探った。

「符術士の真似事か？」

他のアヌビス達から笑いが漏れる。

カチンッ

それは藍が戦闘用に自作した術式の符だった。

「――し―に――――れた」

藍の手が伸びる。
横たわった状態でも、右手がアヌビスの手に握られた術符へ。
藍が掴むよりも早く、蹴りが入った。
顔面。
口の中が切れた。
広がる鉄の味が、それを教えてくれる。
でも、諦めない。

「――――れが―んてん」

聞き取れない声で、藍は何かを言っていた。
トキを護るツルが弱体化していく。
藍の手が符を掴み――

それを見逃さない。　スローイングナイフが符を握った藍の手に突き刺さったのは、ほぼ同時だった。

「いつまでも嘗めてっと、そのまま死ぬぜ」

投擲したアヌビスが藍に言う。
アヌビスにとってこの場で一番厄介な存在が藍だ。
下手をすれば、自分達が大きな損害を被りかねない。
それ程の戦力を持つ。

ＳＲじゃないトキは眼中になく、故に、アヌビス達は彼女に意識が集中し――

――ハンズを甘く見ていた。

「うおぉぉらぁぁぁぁぁぁ！！！」

その光景と大声にアヌビス全員が驚いた。

予期せぬ咆哮。
銃撃、奇襲。

「なめんじゃねぇっ！！」

ザコと決め込んでいたＳＲの復活。
殺したわけではないが、確実に麻酔を撃ったはず。

張本人であるクロスボウのアヌビスが一番驚いた。
ファルシオンを持ったアヌビスのフェイクヒットとなった、側頭部への平手打ち。

バレないタイミング。
感付かれないポジションからの、狙撃。

頚動脈をほんの僅かにかすり――
それでも十分矢に塗られていた麻酔が全身を回ったはず。

それなのにハンズ――錬金術師は動いている。

しかも、麻酔を撃たれたにもかかわらず、まで驚異的な身体能力を示していた。

（ＵＳＡＳ－１２を両手持ち――
それも走りながらこれだけ正確な射撃を）

ＵＳＡＳ－１２。
銃器の中ではショットガンに分類される代物だ。
１２番ゲージのシェル使用のセミオート・ショットガン。

ボックスマガジンで１０発。ドラムマガジンなら２０発。
いまハンズが使っているのはボックスマガジン。
１０発の両手持ちで計２０発。

一丁６Ｋｇオーバーのショットガンを軽々と振り回し、アヌビス４、５体にダメージを与える。

乱射のようにも見える超精密射撃！

弾が切れる前にＵＳＡＳ－１２の片方をリーダーアヌビスに投げつけた。

もう一つには、高速錬金。

叩き落されるショットガン。

ナイフを創り上げ、ハンズは勢いのままリーダーアヌビスへ突っ込む。

「遅すぎるなどという言葉で収まらないな」

その行為に落胆するかのように吐き捨てるリーダーアヌビス。

――最速の突き。

ナイフの刃先はアヌビスの胸元を目指していた。

「フッ！」

直前だった。

リーダーアヌビスの胸元にナイフが突き立てられるまでコンマ数

秒というところ、それは起こった。

根元から折れるナイフ。

突き刺さる前に折れた。

いや、折られたとしか考えられない。

手に残る衝撃がその証拠だ。

「ハァ…

ハァ……」

眼力の限りでソイツを睨むハンズ。

「残念」

息を切らすハンズの左側。

それをやった張本人がいた。

「テメェか、クソっ！」

モーニングスターを持ったアヌビスを睨み続けて毒づく。

コイツがナイフを折った――

その瞬間、視界に異変が起こる。

「ズィ・エンドってね！」

何の前触れもない、超高速回し蹴り。
いつ近付いたかさえわからないカトラスのアヌビス。

ボディ――
そいつを喰らった瞬間、ハンズの肋骨が軋んだ。

（ヤベッ効きすぎ！）

高速で移る景色の中、ダメージの高さに気付く。
背中から着地と同時にハンズは自分に力が残されていないことを悟った。
体の調子がおかしい。

「ハァッ！ハァッ！ハッ！」

（毒？
……いつだ？
神経系？
何なんだ、ツボか？
クソがっ！！）

体がうまくいうことを利いてくれない。

いまの回し蹴り――確かに、特筆すべき威力はあったが、体が言うことを利かなく程の威力でもない。

3発くらいなら耐え切れる。

だが、アヌビスは、

「終わりだな」

リーダーアヌビス。

そいつはハンズに対し、永久の幕引きを望んだ。

カチンッ！

その瞬間、リーダーアヌビスがトキの目の前から消え――

同時にハンズも気付く。

いつの間にか、ハンズの目の前に移動しているリーダー。

握りなおされたキングコブラナイフ。

（やっべぇ……！）

息を飲むハンズ。
アヌビスはハンズの胸元を片手で掴み、軽々と持ち上げて見せた。

ガチッ！

それが目に入った瞬間――
トキは動いていた。

藍はすでに何も出来ない状態。

その時、思ったのだ。
もし、ここで動かなければ一生後悔するかもしれない。

オレが引きこもったのは、勇気が足りなかったからかもしれない。
1体のアヌビスがトキに気付かせたのだ。

“どうしてアナタは1歩も踏み出そうとしない”

自分から踏み込んでいく勇気。
トキが忘れていたもの。

人の流れに翻弄されず、自分の流儀を貫き通す力。
それを保ち続ける勇気。

自分を曲げないこと。

その表層をトキは思い出していた。

何となく……
感覚的に。

（助けないと！）

走り出す。
意識がナイフのアヌビスと、今にも殺られそうなハンズに集中する。

「ト――！」

藍は同時に叫ぼうとしていた。

トキが目に映る。
無防備に走り出そうとするトキ。
同時に、何体かのアヌビスがトキの行動に気付いた。

「させな――！」

更に同時、リーダーアヌビスのナイフも動いていた。

「さらば、錬金じ――」

ナイフが、片手で掴み上げられているハンズの体の一部に向かって走る。
逆手。

（首か……）

朦朧とする意識の中、ハンズは死を覚悟した。

（オレ、ダッさ――）

目の前でハンズが殺される。
いや、誰かが殺されようとしている。

それが嫌で走り出したのかもしれない。

いや、きっとそうだ。
だから、走り出しなんだ。
自分が傷つくのは嫌だ。他人が争うのも嫌だ。
それ以上に自分だけが蚊帳の外ってのも嫌だ。

とにかく夢中で。
必死に。力一杯。

茨の守備範囲内から踏み出す、第一歩。

その瞬間――

ガチンッ！

その瞬間――
トキだけが動いた。

「な！？」

一瞬体にかかった圧力。
異変に気付いたのはすぐだった。

「何だ……？」

静止。
それ以外の言葉が見つからない。

叫ぼうとして止まっている藍。

トキの側面の回りこんでいたアヌビス。
自分に攻撃を加えようとするアヌビス。
藍に攻撃を加えようとしているアヌビス。

ハンズを仕留めようとナイフを振るリーダーアヌビス。
放たれる瞬間のクロスボウの矢。
空中で静止するスローイングナイフ。
全ての“者／物”が止まっていた。

「止まっている？」

一切の物音が途絶えた世界。
周りの全てが死んでいるかのようにも思える不気味さ。
その不気味さがトキの決意を薄めた。
トキだけが動いている世界。

カチッ

また何かが頭に響いた。

（時計？）

思えば、さっきもこの音が響いた気がする。
と、その時――

「初めまして」

何の前触れもなく、ソイツは声をかけてきた。
そこに居たのは、1体のアヌビス。

（ショーテルの奴！）

リボルバーを向ける。
銃口を向けつつハンズの方へ体を移動させ、ソイツに目を向けて外さない。

この空間。
何が起こっているかわからないが、警戒するに越したことはなく――

早くもアヌビスの姿に異変が起こった。

（えっ！？）

歩いて来るアヌビスの姿が変わった。
犬のような頭をしたソイツの姿は、

（ディマ！）

一瞬でアヌビスからディマの姿に変形していた。
その風貌はどう見てもディマだ。
まだ短い付き合いだが（何度か顔を合わせただけ）――しかし、
それがディマのものだと確信を持てる。

だが、何故ココに？

「ディマ……さん？」

「違うわ」

歩いてくるディマ。
しかし、そいつはディマであることを拒否した。

「どうしてディマたちが芹真事務所と組むと言い出したのか、理由がわかったわ」

その口調、声。
間近に迫り、その輪郭がいっそうハッキリする。

どれもがディマのものだ。
だが、何かおかしい。

「あんたは誰だ！
ディマじゃないのか！？」

銃口を向けられているにも関わらず、そいつは歩をやめない。

「色世　時君。
あなたに質問していいかしら？」

「質問してんのはオレの方だ！」

質問を逆に聞き返す。

「私の質問に答えたら包み隠さず何でも答える。
こんな条件じゃダメかしら？」

沈黙。
改めて、そいつを上から下まで見回す。

服装、風貌、動き方。
口調、声、顔立ち。

すべてを知っているわけではないが、それらがディマ本人のものだとわかる。
だが、ソイツはディマであることを否定した。

（誰だ！？）

何故、アヌビスがディマに？
――作戦か！？

「どうして、いま踏み出したの？」

ソイツの指が藍の発生させた茨の守備範囲を示す円に向く。
僅かな間をおき、応えようか戸惑いつつもトキは答えた。

「敵か味方かわからない奴に教える必要はあんのかよ！？」

ハンズの横にたどり着くトキ。
ふと、この空間を作り出したのが目の前のコイツなんじゃないかと思った。

「ハンズを助けるの？」

「当たり前だろ」

「何故他人を助けるのかしら？」

「なに？」

ディマが、ハンズを挟んで反対側に来た。
2人はそこで向かい合い――

「ハンズはね、過去に何度も死にかけているの」

ほとんどが自分から無謀な突撃を敢行したからである。

「ただの人だった時――
大きな事件に巻き込まれたの」

何故そんな話をするのか、トキには理解できなかった。

「その時、ハンズは一度死んでいるの。
それをあるSRが蘇らせようとした」

「それなら、尚更助けたいね。
それで、それが何だって言うんだ？」

ディマの姿をしたソイツは、歩き出した。
一度、ナイフのアヌビスの影にはいり、再びトキの視界に入る時には――

再び変化が起こっていた。

（なっ！藍！？）

背丈、風貌。
服装に、頭髪。
ディマに続き、藍の姿がトキの目に飛び込んだ。

自分の目を疑うばかりのトキ。
自然と目が、戦っていた藍へと向く。

そこに藍はいた。
静止したまま――何かを叫ぼうとしたままの状態で。

「鬼の姫候補だった藍にも辛い時期があった。
家族は戦闘で死に、兄姉妹（きょうだい）は行方不明。
一族から追放。
一族の消滅――」

そいつが敵なのか、味方なのか――トキは混乱していた。

「それでもハンズも、藍も、目標を持って生きている。
正確には、辛い体験を潜り抜けた先で目標を見出した」

「……」

無言で睨み返す。
藍の姿を模しているソイツの真意はなんだ？

「芹真にもあるわ。一族の消滅。
ボルトやディマだってそう――魔女狩りや戦争。虐待。差別。全てを乗り切ってきた」

「ボルトが戦争？」

「肝心なのはそんなことじゃない」

（どんなことだよ……？）

手が震えていることに気付き、グリップを握りなおす。
コイツは、一体全体何が言いたいのか。

「トキは、逃げずに立ち向かった？」

「何に？」

「辛いこと」

「……知るか」

「そういう適当な答えも、逃避言動よ？」

――言葉で逃げる。
これほどうまい逃げ方は無い。それがソイツの考えでもあり、ソイツはそれを嫌う。

「ハンズや藍が人並みはずれて強いのは、ＳＲという存在だからってのもあるけど――」

再びソイツの姿が変わる。

「どんなことからも逃げようとしなかった。
それが“共通する強さ”の秘訣なんだよ」

（お……オレ？）

トキと向かい合う、偽のトキ。
コイツも、ＳＲだ。
それだけは確信を持って言い切れる！

「誰だ、お前！？」

「色世　時さ」

これは、夢か？
今まで出会ったどのバーチャリティ溢れる現象よりも強烈な気がした。

想像できるか？
自分の名前を名乗る、完膚なきまで自分に似た偽者。

少なくとも、トキは冷静でいられなかった。
それに、こいつはディマの姿でディマであることを否定した。
そのくせ自分の姿になった瞬間、オレの名前を名乗りやがったんだぜ？

焦る――というよりイラつく。

「そして、本当のオレは自分の力を知らな過ぎる」

「……オレのことか？」

「自分自身が一番わかっているはずだ」

カチッ

「そもそも、人は他人よりも自分を理解しやすい。
俺の言っていることに間違いがあると思うか？」

それは、ごく当たり前の事だ。
自分のことがわからない人間はいない。

自分を理解しているということが、どれだけ心にとっての安息になっているか。
それは、自分が何者で――何のため、そこに存在しているのか考えてみればいい。

僅かな沈黙の後、再びソイツは口を開いた。

「オレ（偽）からお前（オリジナル）に聞きたい。
自分の価値に悩んだことはあるか？
あったとしたらそれは何時のことだ？」

「……」

コイツに対してまともに答えるべきか？
わずか悩み、応答を決した。

「いままでだ」

ソイツは笑う。
それが無性に腹立たしく……
それでも、引き金を絞ることは出来なかった。

カチッ

「自分の非力さ、にだろ？」

「どうしてわかる？」

ふざけた態度のソイツ。

自分と同じ姿のソイツに笑われたことが、苛立たしく、同時に気持ち悪さを覚えた。

「そういうＳＲだからな」

「これは、罠なのか？」

最悪、誰の支援もなしにコイツと戦うことになる。

勝ち目は無いだろう。

だが、

「コレって？」

ソイツは逆に聞いてきた。

ふざけている可能性は？　――そう考える前にトキは叫んでいた。

「ふざけるな！
どうしてコイツ等が止まっているんだよ！？」

トキがアヌビスを指差すのを見て、ソイツは溜息をついた。
何故味方ごと止める必要がある？

「人は、価値を得るために戦い続けるものだ」

一歩。
トキと向かい合って歩み寄ってくるソイツ。

その言葉にどんな意味があるのか？
或いは、無いのかもしれない。

カチッ

「色世　時。お前は自分を評価……
いや、自分の力をもっと信頼するべきだ」

トキの欲しい答えが返って来ない。
次第に詰まる2人の距離。

「動くなっ！」

咄嗟にそれだけが口から出た。

それを予想していたのか、ソイツはついに――

やっと、肝心なことを言った。

「安心しろ。オレは助けに来てやったんだよ」

「……信用していいのか？」

「無理だろう。少なくともこの空間を解かない限り」

ソイツはこの空間について知っている。

何となくそれがわかった。

「これはお前の仕業じゃないのか？」

「色世　時の仕業さ。

ただ、再生中のオレがその半分を担っているがね」

意味がわからない説明にトキは眉をひそめた。

ソイツはトキの目の前まで大股で歩み寄り、

「この空間を作っているのは“お前自身”なんだよ！」

……

……

……ここ信じるトコ？

もしそうだとしたら――やってらんねぇ～

そう言いたくなるような回答だった。

実際に、心の中ではもう叫んでいる。

「お前の力があれば、アヌビスどもを返り討ちに出来る」

そう言われたトキの目がアヌビス、ハンズに向いた。

助けられる。

ハンズ、それに――ー

（藍も）

静止した藍の姿が偽トキの肩越しに見えた。

「どうすればいい？」

一呼吸置き、トキは聞く。
聞かない理由はないが、聞く理由ならある。

「藍とハンズを頼めるか？」

「そうじゃなくて、どうすれば力が？」

「初心者は叫べ。ダメでも叫べ。
それがお前の力になるんだからな」

叫ぶことが自分の力になるなら……

（いくらでも叫んでやる！）

「トキ、勘違いするなよ。
お前の力は限られている。いまは、ある範囲までしか使えない。
しかし強力な力だ。お前の力は」

そして、トキは知ることになった。
自分の力――ＳＲ。

「“時間”だ」

聞いたトキはすぐに深呼吸を始める。
その間、ソイツは固まったハンズを移動させていた。

「叫べよ。“動け”てっ」

ソイツは知っていた。
目の前の男、色世　時。
コイツならアヌビスからハンズを救ってくれる。

それだけの力を持ちながら、自分の力を知るチャンスに恵まれない。
だったら、オレが教えてやろう。
そして今回だけ助けてやろう。
ついでに趣味も平行して。

――トキ。
その力は、長いＳＲの歴史の中でも2人しか目覚めたことのない、強力なＳＲ。
下手をすれば無敵――世界の頂点に立つこともできる力。

使い方次第では、『死』さえも覆す。
それが、トキの力――

セカンドリアル：タイムリーダー

「さぁ、ラウンド2と行こうか」

第6話－Ｒｅｓｐｅｃｔａｂｌｅ　ｖｉｃｅ！－（前書き）

続き

第6話－Ｒｅｓｐｅｃｔａｂｌｅ　ｖｉｃｅ！－

（鐘の音が止まない……）

これが異常なのはわかる。

でも、この異常がわかるのは私だけで、本人はまだ気付いていない。

この止まない鐘の音に……

それが何を意味し、どんな結果を生むのか？

彼自身、それを知らない。

もしかすれば、知る機会が来ない可能性も．．

（でも、誰にも負けない力――）

それだけはハッキリわかる。

いま、ベッドの上で横になっている彼女。

それでも、離れた場所で戦っている彼のことを理解することは出来た。

恐怖。
自分への失望。
浮かび上がってきた希望。
――
ふと、彼女は自分の力について考える。
（……）
自分の力のせいでベッドの上での生活を余儀なくされている彼女。
そんな彼女にとって、彼は――
（本物の希望になるかもしれない）

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第６話－

－Ｒｅｓｐｅｃｔａｂｌｅ　ｖｉｃｅ－

僅かな亀裂音――

リーダーアヌビスは頭上を見上げた。

（結界が破られたか）

つい数分前に出現した男によって戦局は大きく変わった。

まるで幽霊の如く湧いて出たその男、ソイツはいま……

「伏せろトキ！」

（敵対――
最も非力な者への助力を……）

リーダーアヌビスがそう考えた瞬間。
また1人、仲間が倒れた。

（強っ…！！）

トキは味方として現れた男、フィングの実力に息を呑んだ。

四方から襲い掛かってきたアヌビス相手に無傷。
しかも、全てを返り討ち。

一瞬で撃破数4。
半数近くを片付けた。

そんなフィングに恐れをなした1体のアヌビス――クロスボウの奴が叫んだ。

「何なんだキサマは！？」

アヌビスが叫び終えるのと、そのアヌビスの視界からフィングが消えたのは同時だった。

手刀。

アヌビスの首に切れ筋が走り……
頭が地面に落ちる。

撃破数5！

残りのアヌビスもその実力差に驚かされた。

「隊長！奴は何者ですか！？」

スローイングナイフのアヌビスが聞いた。

あんな奴知らない。
何者なのか聞かずにいられない！

「フィングだ」

「フィング……？それって！？」

リーダーアヌビスの回答を聞いたアヌビスたちの表情が変わる。
トキはその様子から、アヌビスたちはフィングのことを知っているのだと確信した。

「まさか、あのフィングか！？」

ランスを持ったアヌビスまで驚きを隠さない。

（有名人？）

どっかのスターなのか？

と、頭にクエスチョンを浮かべつつ、フィングに言われた通り動き続けるトキ。

実際のところ、その憶測は当たらずとも遠からずというところだった。

フィングが有名なのには間違いのだが――

“ＳＲ（セカンドリアル）の世界”での話だ。

「ああ、あのフィングだ」

同時――

６体目、スピアアヌビスに強烈な回し蹴りが決まる。

超高速で突っ込んだアヌビスに合わせた一撃。

スピアのアヌビスは慣性に従って屋上の鉄柵まですべり、激突。

停止した。

「間違いない。再生のＳＲだ」

「ご名答！」

リーダーアヌビスの口から出た言葉にフィングは解答をくだす。

「再生？どうしてそんな奴にこれだけの……！？」

再び、アヌビスたちの視界からフィングの姿が消える。
1体のアヌビスが気付いた。

「後ろだっ！！」

言われたものの、モーニングスターのアヌビスは完全に出遅れた。

強烈な裏拳。
背後からの一撃。
頚椎をあらぬ方向へ曲げられたアヌビスは、その場で崩れた。

「侮るな……完全再生の奴だからこそできるのだ」

アヌビスの解説を聞いたフィングは、再び正解を口にする。

「その通り。
君たち、“再生”がどれだけの能力を秘めているか知っているか？」

余裕を見せるフィングにスローイングナイフが迫った。

しかし、当たらない。
直前で全て叩き落す。

「馬鹿な！？」

投擲したアヌビスは目を見張った。
フィングの姿は一瞬で――先程倒したはずの“藍”になっていた。

「再生（Ｒｅｐｌａｙ）」

声・武装までもが全く同じ。
その時……

「黙れ」

リーダーアヌビスの奇襲攻撃。
フィングと同じように、一瞬で視界から消えて背後に回りこむ。

「あっ！止まれ！」

トキは、奇襲を許したフィングを見て叫んだ。
が、力は発動しない。

（クソッ！止まりやがれ！）

ナイフがフィングの体に入る。

右肩。
背後から心臓へ一直線に切り込まれる。

が……

「残念――再生（Ｒｅｓｔｏｒａｔｉｏｎ）」

「その前に死んどけ！！」

スローイングナイフ。
それが次々とフィングに突き立てられていく。

うち１本――左目に刺さったナイフは脳に達した。
しかし、それでもフィングは止まらない。

「無駄。
これも再生（Ｒｅｖｉｖａｌ）」

刺さったナイフを悠々と引き抜き、フィングは背後のリーダーアヌビスにそれを突き立てた。
フィングの傷口がみるみる塞がってゆく。
貫かれた左目もすでに元通りになっていた。

（くっ……！
我々では歯が立たないか！）

それを悟った瞬間――
フィングの姿が芹真へと変わり、スローイングナイフのアヌビスを縦真っ二つに切り裂いた。

（すごい、１人……）

残りはリーダーのみ。
他のアヌビスは芹真や藍の姿・戦闘力を再現したフィングによって倒された。

残されたリーダーアヌビスにフィングが迫る。

（くっ！この動きは…！）

フィングが再生した芹真の動きにアヌビスは目を凝らし、後退。

目まぐるしいなんてものではない。

明らかに自然の摂理を凌駕した人ならぬ速度。

目がついていけない。

弾丸さえ簡単に見切るアヌビスが見失ってしまうほどの速度で、

フィングはリーダアヌビスを撹乱した。

（まずい）

ふと、中華料理店と病院に突入したグループの安否が気になった。

が、そんなこと気にしている暇はない。

攻撃が来る。

真正面。

（ガードっ！！）

しかし、アヌビスを襲った攻撃は打撃ではなかった。

鋭利な刃物。

（ナイフ？
背後！？）

ガードは意味を成さず、アヌビスの背中にナイフが突き立てられた。

アヌビスは咄嗟に空中へと飛び出す。
その途中で自分のナイフを逆手に持ち、防御体制をとる。

衝撃に耐える覚悟を決め――

しかし、フィングはいとも簡単にガードをこじ開ける。

再びアヌビスの防御を突破したフィングは、最後のアヌビスを真正面に捉えていた。
――もう、ガードをさせない。

（あっという間に8人のアヌビスを……）

トキはフィングという男に戦慄し、味方で良かったとつくづく思った。

（馬鹿な！？）

腕一振りのもとにナイフを破壊したフィングは、更に姿を変える。
アヌビスは手持ちのナイフを破壊されたことに動揺していた。

（“裁決怨霊の集合体”から作られたこのナイフを、一撃――！）

そう。
裁決怨霊から……

断罪を望む怨霊。
それが篭ったナイフは、善人は食わず、悪人の肉を喰らう。
全てに等しき審判を下す道具だった。
篭る怨霊が裁判官。

今日まで幾千もの罪を裁いてきた。

（ここで終わるのか！？）

最後のアヌビスは全てが遅かった。
――空中で全てを終わらせる。
そのため変身したフィングは両手を広げ、手に光を纏った。

そして、女性の姿を再生するフィングは笑う。

「この姿を手に入れるのに苦労したのよ」

「な、に？」

フィングが再生した女性の声、容姿、服装、目の色、話し方――
そのＳＲが最悪の相性のアイツであることをアヌビスは理解した。

「誰だアレ？」

見上げていたトキは疑問を持った。
長くナチュラルな金髪。染めたものじゃないと一目でわかる。
見るからに自分より年上なのもわかる。
そして、何より強い。
そんなオーラが零れ出ているようだった。

「終っわり～♪」

フィングの両手が外側から内側へと振られる。
その光景を目にし、アヌビスは目の前のソイツのことを思い出していた。

（アイツか）

強烈な閃光が最後のアヌビスの体を圧し潰した。
それはまるで紙くずを掌で握りつぶすようなものに見える。
更に、フィングはアヌビスの魂を一瞬で焼滅させてしまう。

（――圧倒）

フィングは、1人でアヌビスを殲滅してみせたのだ。

殺しても蘇るはずのアヌビスたちが蘇らない。
空を覆っていた黒色結界は完全に破れ、僅かに残ったオレンジ色の空が目に飛び込んだ。

それを確認し、フィングはトキの前に着地。
同時、元の姿に戻る。

「トキ。感謝するよ」

「――え？」

不意を突かれたトキ。
感謝すべきはこちらじゃないのかと、疑問を持った。

突然現れ、危ないところを助けてくれたんだ。
感謝すべきはこっちじゃ――

「いや……そうか。
じゃあ、こう説明すれば納得してくれるか？」

その時フィングは、トキの肩越しに2人を覗き見た。
視線を追ってトキはそれを理解する。
戦闘で負傷したハンズと藍。

「僕の力は他人の能力を“再生”すること」

「俺の力も再生したと？」

「ご名答！だから最初トキの前に現れた時も、周りは止まっていたろ？」

なるほど。
やはりこいつの仕業だったか……

「まぁ。そういうことで、僕も時間を止める力を手に入れることが出来たし」

「……

え～っと、フィングさん？」

トキはフィングを指して尋ねた。
フィングはすぐに頷く。

「途中で藍とか芹真さんの姿になっていたりしたけど」

「ああ。藍も芹真も再生（Ｒｅｐｌａｙ）できる」

「オレの姿にもなってましたよね？」

フィングが再生できるのは姿だけじゃない……
本当に他人の全てを再生できるようだ。

となると、気になってしょうがない事がある。
それは、どうすればフィングは相手の姿を再生できるようになるのか？

「ディマにもなれるし、あそこで寝ている馬鹿も再生できる。
まぁ、どうするかは企業秘密だけどね」

どの馬鹿のことかはあえて見ないことにする。
トキは単刀直入に聞こうとし、直前で別の質問が浮かんだ。

どんな質問か？

それは、とても重要な質問。

ついさっきの戦闘で、フィングの強さに惹かれたのもあり思い出したのだ。

「SRの力って、どうやって強くなっていくんですか？」

そんなトキの口から出た質問がこれだ。

フィングは意外な質問に意表を突かれたらしく、

「何？強くなりたいの？」

頷くトキ。

フィングから見たトキの目に迷いや中途半端な光は見られなかった。

「じゃあ、まず何で力が必要なのか、理由を言ってみろ」

「……理由は、弱いから」

「まぁ、確かにザコもいいとこだ。それで？」

「芹真さんたちと会って、やっぱオレだけが非力だってわかったのが嫌で……」

「それは嫉妬か？」

芹真の名を聞き、フィングはトキとパイロンを重ね見た。
自分の弱さ、芹真事務所のメンバー。
パイロンとトキは同じ事を言っている。

新たな質問にどう答えるか、フィングは少し意地悪な気持ちになってきた。

「わからない。
けど。どこにいても弱い自分が許せないのは確かだ」

フィングは何も言わずに何度も頷く。

（ここまで言うこと同じか……）

それからフィングは何か考え始め、トキは黙って回答を待った。

自分から聞いたんだ。
フィングが何を考えているのかわからないが、考えている相手の思考を遮ることは良くない。

そう判断し、回答を待つことにしたのだ。

「――――あ」

フィングが口を開いたかと思うとまた考え込み、

「……ふん」

何かに納得し、何かを悩んでいる仕草を見せる。
実際のところ、何を考えているのだろうか？

「う～……――ん！
そっちの方が楽しいな」

何らかの結論が出た。
どんなことを考えていたのかトキは知る由もない。

ボルトだったら別だろうけど……

「メイトスに狙われているって言うしな」

「知っているんですか？」

「いや、知っているからこそ俺は戻ってきたんだよ」

「え？戻るって？

あ、じゃあ、事務所の――？」

狙われている、戻る。
そんな言葉がフィングを事務所員とつなげる。

トキの短絡的で安易な思考にフィングは苦笑した。

「2つ違う。この世界だと大騒ぎなんだよ。
協会がトキを手にするか――
メイトスの手にかかるのが先か、ってね」

オレはそんな賭博の対象みたいに見られていたのか？
初めて知った事実に、腹が立つ。

「芹真たちはそんなお前を護ってやるために勧誘したそうだが？」

実際のところ、芹真本人はどう考えているだろうか。

「もし、つまらない理由で――
弱い自分を否定したいためだけで戦いたいと、言っているならやめた方がいい」

フィングも心配して言っているつもりだ。

「――ぁ、そうか」

そのフィングの言葉を受け、トキは自分なりの答えを見つけた。
とても稚拙で簡単な答え、

「心配されないほど強くなりたい」

「本気か？」

「本気だ」

トキの中の答え。
今まで何かを求めて試行錯誤した結果。

どうしてか埋まらない“何か”
変わらない日常。

「誰かに心配されるのが嫌なんだ」

トキは自信を持ってフィングに言った。
が、

「だから、そういうのをつまらないプライドって言うんだよ」

フィングの表情が変わった。
笑顔が真剣な面持ちになる。

それだけ、トキのことを真剣に考えてくれているのは言うまでもない。

「でも、それだけのために今まで色々試してきた……」

そして、やっと出会った。
目の前にあるきっかけを逃したくはない。

「違うな。お前は誤解しているんじゃないか？」

「誤解？」

「心配されたくないなんてのは言い訳でしかなく、本当はいままで恐くて逃げ続けていた」

「だったら、もう逃げたくない。
それだけでも理由は充分なハズ」

2人の間に沈黙が降りた。
やがてその沈黙をフィングは破――

「芹真さんたちに会って、それがわかったんだ」

――ろうとしたフィングより先に、トキの声が通った。

「本当にいいんだな？」

「今日で襲われたのが2度目。
これからも自分だけが蚊帳の外なんてのは嫌だから」

「OK。じゃあ、教えようてやろう」

いやにあっさりと認めてしまったフィングに僅かに疑問を抱く。
そんなトキの心境を知ることもなく、フィングは説明を始めた。

SRの養い方。
それは――

「さっきも言った通り、強く願うこと。
どんな時にどんな風になればいいのか、それを想像してから使えば効率がいい」

「つまり……？」

「未来を想像して、そうなれって願えばより効率的だってこと。

ポイントは“想像力／創造力”と“状況の未来位置”だ。
後は使い方次第」

以上。
説明終わり。

（え？それだけ？）

「そうだよ。これだけだよ！」

いきなりボルトの姿になったフィング。
読心術。

なるほど。
能力まで再生できるんだ……

――正直ウザい。
ボルトの姿のままフィングはトキに質問する。

「ねぇ。トキは、何かのために必死になったことはある？」

「――テスト勉強の時とか？」

「そうだね～。
学生じゃその程度のものだもんねェ～」

またしても真意が掴めない質問に、トキは顔を歪ませた。

「悪いかよ？」

「悪くはないけど大問題だね」

いや、それ悪いんじゃないのか？
大体、何が問題なのかさえ理解不能。
それなのにフィングは、

「じゃあ、僕は」

元の姿に戻り、踵を返す。

「そこの2人が目覚める前に退場するよ」

中途半端なところで話を切り上げてしまう。

「は！？」

あまりにも唐突な退場宣言。
“何で？”以外に言葉が浮いてこなかった。
――ってなわけで、
「何で？」

慌ててフィングの背中を追い、トキは聞いた。
「出来たら、俺の名前を口にしないで欲しい。
事務所の誰にも話さないのなら後でいいこと教えてやるからさ」
「いや、ボルトがいるから無意味だし」

超読心術――
つうか心の覗き魔？
そんな能力を持ったボルトの前で隠し事は無意味。
つうか無理！
最近の例では芹真さんの雀荘入り（秘）が発覚していたし。
「って、その前にもう一つ分の褒美もあったなぁ……」

またしても1人だけ納得したように話すフィング。
全体を把握しにくい。
具体性にかけるフィングとの会話はトキに多大な疲労感を与えた。

「トキ。階段昇っている途中、俺に気付いただろ？」

言いながらフィングは芹真へと姿を変えていく。

（え、階段？）

脳裏に足を止めた時のことが思い浮かぶ。
何故か路地が気になったあの瞬間。

「あの時、俺がショーテルのアヌビスを破壊した」

突然の暴露。
トキが階段で足を止めたのは、何かが一瞬きらめいた気がしたから。

そのきらめきこそ、ショーテルアヌビスの死。
フィングは最初から、アヌビスの姿を装ってあの場にいたのだ。

「よく気付いたものだな。
他のアヌビスたちですら俺だと気付かなかったのに」

「じゃあ、最初から……」

「ああ。俺は居た」

つまり、アヌビスたちの五感をもってしても、声、匂い、動作、口調、姿――
それら全てを完璧に“再生／再現”しているフィングを判別することは不可能だったということだ。

「で、偶然だろうけど俺に気付いた褒美」

突然振り返り、

「ほら、これ」

（何コレ？）

いきなり目の前に差し出されたモノ……

（紙の束？）

異様に薄い何かが、相当な数重ねられているそれは紙にしか見えなかった。
色も白い、一枚一枚が軽い。

「特殊な金属らしい」

「――へぇ？」

何とも間抜けな声がトキから漏れた。

「以前、ボルトの友達ってのが来てさ。
そいつに貰ったんだが、俺にとって不要な物でしかない」

渡されたものが金属であるという事実を受け入れることが難しい。
常識的に考えて、この大きさと重さから“紙”以外に考えられない……
それなのにフィングはこれを金属と言った。

特殊な金属だと。

「そこで、押し付けるわけじゃないが、俺には再生の力があるからさ。
不要なんだ。貰ってくれ」

何者だよ――
ボルトの友達。

色々考えているうちに、フィングがドコからその紙……
もとい、特殊な金属を取り出したのか？
その疑問が浮いてくることは2度となかった。

「それじゃ」

直後、フィングは一瞬でその場から姿を消した。

芹真たちが戻ってきたのは、フィングが去ってから2分も経たないうちだった。

パイロンの店で会合中に襲われたのだという。
しかも規模はトキら3人を襲った数の3倍。
それでいて芹真さんやボルト、ディマ、クワニーは無傷で帰ってきた。

パイロンの傷がまた増えたという話も少し出たが、誰もあまり多く語らなかったことから生きているだろうし、重症でもないと判断した。

パイロンの店を襲ったアヌビスは2、3体を討ち逃がして全て失命に追いやったという。

ほとんどをディマとボルトが片付けたという。

話をしながら全員で事務所の後片付けをした。

それまで聞いてばかりのトキも、こっちで起こった戦闘のことを聞かれ――

「えぇ～！

フィングが来たの～！」

案の定、真っ先にボルトに心読まれた。

“いいこと教えてやる”――ってのにかなり期待していたのに……

早くも見えない楽しみを奪われたトキは致し方なく頷く。

「マジかよ……」

その話には、芹真さんも信じられないというような表情を見せた。

特に、芹真さんの横。

ディマとクワニーの驚きようが……

ディマは心臓が止まったんじゃないかと思えるほど完全に硬直している。

クワニーの場合、動揺してなのか――いきなり腰抜かしたかと思うと後頭部をテーブルにぶつけて悶えていた。

「でも、完全に戻る気配は見せなかったみたいだよ」

トキの記憶まで読む。

ボルトの説明に2人が冷静をとり戻す。

藍とハンズは未だ横になって目を開けない。

「有名なんですか？」

聞かずにはいられないフィングの詳細。

なんたって、アヌビス達ですら怯んでいたくらいだ。

それに、あの戦闘能力の高さ――

脳裏にその時の光景が鮮明に浮かび上がる。

「なるべくハンズに言うなよ」

我に返ったクワニーがトキに前述する。

――何故ハンズなのか？

ハンズの性格を思い出してみるといい。
トキの脳裏にイメージが浮かんだ。
非常に子供っぽく、負けることを極端に嫌うハンズ。
アヌビスに負けたことで尾を引かせないためか……

――と、思いきや、

「本名：フィング・ブリジスタス
正真正銘、ハンズの兄貴だ」

――――ＴＨＥ　兄弟。

「え――マジ？」

トキは思わず頭の中で２人の戦闘能力を比較した。
確かに、ハンズは共闘するなら心強い人物だ。
頼りになること間違いない。

――が、フィングはどうだ？

圧倒的すぎる火力。
頼りになるなんてモンじゃない。
いっそ全てを任せてしまいたくなる程の力の持ち主。
力の差がありすぎる。

「何年前だっけ？
突然姿を消したの？」

「7年前」

芹真の質問に、ディマが回答。

「“完全再生”或いは“完璧再現”のＳＲ。
こっちの世界じゃ知らぬ者ナシってくらい有名だけど――」

「あだ名は“リスペクタブル・ヴァイス”
または“コレクター”」

「その由来が度重なる謀反・反逆行為」

「それから能力採集」

突然一同が沈黙した。

トキも倣って沈黙を続け、フィングのあだ名を頭で復唱。

「変態よ」

「変態だ」

「そう。変態だな」

「あ～あ。戻って来たんだ……あの変態野郎」

いきなり零れた悪口。

（え？
掌返したように皆どうしたわけ？
いや、つうか――それ言いすぎじゃない？
つうかディマさん変態ってどういうこと！？
それにボルト！
何でそんな戻ってきたことに残念そうな顔するの！？）

「だってさぁ、トキ……
フィングから話聞かなかった？」

「何の話だ？」

「フィングの再生能力の強化方法～」

「フィングは相手の血や細胞から能力を読み取る力があるのだ」

「それに、あいつコレクターなんだよ。
ネクロフィリアだっけ？その気があるんだよ」

「そうだ。ネクロフィリア」

「そんな奴を変態と言わず、何が変態か……」

手厳しい言葉を放つ芹真、ディマ、ボルト。
しかし、トキからすれば――

「いや、ネクロフィリアって何？」

根本的な疑問。つうか問題。
まず、そんな単語聞いたことない。

何それ？
流行の１８禁ｗｏｒｄ？

変態＝エロスにつながる。
これでもトキは頑張って頭を捻ったほうだ。

（さっきまで生きるか死ぬかの世界を体験したばかりだからさ）

ろくに頭の働かない。

だから――
変態→マニアック（？）→やらしい→18禁
と、つながったのだ。

トキの質問に答えてくれたのはまたしてもクワニーで、

「“ネクロフィリア”ってのは死体に興奮する奴のことで、屍姦（しかん）症ともいう精神病だ」

大半が精神病なのか一瞬疑問に思った。
が、トキもそれで大体納得。

死体に興奮。
マジでいるのかよ……そんな奴？

「だから、フィングがそうなんだよ～」

本日、心読まれること3回目！
正直疲れる（精神的に）～…

「トキ。深夜徘徊は避けたほうがいいわよ。
フィングは、自分が再生できる能力を手に入れるためなら何だってするから」

ディマからの忠告を吟味するよりも早く、

「私なんか解体（バラ）されそうになったんだよ！」

ボルト憤怒。

頬を膨らませて、眉間にしわ寄せ怒りを表現している。

「自分の趣味のほうに走りやすいからなぁ」

芹真も呟く。

“素直に忠告を受け入れたほうがいい”と即判断し、トキは黙り込んだ。

（まさか変態だったとは――）

あんな強いのに誰が予想できたか？

とてもじゃないが、まともにしか見えない。

見た目ならハンズの方がよっぽど変だし……

「ちなみにフィングはうち（ホートクリーニング店）のメンバーだから」

どこか鬱の気が入りかけているディマがそう教えた。
詳細を言うならこうだ。

ホート・クリーニング店の実質ナンバー2。
ディマよりも断然若いにもかかわらず、実力でディマに迫る猛者。

それがフィングだ。

猛者。であり、変態――
店長であり、同じSRであるディマが頭を抱えるのも当然だ。

ハンズと兄弟ということもあって、店が抱える2人目の問題児でもあるのだから。

（ボルトに心の内読まれて助かったことになるのかな……）

フィングが言っていた“お楽しみ”――
正直、その言葉自体怪しいものだと思えるてきた。

「でも戦績は確かでぇ～」

ぐったりとやる気ゼロな態度でボルトが言う。
が、違う。
やる気ゼロではなく、眠気だった。

眠気９９％！

気が付けばボルトの目蓋は落ちかけていた。

「テロリスト狩りだけでも何十回。
謀反予防に～
護衛～
銀行強盗退治～
……え～
…ぅ～
眠ぃ――――」

睡魔と闘いながらフィングの戦績を説明するボルトは、ついに睡魔に敗れた。
眠いと宣言。
３秒後にお休み。

芹真とディマ以外、意識が飛ぶ直前に眠いと喋る子供を見るのは初めてだった。
睡眠へと突入したボルトを芹真さんはベットまで運び――

戻ってきた頃。
今度はいきなりハンズがソファの上で目を覚まして飛び起きた。

「だぁ～！！！
ぁんのクソ野郎ぉ！！」

あまりにも不快な大声にうんざりしたクワニーが――

「ふっ！」

顔面へ下段突き！
ハンズは再び夢の中へ落ちた。
起きて2，3秒足らずの出来事。

（いっそ起きないほうが良かったのでは？）

再び夢の中へ落ちていったハンズを見ながら、ディマがため息をついた。

「それじゃあ、私達はこの辺で去ることにするわ。
クワニー」

切り出したディマの一言にクワニーはハンズを見下ろす。
そういや、ディマたちのクリーニング店がどこにあるのか知らない。
トキは場所くらい聞いておこうと思い、

「嫌よ」

スゴいこと判明！
ボルト同様、ディマもある程度心が読めるらしい！

即否定されたのだ。

「自分で探しなさい」

言い残してディマは出入り口へと向かった。
クワニーはハンズを持ち上げてディマの後ろをついていく。
3人が出て行き、出入り口の外でディマが簡易魔法を使用。

「ありゃ、高速転移術だ」

芹真さんの有難き説明。
外に出た3人をディマが操る影が包む。

真ん丸の球。

その形を意識した時――
いつの間にか影は消えていた。

ディマたちは帰ったようだ。

――
――にしてもだ。
“探しなさい”って言われても、電話帳とか見れば一発じゃないか？

「さて、トキ。
夕飯どうする？」

芹真の目が藍へ、それからトキへと向く。
当分起きそうにないと悟ったのだろう。

「ビニ弁とか？」

「パイロンも疲れているだろうしな。
うん。やっぱそうするのが一番だよな」

夕飯決定。
コンビニ弁当。

と、その前に……

「そういやトキ。
俺の友人がお前の家直しておいたって」

出ました。
いきなりな宣言。
今更？とか考えつつ、トキは聞いた。
「芹真さん。その友人もしかして……」
「もしかしなくても、ＳＲだ」
ダメだこりゃ。
何となく、そんな気分にトキは陥った。
冷静に考えれば“そういや”は余計じゃないか？
仮にも人様、つうか俺の家だぞチクショウ……
その時、更に芹真は何かを思い出し、
「話し変わるが、お前らの方に現れたアヌビス――
本当に１０体だけだったか？」
突然の質問。
当然トキは、
「わかりません」

あの時、恐怖やら混乱やら……ｅｔｃ
で、いっぱいだったトキにアヌビスを数える余裕さえなかった。
今さらだが本当にアヌビスが１０体いたのかさえ、判らなくなってきた気がする。

「いや、たまにゴーレムかフェアリーの類が付いていることがあるからさ」

「…ぁ（…」ありえネェ…）

一瞬言おうとしたが、心の中で呟くにとどめた。
そう思いながら財布を用意。
芹真さんはすでに事務所の扉を開けて外に出ていた。
人ごみに揉まれつつ一番最寄のコンビニを目指す。

「芹真さん」

人ごみ賑わう路上。
いや、ホントにゴミって言っていいほど人影が多いんだって。
気になることを思い出し、トキは聞くべきか聞かざるべきか迷っ

たが、聞くことを決意した。
フィングの言っていた、あのこと。

「協会が俺を狙っているのは、俺を協会側に取り込むためって、知っていたんですか？」

「ああ。知ってた」

思ってもいない即答にトキは言葉を濁した。
そんなトキに芹真は続ける。

「俺は協会のやってきたことを許すわけにはいかない。
大層な正義を掲げておきながら平気で民間人や戦闘に不向きなセカンドリアルまで巻き込む。
トキに、そんな連中の仲間になって欲しくなかった」

芹真の脳裏に何十年も前の光景が浮かび上がってきた。
戦場となった山脈。

転がる死体の数、姿、どんな存在なのかも鮮明に覚えている。

それが芹真の“協会を許さない理由”

「あまり――
すぐに信じてもらえると思っていないから話すが、俺、ボルト、

藍は協会のトップを殺すことにすべてを賭けている」

「トップ？」

「前に教えなかったか？
完全支配のＳＲ：オウル・バースヤードと名乗っている男。
そいつが、俺の一族と藍の一族を戦わせ、全滅に追いやった張本人なんだよ」

そいつのことを考え、拳を強く握る芹真。

まだ、この手に友人たちの感触が残っている気がした。
それを……

「全てあいつの脅威になりえないからって理由で、だ？」

奪われたのだ。
自ら手を下さず、計略によって。

家族も、友人も、故郷も。

「一族って……」

突然の話にトキは戸惑った。
――本当のことを言っているのだろうか？

冗談でも信じたくないような話だ。

だが、芹真は真剣そのものだった。

コンビニに到着と同時、芹真は黙り込んだ。
数々の物品を品定めして会計を済ませる。

外に出た時、芹真は話を再開した。

「いま、ＳＲの世界は暗黒時代の真っ只中にある。
その原因が協会だ」

トキは黙って聞いた。

「トキ、俺たちに協力してくれないか？」

沈黙が続く中、芹真は続けた。

「オウルのやり方に反抗できるのは俺たちしかいないんだ」

「……だから、戦っているんですか？」

トキは迷うことなかった。
戦う決意なら、とうに出来ている。

理由だってある。
だが、現時点でトキは非力過ぎる。
そんな認めざるを得ず、避けて通れない現実を真っ向から受け止める決意。

「俺は構いません」
「ありがとう」

非力という現実。
受け入れたからこそ決意できた。
“弱いから強くなれる”

「芹真さん、逆に――ちょっと聞いていいですか？」

お互いコンビニ袋片手に歩き続けること約１０分。
事務所が目の前に迫ったところでトキは聞いた。

「メイトスも協会の敵なんですよね？」

「メイトスはＳＲを終わらせようとしているＳＲだ。
つまり、メイトスは全てのＳＲの敵でもある」

トキの質問に芹真は即答した。
帰ってきたのは　Ｙｅｓでも　Ｎｏでもない答え。

「え？」

素直にトキは理解に困った。
事務所の扉に手をかける芹真が振り返り、

「メイトスは、歴史が進むごとに増えていくＳＲによる犯罪をなくすために戦っているそうだ。
最近聞いた話だと“不老不死”や“超長寿”を主な殲滅対象としているらしい」

「つまり……長生きを認めない、みたいな？」

「ん～、まぁ……
そう言うことだな。
オウルもメイトスの対象とされているし。
メイトスの目的がＳＲの――」

ここで芹真の言葉が切れた。
何事かと窺うトキ。

芹真は嗅覚をフル活用し、

「藍が起きたみたいだ」

料理の臭いを嗅ぎ取ったらしい。
それを聞いたトキはフリーズ。

――コンビニに行った意味ねぇじゃん。
テーブルの上には多くの料理が所狭しと並んでいる。

（……有り得ねぇ）

外出約15分。
その間、これだけの料理を手がけたのか？　少なく見積もっても30皿はあるぞ？

なに？
単純計算で1皿30秒？

「……あ」

台所から姿を見せた藍の両腕には、お盆に載った新たな料理が……

「ただいま！」

芹真は元気に着席。
コンビニ袋を一瞬で自分の部屋に置いてきたのだ。

藍も寝ぼけているのか、それでもしっかり事務的な挨拶を返し――

「ねぇ、気がついたらアヌビスたちいなくなっていたんだけど、どういうこと？
いつの間にか事務所で寝ていたみたいだし」

芹真は首をかしげた。
誤魔化す気らしい。

「トキは知らない？」

「……さぁ」

芹真に倣い、トキも誤魔化すことに。
藍もそれ以上追求してこなかった。

それから芹真はテレビをつけ、３人は何事もなかったかのように食事に取り掛かる。
食事中にアヌビスの話題が出てくることは一切なかった。

（絶対誤魔化しているわね）

終わりよければ全てよしという。
終わっていない気もしていたが、藍は深く追求しようとは考えなかった。

（どうせワルクスが援護にでも来てくれたんでしょう）

自分なりに納得のいく理由付けをし、黙々と箸を進める。
まるで何事も無かったかのように今日という日が終わった。

第7話ー惨敗！完敗！超連敗トキ！ー（前書き）

次の日――

第7話－惨敗！完敗！超連敗トキ！－

翌朝

…

・・・

……硬い？

トキは妙な感触を頭の横に感じて飛び起きた。

頭の隣に何か硬く、冷たいものが……

「……」

起きてそれを確認したまでは良かった。

しかし、何で“ソレ”なのか理解できなかった。

（――はい？）

まだ、日の姿が見えない早朝。

それでもうっすらと空は明るみだしていた。

どうリアクションをとればいいのかわからないまま、ソレを手に取る。
ある程度常識を持ち合わせているトキからすれば……
やはり、これは有り得ないとしか言いようがない。

「銃？」

しかも複数。

ハンドガンが２つ。　明らかにハンドガンじゃないのが１つ。こちらは茶色い紙に包まれている。

（俺に何しろって言いたいんだ？）

バ○○○ワイヤル？
――まさかな。
どこの誰と戦れってんだよ？

冷静さを取り戻しつつ、触れてみる。
まず、一番手近にあるハンドガン。

（キム――ベェアァー？
コム……コンパクト）

正式：キンバー（Ｋｉｍｂｅｒ）コンパクト（Ｃｏｍｐａｃｔ）
ピストル。
朝一の事態ということもあり、読解力が著しく低いトキであった。
銃本体からマガジンを取り出し、

（本物、か？）

見ただけで納得できないトキは、

マガジンをセット。

そして――スライド。
チャンバーに弾丸装填。

ますます本物っぽい……
だが、ここは日本。
それにクリスマスでもないのに、さもプレゼントのように置かれた“これら”はあまりにも不自然。

おそらく、芹真さんかボルトあたりの仕業だろうと思いつつ……
試しに壁へと銃口を向けてみる。

ふと、昨日のリボルバーの反動を思い出した。
強烈な反動。
目に痛いマズルフラッシュ。
鼓膜を破らんばかりの銃声。

あれを朝から体験するのは辛い。

（まぁ、本物のはずないし）

あくまでモデルガンだと思い込んでいるトキ。

――ってなわけで、

銃撃！

本物の轟音！

その銃撃で、何よりもトキの五感を刺激したのは強烈なマズルフラッシュだった。

「っっ！！」

闇を照した一瞬の閃光。

薄暗い部屋の中、トキは反動で後ろに転がり、背中から落ちる。

薬莢の乾いた落下音がどこか小気味よかった。

何事かと真っ先に駆けつけたのは芹真。

次に藍。

ボルトは静かに眠り続けていた。

数時間後

ＡＭ　０６：００

台所に立つ藍とトキ。

藍はトキに同情した。
確かに、戸惑うだろう。
起きた瞬間得体の知れないモノが自分のすぐ真横にあるのなら。

想像してみればいい。
もし、何の前触れもなく自分の枕元に〇〇が置かれていたら――
というシチュエーションを。

「でもそれは孫さんのミスだし」

トキは無言で藍の調理を手伝った。
手は動いているものの、虚ろげな目である。

（さっきの発砲の事かしら？）

かなり動揺しているらしい。

常識を持った人間ならこう……

――訂正。

小心者か、法を律儀に守る者なら誰でもこうなる可能性はある。

藍の脳裏に浮かぶ、昨日のアヌビスと対峙した時のトキのビビりっぷり。

正直、先が思いやられる。

「大丈夫よ。捕まりはしないわ」

そう言われ初めてトキは反応した。

銃刀法違反で捕まらないかと本当に……かなりビビッていたらしい。

「どうしてそんなこと言い切れるんだ？」

「協会よ」

そのワードでトキは黙り込んだ。

表情は固まったままである。

「この街の警察にも協会の手の者が複数いるから、簡単に情報操作されるの」

「じゃあ、協会が黙っていないんじゃ……？」

「心配ないわよ。彼らは下手に手を出してこない。手を出してくるとしたら、昨日のアヌビスみたいに自分たちに有利な環境を整えてから来るはずだから」

納得しなければいけないのか？

トキには無理だ。

一番多くダメージを受けていた藍が言うと、どこか説得力に欠けた。

「それに、もしＳＲ（セカンドリアル）が関わる事件が起きたとしても、協会は自分たちだけで事を処理をしようとする。

もちろん、警察は関われない」

じゃあ、どうして協会の人間――ＳＲが警察に？

そう聞くよりも早く、

「藍、ちょっと」

呼ばれた藍は、にんじんの皮むきをトキに託して芹真の元へ。

この日……

この後、トキにまともに質問が許される時間が来ることはなかった。

「これ、届けてくれないか？」

そう言って渡されたものは、今朝トキの隣に置いてあったあの紙に包まれた物。

重く、長い。

「エントリーガンだ」

「……14inchバレル？
じゃあ、ワルクスの？」

ご名答。

藍はそれを手渡すことを承知した。

――――

……

同時だった。

2人が――

面識のないトキがワルクスもSRだったと知れば、どんなリアクションを見せるのか

――と考えたのは。

頭の隅で考えつつ、藍は台所へ、芹真はコーヒーへと意識を戻した。

事務所の窓や扉のガラス越しに差し込む日の光。
本日は快晴――
のち雷雨だけど。

「朝はいい……」

天気予報も“快晴のち雷雨”を告げる。

（嵐の前の静けさ、とでも言うか～）

そんなことをのんきに考えつつ芹真はコーヒーカップを傾けた。

（あぁ～、ねみぃ…）

それから、いつも通りの日常が展開され……
展開されたのはたった1人。
朝の1件を除き、特筆すべきことが何もなかったのは芹真だけだったという。

つまり、いつも通りの日常だが、それぞれ何らかの出来事が起こったり、運がなかったりということだ。
散々な1日になる。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第７話－

－惨敗！完敗！超連敗トキ！－

２年３組というプレートのかかった教室。

時間が進むごとに喧騒を増し、昼休みにはクラス内抗争、あるいは内戦まで発展するという。更に半学級崩壊・授業占領テロという必ず何かが起こる超問題クラス。

しかし、進路の決定率・テストの成績・実用性の面では他のクラスと比べ物にならないレベルの高さを実現しているというのも現実。

クラスメイト同士、仲が良かったり悪かったり……

――なのに抗争やら内戦が起こるのはなぜ？

どうでも良さそうで、実は放っておけない問題なのだが、いまでは解明しようとする者など1人もいない。

2年3組のクラス担任は、超実践主義者で元傭兵という噂（本当にそうらしい）つきの女性。

他の教職員の方も手出しできないらしい。

そんな問題だらけのクラスの1人がトキだった。

「おい、トキ。

お前だけだぞ？進路調査票出していないの」

登校してクラスの扉をくぐり、すぐのことだった。

待ち構えていたようにたたずむ委員長：充（ミツル）。

ヤクザの息子でありながら委員長なんだぜ？

逆らえねぇって……

「いつまでに出せばいいんだ？」

「2日後だ。
じゃなきゃ俺が借金取りヨロシク。
回収に乗り出す」

それは嫌だ。
よって、トキは素直に――

「わかったよ」

「委員長命令だからな？」

最後に念を押して睨むミツル。クラスを出て行こうとした、

「へぇ～」

その時――声がかかった。
ミツルは一人の女性の声に止めた。

その女子とミツルが向き合う。

「何か用事なのか？
え？マイコ」

「いえ。

最近、委員長がどうも命令口調ばかりで、悪印象しか残していない気がして観察していたのよ」

ミツルを止めたのは通称：裏委員長　の麻衣子（マイコ）だ。
女子生徒でありながら頭脳良し、運動抜群、人間の完成度高く、喧嘩もできるという2年3組の女傑だ。

いつもミツルとは真っ向から気が合わないらしいが――
その理由が2人の家系にある。

ミツルの家系は代々やくざ。
マイコの方は昔から警察職。

家系そのものが社会的対立関係にある2人であった。

「トキ君。
どうしても進路が決まらないようなら、私でも相談に乗りますよ。
気軽に声をかけてください」

「あ、はぁ」

あまり会話したことないので返事がぎこちない。

逆にミツルは話し慣れ……
というか、脅され慣れているため、

「くだらねぇ。
男なら自分の進路（人生）くらいテメぇで決めるもんだろ？」

マイコの意見を否定。

（つうか、俺をきっかけに喧嘩するのやめてくれ～！！）

とことん巻き込まれることだけは避けたいのに……
この後、トキは後ろから来たコウボウによって何とか着席へといたった。

朝のホームルームが終わり、クラスの全員が一時間目の科目『体育』に備える。

一時間目から体育って……
とか、最初の頃はそう思った者がほとんどだ。
トキもその1人だったし。

引き篭もってブランクがあるとは言え、もう慣れている。

一時間目から体育？
――仕方ない。やるか――程度のやる気しか起こらないが。

「トキ、元気ないな」

突然、横に現れたのは友樹だった。
後ろからトキの俯き具合を心配して見ていたらしい。

「朝ちょっとしたアクシデントがあってさ」

トキの頭に今朝の光景が……
そういや、まだ耳が少し痛い。

「他校の奴らにケンカ売られたとか？」

「いや、そういう殺伐とした内容じゃないんだ……」

本物とは知らずに拳銃の引き金を軽い気持ちで引いただけ。
引いただけなのに、精神的ダメージは計り知れないほど大きかった。

やっぱり殺伐とした内容なのか悩んだりした。
警察とかに捕まったりしないよな？

「そんな朝から落ち込むなって。
体動かせば悩みも吹き飛ぶださ。な？」

そんなアドバイスを受け――

一時間目開始から１０分。
種目バスケットボールにて、色世　時の後頭部にキラーパスが直撃。
――ＴＨＥ　脳震盪。
保険委員にエスコートされ、早々に退場。

「散々だったね。
そういえば、次の数学で“テスト前テスト”やるみたいだよ？」

休み時間中の会話。
話し相手はクラス内の中立派で２人しかいない女子の１人、智明（ちあき）さん。
トキは必死でアドバイスを聞いた。
次の時間まで１０分も無いという切羽詰まった状況。

そして、テストは開始。
授業時間の前半で回答、後半で答え合わせという方式だ。

テスト終了。

結果――３６点。

「……」

あんぐり。
解答欄に空白は無い。
が、答えがズレている。
原因は2問目と3問目。

(同じ答え書いてるし……)

そこから1問ずつずれているが、途中で直っている。
最初と最後に点を取って何とか合格ギリギリライン。

「いや、誰だってミスあるじゃん?
オレもホラ、勉強した割りに５０点代だぞ?」

中立派リーダー、コウボウはトキを励しにやってきた。
中立派でコウボウとトキが６０点アンダー。
崎島さんと友樹は８０点オーバー。
トキはまだ知らないが、智明さんは１００点だったりする。

「結構堪えるな……
余裕でへこめるよ……」

「大丈夫だって。
美味いモンでも喰えば、満腹感と一緒に幸福感も湧いてくるもんだからさ」

時計を確認。
まだ二時間目が終わったばかりだし？

つうか、やっぱり……
ある程度自信がある範囲内のテストでこれだけ酷い点数を取ってしまったんだ。

健全な精神の持ち主なら誰だってへこむさ。

「あれ？
トキ忘れてんのか？」

「何を？」

「次、家庭科実習だぞ？」

――完全忘却！

もちろん、三角巾も前掛けも持ってきていないトキは先生の指導を受けた。

指導を受けた生徒は3人。
トキ、岩井、灘（なだ）さん。
特にトキはこっ酷く言われた。
3人は罰として、先生の誰かに渡してもいいことを条件に、必ず三人分を作るように言われた。

3人分――も作るのか……

原則自分で食べる分以上の物を作ってはいけないという、変なルールがあるこの学校。

嬉しいような……やっぱり、嬉しくない。

「参った」

説教から帰ってきたトキは、大きな溜息をついた。

「すごい条件出されたな」

友樹がおかしそうに言ってくる。

面白くないし、笑えないって……

「他人に助けを求めちゃダメって言っていなかったから、私達も手伝えばいいじゃない」

落ち込むトキに助け舟を出してくれたのは崎島さんだった。

その崎島さんに呼応するように、

「もちろんそのつもりだよ」

コウボウ。

「つうか助けない奴はいないって」

友樹。

「料理は得意だから」

智明。

「大して支障は無いもの」

藍。

ちなみに、この時間のグループ分けの基準は、“息の合ったもの同士”

当然、孤立した奴が出てくる。

自分から群れようとしない岩井なんていい例だ。

そんなアバウトな基準で編成された今回のグループ。

いつもの中立派グループ＋藍、の６人編成。

「ところで藍さん料理得意なの？」

崎島さんからの質問に藍は頷く。
トキは今朝も手伝ったからその腕を知っている。

かなり上手だよ、藍は。

「今回作るモノって？」

説教でメニューを聞き損ねたトキ。

「丼物だって」

コウボウが答えてくれた。
どうでもいいが、家庭科実習で丼物って……

「なに丼つくんの？」

「和風カレー丼は？」

「いいね」

「何入ったっけ？」

「うっ……」

なんて会話の隅でトキは手を洗い始めた。
当たり前のことだが、衛生第一。料理作りの基本だ。

「バリエーションで攻める？」

5人の会話が軽く路線を外れた。
一体、何を攻めるんだよ……ったく。

「じゃあ、3種類、二人一組でやろうか？」

「あくまで“二人一組で一品がベース”ということでね」

コウボウの提案に崎島さんが補足する。
そして決まったペアとメニューが次の通りだ

1．コウボウ&藍：和風カレー丼
2．崎島さん&友樹：焼肉丼
3．トキ&智明：山菜から揚げ丼

である。
正直、焼肉丼はナシだろうとトキは思った。

――焼いて、乗せるだけだぜ？
どんな料理下手な奴でも作れるじゃん……

「山菜から揚げって、キノコとかでいいのかな？」

ちなみに、山菜から揚げ丼というネタを提供したのは智明だった。
トキはそんな料理自体知ない。

「うん。まぁ、野菜中心。
真ん中に鳥の唐揚げとあんかけをちょこん、っと乗せれば完――
……」

その時――

ゴッ――

智明はその音で説明を中断。
何かが顔面横を高速で横切ったのだ。

――ッワン！

「あーっ！！」

悲鳴――じゃなく、叫び声。
その声の主はクラスナンバーワン熱血（？）不曲の宮原。
智明は呆気にとられた。

「避けるな岩井！」

彼女の背後で何かが起こっていた。

“何”が起こったか簡潔に言うとこうなる。
宮原と岩井は同じグループとなり、早速いさかいを起こした。
宮原の凶器攻撃。

喰らえ、ステンレスボール！

岩井はあっさりとそれを回避。
勢いよく飛んでいったボールは智明の耳元をかすり――

トキの顔面を捕らえた。

「災難だったなぁ」

昼休み兼昼食時間。
場所はいつもの溜り場、人気のない特別棟の階段。

いつもの段に腰掛けてそれぞれ昼食をとるいつもの5人。

「もう帰りてぇ……」

鼻血で汚れた制服を気にしつつ、トキは昼食をとる。
午前中に2度もボールという呼称のものからダウンを奪われたトキ。

今朝から耳と目が痛くなる思いをし、学校に来て脅迫じみたことに遭ったり、喧嘩の促進剤にされそうだったり、一時間目から保健室のお世話になったり……

そして、さっきのステンレスボールの顔面直撃。

「なぁ、久々にゲーセン行かないか？」

唐突に友樹が提案した。
コウボウがそれにあっさりとOKを出す。
人の話を聞いているんですか？

「久々だからいいわよ」

崎島さんもOK。

その横で智明もうなずいている。
気晴らしに行こうというハラだろう。

「おごってやるからさ、トキも行かないか？」

（ゲーセンかぁ～…）

「いや、強制連行だろ？」

ｂｙコウボウ。

って、何ですとっ！？

「はい決定～」

（む～……
……ま、いっかな？）

どうにでもなれ！
という自暴自棄までは行かないが、トキの中である程度の諦めがついていることは間違いない。

5、6時間目ともに何事もなく終わりを迎えることのできたトキ。
そして、放課後がやってきた。

「はい？」

ある人物によるある一言でトキの顔は引きつった。

「ちょっとツラ貸せ」

その人物こそ、クラスで最も腕が立ち、かつ絶対敵にまわしたくない男。
キリングマシーン岩井。
岩井は玄関でトキを待っていたのだ。

「あの、さ……
俺、ちょっと用事あるんだけど――」

「俺もお前に用事がある」

そう言われてトキは連行されていった。

（カツアゲ？
サンドバック？
いや、両方か！？）

もちろん、ビビりまくりのトキ。

今すぐセカンドリアルの力を使って逃げ出したい！
でも、いま逃げ出したところで後が面倒になるだけだし……

岩井はトキの首に腕を回して逃げないように抑えていた。
最寄りのトイレに連れ込まれ、トキは覚悟する。

都合よく人気が無く、助けは呼べない……

（耐えろ！オレ！！）

トイレ、外から見えない。
犯罪現場（？）
うってつけ。
やっぱり恐喝？

さまざまな思考がトキの頭を駆け巡った。

「ちょっと聞きたいんだが……」

（財布の中身か！？）

「他人に言うなよ」

ドスの利いた声で脅すように言ってくる岩井。

嗚呼、恐喝か……

それを覚悟した瞬間。

ツイているのかツイていないのかわからないが、トキの予想は外れることになった。

「秋森って、彼氏いる？」

「――……智明？」

「おう。

秋森智明……さんに」

岩井は小声でそれを聞いた。

初めて見る岩井の赤面。

（マジか？岩井が――）

一息飲んで、試しに聞いてみる。

「ほ……惚れてんのか？」

殴られてもおかしくない質問だったが、トキは聞いた。
意外以外の何者でもない。

「おぅ」

超小声。

「で、いるのか？」

「いや、居ないはず……！」

意外な一面にトキまで赤面してきた。
つうか、何でオレに聞くんだ？という本音を口にしてみる。もちろん、半ば敬語で。

「お前が一番聞きやすいから」

その後岩井は、聞いといて失礼だと思うが。

と付け足した。

トキは、ゲーセンまでの道の半分のところでコウボウたち（中立派メンバー＋藍）に追いついた。

「おっ！
無事で帰ってきたよ」

「何だよ……無傷じゃ悪いのか？」

友樹や崎島さんは心配していたらしい。
持つべきものは『友』、とはよく言うが――
トキは今ならその言葉に納得できる。

「で、結局藍も一緒に行くんだな？」

「悪い？」

「いや、別に」

トキから見てもわかるように、今の藍はものすごい上機嫌だ。
と、友樹が奇襲。

「そういや、お前ら一緒に住んでいるんだって？」

にやけながらの質問。

コイツ……どこでそんな情報手に入れたんだ？

「へぇ～。どおりで朝一緒にいることが多いわけだ」

コウボウは納得。

まぁ、コウボウはこういう奴だし。

面白い情報以外あまりリアクションを見せない。当たり前といったら当たり前な奴なんだが……

「どこで手に入れた情報なんだ？」

「私がそれらしい話を聞いたの」

崎島さん自首……じゃなくて、挙手。

「そういえば、トキの家工事してたもんね」

智明の台詞が終わると同時、目的のゲーセンが皆の視界に飛び込

んだ。

去年。
クラス内の抗争から逃れてきた5人が偶然居合わせた場所。
中立派成立の場所。
それがこのゲーセンだった。

店名：『バーテックス』

「うわぁ～
やっぱり配置変わっているよ」

入店した6人。
さっそくコウボウがそうこぼした。

「アレやんねぇか？」

そう言って友樹がクレーンゲームの前に立った。
女子三名は賛成。

トキとコウボウだけが別のゲームに目が行っていることに気づいたのは、藍だけだった。

「シューティング行くか」

「行きますか～」

2人が選んだのはありきたりなシューティングゲーム。
画面に向かって銃の形をしたコントローラーを向けるタイプのアレ。

「久々だなぁ～」

「これの前作は糞だったな」

「いや、コウボウが下手なだけじゃん？」

そんな会話を繰り広げつつ……
トキ、第一ステージでゲームオーバー。

「いや、ほら。
久々だしさ――」

苦しい言い訳。

「まぁ、家庭で使えるコントローラーじゃないしな」

「格げーでも行っとく？」

トキは次のゲームを指名。
コウボウは肯定し、移動を始める。

その途中、いまだクレーンゲームで快勝・快進撃を続ける友樹の姿が映った。

（あいつ、何個取ってんだ！？）

見た感じ軽く１０個オーバー。
カバンに入らないのか、制服の後ろ襟にぬいぐるみを突っ込んでいやがる。

「あいつあんなにクレーンうまかったっけ？」

「……さぁ？」

さすがのコウボウもこれには驚いていた。

「アレ？」

藍と智明は完全ブルーになっているトキを目撃した。
自販機の前のベンチに腰掛け、下を向いている。

矢〇〇ョー……のコーナーリングでかの有名な台詞を吐いた時と同じ姿勢。

「どうしたの？」

「……全敗だ」

「うん？」

つまり、どんなゲームをやっても全戦全敗のトキであった！

鬱憤晴らしに来ているのに、逆にブルーになっているのだ。

「とことんついていない日ね」

「うわぁ～」

２人はトキに同情しつつ、次のコメントを考えた。

（飲み物でもおごった方がいいかなぁ？）

（何かのゲームに付き合うべきか……）

「トキ、ＤＯＲやらねぇ？」

第三者介入。

奇襲が得意なのか、友樹という男はいつも突然割って入ってくるのだ。

「……」

無言で立ち上がり、トキは友樹についていった。

トキの背中を見守る智明は、

「涙目だったよ？」

とりあえず藍に報告した。

ＤＯＲ

某社が開発した音にあわせてステップを踏む、あのゲームだ。

「これも久々だろ？
だからさ、ライトレベルでいいよな？」

「――……」

「曲、なんにする？
ほら、スネてないで選べって」

精神的に疲弊しきったトキはジェスチャーで伝える。
お任せします、と。

そんなトキを見て……

（誘ったの失敗だったかな？）

友樹は少し後悔した。

だが、曲が終わるのと同時、トキは完全復活を遂げていた。

「ト、ＡＡＡ……だと？」

結果表示画面で友樹は唖然。

このゲームには、判定というものがある。

上からＡＡＡ、ＡＡ、Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄ、Ｅ、Ｆ

画面下から現れる矢印を、タイミングよく足で踏めばポイントが加算。曲が終わった時点でその総計が算出される。

ポイントの加算は『ひとつの矢印をどれだけタイミングよく捉え、踏むことが出来るか』によって左右される。

その基準は７段階。

高得点がマーヴェラス、最悪の場合、つまり目で追いつけずに見逃した場合はミス。

トキの総合判定：ＡＡＡ

それが、どれだけ難しいか友樹は知っていた。

判定基準のうち、『マーベラス』か『パーフェクト』以外の判定を一つでも出してはいけない。

それが、ＡＡＡ判定を出すための絶対条件だった。

「まぁ、ライトレベルだし……」

レベルを変更しつつ次を選曲。

「おしっ！
次、“パラ〇イア”だ！」

張り切って宣言する友樹。
実は少し悔しがっているのだ。

なぜ、引きこもっていたトキは息ひとつ切らしていないんだ？
かつＡＡＡだし……

そして、気付けばトキはレベルを上げていた。
『楽』から『激』へ。
一気に2ランク上げた。

「パラ〇イアって？」

ギャラリーとなっているコウボウへの質問。

「Ｄ〇Ｒのボス曲のひとつだよ。
ていうか、初代ボス曲？
シリーズも意外と多くあるんだ」

解説の途中で音楽がスタート。
結果から言えば、曲が終了する前に勝敗はハッキリとしていた。

トキの圧勝。
パラ○イアは、トキの得意曲でもあったので無理もない。

「強ぇ……な」

信じがたい光景に直面した友樹は、半ば放心状態に陥っていた。
少なくとも、このゲームで敗れまいという自信はあったし、今も自己記録を上回る記録を出したというのに……
それでも、トキは友樹の上を行った。

「オレはまたＵＦＯやってくるよ」

友樹とコウボウで選手交代。

「うわぁ、やべぇ久々！
クリアできっかなオレ？」

僅かなギャラリーが、ゲーム機の周辺に集まった。
他人に見られているからか、妙にコウボウのテンションが高い。

「じゃあ、“Ｓ○○ＵＲＡ”で！」

いきなりボス曲を選択するコウボウ。
見知らぬギャラリーが聞く。

「S○○URAって？」

そして見知らぬギャラリーが応える。

「和風ボスだよ」

そんなボス曲に挑んだトキとコウボウの結果は
トキ、AA（激）
コウボウ、B（踊）
また、トキの勝ち。

「スゲェな！調子いいじゃん？」

コウボウ1曲終わっただけなのに完全燃焼。
額に水玉浮かべさせつつ、満面の笑顔。

「バーサス、いいかしら？」

いきなり乱入。

トキは名も知らぬ女性との対戦を承諾。

その頃、藍はクレーンゲームで惨敗を喫していた。

（何故取れない？）

更に2度挑戦し、結局一つも景品を手にすることができず、諦めてトキらに合流しようと店内を探し歩いた。

トキと見知らぬ女性は接戦を繰り広げていた。

お互い一勝一敗。

期せずして3本勝負。

「時間ないからラストはコレね」

女性の方から指定。

（ＭＡ〇３０〇

よし、得意曲！）

意気込むまでは良かった。

D〇Rの正統派ボス！

それが今から二人が挑む曲だ。

結果……

（嘘だろ！？）

トキ、ＡＡ（激）

見知らぬ女性、ＡＡＡ（激）

トキの完敗である。

その時、藍はギャラリーに囲まれているトキを見つけた。

（盛り上がっ――え？）

「君うまいのね」

「どうも」

少し拗ねた風に答えたトキに、見知らぬ女性は笑顔で言った。

「それじゃあ、これで。

また後で戦いましょ」

もう2度とやらねぇ……
――そう決意するトキだった。

得意曲での敗北。
再びブルーになる精神面。
必死に上げようとしたが、無理だ。

（疲れた～）

体力の限界、精神的な限界。

いますぐにでも寝たい気分――不貞寝する奴の気持ちがわかるというものだ。
人はこうして不貞寝をするのかと考えつつ、トキはベンチへ向かった。

（あれ？藍）

ベンチに座り込んだトキの目に、藍の背中が飛び込んだ。
ゲームセンターの出入り口を出て、左右に首を振っている。

（珍しいな）

普段、藍は1人で行動を起こすことはしない。
芹真に“トキを見守れ”と言われていることを知らないトキだが、薄々気付いていた。

（藍はオレを監視……
いや、初めて会ったときボルトも言っていた通り、護衛していた）

だが、その藍が単独で行動を起こした。

（もしかして、ただごとじゃないのか？）

追いかけようかと一瞬悩み――
無理です。疲労で動きたくありません。
脳の“命令／本能”に従い、ベンチに座り続けるトキだった。

「で、藍さんがどこに言ったのかさえ聞かなかったわけ？」

詰問調で聞く崎島さんに、小さくなっているトキ。
再びブルーになってしまったトキを励まそうとする智明。
コウボウは面白そうに会話を聞き、友樹はハラハラドキドキ右往

左往。

「全く……
もし何か問題に巻き込まれていたら大変でしょ？」

崎島さんの説教に何も言い返せないトキは、自分の薄情さにもショックを受けた。
自分の事ばかり考え、他人に対してぞんざいになっている。

（でも、アイツは1人でも大丈夫だろ）

芹真事務所のＳＲ。

たしかフィングは、鬼の姫とも言っていた。
鬼のように強いという意味か？

そのまんま鬼のＳＲなのか？

（そういや、金棒持っていたしなぁ）

鬼のＳＲなのだろう。

もし事件に巻き込まれたら？
それでも彼女は生還するだろうという予感がした。

根拠は無いが。

「人が社会を作るのは、人は単独では何もすることが出来ないからなのよ？」

（おぉ、説教が始まった）
（止めなきゃ……）
（説教始めちゃったよ～）
（うわぁ、これ以上聞きたくないって時に）

「どんなに頭が良くても、1人じゃ何も出来ない。
どんなに強くても、集団や社会に勝てるはずが無い。
天才も達人も、結局独りだと勝つことは出来ないのよ」

「だから、みんなと一緒に居たほうがいいってのか？」

友樹の反論。
トキは第三者と同じ立場程度に耳を傾けた。

「ええ。
どんなに個人的な局面の回避方法が上手でも、相手が集団となった場合に勝ち目は無いの。
そもそも、勝ち負けとかの問題じゃないけど」

「それじゃあ、人類皆なかよしこよしで固まってろって言っているようなモンじゃないか？」

「――それが、無難なのよ」

「でも、それは偏見じゃないのかな？」

友樹と崎島さんの会話に智明が加わった。

「偏見？」

「うん。
恵理ちゃんもさ、１人にして欲しい時ってない？」

「ない――
……と、言ったら嘘になるけど」

「ね。ほら、誰にでも事情ってあるしさ」

「……確かに」

トキも口を開いた。

事情。

自分は相手の事情を真剣に考えたことはあるのか？
それを考慮してやったことはあるのか？
考慮してから話してるか？

（いつか、藍がオレに刀を付きつけたな……）

「――考えてなかった」

同じ事務所に住みながら、トキは藍のことを全然知らない。

（それなのに軽口ばかり叩くから……）

いまにして思う。

付きつけられた日本刀。

あの時、非は完全に自分の方にあった。

「オレ、藍を探してくるよ。

確か学校方面に走っていくのだけは見た……気がするからさ」

「おう。気をつけろよ」

心の中で“もう終わりかよ”とか思いつつ――

コウボウはあっさりとトキを見送る態度を見せた。

友樹と智明が同時に時間を確認。

「じゃあ、悪いが俺らもここらで帰んないと」

「私はついていくわ。
ちょうど3人ずつの集団下校になるわね」

言い切った以上、それなりの面子もあるし……

「ふぅん。確かに」

「気をつけてね。
それじゃあ、また」

遠ざかる3人をトキと崎島さんは見送り、藍を探すために移動を開始した。
何か、悪い予感がする……

第７話－惨敗！完敗！超連敗トキ！－（後書き）

後、降水確率１００％

第8話－Ｒｉｄｅ　Ｏｕｔ！！－（前書き）

ゲーセンを後にしたトキら。

コウボウ・友樹・智明の３人は先に帰路に着き、トキは崎島恵理と藍を探すことになった。

第8話－Ｒｉｄｅ　Ｏｕｔ！！－

人の善悪に“意味”があるのだろうか？

この質問こそが最大の無意味なのかもしれないが、それでも私は聞くだろう。

『意味はあるのか？』

とある人間はこう答えた。

『考えるだけ無駄だぞ？』

……

（一体どこに……）

夕暮れに賑わう街。

その中で、藍は必死に駆け回っていた。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第８話－

－Ｒｉｄｅ　Ｏｕｔ！！－

「それで、トキ。
本当に藍さんが学校方面に向かって走るのを見ただけ？」

「ああ。見ただけだ」

どこから探そうかと考える崎島さん。

トキは迷わずに携帯電話を取り出し、ダイヤルボタン。

「あ、芹真さん。
ボルトいます？代わってもらえませんか？」

『何で？』

「珍しく藍が1人でどっか行っちゃったもんで……」

『藍が？
ってことは、何かあるな』

「え？」

『トキ。今1人か？』

「いや、友達と一緒です。
ゲーセンの帰りで、藍を追おうと思って」

『友達か。
なら協会のセカンドリアルも下手に手は出さないな。
どうでもいいが気をつけろよ？』

その後、芹真さんはボルトに代わった。

『藍ちゃんの居場所？』

「わかるか？」

『“なびげーしょん”を付けておいたってことにしてちょうだいね』

何のことか最初は分からなかった。
それが言い訳だと気付くまで数秒。

言い訳まで作ってくれたボルトに感謝の念を込めつつ、藍の居場所を聞く。

『え～、っと。
あ、みっけ♪
ん～……』

「ドコなんだ？」

『止まったり、走ったりしてる』

「走る？」

『ここは……
古いパなんとかっていうお店の駐車場』

「パ？？
……パチンコ屋？」

『うん。それ！
トキの方から見て直進６００メートルちょい。
それで、交差点を右に曲がったトコ』

「わかった。ありがと」

『あ、ねぇ。トキ』

「はい？」

『帰りアイス買ってきてちょうだい。ダメ？』

「余裕があったら買うよ」

『本当！楽しみにしているからね』

電話の向こうにいるボルトの笑顔がわかってしまう自分は何なんだ？

『気をつけろよ』

いきなり代わった芹真さん。
気を付けろって言われても……
とか思いつつ、

「わかったの？」

携帯を切りながら、間髪入れず質問してきた崎島さんに答える。

「ああ。
古いパチンコ店の辺りにいるらしい」

「この街の？
ということは学校方面には2箇所あるけど、どっちかってことね？」

ボルトは右と言っていた。

ここから真っ直ぐ行って、右の河川近くにあるパチンコ店と……
反対側、左は商店街の近くにあるパチンコ店。

どちらも古い。
ボルトの言っていたパチンコ店は、つい最近つぶれたばかりだ。

「どっちから行くの？」

考える素振りを見せ、トキは芹真の言葉の意味を考えた。

“協会も下手に手を出せない”

それは、一般人の崎島さんが一緒に居るからだろう。
もし、ここで二手に分かれたら、敵が来るのか？
芹真さんが何かある、と言っていたくらいだ。

協会が来たっておかしくない。
もしかしたら、メイトスという可能性もある。

（一緒に行くべきか……）

だが、それでも襲ってきたら？

崎島さんをセカンドリアルの世界に巻き込んでしまったら？
最悪の場合、命を落とすことになったら？

そう考えると、二手に分かれるべきだろうという結論に至ってしまう。

（どうすればいい？）

時間が惜しい。
崎島さんを優先するか、自分を優先するか。

（……自分？）

ふと、つい先ほどの智明の言葉が浮かんだ。

“誰にだって事情はある”

そうだ。

藍にだって何らかの事情があったかもしれない。

崎島さんにもある。

（自分だけが安全な世界に居ていいのか？）

“新しい刺激や世界、分野を求める”

本当にそう望んだ場合、いつまでも安全な場所に居ていいのか？

留まることが人から進歩を奪い、逆に踏み出すことで進歩を勝ち取ることが出来るのだとしたら……

まして、新しい世界でも“自分だけが非力”な場合。

飛び出さずにはいられない。

トキは決めた。

「じゃあ、オレは河川近くの方を見てみるから、崎島さんは商店街の方を見てくれないかな？」

「二手に別れて探す？」

「そっちの方が手間が省けるだろうし」

「わかった。
トキが先に見つけたら私の携帯に連絡入れて」

「ああ、そっちもな。
あんまり無茶な探し方するなよ」

「こっちの台詞よ」

言って崎島さんは走り去る。
トキは、二手に別れることを選んだ。

（協会は、何の関係の無い人まで平気で巻き込むとかって、昨日芹真さんが言っていた……）

だから、別れた。

一緒に居て襲われるくらいなら、最初から1人で居るほうがいい。
もし、襲ってきたとしても逃げることくらいは出来るだろう。

誰にだって乗り越えなければならない時や場合が訪れる。
それがいま訪れたのだ。

トキは自分にそう言い聞かせた。

「ふぅー」

深呼吸を数回。

酸素の供給が行渡ったところで、脳を使って状況を整理してみる。

（藍は何も言わずに走り出した。学校方面。
ボルトの話だと、これから行く駐車場に藍はいる。
だが、いつまでそこに居るのかわからない）

時間がない。

早いうちに追いつかないといけない。
また移動して見失ってしまう、何ていう事態は避けなければ。

途中で色々と考えることにした。
走り出していきなりおっかない人にぶつかりゴメンナサイ。

（そういや、フィングが言ってたな。
藍にも辛い時があったって……
やっぱり、誰にでも不幸は訪れるものなのか）

当たり前としか思えないことなど考えつつ、交差点。

信号無視。
危うく撥ねられそうになったが無事通過。

（鬼のセカンドリアルだって……）

歩道橋。
踏み外しそうになったが、何とか踏みとどまった。

様々な考えに頭を回している内に、目的地が目に入った。

（まだいるかな？）

息を切らせながらスピードを落とし、フェンスの外側から駐車場の敷地内に目を配る。

つぶれた店の割りに停めてある車の数は多かった。
多いというか、ほぼ満席ご免状態だ。

（この中に――）

到着と同時に、それは響いた。

ガラスの砕ける音。

それを聞いたトキは、呼吸が整う前に再び駐車場内入り口へと走り出していた。
少し早く起こった安堵は完全に消え去り、嫌な予感が頭をよぎる。

（まさか、昨日の今日で戦闘しているんじゃないよな！？）

アヌビス戦。

また、藍は誰かと戦っているのか？
それとも、今のガラスの音は偶然か？

つぶれた古い店だ。
誰かが侵入しようとしてもおかしくない。
誰かが悪戯でガラスを割っている可能性だって有り得なくはない。
悪戯でないにしろ、業者の人が解体工事に取り組んでいるのかもしれない。

偶然か？
戦闘か？
鼓動が速まる。
この先にある光景は――

戦闘でないことを祈りつつ駐車場内に飛び込んだ時、すぐに藍は見つかった。

「藍！」

見つかったが――
なぜ、その金棒（理壊双焔破界）を握っているのか理解できない。
というより、したくなかった。

「トキ！？
どうして！」

「何やってんだよ藍。こんな所で？」

駆け寄り、質問した。
だが、返答はせず、周囲を警戒している。

「いますぐココから逃げて」

帰ってきたその言葉に、心の中で答えが出た。

偶然じゃない。
戦闘が起きている。

だが、相手が何なのか分からない。姿が見えない。
もしかして、ただの喧嘩？

「何から逃げるんだよ？

ほら、帰ろう。崎島さん心配していたぞ？」

それでも気付かないフリをする。
この時、すでに説得するのは無理だろうと言う回答がトキの中で出ていた。

「協会のＳＲ（セカンドリアル）がいるのよ」

予想通りの回答。
同時に認めたくない返答。
その言葉にトキは混乱した。

『協会』
さすがに演技を続ける気にはなれなかった。

「どうしてだよ？」

藍に背中をあずけ、周囲に目を配る。

冷静に見回してみれば、辺りには駐められた車だけが物静かに並んでいるだけで、動くもの一つない。
通行人や鳥、猫、犬などの気配、姿さえ見えない。
天候の所為かも知れない。
頭上は今にも雨が落ちてきそうな曇り空。

だが天候の所為とは思えない。
人払い。

「藍を狙っているのか？」

「いえ。
私が彼を狙っているの」

「藍が？」

「そう」

藍にとって、いま対峙している敵は絶対に許すことの出来ない者の1人である。
必ず自分が倒さなければいけない。
恐ろしいほど強く、自分の“死”に関心を抱かない。
そんな相手。

「じゃあ、オレは……」

「出来たら、関わらないで」

速攻拒否。

誰にもこの戦いを邪魔されたくない。

それが藍の発言の理由だ。

だがトキは、一刻も早く崎島さんと合流して厄介ごとを回避したい。

崎島さんの事だ。

自分の担当エリアの探索が終わり次第、携帯に連絡を入れてこちらに向かってくる可能性が高いのだが、それだけは絶対に避けたい。

セカンドリアルの世界に関わりを持ってしまう。

「何でダメなんだよ？」

「ねぇ、トキ。

どうしても“コレだけは自分で成し遂げたい事”って、ない？」

目的意識。

自分に課せられた責任。

自分で課した使命。

トキにも分からなくは無かった。

自分でしなければいけない事。

することが当たり前の事。

どうしても譲れない何か。

「無くはない」

「コイツを殺すこと。
それが、私がアサ兄たちに誓ったこと」

（あさ兄？お兄さん？）

カキッ

ガラスが踏まれる音。
２人は警戒する。

「トキ。力の限りこのエリアを逃げ続けて。
そうすれば、奴は下手に攻撃を仕掛けてこないから」

ゴッ

天井かボンネットを蹴る音。

何かが２人の周囲を移動している。
そこから何が予想……

予想する間もなく、それは飛んできた。

「トキっ！」

（っ車ぁ！？）

急襲！

その瞬間、トキの力は無意識のうちに発動していた。

スローモーションで飛来する４ドア車。

目に映る車底部。

胸元に衝撃が走る。

藍が突き飛ばしたおかげで車との衝突は免れた。

「走っ…！」

車の飛翔に伴う音。

藍の台詞がトキの耳に飛び込むと同時、視界にソイツが飛び込んだ。

（ボンネットに張り付いている！）

ソイツの手に握られた、槍。

「はぁっ！」

その先端が藍に襲い掛かる。
鋭い突きを、藍は片手の理壊双焔で弾き防ぐ。

「こ……！」

もう片方の理壊双焔で反撃に出る。

横一閃。

理壊双焔が車のボンネットに打ち込まれ、余りある破壊力で車は不自然に吹き飛んだ。

「のぉ！！」

理壊双焔による４度の打撃。
ソイツは全てを躱わすか、捌くかして距離を取った。

「誰だテメェ！！」

いきなりトキへの質問が飛び出した。

「彼は無関係よ！」

「じゃあ、何でお前の結界に入ってこれた！？」

「お前こそ誰なんだ！
剣山頭！」

3人同時に沈黙。
それぞれの間を風が吹き抜け、時間帯と天候の影響で周囲が暗み始める。

「へぇ？
もしかして、あの時のガキか？
アリえねぇがそいつ以外考えられないしなぁ。いや、可能性は……」

独り言の後、

「お前、色世　時だろ？」

「そうだよ。
指差すな」

「トキ。アイツは協会のＳＲ、トウコツ。
“四凶のセカンドリアル”の1人で、協会の中でも単純且つ、極

めて危険な男よ」

「単純は無いだろ？
せめて“猛者”って言ってくれよ」

トキの目で確認したトウコツの武器。

まず、両手で握った槍。
背負っている４本のソード。
両足の太腿に巻かれているホルスター、そこに納まるハンドガン。

（うわっ……重装備）

ヤバイ、マジでやばい！
誰か警察……いや、自衛隊呼んで来い！！
アレを相手にする。
そうわかった瞬間から諦めモード。
つうか、あんなの相手に出来るか！

直接戦うわけじゃないことをすっかり忘れている結果である。

「トキ。
今朝の銃持ってきてるよね？」

確かにある。鞄の底。

だが、取り出す暇はあるか？
あんな重装備の奴相手にしたくない。どっちかというと逃げたい。

「これで会うのは……」

こちらの気持ちにお構いなく槍を構え、トウコツはトキに言った。

そのトキの前に藍が立つ。
急いで銃を取り出せ。

無言でそれを伝え……たかったのだが、トキはその意図に気付かなかった。

「何であんなのが日本に入ってこれるんだよ？」

「いいから！
早く銃を取りなさい！」

檄を飛ばされトキは鞄をひっくり返す勢いで銃を探し、手に取る。

キンバーコンパクトと、スプリングフィールドＸＤ。
最初に手に入ったのはスプリングフィールド！

「２度目だなぁ！
トキ！」

同時、トウコツの斬撃が襲い掛かる。
装備の多さにも関わらず、見失うほど素早い動きだった。

打ち下ろし！

横薙ぎに槍を弾く。

トウコツは素早く後退した。

（……なに？）

トキが銃口を向ける姿に警戒したのだ。

しかし、トキは引き金を引かなかった。
トウコツの言葉が気になったのだ。

下手に撃たない。
さっき藍と約束したばかりだ。
それに、引き金を引くことに抵抗が……

「いまこの空間には結界が張ってあるから、気にせず撃って。
誰もこの結界内で起きていることに気付くことはないから」

もちろん、“自分の身に危険が迫った時に限って”だが。

そう付け加えたかったが、そんな余裕は無さそうだ。

「本当か？」

返答はしたものの、ほとんどカラ返事に近かった。

トウコツの言葉“会うのは、２度目”
その言葉は、心理戦へと引きずり込むためのものなのか気になっていた。

トキはトウコツに遭った記憶を持ち合わせていない。
ということは、遠くから監視されていた？

「トキ。
トウコツ自身が言っていた“猛者”ってのは確かだから、いちいち惑わされないで！」

トキの動揺に気付いた藍が言った。

「戦い慣れているから、変な言葉に惑わされないで。
こっちが命を落とすことになるわよ」

その言葉がトキを正常へ……
勇気付けてくれた（逃げ続けるため）。

心理戦へと誘導する言葉だと確信した。

「けど、生身であることに変わりは無いわ。
急所さえ突けば、トキでも倒すことが出来る。けど……」

「手を出すな、ってんだろ？」

コクンと頷く藍。
その時、トキは気付いた。

（あれ？
デコから……）

いつぞかのように、藍の額に不自然な膨らみが出来て……
その時、トウコツが突っ込んだ。

「はぁあ！！」

「だから、離れて！」

理壊双焔破界と槍がぶつかり合う。

一合、二合、三合！

四合目、槍の先端がトキの前髪を掠める。
六合目と同時、藍は別の動きを見せた。

「二段：朝顔（あさがお）！」

オリジナル陰陽術もどき、華創実誕幻の発動。
二段：朝顔の効果『光』
閃光が生じる。

「ちっ！」

トウコツは再び距離を取る。
僅かな光が目を焼いた。

「一段：柳（やなぎ）！
：菖蒲（しょうぶ）！」

間髪居れず、次の術が発動された。

一段：柳。
その効果は『実像』
逆に、菖は『虚像』

そこから生まれたモノがトウコツに迫る。

（コレか！
フィングの言っていた術は！）

トウコツの頭では藍に関する情報が目まぐるしく駆け巡った。
鬼の中でも特別な意味で強く、あらゆるセカンドリアルを畏怖させたという藍。

鬼でありながら陰陽術を使えるという矛盾した存在。

（分身か！）

トウコツに迫る４つのそれは、紛れもなく藍の姿をしていた。

最初の“朝顔”で放たれた光を集約し、実体……質量を持たせたモノが２体。
これが“柳”より作り出されたモノ。

外見だけで質量を持たないモノが“菖”で作り出されたモノだ。
これも２体。

（本体はあそこか！）

トウコツは迷わず槍を投げつけ、藍は難なく躱わす。

代わりにトキのこめかみをギリギリで通過し、車に刺さった。

「三段‥」

（（まだやるのか！？））

トキとトウコツ、同時に思うのだった。

１０秒以内で２つ以上の術の発動。
ここまで連続できるものなのか？

魔法使いや陰陽師と戦ったことのあるトウコツからすればこれは驚くほかに無かった。
大抵の魔法使いやその類のＳＲは、一度の魔法で消費する魔力の量、制御の難しさから連続攻撃が難しい。

下手をすれば術が暴発する恐れがあるため、協会でそれらを解消・解決するための研究・研鑽が日夜続けられている。

陰陽術となると、術式・布陣の完成や魔力の供給量、配分・コントロールにより精密さを要求される。

だから、小道具などで補い、術を確実に成功させる陰陽師が大多数を占めるのだ。

（それなのに、コイツは正式な補助道具一切なし！
金棒２本だけ！）

第1、コイツ（藍）は鬼であって陰陽師ではない！

トキはここまで連続して使うのを初めて見た。

最初に目撃した時はもっと間隔をあけて術を使っていたが、目の前で行われる術の使用速度がものすごく速い。

いや、使用速度というより、使用間隔……それが短い。

（待てよ！

そういや魔法使いにも例外は居たな！）

ＳＲの世界での有名な話。

魔法使い達の間で難題とされる魔術の使用間隔。

そんな魔法使い達の常識を、まるで呼吸でもするかのようにあっさりと覆す2人の黒白の魔女。

そんな話を思い出しながら左右、後方からの虚像と実像の攻撃を躱わし、背中のソード2本を手に取るトウコツ。

（こいつも同じくらい強くなっているか！？）

トウコツの顔が笑顔へと変わってゆく。

嬉しくてたまらない。

協会内で、強い自分の相手が務まる者がいない。

皆、ルールだ何だと抜かして戦いを避ける。
中でも特に伯爵が気に入らない。
協会内の腕が立つことで有名なドラキュラ伯爵。
だが、奴は自分を毛嫌いし、話しかけてくることもなければ、近付いてくることもない。

戦う相手が欲しい。が、現実には居ない。

そんなつまらない世界がトウコツは嫌いだった。
皆なにがしか理由をつけて逃げ回っているようにしか見えない。

おかしいのは自分か？世界か？
本気になって考えたところでどうしようもない疑問。

しかし、今は目の前に敵が、相手がいる。
自分を殺そうと言う敵が。

（コイツならオレを楽しませる！）

勝敗、生死。
そんなものに興味はない。
とにかく戦い続けることが存在理由だと、トウコツはいつも自分に言い聞かせている。
そうする限り、誰が相手でも楽しむことが出来るからだ。

「蒲公英（たんぽぽ）！」

華創実誕幻、三段：蒲公英。
効果：無限召還。

次の瞬間、四方から迫る４体のコピーが一気に増えた。

４体から８体。
８体から２０体。
２０体から９０体。
そして、１００を超える。

駐車場の半分近くが藍のコピーで埋まった。

「いいねぇ！
上等、上出来、かかって来い！！」

トウコツは突っ込んだ。

コピーとは言え、その半分近くは質量を持ち、本物の攻撃を繰り出すことが出来る。
しかも、藍が生んだコピーは実像・虚像問わず、全員が金棒装備。
一撃が命取りになる威力を持っている。
だが、それはトウコツも同じ。

一閃！

トウコツの斬撃速度は恐ろしく速く正確なものだった。
一撃で３、４体のコピー体を切り伏せ、消滅させてしまう。

「おらおらっ！
本物はドコ行ったぁ！！」

足場を車の上に変え、上空から迫るコピー体を迎撃。

コピー体の１人が金棒で車を叩き潰した。
トウコツは隣の車へ飛び移り、コピー体撃退を続行。
再びコピー体が車を破壊。足元から迫る金棒、削られる天井。
攻撃を避け、トウコツは飛翔。

十数メートル離れた車の屋根まで飛び移る。

「一段：菫（すみれ）」

それにあわせて藍は次の術を発動。

重量変化。

トウコツが着地した車は、着地と同時に異様な変形を遂げる。

（うおっ！
つぶれた！？）

見えないハンマーが上から振り下ろされたかのような潰れ様。
体勢を崩すトウコツに１０体のコピー体が襲い掛かる。

（だが、いくら術の間隔が短ろうが…！）

トウコツはソードの１本を圧壊した車に突き立て、崩れる体勢を支えた。
そこに金棒が迫る。

（え、避けない！？）

異様な光景がトキの目に飛び込んだ。

トウコツは体勢を支え、すぐ反撃に出ると思われた。
が、出なかった。
金棒がトウコツの体を打ち込まれる。

一つ、二つ、三つ！
四度目の打撃が迫ろうというところで反撃に出た。

「ノーダメージ！？」

反撃に移ったトウコツは無傷。

笑顔が陰ってさえいなかった。

1本のソードを投げ放つトウコツ。

異常な速度で飛来したソードがコピー体を容赦なく貫き、何十体か巻き込んだ後、車に刺さって停止した。

車はソードの突き刺さった反動・衝撃で90度転がり、車底部を見せていた。

その間、トウコツは開いた手にハンドガンを握った。

ガガンッ！

的確な銃撃、百発百中。

1発目で横転した車の燃料タンクに穴を開け、2発目で着火。

爆風に巻き込まれなかったトキだが、爆音と爆風で鼓膜が痛い目を見た。

（つうか、これ絶対外の人たち気づくって！）

だが、そんなトキの予想が当たることは無かった。

「ダァラァァッ！」

上段、下段の打撃を同時に防ぎ、ただ単純な腕力だけでコピー体を弾き飛ばす。
頭突き、斬撃、回し蹴り、斬撃、銃撃、打撃……
トウコツのあらゆる動きには無駄がなく、１００を越えるコピー体が次々と減り続けた。

「ぜぇい！！」

車を破壊。上に乗っていたコピー体がバランスを崩す。
回避。同士討ちを誘い、そこへ更に自分の斬撃と銃撃を加える。
発頚。掌底にのせて打ち込み、コピー体を吹き飛ばす。
更に車も吹き飛ばしてコピー体を押しつぶす。
気功。コピー体の打撃を無効化。
そして反撃。

（つ、強ぇ！）

徒手、武装術、環境利用。
あらゆる方法で藍のコピー体は次々と消されていく。
そんなトウコツにトキは震えた。

（本当に生身なのか！？）

「茨（いばら）！」

藍の術も容赦なく襲い掛かる。
召還されたツルは虚像という死角から、虚像ごと貫いてトウコツに襲い掛かった。が、

「バレバレェッ！」

数本のツルがいとも簡単に切り落とされる。
さらにコピー体の首が数個、宙に舞った。

「二段、上：芙蓉（ふよう）」

今度は突風がトウコツに襲い掛かる。
コピー体が浮く。
その突風に質量の軽いコピー体が乗って、攻撃を仕掛けた。

「やるな！
だが、ヌルいっ！」

トウコツは1本のソードを地面に突き刺して体勢を維持。
残る片腕でコピー体による特攻を全て防いだ。

と、急に風が止む。

「一段：桜（さくら）」

突風に乗ったコピー体の攻撃はフェイクで、こちらが本命！

（まだ知らない術！）

ビチッ

直後、トウコツは手におぞましい感触を覚えた。
体勢を保つために地面に突き刺し左手のソード。

それが藍の術だと気付いた時、ソードは使い物にならくなっていた。

「何だこりゃ！？」

（剣が地面に飲まれているのか！？）

トキとトウコツは同時にその光景に目を奪われる。
ソードは柄だけを地上に覗かせ、その他すべてが地面の中へと消えた。

「侵食効果の桜」

「へぇ、やるじゃん！だが……
お前が本物だぁ！」

トキの視線に気付いたトウコツ。
俯き、独り言を呟く藍に狙いを定める。

全てのコピー体を倒すのも面白い。
だが、本体と比べるとザコもザコ。やはり、本体を攻撃したほうが楽しめる！

４本目のソードを抜き、トウコツは飛翔。
真っ直ぐ藍に向かって飛来した。

「一段：菫（すみれ）」

その瞬間、トキは目撃した。

（結晶の角！？）

藍の額から生える、１本の角。
鬼のセカンドリアル。
藍がそれを開放した確かな瞬間。

そして、再び重量変化。

ただし、さきほどの重量変化とは明らかに違う変化。

（な……！？）

重量変化の上からかかる圧力をプラスとするなら、今度はマイナス。
磁石で言うところの反発。
下から上へ。

飛来するトウコツに真下から乗用車が襲いかかる。

（何ぃ！？）

思わぬ攻撃により、空中で体制を崩される。
視界が回る。
その目まぐるしく回る視界から、トウコツは藍を見失った。

「：椿（つばき）」

今度は、瞬速モード。
トキは付いていった。

スローモーションで空中を舞っているトウコツ。

「二段、上：
芙蓉（ふよう）
鈴蘭（すずらん）」

トウコツに聞こえない術文。
またしても風が通り過ぎる。

（なッ！これは）

たった一度の風。
だが、その風はトウコツの全身に斬撃を刻み、通り過ぎていった。

芙蓉の効果、『風』
そして、鈴蘭の効果、『先鋭』
そこから生まれた風の刃、『カマイタチ』

（こんな芸が出来たのかっ！？）

「三段：」

瞬間、視界に藍が現れた。

「おっ！？」

さすがにトウコツは戸惑った。
いままでずっと遠距離からの攻撃に徹していた藍が一気に距離を詰めた。

（いきなり接近戦！？）

そう予測したトウコツは、ハンドガンに手をかけた。
相手が接近戦で挑んでくる。
自分が最も得意とする戦術を駆使すればいい。

迷いなく取り出すハンドガン。

その威力は、言うまでも無い。
徒手以上の威力、破壊力を期待できる。

いま、藍はノーガード。

「もらっ……！」

だが、藍はそれを完全に予測していた。
藍はハンドガンを握ったトウコツの右手を握り止め、放さない。
鬼の握力。
女性であり、同時に鬼のセカンドリアルである藍。
生身の人間なら握力だけで殺せる自信はあると言っていた。

（やっb……！）

「秋桜（こすもす）」

術の発動と同時、トウコツは掌底を放った。
２人が反発しあうように後ろへ吹き飛ぶ。

（相打ち！？）

トキの心配をよそに、藍はある確信をした。

（通った……）

トウコツの掌底で術に失敗したような感じがあったのだが……手に残るその感触から、術の成功を知った。

その術は――

「あ？
なん！？」

右手の薬指と人差し指の先から感覚が消えてゆく。

だが、それだけじゃない。
その感覚が次第に広がっていくのだ。

（これは！？）

「戸惑ってる？」

トウコツの動揺に気付いた藍。
立ち上がりながらそれを教えた。

「華創実誕幻、三段：秋桜（こすもす）。
その効果は、痺極枝死（ひきょくえし）。

あなたの指先は死んだわけではなく、麻痺の極地にあるだけ。
それでもこの術が心臓か脳に達した時、本当の死が訪れる」

麻痺、極地。
それは、枝のように張り巡らされた人体の様々な組織（血管・筋組織・神経など）を伝って、“心臓か脳の機能停止”という形の死へと誘う術。

それが、秋桜の効果だ。
伝染する麻痺。

指から始まる侵食でも、やがて麻痺は体の中心部である心臓を侵す。
逃れる術は――

「死ぬまでに私を倒せば、私の命と共に術の効果も消える」

トウコツの手からソードが落ちる。
すでに五指全ての感覚が消えているのだ。

ソードを握ることも出来ない。
それが、トウコツを軽い逆幻肢状態へと陥れる。
すでに手首までの感覚が消えている。

混乱。
見えてるのに、無い感覚。

「二段・芙蓉」

3度目の突風がトウコツを襲う。
足元から襲った超強烈な上昇気流はトウコツの体を上空へと運んだ。

（またカマイ……！？）

「天段」

秋桜によって麻痺させられた感覚に戸惑うトウコツ。
すでにろくな判断も下せない。

次の手を読み誤った。

（天段！）

藍は次の術を発動させて見せた。
ゆっくり、トウコツにも聞こえるように宣言。

いつもより、より高密度な力を練り、術へと注ぎ込む。

（やべ――）

両手の理壊双焔破界を地面に突き立て、空中のトウコツへ手を向けた。

「瞳断銃矢（どうだんつつじ）」

閃光、衝撃波、熱。

一筋の光がまばゆい光を放つ。

その巨大な光の矢がトウコツの体を貫いた。

（これ、絶対に外の人たち気付くって！？）

冗談抜きでまばゆい一撃。

つうか、まぶし過ぎ。

結界があるかさえ定かではないのに、これだけ派手な攻撃をして大丈夫なのか！？

さすがに誰か気付いたんじゃないか、と周りを見てみるが、無人。

いつもと変わらぬ騒がしさだけが街中に響いていた。

いつも通り。

本当に何事も無かったかのような静けさ。

トキの不安は杞憂に終わった。

「すげぇ、1人で倒しちまった」

ポツンとそう漏らした。
同時、ポツンと何かがトキの鼻先を叩いた。

（……雨。
降ってきたか）

術の効果が切れたコピー体が次々と消えていく。
すべて消えたところで藍は顔を上げた。

暗い空、黒い雨雲を見つめている。
この空に何を思い、何を感じているのか？
トキはそれを理解する術を知らない。
ただ、目標を達成したことに間違いは無い。

「終わった？」

不意を突くように藍はトキに質問を投げた。
僅かな間を置き、

「あんだけやれば誰だって死ぬんじゃないのか？」

トキの目が地面に突き刺さったままのソードに向いた。

「……」

僅か、雨が強くなり、風も吹き始める。

「帰ろう。
崎島さんもこんな天気で藍を探すために走り回っていることだし」

「彼女が？」

「ああ。
さっきも言ったろ？聞いてなかったか？
もし何かあったらどうするんだ、ってね」

「そう。
後でお礼を言わなくちゃ……」

どこか沈んでいる藍。

「何か気になることでもあるのか？」

たまらずトキは聞いた。
もしや、まだ昨日の傷が痛むのか？
或いは、相当疲れたのか？
いや、そう考えるのが当たり前か……

「昔、私の一族の人たちを殺した時のトウコツは、こんなものじゃなかった気がする」

「殺した時？」

「私は昔トウコツに殺されかけた」

雪辱戦。
そんな気は毛頭ない。

ただ、
仕掛けられた戦争。
仕組まれし政略。
もっともらしい理由……討伐。

戦争し合うように仕向けられていた事実。

「私の一族が芹真さんの人狼族と戦い、勝った。
でも、そのすぐ後に戦犯討伐という理由で私の一族が滅んだ……

その討伐隊に、トウコツがいたの」

未熟な子供（アイ）と、百戦錬磨の猛者（トウコツ）。
勝敗は火を見るより明らかだった。

覆せない完敗。

だが、個人的な敗北よりもすべてを仕組み、いかにもらしい大義名分をかざして討伐に乗り出した協会のやり方そのものが許せない。

その中で、自分を満たすためだけに戦っていたトウコツは特に気に食わない存在だった。

藍は怒りに身を任せ、何十人ものＳＲを撃破したがトウコツに返り討ちにされた。それでも何とか生き延びることができた。

そう。生き延びること。

それが当時、最も優先すべきことと気付いた。まだ対決・復讐する時期じゃない。

必ず協会と敵対する――それは芹真たちと出会って叶った。
そして、次の段階。
当時、討伐に乗り出していた全てのＳＲを殺す。

「一族のほとんどがアイツにやられた」

「でも、今日ソイツを倒せた」

藍は頷く。
だが、どこか浮かない顔であることに変わりはない。
トキは次にどんな言葉をかければいいのか迷った。

自分も親の死を目の当たりにしている。
だから、大切な何かを失う“悲しみと不幸”を凝縮したような、
あの体験の辛さがわかる。
家族を大切にする者にとって避けられぬ不幸。

「やっと、私は……」

「死んだ兄に誓ったことが成就され、開放される。
ってとこか？」

落雷。
それと同時だった。

「えっ！
と、トウコツ！？」

廃車の上で首を鳴らしているトウコツ。

「じゃあ、さっきのは！」

「影武者に決まってんじゃん？
常識だぜ、トキ君。
おかげでじっくり作戦練ることが出来た！」

囮（デコイ）……
今の戦闘で藍の手の内が知られたことになる。
そして、トキが戦力外であることも！

「……トキ。
悪いけど今度は手伝ってもらえない？」

藍がトキに頼んだ。
やはり、自分ひとりでどうにか出来る相手ではなかった。

（いままでので3分の1は消費した）

トキからすれば、藍の台詞は予想だにしていなかったもの。
だが、覚悟はしていた。

「ＯＫ。
出来る限り手伝ってみるよ」

だが、足の震えが止まらない。
藍はそれに気付いたが、あえて声をかけない。
余計な事を言えば、トキまで命を落としかねないからだ。
余計な言葉でいらないミスを生むことは避けたい。

（本物のコイツを倒さないと）

だが、本当に倒せるのか？

トウコツの戦闘スタイルを覚えてたとしても容易に倒せる相手ではないことは分かっている。

さまざまな戦闘法を身につけ、幾千の死地を越えてきた猛者だ。

藍でさえ及ばない、高い域の狡猾さ、闘争心。
その全てを存分に発揮して臨み、遊び楽しむだろう。

「さぁ、オレを倒したいんだろ？
オレも戦いたいんだよ！」

あからさまに戦いを楽しんでいるトウコツ。
落雷がその影を不気味に彩る。
間もなく、雨は土砂降りへと変わり、風も強風へと変化する。

「乗り切って見せるわよ、トキ。
……この嵐ごと」

不敵に笑うトウコツに対し、藍は怒りの表情を見せ……
だが、先手を打ったのはトウコツの方だった。

「いい威勢じゃないかぁ！
なら、とりあえず避けてみろよ」

どこからともなく取り出したそれ。
携帯電話。

トウコツは手携帯電話をダイヤルボタンをワンプッシュし――

直後、爆発が起こった。

たった一度の起爆で、いつの間に仕掛けてられたのかわからない。
仕掛けられた爆薬を全て吹っ飛ばした。

「ト……！！」

藍もトキも、口を開いている暇はなかった。
次々と車が誘爆し、仕舞いには駐車場は火炎で包まれるほど爆発は激しかった。

（くぅっ！
一体どれだけの爆薬が！？）

鼓膜を破らんばかりの轟音。
肌を焼く爆風。

容赦なく襲い掛かる金属、タイヤ、コンクリート。
切り裂いてゆくガラス片。

同時、何かが脳裏を掠める。

（はぁっ、何だ！？
むかし！）

爆風で吹き飛ばされたトキ。
自分の体が空中に舞っている自覚していなかった。
高速で移り行く光景の中、そこに……

（ま、また！？）

一瞬、何かがトキの脳裏を横切った。

その瞬間から、音が消える。

（雨……）

視界の中に黒い空が映り、それを何十秒も眺めているような錯覚に陥る。

景色が、駐車場へと戻る。

爆発が続く。

（車…
爆発…）

その中で、藍に炎上した車が迫っていた。

（あッ！）

爆風に弄ばれ、避けられない――
避ける余裕がない。

間に合わない！

（あぁっ……！）

目に焼きつくその瞬間。
圧し掛かられ、燃え盛る車の下へと消える藍。

訪れる、混乱と恐怖の混合反応。
頭が真っ白に――

無意識に駆け巡るさまざまな情報。
二度目、そして雨。
爆発。
燃える車、すべて燃やす炎。

トウコツ――
セカンドリアル。

『乗り越えるんだ少年。
例え、1人でも……』

誰なのかわからない。
ただ、誰かにそう言われ、死ぬことを拒否したことがあった。

見知らぬ男の声と同時。
トキの中で何かが解け――

「あ”ぁああっ！！！」

異変が起こった。

第8話－Ｒｉｄｅ　Ｏｕｔ！！－（後書き）

――――

その波動が伝わったのは、男の仕事が終わった直後だった。

（やはり、目覚めたか）

山雪を踏みしめながら、男はある方角へ顔を向ける。
遠く、久しく踏み入れなかった島国――

日本。

（まだ初期段階の力でこれ程とは……）

男は早急な準備が必要だと悟った。
なるだけ早いうちに接触する必要がある、と。

（色世　時……）

こうして、メイトスと呼ばれる男は日本に向かうことを決意した。

第9話－SR継承！時間剥奪者（クロノセプター）　トキ！－（前書き）

前がないなら後ろへ。
左がないなら右へ。

そのどちらもダメなら、ちょっと止まって考えてみる。
ほんの1秒で何か違ってしまうかもしれない。

時間と言うのは、過去を創り残し、未来を期待させる力を持っている。

色世　皐（サツキ）。
いまはもう居ない母親が教えてくれた時間の話。

トキはもう、それを覚えてなど……

その考えに至ったのは突然だった。

（思い出せないことは、正しい事なのか？）

わからない……
誰でもいい、少しだけ話に付き合って欲しい。
誰かに聞いてもらわないと、何かが壊れてしまう気がした。

「オレは何に悩んでいるんだ？」

いつしか、自分にそう聞いくようになっていた。
答えなど返ってくるハズもない。

昔、よく話しかけていた母親はすでに他界し、父親とはある意味別居中。
孤独とは、案外身近にあるものだと思った。

（そうか。
もしかして、自分は孤独が恐かったのか？）

結局、どれだけ考えても自分を納得させるような答えが浮かんだ

ことはなかった。

（コウボウ……）

そんな自分の話に彼は真剣に付き合ってくれた。
孤独とは、なりたくてもなれないもの。
彼は家庭での孤立に、日々不安を抱きながら生きていると言った。

（友樹、崎島さん）

出会って間もなく、彼らも同じことを自分に聞いてきた。
思い出せないことは正しいことなのか、と。

自分と同じことを考えていた。
だから、その話に付き合う義務とシンパシーを感じ、お互いに話し合うことを決めた。

（智明……）

３度の火災、２度の肉親との死別、数え切れないほど事故や事件に巻き込まれ、そして望まない呼び名で呼ばれる生活……ｅｔｃ

それは、まるで災禍に付きまとわれている様な不運多き日々。
自分よりも辛い経験を多く乗り越えてきた彼女に、少なからずシ

ンパシーと尊敬の念を抱いた。
どんな不幸に出遭おうと、生きるために必死で乗り越えようとする意思の強い姿勢。
そんな彼女との大きな共通点が、共に母親と別れている事だった。

彼らに出会ったことで自分は、自分で思うほど酷い目には遭っていないと思え、つまらない自己陶酔・自意識の過剰だったと思い知ることが出来た。

『この世界には、学ぶことさえままならない子供たちがいるのよ』

崎島さんはそう言った。

確かに、自分たちよりも過酷な立場にいる人間は世界中に数え切れないほどいる。
彼らと比べれば、自分の不幸なんて塵ほどのものに感じないだろうか？
すべての不幸を忘却できないことが、最大の不幸なんじゃないか？
希望という光明もなく、自分たちが目指すべき道しるべさえ浮かばない。

ならばどうする？

それほど不幸を味わったわけではない者同士が楽しいことも悲しいことも共有できる程の友になれたら――
他人の不幸を理解することができる人間になれたら。

そんな人間を目指してみようと5人は約束し、かけがえの無い親友となっていった。

今のトキには不幸を包み隠さず打ち明けることができる友が居る。

1人暮らしでもさびしくは無い。

そして、本人が気づかないうちに別居中の父も、死別した母親のことも無理に思い出す必要がなくなっていった。

最も、なぜか母親の死別は思い出そうとしても思い出せないものだったが……

PM　17：42

結界内、駐車場で繰り広げられている戦闘が外の人々に気付かれることはない。

が、SR（セカンドリアル）には見えていた。

「アレがトキの力!?」

現場に駆けつけた人物が2人いた。

1人は芹真事務所のボルト。

もう1人はホート・クリーニング店店長のディマ。

魔女2人が、上空から結界内の様子を見下ろしていたのだ。

（私達でも敵うのかしら？）

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第９話－

－ＳＲ継承！
時間剥奪者（クロノセプター）　トキ！－

爆風で吹き飛んだ車が消えた。

そんな理解不能な出来事が駐車場内で起こっていた。

数秒前、トウコツが駐車場のいたるところに仕掛けた爆弾を爆発。

四方から襲い掛かる爆風。

鬼である藍も、爆風の強さにもてあそばれた。

そこに爆発で吹き飛んだ自動車が飛来。

上から全身に圧し掛かった――

その瞬間。

圧力が消え、火炎が消えた。

戸惑いつつも周りを見渡す藍。

異常が続く。

（炎が！？）

次々と消えていく炎。

消えたのは藍に圧し掛かった車の炎だけではなかった。

だが、それだけに留まらない。

「――あ」

空を見上げ、あの光景を再び見ることになった。
それはトキの力――

（何っ！
雨が……！？）

トウコツですら戸惑った。
雨が完全に空中でストップする。

「タイムリーダー」

トキの力が瞬間開放されたことをわかる。
その力を放出している本人は空を仰ぎ、叫び声を上げて続けている。

まだ異常は終わらない。

今度は、トキの周囲の車が次々と消えていく。

次々よパーツごとに消滅し、形状崩壊。
完全消滅。

十数台の車がわずか5秒足らずで完全消滅したのだ。

まだ完全に目覚めていないという話を聞かされていた。
トキはいまココで、目覚めたようだ！

「面白……！」

開口直後、トウコツの背後に衝撃が走った。
打撃による衝撃だと理解するのに一秒もかからない。

（ちっ！後ろかっ！）

先ほどまでトキがいた場所は、無人。
叫び声の終わりと同時にトキは背後に回りこんでいたのだ。

「痒くもない！」

空中で身を翻し、トウコツは銃撃。
トキは再びトウコツの視界から消える。

（コイツの速さは芹真並か！？）

トキの思ってもいない底力に顔がほころぶ。
悪くない。

いや、上出来だ。

こんな奴がまだ居たなんて。
しかもまだ若い。
これからもっと強くなるとしたら……

と、考えながらもしっかりとトキの打撃を防ぐ。

「バレバレェ！」

反撃の拳。
だが、トキはまたしてもトウコツの視界から消えた。

（スピードはあるが――）

トウコツのカウンター。
肘、肋骨。
確信。砕いた感触。

またしてもトキは消る。スピードは全く落ちていない。

四度目の攻撃、またしても背後。
だが、今度は背後の下段攻撃！

「おっ！」

軽く驚かされたトウコツだが、すぐに反撃に出た。
下段突き。
潰れるように突き飛ばされたトキを藍が受け止めた。

「トキ！あまり無茶しないで！」

だが、藍の呼びかけを無視し、トキは再び突っ込んだ。
藍が止めることもできない速度。
正面。トウコツの銃撃を掻い潜り、懐へ。
顎！
しかし、

「特筆すべき　俊敏（はや）さだが、直線的過ぎるんだよ！」

五度目の打撃も防がれたトキは、反撃する間もなく蹴り飛ばされた。

「いい速さ持ってんだ！
もっと工夫してオレを……」

「二段：芙蓉！」

突風がトウコツのバランスを崩す。
そこへ再びトキが攻撃を仕掛けた。

頬への打撃。
トウコツを車の上から落とす。

「やれば出来るじゃん！
じゃぁ！」

トウコツの銃撃。
藍はそれを回避し、同時にトキが攻撃を仕掛ける。

「一段・茨！」

トキの打撃を防いだトウコツ。
更に足元から生えてきたツルを紙一重で躱わし、距離を取ってソードを手に――

（さっきのとは違う！？）

藍の観察眼がトウコツの武器に着目した。
先ほどまでの粗末な作りのソードとは明らかに違う。

（まさかあの剣、行方不明中の……）

その武器にいち早く気付いたのは、空中から眺めているディマだった。

「デュランダル！
何故トウコツが？！」

「？？
ねぇ～、デュランダルって何～？」

（まさか、トウコツが持っていたなん……）

その真横でボルトは手に光を纏わせ、手刀をつくり……

ビュンッ！

ボルトの手刀攻撃（レーザーブレード）をあっさり回避するディマ。
光撃軌道上に静止していた雨粒が全て蒸発。
人間でも岩でも簡単に切ってしまうボルトの“お得意攻撃”
……いや、“光撃”

「ねぇーっ！
デュランダルって何っ！？」

「そんな事も思い出せないの？」

「思い出す？
知らないよ！」

「ぁ、いえ。
芹真から聞いたことないの？」

「ないよ」

その時、トウコツが仕掛けていった。
ぶつかり合う2つの得物。盛大な火の粉がその場に舞い散る。

理壊双焔破界とデュランダル！

破壊力では理壊双焔破界。
切れ味と耐久力はデュランダル。

武器の違いによって生じるそれぞれの戦闘スタイル！

藍はとにかくパワーとスピード攻撃。
トウコツは回避とカウンター重視。

藍もまったく避けないわけではない。
トウコツが回避重視なのはトキも襲い掛かってくるからであり、
下手に手数で勝負することができないため、確実にダメージを与え

られるタイミングを見計らっているのだ。

飛び蹴り！
わざとギリギリ躱わす。
同時、藍の理壊双焔破界が予測通りの軌道からトウコツに襲い掛かる。

当然の防御、反撃。
トキが仕掛ける。

顔面ストレート！
あっさり回避。そして、

1．鎖骨に手刀、2．脇に平拳、3．顔面に裏拳、4．両太腿に浅めの斬撃、5．胸元に双拳！

矢継ぎ早に襲い掛かる反撃乱打。
トキはまたしても吹き飛ばされる。

「トキ！」

少しは話し聞け～！
切りかかりを捌き、切り返しを躱わす藍。

再びトキが突っ込んだ。

「ト……！」

「ほらぁっ！」

今度は一撃で吹き飛ばされる。

お帰り！そして、すぐにまた行ってらっしゃい！

不思議とスピードは落ちていない。

藍は、ダメージが無いのかという疑問さえ持ち始めた。

だが、いまはそれどころじゃない。

「‥薄！」

遅滞効果、薄。

それがトキの動きを一瞬だけ遅滞させることに成功した。

カウンターを極めようとしたトウコツのタイミングをずらし、すかさず攻める！

「おっと！」

もう1本のソードが理壊双焔破界を阻んだ。

だが、これでいい。

トキがトウコツの気をそらし、そこに藍が仕掛ける。更に、今度

はトウコツの注意が藍に向いた時！

その隙、トキにかけた薄を解く。

直後、トウコツの側頭部に平手が叩き込ま……！

が、トウコツはフラつきさえしない。

「甘い！」

回し蹴り。

正確に肩を捉えた。

トキのスピードこそ落ちていないものの、少しずつ隙が大きくなっていることは確かだ。

ほんの僅かながら、トウコツに反撃の余地を与えないほどの高速行動と攻撃ができなくなってきている。

藍も距離を取る。

「トキ、いい加減に大丈夫！？」

「まぁ」

それはあまりにも奇妙だった。

確かに切られたはず……

トキの太腿に外傷がない。

再び、ゆっくりと立ち上がる。外傷の無いことから、行動に支障がないことはわかる。
痣もないし、息切れもしていない。

（これが、時間のＳＲ……）

おそらく、ダメージの伝達を遮断しているのだろうと解釈した。
そうすればダメージは受けない。

藍は再び突っ込もうとするトキの手首を掴み、

「武器が欲しい？」

思いついた必要最低限の質問。
だが、その言葉が出た直後に言い出した本人が後悔した。

「欲しい」

なぜなら、自分が渡そうとしているそれは、

「握った瞬間に死ぬかもしれないけど……」

「いいぞ」

トキは承諾したものの、言い出した藍が直前で渡すことを躊躇った。

（……いえ、無理。
そう、トキには……
落ち着け！
アサ兄さんじゃない。触れた瞬間に死ぬかも）

ためらう最大の原因は“未練”。
そして、いま渡そうとしている日本刀：生死繋綴（せいしけいてい）の性質。

トキが死ぬことは避けなければならない。

（トキの心配をするのはトキがあまりにも弱いから？
でも、タイムリーダーが……
いえ、やはりダメ。
いくらアサ兄様と瓜二つだからって）

命が懸かっていることに変わりはない。
それを不確定要素に賭けた場合のリスクは計り知れない。
将来的に有力な仲間を失うことになる。
――自分も混乱している。
結局、藍は武器を渡すことをやめた。

「さっき……」

トキの開口と同時、トウコツは車の上から降りてきた。

「爆発に巻き込まれて、どうしてか昔のこと思い出したんだよ」

（……そう。
トキはトキ。
協会が敵に回る前に手駒にしたいほどのセカンドリアル。
いまは生死を繋げる必要は無い。
むしろ、生存できるようにこちらがサポートしないと）

「何で今頃になって思い出したのかわからないけど、母さんが死ぬ時のことだったんだ」

「トキのお母さん？」

「ああ。思い出した」

トキが思い出した記憶（モノ）。

それは、約１０年前のことだ。
トキは訳もわからず、母親に連れられ慌てて家を出た。

台風の中車を飛ばす母親。

不安を隠しきれないトキ。
各地で洪水や土砂崩れのニュースが出ていた悪天候だ。

そんな中で、悪い予感は実現してしまった。

豪雨の山道。
落石。
しかし、車は大破したものの、トキは軽い打撲程度で済んだ。

心の傷以外は……

後々長く引きずることになる、母親の死。
最後まで必死に泣くのを堪えて呼び続けた母の名。

“返って／帰って”こない返事。
そして生命（いのち）……

「前にトキの記憶の中を覗いちゃったんだけど、トウコツがいたんだよ」

「トキはすでにトウコツに会っている、そういうこと？」

「うん。
それで、トキのお母さんに止めを刺したのものも……」

2人の下で、トウコツが攻撃を仕掛け、トキも負けじと応戦する。
銃撃！

回避してデュランダルの斬撃！

藍が割って入る。
理壊双焔破界で防御姿勢。

今度はトキがトウコツの背後に回りこむ！
が、読まれていた。

「二段：紅葉」

その言葉にトウコツは距離を取る。
だが、何も起こらない。

「ふぅ～ん、やるじゃん♪！」

「：紅葉」

（同じ術文？）

その時、トキの銃撃がトウコツを襲う。

ヒット！
腕。だが剣（デュランダル）を手放さない。

「いいぞ！

こんなにたくさんの痛みなんて何年ぶりだ！？」

再び、理壊双焔破界とデュランダルがぶつかり合う！

何度も、何度も。

だが、明らかに藍の方が不利であった。

（理壊双焔にヒビがっ！）

１３合目。

藍は、トウコツをデュランダルごと弾き飛ばす。

距離と余裕を手にし、唱える。

「：紅葉」

すかさずトウコツは襲い掛かる。

防御！

理壊双焔破界のヒビが大きくなる。

（うっ！

さすが名剣と言われるだけはある！）

だが、諦めるわけにはいかない！
こちらも武器だ。

条件は同じ。後は……

「‥紅葉！」

更にヒビが大きくなる。
トウコツは二刀流に付け加え、うち一刀はデュランダル。
切れ味、耐久力は理壊双焔破界のそれよりも遥かに高い。

（強い……！）

トキは2人が急接近したため下手に銃撃できなかった。

だからといって、格闘で仕掛けたところでトウコツと自分の徒手に関するレベルは天地ほどの差がある。

戦力に、相手にならない。
これでは今までとまったく変わりがない。
藍は戦っているのに自分は目で追うことが精一ぱ……

「うん？」

無力感に直面したその時だった。
忽然とトキの右手から銃が消えいる。

「そらっ！」

同時、デュランダルが強めに打ち込まれた。

鍔迫り合いなら理壊双焔破界にも分があるものの、耐久力で圧倒的に不利な今、まともに打ち合うことは不可能だ。

理壊双焔破界が崩れる――
その直前だった。

「おおぉぉぉっ！！」

2人の間にトキが割って入り、トウコツを吹き飛ばした。
車に激突。
が、トウコツにダメージはない。

「やっぱり、目覚めたか！？」

トウコツからすれば、楽しい以外にな……！
同時、異変に気付く。

（あれ？）

デュランダルはしっかりと握っていた。
しかし、もう1本のソードは手から消えていた。

「ん！？」

体勢をなおし、すぐ目に飛び込んだ光景はこうだ。

藍の前に立つトキ。
トキが自分を吹き飛ばしたということはわかる。

（あんなトコに刺さ……）

最初はごく普通にそう思った。

トキの右腕に、ソードが深々と突き刺さっていたのだ。
接触した瞬間にそうなったのだろうと予想できる。

（……って！
何だありゃ！？）

刺さっている光景まで問題はなかった。
だが、突き刺さっているソード。
目の前で起きている明らかな異常。

それは、柄と剣先から無くなっていく――という光景。
少しずつ溶けていくような……
しかし液体や粉状のものは一切出ていない。

何らかの薬物を使うわけでも、また魔法を使ったわけでもない。
トウコツに理解できない。
自分が知らない何かによって溶けていくその様子は、あまりにも不気味だった。

（トキ。
やっぱり、物質から時間を……）

すると、トキはゆっくりと歩き出す。
トウコツとの距離が開く。
堂々と背を見せて歩くトキ。

「おい、逃げんのか？」

トウコツは目で追った。
背後から襲い掛かることは造作も無いが、面白みが無い。

「……武器」

言って立ち止まる。
その場所には、

（アレは）

（さっき使用不能にしたトウコツのソード）

……の柄。

「まさか」

2人の予想通り、トキはその柄を握った。

地面に溶け刺さったソードを武器として使う気か！？

「トキ、無理よ！
桜で使用不能にした剣よ！」

藍の華創実誕幻、一段：桜。

それは壁や床・天井を一種の無意識生物とし、接触するものを飲み込ませる術。

術者の意志力が大きく反映される術で、飲み込んだ者を生かす・殺す・痛めつけることを自在に操作することができる（生かした事は無いが）。

無機物の場合は、粉砕か溶解して使用できないようにするために使うことが多い。

偽トウコツのソードもそれで完全に溶かしたはず。

「うそ……」

使用不可能にしたはずのソードが、トキの手で転生を遂げていた。

それもトウコツを驚かすほどの名剣となり。

「あれは、カリバーン！？」

それを見た上空の魔女２人は、

「え～？
どういうこと～！？」

「確かに受け入れがたいわね。

トキの力はタイムリーダーのはず。
でもあれは、蘇逆時行なんてレベルじゃない。まるで錬金術。
しかも創りだした物がカリバーンなんて……」

「でも、トキが錬金術師のセカンドリアルに目覚める可能性はないはずだよ？」

（まさか……
もし、あのセカンドリアルを受け継いでいるとしたら）

ディマの中で自分だけが知るパズルが組みあがっていく。

（そうだとしたら、トキの本当のＳＲはタイムリーダーじゃない！）

その下の駐車場。
トウコツの言葉に藍も驚いた。

（カリバーンって、あのアーサー王伝説の？）

トキは少し剣を振ってみせる。
使えると判断して一呼吸し、トウコツに聞く。

「トウコツ、ひとつ教えろ。
どうして母さんを殺した？」

明らかに何かが違うトキ。
トウコツも今までにない嬉々とした表情で答えた。
予感がした。これで小コイツも対等に近い力を発揮すると言う予感。

「いいねぇ～、その殺る気満々の姿勢！
何故かって？
邪魔だったからさ」

「どうして母さんが邪魔者にならなきゃいけない？」

「トキ。
お前、いま自分の母親が一般人だったと思っただろ？」

「どう……
意味が分かんないな」

「まぁ、当時の記憶は俺の職務過遂もあってフェアリーどもに封印されちまっただろうからな。
どうせ覚えていないだろう。
つぅか、ここまで話せばもう分かるだろ？」

「ＳＲだったのかよ！」

「そうさぁ！
大当たりだよ！」

視界からトウコツが消える。

右！

直感がそう告げ、それが実現する。

防御に成功！

「お前も心臓貫き殺したはずだ！

どうして死んでいない！？」

鍔迫り合い。

トキが押されている。

「うっ！」

背中が車にぶつかり、わずかな戸惑いが起こる。

押される。

迷うな、押し返せ！

デュランダルの刃が徐々に迫る。

その刃が目前に迫った時、

「……思い出した」

「あ？」

「こうしたんだ！」

トキの右手がトウコツの左手首を掴み、

ピシャッ！

初めて聞く音と共に、トウコツの左手が地面に落ち、握られた部分が一瞬で消滅した。
隙を見せたトキにトウコツのデュランダルが襲い掛かった。

相打ち。

（頚動脈！
手応え……）

有り！
だがトキには一切の外傷がない。
斬りつけたはずなのに流血はおろか、傷が出来ない。

どうなっている？
トウコツには理解できなかった。
完全に理解しているのは上空にいるディマだけだった。

「いまから30年くらい前かしら……
トキの母は、誰もが認める最強のセカンドリアルだったけど、誰もその全ての能力を見たことはない」

「ディマは戦ったことあるんだっけ？」

「ええ。
時間のSRの厄介さを嫌と言うほど味わったわ」

「ふぅ～ん」

「トキはしっかりその力を受け継いでいるわね」

「でもさぁ、いくら親子だからってSRが受け継がれることは無いんじゃなかった？」

「そう。
でも、彼女はその方法を知っていた」

「あるの？」

「みたい」

「それで、トキが使っている力って厄介なの？」

「見ての通り厄介よ」

触れただけで消滅する。
それが、トキの“能力／SR”

「おうおう！何だいこりゃ！？
いいねぇ！すごいねぇ！！やるねぇ！！！」

再び斬撃がトキの体に刻まれるが、やはりダメージ・外傷は一切ない。

（デュランダルを受け止めた！）

次の術の準備をしながら藍はそれを目撃した。
素手で真剣を受け止めたトキ。

ピシャ！

再びこの音が響き、デュランダルが折れた。
理壊双焔破界よりも頑丈で折れにくいデュランダル。
トキはそれを刀身に触れただけで折ったのだ！

（デュランダルから時間を奪った……）

爆発を消し、車を消し、トウコツの腕を消し、そしてデュランダルの刀身の一部を消した。

「すっげ・・・！」

トウコツも呆気に取られた。
上空のボルトも軽く驚く。

「あれが“時間剥奪／クロノセプト”」
「本当に時間を奪っちゃうの？」

「ええ。
奪うかあるいは強制進退させる力よ」

「え？
どゆこと？」

「以前戦った時、私は右目を強制若化された。
それがどういうことかわかる？」

「たんと～ちょくにゅ～に言えばいいじゃん」

回りくどい。

「右目だけが極端に若返り、焦点がずれたのよ。
おまけに視力も相当落ちたわ。回復はしたけど」

強制的に赤子くらいの視力まで若化されたってことよ。

「ふぅ～ん」

「何百年も生きている私達にさえ匹敵する力よ」

「でもさぁ、仮に光と影なら――」

「無理よ」

（どうなってる！？）

今まで戦いを楽しんでいたトウコツの顔に僅かな翳りが現れた。

（いきなり爆発が消えたと思ったら今度は車を消し、俺の腕と剣も消しやがった。
そして……）

トウコツはデュランダルを捨て、残りのソードでトキの斬撃を捌いていた。

（なぜ使用不能になったソードが名剣として蘇った！？）

高速で迫るトキ。
体の一部を失ってバランスがうまく保てないトウコツ。

「オレを殺せるのか！」

トウコツは初めて自分の死について考えた。
斬撃が迫る！
回避。
空振り。

いまの斬撃は避けなければ確実に首を刎ねていただろう。
トキが殺しに来た。
それは分かりきっていること。

殺し合うのが戦いの本質！
問題は、初めて殺されるかもしれない状況に遭遇したことにある。

恐怖と快楽の境界線。
頭の中から余分なものが消えていく素晴らしき瞬間！
一瞬後には死ぬかもしれない緊張感。
それを楽しむ心、臆する心。
矛盾する２つの感情が織り成す結果で生まれる独特の雰囲気！

「オレはお前を殺さない」

トウコツの両足にカリバーンの斬撃が入る！
それでもトウコツは移動を続けた。

車と車の間。
それはトキの斬撃をいくらでも防ごうという考えからだ。
防ぐと言うより、もっとこの感覚を堪能したいがため。いくらでも闘いを長引かせるため！

トキはまだ剣に慣れていない。
だから、車と車の狭間のように、狭い場所では思うように剣を振れない。

車のドアを開け、トキの斬撃を妨ぐ。
反撃。
ダメージを与えることができない。わかっていながらも攻撃する楽しみを捨てない。
トキが背後に回りこむ。

それは誤算だった。
自分で開けたドアが、今度は自分の退路を塞いでしまった。

トウコツは振り返り、防御姿勢を取る。
次にくるだろう斬撃は縦に……！

だが、トウコツに襲い掛かったのは銃撃だった。
それはもう1つの銃、キンバーコンパクト。

（クソっ！
また両足……）

剣と思わせ銃！
完全に機動力を奪われた、その直後。

「華創実誕幻、三段‥」

トキの背後に藍がいることに気付く。
戦闘の間に姿をくらましていた藍。
探す余裕もなく、まして移動力を奪われた今トウコツは動かぬ的でしかない。

「蒲公英（たんぽぽ）」

一瞬後、藍の紅葉が打ち込まれた部分と理壊双焔破界の火の粉が落ちた場所から大量の火炎が生まれ、トウコツに襲い掛かった。

『熱効果』＋『無限召喚』
これによって生まれる『無限火焔地獄』！

一つの術から巨大な炎を生むことは出来ない。
だから、小さいものを少しずつ重ねて作り出す。それが紅葉を連

発した理由だ。
そう。熱も集まれば炎と化し、塵も積もれば山となる！

「オオオッ！！！」

炎に包まれたトウコツが雄叫びを上げる。
服が、皮膚が、デュランダルが燃える。

（勝った）

確信――
だが、トキは複雑な心境だった。
自分の母親の仇を討てたという達成感と同時に、殺人に加担したことへの後悔、ただならぬ罪悪感。

しかも、母を殺した者だと思い出したのが数分前。
本当に自分の記憶なのかも疑わしい。
ただ頭が混乱し、トウコツが母の仇だと錯覚していたら……
そう考えると背筋が寒くなる。

真偽を問う達成感と確実な罪悪感のせめぎ合いがトキを混乱させた。

（夢にまで見なかった、殺人）

刺激や興奮は望んだ。
だが、人の死は……

「残念ながら助ますよ」

突如、新たな声が駐車場に響いた。

「はっ！？」

若い男の声。
直後、トウコツの頭上から滝のような水が降りかかった。
トキは呆気に取られ、藍は驚いた。

「……まさか。
生源創水、センね！」

「その通り私です」

藍の足元にある水溜りからセンと呼ばれる青髪の青年が現れ、少しずつ体型を作り上げていく。
やがて藍と同じ目線の大きさになったところで形成がストップする。

この際、藍がスカートであったことは無視しよう！

「トウコツには半年の謹慎が課せられていましたが、２日前からそれを破って行方をくらましていたのです。
藍さんとトキ君のおかげで発見に至りました。
心から感謝します。
上からの指令通り生かして連れて帰ることも出来そうです」

センは頭を下げて深くお辞儀。
その間、トウコツの体を水が包む。

すかさず藍が質問する。

「アナタだから信用はするけど……
念のために聞かせて。どうしてトウコツが謹慎を？」

「さすがにそれは言えません。
それを言ったら今度は私が謹慎を受けてしま……」

同時――

「うわっ！」

いきなり、センの鼻先をソードがかすった。

「え！？
ぁ、トキ！」

「そいつ……
トウコツは俺達がここで倒すんだ。連れ帰るんじゃない」

しかし、吐いた言葉と裏腹にトキの顔には困惑の表情が浮かび上がっていた。
迷っている。
トウコツを見逃すべきか、今ここで殺すべきか。
決断が出来ない。
自分が殺人へ加担することを認めるか、目の前で虫の息の敵を逃がすか。

「トキ。
どの道私達じゃセンには敵わないし、センは敵じゃない」

「でも！」

「あ、確かに私は協会のＳＲですけど！
芹真事務所やクリーニング店の皆様に楯突く気は毛頭ございませんから！
というか私は強くありませんから！」

メチャクチャ必死に訴えるセン。
年齢はトキよりも上なのに、やたらと頭が低い。

「そいつは……」

「お願い、トキ。
彼には敵わないから、大人しく剣を収めて！」

「そ、そうです！
でなければ必死に力ずくで黙らせなければならなくなるので、今回は譲ってくださいよ！」

「……今回って、次はもう連れ帰らない？」

「はい。もちろん！
私もこの男にはあまり関わりたくないですから！」

「ごめんね、セン――
目が覚めたらトウコツに、次は必ず殺すからって伝えて」

トウコツを包み込んだ水は次第に空へと昇って行き、センもその水と共に空へと消える。
藍とトキはそれを見送った。

「トキ。
私もトウコツを倒せないことは悔しい。
でも、次会う時までに鍛えれば、一人でも太刀打ちできるように

なるかもしれないから……」

「そうだな」

トキは、呆気ない終わりに落胆し――
しかし、これで殺人に至らなかったことで安心もした。

一方、上空の魔女2人。

「あっ！センだ！」

「あら。本当」

トウコツを抱えている？

「あ、ディマ先輩にボルト先輩！？」

何で私だけ嫌そうなのよ～っ！

「トウコツの回収命令？」

「え、はい。
会長じきじきの命令でしたので、早急に雨と共にやってきました」

無視……
それなら、

「ねぇねぇ、セン！
また後で海柱（かいちゅう）やってちょうだい！」

「えぇ！！？
でも、あれは……！」

じゃなきゃ殺るよ♪

「ひっ！」

ボルトの心の声に心底震えるセン。
こら。脅さない。

「ボルトの言うことを真に受けちゃダメよ。セン」

きっとボルトも久々に会ったから冗談を言ったのよ。

「ホッ」

安著。

「冗談言わないよ～だ！」

戦慄。

「えっ！？」

「セン。
とにかくボルトの言うことは聞き流して。
今は仕事を最優先……」

ビュンッ！

ボルトの光撃再び！
ディマのあっさり回避再び！

「ババァは黙れ～！」

「黙らないわよ、クソガキ。
センは、如何なる時でも仕事を完遂するのがプロフェッショナルというもの。
トウコツを運びなさい」
「あ、ではっ！」

センは逃げるようにその場を去っていった。

「あ～ん！
セン待ってよ～！
またアレ見せてよ～！」
（まったく子供は）

ビュンッ！
スカ！

「何よぉ！
い～っつもディマがセンを唆すから……！」

「唆す？
それはあなたじゃなくて？」

「ムッカ～ッ！
いいもん！

また後で問い詰めるんだから！」

「何を問い詰めるの？
言葉選びなさいよ……
そんなことしたら余計にセンは悪い方向に転がっていくじゃない」

「そんなこと無いもん！」

2人にとって日常的な口喧嘩が今日は空中で繰り広げられ……
その最中、再び雨が降り出した。

「あれ？トキは？」

数十分後、藍とボルトは芹真事務所に帰ってきた。
そのメンバーの中にトキがいないことに芹真は気づき、そう質問した。

「今日は自分のベッドで寝るっていってたよ」

ボルトの手にはしっかりとアイスクリームが握られていた。

「へぇ。
何かあったのか？」

「トウコツだよ」

「トウコツ？
まさか、あの四凶の1人の？」

「ええ。
私から戦いを仕掛けたんだけど、その後トキが追いかけてきて……」

「おいおい……
藍もトキも大丈夫なのか？怪我とかしなかったか？」

「私はいつも通り。
無傷とはいかないけど大丈夫。
でも、トキについては私も結構驚かされたわ。
傷つけられたはずなのに、まるで無傷よ。
トキのセカンドリアルがあそこまで強力だったなんて、夢にも思わなかったわ」

「うん。
トキは無傷だったよ」

「……目覚めたのか？」

「ディマがさ、“クロノセプター”だって」

「嘘ぉ！？」

芹真、本日1番の驚き。
その驚き様は、お気に入りのマイコーヒーカップを握り砕く程だったという。

第9話－ＳＲ継承！時間剥奪者（クロノセプター）　トキ！－（後書き）

駐車場からまっすぐ家に帰ったトキ。
振り出した雨が頭を冷やしてくれた。

その所為で震え、頭の中がパニックを起こした。

到着した久々の我が家。
１人で考える時間が欲しい。

晩御飯のことはまだ考えなくても大丈夫だ。
それよりもＳＲだ。

自分の母親がＳＲということを少し考えてみようと思い、我が家の玄関を開ける。

自分の部屋に向かう途中に……
気付いた。

招いてもいない者達が勝手にあがりこんでいることを。

第10話－In my home…　Successive attack

帰路に着いた時、再び雨が降り始めた。
だが、降ったのは10分前後。

雨雲は不自然なほどサッパリとその姿を消し、夕焼けの空を人の目に晒していた。

絵になるような夕立後の空。
不純な空気は雨に流し落とされ、綺麗なオレンジ色が過ぎ去り行く雲を染めていた。

そんな綺麗な空の下――

トキの連敗的1日は続いていた……

第10話－In my home…　Successive attack

場所は変わって住宅街。
トキ、色世（わがや）家にて唖然。

「おっ！
家主が帰って来たぞ！」

玄関。
SRについて、もう少し自分なりに考えて整理してみようかと考えていたトキだった。

大抵、家にはトキ1人しかおらず、母もいなければ父もいない。
1人で考え込むにはうってつけな静寂。
滅多に邪魔の入らない空間。

しかし、今日は招いてもいない……
というより、招きたくない類の客がいた。

見てくれはただの外国人。

実際は、『外国人が来ている』ということだけでも日常的には考えられないことだ。

見知らぬ外人が、いきなり自分の家を訪れてきた場合を想像してみよう。
しかも、初対面でいきなり『俺達知り合いじゃん』みたいな軽い

ノリで。
更に自分よりも先に自分の家にあがっていた場合。

戸惑うこと間違いなし！

その内の１人が仲間に声をかけ、合計３人の客人が顔を見せることになった。

（……）

トキは今日の朝の占いを見ておくべきだったと後悔した。
絶対の自信をもって言えることがある。

今日は大凶だ。

嗚呼、逃げ出したい……

－第１０話－

－Ｉｎ　ｍｙ　ｈｏｍｅ．．．Ｓｕｃｃｅｓｓｉｖｅ　ａｔｔａｃｋ！－

「誠勝手ながら家主より先にお邪魔させてもらったことを謝罪します。
しかし、我ら。昨日より帰る場所（チーム）をなくして間もなく、本部からこの地に留まり反省と謝罪をもって職を全うせよとのこと」

「まっ、早ぇ話許可なしでこの地を出たら命は無えってことよ。
この街に隔離されたって訳」

「そして私達がここにいるのは、すこし聞きたいことがある為なのです」

三者三様。
１人目は手袋をしたリーダー格。
２人目が顔に包帯を巻く荒い口調。
３人目だけ女性。

それぞれ違う特徴をもっているものの、服装はみな同じだった。
褐色の肌に、黒のインナー。黒いマント。

見紛うことはない。
何たって昨日の今日だ。

その姿はこの平和な国――この街では異色も異色。

（……アヌビス？）

としか捉えようのない彼らの姿。
トキは玄関にて、

（自分の家？）

当然のように浮かび上がる疑問を抱いていた。
1度外に出て表札を確認。
今度は、紛れもなく自分の家であることには疑問を抱いた。

何故？
どうして彼らが我が家に？

「我々は少し聞きたいことがあるが故、ここでトキ君の帰りを待っていたのです」

「なんか脅えているように見えんの俺だけ？」

包帯顔のアヌビスの指摘に、あっと声を上げる2人のアヌビス。
言われた通り、トキは震えていた。

先ほどのトウコツ戦で心身的疲労がピークに達していることが大きな原因だ。
それと相まって、昨日のアヌビスたちの常人離れした戦闘能力が脳裏に思い描かれる。

まさか自分の家にアヌビスがいるなんて誰が予想できたものか。

昨日の戦闘が頭に思い浮かぶ。
やべ、3人も……
死んだ……

「先告すべきでした。
我々は戦闘のために来たのではありません。情報が欲しいために来ただけです」

「これはマジ」

マジとか言われても……
信じていいのだろうか。
むしろ、こういう場合は疑うべきなんだろうけど。

「アックス。
疑いはキリ無い。単刀直入に聞けば良いのでは？」

「ふむ。やはりそうすべきか」

「どうでもいいから早く聞けよ」

「ハルバート。
あなたは黙っていなさい」

「……え～っ、あの。
オレは上がっていいのか（自分の家に）？」

自分の家の玄関。
今日、この時に限って自分の家に帰ってきた気がしなかった。

リーダー格アヌビスは、慌てて自分たちが犯した無礼を謝罪。
やっとのことで自分の家の床を踏みたトキだった。

それからアヌビス３人をリビングで待たせ、トキは自分の部屋で着替えを済ます。

（改めてみると、本当に元通りに戻ってるなぁ）

ハンズによって半壊状態に陥ったこの家は、芹真さんの友人によ

って完璧な復活を遂げていた。
しかも、以前から直そうと思っていた壁や床も新調され――
少し複雑な気持ちだが、タンスの中身や本棚、冷蔵庫の中身までハンズに襲われた時の状態を完璧に再現していた。

（完璧再現……）

昨日知り合ったばかりの人物の顔が浮かび上がる。
この家を半壊させた犯人の身内であり、完全再現・完璧再生のSR。

フィング・ブリジスタス

これも彼の成せる業なのか……
実際のところ、真相を知っているのは芹真さんだけだ。
友人かどうかは昨日の口ぶりからいくと少し怪しい。

それでも、修復を依頼してくれたのは彼なんだし。
階段の途中の装飾、掛け絵まで元通り。
芹真さんに土下座して感謝してもいいくらいだ。

（さて、それよりも……）

トキがリビングに入ると、1体のアヌビスが勝手にテレビを使用していたことに気付く。

他の2人は静かにトキの着席を待っていた。

えぇい、ツッコムのは後だ。

引き篭もっていたとはいえ、この状況が読めないトキではない。
アヌビス（×2）はトキの着席を待っている。
トキはアヌビスたちと反対側に腰を落ち着かせ、

（オレから何か言うべきか？）

そこで少し迷った。
が、あまり長く一緒にいようとも思わないため、準・単刀直入に聞くことにした。

「え～っ。
オレに聞きたいことがあるそうだけど」

無言で頷く2人。
興味なさげにテレビに噛り付く1体。

「単刀直入に言いましょう。
我々は迷子です」

「はい？」

「ちゃんと説明しないと分からないと思うけど」

女性アヌビスの指摘でリーダー格――
先ほど玄関では“アックス”と呼ばれたアヌビスが自分の説明不足に納得する。

全くの説明不足。
よってトキには何故彼らが迷子だと言ったのか毛ほども理解できなかった。

「失礼しました。
簡潔に説明すれば――」

こういう事だった。

いま、トキの目の前にいる3体のアヌビスは、パイロンの店に突入したグループなのだと言う。
3体はそれぞれ――

“アックス”
“ジャベリン”
“ハルバート”
と呼ばれ――

パイロンの店から辛うじて逃げ延びた新米アヌビスたちだった。

自分達を残して偉大な先輩方全てが絶命の負い目に遭った状況で

孤立した彼らは、協会本部と連絡を取った。

元々3人は詳細も知らずに戦地に赴いたため、今後どのように行動するべきかなのかも全て先輩任せだった。

状況の報告と、今後の方針を協会に仰ぎ求めた3人に返ってきた返答は、決して温かいものではなかった。

“現地とその周辺に留まり、勝手な仕事をした分だけの功績を上げたら帰還を許可しよう。

もし、この命令に従わぬ場合は英雄達による処罰が下り、貴様等の命は無い。

監視は現地のSRが行う。

僅かな怠慢でも厳しく指摘するよう、すでに指令が飛んであるはずだ。

怠ることなかれ。

アヌビスとして不整な精魂を断罪してこい。つまりいつも通りのことをすれば良いのだ

つぅか、人手不足なんだからとっとと罪を償って戻りやがれ新米共が”

そして、3日間だけの準備・調整期間が与えられ、今日がその1日目。

3人は監視役のSRに顔を合わせて挨拶をしようと考えていたようだが……

「警察署がわからないと？」

「はい。

そこで、先輩方の話に出ていたシキヨ　トキという人物に話を聞

いてみようと思いまして」

「いや、何でオレに聞こうとするの？」

「先輩達が口にしていたほどですから、相当のＳＲだと思いまして。違いますか？」

断固として違います。

トキの力が花開いたのはついさっきの事だ（藍談）。

実際はあれが自分のＳＲなのか自信がもてないし、しかも、どんな感覚だったか覚えていない。

もう一度、あの力（クロノセプト）を見せろと言われても無理だ。

自分でもどうやったのか覚えていない。

「ほらな！

だから言ったろ！」

それまでテレビに没頭していたアヌビスが声を上げた。

「確かに先輩達は口にしてたけどなぁ、そりゃ、標的確認って意味でなんだよ！

しかも、め・ず・ら・し・く捕獲対象なわけ！」

「ハルバート！」

「んだよ？
事実だろ、なぁトキ」

そのアヌビスと目が合う。

怖っ！

だが、確かにそれは事実だ……ったか？

「再度公言しますが、我々に戦闘の意志はありません」

公言しなくてもいいよ。
昨日遭遇したアヌビスたちと違って、殺意が全く感じられないことからそれは分かる。

まぁ、１人殺気を含んだ奴もいるけど……

「トキさんのＳＲって、どんなモノですか？」

唐突に女性アヌビスが真剣な質問してきた。
どんなとか言われてもほとんど自覚がない。
が、名前だけ聞かされた。

「タイムリーダーとか……」

ハルバートがへぇと感心する。

「時間の指導者（タイムリーダー）。
確かに珍しいＳＲですね。それじゃあ、任意に時間を止めることが可能なんですね？」

「まぁ、ほんの少しは」

「待て待て。
オレには少し違う感じがしたが？」

ジャベリンに待ったをかけるハルバート。
まじまじとトキを観察するように見回した後、

「どっちかというと“数秒後に起きる未来を予想できる”って感じじゃないか？」

「え？」
「へぇ？」
「未来？」

ハルバートアヌビスの言葉にトキが一番驚いた。

何故かわからないが、ハルバートのアヌビスにはそれを見抜かれていた。
実際トキは、意識の有無を問わずにタイムリーダーの力が発動していることがあるのだと薄々気付いていた。

任意に止めることはまずない。
と言うより、ほとんど止めたことが無い。

しかし。
代わりに、予言じみた直感をかなり昔から幾度となく体験している。その本能的な危機察知・予想能力もここ何日かで飛躍的な向上を見せ、機能していた（が、それでも回避不可能なこともある）ことがあった。

例えば、階段。
数秒後に転ぶと言う異常なまでにリアルな予感。
その数秒後に備えるように体は硬直を始めるか、手すりを求めて腕が動く。今日もあった。

それは予感と言うより、悟りに近い。

「オレは時間指導者というより、時間解読者（タイムリーダー）だと思うな」

統べる者ではなく、読む者。
つまり、それは予言といってもなんら差し障りは無いだろう。

誰にも見えない分岐した未来。

枝のように分かれた未来（ルート）で最も実現しうる可能性の高いモノを垣間見る、あるいは感じ取る能力。

アヌビスの説明でトキは確信した。やはり、と。

「なるほどね。
それなら確保しようという方針も分からなくわないわね。
時間を読む、か。
理論型のＳＲの中でも飛びぬけ珍しいわね」

理論型？

首をかしげたところ、トキがこっちの世界に入って1月も経っていないことを確認。
説明の必要が有り、と判断したアックスが説明を開始した。

「ＳＲ（セカンドリアル）には大きく分けて3種類あります。
まず“存在型のＳＲ”。
我々アヌビスや、芹真事務所、ホート・クリーニング店の人狼、鬼、錬金術師、呪術師など神話や童話、伝承、創話にしか存在しないモノがこれに当たります。
強靭で人間離れした力と精神力はそれだけでも強力な武器になり得ます」

「孫悟空の野郎もな」

えらく毛嫌いするハルバート。
入れ替わるように今度はジャベリンが説明する。

「2つ目が“理論型のＳＲ”。
これは完全支配のオウル・バースヤード、完全否定のメイトス、完璧のワルクス、完全再現のフィングのように世の中の理（ルール）を覆すことを武器とする者達（ＳＲ）のことです。
理論型ＳＲは、いかに理を自分のものにするかが戦闘を大きく左右する鍵となります」

例えば、フィングの完全再生・完璧再現。
他人の容姿を再現し、壊れた体を再生する。

再製（リプレイ）と再生（リバイバル）。

再現を武器に、昨日はアヌビスを撃破して見せた。
アヌビスを確実に仕留めるために必要な相性を持ったＳＲを自らがリプレイし、受けた傷はたちどころリバイバルする。

トキは、芹真と藍の話を思い出す。

“戦争し合うように仕向けられた”

それは完全支配のＳＲ：オウル・バースヤードによってすべて操作されていたものだと2人は言った。
自分が操作する全てが実現する。どんなに抗おうとも実現してしまう。

トキは初めて理解した。
反抗しても実現してしまう、いくら自分が拒もうと現実は否が応でもソイツの思い描いた結末へと向かって止まることがない。
それが、完全支配。
自分達が介入する余地もなく、またそのルールを崩そうにも崩せない。介入できたとしても、完全な支配者からすればそれすらも予定の範囲内でしかない。そして、介入者や支配者の手駒となった者は描かれたシナリオを書き直すことが出来ない。
書き変えることができるのは支配者のみ。
神として君臨することも可能な、圧倒的不可視の力。
全てを自分が創り上げた世界（ルール）に縛り付けるＳＲ。
トキは自分の“考え／推測”に没頭するあまり、何か意外と大事なことを聞き逃したことに気付かなかった。
ふと、今度は疑問を抱いた。根本的でありとても大事な質問。
トキは躊躇わずに聞いた。
「どうしてＳＲは生まれるんだ？」
前々から思っていた疑問に、アックスが答える。
「近代の存在型ＳＲは代々その系統、一族や末裔として生まれた者を言います。
しかし、その元の元――起源となるＳＲは理論型のＳＲと同じように発生します」

“誕生”ではなく“発生”と、ジャベリンが訂正してバトンタッチする。

「肝心なのはここにあるの。
理論型のＳＲは、一途で強烈な願いでしか発生しない」

「願い？
“そうなりたい”って思えばなれるってことか？」

今度はハルバートが、答える。

「少し違うね。
俺達みたいな存在型は望まなくとも何らかの力を持って生まれる。
アヌビスから竜の子は生まれない。
生まれるのはただの人間か、アヌビスの二者択一。
だが、理論型はそうじゃない。
いくら親が強力なＳＲを持とうと、それが子供に受け継がれるなんて有り得ない。むしろ、受け継ぐことが稀ってくらいだ」

いつの間にかハルバートもテレビから離れ、体をしっかりと向けなおして真面目に会話に入り込んでいた。

「理論型のＳＲは、同時代の誰よりも何らかの理を自分だけのモノ

にしたいと強く望んだ特別な者に許される力。
協会で必死に探しているメイトスの野郎も例外じゃない。
奴は自分の過去に起こった受け入れたくない　何か　を否定し続けた結果、いまほどの力に至るって話だ」

「へぇ」

ふと、魔女は存在型なのか理論型なのか気になったが、トキは聞かないことにした。

「そして3つ目。
存在型でも理論型でもない。
昔は理論型の例外として扱われたＳＲ」

「四凶と呼ばれるＳＲがそれにあたる。
トキさんは知っていますか？
コントン。キュウキ。トウテツ。トウコツ。
この四種で“四凶”と呼ばれているのです」

アックスが言うには、彼らはその存在意義にあわせてそう呼ばれるようになったらしい。

「……」
「……」

ジャベリンとトキが同時に黙り込む。
何といえばいいのか、その内の1人と交戦してきたばっかりなのだが……
「何て言ったっけ。
彼らのような例外を？」
「……創造型」
ボソッとつぶやくジャベリン。
言葉を遮られて拗ねてる。
「あ、そう！
“創造型のＳＲ”！」
「あの、アックスさん。
話盛り上がるのはいいことだろうけど、主旨ズレてません？」
言われて我に返ったアックスは口をつぐむ。
その横でハルバートは呆れ、ジャベリンが微笑んでいた。
「警察署ですよね？」
「はい」

昨日遭ったアヌビスと違って目の前の――特にアックスはしっかりと礼儀を弁えている。

「え～っと、地図は要ります？」

「あ、それは私から是非お願いしたいです」

ジャベリンさんが挙手。

ハルバートは再び、飽きたと主張し寝そべる。

この3人のアヌビスは本当に無害だ……

何なんだろう昨日のアヌビスとのこのギャップの差は。

席を離れ、台所へ。

ごみ収集ポイントが記された地図だが、公共の建物にはしっかりとマークが入っている。

これでも十分だ。

トキは台所から地図を手に、アックスに手渡した。

「え～っと、この家がこの辺で～……」

手近にあるマジックを取り、道を書き示す。

説明する横でアックスとジャベリンが、片やうんうんと頷きながら、片や黙々とその道のりを覚えようと真剣に地図を覗き込んでい

る。

その隅でハルバートだけ大きなあくびをかいている。

1分もかからず書き込み完了。

「これなら行けるね」

と、ジャベリン。

いや、標識とか交番見つけて聞けよ。

説明してからツッコむのもなんだけど、お前ら地図を買え！　or　交番尋ねろ！

「そうですね。これなら迷わないでしょう」

恩に着ますとアックスが深々と感謝の辞（ことば）を述べる。

どうでもいいけど、この人外（アヌビス）見と裏腹に頭低っ！

「では、長居は迷惑をかけてしまいそうなので、我々はこの辺で退散します」

律儀に説明アリガトウ。

実際のところ、勝手に上がりこまれていた時点で相当迷惑感じた

んだよ……

など、口が裂けても言えない。
だって、アヌビス恐いもん。

3人が玄関へ移動するのをトキは見送った。
それでは、とアックスは言って玄関を後にする。

1人。
ハルバートが振り返り、

「トキ、お前もSRならこれだけは知っておけ。
創造型のSRに勝とうと思うな」

「何で？」

「SRの本質を“善”と“悪”に分けるなら、曖昧なものが殆どだ。
90%くらいがそうだといっても過言じゃない。
だが、創造型SRは極端にどちらかに偏っている奴が多い」

それだけ言い残して去るハルバート。
気になる。
たったいま、改めてアヌビスに聞きたいことがたくさん出来た。

「意味がわか……」

ハルバートを呼び止めようとし――
入れ替わるようにいきなり奴が来た。

「トキ～！
ＤＶＤ貸して！」

抜き手臓物潰しっ！
ぐはっ！　ｂｙ　トキの心境風景より。

「友樹……なんだよ、いきなり！」

「何だとは何だ！？
こっちはメール送って、返信ないから電話かけて――
それでも出なかった奴がそんなこと口にしていいと思っているのか？」

「……」

無言でトキは自分の携帯電話を探――
ポケットにない。

「あー、まず上がれぃ！」

「おう！

お邪魔しなきゃ気が済まん！」

2人とも階段を上がって2階の部屋へ。
入室してすぐにトキは自分の制服・鞄のポケットを探る。

あった！
点滅あり。

本当にメールと着信アリだよ。
メール内容：ＤＶＤ貸して

まぁ、それなら問題はなかろう。

「ちゃんと最後まで読めよ」

「最後？」

言われて画面に注目。
『▽（つづく）』表示あり。
まだ下に続きがあるというのかっ！？

改めて読んでみると、その内容が――

『何か、今日エロティカと、奈倉さんが来るみたいだから～』

文章の意味をトキは必死に理解しようとし、その名の持ち主の顔しか浮かんでこない。

あぁ～、何も考えられない。
やばいくらい混乱してるぞ、オレ！

エロティカ……
本名：村崎　翼

そう、クラス１の美形にしてクラス１の変態。
あんなのが家に来るだと！？
外見上は華だが、中身が淫魔で出来上がっているあの男が！？

それに、奈倉さんって……
本名：奈倉　愛院（あいん）
通称：ケルベロス！

上級生・下級生・同級生・近隣の諸学校の生徒・教職員問わず、誰からでも恐れられるような典型的超攻撃型女子！

恐喝・脅迫はもちろんの事、喧嘩・喫煙・飲酒・無免許運転の他に――
あくまで噂でしかないが、殺人やら窃盗やら計画犯罪にまで手を出していると言う、おそらく白州唯高校で確実にダークサイドに数えられる完膚無き悪女（オンナ）！

最近はかなり大人しくなっているものの、何しにここまで来るのか全く検討が付かない。

いずれ訪れる未来（来客）に震えるトキ。
ＤＶＤを漁りながら友樹が、

「何か、エロティカは委員長の差し金らしいよ？
そんで、心配だからって裏委員長から奈倉さんが派遣されたとか
……」

解説サンクス。
大体の理由がわかったぞ！

「進路調査票かっ！？
調査票だな！」

「ん～、そうなんじゃない？」

我関せずと言いたげな他人行儀率。
ほんの少し苛立つトキに……

「でも、それってトキが悪いんじゃない？」

背後からの奇襲。
いきなり首筋に掌当てられ、

「――――っ！？」

ＴＨＥ　声にならない声。

優しく包み込むような柔らかい手――
じゃなくて、慌てて振り返り……！
そこに智明がいたことに混乱する。

「え？
なんっ……！」

よく飲み込めない状況に遭遇したトキに、友樹が親切に説明してくれた。

「ああ、オレら一緒に来たんだよ。
トキにＤＶＤ借りに行くって言ったら、２人ともついてきて」

「そういうこと。
私も借りてもいい？」

この２人、なんでこんな活動的……

「って、待てコラ！そこのタイガーヘッド！
２人ともついてきたって……」

間髪おかず、ポン、と再び首筋に掌が。
それはそれは、やたらと力強い感じで。

「オレも借りていいか？」

ザ・キリングマシン登場。
何故、岩井が？

思わず戦慄を覚えた。
あぁ、ついに殴りこみに……
オレ（トキ）、岩井の癪に触ることしたか？素直に白状しやがれ。

混乱しつつ震えるトキ。
もしや、岩井様も委員長によって送り込まれた刺客なのでしょうか？

「信弥君に安いお店教えてもらっていたの」

まるで計っていたようなタイミング良き智明の解説。

ゲーセンの帰りにか？
と、ここはツッコんではいけないトコだ！

そういや、この2人付き合い始めたんだ。
すっかり忘れてた。

「で、トキってどんなＤＶＤ持ってんだ？」

「アクション系が８割」

意外と普通に会話する友樹と岩井。
昔は仲悪そうに睨みあっていたが。
はて……

唖然としているうちに友樹の借りていくＤＶＤが決まる。

「じゃあオレは、『男達の○歌』借りるぞ～」

しかも、シリーズ全て。
負けじと岩井も、

「オレは『ワンス・アンポ・○・タイム・イン・○○○○』な」

これまたシリーズ全巻。
おい、どうして君達は古い映画ばかりを選ぶのだ。
トキも今日は古い映画ヲ楽しもうトしてイタのニ……

ハッ！
もしかして、オールドファンか！？

「じゃあ、私は」

これがまた意外だった。
普段は闘争などの争いごとを極力避けていた智明まで借りる気満々だ。

で、決定したのが――

『ポリ○・○トーリー』

ジャ○キー！
そして彼女までシリーズ全巻借りていくという。

岩井と付き合って暴力に目覚めたか!?

「つぅか、俺ん家はレンタルビデオ屋じゃないんだぞ?」

「だからタダなんだろ?」

アイタタッ……
実際に持っていくことを止めることの出来ないトキであった。
これだから非力は嫌なんだよなぁ。

ここで1つ、前もった教訓と余談を。

海岸で波というものは幾度も上陸と海への退却を繰り返すもの。

そして、それにあやかって世の中には『波状攻撃』なる言葉が存在する。

（嗚呼。

これであの２人まで来たら……）

どんな波乱が起こるか予想不――

ピンポーン！

……来た。

※波状攻撃：断続的に、攻撃を繰り返し与える“もの／こと”

「勝手にお邪魔しま～す」

エロティカの声。

続いて、

「じゃあ……

我が物顔でお邪魔しますよ～、だ」

2人して何を競っているのか分からないが、トキは2人を案内するため階段を駆け下り――

ズゴゴゴゴゴッ！！

コケた。
停止したのは階段落ちが終わって更に2メートルほど転がってからだ。

しかも、ちょうど良く2人のまん前で。

（痛い！
そしてハズい！）

「盛大に転んだな。お邪魔します」

「言い直さなくてもいいよ。
聞いてたか……タタタッ！」

「マジで大丈夫か？
特に肩」

心配してくれてアリガト。

「いきなり訪問してきてくれたのに言うのもなんだが……

何の用件で来たんだ？」

「進路調査票の回収命令」

「は？何で？
期限は明日までのハズだろ！？」

「委員長曰く、
“明日忘れてきて、ここまで回収に来るのが面倒臭いから今日中に回収しておこう。で、誰か頼まれてくれ”、だとさ」

委員長として失格でしょ、その台詞は。
何で支持率が落ちないかなぁ。

「でも、提出していないトキが悪いじゃん」

本日2度目。
グサ、っと刺さる奈倉さんの一撃（コトバ）。
それを言われるとたちまち反論不可となってしまう。

いじめだ……

「分かった……
いま書いて、エロティカに渡せばいいのか？」

「おう。出せ。

そしてＤＶＤ貸せ」

お前もかよ……
って、そうか。以前１度貸したことがあったな。

「おい、エロティカ。
私たちは、遊びに来てるんじゃないんだよ？」

「おい、奈倉。
１発　上のトキの部屋の棚見てきな。
ついつい借りたくなる１本があるはずだ」

言い方がエロいぞ。さすがエロティカ。
言われた奈倉さんが勝手に階段を上がっていく。

「あれ？
智明に友樹、岩井？」

２階の部屋に消えた奈倉さんの台詞。
バッチリ１階まで届き……

「え？何？
上で何やってたの？」

目の前に変態1名。
厄介なものに油を注いでしまった。

「●交か？
複●か！？」

「……ＤＶＤ借りに来たんだよ」

「ほう。ビデオ●●イか
自らのテクニックの稚拙さを省みての……」

……
お前だけ！帰れ。

「ん？
上で何やってんだ？」

トキ思ふ。
クラスで1番顔が整っていることで一部評判のこの男――
外見は映画俳優並で、中身がＡ○男優、いや、監督がどうして家に来たんだろう。
って進路調査票か……
実力があったら、委員長に文句言いてぇ。
つぅか、いますぐ追い返してぇ。

－１０分後－

１階のリビング。
全員に睨まれながらトキは進路調査票を書き終えた。

「はい、お疲れ～」

リビングに集まっていた面子が、一斉に茶なり菓子なりに手をつけはじめる。

そう。
書き終えるまで全員が少しアドバイスする程度で問題行動・発言は一切たりともなかった。

その反動なのか定かではない。
定かではないが、奈倉さんはその発言を我慢していたらしい素振りを見せていた。

「なぁ、トキ。
この家に骨董品の類はあるか？」

言っておこう。
テンションが高まると奈倉さんは男口調になるのだ。

「？？
……ない」

突拍子もないことを言う奈倉さんに疑問を抱かずにはいられない。

「何で？」

「いやね、私さ、骨董品はあんま好きじゃないんだけど……
鎧とか、甲冑とかには目がないって言うか？
何だろ？
認めたくないけど、コレクターとしての血が騒ぐって言うか、匂いがするっていうか……」

「残念ながら、この家にはオレしか住んでないし、俺にはそういった物を集める趣味はない」

「よし、じゃあ、探していいんだな」

何故、そういう結論にたどり着く？
どんな思考回路持っているのか不思議でならない。

無いって言ってるのに聞き分けの悪――

（……待てよ）

トキの頭の隅で該当するモノが見つかり、アレか、などと考えているうちに……

「部屋のベッドの下に隠してあったコレか？」

いつの間にか2階の部屋（マイルーム）を物色したらしい友樹が該当したソレを持ってきた。

本当、いつリビングを抜け出したのか気付かなかったよ。

自分の興味のためなら止まらない男だ。

お前も武器は好きだったな。

「おぉぉっ！」

「うわっ……」

「銃刀法違反じゃん」

各人それぞれの感想クソありがとうございます！

そこ、明らかに引かない！

トキの予感は見事に的中。

それは紛れもなくトウコツとの戦闘で手に入れた名剣、『カリバーン』

アーサー王が最初に抜いたと言う、岩に刺さっていたあの剣だ。

「へぇ！すっげぇ！
リアルっつうか、マジモンじゃん！」

大興奮で手にとって剣を振ってみせる奈倉さん。

皆が白い目でそのはしゃぎぶりを目に焼き付ける。

曰く、2年3組最強のツンデレ（いや、デレは無いが）――
――の初めて見せる子供のような可愛らしさを覚えてしまう姿。

長らくあのクラスの連中と一緒に生活を送っていればわかる。
彼女はこんなキャラではない！

格好いいと感じることはあっても、可愛いと感じさせることのない彼女。

（つうか、鎧・甲冑で喜ぶ女子も稀少だな）

どんな生活送ってればそんな趣味が芽生えるんだか……

ちゃっかりスカートの中を覗こうと懸命なエロティカ。

そんなエロティカの後頭部に平拳打ち込む友樹。

巻き込まれまいと距離を取る智明・岩井ペア。

「トキ！これくれ！」

もはや完全に貰う気満々の奈倉　愛院。
彼女の欲するモノは、博物館行きも間違いないであろう名剣。
名剣と知ってか、知らずか、３人は奈倉さんの言動に驚いていた。
だが、トキも管理に苦労するだろうというリアルな予感と不安があったため、譲り渡すことに迷いは無かった。

「いいよ」

あっさりＯＫ。
その返事を聞いて岩井が口を挟む。

「いいのかトキ？
あれで犯罪でも起こされた日にゃ、お前まで芋づる方式で捕まったりするんじゃないか？」

「大丈夫だよ♪
ちゃんとトキの指紋は消しといてやるから」

奈倉さん、いつものスケ番的キャラに戻って。

見慣れないモノを見ると気持ち悪い。

その感覚をトキは思い知らされた。

「さて、目的完了でポロリもなかったし、飯時だし。
ＤＶＤも借りたし、俺は撤退する」

物分りのいい男１名。中身は変態だけど。

連鎖的に岩井と智明、友樹も立ち上がり、奈倉さんは相変わらず嬉々として時間と言う概念を忘れたかのような振る舞い。

が、みんなが玄関に向かうとさすがの奈倉さんも時間を確認し、帰宅。

「じゃあな、トキ」

岩井・智明が帰り、

「また明日な！」

友樹が突っ走って帰り、

「お返しに後でマイベストセレクションＡ〇貸してやるよ」

男子としては是非とも借りてみたい話を持ちかけ……

って、その前にキサマは何を借りた！？

「ん？

『ポリ○・○○デミー』

もちろん全巻一括で」

コンチクショウ！

気を紛らわせようと今夜予定していたのにっ！しかもアニメ．Ｖｅｒの方まで借りやがってるし！

コンプするのにどれだけかかったと思っていやがる。

こぼしたい愚痴を我慢しつつ見送る。

最後の１人、奈倉さんの帰り支度完了。

問題あり。

完全露出したカリバーンをそのまま抱えて帰る気満々だよ……

「何か包み隠すのいるか？」

さすがに銃刀法違反で捕まるでしょ？

真剣もって街中を闊歩している学生が警察と一悶着～、なんてニュース見たくない。

「大丈夫よ。
それより、こんなもの貰ったんだから、後で困ったときに何か手伝ってあげるから♪」

今まで見たことない笑顔を残して去ってゆく奈倉さん。
期待してないから～、って、もう視界から消えているし。

第2波が去った。

全員が帰った後に残ったものは、程よい静寂だった。

だが、何だ？
この……
妙な、置いてけぼりを喰らったような感じ。

玄関の扉を開けたままでトキは溜息をついた。
まるで嵐が過ぎ去ったあとのようだ。

（きょう一日散々だったなぁ）

疲労がピークのピークに達した時、何故か今日一日の回想が始まった。

学校で2度も保健室行く破目に遭ったし、ゲーセンでも自信喪失。

トウコツ。

藍が売った喧嘩だが、最終的には自分も加わることになった。

でも、まさか、母親がＳＲだったという話を聞かされるとは夢にも思わなかった。

大きな収穫だが、どう受け止めていいのかわからない。

喜べばいいのか、悲しめばいいのか。

しかし、どこか欠けていたパズルのピースがやっと埋まったと言う感じがし、嫌な記憶ともども思い出したが、心は満たされていた。

「なら、よかったじゃん？」

「あ……」

ぁあ？

頷きかけてソイツに気付く。

「って、ボルト！」

「何でそんなに驚いてるの？

あ、私ね。

きょう、トキん家に泊まってもいいって言われたから来たんだよ！」

元気ハツラツ！

存在が爆撃級の輝きを放つ厄介者（ボルト）登場！

「……1つ聞くけど」

「芹真さんの差し金？
違うよ！」

「……」

読心術って、読まれた側からすれば結構腹立たしいんだよね。
何か、一言も発言できないキャラになっちゃうし……

1人ブルーになって、1人納得して、1人静かに明日に備え、暗い今日という日にさよならを告げるという――
トキの『だるまさんが転んだ計画』はココで粉微塵にされた。

おそらく、肩から提げているボストンバックには着替えでも入っているのだろう。
おつまみがのぞいているけど。

（……諦めよう）

一日を通して連敗し続け――
その敗北のうち、いくらかが完敗で――
トータルして今日はほぼ全敗のいいトキであった。

嗚呼。

誰か……
さし当たって、この波状攻撃を企てた神よ。
あんたが実在するなら、今すぐ殴りたい。

現時点。
トキの精神形状をあらわすなら

“穴だらけの酒瓶”

つまり、何がこぼれてもおかしくないと言う状況なのさ。

（ううう……
もう、どうにでもなりやがれ）

ボルトのお泊り。
そこにパイロンが『差し入れ！』と称してちゃっかり加わり――
その後、『家を壊したことについての謝罪を～～』と称してハンズが加わった。

第10話－In my home…　Successive attack

結局、何もかもすっきりしないままトキはベッドにもぐりこんだ。

が、ボルトが潜ることを阻止し、1人いじけることさえままならない。

嗚呼。

また引き篭もりたくなってきたよ……

しかし――

そうさせまいと、ある計画をしているボルトだった。

第11話 ― 喧騒と平和の狭間に／Ｅｎｅｍｙ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｔｈｉｒｄ　ｋｉ

トキのベッドでボルトが夢の中へ落ちるまでそう時間はかからなかった。

問題は1階に寝る予定の2人であるが、とりわけパイロンは問題なし。

問題があるのはハンズで、仕方なくソファをベッド代わりにするなどとゴネ、何だかんだ言って気持ち良さそうに寝やがった。

ともあれ、久々に我が家（色世家）に自分以外の誰かが寝る。

眠りにつく間際、トキはその事実を認識した。

新鮮なような不愉快のような……

第11話 ― 喧騒と平和の狭間に／Enemy of the third kind

丘の上に教会が見える。

そこから空へと視線を移すと、果てしない蒼穹が広がっていた。

地上から見上げる午後の青空。

トキは墓地に立っていた。

この墓地は、教会の所有地。

見たことのない土地、来たことのない場所。

これは夢だ。

なぜなら、トキにここを訪れる理由がない。

自分は何故ここにいる。

この無償に湧いてくる幸福感は一体何なのか。

同時に発生する寂しさ、切なさ。

いままで着たことのない服。何故、スーツを着ているのか。

葬式にしては妙だ。自分以外に人がいない。

かといって葬儀が終わったわけでもないようだ。墓には何の供えも無い。

数秒後にこれが夢だと再び認識し、心の隅で笑った。

誰かの墓参りに訪れている自分。

だが、知人や親族が死んだと言う出来事は、ここ数年起こっていない。

この墓は誰のモノだ？

考えに考え、ある人が頭に浮かんだ。

まさか。

「……母さん」

目が、墓石に刻まれた名前へと落ちる。

しかし、焦点が合わない。

刻まれた名前に、目が上手く向いてくれない。

どうしてなのか少し悩み――

自分はまだ、母の死を受け入れきれていないのか。

だから、死を証明する墓石に刻まれた母の名を直視できない。

そんな自分に情けなさを感じずにはいられない。　だが、どうしても受け入れたくない現実が目の前にある。

（でも……）

ふと、それが母の墓なのか疑問を抱いた。

――もし違ったら？

――他人の墓だったら？

――考えてみれば、母の墓参りに参加したことはあるか？

（いや、ない）

それどころか、墓があるのかどうかさえ知らない。

（そうだ。これは、母さんの居場所を知るチャンスだ）

これが夢だと分かりつつも、決心する。

そう。思い出したんだ。

トウコツのとの戦闘で、封じられていたらしい記憶が。

どんなに否定しようとも死人は蘇らない。ＳＲであろうと死を簡単に覆すことはできない。

なら、『死』は受け入れなければいけない。誰も避けることの出来ない結末。

唯一決められた未来。

それでも、誰かが覚えてさえいれば、永遠に存在できる。

トキは目を開き、改めて視線を墓標に向けた。

母の死は、子供である自分が受け止めなくては。

しかし、それが叶うことは……。

ドドドンッ！

「……？」

静寂な夢に走る轟音（ノイズ）。

揺れる視線。
その衝撃で体勢が崩れる。

トキは前のめりになる体を、目の前の墓石に手をつくことで支える。
そんなトキに、容赦なく銃撃が襲い掛かり続けた。

銃撃。

三点連射。
轟音に伴う衝撃。激痛。
視界が揺れる。体が熱い。力が、自分の中からこぼれていく。

（敵……！？）

3度目の銃撃。

呼吸が乱れる。
撃たれた。背後。遅い……
夢、という感じがしない。
トキは撃たれながらも何とか振り返る。
その先に――

銃撃。

（M…９３R！）

無機質な表情で銃を構える、少年とも少女ともとれる子供がいた。
飾り気の無い服に、喜怒哀楽を知らない顔。
銃を握る白い手。

すでに１０発以上の銃弾を喰らったトキは、これで自分の人生が終わるのだと悟った。
どこかの偉大で高名な預言者にきかなくたってわかる。

―この負傷、２分もせずに死へ至る―

これが自分の最期。
その呆気なさにトキは可笑しさを覚えた。
いくら強力なＳＲという力を持っていようが、必ず隙は生まれてしまう。
常に肩に力を入れて生きていける人間など居ない。弓とて弦を張りっぱなしでは緩んでしまうものだ。それではいざと言う時に使い

物にならない。
だから、たまに外さなければいけない。
その外した時のことを『隙』というのだ。
目の前の暗殺者はしっかりとそれを理解し、モノにした。
自分の人生の最期がこれほど呆気ないとは。

「なぁ……」

銃を構えゆっくり歩み寄るその子供に、トキは声をかけてみた。
せめて、最期に教えてくれ。冥土の土産ってやつにさ。

「君は……誰だい？」

それまで無言だった子供は答えた。

「　　」

更に銃撃。

最早、声さえ聞こえない。
だが、少女はしっかりと答えてくれた。

――――！

それが、止めの銃撃だった。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第１１話－

－喧騒と平和の狭間に／Ｅｎｅｍｙ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｔｈｉｒｄ　ｋｉｎｄ－

「――っ！？」

トキは、汗まみれの体に不快を覚えつつ飛び起きた。

その横では、どんな夢をみているのかわからないが、激しく両手両足をバタつかせているボルトが居た。

（何だよ……あの夢？）

あの夢を作り出した自分の脳みそに対して自問自答し、頭を振ってから時間を確かめる。

ＡＭ　０５：４９

芹真事務所に関わってからと言うもの、起床時間がやたらと早いトキ。

そういえば昨日の今朝は、と考え嫌なことを思い出した。

「ん～、ぃやぁ～～」

トキが軽く鬱になっている横で、ボルトが寝返り――

だけで終わるかと思いきや、

「っちぃくう～！」

ワケのわからん寝言と同時にボルトの蹴り――正確に言うなら踵（かかと）――が炸裂。

もちろん金的で！

「l' ＊q# ―ッ？！」

トキは激痛のあまりにベッドから落ちた。
股間に走る激痛！

（おぉぉ！
タマァァぁッ！！）

寝ているボルトに罪は無いだろう。
だが、これはちょっと抗議しなければ腹のムシが治まらない！

男子なら一度は体験したことがあるであろう、金的。
あのジワジワと体中に響く痛みを、それもまだ意識も朦朧としている朝の一番から受けた時のことを想像してみよう！

眠気＋激痛。
この二つが伴う不快感は大陸棚のそれより深い。

食い物の恨みは海より何ちゃら～、に勝らずとも劣らない憎悪が湧いてくる。

トキも健全な男子だ。
例外なくその痛みにもがき、歯を食いしばって堪える。
後で仕返ししてやろうかと頭の中によからぬ企みが浮かび上がる。

が、しかし……
トキがボルトに太刀打ちできないことは火を見るより明らか。
下手に罠を張って待っていたところ、お得意の読心術で看破されるのがオチだ。

なら、腕力では？
ハッキリと言おう……なおさら無理！まず命がいくつあっても足りません！
故に、後で文句を言うことでしかこの怒りを解消する方法がない。

うぅ、情けねェ。１１歳の女の子に太刀打ちできないなんて……

少しずつ治まりつつある痛みを堪え、トキは二度寝を諦めた。
いつの間にかベッドの主導権を枕ごとボルトに奪われている。

昨日の不運がまだ続いているのかトキは考え、もしや今日もついていない日になるのか、と不安になった。

「……ん？」

トキは自分の部屋を抜け、階段を降りて１階の廊下で立ち止まる。

「ぐぉー……」

リビング。

ソファの上で夢の世界を堪能しつつ、豪快にいびきを立てているハンズが寝ている。

トキはどのようなリアクションを取っていいのか困り、あえて無視するという方針に落ち着いた。

それと同時――

玄関の扉が開いた。

『誰？』という疑問よりも、『何？』という疑問の方が先に浮かぶ。

「ぁ、おはようございます」

音量をセーブした声で挨拶するのは中国マフィア・首領の息子、パイロン。

功夫服の格好で両手に大量のビニール袋を携えているその姿はどこか尊敬できるものがある。

ものすごい袋の数だった。確実に１０袋はあるだろう。

一体、その袋から覗く食材をどうする気だ？

「いま、食材を取りに行って来たんですよ」
「……しょくざい？」
パイロンの言葉の意味を吟味し……やっぱ、理由がわからない。
我が家の冷蔵庫もある程度充実しているはずだ。
「ええ。実は――」
パイロンは簡潔に理由を説明してくれた。
全員が寝静まった深夜。
いきなり、ボルトが寝惚けて眼で夜食を探しにふらっ、と降臨。
誘われるように冷蔵庫へ直行し、中の食材を全て貪り尽くしたのだ。
だが、それだけにとどまらない。
家中のいたる所に保存されている『食べ物』にカテゴリーされるものを見つけ次第貪るという暴食の限りを尽くした。
「というわけなんです」
パイロンの説明の締めくくりの途中、トキは冷蔵庫に駆けつけた。
それが本当の話なら、と脅威を覚えつつ冷蔵庫の扉を開き――

「うわぁ……」

冷蔵庫を新しく買ってきた時のような小奇麗さ、“だけ”がそこにはあった。

とても長い付き合いの冷蔵庫とは思えないほど、それは見事な伽藍洞(がらんどう)っぷり。

理解していただけたでしょうか、と声がかかり……

「それも一切調理せずに食したのです」

「調理……なし!?」

驚くべき補足内容。

今度は慌てて台所を検索する。

その結果、ご丁寧にマヨネーズや唐辛子・ハブ酒・生卵・生肉・ココアパウダーまでとにかく食品関係材料の全てが食い尽くされている。

しかも、聞く話によれば全て『生』

（暴飲暴食もココまで来れば逆に驚きだなぁ）

そこでパイロンは三つ隣街にある自分の店まで足を運び、材料を

揃えて再びここへ戻ってきたのだ。

「いやぁ、本当にボルトさんは料理人の敵ですね」

「……全くだ」

それから数時間後。
朝食の準備が整い終わりそうなタイミングでボルトは起きてきた。

「おはよぉ～」

寝惚け眼で挨拶するボルト。
髪も枝毛だらけで乱れている。

「お……おはよぅ」

ボルトの挨拶にトキが返事する。
それはとても落ち着きのない声であった。

数時間前までボルトに恨みを覚えていたトキだが、いまはボルトに助けを求めていた。

その原因が、調理担当パイロン、盛り付け担当トキ、配膳担当ハンズ――という配置にあり、3人仲良く……

……調理できるか。

「だから、何でオレに包丁貸さねぇンだ？」

「さぁ何故でしょうね？
不思議と私の包丁は貴方に握られることを拒否しているようです。
私には得物の抗議が聞こえる」

全くと言っていいほど噛み合わないし、合わせようとしない錬金術師とマフィアの息子。
その狭間で右往左往するトキ。

「ざけんじゃねぇ！
テメェに負けないくらい上手い料理、俺にだって作れ……」

「ええ。じゃあ作ってください。
素手と空気のみで」

まるで子供の口喧嘩。
刃物をめぐって言い争う2人。

錬金術で作り出せばいい、という話も出たがハンズ曰く――

『昨日、この家を蛇の巣みたいにしたこと詫びたばっかりだぞ？』
などと言って頑なに錬金術の使用を拒否。
ハンズの心遣いを他所に、また我が家が壊れるのかと心配するトキ。
そんな、あまりにもレベルの低い争いにボルトは呆れ、洗面所へ消えていった。

食事が出来るまでは色々揉め事があったものの、いざ食事となればこれと言った問題は起こらなかった。
今日はいつもより早く起きたこともあって、時間的にかなりの余裕が得られた。

「そうそう。早起きは3本の毒だよ」
「……ボルト。“3本”じゃなく“3文”そして、“毒”じゃない“得”だ」

その後、何の問題も無く後片付けが始まる。
トキはパイロンに促され、台所の片づけをお願いして着替えるために2階へ上がっていった。
ベッドを直して鞄を用意。
ハンガーにかけてある制服に手をかけて袖を通す。

その隙に――
トキが2階で着替えているうちにハンズはとっとと帰ってしまった。
一声くらいかけてから行ってほしかった。が、そう思う反面で、トキは厄介そうな人物が減ったことに胸をなでおろしていたのもまた事実だ。

「おはようトキ。
上がるわよ」

タイミングよく1階に戻ってきた時だった。
入れ替わるように彼女が来た。

「おはよう」

芹真事務所の鬼登場。
迎えに来てくれたらしい。
折角なので上がってもらうことにし、そこへこれまたタイミング良くパイロンがお茶を出した。

登校時間になると全員が表に出て、それを確認しトキが家の鍵を閉める。

トキと藍は学校へ。
パイロンとボルトは芹真事務所へ向かった。

「あっ、そういえばトキさん！
いま、ウチの店は改装工事中なんですよ！アヌビスとの戦いでボロボロで！
すっかり忘れていました」

「わかった。
完成したら教えてくれ」

頭を下げてパイロンが背を向ける。
それから2人は登校を再開し、ボルトたちも事務所にむかって移動を開始した。
あまり変わらない日常。
通学路を進みながらトキはそれを実感した。

ＳＲの力さえなければ、みな同じ人間だ。

物騒な世界は嫌いじゃないが、いざ実戦の世界に踏み込むとこういう日常も大切なんだと改めて思える。
平和な国、不安定な国。
世界中探せばあらゆる国があり、そこに独特の風景がある。
この日本の風景は『平和』だ。

争いごとが全く無いわけではないが、露骨に人が人を殺すことは滅多にない。
そんな平和を受け入れられない人間も探せばいるかもしれない。
だが、この国の人間のほとんどがこの平和を受け入れている。

だが、受け入れることの出来ない――
この国の風景とは全く関係なしに常に戦いが付きまとう人々がいる。
どんな国にいようが関係ない。
力を持っているからという理由だけで襲われる人間もいる。
セカンドリアル。

協会に所属していれば、ある程度の平和な日常を保障されるらしい。
が、無所属・小規模集団となれば話は別だ。
小規模集団だと協会からの勧誘、脅威と見なされた場合は拉致部隊、あるいは討伐部隊が派遣されることもある他に、小規模集団同士潰し合い、取り込もうとし、そしていつかは協会に対して反旗を掲げて挑もうとする。

平和な日常とＳＲについて考えているうちに、トキの視界に目的地が映る。

―白州唯高等学校―

２人が校門をくぐってすぐ、あるものが目に飛び込んだ。

「汚ねぇぞ！」

朝から大声でわめき立てるクラスメイトの宮原。
その文句の対象というのが、これまた同じクラスメイトの岩井だ

った。

日常的な光景。

一方的に喧嘩を売る宮原と、一方的に喧嘩を売られては買い、その都度返り討ちにしてしまう無敗の岩井。

四の五の言わず仕掛ける男と、うんともすんとも言わず返り討ちにしてみせる男。

それが今日はどこか変だ。

宮原が仕掛けない。突っ込んでいこうともしない。

「ぐっ、岩井！

キサマは“決闘”という言葉を忘れたのか！？」

完璧に無視され、岩井に指を差す宮原。

めずらしく今日は喧嘩が成り立っていない。

「あ～、なるほど」

トキはその原因に気付いた。

岩井の隣で肩を並べて歩を刻むクラスメイトの彼女。

同じクラスの中立派の１人、秋森　智明（ちあき）

大声の宮原を完璧に無視し、智明との会話に華を咲かせている。

熱血小僧の宮原も、２人の邪魔するような役割を果たしてまで喧

囁を売る気にはなれなかった。

『人の恋路を邪魔した輩は犬に喰われて逝ってよし！』

それが2年3組の裏委員長、木田村麻衣子の格言だ。人の人生の蜜月を邪魔することを許さない。

すでに他クラスで被害者が出ているという噂がある。

ちなみに、犬＝奈倉　愛院。　彼女のことだ。

マホメドｖｓ猪木よりも酷い。　決闘が成り立ってねー。

結局――やる気満々だった宮原は全く手を出すことが出来ず、そのやりきれない気持ちを野球部の朝錬に乱入して解消したという。

「……」

「……アホ？」

コメントに困った藍と呆れるトキ。

朝から妙に濃いモノを見てしまった気がする。

気を取り直し、そんなやり取りを見ていた観客一同は登校を再開した。

1時限目：化学。　今日に限って実験。

正直、朝から薬品の匂いはキツイ。
おなじグループの5人も同意した。

ちなみにグループは、中立派5人＋藍の6人編成。
席やグループ別けは生徒の任意だ。

化学実験の先生も大胆――――だと思う人もいるだろうが、この2年3組の生徒からすればそうすることがごく当たり前で、教師が席を決めるという事態が信じられなかった。
他のクラスは教師が決めたグループで落ち着いている。が、2年3組の面々は何故それで落ち着けるのか、と理解できない者が半数以上を占めていた。

もちろん。
2年3組だけ生徒任せでグループを組ませるのは、教師側にもそれなりの考えがあってのことだ。
まず、2年3組は問題児と思われる生徒を無理やり押し込めて形成されたクラスである。
これは学校側が密として押し通してきた問題であり、今後も生徒達に悟られないよう鋭意努力する問題である。

問題児クラスの筆頭に――
ヤクザ委員長。
対立するように存在する裏委員長とやらも、警察の家の娘さんだ。
莫大な資金提供により入学を果たした大企業のお嬢様。
誰の喧嘩であろうと必ず買う殺戮マシーン。
痛いところを突くのが得意らしい、スズメバチと呼ばれる生徒。
あらゆる犯罪に手をだしているという女子。
相手が何であろうと突っ込む男。

過去に転校先で教頭を辞職に追いやった女。
同じく、過去に起こった大火災の真の放火犯と言われる女子生徒。

この面子だけでも大分手間なのに、他の生徒もやはり問題を抱えていたりする。

年上に対して極端に嫌悪感をあらわにすると言う妙な性格の男子。
やたらと喧嘩に強い男子が6人衆。
わざと留年したと噂が立っている男。
コミュニケーションを図りにくい女子。
超おしゃべり女。
超反則魔。
授業の大半を居眠りで過ごす男。
ニート候補×3（実際は、すでに就職先決定済み）。
転入して間もなく、不良間で『女帝』と噂されるようになった女子生徒。

……そう。
教師側はこのクラスを手懐けることをとうの昔に諦めているのだ！

むしろ、生徒達に任せておくと勝手にまとまり、自ずと良い方向へと向かっていくという。
自立している、と言えば聞こえはいいが、これは明らかに教師を受け付けようとしない態度の表れでもあった。従順性皆無な生徒の集まりだ。

故に、このクラス――　下手にルールに従わせようとすれば、かえって接しにくくなるばかり。
しかし、最低限の仕事をこなせば文句は飛んでこない。むしろ、他のクラスよりも積極的に授業の取り組んでくれる典型的な押して

ダメなら引いてみろクラス。

少し前の話になるが、このクラスの現代国語の担当教員は生徒との口論で惨敗を喫している。

先生がそんなことを理由に授業をサボるな、と言われてしかたなく暴力を振るうことにした。

大抵は教える立場の教師が暴力を働く場合、生徒に非がある。

それでもあえて暴力に走るのは教員の忍耐力のなさではなく、現代の子供の態度の悪さが教員にそうさせるのである。叩かずには直らないだろう。

その教員もそう考えての行動だった。　叩かずには直らない。鉄は熱いうちに打て。

それは教科書の角で叩くというしごく軽い体罰――

だが、いかなる罰であろうと関係ない。黙って叩かれるのを待つ裏委員長ではなかった。

彼女の合気の前にもれなく返り討ち。

教員は力でも負け、それ以来、必要最低限の授業をするだけにし、あまりこのクラスと深く関わらないように距離を置くことにし、他の教員も同じく距離を置いて見守ることにした。

「ふぅ～ん」

さて、そんな爆弾的問題クラスに、存在が爆弾級の魔女が介入しようとしていた。

1時間目の化学実験が終わったあとの教室移動。
いつもの5人メンバーで移動をしていた。
藍はワルクス先生に用事があると言ってグループを離れている。
たわいもない世間話をしながら教室に戻る途中、何の前触れもなくトキは盛大にコケた。

「はぁ？」

コウボウが疑問を抱く。

トキが躓(つまず)いた場所は段差も起伏も斜面も無い、真っ平らな平面が続く直進の廊下であった。
そのあまりにも見事なコケっぷりにコウボウは笑い、友樹は疑問を差し置きつつ心配し、崎島さんはノーコメントで手を貸し、智明は軽く心配しつつ落とした教材を拾ってくれた。

「すまん」（トキ）

「何でコケてんだ？」（友）

「いまの演技？」（智）

「それにしては見事だったね」（崎）

「いやぁ～
芸人だなぁトキ！」（コウ）

５人は再び移動を再開する。
他の生徒にも結構目撃されたみたいだ。

恥ずかしい……

「目眩でもしたの？」

「いや、目眩じゃないけど今日はちょっと体調が優れないっていうか……」

昨日あたりから生活のリズム崩され……
いろんな事実を知ることになって、その時の動揺がまだすこし抜けてなくて……

なんつぅか、寝不足で……
しかも今朝に至っては、いままでにないほどリアルな悪夢を見て、しまいには踵で金的だ。

精神的衛生状態はとてもじゃないが健康とはいえない。

せめてもう少し眠っていたら……と、かなり鬱が入るトキであった。

「一応保健室行く？」

崎島さんは本気で心配していた。
真横でへらへら笑っているだけのコウボウよりも遥かに好感度が高い。

「いや、大丈夫だよ。
気分悪くなったの一瞬だから」

「それ、なおさら行ったほうがよくない？」

「う～ん……
でも、つぎ歴史だろ？
トキの単位の中で最も危ない」

「あ、そうだったね」

「皆で卒業するためにはそっちを優先しないとな」

「……ああ。頑張るよ」

そんなやり取りをしながら5人は教室に到着し、クラス中央に人だかりが出来ているのに気付いた。

「何だ？」

友樹が疑問を口にする。

このクラスの連中が派閥問わずに肩を並べて何かを囲むなど、まったく前例がない。

早速、友樹がその囲みにつっこんだ。

「どうしたんだ？」

その質問を遠巻きに聞いている他の４人。

いつもなら大して関心を示さないコウボウも機嫌の良さから興味を抱いている。

友樹の質問に答えたのは、フォルテと呼ばれる男子：函音カイ（ハコネカイ）だった。

「外人の子供がこのクラスにいてさ。

職員室に連れて行こうか迷ってんだよ」

「は？

迷うところじゃないだろ？職員室だろ普通……」

そこまで聞き、中立派5人も一目見ようと人の輪に加わった。

「あ、かわいい」

これが智明の反応。

「金髪だ」

これはコウボウ。

「しかも子供じゃん？
何でココにいるんだ？」

友樹。

「……」

崎島さん。

「ボル…！？
何でココ――」

と、これがトキ。

そのリアクションは愚行、いや、愚口だった。
何の考えもなしに口から出たトキの言葉を聴き取り、数人がトキに問い寄った。

「知ってんの？」
「あの小娘だれ？」
「どっから来たのか分かるか？」
「つぅか、知り合いか？」

ハタ、と気付いた。
トキの質問攻めを遠巻きに見ている藍の視線。　ワルクス先生に用事があるんじゃなかったのか？

やれやれと首を振る藍のその仕草はまるで――
他人のフリをしていればいいのに…、とでも言いたげなものだった。

「え、と……とにかく落ち着け。
特にエロティカ！　何で息が荒……！？」

トキに詰め寄ったメンバーは６人。

コウボウ。
エロティカ。
アキバこと、村越貫二（むらこし かんじ）
裏委員長：木田村麻衣子（きたむら まいこ）
通称メイド――五十嵐沙理奈（いがらし さりな）
ダーティこと、隅田幸平（すだ こうへい）

裏委員は、事情聴取という理由だろうから理解できる。
コウボウは面白半分。
エロティカは……エロティか！
アキバも――何て言ったっけ……肥えだっけ？　燃えだっけ？
とにかくその類だろう。

しかし、なぜ五十嵐さんと隅田？

「学校にあんな娘持ち込むなんて、おまえ、オレ以上に外道じゃねぇか！」

「いや、違う！
オレは持ち込んでないし！」

「是非、妹に！」

五十嵐さんによる五十嵐さんのためのエロティカよりも上を行く問題発言。

ちょい待て。　欲しい？
しかも妹として欲しいだと！？

ハッキリ言いうけど、命の保障は無いぞ！？

「で、実際のところトキはあの金髪っ子を知ってるのか？」

「まぁ、えーっと、ちょっとお世話になったことが……」

「ほぅ、お前にロリ属性が――」

エロティカによるある意味ハイレベルな問題発言。

さすがに全員、とくに五十嵐さんは真面目に怒った。

５方向からの同時攻撃。　前後左右からの顔面同時攻撃が４。そして下から金的１。

「いや、何ていうか……」

トキの頭の中が目まぐるしく回転し、最初に出遭った時のことが思い起こされる。

いきなり訳わからないこと言い出した、と思ったらいきなり見知らぬ人に襲われ、その時に助けてもらった。

簡単にまとめればそうなる。

そうだ！

「前にさ、ちょっと暴漢の類に出くわした時に助けを呼んでくれた

のがあの娘なんだよ」

既成事実を少しだけ加筆修正。

まぁ、あながち間違いではないけどな。

後は、怪しまれないようにあくまで冷静を装って答える。

「そうなの。偉い娘ね」

裏委員長、笑顔で関心。

コウボウも首を上下させた。

「もちろん、名前を知っているのだろう？」

5方向同時攻撃にめげず、平然とした声で質問するエロティカ。

コイツ……一体全体なにを企んでいやがる？ダメージ無いのか？

「……確か、ボルト」

「確か？

命の恩人の名前もロクに覚えられないの？」

この場を必死に凌ごうとするトキに、裏委員長は笑顔で青筋をたてた。
確実に怒っている。
下手をすれば四肢の3本は持っていかれる。
実際はそこまでやらないだろうが、トキは裏委員長の怖さを知っているが故に震え上がった。

「あ、トキ！」

そんな時にかかる一言。
ボルトの台詞で、状況が一変。
クラス全員の目がトキに向いていた。
何でトキの名前を知っているの？　などと、いろんな意味で熱い視線がそう訴えている。
たじろぐトキ。駆け寄るボルト。そして、問い詰めるクラスメイトと傍観を続ける藍。

「知り合いか？」

委員長の視線が怖い。　ヤクザの息子とわかっていることで相乗効果を発揮しています。
2大委員長に挟まれた状態で問われるトキ。

前門の狼、後門の虎とはまさにこのことだ。

「え～、知り合いっていったら知り合いだけど……」

「一緒に住んでるじゃん！」

トキは進退窮まったこの状況で、一生懸命頭を働かせて答えを考えた。

そんな答えを、ボルトの無邪気かつ後先全く考えていないであろう発言で台無しにしてくれた。

もとより、ボルトは責められることはない。何といっても年齢が11歳、外見は8、9歳といったところだ。更に外国人というアビリティを兼ね備えている。

このクラスの連中のことだ、まず責めようとはしない。その代わりにトキが皆に責められる。

よってボルトはそんなトキのことなど全く考えていないし、トキを慮るという考えさえ浮かばなかった。

クラスメイトほぼ全員がざわめき出す。確実にヤヴァい。

トキはその瞬間、死を覚悟した。

おびただしい殺気。特に五十嵐さんから。

「クソォ！負けたー！」

「は？」

傍観していた藍は眉をしかめた。
あれだけ殺気立たせておいて、悔しがるクラスメイト達。

「ヤベェよ！」
「トキの国際レベル急上昇中じゃん！」
「まさか、そこまで読んでいたとは！」
「悔しいわね……」
「株価上昇中ぅーーっ！」
「外国人と来たかっ！」
「いや、いいことだ」
「認めねぇぞ！」
「変態め～～」
「私達のクラスから早くも国際人の誕生か」
「今日外人街行こうぜ！」
「トキなんかに負けたぁっ！」

完全に予想外の反応だった。
国際化？　なんでそういう方面に走るんだ！？

（本当に掌握しにくいクラスね……）

意表を突かれたのは藍も同じだ。
つくづく下手には関わりたくないクラスだと思い改めた。

教師達の気持ちが何となくわかる気がした。　思い通りの反応を示してくれない。

「で、次の時間まで後1分だぞ？」

ざわめくクラスに、高城播夜（たかじょうはりや）の一声が響いた。
この問題クラスで唯一の留年生、年上ということもあって、それなりの発言力を持っている。

「大丈夫だろ」
「次はレンガだぜ」
「でも、何か言われそうじゃない？」
「確かに」
「エロティカの事件が良い例だ」
「でも、トキの知り合いだし」
「そうさ。怒られるのはトキだけだ」
「でもさぁ、連帯責任ってありそうじゃない？」
「何とか理由を作ってトキを孤立させれば？」
「なるほど、離間の計か」

「……ォい」

次の時間は、担任の登竜寺　蓮雅による歴史の時間だ。
見つかったら何を言われるかわかったもんじゃない。

しかし、

「何をしようにも、そういうことは早くから取り掛かるべきね」

あっさりタイムオーバー。

物音ひとつ立てずに教壇に上り、立ち尽くす我らが担任。　登竜寺　蓮雅。

このクラスを唯一、手懐けた――といっていいのか分からないが、とにかく誰も頭が上がらない――先生なのだ。

「はい。みんな席に戻りなさい。
じゃなきゃ、豚トロの刑」

執行すべき刑を宣言した瞬間――雑然としていたクラスが一瞬で静まり返った。

等間隔に配置された机と背筋をしっかり伸ばして着席する生徒たち。

クラスの中心にボルトだけが残った。

「やぁ、子供。日本語分かるか？」

「私？」

「よし。じゃあ、君の用件は何だ？」

躊躇いもなく質問を始めたレンガ先生。
一瞬で静寂な空間となった2年3組でボルトとレンガは向かい合い、質疑応答をはじめた。
全員の目がボルトかレンガに向いていた。
どうなる、と緊張して見守っているのだ。

「私の用件？
学校と、トキの見学だけ……です！」

いつもと変わらぬ元気な返事。
どうでもいいけどボルト、オレの名前を出さないで。

そう願うトキであったが、すでに遅い。
言葉として出たものは2度と戻らない。吐いた唾は飲めない。

「トキの？　見学して何とする？」

「うん、とね……トキって弱いじゃん」

本人を含めてクラスメイトのほぼ全員がその事実を承知。
弱さでいくならおそらく、最弱ランキングベスト3は確実だろう。

「確かに。

私から見ても、トキは即刻鍛えなおさねばならないほどの軟弱さ」

「だから、私が友達に頼んで鍛えてもらおうと思って、トキを見に来たの！」

クラス内にざわめきが発生する。
その話を信じきれない者。
なぜトキなのか考え込む者。
羨む者。
疑問を抱く者。

そこへ――強制鬼ごっこ、と――レンガの一言で再びクラスは静まり返った。

プチ支配政治、ココに在り。
誰も文句をいう度胸と実力を持ち合わせていない。

「理由になっていないわ」

「え～っと。
友達の所に連れて行ったら、半年くらいは帰ってこれないから……」

「つまり、国外？」

「う～ん……
まぁ、この地でないことは一緒だね」

「それで、トキを連れて行っても学業に支障がないか確かめに来た」
「あ～、う～、んっ！
そういうこと！」

ボルトの問題発言に再びクラス内がざわめき出す。

「海外留学！？」
「そうか！　だからあの外人っ娘と住んでいるんだ！」
「眠ぃ……」
「そういえば、トキの父親も海外にいるって噂だぜ？」
「海外か～」
「ブラジル行きて～！」
「先生～、暇だからトイレ行ってきます」
「いや、やはり今時はシンガポールでしょ」
「古っ！」
「いや、“いまどき”なんて無い！」
「海外ねぇ……」
「そうだな。行きたいところ、人の心それぞれだし～！」
「じゃあ、ハワイか」
「定番だね」
「よし！絶っっ対、外人街行こうぜ！」
「心の在り処っていうか……」
「……インド？」
「いや、アメリカとか？」

これ見よがしにざわめき出す生徒達に、

「ガムボールマシンの刑」

ボソッと一撃……じゃなくて一言。

再びクラス内が静まり返る。

「寝るな四式（よしき）。

愛院（あいん）、トイレでタバコを吸わないように。苦情が来てるから。

それから、２８（ニィハチ）とその不愉快な仲間達。いかな理由があろうとも外人街には近付くな」

１人も聞き逃さない我らが担任。

どうでもいい――よくない――が、彼らの命令無視間違いない。

いきなり言い出したことは必ず実行してしまうのが彼らなのだから。

ごん！

そして、これまたいきなりだった。

このクラスでは最早おなじみ。クラス１の居眠り君：樋口四式（ひぐちよしき）が勢いよく夢の中へダイブ。

担任の恐怖支配政治より眠気が勝ったらしい。　注意された直後によく寝られるもんだ。

そして毎度のことだが……
なんで机に額を強打しておいて眠れるんだ？

（あれ……？）

もらい笑み。
じゃなくて、もらい眠みぃ。
四式が眠ってからすぐ、トキも眠気に誘われる。

「それで、私はトキの担任であるのだけど……」

レンガの上体が前のめりになり、すぐに体勢を立て直す。

「――？
おかしいわね？」

眠ってしまおうか迷っているトキ。
しかし、単位の心配がある。

不安と眠気の狭間を行き来する意識。そんなトキの耳に担任の言葉が流れてくる。

「睡眠はとっているはずだけど……」

「先生眠いんですか？」

少し心配そうに見ていた裏委員長が聞いた。
トキは自分の腕を枕にして夢の中へ向かうことを選んだ。夏だと言うのにまるで春のように心地よく、つい眠りたくなってしまう。
仕方がない。
後で崎島さんにノートを見せてもらおう。
睡魔がトキを夢の中へと誘導を始める。

「ええ。
何故かいきなり眠くなってきたんだけど」
「じゃあ先生。
今日は、オレも眠いんで今日は睡眠授業ってことで」
「じゃぁ、私も～」
「オレも」
「僕も……」

「あなたたちね、寝言は寝て――ＺＺｚ」

その異変に気付いたＳＲが６人いた。
藍もその内の１人である。

（この眠気は……バク！）

気付いた時にはすでに遅い。
敵の仕業と分かっていながらも体が機能しない。

狙いはわかっている。トキだ。
私がいながら……

そう分かった瞬間に、悔しさが込み上げてきた。
しかし、既に相当な眠気を誘われているこの体では身動きひとつ出来ない。
これではトキを護ることが出来ない。

これでは、アヌビスの時と同じではないか……

「藍ちゃん」

強制的に夢の中へと引きずり込まれる意識。
机の上で身動き出来ずにいる藍の前にボルトが立った。

かすむ視界に映るボルトは、優しく微笑み――

「今日はゆっくり休んで。
2日も強い人と戦ったんだから」

「パル……」

「アヌビスでしょ、それにトウコツだよ。
しかも、アヌビスで大怪我したんだし、今日は装備も少ないんでしょ？」

「トキを、ま――」

睡魔に押し負け、藍の目蓋が閉じていく。
限界まで意識を保とうとしたこともあり、睡眠反動は怒涛の如く勢いで藍を侵した。

「きょうは休んで。ねっ？
私が――」

返事もできず、藍は完全に夢へと堕ちた。

睡魔に侵される他の生徒達。
老若男女を問わない無差別侵攻。

ボルトの体が光り始める。

その顔に――
藍に見せた微笑みは一片たりとも残っていない。

「――皆を護ってあげるから」

第11話―喧騒と平和の狭間に／Ｅｎｅｍｙ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｔｈｉｒｄ　ｋｉ

「むっ？」

学校の敷地内に侵入する他のＳＲに混ざり、男は警戒した。

自分でさえ勝てないＳＲがいる。

そして、自分達に対してただならぬ殺気を放っている。

他のＳＲもそろそろ気付くだろう。

その時は忠告してあげよう。

潔く逃げよう――と。

第１２話－魔女ＶＳ鬼！動き出した無所属連合！－（前書き）

人とは空ろなもの……
自らの価値を求める。

空を仰ぎ、地を踏み、海を越え、時に自分の過去を振り返り、未来に不安を覚え、一時の幸福を悔い残さぬように謳歌する。

そこに自分の価値は存在したのだろうか？

筆を走らせ、書に耽り、風に当たって空を仰ぐ。剣を振るい、戦い方を学び、幸せについて考える。

（私は、何を求める？）

兄弟は皆、彼を尊敬する。
だが、どんなに讃えられようと、彼の心が満たされたことはない。

（私は一体……）

１人で塞ぎこむ時期もあった。

しかし、彼にもやっと――
自分から望む目標がたった。

（世界を変えよう。
無所属は、最近組織化したから誰を潰せばいいのかわかりやすい）

最初の目標が決まる。　まず、無所属連合。

急に連合した目的を探るため、男は自ら連合の1チームに加わった。

極東での作戦に伴って編成された部隊。
何らかの研究のための実験体集め……

反吐が出る。
やろうとしていることは誘拐に他ならない。
男は、いざとなったらチームを裏切ろうと硬く決意した。

そして、――学校の校門で何度も深呼吸し、殿（しんがり）を務める。

無所属連合による、作戦にしてはあまりにも稚拙な『作戦』が始まった。

第１２話－魔女ＶＳ鬼！動き出した無所属連合！－

どうしようもない事。
それは誰の人生にだって最低一度はある。

偽りの終わり、安心した頃に蘇る不安、不意を突くように発生する事故・事件。

ホート・クリーニング店店長、ヴィラ・ホート・ディマ。
彼女も例外ではなかった。

闇影使い最高の魔法使いという肩書きを持つ、元テロリスト。
今でも所属を問わずにあらゆるＳＲ（セカンドリアル）とのコネクションを持つ黒き魔女。

闇影を司る人にして人の領域を超越した者。
しかし、現在は協会を抜け、小規模集団となって芹真事務所と手を組み、常時共同体制を示していた。

そんな彼女を不安に陥れる事態が発生していた。それも現在進行形で。

――ボルトの復活――

しかし、それは有り得ないはずだ。
有り得ない事態であるだけにディマは戸惑いを隠せない。

（なぜ、いま彼女が出てこられる？）

最強に数えられる魔女の1人と謳われるディマが不安になる理由。
それが――

『ボルト・A・パルダン　唯一の封印成功者』

悠久の眠りへついているハズのボルト。
数百万の犠牲の果て、ディマに託された封印の代行。

無限の眠りに堕ちた『創造されし災害』
災害を眠りの彼方へ封じた『対する黒鍵』

彼女を包む夢の殻が、音もなく崩壊を始めていた。

ＡＭ　０９：５９

何の前触れもなく、白州唯高校を中心に半径３Ｋｍ一帯は静まり返った。
学校の内部や民家の中も例外ではなかった。
つい数秒前まで学校は活気で溢れかえっていた。
それが突如、無理やり夢の中へと引きずり込まれたのである。生

徒も職員も皆。
睡魔に侵された教室の中でボルトは怒りに震えていた。
――こんな事があっていいの？
学校……
これからの長い人生に備えて学ぶ場所だ。
（こんな大事な場所なのに……）
睡魔を大量に放出している犯人はそのあたりを全く考慮していない。
自分達の目的のためなら何であろうと犠牲にする。障害として取り除く。
他人のことを一切考えない最低な連中。
自分達が最優先なのだと錯覚・勘違いしている連中。
子供……生徒たちのことを何も考えていない。
（絶対に護る）
目の前で睡魔に負けたメインボディガードの藍に再び声をかける。
返事はない。

「今日は私が頑張るね」

ボルトは撃退を決意し、深呼吸を始める。
光に包まれたボルトの体が膨らみ始め、一定のサイズで止まった。

学校に憧れ続けたボルト。
夢にまで見た学校に今日初めて彼女は足を運んだのである。
将来に備える生徒で溢れ、喜怒哀楽をあらゆる人々と共にすることが出来る場所。

そんな場所まで奴らは敵としてやって来た。

「さぁ～て。何人……」

ボルトから放たれる光が納まった頃、ボルトは今までどおりのテンションを取り戻していた。
怒りに任せた戦闘をボルトは嫌う。怒ったからといって敵が消えてくれるわけではない。逆に戦闘には冷静な判断が必要であることを知っていた。

閃光の消えた教室。
窓辺へと歩み寄り、正面から堂々と歩いて侵入してくるソイツ等の姿を確認する。
――１５体。

「少なっ……」

軽く愚痴をこぼしつつ窓を開ける。
そして、躊躇なく――
ボルト（１７）は飛び出した。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第１２話－

－魔女ＶＳ鬼！
動き出した無所属連合！－

乾燥した夏の空気。
前日に雨が通過したとは思えないほど乾いていた。

ボルトの出現に気付いた侵入者たちが足を止める。
2階からの飛翔する子供。重量を感じさせない静かな着地。

「むっ！」
「隊長」
「アレは……」

その中のリーダー格、アイルランド系の長身青髪男が着地した子供について記憶検索を始める。
その最中、後ろをついてくるSRの何人かは早くも気付いていた。

「はて？
どっかで見た顔……」

「あいつ光の魔女じゃないですか！？」
「え、マクマランを倒した奴？」
「ボルト・パルダンじゃない！？」
「でも何か……写真で見たのより大きくねぇ？」
「バカ！姿を変えられるって噂あったろ！」

「いいから早く行けよ」
「お前らみたいに暇じゃないんだからさ～」

ボルトを知る者半数以上、無知数名。

まず、名乗ろう。
ボルトはそう決めた。
彼らのリアクションに付き合っている暇は無い。

そしてこんなリアクションには既に飽きが来ている。
大抵のＳＲがボルトと対峙した時、その反応はほぼ共通して驚愕へと走るのだ。

「ボルト・Ｓ・パルダンです。貴方達は？」

ざわめくＳＲ、困惑するＳＲ、逃げ出すＳＲ。
ＳＲたちの間にこんな話があったのを思い出した連中が逃げ出したのだ。

――ボルトに名乗って挑んだ者は例外なく死去！

が、それを知らないリーダー格はしっかりと答える。

「ふふん。私は魔法使いのＳＲ、リデア・カルバレーだ！」

「あ～、知ってる。
風の特級魔法使いの」

テロリストにしてはある程度名の通ったＳＲだ。

その後ろにいる他の面子もほぼ全員がテロリスト。
敵は無所属だと判断するに十分な顔ぶれだった。

「そうだ！
驚いたか！」

「全然」

自分の肩書きを誇る魔法使い。
ボルトも彼のことくらいは知っている。
風の魔法を使わせたら右に出るものはいないといわれ、類を見ないほどの風使い。
だが、興味ない。

「えっと……
あなた達はここがドコだか分かってる？」

「日本であろう」

「隊長。あまりレベルの低い返事は……」

「何ぃ？
雇われた身のでありながら言うじゃないか」

「まぁ……それは」

「ね～え。ここがドコなのか本当に分かってる～？」

再びボルトの質問。
軽く無視されたようで少し苛立たしい。

「学校でしょう」

「……はい。正解」

リデアではない、別のＳＲが答えた。
僅かに機嫌を損ねながらボルトは返事を返す。
それと平行し――

魔法使いが２。
バクが２。
ゴブリンが２。
ゴーストが２。
妖精が１。

逃げ出した連中を省き、目の前に残っている敵のＳＲをボルトは把握する。
彼らの纏っている光がボルトの中にそういった情報をもたらす。

そんな中、１人――
赤茶色の髪をしたリデアとは別のもう１人の魔法使いも、ボルトを観察していた。

――聞いた話では、１０代なりたての小さな女の子という話だった。
が、目の前にいるボルトは話通りの容姿に当てはまらない。
少なく見積もっても１７、１８歳。身長も１７０は確実にある。
全く、話の内容と異なる。

「あなた達はどうして学校まで入ってきちゃうの？」

「ほぅ、どうしてだと？
シキヨ　トキの価値はキサマも知っているはずだ」

風の魔法使いが質問に質問で返す。
その背後でもう１人の魔法使いが準備を始めた。

「我々は我々の研究に適した実験体を探しているのだ。シキヨ　トキは実験の器として申し分ない素質を持っているのでな。
そう、是非とも我らの手の内に招こうと思っている！」

「誘拐じゃなくて？」

「それは人の解釈それぞれ！
我々の招待がキサマの目には誘拐として映っているだけの話だ！」

――ウザ。
ボルトは一呼吸置いてから、肩にかかった髪を後ろに撥ね退ける。

「あなた達はどうしてもトキを手に入れたいわけ？」

「無論だ。
それ以外の目的で我々の利益に繋がる『何か』がこの国にあるとは考えにくい！」

（あ～、もう！
この人と話すのヤメた！）

断言する風の特級魔法使いに呆れるボルト。
1秒でも時間を無駄に出来ない。
夢の中へ引きずり込まれた人々を救いたい使命感にボルトは駆り立てられていた。

「故に！　我々も早く自分達のいるべき場所に戻るために手っ取り早く目的を達成しようと――」

そこまで言いかけた時、対峙するボルトが動いた。
人差し指を向ける。　行動はそれだけ。
しかし、全員がその指の向く方向、右側を確――

瞬間。
僅かな蒸発音を伴い、周囲が光った……気がした。

――認したリデアは疑問を抱いた。
真横、右側に並んでいたゴブリンの姿が消えていたのだ。

「ん？」

リデア本人がそれを視認した時、残っていたのは焦げたアスファルトと妙な臭い。

それが何を示しているのか、さっぱり分からない。
唯一わかるのはボルトの攻撃であること。

しかし、一体どのようにして？
視線をボルトに戻すと、

「次は君ね」

人差し指で指名。
リデアはその指が差す方へ体を向ける。

今度は反対、左側。
ゴーストのＳＲ。

「頑張って避けてね～♪」

笑顔で攻撃宣言。
ボルトは有無をいわずに攻撃を決意した。

――コイツらは話し合ってどうにかなる相手じゃない……というよりもう何も話したくないのよね～♪

（何だ？）

指名されたゴーストは、訝しげにボルトに注意を注いでいた。
自分を指した指が、今度は空へと向けられている。

（避けろ……？
指？指……？）

何が起こっているのか理解できない諸々のＳＲは、本当にボルトの仕業なのかと訝しげにゴーストを凝視していた。

視界いっぱいに広がる夏の空。
鮮やかに浮かぶ雲。

そして、何の前触れもなく――
ゴーストは消滅した。

「うおっ！？」

（やはり光！）

「はい！ざ～んね～ん♪」

リデアは目の前の光景に驚きの声をあげ、もう1人の魔法使いは自分の予感が当たってしまった事に驚いた。
あどけない笑みを振り撒きながらボルトは次を指名。
次はこの睡眠を生み出している原因の1人、バク。

「オレ!?」

ボルトの指が空へと向く。　バクも空を向く。
――避けられるのか!?
しかし、避けなければ死ぬ。

「ちっ!」

リデアの後方に控えていた魔法使いが動いた。
術文を唱え、ボルトに補助装具の短剣の切っ先を向ける。

「Rディ――!」

呪文詠唱の途中で魔法使いの動きがピタリと止まる。
もちろん、ボルトの仕業だ。

「私ね、遊ぶのを邪魔されるのは嫌なんだ。
あなたも嫌じゃない？そういうの」

その魔法使いは見事に固まっていた。
意識はある、感覚もある。だが、体の自由だけが利かない。

「それに、正規魔法使いのあなたなら分かるでしょ？
ベクター・ケイノス」

（くっ、読心術か！？）

目の前の光景を見ていたリデアは思い出した。
ボルトという魔女が最強の理由。
――その秘訣が高度な読心術にあるのではないかという噂。
敵の心を見透かし、作戦を看破、敵を心から崩していく。

「ケイノスだけじゃないよ。
リデアも、他の人もそう」

バクの目が空からボルトへと落ちる。

その時――
一瞬の隙を突き、ボルトの魔法がバクを消滅させる。

「あなたたちは常に私の補助装具の中にいるのよ？」

（あ、なるほど……だからか！）

いきなり彼が――

ケイノスは自分が動けなくなった理由を悟った。

遅れて他数名のＳＲも気付く。

ボルトから直接魔法を使った気配が感じられないことを妙に思っていたが、今の説明で納得がいく。

「人はね……光なしでは生きていけないんだよ？」

――魔法を使っている。

――それも、誰も気付けないほどごく極めて微量の魔法を！

空から襲い掛かる一条の光。

それが、ボルトが光を極限まで収束し、光の速さで標的へと落とす『光撃』。

収束により質量を確保、高熱を発生する。

更に、質量と高熱を得た光に落下を与えることによって威力を倍増させ、直接敵に落とし一撃で敵を仕留める。

それはすでにエネルギー兵器の域か、それ以上の存在。

その時、全員がリデアから魔力の蓄積を感じた。

ボルトに攻撃をする気だ。

ケイノスはそれを咎めたかったが、体が動かない。

――隊長が無駄死になる！

そして、ボルトはリデアを迎え撃つ気で満ちていた。

この隊のリーダーがリデアだ。彼を欠いたら次にどう行動をすればいいのか――

それ以前にこの隊をまとめる器量を持ち合わせた者などいない！

「華創実誕幻（かそうじったんげん）」

ボルトの魔法が発動。

それと同時だった。

「天段：亜時砦（あじさい）」

天からの裁き、ボルトによる断罪の光――

それが突如発生した不可視の壁にぶつかり、リデアの抹消に失敗する。

光が何かに遮られた。

「なんだっ！？」

「へぇ～」

リデアは頭上で起こった事態に困惑した。
銃弾以上のスピードで上空から降り注いだ光撃。
それを妨げた不可視の壁。

ボルトの光と、それを防いだ術。
リデアを護った男が学校の敷地内に入ってくる。光がボルトにそれを伝える。

黒い髪、白い目、青いワイシャツ、スーツ姿。
一見すればただの若手サラリーマンにも見えなくはない。　そう、一見すれば……

「ここで数を減らされるわけにはいきません」

「キサマ、勝手な真似を……！」

「その勝手な真似に助けられたのが隊長殿。貴方です」

空気が変わる。

それまで邪心を持って対峙していたボルトだったが、その男の出現と同時に遊び心はどこかへと消えていた。

「彼女は私が抑えます。

その間、リデア隊長らで目標を確保してください」

「断る。私が魔女を倒す！」

会話を聞かず、ボルトは男に意識を傾けていた。

リデアを護った男。

――防がれたのは、完全に見切られていたから。

「無理です。隊長は今の攻撃を避けるどころか反応することすら出来なかった」

非常に痛いところを突かれるリデア『隊長』。

隊長としての器ではない――読心術で男の心の叫びを読み取るボルト。

「しかし、私は……」

「解らないのか？

行け、リデア。

君のような中途半端なＳＲで勝てる相手ではない」

ボルトは初めて気付いた。

ここにいる誰よりも殺気を放っているのがあの男だと。

――下手なＳＲより遥かに強い。

「くぬぅぅ～！
雇われた身のくせに！」

「私を雇ったのは貴方じゃない」

やりきれぬ思いを残し、リデアは渋々男の指示に従う。
だが、それを見ているだけのボルトではない。

光撃を仕掛けた。

（落下光跡！）

ボルトの魔力が動き始める。
視界いっぱいに広がる景色から少しずつ光を集め、それがある程度集約された瞬間、再び一条の光が降り注ぐ。

目標はリデアを救った男。
しかし――

「一段：薄（すすき）」

遅滞効果を与える効果の聞き慣れた陰陽術。

頭上から迫った光撃が緩慢になり、やがて光は徐々に雲散する。
光は自ら形状を維持することが出来ない。
――光の魔術の対処法を知っている。
ボルトは目の前の男だけに興味を持った。他のＳＲはすでに眼中に無い。
（強い……
それに、聞き慣れた――藍ちゃんと同じ術）
しかし、最もボルトの興味を引いたのは彼の術でも殺気でもない。
男の顔――
（トキの兄弟？）
２度も術を阻止した男。
それでもボルトは次の光撃を仕掛ける。３度目の光撃、落下光跡。
ただし……
「落下光跡　絨毯・Ｖｅｒ！！」
今度は複数の光が多方向から一斉に襲い掛かる。

真上からの光撃に加え、斜め方向、水平方向からの攻撃。
それはまさに光線の乱射。　どこへ逃げようと死角は無い。
だが――

「二段、下：釣鐘（つりがね）」

男はボルトの攻撃を予知していたかのように、同時に術文を唱えた。
重なる2人の声。
ボルトの光撃が始まると同時、男の防御術も発動する。
多方向から迫った光撃は、再び不可視の壁にぶつかり消滅――いや、今度は全て反れてしまった。

「わかりましたか？
皆さんで目標を確保してください。私が彼女を止めておきます」

彼の後ろで全員が了承する。
――俺達の手に負える相手じゃない！
その反応に男は満面の笑みで応えた。

「では、行って下さい」

「行くぞぉ！」

「“行かせ／生かせ”ないっ！」

再び複数の光撃が集団めがけて放たれる。

先ず、前後左右同時。

「天段：八衛柵螺（やえざくら）
二段、上：夕顔（ゆうがお）」

術文の直後――

土の塊が地面から生え、空へ空へと急速に伸び始めた。

六方から迫った光撃がソレに遮られる。

（藍ちゃんが自主課題にしている別段同士の同時発動！）

次に迫る光撃、上下同時。

空中の光による上：四方向。地面を照らす光が下：三方向。計7条の光撃。

しかし、男の術はそれも防いでみせた。

――天段：ヤエザクラ

その効果で八方と上方からの光は全て遮られ、

――二段：ユウガオ
地面に蓄積されていた光が闇の蓋に覆われ、そこから光が発生することはなかった。

「俺に続けぇ！」

隙に乗じ、リデアが僅かに吹いた風に乗る。他のＳＲもリデアの魔術によって風に乗って白州唯高校内に突入。
風の特級魔法使いと言われるだけはある、とボルトは思い改めた。
髪がほんの僅かになびく程度の微風。そこに足場を作ったのだ。
リデアはその動く“足場／風”に乗ることでボルトの頭上を飛び越えていった。

――さすが、特級魔法使い。

（あれ？
そういえば、私は何て呼ばれていたっけ？）

校庭で向かい合う光の魔女と陰陽術士。
２人を残して他すべてのＳＲは学校内へと侵入していった。

「――さて。
あなたは光の魔法使い：ボルト・パルダンですね？」

先に口を開いたのは男の方。
ボルトは自分の階級を思い出そうとしながら――思い出せない――頷く。

思い出すことを完全に中断し、男に聞き返す。

「あなたは哭き鬼のＳＲね？」

「その通り」

「それで――
あなたは藍ちゃんのお兄さん？」

「さぁ……
どうでしょう」

「当たりね。陸橙谷（リクトウヤ）　麻さん」

（本名を……
読心術か？）

あくまで笑顔を崩さない男：麻（アサ）。
ボルトも負けず劣らずの笑みを振り撒く。

笑顔のまま向かい合う２人。

顔こそ笑ってはいるが、実際はいつ攻撃を仕掛けるか見合っている。
先に隙を作った方が負ける。
数秒経過し、風が吹いた瞬間――

「目潰しビーム！」

焦れたボルトの奇襲先制攻撃！
しかし、アサは上半身を大きく捻ることによって躱わし、反撃に出た。

「一段：菫（すみれ）！」

同時にボルトを取り巻く重力が重くなる。
まるで自分に足が無いかのような錯覚に陥るほどの無力感。自分ひとりの力では立っていられない。
日常ではありえない重力。

「な、なにおぉ！」

しかし、ボルトも負けずに次の術を繰り出す。
アサはそれも予測し、回避。

（この人、魔法使いと戦い慣れている！）

無駄に動かない、無駄に止まらない、『作っておいた隙』の存在を看破している。対抗できる術を持っている。

そして、魔術の種類を的確に予測している！

驚異を覚えずにはいられなかった。

しかし――

（何ていう子供だ……

あの強重力下で反撃に出るとは）

大抵の人間――

いかなＳＲでさえまともに立っていられなくなるハズだ。

しかし、ボルトはゆっくりと、確実に立ち上がっていた。

「あ……」

ボルトはアサに指差し何かを訴える。

それは――

（いつの間に！）

指を差したその背後にボルトがいた。
しかも、視認した時にはすでに攻撃モーションに入っている。

アサは咄嗟に横へ飛び距離を取る。
ボルトの手から発生するビームソードが空を切る。

攻撃を躱わされたボルトと強重力の下で立ち上がるボルト。

――ボルトが2人。
アサは判別を始める。

（おそらく、術を受けた方が今は虚像）

アサの手が光剣を発生させているボルトへ向く。
咄嗟にボルトの読心術が告げる。
次の術は――

「やばっ！」

「二段、下：紫苑（しおん）」

ボルトはこの術を知っていた。
以前、藍に折檻として喰らった凶悪な術。

その効果は――視界消失――
しかも、術の効果を解くことが出来るのは、術をかけた術者本人だけ。

ボルトは必死にその術を避けた。
２度とあの暗闇は体験したくはない！

姿勢を低くし、アサの指先――
射線から逃れる。
回避してからそれが計算されたものだと気付く。

「理壊装円破解（リカイソウエンハカイ）」

一瞬での装着。
ボルトは僅かに戸惑った。変わった形の金棒。

――トゲの代わりにサムライブレードが取り付けられている？

アサが距離を詰めてくる。

（目の前っ！？）

鬼のＳＲたちの間で歴史的に愛されてきた得物――金棒、リカイソウエン。
金属製の打撃武器。
だが、彼の持つ金棒には、斬撃武器としての機能も備わっている

ようだった。
しかも――最高クラス『ハカイ』の名を持つ棍棒。
ハカイと名のついた金棒の破壊力は、戦車の装甲すらも破る！
横一閃。
避けられない！
ボルトの体の上下半身が別離――だが、流血無く、大粒の光の粒子が空気中に散った。
（やはり……
光で残像を作り、その残像の中に魂ごと移動できるというわけか。
抜け殻戦法、囮としてはうってつけという訳だ）
（この人、私の戦い方を分析している？）
それまで強重力によって自由を奪われた『虚像のボルト』が『本物のボルト』へと戻る。
アサは次の術を用意。　要する時間は０．２秒。
ボルトも対抗策を思いつく。
「一段・薄」
遅滞効果の術。

ただでさえ自由を制限されたボルトにそれを躱わす術はない。

もとより藍や、いまアサが使っている陰陽術は不可視のものが多い。ボルトの光撃との大きな違いと言ったらまずそこが挙げられる。

次に術の速度。

ボルトの光撃は文字通り光速。それに対し、藍の華創実誕幻は銃弾程度かそれ以下のスピード。しかし、遅滞効果と組み合わせて使うことによって確実に当てることが出来る。

ボルトの感覚に異常が発生する。

音が聞こえない、周りのものが異常な速度で動いている……

「三段：秋桜（こすもす）」

アサの右手に握られた金棒に華創実誕幻の力が乗る。

つまり、棍棒からも華創実誕幻の効果を相手にぶつけることが出来るのだ。

（秋桜は確か、痺極枝死！）

光の速度で直接頭に伝わるアサの攻撃方法。

直撃は免れない。

アサの狙う場所は頭。

一撃で脳の機能を停止させることが出来る。

しかも、『打撃＋麻痺』だ。

（これなら！）

ボルトの準備も整い、同時――
アサの攻撃がボルトの体を破壊した。

左側頭部から左肩へ振り下ろされ、左腕がもげる。

「むっ！？」

ボルトの体を破壊した瞬間、光の粒子がボルトの周りに漂い始め――

1人だけスローモーションの中に取り残されていたはずのボルトが、通常速度での行動を再開する。

ハンズとの戦いの最中に思いついた戦法だ。光質変化とでも言おうか。

（薄の効果を解いたか……）

「落下光跡ぃ！」

「一段：椿（つばき）！」

光撃再び。　しかし、威力は先程のものとは比べものにならない。

慌ててアサは距離を取る。
顔をあげたアサの目に、空中に浮かぶボルトが飛び込む。

（無傷……？）

確実に破壊した頭部と左腕。
しかし、ドコにも傷は無い。それどころか、流血や血痕１つすら無い。

（これが、光の魔女か！）

体勢を直し、理壊装円破解を握りなおす。
ボルトもアサの戦闘能力の高さに驚いていた。

「ねぇ、アサさん」

「はい？」

「学校に行ったことある？」

どんなに驚こうと笑顔を崩さない２人だったが、ボルトの顔から笑顔が消えた。
つられるようにアサの顔からも消える。

「いいえ、学業はすべて自宅で。
あなたは？」

「私も行ったことないよ」

アサはボルトから魔力の蓄積を感じ取っていた。
ボルトもアサが準備を進めていることに気付いている。

「だからね、学ぶことを邪魔する人は許せないの」

「同感です。
しかし、今は仕方ない」

「仕方ない？」

「色世　時を狙っているのは協会だけではない。
すでに私のような死者の端くれの耳にも噂が流れているほどです」

「トキがメイトスを倒すＳＲっていう噂？
それとも、トキの眼に価値があるっていう噂？
でも残念。
今のトキじゃメイトスに秒殺されるだけだし、トキの力はトキの中に完全定着しちゃったんだよ」

「そうですか。
しかし、それを知らずに協会のＨＥＲＯ－Ｓや、無所属連合のＮＩＧＨＴＭＡＲＥが争いを始めました。この国が戦場になろうとし

ているのです」

「うん。知っているよ」

「知っている？」

「少しずつだけど、この街にいろんなＳＲが入ってきていたり、発生しているんだよ」

「私は、この国が戦場になる前に色世　時を別の国に移動してもらうか、拉致することによって人々の無駄な衝突を避けたい」

アサの言葉に耳を傾けながらボルトは考えた。

この世界のどこへ逃げようと、協会は必ずトキの居場所を突き止めるだろう。それが可能なＳＲが協会にはいるのだから。

そしてそれは協会だけじゃなく、無所属のＳＲたちの中にもいる。

協会の預言者や、無所属の千里眼能力者（クレアボヤンス）。

「でも、トキは渡さない」

「その結果、多くの無関係な人々が死んでもいいのですか？」

「ううん。死なせないよ」

ボルトの手が光に包まれてゆく。

仕掛けてくるつもりだ。

接近戦。

アサも金棒を握り締める。
やはり、この戦い方が手っ取り早い。

「その為の――」

その瞬間――アサは視界からボルトを見失う。
光速移動。
直感が告げる。

（後ろ！）

理壊装円を振り、ぶつかる。
そこにボルトはいた。

衝突する金棒と光の剣。

「私達だよ」

――再びぶつかる。
三合、四合！

「天段：大紋慈双（だいもんじそう）」

ボルトの三撃目を防ぎながら唱える。

直後――

アサの中から、同じ姿の模倣体が出現する。

右に1人、左に1人。

合計3人のアサがボルトの視界に現れた。

（虚像……じゃない！）

ボルトは空中へ退き、見極めようと目を凝らす。

全てが同じ。

感じられる気配も、総合的戦闘力も。

3人のアサは全てが共通し、相違点などなかった。

「大紋慈双。

効果は有意識体の召喚」

「有意識体――

ってことは……！」

ボルトの真下でアサが、

「一段：薄」

同時、ボルトの背後からアサが、

「三段：秋桜」

そして斜め下、本体のアサが――

「二段、下：麒麟（きりん）」

3体同時。

真横から見て、1：2：√3のポジション。

同時に3つの術がボルトに襲い――

「やっぱり！」

攻撃が迫っているにも関わらず、ボルトの顔には笑みがともっていた。

アサの術がかかるよりも早く、いきなりボルトの両手は真下と斜め下に向けられ――

指先に僅かな光が灯り、そこから光線による乱射が始まった。
十指から放たれる１０本の光線。
必殺の威力こそ無いものの、ある程度の質量と熱を持っている。
それに目的は殺傷ではなく、術の妨害だ。
狙い通り、真下のアサと本体の術が途中で途切れる。
――術文の失敗。
十分に魔力が行き届かなかったことと、十指から連続して放たれる光線の乱射に術がかき乱され十分な途中で打ち消されてしまった結果だ。
魔力は魔力を持って潰せることをボルトは完全に忘れていた。思い出せたからこの行動に出たのだ。
更に、ボルトは光速移動で背後から迫る三段目の攻撃を躱わす。
真下にいたアサが接近戦で挑んでくる。
ボルトも手刀光撃で対抗した。
一合、二合……
真横からもう1人、アサが近接戦闘に加わる。
2対1。
しかも、どちらのアサも相当戦い慣れていた。
滅多に接近されることのないボルトにとって少しやりにくい相手だ。
その間、アサ本体は何もせずにボルトの動きを見つめていた。

（あれで本気なのか？）

数秒眺めてわかった。
ボルトは遠慮している節が見えた。

「ボルトさん。どうして――」

「だって、藍ちゃんが悲しむかもしれないから！」

先に読まれた。
しかも、戦いの最中に。

「藍は関係ない。
私は全力であなたと戦い、時間を稼ぐだけ」

「私は戦いたくないの！」

1人のアサを踏み台に、ボルトは高度を上げた。
有意識体も一段：：董で重力を操作し、ボルトを追う。

振り向きざまの光撃……躱わす。

「それだけの力を持っていながらですか？」

「本当は誰とも戦いたくない……！」

「なら、私はあなたを殺しますよ？
そしてトキも――」

金棒を受けながら、再び指先に光が灯った。
しかし、指の向く方向は白州唯高校、その校舎。

光撃がないと判断した有意識体２つが容赦なく攻め……

同時――
校舎からのビームが飛来、１体の有意識体の首を貫いた。

（反射光か！）

アサは素早くそれを分析し、本人も近接戦闘に加わる。

直後――
強烈な閃光がボルト全身から放たれ、アサ本体の視界をホワイトアウトに追いやった。

（閃光か！？何て攻撃だ！）

ボルトの矛先が壊れかけの有意識体に向く。

そこへもう1体の有意識体がカバーに入ろうとし――

「ぐっ！」

突然、有意識体は両目を押さえて苦しみだした。
もう一体、首に傷を受けた有意識体は困惑しながらも攻撃を続けた。

理壊装円破解による袈裟。
乱杭歯の代わりに備えられた刀刃が魔女の体に切り込むんだ。
しかし――再びアサは彼女が最強と呼ばれる理由を思い知らされた。

（抜け……殻？）

有意識体が攻撃を与えたのは光の残像。
僅かな手応え。　滝に向かってバットを降ったような感触。
いつ抜けた？　視界が揺れる。
零距離、後頭部に五指光線を喰らい、有意識体は完全に機能を停止した。

「光、貰うよ」

すでに物言わぬ死体へボルトは言った。

触れたボルトの手に、有意識体のアサが纏っていた光が集まってゆく。

目を押さえて苦しむもう一体の有意識体。ボルトは、彼の視界に細工をしたのだ。

紫外線量の増加と可視認識域の過剰作用による、網膜の破壊。

光。

それがいかに自分達の生活のなかに溢れているものなのか、アサは思い改めた。

（少しずつ本気を出しているな）

アサ本人の目に色が戻ってくる。

有意識体が1体破壊されていたことには驚かない。

しかし、ボルトの魔力の膨張に焦りを覚えた。

――これが人なのか？

一般的な魔法使いの魔力量を月のサイズとしたなら……

彼女の魔力量はまさに太陽。いや、今、それを以上になった。そう感じた。

ボルトは指に光を蓄積させる。

先ほどの光線とは違う。

――光の爪。

それが、まず形を作り、次に有意識体めがけて突如飛来。
顔を潰し、肉を切り裂き、心臓を貫いた。
目の前で2体目の有意識体も破壊され、振り出しに戻った。

(光の最高魔女、ボルト……
これほどの化け物だとは思わなかった。いや、油断したと言うべきだな)

再び2人は向かい合う。
アサにはまだ見せていない術は残っていた。が、余裕は残されていない。

「どう……―…したの?
もう終わり?」

急激にボルトの魔力が変動する。
それまで、いくら強大でも常に清澄さを併せ持っていたボルトの魔力の流れから、優しさと清澄さが同時に消えた。

彼女の中で魔力の流れが変わっている。
――殺される
直感がそう告げる。
しかし、彼女には完全決着の意志はないハズ……

「残念。さっきまでの私ならそうだけど――」

ボルトの体から光球が発生し、同時にボルトはその光の中へと消えていく。
すでに予測不可能。
次にどんな手が飛んでくるか、想像すら出来ない。
――接近戦？遠距離戦？

「もう時間切れよ」

ボルトの声。
しかし、真後ろ。

（いつの間……またか）

アサは動かなかった。
動いた瞬間――いや、動く一瞬前に殺されるだろう。

「協会でも私とここまで戦える人はいないんだよ？」

その声は今までのボルトのものと異なっていた。
先ほどまでとは比べものにならないほど大人びた声色。

口調こそ変わっていないものの、声は変わっている。
ついでに殺気と憎悪の量も。

「ふり返っていいよ」

「貴女は私を殺すのか？」

「うん、殺すよ。
面白かったけど、生きていても邪魔になるだけだし」

「先程の言葉と矛盾していないでしょうか？」

「してるよ。
さっきは戦いたくないって言ったけど、今は戦いたくてしょうがないんだ。
何か、トウコツみたいなこと言ってて嫌だけど」

気付けばノドもとに光刃のきっさきが突きつけられていた。
熱く、そして何より痛い。

目の前に少女の姿はなかった。
あるのは大人の姿へと変わった――

「貴女は、ボルト・パルダンなのか？」

「ううん。
正しくはボルト・Ｓ・パルダンだよ？」

「……何？」

「だ……――から、ボルト・Ｎ・パルダンってのが……」

明らかに、何かがおかしいかった。
その異変に本人も気付いたのか、

「あれ？
私は――……」

「一段：椿」

その一瞬――
隙を見て、アサは高速の世界へ突入。
ボルトの足止めを完遂する。いまが絶好の好機。

「一段：蓬（よもぎ）」

術の発動。
それによってボルトの背後、地面の中から巨大な樹木が生える。

「うわっ！？」

蓬の効果は、捕縛。
ボルトの四肢を樹が絡み取り、体の自由を奪う。

「二段：夕顔」

アスファルトの通路と土のグラウンドが黒い影によって染まる。
――準備は調った。

「私は――…」

「天段：霞黎央華（かれおばな）」

術の発動に伴いボルトの体が黒い霞に包まれ、流れ出る魔力の放出が止まる。
天段、霞黎央華。
効果は黒い霞による精神侵食。

誰もが持つ“忘れ、消し去りたい記憶”
それを無理やり掘り起こすことによって相手の精神崩壊を誘う術である。
しかし、この術の最大の特徴は、ただの記憶の逆流ではない。

記憶の再生強要と、擬似痛覚再現がこの術の本質である。
つまり、2度と味わいたくない痛みごと思い出させ、疑似体験させるのだ。

現実に痛み感じているわけではなく、記憶がその痛みを思い起こさせる。それが霞黎央華。

この術にかかれば、ただの人間だろうがＳＲだろうが大差はない。

ＳＲも元は人である。

故に感情を持ち、その生を記憶によって左右される存在であることに変わりない。

「嫌ぁ……」

目の前のボルトも例外ではない。

独り言がはじまり、やがて自分で命を絶つ。

これまでこの術を受けて生き延びた者はいない。

極痛の記憶に苛まれ、やがて自ら命を絶ち、終わりを迎える。

「1人は嫌――」

アサには、この術でボルトを殺せないだろうという予感があった。

それでも精神崩壊まで追い込むことならできる。

――だが、本当にいいのか？

ついさっきまでボルトに完全決着の意志はなかった。

卑怯ではないのか、と何度も自分に尋ね、結果曖昧でやるせない

答えばかりが渦巻いた。

仕方なかった。

彼女はいきなり自分を殺そうとした。

でも、自分は彼女を殺せない。なら、壊してしまおう。

「置いてかないでよ……

もう、悪いことしないから！」

ボルトの目から生気が抜ける。

樹木に手足、首、胴体の自由を奪われながらも必死に身振り手振り、体を揺らす――

何かを払おうとしていた。

（悪夢を見ながらも、霞を払おうとしているのか？）

「いやぁ……」

アサはボルトの崩壊を見守った。

最強と謳われる少女の悪夢にも多少の興味はあったが、アサのプライドがそれを許さない。

これ以上、戦った相手に失礼を働きたくはない。

だから、これ以上は何もせずにいよう。

そうすれば、この術の終わりと同時にボルトも大人しくなってし

まうハズ。

術は完全に決まった。

これ以上、必要以上に目の前の魔女を苦しめたくない。

アサは、ボルトが立ち上がらないことを願った。その術に苦しんだ後、少しでも長く眠っていてほしい。

「……

私はここで引き上げる」

聞こえているのかいないのか……

アサはボルトに告げた。

樹木によって拘束されて苦しみもがくボルトを見て、アサは踵を返す。

――彼女なら自殺はしないだろう。

確かな予感をもとに、アサは撤退を決したのだ。

――逃げるのではない……自分は仕事を果たした。

アサは魔女として高名な彼女を、これ以上汚すことに多大な罪悪感を感じているのだ。

この戦いに正義がないのがせめてもの救いだった。

どちらかの死を必要としない。

校門を潜り抜け、数秒――

ボルトを抑えていた樹木が地面へと還る。

（リデアは、ボルトの魔力の超大さによって大事なことを見落としている……）

アサの脳裏に校舎内へ突入したＳＲたちの顔が浮かぶ。
おそらく、誰も生きて帰って来ないだろう。

そう。
どの道、この作戦が成功する確率は著しく低かったのだ。

（学校の中にもＳＲが３人……）

それが協会の手回しか、偶然か――
はてまたトキの能力なのか。

アサにはその謎を解く気はなく、今更戻る理由がない。

――足止めは十分。なら、自分のいるべき場所に帰る。

ただ、それだけだ。

第１２話－魔女ＶＳ鬼！動き出した無所属連合！－（後書き）

道を半ば経過した時にディマは気付いた。

（ボルトの解放が止まった？）

理解できない事態が連続した。
突然の解放、急停止、気配の変化。

――もし、解放が完全に終了していたら？

最悪の事態を想定し、ディマは再び全力で走った。

第１３話－Ａｓ　ｔｅａｃｈｅｒ－（前書き）

“全ての生物は生まれてから目的を持つ”

しかし、それは時代と共に変わりゆく一つの概念でしかなかった。

「行こうではないか、ケイノス君！
全ては打倒協会という、全人類の自由への飛翔の為に！」

彼と自分は共通の敵、共通の目的のために生きている。

年上の先輩にしては少し抜けているところが痛い。
そして、一緒にいるのが恥ずかしい。
が、それでも僕は彼について行った。
隊長は失敗しても必ず次に事を繋げるという、類稀なる『悪運』を持った男だ。
つまり、一緒にいるだけで様々なチャンスに巡りあえる。

まぁ、本人はその悪運に気付いていないみたいだけど……

「この作戦が成功した暁に、私は協会の『ＨＥＲＯ－Ｓ』に挑戦状を送ろうと思う！」

相変わらず突拍子もないことを言い出す隊長。

無謀な台詞。
無茶苦茶な内容。
ＳＲという、ただの人間から見れば現実離れした力を持った僕ですら、隊長の言葉が現実味を帯びていないと、理解する前に直感した。

作戦開始２時間前のリデア・カルバリーの台詞である。
その場の誰もが作戦の成功を疑った。

『こんな隊長で大丈夫なのかよ？』

リデアと長い付き合いのケイノスだけが、我関せずといわんばかりの面持ちで空を仰いでいた。

（……眩しいなぁ）

あぁ、夏。
隊長はアホな台詞をアホ丸出しに大声で発声し、そのアホっぷりをコレでもかというくらい周りに露呈させていた。

少々の不安はあるものの作戦は成功するだろうと、この時誰もが作戦の成功を疑っていなかった。
ただ１人、哭き鬼の男を除いて。

第13話－As teacher－

ＡＭ１０：０３　白州唯高校

校舎の2階の廊下を進む6つの影があった。
容姿や思考に共通した点は無いが、立場はみな同じ。

無所属連合『ＮＩＧＨＴ　ＭＡＲＥ』
この学校に来た目的は、『器実験』に必要な人的素材を集めるためである。

第1目標：色世時（しきよ　とき）の確保。
第2目標：それ以外の『器』候補者の確保。

ここを護るのは協会のＳＲ少数名と小規模集団の鬼の娘1人のハズ“だった”……

彼らの進行がピタリと止まる。
その理由は、想定外のＳＲがこの学校に居たことにあった。
リーダーを務める風の特級魔法使い：リデア・カルバリーは再び足を止め、

「コイツ、何故催眠が効いていないっ!?」

素直に驚き、戦闘態勢をとる。
リデアついて来た手下たちも臨戦態勢に移った。
その中でサブリーダーを務めるもう1人の魔法使い：ベクター・

ケイノスは誰よりも早く、目の前の敵の正体に気づいた。

対峙する男は悠然と廊下に立ち、彼ら7人を待ち構えていたのだ。

たった1人。

男の目に迷いは無かった。

十分対応できる事態・状況であると静かに存在が語っている。

ケイノスは理解した。

男に迷いが無い理由、強制睡眠が効かないそのワケを。

「か…完璧のSR！」

Second Real／Virtual

－第13話－

－As teacher－

校庭での超難関は、雇った鬼に任せて何とかココまで来ることが出来た、リデア率いる正面チーム。
計画通りだと護衛の鬼は夢の中に堕ちている。

何人にも邪魔されることなく目標（トキ）の身柄を確保できたはずだった。

しかし、それ以上進むことができなかった。
鬼はしっかりと夢の中に堕ち、睡魔を跳ね返すというイレギュラーが発生することもなく、すんなりとここまで進むことが出来た。

しかし、誰もが予想だにしなかった、鬼よりも遥かに深刻な存在（イレギュラー）発覚。
たった1人の男に隊の動きが止まり、その男はそれ相応の実力を兼ね備えていた。

「構うこと無ねぇだろ。
アイツ1人じゃん？」

威勢良き同志が男に仕掛けた。
こんなところでモタモタしている暇は無い。
早急に、協会と対等の戦力を確保しなくてはいけないのだ。

そのために彼らは時間を気にしすぎ、また功を焦り、結果……

戦闘開始から――５０．０００秒――わずか1分足らず。

たった1人の男にチームの大半が極半殺しに遭い、無傷でいるのは隊長と副隊長の2人だけという状況となった。

（これが完璧のＳＲ……
ワルクス・ワッドハウス！）

残った2人にワルクスの目が向く。

「さて、次はいよいよ君たちだ」

ショットガン　レミントンＭ８７０　Ｐｏｌｉｃｅ――通称：エントリーガン――片手にワルクスは尋ねた。

授業を邪魔してまで何しに来たのか知る気はないが、一教師の端くれとして、どんな理由があろうと生徒たちに手出しさせるつもりはない。

「学校は土足で上がる場所じゃないんだ。
ＯＫ？」

わざとらしくため息をついてみせる。

元々、交渉する気はあった。

しかし、奴らは四の五の言わず攻撃を仕掛けた。その時点で、ワ

ルクスの頭から交渉という選択肢は消えたのだ。

こういう手合いはとっとと痛い目に遭ってもらう。
殺してはいけない。
なぜなら、報復は必至。
殺さない程度に殺す。つまり、半殺しだ。その方が時間を稼げる。

「なぜ私の魔法が効かない！？」

「隊長の魔法じゃないでしょう。
それに隊長、そういうことは大声で叫……」

「俺が“完璧”だからだ」

ショットガンに悠々と弾を込めるワルクス。
手っ取り早く終わらせたい。
ここで一つ思い出した。対峙するリデアは執念深い性格だとか……

（奴の疑問に答えてやるべきだろうか？）

混乱するリデア。
いままでにない状況に冷静さを欠くに欠きまくっていた。

（どうして私の魔法が効かないのだ！？）

呆れるケイノス。
隊長が隊長なら、敵も敵だ。
何で自分の周りは目立ちたがり屋　ｏｒ　無駄に声のデカイ人物が多いのだろうか。

（何ていうか、いちいち……）

「教えてやろう。
ただ完璧と言っても、どういった意味で完璧であるのか。
まず、その基礎を組み立てなければいけない」

「基礎、だと？」

（いちいち戦闘にまで演出を凝らす必要は無いと思うんですが……聞いてますか、お二方？）

勝手に説明会がスタート。
出来るだけ早く終わって欲しかったが、確実に１分以上はかかるだろう。
ついため息が漏れてしまう。
はぁ……

「今の場合は……
そうだな、簡単に言えば視線の高さの違いだ。
例えば――
戦う前から恐怖を抱く者と、抱かぬ者。　対する２人の目に戦い

はどう映ると思う？
片や黒く凶々しいイメージを抱いたり、流血や痛覚による完膚なき負や、死のイメージを連想するだろう。
しかし、もう一方は戦いを仕事と捉え、そうすることが当たり前なのだと理解することだってある」

「結局、同じではないか！？
それに例えが解りにくいわ！」

「解り難いか？
う～む……
じゃあ……」

考え込むこと約５秒、ワルクスは再び顔を上げた。

「０から始めることと、５から始めることだ。
終着点を１０とした場合のね」

「キサマは何が言いたい？」

「隊長が叫んだからですよ……」

「リデア。君は数字の基礎が何であるか知っているか？」

「１０個の数であろう」

「どうして？」

「どうしてもこうしても、そう学んだからだ」

「なら、5～9までしか学ばなかった場合はどうだと思う？」

「どうも思わんし、どうも思えん。
私にどう思って欲しい？
仮定するなら詳しい状況を述べろ、極論家め」

「ただの例えだよ」

隊長～、　ここ敵地ですよ？
悠長過ぎではありませんか？

聞きたくても会話に割り込むことさえ出来なかった。
おそらく、聞く耳を貸すどころかそんな耳を持ち合わせていない。

「１０個の数字を満遍なく使う場合に、さ。
そうじゃなくてもいいけど」

「それなら答えよう。
未知である数字との遭遇だ。
その数字を対処出来ず、混乱するか放棄するか……あるいは原点に戻らざるを得ないであろうな」

ケイノスは２人の会話に耳を傾けた。
隊長、もしかして目的忘れてない？
大体、この会話のやり取りに何の意味があるのか……？

（もしや、時間稼ぎ？
しかし、バクの睡眠効果は最高5時間。
時間稼ぎには到底……）

「そうかもな。
5～9しか知らない人はそうなるかもしれない」

「それで、その話がキサマの言う“完璧の基礎”とどう関係あるのだ？」

「本題に入ろう。
いまの話では、ゼロを知らないことになるだろ？」

「ああ」

「隊長、少しは警戒を――」

リデア、あっさり無視。
向いていないのに……
それなのに、何でリーダー業務に拘るのかなぁ、隊長は……

「全ての事象はゼロを起源としてそれぞれの結末へと向かうものさ。
0（はじまり）がなければ、1（つぎ）は無い。
繰り上げもなければ繰り下げもなくなる。
数字の境界線が『0』だ。
何にだってそういった境界に当たるものがある。それが基礎さ。

基礎を知らねば応用を身につけることは出来ない」

ショットガンのポンプ音。
ワルクスは攻撃準備が整ったことを2人に伝える。

正直、意味が分からなかった。
本題に入ると言っておきながら、例え話の方が納得いくようでいかないような……詰まるところ、意図が掴めない。何が言いたかったのか分からなかったことに変わりはない。

「つまり、数学を解くには公式を。計算するには数字と記号の意味。
文学に答えるなら単語と語順。
スポーツをするにはその内容とルール。
何かを悟るために経験。
世の中を渡っていくに正義と悪を……」

エントリーガンの銃口がリデアに向く。
両者の距離は１０メートル前後。

銃撃が来る。
この場で立っているＳＲは隊長と自分しかいない。
いよいよ火蓋が切って落とされる。

「そして、戦いも例外ではない。
“敵を知り、己を知らば、百戦危うからず”と言うだろ。
知らなければ何も得られない――

しかし、何も知らないからこそ何かを知り、そこから何かを得、様々学ぶ価値がある。
悩むこともでき、どんな困難も乗り越えられる可能性とだって出遭え、より高次な自分を想い描けるようになる。
弱ければ弱いほど強くなる甲斐はある。
肝心なのは、どんな場合であろうと何も学べずに終わらないこと」

「全くわからんわぁ！
お前、人にモノ教えるの苦手だろ！
風の天際！」

発砲。
リデアが叫ぶと同時にエントリーガンが火を噴き、リデアも術文を唱える。

（正直、私も理解できませんでした！）

散弾がリデアに襲い掛かり、それと同時に風の魔法が発動する。
全身を風鎧（ふうがい）で纏うリデア。
散弾の弾道を反らすが、少数のスラグが掠り傷を残していく。だが、結果的にダメージは無い。

「ＲＤ２！」

更に同時、ケイノスの魔法も発動する。

ケイノスの家は代々、優秀な空間操作系魔術師を世に送り出してきた純血魔術師の家系であった。
ベクター・ケイノスが得意とする魔法は、『空間の圧縮と拡大操作』、そして縮小拡大で『空間に流れ』を作ること。

ワルクスは咄嗟に上半身を反らす。
飛んできたＢ４用紙がケイノスの作り出した魔術空間に触れた途端、消しゴムサイズに縮小する。
その空間の歪みは、透明ながらもそのシルエットが球体を連想させた。
サッカーボールほどの少し大きめの球だ。

（……空間圧縮！）

次弾装填。
発砲。
ワルクスは２人に向かって突っ込む。
この戦いは長引かせるものではない。

「風獣、鋭爪！」

リデアの魔法が突撃するワルクスを迎え撃った。
魔法の発動と同時に壁や天井、ガラスなどに切れ目が走る。
一瞬の目配せながらもワルクスはそれがカマイタチによる攻撃だと理解し、しかし、走り続ける足を止めない。
スピードを上げ、ワルクスはカマイタチへと突っ込んだ。

「馬鹿め！
カマイタチを避け――」

その瞬間、ワルクスはスピードを殺さず、空中に躍り出る。
ハイスピードダイブ。

滞空時間が長い０．５秒。
そこで２人は異変に気付く。
すでに１．４５秒もの滞空を実現しているワルクス。
完璧のＳＲ全くといっていいほど高度を落としていなかった。

風が下からワルクスの体を押し上げていた。　風に真横から乗ったのだ。
だから、カマイタチによるダメージを受けていない。

「――ら、れた！？」

ワルクスが無傷でカマイタチを突破する。
再び銃撃。
そこに、

「ＬＵＬ！」

飛来する散弾に対し、ケイノスの魔法が発動する。
リデアの目前に迫った散弾は、ランダムに発生させられた圧縮空間に遮られ、その速度を落とした。
迫り来る散弾のスピードが落ちた隙を見て、リデアは射線軸から退避しながら次の魔法を用意する。
見事にカマイタチを切り抜けたワルクスに感心してしまった。

（えぇい！見とれている場合ではない！）

頭を切り替え、再び敵を捉える。
逆風の中、果敢に突撃してくる完璧のＳＲ。

「風流、９号！」

「ＤＲ！」

ケイノスの圧縮空間が作り出した空間の流れに乗せ、超強風をワルクス目掛けて放った。
水の流れるホースの先端をしぼめるようなものだ。

カマイタチを通過したワルクスは更に距離を詰め、同時にリデアは真正面から風速３０メートルの風をワルクスにぶつけた。

廊下に掲示されていたプリントや、隅にたまった綿埃が真っ先に吹き飛ばされ――
その風にケイノスの破壊した壁や床の材質の破片が乗った。

それはまさに、エントリーガンと風式散弾銃の対決。

強風の中、ワルクスはエントリーガンで飛来する破片を弾きながら距離を詰めた。

３０メートルの風速がワルクスの進行を大きく阻む。

風に飛ばされたものが凶器と化して容赦なく襲いかかり、思うように進めていなかった。

（何より、この地形！）

この四角く長い一直線に伸びた廊下には逃げる場所、身を隠す場所が一切無い。

あるのは前進か後退のみ。

判断を誤れば直ちに死地へと赴くことになる。

しかし、ワルクスに後退する理由は無い。

逆に前進する理由はあった。

どんな逆風で、どんな強風だろうと逃げる理由もなく、また隠れる必要も無い。

生徒を護る。

ここで諦め、逃げ出したのなら、一体誰が生徒達を守るのだ？

自分が何のためにココにいるのか。

それを改めて認識する。

くだらないことかもしれないが、その認識が目的へ、また使命としてワルクスを駆り立てるのだ。

生徒を護る為に自分はココにいる。
理由は、それだけでも十分だった。

「このくらいの風、１０％だった頃のオレでも乗り切れた！」

自分に言い聞かせ、強風に負けじと高らかに宣言するワルクス。
その台詞に２人は疑問を抱いた。

――１０％？
――何が？

直後、２人――特にリデア――は目の前の事実に驚愕した。
ワルクスにぶつけている風が、

（緩和されている！？）

リデアの風と別の風がぶつかり合い、相殺していた。

この場所にいる風使いは自分ひとり。
その見解が誤りだったとリデアは今更気付いた。

「キサマも魔法を使えたのか！？」

「完璧だからな！」

（いやいや！
何でも有りですか！？）

強風の中をワルクスは風の流れに乗って逆流し始めた。
川の上流を目指す鮭のように。
余計な動作を極力省いた全身全霊を込めた突撃。
ケイノスはワルクスの未来位置を予想し、そこへ、

「Ｄ２Ｒ！」

風に乗るワルクスに向け、ケイノスの空間圧縮魔法が発動される。
大小違う大きさの拡大空間が４つ。

触れれば質量をそのままに体積を拡張され、風の影響を大きく受けてしまう。

（読まれたか！）

ワルクスは風の流れから降り、再び前傾姿勢で地面を走った。
風に乗って迫るワルクスを迎撃しようとして拡大空間であるだけに、低姿勢で走れば牽制程度にしかならなかった。

そこへ、間髪いれずに破片が襲い掛かる。

躱わしながらショットガンを向ける。

――この距離なら届く！
目標は、リデア・カルバリー。

まず、この風を止める！
発砲！

しかし、

「何っ……！？」

「フハハハハッ！
風の障壁を甘く見るでない！」

シェルから放たれた無数の粒弾（スラグ）。
しかし、リデアの風の障壁によって阻まれ、致命傷どころか掠り傷をつけることすらなく軌道を反らされたのだ。
風の障壁――風の天際と唱えていた――を纏い始めた頃とは比べ物にならない、圧倒的防御力。
かすり傷をつけられないどころか、超強風によって完全に無力化されている。

「ならっ！」

銃撃が思った通りにいかなかった。
でも、そんなことは日常茶飯事だ。

（理想どおりの未来などない）

現実は常に紆余曲折する。

故に、ワルクスは今回の相手も銃撃が効かないと知り、手にしているショットガンを――

「なっ！？」

投擲。

風速３０メートルを超える逆風の中、まるで野球ボールを投げるかのような鋭いピッチング。

しかも、物が物だ。

３、４ｋｇはあるショットガンを軽々と投げて見せた。

（何という強肩っ！）

しかし、風に流され、ショットガンは変にポップアップ。

リデアの後方で天井に突き刺さった。

同時、ケイノスの魔法が消えたのを機に、ワルクスは再び風に乗って距離を詰める。

「風流、１２号！

そして――風竜、滅爪！」

一瞬だけショットガンに気をとられたリデアも、再びワルクスへ矛を向ける。

これ以上接近されては何をされるか……

……わかることはわかるが、受け入れがたい！

背後で天井に突き刺さったショットガンが落ちる。

滅爪の発生と同時に周囲に傷が現れ始めた。

天井も、床も、その空間にあるモノ全てを切り裂き、風が襲い掛かった。

壁に切り傷が残り、床の石材は削られ、天井から埃と破片が降り注ぐ。

それでもワルクスは足を止めず、カマイタチの“嵐舞／乱舞”に突っ込んだ。

どんな障害があろうと、まだ諦めるには早すぎる。

（いける！）

風を相殺し、突破する。

それは、ワルクス魔法を使っていると確信するに十分な状況だった。

――風を風で打ち消し……いや、軌道を変えているのか？

風というのは消すことが出来ない存在だ。
自然消滅を待つ以外に消える術を持ち合わせていない。それが風の性質だ。

しかし、風の流れを強制的に変えることによって急激に弱体化させることはできる。
とにかく、ワルクスは対処法を知っていた。

（ここだ！）

距離を４メートルまで縮めたワルクスは、懐からあるものを取り出す。
それが何なのか、リデアとケイノスの目にもハッキリと映った。

（携帯電話？）

目前でそれを取り出したワルクスに疑問を抱き、リデアの突風がわずか弱まる。
ワルクスはその隙を突いた。

突如、ワルクスの手の中の携帯電話が形を変え、膨張を始める。
変形と膨張、その時点でそれはすでに――

（携帯じゃない！？）

形状を変えながら、それはリデアに急迫した。
弾丸ほどではないにしろ、かなり速い。
一瞬の隙を突かれたリデアにそれを躱わす余裕はなかった。

「隊長！」

ケイノスはリデアの前に立ち、急迫するソレを短剣で弾き反らした。
軌道を反らされたソレが天井を穿つ。
ワルクスの放った得物が、何らかの金属であることが判明した。
金属同士の擦れ合う独特の反響音。
リデアの風がそれをかき消すように強さを増す。

「下がれケイノス！」

「隊長こそ下がって！」

互いに譲らぬ無所属の魔法使い２人。
その間――
ワルクスの手には鍔なし・肉厚・幅広い両刃の剣：グラディウスが握られていた。

「風と共に悟る！」

近接戦闘を挑んでくるであろうワルクスに対抗し、リデアは感覚強化魔法の術文を宣言。

常に自分の周りに風を発生させ、風の乱れを察知することにより敵の接近・攻撃に対応する術である。

理論上この術の発動によりあらゆる死角を無力化でき、また、纏っている天際、滅爪と共に併用させることの出来る術であった。

ケイノスが予備の短剣をリデアに渡し、ワルクスの近接戦闘に備えた。

リデアが1歩踏み出した直後、2人の剣がぶつかり合う。

高速で繰り出されたワルクスの剣戟をリデアは風の流れで軌道を察知、見事防いでみせる。

（この男！

剣に風を纏わせ、こちらの風鎧を撹乱しようとしているのかっ！）

ワルクスは一旦距離を置き、その隙にリデアも風を整える。

2人同時に仕掛けた。

「ＵＲＬ！

追加、ＤＲ２！」

縦一直線に複数の放出型球状の力場が複数発生する。
まともに喰らえば頭ごと潰される！

ワルクスは横へ飛び、ケイノスの魔法を避ける。
リデアはそこに追撃をかけた。

（ちっ！
間に合わ……！）

「遅い！」

リデアの順手に持った短剣による刺突。
――手応え有り！

だが、致命傷には程遠いことがすぐにわかった。
ワルクスは左腕を盾とし、急所への攻撃を防いだ。

そこから反撃に出る余裕は……無い！

思いの他、リデアの自力は強かったのだ。
右手の短剣を逆手に持ち方を変え、柄頭に左手を添えて押してくる。

パワーゲームでは圧倒的不利！

（眼球狙いか！）

ワルクスは必死に押し返そうと抵抗する。
この状態が1秒でも長く続くのはまずい。
ケイノスの魔法の準備が整い、餌食になることは間違いなし。
それに、リデアには圧倒的に力で負けている。

背中が壁につく。
後ろは窓。
下手をすれば落とされる。
逃げ場は……

――いや……逃げる必要など！

辛うじて手に力が戻り、無傷の右腕で――
短剣に貫かれた左腕を押さえながらグラディウスに自らの意志を伝える。

（変われ！）

グラディウスを模（かたど）ったはソレは応える。
ワルクスの要望。

生徒を護りたい願い。

リデアはワルクスの目を潰すことに精一杯でその変化に気付かなかった。
何せワルクスに、グラディウスを逆手に持ち替える余裕がないと、リデアはそう思い込んでいたのだ。

――しぶとく抵抗するコイツを一刻も早く倒したい！

「隊長！」

名前を呼ばれ、リデアは目の前の現実を再認識し、気付いた。
ワルクスの得物――鋭利な刃先――が自分に向いている。

（いつ、グラディウスを持ち替えた！？）

戦いの最中に疑問を抱くことがどれだけ危険なのか、リデアは後悔し、思い知った。

再び、ワルクスのグラディウスの刀身が伸び、リデアの左目を掠めるように――水晶体を破壊し、深刻な――傷を与えた。

リデアの体から力が抜ける。
それを機にワルクスは押し返すため、リデアの腹を蹴った。
腹を蹴られたリデアは短剣を手放し、必死に左目を押さえて激痛にもがく。

「おおおぉぉぉぉっ！！！！」

泣哭（きゅうこく）するリデア。

ワルクスは背後にケイノスの魔力蓄積を感じ取り、急いで回避行動に移った。

「R2L！」

ガラス全体にはヒビが入った。

背後のガラスが一箇所だけ綺麗な球状の虚空と化し、圧縮されたガラスの一部が落ちて小気味よい音を立てる。

ワルクスは、足元に転がるリデアに目を向け、野球バッドのようなグラディウスの柄頭でリデアを気絶に追い込んだ。

ずん、と鳩尾への重い一撃。

「このぉお！」

ケイノスが隙を突こうと襲い掛かってくるが、隙を突くにはあまりにも遅すぎた。

急襲のポイントはスピードとタイミング。

ケイノスは成功の条件であるどちらも満たしていない。リデアを黙らせた後では遅いし、隙を突くにしては襲い掛かってくる速度が酷く遅い。

ワルクスは――短剣の使い方に慣れていないのか――あっさりと短剣を弾き飛してしまう。

近接武装を弾かれたケイノスは距離を取り……

「ぐっ！」

ワルクスの得物が変化していたことに気付く。　リデア同様、気付いた時には遅かった。

後退と同時にそれらがケイノスの体に当てられていたのだ。

首右側と上半身僅か左寄りの心臓。

（何だ、この大鎌は！

それに、いつショットガンを拾った！？）

「勝負はついた。

このまま大人しく去ってくれ。

さもなくば首と心臓、要らない方を選べ」

あれだけ小型だったグラディウスが、いつの間にか長柄鎌に形を変えていたことに驚く。

質量的に考えても有り得ない事態に、ケイノスは戸惑いを隠せなかった。

いくらＳＲという非常識的な世界に身をおく者であろうと、戸惑う以外に無い。

――世界中のどこからそんな金属を見つけてきたんだ？――何のカラクリもなく変形・拡大縮小する金属なんて……

「この金属は以前、知り合いの知り合いに貰ったものだ」

「なっ……！」

「この世の物じゃない。
そんな事より、お前は命の重さを知らない愚か者ではないだろう？
リデアを連れて帰れ」

「……断ったら？」

「言ったろ。
首と心臓のうち、要らない方を選べ」

「後悔するぞ……」

睨み付けるケイノスと、殺意の篭った視線を受け止めるワルクス。

「ああ。
だが、いまは後悔しない」

「いまは無理でも、後で後悔させてやる！
絶対に！」

「そうか。
なら、お前はもう少し魔力をセーブして空間圧縮と拡大を使え。
質より量で攻める戦法が向いている」

「うるさい……」

「もうひとつ。
リデアが起きたら伝えてくれ。
お前は遠距離戦向きじゃないと」

「黙れ！」

「オレに後悔を味わわせたいんだろ？
ただのアドバイスだ。
なら、今の言葉を忘れるなよ。
お前らはいい素質を持っているんだ。
その気になれば、協会のＨＥＲＯ－Ｓにだって立ち向かえる」

数秒の沈黙の後、毒づきながらケイノスは戦闘の続行を断念。
その意思をワルクスに伝え、リデアと他のＳＲを亜空間に収納し、
早々と撤退し、後には静寂に戻った空間でワルクスはため息をついた。

「さて……」

ケイノスが完全に去ったことを悟り、ワルクスは周辺の掃除・修復に取り掛かった。

自分の投げたショットガンによって出来た天井の穴。
リデアによってはがされた掲示板や、それに張られたポスターや連絡用紙。

ケイノスの破壊した窓ガラスやらコンクリートの壁やら床やら…
…ｅｔｃ

（こういう時の為に復元魔術を学んでおいて良かった……）

使うたびに痛感するありがたさと、後ろめたさ。

全ての人間がこんなことを出来る世界になれば、人は堕落の一途を辿るだろう。

現代の社会でもそうなのかもしれない。が、おそらく、今の比ではない堕落の道を進むに違いない。

人は、楽な道を選ぼうとする。

特別な力がないから人は努力をする必要があり、だからこそ何かを学ぶことが出来るのだ。

逆に、特別な力を持つ者は何も学ばなくてもよいと考えている人がいるが、そんな事はない。

学ぶところが違うのだ。

使い時がいつなのか、それを使っていいのか。

効率で考えるか、道徳で考えるか。

数字か、右か左か、善悪か。

自分に何が出来て、何が出来ず、どうすれば出来るようになるのか？

とにかく、いまはこの力があることに感謝しよう。

（――にしても……）

少し自信のあった数字と完璧の基礎をつなげる話。

（――リデアで理解できないということは……）

話をもっと簡潔にするよう、ワルクスは頭も働かせた。
どういえば分かり易いものか……

第13話－Ａｓ　ｔｅａｃｈｅｒ－（後書き）

この私の作戦に呼応してくれたことに礼を言おう。
ケイノス君、皆に飲み物を。

――さて。
手順を説明しよう。

まず、我々が正面から進行する。

君らは強制睡眠を頼む。
もちろん、彼を中心に、ダミーとバックアップでお互いカバーしあい、出来るだけ長く、多くのモノを夢の中に落として貰いたい。

そうだ。
君達は。そう、その通り。
裏門からの進行だ。頼む。

屋上？
資料を見ていないのか？
対空用の迎撃魔装が敷かれている。
簡単に突破は出来まい。

……何？
学校ごと破壊？

バカモノ！
そんな考えだから我々無所属は野蛮人だけと罵られるのだっ！

我々は正面から、堂々と進む！

全てを破壊するなど……君は芸術という言葉を知らないのか！？

――リデアの作戦会議、より――

現在。

正面チームと睡眠チームの半数以上が壊滅したいま……

残るは裏門チーム、そして、強制睡眠の主担当者のみとなった。

第１４話－皆殺犬！解放、奈倉　愛院！－（前書き）

世の中――

表が在って裏が在る。
内が有って外が有る。

彼女の担当は裏でなく、表。
――しかし存在は裏

また、彼女の心も内ではなく、外にあった。
――でも、時折内が恋しくなる

表裏はあって中立は無い。

裏の存在で、孤独。
家族は皆死んで、孤独。

故に、他人とは比べ物にならない自由を手に入れた。

タバコ、暴力、裏ルート、点滴、金、男、女、飯……ｅｔｃ

ルールだらけのこの国（ニホン）で、今までどおりにやりたい放題。

しかし、時折協会のアヌビスの注意がウザい。
けど、聞く耳持たず。

うるせぇんだよ。

私にゃ、私のやり方があんの。

ブレイクしたい時にブレイクして何が悪いんだよ？
やるときゃやるからさぁ、黙っててくれない？

それを今――
口先だけじゃないことを証明してやる。

この場にアヌビスがいないのは言うまでも無い。が、それでも、
しっかりと働いてみせる。
有言実行。
きっといつか報われるだろう。

いまは真面目に前向きに。

彼女は得物を用意する。

得物は獲物を求めて声を上げる。
聞こえるはずない、また、聞こえない声。

獲物は向こうから。
得物はここに。

「はぁーっ……」

少し落ち着こう。
敵は向こうから来るんだ。

いまから興奮していても、敵が早く来てくれるわけじゃないんだ。

（私と一緒に人類最大の発明について考えてみようじゃないか……）

第１４話－皆殺犬！解放、奈倉　愛院！－

彼女は人が発明したモノの中で、『扉』の存在に偉大さを感じていた。
外界からの接触を前もって知ることの出来るモノ。
外と内を明確に分ける境界。

人々が安心して生活を送っていくのに『扉』は必要不可欠。

しかし、明確な『内』がない場所に扉はない。
外側と内側の接点を隔てる為に扉は存在し、内を外から守るために扉は必要とされる。

少なくとも日本の学校では、そういった扉は内側の更に内側にしかない。
最初に触れるべき扉はなく、ただ、門としてしか存在しない。それも申し訳程度……
正面扉ではなく、正面門。

敷地内に入ってからやっと扉があるのだ。

（まっ、私としてはそっちの方がやり甲斐あんだけどな）

侵入者を追い返すだけなら誰にだって出来る。
肝心なのは、恐怖を植えつけること。

殺意に駆られ、得物が光る。

（それが番犬――最初の扉……
……来た！）

敷地内に6つの人影が侵入してくるのが目に入った。
その中で、最も殺意にあふれた者に狙いを定め……

――奔る――

5人が彼女の存在を知覚した瞬間、メンバーの1人が倒された。
左頚動脈から左胸、右脇。
時計回りに斜めの切り、絶命に追いやる。

（はい、ショック死確実ぅっ！）

もし、生きていたとしても……それは確実に有り得ないだろう。
まず助からない。

裏門から進入したSR達は有無を言わない凶刃による出迎えを受けた。

この時、裏門チームの誰もが正面チームも同様の歓迎を受けているとは考えなかった。

「なっ！何者かっ！？」

正面から突入したチームよりもはるかに人数の少ないこちらのチームは６人。
そのうちの１人が速攻で切り伏せられたのだ。

こちらで侵入者を歓迎した者も１人。
もちろん、ＳＲだ。

「ただの番犬さ」

問う彼らに、彼女は淡々と答えた。
回答と同時に解析を始める。

（リーダーは、雷系の魔法使いだなぁ……
はっ！　自分でも十分闘れる相手かっ）

撃退可能と判断がつく。
いつまでも平和な生活が続くと彼女は思っていなかったが故、行動を起こした。

協会が在る。
無所属がいる。
小規模集団も目の隅に置けない。
いずれ戦いが勃発する。

今日が境目だ。
頭を切り替えなければ、やっていけない。

さよなら、『平和』が日常の世界。
ただいま、血と怨恨渦巻く『戦い』の世界。

（久々だな～、こういうの）

ただいま、元の世界。
さよなら、第２の現実。

私は始めからＳＲの世界の住人だからさ。
平和と花は似合わない。
どうでもいいこと、鳩（ハト）は嫌い。ってね。

僅かな名残を覚えつつも彼女は頭を切り替える。

（やっぱ、どこか護りながら生きていくのが性に合う……）

そうでなければ退屈で退屈で……本当、冗談にならないくらい退屈でしょうがない。

ギリギリまでふかしたタバコを吐くように捨て、彼女は再び定位置へ戻った。
裏門の中心地ともいえる場所。門と校舎の狭間。

「私はマクサス・ロイだ！
そちらも名乗っていただこう！」

あくまで紳士的に話を進めたい雷系魔法使い、マクサス。
しかし、対峙する相手……彼女にそういった要素は外見上皆無だった。

……外見だけなら。

だが、中身はどうだ？
もし戦闘を回避できるようなら、とマクサスはそこに賭けてみるが……

「はぁっ？
何でアンタらのルールに従わなけりゃなんねぇんだ？」

「何！？」

もしかしたら、という希望は一瞬にして消え失せた。
交渉する気は皆無だと判明。する気なし。

「あんたらも無所属だろ？
アタシのこと知らないわけ？」

「知っているなら名乗りはせん！」

その一言を聞き、彼女は嗤った。
本気で喋っている事が笑える。

――とんだモグリだな

仕方なく、面倒臭そうに……しかし、精一杯丁寧に慈悲を込めて彼女は答えた。

「私は無所属――元パンドラ・プロジェクト正面番――」

すると……

「パ、パンドラ・プロジェクト！？」
「何てこった……！」
「え、パンドラ……の？」
「まさか、コイツが――！」

瞬間、マクサスの背後に控えていた手下の首が宙へ舞った。

（斬撃っ……！？
一瞬で首を刎ねた！？）

「こいつ……
こいつがあの時の門番!?」

手下のＳＲ１人が叫ぶ。
気付いてもらったこと、驚いてもらったことに彼女は喜んだ。

それは同時に威嚇になるんだ。
そう、それが番犬の役目。

「奈倉愛院（ナグラ　アイン）だ」

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第１４話－

－皆殺犬（かいさつけん）！

解放、奈倉　愛院！－

最初に仕掛けたのはアインの方だった。
武装した侵入者の来訪を受け付ける理由はなく、そんな外敵を門前払い、あるいは排除するのが彼女の役目である。校舎まで入れてやるつもりはない。

それが彼女のＳＲ。
外敵の侵攻を止める。

当然、彼らは反撃に出た。
人数的優位を生かし、コンビネーション攻撃を仕掛ける。

斬撃、銃撃、打撃、攻性魔術。

右を躱せば左から。
左を防げば下から。
屈んで避けても背後から。

しかし――それでも彼女は、全てを躱すか、防いで見せた。
そう、どんな死角を突こうと、全ての攻撃を回避する。

（どうなっている？
明らかに死角からの攻撃だった……！）

人数的不利であるはずのアインは４人相手に互角以上の戦いを見せた。

響き渡る剣戟、金属音。
風に流されずに篭る熱。
度々起こる空振り。　それに伴う空気の流れ。

容赦ない日差しが無所属ＳＲたちのストレスを扇いだ。
たった１人の少女に手間取っている事実。

「ハッ！だらしねぇ」

息を切らせ、３人のＳＲが彼女を取り囲んでいる。
後方にマクサスが控え、そこから魔法による援護を行っているのだが全く効果なし。
良くて威嚇になっている程度だ。

しかし、決してマクサスの魔法が遅いわけでも、また威力に乏しいわけでもない。
スピードは銃弾以上。
威力は一撃で金属を融解・貫通する程。

それにもかかわらず、どんなに死角を突こうが彼女は悠々と避けて見せるのだ。

アインを取り囲む３人も銃器や近接武器を装備して挑んでいる。
３人同時に襲い掛かって何とか彼女と互角に戦える、という事実

が腹立たしい。

しかし、マクサスらは認めざるを得ない状況に遭遇していた。
この場でもっとも戦いの場数を踏み、戦い慣れしているのが彼女。
対峙する番犬、ナグラ　アインであることを。

「“器実験”が成功するなんて、まだ本気で考えてんの？
しかも、人材集めのためにこんな極東の島国まで来やがって……」

「なぜ……？
どうして我々の研究を知っている？」

アインの言葉にマクサスは聞き返す。
まだ、そんな単語を口にはしていない。

――的を射ている

彼女はその実験が成功するとは思っていない。というより、失敗が必然であるかのような口ぶりだ。

しかし、自分達の実験をやめるわけにはいかない。
この実験が将来、協会と互角に渡り合うために必要になってくるのだ。

最も、いまは人材不足で明確に反旗を翻すことはできない。
だが近い将来、それは実現するだろう。

――我々の実験の成功がその将来を実現する鍵なのだ。

少しでも可能性があるなら、それを簡単に諦めるわけにはいかない。

「何で私が知ってるといけないんだ？」

「元パンドラ・プロジェクトメンバーだろうが、この計画を知っているのはごく一部のＳＲのみ！
協会ですら気付いていないことを、なぜ一個人であるキサマが知っている！？」

「モグリもそこまでいくと悲しくて涙出てくるよ。
同情のな……」

「なっ！
同情……！？」

「……――っ！」

アインは口を開きかけ――
同時、咄嗟に重心を落とした。

ギンッ！

銃弾が頭上を通過する。
３２口径の弾丸をあっさりと躱したアインは、西洋剣による反撃

に出た。

更に他の2人がカバーに入る。

――状況把握&再確認……

正面手前にダブルガン。
左後方にガン&ソード。
右後方にツインソード。
正面奥が雷系魔術。

リンチするには充実した装備だ。
が、しかし……

（遅っせぇっ！！）

つい、相手のやる気と本気を疑ってしまう。
そんな奴らを見て、アインは抑えきれない狂喜で顔を歪めた。

笑えない。
けど、嗤える！

左後方から距離を詰めた敵を脳内ロックオン。

時計回りに体を回転させ――もう1人の方も遅っ！！――ひとまず左後方から迫っていた敵を片付ける。
右後方から来た奴も大分遅い。十分間に合う。

（まずは……っ！）

空気を切り裂き、手元の得物が煌く。

下から上へ！

左後方から迫ったＳＲはアインの斬撃を左手の大型ナイフで受け流した。

金属の摩擦。

一瞬の衝撃。

勝負はその瞬間に決定する。

先に次の行動に移ったのがアインで、出遅れたＳＲは右手のハンドガンで対抗しようとした。

そいつが犯したミスは２つ。

１つ、決定的スピード差。

２つ、武器と戦略の選択ミス。

充分な余裕を持って、右腕を切り飛ばす！

（トロいっ！

接近戦になってから銃を使ってんな、バァカっ！）

距離ある時に銃を使わず、距離がない時に銃を使う。
適材適所という言葉が脳裏をよぎった。

銃を握ったまま、右腕が舞う。

次いで左手首も斬る。

下から上へと流れる剣筋。
相手が右腕を失った衝撃で混乱していたため、簡単に左手首も切り飛ばすことが出来た。

高い位置にある剣。
切り上げた故に、高く掲げられるように握られた剣。

アインはそのまま剣速を殺さず、体だけ振り返り、右後方から迫って――今は左後方か――いたもう1人に斬撃を浴びせた。

鎖骨を砕き、肋骨を破り、腰まで一直線。
絶命は免れない。

――何てタイミングの悪い奴らだ。カバーに入ろうとしてカバーに失敗し、更にそのまま突っ込んで剣戟の餌食となっているんだから……

正直、アホとしか思えなかった。
が、確実に1人仕留めたことに変わりない。大して嬉しくも無いけど、まぁ、楽しいからいいや。

（私に損がないにこしたことないし！）

次に、正面手前にいた敵。
その時、ちょうどよくそれが目に入った。
切り飛ばした腕に握られている銃。
アインは迷わずそれを掴み取り――
――連射！
「何のっ！」
撃たれる側もただ立っているわけではない。自らのＳＲを発動し、防御しつつ体制を整え、同時に反撃に出る。
ダブルハンドガンを持つ男の皮膚が硬化していく。
石化。
それがゴーレムのＳＲの力だ。
「５１：１８！」
更にマクサスの雷撃が迫った。
奇襲のつもりだったのだろう。
しかし、見えている。

「学習しな！　私に死角はない！」

孤を描いて迫った雷の筋を上半身を反らして躱す。

外れた雷撃は校舎のコンクリートを直撃した。

直撃部を急激に加熱し、融解させる。

上体を反らした状態になってもアインの銃撃は続く。

硬化させた腕で銃撃を凌ぎつつ、ゴーレムも負けじと連射した。

（ハハハハッ！！

久々ッ、ひっっさびさぁぁっ！！）

ガキッ！

途切れる銃撃。

止まらない刺激。

狂想の果ての住人に帰る瞬間。

壊れ、崩れていく瞬間。

手を伝わる戦いの温度。

周囲に漂う血臭。

生と死が織り成す狂奏空間。

「ちっ！」

マガジンが空になって初めてアインの銃撃が途切れる。
それはもはやフルオートと大差ない、激しい連射だった。

（ゴーレムに銃撃は通じねぇ！）

銃撃から顔面を守っていたゴーレムのＳＲは、体を石化させることによって銃撃による致命傷を免れていた。

全弾はじかれ、かすり傷一つ無し。

しかし、石化はそう長く続かない。
大量に単純なエネルギーを消費するのだ。　個人差はあるが、目の前のゴーレムは半端でない防御力を持っている変わりに、燃費は最悪と言っていいだろう消費速度だった。

ＳＲを解いた、その一瞬――

「もうちょい考えなっ！」

アインは約６メートルもの距離を一瞬にして詰めた。

そして、左から右へ。
斬撃が走り、ゴーレムの首が体に別れを告げる。

ついで、邪魔くさい死体を力一杯蹴り飛ばし、敷地外へ。

（これで2人！）

次に両腕に深刻な傷を受けてもがく妖精。

アインは手にした剣を投げ放つ。

自らのSRを半ば開放させることもなく、心臓への一突きで妖精は絶命した。

3人目も撃破され――トータルで5人目の撃破――マクサスだけが残された。

死体に囲まれ、再び2人は面と向かい合う。

（これで門番だと言うのかっ！？）

見せ付けられた実力差。腹立たしい現実。

銃弾を躱わし、奇襲を悉く察知し、ありえない速度での攻撃を実現する。

付け入る死角がどこにも無い。

「何故だ！？」

「ぁあ？」

「キサマも同じ協会を敵とする者！
何故、我々に刃を向ける！？
同じ敵と戦って――！」

「じゃあ、逆に聞くぞ？
何であんたら、私のダチに手を出そうとするんだよ？」

「ダ……？」

剣を――
つい昨日手に入れたばかりのカリバーンを取り出し、アインは言った。

早速、コイツを試せる。
クラスメイトが干渉されることに対する怒りと、破壊衝動に駆られて胸躍るアイン。
矛盾する感情が彼女を更にハイにした。

「それにこの学校は結構気に入ってるんだよ」

「たった……
それだけで我々を阻もうというのか？」

「いや、暇つぶしに邪魔してやろうってハラさ。
それに、お前らじゃ絶対に実験に失敗する。保障するよ」

マクサスの額に青筋が浮かぶ。

今の一言が決定打になった。

「最も、いまを生き延びればの話だがな」

絵に描いたのような見事な青筋。
そして更に決定的にする言の葉。

青筋立てるマクサスの表情を楽しみながら、アインは最後の1人を撃破する準備を整える。

――あれ？そういや最初は撃退のつもりだったけど……

「キサマは協会が陥落する瞬間を見たくはないのか！？」

「そりゃあんたの個人的要望だろ？
私は興味なし。皆無。やりたきゃ勝手にやってな。やれるもんならね」

（この……！
許さん！
断じて許さんぞ！）

（やっべぇ、また熱くなって皆殺しにしちまったかー、ってまだ1人生きてるけど……
仕方ねぇ。撃退はヤメヤメだ。
皆殺っちまおう……）

魔力の蓄積を感じ取りながらもアインは動こうとしなかった。
理由は簡単。
あっちが動いてからでも十分間に合うからだ。
全く……何でこんな奴がリーダーのポジションを勤めている？
――何ていうか……
「いちいち遅いんだよ。
早く来いよ！」
「６６６：８２８！」
直後、マクサスの背後から１２本の雷鞭が放たれた。
頭上、足元、左右、前、背後。
チャージした分だけあって、結構壮観なものだ。
「これならドコにも逃げられまい！」
いや、避けれるんだなコレが……
（はっ、とんだ夢想家だこと）

あんな小娘1人なんかに……！

「いかな理由であろうと、我々の邪魔はさせん！」

ああ、そうですか……

誠に残念なことながら、『右』へ行けと言われたら絶対に等しい確立で『左』を選ぶのが彼女、奈倉愛院という人間であった。
仕事には忠実だが、それ以外の時の性格はとにかく反抗的。

「断じて邪魔などぉぉっ……！！」

「じゃあ、思いっきり邪魔してやるよ！」

“するな”と言われたら“する”

雷の鞭が迫る中――マクサスの魔法が生み出した8億V超の雷撃を前に――彼女はそう宣言した。それも飛びっきりの笑顔で。

12方向から迫る雷撃。　全てが同時。

正面から挑む彼女はその壮観さに感動した。
迫る紫電。
轟く雷鳴。
空気を伝わり、体中の毛に干渉してくる静電気――いや、すでに

静電気の域じゃない。軽い電気ショック程度の威力はある。

初対面でこれを喰らったら、電気ショックで逃げるのもままならないだろう。

だが、彼女は違った。

――閃光！

紫電が爆発に変わる。

雷同士が擦れ・ぶつかり合って強烈な閃光を生み、とてつもない衝撃と熱が発生した。

（これでどう――

――っ！？）

マクサスの耳に轟音が届くのと同時、胸元に衝撃が走った。

激痛。

並走する熱さ、冷たさ。

気が付けば彼女（アイン）は目の前にいた。

「あんたの負け」

その声。
言葉の内容を理解するまで少しかかる。
マクサスは悟った。
自分の攻撃は外れ、彼女の反撃によって深刻なダメージを受けた。
胸元に走る衝撃と違和感がその証拠だ。

「来世では気をつけるんだな。
門番のいる場所には用心して足を運べ」

「ど、な……
どうし……て……」

マクサスの口元が朱に染まる。
そんな彼を見て、彼女は再び哂った。
目の前の虫の息の男に――冥土の土産だ――ネタばらしでもしてやろう。

「雷の落ちた場所……見てみな」

死に際、マクサスは素直にそちらに向く。
やはり、自分の攻撃に自信があったのだろう。
何故外れたのか相当気になるようだ。

「あそこで焦げちまったのは私のコレクションの1つだ。
パチもんだが、切れ味は確かなものだった。
どういうことかわかるかだろ？」

「…避雷……針」

マクサスの体から剣が抜かれ、地面へと崩れていく。
足に力が入らないのだろう。

「ただの避雷針じゃない。
名剣のコピーでな、今まで一度も刃毀(はこぼ)れしたことのない優秀な剣でさ。
“アロンダイト”っつうんだけど……
まぁ、興味ねぇだろ？」

「ぐっ……
はっ、はっ、はぁっ……！」

「私にとって厄介な魔法使いは雷系と風系。
事前に自分の弱点対策練っとくのは当たり前だろ。
ちなみに、この剣は昨日手に入れたばっかりでな、ちょいと麻酔毒を塗ってみたんだ。
いい実験台になってくれたな、マクサス。
ハハッ、もうじき逝けるぜ♪」

「きさ……まぁ
どうひて……」

呼吸もままならぬほど毒が回ったことがわかる。
マクサスの言葉に呂律が回り混じり始め、わずかだが顔色にも変化が現れている。
何を聞きたいのか分かりきっている。
――何故、邪魔をしたのか？
嗚呼……
笑えねぇ。
マジ、嗤えねぇ……
アインの顔から全ての表情が消える。
「あんた達が“器の実験”を続けるって言ったからさ」
「な……？」
「パンドラ・プロジェクトがどうなったかは知っているハズだ。
同じ失敗を繰返すつもりか？」
「……ぐ…そっ――」
それ以降、マクサスから言葉が発せられることはなく、同時にアインは嫌な記憶の再生に顔をしかめた。

あの事件のせいで自分は晴れて自由の身となれた。
だが、やはり兄弟同然だった親友の死は未だに堪えるものがある。
校舎の壁に背をあずけ、タバコを取り出して銜える。
ライターを探しながら横たわる６つの死体を眺め――
――そういや死体の片付けはどうしよう？
肝心の後片付けを思い出した。
面倒臭い。

「ちっ……忘れてきたか」

トイレに忘れてきたライターの存在を思い出し、ついでに嫌な記憶も浮かんできた。
出来たら思い出したくない記憶。

パンドラ・プロジェクトに加担していた当時、１３歳の時のこと。

協会と喧嘩していたあの時代。
殺人は当たり前。
襲撃も当たり前。
裏切りなんかあったなぁ～……
無法は常識。
家族になろうって言う奴らはマジで邪魔だったなぁ……

思い返せば、すべてが自由だった。
こうして並のＳＲ程度なら一蹴してのけることが出来るのはあの

時代があったからだ。

（あいつら、名前を変えただけで自分たちの実験だと言いやがって……）

“器”実験……

あの実験は危険かつ、最悪だ。
ひとつの人生を剥奪し、強制してしまう。

（成功率は低いわ、道徳的に罪悪感溢れるわ……）

人を殺す分には何の罪悪感も感じないが、生きた人間の人生を強制してしまうことには吐き気を覚えてしまう。
殺る時と違って慈悲ってモンが無ぇ。

それ以前に、自分達でＳＲを作るのはいいが、必ずしも手懐けることの出来る奴が現れることはない。

“１人の人間に強力な霊魂を入れてしまう”

それがパンドラ・プロジェクトの内容だった。
生きている人間に死んだ人間の魂を与えて能力の向上を図る計画。
最初はひとつのＳＲに別の力を加えようとする計画だった。

人という名の箱に、各地に封印されている霊魂を入れてしまう。

現在ある、『ＳＲ』という力に死んだ人間の魂を加える。そうすることで新たな能力が芽生えることがある。

しかし、それは非常に成功確立の低い実験だった。

“箱”の実験が、“器”の実験になっただけである。

（ってことは、いまだに降霊術士の生き残りがいるってわけだな……協会に刈り取られなかったのか？

あるいはつい最近、力に目覚めたのか……）

彼女の頭の中で様々なモノが駆け巡った。

パンドラ・プロジェクト。

２年前に大きな失敗を犯し、協会を打ち破るという計画は白紙となった。

門番として研究所の正面を守っていた彼女。

外敵は全て打ち倒した。

が、内部謀反の発生により研究所は壊滅。主要メンバーも殆どが討たれ、研究そのものが続行不可能となってしまった。

（そういや……

あん時、逃げた奴らはどうなったろ？）

アインの脳裏に彼らの顔が浮かぶ。
特に印象を残した数人の人工ＳＲ。　数少ない成功者たち。
フランス人の悪魔憑き。
隻腕になった少年。
牛人青年。
超冒険者。
内乱の首謀者と思わしき言動の少年。
（協会に捕まってなきゃいいけ……
あっ……）
ふと思い出した。
いま思い出した５人の中の１人。そいつは協会に捕――というより、自ら協会の門を叩いたのだ。
（クソ面白くねぇ。
何が童心英雄だよ。ピーターめ）
個人的な感情を抑えつつ、人工的火種が無いことを心から後悔する。
次からは忘れ物をしないようにしよう。
（仕方ねぇ……）

アインはくわえたタバコを手に取り、そっと息を吹きかけた。
手元のタバコが赤く燃える。

（うめぇ……）

戦闘の後は何故かタバコがおいしい。
タバコの煙を楽しみながら、再び目を物言わぬ死体に戻す。

――いやぁ、本当に死体の後片付けどうしよう？
面倒くさいこと極まりない。

片付けるのは得意だが、なかなか取り掛からないのが彼女であった。

あぁ～、面倒くせぇ～

第１４話－皆殺犬！解放、奈倉　愛院！－（後書き）

「あぁ～、ダッリィ」

後片付けがどれだけ大事なのか……人は皆一定の条件を満たした状況を経験すれば、誰もが気付く。

片付けなくして新鮮な心はありえない。

汚い場所からはマイナスの印象を受けるか、何も感じない。とにかく、プラスとなる印象を受けることはまず無いだろう。

（さぁ～て、コイツら片付けたら今度はこの夢創り出してる奴探さないと……）

全く。

数ばかりいて強い奴が少ないなんて、もう少し上手い作戦立てろよ……

愚痴の止まらないアイン。

その間、夢の中では大変な事態が藍を振り回し、トキを困惑させていた。

第15話－Ｃｈａｉｎ　ｏｆ　Ｄａｙｄｒｅａｍ－（前書き）

まずは括（くく）ることから始めよう。

楽しい層。
悲しい層。
怖い層。
理解できない層。
不快な層。
虚無の層。
荒廃の層。

よし、次は堕とそう。

君はあっち。
お前はそっち。
あんたはこっち。

「さぁ、皆。
静かに眠りな」

大抵の者は、何の抵抗もすることも無く、夢の箱へと入ってしまった。

トキも例外ではなかったが……
ある意味で、トキは例外だった。

第15話－Chain of Daydream－

人は、無限に変わってゆく。

その中で一般的にいう『成長』と、ひとつの『世界』としての成長。

夏の空を窓の外に、彼女は発展途上にある彼の力を感じ取っていた。

成長とは何か？

変わるとはどういうことか？

それらは日常生活において、あまりにも無意味な疑問だろう。

人は常に変わり続け、しかし、その些細な変化の繰り返しに気付かない。

しかし、体の不自由な彼女にとって、日常における些細な変化に気付くことは退屈な時間を潰すための重要な思考であり日常であった。

空を眺めているのも悪くはないが、6年も同じ場所から見上げる空の価値観はほぼ皆無となりつつあり、それでも素晴らしいものだと時々痛感するが、その程度の価値しかもう無い。

それに、今となってはもう殆ど見えないに等しい。

だから、彼女は疑問を見つけることとそれを自分なりに解くことを最近の日課とし、退屈しのぎとしているのだ。

今もそう……

自らのＳＲ（セカンドリアル）が勝手に彼の力の波動を汲み取り、疑問を与える。
時々、それが腹立たしい。
自分がベッドでの生活を余儀なくされているのは、紛れもなく自らのＳＲが原因である。
勝手に世界を読み取るか、或いは取り込んでしまう。

（眠りについていながらも、こんなに可能性を秘めている……）

しかし、最近はそんなことに頭が回らなくなっていた。

彼女は、日増し――いや、僅かずつ、数秒毎に変化していく彼の力に不安も覚えていた。

――急すぎる

成長が異常に早い。
それでも遅い方だと芹真さんは言っていたが、自分のＳＲの成長速度とは比べ物にならない速さで力を増していた。
増す、というよりは顕わになっていると言った方が的確だろう。

（もし、彼を敵に回した時……
私の力で敵うの？）

頭を振り、よからぬ考えを取り掃う。
前向きに考えよう。彼には芹真さんがついている。

きっとうまくいく。
あと少し我慢すれば、また光の世界へ戻って行ける。

解放の心地を漂わせる世界。

温かい空気。
安らぐ魂。

――ここはとても気持ちがいい。

つい眠気を誘うモノ。
まるで――――

快晴の空から差し込む光。
開け放たれた窓から吹き込む風。
ついつい眠気を誘う。

（……）

力む必要が無い。
死ぬとこういう心地でいられるのだろうか？

そう考えると、自殺志願者の気持ちも解らなくはない。

夢から現実へ戻る時のあの、夢心地への未練。
その更に数段心地が良いこの感覚は、麻薬以上に依存性が強い。

（……）

しかし――夏……

（……――っ）

前言撤回。

（暑……）

――※直射日光の中で居眠りは危険です。やめましょう――

なんて標識を見かけたのはドコだったか……
ところで、俺の席はこんなにも直射日光降り注ぐ場所だったっけ？

色々と思い出しながらトキは、奇妙な感覚に目を開いた。

「ん～？」

妙な静けさとあまり気にしたことのなかった太陽光線の量。
さっきまで騒がしかったクラスが静寂に包まれている。

カチッ

あまり遭遇しない雰囲気。
授業中でもこれだけ静かになることはまず無い。

トキは自分が机に突っ伏し寝ていたことを頭で認識する。
寝惚け眼をこすり、あくびを一つ。

(他の奴らはどうした？
四式(よしき)あたりはいつも通り寝てそうだけど……)

不気味なくらい静かだ。
普段の授業でもこうだといいんだが……

いま寝ているのが自分だけなのか、と後ろめたさと僅かな不安を感じて上体を起こす。
寝惚け眼に映る視界が明確な輪郭を取り戻し――

直後、多大な不安に陥った。

「へっ！？」

思わず首を振る。

前、左、右。
上半身、イスの背もたれに肘を乗せ、後ろを振り返り……
体の向きを戻す。

つい数分か数秒か……とにかく騒がしいクラス。
それが2年3組だ。

しかし、今はドコに目を向けても――
何度、ドコを確認しても――見知ったクラスメイトの姿がない――
――教室にはトキが1人だけだった。

不安を隠す余裕は無く、素直に狼狽した。
静寂であることもありも、不気味である。

あからさまな異常事態。

「なん……？」

自分を除き、完全に無人化した教室。
トキは立ちあがり、窓へと駆け寄った。

窓の外を覗き――夏の日差しに目が眩む、一瞬の眩暈。

急いで校庭を確認するが、無人。
そして、何の音も聞こえてこない。
一切の動作に伴う音が微々として伝わってくることは無かった。

カチ

（どうなってるんだ……！？）

トキは慌てて自分の机に戻って鞄を開ける。
鞄の中には今日の分の授業道具と細長い弁当箱がしっかりとその姿を見せていた。
しかし、余計な物にかまっている時間はない。急いで時間割のコピーを取り出し、現在時刻と照らし合わせる。

（10：04……
社会の時間のはずだよな）

眠りについてから5分と経っていない。
その間、何があったのか。

なぜ、クラスメイトは消えた？

考えながら拳銃――キンバーコンパクト――を取り出す。
こんな異常事態、ＳＲの仕業以外に考えられない。

顔をあげ、机の中を確かめる。
そこには見慣れた授業道具が納まっていた。

（あの時に似ている）

脳裏に浮かぶ月光降り注ぐ夜。
ＳＲの世界に足を踏み入れた日、その夜の出来事。

（また、あの男の仕業なのか？）

罪人（ゾンビ）予定者を操る能力の男。
しかし、よく考えてみればあの男：クワニーもホート・クリーニング店の店員だ。
現在、芹真事務所と共闘体制を取っている。
寝返ったのかもしれないが、何故かそうではないと否定する自分がいた。

（それとも、他のＳＲの仕業か？）

どのみち異常事態であることだけはハッキリとしている。

なら、自分は行動どうすべきか？

銃を付属のホルスターに収め、制服の内側へと忍ばせる。
軽く混乱していたとはいえ、訓練してもいない装備の装着をスムーズに行えた事にトキは疑問を抱かなかった。
どちらかというと、気付かなかった。

（藍もいなくなっている。
またどこかで戦っているのか？）

もし、藍が戦っていたら、止めよう。

（三日連続で戦ってることになるじゃないか……）

一呼吸おき、もう一度教室中を探る。
後ろめたさを感じつつも他人の机の中身を確認。
コウボウ、友樹、智明、崎島さん、エロティカ、岩井、二大委員長……ｅｔｃ

誰も居ない。
ついでに掃除ロッカーや教卓を覗いてみたが、やはり――

－第１５話－

－Ｃｈａｉｎ　ｏｆ　ＤａｙＤｒｅａｍ－

自分の教室内の検索を終えたトキは、次に隣接するクラスの検索にかかった。
教室の隅々、時々窓の外を覗く。
廊下、それから、この階にあるトイレ全て。

――１人も見当たらない

次に馴染みの昼食場所、特別棟の部屋を全て覗いて歩いた。やはり無人。
それから職員室だ。
人影はなかったものの、人が居た確かな証拠を発見。

――火のついたタバコ

しかし、人との遭遇は皆無。

学校は完全に無人の建物と化していた。
自分達のクラス同様、人の気配がない。

学校どころか、窓の外にさえ生物や機械、一切の活動を感じない。
動いているのは自分だけ。
自分達以外の一切の音が断たれたこの世界は、何が原因で発生しているのか、校舎を回りながらトキは考えた。
こういった体験も、深く考えてみれば珍しい。
普段人のいる場所に、自分以外の人が存在しない。
（まるで、自分だけが生き残っているような……
他全部が死んじまったような……）
それが率直な感想であり、自分の辿りついた感想に恐怖を覚えた。
もし、世界がこのまま続いたら？
カチン
（いや、そんなことない）
これはＳＲの仕業だ。
確たる証拠こそないが、霊的予感がそう告げる。
トイレに寄り――やはり無人。
廊下を進む途中も人の声が聞こえてくることさえなく、自分の足

音だけがいやに大きく響き、伝わった。

（この調子じゃ、体育館も同じかな……）

無人のゴミ収集所を後にし、トキは来た道を戻り始めた。
半ば諦めつつも体育館を目指し歩き続ける。

体育館へ通じる廊下を数歩、校舎と体育館をつなぐ渡り廊下でトキは足を止めた。

（一年生？）

制服姿で蹲る男子が居たのである。
制服の刺繍は学年を示していた。

無人と思っていたこの世界で、初めて他人と遭遇したのである。

（やっと人がいたか……）

安心しつつもため息が漏れる。むしろ、安心できたからため息が漏れたのだろう。
とにかくトキはその生徒に歩み寄った。
他人が居るのと居ないのでは大違いだ。
寂寥感が紛れる。

普段は耳ざわりに思っているはずの喧騒。　それが急に無くなった途端、人は寂しさを恐れる。
トキはそれを実感しつつ、再び歩を進める。

（そうだ――
もし、ここで敵が来たら……）

丸刈り頭の一学年、男子生徒。

「なぁ、ちょっと」

声をかける。
だが、男子生徒は顔を上げない。その代わり、わずか頭を動かした。
耳はしっかりと働らかせいている。

「先生たちがどこにいるか知らないか？」

一年男子は職員室を指す。
なるほど、普通はそう答えるよな。職員は職員室に。
むしろ、普通なら質問をしてきた者の頭を疑うだろう。　何故そんな常識的なことを問うのか、と。
しかし、いまは『普通』ではない。

「いや、職員室にはなぜか居なかったんだ」

「……」

沈黙が降り立つ。

この状況を一言で言うなら不気味だ。

セミの鳴き声が聞こえてもおかしくない季節だ。

それなのに、虫の声どころか車の音・生徒や職員の声さえ……とにかく何かが運動する音が聞こえてこないのだ。

目の前に他人が居るにもかかわらず静寂が続く。

これでは1人でいるのと変わらない。

「君はどうしてここに？」

「待ってる」

「他にも誰かいるのか？」

初めて声を聞いた途端――

カチンッ

「皆消えるのをさ」

瞬間的にトキの頭はフリーズした。

快晴の日差しの下、トキは本当に凍ったかのように固まり、思考停止に陥ること数秒。

トキの中で何かが吹き飛んだ。

この世界に取り残されたのが自分だけじゃないという恐怖、それを払うための希望。

恐怖と希望のカクテルがトキの頭を混濁させていく。

（まさか、こいつ……）

少しずつ混濁が収まっていくのと同時、状況整理が始まる。

自分と同じ学校にＳＲがいる。

しかも、一年生に。

「……やっと、９８％の排除・整理が完了した」

立ち上がりながらソイツは言った。

１歩引き、トキは質問する。

「お前、ＳＲか？」

「ああ」

ソイツはあっさりと認め、トキは反射的にまた1歩引いた。

（こんな時間に襲ってくるなんて……）

「この体に馴染むのに時間が掛かった『所為』か、『お陰』か……
ここに蹲っていたことで貴様と対面できたわけだ。
こちらから足を運ぶ手間を省いてくれたことに感謝すべきか？」

「お前も協会か！？」

自分より身長の低いはずのソイツにトキは気圧されていた。
だだ漏れる殺意が足を引かせる。

「オレは無所属連合の第５位１１番。
呪術師のＳＲ、イマル・リーゼ」

（無所属……連合？）

名前と顔に違和感があった。
どう見ても日本人。
ハーフにも見えないし、名前だって日本人のそれではない。

「もちろん、この体は本体ではない。
一時借りているだけだ。
まぁ、そんなことはどうでもいい。
さっそく本題だ。
早くこの世界を脱したいのなら、オレ達と一緒に来ることを承諾しろ」

「は？」

あまりにも唐突な話に、トキの思考は呆気なく2度目の混乱を迎えた。
無所属であって協会ではない。
無所属だから小規模集団でもない。
目の前のこいつは本体じゃない。

一緒に来る……行く？
それは無所属になれと？

「さぁ、早くこの夢から出たいだろ？」

トキの質問を無視。
まともに話を聞いてくれない相手であることは十分にわかった。

「まぁ……出たいさ」

「なら一緒に――」

「お断りだ！
ココから出たい以外の理由がない。そんな理由で無所属の奴らとは組まない」

「理由として不十分だったか？
しかし、貴様に理由がなくともオレ達には明確な理由がある」

「一体、どうする気だ？」

「利用……いや、使用だ。
貴様ほど器にふさわしい人間はいない」

（器？）

「オレ達が協会に対抗するための手段だ」

「それこそお断りだ……嫌だね。
何でオレが？
お前らの兵器になんかならない。なってたまるかよ」

一方的な要求など、誰が認めようか。
強気に言い返すトキだが……

「兵器じゃない。
同志だ」

「ドウシ？」

「貴様とて協会を憎いと思っているのだろ？
なら、オレらと組もう。手を貸せ。
そうすれば協会に一矢報いてやることもできる。
うまく行けば我々が新たなルールとして世界に君臨できる」

混乱は深まった。

協会を打ち破る……同士？　同志？
無所属は群れを成さない者たちの総称ではなかったのか？
オレ達と言っている時点ですでに組織化している？

無所属連合？

しかし、返事は決まっている。
Ｎｏ。
芹真さん達と共に戦うと心に決めたんだ。

「オレ達に兵器は要らず。
しかし、圧倒的人材に不足しているのが現状さ。
まぁ、そうじゃない奴らもいるが……」

「俺は仲間になんかならない。
それ以上話ても――」

「そうだな、無駄になるな。

なら、貴様の友人を連れて行くとしよう」

カチッ！

トキの体中に電撃が走った。
混乱がたったの一言で沈静化。

おい……

「……何て言った？」

「貴様の友人を連れて行く。
何も貴様だけが器の候補者じゃない。
器に相応しき者が他にも2、3居るのだからな」

絶句。
それは無関係な人を無理やりＳＲの世界に引き込むということ。
許されるはずが無い。

つぅか許すかよ。

「……これは夢だ」

「そう。
オレが創り出した夢（モノ）」

「お前を倒す……
決めたよ、絶対に倒す！」

「意気込むのは結構。
しかし、それがどれだけ無駄なことか……体で思い知った方が早いか？」

トキは銃に手を伸ばし――初めて異変に気付いた――ホルスターに収めたはずの銃がなくなっていることを知った。
微笑むイマル。

「この世界を創っているのはオレ。
全ては意のまま。
お前に勝ち目があると思うな」

（銃が……）

武器なしで対峙するのは困難。
トキは、自分の戦闘能力の低さはここ2日で――今日で3日目か――嫌というほど味わった。

だが、全て“武器／ネタ”が尽きたわけではない。

（もう一度、あの力が使えれば……）

トウコツと対峙した時に使用したタイムリーダー。
そして、時間剥奪（クロノセプト）。
問題は、奴が創り出したというこの世界で力を使えるかどうかにある。

もし、ＳＲが発動しなかったら……

「どうやって痛められたい？」

２人は無言で睨みあった。
これ以上、言葉は要らない。

（コイツ……先ず、武器を手に入れようとするな）

（そうだ、武器を手に入れないと太刀打ちはできない！）

直後、２人は同時に動き出した。
トキは踵を返し、全力疾走。
一方イマルは、予想通りに動き出したトキの追撃に出た。

「“霞の彼方への咆哮、見えて観えないモノの追討！
ただ一を狩り、一のみが得、得たもの真実に変わり、無限に繰り返される夢幻の誓約。
追え　狩人たちよ！”」

超早口を背中にトキは走り続けた。
振り返っている暇など……耳を傾けている場合では、ない。
奴の術か技、とにかく何かが迫ってくるだろう。
――出来るだけ距離を！

体育館へ通じる通路から校舎内通路へ。
全力で戻った時、思いもよらぬ事態にトキはスピードを落とさざるをえなかった。

「う、わっ！
ってぇっ！？」

突如、無人の校舎は大勢の生徒で彩られた
廊下を半ば走ったところ、トキめがけて生徒達が殺到。
しかも、一クラス単位。
この狭い廊下に逃げ場が無い。

階段――遠い！
戻る――論外！

「くそっ！」

人波の先頭集団がトキを抑えようと殺到する。

捕まったら終わりだ。
全てのチャンスを失う。負ける！
トキは教室とは反対側の廊下の壁――ここは1階――窓に向かって加速した。
ガラスの窓は開いている。
（うまく行けば！）
しかし、開いていた窓がイマルにとって都合よく閉まってしまう。
納得しながら悔やみつつトキは突っ込んだ。
どうせ夢だ。
「だあぁぁぁっ！」
水飲み場を足場に飛ぶ。
その直前にトキの足を押しかけた生徒らの指先が掠めた。
間一髪。
トキが飛ぶ方が早い。
ガラスを割り、トキは外に出ることに成功した。
「痛っ……！」

しかし、着地にわずか失敗。
地面を転がった時、ガラスの破片が皮膚と肉を切り裂いた。

だが、止まっている暇は無い。
立ち上がって出来る限り速度を上げる。

ガラスで切った腕の部分から流れ落ちる血の温もり。
教室で寝ていた時の温度。
走る時の風の感触。

（とても夢とは思えない……！）

奴らが追ってくる。
そのままトキは裏門へ走り、

――屋外が屋内に――

気付けば、校舎内へ戻っていた。

「なっ…にん!?」

いきなり地面が床になっていた。
太陽の下からいきなり校舎に入り、暗順応に少しだけ戸惑う。

しかし、視界が明確さを取り戻すにつれ、戸惑いを軽く覆すほど

絶望的な光景が目に飛び込んできた。
目の前に大勢の生徒・職員達が待ち受けていたのだ。
所狭しと玄関のロビーは人並みで溢れかえらんばかりだった。

（ちくしょう！　上等だ！
お前らなんて、トウコツやアヌビスと比べたら全然怖くなんかない！）

自慢じゃないが鬼ごっこだけは負けたことが無いんだぜ！

しかし、この圧倒的人数差の前にそのスキルが生かされることはないだろう。
何せ、無数の鬼ｖｓ逃亡者１人。
逆鬼ごっこだ。
そして怖くないと思っているのも表層意識だけ。
捕まった時のことを考えると鳥肌が立ち、足が震える。

（そうだ！）

無数の鬼の中に突っ込んだ瞬間、
以前、１度見た映画――何だったっけ？――とにかくその行動をトキは模倣して試みよう。

１人目のタックル。
紙一重で躱わし、次にまた１人突っ込む。
低めのタックル。

（まるで神風特こ……）

躱わす！
３人目が迫った。
距離、タイミング、高さ……跳ぶならここだ！

「はっ！」

ソイツのギリギリまでひきつけ、トキは直前で飛んだ。

――踏み台！

トキは生徒の低姿勢でのタックルを逆手に取り、普段は取らない足場を選んだ。
どうせ夢。
そらなら、何をしても咎めはない。

背中から他の生徒の肩へ、頭へ。

普段ではありえない視点の高さに一瞬戸惑う。
高い。
落ちたら痛い。いや、次は無い。

故に、落下は許されない！
そう。問題はココからだ。いかに早く、そして落ちずにこの密集

地帯を切り抜けるか。

「これなら行けるっ！」

その時、トキのＳＲは発動した。
跳ぶ。
他の生徒の肩や頭を足場とし、次々と足場を跳び移っていく。

タイムリーダーの力で全てがスローに見えた。
ほぼ止まっていると言っても過言ではない。
意識はこの低速の世界でも通常速度で働いている。

問題は、自分の体もほぼスローで動いていること。踏み外すことは許されない。
それなのに、筋肉の伸縮がまた妙な感覚にトキは軽く戸惑っていた。

（運動している時の筋肉って、こんなに伸縮するんだ……）

雑念にかられ、途中でバランスを崩すもののギリギリのところで持ち堪える。
そして、５分にも１０分にも感じられた数秒が経過した時、トキは玄関の密集地帯を切り抜けることに成功した。
急いで自分のクラスを目指す。

（よし！）

トキは生徒の少ない地面に着地し、再び走り出した。

走り続けるトキの様子を、イマルは完璧に把握していた。
この世界を創り出したのは自分で、自分が創り出したモノ以外の存在は、簡単に知覚出来る。

「さて、色世　時……
貴様の夢を見せてもらおう」

仮構の炎天下、呪術師は呟いた。

――あいつら、数はいるが反応速度が遅いうえに、走るのもそんなに速くないぞ！

素手で奴を倒すことは無理だろう。
しかし、何か武器さえ手に入れることが出来れば、倒せなくとも傷を負わせるくらいできる。

そんな気がしていた。

（どうしてアイツらはいきなり現れた？
ドコにこれだけ隠れていたんだ？
何で今頃になってこんなに現れたんだよ？
全てが奴の仕業なのか？）

呪術師イマル。

これが、無所属のやり方なのか考えているうちに2年3組に到着した。

扉をくぐりトキは教室全体を見回し……

「うっ！」

教室に入り、その異変に気づいた時、扉は自動的に閉まった。

扉が勝手に閉まったことには驚かない。

が、さすがに教室の外――窓の外――で昼夜が完全に逆転していたことには驚いた。

「さっきまで……
青空……」

更にトキを驚かせたのは無人だったはずの教室が、昼夜逆転の異変に気づいた途端、見慣れたクラスメイトたちで埋め尽くされていた。

「トキ、何をしているの？
すぐ席に戻りなさい」

「え、あの、レンガ先生……？」

「ん、何？
授業の邪魔をしたいの？」

いつの間にか定時制になってしまった自分のクラスを見て、トキは夢と現実の混乱が始まったこと、自分がいま非の打ち所のない混乱にいることを認識した。

目の前の光景はおそらく夢だろう。
だが、感覚や感情は、夢の中にまで付きまとうモノだっただろうか。

付きまとう。
いや、錯覚だ……

錯覚か？

（落ち着け！
これも、あいつの仕業だ！）

トキは焦り、同時に恐怖を抱いた。
夢の中だと思っている世界で他の生徒たちの視線に恥ずかしさを覚え、夢の中であるにも関わらず、羞恥心が働く。
この世界が夢で無いから？
（本当に夢なのか？）
これまでの全てが夢で、目の前の光景が現実だったらどうであろう？
今まで体験・体感してきたもの全てが偽りだったと受け入れることは出来るか。
受け入れたことでどう変わる。
自分の過去は夢だった。
どのように変わることが出来て、自分はどうなってゆく？
（いや、現実じゃない！
アイツが創り出した世界で、俺を惑わす気だ！）
カチン

「先生、俺……ちょっと用事があって早退したいんです。
それで、忘れ物を取りに来ました」

「そうか。
で、どんな用事があってだ？」

夢と分かりつつもいつも通りの会話口調になってしまう。
目の前の蓮雅先生は現実と何一つ変わりない。
口調から体格、威圧まで全て現実のそれと同じだった。

「えっ、と……」

トキは言葉に詰まった。
残念ながら、一般の人間に話せる理由はない。
例え、コレが夢だろうと。

（そうだ、これは奴が創り出している世界だ。
どんな理由があっても断られるか……）

踵を返してトキは自分の席に走った。

（なるほど……
コイツには人並みの“夢／理想”がない）

将来、何になりたい。
そういう明確な願望・欲望が、トキには皆無に等しいかった。

何になろうとしているのか、将来の自己像が確定されていない。
通りで、とイマルはため息をついた。
面白い実験対象ではあるが、黙らせるとなれば面倒な相手でしかない。

（しかし……“夢／記憶”はあるか）

イマルは“改層”をやめ――
“回想／回層”でトキを囲んだ。

机の脇に提げている鞄を手に取り、トキは走り出した瞬間――

再び周囲の光景が変わる。
外は晴天の真昼へ変わり、教室からはすべての机が消えた。

（あれ？

何で上下逆さ……）

トキは背中から地面に転がった。
呼吸が乱れる。

直前に僅かな感触があり、寝転んだ状態から起き上がろうとするトキの目の前に彼女が現れた。
裏委員長こと、木田村　麻衣子（マイコ）

「色世君。
先生の質問には答えなきゃダメでしょ？
それに、早退にはそれなりの理由が必要なんだから」

トキの中で、夢と現実の区別が一層曖昧なものになった。
夢の中でも正当な理由を突きつけてくる裏委員長。
いつでも、誰にでも平等だ。

「っ……」

一瞬にして机が消えたのは幸いだった。
机にぶつかってダメージを貰うことは無かったのだから。

しかし、見知った生徒は誰一人として消えていなかった。
そう。
見知った生徒は。

「うっ……！」

地面を背にしていたはずのトキは、２本足でクラスの真ん中に立っていた。

またしても景色が変化したのだ。

倒れているはずのトキは、しっかりと自分の足で立ち、そして、机・椅子の消えた教室でクラスメイトに囲まれている。

（何なんだこれ……！？）

だが、最大の衝撃をトキ与えたのは、トキだった。

中央に立つトキと、向かい合う――

（え……俺！？）

トキを囲むクラスメイト。

トキの真正面に立ち、鋭い目で睨み付ける、もう１人のトキ。

現実と夢のトキ。

呆気に取られた数秒。

囲いは一気に縮まり、全てが一斉にトキへと襲い掛かった。

最初の一撃は、背中。

誰が押したのかわからない。また、どんな方法で押したのかわからない。
押したのか、蹴ったのかさえ曖昧だった。

体が前のめり、必死に支えを探す。
地面に手を付くことでなんとかバランスを保つ。

しかし――バランスを保った直後、トキは何もすることが……
…させてもらえなかった。

“逃げた意味な――……”

殴る。
蹴る。
叩く。
踏みつける。
物をぶつける。

袋叩き。

その現実は、1対39という圧倒的差。

「――――ッ！！」

1秒が5秒にも感じられる瞬間。
それは時間の経過と共に体感時間も長くなっていく苦痛。

見知った顔――クラスメイト――の容赦ない攻撃。

つい数秒前まで、ただ視線を送るだけだった彼ら。

それが今、微塵の殺意も抱かずトキを囲み、痛めつけていた。

声をあげれば、少しは楽だろう。

力一杯叫ぶことで少しは痛みを紛らわせられるだろう。

だが、それも出来ない。

床に手をついてすぐ、トキの顔面にローキックが打ち込まれた。

揺れる視界。

混濁する思考。

蹴られた場所に響く痛み。

歯はぐらつき、口の中は切れ、鼻から朱が滴る。

「――……！！」

腕で顔を守る。

脇を占め、両足を閉じ、トキは反撃や抵抗といった多くの『選択』を捨てた。

急所を守る。

声を上げることが出来ないトキに残された抵抗手段。

――痛い

（やめてくれ……友樹
そんなすんな、翼……
コウボウ――まで）

背中。
蹴られ、何らかの物で殴りつけられ……
――怖い

（やめてくれ……佐野代、裏委員長！）

腕。
骨が軋むのがわかる。
一体何人に蹴られ、何度蹴られ……

あと、何度痛めつけられる？

――もう……

（……やめ……）

脇腹。
重たい何か。
蹴り。拳。凶器。

この体はいつまで保つ？

悲鳴を上げる肉体。

鍛えておけば良かったと後悔するが、後の祭り。

――やめてくれ

（――――）

全身に痛みを覚えながらも、トキはただ縮こまるしかなかった。

今、自分に出来ること――必死に、この場を切り抜けること。

（――で？

何で？どうして？

皆、どうして？

俺は何もして……）

加え続けられる打撃・衝撃。

――痛い、痛いっ

……痛い！痛いっ！

蹴り。

指や関節が異常を訴え始める。

殴打。

打たれた背中に熱が篭り、激痛として伝わる。
凶器。
制服を破り、皮膚へ直接攻撃を受け、体の所々から流血が始まる。

（これじゃあ……）

脳裏に浮かぶ、記憶。
今に始まった話じゃない。
が、2度と思い出したくなかった記憶。

（小学の時とまるで同――……）

再び顔面に蹴りが入る。
床に側頭部を打ち、今一度力の限りを出して縮こまる。

もう、どこをどうされているのか判らない。

早く終われ。
すぐに覚めろ。

きっと、目が覚めればベッドの上だ。
見慣れた自分の居場所で目覚め、すべてを共通の世界へと歩み出て行く。

そう。
これは夢だ。

――小学校の時の嫌な思い出を、夢で見ているんだ！

夢の回層が一段と激しさを増す。
トキを痛めつける全員が、得物を手に、袋叩きを続ける。
脛（すね）、肘、首、尻、腕、背中、ヒザ、指、頭……

痛みの度合いを増していく攻撃。
何度も繰り返される痛み。

何度も放たれる攻撃。
考える余裕・冷静さを奪ってゆく痛み。

執拗に――
無限に繰り返される囲い。

（夢だ……
夢なんだ！）

夢という名の現実。
まさにそれだった。
それでも終わりが来ることを信じ、トキは自分に言い聞かせた。
いつかは終わる夢だ、と。

そんなトキを感じ取り、イマルは夢層のグレードをあげる。
まだまだ。　これからだ。

「コイツらも混ぜてやるよ」

トキを囲む袋にソイツらが追加された。

ズッ……

それは突然。
何の前触れもなく訪れた。

凶器攻撃を必死に耐えるトキを、新たに――更なる激痛が襲った。

「あっ！……！？」

押し殺されていた声が上がる。
鋭い、一瞬で通過する電撃のような痛み。

今までの凶器、打撃によるものとは明らかに違う激痛。
それが次々とトキに降りかかった。

両手両足、脇、背中、関節、首。
その中で、最も痛覚を伴ったのが背中である。

（刃物！？）

直後、誰かが背後から首を掴み、持ち上げる。
持ち上げられ、開けた視界から不思議と驚愕が同時に飛び込んだ。

（アヌ……ビス？）

最初の不思議は、そいつら（アヌビス）が生きていたこと。
しかも、複数。
それから僅かして、ピタリと攻撃が止んでいた事に気付く。

（死んだはずのアヌビスが――）

どうして。
そんな疑問の言葉が浮かんだ頃、トキの体はガラスを割り、地上2階の空中に投げ出されていた。

何をされたのか、トキには理解できない。
思考が追いつかず、自分が投げ出されたと認識するのが精一杯だった。

幸か不幸か、そのお陰か所為か……
2階からの落下が頭になかったため、トキは簡単に生を諦めることはなかった。
自ら、“死んだ”と悟らない。

何故、アヌビスが生きているのか。
どうして自分の目の前に再び現れたのか。

更に、単純・明確に幸いだったことは、落下した場所が陸上部所有の砂場であったこと。
それでも、着地の衝撃が半端なものでないことに変わりはない。
一瞬止まる呼吸。
全身に響き伝わる衝撃。
飛びかけの意識を必死に繋ぎ止めることさえ苦痛に感じる。

呼吸を整えるのに数秒。

――痛い

すぐに追ってこないことが逆に不気味だった。
全身の痛みを堪え、トキは砂場を這いずり出る。

目に映る出入り口。　正門。

カチン！

ふと、トキの目がソイツに向いた。

現状の原因、敵呪術師：イマル・リーゼ。

「貴様は何をしているのだ？」

微笑むイマルを見上げ、トキは停止した。

どうしてコイツはこうも面白そうな顔をしているのか……その理由を考えて腹立たしくなる。

「オレを倒すんじゃないのか？
貴様はそう決めたんだろ？」

「……」

返す言葉を必死に探し――

「お前は夢の中にいるのか？」

そんな言葉で探索を中断させられた。

「貴様は本当にコレが夢だと思っているのか？」

「……ば」

「もしそうなら、理由を聞かせてもらおう。
“何を否定したくて”この世界を夢だと言いたい？」

呼吸を整える。
全身の痛みが思考を阻害し、上手く言葉が出てくれるか不安だった。

「……オレのクラスメイトは――」

「ん～？」

勝ち誇るイマル。
怒りが傷に響く。
だが、痛み以上に悔しさがこみ上げていた。

「意味も無く……人を――
……殴ったりする奴らじゃない！」

僅かな呼吸の乱れ・多大な感情の流動から咽(むせ)ぶ。
悔しさと怒りと、痛み。
自分で吐いた唾は、虚しくも自分に降りかかるだけだった。

「その言葉を現実に何人のクラスメイトが聞き入れると思う？」

イマルに気を取られていたトキは、再び囲まれていることを今更になって気付いた。
見慣れたクラスメイト。
死んだはずのアヌビス。

極めて絶望的状況。
再び逃げ場を失ったトキは、俯き、地面を叩いた。

――こんな奴にやられる
――自分独りでは何も……

「貴様のクラスに何人のＳＲがいると思う？」

「――……え……っ」

顔を上げるのと同時、首が痛む。
何かを突きつけられている。

「貴様は無意味に人を殺めるクラスメイトなどいないと言っているが、それは貴様が奴らの素性を知らないだけだ」

「素性……？」

「貴様のクラスには協会１人。鬼の娘が１人。
その他にも、ＳＲの器としてこれ以上無いという上質な素材が複数。

更には器実験の痕跡者が居るではないか」

2度目の絶句。
それはトキにとってあまりにも衝撃的なものだった。

巻き込まれないで欲しいと心の底で願っていた。
どれだけ蔑(さげす)まれようと、どんなにいたぶられようと……皆と一緒に居たい。

もし、そんな彼らが生死に関わる事件に関わっても、自分じゃ助けるだけの力が無い。
だから、是と非と、心の底では願っていたのだ。
巻き込まれないで欲しいと。

「貴様は甘い。
考えが甘い。
行動も甘い。
やること成すこと中途半端で、賞賛できるものが一つも無い」

弱く。
また、愚かしい。

（あぁ～、何か……）

この状況を打破する閃きは無く、ただ――現状況下でトキの頭は

どうでもいい結論に至った。

どうして小学校の時に袋叩きにあったのか？
考えてみれば、自分の両親はその頃から日本には居なかった。
母親に至っては他界しているし、父は海外獄中。

そうか。
だから、親父はあんな所に籠ってしまったのか。
養父との関わりもその辺りの時期からだ。

どうしてその辺の記憶が曖昧だったのかは、昨日判明した。
ＳＲの襲撃と、自分が唯一の生存者であったこと。
その為、ＳＲに関わった記憶を封印されていた。

一度殺されたらしい、俺。

では、なぜ今まで――今、生きている？

（……あれ？
オレ、生きている？）

この世界は夢。

夢の中に、生命（いのち）は伴うものなのか？

トキは脳心理学者でも医者でも、また夢を研究する人間でもない。
故にそんなことわからない。

夢の中で死ねば、現実でも死ぬ。
なぜなら、魂は常に自意識と共にあるから。

（あぁ～……エロティカめ）

自分を囲む袋の中にそいつの姿を探す。
といっても顔を上げる程度のことしか出来ない。

――トキは軽く混乱していることに気付いていない

認めたくないが、人生における初めての親友。
態度と性欲は最悪級だが、絶対に暴力には触れない男。

ガチン

（……居た）

イマルの左側、３番目のところにその姿はあった。
見慣れた面。
それが再びこの世界を夢だと認識させる。
ここは現実であって夢だ。

夢の中という現実だ。

「――うるせぇ」

「ん？」

踏ん切りがついた。

いいや。どうなっても。

分かったんだよ。

「もう、お前は喋んな……」

「よかろう。

だが、どうしようとこの袋は黙らないぞ。

なぜなら、全てオレの思い通りに動くんだからな」

呼吸が、少しずつ整う。

痛みが消えたわけじゃないが、痛みを忘れることは出来た。

せめて、1発。

例え効果や意味が無くても、1度くらいは叩いておきたい。

這いずり、トキはイマルに接近した。

見上げるトキと、見下すイマル。

本当に無言だった。

何も語らず、イマルはトキを見下し、トキは視線に憎悪をこめて見返す。

関係ない。
相手がどうしようと、どんなだろうと、とりあえず殴る。
相手が動かないんならそれに越したことは無い。

どうせ夢だ。
やれるだけやって終わろう。
死ぬかどうかは後回しだ。
やらないと目覚めが悪い。
怒り任せにトキは、イマルの足元まで這いずっていた。

イマルの足に。
立ち上がることができないトキには、それが精一杯だった。

放たれる、遅々とした拳。
狙いは、脛。

結果――
イマルの言う通り、袋は黙っていなかった。
トキの放った右拳は、イマルに届く前に阻害される。

ズンッ

スローイングナイフ。
右手の皮膚を切り裂き、肉を破り、甲の骨を砕く。
貫いたナイフは、その刀身を地面に深々と突き刺した。

今までの攻撃の中で、最も痛みを喚起した。

全てを挫く一撃。
いままでに出遭ったことのない痛み。

トキは左手で手首を押さえた。
少しでも、痛みが和らぐなら。
涙を流しつつも、イマルを睨み付ける。

（――藍だって……っ！）

ガチンッ

トキの頭に彼女の姿が浮かぶ。

初めて出会った夜の驚異。
非力すぎる自分を救ってくれた戦鬼。
流れるような動きと、圧倒的スピードと、火力。
そして人並み外れた底力。

どんなに多くの敵と向かい合っても決して逃げようとしない。
全てを打ち砕かんという強い姿勢。
ゾンビに立ち向かい、アヌビスと渡り合い、トウコツと対峙した。
どんな敵だろうと関係なく、常に全力で戦っている。

それが、トキの目に映った藍。
自分の求める強さを纏いし、哭き鬼。

「あいつだって……！
こんなに耐えたんだ！」

同じアヌビスに、同じ攻撃をくらい――だから、同じ痛みに耐えてみたい――だからこそ、諦めたくない。
アヌビスと戦っていた彼女は最後の最後まで諦めようとしなかった。

（俺だって！）

トキの叫び声にイマルの顔が驚きで彩られた。
再び、袋が縮まり、嵐のような攻撃が再開される。

だが、先程とは違う。
凶器攻撃に無数の刃物が追加され、急所を避けるよう、じわじわ痛めつけるように浅めの斬撃が断続的に繰り出された。
攻撃されるたびに痛めつけられるその感覚は、ひと思いに死を乞いたくなる痛覚の波。

（ちっ……
しぶとい！）

しかし、先程とは違う。
トキの目はイマルをにらみつけたまま動かない。
涙溢れる激痛の中、闘志は膨らむ一方だった。

どんな痛い目に遭おうと、決して屈するつもりはない。

思い返せば自分の理想像が手の届くような、身近に存在した。
非力なんだ。
少しでも強い奴の真似をして、近づきたい。

強い奴の真似をして何が悪い？

とにかく、１人でも困難を乗り越えられる力が欲しい。
その為にはまず諦めない。
逃げない。
そうすれば、いつかはチャンスがくる。
トキはひたすら耐えた。

それがトキに出来る唯一、精一杯の『抵抗』だった。

第15話－Ｃｈａｉｎ　ｏｆ　Ｄａｙｄｒｅａｍ－（後書き）

「あん？
何だお前？」

タバコを踏み潰し、奈倉愛院はソイツと遭遇した。
ＳＲの匂いが嫌なほど漂ってくる。

「色世　時のクラスはどこかな？」

「あんた誰だよ？」

鋭い目付きの番犬に対し、男の目は殆ど死人に近いものだった。

「この夢を創り出している男を捜している」

「皆を夢から逃がしてくれるのかい？」

「そうだ」

愛院は手早く男に場所を教えた。
すぐに男は移動を開始。校舎へと消えていった。

通りざまに嗅いだ匂いから、あまり相性の良くない相手だとわかった。

（まぁ、敵対意志は皆無だし、害は無ぇか）

あっさり認め、愛院は次のタバコを取り出した。

いま、呪術師イマルにとって最大のイレギュラーが裏門から侵入を果たしたのである。

第１６話－決着！夢層の戦い！－（前書き）

変わりたいものが夢。
変わろうとする標が夢。
変わるきっかけが夢。

変わった理由を返り見せるのが夢。

――いや――

記憶が夢。
思い出が夢。
夢見ることも夢。

当たり前でいい。
夢は夢でいい。

だから、

お願いだ。

せめて、私にも夢を……

第１６話－決着！夢層の戦い！－

白州唯高校２年３組

そこを独りの男が訪ねた。
全てが静寂に帰っているこの学校に虚しさを見出し、それでも男はある意味での喜びを感じていた。

この夢を作り出している呪術師を殺すまたと無い理由を手に入れた。
犠牲となっている生徒には悪いが、君たちのおかげで奴は下手に動けない。

（もう少しの辛抱だ）

眠りから覚ましてあげよう。
そのために男はここに来たのだ。

男は夢に堕ちた１人の男子生徒の背後で立ち止まった。
ここまで来た理由は、夢を止める為。

（皆を夢から救うにはお前の協力が必要不可欠だ、トキ……）

取り敢えずの謝罪と、これから行う行動に事の理由付けを心の中でつぶやき、腰のホルスターから黒い鉄針を取り出す。

黒い針身には白い呪文が書かれていた。

呪われた人間と直接コンタクトを取るにはそれなりの処置が必要で、夢に呪い堕とされた人間には、その夢と現実を繋ぐ橋が必要だった。

男の取り出した鉄針がそれである。

男は、鉄針をトキの後頭部に突き刺す。

死に至るはない。

なぜなら、この針は人を殺せないという呪いを受けている。

刺しても死なない、傷つかない。

しかし、刺さっているという事実は存在する。

痛みを感じることはない。

男は、夢に介入した。

「な……っ！？」

イマルはすぐその介入に気付き、動揺した。

その――夢を――、一瞬。

呪いによって創られた夢の世界が、別種の呪いによって“止めら

れた”

1秒たりとも時間が流れない世界が発生する。

完全静止の零世界。

介入した男の所為で、世界が狂ったのだ。
時間の流れが止まり、イマルも、夢の住人も、全て……
何もかもが制止してしまう中、トキだけが時間の流れの中にいた。

「……え？」

突如として止んだ打撃・斬撃の嵐に顔を振った。

イマル、止まってる。
クラスメイト達、静止している。
アヌビス共、微動だにしない。

（まさか……）

自分のＳＲが発動したのか、トキは疑った。
そうだ。
そうすれば、ここから逃げることが出来た。

どうして使わなかった？
なぜ気付かなかった？

「動くな少年」

一声。
しかし、そのひと声はトキの背中に寒気を覚えさせた。

「いま下手に動くと首が飛んでしまう」

「なにが……？」

「私の介入はここまでだ」

トキの脳裏にある男が浮かぶ。
まさか、また――

「フィング……さん？」

否定の返答。
しかし、男であることは分かる。
そして、聞き覚えの在る声。

「完全再生に比べれば、あまりにも微弱なＳＲ。
どうでもいいことだ」

「時間を止めたのはあんたか？」

単刀直入な質問に男はイエスで返す。
凶器や蹴り足に囲まれたトキは、男の姿を確認することが出来ないが、声を聞くことは出来た。

「私はイマルを殺す。
君は、この世界を破れ」

「……破れ？」

「そう。
呪術師は私が倒す。
その為に、この世界で君は奴を足止めしてくれ」

その男が味方であることは分かった。
が、しかし、信用していいものなのか疑問である。

「ならば、言っておこう。
会うのは瞬間的な場合を含めて８度。
言葉を交わすのは今回が２度目」

「……ぇ？」

「時間がない、どうする？

この世界でイマルを倒してくれるか？
そうしなければ現実で奴を倒すことは不可能だ」

「……」

芹真さんといい、フィングといい……

どうしてみんな言い出すことが急なんだろうか？
それは俺が世界の状況を知らないから？
実は明日にでも人類が滅びてしまうくらい切羽詰まっているとか？

だから、ＳＲの世界は慌しいのか？

「違う。
お前は自分の成すべきことをいままで避けてきた。
その代償だと思え」

「代償だって？」

「引きこもることで、お前は何を見つけようとした？」

ガチン！

「欲しかったものは“あらゆる困難を乗り切る力”だろう？」

ガチッッ！

「お前には力があるんだ……
やってくれないか？」

ガチンッ！

「俺が、目の前のＳＲを――殺せばいいのか？」

「そうだ。夢の呪術師、イマル・リーゼ」

完全に停止しているこの世界で、トキを中心に世界の“一部”は時間を取り戻した。

「この夢の世界は、お前の望みに答えるはず」

「夢……だからか？」

「そうだ。
だからこそ、奴を倒せる」

トキの体中の傷が消え始めるのと同時、男の体から色素が抜け始めた。

（もう時間か……）

この世界から強制的に排出されてしまう。
夢の外に出たら本格的に夢の呪術師を見つけねばならない。
問題は、この世界を破るか覆すという重荷を目の前の少年に託すしか方法がないということ。

「武器が欲しいなら、右手のそれを使え。
お前の母親が得意とした“クロノセプト”を使ってな……」

「俺が……呪術師を倒せばいいんだな？」

全身の傷が完全に消え去ったのを見て、男は安心した。
トキならやれる。

この世界で――全ての都合がイマルに傾く世界で――トキをタイムリーダーが使えるまでに引き出すことが出来た。

元々使えたわけだが、引き金が引ききれていなかった。
それがトキの弱点。
敵の創りだしたものに飲み込まれ、自分を見失ってしまう。

だが、今のトキは完全に自分を取り戻していた。
安心してこの世界を出られる。

「乗り越えてみせろ、少年。
例えば――

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

第１６話

―決着！夢層の戦い！―

地面の沈下と共にイマルは驚愕した。

崩壊の轟音と、バランスを崩し倒れる住人たち。

一瞬だけ世界を止められたことを感覚的に悟る。
その間に何をされたのか、被害調査に意識を向けようとしたが、頭は軽い混乱を迎えていた。

被害調査したい頭と、足場の陥没によるサプライズで不思議を覚えずには居られない頭。

（何だ！
この陥没はっ……！？）

コンクリートの道が沈む。
多くのアヌビスや生徒達もバランスを崩して倒れた。

「はあぁぁぁぁっ！！」

陥没した道の――その中心にトキがいた。

（そうだ……コレだ！）

トウコツとの戦いを思い出す。
つい昨日。
しかし、どうしても思い出せなかったその感覚。

右手を貫いているスローイングナイフを握り、時間のＳＲを流し込む。
この一瞬で作り上げる。
さもなくば、奴らが一斉に襲い掛かり、またチャンスを失うことになる。
今まで、幾度と無くチャンスを失ってきた。
全て逃げてきた為。
だから、何も得られない。
何も変わらない。
いつかは逃げ出さずに立ち向かわなければいけない時があるのだ。
それが避けて通れない道。
様々なモノに共通する、試練。
（乗り切ってやる！）
いつまでも助けられっぱなしは嫌だ。
自分を嫌いになってしまう。
そうなれば、人として壊れていくだろう。
それくらいなら、死ぬ覚悟でぶち当たってやる。
玉砕だ。

「させるかっ！」

改層を阻害されたイマルは苛立ちながら夢の住人に告げる。

トキを止めろ！
何もさせるな！

しかし、僅かな困惑でトキに隙を与えたイマル。
号令の発令と同時、トキの右手に刺さったスローイングナイフは、
金棒へと姿を変え、トキの手に握られた。

アヌビス戦で藍が使って見せた金棒。
トキの記憶に強く結びついている武器。

理壊奏淵破界（リカイ　ソウエン　ハカイ）。

「何っ！
貴様も持って……！？」

トキは立ちあがり、理壊奏淵を振る。
最初の餌食となったのは、スローイングナイフのアヌビス。

更に、

「止まれぇぇえ！」

トキを囲む夢の住人達（クラスメイトたち）が立てるざわめきに負けないほど大きな声でトキは叫んだ。

呼応する夢の世界。

イマルが創ったはずの世界で、トキは主導権の半分を掴み取った。

「――馬鹿な……

私の……夢層を改竄（かいざん）したのかっ！？」

トキの号令で世界が、夢の住人たちの動きが緩慢になる。

完全に止めることは出来ないが、そのあまりにも遅々とした動きは止まっているに等しかった。

まず、アヌビス共から吹き飛ばす！

（イメージだ！

イメージを……！）

頭に浮かぶ、藍の姿。

理壊奏淵破界を握った藍。

理壊双焔破界を振り回す藍。

どんな窮地も切り抜ける力を持った鬼。

逃げたい気持ちを押し殺し、戦いに没頭する。
鬼になれ。
頭を切り替えるということ。
戦う。
もう、逃げ出さない。

「誰も連れて行かせねぇ！！」

「ほざくな！
穿て、射手達！」

イマルの号令で、緩慢となった住人達に通常速度を取り返す。
その内の半数が距離をあけ、残り半数もトキから距離を取った。

手にする得物が変わる。
近接武器から、遠距離武器へ。

イマルの知る最も高性能な銃。
アメリカ製軍用アサルトライフル：Ｍ４Ａ１カービン。
５．５６ｍｍＮＡＴＯ弾使用の高速連射ライフル。

２０もの銃口が一斉にトキに向く。
が、どんな事が起ころうとこれは夢だ。
現実じゃない。

だから、何が起こってもおかしくない！

一斉に放たれる５．５６ｍｍの弾丸。

同時、再びトキは叫んだ。

「止まれっ！」

再びタイムリーダーが世界の一部から時間を奪う。
放たれた弾丸は時間という概念を奪われ、虚しく空中で静止した。

しかし、第2波が襲い掛かった。

同時にトキは走り出す。
いつまでも同じところにいるわけにはいかない。

アヌビスの時も、トウコツの時も、皆そうだった。
動き続ける。
止まることがダメージに繋がる。

（イマルを叩く！）

トキは直進した。
その進路をアヌビスが遮る。

（今なら――これが夢ならお前らなんかに負けない！）

トキは理壊奏淵破界を振り、アヌビスに殴りかかる。

が、アヌビスはそれを躱わし、反撃――
――しかし、攻撃がトキに届くよりも早く、アヌビスが崩れた。

「何!?」

（なっ……！
まぁいい！
とりあえず2人目！）

トキは然程気にしていないが、それが――アヌビスが倒れた原因こそ――“奏淵”の効果だった。
アヌビスとの戦闘時は封じられていた破壊音詩の力。

理壊双焔破界
――双焔の効果が絶対火炎なら、

理壊奏淵破界
――奏淵の効果は極超音波。

不可聴域による直接脳攻撃。
相手の近くで振るだけで、相手をブラックアウトに追いやってしまう。

それが、アヌビスを堕としたのである。
この世界の創造者であるイマルはすぐその仕組みに気付き、同時に疑問を抱いた。

（使用者には何の影響も無いのか！？）

イマルは改層し、この夢層における立ち位置を変えた。
この夢の世界でなら、どんなことであろうとイマルの思うがままだ。

よほど強力なＳＲでも無い限り、この夢の層は覆せない。
その事実はまだ変わっていない。

「なっ！
何処行ったっ！？」

「斬りかかれ！」

叫び声と同時、再び夢の住人たちがトキへ近接戦闘を挑んでくる。

１０人一斉。
勢いよく仕掛けてくる。
だが、トキの方が怒り遥かに勝っていた。
何せ相手は夢の住人。
ただ、形を成しているだけで、心を有していない。
感情皆無のイマルが作り出した人形に過ぎないのだ。

作りモノに負けない。

「とまれぇぇぇっ！！」

今度は完全に止まる。
動くものから時間を奪う。
それが、クロノセプト。
動作には時間が伴い、また一度動き出したものには必ず時間はついて回る。

「おおぉぉぉっ！」

止まった敵に理壊奏淵破界の一撃を喰らわせていく。
奏淵が触れた者から時間を取り戻し、同時に崩れていった。

しかし、止まった１０人全てを叩いている暇は無い。
クロノセプトの対象にならなかった他の住人達がトキに殺到する。
今度は１０人どころではない。

２０名＋アサルトライフル！

「全部止まれぇぇぇっ！！」

流石にイマルは驚き、同時に疑問を抱いた。
この世界の主導権を完全に奪える力を……世界を覆すだけのＳＲをトキが持っているのか、と。

そして、イマルは本当に驚かされた。

トキに迫る何十発もの弾丸は完全静止。
四方八方から迫った住人たちの活動速度は１０分の１にまで落ちていた。

完全停止ではなかったものの、トキはこの夢の世界において、１個の世界として独立し始めた。
止められた銃弾や遅滞状態に陥った住人がその証拠だ。

驚異であり、また脅威である。
もし、今回トキの捕縛に失敗したら、次はない。
この程度の『夢層』では止めることの出来ないＳＲに成長する。
その可能性を秘めている。

（だから、器としても又と無い人材なのか！）

納得と焦燥。
後悔と憤怒。

こんな子供に押されている……
負けるのか？

協会が目をつけるだけあって、それ相応の力を持っている。
しかし、まだ未熟だ。

今なら勝てる！

「射手４つは左より牽制。
接近は一度に2つ。
波のように繰り返し打って撃て！」

屋上のフェンス上に陣取りながらイマルは指示を下す。
トキを囲む住人たちがその指示に従い、仕掛けた。

（奴のＳＲは、叫ばなければ効果を発揮しないようだな）

それは魔法使いで言うところの呪文詠唱。
自分の中の魔力を引き出し、実行するための『起動コード』。
それが、魔法使いにとっての呪文。

トキの力もその類のものだと判断し、イマルは波状攻撃を命じたのだ。
息が切れるのを待ち、畳み掛ける。

何も焦ることは無い。
確実に相手の隙を突けばいい。

３３階層、反時計周りの夢層。

（ここもダメ……！）

荒廃した校舎を藍は独り、駆け回っていた。

机の上で睡魔にやられ、夢の世界へ堕とされたところまでは覚えている。

現実世界にはボルトが残っている。

それに、ワルクスも。

（狙いはわかっている。

でも、まさか、こんなに早く動くなんて……！）

焦りつつ、コンクリートの壁を叩く。

この世界が敵の創り出した世界だということは理解している。

現実に、コンクリート程度の壁なら素手でも簡単に粉砕できるハズだ。

だが、それが出来ない。

また、リカイソウエンが出せないことと、華創実誕幻を使えないことが夢であるということを大いに証明していた。

まず、現実では起こりえない。

トキの安否が気になって仕方が無く、学校での護衛を任されているのにこの様であることが悔しくてならない。

しかし、この世界に閉じ込められた時点で、藍は巻き返し不可能

な立場に追いやられたのだ。

「最悪……」

ついでに場の雰囲気も。

馴染みの――少しずつ愛着の湧いてきた学校。
ある程度清潔を保たれた学業空間。

それが錆と埃に彩られ、カビや破片が廊下・教室を飾る。
割れた窓に朽ちた机やイス。
剥がれた天板。
むき出しのコンクリート。
一切の光源がないのに薄暗さを保っている校内。

様々な扉が藍の進行を阻んだ。

開く扉、開かぬ扉。
扉の向こうは荒廃の度合いを増し、また、窓は窓とつながり、内と外をつなげない。

無人の校舎。
閉鎖された巨大密室。
校舎内の移動はある程度可能だが、校舎内と外の行き来が出来いない。

一刻も早く、自分の仕事を遂行したい。
トキの護衛を任されておきながら、何もできないということが芹

真やボルトに対して申し訳なさを感じさせずにはいなかった。

『そこの壁ではない』

廃れた壁を殴った直後、聞き覚えのある忌々しい声が藍の耳に届いた。

男の声。

意外な登場に驚くよりも、冷静と怒りが働いた。

「まさか、あなたがこの世界を……」

『断じて違う。
そこで協力してほしい』

藍からすれば嫌な申し出だった。
この男と手を組む。
有能だが、避けたいことだ。

しかし――

『トキ独りでは、いつまで持つかわからない』

「え、どういうこと？」

『いま、トキはこの世界を創り出した張本人と戦っている』

「まさか……そんな！」

予期せぬ話に藍は驚いた。
それが事実なら、藍はこの男と組まざるを得ない。

『深く考えるな。
私は直接夢の世界に入ることができない。
だから、お前とトキで創造主（イマル）を討て。
私は現実で奴を討つ』

「……信じていいの？」

『信じられないだろうな。
だが、今回だけでいい信じて欲しい』

ほんの僅かな沈黙ののち、藍は肯定した。
ここで黙りこくっている時間が惜しい。
すべての質疑応答を即座に終わらせる。

「どうすればトキを助けることができるの？」

『まず、最初にいた場所に戻るんだ。
そこから、校庭に向かって走れ』

「でも、窓が外と繋がっていない」

『その瞬間を私が助ける』

藍は走り出した。

――今回、あの男は本気で味方をする気だ。

走り出してわずか1分足らず。

藍が目を覚ました場所、2年3組のクラスプレートが視界に入った。

イマルは更に場所を移した。

校舎の上から、野球部の部室となっているコンテナ。

しかし、トキはその移動に気づかない。

(よし。

少しずつ余裕を失ってきているな)

叫ぶトキ。

襲い掛かる銃弾・住人。

トキの余裕もなくなってきているが、夢の住人も確実に減ってい

た。
すでに3分の2が使い物にならない。

「“その眼は光を
鼻は生命香（いのちが）
耳、息吹を捕らえ
獣に群がり――」

そこで、イマルは夢の住人――半径3キロ以内の使える住人――を集められるだけ集めた。
トキの所為ですべてを集めることができなかったが、それでも十分な数がこの場所を目指して移動を始めている。

「――集え！
無道の得物達！”」

最初の集団が早くも学校の敷地内、正門に姿を現した。
最後のアヌビスを撃破したトキは、初めてその異変に気づいた。

「な……ん！？」

まるで――あの夜と同じだった。
芹真たちと――SRの世界に踏み込んだあの日。

自分は独り。
敵は大勢。
だが、今は武器がある。

（クソ……体力持つか！？）

そんなことを思いながらもトキは突っ込んだ。
先制攻撃。

相手が来るのを待っているほど余裕はない！

門の方に見える敵は１０人弱。今のうち叩いておけば……

と、その瞬間、トキの思惑を打ち砕くように――２桁では到底収まらない――多くの住人が姿を見せた。

「――っ！」

前言撤回！
ちょっ、コレ多過ぎないっ！？

踵を返して逃げ出す余裕もない。

「止まれ！」

辛うじて先頭集団が緩慢になるものの、後続の住人たちは通常速度でトキに押しかけた。
その勢いに気圧され、タイムリーダーの効果が薄れていることに気づく。

（ヤバッ！
マジヤ――ッ！）

奏淵一振りで数人をブラックアウトさせるが、人の波は勢いが衰えることはない。
学校のフェンスや塀を登り越え、更に何十、何百もの住人がトキに迫る。

正面だけでなく、左右。
更に校舎の中からも大勢の住人が姿を現した。
校庭の半分が住人によって埋め尽くされる。

幸いなのは、相手が何の武装もしていないこと。

奏淵を振る。
数人倒れるが、間もなく次が攻める。

タイムリーダー。
しかし、それでも全てを止めることはできず、更に止めることが出来なくなってきた。
動きを緩やかにするのが精一杯。

とにかく、奏淵を振る。
休む余裕などない。

（あいつはどこに行った！？）

住人の中にイマルの姿を探すが、見つからない。

数が多すぎる。
視界を覆う住人たち。
右も住人、左も住人、前も後ろも夢の住人！

背後から迫る。
前から押しかける。
左右から挟撃をかける。

そのたびに奏淵を振る。
倒れた住人がコンクリートの道を覆ってゆく。
気づけば自分の周りは全て住人たち。

「栄華の夢心地はどうかな？」

イマルは叫び、トキはその方向に顔を向けた。
野球部の部室となっているコンテナの上。

そこにイマルはいた。

トキが生んだ一瞬の隙を突いて迫る住人たち。
走り出し、トキは一斉攻撃を回避し、同時にイマルを目指した。
背後・左右の奴らは極力無視。

――奴を倒せばこの夢は終わる！

奏淵を振りながら出来る限り全力で走った。
目の前、トキの行く手を阻む住人が悉く崩れ落ちてゆく。

イマルはその光景を見て微笑んだ。

――うまく乗った！

次の瞬間、トキは自分が誘われていたことに気付いた。
イマルが足場とするコンテナを目前にして、コンテナの中から大勢の住人があふれ出たのだ。
物理的に考えてありえない数量の住人達。

「うっ……わっ！
止まれっ！」

しかし――
いかに高速で動こうと……
いかに動きを緩慢にしようと……

その圧倒的数の前にトキの力は微々たるモノだった。

「ゲームオーバーってヤツさ。
貴様の負けだ、色世ト――」

――……シャン

住人とトキの揉め合いの最中――
イマルは確かに、その破砕音を聞いた。

（何だ？
今の音――！？）

「華創実誕幻」

トキは背後に立ったそいつ目掛けて奏淵を振る。

（今度は上から――っ！？）

しかし、トキの攻撃はあっさりと止められ、同時に気付いた。

「あ……っ！」

「天段：八衛柵螺（やえざくら）！」

直後、地面は天を衝く勢いで変化した。

2人と住人たちを遮るよう、何の前触れもなしに地面が空に延び始める。

自分たちの立っている地面だけだ陥没したかのような錯覚さえあった。

八方を土気色の何かに囲まれ、住人たちの侵入を阻害した。

「藍!?」

「間に合ったようね」

そう。

まるで、あの夜のように。

再び彼女はトキの前に降り立ったのだ。

「いままでどこに――!?」

しかし、これが本物の藍なのか、トキには知る術は無い。

そんな藍の眼は、トキの右手で止まっていた。

「――ここから何階層か下の夢の層に隔離されていたんだけど……」

何故、トキが“理壊奏淵破界”を握っているのか……
戸惑わずにはいられなかった。

鬼でもない、ただの人間が持っているはずが無い代物。持てるはずが無い得物。
鬼達の金棒、リカイソウエン。

「いや、待て……本物の藍、か？」

とりあえずとして、藍は自分が疑われていることを知った。
一体どんな状況に遭遇すれば、そんな考えがトキの中に生まれるのか。

「本物かって？」

「イマルの――
夢の……あいつらとは違うんだよな？」

「それはこの外にいる敵のこと？」

トキは頷く。
本当は、目の前の藍が本物であると頭のどこかでは認識していた。
そう。

夢の住人たちの中には、しっかりと藍もいて――
しかし、金棒や符・華創実誕幻を使うことは一切無かったことを思い出す。

「どうすれば本物と認めてくれる？」

その時点で本物だとトキは思った。
ちゃんと反発するかのように答えてくれる。

感情を持っている。

なら、答えは簡単だ。
安心して背中をあずけることが出来る。

「この夢の世界を創り出している奴を倒す。
周りの奴らは、オレだけじゃどうにも出来ない……」

「なら、私に任せなさい」

「ああ。
どうせ夢の世界だ。
何でもありだし……オレが本体を叩いてみる」

ちょっとした沈黙。
急に静かになった藍に、トキは不安を抱いた。

「藍？」

「そう……何でもアリ……」

何か閃いたのか、藍は片手に理壊双焔破界を出現させる。

「トキ」

「はい？」

「本当に何でもアリなの？」

「……たぶん。

いや、俺さ、さっきまで袋にされていたんだけど――

まぁ、反撃できるって事を知らされて、それで……」

「だから、奏淵を持っているのね」

「あぁ……まぁ……」

藍の目がトキの体を探る。

傷一つ無い。

本当に袋叩きにされていたのか、怪しいところだ。

が、他の決定的要素は覆っておらず、ここが本当に『何でもアリ』な空間――夢の世界であることを思い知る。

夢はまだ終わっていない。
夢の世界から夢の世界に移っただけで、まだここは現実じゃない。
しかし、夢の世界だからこそできることがある。

（なら、取られても大丈夫ね）

八衛柵螺の障壁が地面に還り始める。
天高く聳(そび)え立った障壁は、地面の中へと潜り始め、2人も戦闘態勢をとった。

どうせ夢だ。
藍は、1枚の符を取り出す。
漆黒の術符。
それを双焔の柄に巻き、柄から棒先へと滑らせて行く。

（まだ、武器持っているのか！？）

それが率直なトキの感想。
トキの初めて見る、藍の武器。

金属特有の輝きを持たない――しかし、それでいて気品と凶悪性を存分に秘めたような不思議な雰囲気を醸し出す刀。
全てを飲み込むような漆黒の刃。

純白に輝いているような錯覚を誘う峰。

白と黒の日本刀。

「生死繋綴（せいしけいてい）」

八衛柵螺の半分が消える。

生死繋綴を右手に握り、左手に双焔のもう片方を取り出す。

「トキ、茨はいる？」

「茨……なんだっけ？」

「自動防御陣、とでも言おうかしら」

アヌビス戦の時のことを思い出す。

ああ……あれ。

地面に描かれたサークルから生えてくるトゲトゲの。

「それって、動けなくなるんじゃ――？」

「この符を持って。

そうすれば、術式陣はついてくるから」

渡された術符をポケットにしまい、トキは構えた。

土の障壁が消え――

再び戦闘の火蓋が切って落とされた。

「行くわよ！」

「放て！」

「止まれぇぇっ！！」

飛び出す藍。

放たれる砲弾の雨。

それを止めるトキ。

「華創実誕幻、一段：茨！」

（コイツら、また変わってやがる！）

茨と“奏淵／双焔”で攻撃を防ぎながら、トキと藍は住人たちの変化に驚いた。

全員が武装していた。

大半が日本刀や西洋剣・槍または薙刀。

その他、１００名近くが銃火器だった。
先ほどから使用しているＭ４Ａ１にＭ２０３グレネードランチャーやＭ３ベネリショットガンが取り付けられている。
何でもアリなのは、こっちだけじゃない！

（なら！）

形勢の優劣を見極めながら藍は術を用意した。

「トキ、飛んで！」

「なに！？」

その光景はイマルの目にも飛び込んでいた。

（そっちが数で来るなら、こっちは火力で勝負！）

（アイツめ！
直接ここを撃つ気か！）

この空間に於いて、最大の戦力を持つのが彼女だった。
イマルはその行動の一つ一つをしっかりと観察。

その結果、観察することなど無意味なのだと知った。

「天段」

（え――天段？）

（来るっ！）

「‥瞳断銃矢（どうだんつつじ）！
‥ホウセンカ！」

双焔の先端に煌く、光の蓄積。
トキは理解する前に跳び、イマルは理解してから飛んだ。

直後、校庭を埋め尽くす住人の海を一条の光が切り裂いた。

閃光、熱、衝撃波。
反撃の余地を与えない。
光速で迫るそれは避ける事は容易ならないことだ。

瞳断銃矢はコンテナをまるごと消滅させ、さらに背後の民家にまで消滅破壊の痕を残した。

（何だ？
天段を2つ？）

（しかし、効果を発揮したのはひとつだけ！）

（そんな！
夢でも“ホウセンカ”だけ扱い切れないっ！）

瞳断銃矢の効果が現れるのは一方向のみ。
その他の方向から迫る敵も同時に排除したかった藍。
しかし、成功したのは一撃クラスの威力を有するが、一方向の敵しか消すことのできない瞳断銃矢のみ。

（でも、大した問題じゃない）

「女に集中砲火！
トキには砲撃と斬撃の波状攻撃。ただし、殺すな！」

イマルが叫ぶのと同時、トキは再び走り出し、藍も次の行動に移った。

ボンッ！

十数発もの榴弾が放たれる。
それでもトキは進行を止めない。
榴弾を止める術はある。

問題は、止めてからどう行動すべきか、だ。

「藍っ！」

「え、何！？」

それが初めてのトキからの明確な要求。
一気にイマルまで迫る方法をトキは見つけたのだ。

「トウコツを浮かせただろ！
アレを！」

トキの脳にくっきりと焼きついた、昨日の映像。
飛来するトウコツに襲い掛かったのは、どこの道路でも見かけるような乗用車。
上から襲ってくるトウコツに、下から自動車をぶつけた、あの術。

迷わず藍は唱え、応えた。

「一段：菫（すみれ）！」

藍の術がかかったことを悟る。
体が軽い。
地面が弾んでいるような錯覚。

（――よし！
これなら）

――飛べる

「止まれぇぇえっ！！」

叫び、砲弾を止める。遅滞させたのではない。
正真正銘の“完全停止”

「何をしている！
撃ちまくれ！」

今度は銃弾の雨が襲い掛かる。
が、間髪入れず藍の術がそれを阻んだ。

「‥薄（すすき）！」

銃弾は瞬速から超低速へと破壊の秘訣を封じられ、トキはその間、
イマルを目指して飛翔した。
住人たちにトキを止めることは出来ない。

（何だ！？
どうして遅い？
トキは力を使って――）

藍が、両手で薄を使っていたのだ。
銃弾を遅らせるために右手。
そして、住人達に向けて左手を。

奥歯を噛みしめながらイマルは藍から視線を戻し、トキに据える。
1対1でトキとイマルは向き合った。

イマルは大剣：クレイモアを創り出し、両手で握り締める。

「貴様がここまで来たのは誉めよう！
だが、あまりにも無謀！」

「うるせぇ！」

ぶつかり合う大剣と奏淵。
優劣は一撃でトキの方へ大きく傾いた。

（くっ……！
何て超音波だ！）

金属と金属の衝突によって生まれる反響。

それがイマルの脳を揺らした。

（何てことだ！
コイツ――この武器で現実の世界にまでダメージを反映させていやがる！）

相手には多大な影響を及ぼすが、使用者には何の害も見て取れない。

（コレが！
日本の鬼が好んで使うアイアンロッド……！）

あらゆる理を破る力を秘めた金棒。
リカイソウエン。
そのハカイ級の力を目の前に、イマルは撤退を決意した。

銃撃隊も藍の攻撃によって壊滅。

イマルは疑問を抱かずにはいられなかった。

藍がどうしてわずか数秒で、１００数名を討ち殺せたのか？

銃撃隊全員の体に穴が見えていた。
大小様々だが、藍が銃器を使った痕跡は無い。

「二段、上
‥鈴蘭、
‥芙蓉！」

風と先鋭。

カマイタチが住人達をなぎ払う。
得物を切り裂き、獲物を切り伏せる。
イマルは揺れる視界で何とかそれを横目に見た。

クレイモアでトキを弾き飛ばし、距離を取る。

「二段、上
‥紅葉
‥朝顔、」

（なっ……！）

藍の両手が発光と紅蓮に包まれる。
それを見て、イマル何となく理解した。

あれが、銃撃隊をなぎ払ったのだと。

「‥鈴蘭！」

熱は光を伴い、光は高熱を帯びる。
そして、先鋭が加わり、全てを切断する効果を得る。

熱＋光＋先鋭。
それがもたらす結果（モノ）は、

（レーザーまで使えるのか！）

藍の両手、両の武器の先端から放たれる一条の光線。

その場での一回転。
たったそれだけで多くの住人が再起不能の重傷を負う。
レーザーの回転。

再び仕掛けてきたトキの攻撃を躱わす。
トキの攻撃を受けてはいけない。

必ず躱わさなければこちらがヤバイ！

回避しながら、イマルは更に見た。
日本刀で住人たちの武器を全て消滅させる藍、その次の行動――

「‥鈴蘭！」

先鋭効果を金棒に帯びさせ――

地面を抉った。
それが、銃撃隊を壊滅に追いやった攻撃だと、一目で理解できる。
日本刀で住人たちの武器を完全無力化させ、更に命を絶つ。
近距離の住人は全てこれで片付けられていた。

（何て奴だ！
一瞬で５人も切り伏せていやがる！）

そして、遠距離。
半径５０メートル内の住人が右手の双焔で片付けられていた。

（土の塊が……銃弾のように飛んでいくっ！？）

金棒で抉り飛ばされたコンクリート、土、石。
それらに先鋭効果を加えたことで、凶器は出来上がっていたのだ。
そして、飛んでいるのは土だけじゃない。
双焔で破壊した住人たちの得物、それから住人たちの破片。

（“すずらん”
……あの呪文には要注意か！）

イマルは再びトキの方を向く。
せめて、コイツを倒してから現実に戻る。

手ぶらで撤退しては物笑いだ。

「空中戦には慣れていないようだな！」

高い位置からクレイモアを振り下ろす。
トキは間一髪で受け止めた。

超音波は出なかった。

（なるほど。
自分から攻める時に限って、あの妙な音波が発振させられるわけか！）

「と――っ！」

直後、イマルの視界からトキが消えた。
理解する前に、痛感する。

背後に回りこまれた。

「まれっ！」

「なにぃ……っ！」

その瞬間――

「終わらせる！」

背骨。

奏淵がイマルを捉えた。

軋る骨と奏で合うように奏淵は鳴り響き、強烈な破壊振動がイマルに異常を与え、吹き飛ばす。

イマルの景色は、トキを視界の中心に残し、高速で移り変わっていった。

トキが、雲が遠ざかる。

一瞬後の騒音、激痛。

混乱する頭では理解が及ばない。

どうしてやられた？

そんな疑問が浮かぶ余地も無いほどイマルの混乱は深く、ひたすら『逃げろ』と警報を出し続けることに懸命だった。

トキは自分でコイツを倒すと決意した。

しかし、自分ひとりでは無力だと分かっていたから武器を求めて走ったのだ。

それは結果として自分を信じないことに繋がってしまい、自分の非力さばかりを知り、自分の持つ別の力を信じていなかった。

（それをあの男は気付かせてくれた）

イマルの眼前でタイムリーダーを発動。
背後に回りこみ、十分に体勢を整え、力一杯――絶対に倒すという想いを込め――奏淵を振った。

少しでも多くのダメージを。
その願いを叶えたのが奏淵なのか、この世界なのか定かではない。
ただ……
少し過激すぎた。

バッドのフルスイングで、人が弾丸の如く飛ぶことなどありえない。
よろめくか、倒れる。
そんなものだろうとトキは心の隅のどこかで思い続け――だからこそ、目の前で起こったことに驚きを隠せない。

ほぼ４５度。
地面に向かって高速落下。
住人たちの動きが止る。

「あ……れ？」

煙の晴れた崩れた陸上部のコンテナの中に、イマルの姿は無かった。
残骸ばかりが散らばり、一切の姿を見失ったのだ。

（ドコに？）

トキは周囲を見回し、イマルを探す。
その最中、微動だにしない住人と、住人の波をかき分けるように進む藍の姿が目に付いた。

「トキ！
敵は逃げたから、急いで降りてきて！」

ここが夢の世界とわかっていた。

そう。
理解してしまったことが、最大の盲点。

イマルの最後の攻撃手段はまだ残っていた。
２人を取り巻く景色が一度歪み、住人が消え始める。
次に、破壊されたガラスやコンテナ部室が元通りになり、散乱し壊れた得物の残骸や、トキが陥没させたコンクリートの道まで全てが現実世界に飲み込まれていく。

夢の世界に飲み込まれるのではない。

現実の世界が戻ってくる。

それはつまり……

地上２０メートルの地点にいるトキに重力が戻り始めることを意味した。

「うっそおおおおぉ！！！」

「一段：薄（すすき）！」

地面との距離を半分以上経過したところで、藍の術が発動。

トキを空中で遅滞させることに成功した。

後の救出は簡単。

「：菫（すみれ）」

重量変化でトキを軽くし、茨でトキの足を絡め取る。

今のトキがどれくらい軽いかというと――

藍は下からトキの手を軽く押して空中へとバウンドさせた。

「：薄」

遅滞効果を解く。
8分の1という重力下に置かれたトキは戸惑いを隠せず、

「え！え！？あれぇ！！？」

見事混乱。
そんな中、茨は手繰り寄せるようにトキを地面に引っ張ってくる。
両足が地面に付いた瞬間、茨でグルグル巻き。
今日の茨は少し悪戯気質なのか、トキに好意でも抱いているのか
……
何はともあれ、完全に落下の衝撃を殺して見せた藍であった。

「ぐっ……！」

背中を押さえ、イマルは膝をついた。
予想以上のダメージ。
予期せぬアクシデント。

「馬鹿な……
どうして……」

ありえないハズだった。
この一帯に於ける人間は、誰一人として見落とさなかった。
ＳＲには特に注意した。
睡眠を回避する力を持った奴らだって数人いる。
そういう奴らを真っ先に、集中して眠らせた筈なのに……
それなのに、眠っていない。

「なぜ、私がお前の夢に介入できたか教えよう」

イマルは顔をあげ、男を見上げた。

「貴様……」

「イマル。呪術師としてお前は優秀だ。
まず、多くの人間を夢に陥れる。
お前の凄いところは、個々が見ている夢を他の夢の世界に繋げてしまうこと」

例えば、雨の夢と雪の夢。
雨の降る夢の世界と、雪が降る夢の世界を、イマルは自分が新たに創った第3世界につなげることが出来るのだ。

雪の最中に雨を降らせることも、水溜りの上に雪を落とすことも出来る。
なぜなら夢は統合され、２つの都合が入り乱れているのだから。
雨が降りながら雪も降る。

また、雨の世界も雪の世界も、統合された世界も、夢の世界ならイマルには自在に改変することが出来た。

リデアは、夢の世界においてまさに神に近しい力を持っていた。

“全ての夢を統制する”

それが、イマルのＳＲ：夢の呪術師である。
だが――

「率直に言おう。
私は、生まれてこのかた１度も夢など見たことなどない。
他人の夢を覗き見ることはできても、私自身が夢を見ることは出来ない」

「……」

「残念だ。
君のＳＲでも私に夢を見させてはくれない……」

イマルはため息をついた。
もう、この次は無い。

自分がここで終わるのだと悟った。
やがて、イマルの首筋に僅かな痛みが走る。
次の瞬間には視界から光が消え、耳に届く全ての音は遮断され、
感覚が指の先から消えていく。
何も残らない。
痛みも無く、後悔・怨恨を残留させる余地も与えず、男はイマル
を殺す。

静かに。
極力苦痛を取り除いた、最も自分が得意とする方法で。

イマルは穏やかな顔で死を受け入れた。

「君は実に興味深い……
いつか、夢でもう1度会って話したいものだ」

こうして戦いの幕は下ろされた。

流れる清水の如く静かに――
灰色に染まった空のように虚しく……

それでいて残るものは、人々が思っているよりも多かった。

第１６話－決着！夢層の戦い！－（後書き）

白州唯高校の生徒たちが目覚めたのは襲撃から約３０分後。

ワルクスや愛院が起こして回り、トキや藍、それからいち早く目覚めた蓮雅さんは警察に連絡。

学校は臨時休業となり、生徒らは簡単な質問を受けてから帰路についた。

第17話－the EDGE of GILTY－（前書き）

償いとは、容易ならないモノの一つ。

犯した過ちが大きいほど、償うことは難しい。

ある男は『償い』を勘違いしていた。

謝罪すれば済むのではない。

後ろめたさを抱くのは誰だって共通。それが当たり前だ。

償いとは、後悔の解消であって、見返りを求めてはいけない。
そこに邪な心を挟んではいけない。

……だが、間違っていたのは私だった。

あの男に後悔や後ろめたさなど無い。

目に映る者が生者か死者かだけ。

つまり、あいつは償いというモノを知らないだけなのだ。

第17話－the EDGE of GILTY－

日本
某県白州唯市

午前11：00
白州唯高校を中心に大規模な調査が始まった。

原因不明の睡眠。
多くの人間が突如として眠りに落ち、死傷者を出した。

軽症が38人
重傷が3人
小火5件
火事2件
死者7名

昏睡1名……

それがテレビで報道された結果である。

「あれ～？
トキはドコ～？」

風呂上りのボルトが、何の前触れもなく芹真と藍に質問した。
5時を少し過ぎた夕方。
夕焼けを窓の外に、芹真事務所内に軽い動揺が走った。

早めの風呂から上がったボルト。
その質問を受け、トキの姿を探す芹真と藍。

「さっきまで居たよね～？」

「居たっけ？」

芹真はコーヒーカップを置き、上半身を捻って背後を見る。が、視界にトキの姿は映らなかった。
藍もボルトに言われてから顔を上げ、新聞をたたむ。

（確かに居たハズだけど……）

「ねぇ、トキ～？」

「トイレじゃないか？」

藍も無言で台所を覗きに行き、芹真は各部屋を見てまわる。

「入ってますか～？」

ボルトはトイレと風呂場のドアをノック。
しかし、返事が無い。

風呂場も確認しようとしたが、先ほどまで使っていたのが自分であることを思い出し、きびすを返して、再びトイレのドアをノック。
扉を開けて中を確認するが、

「トイレにはいないよ」

「部屋にもだ」

「探してくる」

素早く藍は得物を体中に忍ばせ、出入り口をくぐった。

「頼む」

「私も行く～！」

「なぁ、パル。
今のうちパイロンに出前頼んでおかないか？」

魔女、クルリと反転。

「賛成賛成っ！」

無理やりついて行こうとするボルトを引き止めながら芹真は電話

を取り、出前を取る。
その隙に1匹の鬼が夕方の街へ飛び出し、疾駆した。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第17話－

－ｔｈｅ　ＥＤＧＥ　ｏｆ　ＧＩＬＴＹ－

白州唯高校襲撃から2日が経った。
警察が駆けつけ、簡単な事情聴取のが始まった。
それが終わると生徒全員早急に帰宅。

多くの生徒は密かに喜び、一部の者は首を捻った。

何が起こったのか理解が及ばない者。
早い時間からの帰宅に心躍る者。
帰路を行くうち、不安に駆られる者。
その異変が起こったのが、自分たちの学校だけでないと悟る者。

いま、学校周辺は多くの警官や調査団と名乗る者達であふれている。
睡眠の原因が何なのか。
世間一般に報道される原因も気になったが、未だに公言されていない事実が多数あった。

公表されるモノはおそらく……真実でなく、また事実でない。

夢の呪術師との戦闘。
人の域を超えた者同士の戦い。
世界に関わってゆく規模――協会と無所属連合――の戦い。
本当の現実が公になることは無いだろう。
公になる情報は偽り。
真実は核心に触れた者、或いは、核心に近しき者か、資格を持った者のみに語られる。

巻き込んではいけない世界。
そこへ侵食を始めたもう1つの世界。

（協会……
無所属――連合……）

イマルとの戦闘後、トキはすぐに冷静さを取り戻した。が、冷静さを取り戻すのに反比例し、現実は崩壊していった。

知らなければいけなかったであろう事実と、
望んだ結果。
知りたくなかった事実と、
受け止めがたい現実。

その2種類の感情がトキを困惑させた。

（……SR）

手に握られた紙をポケットに突っ込み、目的地を目指す。
右手には中程度の紙袋。
まず、確かめなければならないことがある。

学校が休校中につき、トキは昨日と今日を養生に充てた。
心労を除けば、疲労はだいぶ回復している。

普段あまり通らない道を通り、時折足を止めて道を確認しながらトキは進んだ。

喧騒に包まれた街のノイズが届かず、車の排気ガスも歩きタバコの紫煙も、道行く人混みも気にならない。
いま、トキの頭にあることは1つ。
事実を確かめる事。

目的地が目に入ったのは、芹真事務所を出てから25分。
心の準備は道中で整っている。躊躇う必要は無い。
トキは迷わず出入り口をくぐり、入店。

その店内は衣類が所狭しと掛けられていた。
申し訳程度に設置されたカウンター上の観葉植物、天井から吊られた『禁煙』のプレート。
店内の隅には――ゲームセンターから盗んできたのかわからないが――明らかに個人販売していないであろうアーケードゲーム機が置かれ、その他には小さめの長椅子が1つ。

店内にトキ以外の客は無く、店員も1人。ラジオの音楽をBGMに落ち着いた雰囲気を醸し出していた。
来客に答えた店員は、トキが最も望んだ結果……いま最も用件があり、どうしても質問を浴びせたい男。

「……いらっしゃい」

あくまで事務的に答える、男。
罪の呪術師：クワニー・トロス・ウィトナ。

トキはカウンターまで歩み、カウンターの上に紙袋を置き、紙袋から汚れた制服を取り出し、クワニーはラジオをとめた。

「あのさ……」

「質問の前に、この制服はいつまでに仕上げればいい？」

「……」

「汚れを落とすため持ってきたのだろ？
答えるのはそれからでも遅くはない」

「できるなら2日」

「承った」

少しの沈黙。
トキは静かにクワニーの行動を見守っていた。
……見守るというよりは監視だが。

今、この店にディマやハンズは居ない。
トキ以外の客は皆無だった。
話をするには丁度よい、真実を打ち明けるに程よい環境。

ハンガーラックにあずけられた多数の服の中に、トキは自分と同じ制服を3着。
見つけ、同時にクワニーは切り出した。

「さて……
何か言いたいことがあるのだろ？」

「俺の母を知っているのか？」

クワニーは目を閉じ、少しして開く。
直球で聞いたトキを再び見回す。
それから、頷く。

「知っている」

「そして、あんたは母さんが死ぬ瞬間も居た……」

「ああ」

クワニーにトキの感情が手に取るように感じ取れたのはその辺りからだった。

いや……
おそらく、今のトキなら誰でも感じ取れ、読み取れるだろう。

それほどの殺気が漏れていた。

「そして、お前が死ぬ瞬間にも居合――」

一瞬。
ほんの一瞬だけクワニーの痛覚が訴える。
パルスの流れ。
伝達信号。
その内容は、痛み。

殴られたり、蹴られた時のような鈍い痛みでも、撃たれた時のような冷たさを感じるような痛みではない。
だが、大抵の人間なら致命傷に違いはない。
それは死の感覚に近く、とても冷たい。
そんな痛み。

「トキ……
……俺を刺したところでお前の母は戻らない」

紙袋に隠された凶器。
どんな家庭にでも在る包丁。
しかし、クワニーはその刺突を避けず、遮ろうとも、目を逸らそうともせずにトキの凶器を受け止めた。

現色の刃は骨と骨の隙間を抜け、

クワニーの筋肉を切り裂き、

心臓に突き刺さり、

背なの筋肉まで達していた。

「1つずつ誤解を解いていこう」

そう。

確実に心臓に達していた。

突き刺さった刃の深さと、出血の量からトキは悟り、クワニーは体感していた。

“確実に、死に至る致命傷”

そのハズなのに……

そのハズだが……

クワニーにダメージは一切無かった。

トキの頭は冷静さを取り戻し、恐怖を抱かずには居られなくなり、本能的に走り出す。逃げる。

しかし、逃がさない。

クワニーはトキの腕を掴み、力一杯引き寄せる。

力に大きな差があり、トキにはどうする事も出来なかった。

「まず、私はお前の母の『死』こそ目の当たりにしたものの、私は彼女に何もしていない」

「放……！」

「落ち着け！

いま、自分が何をしたのかわかってるのか！？」

言い聞かせるクワニーをトキは睨み返した。

ぶつかり合う視線と視線。

そこに映るモノはそれぞれ違った。

「刺したのが私だったから良かったものを！
少しは考えてみろ。
お前がもし、何の力も無い『ただの人間』に同じことをしてしまったら……
その後のお前の人生はどうなる？」

「何だよ……
人を殺した奴が言う台詞かよ！」

「直接手を下していないと言ったハズだ。
だが、だからといって筋違いだと言うつもりは無い。
その証――その償いがコレだ」

トキの腕を放し、両手を広げ、クワニーは伝えようとした。

この状況。
この空間。
協会に於いて絶大な信頼を寄せられていた自分が何故協会を抜けたのか。
有力ゆえの厚待遇を拒み、協会を抜け出したのは何故か。
なぜ、自分がここにいるのか。

「うるさい……
意味がわからない！

どうして平気な顔して人を殺せるんだ！」

しかし、トキは聞く耳を貸さず、全力で出口を目指した。

（致し方ない……）

クワニーは左手をかざし、正確にその掌にトキを捉えた。

（浮かべ、罪たち）

異変はトキがドアを開けようとした時に起こった。

引く。

――開かない。

慌てず、もう一度。

――だが開かない。

体勢を整え、なるべくスピーディーに扉を横に押す。

――しかし開かない。

全力を注ぎ、両手で扉を引く。

――それでも、扉は1ミリとて動かない。

「血気に逸るのも若いから仕方ないとしよう。
しかし、何事にも限度がある」

「何をした……？」

開かずの扉を背後に、トキは聞いた。
普段ならありえない。
重量が自分より軽いドアが開かないなど、ロックでもされていない限り有り得ない。

「罪を感じているなら詫びろ。
ただし、私にじゃない。
お前自身に、だ」

「何でだ！？
罪を感じるべきはお前だろ！」

カウンター越しにクワニーは言葉を続けた。

「理解しろ。
まず、何に対して謝罪すべきか。
そうすれば、それを理解できたのなら、その扉は開く」

「な……っ！」

「クロノセプターとは、一体何だ？」

「何っ！？」

「私は自分のＳＲを理解している。
しかし、お前は自分のＳＲを理解していない。１割どころか、微塵も。
その違いが表れただけの話」

トキにはどうすることも出来ないことが起こっていた。
クロノセプターを使う余裕が無い。

精神的余裕は皆無に近く、
肉体的に目の前の呪術師に勝てる気がしない。

逆に、クワニーには充分すぎる余裕があった。
だが、今トキに対してみせるものは余裕ではなく、確信された勝利への裏づけでもない。

「すまないと今でも思っている」

「――ふざけるな」

心からの謝罪。
待ち続けた瞬間。

トキは右手に意識を傾けた。

（集中しろ……
クロノセプターさえ使えれば――）

だが、いくら意識を傾けようと、
どれだけ集中しようがクロノセプターどころか、タイムリーダーさえ発動しなかった。

「彼女は、いい人間だった」

「黙れ！」

ＳＲの発動をあきらめ、走り出す。
扉から離れ、再びトキはクワニーに仕掛けた。

顔面を拳が捉える。
カウンターを挟んでトキはもう一撃。
力の限りクワニーの顔面に叩き込んだ。

クワニーは微動だにせず、トキの拳を受け止めた。
流れ出る鼻血を拭い、クワニーは続ける。

「私が非力だったばかりに……」

再び迫る、拙い（つたな）拳打。

トキの手首を掴み、クワニーは一呼吸置く。
再び捕まったトキはその握力に恐怖を覚えた。

「その力を本当の仇敵に叩き込め」

「それは誰だ!?
トウコツか!?」

クワニーは頷いた。

それが、“元凶／源凶”
駐車場の戦いで知った本当の敵。

そして、クワニーの元、

「信じて欲しい。
私は、相方だったトウコツを止めようとした」

「そん……っ、嘘だ……」

元協会のクワニー。
いまも協会に属するトウコツ。
相方、パートナー。
信じる要素が無く、また、心から信用できない。

「私とクワニーは、当時チームを組んでいた。
が、それは私とトウコツだけに限った話じゃない。
四凶のＳＲ全員に監視役のＳＲがついたのだ。必ず……」

「何でアンタなんだよ……」

「それが、私にもわからない」

クワニーも未だに謎とし、頭を悩ませている当時の組み合わせ。

何故、四凶の中で最も戦闘能力に長けているトウコツの監視役に抜擢されたのか？

あからさまな人選ミス。
だが、任務で共闘する際には、これ以上無いと言ってもいいベストな組み合わせだったことは確か……しかし、監視に関してはこれ以上ないというほどの難題であった。

「お前の母を討ったのはトウコツだ。
しかし、だからといって私に責任が無いと言うつもりはない」

「2度も言うな。
どうして止めなかった？」

「止められなかったのだ。
私に有る力は、罪を背負った人間を操り動かすだけ」

「誰にだって罪はあるって……
あんたそう言ってなかったか！？」

「だが、中には特別な者がいる。
トウコツを含め、四凶は皆善悪の価値が他とは違うのだ」

「だから、止められなかったって言うのかよ！？」

「トキ。
小さい球と大きい球。
受け止めやすいのはどちらだ？
触れやすいのはどちらだ？」

クワニーの手のひらが見えない球を持つ。
だが、そんなジェスチャーを見せられたところで、クワニーが何を言わんとしているのか、トキには皆目検討がつかなかった。

だが、クワニーはいままで何度と無くこの話をしてきた。
この説明が一番分かりやすいのだと、自分で分かっている故の説明。

「何のことだ？」

「例え、だ。
私の呪術はその感覚に似ている。
罪悪感が小さければ小さいほど、その者は掴み難く、つまり操り難い。

人の中には様々な罪が在り、様々な性質を持っている。
触れただけで支配できる罪。
絡み取るように手繰らなければ支配できない罪。
何度も掴み直さなくてはいけない罪。
深く潜らなければ一切操作することの出来ない罪。
この世には私もまだ知らない性質の罪がある。
それほど罪の形、性質は人によって異なるのだ」

トキはカウンター越しにクワニーと向かい合う。
初めて聞くクワニーの呪術の仕掛け。
それは、自分の罪を認識しているものほど操り易いということ。

「そして、トウコツを止めるに私では役不足だった……」

「アイツは一体何なんだ？
罪を持たないのか？」

「奴は四凶の一つ。
乱世を生み出す運命を背負い、才能を持って生まれてきたＳＲ」

「四凶って……
前にも聞いたが、全然意味がわからない。
何だよ、四凶って？」

「理解できないのは当然のこと。
ただの学生に理解できる話ではなく、また理解する必要の無い話だ。
……しかし、お前は知っておくべきだ。

要約するなら、奴ら“四凶”はこの世の悪を担っている者達だ」

「悪を担う？
どうして？」

トキの視線が包丁に向く。
すでにクワニーの体から抜かれた包丁は、その刀身を朱に染めて尚輝きを放っていた。
その包丁の刃をクワニーは強く握り締め、カウンターに血の雫が滴る。

「トウコツは平和な世界を望まない。
戦い続けることで奴は初めて存在する。
平和の世界で奴は生きていけない。
だが、お前の母を殺したトウコツは少しだけ、他のトウコツとは違っていた」

「他……だって？」

「最近、最後の1人になったと聞く。
その前までトウコツというポジションには4人の者がいて、それぞれトウコツを名乗っていた。
もちろん、トウコツ以外の四凶にもそれぞれ何人か居るらしい」

トウコツの顔を脳裏に思い出しながらトキは耳を傾け続け、クワニーは放し続けた。

「四凶とは、この世に在りて特別に禍々しき者達。
だが、アイツだけは更に特別だった」

罪悪感を微塵も感じない。
それは、どのトウコツにも共通していて、奴も例外なく罪悪感に恵まれていなかった。

だからクワニーに止めることが出来なかった。
クワニーの力は罪悪感につけ込む。
罪を感じない相手はどうすることも出来ない。

しかし、奴が他のトウコツと圧倒的に違っていたのは、罪こそ感じていないものの――誰かの為――間接的だが積極的に協会に『貢献』しようとしていた事にある。

無益な殺生ではない。
純粋に誰かのため。
間接的に協会へ貢献しようとしていたのだ。

当時、最も危険視されていたＳＲ。
それがトキの母親、色世　サツキ。
協会のためにと、目をつけたのが彼女だったのである。
トウコツが彼女を追い込んだ理由はそれだった。

「それが最悪の事態を招いてしまった。
協会、無所属、小規模集団……異なる種族・傾向のバランスが一気に協会優勢の状態へと偏ってしまった。

もちろん、原因はトウコツがお前の母を討ってしまったことだ」

誰もが協会に逆らえないと悟った事件。
多くの無所属や小規模集団を配下に加えるきっかけとなった、決定的出来事。

世界最強と思われていたＳＲの撃破。

「偶然に偶然が重なり、彼女は死に至ってしまった」

「……トウコツ」

頭の中でトウコツが黒く染まってゆく。
憎悪、嫌悪……殺意。
絶対に許せない存在へと昇華していく。

数秒の沈黙をクワニーは破る。

「トキ、復讐は考えるな」

「なら、俺はどうすればいい？
俺はアイツを……」

「まず、今のお前では奴と対峙した瞬間に徒死すること間違いない」

「とし？」

「その命を無駄にするな。
機会を待て。
お前では奴に触れることすら出来ない」

「でも、この前戦った時――」

「貴様1人の力ではない。
どういった状況だったのか聞かせてもらっているが、お前はまだ非力もいいところだ。
どう考えても、戦力外。今のお前では無駄死になる」

トウコツを撃退できたのはトキ独りの力ではない。
藍との協力あってこその結果だ。

だから、決してトキの力とは言えない。

「だが、イマルを撃退した。
それは立派な功績として数えられる」

「功績？
あれは夢の世界だったから倒せた。
藍もそう言っている。
それに、俺はそんなものが欲しいんじゃない」

「トウコツを打ち破る力、か？」

「ああ。

でも……
実は、本当は戦うことが怖い」

それでも眼だけは強気を装ってクワニーに添えていた。

いくら自分が力を持っていようと、相手を打ち破らなければ戦いは終わらない。
相手が退いてくれるならそれに越したことは無い。
相手が戦いから降りてくれるなら命を奪い合うことは無い。

が、死を覚悟で向かってくる相手に出遭ったらどうすればいい？

どちらかが死ぬまで戦いは続き、どちらかが死んで初めて戦いは終わる。
いつかそんな時が来るだろう。
そう考えると怖くて仕方が無い。
否が応でも戦わなければいけない――

しかし、トウコツは違う。
どうしても倒さなければいけない敵として認識してしまった以上、許す気はない。

どんなに戦うことが怖くても、許すことが出来ない。

「トキ。
私だって戦いは怖い」

「え？」

「戦いに怯えなかったことなど、唯の一度も無い。
全ての戦いに怯えていた」

それはトキにとって意外な話だった。
夢にも思わなかった事実。
初めて出遭った夜も、クワニーはまるで見下すかのような毅然とした態度でトキと対峙した。

むしろ、怖いからこそ、絶対に乗り越えなければならないと自分に言い聞かすことが出来た。
怯えているだけでは何もかも失ってしまう。
死ぬ覚悟で向かい、決死で考え、後悔しないよう全力でもって挑む。

「どんな人間でも最低一度は恐怖に出遭う。
怯えなかったこと無き人など在り得ない」

目的のためには乗り越えるしかない。
どんな困難に遭遇しようと、必ず生き延びねばならない。
だから、全力で臨む。
だから、死と隣り合ってでも戦えるのだ。

それが、決死の覚悟。

「芹真たちは、いずれ協会の本部に乗り込む。

その時、おそらくトウコツがお前の行く手を阻むだろう」

「どうして？」

「お前はトウコツの手を消したそうだな。
奴はお前に再戦を申し出る。
奴の性格を考えれば、充分ありうる話だ」

「再戦って、それは――
元パートナーとしての忠告か？」

「出来る限りの情報を提供しようと思っている。
奴に関してはな」

２人の脳裏にトウコツの戦闘時の姿が浮かんだ。
時には槍を使い、時には剣を振るう。そして引き金を引き、自らの肉体を的に相手を引き込む。

「おそらく、全ＳＲの中でも最悪２０人の中に数えられるであろう強者の１人だ」

「聞きたいんだが……
母さんより、トウコツは強いのか？」

クワニーにとって意外の質問だったが、それでもすぐに答えることは出来た。
怒りを抱くと同時、トキはトウコツを正確に分析しようとしてい

る。

クワニーにはそれが妙に嬉しかった。
初めて言葉を交わした時から少しずつだが、確実に変化している。

そして――
クワニーはその瞬間、絶対の確証を持って確信した。
トキは、母親のＳＲを受け継いでいる、と。

「トウコツと彼女を比べるなら……」

僅かに考え、クワニーは２つのものを挙げる。

「石ころとクリスタルほどの違いがある」

今度はトキがその差に戸惑った。
どっちがどっちなのかと口にしようとし――クワニーの説明――
トウコツが石だと間髪入れずに言い放った。

トウコツ＝石
過小評価ではないだろうか……？

「お前にもその素質はある」

石ころの？

半ばトキの頭は話に付いていけなくなっていた。
トウコツですら石。
自分の母親は何なんだ？

「お前は彼女の子だ」

「ちょっと待ってくれ。
母さん……母さんのＳＲは何だったんだ？」

「……」

途端に黙り込むクワニー。
トキはもう一度繰り返し、聞いた。
だが、答えは返ってこない。

「実はな、私はまだ彼女のＳＲを信じきれていない」

「は？」

信じていない。
その言葉の意味がわからなかった。
何が信じれないというのか、どういう意味で言っているのか。

「どんなＳＲなのかは聞いたことがある。
しかし、いくらＳＲとてそんな力が発現し、存在するとはとても思えない」

「つまり、実際に見たことはないと？」

しかし、そんなことを言いながらもクワニーはトキに対し、彼女と同じ雰囲気を感じていた。
本能に訴えかける人と思えない、匂いたつ何か。
その矛盾を噛みしめながらクワニーは説明を続けた。

街中を駆け回る藍の頭に、クリーニング店のことが浮かんだ。
共闘体制をとる小規模集団。
自分たちと同じ、目的を持ったＳＲの集まり。

（まさか、殴りこみ？）

白州唯高校襲撃以来、なんとなくトキの異変を感じていた藍。
憤りを感じているわけでもなく、恐怖に拉がれたわけでもない。
ただただ、虚ろだった。
目的を見失った人間が持つ雰囲気とは少し違うが、似ているもの

があった。

「全く！」

交差点を抜け、人通りの疎らな商店街の片隅にその店を見つける。

ホート・クリーニング店。

ヴィラ・ホート・ディマ社長を始めとする元協会のＳＲたちによって運営されているクリーニング屋。

聞いた話では、予想以上に評判がいい。

安くて、確実。スピーディーなパーフェクトワーク。日限を守る依頼成功率１００％を誇る新参名店。

（居た！）

その中に藍はトキの後姿を見つけ――

そんな後姿を見られているとは知らず、トキはクワニーの言葉を鸚鵡返ししていた。

「絶対審判？」

「“絶対神判”のＳＲだ」

「それが、母さんの？」

「多くの者はそう呼んでいる。
協会にも属さず、フリーランスで世界中の犯罪を狩り続けた。
その圧倒的戦力の前には、核ミサイルを持ってしても太刀打ちできないという話だ」

驚愕せずにはいられない。

核＜母！

改めて、トキは自分の母親に恐怖を抱いた。
おぼろげに蘇った記憶の中で輝く母。
優しい笑顔に、温かい言葉。

しかし、その実力は核を上回るＳＲ。

「あくまで“話”だ。
実際目の当たりにしたことのない私に、それが確定事実と断言できない。
それに、彼女のＳＲは絶対神判だけではないという話もある……」

「どうして母さんのＳＲが在り得ないっていうんだ？」

「少し考えてみろ。
絶対神判。
それは彼女が“絶対の真実”であるということなのだ」

「……わからない」

「お前が正義。俺が悪。
私は警察。あなたは犯罪者。
何が違って、どうズレていればそんな立場が生まれる？
人間は様々、それぞれ多様な環境で育ってくる。
ある人間は画家として育ち――
ある人間は医者として育ち――
ある人間は兵士として育てられ――
また、
ある人間は犯罪者になることしか、そんな過酷な選択肢しか残されていない環境で育つ」

「生まれが違う……ってことか？」

「しかし、彼女のＳＲの前ではそういった概念は一切通用しない。
なぜなら、神がかり的な判定を下すのは、絶対に彼女だからだ」

「つまり――」

「優先されるは絶対神判。
覆せないから絶対神判。
足掻こうにもすでに下された判定だから絶対神判。
彼女が右と言えば、左だろうが後だろうが右になり――
自分の負けを受け入れなければ、彼女は勝者になり――
気分ひとつで対峙する者をも、最初から存在しないモノに出来る」

「うわっ……」

卑怯という言葉しか頭に浮かばなかった。

つまりどんな我が儘合戦も、色世皇に軍配が上がってしまう。
なぜなら、絶対神判。
それが、絶対神判。
勝者は常に彼女。
その力がある限り、どんな環境、どんな敵と対峙しても、優先順位は常に自分が上になる。
全ての我が儘を貫き通す力。

相手が銃を持っていようと、ミサイルを所持していようと、人質を取っていようと……
絶対優位が約束された色世皇の前では何の意味も成さない。
それが、絶対神判。
常に判定を下す絶対上位者。
勝敗を意のままに決する絶対者。

いかに自分の母親であろうと、それは度が過ぎる。

「私が信じない理由は――この世界は今、混沌に包まれているからだ。

正義を謳う者達。
反逆する者達。

辛うじて、人類を保っている生物文明。
人類が頂点に立って、地球がどれだけ痛んできたのかわかるであろう。
自分達が生きていくためには自然を蹂躙して当たり前。
そのようにしか思っていないのが人間だ。

そんな人間が戦争を起こせばどうなる？

地球の寿命が縮むだけだ。

その為には少しでも争いの元を取り除かなければいけない」

「でも、さっきはそれが間違いだったって……

トウコツが母さんを殺したから――」

「世界中でＳＲによる犯罪が増えた。

だが、認めねばならないことはもう１つある。

それは、お前の母は常に万人にとって正しいであろう道を追求していたこと。

彼女自身が、万民の為の絶対平成の真理を求めていたこと」

「本当に平和を願っていた……」

「そう。

そう考えると、絶対神判も考えられなくは無いが……」

やはり、クワニーにも少し意地がある。

彼女の絶対神判を容易に認めることは出来ない。

一個人が、人類の枠を超えて絶対に最優先される存在になっていいものだろうか。

そう考えると否定的な気持ちになってくるのだが、やはり認めるしかない現実もある。

「うん？」

その時、店の扉が開き、2人の女性が姿を現した。
うち一人の姿を見て、トキは心のどこかで安心し――
また、もう一人の姿を見て戦慄を覚えた。

「藍……」

「おかえり、ディマ」

カウンターを挟んで、2人の男の目が現れた2人の女性に向く。
いつも通り穏やかな表情の魔法使い、ディマ。
いつもなら見ることのない哭き鬼、藍。

物凄い剣幕の藍にトキは一歩引こうとしてカウンターに踵をぶつける。

「トキ……どうして黙って出かけたの？」

「いやっ――！
本当は一声かけようとしたんだけど……！」

藍が迫る。

恐っ！
怖っ！

つい頭を下げて謝りたくなってしまう。

「帰るわよ」

「え？
いや、待て！
まだ聞きたいことが……っ！」

藍の肩にディマの手が置かれる。
それでも藍の眼はクワニーに添えられていた。

「ねぇ、２人は今とても大事な話をしているらしいじゃない」

「ディマは黙ってて」

「黙るのはあなたよ、藍。
トキのことを心配するなら、彼に質問をさせること」

そんな２人を差し置き、トキはクワニーに聞く。
最も気にかかった疑問。
クワニーの答えによっては、今までのすべてが崩壊しかねない。
学校も、友達も、家も家族も……

「トウコツは俺を殺したと言ってた。
でも、俺は生きている」

その質問をクワニーは――ディマや藍も――受け止めた。

一度死して生きている。
それが今のトキだった。

「俺を蘇らせたのは母さんか？
それともクワニー、あんたか？」

沈黙と静寂。
クワニーは考えるように目を瞑り、背後の2人は口をつぐんで結果に耳を傾けた。

「……」

トキと眼を合わせ、クワニーは答えた。

「私だ。
お前を助けたのは」

「クワニー、それは――」

言いかけた藍を遮り、ディマは沈黙を続ける。
トキは何のリアクションも見せなかった。
心のどこかでわかっていた。それが、予感から確信に変わったのだ。

「本来、その時点で私は犯罪者。
私は自然の法則を破った。
死せる人間を蘇らせたのだからな。
しかし、それにも係わらず私は１０年も協会で有能な駒として使われた」

死者の蘇生行為は通常、死罪。
軽くて追放、監禁、監視対象に照らされる罪である。

「あの時、私はお前でなく、お前の母親を蘇らせようとした。
彼女の力を持ってすれば、お前の蘇生も容易かったろう」

「……どうして俺だったんだ？」

「遺言だ。
彼女は最期の力を使ってあらゆるモノを残した。
まず、言葉。
私はその言葉に従い、彼女でなく、お前を蘇らせた」

ディマは納得する。
なぜ、トキの母がそんなことを言ったのか。

彼女のメインＳＲは“絶対神判”
『戦闘』ではこれ以上無いほど脅威だが、『回復』という点においては、ほぼ無能と言ってもあながち間違いではない。

事の善悪を裁くのが彼女のＳＲ。
善悪を踏まえたうえで、全てを覆し、時に蹂躙する壮絶な力。
ある意味では、完全否定。

しかし、自分の息子、トキが死んでしまったことに『善悪』などない。

死者には善も悪もなく、ただ骸として静かに在るだけ。
善人を救い、悪人を滅する。
しかし、善と悪の区別がつかない子供に、その力が働くことは無い。
自分の死を『悪』だと……親不孝だと考えることも出来るはずも無く、また、自分の人生が終わることに正義を見出すことも無い。
ただ只管(ひたすら)毎日を、本能のままに生きる子供に対し、絶対神判の力が及ぶことはない。

（彼女は、トキを救う術を持ち合わせていなかった）

外敵を排除するだけの力はあるが、傷ついた者を救う能は無い。
なぜなら、神判こそ彼女の力。

裁かれて治る傷などない。
体にも。
心にも。

まして、死人。
善悪、老若男女、時間、意思。

全て――喜怒哀楽、痛み、感情と感覚――から解放された、ただの肉塊。

「だから、私は全力でお前を蘇らせた。
すまないと思ったが、協会の規則に則り、事故当時の記憶も封印させてもらった」

それが、１０年前の真実。
母親との死別。
初めてＳＲの世界に触れていた日。

「どうやってトキを？」

不意に藍は疑問を抱いた。
クワニーのＳＲはあくまで呪術師。
それも、罪悪感を取り扱ったもの。

どんな使い方をすれば、死者を蘇らすことができるのか。

「罪を使った。
私が感じてきた罪悪感に、私の寿命の約２０年分を加え、トキに送った」

「なっ――！」

（……やはり）

「そんな使い方……」

「しかし、それだけでは足りない。
だから、半径３０００ｋｍ以内のすべての人間から――
１分ずつ、罪に乗せて寿命を貰った」

その話は、３人を必要以上に驚かせた。
クワニーの話の内容がどれだけ罪深いことなのか。

他人から時間を貰って生き返った自分は、本当に生きているべきなのか……
生きていていいのか……
トキは罪を感じずにはいられなかった。
クワニーの２０年と他大勢の人間の１分ずつを貰って生きている自分。

「お前にはやるべきことがある。
メイトスを倒す。
それが出来るのはお前だけなんだ」

「何回か聞いているけど、今の俺じゃ……」

「そうだ。
切磋琢磨しろ。
微力ながら、助力の限りを尽くそうとは思っている」

そこでトキは思い出し、もう1つ。
最後の質問をぶつける。

「なぁ、夢の中でイマルを倒せって言ったのも、クワニーだよな？」

「そうだが」

何度かうなずき、トキは頭を下げた。

「ありがとう。
それと……ゴメン」

「感謝している場合ではなく、
謝罪している暇などお前には無い。
最初に言っただろ？
私に謝るのではなく、自分自身に謝罪すべきだ。
弱くてスミマセン、とでもなんとでも」

クワニーの眼が藍に向く。
2人の視線がぶつかり合うのを感じ取り、ディマはため息をついた。

（どうしてこの2人は解かり合おうとしないのかしら……）

藍はトキを引っ張り、共に店を出ていった。
2人が出て行くのを見計らい、クワニーは言う。

「トキの本当のSRはタイムリーダーではない」

「あの子たちだけで気付くかしら?」

「2人揃って自分の本当の力を知らないのだから面白い……」

「ホント――
でも、気付くことができれば、私たちを超えるかもしれないわね」

ディマは軽く笑い、クワニーも笑う。
これからが楽しみだ。

おそらく、今後トキや藍のようなSRが世界のドコかに現れることは無いだろう。

そんな化け物じみたSRが手の届く場所にいて、日常的に会話できる関係にある。

幸運だ。
一生涯で、あれほど稀代のＳＲに出会えることはそうそう無い。

「私はすでに超えられている」

２人が笑う中、入れ替わるように顔にアザ作ったハンズが帰ってきた。

トキと藍が事務所に帰ってきたのは６時を少し過ぎた頃だった。

ボルトが元気良く２人を出迎え、芹真の淹れたコーヒーをテーブルの片隅に、メイドｉｎパイロンの料理を頂く。

いつも通り――

芹真さんはテレビを見ながら。

ボルトはテレビなど眼中に無く、ひたすら料理を貪り、

藍は行儀良く租借していった。

そんないつも通りの風景に溶け込み、トキも夕食を腹に収めていく。

大体の疑問は解決した。

母の死。
父の獄中生活の理由も、母の死で納得できる。
トウコツの言葉。

少し後悔している事といえば、母の墓がどこにあるのか聞いていなかったこと。
また後で聞くことのしよう。

夕食を終え、トキは芹真に帰宅することを告げた。
薄暗い街を抜け、住宅街へ。

帰宅してすぐ、トキはベッドに身を預け、深い眠りについた。

当分学校は無いんだ。
予習と復習をちゃんとやらなきゃ、単位がやばいけど……

頭の中で明日の予定を組み上げていく。
いつも通り朝食を自分で作る。

食べ終わったら食器を片付け、次に家全体を掃除。
ベッドを直したら洗濯だ。

それから不足している食材を買いに行こう。
ついでにゲームの新作でも……って、それはダメだ。引きこもりがちになってしまう。

（――……あっ）

そういや、智明（チアキ）たちがＤＶＤ返しに来るとか言っていたな。
完全に忘れてた――……
けど、大丈夫か。

下手に外出しなければいいんだ。

心なしか、いつもより気持ちよく眠れそうだ。

よし。
もう、今日は寝よう。

第17話－the EDGE of GILTY－（後書き）

1st real：
『Second Real／Virtual』

NEXT・・・

1.5th real：
『Second Real／Virtual NexTrial』

人がどう思おうと、過去と現在と未来を定義した瞬間――
望もうが望まなかろうが、明日は来てしまう。

第１８話「親光少女！ボルト・パルダン！」（前書き）

きっとその瞬間がすばらしいから。

だから人は――
過去を造って、
未来を創って、
現在を作るんだ。

だから――
朝があって、
昼があって、
夜があるんだ。

どれが一番なんて無い。
どれも素晴らしいんだ。

……

……

……

本気でそう思っていたのはいつの事だったろう？

第１８話「親光少女！ボルト・パルダン！」

成功に次ぐ成功から真理を得ようとする事は難しい。

目に映るものは簡単に入手することができるが、見えないモノ、目に映りにくいモノは中々得がたい。

例えば――『愛』やら『信頼』やら『生命』やら『ライバル』やら……――ｅｔｃ

しかし、そういったものを気付かぬうちに手に入れている者も居る。

「あれ？」

午前０４：０４
芹真事務所。

そこには１人の魔女が住んでいた。
人狼と鬼と一緒に生活を送り、日々を過ごす、忘却水準を往来する光の魔女。それが彼女、ボルト・パルダンである。

事務所内に設えてある部屋の１つに、ボルトお気に入りの部屋があった。

部屋の中は多くの照明器具と子供には少し大きめのベッド、それから、短剣の刺さった懐中時計と、木製の大きな時計が壁に並べて掛けられている。

純白で統一された壁に一点だけ、黒い穴。

以前、トキが朝から発砲して開けた穴である。幸いにも、あの時は照明器具を1つ破壊されただけで、ボルト本人が怪我することはなかった。

「……ん？」

いつもならまだ寝ている時間帯である。

しかし、訳も分からずボルトは目を覚ました。いままでにない感覚、起床。

夢の途中に、何の前触れも無く覚醒に至ったことは今まであっただろうか？

それすらあやふやなのである。

（何だろう？

怖い夢……だったっけ？）

どんな夢を見ていたのか思い出そうにも思い出せず、上半身を起こし、ベッドから足を下ろす。

どんな夢？
思い出せない。

閉じた窓を開けようと立ち上がり、ボルトは自分のそれに気づいた。

（……涙？）

目尻に感じた違和感を、手で触れ、その雫を撫でる。
よほど怖い夢でも見たのか。

しかし、どうしても思い出せない。

ボルトは涙を拭いながら窓を開けた。

開け放たれた窓から吹き込む新鮮な空気。
ほど良く暖かい微風。
外に映えるオレンジとブルーの朝空。
昼は喧騒に包まれるであろう静寂の街。

まるで嵐の前の静けさのような雰囲気。人ごみでざわめき、車の活動で静寂は切り裂かれ、空気は淀む。

「ん～～っ」

一度伸びをしてから両手を広げ、朝日と微風を受ける。

（思い出せないなら仕方ないか～）

あっさり頭を切り替え、ボルトは深呼吸し、僅かの間景色を楽しんでから洗面所に向かった。

ここで、問題が１つ。

ボルトは通常この時間帯に起きることはない。ほぼ１００％。故に、どんなに早く起きようと眠いことに変わりなく、彼女の脳はおそらくまだ眠っていた。

それも、確実に５０％は非覚醒状態。

そんなボルトが鏡の前に立った時、

「ん……ん？」

鏡の前で伸びながら自分の顔を覗き込む。

どこか違和感が……

（まぁ、いっか）

確実にまだ半分くらいは寝ていた……

意識がハッキリしないとあまりいいことはない。

よし。

まずは、意識がハッキリした所から始めよう。

俺は夢の中にいた。

おそらく自分の葛藤か未来予想図か……

とにかく、夢の中でもう1人の自分らしき者と格闘している最中、俺の体は危険信号を宇宙人と交信ができるんじゃないかと思えるくらい発信し、覚醒に至ったのだ。

そう。

俺、色世トキは確かに自分の部屋のベッドに寝ていた　ハズ　だ。

だが、目が覚めてみれば、見慣れた天井や壁・床などはドコにも見えず、また柔らかい布団や枕も何処かへと消えていた。

しかし、決定的違和感は自分を取り囲む環境の変化じゃなかった。

シーツの感触も、枕の心地も、暗いマイルームでも、決定的な違和感を与えたのはそんなモノじゃない。

目が覚めてみると、俺は習慣でも趣味でもないのに――しかも…

…おそらく、いままで寝ながらだろうか――俺は、

『散歩』に勤しんでいた。

それも、早朝から。

（はい？）

夢だと信じたい俺。

しかし、現実にはしっかりジャージ着用しているし、シューズも履いているし……

気付けば隣にボルトが居るし――

しかも、何か――

いつもと……

「おはよ～！」

「う、ぉ、おお。

おはよう……」

トキが夢から覚めるのと同時、ボルトはその覚醒に気付いた。

スマンが、混乱も覚めるような説明をしていただけないでしょうか？

トキの意識はある程度ハッキリしていた。

が、ハッキリしているだけで、ボルトの読心術を完全に忘れてい

たのである。

「うん。
今日ね、スゴく早く目が覚めちゃったんだ。
それで暇つぶしに散歩行こうかな～、って思って」

「それで俺を誘拐――じゃなく、誘ったとか？」

「とかじゃなくて、まさしくその通りだよ。
どうせトキは今日も1日暇でしょ？」

朝から痛いところを突かないでくれ。
いや、決して暇ではないんだが……
しかし、そんなことよりも、どうして俺はしっかりと着替えているんだ？

「え？
あ、それはね」

そう言った直後、ボルトの指先に光が灯る。

しかし、ボルトだけじゃない。
俺の両手、両足、指、腰、首まで光を纏ってしまった。
朝早くとはいえ、大体予想がつく。

つまり、マリオネット。

糸で操る人形だ。
俺の体から自由が奪われていくのが感覚的にわかる。
多分、ボルトは起きている人間には容赦ない娘だ。
予想はついたからその辺で……

「こうやって」

ゴリ

「うっ……！」

「こうして……」

メキメキ

「っ！」

「こんな感じで――」

「ぁ……っ！」

ポキポキ、コキッ

「こうやったんだよ！」

ボキッ！

「――――！！！！」

されるがままの俺。
声も出せないもんだから、本当に操り人形と何ら変わり無い。

俺＝人形。
ただし痛覚あり、限界あり。

ボルト＝操り師。
ただし、スーパーアマチュア。

もうやめてくれ。
意志と関係なしにギリギリまで関節とか動かすと、結構痛いもんだしさ。
マジで洒落にならん。

「あ、ゴメ……
間違えた！」

ギュウゥゥ……

あの、ボルトさん。
悪化。
なんか、首絞まって――

「う～ん……」

何を考えてるのか詮索しないから……いや、あとで聞いてあげるから、いまはとにかく首の圧力を――！

「それっ！」

ゴリゴリ
ポキッ
メキメキメキパキッ

多分、首が絞まってなければ思いっきり叫んでた。

嗚呼……
俺の人生、散歩で終わるんだ……

「ごめんトキ！

思いつきでやってみたんだけど――
あ～、えーっと！
さっきは上手くいったんだけど、今ダメみたい！」

だったら最初からやらないで……

「今治すから！」

糸が切れた人形そのもののトキに向かい、ボルトは急いで両手に光を纏って修復にかかった。

（え～っと……
両腕は８０％、
腰５０％、
両足９０％、
……首４０％も壊しちゃったんだ）

それでもまだしぶとく生きていたりする俺。
でも意識は今にでも飛びそうだったりする。

（やばい、マジで逝くかも……）

が、幸か不幸か、ボルトは逝かせてくれなかった。

生き延びた、といえば聞こえはいいが……

「それっ！」

ボルトの実行した治癒魔法　＝　貫き手！

分かり易く言うと、手は前倣え状態。
手刀の突きバージョン。
五指をそろえて伸ばし、突き立てる技だ。

しかも、人体で急所が多数存在するという正中線。

そこに集中。
しかも複数回。
更に乱打で！

それでも不思議なことに、折れた骨、ねじれた骨、外れた骨は全て元通りになった。
ただし、貫き手のダメージは蓄積。
ボルトの指が意外と鍛えられていたことにも軽く驚かされたが。

「何で朝から死にかけなきゃいけないんだ……」

立ち上がり、そんなことを言ってみる。
貫き手のダメージはあるが、先ほどのように各関節や骨への尋常ならぬ激痛は綺麗サッパリと消えていた。

どうせ独り心につぶやいても同じだ。
読まれることを思い出したことだし、いっそ愚痴ってみ――

「誰にでも間違いはあるじゃん！」

「間違って殺された俺は一体……」

どれだけツイていないんだか。

それはそうと、気付けばココは隣町だった。
一体、どれだけ歩いているんだ？

「なぁ、ボルト……いま、何時？」

人影皆無の、騒音極少。
朝だってのはわかる。
だが、一体何時なんだ？

「たぶんＡＭ０４：４８～」

多分にしては細か……
って、おい！

「5時前!?」

「朝の空気はおいしいね」

いや、そんな余裕ないし!
つうか、眠気が踵を返したかのように襲い掛かってきたし!

「そんな不健康なこと言っていると、早死にするよ~!」

いや、お前といる方が早死にしそうだよ……
というより、もう1回死んでるし。

「何が目的で朝の散歩なんかしてんだ?」

「散歩するため」

何のひねりもない回答、実にありがたい。
特に混乱と眠気で頭がうまく機能してくれない時には。

だが、いまはそんな回答が欲しいわけじゃない。

「本当はね、準備している時に、トキの顔がふわ~って浮かんできたから、一緒に散歩するだけ出し、大丈夫か~って思って」

「全然大丈夫じゃない。
眠い。
寝せて」

「ココで？」

「いや、じゃあ、まず家に帰っていい？」

「ダメ」

理由無き一刀両断。
そりゃないだろう……

「トキといると夢を思い出せそうだから、一緒にいて」

「夢って？
何か重要な夢？」

「う～ん……どんな夢か覚えていないの。
けど、起きたら泣いていたから、何で泣いているのかな、って気になって……」

本当にボルトか？
今更だが……
今更ツッコむのも何だけどさ……
あなた、本当にボルトですか？

ガチ

「それで、私がどんな夢見てそんなになったのか思い出したくて」

トキは心から戸惑っていた。

口調こそ同じだが、今日のボルトは明らかに変だった。
まず、何より身長が自分の口元辺りまであること。
普段のボルトはどんなにがんばってもトキの胸くらいの身長しかない。

次に髪の長さ。
普段は短めだったり、セミロングだったり、たまに気分で成長急促進させてツインテールとかやっているらしい。
が、今のボルトの髪は明らかに腰まで達している。
ボリューム満点且つ、金髪が眩しい。

それから体型。
頼りなげな四肢はモデル顔負けの整った体つきになり、無駄がない。
そして胸も藍に匹敵するサイズを誇っていた。

（エロティカには是非とも遭わせるわけにはいかんな）

それはもう、さまざまな意味で。

下手すれば俺みたいにマリオネットのように弄ばれて、『間違えた』で殺されるやもしれんからな。

「そうか。
とりあえず、夢が思い出せるまで散歩は続くわけだ」

「う～ん……
たぶん思い出せない気がするし……」

帰宅不可ですか。

「じゃあ、パイロンの店まで行ったら帰ろ。ね」

つまり、どんな早くてもあと街二つ。
あそこまで歩いていくとなれば結構かかるな。

正直、キツい。

「……なぁ、ボルト」

トキは観念し、仕方なく眠気を吹き飛ばすためボルトに話しかけることにした。

「朝からこんな話もなんだけどさ」

「な～に～？」

少々聳なトキに対してボルトの機嫌は良好だった。

「ボルトの家族はもう、皆いないって話だけど……」

「そんな話したっけ？」

「初めて会った時話したろ」

「ん～……ごめん。
思い出せないや」

ガチッ

「ぁー……そうか」

「でも、皆居なくなったわけじゃないよ」

「兄弟とかいたり？」

「うん！」

妙に嬉しそうだが、同時に少し寂しそうだった。
やはり、どんなに強力な魔女だろうと子供であることには変わりない。

「トキは？」

「知ってるくせに聞くのか……」

「兄弟なしの、母他界、父獄中、でしょ？」

「そうだよ」

後ろ手組んでボルトは歩を進めた。
トキも歩いて追いかける。

「ねぇ、トキ」

「何？」

「ちゃんと友達は居るんだよね？」

「ああ」

振り返り、ボルトは言った。

その時のボルトが何を考えていたのか俺にはわからなかった。

もしかすると、解ろうとさえしていなかったのかも知れない。
とにかく、ボルトの本意が読めなかった。

「友達の世界を大切にしてあげてね」

「？」

「この世界はね、世界（ホシ）の上にさまざまな世界（ヒト）が存在して世界（クニ）を動かしているんだよ。
そうやって“世界／生命”が世界（レキシ）を重ねていくんだ」

「はい？
どういうことだ？」

単刀直入にいうと、さっぱり解りません。
むしろ、テラカオス……
変な電波入っちゃったのかい？

「わからなくてもいいんだよ。
ただ、聞いたことがあるか、ないかの違い」

「わからなくてもいい？」

「わかりやすくいうと、個と全だよ。
それは始まりから終わりの過程が光と闇の狭間を漂って、共通して同じ結果にたどり着く。でも、結末が同じというだけで決して全

てが共通するとは限らない」

「……」

……もう、なんてコメントすればいいの？
ていうか、あなた本当にボルトですか？

「うん！
ボルトだよ！
そういうトキは、本当にトキなの？」

元気ハツラツ。
たしかに、ボルトらしいといったらこの上なくボルトらしいが……
ただ、それは中身に限ってだ。
外見に関しては全くの別人にも、思えなくはない。

「俺も俺。
色世時だよ」

「うん！
私も私！
ボルト・S・パルダンだよ！」

S……？
やっぱり、いつもと少し違うようだ。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第１８話－

－親光少女！ボルト・パルダン！－

「あ、猫さん」

隣街に入ったところで、ボルトは路地裏に潜む存在に気付いた。

トキも何となく、そちらの方へ目を向けてみて……

「うっ……」

思わず目を反らした。
臓物引きずりながら、辛うじて息をしている生き物がそこに居たのだ。

ボルトは駆け寄り、猫は逃げようとする。

「おい、ボルト」

引きとめようとしたが、ボルトはすでに猫を捕まえていた。
必死に逃れようとする猫と、必死に抑えるボルト。

「いま治してあげるから」

その瞬間、裏路地はまばゆい光に照らし出された。
太陽光とは違う、もっと白く、強烈で――
しかし、優しさに満ちている、純白の光。

トキは思わず目を瞑った。
素直に眩しい。

（朝からこんなことして大丈夫なのかよ！？）

近所迷惑になってないことを祈る。
まぁ、近所ではないが。

程なくして放光は終わり、裏路地からボルトは帰還してきた。
その足元には先ほどの猫。よく見れば、子猫。

「おっきな猫と喧嘩したんだって」

足元でボルトに身を寄せる子猫。
ボルトも笑顔を見せた。
一つの命を救ったことに対する満足感からだろうか。

（そんなことも出来るんだ……）

ボルトは再び歩き出した。
再び笑顔を向けてくる。

「凄いな、ボルトは」

「うん？
えへへ♪」

心底驚きだよ。
はみ出てた内臓がしっかり元に戻ったのか、子猫は元気にボルトの横で鳴いてる。
これが魔女のＳＲなんだ……

「魔女じゃなくても命を与えることが出来る人はいるよ？」

「……居るんだ」

何か、人の命が安く思えてきた……気のせいだと信じていたいけど。

「例えば、アヌビスとか」

「あの黒い人たち？」

「うん。
協会の断罪部隊最高権威者、前ＨＥＲＯ＇Ｓの１人、イシスによって創設された部署。
その主力構成員たち」

いや、そんな自慢げに長々とした名前を連ねられても分からないんだけど。

というより、イシスってあのゲームとかによく出てくる――

「うん。
たぶん、世界最大の占い師」
「占い師が人を蘇らせるのか？」
「藍ちゃんとか良い例だよ」

数秒沈黙。
足音と子猫の鳴き声と烏の鳴き声だけが周囲を彩った。

「藍って……
一回死んだの？」
「うん。
私達と会う前に１０回死にかけて、１回リアルに死んじゃったらしいよ」
「マジ？」

どんなに傷付こうが死なない人だと思っていたのに……

「なんかその時、金棒と術符と日本刀しか持っていなかったんだって」
「はい？」

何ゆえいきなり装備の話？

「しかも、その時藍ちゃんが着てた服なんて、戦いに次ぐ戦いでボロキレも同然だったんだって。辛うじて大事なところ隠れる程度の。そんな状態で……」

「砂漠を横断したと？」

なるほど。

こんなこと言いたくないが、藍も結構アホだったんだな。

「藍ちゃんにそのまま伝えておこうか？」

すいません。

伝えないで下さい。

言わないで下さい。

間接的に殺さないで下さい。

「にしても、そのままの状態で――」

確かに。

よくもまぁ、そんな所を……

「南極に渡ったんだって。
しかも、船も使わずに」

瞬間的フリーズ。
解凍し、回答に悩む。

イシスって言うからエジプト方面じゃないの？
てか、何で南極！？
つうか、アホでしょ！

自殺行為もいいところだ。
ボロ切れ纏って、船も使わず、しかも武器以外一切持っていないなんて……

「藍ちゃんも未熟だったんだよね～。
直に見てみたかったな～」

「って、ちゃっかりサディスティックな宣言してるし……」

「だって、藍ちゃんが馬鹿みたいなことする所見たことないんだもん！」

「いや――」

初めて出会った夜は、数千いるんじゃないかっていうほど大量の

クワニーのゾンビに突っ込んでたじゃん。
あれが馬鹿みたいじゃないと？

「そんなの全然馬鹿みたいじゃないよ～！」

「俺から見れば、スゲェ馬鹿げて見えたぞ？
普通は突っ込まないし」

「それは、一般人的見解でしょ？
私達は“セカンドリアル”！
常識で考えていると、その内訓練で死んじゃうよ！」

「訓練で死んだら意味無いだろ？」

何の訓練だよ……
って、ちょい待て、何その笑顔。

「何だよ訓練って？
って……
それはまさか、その……俺が訓練の対象だったりはしないよな？」

「トキほど戦力にならないＳＲがどこに居るの？」

スイマセンでした。
そうですね。
芹真事務所で最弱なのって、俺なんですよね。

「だから、訓練相手をお願――」

「なぁ、その相手もやっぱりＳＲだったりするのか？」

「ＳＲじゃないよ。
あ――う～ん……
でも、ＳＲほどじゃなくても普通の人間なら持っていない力を持っているよ～」

やっぱり、普通じゃないんだ……
これは質問なんだが、ＳＲじゃないのに普通の人間じゃないってのはどういうことだ？

「え～？
だって、この世界で特異な能力を持った人たちや、そんな存在を『Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ』っていう、まぁ、読み方が違うだけだよ。
大体相手はＳＲだと思っていても間違いじゃないし」

「何かそれじゃあ――
まるで異世界からでも来たみたいな、
自分の世界に閉じこもって独自のルールができたみたいな？」

にしても、今日はよくも朝から頭が働いてくれること。
普段からこれだけ回転がよかったら成績で悩むこともないんだろ

うなぁ……

「うん、当たり！」

「はい？」

「まさしく――」

何が当たりなんだよ？
子猫も軽く驚いているようだし、もちろん、俺も軽く驚いた。軽く、ね。

「ナインちゃん達はこの世界の人間じゃないんだ～！」

自慢げに笑顔で解説するボルト。
必死に話についていこうとするトキ。
必死に歩行速度について来る子猫。
どうでもよさそうに鳴き続けるカラス。頭上を旋回するカラス。

「前にも1度来たことがあるんだけど、その時は少人数だったから少し寂しいかな？っていっていたんだ。
だから、今度来る時は知り合いを連れて来るって！」

「その、異世界の人とは仲いいのか？」

「うん！」

「どうやって知り合ったんだ？」

抱かずにはいられない疑問。
抱いて当然の疑問。

何が目的で異世界の人と知り合ったんだ？

「何でかって言われても、マリーンを探すためにあちこち飛び回っていたら、偶然ナインちゃんと遭遇したんだ」

「ナインって、それは人の名前か？」

「そういう部署で仕事をしていて、みんなが気軽にナインって呼ぶから、その名前が好きになったんだって。
それで、呼ぶときはナインで統一お願いって言われたことあるんだ」

どんな部署で、どんな仕事だ。
仕事でナインと呼ぶ職場も職場だ。

「安心してトキ。
ナインちゃんは相手しないから！」

（ナインちゃん……

……女性か？）

てっきり男かと思っていたよ。

「うん！
女性！
ウーメン！
たぶんそろそろ２３才になった頃だと思うけど」

「若いんだな」

「でも強いよ～」

「強いのか？
あ、だから俺の相手はしないと？」

それはそれで少し腹の立つ話だが……
まぁ、俺が弱いのが悪いんだろうしな。

「そう！
いっておくけど――
ナインちゃんは自分の世界で最も頂点に近かった人なんだ！」

「何の頂点だ？
っていうか、どんな仕事している人なんだ？
軍隊や特殊部隊とか？」

「この世界にはない仕事」

「へぇ」

ちらりと子猫に目を向ける。

たまに見てみれば可愛いかった。

何か、飼ってみたくなるな。

たぶん、長続きしないだろうけど。

気付けば、芹真事務所から3つ目、パイロンの店のある街――通称：外人街――の都市部に差し掛かっていた。

「ナインちゃんの世界では“フィルナ”って呼ばれているお仕事」

「ふぃ……？」

子猫を抱き上げ、ボルトは頭を撫でる。

そんなボルトの足元に、いつの間にか逃げ出したらしき犬が近寄っていた。どちらかというと少し痩せ気味で小柄な犬だった。

「トキ。

この世界が平和過ぎじゃないかって、思ったことない？」

突然ボルトは口調を変わった。青空から灰色の空に変わるように。

上空のカラスたちが飛び去っていく。

「平和すぎるって……
まぁ、この国は法律がうるさいし」

「この国じゃないよ。
世界だよ。
そう感じたこと、そう思ったことはない？」

「実感がないし、世界中のこと考えているほど余裕あるわけじゃないし……
あ～……
実感が湧かない」

「そっか」

と、再びボルトの口調に明るさが戻った。
結局、今の質問にはどういった意味が――……

「じゃあ、これを機にナインちゃんが連れてきた人たちに訓練してもらいながら聞いてみればいいよ。
絶対損はしないから」

そう繋がる訳か。ということは……
ナインなる人の世界は、この世界以上に荒れているということだな。

「うん。
そんな世界でも生きていく為に必要なもの。
これからお世話になるんだから、あっちの世界のことも少しは知っておいたほうがいいでしょ？
まぁ、訓練が始まれば、それどころじゃないと思うけど」

どんな訓練になるのか、秘かに胸躍る響きもあるのだが……
冷静に考えてみれば、ボルトの知り合いである。
そして、その知り合いの世界は酷い荒れ様という。
間違って命落とすことはないよね？

「保障できな～い」

じゃあ、死ぬ確立の方が遥かに高かったり、とか？

「うん。
それは保障できる」

――参ったな。
半ば冷静、半ば冗談で聞いたつもりだったのに……返ってきた答えはとても耳当たりがいいとは言えないモノだった。

例え冗談だったとしても、訓練つけてもらうのは俺。
命落とす可能性があるのは俺。
ボルトは訓練に参加するわけじゃないんだ。命を落とす心配なんてないだろう。

しかし、俺は違う。
下手すりゃ逝けるらしいじゃないか。
嗚呼、逃げ出したい……
痛いのは嫌いだ。

「でも、慣れておけばすごいプラスになるよ」

そんなこと言われつつ俯くと……
初めて足元の異常に気付いた。

「……！？
っ！？
えっ！！？」

いつの間にか犬＋猫、合計して４匹に増えてるし。
更に、ボルトの右肩には鳩が。

足元にカラス……って、上空にもたくさんいる！
他にも数え切れないほどのスズメやネズミ。

俺の後ろにも何か――か、カルガモ！？――ついてきてるし！

「あとでトウコツと戦うんなら、結構役に立つと思うよ？」

「う、ん、わかった！
ちょ……なぁ、ボルト！
何だこの動物！？」

「お散歩仲間～」

「い……えっ、嘘ぉ！？」

なんか、鷲（ワシ）まで！
随分愉快なお散歩パーティーじゃないか！
これ、俺誘う必要なくない！？

「こうやって、パイロンの店まで行くと、皆で朝ごはん食べたりできるんだよ」

原因発見！
餌付けか……餌付けしたんだな！？

「違うよ～、食べ残しなんて勿体無いじゃん！
だから、有効利用しているんだ」

いや、結果的に餌付けになっているし。
ウミネコに、カッパ〇〇センを与えないでください、って標識見たことないのか？
この動物メンバーに天然記念物混じっているぞ？

「……」

「下手に懐いちまったら、面倒なことになるんじゃないか？」

「ぅ～～～……」

あ、ふくれた。

と、同時。

一斉に動物たちが逃げ始めた。

子猫なんて逃げ遅れてボルトの腕の中で震えている模様。

かわいそうに。

ボルトはゆっくり子猫を地面に下ろしてあげる。

すかさず逃げ出す子猫。

「本当はわかってるもん」

言ってからこんなことというのも何だけど、何か悪い事してしまったな……

それから黙々とあるくことわずか2分。

パイロンの店（改装中）の姿が目に飛び込んだ。

「なぁ、ボルト。
俺、今日友達が来るっていうから、家に居なくちゃいけないんだ」

「そうなの？」

「ああ」

「ちぇ～っ」

膨れながらボルトは踵を返し、復路を進み始める。

「じゃあ、また後で散歩に付き合ってね」

「え？」

突然の申し出に戸惑い、トキは足を止める。
街の稜線を飾る太陽光を背に、ボルトは言った。

「みんな変わっちゃう前にもう一度、一緒に散歩しようね」

いつものボルトはもっと元気で、もっと子供っぽく、もっと無邪

気。
だが、目の前のボルトに、そういったものがない。
何故か、少し寂しげな顔。
何気ない約束。

「ああ。
いいよ」

見慣れたハズなのに、しかし、見慣れないボルト。
容姿が変わったことだけが原因とは思えない。
決定的に、いまのボルトは何かが違う。

「約束だよ」

2人は静かに、それでもいつもより話は弾み、復路を行く。
その帰り道に疲れを感じることはなかった。

トキが自宅へ着いた時、ボルトは再び踵を返した。

「事務所には行かないのか?」

「うん。
ちょっと用事思い出したの」

手を振ってボルトは走り去り、トキはそれを見送った。

朝早くからだというのに、何故あんなに元気でいられるのか疑問に思った。
自分には到底真似できない。
早寝は苦手だし、早起きは規準がわからないし。

「まぁ、ボルトなら大丈夫か」

魔女だし。
その気になればきっと、人独り、1分もかからずに破壊できるだろう。
俺がそうされたように。
だから、誘拐されないか、という心配をしなくて済む。
逆に、こっちが危なくなった時に駆けつけるだろうから頼もしい。

（さて、エロティカや智明たちが来るまで余裕を持てそ……）

ボルトという津波が引いた後、

第2の波が来た。

しかも、かなり害悪・有害・精神的不衛生な、

「ぬっ！
起きていたかトキ」

何日か前にＤＶＤを借りていった人物の１人が、常識ハズレなマル秘友人が常識外的な時間帯から襲撃を仕掛けてきた。

「セ～ン～。
何～処～？」

隣町。
２度通った場所へ、再三ボルトは足を運んだ。

もちろん、人探しのためである。

それは親友。
そいつは後輩。
彼は人外。
周囲は勝手に仙人と呼ぶ。
が、本人にその自覚なし。

「セン～。
出てこないと焼き殺……照り消しちゃうよ～♪」

ボルトの両手に灯る蒼白い光。
その気になれば半径２０Ｋｍくらい一瞬で焼け野原にできる魔女。

そんな彼女を先輩と慕っているのが彼、センであった。
直後、裏路地の水溜りから人１人が飛び出る。

「すみませんでした！
もう2度と邪な悪戯を仕掛けようとはしませんから許してください！」

学生服に身を包みながら謝罪の意を必要以上に繰り返す、実年齢２１歳の微童顔青年。

本名：オリベイル・セスナム
通称：セン

水の精霊に見込まれた、命を守る水。
遥か昔から人々を育んできた水。
光と影の後輩。
それが、この男“生源創水”のセンである。

（って、うわっ！

ボルト先輩が“S状態”だ！）

「そんなことより、ちゃんと測定できた？」

殺意に満ちた笑顔で迫るボルト。

必死に頷きながら胸ポケットを探る。

「もちろん取れました！

急ごしらえとはいえ、それなりの設備を借りれましたので！」

色々戸惑いつつも、センは一枚の紙を取り出して読み上げる。

「色世　時君に関する情報！

第1覚醒：タイムリーダー

第2覚醒：クロノセプター

それから、第3覚醒の予兆が現れています！」

「やっぱり？」

通常の態度に戻ったボルトにセンは安心を隠せない。

殺気が津波のように引いていく。

思わずため息が漏れた。

「はい。

先輩の言ったとおり、トキ君は並みのＳＲじゃないです」

「直に見て正解だったと思わない？」

「ですが……

本部からは、積極的なアプローチは一切禁止とされていますので……」

「大丈夫だよ。

私に脅されてやった～、って言えば」

言いつつボルトは指先に光を灯らせる。

センは身構えながら言葉を選んだ。

「そ、それは、先輩……」

「それにしても、よく1時間以内に用意できたね」

「え？

ま、まぁ、先輩の頼み――」

――だと、断るに断れない。

断ったら他界必死。本当に必死。必ず死にます。そう、冗談抜きで！

（1、2……5人か～）

ボルトから声がかかったのがトキを散歩に連れ出す直前。
指定された時間内に指定された場所で待機して欲しい。

2人が外人街に来る前後から“その眼”は少しずつ集まり始める。
様々な動物達の目を通してトキを観察する千里眼達（リモートビュワー）。

ある者はトキの仕草を観察し――楽しんで、
ある者はトキの外見的特徴だけをしっかり目蓋に焼付け――ナルシスティックに表情をゆがめ、
ある者はトキの口調から癖を拾い――速筆でメモを取り、
ある者は娯楽としてトキの考えを考慮・吟味し――反応のいちいちに笑みをこぼし、
ある者はトキのＳＲを考察・推論していた。確実に覚醒を重ねている、と結論に至った。

「それにしても、思いつきでやったにしては相当な情報を得ることが出来ましたね」

「うん。
やって良かったでしょ？」

「はい。
ですが、先輩。
先輩は協会が嫌いなんじゃ……」

「嫌いだよ～♪」

殺意のこもった笑顔。
殺意というより、むしろ悪意。

「ぅへっ……！？」

そこからボルトによる後輩イヂリが始まり、正午まで続いた。
今日の外人街は、いつもよりも多くの外人が喜怒哀楽で街を飾ったという。

第１８話「親光少女！ボルト・パルダン！」（後書き）

＜報告＞

色世　時。

――ＳＲ――
タイムリーダー（未確認）
クロノセプター（未確認）
ＵｎＫｎｏｗｎ（予兆有、不特定要素未知数）

――危険度――
通常時：皆無
ＳＲ発動時：Ｂ＋
異常時：未知

――コメント――
預言者でさえ完全に読みきることの出来ないＳＲであり、且つ協会に服する意志がないことから、ＮＩＧＨＴ　ＭＡＲＥに加わる前に処分することをお勧めします。
ただし、四凶を向けてはいけません。

＜確認書＞

――印――

受領

――コメント――
処分不可能。
やれるものならやってみやがれ。
無理だから！

＜追加報告＞

――緊急――
色世　時と魔女に関する報告ですが、今回観察して判明したことがあります。
ボルト・パルダンは、色世　時から漏れているＳＲの微々たる波動を拾って復活しつつあります。

――詳細――
仮説の域を出ていませんが――
もしかすれば彼のＳＲ：クロノセプターがボルトの『夢の殻』から時間を奪い、夢の殻に閉じ込められたボルトに時間を与えているというものだったとしたら、最悪の場合、彼女が完全に復活します。
早急に防御を固める必要があると思えます。
他のＳＲの仮説でありますが、検討した結果、トキの力で彼女が蘇る確立は６５％を軽く上回ったそうです。

その報告書が届けられる前に、１人の男がそれを盗み見た。
色世　時に関する報告書。
それは興味深く、またある程度の期待を抱くに値した。

何せ、色世　時はトウコツの左手を奪っている。

それだけの力、見てみたい。
自分を凌駕する実力者は飽きるほど見てきた。
逆もまた然り。
問題は、それらの殆どが完成体、または完成間近な実力者達。

（あの若さ……
あの未熟さ……）

しかも、日本人。
しかも、学生。

戦争も知らない。
戦いも知らない。
命の駆け引きを知らない。
世界の流れなど考えたことも無い。

だが、トウコツの左手を奪った少年、色世トキ。

「ククク……ッ

フハハハハハッ！」

“自分が試してやる”

男は笑いながらトキに向かって歩き始めた。

第19話－Ｐｉａｃｅ　ａｎｄ　Ｆｒｉｅｎｄ’ｓ－（前書き）

ただ何となく。

ただ騒がしく。

それでも、そんな日々も日常。

当たり前に日々は移り変わり、

何気なく、変わってゆく。

第19話－Ｐｉａｃｅ　ａｎｄ　Ｆｒｉｅｎｄ'ｓ－

私には1人――実に興味深く、且つなかなか予測できない――親友がいる。

出会ったのは中学の時。

そやつはイジメに遭っていると理解していながらも欠席したことがない人間。

1人暮らし故に生活力は優秀で、同じ年齢の中学生とは思えないほど手馴れ。まるで何十年もそうしてきたかのような手際のよさに、私も幾度か魅せられた。

しかし、遊び人という素質も兼ね備えているらしく、楽しんでいるわけでもないのにゲームを買い、どんなにかかっても1ヵ月程度で全てクリア。

娯楽としてゲームを楽しんでいるのか、いままで幾度も疑問を抱いたくらいである。

ゲームだけじゃなく、映画もそうだ。

ＤＶＤを購入して鑑賞し、棚にコレクションする。

生活用品の買い物は上手なのだが、娯楽品となるとその消費は激しい。

やはり、楽しんでいるようには見えないし、思えない。

「ぬっ！

起きているとは思わなかったぞトキ」

金銭面の管理能力欠如は置いておこう。

奴はまたしてもこちらの意表を突いた。

「まぁ、ちょっと、色々あってな……」

「ほう？
イロイロとな、何事ぞ？」

普通の人間ならこちらの出現に怒りを覚えるだろう。
しかし、トキは違った。
中々怒り出してくれない。
それ故、言語による誘導が時折困難であったりする。
が、負けるわけにはいかない。

「あ～……
まず言っておくが、お前みたいに“いかがわしい故”じゃないから」

「であろうな」

そこが私の親友の特殊な場所だった。
私が最も大事としている部分が、奴には抜けている。
というより、ほぼ皆無に近い。
故に、奴に性別という概念は中々通用しない。

「知り合いが“朝の散歩に付き合え”って言ったから一緒に行ってきたんだ」

「ほぅ、意外と脈有りか？」

「は？
う～ん、まぁ、とにかく上がれ」

私の親友は変わっている。
それ故に面白い。
学ぶところもあれば、教えねばならないこともある。

親しき者が少ない私にとって、絶対に失いたくない者。
私にあだ名をくれた初めての人間。

だから、私は注意していることがある。

学校での私の評価はワースト5にランクイン。というより、その頂点にランクイン
だから私は――学校など、多くの他人がいる時や場所では――トキの『ただのクラスメイト』として振舞っている。
奴まで私と同列扱いされては迷惑だろう。
そして、私個人、そうされて欲しくないと思っている。

「どうした？
上がらないのか、翼？」

それ故、クラスメイトたちは我等が中学来の親友であることを知らない。

「いや、エビフライの衣のような不規則的突起のバ○○を突っ込んでみたら、意外といけるのかどうか……と考えてな」

「おい……
朝からエロティカになるな」

「ふふふっ、冗談に決まっているだろ」

「そうか……
とりあえず、もう帰るか？
それとも上がっていく？」

「昨日の晩も飯にありつけなかったのでお邪魔させてもらうよ」

「またか……
ちゃんと食えよな」

我々には共通点がある。
“共に1人暮らし”であること。
トキの母は他界。
父は獄中。
そして私の両親は、理由不明で原因不明の夜逃げ。失踪。行方不明。

だから、お互い分かり合えるものがあった。

Second Real／Virtual

―第19話―

―Piace and Friend's―

「うむ！
また一段と腕を上げたではないか！」

「そう？」

AM 08：21

リビング。

朝食から数時間が経過し、2人はテレビゲームに興じていた。

「デザートも完璧！
いやはや、本格的に住み込んでしまおうか！？」

「別に、俺はかま……」

朝食の時からエロティカは定住宣言を連呼して止まない。
その言動の一つ一つからまともな食生活を送れていないことは容易に推測できた。

トキとしてはルームメイトが出来るだけで、それなら大した問題ではないと思えた。

だが、『SR』という単語が頭のどこかを掠った時、彼の同居を認めるわけにはいかない。

ハンズのように有無を言わず外から乱射されたら……
トキにはボルトのように、人を生かすだけの力が有るわけではない。
自分の身を守ることで精一杯。
それくらいなら……
巻き込まれるくらいなら、翼には現実的に厳しい道を行ってもらうしかない。
しかし、言い始めの村崎翼本人には本気で同居するつもりはなかった。

「あ、やっぱ無理かも」

「気にするな。気にしていないだろうが。
回答がどうであろうと私は定住する気は無い。
自力で在り処を探すさ」

「頼もしいな」

「頼もしいのはトキの料理の腕だ。
メインからデザートまで作れる学生は今の時代希少だ」

「いや、希少じゃないし……」

「私は自分のメニューで精一杯だと言うのにトキは何品も作れるうえ、美味。
私の腕と比べ、料理の腕では遥か上空を遊泳飛行しているではないか」

「いや、上は居るんだけど……つぅか、いるんだよ
俺よりもおいしいの作れる人が」

しかもクラスメイトに。

コントローラーを握りなおし、エロティカは画面に向き直る。

「ほう？

そんな者がいるとは……」

「藍だよ」

「アイ？
……それは、橙空藍のことか？」

「その藍だ」

「……冗談ではないのだな？」

「冗談の方がよかったか？」

「いや、冗談でないことが嬉しいな」

「嬉しい？」

ゲームの中でエロティカ操るキャラがありえないコンボを決めてくる。
くそ、腕あげてやがる……

「ああ。
彼女の肢体を見ろ。
服の上からでもわかるあの整ったボディを！
是非ともお近づきにな……！」

逆襲ついで、エロティカの野望を打ち砕くかの如くトキのキャラ

が一撃必殺を繰り出す。

「何っ！
そんな技があったのか！？」

「あぁ、あるんだ」

「おのれ……！
だが、しかし！
私が負けるハズ……！」

ラウンド３。
トキの堂々勝ち。

「だが、あのボディは諦めんぞ！
彼女の肉体はこれ以上ないというほど私のインスピレーションを掻き立てる、私が最も理想とするイメージの肢体に近……！！」

やばい。
これ以上話させると話の内容がエロス１００％で染まってしまう……
一般的に行くなら、ここで何とか流れを変えないといけないのだろう。

「なぁ、ＭＵ○ＥＮやらないか？

何日か前にキャラ増やしたんだ」

「何と！
増えたのか？」

「エビル――と、セ―。
それから――ト系とか、
Ｘ――Ｎとか……」

「早速やろうではないか！
言っておくが、私は絶対に貞―だからな！」

「じゃあ、俺も黄金――で戦おうか？
それとも阿―さんがいいか？」

「……いや、そいつらは勘弁してくれ」

※あまりにもマニアックな内容が含まれていました。　しばらくお待ちください。

その日、トキの家に2人目の来客が訪れたのは、2人が新たにゲームを始めて1時間が経った頃だった。
チャイムが鳴り、トキはエロティカを部屋に残して階段を降り、玄関へ。

「おっす、トキ」

ＤＶＤを返却に現れたのはタイガーヘッドの友人、友樹。

「いや～、楽しませてもらったよ」

「映像の乱れとか無かった？」

「全然。
最初から最後まで途切れることなく楽しめたよ。
悪りぃな、朝から出向いてきて」

嗚呼、そんな言葉をエロティカからも聞いてみたい。

「それじゃ、今日はこれでっ！」

「おう。
気をつけろよ」

「はいさ～。
それじゃ」

友樹は足早に去って行き、トキはキッチンに向かう。
冷蔵庫から飲み物を、食器棚からコップを手に取り、２階へ移動を開始した――

その時に、次の訪問者が現れた。

「よ〜ぅ！
トキ、居るな〜！」

目的不明な彼女の出現にトキの足が止まる。

「奈倉さん……」

予想外な人物の出現に戸惑いを隠せないが、戸惑っていても仕方が無い。

「DVD、ほら。
ん？
両手ふさがってんのか、なら、ここに置いておくよ」

「あれ？
奈倉さんも借りたっけ？」

「ああ、こっそり借りたよ。
スピ――――グの作品」

勝手に持って行ったのかよ……

「ああ、パクっても良かったんだけど、色々大変だろうしな」

「……大変？」

彼女が不敵に顔を笑みで彩る理由がわからない。

「ほら、あんな立派な剣（エモノ）を貰っただろ？
良心の呵責？
恩を仇で返したくない、みたいな？」

「まぁ……」

別に全然大変じゃないし。
でも、少しは腹を立てたかな。

「何だよ？
ＤＶＤはこうしてちゃんと返したんだ。
それでも何か言いたいことでもあんのか？
聞いてやるけど、その前に１本吸ってもいいか？」

「言いたいこと……無くは無い」

タバコを取り出して彼女は聞く耳を立てる。
紫煙が流れ、それを軽く目で追いながらトキは切り出した。

「奈倉さん、“ＳＲ”って知ってる？」

「エス、アール……ね～。
シングル・ルームとか？」

トキは黙って彼女を見据えた。
何故か、彼女に聞いてみたくなった。
かすかな確信も無いのに、心のどこかが訴える。
それが本能的警戒心によるモノなのかもしれない。

「剣を欲しがるのは、奈倉さんの興味？
それとも、何か理由があってなのかな？」

「趣味で悪いか？」

「どうして俺が大変だってことがわかるんだ？
俺は全然忙しくない。
暇で暇で眠りそうだよ」

奈倉さんの目が階段の上へと向き、トキの手元のコップに向く。
２個。

「そうか。
じゃあ、私は帰るとするよ。
道路まで付き合ってくれない？」

「……」

「SRって、もしかしてナゾナゾだろ？
恥ずかしい答えかも知れないし」

「聞かせて欲しい」

確信に変わった。
彼女は、知っている。

頷きながら彼女は玄関を出て、トキはそれを追う。
夏の日差しが照りつける中、彼女は急に切り出した。

「“Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ”だろ？」

背中を向けているはずの彼女に、トキは寒気を覚えた。
――殺気
トウコツほどではないにしろ、それに近いだけの殺気が零れていた。

「気をつけろ。
ハリヤの奴なんか、お前の所為で留学させられたらしいからな」

「え？
ハリヤって、まさか……」

思い浮かぶのは自分のクラスの、

「出席番号：３８
高城播夜（タカジョウ　ハリヤ）
通称：先輩
ここまで言わなくてもわかるだろう？」

「そんな……」

「でもアイツは協会の人間だ。
下手に手出しできない。
知ってるか、トキ？
今な、協会はＮＩＧＨＴ　ＭＡＲＥとの戦争に忙しいんだ。
殆どのＳＲは主な戦場になるだろう国に移動している」

「ナイトメア……」

「いま最も気をつけるのはナイトメアだ。
メイトスも中々脅威だけどな。
目の前の現実を教えてやろう。ナイトメアがお前を狙っている。
経験済みだろ？」

「……ああ」

「お前も戦ったんだろ？
なら、奴等が本気だってことはわかるよな？」

「一般人を巻き込んでまで人材を手に入れようとしている」

彼女は頷き、灰を下水に落とす。
そこではじめて振り返った。

「私も、ここ数日のうちに何度か誘われたよ」

「奈倉さんが？」

「トキ、もう私がＳＲだってのはわかったんだろ？
なら、疑うべきは私が普通の人間かどうかじゃない。
お前の敵か味方か、だ」

「……」

「ん？
私の言っていることに間違いがあるか？」

「……いや、そう。
きっと正しいと思う。
でも……
何ていうか……
これだけは言わせてくれ」

「何て言いたい？」

「俺はクラスメイトと戦いたくない」

沈黙。
静寂。
そして、

「それを聞いて安心したよ」

安堵。
彼女も同じ考えだった。
なるべく、クラスメイトとは戦いたくない。
顔見知りとは拳を、また剣を交えたくない。

「私は協会にも、ナイトメアの下にも服さない。
ＳＲである前に１人の人間として生きていく」

「どうしよ……
オレは奈倉さんみたいに立派に生きていく道標が無い……」

彼女のように立派に、そして気高く生きていく自信はなかった。
自分の非力が、
優柔不断が、
無力さ。

「けど、いま居る仲間と一緒に生き方を見つけていこうと思う」

約束。
芹真と交わした口上の契り。

「芹真事務所か……
確かに、トキはあそこの奴らと一緒に居るべきだ。
世界一安全な場所だと思うぜ？」

そう言った瞬間、奈倉さんは走り去ってしまった。

（彼女が味方でよかった……）

トキはため息をひとつ付いてから、まず飲み物を自分の部屋まで運んだ。
部屋の中ではエロティカがＣＰＵ相手にゲームを進行していた。
もう一度下まで降りて今度はＤＶＤを運ぶ。

「あの声からして奈倉さんだな？」

（まさか、聞いていた？）

「思い出したんだが、彼女もいい体つきしているな」

「お前の脳（あたま）は年中桜が咲いているんだな……」

ある意味安心だけど……

次の来客は電光石火そのものだった。

チャイムが鳴り響き、トキは再び玄関まで降りる。

だが、誰も居ない。

「あれ？」

悪戯かと判断した瞬間、とある物が目に入った。

もしやと思い、トキはそれに近付き……

当たり。

それは郵便受けに突っ込まれた大きい包み。

重さ、大きさ、触感からＤＶＤだとわかる。

その包みに張ってある紙に目を落とすとキリングマシーンの字で謝罪の意が綴られていた。

前の訪問からきっかり１時間後の出来事でる。

「残るは智明だけか……」

そしてこれまたきっかり１時間後、彼女は汗だくになりながらや

って来た。

「ご……ごめ……っさい……
もうちょ……けほっ……早めに来ようと……っ」

「あの、大丈夫？
お茶かなんか飲んでく？」

「お言……葉に甘え……えほっ」

息を切らせながら智明は玄関に腰掛けた。
相当な距離を走ってきたのだろう。
汗が凄い。
お茶を渡すや否や、彼女はあっという間に飲み干してしまう。

そして、友樹や奈倉さん同様、彼女もあっさりと別れを告げて帰路に着いた。
その時からだった、トキの中にある感情が浮かんだのは。

『ＤＶＤをシリーズ全部借りてくるのって、面白いのかな？』

ただの好奇心だが、１度火がついたら止まらない。
今日訪れた皆がみんな何らかのシリーズを借りていたのだ。

「翼ぁ～、街まで出かけないか～？」

「出かけるだと!?
いいぞいいぞ!
しっかりと引きこもりから卒業できているではないか!」

余計なお世話だ。
が、どうもと一応言っておこう。

で、行くのか、行かないの?

2人が帰宅したのは家を出発してから実に5時間後。

移動に約1時間、遊びに3時間半、レンタルビデオ屋で半時間。
さすがのエロティカも帰宅。
遊びの3時間半が大分堪えたようだ。
そして帰宅を果たしたトキにとって、最も堪えたのは藍の存在だった。

「お帰りトキ」

リビングの中央で、まるでこの家の主であるかのように振舞う客人。

「どうやって入った？」

「人を幽霊みたいの言わないで欲しいわ。
普通に入ったわよ」

鍵のかかった家に入ることが普通ですか。
もしかして、ピッキング？

「ドアを掴んで、こう……」

手前に引くアクションを見せるが、そのドコにも違和感は無かった。
普通に扉を引いているようにしか見え……――

そうか。

間違っていたのは俺だ。
俺は第2の現実が見えなくなっていたんだ。
藍の力の前にドアの存在は無意味。

引き剥がされて当然。
藍の口からそれが証言された。
事実、はまっている枠から外れたドア。　藍は何事も無かったかのように家の中へ。
便利な陰陽術もどきで何とか修理したそうな。

「わかった……
で、この時間に来たってことは、何か用事があるとか？」

「いえ。
さっき、芹真とボルトが仕事に出かけて私は非番になったのよ。
だから暇なの。　それでここに来た」

（いや……
俺ん家はマンガ喫茶やインターネットカフェみたいな暇つぶし施設じゃないんだぞ？）

あえて心に思うまでにとどめておく。
間違って口にだしておっかない目に遭うのはゴメンだ。

「それに話しておきたいこともあるし……」

「話しておきたいこと？」

藍は立ち上がり、トキの目の前まで歩み寄った。
そして、耳元で小声で囁く。

「その前にお風呂ドコ？」

「何で小声で言うんだ？」

話の内容がガラリと……
話しておきたいことって、まさかそんなことではないだろう。

そして、何故赤面する？

直後、ボディブロー。

えぇ……！？
なんで、何で殴るの？

「ふーっ……
他の人に絶対言わない？」

「え？」

「言ったら……」

いつものことだが、あの金棒は普段どこに隠してあるのか――

ずん！

などと考えているうちに、金棒が両足の間に突き立てられる。

すいません……
誰にも言わないから、ソレ、やめてください。

すると、再び小声で宣言。

「今日8度目なの」

「何が？」

「お風呂……」

いくらなんでもそれは入りすぎだ。

「最初は寝起きでシャワーを浴びたの」

しかし、ボルトが事務所に帰ってくるなり朝食を貪り、珍しく早くから起きていたせいか、やたらと行儀が悪い。

食器を洗っているうちに油まみれになってしまい、外出の予定があったので汚れた出で立ちで出向くわけにも行かず、そこで2度目のシャワー。

その次。

外出した先で汗を落とすようにと言われてシャワールームを提供され、仕方なくそこで3度目。

その直後に精神的な地獄を見て、その後に4度目のシャワー。

「理由は聞かないで。
あまり綺麗なものじゃないから」

トキの頭には真っ赤で血みどろな光景が浮かんだ。

事務所に帰ってから上の部屋の住人と一緒に事務所の倉庫内を整理、大掃除。

最悪なことに、くもの巣やら埃かマリモか目を疑うような塵芥のなかで掃除すること1時間。

昼食の準備もあるため衛生状態をはかって5度目のシャワー。

ボルトが喰い散らかすこと再び。

調理と片づけで再び油塗れになり、朝にまして汚れたため6度目のシャワー。

今朝よりも酷い汚れようだったのだ。全身油気。　その他、ボルトのドジに付き合い、上半身あんかけまみれ。

気持ち悪かった。

「さすがに頭に来たから、もう何もしたくないと思ったんだけど……」

そこに――

ナイトメアを名乗る連中が襲い掛かってきた。

総勢たったの7名。

揃いも揃ってザコばかり。

芹真は彼らの相手をする気皆無。
ボルトは眠い、くだらない、と文句ばかりたれてばかり。
仕方なく、藍が7人を同時に相手にしたのである。

「そこで返り血浴びたわけか……」

「7度目のシャワーよ」

「で、いま浴びる理由は？」

肝心の8度目のシャワーの理由。
別に、浴場を貸したくないというわけではない。
ただ、どう頑張れば8度目のシャワーという結論が出るのか気になった。

「蚊が酷いからよ。
汗をかいて、やたらと寄ってくるの。
私、これでも傷負けしやすい方だから……」

その割りに綺麗な肌なのは黙っておこう。

「なるほど……
柑橘系のシャンプーとかあったけど、使う？」

「いいわよ。
お風呂借りれるなら、それだけでも助かるから」

「何なら泊まっていく？
帰りにまた汗かいたら意味無いだろうし……」

「トキがいいって言うなら泊めて貰いたいわね。
パルは朝まで帰ってこないって言っていたし」

トキは頷く。

「別に問題ないだろうし、一泊していけよ」

「じゃ、お言葉に甘えて。
あ、それと……」

「藍は夕食はまだ？」

「えぇ。まだだけど……
それより、ちょっと話したいことがあるから、一緒にお風呂入らない？」

「いいよ。
ところで、何か食べたいものとかある？」

食べたい物と聞かれ、藍は悩んだ。
普段はオーダーを聞く側なのだが、いざ自分からオーダーすると

なると悩むものがあった。
パイロンの店のように行きなれているわけではなく、しかも他人の家。
全ての食材が揃っている可能性は低い。
しかも今、自分が押しかけ同然に上がっていることも頭の隅にあって余計に悩んだ。

「それじゃあ、トキの得意を食べてみたいかしら？」

「俺の？」

「あ、別に……
いまある食材で作れる物なら……」

「在る物で作れる夕食ねぇ」

頭の中に様々な食材と調理道具が浮かび、レシピを組み立てていく。

そして、その間――トキは藍に引っ張られ――浴場に連行されていることに気付くのに遅れた。

「あれ？
先に風呂入るの？」

「確かめたいこととかあるの」

気のせいじゃなく、自分の手を引く藍の手には力が入っていた。
そして、ごく僅かだが震えている。

風呂の場所を聞いておきながら、藍は滞りなく浴場へと足を運んでいた。

「なぁ、お湯まだ入れてないんだけど……」

「シャワーで充分」

いらないらしい。
言いながら藍は服を脱ぎ始める。

「そういや、着替えるもの持ってくるよ」

「お願い。
早く戻ってきて……」

言われてトキは足早に浴場を出て廊下を進み、階段を上がって2階のとある部屋へ。
そこは単純に言えば物置である。

だが、それは特別なケースに備えて揃えた特別な物置。

トキ自身もこの部屋に何が置かれているのか、完全には理解して

いない。
ただ、ここには客を喜ばすための飲食物や玩具、困った人のための衣服などが大量に放置されていた。
もしかすれば、この部屋には女性用の衣服があるかもしれない。

ハンガーラックを漁り、
箪笥を漁り、
ダンボール箱を漁った、
その結果、トキが入手した服は白い簡素な寝巻き。

言われた通りなるだけ急いで浴場に戻る。

「藍、服は洗濯機の上に置いとくよ？」

扉越しに返ってくるアリガトウの返事。
しばらく無言が続いた後、トキは質問した。
話したいこととは何か。

「……」

「藍？」

一瞬、寝てしまったのかと考えたものの、常識的に考えてそれは無いだろうという結論に至るトキ。
扉越しに彼女が僅かでも動いているのがわかった。

（そういや、一緒に入ろうとか言ってたっけ？）

「トキも入ってきて」

「……わかった」

思い出し、同時に言われ、トキは脱衣を始めた。
上脱ぎ下を脱いだ瞬間にある男の言葉が頭に浮かんだ。

（待てよ。
エロティカはタオルを腰に巻くように言っていたな……）

そう確か、男女が湯を共にするときはタオルを忘れずに。
いつの事だったか曖昧な記憶だが、確かに言われた覚えはある。

辺りを見回してタオルを探し、適当に置いてあった大き目のフェイスタオルを腰に巻く。

「入るぞ～？」

無言。
トキは扉を開き、湯気漂う空間へと入っていった。

まず気になったこと、浴槽が湯で溢れそうになっていた。

焚いてすらいなかったのにだ。
浴槽の次に目に飛び込んだのは藍の後姿。
タオル一枚さえ羽織らずトキを待っていた。

「……背中」

「背中？」

唐突に言われ戸惑う。
目のやり場に困るとか言うが、トキの場合はリアクションに困った。
顔も向けずに言われるとちょっと怖い気もする。

「こすればいいの？」

無言で頷く藍の指示に従ってトキはタオルで洗う。
洗う直前に藍は軽くお湯をかぶっていた。

（髪長ぇ～……）

濡れた髪の重さに軽く驚く。
背中をこすりながらトキは藍の体を知った。
鬼のＳＲだろうが、体格は一般人のそれと変わらない。一般的な女子高生と大差ないであろう体格だ。

久々に誰かと風呂に入る。
そのことを思い改め、少なからず新鮮味を味わった。
長い髪をまとめ、藍はそれを前方へと持って行く。

どれだけ常識ハズレな戦闘力を持とうが、結局彼女も生き物であって、いつかは死んでしまう。
そう考えると――非常識なのは、人の死を無意味にも拒み続ける自分。誰にも死んで欲しくないと願う自分――ＳＲの力があろうと、『死』という平等な結末は変わらない。ただ、あえて言うならそこに辿り着くまでの過程が違うだけ。

「なぁ、藍、どっか痒いところとかあるか？」

無言。
ただし、首は横に振られた。
それでもトキは洗い続けることを選んだ。

「……」

「……」

しかし、静寂がいつまでも続くわけではない。
藍の背中のあらかたを洗い終え、トキはその旨を伝える。

「藍――」

やはり藍は無言。
しかし、明らかな異変には気付いた。

「なぁ」

服を脱いだ状態の彼女を見ることは今後一切無いだろう。
だが、そんなことはどうでもいい。

トキは藍の体よりも、彼女の頬を伝う一粒の涙に目が向いた。

「……泡飛んだりとかした？」

無反応。
しかし、藍はトキの言葉を聞き流しているわけではなかった。

逆に一つ一つを噛みしめるように、丁寧に聞き入れていた。

「なぁ――？」

「――実誕幻」

それは意外な反応だった。
心配して藍の顔を覗き込むトキを狙い、

「二段‥」

限界だった。
なぜ、トキが存在するのか。
誰にとっても特別な人はいる。

「蓮華（れんげ）」

浴槽の湯が踊り狂い、トキの顔面を捉えた。
ただし、ダメージを与えるわけではない。

「おっ……！？」

突然の出来事にトキは尻餅をついた。
そこへ藍は乗りかかり――両手――トキの顔に触れて、濡れた髪を丁寧に掻き上げる。

一瞬、トキのクロノセプターは発動しかけた。
ほんの僅か、藍から零れた殺意に反応したのだ。

――自分の手が今どこにある？

それを考えた瞬間、自分が恐ろしいことをしていたことに気付く。
クロノセプターがまともに発動していれば、藍もトウコツと同じようになっていた。

トキは藍の両手首を握り、押し返そうとする。
が、逆に押さえられた。

「どうしてアナタは……」

背中が冷たい。

それは、こぼれたお湯の所為か、藍の気迫か定かではない。
両腕を押さえられた状態で2人は向かい合った。

藍の長い髪が触れる。

「どうして……そんな」

「……なぁ、オレが悪いのか？」

彼女の泣き顔だけは見たくなかった。

オレの理想が君なんだ。

お願いだ、泣かないでくれ。
いつもの強い藍に戻って――……

「何で……アサ兄様と――……」

「アサ？」

そして、彼女はトキの上で啜り泣き始めた。
彼女の親族のことまでまともに考えたことがない。　その現実に直面したのはこれが2度目である。

濡れた顔の水滴が乾ききった頃、彼女はすっかり泣き止んでいた。

結局、2人は揃って軽い湯冷め状態に。
夏場でも今日の夕方はやたらと冷えた。

いまは2人して背中合わせで浴槽に浸かっていた。

「4人兄弟だったんだ」

「私は3番目だったの」

「その1番上がアサって人か」

「ええ……」

体を温め始めて2分。
藍は初めて、自分の過去をトキに教えた。

「最後に見たのが私だった」

「……殺されたんだって？」

「そうよ……
ソイツは協会を抜け、おそらく今ナイトメアにいる」

「ソイツって、藍のお兄さんの敵……だよな？」

「そして、トウコツはみんなの敵」

哭き鬼の一族の悲劇は藍の兄の暗殺事件から始まった。
人狼の一族に対する疑惑。
相手は潔白を主張し、その確認のため5人の鬼が派遣。
しかし、視察に行った哭き鬼5人全員が行方不明。
それでも人狼族は無実を主張し続けた。

「もう1度チャンスを与えるということで再び視察のメンバーを編成したわ……」

その中に藍は志願していった。
身内を討たれたからといって、落ち込んでなんかいられない。
北日本の山間にある小さな村。
藍が訪れた時、人狼の村は静寂と疑心に満ち溢れていた。

「そこで芹真さんと知り合ったの？」

「いいえ」

芹真が事務所を開いてから聞いた話だが……
はじめの哭き鬼視察団の行方不明と同時、芹真とその仲間達によるグループ『ＣＵＭｏ』のメンバー１人が死体となって発見され。
彼は葬式の列で雨雲のごとく、涙を落とし悲しみに沈んだ。

だからこの時、藍と芹真は出会わなかった。

葬式後を藍も目撃し、哀しみとはいつか必ずやってくるものだと思い改めた。
同時に藍は、人狼の無実が本当であって欲しいと思い始めていた。

これ以上、誰かが死ぬことは悪戯に悲しみを作るだけなのではないか？

しかし、そんな願いも虚しく武力衝突は起こった。

「……」

「本当はね、トキのことを知った時、アサ兄様が生きていたんだと思ったわ」

「改めて聞くけど、そんなに似ているのか？」

「ええ。
体の造り、顔立ち、全体的輪郭、髪型、身長はトキの方が低いけど、声も大体似ている……
違うところといったら、話し方と目の色くらいよ」

「そんなに似ているんだ。
世の中には似た人が3人は居るっていうけど……」

「世の中が狭いとでも言いたい？」

言いたい。
浴槽から出て体を洗う。

「なぁ、明日の朝飯は何がいい？」

「その前に、今度は私が背中洗ってあげるわ」

「別にいいよ。
ゆっくり暖まっていろよ」

「いいから」

半ば無理やり。
しかし、藍に洗ってもらい、よりしっかりと汚れが落ちていく気がした。……ちょっと痛いけど。

「ところで、トキのお父さんの名前は何ていうの？」

いきなりな質問に、トキは鸚鵡返しで答えてしまう。
すると藍は理由をつけてもう1度言った。

「トキのお父さんの名前よ
少し気になることがあって色々調べてみたんだけど……」

「何かあったのか？」

「……慌てないでよ？」

「慌てはしないが……何で？」

「じゃあ、聞くわ。
トキのお父さんの名前は“シキヨ　キョウ”でいいのかしら？」

「ああ。
境ってかいて、色世境（しきよきょう）だ」

そして次の質問。
今度は父の現在地に関するものだった。

「今はカリフォルニアの刑務所に居るはずだけど……」

「当たりか……」

「は？」

背中を洗う藍の手が止まり、とある事実を告げた。

「彼にもＳＲが発現しているのが、最近わかったそうよ」

「え……！？」

「ナイトメアに誘拐されそうになった時、自力で檻（おり）の中まで逃げ戻ったらしいの」

「ナイトメアって何で！？」

振り返り、面と向かって2人は話した。

面会と称して現れたナイトメアのＳＲ。

ゴーストのＳＲ。

事実上の刑事でありながら、ナイトメアのメンバーだったのだ。

目の前まで来た色世境の精神を奪おうとしたが、直前で感付かれて逃げられた。

のち、ゴーストのＳＲは特別査察官のＳＲによって消滅。
相手と場所が悪かった。

「特別査察官は協会のヒーローズの１人。
トキのお父さんがいる刑務所は協会の所有物なの。
だから、一般にこの情報が漏れることは無いの。
逆に、彼のＳＲが誰にも悟られなかったのはそのお陰もあるわ」

「一体、何のＳＲなんだ？」

「そこまではわかっていない。
というより、彼女はそのＳＲが何なのかを書類には書かず、直接口頭で報告したらしいから、その情報は公開されていていないと言った方が正確」

「それは何日前の話だ？
父さんは無事か！？」

「無事よ。
安心していいわ」

湯気が視界を覆う。
蒸し暑さを忘れるほど、トキはその話に食いついていた。

「いま、協会のヒーローズが総力を挙げてナイトメアの討伐に乗り出したの」

「ヒーローズ……」

奈倉さんも言っていた、協会とナイトメアの戦争。
ナイトメア。
協会のヒーローズ。
わかり易そうで中々イメージの掴めない名前。
ただ、並みの集団でないということは直感で理解できた。

「その中の1人、リーダー格の英雄がナイトメアに勧誘される可能性があるSRに、直に接触しているそうよ」

「父さんもその1人だった……」

「そう。
どうしてか彼女にはトキのお父さんは目を付けられていたってことになる。
いままでSRだなんてわかっていなかったのに……」

それとは別に、協会よりもナイトメアの方がSRの探知力に優れていることが判明した。
自分達所有の刑務所にいながら誰もその力に気付けなかった協会に対し、何の接点も持たないナイトメアが先に彼の能力を見出したことがいい証拠だ。

「この街にもヒーローズは来ている。

だから、私達は攻勢に出るわ」

「オレ達から向かっていくのか？」

「トキはまだ早いわ。私は一緒に戦いたいけど……」

何も言い返すことが出来ず、トキは沈黙を続けた。

何故、ＳＲという力があって――

何のため、

誰のため、

何を求めて――戦う者達がいるのか？

『強くなって、何になる……』

トキは一つ思い出した。

乱痴気騒ぎ、馬鹿騒ぎを毎日続け――

飽きず、懲りずに――

教室で決闘のようなことを続ける――

そんなクラスメイトに対して呟いた言葉。

呟いたつもりが、とあるクラスメイトに聞かれていた言葉。

喧嘩が強いからって、世の中を渡って行けるわけじゃない。
頭が良いからって、必ず職にありつけるとは限らない。
学校に来たからといって、絶対頭が良くなるわけではない。

それが逃げ言葉だと気付いたのは、どれくらい後のことだろう？

だから、彼は怒りを覚えた。
逃げ言葉を吐くだけ吐いて試そうとしない、自分に。

だから、自分は負けたのだ。

『戦いを理解できていない奴が……』

そう。
自分は、戦うということがどういうことなのか、理解していなかった。

喧嘩も、
知力も、

それは戦い方ではなく、ただの『スタイル』だ。
そのスタイルをもって人生とどう向き合うのか。

それが『戦い』

最大の敵は己である。

誰がそう言ったのか思い出せない。

ただ、トキが眠りに落ちる直前――何となく、直感的に戦うことの必要性を自分のこれからの生活に見出した。

弱いから強くなれる。

違う。

強いとか弱いじゃない。

肝心なのは、いつまで向き合っていられるか。

人生に落胆しない。

希望を捨てない。

夢を追い続ける。

必要なのは、挫けない心。

折れない精神。

不屈の魂。

――ただ、自分がそこまで貪欲になれるか……

心配はある。

だから、この世には大義と名分があるのだ。

自分ひとりでは虚しく、儚く、簡単に諦めてしまうような夢も、何らかの理由さえあれば少しは長く続く。

希望を捨てないための糧。

きっかけ。

燃料。

自分の場合は、協会に母さんの真実を問うこと。

なぜトウコツは、好き勝手にやっているのか。

ナイトメアが自分を戦力として欲するなら、抗う。彼らの仲間にはならない。

芹真さんやボルト、藍。

オレは、みんなと一緒に戦う。

「おやすみ、藍」

「おやすみなさい。
ア……トキ」

今間違えたろ？

無言で頷きながら2人は床に着いたのだった。

数時間前。

トキと藍が風呂に入っている、その外で――

『オオオオオッ！』

カメラより送られてくる映像に彼らは必死に声を殺していた。

「どうだ？
私の眼に間違いは無かっただろう？」

その中心にエロティカが居た。
エロティカを囲むのは性欲仲間。
すでに高校を終えた先輩や、中卒のＡＶ男優見習い。その中には女性の若手ＡＶ女優も混じっている。

それは本来、トキを驚かすためのメンバーだった。
逆夜這いでトキを驚かせ、ついで、素人と若手女優の絡みをカメラに収めようというサプライズ企画だったのだ。

が、またしてもエロティカの方が驚かされてしまった。

何故か、藍が居る。
そして、どうしてか一緒に入浴しているという。

「おい、水ぶっかけたみたいだぞ！」
「見逃した～！」
「お前のせいだ！」
「やるか？
やるか！？」
「生の逆レ○プ初めてみるぜ！」
「って、あれ！？

何か泣いてない、コレ？」

映像をのぞく面々から音声を求める声が上がったが、生憎機材と時間が足りなかった為、映像のみで我慢していただくしかない。

ちなみに、カメラを仕掛けたのは日中。
リビングにはトキが朝食を作ってくれている間。
トキの部屋にはＤＶＤを回収しに玄関まで降りていった時。
トイレにはもちろんトイレに行くと称して部屋を出た時。そのついで、風呂場にも設置。
なるべく怪しまれないように、そしてバレないよう、スピーディ且つパーフェクトに。

「にしても、いい体してんなぁ～」

「ああ。
初めて女子高生とやりて～、と思ったぜ」

「トキ君って、本当に性に関して興味薄いんだね」

エロティカは頷く。
確かに橙空藍はいい体をしている。
エロティカ自身もプロデュースではなく、実際に体を交えてみたいと思ったことが多々ある。
しかし、それ以上にトキのことが心配でもあったのだ。

映像を見て皆も理解・納得していた。

トキは藍が全裸であろうが、密着していようが関係ない。
男子として当然の反応も見せなければ、自然と目のやり場に困る事だって無く、赤面さえしない。

「こいつに性の楽しみを教えるってのは至難だな……」

「いや、いずれ私が一般人ほどの性に関する興味を持つまでにしてやるつもりだ」

「できんのか翼？」

「いや、翼ならできるかもな……」

「私も協力しよっか？」

「必要になったら声をかけてくれよ。
絶対気になるような女を紹介できる自信がある」

「先輩人脈広いですからね」

「おっ！
風呂に入った！」

「浴槽でやるのか！？」

妙に興奮するエロティカとドロドロな仲間達。
残念ながら画面の２人が皆の期待に沿う行動を取ることは無かった。

背中を流す立場が逆になったり、
トキがいきなり驚いたりはしたものの、
それ以外のラッキー映像が映ることは無かった。

しかし、その終わり間際、画面を除く唯一の女性が気付いた。

「ねぇ、この娘の方もトキ君と同じじゃない？」

一同に衝撃が走る。
2人はちょうど風呂から上がったとこなので、撮影――じゃなくて盗撮――会は終了。
彼女の一言を確かめるため、エロ集団は録画した映像の検討会に移った。

こうしてまた、何事も無かったような、やっぱり色々あったような1日が終わった。

第19話－Ｐｉａｃｅ　ａｎｄ　Ｆｒｉｅｎｄ’ｓ－（後書き）

「うん」

全員がうなずく。

「彼女もトキと同じだ」

第２０話－世界の一部が反転した時－（前書き）

もう1度言おう。

事故とは、予測できないから事故である。

だが、予兆はある。

しかし、見逃しやすい。

そして今回、トキは予兆に触れることができなかった。
予兆を見つけたＳＲも何人かいた。

トキが予兆を見逃した理由は、ただ単に寝ていたからである。

第２０話－世界の一部が反転した時－

それは、この世界の証明。

前に誰かが話していた、この世界の特殊性。

『あらゆる可能性にリンクして、様々な未来が常に覗ける立場にある』

それは可能性。
それは選択肢。
選ばれた未来、選ばれなかった未来。
見える範囲で選んだ世界。
見えない場所で選ばれた世界。

多くの顔を持ち、且つどんな未来へでもいける世界。

「だから、この世界は異世界へジャンプしやすい特性を持っているんだよ～！
またその逆も然りでさ～！」

芹真事務所と知り合って４日目の夜。
光の魔女はトキにそう教えた。
だが、トキの頭は混乱し続けていたため、その内容をゴマ粒程も覚えていない。

起床から1日が始まることは人間皆共通する。

ただ、その起床の時間に少し違いがある。

一般的に、1日の始まりは朝からである。中には昼から始まるという人もいるし、夜から活動を開始する人だっていなくはない。

だが、常識的で一般的な高校生の1日の始まりは、やはり朝である。

そしてトキも、SR（セカンドリアル）の力を抜いて言えば、一般的な高校生の1人である。

1日の始まりは朝から。

今日は実践術部の集まりがある。

学校が始まるのは明後日だが、その前準備ということで……出ておけば得するらしいので、強制参加ではないが参加しようとトキは心に決めていた。

連絡を受けたのは朝の3時。

メールが一挙、7通も届き、その内容全てが実践術部への参加に関するものだった。

担任の登竜寺　蓮雅先生から2通。

単位がやばいから、少しでも役立つ技術を身につけたほうがいいという内容と、脅迫と取れなくもないような手痛い現実通知。

それから同じ実践術部のコウボウ、崎島さん、エロティカ。
さらに、クラスの居眠り魔：樋口四式（ヒグチ ヨシキ）、反則魔：隅田幸平（スダ コウヘイ）

前半の3人からは一緒に出ようという誘い。
後半2人はサボるからヨロシクと。人を何だと思っているのだか……

朝早くからメールを確認して再び夢の中へ。
そして現在起床。

ＡＭ０７：０５

「……――」

目を覚ましてすぐ、視界に飛び込んだものは見慣れたはずの自分の部屋の天井。

上半身を起こして軽く頬を掻く。
疲労はなし。
体調だけ言うなら快調な出だしの朝。

ただ……

「……ん？」

再びトキは周囲を見回す。

見慣れた自分の部屋。
いつも通りの部屋模様。
だが、何か違って見えた。

「あれ――？」

気のせいかと頭を振って伸びをする。
小気味よい関節の軋む音が体中から響く。

よく見れば、いつもと何ら変わらない光景。
机の位置も、タンスの模様も、ベッドの向き、窓、カーテン、本棚……ｅｔｃ
何一つ変わっているわけでなく、見慣れたいつも通りの姿を見せていた。

ベッドから降り――微か過ぎる違和感に気付かない――ドアへと歩き出す。

明確な違和感に見舞われたのは、ドアノブを捻り、外の廊下に１歩踏み出した瞬間だった。

「――うん？」

２度目の違和感。

しかし、ベッドの上より明確に何かが違っていると感じたが、やはり何が違うのか分からない。

トキはその場で再び周囲を見回した。

見慣れた廊下。
階段。
手すり。

1歩ずつ、慎重に階段を降りていく。

照明器具。
壁。
天井。
壁に掛けられた小さな絵。
廊下や階段。

1階に下りて更に違和感は膨れ上がっていた。

何か違うわけでもない。
が、確実におかしい。

何に対してそう感じているのか全く分からない。

（……なに？）

軽く頭を掻く。
困ったことに原因が分からず、そして違和感は更に増した。

自分が何に対して違和感を感じているのか。
それを知る術の前に、何に対して違和感を感じているのかすら分からない時点で対処法が思いつくわけない。
途方に暮れるとはこのことか、と頭の隅で考えつつ……

（とりあえず顔でも洗ってこよう……）

寝惚けた頭では違和感の正体に辿り着ける気がしない。
トキは洗顔タオルの補充がてら洗面所に向かった。

そこでトキは、違和感の正体に気付いた。

なぜ、見慣れたはずの部屋に違和感を感じるのか？
なぜ、変わり映えの無い光景がいつもと違って見えるのか？

洗面所で初めて気付いた。

「はれ？」

最初は混乱した。
混乱を覚ますために急いで顔を洗い、もう1度確認する。

鏡に映る自分の顔。

が、何故か見たこともない変形を遂げていた。

「え？
オレ？」

彼は幸運だったのかもしれない。
大抵の者はその異変に気付かず『いつもと変わらない』と、異常が起きている真っ只中を何の疑問も抱かず普段どおり過ごす。

その異変には気付かない、気付けない。
時には性格にまで影響を及ぼす場合もある。

どんな者だろうとこの異変から逃れることは出来なかった。
それはＳＲであろうと例外ではない。
全世界でわずか数人は異変の前兆に気付いたが、抗うことが出来なかった。

ＳＲ協会会長も。
ナイトメアのリーダー達も。
クリーニング店店長のヴィラ・ホート・ディマも。

皆例外なくその異変に飲み込まれていた。

しかし、トキはその中で特殊な存在だった。
異変に飲み込まれていながら、変化前の記憶と意識をしっかり保持している。

自分は、元が何だったのか。

大抵はそれをも忘れてしまう。
それも含めて異変なのだ。

よって。
この異変でトキは男から――

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

―第２０話―

―世界の一部が反転した時―

女になっていたことにトキは驚き、困惑し、それでも何とか冷静を取り戻すことが出来た。

最初に頭に考えたことは、

（え？
何だコレ？
コレもナイトメアの仕業……！？）

すぐにナイトメアの仕業かどうかという真偽を確かめようとした、その前に、不法侵入――というか不法親友が……

「トキぃ～
いる～？」

いつの間にか上がりこんでいた――こ、コウボウなのか、コイツは？――友人の姿が鏡の隅に映る。
直感が彼だと告げるものの、どうにも信じがたい。
何せ、直感は男のコウボウを知らせるのに、目に飛び込んだその容姿は完膚なきまで女性なのである。
強いて言うなら、肌の色がコウボウのそれであったから。

「え、ああ、ココに！
寝惚けてない！」

聞き慣れない自分の声。

頭で再生しろと命令した言葉。
今までの自分の声と、現在のそうでない声。
声まで女性のモノになっていた。

その差に驚き、また戸惑……

慌てて玄関に向かい、更に驚いた。

「朝早くから悪いな」

玄関にたたずむ3つの影。
最初に声をかけてきたのは、崎島さん。

ただし、“男”ヴァ～ジョン！
やべ、かっこいい……

「上がっていいかな？
って、私はもうあがってるけど」

再びコウボウ（♀）。
褐色の女子高生め……

「ああ、上がれ」

「トキコちゃんは男っぽい……」

それまで静かにしていた――たぶん、エロティカ――が口を開いた。
あの存在がセクハラ的な奴が、随分大人しくなったもんだ……って、
いま、何て呼んだ？
「お邪魔するぞ、トキコ」
崎島君に言われて判明。
最悪の事態発生。
性別判定に伴って、名前も少し変わっている。
オレの名前、どうやら『色世時子（シキヨ トキコ）』になったらしい。
とにかく学校指定のジャージに着替えを済ませ、部屋を出ようとする。
それと同時、寝ていた藍が起床した。
もちろん彼女も、彼へと変わっていて……

「やぁ、トキ、おはよう」

こちらは幾分マシ。

名前を略称してくれるだけ耳当たりが良く、とても馴染みがあって反応しやすい。

体格は大きさを増し、髪は短くなって、しかし、顔形は殆ど変っていない。

男性になって尚独特の優雅さというか、華やかさを失っていない。

「お、オハヨウ……」

軽い戸惑いから返事がギコちなくなってしまう。

性別が反転したことよりも、藍が何事も無く挨拶してきたことに驚いた。

つまり、この異変に――ナイトメアや協会など――藍に殺意を沸かせるような、人為的な事が起こっているわけではないということがハッキリした。

「どうした？」

「いや、どうもしないけど……」

混乱したまま有無を言わずに1日が始まった。

場所は変わって色世家、リビング。

トキコと藍（らん）、現エロティカ：村崎羽音（ムラサキ　ハネ）の3人は朝食に勤しんだ。

残りの2人は新聞とテレビに注目。

その間、トキは必死に会話に耳を傾け、全員の名前情報を獲得した。

まず崎島さん。

彼女は、彼になってから――崎島恵維理（サキシマ　エイリ）、と変化していた。

ただ、『イ』が入っただけなんだけど……

体格はあまり変わらないが、目付きが女性の時よりも鋭くなって怖さアップ。

知力の高さも、『スズメバチ』のあだ名もそのまま。

次に元コウボウ。

本名は北島香霞（キタジマ　コウカ）に変わっていた彼女。

ただし、中立派のリーダー的存在という点は変わらず。

明るく豪快な性格も変わらず。

見事な姉御系キャラのフラグを獲得していたわけだ。

5人の中で最も大きな変化を見せていたのが、元エロティカ。

今の名を、村崎羽音（ムラサキ　ハネ）という。

24時間スケベはすっかり大人しく、また淑やかになり、コンポジションC4の如き爆発力を秘めたテンションはドコへ消えたのか

不思議に思えるほどの淑女に変わっていた。

しかし、名前だけの変化なら藍が一番の変化を見せていた。
陸橙谷藍（リクトウヤ　ラン）。
苗字そのものが変わっている。
何故なのかは後で聞いてみよう。

そして、オレもそこそこ変化していた。

「片付けたら行こ」

男性から女性へ。
男性の時あるものが無くなり、男性の時なかったものが有る。

寝起きの違和感の正体はそれだった。
女性になったことで、感覚がまだハッキリと覚醒していない状態で違和感を感じ、それが周囲の変化だと勘違い。
わかってみれば、あっけない原因だが……
現実的に考えてみれば、かなり深刻な問題であった。

（って、ことは……
女っぽい話し方しないと変に思われるのか？）

「早くしてよ～
トキコちゃ～ん」

急かすコウボウ――じゃなくて、コウカを無視し、急いで食器を棚の中に収めていく。

トキの頭の中では学校に行く前に芹真事務所に寄るルートが浮かんでいた。

どうしてこうなっているのか芹真さんに聞いてみよう。

なぜ、いきなり性別が反転したのか？

高速で食器片付け終了。

なるだけ平静を装って全員を玄関まで誘導する。

全員が外に出た頃合を見計らってトキは寄り道の旨を伝えた。

コウカは反対で、

崎島さんと藍は遅刻の心配をし、

エロティカ静観モード。

「先に行ってて！」

その一言で全員が何とか納得。

性反転してからというもの、歩くだけでも違和感が湧いて止まない。

体の勝手の違いから疲労が激しい。　主に精神的疲労だが。

サブバッグ片手に小走りで移動すること約２０分。

芹真事務所の小さな看板が目に飛び込んだ。

ふと、階段の途中で足が止まる。

（藍が男になっていたってことは……
それに、協会でもナイトメアの仕業でもないとすると――）

悪い予感は最悪の現実へと変わった。
予感というよりは、確信に近かったが、いざ実現してみれば泣きたくなる。

「おはよう、トキコちゃん♪」

ＴＨＥ　寒気。
つい、優雅に紅茶を注ぐ芹真さん（♀）の姿に唖然としてしまう。
あんたコーヒー派だろ……って、どうでもいいツッコミは無しにして……

「オ、オハヨウゴザイマス……
あの、芹真さん……」

「そうだ、ジャスミンティーが手に入ったんだけど、飲む？」

唖然のち、引き。
正直に言うと、気味悪い以外に言葉が見つからない。

「何で引くのよ？」

目を細めてこっちを睨む芹真さん。

強気な物腰は変わっていないが……

短髪の髪はロングの茶髪へ変わり、たくましい肉体と強気な目付きは、柔和――まるで喫茶にでもいそうなメイドのよう――で優しさをもってして相手を包んで離さんばかりの柔らかいモノになっていた。

いつも着ているワイシャツは変わってないが、その胸元はあからさまにいつもと違う。

デカイ……

その胸が自然の発育によるものなのか疑ってしまう。

じゃなくて、用件は……

「あの、芹真さん……」

「もしかして、ジャスミンティー嫌いだった？」

やや落ち込み気味の口調で言う芹真さん（♀）。

うわっ～

こんな大人現実に居ねぇ～

（って、コレも現実か！？）

女体化した芹真さんを目の前に、夢だと思い込みたいトキがいる。
気を取り直して芹真へ質問。
これは一刻を争う事態なのかもしれない。

「それどころじゃないですよ芹真さん！
これは一体どういうことでしょう！？」

「何が？」

「何がって……この状況ですよ！」

「やっぱり飲む？」

「お茶から離れてください……
え～っと、オレ女性になっちゃってるんですけど？」

「……ねぇ、トキちゃん。
もしかして寝惚けてる？」

「目ならスッカリ覚めてます。
芹真さんは何とも無いんですか？」

「何が？
今日のトキちゃん少し変ね。
いつも通りの光景が違って見えちゃっているわけ？
変な電波受信しちゃったの？」

全く違って見えます。ていうかどんな電波だ。
何の前触れもなく起きてみたら性別が逆転しちゃってるし。
むしろ、この異常な事態に気付かない方こそ変でしょ。

「トキ見っけ～！」

ボルト出現。
そして気付けば強制連行されていた。

これぞ奇襲。
これぞ急襲。
それは予測不可能で抵抗不能な強制連行。

突如現れたボルトによって、トキは芹真事務所の外へと連れ出され、半ば強制的に引きずられるトキは階段で鞭打ちの洗礼を受けた。
ボルトがどこから現れたのか見当がつかず――
安心していいのかどうかわからないが、

「ボル……っ！
――って、あれ！？」

気のせいかと最初は思った。
だが、どう頑張っても目の前の現実は幻になってくれない。
というか幻でも何でもなく、ボルトはいつものボルトのままだった。

全くいつも通りの姿である。

「どうしようトキ！
みんな変になっちゃった！」

「え！
ボルトは気づいて……！？」

「ちょっと調べてみたんだけど、この世界で今この異常事態に気付いているの私達だけだよ～！」

「はぁっ！？」

「原因は、たぶんわかっているから、それを探さなきゃ！」

ボルトに引かれるがまま、街中から住宅街へと抜けていく。
もちろん、学校からは遠ざかる一方である。

「ちょ、ボ……原因って何！？
協会とかナイトメアとかじゃないのか！？」

息を切らせた2人は足を止める。
呼吸を整えてからボルトは話す準備を、トキは聞く準備を整えた。

「トキは、結構前にこの世界の次元レベルの話をしたのを覚えてい

る？」

「……」

「覚えてないんだ。バカなんだね」

「まぁ……」

そんな動揺に次ぐ動揺で混乱気味になっているトキにボルトは説明を始める。

初めての説明じゃないが、しっかりと頭に入れておいて損はない話。

もしかすれば、一生のうちにもう1度遭遇する場合だって考えられる。

「この世界は他の世界とは少しだけ違うんだ」

「この世界？」

「どう違うかって言うと、あっちからこの世界にも来やすいし、逆にこっちの世界から様々な可能性の過去とか未来に跳びやすいんだ」

「あっちの世界って、それ……天国ってこと？」

「ち～が～う！

トキ、昨日ナインちゃんの話しているの覚えてる？

訓練してもらうって話」

「あぁ、それは覚えているけど……」

「ナインちゃんたちも同じようにして来る予定なの！」

「――……なぁ、確か、ナインって人は異世界の人だよな？」

「うん、そう！

それで、この異変も異世界の人たちの中途半端な干渉のせいなんだ！」

「ちょっと待て！

話が……なんかスケールっていうか何ていうか、突拍子過ぎて頭追いつかないんだけど？」

「だから、この世界の人じゃない人がこの世界に入ってきたからみんな変になっちゃったの！」

「それって……異世界人ってやつか？」

「もう、その解釈でいいから！

とにかく、その人たちがココに干渉して、こんなことになってるの！」

異世界干渉。

ボルトの最も言いたいことがそれである。

別世界と別世界の部分的交わりは、一方または双方に何らかの影響を及ぼす危険性があるのだ。

異なる世界同士でも、共通する事項が多ければ影響は起こらない。

例えば文化。
例えば歴史。
例えば生態系。
排他されたモノや存続しているモノ。
流行や軍事バランス、国と国との関係。
映画や音楽、技術や主食。娯楽や職業など。

しかし、共通するモノが少なければ……或いは皆無であれば、高確率または絶対の確率でどちらかの世界に影響を与えてしまう。
今回がそれだ。
異世界から何者かが干渉。
その結果、こちらの世界で性別が反転してしまったのだ。

「ということは、異世界からの干渉が無くなればみんな元に戻るって事？」

「よく出来ました！
そういうこと！」

「じゃあ、原因が――」

ガヂンッ！

「リュウエが穴開けたから……」

その瞬間、気付けばトキはすくんでいた。
タイムリーダーの異常なまでの警告音。

ボルトはその声の主と向き合う。
気付けばそこに居て、気付けばこちらを見ていた少女。

「あなたも別世界から来たの？」

しかし、ボルトの問いに対する答えはなく、トキが目を向けた瞬間、その娘は姿を消していた。
本当に一瞬。
おそらく、ＳＲ。
ボルトでさえ驚愕に顔を彩られ、慌てて周囲に彼女の姿を探した。

「トキ、大丈夫！？」

「まぁ。
それより、いまの娘……」

「……どうしてトキの中の警鐘が大きく鳴ったかわかる？」

その声には焦りとも憎悪とも取れる何かが含まれていた。
突然機嫌を損ねたボルトに疑問を抱きつつトキは首を横に振る。

「彼女も、トキと同じタイムリーダーだよ」

「タイム……そんな！」

「でも、彼女の方が全然上だよ」

「だから一瞬で」

納得する一方で恐怖を感じずにはいられなかった。
ボルトをも置いていってしまうほど早いタイムリーダー。

「早く彼女達の目的を確かめないと！」

「目的……え、『達』って！
1人じゃないってこと！？」

もし、干渉者の目的がこの世界だったら。
もし、協会のように世界の頂点に君臨するというものなら。

「急ごトキ！
芹真さんに話してみよ！」

あの銀髪紅眼の少女がたった一言、残した言葉。
“リュウエ”
“穴をあけた”
それがこの異変の原因。

おそらく人名。
そして行為。
ボルトはトキの両手を握り、そこに光を集めた。

「跳ぶよ！」

次の瞬間、２人は建物の屋上に来ていた。
ボルトはもちろん、トキもこの場所は知っている。

（……ここは、アヌビスと！）

協会の実行部隊と戦ったその場所。
初めて自分の力に気付けた所。

ボルトに言われ、追いかけるようにトキも階段を駆け下りていく。
その途中でボルトの足が止まる。

「おっと！」

「中に同じ世界を纏った人がいる……」

突然足を止めたボルトが再び走り出す。
階段を下りながらトキはその言葉を考えてみた。
同じ世界。

纏った人。
ボルトの眼に異世界の人間がどう映っているのかわからないが、言葉の意味・流れから察するに、先ほどの少女と同じような誰かが事務所に居ると解釈する。
扉をくぐると、芹真さんと彼女は居た。

「おかえり」

見知らぬ少女。
先ほどの少女とは違う黄色い瞳の娘。

彼女は芹真さんと何かを話していたようだった。
ボルトは先ほどまでの焦燥が嘘であったかのように平静を取り戻している。
その変貌ぶりにトキが戸惑った。

「ちょうどいい所に帰ってきたわね。　パル、トキ。お仕事よ」

「仕事って……」

「人探し～？」

すかさずボルトの読心術。
社長の芹真だろうが関係ない。無断で心を読むのがボルトだた。

「そっ、この娘の連れ」

「ねぇ、その人って魔法使い？」

ボルトの眼が芹真から依頼人の彼女に向く。

注目を浴びた少女は怯み、アイコンタクトで芹真に助け舟を求めた。

が、それより早く、ボルトの読心術が答えを掴む。

「ふ～ん？

神に近い存在なんだ～」

『神？』

芹真とトキの声が重なる。

その少女は必死に頷き、それからやっと声を出した。

「1人で歩き回っているというのが心配で……」

「ああ、紹介遅れたわね。

夕陽ちゃん。彼女たちは私の事務所で働く人たちよ。

金髪のがボルト。ジャージの方がトキコ」

「よろしくお願いします」

「人探しだね、まかせて～！」

「こちらこそよろしくお願いします」

気兼ねなく声をかけるボルトと、挨拶に挨拶を返して軽く頭を下げるトキ。

行儀正しいその依頼人の娘は、夕陽（ゆうひ）といい、この異変の原因となった人物を追ってこの世界に来たものの、右も左もわからず、ここを訪れたという。

目的の彼は結構気まぐれな性格の持ち主らしい。

「ご迷惑をかけているようなので、早くこの世界を去るように伝えたいのですけど……」

「それで探しているんだ」

「だから私とトキで探してくるのね～！」

「じゃあ、早速名前を教えてもらえないかな？」

トキが聞くと何故か距離を取られる。

俺なんかした？

思い当たる節も無いまま、これから探すべき人物の名前を耳にいれた。

「歌城華晴龍恵」

「……」

「……」

「……ん？」

スイマセン。

区切り方わからないんですけど……

珍しくボルトが誰かの言葉で首を捻っている。

「え、もう１度お願いできますか？」

トキは本当に区切り方で混乱しかけて――距離を保たれつつも――もう１度聞かせて欲しかった。

ボルトももう１度聞きたかった。

声に出さなくてもいい。ただ、その名前を心の中で呟くだけでも。

そうすれば後は勝手に読んでしまえる。

「苗字は、歌城華晴（カジョウカセイ）

名前は、龍恵（リュウエ）です」

それから身体的特徴。

着ている服は、黒の長袖に白のハーフパンツに黒い大きな帽子。

金髪で超長髪、ブルー系の瞳。

身長はボルトくらい。

「当たりだね」

「だな」

トキの男口調に芹真と夕陽が引いた。
外見と合わない。
そんな2人を他所に、トキとボルトの2人は納得していた。

「じゃあ、芹真さん行ってきます」

「見つけたら電話するから～！」

「手荒なことはしないようにね」

「お願いします……」

しかし、いざ探索を開始してみると問題は多々あった。

日中から学生が堂々と街中を歩いている姿を見られては呼び止められる事数多。また目線が痛い。
すぐさま新しいの問題が発生。

本日の天気は晴天なり。
加えて異常に夏休みの早い小学校が何校か存在するらしく、アウトドア派の子供達が帽子着用でそこら中を跋扈(ばっこ)していたりする。
そして、外人街から買い物目的で流れてきた外人達も今日に限ってやたらと多く、老若男女問わず、国籍問わず、探しにくい。

「何で今日に限ってこんなに人が多いんだ……」

場所は街の中心街。
ボルトの直感的センサーで大まかな方位を特定。
右往左往を繰り返すうちにこの中心街に絞れたのだが……
問題に問題が重なっていく。

「ねぇ、トキコさん。
その娘、この前学校に来てた娘だよな？」

事情あって学校への立ち入りが一部を除いて禁止されているウチの（白州唯高等）学校は臨時休業中。
その期間中に勉強に勤しむ者がいれば、遊びに全力を尽くす奴もいて、またバイトに精を出す者だっている。
そんな彼女……じゃなくて、彼は3つ目の該当者。

ボルトに最も興味を持った2年3組の出席番号2番。
この人もだいぶ名前が変わっていた。
元、五十嵐沙理奈(イガラシサリナ)
現、五十嵐早獏(イガラシサバク)

しかし、ボルトに対して興味津々なのは相変わらず。

「妹に欲しい……」

どうやら男バージョンだとロリコンに属するヤウダ……
付きまとう五十嵐さんを振り切ってどこか人気の無い場所を探す。
適当な裏路地に入り込むと、早速ボルトが探知開始。

「っていうか、ボルトにはわかるの？」

「うん。
光のある限り……」

「ある限り？」

「私は何も逃さない」

ボルトの両手が煌々と光を放つ。
日陰の裏路地を白闇に染め、ボルトは目標を探す。
目を瞑り、
ひとり静か、
光に問う。
この世界には無い光を纏いし者へ。

「見つけた」

光が消える。
だが、絶えない。
それがボルトの知っている光の強さだ。

「ここから5ｋｍ。
あっちの方」

「隣街か」

ボルトが指差したのは、パイロンの店と白州唯の間にある隣街。
近代的建造物と古参の建物が乱立するビジネス街。
裏路地を出て交差点で足を止める。
赤信号。
もうじき変わるが、待ち時間がもったいない。
轢かれるのを覚悟で渡って行きたい。

（でなきゃ、部活が……）

部活と言っていいのか甚だ疑問はあるが、とりあえず部活への出欠が心配だった。
なるべく遅刻は避けたい。
遅れた場合は罰ゲームがあるのだ。

カチン

「いま食事中……」

2人が同時に振り返った瞬間、再び彼女は居た。
短い銀髪に紅い眼。
思考を一切読み取れない無表情。
夏場に黒の長袖。

そして気付けば周囲の一切は停止していた。
点滅を止めた信号。
微動だにしない衆人。
大小さまざまな車両はまるで模型のよう。

「あ、消えた」

「動き出した」

彼女の視界消失と共に時間はその役目を取り戻した。
残した言葉はまたしても一言のみ。

「食事中らしいね」

信号の下を抜け、ボルトは空を見上げながら急ブレーキを掛ける。

反応の遅れたトキはボルトにぶつかり停止した。

「跳んで行こ！」

「は――？」

直後、急激な圧力がトキの手を掴み、裏路地へ引っ張った。
ボルトの指先が光っているところから、昨日の朝の散歩時に使ったあの力だと理解する。　全身粉々にされたくらいだし。

再び2人は裏路地に入り……

「ふざけんなっつうの！」

「も、かんっ――！
ゆ、許し……！」

襟首掴んで顔面、顔面、顔面、顔面。
そんなバイオレンスなことをするのはこれまたクラスメイトの――

「あ、トキ。
どうしたんだ、こんな危ない場所で？」

またしても直感が告げる。

コイツは、

「秋森……君こそ何しているの？」

「バイト先で嫌がらせにきた取立て屋を絞めてんだよ」

「バイト？」

「あ、言っとくけど、俺のじゃない」

そう言われて彼女――じゃなくて、彼の背後に目が行く。
申し訳なさそうにたたずむその赤髪長髪の少女。
彼女こそ、元・岩井信弥（イワイ シンヤ）だったりする。
クラス1、そして学校で1番腕の立つといわれていた男。　キリングマシーン岩井。

「なぁ、信音（しのん）」

「しのん……？」

名前の変わっているクラスメイトに戸惑うトキ。

――って、名前だけじゃない。
性格まで変わってる。
岩井と智明の性格が真逆だ。
性別変わっても仲が良いのは微笑ましいのだが……

「お、お疲れ」

とりあえず労いの言葉をかけてボルトと2人、その場を後にする。
ここでは知り合いがいるからボルトの魔法は使えない。
他の場所を『探ため』に走り出す。

「やっぱり、空気が違うな～」

突然こぼした言葉を聞きながらトキは走り続けた。
ボルトが何気なく放つ言葉は続く。

「きっとすごく強いよ。
もしかしたら私以上かも」

「……とにかくさ、まず見つけよう」

数百メートル移動したところで路地に入る。
人気無し。
大通りに光が漏れること無し。
ここなら、行ける。

「行くよトキ」

「ああ」

頷きながら先ほどの2人が気になって仕方ない。
凶暴化した智明。
逆に大人しくなった岩井。
カップルの立場逆転しただけでこんなにも新鮮だとは夢にも思わなかった。

思考の途中で視界が白闇に包まれていく。
暑さよりも暖かさが優先するボルトの光。
視界の全てが光に包まれた頃、周囲から響く音に変化が現れた。
車の騒音が小さくなり、代わりに落ち着いた音楽と軽いざわめきが耳に届く。

（ここって……カフェ？）

「カフェだよ。
地上4階にあるオープンカフェ」

勝手に読心術。
プライバシーなんてあったもんじゃない。
だが、たまに助かる。

「金髪に……」

視界からボルトの光が完全に消えるのと同時、自分の置かれている状況判断が始まる。
２人が光速移動で出現した所は自販機の影。ボルトの移動が眼に止まることなく、この場を踏めた。
早速トキの目が右から左へと移ってゆく。
誰にも見られていない。

「黒い大きな帽子」

あまり多くの人はいなかった。
時間帯のせいもあってか、いるのは子連れやちょっと暇な会社員、それから職探しに必死な方々。
その中に黒い帽子の子供は３人。
大きな黒い帽子を被った子供は１人。
付け加え、金髪の少年は１人。黒の大きい帽子を被っている。

（あれかな？）

「アレだね～！」

晴天の下、人の目も憚（はばか）らず走り出すボルト。
パラソルの元で１００％還元グレープジュースを飲み続ける少年。
と、
理由もわからず、殺気というには小さすぎる殺気を抱いて走ってくる少女。

炎暑の中、わき目も振らず攻撃を開始する少年。

それは、互いに顔を確かめ合うことさえなく始まってしまった。

可視の光と不可視の何か。

２つの力はぶつかり合い――……

衝撃が空間を飛ばし――

４人を除いた、他一切の客を、

消し飛ばした。

第２０話 ― 世界の一部が反転した時 ― （後書き）

動き続ける時間の中――

（ボルトが手荒なことしなくちゃいいけど……）

適わぬ願いを頭の片隅で考えつつ紅茶を淹れる芹真であった。

第２１話－Ｌｉｇｈｔｔａｃｋ－（前書き）

「サブタイトルの少し仕様が変わりました～Ｚｚｚ……」

「お客さん、昨日から寝てますよ！　そろそろソコどいてください！　掃除できませんけど！
っていうか、これから出前もあるんですからいい加減に退いて下さいよ！」

改装中の店の前。
パイロンは屋台で寝続ける迷惑客を起こすことに必死だった。

ワケのわからない寝言を言い放つ客を必死に起こそうとしたものの、結局惨敗だったという……――

第２１話－Ｌｉｇｈｔｔａｃｋ－

少し早い夏休みに入っている学校がある。
時間に余裕をもつ会社員達が居る。
人生の残りを気ままに過ごす老人もここを訪れる。

そんな、数こそ少ないが様々な人間の集まったカフェ。

地上数階の高さにあるオープンカフェで、４つの人影を除いて他の客は全て消えてしまった。
それは２人の共通意志による出来事。
関係の無い人間を巻き込まないという意志、信念。

ボルトの指に光が集い、灯り、一瞬後に放たれる。
黒い帽子の少年はそれに対応する。　光速で迫る魔法を躱し、左手を横薙に振った。
トキはその流麗かつ手馴れた反行に脅威を覚えた。
奇襲を仕掛けたボルトに感付き、躊躇わない反撃。
今の自分には到底出来ない行動である。それを、小学生ほどの身長しかない子供が易々とやってのけるという光景。
そして、躊躇無く仕掛けていくボルトには恐怖を抱いた。

テーブルが吹き飛び、自販機が熔解。
足場の表層は剥がれ、フェンスが歪む。

それが、たった２度の衝突によってもたらされた被害。

「すっご～い！

それ、どうやってるの～！？」

「……どうでもいいじゃん」

ボルトは足を止め、崩れた足元の破片を光で包み、銃弾の代用とした。

複数個の弾丸コンクリートを前に、やはり少年は落ち着いた対応を見せる。　かざした右手を目前に、弾丸は虚空で制止する。

次に少年の反撃。

ボルトが飛ばした破片を更に細かく砕いて撃ち返した。

「落下光跡～！」

対してボルトも易々と……

余裕を持って対処し、飛来する破片を完全に消す。

光に飲み込まれた破片が蒸発し、地面を黒く黒く焼いた。

空から降り注いだ光を見ても少年に動揺はない。

逆にトキはド肝を抜かれていた。

そんなトキの背後に彼女は立って二人の戦いを見ていた。

2度、路上でであったあの銀髪紅眼の少女。

「……同じくらいだ」

再び、２人の力がぶつかる。
パラソルやイスは倒れ、カウンターのショーケースが砕ける。
次々と周囲の物という物を乱暴に押し飛ばしてゆく。
そんな嵐のような根源である２人を、トキらは静かに見守った。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第２１話－

－Ｌｉｇｈｔｔａｃｋ／妙って言うレベルじゃない子供対戦！－

「落下光跡！
絨毯ヴァ～ジョン！」

「……うざい」

無数の細い光の乱射が地面を削っていった。
光撃の雨の中、少年は踊るように回避を続ける。
真上からの光も、斜め上からの光も、ボルト自身から放たれる光も、全て当たらない。
全て躱わしているわけではない。数本防御して直撃を避けていた。

それでも、ダメージが一切無いことに変わりは無い。
光の雨と言って過言でないボルトの光撃。
光の束を相手に落とすことによって、射殺あるいは消滅させる殺傷力抜群の魔法、落下光跡。しかも、光速で落ちてくるため、常人に回避することは不可能。

そんな光の雨を、少年と観戦者2人は必死に避けていた。

「ちょっ、ボ……！」

全てを言い切るより先に、タイムリーダーが自動的に発動していた。
まずは生き残る。
いまのボルトの眼に、トキは映っていない。
つまり、巻き添え必死の、完全予想外。
目の前の相手に固執し過ぎるボルトは、トキへの被害などこれっぽっちも考えていなかったのだ。

しかし――

（死ねるかっ！）

トキにはタイムリーダーがあった。

スローモーションで動く世界の中で、トキは空を見上げ、光撃の軌道を見切り、安全地帯へと向かって回避と移動を繰り返す。

注意すべきは上からの光撃ではなく、ボルトが放つ、横薙ぎの光撃。

1度首を刎ねられそうになりながらも何とか屋上の隅っこまで避難完了。

ココなら光撃は届かない――横薙ぎ以外なら――安全圏である。

「遅……」

光撃の範囲内から安全圏へと逃れてきたトキにかけられた第一声がそれだった。

銀髪紅眼の少女。

自分と同じ、タイムリーダー。

ただし……

「え？」

「……遅いんだね」

彼女はトキの遥か上を行く存在だった。
レベルが違う。
技量が違う。

何が違う？

何が違ってそんな差がでるのか。
どうすれば、他人に負けないのか。
一瞬の思考は途切れ、次に思い出したかのようにトキは思わず聞いた。

「オレ達がこんな風になったのはあんた達の所為なのか？」

ほぼ初対面。
それでもトキは聞いた。
初対面だろうがそうでなかろうが関係ない。それほど重大な現実が進んでいるのだ。
性別が転換してしまったこの世界。
それはトキが知る通常の世界ではない。

気付いていない者達にとって、それが当たり前の世界。
だが、トキとボルトはそれに気付いた。
誰もが疑問を抱かないのなら然程問題は無いだろう。何故ならそれは、現実に疑問を抱かない問い事。それはつまり通常で当たり前なのだから。
だからこそ、問題がある。
1人でもその異変に気付いた時点で問題があるのだ。

「……」

言葉では何も伝わらない。が、その動作で、トキの考えが正しいと判明した。
頷くよりも口答して欲しかったが、些細な違いだ。

「どうしてここに来た？」

「夕陽」

「……――え？」

大抵、物事には原因と結果、理由と道理が付きまとう。
核心にあるものが何なのか。
それが重要。

なのだが……
トキは我が耳を疑った。
ボルトは確かに言っていた。『同じ世界を纏っている』と。

話が繋がらない。
なぜ、依頼人の名前が突如として出てくるのか。
銀髪紅眼の少女が嘘をついているようには見えなかった。

「龍恵、探してる」

「リュウエって、あの子？」

２人の眼がボルトと戦う彼に向いた。

彼女は頷く。

彼が、歌城華晴龍恵（カジョウカセイ　リュウエ）である。

「探してるって、何――？」

同じ頃、２人の戦いに優劣の差が現れ始めた。

光撃を続けるボルトに、龍恵の反撃が決まる。

「あぅっ！」

鈍い衝撃。

震える大気。

見えない圧力がボルトの体を上空へと打ち上げた。

それでも光撃は続く。

が、当たらない。命中精度は格段に落ちていた。

空中であがくボルトを更に上空へと打ち上げる。

「トキぃ～！　頑張って生き残って～！」

「え！？」

「光黎一火（こうれいいっか）！」

ボルトの抵抗は続いた。
特大の光の束が上空から降り注ぐ。
もちろん、回避など間に合うはずがない。

衝撃と閃光。
振動と大気の逆流。

その一撃で、建物が崩壊を始める。

（生き残れって……無理！）

傾く足場、建物。
中央に大穴を穿たれ、四方に崩れていく建物。
そんな状況下でどうやって生き残れというのか。

必死に地面にへばりつくトキの真横で――大丈夫――彼女は言った。

一瞬浮かぶ疑問。
その直後、新たな異変が始まった。
疑問はすぐに頭の隅に追いやられ、感覚が通常状態に戻る。

重力による拘束が始まり、そこから様々な情報が交錯、トキは恐

怖に包まれた。
置かれた環境、周囲の危険なモノ。
落下スピード、落ちたらどうなるか。
死。
死にたくない。
終わる、コレまでの人生が……

そして、落下は始まり――
しかし同時、崩落が止まる。

「え？」

視覚よりも感覚の方が先にその異変に気付いた。
増加する重圧感、落下への予感。
自然の法則が、突如として“止まった／破られた”のである。

「止めた」

伏せ続けるトキに声がかかる。
顔をあげたトキの目に、何事もなかったかのように2人の戦いに目を戻す彼女が映った。

「止めた？」

上半身を起こし、その言葉の意味を知る。
崩壊が嘘のように止まっているのだ。

傾く足場から下の方に目を向けると、落下中の破片や下で逃げ戸惑う人々も完全に停止していた。
コンクリートも、ガラスも、金属も。
逃げる人、叫ぶ人、諦める人、伝える人……

無差別に……そう、全てが止まった。

「光万夢致（こうばんむち）ぃ～！」

やはり4人を除いて。

上空で絶叫マシーンの如く上下に振られるボルトは、さらなる乱射光撃に出た。
空中の様々な場所から、様々な角度、あらゆる方向へ浴びせられる無数の光線。

ガラスを溶かし、コンクリートを砕き、
車は燃え、ビルの一角を消し飛ばす。

体を切り裂き、また貫き、消滅を振り撒く、
見るも無残な破壊の雨あられ。

街の一角を削り、破壊していく光の乱射、そして連射。

観戦者2人は再び回避行動に移った。

落下光跡よりも数が多くて光の束、一つ一つが粗く太い。
故に避けにくい。
眼で直視することも難しかった。
そして、避けたところで床を破壊され、足場を失う。

「こっち……」

タイムリーダーで必死に足場を探す最中、彼女はトキと同じ時間の中に入ってきた。
同じ時間感覚。
通常に伝わる声がその証だった。
早くて聞き取れないわけでも、遅くて理解できないわけでもない。
ただ、通常の声。

（これが、この娘のタイムリーダー）

他人の時間に同調する力。
トキはその娘に導かれて隣のビルを目指した。

崩れた建物の残骸を足場に、少しずつ移動する。
幸いにも隣のビルまで5メートルほどの距離しかなかったため、苦もなく移動することが出来た。

完全停止した世界。
その中で、ボルトと龍恵は動き、トキと銀髪紅眼の少女は更に高

速で動いた。

2人の戦いは呆気ない終わりを迎える。

乱射光撃を続けるボルト。

光の魔女に龍恵は言った。

「人を巻き込まないって、そんな気あるの？」

同時、空中で逆さまになっているボルトの両手が白銀の光輝を放つ。

いままでにないほど明るい光。

眩しくて、強大。そして、最悪と言っていいほどの殺気……

「天光石火（てんこうせっか）ぁ！」

両腕を力の限り真横に開き、高速で内側へと振りぬく。

そんな彼女の動作を見て、龍恵はボルトを操作することを放棄し、防御姿勢を整えた。

直後――空中で爆炎の連鎖が始まる。

何の前触れもなしに爆発は起こった。

龍恵が爆炎に包まれ、その背後のオフィルビルも爆発に飲まれていく。

まだ、爆鎖は止まらない。ビル1つの上部を粉微塵にし、その後ろのビルを次々と飲み込んでいく。
衝撃波の連続。
鼓膜に訴えてくるような轟音。
圧倒的な破壊力。
地上に降り注ぐ破片。

少女はそれを止めた。
残骸の雨がタイムリーダーによって、その活動を完全に止められる。

「ちょっ……！
やり過ぎやり過ぎ！」

心配に次ぐ心配。
芹真さんは手荒なことはするなと言っていたのに。
トキは少年の生死さえわからぬまま爆風にバランスを崩される。

「大丈夫みたい」

戦いを見上げる2人。
空中で一呼吸おくボルト。不可視の力による拘束を解かれ、空中で体勢を正す。

そんなボルトに龍恵は仕掛けた。

ボルトが油断したその一瞬。
龍恵は爆発の中から飛び出した。
爆炎の中から高速で距離をつめ、ボルトがアクションを起こす前に、

ピシッ！

デコピン。
それがボルトの広いおデコに炸裂。
間もなく、光撃が嘘のように止んだ。
正直……
トキも龍恵も、何故ボルトが仕掛けていったのか……
または仕掛けてきたのか理解できなかった。

膨れっ面のボルトと向かい合うように目的の少年――歌城華晴龍恵くん――はイスに腰を掛けた。
トキの左側にボルト、向かい側に銀髪紅眼少女、右側に龍恵。

「すごい……全部元通りだ」

ボルトが膨れる横でトキは驚くばかりだった。
２人の戦闘終了直後、タイムリーダーの少女：ギン・ラシュライズ。彼女は己が持つ力を使い、世界全ての時間を１０分前まで巻き戻した。

瓦解しかけた建物。
破壊された数々の物、者、モノ。
イスもテーブルも地面も、屋上の出入り口も、オフィルビルも……
何もかもが破壊される前の状態に戻った。

有り難いことに、学校指定のジャージの汚れなども綺麗に消えていた。

「負けてないモン！」

と、未だに駄々をこねるボルト。
しかし、その手はしっかりとポテトを摘んで離さない。そして、頬張る。

全て元通りになったオープンカフェで４人は何事も無かったかのようにメニューを手元に会話を続けた。
トキはミネラルウォーター。
龍恵はグレープジュース（１００％還元）。
ギンはコーヒー（頼んだだけ）。
ボルトは、アイスティー、フライドポテト、リンゴパイ、サラダサンド、アップルジュース（果汁２０％）、から揚げ、ホットドッグ……ｅｔｃ、とにかく飲食によりストレスを解消しようという試みらしい。

「とりあえず、僕らがこの世界に来たせいで性別が転換した。
それで間違いないんだね？」

気だるそうに龍恵はトキとボルトに質問した。
この異変に気付いているのはこの2人だけであり、それを解決するために2人はここに居るのだ。
気を取り直したトキは頷く。

「で、僕を探してくれって頼まれたんだ？」

「ああ、心配してるかもしれないから早く――」

「どうでもいいよ」

良くないよ！

「僕は探し物があって色んな場所を行き来しているんだ。
この世界が初めてって訳じゃない」

「探し物？」

ボルトは喰らい続け、ギンは時折頷いてリアクションを取る。
質問は専らトキ。
ボルトには手伝う気がないのだろう。

「たぶん、僕のことあまり聞かされていないね。
姿・格好、外見的特長だけしか聞いていないでしょ？」

長い長い髪の房をいじりながら龍恵は聞いてきた。
確かに、トキとボルトが夕陽という少女から得た情報はそれだけだ。

「夕陽は何も知らないから“連れ戻せ”なんて言えるんだよ」

「とりあえず、彼女に会って事情を説明すれば？
そうすれば、一緒に探すのを手伝ってくれるんじゃ……」

「どうでもいいよ」

「……はぐらかした」

「ど、どうでもいいって……夕陽ちゃんは君のこと心配してたよ？
それに、何を探しているのか芹真さんに頼んでみれば？
きっと探してくれると思うし」

「探しているモノはもう少しで手に入るハズだからいいよ。
ここにいることに意味がある」

「君が探しているモノは、物なのかい？」

「力の残流」

いきなり質疑応答の中にギンが加入した。
探しているものが、『物』なのか『者』なのか『モノ』なのか……

彼女の言葉から『モノ』だということは辛うじてわかった。

「残留？」

「トキ、残りカスじゃなくて、残り溢れた流れの残流（ざんりゅう）だよ」

出ました、始まりました勝手に読心術。
お陰で正しく情報が伝わるのだが……
正直、頭の中見透かされるってのは気持ちの良いものじゃない。

「だから、ここに留まっているんでしょ？」

トキだけに留まらず、ギン、そして龍恵へと読心術は移りゆく。
ギンはわずか頷き、龍恵はしっかりと肯定。

「昨日の夜、預言者に言われたからココにいる」

「預言者？」

「え～！
ディマは預言者じゃないよ～！？」

これだから読心術は困る。
と、本気でトキは思った。

「とにかく、黒ずくめの男の人だよ」

「彼女……じゃなくて彼に遭ったの？」

「この世界に来たらいきなり目の前に現れてさ。
ちょっと話をしたら、ここにくれば欲しいモノが手に入るかもしれない、ってね」

「“かも”で来ちゃったの？
ディマは嘘つくこと多いんだよ～？」

批判。
肯定。
適当。
はたして一般人多数のこの場所で、大声で話していい内容なのだろうか……

しかし、物事は連続的且つ突発的に起こることがある。

それぞれの言葉が飛び交っていくうちに、龍恵少年の態度に変化が現れた。
同時にギン、そしてボルトまでもが同じ反応を見せて――

3人揃ってトキへと目を向ける。

「え、何？」

「うわ～」

「いや、ボルト。うわ～、じゃなくて……
何？
何か付いてる？」

自分の体を見回しつつ、学校指定のジャージでこの時間帯からこの当たりをうろついている自分に向けられる視線の痛さに気付く。
が、学校指定のジャージでこの場にいるというだけで、別に何かが付いているわけではない。

「へぇ～、ホントにこぼれてる……」

いや、君。
なに頷いているんだ？
というより、何がこぼれているわけ？

「……たっぷり」

ちょっ……！
何？
本格的に何がこぼれているわけ!?
ジュース!?
まさか……全然こぼれてないし……

……え、その視線、まさかまだこぼれてる？
流石にトキは戸惑いを隠せなくなってきた。

「力の残流って、トキの中からだったんだ～」

「これだけ……カナ並にこぼれるほどの力の持ち主久々見たよ」

「……大量、大量」

「――……」

オレ？
ん？　聞き間違いかな？
ナニ言ッテルンダ、コノ子供タチハ……

虚しさ＋悲しみ＋このスカ喰らったような、遅れを取ったような感覚。
なぜ自分なのかを頭の隅で考えつつ、この子らには一体何が見えているのやら……

「これだけ流れているんなら、いくらか貰ってもいいよね？」

何を貰う気だ？
力の残流？
もう、なんにも耳に入りません……というか入れたくない。

結局、どういう状況で――
結局解決なのかどうかもわからず――
どんなリアクション取ればいいのか困るような――

とにかく、一般的な学生であることを少なからず自覚しているトキにとって、帰路で前方を歩いている子供（×２）の現実とは思えないような……
でもＳＲという存在を知っているからそれがリアルな話だって否定できない自分が居たり居なかったり……

早い話、トキにとって、事務所への帰路が最も精神的にキツかったのだ。

何故ならボルトという太陽並の魔法使いと、龍恵という名の１つの小宇宙のような全能らしい魔法使い（？）の会話は常人の理解を超えた会話であり、理解が及ばないとか常識として扱わないことを常識的に扱ったり……正直にいうなら、カオスとしか思えない内容だったのだ。

でも、その話は現実。
何故ならトキもボルトも、この世界に来た龍恵もギンも、一般人とは違う。
特別な力を持って、それでも一般人と同じ世界に生きる。
相違点は少ないが、その僅かな違いの内容は濃く、やはり一般人と同一視できないところがあった。

「で、結局トキがダウンか……」

優雅に紅茶を啜りながらソファで横になっているトキ。
見事、子供の言葉でダウンを奪われたおと――女の子。
その向かいのソファでは小さな依頼人が静かに寝息を立てて寝ていた。

その他にも事務所にはお馴染みのメンバー＋呪術師がいた。

「ねぇ、トキ。
クワニーさんから本場のダージリンティー貰ったんだけど飲まない？」

「飲みません……」

貰ったお茶を掲げてみせる芹真さん。
とにかく今はゆっくりしたい。
カフェインは遠慮します。
まさか、昼前からこんなにも疲れるとは思っていなかったんだ。

「トキちゃん！
黄金炸油角つくってみたんだ！　食べない！？」

これはこれで怖い、パイロン女性バージョン！
軍帽被ったチャイナ娘になっっちゃってる！
爆発的テンションはいまだ健在！
そして芹真さんを慕っているらしい面も、怪しい方面に傾きつつあるが健在！

「人の差し入れを断れるほどの勇気は付いたらしいわね」

だが、パイロンを上回る奴がいた。
まるで蛇のように絡んでくるクワニー（♀）。
紫色の髪が不気味だ。
さすがにトキは逃げた。
ソファからボルトの横まで。それはもう、ゴキブリのように。

「どうでもいいけど、この娘どうしたの？」

クワニーの眼が依頼人である夕陽をロックオン。
一瞬、龍恵の目が厳しくなる。
そんな龍恵を気にもとめず、クワニーは勝手に夕陽の体を操作、器用に目蓋を持ち上げて眼の中を覗き込んだ。
さすが呪術師。
マリオネットのように彼女の体を起こして閉じた目蓋を強制解放。
はたから見れば拷問しているようにも見えなくはない。

「どうしたのかしら？」

「わかんな～い……」

「……」

「……」

沈黙が続く。

芹真さんも、ボルトもパイロンも、クエスチョンマークを頭に浮かべてクワニーの行動を見守った。

クワニーは夕陽の中に何かを見つけている。

それは芹真さんにもボルトにも理解できない何か。

もちろん、そんなものがトキやパイロンに理解できるはずがない。

「神か……悪魔とでも契約したの？

そうでもしなきゃ、これほど難解な呪いにかかる事なんて出来ないわ」

「え――神？」

「この娘、どんな理由があって呪われているのかしら？」

夕陽の目を覗きながらクワニーは聞く。

少なくとも龍恵たちは知っているだろう。そう踏まえて聞いたのだ。

こんな時に言うのも何だけど……

――クワニー、普段のイメージが紳士気取りっぽいからキモいよ。

やめて、女性口調。

しかし、クワニーの解説はお構いなしに続いた。

「こんな太古の呪術を使っているなんて……呪いかけた人はシーラカンスか何か？
とても現代人が使えるような呪術じゃないわね」

「まぁ、ちょっとした事故で」

「……またはぐらかした」

「もし、この呪いを解きたいなら、正攻法でいくしかないわ……糸状の巧妙に意義の崩壊因子が織り交ぜられている。
それより、こんなの解こうとする人いるのかしら？」

あんたのすぐ隣に居るよ。
なぁ、龍恵くん。
わかっていながら敢えて聞いたクワニーはため息をついた。

「まぁ、私には無理だけどね」

諦めやがった……
あんた本当に呪術師なのかよ。
呪いはあんたの得意科目だろ。

するとボルトが、読心術と共に分かり易いようで少しややこしい例題を挙げた。

「ねぇ、トキ。
どんなに大好物でも、半径５００ｋｍのアイスクリームを１週間で食べきれると思う～？」

「……考えるまでもなく、無理だろ？」

「でしょ？
その娘たち、それに近い状態なんだ～。
四の五の言っていられない」

「……まぁ、な」

「残り４．５」

もうツッコマナイことにしよう。
とにかく、彼らには時間が残されていないということは理解できた。
呪い、残り時間、力の残流、解き方。
いくら鈍いトキでも状況は把握できる。
クワニーの話が事実なら、依頼人の夕陽は呪いにかかっている。
それを龍恵は解こうと方法を集めるため世界を行き来しているのだ。

「じゃあ、少なからず成果はあったんで、帰ります」

「え！？
帰るの！？」

何故ボルトが驚く？

「だって、迷惑なんだろ？」

はい。
何てたって、性別が転換しちゃってるし……
芹真さんやパイロン、特にクワニーなんて見るに耐えないし……

「それじゃ」

言うが早いか、龍恵は事務所のドアを潜り出て行く。
その後をギンが物静かについてく。
ペコリと軽く頭を下げて事務所を出て行った。

トキの目は自然とボルトに向き、ボルトの目もトキに向いた。

「きっと目が覚めれば元に戻っているさ」

２人のやり取りに疑問を浮かべる３人。
その中でクワニーは早急に撤退することを宣言。実行。
トキは改めて時間を確認。
１１時半前。
まだ実践術部には間に合う。

こうしてトキは学校へと向かった。
パイロンも芹真との会話をひとしきり楽しんだ後、岡持ち片手に元気に退却。

芹真事務所にはいつも通りの風景が流れた。

ボルトはソファでお昼寝。
芹真さんは新聞に目を落としつつ、時折かかってくる電話の相手をして1日を過ごした。

結局、性別が元通りになっていたのは次の日になってからだった。

第２１話－Ｌｉｇｈｔｔａｃｋ－（後書き）

ねぇ、トキ。

トキはあの子たちをどう感じた？

私は、最初すごく変な子たちだなって思ったけど……

でも、考えてみれば、私も結構ヘンなんだね。

トキは初めて異世界の人に触れてどうだった？

何か変わったと思う？

初めて自分と同じで、自分より強い力の持ち主に会えてどうだった？

わたしはとっても新鮮で、でも負けたことが悔しかったな。

信じられないでしょ？

いきなり異世界から来たなんて、私でも最初は信じなかったもん。

でもね、世界は決して一本の道じゃないんだよ。

私はその言葉の意味を知らなかった。

少ししてからそれは間違いだって思えたけど……

今日のあの子たちのように、別の方向時間角帯から来る力を持った者達に学んだの。

夢を果たせた自分と、果たせなかった自分。

果たせたものの納得いかぬまま生きていく自分。

果たせなかったが、それでも胸を張って生きていける自分。

この世に様々な自分が統一して存在しているんじゃないよ。

可能性の分だけ自分がいるんだよ。

元を辿れば1人のオリジナルに辿り着くのかな？

チャンスがあったら一緒に試してみたいね……

……

……ゴメン

今は、ちょっと無理みたい。

トキさえよければ、今日のお昼から行くことも出来たけど……

『私が、私に戻る』

それで行けないんだ。

きっと私、今日あそこに居ちゃいけなかったんだ。

ゴメンね。

もう、思うことしか出来なくなっている……

本当は、原因はトキ。　なんだろうけど、私はトキが原因だとは思っていない。

みんなの言うことちゃんと聞かない私が悪いんだ。

せめて皆に安全な所まで逃げて欲しかったけど、私が私のことを思い出した時から酷いことばっかり思いついちゃって、それが出来なかったんだ。

たぶん、いっぱい迷惑かける……

その時は、ディマにお願い。

いまこうして思うことも難しくなってきたから、一言だけ残すね。

「ただいま。お姉ちゃん」

いまの私を止めることができるかどうか、わからない。

けど、彼女が私を止めに来ることは間違いない。

だから――……

落ちて行く目蓋。

次に目が覚めたら、自分は死んでいるのだろうか？

それが唯一の不安。

しかし、その不安に打ち勝つだけの要素はある。

色世　時。

彼が居れば、死にすら勝てる。

トキの本当のＳＲに気付いている彼女は一抹の不安と共に、一度の眠りに落ちた。

第２２話－Ｇｏ　ｔｏ　ｔｈｅ……！－（前書き）

何から思い出せばいいのか？

あの日、私はどうしていた……

雪の降り続ける窓の外。
白銀とイルミネーションに染まり、照らされた夜。
聖夜を一週間後に控えた白州唯の街。

中心地から外れた場所に佇む病院。

彼女は光を失った目を街の方へ向けた。
が、そこにあるのはいつも闇だけだ。一寸の光も無い

（そうだ……
いつもみたいに芹真さんたちのことを考えていたんだ）

数ヶ月前の夏。
彼女は他人の瀕死を目の当たりにして泣いた。

初めて会う人にも関わらず、恐怖と絶望を突きつけられて涙した。

１秒後にでも死ぬかもしれないと宣告された少年。よくは見えなかったが、おそらく自分と同じ年齢だろうと体格から読み取った。

何が起こったのか？

あの夏の日のことを思い出しながら、彼女は見えない目を今なお眠り続ける少年に向けた。

窓の反対側。

隣のベッドであらゆる機器につながれた彼。

以前、芹真が自分に言い聞かせてくれた名前の少年。

『彼を取り戻すには、君の力が必要だ！』

そう言われ、彼女は初めて、今まで恨んでいた自分の力を頼りにした。

“彼”を助けることが出来るのは私だけ。

光の魔女さんも、鬼の彼女にもできない。芹真さんにも……

（私にしか出来ない！）

他に誰がやるのかと考え、意識を集中する。

彼女の手はずっと彼の手を握っていた。それが唯一、彼を助ける方法。

そう、それだけが、未だ意識不明の彼を……

第２２話－Ｇｏ　ｔｏ　ｔｈｅ……！－

白い天井。
白い壁に、白い床。
不思議なことに、その場に照明器具の類は１つも無い。
照明器具どころか全く一切の飾り気ない廊下。
この通路には一切の飾り気が無く、装飾から持ち主の趣向を読み取ることなど到底出来ない。そもそも装飾が無いのだから。
しかし、屋内は陽光の下にいるような錯覚を呼び起こすほど明るく、通路の奥に大きな扉の姿を確認できるほどだ。
純白の廊下を１人の男が進む。
片手に紙袋。
片手に革の鞄。
この廊下の先に、協力を仰ぎたい人物がいた。
協会にもナイトメアにも属さない男。
夢を捨て、希望を失い、人生とまともに向き合うことを諦め――
しかし――それでも未だに強力な力を持つ男。
重厚な扉の前に立ち止まり、監視カメラに顔を晒す。
数秒して、銀行の金庫並に厚い扉が内側へと開いた。
目に飛び込む単色の部屋。
一瞬、目が眩む。

蒼純の部屋で、唯一白い清潔感溢れるデスクに男は腰掛けていた。
桑年を過ぎたばかりの男。
目的の彼。

「四凶が私に何の用だ？」

男の重い声。
一瞬だけ部屋を震わせた感覚。

言われて、一笑。
ただ1人の凶は声を上げず、顔だけで笑った。

出入り口から男のデスクへと歩み寄る。
男は警戒しない。
いつ死んでも構わないという態度の表れだろう。

そんな男の態度を一笑した。

片手に持った紙袋をテーブルの上に置き、革鞄をデスクの横に置く。

男が紙袋の中を覗いた。
すると、部屋の色が蒼から緑へと変わる。
男は袋から取り出して高々と掲げ、凶はその名（ブランド）を声にする。

「ヴァムフォーテンです」

「オレに何をさせたい？」

それは粉末の詰まった缶。
男はココアパウダーの缶をデスクの隅に置き、男に聞いた。

「色世　時を知っていますか？」

「馬鹿な連中共が噂していた子供だな……
ソイツがどうした？」

「私は彼に会いたい」

「それで？」

男が部屋の中を歩いて廻る。

緑の壁、天井、床。
何もかもが単色の部屋。
唯一、ワークデスクだけが白く輝いていた。

「しかし、中々会うことが出来ない。
そこで、Ｍｒ．シーズン。
あなたに協力を仰ぎたい」

「いまの季節を知っているのか？
まぁ、協会のお前がココに来た時点で大体予測はついていたが…

…」

四凶の男は照れ隠しでもするかのように目を伏せる。
数秒の静寂。
そののち、再び四凶の目は開かれた。
シーズンはソイツの目付きが変わっていることに気付いたが、微動だにしない。

「あんたが有能なＳＲだから声を掛けた」

変わっていたのは目だけでない。
口調、そして態度。

「そいつはどうも。
だが、オレに何かさせる――ただそれだけで、そのガキに会えると思っているのか？」

「ああ、会える。
あんたは雷か雪を降らせてくれればいい。
足止めや陽動は他の連中がやる」

「それは……戦争か？
何のため色世時に会う？」

「Ｍｒ．シーズン。
オレはそのガキに会う、その為だけだ。その為に日本へ行く。

ナイトメアも協会も関係ない」

「それは1人の人間として会いに行くというわけか？
それとも、その少年を理由に日本へ入国するのが目的なのか……
本心はどちらだ？」

しかし、四凶は首を振った。
肯定はしない。

まずは、会う。
それが第1の目的。

ナイトメアなど眼中に無い。
1つの生き物として対面したい。

「トウコツが手を取られたのは知っているか？」

「お前の仲間のトウコツか？」

「あぁ。
あの無能さ」

「戦闘しか能がないからな。
聞いた話だと、1人だけになっちまったらしいが？」

「ああ。
影武者まで全部潰されてやがんのさ。
完全否定のSRに1人。

国連の至純殺意に1人――」

「セブンス・ヘブン・マジックサーカスに1人……」

「いま日本に居る1番カスな野郎だけ生き残ったってわけさ」

「珍しいことがあるんだな。
まさか、トウコツの連中が1人だけ残して逝ってしまうとは。
しかも生き残りが下っ端？」

「そして珍しいことに……
下っ端とはいえ、仮にもトウコツであるソイツの手を奪ったのが、
色世　時だ」

「ほう？
それで、色世　時がどれほどのＳＲなのか、と……
本当にそれだけで会いに行くのか？」

部屋が緑から淡い水色へ変色する。

シーズンはデスクのイスに戻り、四凶はデスクに寄りかかった。

「どうでもいいが、オレに殺意を見せても何にも出ないぞ？」

シーズンの目が、凶へと向けられる。

言われて一笑する凶。

「気にするな。
あんたは有能だがムカつく。ただそれだけさ」

「……ありがとよ」

ため息をこぼしながら、シーズンはソイツと手を組んだ。

日本――白州唯（しらすい）

「それじゃまた！」

夕方。
白州唯高校の調査が終わってから3日が経った。
警察や調査団による立ち入りが終わった学校。

そのどこかに今までと違う場所があるということもなく、生徒達はあらゆることに首を捻りつつ、今までどおりの日常を展開した。
朝登校し、授業。
昼食を摂りながら、休み時間に他愛無い会話や絡み合いに喜怒哀楽を。
午後の授業が終わり、掃除を終えた生徒達は流れるように学校の

門を潜り抜けていく。
また次の日登校し、
友達との会話で盛り上がったり、
職員室で教員から叱責を受けたり、授業の質問をしたり、
殴りあったり……

「ぁがっ、かっ……！」

2年3組。
あらゆる呼称、別名、あだ名を持つ優良問題クラス。
その中で、2年3組を代表する猪突猛進の1人、大橋友樹は自分の犯した過ちに頭を抱えた。

「ま……」

クラスの中央に1人の男子が倒れていた。
2年3組、もう1人の猪突猛進、宮原漣太（ミヤハラ レンタ）。
通称：不曲の宮原

「気は済んだか？」

大の字になって倒れている宮原を見下ろす赤髪の男子が声を掛け

た。

岩井信弥（イワイ シンヤ）
宮原を二撃で打ち倒した張本人である。

「負けんな宮原ぁ！
オレはお前に１０００円賭けたんだぞぉっ！」

などと、勝手な賭博に興じている友樹を隣に、色世時はその異常な賭博熱に気圧されていた。

賭けなくてもいいじゃん。
というより、学生の賭博は禁止されていなかったっけ？
そもそも、学校で賭けるなよ……

「馬鹿め！
１％も勝率のない奴に賭けるからそうなるんだよ！」

「うっせぇダーティ！
サボリがいきがってんじゃねぇ！
オレは大穴狙いで――」

「悪いが１０００円いただくぞ、友樹」

「おい、カイ。
オレにも取ってくれ！」

「テメェは賭けてないだろ、ニィハチ！
勝手にオレの財布漁ってんじゃねぇ！」

怒りに震える友樹。
その横でトキはうんざりしていた。

右の喧騒。

友樹らを中心とした賭博チーム。
もうすぐで6時間目始まるというのにこの馬鹿騒ぎ。
ある程度騒がしいことは悪くないが、これは度が過ぎている。
というより、真横で乱闘が起きそうな予感が……

「……」
「……」
「……」

対して、左の静寂。

物静かにギャラリーと化している者達。
問題はその面子だ。

2大委員長。
ジェイソン佐野代。
そして、藍。

4人が4人とも腕が立つ者。

しかもジェイソン佐野代に限っては、トキ自身その実力を身をもって体験している。
つまり、知っているが故に恐い。
そんなメンバーが、トキの左から後方にかけて並び、立ち尽くして宮原と岩井の戦いを見ていたのだ。
気不味く、そして居辛い……

「ねぇ、2人とも――」
「おい、おまえら――」

突如、静寂の中に雷鳴が轟いた。
何の前触れもなしに、表と裏の委員長が同時に口を開いたのである。

「もう時間だから――」
「次が始まるから――」

見事なまでの内容重奏。
そんな2人に周囲が凍てつく。
友樹たちでさえ沈黙してしまった。

『その辺にしてお……』

完全にセリフが重なった瞬間に2人の腕がぶつかり合う。

「オレが責任持ってやめさせっからさぁ、黙っててくんねぇ？」
「責任だなんて……そんな言葉、あなたに似合わないわよ。
無理しないでここは任せなさいよ」

平静と余裕を装いながら2人の視線がぶつかり合い、火花を散らす。
片や嘲笑するように、片や微笑むように。

どちらも譲らない。

委員長2人が次のアクションを起こす前に賭博チームは解散した。
岩井は呆れて自分の席へ戻り、友樹は宮原を回収する。

その時――

「さぁさぁ始まりました、委員長対決！
2年3組を南北に二分している2大党派の首領2人！
今日こそ決着が着くのか～っ！？」

2年3組のウィルスこと、類家香織（ルイケ カオリ）による実況が始まる。
結果的に言えば、それが火に油を注ぐ結果となった。

正委員長、桃山充（トウヤマ ミツル）
or
裏委員長、木田村麻衣子（キタムラ マイコ）

2年3組が二分している理由はそこにあった。
男子の大半はミツルを支持し、女子はマイコを支持する。
綺麗に分かれたところで2人の委員長はお互いを完全に相容れぬ存在になった。

2人の家柄がヤクザと警察であることも僅かながら関係している。
クラス方針から人員選択、どちらがより良きクラスを築き、保っていけるか。
残念ながら、どうあっても2人は友好な関係を築けそうになかった。

ウィルスの一言により、クラスが闘気で満ちてゆく。
そう、それは乱闘に発展する直前。

「何をしているのか、諸君?」

それは全員が動き出す――本当に一瞬だけ――直前だった。

担任、登竜寺　蓮雅(レンガ)先生の登場。
教室全体で乱闘が繰り広げられることなく、彼女の登場によってクラスは静寂へと返った。

「今日は机を動かさない。
動かさせないから」

一部の男子生徒の舌打ちを流しつつ、レンガ先生はプリントの配布を始める。
窓側から廊下側へと、流れるようにプリントを配るレンガ先生。
最初に受け取った面々――最前列の生徒たちから苦情が上がる。
それが、次々と連鎖していく。
無反応の者も少なからずいるが、文句をいう生徒のほうが圧倒的に多い。

「プリント行き渡った所、口頭で説明するわよ。
まず、プリントに書いてある通り、校長先生および進路指導部、
それから一部の先生方の判断で夏休み中の登校日が“２倍”になりました」

プリントの文字を視覚が捉え――
聴覚から入り込んだ言葉を脳が解釈し――
生徒達からの多大な質疑と盛大なブーイングが始まった。

「理由はわかっているでしょう。ただ認めたくないだけで。
この間の、全員が睡眠状態に陥ったことが原因で臨時休学になりました。
忘れたとは言わせません」

「忘れました～」

勇者発見。

直後、裏委員長による正拳制裁。あえなく撃沈。

「お前ら、しっかり先生の話聞けよ？」

委員長による釘をさされ、教室中が静まり返り、レンガ先生は頷く。

「そう。
いつものことですが最後まで聞いて下さい。
このクラスに限って、特別な条件があります」

意気消沈していた生徒達の目がレンガ先生に集中する。

「先生、それは罰ゲームみたいなモノですか？」

「違います。
むしろ、逆です」

再びざわめく2年3組。

「登校日の殆どは夏休み前半から中ほどにかけて集中しています。
夏休みの後半に、一週間近く何も無い日があります。
そこで――私があなた達を旅行に招待」

再び沈黙する2年3組。

「それ……本当ですか？」

さすがに2大委員長も驚いた。

ある者は突拍子ない先生の発言に呆け、
とある者は今の発言を頭の中で反芻し、
ある者は我関せずとばかりに居眠り、
またある者は必死に我が耳の掃除をして、
ある者は頭上にクエスチョンマークを浮かべていた。

「マジ……本当です。
私の奢(おご)りです」

再三ざわめく2年3組。

「マジ！？」
「旅行だとぉぉおっ！」
「いや、マジだって！」
「有り得ねぇ！」
「ドコ行くんだろ～♪」
「本当におごりなのかな？」

「国外かしら？」
「国内じゃないか？」
「旅費はおごりで土産代は自腹だろ」
「安全ならいいじゃん」

「また詐欺じゃないか？」
「怪しい怪しい裏ルートとか？」
「あ～、ありそうだな」
「センセ～、ちょっとトイレ行ってきます」
「家でゴロゴロしてた～い！」
「夏休み登校日2倍、代わりにおごりで旅行、更にその代わり修学旅行無し、みたいな感じ？」
「戦場にでも連れて行く気じゃねェ？」
「今時旅行で喜ぶヤツなんて……」

ざわめきは止まらない。
盛り上がる生徒、冷静を失わない生徒、冷める生徒、抜け出す生徒……

「京都、5泊6日の旅」

そして、言い放つ担任。

怪しむ生徒の半数が“京都”の漢字2文字、ひらがな4文字、ローマ字の6文字で寝返った。

『いよっしゃあぁぁぁっ！！！』

「ただし、１つだけ面倒臭い条件があります」

再三沈黙する２年３組。

「夏休みの出校日よ。
旅行の日までに予定されている出校日に全員が１日も欠かさず出席することが条件です」

面倒臭いって、まさか教師からそんな言葉を聞くとは思わなかったよ。

「蓮雅先生、旅行に行きたい人だけにその条件を適用してはどうでしょうか？」

「私も最初ソレを考えたけど、その案は降ろした……」

「何ですか？」

「連帯責任を意識してもらう為よ。
学生のうちから慣れておいて損は無いでしょうから、連帯責任制にしました」

「連、帯？」

「社会に出て個人の我が儘が通用すると思っている奴、手を上げて」

1人も居ない。

それはしごく当然の反応だ。

「皆も心のどこかで半分程度は理解できているでしょ？
通用するはずありません。それが現実です」

「実際に経験してみると現実と予測にギャップがある……」

崎島さんが呟き、レンガさんは頷いた。

「その通り。
小・中学校では団体行動を学びますが、高校生はそれよりももっと社会的なルールを意識し、学ぶ必要があります。
実際にやってみると中々うまくいかないものよ。
クラス内での実践だけど、自己中心的な人間には耐え難いルール」

黒板に向きを変え、レンガさんは白いチョークで『要』と書いた。

「欲や衝動に負けて自分がすべきことを怠り、連帯責任の名の下に何の関係も無い、一所懸命励んでいる人たちまで巻き込むことが多々あります。

社会に出て恥を掻く前に、少しでも慣れておいた方がいいでしょ？
つまり、自分の欲望と役割を秤にかけて、コントロールする術を学んで欲しい」

後半が勝手な物言いにしか思えなかったが、とりあえずトキは頷いてみせる。

そこまで思い返していた所……

トキは後頭部に軽い痛みを覚えた。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第２２話－

－Ｇｏ　ｔｏ　ｔｈｅ……！（ＣＯＵＮＴ：３）－

振り返り、そこには藍が居た。

「ちゃんと聞いている？」

「え……」

「聞いてないでしょ」

「……ごめん。
ちょっとまだ、レンガさんの話が信じられなくてさ」

「頭を切り替えなさいよ。
いまから対策を考えなければ大変なのよ？」

放課後の帰路。
閑静な住宅街を通過している最中のことであった。

藍もレンガ先生の話を信じ切れていないが、本当だった時に備えて色々と頭を回していた。

「京都には私と同じ鬼のＳＲ、その一族がいる」

「鬼か……やっぱり強いんだよな？」

「向こうは白鬼一族。
あまり好戦的じゃないけど、身体能力ならトップクラス」

「アヌビスみたいに強いの？」

「比べられないわ。
スピードこそアヌビス達には及ばないものの、体力や闘争心、タフネスには天と地ほどの差があるから」

「……好戦的じゃないんだよな？」

「でも、やられたらやり返す。
それが彼らの流儀よ」

「まるでヤクザだな……」

「えぇ、ヤクザよ」

京都の魅力、２０％ダウン。

やっぱりどこにでも居るんだ……

「とは言っても、地元住民には評判が良いの。
元々は自警団として始めたのが、組織の構成や他の機関・組合……
そういった怪しい所との繋がりを持っている者が多かったことから、ヤクザとしてカテゴリーされているだけらしいわ」

「へぇ～？
つまり、本人達にヤクザみたいなものだっていう自覚は無いんだ？」

「そうだけど……」

しかし、と言って藍はため息をつく。
問題は彼らがどういった分類の“人間”かではない。

「協会に所属なの」

ＳＲの世界における彼らの立場がどこに位置するかである。

「……安全な旅行になるよう祈るか」

「私達は忙しくなるわよ」

「まぁ……そうだな」

ＳＲだし。
協会じゃないし。
無所属でもないけど似たようなものだし。

「そうじゃなくて、レンガ先生が見つけたのよ」

「何を？」

「事務所よ。
……芹真事務所。
レンガ先生は芹真さんに依頼したらしいわ。
旅行中の護衛を」

「え、ちょっと待てよ！
ってことは、オレ達も――？」

「ええ。その可能性はとても高いわ……」

ため息が出る。
これ以上ないくらいの大きなため息が。

旅行に危険が伴う。

そうわかっていて旅行に行く人間が果たしているだろうか？

確かに京都の価値は大だ。
でも、命を落す可能性があるのなら、また別の機会に訪れるということしたい。
命が何よりも大事だ。
どんな苦痛より、どんな快楽より、例え人生を大きく変えるほどの何かを犯しても優先すべき事。常識だ。

「とりあえず、今日事務所に泊まって芹真さんに聞いてみるよ」

「今日は泊まるの？」
「ああ。
ダメだった？」
「……別に」

「ｗｈａｔ？」
職員用トイレ。
そこでワルクスは１人、送られてきたメールの内容に軽く驚いていた。
そのメールの内容というのが――

『ボルトだよ。
今日、トキが事務所に泊まるから、打ち合わせは明日ね。
って、芹真さんが言ってた。
それじゃ。
追伸：ワルクスの分の夕食は私が食べておくから安心して♪
芹真事務所代表、ボルト・パルダン』

以上。
その手紙が芹真に持たせた携帯から送られてきたのだ。

（いきなりだな。
それにしても、まだメール打てんのか？
あのアホは……）

周囲に他人が居ないことを確認しつつ、手を洗ってトイレを出る。

日暮れの学校というものは実に静かだった。
外の微かなざわめきと校内に漂う静寂の晩景コントラスト。
静寂に浸った空間を染める空の紫と紅。夕陽を反射する雲。
それがまた何とも言えない哀愁を漂わせ、1人落ち着いて思考するのに打って付けの場所だとワルクスは思った。

ここは日本の学校。
血生臭い世界とは海を隔て、争いとは塀と敷地をもって離れている。

平和の為に世間を学ぶ場所は、当然ながら平和が充満していた。

微笑をかわす生徒達。
未来を創ってゆく大事な子供達。
苦悩しながらも生徒と向き合う教職員。
先駆者として語り、先輩として様々なことを伝えていく。

普段あまり意識しないが、ワルクス自身もその例外でないことを自覚した。
いくら人を殺めてこようが――
人並み以上に愚かであろうが――

いつか人は人に何かを伝えなければならない時がある。

我が子に。
弟子に。
望む者に。
向き合う者に……

（イージー携帯でも持たせてやるべきだろうか……）

頭の隅で考えつつ、ワルクスはここが学校であることを何度も自分に言い聞かせた。
断じて、血を見るようなことがあってはならない。
未来を育む子たちを守る。

それが学校。

だから――ソイツの存在が気に入らない。

「トウコツ」

そいつの存在は場違いもいいところだ。
トイレを出てすぐ、ヤツは左側に存在した。

「君はトキの周辺警護・観察をジャンヌに直接言われたのではなか

ったか？」

暗闇に紛れるよう階段踊り場の影から動かない。
そこに居るのは男。
逆立てられた髪、獣同然の目付き、露骨にぶらさげているナイフ。

四凶、トウコツ。

「ワルクス……アンタはどっちの人間だ？」

「私はどちらの“人間”でもない。
ただ1人の人間だ」

トウコツが暗闇から出てくる。
極限まで押さえ込まれた殺気の中に、僅かな戸惑いのようなものを感じた。

「聞き方が悪かったな。
あんたはどっちの“ＳＲ”だ……協会か？
それとも、芹真事務所か？」

「私は協会のＳＲであり、芹真とは酒を交わす間柄のＳＲ。
協会にとっても、芹真事務所をうまくコントロールすることができれば色々と便利なのさ。
だから、私は芹真たちとのコンタクトを許されている」

「誰が許してんだ？
そんな話聞いたことねぇぞ？」

「会長から直に、だ」

歪む。
殺気が空間を歪め、
真実がトウコツの顔を歪め、

同じ協会に属する2人の関係を歪める。

だが、最初から2人は相容れぬ者同士だったことは両者共に自覚し、また周知の事実でもあった。
トウコツは完全・完璧のSRを嫌い、
ワルクスは四凶そのものを排除するよう、会長に直談判していた。

「そうかい……」

苦虫を噛み潰したような表情を見せたトウコツが冷静さを取り戻す。
歪んだ顔は徐々に落ち着いた雰囲気を取り戻した。

「その話は後でケリをつけるとしよう……
オレはアンタに質問しに来た」

「珍しいな？」

「アンタにとってあんま良い話じゃねぇ――ただよ……」

再びトウコツの殺気が大気を揺さぶる。
一瞬、ワルクスの目がトウコツの手に向いた。

義手……

「トキに関わることだ」

「何っ……？」

珍しくトウコツ相手に意表を突かれたワルクス。
戦闘でもここまで驚かされたことはない。

「オレはアイツともう1回戦らなきゃならねぇ。
取られた腕の分までやり返さなきゃ気がおさまらねぇ！」

「つまり、お前はその内トキに仕掛ける、ということか？」

「……」

「違うのか？」

「トキと戦いたいのは私事だ。
いまは協会のＳＲとして言いに来たつもりだ」

「……そうか」

「“オレじゃない誰か”がトキに仕掛ける可能性があるんだよ」

その瞬間、ワルクスの頭にトウコツを含めた４人の顔が浮かぶ。

四凶。

「お前じゃないのは確かだな？」

「ジャンヌに言われているしな。
可能性があるとすれば、オレとトウテツを除いた２人……」

４人のうちの２人。
もしそれが、真実なら。
トウコツの話どおり、その２人のうちどちらかが仕掛けてくるとすれば、今、トウコツを含むトキの周辺警護をしている者達では太刀打ちできない。

力に差がありすぎるのだ。

「キュウキとコントンが！？」

突如、暗闇に響く第３の声。

２人の顔がその声主に向く。
スカート――女子生徒。
持ち物――火のついたタバコ。
ワルクスは理解した。

「アイン！
どうしてここに？」

「アイン？
お前が番犬のＳＲ、ナグラか？」

両者の質問に彼女は答えず、階段の上で固まり続けていた。
２年３組、無所属のＳＲ、奈倉愛院。
彼女の出現はどちらにとっても予想外だった。
そして、彼女にとってトウコツの話こそ予想外なものであった。

「トウコツ、お前から何とか言って止めろよ……！」

「オレは指図されるのが嫌いなんだよ。
それにキュウキとコントン。
今のオレにはどうしようもできない存在なんだぜ？」

「アイン……」

「それにケルベロス……テメェは、キュウキの姉御と仲良いって話聞いたぜ？
テメェで連絡取ればいいじゃねぇか」

卑しい笑い声が夕闇に響く。
ここに居るのが3人だけなのが救いだ。

「……」

「おい、トウコツ……」

「ワルクス、オレはいまケルベロスと話しているんだぜ？
またこの学校をぶっ壊す気か？」

「壊すことはなくても、一部が血で汚れる知れん」

沈黙が続いた。
誰も1歩も動かず、ただ時間ばかりが過ぎ、闇がその濃度を増していく。

「お願いだよ……」

静寂を彼女が破った。
階段を下り、2人のいる踊り場まで歩を進める。

「トキに手を出さないでくれ」

「お前は芹真事務所の人間でも何でもないだろ？」

「クラスメイトだ」

ワルクスはトウコツを睨み、トウコツは睨み返す。
横槍を受けたトウコツの目が再びアインに向く。

「そんなにこの学校が大事か？
何がそんなに大事なんだ！？」

「その辺にしておけトウコ――」

「やっと……
私がやっと手に入れた居場所なんだ。
何一つ欠いても困る。
我がままって思うだろうが、私にとってソレを守り続けることが生き甲斐なんだよ」

「そりゃまた、ぶっ壊し甲斐があるモンだな……
そんなつまらない理由でキュウキに連絡取れってのか？
ゴメンさらさらお断りだ」

「いい加減にしろ！」

「黙れよ、完璧もどき」
「仮にも彼女（アイン）は私の教え子だ」
「だから何だ？」
「付け加えて貴様は不法侵入だ。
つまみ出すには十分な理由がある」
「そん中にイジメも入るのか？」

厭らしく笑う男。
沈黙を守る彼女。
教師の双拳が風を纏う。

「出て行け」

しかし、トウコツは再びアインに向き直り、話し始めた。

ワルクスに関する興味が無いわけではない。
が、今後の有益な関係を慮った、トウコツなりの考えがあった。

「じゃあ、ケルベロス。
取引でもしないか？」
「……何？」

「そっちの条件はキュウキの糞尼への連絡。
こっちは欲しい物がある」

「乗るなアイン」

「ケルベロス……お前の魔倉にパチモンたっぷりあるだろ？
その中に1つ、どうしても欲しい物がある。
聞いた話だとお前の魔倉に流れたらしいからな」

「そんな物でいいなら乗った」

「アイン……！」

四凶との取引でろくな結果を得た者は過去に1人も居ない。
すべてが仇になって返ってくる。

ワルクスはその事例を多く知っていた。
もちろん、アインも知らないわけではない。

「白金の方天画戟（ほうてんがげき）だ」

その回答にアインは頭を捻った。

「白金……だと？」

「そう、プラチナのな。
柄頭に剣の収まった、あの輝く方天画戟」

しかし、トウコツの言葉に彼女は戸惑っていた。

「ちょい待て！
私の手元にそんなものは無ぇぞ！」

「はぁ！？
無いはず無いだろ！
テメェの所に流れたって、そう聞いたぞコラッ！」

「持ってねぇよ！」

「じゃあ、キュウキとの連絡は諦めんのか？
オレは別に構わないが、お前が困るだけなんだぜ！？」

「別のじゃダメか！？」

「物にもよる！」

「もちろんパチモノだが、出来は中々良いヤツがある」

「刃物以外は受付ねぇっ」

「お前ら……
そういう取引は学外で……」

呆れ半分のワルクスを無視し、２人の話は即決という結末を迎えた。

「日本刀」

「鈍（なまくら）は却下！」

「雷切」

「おし、乗った！」

黒い生き物同士の取引が決定した。

同時刻――

「降ります！
ていうか降ろし……！
あ、いや、やっぱ降ろさないで――！」

日本海上空、地上１０．９９９ｋｍ
成層圏の１メートル下の対流圏ギリギリを４人は夜に向かって移

動していた。

――5分前

芹真事務所の扉を通過した藍とトキを迎えたのは、芹真のコーヒーとボルトの無駄元気だった。
いつも通りの光景。
ただし、今日は珍しくドリップコーヒー。

2人がコーヒーを飲んでいる間、芹真は黙々と自分の部屋で外出の支度をし、ボルトは笑顔のまま2人を見守った。

先にコーヒーを飲み干したのはトキの方だった。
それと同時、芹真は自分の部屋から出て来る。
鞄を置きながらトキは服装の変化に気付いた。芹真がいつも着ている白のYシャツが、水色のYシャツになり、しっかりとその上に露骨にホルスターをぶら下げていた。

その姿から嫌な予感が漂ってならない……

「さて、藍。

久々にみんなで仕事だ。
そして、トキ。
初めて全員で赴く仕事だ」

ボルトは相変わらず笑顔のままソファに腰掛けていた。
どうやら既に準備を終えているらしい。

「仕事？」

トキは顔をしかめた。
当たり前といったら当たり前の反応。
そこでボルトが説明を始める。

「これからみんなでステルス船を占拠しに行くんだ」

コーヒーカップを空にし、藍が質問する。

「依頼人は？」

「シミネ　マサトさんだよ～」

「藍は知っているだろ？
現白州唯警察署の最高権力者だ」

今度はトキが、

「……芹真さん。
ステルス船ってのは？」

「警察であり協会のＳＲであるシミネからの依頼さ。
内容は、今日これから上空で行われるパーティーの阻止だ」

「パーティー？」

「武器密売とか～
人身売買とか～」

「相手はナイトメア？」

「ああ。
兵器の売り手は黒羽商会。
買い手はナイトメア武装派の使い。
多くの駒を引き連れているだろうな。
ステルス船なだけにレーダーにはかからない上、黒羽商会のゴーストによって通常時は目で見つけることも難しい」

「どうやって見つけるの？」

「オレ達には見える。
なぁ、ボルト！」

「うん！

私が皆に見えるようにするんだ！」

「ということだ。
さて、藍はブリッジを制圧してくれ」

「私は～？」

「船の時はいつも同じ。
そうだろ？」

「あ、じゃあ、逃げないようにね」

「そう。
で、オレとトキで倉庫内を制圧する」

次々と決まってゆく話の流れにトキはいつも通り蹲(つまづ)いていた。
中々言い出せない。

「正確に言うなら……」

芹真はテーブルまで移動し、そこにこれから乗り込む飛行艇の断面図を広げた。
3人も移動し、その図に目を落とす。

「ボルトは1人も逃げ出さないように外で見張っていろ。
藍はブリッジを制圧したのち遊撃。

オレとトキで倉庫内を制圧。それから全員に無線する」

「合流場所は？」

「ブリッジか機体の上ってことにしよう」

こうして、四の五の言わず……

そしてトキはろくな装備も無いまま、半ば強制的に出発するはめになった。

何故か？

混乱しているうちに流され続けて発言チャンスを全て棒に振ったからである。

周章狼狽していたトキが悪い、とボルトは言った。

そして現在、地上１０．９９９ｋｍの地点に至る。

移動手段はボルトの光撃魔術。

ボルトが全員の体を光で包み――相手を握りつぶすなり、意のままに動かして弄び、嬲り殺すための――その魔術によって空を飛ばしていた。

かなり危うい光に身を包み、半ば闇に染まった空を飛行艇を目指す芹真事務所の４人。

「芹真さん！」

「落ちたいならボルトに言え！」

とにかく風が強く、冷たく、そして高い。
目眩がするとか、体がすくむとか、気が遠のくとかそういうレベルじゃない。
いとも簡単に崩壊した『現実味』という概念からか、何故か……

「ありえねえぇぇっ！」

「高いトコ苦手か！？」

絶叫しつつ、なぜか顔は笑み。
心から笑っているのではない。置かれた状況と自身の心理を上手くかみ合わせて調和を取ろうという本能の試みだろう。引きつり気味に顔が笑みを模った。

とにかく、何の乗り物もなしに空を飛ぶことなど、常識的に考えてありえない以外の何物でもない。

「そうじゃなくて！
芹真さん、これって警察は協力しているんですか！？」

「1人もしない！」

「な、何で！？」

簡単に説明すると――

ナイトメアの活動活発に伴い、協会の実行部隊・執行部隊は東奔西走。

数日前、芹真は警察を訪問してある約束を取り付けた。

『ナイトメアの尽滅にオレ達も参加する。
だが、協会の指揮下に入るわけじゃない。
下手な支援・情報提供等、一切お断りだ』

故にこの仕事――実際は芹真事務所が自らナイトメアへ本格的に反抗の狼煙を上げる最初の戦いであり、また協会の態度を確かめようという試験的かつ挑発的な行動であった。

ついでにボルトに食い尽くされた非常食と、間違って処分された弾薬、トキがこれから携帯する銃器等の確保も目的に含まれていたりする。

だから、協会からは貴重な人材を1人も派遣しないのである。
それだけ協会の執行部隊は多忙なのだ。

「協会に弱みを握られたくないからさ！」

「みんな～！
このまま成層圏界面まで昇るよ～！」

移動方向が横から急激に斜め、そして上空へとその向きを変える。
行き先は高度約５０ｋｍの地点。

取引現場のステルス船。

「あ、トキのために言っておくけど、オゾンとか紫外線とか関係ないから～！」

「え……何！？」

「何でもな～い！」

「よし！
全員、準備しな！」

「……出来てる！」

「はいは～い！」

「ちょ……っ！
芹真さん！」

不思議なことに、時速数百ｋｍの中だというのにそれほどＧを感じない。
車に乗って急発進した時くらいの圧力しか感じられなかった。
高速で映り行く景色の中、夜空の中に奇妙な光を見つけた。

カキ――ッ

（何だ？）

次第に大きさを増していく飛行艇。
黒くて大きい。
それが上空に留まっていた。
目的のステルス船が視界に入る。

（……警鐘？）

いつも危険か何かの直前に響く鐘――いや――時計の音。
どうしてか、いまの音は弱々しく、いつもと違う。

一瞬。
目に痛みが走る。
眼球が乾いたものだと思って、目蓋を閉じた。

その時、視界が白光に埋められていく。

（あれ……？
なん――）

そこは金属で出来た部屋だった。

周囲には多種にわたる箱。

砕けた銃器。
明日なき死体。
そこかしこに穿たれた弾痕。
申し訳程度の灯り。
砕けた非常灯。
足元を汚す飛び血。

とある壁に、２つの扉があった。

右に亀裂の扉

左に弾痕の扉

どこかで爆発が起きる。
それと同時に何かが自分に訴えた。

ひらけ――……
開け放て――！

足元が揺れる。
急かされるように右手のドアを選び、重たい扉を開く。

その先は、赤黒とオレンジの狂演。

それが視界を覆った時……――

――……トキの視界に夜空が戻った。

夕日の残していった僅かな光と弱々しい星明り。
淡い青に彩られ、黒に沈んだ少し早い夜空。

そんな中、芹真事務所一行は徐々に飛行艇へ迫っていた。

「ボルト！
オレ達は中央から行く！
1人も逃がすな！」

芹真が叫ぶ。
飛行艇の真下から上昇を続ける。

やがて迫る飛行艇の腹。大きい。
水面発着が可能な構造の水上飛行機。
船の機能と飛行機としての機能を兼ね備えた乗り物。

インカム越しにボルトの声が伝わる。

『いってらっしゃ～い！』

上昇を止めたボルトは3人を見上げ、手を振った。
それでも芹真から指示があるまで操作をやめてはいけない。未だに3人を飛ばしているのはボルトなのだ。

上昇しながら芹真は急いである物を取り出す。
拳銃。
見たことのない……しかし、どこにでもありそうな拳銃だった。

「スピードダウン」

『了～解！』

上昇速度が落ちても急激に縮まる飛行艇との距離。

このままでは船底と激突してしまう。

だから、芹真は右手に持った得物の銃口を向けた。

カンカンカンカン――ッ！

弾丸が放たれる。

その銃声はトキの予想を大きく外れるモノだった。

アルミ缶でも叩いたような銃声。

今まで聞いたこともない音。

より無機質な響きは実銃でなく、トイガンを連想させた。

凹む。

それでも――連射が続く――十数発の弾丸は飛行艇の船底に大きな、それこそ致命的に大きな窪みを作れるだけの威力を秘めていた。

綺麗な円形状に、奇妙な弾痕。

ヘコみがつくるサークル。

その中心は圧倒的な威力の前に亀裂を走らせていた。

「いいぞ、藍！」

次に動いたのは鬼の彼女だった。

トキたちはすでに亀裂の目前に達していた。が、現時点で激突は必至。

だから彼女の出番なのだ。

「理壊双焔破界」

両の手に現れる金棒。

炎を纏った金属の肌が船底を焼き溶かし、船底を吹き飛ばす。

こじ開ける鉄の腹。

金切音と上空の風が耳に痛い。

力と質量のぶつかり合いが生む結果。

耳ざわりな音と、金属摩擦による火の粉、破片。

芹真が歪めた船底を、更に藍がこじ開けた。

（通った！？）

「――んだっ！？」
「敵襲！」
「すぐ伝えろ！」
「包めボルト！」

硬い床に足が着く。
だが、芹真たちが立っている場所はあくまで虚空。
ボルトがステルス船全体を光のベールで包み――その内側――光の上に芹真たちは立っているのだ。
一瞬、足元の夜闇に目がくらむ。

トキは芹真に服の後を掴まれながら、船内のそいつらに顔を晒す。
その隣では藍が周囲の状況を確認していた。
芹真の手から解放され、床に足をつける。

藍も芹真も穴の上から床の上へ移動する。2歩。
だが、これ以上は進めない。
こちらに向いた銃口が自然と足を止めた。

どうやらここは貨物室らしい。
無数のコンテナが壁際や中央に積まれ、蓋を開けられたり、腰掛とされたり、テーブルの代わりとされ、そこかしこにその姿を見せていた。

軽く周章狼狽するトキの横で芹真は――

「ど～も、芹真事務所です！
この船を墜としに来ました！」

……早くも喧嘩を売っていた。

第２２話－Ｇｏ　ｔｏ　ｔｈｅ……！－（後書き）

凶は海の上を早足で歩き、日本を目指していた。

（早く会ってみたい！）

いま、世界に2人しかいないというＳＲの持ち主……

色世トキと、そのＳＲという力に。

第２３話－芹真事務所ｖｓ黒羽商会！－（前書き）

芹真事務所の襲撃。

黒羽商会はそれを予測していた。

何故なら、ナイトメアの肩を持つのが黒羽商会であり、僅かながらも協会と繋がりを持っているのが芹真事務所なのである。

協会の依頼を受け、攻撃を仕掛けてくる可能性は高い。

しかし、黒羽商会に取引をやめるつもりはなかった。

客を満足させ且つ、芹真事務所を撃退する。

黒羽商会の４人はそれを目標として、今回の取引に臨んだ。

そして、予想通り、芹真事務所は現れた。

……生身で来るとは思っていなかったが。

（スティンガー持ってきた意味無ぇ～！）

一名、大いに嘆いていた。

第２３話－芹真事務所ｖｓ黒羽商会！－

最初の振動は、船に乗り合わせた者の大半に不審を与えるのに十分な効果があった。

「何だ、今の揺れは？」

お得意である買い手が訪ねた。

代表同士で向かい合って支払いの額を決めている最中の事だった。

「ジュリー、見てきてくれ」

この船で行われる取引の責任者はナイトメア武装派、妖怪のＳＲだった。

名を、瀬賀駆滝（セガ　クロウ）と言う。

彼には男女２人の部下がついていた。

女性がコンテナからコックピットまで走り、状況を確認する。

「さて何番の子が……お望みでしたっけ？」

「２番、５番、７番のガキを貰おう」

「了解。では確認を。
まず銃火器が5箱。
薬の箱が1つに、当機に積載されていないモノ2つ。こちらは入金を確認し次第、そちらでご足労願うほかありません。暗証番号はこちらになります」

着々と進む船内取引。
それはナイトメアの武装派の火器調達であった。
協会との戦争に必要な武器。
築いておいて損はない友好関係。
そのベクトルの全ては、協会を破るために向いていた。

「最後に“器”3基の引渡し。
内容は神隠しが1、預言者が1、魔術師が1。
――以上で間違いありませんね？」

「ああ。
しかし、まぁ、よく預言者なんか見つけられたな。
ボスも驚き喜んでいたよ」

「偶然ですよ。
それに、預言者を作り出したのは器の実験です。
パンドラプロジェクトがあったからこそ、器実験は成功を収めることが出来ました」

「確かに。
だが、パンドラも失敗したと言う訳じゃない」

「そうでしたね。
正確には妨害され失敗しただけですから」

「幸運だったよ。
俺たちの仲間に、あの計画で発現したＳＲの１人を迎え入れることが出来るんだからな」

「神隠しですね？」

「“他の奴に”だが、俺は１度殺されかけているから神隠しの威力は知っている。
味方になると思うと、おっかないような頼もしいような、もどかしい気持ちさ」

「それでもまだ１３歳の子供なんですから、しっかり面倒は見てやってください」

足元が揺れる。

「可愛がってやってやるさ」

再び機体が揺れる。
買い手側も、瀬賀も不審を感じずには居られなかった。

直後、銃声と悲鳴が上がる。

「……皆さん。
少々騒がしくなって参りましたので、慌てずに避難口へ移動してください」

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第２３話－

－芹真事務所ｖｓ黒羽商会！－

床に大穴を開けられた格納庫。
そこでは今、混乱と怒りと衝撃で震えていた。
唖然とする者、体勢をなおす者、怒気を含んで叫ぶ者、四の五の

言わず銃を構える者、ＳＲを解放する者。
そいつらに囲まれ、第３格納庫の中央で――

「じゃあ、藍はブリッジを制圧。
トキはオレと一緒にいくぞ。
ボルト、聞こえるか？」

『聞こえるよ～』

仕事の確認とインカムのテストを実行する芹真。
トキも支給されたインカムが通常に機能することを確認した。

「悪いが船を持ってて貰えないか？」

『船を？
いいよ～』

どんな会話だ……

うんざりしつつもトキは周囲に目を配る。
屈強な男達が多数。
中には女性、スーツに身を包んだ青年、厳つい顔つきの熟年と――
――人外が少々――とにかく老若男女バリエーション豊富。

「ここにいる全員がＳＲだと考えて間違いないことを忘れるな」

警告１。
銃相手ならどこか安全な場所に身を隠れればやり過ごせば問題は無い。
だが、敵がＳＲという力を持っているのなら、銃弾とはまた別である。
常識では考えられない力で襲い掛かってくる者もいれば、特殊な方法で仕掛けてくるヤツだっているのだ。
前者はトウコツ、後者はイマルが良い例だ。

「自分の安全を図るために全力を尽くせよ」

警告２。
つまり、一緒に居ること居る。がカバーはしない。
トキは憤りを覚えた。

何の為ここに連れてこられたのか？
足引っ張るかもしれないんだよ？
というか、オレ死にたくないんですけど……

「ところで、お前武器持ってる？」

警告３……というより注意。
丸腰です。

芹真さん、もう少し人の話を聞いてくださいよ。
言い出せなかったオレも悪いだろうけど……

「一段：茨」

藍の足元からイバラの鞭が現れる。
それを引き金に芹真も、相手も、全員が同時に動き出した。

「叩き出せぇ！」
「なめるな！」

銃撃が始まり、
撲滅が始まり、
戦闘が始まる。

「死ぬなトキ！」

（それ何日か前にも言われたような……！）

この場で動き出した殆どの者が、最初の半歩だけ移動した――その瞬間――芹真という1人のSRが、どんなモノよりも早く動いた。
人より、SRより、銃弾よりも速く。

一瞬後に展開された残骸と血飛沫、破壊と瞬殺の光景。

切り落とされた突撃銃。
力づくで打ち砕かれた短機関銃。
瞬く間に分解された拳銃。

散弾銃を撃ち抜かれ、更に人体まで吹き飛ばされた中年。

蹴り飛ばされた壮年。
首を折られた男子青年。
体をくの字に折り曲げ、吹き飛ばされた老人。

心臓に貫き手を喰らう女性青年。

頚動脈を切り裂かれ、
両目を貫かれ、
五臓六腑、いずれかを破壊される兵士達。

床は凹み、
壁はひしゃげ、
コンテナ吹き飛び、電灯が割れる。
吹き飛ばされたモノが二次災害を振り撒いた。

それが、芹真の行動による一瞬の破壊劇。
この場の半数近くを一瞬で片付けてしまったのだ。

「止まれ！」

トキのタイムリーダーが発動する。
半数近くが戦闘不能になったとはいえ、それでも敵は多勢。
しかもＳＲでありながら、強力な銃火器で武装。

だから、トキはタイムリーダーをフル活用して逃げ回ることを選んだ。

止まった時間の中を移動する。
それがトキだけに出来ること。

視界からトキが消えた瞬間、芹真は再び動き出した。

この場にいる全員を倒す。
武器を扱う前に、ＳＲの力を使い始める前に。
それが攻撃になり、防御になる。

掌底で相手の顎を捉えて打ち上げた。
殴られたそいつが天井にぶつかり、落ちてくる。芹真はその間に数人を殴り飛ばし、蹴り飛ばし、投げ飛ばす。
そして、落ちてきた奴をタイミング良く、殴り飛ばす。
人間大砲、とまではいかないものの、それなりの武器にはなった。

着地してすぐ、背後に蹴り足を飛ばす。
相手の胸を捉えた。
蹴り飛ばした感触から肋骨数本だとわかる。

更に銃撃。
１発の銃弾は３つの人体を貫通。有り余る破壊力で、背後のコンテナをも破壊した。
降り注ぐコンテナも全て撃ち壊す。

金属のコンテナだろうと1発で破壊できる。

「芹真、先に行くわよ」

コンテナを撃ち壊して遊ぶ芹真に、藍は声をかけて走り出した。
真っ先に仕事を終わらせる。
それが藍のやり方だ。
仕事に関しては真面目で私事を挟まない。

芹真が半数以上を片付けている傍ら、藍が残りの敵を片付けていたのだ。

「おう、気をつけろ」

トキはその2人の行動を見て——正確には、行動が終わってから認識した。

芹真の戦い方は、鋭い爪と拳銃、常識を超えた超高速移動による撹乱戦闘。
眼にも止まらぬ格闘から繰り出される格闘、斬撃、銃撃のコンビネーション。
防御・抵抗どころか、反応することすらままならない一方的な戦闘スタイル。

風を切る銀爪。　ボディアーマーを貫き、人体に大きな風穴を開ける。

一方、藍はオリジナル陰陽術もどきと金棒、鬼の怪力を駆使した火力戦闘。
近付けば鬼の怪力と金棒の餌食。
離れれば他の術によって攻撃を食らう。
距離を取って銃撃を浴びせようが、茨の鞭によってほぼ全ての弾丸は叩き落されるので意味が無い。

1人、また1人と……2人は確実に相手を無力化していく。

金棒一閃。
藍が最後の傭兵をミンチに仕上げたのをトキは目撃した。

「無事かトキ？」

「……」

言葉が出てこない。
夢だと思いたい現実が目の前にあった。

銃、
鮮血、
人、
死体、
殺し合い……
粉々にされた死体。

原型を留めていない故か、それが同じ人間だったとは思えない。

こみ上げる吐き気、目眩。

（これが……？）

「トキ？」

顔を覗きこまれ、トキは退いた。
周囲の惨憺たる光景を見回し、再び芹真に目を向ける。

「……怖いか？」

トキの視線を受けた芹真が聞く。
それは、これから一緒に戦う上で重要なこと。

「信頼していいのか？」

「……」

だが、返ってくる言葉は無い。
芹真はトキの態度に迷いを見つけた。
分かっていたことだが、ここまで来てから迷われても正直困る。

「ここで脅えていてどうする？」

「……人、ですよ？」
「だから容赦しないんだ」
「逆じゃ、ないんですか？」

トキの声が震えていた。
芹真はため息をつき、少し考える。

確かに、トキが言っていることも間違いではないが……

「なぁトキ。
お前は身売買なんかする奴らを許すか？」

「人身売買、って……」

「ん？　どうだ？
どんな悪人だろうと人を殺してしまうことは法律的に悪い。
だから、いけないことだって、お前はソイツらを見逃すのか？
ちょっとくらい灸を据えれば丸くなると思っているのか、トキ？」

「芹真さんは殺すんですか？
その……何の迷いもなく」

「こいつらなら殺す。確実に」

「でも……」

「言っておくが、“悪人全て”じゃない。
あくまで“こいつら”だ。
全部が悪なら、オレもそれになれるだけの経験はしてきたし、今もしている」

芹真はとあるものを拾い上げてトキに投げ渡した。
トキはそれを取り損ねて床に落す。
しかし、それが何であるのかは簡単に理解できた。
それは軽く、楕円形の丸い金属製――

「バッジ？」

「黒い戦闘服着た奴ら全員、アメリカ大使館の男の部下だ」

それからもう1つ、今度は別の場所から拾ってトキに投げ放った。
今度はひし形のエンブレム。

「それがこの船の所有者。
取引相手は元パンドラ・プロジェクトの資金提供者。
どうやら、まだそれらしい事を続けているらしいな」

トキの頭にイマルの台詞が浮かんだ。
器実験。
芹真は屈(かが)んで拳銃を2つ、適当に拾いあげる。

１つはイスラエル製ハンドガン――Ｂｕｌ　Ｍ５ガバメントモデル
もう１つ、スイス製――Ｓｐｈｉｎｘ３０００スタンダートモデル

マガジンを抜いて動作確認をし、その２つのグリップをトキへと向ける。

「１つくらいは持っておけ」

「この人たちはお金が目的なんですか？」

トキはそれらの銃を受け取ろうとはしなかった。

「戦争に必要なモノはいつの時代も人と武器。　金は二の次さ。
そこらに転がっているコンテナはどれも空のようだが、どこかに兵器の入った物があるはずだ」

芹真とトキの目が合う。
沈んだ目と、何かに燃える目。

「……トキ、考えてみろ。
奴らは何度、こんな取引を繰り返していると思う？」

しばしの沈黙。
揺れる機体と、時折耳に届く悲鳴。

「何度も何度も繰り返しているんだ。
そして、武器の取引は戦争が終わるまで続く」

「それはつまり……協会がなくなるまで、ってことですか？」

「その間にどれだけの人間が死ぬと思う？
１００人や２００人程度じゃ済まない。
だから、いま壊すんだ。　兵器を売る奴らは片っ端から殴り飛ばす。
オレは悪事を見て見ぬフリする気は毛頭ない」

「……」

見て見ぬフリ。

厄介事は事情を知ってしまえば逃げることが出来ない。
だから厄介事なのだ。
それに最も有効な対抗策は“関わらない”こと。

見知らぬ他人の喧嘩に割って入れば、自分も殴られる。
他人の悪事を覗いて自分まで巻き込まれる。

だが、トキはまだ引き返せる時点にいた。
芹真事務所と共に戦っていくか、何も知らぬと主張し生きていくか。

（見て見ぬフリなんて……）

それを自覚しながらトキは、芹真の差し出したハンドガンを受け取った。

右手にＢｕｌ　Ｍ５。
左手にＳｐｈｉｎｘ３０００。

見て見ぬフリ。
自分が立ち向かうことで誰かが救われるのなら……
自分に殺気が向けられることで誰かが逃げ延びれるのなら……

いままで幾度となく決意し、悉く挫けてきた事。

誰かの為に――
見返りを望まず――
一切の邪心を抱かずに。

「やれるかトキ？」

「弾をバラ撒く程度ならできると思います」

「よし！
じゃあ、課題を出そう！」

それは芹真さんが得意とする、強襲課題。
まるで思いつきで言っているかのように、課題やら任務やら頼み

ごとが口から出るのだ。

「課題って、そんな、無理――」

「1発も食らうな。
プ・ラ・ス、
1発も外すな。
ついで、
敵の足か腕、または武器を狙え」

「なん……ですけ――」

「それまでオレは援護しないからな」

「……ど」

反論の余地もなく、芹真は足早に大きな扉を目指す。
第2格納庫。
トキは必死に付いていき――しかし――追いついた頃、芹真は既に扉を撃ち破っていた。

「撃てぇえっ！！」

扉の破壊、芹真の出現と同時に銃弾が飛来する。

「止まれぇっ！」

芹真の回避と同時、トキもタイムリーダーを発動して射線上から退いた。

方向は違えど、２人が取った行動は同じだった。

回避。

芹真は右、トキは左へ。

それと同時に撃ち返す。

素早いロックオンと繰り出す必殺の弾丸。

芹真は反時計回りに高速移動しながら１人ずつ破壊していく。

逆にトキは時計回りに移動した。

回避、ロックオン、銃撃の繰り返し。

芹真のように素早く敵に銃口を向けることはできないが、トキにはタイムリーダーがある。

停止に等しい低速時間帯の中、トキの意識は通常速度で、肉体は通常の二分の一の速度で動く。

トータルして、トキは芹真に負けず劣らず高速で動いていた。

（タイムリーダーを使えば結構いけるか！）

初めてトキが自らのＳＲの強さを自覚した瞬間である。

（後は、弾が飛んで来る前にコンテナの陰に隠れて――！）

無数の銃弾が壁やコンテナに弾痕を残す。
嫌な音がわずかな間隔を空けて耳に届いた。

いつもより重い体。
考えてみれば、夢の呪術師と戦っている時もこの感覚は体験している。
玄関ロビーの人ごみを踏み越えた時。

（でも、あの時よりは体が軽い……！）

静止状態に近い、緩慢な動き。
行動速度は通常よりも遅いが、銃弾を避けるには十分な状態。

コンテナの陰から陰へ、コンテナの隙間から相手を横目で確認する。
再び隙間に到達したら銃撃。
芹真の言いつけ通り、相手の手足か武器に狙いをつけて複数回引き金を絞る。

自分でも信じられないほど的確な銃撃が続いた。

血飛沫と破片が宙に舞い、バランスを崩していく傭兵たち。
トキが機動力を奪い、または武器を壊す。
そこへ芹真が銃弾を撃ち込み、確実に倒していく。

残弾の心配が頭の隅に浮かぶのと同時、

「はい、殲滅っと！」

マズルフラッシュに照らされた第2格納。制圧に要した時間は、芹真が扉を破壊してからわずか8秒。

10秒にも満たない時間で十数名の傭兵が消し飛び、絶命した。

床や天井に大小様々な穴が無数に穿たれ、景色は鉄屑と飛び血で塗り替えられ、動く者はトキと芹真を除いて他にいないという光景。

上半身を失った者。

頭部無き者。

命無き死骸達。

芹真は次の扉――第1格納庫――を目指した。

「大丈夫か？」

「はい」

「次が本番だと思っておけ。

全員がSR解放しているだろう。

その中に、特別注意しなくちゃならない男がいるだが……生き残れると思うか？」

「何のSRですか？」

「この船の持ち主だ。
妖怪のＳＲ、瀬賀駆滝（セガ　クロウ）って奴さ」

「妖怪って……あの、お化けとかの？」

「ただの“妖怪のＳＲ”なら雑魚……だが、こいつだけは一筋縄じゃいかねぇんだ。
トキ、弾切れてるぞ？」

言われて初めて気付く。
Ｓｐｈｉｎｘ３０００のスライドが下がりきっていた。
急いで探して拾い上げ、マガジンを交換する。
芹真は説明を続けた。

「妖怪のＳＲの中では一級品。
“Ｊｒ”或いは“殲命獄炎”――それが奴のあだ名だ。
俺ほどのスピードは無いものの、炎を操らせたら日本一」

トキはＢｕｌ　Ｍ５のマガジンも確認する。
残りわずか……
こちらのマガジンも取り替えた。

「性格の悪い化け狐……」

「狐？」

「それが瀬賀駆滝、九尾のＳＲさ」

『芹真さ～ん！
面倒臭いのが現れた～！』

静寂の溢れる格納庫に響く、ボルトの声。
トキは思わず耳を押さえ、芹真に至っては一瞬白目を剥いた。

気を取り直し、芹真が返答する。

「誰が出た？
もうちょい静かに話せ」

『霊装呪術師ぃ～！』

その音はトキや藍にも伝わっていた。
空気を切る音。銃声。強い風。

「来たか……
何とか抑えられるか？」

『殺して良い～！？』

「ダメだ」

第1格納庫へと続く扉が盛大に爆ぜ飛んだのは、芹真が言い切るのと同時だった。

重厚な金属の扉が蕩け、熔解して多大な熱気と火の粉を振り撒く。
それは火災を誘発させるに十分過ぎる熱量を伴った炎の塊。

「ボルト、こっちも面倒なのが現れた。
また後で会おう。間違っても殺すなよ?」

一瞬で火炎に包まれた第2格納庫。
炎の揺らめきが不気味に周囲を彩った。

「会えるもんなら会ってみやがれよ、芹真」

扉の向こうに姿を現した2人の男。
1人はスーツを着た細長い日本人。
もう1人は戦闘服を纏った筋骨隆々のモンゴル人。

「よぉ、瀬賀。
仕事はうまく行ってるか?」

「ぁあ?
芹真、営業妨害だとわかっていてこんな……」

「やっているに決まってんだろ?」

「な、貴様ぁ！」

落ち着き払った瀬賀に対し、傍らのモンゴル人は怒り顕わに震えていた。
そして、藍の同様、どこからともなく得物を取り出す。
左手にサブマシンガン：Ｖｚ６１スコーピオン。
右手に鉞（まさかり）。

「タウ、あの少年を確保しろ。
あれが色世トキだ。商品価値は計り知れない。
なるべく壊さないように捕獲してくれ」

「あの人狼はクロウがやるのか？」

「俺直々にやらず、誰がやるんだ？」

２人は相手を目の前に堂々と会話を進めた。
対抗して、

「じゃあ、トキ。
そっちの木偶の坊を頼む。いや、木偶の牛か。
ああ見えてもダチョウみたいに速いから気をつけろ」

「アレ扱いするなよ……」

「俺は狐狩りしてくる」

「え？

いや、俺には無理じゃ――」

「やってから無理って言え」

芹真は言い放った。

少しは反論を並べたいトキだったが、あっさりと切り捨てられたので諦める。

どの道、逃げ場はない。

それくらいなら、いっそのこと潔く――

「誰が木偶だってぇ！？」

木偶と言ったのが芹真にも関わらず、巨躯はトキに迫った。

仕方ないと、トキは銃を握り直してコンテナの物陰へと走る。

だが、すぐに身を隠すという行為が無意味であると知った。

（……っ！

コンテナごと！？）

力任せに振られた鉞（まさかり）の前に、金属製コンテナは無いも同然。

まるでダンボールでも裂くかのように、硬質な物質を切断してみせた。

当たれば即死は免れない。

次の攻撃に備えてトキはモンゴル人から離れ、２つの銃口を向けた。

しかし、モンゴル人は銃口を向けたまま足を止めていた。

（停止？）

では、

（――ない、ＳＲを解放したんだ！）

男の姿が次第に変化していく。

人から、人牛へ。

赤い体毛がほぼ全体にわたって生え、肌色が見えなくなる。

「名乗っておこう。

牛人のＳＲ、タバール・ウラフ！」

「……えっ、と、タイムリーダーのＳＲ、色世　時」

申し訳程度の礼儀を済ませた後、３つの銃口が火を噴いた。
２丁拳銃による乱射と、ＳＭＧ（サブマシンガン）による連射。

トキはタイムリーダーによる高速移動で銃弾を躱し、コンテナの影へと飛びのく。
ウラフは銃弾を跳ね返す強靭な肉体を盾に、急所だけを守り隠しながらトキを追った。

追撃開始の際、ウラフの側頭部から2本の角が生える。

牛人から逃げる途中でトキは気付いた。
タイムリーダーの効力が落ちている

（さっきよりも銃弾が速い！）

突然の効力減少。
辛うじて弾丸は避けられるが……このままタイムリーダーの効果が完全に切れたら勝ち目はない。

背後から牛人が迫った。
進路上の遮蔽物を力任せに薙ぎ払う。弾が続く限り、トキが視界に入り次第容赦なくＳＭＧの銃撃を繰り出す。

タイムリーダーに頼っていられない。
早期決着に臨まなければ、敗北の確率が上がるばかりだ。

（何とかしないと！）

怒りまかせに仕掛けてくる牛人。
逃げながら抵抗するトキ。

そんな2人を他所に、第2格納庫の中央でも戦いが始まろうとしていた。

「お前ん所の牛はだいぶ溜まっているみたいだな、瀬賀？」

「ああ、なにせ多忙でな。
お前の暇な事務所と違うんだよ芹真。
まぁ、今回の仕事が終わったら休暇を取るつもりだったが……」

「このオンボロでどっか行くって計画だったのか？」

「……だから、テメェをぶちのめさなきゃ気が済まねぇんだよ。
修理代を寄こしやがれ！」

火炎に包まれた妖狐と人狼。
睨み合いながらそれぞれの得物を取り出す。

対物拳銃と獄炎。

どちらが有利でどちらが不利なのか、お互いにそれを理解しながら向き合っていた。

スピードなら芹真。

置かれた状況なら瀬賀。

だが、

「炎に包まれた時点で俺の勝ち……そう思っている時点でお前の負けだぜ、瀬賀」

「思ってなどいない。

が、どうやってこの状況を切り抜けるか気になってなぁ、芹真」

瀬賀は両手に火炎を纏う。特に指先へと炎が集中する。

それでも、芹真の顔から余裕の色が消えない。

「お前、置かれた状況を本当に理解しているのか？」

「やってみろよ」

炎が芹真の足元から、まるで意志ある生き物のように迫る。

通常の炎ではありえない動き。揺らめきより早い移り火。

だが、空振りに終わる。

芹真は天井を握り掴んで逃れた。

そんな芹真に瀬賀本人が迫る。

獄炎を纏った手刀。

天井の金属を溶かして切り裂く。が、そこに芹真の体はない。
ぶら下がった状態から一気に反動をつけて飛んだのだ。
2人の立ち位置が変わるのと同時、芹真の銃撃が妖孤の足元を削いでゆく。

「その程度かよ！」

銃弾は燃える床と焼かれたコンテナを捉えていた。

しかし、弾は外れた。
飛び散る火の粉を払いながら瀬賀は視界に芹真を捉える。

「焼け死ね！」

「やってみろ！」

芹真は格納庫内で止まることなく動き続け、瀬賀の炎が多方向から複数で芹真を追う。

コンテナの上を逃げ――溶かす――銃撃。お互い外す、外れる。

囲むように迫る炎の上を逃げ、銃撃。
次の炎が襲い掛かった。が、空中では逃げ場がない。

カンッ！

芹真は銃撃で獄炎を殺す。
船底を易々と窪ませる拳銃から繰り出される銃撃の風圧は予想以上に強く、一般的な銃の常識を軽く超えていた。
着地。
獄炎が一瞬の隙を突いて芹真の足に絡もうとするが、紙一重で逃げられる。

芹真は壁とコンテナの間を走り抜け、その後を爆炎のような熱風と殺意が追ってきた。

「当たってねぇぜ！」
「お前もだ！　芹真！」

コンテナを薙ぎ払う、火炎、火焔、火宴。
勢いあまった炎が部屋を隅々まで炙(あぶ)った。

「熱っ……！」
「うおっ！」

第2格納庫“全体”が火炎に包まれていく。
金属や死体は溶け、電気系統は機能を停止し、触れるもの全てを飲み込んだ。

そんな強大な獄炎の力は、他に向かい合っている2人の戦いを妨

げた。
時間剥奪者と牛人。
トキは次なる部屋へ、ウラフは元の部屋へと逃げ込んだ。

（セガの奴、相当頭にきているな！）

（芹真さん、この機を墜とす気じゃないよな……！？）

体勢を立て直し、トキは再び銃口を向けた。
物陰から物陰へ。
隙間から銃撃を繰り出しては、相手の銃弾から逃れる。
遮蔽物を手当たり次第破壊するウラフ。
直線的にトキへ迫りつつ銃弾を続ける。

（なんて奴だっ！
まるで銃弾が効かない！）

物陰でリロード。
ＳＭＧの銃弾がコンテナをノックする。
すぐそこまで来ていることがわかった。
近づく銃口に恐れを抱きながら、それでもスピーディに新しいマガジンを装填する。

右手が１８発、左手が１６発。

しかし、両方とも口径が９ｍｍのため、弾数はあるが威力に乏しかった。
普通の人間を仕留めるには十分だが、ＳＲには通用しない。

（牛人のＳＲって言ったな……）

鉞の鋼刃が真横にその姿の見せ、コンテナを割った。
金属同士が響かせる嫌な音をＢＧＭに、トキは前へと転がる。

そこへウラフの銃弾が襲い掛かった。

（近づけないし、遠ざかれない！）

離れれば銃撃。
近付けば斬撃。
しかも、牛人にとってコンテナは無いに等しい。
トキにとっては重要な物陰であり――しかし――場合によっては致命的な障害物という矛盾した存在であった。

身を隠しつつ銃撃するが、相手に銃弾は効かない。
効力の減少したタイムリーダーでは銃弾を避けることも難しくなってきた。
あまり時間をかけていれば、いずれ銃弾か鉞の餌食になることは明確である。

「ヤバイっ！」

物陰から飛び出したトキに鉞が襲い掛かった。
頭上からの振り下ろし。

「止まれぇっ！」

トキは咄嗟に2つの拳銃を交差させて防御姿勢を取った。
Ｂｕｌ　Ｍ５の銃身に鉞が刃を入れた瞬間、牛人の動きが鈍る。
トキはＢｕｌ　Ｍ５を空中に置き去りにし、その状況から横へと、鉞の軸上から逃れた。
空中に残されたＢｕｌ　Ｍ５のフレームが切られ、スライドがひしゃげる。
バレルを綺麗に切断され、スプリングやＳＰガイドが飛び出し、その残骸を辺りにばら撒いた。

「クソッ！」

タイムリーダーの効力は減少しているものの、トキは緩慢になった世界で通常と同じ速度での移動を実現していた。
横に退避した直後、鉞が金属の床を叩く。
次に銃口がトキに向いた。
今度は狙いも何も無い、乱射。

トキは身を縮こまらせた。

――立たなければやられる！

頭でわかっていても、足が竦み、身が震えて立ち上げれない。

そんなトキを見て……――

ウラフが乱射から連射に移行しようとした時、Ｖｚ６１のマガジンが底をついた。

止んだ牛人の銃撃にトキは顔を上げる。

が、遅い。

「武器を捨てろ」

次の行動も、牛人が１歩早かった。

弾切れになったＶｚ６１のリロードをあきらめ、一気に距離を詰める。

鉞を右頚動脈に突きつけられ、トキは地面を背にしていた。

（銃声が止んだ？）

その異変に芹真の顔が第1格納庫に向く。
トキと黒羽商会の牛人がそこへ飛び込んだ瞬間を芹真は目撃した。
2人があそこで戦っていることは間違い無い。
問題は、なぜ足音や銃声が途切れたのかである。

「そらぁっ！」

一瞬の隙を突いて、瀬賀の回し蹴りが芹真の拳銃を弾き飛ばした。
背を向けた瀬賀を突き飛ばそうとするが、それもままならない。

（ちっ！）

熱気が芹真の肌を焼く。
相手は九尾のＳＲ。
炎を使わせたらバーベキューから戦争までこなす、炎のエキスパート。

（これが火焔の尾か！）

後退しながら瀬賀の行動を見定める。

一瞬前に居た空間を火焔の尾が薙いだ。
火の粉を散らし、異常な熱気を撒き散らした。炎を巻き上げ、次

なる火種を飛ばす。
それが質量を持った炎“火焔の尾”
攻防一体で、攻撃を外しても次の攻撃へのつなぎを撒き散らす。

芹真はＳＭＧ‥ＨＫ　ＵＭＰ４５を拾い上げ、セミオートで瀬賀の四肢を狙う。
３２口径のフルオート。
マズルフラッシュと獄炎の共演。
小さな爆音と鼓膜を衝く銃声。

しかし、２５発の弾丸は瀬賀に届いていなかった。
すべて直撃する前に火焔の尾に阻まれ、気化したのだ。

「今のオレは2万度までホットに出来るんだぜ?」

「そりゃ凄い……」

ＵＭＰを投げつけ、更に手近にあった小さなコンテナボックスを蹴り飛ばす。
投げ捨てたＵＭＰが溶解し、次いでコンテナも気化してしまう。

更に銃撃を加える。

右手のショットガン‥Ｆｒａｎｃｈｉ　ＳＰＡＳ１２。
左手のＳＭＧ‥ＦＮ　Ｐ９０。

１２番ゲージの００バックを7発――1つの筒に9つの粒弾で――計６３発の連射。

5．７×２８ｍｍのフルオートで５０発。
両手合わせて、１１３発の弾が瀬賀に襲い掛かった。

「それだけか！」

が、瀬賀はそれを物ともせず、確実に銃弾を焼滅させながら距離を詰めた。
弾切れになった２つの得物を投げ捨て、芹真はコンテナの山を飛び越える。

「揺さぶれ」

物陰に着地するのと同時、芹真は言った。
それから自分のＳＲを解放する。
半分も解放していないが、それでも充分だった。

（あっちが火焔の尾なら……）

その変化は腕を中心に現れた。

黒ずむ指先。
膨張する腕の肉。
黒い指先に現れる、炎に照らされる金属質の爪。

その背後でコンテナの山が溶け崩れる。

「無駄だ、芹真。
僕に弾丸は届かない」

「やばいってヤツか？」

不敵な笑みを装って向き合う社長２人。

周囲は全て炎と壁に囲まれ、逃げ場が無い。
圧倒的有利は瀬賀。

しかし、特大の切り札は芹真にあった。

「はっ！
いまさら銀爪なんか出してどうするつもりだ？」

「お前に１発ぶち込むのさ」

「その前に焼け死んでみるか？
そうすりゃ現実が見えるぞ」

「おいおい……変な事言うなよ。
頭でも打ったか？」

芹真の１メートル左右と手前に炎。

背後は壁。
瀬賀本人との距離は3メートル。
どれだけ芹真が早く動き出そうが、瀬賀の炎の方がわずかに早いだろう。

「殺せるのか？」

「あぁ、いま殺して――」

その時、船が傾いた。
瀬賀が背後へと転がり落ち、同時に積荷の落下も始まる。

「なっ……！」

『これでいい～！？』

「上出来！」

９０度、真横に回転した船内で瀬賀は必死に降りかかるコンテナを弾きのけていた。
そこそこの重量を持った金属コンテナは重力を得て立派な凶器と化す。
常人なら運良くて軽症程度、運悪ければ即死級の殺傷力を、船内に積まれたコンテナは有した。

（狙い通り！）

瀬賀は存在型のＳＲである。
ＳＲを完全解放しても、殺傷能力が飛躍的に上昇するだけで体が丈夫になるわけでない。
むしろ、瀬賀のＳＲは完全解放に反比例してデリケートになっていく。
体力を犠牲にして攻撃力を高める、というものなのだ。

（情報有難うだ、ワルクス！）

（空箱降ろしとくべきだったか！）

上空から襲う複数のコンテナ。
時には武器を詰め――
ある時には食料や医薬品――
大きなコンテナにはバイクや人を積んだこともあった。

幸いにも特大サイズのコンテナはしっかりと床に固定してあるので落ちてくる心配はない。

問題は小さいコンテナ――
そして、それを盾にし、いつの間にか至近距離まで迫っていた芹真。

銀爪が走る。

瀬賀は咄嗟に炎の鎧を全身に纏うが、芹真の爪の方が断然早い。

攻撃を――食らった――？

そう解釈していいのか、瀬賀は一瞬悩んだ。

（掠めた……だけ！？）

ネクタイの半分を切り落とされただけで、瀬賀本人には傷一つついていなかった。

圧倒的に芹真の方が早かった状況で。

胸襟が血飛沫で染まっていてもおかしくない攻撃のはずだった。

「いつまで篭っている気だ？」

炎の向こう。

挑発と理解しながらも瀬賀は芹真に顔を見せた。

火焔の尾で作った炎鎧の正面が開く。

「篭ってなんかいないさ」

「へぇ……そうか」

芹真の手でその得物が光った。

瀬賀が蹴り飛ばしたハンドガン。

再び炎鎧の正面が炎で覆われた。

これで、弾丸が瀬賀本体に届くことは無い。届く前に気化してしまう。

「これで同じ手は使えねぇぞ！」

瀬賀が叫ぶ。

しかし――芹真は発砲していた。

好機は突如として訪れた。

鉞を突きつけられたトキは、牛人とにらみ合ったまま呼吸を整えた。

タイムリーダーを使う余裕も、クロノセプターで鉞を消滅させる余裕も無い。拾い物の銃も１つは原型を留めておらず、もう１つは牛人の足の下。

突きつけられる物も鉞とＳＭＧの２つに増え、ますます不利な状況へと追いやられた。

そんな時、船が揺れた。

牛人がバランスを崩してＳＭＧの銃口が反れ、トキは鉞を力一杯押し返した。

一瞬理解に苦しんだが、インカムを通して伝わってきた会話で何とか納得できた。

（なっ……！？）

（ボルトが船を傾けたのか！）

芹真が船を持っていろと言った事を思い出す。

つまり、この船そのものが人質であったのだ。

それは地の利を制するということも意味する。

程なくして落下が始まる。

幸いにもトキのすぐ背後には壁があり、それがいま、床に変わった。

急いで立ち上がり、牛人を探す。

右の壁が床で、左の壁が天井……

そんな中、ウラフは鉞を床だった壁に突き刺し、必死に重力に抗っていた。

目と目が合った瞬間、Ｖｚ６１の銃口がトキを捕らえる。

この角度では脳天を撃ち抜かれる可能性が大きい。

（止まれ）

タイムリーダーが滞りなく展開する。
戸惑った分だけ、少しずつ使い方がわかってきた。
時間は止まらない。
だが、緩やかにすることは出来る。

（この力は……）

弾道から体を逸らし、滑り落ちてきた銃を拾い上げる。

（常に発動させておくのも悪くない……）

天井（かべ）を仰ぎ、銃を構えた。
グリップをしっかり両手でホールドし、照準を牛人に定める。

（けど断続的に使わないと、効力の落ちが早い！）

トキは引き金を絞った。

なるべく多くの弾丸を放つ。
トキは場所を変え、ウラフの銃撃を躱わしながら撃ち続けた。
ウラフもトキの銃撃に構わず、真っ向から撃ち返した。強靭な肉

体を信頼してこそ、弾丸を跳ね返す丈夫な肉体を信じてこその戦い方だ。
まともに撃ちあって勝てる相手でないことはトキは理解している。

（そのまま撃ってこい！）

こちらだけを向いてくれれば良かった。
周囲に気付かなければ良い。
落下と銃撃。
そして、振動がコンテナを動かした。

「ちっ！
そういう……っ！」

「そのまま喰らえ！」

ぶら下がるウラフの後頭部に金属のコンテナが直撃した。
1つじゃない。
連続して4つのコンテナが直撃したのだ。

さすがの牛人も脳震盪を起こしたのだろう。白目を剥いたまま鉞とともに落下してくる。
普通の人間なら死。

だが……

カチンッ！

油断しきったトキにタイムリーダーの警鐘が知らせた。

「嘘ぉっ！？」

落下しながら鉞を握り直しているウラフ。
そう距離は無い。トキは再び銃口を向けようとするが、落下してくるウラフの方が圧倒的に早い。

引き金を引いた瞬間、トキの腕はウラフに蹴り下げられて足元の扉に向く。
残った全ての銃弾を吐き出し、トキの得物が弾切れとなった。
ウラフの得物が頭上高く掲げられる。
右腕を掴まれた状態から逃れようと、トキは牛人の胴体に蹴る。
が、トキは再び力の差を思い知たった。

（ビクともしない！）

怒りの表情でウラフが鉞を振り下ろす。

トキはウラフの懐に身を滑り込ませて斬撃を躱わした。
コンテナが切断され、その下にあった扉にまで斬撃痕を残す。
ウラフの懐で、ダメもとで拳を放つが……

「いっ……！」

打ち込んだ左の拳と、握られた右腕に激痛が走った。
右腕が握り締められ、骨が悲鳴を上げ、血液の流れが滞る。激烈な痛みで空になったＳｐｈｉｎｘ３０００を落としてしまう。

「舐めるな」

腕を握り潰されると覚悟した瞬間――トキの体は宙を舞った。
それは力任せの投げ技。
力任せに無理矢理投げられたトキは右腕の異常に気づくまで時間がかかった。それは単に、右腕以上に鮮明で強烈な痛みを伴う傷を負ったからである。

「う……ぁっ！」

背中から乱積したコンテナの山に着地したのだ。
クッションもなしに背骨をコンテナの角に打ちつける衝撃。それは日常で滅多に味わうことのない激痛。
更に切断されたコンテナの断面が左太腿を切り裂いていた。それも複数、並列に。

「動くな、殺したら俺が叱られる」

再び鉞が突きつけられる。

「動……かない？」

鉞を前にしながら、トキはやっと右腕の異変に気付いた。
異常な熱を帯び、五指全てが動かない。
手首も、肘も動かない。動かそうとしても首筋の辺りに鋭い痛みが走るだけだ。

（痛……！
痛いっ！）

冷や汗が噴出し、左足の傷口から血が流れる。
鉞が頚動脈に当てられた。
ウラフの冷ややかな視線がトキに注がれる。

「動くなよ」

『そのまま聞いて、トキ』

ウラフの警告と同時――

突然、ボルトがインカム越しに声をかけた。

（ぼ、ボルト……？）

『自棄になっちゃってもいいから、まず相手を睨んで』

言われてトキの顔がウラフに向く。が、睨めるハズがない。
この圧倒的不利な状況で、これ以上相手を刺激して痛い目だけを見たくない。
そんな考えがトキにはあった。

『いい？
トキは芹真さんや藍ちゃんより強いＳＲを持っているけど、使い方がヘタ過ぎなんだよ。
ただそれだけ』

「無理だ……
勝ち目が……無い」

「よく分かっているじゃないか」

『じゃあ、ちょっとしたヒントをあげるね～。
トキのクロノセプターでも、自分の体を治すことはできるんだよ』

「わからない……」

「何ぃ？」

『トキ！』

一瞬、トキの体が跳ね上がった。

それにつられてウラフも半歩下がったが、すぐに鉞を握りなおす。

うっかり頸動脈を掻っ切ってしまう訳にはいかない。瀬賀の指示は商品として生きた状態での確保だ。

頭の中で指示を反芻するウラフと向かい合ったトキは、藍の介入に心から驚いていた。

『弱気にならないで！
あなたは1人でイマルに立ち向かったのよ！』

「……」

脳裏に浮かぶ男――イマル・リーゼ――夢の呪術師。

だが、あの時とは状況がまるで違う。

イマルと戦った時は、クラスメイトを守りたいという強い気持ちがあり、また戦った場所がイマルの創り出した夢層空間だった。どんなことでも実現する夢の世界。

死んでも死にきれない想いと、現実のような夢があったからこそ立ち向かえた。

だが、今日――ここには何も無い。

『ここで死ぬつもり？』

「……いや、だ」

でも、武器が無い。
あっても目の前の牛人には届かない。
パワー、スピード、体力……
相手はどれもが桁外れで、今の自分にはどうしようできない。

しかし――それでも、逃げたくはない。

言われなくてもわかっている。
逃げ出すなと必死に言い聞かせる自分が居た。

『やれること、やってみたいと思うことをやりなさい！
できそうなことから試してみれば――……』

『援護にいけないけど、言葉は届くから。
言葉が伝わるうちに出来ることをやっちゃって。ね？
まず、クロノセプターを使って、体勢を整えて』

ボルトの介入で通信は途切れた。
再び目の前の現実と向かい合う。

「殺しはしない。
安心しろ」

左の床、右の天井。頭上の壁、固定されたコンテナ。真下の壁、乱積したコンテナ。

クロノセプター。

こんな状況で一体どう使えばいい？

（鉞を――いや、間に合わない！
こいつを外に飛ばせばいいのか？
穴を開ける？
いや、避けられる！）

痛覚が脈打つ中、汗を流しながらトキは必死に考えた。
ウラフに睨まれながらも触感と視線で自分の周りを探る。

（回復に使え？）

確かにボルトはそう言っていた。
聞き間違えではない。

だが、それは難しい問題だった。
なぜなら、トキ自身がクロノセプターの特性を完全に理解してい

ない。その上、クロノセプター発動のコツさえ不分明なのだ。
使えるものなら今すぐにでも使いたいが、現実にはクロノセプターが発動した回数は非常に少ない。
トウコツの時に一度使い、イマルの時に一度使った程度。

（待てよ……あの時）

使用回数、たったの2回。
だが、その2回には共通点があった。

トキはいま、初めてそれに気付いた。
トウコツの時も、イマルの時も――

（……時間を奪ったのは、この手だ）

右手に目が向く。
そして、あまり自信はないが、もう1つの予感がある。

失敗すれば確実に次はないだろう。
覚悟を決めながらトキは両手に意識を注いだ。
コンテナに触れた両手。
体勢を保とうとする左手、力なく置かれた右手。ウラフにはそう見えた。

（イマルの夢の時みたいにいけば……）

身動きできない状況にトキは不確かな活路を思い描いた。

第２３話－芹真事務所ｖｓ黒羽商会！－（後書き）

炎鎧を纏った瀬賀を前に、芹真は間隔をあけて３発の弾丸を見舞う。

その３発目。

芹真は右手で引き金を絞るのと同時、左手の人差し指を銃弾と同じ着弾点に向けた。

銃弾と共に、銀爪が飛ぶ。
それが、芹真の切り札。
生身から放たれる、銀爪という弾丸。
過去に一度も防がれたことのない隠し玉。

ボディアーマーや大木はもちろん、戦車の装甲さえ貫通したことだってあるモノなのだ。

そして、それは瀬賀の炎鎧も例外ではなかった。

第２４話－Ｌｖ．２：ＣＣ！－

人気のない道路端に設置された電話ボックス。
それは、携帯電話が普及した現代において無用に等しい長物だった。しかし、携帯電話を持たない人間や携帯連絡機器を失くした人間にとって重宝する物である。

白州唯――街境

魔術師２人にとって、携帯電話とは縁遠いモノ。
定期収入もなく、通信する相手も碌（ろく）におらず、また詐欺にあった経験から２度と持たないと２人は決めていた。
電話ボックスの前で無駄に大きなリアクションを取る隊長から離れた場所で、魔術師：ベクター・ケイノスは尾行されていないことを確かめた。

怪しい視線、なし。
民衆の訝しむ視線以外、特に軽快すべき存在は見られない。

２人が所属するのはＳＲ無所属連合：ナイトメア。
その非武装派のリーダーから指令を受けたのが３時間前。
内容は、ある人物との接触をはかれという指令だった。その際、リーダーは相手を『介入者』と呼んだ。
受けた指令を遂行するため、隊長はボックスの真横で待機。ケイノスは大人しく電話ボックスから少し離れた電柱の側で待機した。
隊長は時間が近付くにつれ、珍しく表情を曇らせていた。

何故ならリーダーは、これから接触する相手を『増援』とは言わ

ず『介入者』と呼んだのだ。
そのことから推測できることは、相手が協会か武装派の連中である可能性が高い。交渉に抜擢されたとも考えられなくは無かった。
その責務の重さは、今まで傲慢かつ能天気に突っ走って生きてきた隊長には良いクスリだ。

（もう少し常識的に生きてくれれば……）

そんな心のつぶやきが口から出かけた時、無人の電話ボックスが鳴き始めた。
定刻。
時間を確認してから隊長：リデア・カルバレーが受話器を取る。

「私は悪夢（ナイトメア）を見た」

間違い電話か否かを確認する為の言葉。
ナイトメアの中でなら、武装派・非武装派を問わずに通じる言葉であった。

『君だな、リデア・カルバレー』

その声はリデアの予想を簡単に裏切った。
協会か、武装派のＳＲ……そう思っていたが、現実にはどちらでもなかった。

電話越しに声を聞いたリデアはすぐ、その声主を理解する。
隊長の様子を見てケイノスもそれを察した。

「まさか……！？」

『忘れた訳ではあるまいな、特級風司？』

「ええ、もちろんです！
そちらはお元気で？」

曇っていた表情が晴れていく。
そんなリデアの顔を見て、ケイノスは通信相手に疑問を抱いた。
誰と話せばあんな表情を見せるのか？

『明日、直に元気な姿を見せやるさ』

「楽しみにしています。
そういえば、上物のココアパウダーを見つけたのですが――」

『……その話はまた明日するとしよう。
１つ、頼まれてくれないか？』

「あなたから頼まれるなど、光栄です！」

『雲を用意してくれ』

「雲、ですか。
種類や大きさは――？」

『乱層、高層、積乱の3種類。
サイズは、白州唯を覆い隠すくらいデカイやつだ。
細かい配置等は明日説明する』

「わかりました！
明日までに用意すればいいのですね！？」

『ああ、できるなら昼までだ。
難題を押し付けて悪いな』

「いえいえっ！
勿体ないお言葉……！」

『それから、ベクターの子はいるか？』

「ケイノスですか？
ええ、居ます」

『ちょっと、代わってくれ。
話したいことがある』

電話ボックスのガラスを叩き、ケイノスを呼ぶ。

「あの御方だ」

「……？」

リデアに言われても誰のことなのか分からない。
隊長のような傲慢な人物でも遜(へりくだ)ることがあるという事実に驚きを隠せなかった。

とりあえず、敵じゃないということは隊長の態度で確信を持てる。

「代わりました」

『元気か？
空間殺し』

「……その声」

『忘れてなどいないだろ？』

「忌々しいほど覚えていますよ。
ですが、まさかあなたが介入者だったとは」

『殺したいか？』

「殺したい？
ハハッ……逆じゃないですか？」

『そうかもな。
お互い、殺り過ぎた』

「もう過去のことです。
……それで、どういった理由でこの電話を？」

『明日、オレはその街に入る』

「え？」

『私自身の為ではない。
ある人物がその街の住人に会いたがっていてな』

「たった……それだけで？」

『だが、世界を大きく動かす可能性もある』

「まさか、色世トキ？」

『鋭いな』

「この街で世界を揺るがす力を持っているのは芹真事務所とその周辺だけですから」

電話越しに失笑する介入者。

『“だけ”と来たか。
あまり大きなことは言わないように気をつけろ』

「では、改めて聞かせてください」

『せっかちだな』

「僕への用件は？」

『あぁ……これから言う奴らに声をかけてくれ。
そうしたら明日、君の父の日記を返そう』

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第２４話－

－（ＣＯＵＮＴ：２）Ｌｖ．２：ＣＣ！－

オレンジ色が揺れ移る。
溶解した鉄扉。獄炎に触れたコンテナが床や壁と溶け合った。
燃え盛らり、火の粉を撒き散らし、熱源を拡大していく。

第2格納庫の火災が第1格納庫へ飛び火する。

そんな中でトキとウラフは睨み合い続けた。
鉞(まさかり)を首筋に当てられたトキ。圧倒的不利な時間が続く。
火焔は容赦なく機内・格納庫内の温度を上げていく。ハザードランプが引っ切り無しにがなりたて、炎獄と共に赤を出演する。

しかし、トキの耳にはランプの音も火の爆ぜる音も届いていなかった。

（これは……？）

麻痺に近い状態に陥っていた右腕に痛覚以外の感覚が灯る。

右手に生まれた、体温や血液循環、脈動とは違った感覚。
そこから連想される、日常では体感することの出来ないクリアなヴィジョン。
不愉快にしか見えなかった火炎空間が、新鮮に見えた。
それは浮遊感とも清涼感とも違う。

（力が漲るって……こういうことか！）

その感覚は同時に痛覚を消した。
トキの体が沈む。
誰に目撃されることもなく、突如としてコンテナの一部が消滅する。

「動くな……！」

ウラフの鉞がコンテナと共に少しだけ沈んだトキの体を追う。
船の振動でトキが背にするコンテナの山がズレた、とウラフは解釈した。

（危ねぇ……！）

両手に感じる力の流れ。

右手……動く。
先ほどまでの痛みが嘘のようだ。
ボルトの言っていた回復方法をトキは見つけた。

両手で更にコンテナから時間を奪う。

（足まで届くのか？）

試験的にトキは意識を左足に向けた。

すると、見えない流れが変わっていくのが感じられた。
確かに流れている。

「……それはひょっとして通信機か？」

心臓が高鳴る。
ウラフは初めてトキの耳に付けられたそれに気付いた。

「貴様、連絡を取ったな！」

鉞の刃が皮膚に食い込む。

「ちょ――っ！」

思わずトキは腰を浮かせた。
右手で鉞の厚い刀身を必死に引き離そうとする。が、動かない。
食い込んだ刃が皮膚に朱を浮かばせる。

（待てよ、この状況……）

「今度少しでも喋ってみろ！」

（コイツの武器を消すことが出来れば！）

右手に意識を集中させる。

「その時は、容赦なくコイツをぶち込む！」

握られたウラフの大きな拳。
填められたアクセサリ兼メリケンサックが申し訳程度の室内灯と燃え盛る炎の灯りを反射させて輝いた。

だが、トキは物怖じせず睨み返す。

（奪え……）

視線をそのままにし、右手で僅かに相手の得物に触れた。
意識を右手に集中させる。
ひときわ強い流れが、トキの腕を通り抜けていく。

「クロノセプター！」

叫ぶと同時、ウラフは思わず右手を引いた。
ウラフが自分を殺せないことを逆手に取ったのだ。
トキが上体を起こした直後、ウラフの視界に奇妙なモノが飛び込む。

（なっ……！？）

それは刀身を失った得物、ただの棒切れと化した鉞だった。

逡巡するウラフの横を、トキは一瞬で通り抜ける。

（くっ！
このガキっ……！）

（間に合え！）

タイムリーダーが解け、同時にウラフのＶｚ６１の銃口がトキに向く。

降り積もったコンテナの山影までトキは走った。

振り返っている余裕なんか無い。

全力でコンテナを飛び越え、銃撃を躱わす。

コンテナと銃弾がぶつかり合い、火花を散らした。

山となっているコンテナの影に飛び込んだトキは更に突き進む。

（あった！）

床に転がったそれがトキの目に飛び込む。

それは切り壊されたＢｕｌ　Ｍ５。
もし、予測が当たっていれば……アレはまた使える。

移動しながら右手に意識を傾ける。
僅かな不安があり、そして希望への大きな予感があった。
壊れた銃めがけて走りながら、右手で横の壁（天井）に触れて時間を奪う。
時間を奪われた天井は表面の汚れや傷を失い、綺麗な面、曇りなき輝きを得た。

時間を奪う。
トキはその光景から、何となくその性質を理解した。

（時間を奪うと、過去に負った傷や汚れが消えるのか！）

右手の中に不可視の力を感じる。時間の流れを感じる。
奪い取った時間が行き場を求めて手中で回遊しているのを感じていた。

トキは足を止め、床に転がるＢｕｌ　Ｍ５を手に取る。

トリガーガードの端から銃身を切られ、更にマガジンが空になって軽くなっているＢｕｌ　Ｍ５にマガジンを装填した。
これがラストマガジン。
その背後でコンテナを蹴散らす音が響く。

（違うイメージだ。
タイムリーダーと同じようにクロノセプターが使えるなら……！）

タイムリーダーのコツならある程度知っていた。
強く、実現を願う気構え。
数秒、数瞬後の未来のイメージ。

右手に奪われた時間が、両手を通して銃へと伝わっていく。

それは――トキが思い描いた結果――望まれたモノの実現。

切り飛ばされた部分が、どこかへ消えてしまった銃身が、切り口から新たに生成される。
僅か2秒の願いで、Ｂｕｌ　Ｍ5は完全に元の姿を取り戻していた。
トキはスライドを引いて薬室に9ｍｍ弾を送り込む。

頭上から降り注ぐ火の粉、焼けた金属の破片。
いつ落ちてくるかわからないコンテナ。
そんな状況下にありながらトキは恐怖を押し殺し、正確に銃を操作した。

マガジン装填、スライド、装弾。

次の瞬間、トキとウラフの中間に位置したコンテナの山が蹴り飛ばされ、散乱する。
トキは振り返り、牛人は突っ込んだ。

そして、お互いの得物が敵に向く。

銃声。
直後、風切り音。
小さな船窓が熱気によってひび割れた。

「がぁっ……クソォっ！」

第2格納庫を包む火炎が自然の法則を取り戻す。
瀬賀の支配から解放され、無差別に周囲のモノを焼き上げていく。
勝負は一撃。
炎鎧を纏ったことが瀬賀の敗因だった。

「ふざけ……やがって……何、しやがった！」

「さすが九尾。
呆れるほど、もの凄い生命力だよ」

火炎に包まれ、瀬賀は大の字で天井（カベ）と向き合っていた。
そんな瀬賀の顔を、芹真は真上から覗き込んだ。

「これに懲りて、2度とこんなことをするんじゃねぇぞ」
「オレが、どんな商売しようが……テメェにゃ関係無ぇだろ！」

息を切らせながら瀬賀は叫ぶ。
瀬賀の感情の高ぶりに共鳴し、周囲の炎が勢いを増す。

「確かにそうだ。
だがよ、お前は自分の仕事がどれだけの人間を幸せにしているか考えたことがあるか？」

「喜ぶ奴等はいるさ！」

「馬鹿だけだろ？
じゃあ、逆に……テメェの仕事でどれだけの人間が不幸になっているか考えたことは？」

「オレに説教垂れるんじゃねェ」

「……だよなぁ」

芹真の左手が瀬賀の血で汚れた胸元を掴み上げる。
悪あがきで瀬賀は炎を纏った。
銃弾を気化するほどの火力はないが、人の肌を焼くには充分な熱の炎。
それでも芹真の手から力が抜けることは無い。

「お前さ、利害関係って知ってるか？」

「……知らず、に勤めが出来るか」

「商売やってく上で欠かせないよな。
でもそれ以上に大事にすべきモノがあるだろ？」

「……」

「偉そうなこと言っている俺だけどさ、実はオレもよく分かってないんだよ」

「じゃあ黙れよ」

瀬賀の体が宙を舞う。
頬に走る衝撃。壁に叩きつけられる背中。
炎が風で煽(あお)られた。
地面に膝が付くのと同時、今度は襟首をつかまれる。

「そんなオレでも絶対に守っていることがある」

瀬賀は出来る限りで炎を操り、火力を上げた。
直接炎が触れなくとも肉を、皮膚を焼くことは出来る。
だが、芹真の腕は微動だにしない。確かに焼けているにも関わらず。

「まず、飯を欠かさない」

「あぁ？」

瀬賀の視界からコンテナや壁、窓が遠ざかっていく。
その後、壁に激突してから投げられたと自覚した。

「次、社員のストレスを見抜くべきだな。
疲れているのか、怒っているのか、泣きたいけど泣けないのか……
ボケるなり、励ますなり、同情するのはその後」

床に足が触れる直前に芹真の手が瀬賀の喉首を掴み、再び投げる。
ダメージと戯言。
思考が追いつかない。

「それから、常に気前良く」

「ぐぅ……っ！」

立ち上がって火炎を全身に纏う。

灼熱の炎鎧。
銃弾を気化するほどの熱量を持つ、攻防一体の火炎能力。
近づくだけで大抵のモノは燃焼を始める。それだけの高温を有し

ているハズ……

それにもかかわらず、芹真の拳撃は炎鎧を貫き、瀬賀の頬を叩いた。

「個々の意見、一つ一つを大事にして――」

ふと、芹真の脳裏にトキの姿が浮かぶ。

偉そうに言っておきながら、芹真自身がトキの言葉を聞き流すことの方が多いという事実と思い返していた。

これといって間違った発言をしているわけでもないが、なぜか聞き流してしまうことが多い。

「――時には聞き流す」

自己正当化しつつ……

瀬賀の顎を掴みあげて壁へと軽く投げ飛ばした。

背中に痛みを感じつつ、瀬賀は背中の炎鎧を解いて壁の溶解を止める。

機内から夜空へ飛び出た所、無事に地面を拝む術を持ち合わせていない。

体勢を立て直し、再び芹真と向かい合った。

「分かったらとっとと帰れ」

「分かるかっ！」

「その腹の傷、これ以上やると死ぬぞ？」

「うるせぇ！
ここまでやられて引き返せるか！」

「そうか。
じゃあ、引き返してもらうさ」

芹真は、瀬賀と反対の壁に行き、そこに備え付けられているモノに手を伸ばした。

第1格納庫に苦痛に悶える2つの声が響いた。

（目は……普通の人間と、変わらなかった！）

トキは壁を背にしながら、左目を押さえてのた打ち回る牛人を見据えた。

2人の攻撃は同時だった。
ウラフの投擲とトキの銃撃。

トキの銃撃が見事、ウラフの左眼球だけを破壊。
殺さずに済み、同時にわずかな時間的余裕を手に入れた。

（いっ……！）

もちろん、トキも無傷ではない。
ウラフの投擲してきた物。それが、刃を無くした鉞の柄。
柄の先端を力任せに破壊し、先鋭化させてトキへと投げつけたのだ。

それは風を切り、トキの右肩――骨を砕いて、肉を裂き――貫通して壁に突き刺さっている。
辛うじて武器は落さなかったが、握っているだけで精一杯だった。

「ぐぁっ！」

肩と壁を貫いた棒をを引き抜こうとするが抜けない。
下手に動いても、激烈な痛みで動けなくなる。
涙で歪む視界の中、辛うじて左手で棒に触れた。

（消えろ……消えろっ！）

左手で時間を奪い始める。
しかし、トキのイメージは実現せず、棒は短くならない。

（左手じゃダメなのか？）

挫けずもう1度左手に意識を集中する。
痛覚がそれを妨げるが、極力棒を消すことに意志を注いだ。
今度は左手の中に時間を奪った感触が灯った。
時間が手の中を彷徨っている。クロノセプターは発動している。

しかし、体を貫いた棒に変化が現れない。

「クソガキがぁっ……！」

叫び声にトキの顔が強張る。
眼球を撃ち抜かれたにもかかわらず、牛人は立ち上がっていた。

ＳＭＧを捨て、鉞と左目を失った今、ウラフはメリケンサック片手にトキへと歩み寄った。失った左目の分だけ殴らないと腹の虫が収まらない。
ウラフには自由を奪われたトキがサンドバックのように見えた。

「ふざけやがって……」

「くっ……抜けろ！」

タイムリーダーで時間の流れを緩やかにするが、棒は消えない。
どれだけ意識を集中させても、棒は姿形を変えずに突き刺さったまま変化しなかった。

「覚悟は出来てるか！？」

タイムリーダーの効果が消えた時、牛人はトキの目の前に立っていた。

牛人が大きく振りかぶり、重い一撃が放たれた。
狙いは鳩尾。

「ォグッ……！！」

汗と涙が浮かび、胃の中身が逆流する。
右肩の棒が更なる激痛を誘い、トキの思考を乱した。

次の攻撃が来る。
同じくボディ。今度は連打。

「っ……！」

逃げられない状況。
防ぐことの出来ない打拳。

苦痛の時間。

全てが遠ざかる。そんな錯覚がトキの中に生まれた。

どうしてこんな所で、こんな目に遭っている？

霞む視界、歪む景色。

そこに写るのは、金属と屑鉄と火焔。

揺らめく赤に、申し訳程度に光を放つ屋内灯、殺意に燃える牛人の右目。

――助けて

（……え？）

一瞬の空耳。

そして、ウラフの拳撃がトキの混濁した意識を通常状態へと引き戻した。

「な……っ！

グッ！」

いま、自分の意志や願いとは違う声が頭に響いた。

明らかに自分のモノとは違うかすかな声。

だが、小さすぎて幻聴なのか、現実なのか区別がつかない。

『トキ～！
大丈夫～！？』

トキの耳にボルトの声が届く。
あらゆる痛みに顔が歪む。

「……回してくれ！」

『え、船？
ＯＫ！』

トキは途切れそうな意識の中、左手で奪った時間を自分の体の中へと流し込んだ。
今は少しでもまともな意識を保つこと。
気を失ったら負けだと自分に言い聞かせる。

「貴様っ！」

拳撃。
顔を横から打ち抜かれる。
その衝撃でトキの意識が飛びかけた。が、金属の断裂音が飛ぼうとする意識を繋ぎ止めた。

頑丈な鉞の棒が、トキと壁の間で折れていた。

同時、機内に変化が始まる。
急激な回転。
それはある意味、墜落よりもひどい光景だった。
床だった壁が天井になり、天井が壁に、床に。
上が上なのか、認識が追いつかない中、コンテナが容赦なく降りかかった。

「もっと回せ！」

それでもトキは要求を続け、ボルトはそれに応える。

「もっと！」

いまや飛行艇は巨大な乾燥機化していた。
回転する機体、弄ばれるように回って落ちる物、回っても敵を捉えようとするモノたち。
更に、ボルトはオマケと言わんばかりに縦方向の回転を加える。

横回転と縦回転。
第2格納庫と第1格納庫のモノが混じり合う。
コンテナ、屍骸、残骸、火災。

トキも例外なく弄ばれ、床なのか壁なのかわからない面で体を鞭打った。
空中に身を投げ出され、落下が始まる。頭上からの落下。

一番下の落下地点まで約６メートル。

「止まれぇぇ！」

全力で叫ぶ。
落下しながらトキの目はウラフを捉えていた。
ここで一番恐ろしいのは、牛人の存在である。
仮に、無事着地を果たしたとしても、奴は力任せに身を呈してまで突っ込んでくるだろう。

だからトキは――止まった時間の中で――勝負を仕掛けなくてはならない。それがトキに許されたアドバンテージだった。

今一度、突き刺さった棒から時間を奪う。
左手の中に、より大きな時間の回遊を感じるが、消滅しない。

（もっと……！）

更に時間を奪う。
そこで初めて、刺さった棒に異変が現れた。

（あれ？）

トキはその力が働いていることをやっと視認できた。

それは自分の予想とは全く違う形で作用していたのだ。右手のクロノセプターとは明らかに違う。時間奪取。
触れた部分から徐々に時間を奪い、比例するように対象を消滅させる右手のクロノセプター。

しかし、左は違う。

「棒が、透けている？」

棒の向こう側、めまぐるしく回り移る景色がそこに見えた。
直感がトキを突き動かす。
そのまま時間を奪い続けろ、と。

完全停止の世界が、わずかに動き出す。
だが、体感時間５秒で２ｃｍ程度の落下スピード。

トキの左手が時間を奪い続ける。
落下し終わる前に棒が消滅するという未来を確信した。
半ば透けていた棒が、徐々に透明に近づく。

（もう少し！）

右肩がうずく。
途切れそうな集中力を懸命に保ちながら時間を奪い続ける。

肩に突き刺さった棒が透明化していき、完全に消滅する。

それと同時、棒によって塞がれていた傷穴から大量の血液が滴る。
次にすることはその傷を奪った時間で治すこと。
歯を食いしばって痛みを堪え、イメージ。それから奪った時間を体中に流す。

傷口はがみるみるうちに姿を小さくしていく。
破れた皮膚が新たに組織され、筋肉や神経は繋がり、熱や痛みが引いてゆく。
それはビデオの早送りで植物の開花を見ているようなモノだった。
落下速度が増す。
タイムリーダーの効果が落ちていることは明確だが、まだ時間はある。

（右手……良し、動くぞ！）

トキは顔を上げ、落下してきたコンテナの角に手を伸ばした。
また少し落下する。
そうして少しずつ体勢を変え、地面に対して体の位置が９０度直角になった時、

（動き出せ！）

自らタイムリーダーを解除した。

視界から消えたトキを探すウラフ。

回転する飛行艇。
シェイクされる機内の床を一瞬だけ踏み、トキは再び時間を止めた。

（あいつは左目を失っている……）

完全に停止していない世界。
トキはコンテナや残骸を足場に、空中でトキを探しているウラフに接近した。
銃の残骸、コンテナやその中身から両手で時間を奪い、右手の中に集中させる。
コンテナの上からコンテナの上へ。
的確に足場を判断し、移動。ウラフの目前に迫る。

その時、タイムリーダーの効果が激減し始めた。

「ぬ――！」

（あと少し！）

考えてみれば今日ほどタイムリーダーを多発させたことはなかった。
夢の呪術師の時でさえ指の数ほどしか使用していないのに、今日はすでに指の数程か、それ以上この力を使っている。
加えて、トキは自らウラフの視界に入っていた。

「――るい！」

効果が完全に切れる。
最後の跳躍。
その途中で世界は正常な時間を取り戻した。
勢いに乗ってウラフへ突っ込むトキ。それを迎撃しようと拳を構えるウラフ。

空中で伸びる2人の腕。

トキの右掌がウラフの左目に触れ、ウラフの打拳がトキの胸に突き刺さる。

お互い空中でぶつかり合い、落下してゆく。
2人が床に触れた瞬間に飛行艇の回転が止まった。
照明のほとんどが機能を失った機内で、2人は同時に立ち上がる。

「なっ……！？」

先に声を出したのは牛人の方だった。
トキは息を切らせながらウラフの左目に視線を向ける。
ウラフは自分の左目に触れて驚いていた。

着ているシャツこそ血痕で汚れたままだが、銃撃で破壊された左目は視力・感触・視覚の全てを元通りに、在るべき場所に納まっていた。

「お前がやったのか？
シ……シキ……
トキ」

「俺は、あなたに恨みがあるわけでも無いし、戦う理由だって無い」

「そうか。それがコレか！」

「逃げることに必死で考えなったけど……スイマセン」

「はぁ？」

「手や足の傷だったら治るかもしれないけど、目は治らない」

「それを吹っ飛ばしたから謝るってのか？」

「ああ」

向き合いながら、お互い構えながら沈黙が続く。
十数秒後、沈黙は破られた。

『黒羽商会に告ぐ。
瀬賀社長はこの機を放棄することを決定した。
……ってことで！
この飛行艇と心中したい奴以外はとっとと機外へ逃げやがれっ！』

ブツン。
異常。じゃなくて、以上。
繰り返しはしない。

「今の、芹真だな？」

「……たぶん」

向かい合ったまま、２人は言葉を交わした。

「目を元通りにしてくれたことには感謝しよう。
が、一言。
お前が目を吹き飛ばせたのは、俺が怒り任せにお前を攻めたことが原因で、お前が謝ることじゃない。
礼を言おう。
自分の欠点がわかった。次は負けん！」

指を指されるのと同時、機体が揺れた。
２人は構えを解き、周囲に目を配る。

散乱したコンテナ、銃やその残骸、積荷。
申し訳程度に光を放つ照明。
格納庫の随所で燃える炎。

「生きていたけりゃ急ぐんだな！」

ウラフが走り出す。
言われなくても、死ぬつもりなど無い。トキもウラフと同じ方向へ走る。
第3格納庫にあいた穴。

ウラフは瀬賀を回収するつもりで、トキは芹真と合流するために第2格納庫を目指した。

2人の戦いは引き分けという形で終わったが、隣の第2格納庫ではしっかりと決着がついていた。
壁に背を預ける瀬賀と、コンテナに腰掛ける芹真。
そして2人揃ってタバコを吸っていた。

「真似するなっつってんだろ……」

「俺は真似してないさ。
ただ、このタバコがどんなものか興味があってな～」

……精神的暴力は続いていた。

「芹真さん！
この船墜ちるんですか！？」

「社長！」

第1格納庫から戻った2人に、社長2人が気付く。

「返しやがれ……俺のショートピース」

「悪りぃ、鉛弾しか残ってないんだ」

ウラフは脇から瀬賀を支え、穴へと向かう。
瀬賀は携帯を取り出し、誰にとも無くコール。

「ジュリー、撤退だ。
ギムレットにも伝えろ。
それと……迎えを頼む」

「迷子になるなよ？」

哀れみをこめ、芹真は手を振る。
瀬賀は憎しみをこめ、中指を立てて応えた。

「覚えておけ！」

低く抑えたウラフの怨嗟が芹真の耳をつく。
生憎、それは芹真が最も言いたかった言葉である。

「お前らこそ、これに懲りてまともな仕事始めろよ」

黒羽商会の狐と牛が第3格納庫へ歩み去る。

「芹真さん……」

「ん？」

「本当にこの船を墜とすんですか？」

「いや、協会の連中に引き渡す」

そう言われ、トキは腰を抜かす。
疲労と、緊張がピークに達していた。

「させねぇよ……」

それが、瀬賀の最後に放った一言。
トキと芹真が顔を向けた時、瀬賀とウラフは穴に飛び込んでいた。

対物拳銃のセイフティを外し、芹真は床に向けて発砲する。
金属の床を易々と貫通する弾丸も、見えない目標には1発も当たらない。

『芹真さ～ん！
前と後ろが燃やされた～！』

ボルトからの通信が入ったのはその直後だった。
芹真は舌打ちし、コンテナから腰を上げた。トキも急いで立ち上がり、第3格納庫へと顔を向ける。

「芹真さん！
俺、ちょっと確かめてきます！」

「は……何を？
って、今からか！？」

機体が大きく揺れる。
爆音。
瀬賀の生んだ炎は未だそこかしこで燃え続けていた。
増え続ける炎と黒煙、熱。

そんな中、トキは第1格納庫へと駆け込んだ。

散乱した足場に機動力を奪われつつも、気になるそれを聞いた場所へ。
助けを求める声。
残骸の中で立ち止まり、耳を傾けた。

確かに、誰かいる。
黒煙で咳きこみ、温度の上昇と爆発の連続で不安に駆られ、必死に助けを求めている声が断続的に聞こえた。

（あそこか！）

またしても機体が揺れる。

『ヤバイから急いで～！』

インカム越しにボルトがトキに知らせる。
この機が１分もつかどうか怪しい。

トキは微かな声を頼りにその扉へと急いだ。
瀬賀が最後に残していった火炎が格納庫内まで広がり、室内温度はすでに９０℃を超えていた。
どんな状況であろうが、ここは密売船だ。
人身売買――商品として捕らえられている人がいてもおかしくない。

「……け、て」

扉の前で、トキは生存者の存在を確信し――足が止まった。

（これは……さっきの！？）

目の前に現れたのは２つの扉。
亀裂の入った扉と、弾痕のある扉。

壁が床になっていた時、ウラフの鉞でつけた傷とトキが放った銃撃痕。

それは、空中で見た幻覚。

爆音。
振動の大きさから、爆発が起こった場所が近いと推測できる。
周囲の火炎も勢いを増し、あちこちでコンテナに積まれていた弾薬に触れて小さな爆発が起こった。

（幻覚じゃないのか？）

寒気を感じつつもトキは覚悟を決め、走り出す。
迷っていれば生存者を助けられない。

あの幻覚の中、トキは右の扉を選んでいた。
その先の映像は赤と黒。
予測できるのは――

（バック何とかってヤツか！）

左のドアを目指す。
弾痕で飾られた扉。
戦闘や爆発で重いドアは歪み、思い通りに動いてくれない。
全力で引いてみるものの、やはり微動だにしなかった。

「動けっ！」

靴の底で思い切りドアを蹴ってたが、ドアは微塵も動かない。
そこで、トキは左手でドアに触れた。

「熱……っ！」

一度手を引いたが、痛みより命を選ぶ。誰かを救う代償が火傷くらいなら、軽い。

（クロノセプター！
このドアから時間を奪い尽くせ！）

扉から奪った時間で掌の火傷を癒し、容赦無く時間を奪い続けた。
すると突然、扉の向こうから強烈なノックが始まる。
しかし、それは助けを求める為のモノではなく、まして、人の成す事では無い。

直後、歪んだドアと共に後方へ飛んだ。

原因は弾痕とクロノセプターと理解するまで時間はかからなかった。

時間を奪うことによって頑丈な扉を脆い物にしてしまい、質量的に薄くなった扉で弾痕は小さな空気穴へと変わり、爆発を誘発する。

結果、トキを吹き飛ばしたのだ。

『――――――！』

インカム越しに誰かが何かを叫んでいるが、その内容を理解できない。聞こえない。

爆発の衝撃に吹き飛ばされ、硬く、あらゆるものが散乱した床に背中を強打したのだ。

圧倒的な痛みが意識に問いかける。

死ぬか？

怒涛の勢いで押し上げてくる疲労感に見舞われながらトキは必死に耳を傾けた。

『もう保たないって、芹真さん！』

『トキは！？』

『だから、トキを待てって！』

この船が墜ちる。

早く脱出しないと、藍やボルトまで大変な目に遭ってしまう。

上体を起こし――火炎に包まれた――弾痕の扉、その奥に目を向ける。

そこに人が居た気配はあったが、生きている気配は皆無だった。

悔しさと虚無感が同時にこみ上げてくる。

助けられなかった？

なぜ救えなかったのか、誰に対してでもなく怒りが湧く。誰に対してではなかった。

自分に対する怒り。

全力でやったのに……

再び背中を床につけ、呼吸を整える。

『聞こえる、トキ！？』

『芹真さ～ん！

船が崩壊始めちゃうよ～！』

『まだ……』

外れたインカムから怒声が流れる。

（俺は帰っていいのか？）

誰も救えないまま、日常へと戻っていいのか。
目の前で消えてはいけない命が消えた。助けようとその場に居たのに、何もできずに、誰も救えないまま帰っていいのか……

「――――けて」

（……そうか、もう1つの扉）

トキは全力で抵抗した。
このまま帰らない。
さまざまなモノに触れ、時間を奪い、少しでも痛みを和らげながら立ち上がる。

（い……っ！）

立ち上がった時、金属――コンテナ――の破片が深々と太股に刺さっていたことに気づいた。
爆発と振動の間隔が早まる。
トキは足を引きずりながら、もう1つ、亀裂の扉を目指した。
背後で起こった爆発で躓きながらも前進を止めない。

すでに右も左も火炎に支配された第1格納庫で、トキは扉の取っ手を掴んだ。

熱を孕んだ取っ手を引きながら、トキはその光景と直面する。

炎に包まれた小さい部屋の中で、必死に助けを求めていた女の子。
オレンジの炎と、煤けた泣き顔の少女。耐火シートに身をくるんで耐えていたのだ。
室内の熱気を意に介さず、トキは急いで少女を背負い、女の子はしっかりとトキにしがみつき、泣いた。
よく頑張ったと励まし、トキはインカムを拾いに移動する。

数メートル歩いた場所に落ちているインカム。
熱でわずかに変形していた。

「芹真さん、女の子を……！」

「あぶない！」

叫び声と共に、トキは連絡を中断してタイムリーダーを発動させた。
のたうつ高電圧ケーブルを避け、トキは安全地帯を目指す。

（くっ！
通路が塞がれてる！）

度重なる爆発が、第2格納庫と第1格納庫を繋げる空間を塞いでしまったのだ。

「掴まっていて！」

少女を背負ったまま、トキは火炎の上を駆けた。
熱でトキの体に火がつく前に、火の無い場所へと移動する。
すでに体力の限界を迎えているにも関わらず、体は動いた。
窓際。
厚いガラスに反射する光炎。その向こう側に見える夜空。

夜空と火炎地獄を隔てているのは、この分厚い壁、たった1枚。

（もう少しだけ我慢だ！）

両手を金属の壁につけ、時間を奪い始める。

壁に穴が現れ、少しずつその口径を大きくしていく。
確実に時間を奪えている。

（急げ！）

タイムリーダーの効果が減滅し始め、体感速度が上がった。
背後で鈍い音が生じ、その直後に伝わってきた振動から爆発だと理解する。

爆発がすぐそこまで来ている。

『そのまま落ちてきて～！』

マイクから伝わるボルトの助言。
しかし、壁を消すことへ全意識を集中しているトキに、その助言は無いに等しかった。

「行くよ！」

背中で怯え、咳き込む少女に言い聞かせ、トキは境界に手をかけた。
眼前に広がる冷たい夜空。
背後から迫る灼熱の地獄。
２つの空間を遮る壁に手をかけたトキ。

その背を――爆発――爆風が押した。

「　　」

一瞬の出来事。
脱出と同時に起こった爆発。
体を虚空に投げ出され、火炎地獄から脱することには成功する。
だが、その衝撃で、トキと背中の少女と別々に飛ばされてしまった。
目まぐるしく映り変わってゆく夜空。
時折視界に飛び込む飛行艇は、全体を紅蓮で包まれ、轟音と破片を撒き散らしながら崩壊を始めた。

（オレよりも下に飛ばされたか！）

定まらない視線で、トキは必死に少女の位置を把握しようとする。
自分よりも低い位置――数十メートル下――を落下していた。

姿勢を整えたトキは彼女に追いつこうと落下を始める。
夜闇の中、肉眼で誰かを見失わずに追跡することの難しさを知らないトキ。だが、目的意識が少女を捉えて見失わなかった。

急速な落下に意識は途切れかけ、汗ばんだ体が涼しさを通り越し、冷たい痛みに変わる。
耳や胸・四肢・関節、体中が痛い。

やっとの思いで手をつかむ。

（気を失っている！？）

少女に追いついた時、トキはその状態に驚いた。
高高度での落下と相まって――背中の火傷――少女の意識を断ち切ったのだろう。

最悪のケースが頭に浮かぶ。
これが『気絶』ではなく『ショック死』による沈黙だったら。

（クロノセプター！）

少女の体を確保し、焼けた肌と肉に右手を添え、左手を虚空に伸ばす。

間近で見れば凄惨なものだった。

黒く焦げた肌。焼けた背中の肉。背中の所々に刺さっている金属片、ガラスの破片。

（何でも良い！

雲でも、空気でも！

この子に時間を……！）

その強い意志に、クロノセプターは反映を始める。

右手に集まる時間。

その集約速度は先ほどの戦闘と比べ物にならない速さで、質も先程とはまるで違う。

トキは少女に時間を流し込んだ。

背中の火傷がみるみる消えていく。

焼けた肉が細胞組織と神経、血の気を取り戻す。焼け焦げた皮膚は一新。

トキは左手を突き刺さっている金属片に伸ばして時間を奪い、同時に金属片による傷口を塞ぐ。

傷口に消滅と同時、光が2人の体を包んだ。

「トキ～！
大丈夫～！？」

２人の体が光に包まれるのと同時、トキの目の前にボルトが現れた。

「うわっ！
何やってるのトキ！？」

「ボルト、この娘が気を失ったんだけど、死んでないよな！？」

「え、あ……？」

「俺は間に合ったのか！？」

「いや、トキ……
その娘は生きているよ」

「本当に、本当、死んでいないんだよな？」

「うん……だって、心臓動いているもん」

言われ、トキは少女の胸に手を当てた。
そこに感じられる鼓動、熱。
生存を確認でき、トキは一息ついた。

「生きてる……」

「良かったね、って言いたいところだけど――今後はもっと自分を大事にしなきゃダ～メ！」

「はい？」

指でさされ、トキは頭を捻った。

一体全体、ボルトが何に怒っているのかがわからない。

間違ったことをしたつもりもないし、まず、今この状況で何が間違ったことなのか理解できず、判断がつかない。

女の子を救えたことでトキは安心していた。

1人でも助けられたことが嬉しかったのだ。

安堵するトキの真横と背後に藍と芹真が下りてくる。

「雲や金属から時間を奪うのならいいけど～」

「凄いな！

よく助けられたよトキ！」

「本当にあなたが助けたの？」

ボルトの説教。

芹真の賞賛。

藍の疑問。

トキは藍の質問から片付けることにした。
頷き、次に芹真さんに向き直る。

「でも、ギリギリだったからこの娘を気絶させちゃって……」

「だ～か～ら～！
気絶させちゃったこともダメだけど、トキはもっとダメなことをしているんだよ！」

ボルトの説教が続く。

「え？」

「トキ、何をしたの？」

「聞いてよ、芹真さん！
トキね～、自分の生命から時間を奪って、この娘にあげちゃったんだよ～！」

『え！？』

芹真事務所――ボルト以外――が凍りついたのは言うまでもあるまい。

第２４話－Ｌｖ．２：ＣＣ！－（後書き）

上空から戻った芹真事務所を迎えたのは警察の職につく協会のＳＲだった。
そいつらは相手の飛行艇が爆発したことを知るや、首をたらしながら帰っていった。物的証拠が欲しかったらしいが、芹真事務所が受けた依頼は“取引の阻止”であって、証拠品の提示は含まれていなかった。

「ご苦労様でした。
我々では多くの犠牲者を出しかねなかった作戦を承ってくれたこと、誠に感謝します」

訪ねたのはＰＭ　２１：００ちょうどだった。
代表として訪れたのはアヌビスのＳＲ、１番人の良いアックス。

「どうでもいいが、あの娘の面倒はしっかり見てやれよ」

「わかっていますよ。
責任を持って面倒を見てやります」

静まり返った芹真事務所。
芹真は自分の机に向き、藍は夜食の準備を。
ボルトは既に寝ていた。面倒な敵と渡り合い、無駄に魔力を消費したとごね、珍しく食事を取らずにベッドに入ったのだ。

同時刻、トキもベッドの上にいた。
夏なのに少し寒く感じる。
炎に囲まれていたからだろう。

（クロノセプターか……）

もし、この力で多くの人を助けられるなら、自分が学ぶべきは学問ではなく、力の制御方法なのではないか……

（……いや、やっぱ勉強は必要だよな）

様々なことに思考を巡らせるうちに目蓋が落ち、トキは眠りについた。

今までで、最もベッドが心地よく思えた夜であった。

第２５話―お前ら学こ……！嵐の前の学生宴会！―（前書き）

誰かが頷いた。

私が将来、ＳＲにおける世界のバランスを崩しかねないと。
そして、誰もが納得した。

『そんな……そんなことはしない！
有り得ないっ！
僕が……て、テロリスト？』

『それが、君の運命だ。
多くの人を殺める』

『僕はそんなことをしない！
だから、ねぇ！
見捨てないでくれぇえ！』

いま思えばいい思い出だった。
あの日、“僕”は死んだ。

その思い出が最初の殺人だったことを男は覚えている。
こうなることも運命だったと、そう開き直ってしまえば絶望していた自分が哀れに思えた。

「今夜会いに行くぜ、トキ」

独りで笑いながら、男は空港を後にする。

第２５話 ― お前ら学こ……！嵐の前の学生宴会！ ―

目蓋が閉じてから数秒。
実際は数時間だが、眠りについたトキからすれば数秒程度の感覚だった。

「は？」

突拍子も無い夢を見た。気が付くとトキは空にいたのだ。
それが夢の中だと頭の隅で認識しつつも、この状況は理解できない。
ここに居る理由がわからない。

（もしや、黒羽商会……？）

思い当たるものといったら、それ位だった。

夜空に浮かぶ飛行艇。
その中で、芹真事務所と黒羽商会は戦闘を繰り広げた。
火炎、銃撃、コンテナ……あらゆる危険要素を伴ったアウェイ。
結果は、芹真事務所の飛行艇制圧に終わった。

（でも……）

トキは飛行艇の中から飛び降りている。
夏の夜空。
輝く星と淡く彩る雲の競演。

（何だ？
ここは、あの時の空とは違う……）

夜空ではなかった。
周囲の風景こそ空ではあるが、決定的に色が違う。いまトキを囲む空の色はオレンジ。
更に大きな違いとして、トキはしっかりと地面を踏んでいること。
高い場所なのに、しっかりとした足場がある。

「ハハッ、招待状を見せて貰おうか！」

顔を正面に戻すと、ソイツがいた。
見覚えがない顔。
しかし、トキの中では警鐘が鳴る。

「招待状？」

「トウコツに渡されたはずだ。
返して貰おう」

口だけ笑いながら睨むその男。

「持ってない」

「ははっ！
冗談は抜きにしてくれ。
これは種の保存の為なんだ。
素直に渡してくれれば、君の保存も約束しよう」

（種の……保存？）

あまりにも唐突な話だった。
見知らぬ男。だが、避けられない誰かであると直感が告げている。
いずれは出会う男。

（一体……ん？）

夢が終わる間際、トキは男の背後にある巨大な“何か”の存在に気付いた。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第２５話－

―お前ら学こ……！

（ＣＯＵＮＴ：１）

嵐の前の学生宴会！－

覚めた目に飛び込む天井。

見慣れた自分の部屋。

（昨日帰ってきた時よりは楽だけど……）

重い体をベッドから降ろし、１階へ降りていく。

今朝見た夢について考えながら身支度した。

朝食をとりながら、テレビのニュースにも少しだけ意識を傾ける。

当たり前だが、昨日の飛行艇のことなど一切出てこない。
年金問題や、株価の変動、事故・事件に、闇金、スポーツ、内閣、領土問題に難民や不法入国者の話題。
後片付けを済ませ、制服に袖を通す。
鞄を取りに2階の部屋へ戻り、ついで、わずかな雲しか見られない空を確認する。窓を開けていくのはやめよう。

一呼吸おいて時間を確認。
ＡＭ　０７：０８
遅刻することが難しいほど早い時間帯である。

昨日の戦いの所為か、いつもより体が重い。
だが、昨日の戦いには悔いがなかった。
牛人の片目を撃ち抜いたことは、罪悪感こそあれどその後しっかり元通りに治したし、牛人本人も自分の失態だと断言している。
商品として扱われてた少女も、今は警察病院で安静にしているだろう。

（あとでお見舞いに行……）

トキの思考が途中で停止する。
それは靴の紐を結わえている最中のことだった。
目の前で、玄関の鍵がひとりでに動いている。

誰かが、外側から鍵を開けようとしていた。

（泥棒？）

こんな微妙な時間に忍び込もうとする泥棒が、果たして存在するのだろうか？

疑問を浮かべつつ、トキは身動きひとつ取らず、それを静観していた。

やがてドアは開錠し……

「ほら見ろ。
お前の刃物がなくとも鍵は開けられた」

「分かったからとっとと入れ！」

聞き覚えのある声が2色。
こっそりと扉を開けたつもりの2人と目が合った。

「あれ？
トキ起きてるじゃん」

「あっそ。それならそれで好都合。
おはようトキ。
話があって来た」

「……おはよう、奈倉さん。
それに、高城先輩」

2人はトキを両脇から抱え、玄関からリビングへ運んだ。

「え？
ちょっ……！」

「火急だ。大人しくしろ」

高城に言われ、トキは抵抗をやめる。

「鍵を掛けてくる」

リビングに下ろされ、眼前に奈倉さんが腰を下ろす。
そして、

「今日から一週間、学校をサボれ」

僅かな怒気を含ませながら言った。

「はい？」

「トキ、あんたは狙われてる。
だから、今日から一歩も外に出るな」

「他の侵入経路がないか確かめてくる」

「頼む」

「え？

奈倉さん、俺が狙われているってのはどういうこと？」

「トキ、何か食い物ないか？」

トキは渋々立ち上がり、朝食の残り物を冷蔵庫から取り出す。

振り返って同じ質問しようとするが、

「吸っていいか？」

彼女の指に挟まれたタバコが左右に揺れる。

どうぞ、お好きに。

ジェスチャーでそう伝えると、彼女は早速タバコに火をつけた。

少し冷めた料理をレンジに入れ、軽く温める。

レンジから取り出した時、高城先輩が戻ってきた。

まず、何が目的なのか聞かなければならない。

「どうして学校に行っちゃダメなんだ？」

「まぁ、まず落ち着いて話そう」

「座らせてもらうぞ、トキ」

「どうぞ。適当に掛けてください」

高城がソファの上に腰を落とす。

しかし、奈倉は立ったまま切り出した。

「もしかしたら、四凶がお前を狙っている」

「四凶……トウコツが？」

真っ先にトキの頭に浮かんだのがあの男だ。

人間離れしたスピードとパワーで戦闘を楽しむ凶。

「いや、その可能性は低い」

「低いって……高城先輩は、トウコツを知っているんですか？」

「俺はこれでも協会所属のＳＲだ。

しかも四凶反対派のな」

反対派……

初めて聞く言葉に僅かな疑問を抱いたが、今はそれが主旨ではない。

高城は説明を続けた。

「トウコツは現在、ナイトメア討伐作戦の舞台裏である主要人物の護衛を命じられている。
指示を下しているのはヒーローズの契約英雄、ジャンヌ。
ここで肝心なのは“トウコツは彼女に逆らえない”ってことだ」

「つまり、トウコツにはトキを狙えないってことよ」

「じゃあ、誰が？」

「可能性があるとしたら、キュウキ。
最悪の場合は、コントン」

「でも、どうして？
協会なんじゃないんですか？」

「一応な」

高城から溜息が漏れる。
その隣で、彼女も溜息にタバコの煙を乗せていた。

「協会に所属しているにも関わらず問題を起こす。
それが四凶だ」

「どうして狙われなきゃならないんですか？」

「お前がＳＲだからに決まってるだろ」

質問するトキに高城が冷たく返す。

窓から差し込む夏の日差しだけが味方のような気がした。

「ただ、それだけで？」

「それだけ――じゃないだろ。

お前は自分のＳＲがどれだけ稀少なものか分からないのか？」

「トキ。

時間を操れるＳＲなんて、滅多にいないんだよ？」

言われて、納得せざるを得なかった。

時間の流れを緩め、また止める。更に時間を奪い、与える。

それがトキのＳＲ：タイムリーダーとクロノセプター。

「勧誘、誘拐してまで手に入れる価値は大いにある。

使いこなせば強力なんだからな」

「強力？

そんなモンじゃない。

軍隊だろうと易々壊滅させられる力だよ」

トキは頷く。

「確かに協会は芹真事務所への積極的かつ、自主的接触をご法度としてナイトメア討伐作戦を展開しているが、四凶だけはどうしてもコントロール出来ない。それが、協会の現状だ」

高城は自前のバッグから炭酸飲料を取り出し、口に運ぶ。

「トキも覚えておきな。
四凶は協会の内部でも爪弾き者。命令を簡単に無視して動く連中なんだよ。
私は身をもって体験しているから言っているんだ。これは脅しでもなんでもない、現実だ」

数秒間の沈黙。
高城が新たに話を切り出す。

「言っておくが、ナイトメアの連中もこの街を目指して集結しているらしい」

トキと奈倉の顔が高城に向く。

「おい、そんな話初耳だぞ?」

「ナイトメアが集結……だって？」

「ああ。
この街に滞在しているＳＲも妙な動きを見せている」

「うめ……
うぜぇ～」

「この街にナイトメアが居るんですか！？」

奈倉さんはあからさま嫌そうな顔をしながらミートボールを口に運ぶ。
トキの驚きざまを見て、高城は続けた。

「ああ。そのナイトメア２人は非武装派の準Ａ級ＳＲ。
しかも、この前俺たちの学校を襲った連中の生き残りでな」

「生き残り……また仕掛けてくるってことですか？」

「可能性はある」

「ちっ！
四凶にナイトメアかよ！」

学校に行けないのも頷けた。
ナイトメアに狙われ、この間の二の舞になったら……

また無関係のクラスメイトを含め、多くの一般人が巻き添えをくらう。

「まぁ、安心しろトキ。
テメェの所為でダブったんだ。
勉強は俺が教えてやる」

ＴＨＥ　予想外。
学生だから勉学に励むのは当然だが、まさか……

（まさか、高城先輩から教えられるとは）

まさに、夢にも思わなかった、というヤツである。
しかも笑顔の中に殺意が見え隠れしていたし。

「ついでだ、ケルベロス。
テメェにも教えてやる」

「ご免被る。やりたきゃやってろ。
私はパス。メシ食ってる」

「そんなんじゃ、進級もできねぇぞ」

「お前みたいにか？」

「あん？
何だ、随分躾の悪い犬がいるな～」

「お～、怖。
人様ん家で揉め事はよくないぜ？」

「ふん！
犬みたいに吠えやがって」

吐き捨てるように言い放ち、高城はバッグから教科書とノートを取り出す。
その隣で奈倉はタバコを指に挟み……

ペシッ

指で弾く。
という、些細な嫌がらせに走っていた。
が、高城は飛来するタバコを2本指で受け止め、口に運ぶ。

「……不味い。
もっと上等なの吸え」

紫煙を味わう高城。
吹かしながら教科書をめくり続ける。

「一時間目は数学だったな。

今日はこの辺やる筈だ」

「タバコ返しやがれ……」

噛み合わない2人に目を配らせながらトキはノートを教科書を鞄から取り出す。

そして、ふと思いつく。

(間接……え～と、キス？
ってやつか)

数秒してから奈倉さんもそれに気付いたらしく、

「そんなに私のタバコが吸いたかったのか？
思ったより変態だったんだな」

「げふぉっ！」

高城先輩も気付いたらしい。
むせてから、タバコを握り潰す。

「だ、ゲホッ！　誰だってブレイクに酒やタバコを嗜(たしな)むだろ！
俺はお前と違って協会の仕事とか忙しいんだよ！」

「はいはい」

（ブレイクに酒とタバコか……）

何となく重複してみる。

言い争いは切のいいような悪いようなところで幕を閉じ、高城は気を取り直して授業の準備を整えた。

勉強はしっかりと時間を決められて行われた。

散々文句を言っていた奈倉さんも参加。留年しているものの高城先輩はやはり先輩だ。

１年前にも同じような場所を勉強しているだけあって、こちらの質問に滞りなく答えてくれる。

（これだけ出きるのに、どうして留年したんだろ？）

答えは簡単、協会のＳＲだから。

トキを観察するために抜擢、強制留年させられたのだ。

休憩時間。

トキは飲み物のオーダーを取った。

学校の時間に合わせた休み時間だ。買い出しに行く暇などなく、まして、２人はトキに外出させないために来ている。

その為、適当にある物で間に合わせた。

「ん？」

3時間目の終わり間際。
奈倉さんの顔が窓の外へと向く。

「誰か来たか？」

「この臭いは裏委員長たちだな」

「なるほど。
トキを引きずりに来たわけか」

高城が納得している間、奈倉は鼻を働かせた。

「裏委員長に崎島、エロティカ、コウボウ、お嬢ぅわ……女王様まで来やがった」

「え？
何で6人も来るんだ？」

さすがのトキも驚いた。
意外な面子による突然の訪問。
程なくして呼び鈴が鳴る。

『トキ～、居るか～？
居たら鍵開けてくれ～』

コウボウの間延びした声がリビングまで届く。
立ち上がるトキを奈倉さんが引き止める。

「夏山（かやま）のアホが来てるから開けんな！」

小声で私情を説明。
そういえばこの2人、滅茶苦茶といって過言でないくらい仲が悪いんだよな……

『面倒臭ぇ、蹴破って入っちまおうぜ』
『夏山さん。
それじゃあ不法侵入ですよ？』
『器物破損』
『トキは本当にココいるの？』
『うむ！
私の欲望レーダーがここだと告げている！』

どんなレーダーだ……

『ならば仕方ない！
ここは1つ、私に任せたまえ！』

「奈倉さん、とりあえず、翼が変なことやらかす前にドア開けたいんですけど……」

「ダメ」

「いや、そんな即答しな……」

直後、開錠音が耳に届いた。

「はい？」

奈倉さんの制止が無駄に終わった瞬間である。

「勝手に上がるぞトキ」
「お邪魔します」
「うはっ！
思ってた以上に広ぇ～！」
「スッゲェお邪魔しま～す」
「超マジで邪魔しま～す」
「失礼します」

六者六様。
申し訳程度かつ適当な口上を述べ、勝手に上がりこんできた。

「むむっ！
そこに居るのは奈倉愛院と高城播夜ではないか！」

「え？
愛院さんも居るの？」

「ホントだ。
しかも先輩まで……」

これがエロティカ、コウボウ、裏委員長の反応。

「……へぇ」

「中々広いリビングですわね」

「はぁ！？
何でアインがココに居んだよ！
聞いてねぇぞ！　不愉快だ、帰れ！」

崎島さん、何に感心しているの？
お嬢……人の家を評価しに来たの？
夏山さん、いきなり喧嘩腰にならないで！

「はぁ！？
テメェのおかげでこっちも不愉快してんだよ！

お前こそとっとと帰れ！」

奈倉さんも喧嘩を買わないで！

エロティカ、貴様もかっ！

「ふむ……
不良女子ｖｓ超ドＳ女子。そこから発展して三角木馬で……」

「ヤニ臭いわね」

「ふぅ……」

いや、木田村委員長、止めて。色々止めて。
崎島さんも溜息ばかりついていないでさ。ヘルプ……

「お前ら何しに来たんだ？」

まともな人間発見。ＳＲだけど。
言い始めたのは高城先輩だった。
たったその一声で場が――まぁ、一部例外を除いて――沈静化したのだ。

「あなた達はここで何をやっているの？」

「トキがやばいのに捕まったからそれなりの対処法を教えていたんだ」

「はぁ？」

「やばいのって？」

「あれだ、詐欺ってやつ」

訪れたクラスメイトの間にざわめきが起こった。

「ご愁傷様」

「マジ……なのか？」

息を呑み、コウボウが聞く。

「だからオレ達が相談に乗っているんだよ」

「切迫しているの？」

「ああ、聞いた限りじゃ相当ヤバイぜ委員長」

話が進むにつれて1人、また1人と腰を下ろしていく。
ついには全員がイスまたはソファ、或いは床に腰を落ち着けた。

「なるほど、つまり携帯サイトから始まって、理不尽請求が押しかけるようになったわけか」

「まぁ……」

話を合わせる度に罪悪感が募った。
全員と親しいわけではないが、クラスメイトに嘘をつくことで居心地が悪くる。
詐欺なんて遭ってない。
この場を凌ぐための作り話以外の何物でもない。

「どんなサイトに入ったんだよ?」
「18禁サイト?」
「いや、それは無い」

エロティカが断言する。
それに関してはトキも頷いた。
アダルトサイトに関してはエロティカから飽きるほど警告されている。
そもそも、トキはその手のサイトに興味がない。

「じゃあ、どんなサイトだ?」

「孤児救済掲示板……だ」

咄嗟にトキの頭に浮かんだ単語がそれだった。

「は？」

「孤児？」

「まぁ……」

「そういや最近話題になってるもんなぁ……」

今朝のニュースでやっていた所から思いついただけである。

そんなものが実在するのかどうか、甚だ疑問だ。

「そういうことは真っ先に警察に相談しなさいよ」

「裏委員長に？」

「私じゃ不満？」

「いや、いくら親が警察だといっても、委員長自身はまだ学生だし……」

「まぁ、正委員長よりは頼りになることは確かだが……」

言い淀み、トキの眼が横へ向く。
そこでは裏委員長も卒倒しかねない法律違反、

「――！！！！」
「――！！！！」

真剣な顔で、壮絶なタバコの吸い比べが行われていた。
どちらが先にタバコを吸いきるかという、果てしなくくだらない対決。
また迷惑この上ない。
静かな私闘ではあるが、やはり、迷惑以外の何モノでもなかった。

「あなたたちっ！」

そして、裏委員長の喝が入った。
真横にいたコウボウがこっそり後退る。

「私闘は禁止！
どうしても白黒付けたいのなら、もっと他人への迷惑を考えて争いなさい！」
「いや、喧嘩しないように言えよ」
「ならば、ボディコンなど……」

女子一同による鉄拳――1人は凶器攻撃だが――制裁。
エロティカの美形が鮮血で飾られる。

「それくらいだったら、飲み比べとか料理の腕競ったりする方がマシじゃないか？」
「ほう！
では、北島君！
君は彼女たちの裸体に興味が無いと、そう言いたいのか！？」
「いや、興味云々の前に、常識考えて見れるはず無いじゃん？」
「そうそう」

もの惜しげに頷く高城先輩。
話が大きくなっていく最中、トキは混乱していた。

これは、何の集いだ？

「なら、飲み比べだ！」
「用意しましょうか？」

早速お嬢が携帯電話を取り出す。
そういうのは早いんだね。

「未成年の飲酒は禁止！」

すかさず裏委員長が――

「マイコ。
お前、去年のクリスマスパーティーで1番飲んでいたって知っているか？
というか、覚えているか？」

打ち砕かれ、沈黙。
高城先輩が“やっぱり”とつぶやいた。

「どの種類にします？」

そしていつの間にか、電話でお嬢が話を進めていた。
困惑・沈黙・興奮する諸々を差し置き、渦中の2人は声を揃えて告げる。

『カクテルだ！』

夏。
ひとつ屋根の下で、2人の飲み比べが始まった。

ＡＭ　１１：２７

帽子を用意しておくべきだったと、リデアは後悔していた。
炎天下。
頭上から降り注ぐ太陽光線に耐えながら注文したコーヒーを待っていた。

「だから帽子を買ってくださいと言ったじゃないですか……」

「うむ、ケイノス君。
私もいま後悔したところだ」

「……後の祭り、というモノを知っていますか？」

「いや。
どこの国の祭りだ？」

「諺です……手遅れって言う意味の」

ため息をつき、ケイノスはサイダーでノドを潤した。同時に、なぜ隊長は目先のことしか考えられないのかを考えた。

「それはそうとケイノス君。
君はとんでもないメンバーに声を掛けていたな」

「ええ、まぁ。
あの人の頼みですから」

「正直、私はあまり快く思わないぞ」

「同意します」

「レッドキャップには嫌気がさすし、ステビアの悪女なんか最悪だ。
それに何より、マスターピース殿がくると無様な作戦が立てられないではないか」

（あ、作戦が無様なのは認めているんだ……）

わかっているなら実行しないで下さい――なんて、一度は言ってみたい。

「マスター殿が来られるという事は、芹真事務所が相手だな」

「どうしてです？
まぁ、間違いではないですけど」

「この街でマスター殿を手を煩わせるＳＲがいるか？」

「芹真事務所とその周辺くらいしか」

「実に単純明快だろ？」

「マスターなら光の魔女に勝てるんですかね？

隊長も覚えているでしょ、あの圧倒的な力を」

「忘れはせんよ。
しかし、ケイノス君。我々はチームで戦うのだ。
騎士道を尊ぶことも重要だが、いまはあの方の立てたプランに従うのだ」

「ああ。
そうしてもらえれば助かるよ。
それから、遅れてスマナイ」

炎天下、その男は突如として姿を現した。

「これだけの条件が揃っていれば失敗は無理だ」

イスからを腰を浮かせ、２人は男に顔を見せた。

「どうも、Ｍｒ．シーズン」

最初に挨拶を投げつけたのはケイノスだった。

ＡＭ　１２：５１

真昼。
昼食時、トキの登校が決まる。

「じゃあ、こういうのはどうでしょう？」

提案したのはお嬢こと、冬谷紗月（とうたにさつき）。
一同の顔がお嬢へと向いた。

「私の車で皆様とトキを一緒に送り届けるのです。
これなら、頼れる委員長とも一緒ですし、相手も下手に手出しできません」
「甘いぜ、お嬢。
借金取りは手段選らばねぇ。それに全員が巻き込まれたら収拾つかなくなるかもよ？」
「ビビってる夏山は無視してやれ、カワイソーに」
「……」

口論飛び交う中、トキも考えた。

誰かに狙われているのは事実だが、借金取りというレベルではない。
奪われるものが金銭ならまだ安い。
根本的に次元が違うのだ。
下手をすれば命が消えてしまう。そういう事態の最中にトキ自身

がいる。

（でも、奈倉さんや高城先輩も一緒に居るのなら協会のＳＲは手を出せな……いや、出せるか）

もう一度頭の中に敵の属性が浮かび上がる。
協会所属、四凶のＳＲ。
協会の爪弾き者、協会に属しながら絶対服従しない者たち。

「車に全員乗れるの？」
「もちろん」
「おい、トキ！
学校行くのかよ！？」

奈倉さんが止めようとする。
けど、もう決めたことだ。
奈倉さんを納得させるため、これだけは言っておこう。

「ヤバそうな時は全力で学校から逃げるからさ」

小声で話すトキと奈倉に委員長が注意する。
全員で会議している時はなるべく密談をするな。それが裏委員長ルールだ。

「出来るのか？」

「大丈夫だよ」

彼女が頷くまであまり時間はかからなかった。

「では、車を呼びますので」

トキと奈倉の了承を確認し、お嬢は車を呼んだ。
数分後に姿を見せたのはリムジン。

白州唯高校のメンバーは――お嬢を抜いて――唖然とした。

「え？
これに乗るの？」

全員が躊躇った。

ＡＭ　１２：５３

どうして躊躇ったか？
理由は明確である。
協会のＳＲが介入者に依頼をしたからだ。

「それだけで、ここに？」

オープン喫茶の一角。
リデアは戸惑った。

「私も快くは思っていない。
だが、ヤツには借りがある」

「でも、協会に協力するのは御免です」

不貞腐れたケイノスが言った。

「何で、協会のＳＲの為にそこまでする必要があるんですか？」

「ああ……」

「Ｍｒはそれをわかっていたのですか！？」

「わかっていて受けた。
協会の四凶に頼まれること自体面白くないが、結果的には面白い

ものが見れそうだ」

「面白いもの？」

「おそらく、今日が反乱の序章になる」

２人の魔法使いは顔を合わせた。

反乱。

四凶。

協会。

先にシーズンの意図に気付いたのはリデアだった。

午後の学校は非常に危険な状態だった。

協会とか、ナイトメアとか、ＳＲとか、そういう意味でもかなり危なかったが……

トキは、今日何度目かの混乱に見舞われていた。

（何で俺がこんなところに居るんだ？）

状況を整理しようとしても、恐怖心と羞恥心が混乱を深めるばかりで、つまり、余裕がない。

「トキに２５００円！」

「バ～カ！
それは絶対無いね。ジェイソンに１０００だ！」

「俺も」

「じゃあ、５００円で」

５時間目と６時間目の間、１０分の休み時間。
トキは教室の中央に立っていた。
それが意味するものは決闘。何でもアリの１対１。

（何でこうなったんだっけ！？）

必死に記憶検索をかけた。
深呼吸して、学校に到着した辺りからの記憶を想起する。

リムジンで校門前に到着。昼休み終わり間際だ。
玄関を通過し、委員長と崎島さんとエロティカ同伴で奈倉さん、高城先輩と職員室へ直行。
レンガ先生に罰則を言い渡され、きっかり１分の説教。
職員室を後にする。
トイレに寄ってから教室を目指す。
午後からの授業参加にみんなの視線が痛い。軽く謝罪してから机を目指す。

プラスチックの砕ける音が響く。
注がれる視線から逃れるよう、足早に自分の席へ。
そして5時間目が終わる。

トキの頭に浮かぶつい数秒前の記憶。
5時間目終了と同時、不意を突いて彼が来た。

「おい」

トキは伏せていた顔を上げると同時、両手で机を固定した。
自分の机を蹴る彼。
衝撃が掌に伝わる。
クラス全員の顔が2人に向けられた。

「な、何だよ、佐野代……」

「お前こそ何だ?
どうして“午後”から来るんだ?」

「それは――事情があって……」

言い淀むトキの言葉を遮り、佐野代の手がトキの襟元に伸びた。

「中途半端に出てきてんじゃねぇ」

怒りに震えた佐野代。
それを読み取ってか、彼の仲間が机を寄せていく。

次の授業はレンガ先生。

授業中に堂々と決闘が行われる時間だ。
決闘の準備が整う。
机は寄せられ、窓には紙が張られ、教室の中央が円形に開けられる。

（何で怒ってんだ!?）

思い出し、考えているうちに決闘が始まった。
理不尽なまま、特に思い当たる理由も見つからないうちにトキは決闘の場に立ったのだ。

何の合図もなしに佐野代が仕掛けてくる。

初弾。左肩に貰う。
スピードの乗ったジャブ。

（俺は何もしていないのに!?）

トキは後退する。
佐野代は追撃をかけ、常にトキを自分の射程内に置いた。

「おら、トキもやりかえせよ！」

野次馬の声に反応し、僅かな隙を作ってしまう。
佐野代はそれを見逃さず打ち込んできた。
3発。
左肩に2発、胸に1発。

「俺が、何をしたんだよ！」

「ルールを破っただろ！」

左のローキック。
膝を打たれ、トキの速度が落ち、更に打ち込まれる。

「へっ、授業サボるからそうなるんだよ」
「来るのか来ないのかハッキリしろっての」

ボディに一撃を見舞われ、トキは足を止めた。

（俺が……授業をサボったから？）

再びボディ。
昨晩の牛人に比べ、1発の攻撃にそれほどの威力は無い。
だが、連打の速度は佐野代の方が早かった。

「みんな一生懸命取り組んでいる」

トキはクロノセプターを思い出した。

「ただでさえ、他のクラスの連中より劣っているだの、欠けているだの言われているのに……」

さすがに限界だった。

――やってしまおうか？

タイムリーダーを使えば攻撃は簡単に躱すことが出来、クロノセプターを使えば佐野代から時間を奪える。
だが、大きな抵抗があった。

「欠陥扱いされないために、みんなでルールを守っている！」

それは、正しいことなのか、間違ったことなのか。

欠陥として扱われたくない。
そのために努力する。
悪くは無い。
だが、欠陥扱いされようがされまいが、努力をするもしないも、全て人の勝手――選択――である。
トキは佐野代の懐に突っ込んだ。

「てっ……！」

体勢を崩し、佐野代が地面を背にする。
トキのマウントポジション。

「……悪かった」

「何？」

「佐野代の言うとおりだ。
事情があったとはいえ、その、意欲を削ぐようなことをして……」

直後、トキの顔面に拳が叩き込まれる。
更に、佐野代はトキの襟元を掴んで引き、頭突きを見舞した。
トキが佐野代の上から転がり落ちる。
鼻血が床に滴る。

いつの間にか、罵詈雑言や戯言を吐いていた野次馬や、賭博に興

じていた生徒たちが静かに2人を見守っていた。

一方的な現実（こうげき）がクラスの中央で展開されていた……

上空４５００メートル。

「あそこの雲が積乱。　反対側の向こう、低い位置に乱層雲。　そして我々の足元にあるのが高層雲です」

「結構。来る時にも見上げてみたが、見事だ」

雲の上――正確には雲の上を走る風に乗って――3人は雲の様子を確認していた。

「では、カフェで話したとおり操作してくれよ」

「ぬかりません」

リデアとの確認が終わると、シーズンの顔がケイノスへと向く。

「衛星の方はしっかり騙せているか？」

「もちろんですよ」

「すまんな、ベクター。
この作戦、お前なくして実行は不可能だった。
協会の連中にこの流れが見つかってしまうからな」

「わかってますよ。
確認のためもう一度言っておきますが、この操作を行っている間、僕は戦闘に参加できません」

「心得ている。
これだけの大規模な操作をしているんだ。
他には何も追求しない」

確認を終え、３人は降下を始めた。
風の流れに乗り地上まで滑り降りていく。

その最中、シーズンの目が上空へと向いた。

（まさか、本当に直径５００ｋｍもの空間偽造を行えるとは……）

白州唯に雲をかける。

この作戦の最大の問題点は、不自然な雲の量と配置にあった。
シーズン自身に気流を操作する能力はなく、また、どうにか雲を作り出せたとしても協会に見つかり処分・処罰されてしまう。

その為に、シーズンはこの2人に頼んだ。自分ひとりでは揃えきれない量の雲をリデアが集め、集めた雲が協会に見つからないようケイノスが高高度に偽装を施す。
偽装の仕組みは実に簡単だ。別の地域の雲の流れ（スクリーン）を見せて不自然に集まった雲を覆い隠す。言ってみれば、雲の上にスクリーンを被せて隠すということだ。

（ここまで成長しているとは）

それほど仲のいい関係ではないが、何故か彼の成長が嬉しく思えた。

ＡＭ　１７：５９　色世家

リビングにトキを中心として何人かが輪を作っていた。
友樹の手が肩に置かれる。

「引きこもっていたのに、前よりタフになっていたじゃん！」
「そうそう。前みたいに1発で張り倒されなくなっただけでも進歩じゃないか！」

コウボウも頷いていた。

更に智明が続く。

「それに、ほら、ちゃんと誤ったんだからトキは悪くないよ」
「今回は佐野代のやり過ぎだ」

岩井も頷く。
黙々と手の甲の傷を確かめていた崎島さんも、

「ほとんど無抵抗だったのにね。
あれだと、ただの弱い者いじめ」

思い切り踏みつけられた右手の指に痛みが走る。

「外れかけているんじゃねぇか？」

横から奈倉さんが言った。
その後ろではエロティカが無言でこちらに目を配っている。

「いえ。外れてはいないわ」
「徹底的にやりやがったからな……」
「指の方は大丈夫みたい」

帰宅時、エロティカ、コウボウ、友樹、奈倉さん、高城先輩は手伝ってくれた。
鼻血で汚れた制服の代わりにコウボウから借りたジャージを着て、おぼつかない足を見て友樹が肩を貸してくれる。

まだ、安心できない。

今日はそういう日だ。
対ＳＲ戦のことを考えて体力を温存しておくつもりだったが、無為に終わった。
佐野代に殴られたダメージは予想以上に大きく、すぐにでも寝てしまいたいほど。
だが、

「こうなりゃ飲むしかないだろ！」

友樹が酒瓶片手に組み付いてくる。

「うむ！
酒は百薬の長とも言うしな！」
「ちょっと……！」

「頼むよマイコ委員長。今日くらいさ」

許しを請うコウボウ。
その背後ではすでに、奈倉と夏山の飲み比べが再開されていた。

「ストレス発散が学習効率の向上に繋がるかもしれないよ？」
「いい実験台ね」

「ほら、崎島は認めちゃっているんだし」

トキを励ます為に集まった者が5名。それが中立派メンバー＋エロティカである。
事後処理等に委員長、お嬢、春蘭穂（はるらんほ）。
付き添いやら私怨やら何やらでついてきたのが岩井、夏山さん、ダーティこと隅田（すだ）の3人。

「飲んでもいいの？」

こうして、トキを励ますという口実で飲み会が決行された。

でも、騒がしいとは思わない。思えない。
嫌なことを忘れることができるなら、気を紛らせることができるなら、独りでいるより誰かという方が楽だった。

「ありがとう……みんな」

突如こぼしたトキの言葉に一瞬静まる。

「ウハッ！
大袈裟だよトキ！」
「どういたしまして、って言っていいのかな？」
「……気にしないで」

「気にすんなよ。俺たちそういう関係だろ？」

これが中立派のリアクション。
最初に言った友樹が組み付いてきた。左肩。
最後に言ったコウボウも肩を組んだ。右側。
そして気付いた。　酒臭ぇ……もう飲んでるし。

「ま、また……その、引き篭もられても困るから……よ！」
「イラつくからって、犯罪にだけは手を出すなよ？」

「初めて見たよ、色世君のそういう顔……」
「これからは護身用具の携帯をお勧めしますわ」
「学校に来なけりゃ、俺みたいにダブるんだぞ？」

なぜか裏委員長が赤面。
岩井が思い出したかのように注意し、春さんに至っては注目しているところが違う。
お嬢も、たまにはすごい事言うんだな……

そして、高城先輩。笑顔の中に殺意が見え隠れしていますが、気のせいでしょうか？

「次はコレだっ！」
「ふん！
ん……っふ～。
この味は……エル・ディアボロ！」

「ちっ！」
「当たりだな。
じゃあ、これはどうだ！」
「……嘗めてんのか？
ライムに、ジンに、ソーダの匂いがプンプンするぜ。
ジン・リッキー！」

夏山さんと奈倉さんによるカクテル対決。
もはや、何をしに来たのかさえわからない。
そして、我ら関せずとばかりに2人揃って次のカクテルを作り始めた。

「苛立ってしょうがない時は気軽に声をかけたまえ。
いい女性を紹介して……」

奴なりに励まそうとしたのだろう。
だが、励まし方がまずく、女性陣――春、夏山、秋森、冬谷――による春夏秋冬コンボで左ストレート、ボディブロー、ビンタ、金

的がエロティカにクリーンヒット。

思わずトキは笑った。

このいる全員が笑う。一部まともではないが、それでもいい。

「おらぁっ、湿気てないで飲めぇぇえぃ！」

たまに馬鹿騒ぎするのもいい。

引きこもったことによって忘れかけていたモノ。

疑心暗鬼になりすぎて、誰を信じて良いのかわからなくなった現実。

人は1人でしかない。

だが、独りでなくなることは出来る。

「ふはははっ！

私と飲み比べるつもりか北島？

言っておくが、私はアルコールに対する免疫が人並み外れて弱い！

よって、御免とさせていただこう！」

「おい友樹！

そいつはコザックだ！」

各地でアルコールが進む。

……これは、ヤバくないか？

「私なんかよりトキ方がよっぽどアルコールに強いぞ？」
「本当か！？」

気が付けば、トキはロックオンされていた。
液体の揺れるグラスを両手にコウボウがにじり寄る。

「さぁ、嫌なことを忘れたけりゃ飲むんだ～！」

コウボウ、酔うの早ぇ……

「お酒は飲んでも、飲まれるな……」

こうしてトキも参加し、飲み会は午後5時から始まり――

「トキの圧勝～！」
「枝豆だぁ？
俺はピーナッツ派だ！」
「何で私が正規委員長じゃないのよぉっ！」
「俺だって、色々あって進級できなかったんだ」
「ねぇ、信弥くん。私でも飲めるカクテルってあるかな？」
「チョコレートリキュールなら作れるけど……飲んでみる？」
「崎島……君は本当に格ゲーは初めてなのかね！？」
「……ええ」
「ほわぁ～！

拳心共にして明日に臨まず～！知を伴って場を持ち、勇を持って下がり、力を兼ねてお＊～＄ｗｗ@～っｃ？！」
「エアコンＭＡＸにしろ、ＭＡＸに！」
「ていうか、メイド忍者っていけそうでいけないよな～」
「だから著作権が～」
「お酒は二十歳になってから？」
「いや、疑問符つけるな……」
「アルコールの分だけ点数が増えればなぁ……」
「ふむ。無い乳も悪くはな――ぶぐぉっ！」
「つまり、はぐ○刑事ｖｓコロ○ボみたいな？」

※今更だが、あらゆる意味で大変な事が怒っているので、音声のみでお楽しみ下さい。

「右から、
フレンチコネクション！
マルガリータ！
スティンガー！
ブラッククルシアン！」
「こっちも右からだ！
ポロネーズ！
キング・アルフォンソ！
バカルディ！
アラウンド・ザ・ワールド！」

「ついでに、こっちのグラスの奴がギムレットで、こっちのオールド・ファッションド・グラスの中がゴッドマザー！」

「お前が必死こいて作ってたコレがバーボネラ！
そんで、こっちがシンガポール・スリング！
間違っちゃいねぇんだろ！？」

――６時間に渡って展開された。

「かっ○○びせん切れたぞぉぉぉぉぉっ！」
「やかましい！」
「俺に、命令するなぁっ！」
「いや、だからね……
僕らは一生子供なのさ、ある意味では――」
「喰らえ！
最強コンボ！」
「……遅い」
「プリン味のアイスってないよなぁ～」
「そういや、明日って学校休みだっけ？」
「え？」
「え？」
「ぇ……？」
「うそぉ？」
「ん、何だって？　先輩……」
「今０９分２０時２０日――明日って、創立記念日じゃん」
「……あれ？
飲み放題？」

『ライジング・サン！
ミカド！
ハーベイ・ウォールバンガー！』

「じゃあ、トキ。
泊めてくれ～♪」
「いいよ」
『いいのかっ!?』
「私も泊まってみたいのですが、よろしくて?」
「よっしゃぁあ!
今日は無礼講じゃぁあ!」
「どうして私が委員長じゃ……」
「いやはや、みん程よく酔っているではないか。
ここで誰か、肉の杯でもやって……」
「変～態!
オリャッ!」
「……人の顔って、潰れればそうなるんだ」
「マイクカモン!
1発目はカテコロで行くぜ!」
「知らねぇーっ!」
「シャネ欲し～」
「窓開けろぉい!」
「俺86ね!」
「モスキートがウゼェから開けるんな!」
「皆でmugenのトーナメやろうぜぇ～」
「そろそろノンアルコール飲まないか?」
「変態撲滅宣言～!」
「やべ!
春が酔いギレしれやがる!」
「グハハッ……
怒り上戸というヤ……ツ、か……」
『スクリュードライバー、マイアミ・ビーチ、ラム・コリンズ!』
「やっぱ、ファ○タはライチに決まりだろ?」

「いいや、塩さえあれば生きていける！」
「ほぼ皆泊まっていくんだ？」
「はい、つまみ切れぇ！」
「身長高いイコール、腕相撲が強い、なの！」
「ミニィベアはこうやって作るんだ」
「俺なんか赤点ばっかでさ～♪」
「だから、食料庫はＴＮＴでぶっ飛ばして――」
『Ｘ．Ｙ．Ｚ！』

そう、６時間ノンストップで……
買い溜めしておいた菓子やインスタント食料は綺麗さっぱり消費。
そう、乾パンに至るまで。
お嬢が提供してくれたアルコール各種、サイドメニュー、おやつも同様。
飴玉１つ残っていないという有様。

「買い物行ってくるけど、何か希望はある？」

立ち上がったトキは皆に聞こえるように言った。

「俺も一緒に行くぜ～」
「ソーダ水頼む」
「保護者として同行するよ」
「スナック大量に頼む～！」
「アイス、アイス！」
「車、車！」

「ベンチ、ベンチ！」
「ドライアイスお願いしま～す！」

酔っ払いをさて置き、同行メンバーは４人。
奈倉さん、友樹、岩井＆智明。

コンビニでちょっと怪しい視線を受けながらも、無事買い物を済ませることはできた。
補導員や警察にあわなかったことに少し安堵する。
奈倉さんはそういうケースを想定してついてきたらしい。　免許証提示すれば～どうのこうのと。

「エロティカ君といるのはちょっと、色んな意味で恐くて……」
「酔った拍子に襲われかねんからな」

ＰＭ　１１：３０
コンビニ帰りの路上で智明（ちあき）は本音を漏らした。
それが理由でついて来たらしい。
智明の意見に奈倉、岩井、友樹は激しく頷いた。

「でも、翼は観察するだけだから大丈夫だと思うぞ？」

フォローするつもりは無いが、トキはそう言った。

「は？
充分問題あるじゃん」

「いや、エロティカの目的は、自分の作品を作りたいからで、そこにあいつ自身は居ないんだよ」
「……トキ、それはどういう事だ？」
「岩井に同意。
俺にもサッパリ。意味が分からん」

一息おき、ビニールの取っ手を持ち直しながらトキは言った。

「アイツの夢はえ～……
ＡＶ監督だったか何だったか、だって言ってた」

沈黙と同時、聞き手全員が納得した。
適職ではなかろうか、と。

「俺の夢は運送屋だ」
「意外と地味なんだな友樹」

「お前はどうなんだ？　岩井」
「……お前より地味だ」
「何だよ？」
「言ったところで得が無いからやめとくよ」

「何だそりゃ？
面白みのねぇ男だな」
「そういう奈倉は？」
「考えてねぇよ。
ただ、海外に戻る可能性が高いかな？」
「戻る？
何それ？
実は海外で生まれてます、みたいなその物言いは何？」
「私は外国生まれだよ」
『マジか？』

一同、驚愕。
トキも初めて聞く話に動揺を隠せない。

「海外に戻るかも、ってのは一体？」
「……一緒に働かないかって、誘いがあったのさ」
「スッゲェじゃん！
海外就職か～、俺も海外で運送屋やろうかなぁ」
「英語が苦手な時点で無理だろ」
「トキに言われたくねぇ！」
「いや、トキって、意外と点数高いらしいじゃん？」

「うん。
信弥君の言ったことは正しいよ。私、この前の小テストでトキに追い抜かれたし。

ちなみに、私は信弥君と同じだよ」

『え！？』

何故か、友樹と奈倉さんが驚いた。

「ねっ？」

「ぉ、おぅ……」

岩井信弥本人、赤面中。

「あれ？

いま、夏が暑さを増さなかった？」

「ああ。

私もそれ感じた」

「海外かぁ……」

トキは空を見上げ、海外に父親が居ることを改めて認識した。

一度会いに行くべきなのか。

母と死別した日以来、顔をあわせた記憶が無い父。

「あれ？」

曇り空。
夜空に星は輝かず、暗く黒い雲が頭上一杯に広がっていた。
通り雨でも来るのではないかと、そう思った時だった。

「冷たっ！」

友樹が首筋を抑える。

「何か落ちてきたか？」

直後、全員の顔が夜の曇り空へと向き、全員が固まった。

「ゆ――えぇ！？」

（コレって……！）

トキの顔が奈倉に向いた。
酔いの回っていた頭が急激に冷めていく。

空から降る、無数の桜色。
現実に起こってはいけないことが起こっていた。

「雪、なのか？」

この夜、白州唯は夏の吹雪に見舞われた。

第２５話 ― お前ら学こ……！嵐の前の学生宴会！ ―（後書き）

春と冬を与えられた雲を見上げ、シーズンはインカムに向けて言った。

「全ての配置は完了した。
これより、作戦を開始する」

ここに、ナイトメア非武装派の上位メンバーと創設メンバー１７名による大規模作戦が展開された。

第２６話－Ｓｕｍｍｅｒ　Ｓｎｏｗ　Ｓｔｒｅａｍ！－

桜色の雪が降り始めてから7分。

芹真事務所のメンバーで、最初にその異変に気付いたのは藍だった。次にトキ、芹真、ボルトとそれぞれが異常を認める。

芹真は急いで電話を取り出し、ボルトにワルクスの携帯にコールしてもらい、受け取る。

４度の呼び出し音の後、ワルクスの声が伝わってきた。

前口上を述べながら背後から聞こえてくる音に耳を傾ける。

「お前たちの仕業か？　ワルクス……」

呼びかける電話の向こうから断続的破砕音が伝わった。

それだけで交戦中であることは分かる。

『そんなワケないだろ！　非武装派の連中だ！』

「すでに交戦中だな？」

『ああ！

俺の相手はレッドキャ――』

電話が切れるのと同時、目を扉の方へ固定したままボルトが芹

真のシャツを引っ張った。

「ここにも来るよ」

「何人だ？」

「とっても強い人、１人」

（非武装派の連中か。
ワルクスの相手はおそらく、あの妖精だな……）

ボルトの警告から数秒後、事務所の扉が勢い良く開いた。
開ききった扉を潜って姿を現したのは、青い縁の眼鏡をかけた男。
その姿に一瞬、芹真は固まった。

「こちらは芹真事務所ですよね？」

「うん、そうだよ」

出入り口に立ったまま男は尋ね、ボルトはしっかりとそれに対応する。

「はじめまして。私は……」

「マスターピースさんでしょ？

絶対糸配のＳＲ。
ナイトメア非武装派の第１リーダー」

「それで、どんなご用件でウチに？」

芹真は２つ質問した。
１つ、マスターピースの用事は何か。
もう１つは、

「あんたから藍の匂いがするんだが、知り合いだったのか？」

２つ目の質問について、マスターピースは軽く驚いた。

「あの鬼の娘、アイといったのか……ココに来る途中で襲われたものでね。
撃退させてもらったよ」

マスターピースも予想だにしていなかった関係性。
事前調査が甘かったと、心の中で自分に言い聞かせ――

マスターピースが言い終わるのと同時、芹真の対物拳銃が吼えた。

しかし、弾丸はマスターピースを掠ることさえなく、背後の壁に大穴を空けるだけに終わる。

（なっ……！）

「私に弾は当たらない」

戸惑う芹真に告げるマスターピース。

狙いは完璧だった。何度も何度も繰り返してきたクイックドロー&トリガー。いままで一度も外したことのない銃撃である。

それなのに腕、手首、銃口は、標的から逸れた別の場所に向いていた。

引き金が絞られる一瞬前、狙いが標的を避けたようにも思えた。

「私の用件は、光の魔女だ」

マスターピースの言葉を聞き、芹真の目がボルトに向く。

ボルトもそれを理解していたらしく、その双眸は闘志の輝きを放っていた。

「いいよ。
相手してあげる」

「ボルト、俺は病院を見てくる」

「うん。ここは任せて」

出入り口に立つマスターピースの脇をすり抜け、芹真は事務所を飛び出した。

そんな芹真をマスターピースは止めようとしなかった。

目的はあくまで光の魔女。

人狼はその気にさえなれば殺せる。

「さて」

社長の飛び出した芹真事務所で、魔女と糸配は向かい合った。

同時刻。

白州唯オフィス街。

「こちら衛星。

１１：３０、芹真事務所にて糸と光の接触を確認。

銀狼が別行動を開始。注意されたし」

雑居ビルの屋上。

そこでは、ナイトメア非武装派の千里眼（クレアボヤンス）がフェンスに寄りかかり、

白州唯各所の状況をつぶさに伝達する仕事を担っていた。

『行き先はわかりそうか？』
『シキヨの所じゃね？』
『いや、もしかすれば……』

「いま特定する」

『早くしてくれよ』
『馬鹿馬鹿しい。
俺はクリーニング店の奴等と遊んでくる』
『私もそうしよっかな？』

「……見えた。病院だ」

『それは何分後の未来だ？』
『おっ、マジで？
ツイてる！』
『げっ！
目の前……』
『でも、何でこの病院目指してくるんだ？』

「４９秒後に到着だ。
戦る気のない奴はとっとと逃げた方がいい」

『そうさせてもらうよ』
『銀狼の相手なんざまっぴら御免だ』
『ああ、物好きに任せる。面倒な』
『赤帽子が予想以上に頑張ってるんで、俺たちは予定を変更する。
ホート・クリーニング店の相手させてもらうぞ』
『俺は協会のアヌビスどもをやる！』

『どうすっかな～。予定通りいっちゃうかな～……』
『手当たり次第やりゃいいじゃねぇか！』
『そっ、臨機応変にね』

「……ああ。
その方がいい足止めになる」

『アヌビス来た～っ！』

「幸運を祈る」

『四季より衛星。
一般人の状況、協会と事務所、クリーニング店の動きを知りたい』

「了解。
効果が現れるまで残り推定１２０秒±１０。早い者はすでに意識を失っています。
それに伴い、協会は混乱中。
次にホート・クリーニング店ですが、影の魔女は寝息立ててます。
今のところ起きる気配はありません。
錬金術師はさっきまでアヌビスと行動を共にしていましたが、今はだいぶ離れています」

『罪の呪術師は？』

「一般人を起こそうとしています。
場所は商店街、東入り口から３００メートルの位置。
完璧再現は現在、日本に居ないようです」

『そうか……』

「次に芹真事務所。
銀狼は病院へ向かいました。
光の魔女は糸配と接触。
哭き鬼の娘はすでに戦闘不能状態です」

『色世トキは？』

「……」

『いま、どんな状況か？』

「それが……正直に申し上げると、見えないんです」

『何？』

「妙なことに、私の千里眼に映らないんですよ」

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第２６話－

―Ｓｕｍｍｅｒ　Ｓｎｏｗ　Ｓｔｒｅａｍ！―

芹真が自分の事務所を発ってから7秒後。
ボルトの光撃が、事務所の床と天井だけを残し、全てを吹き飛ばした。

爆発の衝撃波が周囲の建物のガラスを叩く。

飛散する破片を掻い潜り、マスターピースは夜空に躍り出た。

桜色に染まる白州唯。

ボルトの光線が真横を通過し、同時にボルト本人がマスターピースの高さまで上昇してくる。

（ペンライト？）

マスターピースに迫りながら、ボルトは細いライトのスイッチを入れた。
それに危機感を覚え、マスターピースは距離を取り、一瞬前にい

た空間を光が切り裂くのを目の当たりにする。

ペンライトの光を特定の長さに押しとどめ、質量を与えた得物。
光の魔女だからこそ実現できる武装魔術。
光の物質化、調整。

（なるほど、レーザーソードというわけか）

「それで、私に用って？」

「あぁ、私と戦ってくれないか？」

「足止めが目的なんだ。
でも、どうして？」

「考えていることを読んだな」

「協会が絡んでいるんだよ？
手伝っているようなものなんだよ？」

「ああ、知ってる。
知っていて、この機会を大事にしただけの事」

「じゃあ、いずれは来るつもりだったんだ」

光剣が明るさを増す。

「協会の存在以上に君たちの存在は危険だ。
戦争促進のため協会を相手に、我々を相手に……それでいて中立を貫く。
本当の目的は何だ？
過ぎた矛盾から疑問が生じたのさ。
世界中を敵に回してどうするつもりだ？」

「なら、あなたたちは？
協会を転覆させてどうするつもりなの？」

「新しいルールで世界の秩序を保つ」

「そうなんだ。
頑張って～」

ボルトが仕掛ける。
光剣の横薙ぎ。
しかし、剣筋は反れ、掠りもしない。

マスターピースは桜雪と共に降下する。

道路は早くも桜雪で埋まり始めていた。
地熱で溶けるよりも早く積もる雪。
国道では随所で事故が起こっていた。原因は明確である。この桜雪以外の何ものでもない。

『こちら欲望……全員、聞こえるか？』

無線に低く不機嫌な声が届いた。

『一般人の９９％が眠りについた。
とっとと片付けろ』

「第２段階、開始か」

ボルトの光撃が地面を掘り返した。
土柱を避けながらマスターピースは高度を落とし、路面数十ｃｍという低空を飛行する。

「百火光乱！」

マスターピースへ向けて無数の光の線が降り注いだ。
光線の発生源は街灯。
ボルトはそれが周囲に放つ光を一条の線に変え、またはそれを自分の手元に集め、あらゆる場所からマスターピースに向けて撃ち出した。

地面を抉る光線。
路上のあらゆるモノが焼き払われていく。

（ここら辺で始めるか）

マスターピースの右手が街灯に向く。
その動作を見て、ボルトはマスターピースの反撃を警戒した。

「さて、糸配を始めよう」

「させないよ～！」

後ろを振り向くと、ボルトはすぐそこまで迫っていた。
光速移動。
光剣が届く距離。
すでにマスターピースを射程距離に置いている。

体を捻り、光剣が振られ――
が、振られるはずの腕は、半分も振られないうちに止まった。
更にボルトの移動が止まる。

腕を引っ張られた感覚。
ボルトの目が街灯に向く。
そして、マスターピースの言葉の意味を理解する。

（もう、とっくに支配は始まっていたんだ！）

分かっていたつもりだったが完全理解には及んでいなかった。
ボルトは街灯に駆けつけ、根元から切断して腕の自由を確かめる。
不可視の糸。

噂に聞いたことはあっても、ボルト自身体験するのは初めてであった。

「糸の長さは１０メートル前後。
銃では撃ち抜けない、刃物でも切れない、炎だろうが焼けない」

戻ってくるマスターピース。
不利な状況に陥ったと、ボルトは悟った。
この状況で自分の能力の一部を公開するということは、

「知ってるよ。
これがあなたのＳＲ（チカラ）だって事は。
銃でも刃物でも無効化できない“繋がり”という武器をね」

「そこまで知っているか」

桜雪に阻害された視界の中、マスターピースは眼鏡の位置を正す。

「その通り、繋がりが私の力。
この世に在る限り、全てのモノに何らかの関係が纏わりついてくる」

（ヤバいなぁ）

「一般人には見えなくとも、ボルト・Ｓ・パルダン。

君になら見えるだろ？」

ボルトの視界に、少しずつ繋がりを持つ糸が浮かび上がってくる。
体中のあちこちに結び付けられた糸。
ボルトはそれに僅かな光を流してみた。次の瞬間から、不可視の糸は次第に輪郭を顕わにし、可視の糸となった。

（一体、これだけの糸をいつの間に！？）

街灯、信号機、立て看板、ガードレール、街路樹。
小型・大型・特殊車両。
道路、建物、人。

そして、ボルトとマスターピース。

あらゆるモノが2人を糸で取り巻き、マスターピースがこの場を支配し始めた。

「これ、雪だよな！？」

夏の曇り空を見上げた、友樹が興奮しながら言う。
友樹以外は言葉が出せずにいた。

常識と非常識がぶつかり合い、混乱が生じ、自分の目を疑い、現実を疑った。

「冷たい……！」
「何、で？
夏……だよ？」
「なんだよこの異常気象は！？」

「これって、夢？」

手に落ちる桜色の雪。
それを握り、トキは顔を上げた。

「奈倉さん、これって……！」
「ＳＲの仕業だ」

友樹らが騒ぐ後で、奈倉さんは頷く。

「これも四凶の仕業？」

「いや、四凶にこんなことが出来る奴はいない……可能な奴と言ったら、元々ナイトメアで、元協会の四季使い。
Ｍｒ．シーズン。奴以外考えられない」

桜雪が強さを増す。
夏の夜を冷気で包み行く。
トキたちにそれを止める術はなかった。

「四季より、欲望へ。
上空より、目標を確認。すぐその先だが、連れが何人かいる。
早急に眠らせたし」

『……欲望了解。
実行する』

最初にその男に気付いたのは岩井だった。
少しずつ強さを増してゆく降雪の中、桜色の奥から姿を現す誰か。
見知らぬ外国人。銀と黒の髪が混じりあった若い男。

岩井はその男を不審に思い、睨み続けた。
桜色の雪に動揺する自分たちとは違い、この光景の中を毅然とした態度でこちらに歩を進めている。この光景に戸惑うこともなく存在している男。

そして、男の目は自分たちに向いていた。
どんな用事があってこちらに向かってきているのか分からない。
だから警戒するに越したことはない。

（ん？）

一瞬だけ、岩井の視界に映る桜雪が輝いた。
だが、降り続ける雪に輝きは無い。
街灯に照らされてその姿を照らす程度で、目がくらむほど輝いてはいなかった。

「それがお前の欲するものか」

聞き慣れない声に全員の目が男に向く。
それと同時、岩井が崩れ、続くように智明が倒れた。

何が起こったのか、この一瞬誰もが理解できなかった。
トキにも、奈倉にも。

「お前たちの望みは同じところにあったのか……仲がいいんだな」

「岩井！　どうした!?
智明まで！」

心配して駆け寄る友樹。
警戒する奈倉さん。
目の前の男が何なのか、理解するまでそうかからなかった。

「あんた誰よ？」

「お前の望みは……
いや、お前たちの望みは友を護ること、か」

男が言い終えるのと同時、何の前触れもなく、今度は友樹が倒れる。
次いで奈倉さんが胸を押さえながらよろめきだした。

「奈……！」

「大丈夫だ、ケルベロス。
お前の友人には手を出さない。
ただ……1人の例外を除いて」

男の目がトキに向く。
トキは傾く奈倉の体を支え、その場に寝かせた。

「俺はコルスレイ。
以後よろしく」

突風が目をくらます。

頭を下げて挨拶する男。

しかし、トキの目は倒れたクラスメイトに向いたままだった。構っているほど余裕がある訳でもないし、付き合う理由も無い。

そんな無言のトキにコルスレイは声をかけた。

「……なぁ、お前も名乗れよ。
例え、相手が自分を知っていようと名乗る。
それが礼儀だろ？」

「色世トキ」

「お前、今は先生と一緒にいるんだろ？
礼儀くらい教わらなかったのか？」

「先生って誰だ……？
何でこんな事をするんだ！」

肩に積もった雪を払いながらコルスレイは答える。

「俺は手伝いだ。
そのついで、先生がいるこの街を見てみたかった。
ただ、それだけでここにいる」

「手伝いって――」

「もうすぐ本命が来るハズだ。
それまでちょっと待っててくれ。
……ところで、お前は興味深いな」

トキは1歩引いた。
合わせるようにコルスレイは1歩前に出る。

「他の人間とは少し違う欲を願っている」

「……先生って誰だ？」

「俺を助けてくれた人だ。
今ここでこうしていられるのも先生のお陰であり、先生の所為でもある」

「意味がわからない。
先生って、誰だ！？」

病院の前を中心とした一帯が戦場になろうとしていた。
その原因が、芹真と芹真を待ち受ける3人のＳＲである。
目標が視界に飛び込んだ瞬間――芹真は病院を視界に捉えるのと同時、砲撃による歓迎を受けた。

対戦車ミサイル。

地面を強く蹴って跳躍する芹真。

ミサイルを飛び越し、背後で起こる爆発に照らされ、そこかしこに身を潜めていた敵の存在を確認する。

（3人！）

跳躍中、ハンドガンを取り出すのと同時、芹真の体が不自然な落下を始めた。

自然落下のそれとは違う、上からの圧力。

「こっ……超能力か！」

芹真の目が1人の韓国人を捉えた。

ナイトメアの上級サイキッカー。　ギュン・パクフォン。

地面と背中が密接する。　呼吸を乱しまいと抵抗する芹真だが、体が思うように動かない。

一瞬後、不可視の圧力から解放されると同時に反撃に出ようと試みたが、

「いっただきぃぃぃっ！」

（いつの間に……！？）

間髪居れず、他のＳＲが襲い掛かってくる。
動けない芹真に対して大きく振りかぶった大鎌。
繰り出される斬撃。

回避――間に合わない。

しかし、斬撃より、回避より、芹真の指は早く動いていた。

銃声が木霊する。
向いた銃口から放たれた特殊弾がギュンの目前で消滅する。
サイキッカーの意識を芹真から逸らし、大きな隙を作った。

空を切った大鎌がアスファルトに突き刺さり、鋭利な傷跡を残す。

（赤いハーフフィンガーグローブに、右頬の火傷。
噂通りだコイツは……死神のＳＲ！）

芹真は紙一重で脱し、死神に銃撃を浴びせる。
が、銃弾は全て死神の体を透き通り、背後のトラックを破壊するのみに終わる。

「残念賞ぉ～っ！」

殺意に満ちた笑顔。
銃撃が無駄と分かった瞬間、芹真は全力で跳んだ。
一瞬前にいた場所が不可視の力で蹂躙される。
砕けたアスファルト、舞い上がる桜雪、潰された植込み。

「下っ手くそ～！」

サイキッカーに文句を垂れながら死神が追跡を始める。
芹真は路上からビルの壁面へと跳び、そこから適当な建物の屋上へと足場を変え、２人を引き離そうとした。
２人同時に相手をするにはリスクが高い。
死神はさして問題ないが……

（まさかサイキッカーに出くわすとは！）

死神が浮遊して追ってくる。
銃撃を浴びせながら芹真はサイキッカーとの距離を嗅覚と聴覚で確認し……――

「させない」

屋上から屋上へ。
芹真が跳んだその瞬間、サイキッカーが追いつく。

「テレ……マジか！？」

顔と顔がぶつかり合う程の至近距離。

突然の出現に芹真は動くよりも考えてしまい、引き金を引くよりも早く、ギュンのサイコキネシスをまともに受けてしまう。

先程よりも強烈な圧力。

風が、桜雪が不自然な加速と降下を始め、芹真も落ちる。

飛翔の慣性・重力の法則を捻じ曲げてしまうほど強力な付加重力。

地面に向けて加速が始まった。

（やっぱり、一番厄介なのはサイキッカーだ！）

だが、芹真は最後まで足掻く。

不可視の圧力を受けた瞬間、空振り覚悟で放った蹴り足がサイキッカーの太腿を捉えた。

（コイツの視界に入るのはやばい！）

（……っ、空中でこれほどの蹴りを放つとは！）

圧力が消え、同時――

「ダッセ！
蹴られてやんの！」

落下の最中に死神が追いつく。
芹真は乱射を繰り出すが、死神は横目も振らず芹真に迫ってくる。
銃弾は当たらない。建造物の壁面を剥がして終わるだけだ。致命傷どころか、かすり傷にもならない。

「効かねェんだよ！」

吼える死神に芹真は別の得物を向けた。

「じゃあ、こいつはどうだ？」

指先から生える銀爪。
桜雪に視界を阻まれた死神がそれに気付いたのは、芹真の射程距離に入ってからだった。

「なぁっ！
銀の爪！？」

芹真の指先が弾け、銀色の鋭爪が死神に触れ、貫いた。　左肩に

穴をあけられた死神は、自分が傷を負ったことに驚く。
背後の建物に突き刺さった爪。
銀爪。

「テンメェ……納得いかねぇ！
なんで人狼のくせに俺に触れるんだ！」

空中で体勢を整え、芹真はトラックのコンテナ上に着地する。
死神がアスファルトに降り、サイキッカーが死神の反対側に姿を現す。

「何で俺に傷つけられるんだよぉっ！？」

「惨めな」

芹真を挟んで死神とサイキッカーがにらみ合い、同時に芹真は背後の足音を聞き取った。
３人目のＳＲ。
奇妙なことに、そいつからは一切の匂い漂ってこなかった。

（この変な雪の所為か？）

「ダイアン、この人狼は芹真皇聖（セリマ　コウセイ）。
日本の北の人狼一族最後の１人だ」

「サイキッカー、俺をフルネームで呼ぶな。
その名前は嫌いなんだよ」

芹真の警告を無視し、ギュンは続ける。

「ダイアン。君は“ＣＵＭｏ”という名を聞いたことはないのか？」

「聞いたことねぇよ、悪いか！？」

芹真の目がギュンとぶつかる。
既に死神は眼中に無かった。

「魔を以て魔を滅す。
獣と共に、風と共に、歌と共に」

「お前は俺のことを知っているのか？
ギュン・パクフォン」

「知っているさ。
様々な人狼の中でも異端の一族、対魔銀狼。
その人狼、計１４人からなる楽団における指揮者の１人」

「たいまぎんろう？　楽団？
指揮者って……
コイツ、リーダーだったのか？」

死神が顔をしかめた。
聞いたことの無い単語に頭を働かせて検索をかけるが、やはり分からない。

「１０代後半から２０歳未満の男女から編成されたその部隊は、協会の助力を得て世界中を飛び回り、テロやＳＲによる犯罪の早期解決に臨んだティーンスカウト達。
これが裏の顔だ。
その一方で、オペラから民謡、クラシックからクラブミュージックまでこなす１４人の男女。これが楽団の表の顔。
表のバンド名を“Ｃｒｉｔｉｃａｌ　Ｕｎｄｅｒ　Ｍｏｕｎｔａｉｎ”で、略称が“ＣＵＭｏ”だ。
裏の名前は日本語に変換して“雲”」

「……何故そこまで知っている？」

「犠牲者ですから」

「ちょ、お前ら、俺を無視すんな！」

「何処で遭遇した？」

「フランス。
僕が研修旅行中の話だ」

「……美術館か？」

「もっしも～し！！」

「あの日からずっとアンタを追っていた！」

前後からの攻撃。

芹真は死神に向かって飛び、銀爪で死神を自分が立っていた場所へと突き飛ばす。

そこへ見事なタイミングでサイキックが襲い掛かった。

更に芹真めがけて発射された複数のグレネード弾が死神の足元――１０ｔトラックのコンテナから運転席まで――を吹き飛ばした。

「邪魔するんじゃねぇよ、ギュン！
テメェもだ、キリ！
つぅかワザとだろ！？」

「やれやれ」

「クスッ……」

文句しか口にしない死神を放って置き、銃撃を繰り出す芹真と向き合うサイキッカー。

吼え続ける死神。

どこからともなく聞こえる微かな笑い声。

ギュンの目が芹真の銃に向く。

前に目撃した時、芹真は銃器の類を使っていなかった。

昔を思い出し、今の自分の使命を思い出す。

「殺すには早いだろ。
まだ確認すべきことがあるんだ。勝手に先走らないで欲しい」

「俺に命令すんなっ！
ていうか、殺す気満々だったのはどこのどなたか覚えてますか～
!?　えぇ、こら！」

死神を無視し、ギュンは芹真に向け、単刀直入に言い放った。

「僕たちの仲間になりませんか？」

「はぁ!?
確認するべきって……おい！
芹真事務所を勧誘すんのかよ!?」

「光の魔女を除いて、全員が四凶反対派だと聞きました。
目的が同じなら我々が争う理由など無い。そうでしょう？」

矛を下ろすサイキッカー。
それでも仕掛け、突っ込む死神。

「俺はゴメンだね！
こんな生チョロくて弱ぇヤツなんか！」

「じゃあ、そんなチョロくて弱い俺とタメ張る程度のお前は何なんだ？」

大鎌による旋風と芹真の銃撃。
桜雪が舞い上がり、アスファルトが砕け散る。

「断る」

「一時的に協会に属していたあなた方が味方につけば戦力的にも心強い。
それに、非武装派はこれから1年以内に協会との接触をはかる計画を立てています」

「おい！
何バラしてんだコラァッ！」

「そのため、あなた方の協力が必要不可欠なんです。
計画が成功の暁にはあなた方や、ナイトメア全体の矛先が協会で無くなる」

「それでも断る」

銀爪と大鎌がぶつかり合う。
至近距離での銃撃。
足元から飛び散る破片で視界を遮り、距離を取る。桜雪のお陰もあって離れることは容易だった。

「俺たちはあくまでも小規模集団で動く」
「それは、楽団に対する未練ですか？」
「ああ。
それに、オレ達の矛は最初から向けられるべき方へと向いている。
向けているつもりだ」
「そうですか。
あなたの通り名は“殲滅行進”でしたね？
是非とも――」
「何だと！
こいつが、デストロイ・マーチか！」
「悪いが見せるつもりは無い」
「見せてもらわなくともコツを教――」
「うるせぇ！
ゴチャゴチャ言ってんじゃねぇ！
とっとと見やがれ！」
大振り。
姿勢を低くし、脇腹へ銃撃し、両足には左手の親指と小指を向けて銀爪飛ばし。
銃撃は効かずとも、銀の爪は透き通らない。

「見せないって言っただろ。
難聴か？
それとも聞く耳無しか？」

「とにかく見せろ！」

（馬鹿だ）

「……なるほど、馬鹿か」

「馬鹿ぁ？
何とでも言いやがれ！
デストロイマーチに会うことを何年も夢見てきたんだ！
お前こそ俺を知らないのかよ、えぇ！？」

銀爪の傷を意に介することもなく、死神は無無闇やたらと鎌を振り続ける。

「俺は全滅舞曲！　ダイアン・デューティフリー！
死神のＳＲだ！」

「無税？」

「デューティーじゃねぇ！
デューティだ！」

「自由義務、か。

どのみち凄い名前だな」

「テメェに言われたくねぇぞ！　芹真皇聖！
俺の舞曲とテメェの行進曲どっちが上か、殺し合おうじゃねぇか！」

「嫌だね。
それに、俺を名前とフルネームで呼ぶなと……そう言った筈だ」

低くなっていく芹真の声に、サイキッカーは身構えた。

銀爪が鎌を弾く。
その連撃速度にダイアンは自分の死を予感した。

銃弾程度ならと、そう考えていたこと自体が間違い。
芹真の連撃速度はマシンガン程度のレベルではなかった。

ぶつかりあう得物と得物。
一方的な攻防。
最中、地面にクレーターが穿たれ、２人の戦いにギュンは加わっていった。
受け入れがたい存在とはいえ、同志であるダイアンを見殺しにすることは出来ない。

それにもし、芹真を撃退できたのなら……

夏の吹雪が一生に一度あるかないか考え始めた最中、彼は襲撃を受けた。

「いや、だから！
一番性質悪いの来てっから！」

その襲撃をきっかけに我に返った錬金術師、ハンズ・ブリジスタスは柄にもなく携帯電話で助けを請いてしまった。

「はぁ！？
助けてなんて言ってねぇ！
どうなってんのか教えてくれってんだよ！」

『こっちも交戦中だ！
状況もクソもねぇ！
あちこちでお前んトコと芹真事んトコ、それから俺たち協会が攻撃されてんだよ！』

「何でだよ！？」

『こっちが知りてぇよ！
お前の所には誰が現れた！？』

「たぶん、原初悪夢！」

『はっ？　マジか？

レアな体験じゃん！　そいつ本物か！？』

「後ろから追っかけてきてるんだよ！」

『幻覚じゃないよな？』

「テメェの鼻で調べてみやがれ！」

『いちいち文句付けんな！
こっちはドッペルゲンガー相手してんだぞ！』

「ド……おいおい、ちょっと待て！
何でそんな特級にヤバイ奴がこの国にいるんだ！？」

『他にもマスターピースやＭｒ．シーズンなんかも確認されている』

「はぁっ！？
防衛ライン敷いてるって話は嘘だったのかよ！？」

『だから、俺たちも対応に追われているんだよ！
分かるだろ？　緊急事態だ！
もう切るぞ邪魔なんだよ、ボケッ！』

「お、ちょ！
待てコラ、ハルバート！
誰か１人くらいこっちに……！」

ハンズが言うより早く、ハルバートのアヌビスは通話を終了する。
やり場の無い苛立ちと虚しさ、的中した予感による落胆が何処か

らとも無くこみ上げた。

「冗談じゃねぇ！
帰って寝てりゃ良かったぜ！」

桜雪に苛立ちを感じながら、錬金術師は警察署を目指して走り続けた。

今の自分に追いかけてくるＳＲを迎え撃つだけの実力を持ち合わせていない。
だから、ハンズは対応できる奴を求めて走った。
メインで戦うのも嫌いではないが、影から支援するのも嫌いではないし、自分のＳＲが支援に向いていることをハンズは知っていた。

だから、走った。

白州唯の各地で戦闘が発生してから数分。各戦線の状況は一進一退を繰り返していた。
駐屯している協会部隊の出動。
ホート・クリーニング店の妨害。
芹真事務所の行動。
激変を続ける空模様。

しかし、それら激戦の中で、光と糸の戦いはほとんど進展してい

なかった。

両者微動だにせず。動き出す気配がない。

糸配と包光。

お互いの仕掛けが膠着状態を作り出し、互いに身動きできずにいた。

ボルトの光がマスターピースの体を包み、マスターピースの糸はボルトをの体をあらゆるモノに繋ぎ止めていた。

桜雪が、ナイルグリーンの霙（みぞれ）に変わる。

「こちらＭＰ。四季へ、雷だけは落とすな」

『四季了解。

霙は降り始めたか？』

「良好さ」

『……わかった』

空中で睨み合うボルトとマスターピース。

霙と強風がマスターピースの声を掻き消した。

なるべく会話を聞かれないように、という試みであったが……

「Ｍｒ．シーズンが来てるんだ～」

魔女の前で隠し事は無意味に等しかった。
濡れる髪にもどかしさを感じながら、ボルトは聞く。

「目的は私達？」

「他の何人かは、な」

「全員で17人ね～。
少ないけど、みんな実力者だね」

「まったく厄介だな、読心術というのは」

「うん。よく言われるよ♪」

ボルトを拘束する糸が絞まり、皮膚に切れ目が走る。
マスターピースが拘束を強めるのに合わせ、ボルトもマスターピースを包む光を凝縮させた。
体が軋む。

「ちっ！」

「下手に動いちゃだめだよ？」

「俺は動かなくてもいいが、お前は動かなくてはいけないだろ？」

再び睨み合う2人。

「協会の部隊はすでに足止めを喰らっている。
芹真も当分帰ってこない。
お前を助けに来る者など1人もいない。
だが、こちらにはまだ仲間がいる」

「……知ってるもん。1人こっちに向かってきてるんでしょ」

「俺たちと来ないか？
ボルト・パルダン」

空中で微動だにできない状況にありながら、マスターピースは勧誘を試みた。
彼にはボルトが芹真事務所に身を寄せている理由がわからなかった。彼女を超えるほど強力なSRが居るわけでもなく、またナイトメアのように自由に活動できるわけでもない。

「い～やっ！」

「君は協会によって殺されたと聞いたが、それでいいのか？」

「……いいのかって？」

「なぜ誤魔化すんだ？」

「誤魔化していないよ～？」

マスターピースは首を横に振る。
ボルトに遊ばれているのではないか。

「君は過去に一度、協会の部隊に殺されている」

「……」

「私は当時の記録を覗いたから知っているだけだが……
生き残った魔法使い達はみな揃って悪夢の年だったと言っている」

「……」

「その前は、原始宗教殺しから始まり――
草原・密林・村・街などへの放火、焼き討ち。
加害民族の虐殺。
単独での魔法使い狩り。歴史書で言うところの魔女狩り。その核心対象」

「うん？」

「居もしない神を信じる人々を、手当たり次第に葬ったことは覚えていないのか？」

「全然」

「君を探すためだけに、協会が魔女狩りを始めたのを覚えていないのか！」

「……」

「お前が何万人の魔法使いという人々を消したのか、それさえ覚えていないというのか！？」

「そこまで言うなら、教えてあげるけど」

風が止み、霙の音が際立つ。

「宗教を消したことは覚えているよ。
４万と３１０６人の正魔法使い。それと、その家系を消したことも覚えている」

「……それでもいい。
私たちと共に、協会を正そう」

「嫌だよ～だっ！」

「自分の罪を意識しているなら、まだ……」

「悪いけど、協会なんかに興味はないんだ」

一瞬、マスターピースの思考が停止した。

協会に対する興味が、無い。

それは全く予想外の返答であった。
ボルトほどの魔法使いが協会に興味を抱いていない。
夢にも思わなかった事実にマスターピースは戸惑った。
なら、光の魔女が過去に犯した犯罪の原因は何なのか？
彼女が協会を敵対視する理由は何か？

「それから……」

緑色の霙が光を放ち、周囲を照らし始める。

「私は、ボルト・N・パルダンなんだ。
なんかおかしいよね～♪」

（……見誤ったか！）

空中のそれらが光り始める。
霙を光が包み、その光が強さを増してゆく。
直後、それらの光が一斉にマスターピースへと牙を向いた。

雪の降り積もる夏の夜。

一時的に意識を失っていた彼女は雪の中から起き上がった。
背中に積もった雪が落ちる。
冷えたアスファルトに手を突き、ゆっくり体を起こしていった。

「いっ……！」

体中に刻まれた無数の切り傷。
そこから流れ滴る血に気付き、懐から白い符を取り出して傷に覆い被せた。
五体のどれが欠けているわけでなく、また決定打は喰らったものの、致死的外傷は無いに等しい。

周囲を見渡し、数分前の戦闘の傷跡がそこかしこに残されていることを確認する。

（夢、じゃない……）

立ち上がり、桜雪に埋もれた得物を拾い上げる。
理壊双焔破界。　そして、生死繋綴。

「生死（コレ）繋綴を奪いもせず、行った……？」

それが藍にとって理解できなかった。そう、最初は。
マスターピースとの戦いを思い返し、その最中に理由を語ってい

たことの意味を改めて理解する。

“我々は陽動”

非武装派の第1リーダーが陽動で動くわけが無い。
それが信じられなかった。それ故に別の意味があるものだと思い込み、その所為で何がこの街で起こっているのかさえ理解できず、遭遇した敵に敗北を喫した。

だが、本当は最初から分かっていたはずだった。

特別な意味なんかない。
それは最初から考えられていたことだ。

(協会以外の誰かがトキを……
それしか考えられない!)

負った傷と装備を確認し、彼女は走り出した。
目指すはトキの家。
マスターピース程の男が陽動として動くということは、本命はそれ以上の実力を持った誰か。

(まさか……メイトス?)

最も考えられ、大いに可能性を有する男。
他に考えられる奴がいない。

しかし、どのように立ち回ればナイトメアのリーダーが動くのか。
道筋が立たない。
様々な可能性を考えながら、彼女はひたすら重い足を前へと進めた。

「そう。誰にも分かるはずが無い」

ＰＭ　２３：３０

「そもそも関係を持つことが人をリアルタイムに変えていく。
主にプラス。
しかし、孤独からもプラスは生まれる。が、それは隕石が地表に届くほどの確立での誕生。
確実じゃない」

１人の男が交差点の中央で足を止めた。

「なら、プラスとは何だ？
マイナスとは？
そもそも性格の方向性に±という概念を用いることは正しいのか？

揺るがない精神を以てして、人はどこまでいける？　どこまで変われる？」

桜雪の降る空を仰ぎ独り言を続ける。

「変わり続けることに終わりがあるのか？
無限に変わり続ける者にとって、終わることは幸福なのか不幸なのか。
どう思う、俺。
この質問でどれだけの人間にどう思われてきた、俺……」

自分の問いに対する答えを思い出して吟味する。

変化、進化と退化。
在ること、無いこと。
始まることと終わりを迎えること。
何かを始められること、何かの終わりを知ること。

その中の普遍的回答のひとつ。

「何千年過ぎれば、人の世から争いは絶える……か」

無音の夜。
人とは違う世界を生きる男。　人が触れることの出来ない世界に、
男の笑い声だけが響く。

「思い返せば、なかなか面白いことを言っていたんだな、色世皐は。お嬢様を装った、ワガママ女王め……今頃になって笑えてくるとは！」

男から笑い声が途切れ、しかし、微笑みは崩れない。

「さて……返してもらうか。
どうせトキにでも託し、残したんだろう。
死してまで隠したものだ。運があったらトキを生かしてやるし、遺言があったら聞いて記録しておいてやる……クフフッ！」

目を瞑り、正面へ顔を向け、再び歩き出す。
数歩進んだ後に目を開き、男は少年を目指した。

「どんな方法を使ってでも、我々、選ばれたマイナス要素は残らなくてはいけない。
ありふれたプラスなど要らない……」

男は好奇心が理由を上回ったことを実感して笑った。
返して欲しい物があって会いに来たはずなのに、以前から募っていた“わずかな、会いたいという気持ち”がそのサイズを変え、好奇心へと姿を変えて前に出ていた。

「オレが苦労して見つけた破片を取り返すんだ。　自分に言い聞かせろ……
　フフッ、先に殺してはいけない。無駄とわかっていても言い聞かせてみろ、俺。
ククククッ……やっぱ、無駄だろうな！」

声高らかに男は笑いながら走り出した。
どれくらい走ったのか分からない。
どれだけ大きな声で叫んでいたのか自分では把握出来ない。
ただ、目的が変わろうとも情熱は変わらず、また多大な興味があった。

「いま会いに行くぞ、トキ！」

自分と同じ力を持っているＳＲ――

色世トキに。

第27話「桜雪白州唯の戦い！」（前書き）

「来たか……それじゃあ、失礼するよ」

トキの質問が出たのと同時、コルスレイは本命の存在を知覚した。

腑に落ちない点はあるが、コルスレイは何も追求しようとはせず、踵を返す。

「待て！」

「君の友達は寝ているだけだ。
それよりも、トキ。君自身の心配をした方がいい」

吹雪く桜色の雪の奥へと消えていくコルスレイへ向いたままトキは立ち尽くす。

そんな、呆然とするトキの視界に新たな人影が飛び込んだ。

第27話 ― 桜雪白州唯の戦い！ ―

コルスレイが去ってすぐ、入れ替わるように桜雪の奥から見知らぬ男が姿を見せる。

トキは倒れた友樹らに目を配ってすぐに視線を前に戻した。
次第に不鮮明だった男の姿がはっきりと浮かび上がってくる。

――近付いてくる。

上下とも黒い出で立ちに、オールバックの髪と露骨に握られた大型拳銃。
トキは身構えた。
あまりにも不自然すぎる。
状況が状況なだけあって、敵か味方か疑わずにはいられない。

（今、武器を持っていない。
大丈夫なのか？）

更にトキの周囲には友人がいた。
もし、近付いてくる男が敵なら、彼らを巻き込まないよう戦えるのか。巻き込まない為にはどう戦えばいいのか。

（ここから離れる？
いや、人質に取られるし、誘い込む術を知らない。
それに、目的が器実験とかだったら、誘拐される可能性も……）

目が再び友人に向き、そして歩み寄る男に向く。

先手必勝。或いは、４人を安全な場所まで運んでから対峙する。

どちらにせよタイムリーダーを使わざるを得ない状況だった。

「やっと会えたな――」

思案するトキの視界から男が消えた。

何が起こったのか理解が追いつかないトキの頭に、男の声が届く。

（何だ！？）

背後から、何かが迫っている。

どうしてか背後から声が響く。

（止まれ……！）

トキが振り返るのと同時、世界が止まる。

タイムリーダー。

桜色の雪が降る夏の夜、トキとそいつは初めて出会った。

強さを増す降雪が止まり、静まり返った夜から完全に音が遮断される。

風の音さえ起こらない止まった世界。

しかし、

「色世トキ。
フッ、クククッ！」

「何で……？
どうしてだ！？」

男と距離を取り、トキは周囲を見回す。

桜色の雪は停止していた。

暗さを増した夜。

一切の音が遮断された世界。響いてこない世界。

完全に時間の流れは止まっている筈だった。

しかし、男は動いている。

暗闇の中、まるで光源のようにハッキリとそこに存在し続けていた。
そんな男のオーラがトキの焦燥感を仰いだ。

「ん？　どうした？」

「お前は誰だ！？」

男は再び笑う。
不快な笑い声がトキの神経を逆撫でた。

「何がおかしい！」

「コレが笑わずしていられるか！　やっと俺とお前は出会ったんだからな！
クッ、ハハハハッ！」

頭を抑えて笑う男。
トキは隙を見て距離を縮めようと男を窺った。

「もっと驚けよ、トキ。
このパーティーは俺とお前の為に用意されているんだぜ？」

「パーティーだと……？」

「あちこちで戦闘が起きているんだよ、いま。
どうだ、ん？
一緒に見に行かないか？」

トキが1歩後退る。
前に進むために注いでいた視線が、男の奇妙な雰囲気から恐怖を感じ取り、意志に反して引いた。

止まない警鐘。
絶えない寒気。

何を言っているのかわからない。何がしたいのかもわからない。
なぜ笑えるのか。　それさえ理解不能である。

「あんたは協会か？
それともナイトメアか、それとも――」

「そんなつまらない概念は捨てろ。
もちろん、俺を四凶と呼ぶのも無しだ。
俺にだって呼称はある」

（やっぱり四凶……でも、こいつが？）

トキは四凶の言葉でトウコツの姿を連想し、目の前の男と重ねてしまう。
姿形は比べ物にならなかった。
体格もトウコツに比べれば細く、身長は同じくらいだが殺意がな

い。

しかし、

「ああ、そうか。
俺ばかりがお前のことを知っていても公平じゃないよなぁ。
公平である必要は無いけど……フククッ！」

何故か、笑った瞬間の嫌悪感はトウコツを遥かに上回っていた。

「パーティーって、この雪のことか？」

「そうだ。
なかなか綺麗だろ？」

男の手が停止した桜雪に添えられる。

「気味が悪い……俺に、何の用事だ？」

「怒るなよ。
別に怒っても良いけど」

「殺しに来たのか？」

「それも悪くない」

「俺の友人には手を出すな！」

「ああ。
心配するな。興味ない」

「あんたはＳＲだな？」

「いまさら聞くか？
まぁ、いい。
そうだ。そして、お前もＳＲだろ。トキ」

「……あぁ」

「そうか。
じゃあ、いきなりだが“ＳＲの在り方”について考えたことはあるか？
まぁ、捉え方はいろいろあるが」

男の手に握られた大型拳銃が不気味に輝き始める。
わずかに視線を配らせてからトキは男に目を戻す。

「協会とナイトメアの事か？」

「ん～、まぁ、小規模集団も含めて、そこら辺からだな」

「何で協会とナイトメアが争っているのか、納得がいかない」

「納得がいかない？
どう不満だ？
俺は満足さ。いつだってな」

「満足、だって？
そんな私情は聞いていない。
何で協会はナイトメアと話し合おうとしない？
その所為で俺達の学校にまで――」

「ウハッ！　当たり前だろ！
トキ、お前って意外と頭悪いんだな～
世界の物事全てに私情が絡んでいる。
だから、話し合いも何もあったものじゃないんだろ」

話しながらトキは友樹ら3人の倒れている場所まで移動する。目線は男に向けたまま逸らさない。
男は笑みを浮かべ続け、トキのその行動を見張った。

「政治、国、軍隊……
孤独が嫌だから誰かと一緒に居る。
無作為に構成された集団をまとめるため誰かが上に君臨する。
乗っ取られることが堪らないから自ら戦争を仕掛ける。
ありとあらゆる現象に理由がある。
生きるためメシを食う。休むため寝る。楽をしたいがため知識を容れる。死にたくないから抗う」

「それ全部が……私情だって言いたいのか？」

「全部私情だろ？
ナイトメアが協会の方針にケチをつけるのも、協会がナイトメアを認めないのも、お互い都合が悪いから以外の何ものでもない。
でもな、そういうのは組織云々の前に個人で起こっているんだ。
だからさ、実際のところはどうしようもない訳だよ」

「え……？」

「例えば、虫も殺したことの無い子供に、知りたくもない、聞きたくもない暗い未来を教える。
それは預言者が自分に降りかかる火の粉を前もって消火しておこうと考えた結果さ。
結果、その子供は予言を受けてから本当にその通りの運命を歩み始めた。
全ては預言者の私情から始まっていえる。
自分に害が及ぶ前に逃げようとした結果さ」

「全ては、自分のため……そのために他人を陥れるのか？」

「例えば、人々が望む国家を作るため。例えば、人の欲を満たすため。例えば、個人の願いを叶えるため。
元を辿れば必ず欲があって、私情が絡んでいる。
しかし……それこそがＳＲの起源でもある」

男も移動する。
トキは男が歩いて行く方向を見て焦った。

やがて男は足を止め、足元に倒れた奈倉に銃口を向けた。

「やめろ！」

「ナイトメアと協会が争う理由は協会のＳＲに対する対応と基本的方針にある。
ピックアップする内容は小さいが、濃度の高い問題だ」

男は腕を下ろし、倒れた番犬に目を配る。
鼻で笑い、再びトキへ。

「トウコツとはもう会ったらしいな」

「……お前はトウコツに頼まれたのか？」

「フフフッ、もしかしてビビってる？」

「悪いか」

「いいんじゃないか？
オレがトウコツとどういう関係で、どんな理由があって来たかなんて」

（よくない……）

笑いながら男は続ける。

「正直驚いているんだぜ。
一番下っ端でも自分の先輩を影武者に使うようなトウコツから手首を奪ったんだからな。
力に目覚めてわずかしか経っていない新米にしちゃ上出来だぜ、トキ」

「協会とナイトメアが争う理由ってなんだ？」

「いい感じに焦ってるな。
ククッ……
本人の口から言うんだ。聞き間違えるなよ？」

（本人？）

「ナイトメアには武装派と非武装派があるだろ？
特別な武器を持って協会に楯突く武装派と、ＳＲの力だけで協会に挑む非武装派。
両者の決定的違いは、一般人を巻き込むか否かだ。
ある意味で両派共に巻き込みまくっているんだが、巻き込み方が違う」

トキの脳裏に２つの光景が浮かぶ。
イマル・リーゼ襲撃時と、黒羽商会の飛行艇。

「武装派の連中はＳＲがなくとも、使える人間なら誰でも仲間に迎えて、それで戦争を仕掛ける。
非武装派はなるべく一般人に犠牲者を出さないよう仕掛けてくる。
目的は同じだが、方針の違いもあって、お互いナイトメアの中で

相容れない組織関係に成長しきった」

非武装派はなるべく犠牲者を出さないようにする。
男が奈倉や友樹たちを指差した。

その言葉をトキは信じなかった。
信用できない理由はとある前例――白州唯高校を襲撃したメンバー。
あの時、イマルは器実験の有資質者の確保も目的だと言っていた。

「俺が会った男は一般人を巻き込もうとしていた」

「ああ。
そういう奴らもいる。
それでな、そういう奴らがいる原因がオレ達なんだよ」

一瞬、トキは理解に窮した。
目の前の男は言動・仕草、どれをとっても突っつき難いのだが……

「たち……？」

今の言動はその中で特に理解に時間を要した。

「協会そのものじゃない。

その一部、オレ達“四凶”が原因なんだよ」

以前ボルトに言われた名前が頭に浮かび上がってくる。

トウコツ、トウテツ、コントン、キュウキ。

それぞれがこの世の悪を担うという。

いわば、禍根。

負の原因、元凶。

「お前は誰だ!?」

「ああ、俺な。

フッフフ、ハハッ!」

「どうして――何がおかしくてそんなに笑える?」

「お前も笑えよ!

考えてるだけじゃ見えてこない事があるんだぜ?

わからないか?　わかるだろ!?

成した奴、試した奴、死んだ奴らにしか見えてこない真実って奴だよ。

あるだろ?　そういうのがさ」

「……」

いつの間にか動き出していた桜雪に気付き、トキは顔を上げる。

再び、トキの視界から男が消えていた。

（止まれ！）

タイムリーダーの発動。
それと同時、背後に気配を感じた。
殺気とは違う、黒く禍々しく巨大なモノ。

振り返った先にいた男は、自分の側頭部に銃を突きつけていた。
何がしたいのか全く理解不能なまま、トキは男と睨み合う。

「そうそう、そんな風に生きることも必要だ。
考えるのをやめて直感を頼りに生きろ」

自分に銃口を向ける男に言われても説得力は皆無。
何がしたいのか、何を言いたいのか、微塵も理解できない。

「さて、トキはどうする？」

「どうするって……話が飛びすぎていて何のわからないんだよ！」

「だから、それがダメなんだよ。
何を話せと強制しているわけじゃないんだ。
言いたい事を言えばいい」

トキは更に混乱した。
どう足掻いても、本当に目の前の男は理解できない。
行動も、言動も……

「あんたの名前は何だ？」

「いいぞ、その調子だ。
オレの名前はコントン。
お前は色世　時……フフッ」

その名を聞いた瞬間、トキは全員を連れて逃がす手立てを全力で考えた。
四凶が自分を狙っている。
そう言われたのが今朝だ。それがいま、実現してしまっている。

「ああ、そういえばトキ。
お前リストに載ってたぜ？」

「リスト？」

後ずさりながらトキは聞き返す。

「喜べよ。これで芹真事務所全員がリスト入り果たしちまったんだぜ？」

「何のリストだ？」

「もちろん、黒いヤツさ！
光の魔女がＳ級、哭き鬼はＢ＋。
銀狼がＡ級、完璧もＡ、完全受容もＡ。
ほぼ全員がトップクラス。その中でだ、いったいお前はどれくらいだと思う？」

「指差すな
……それは指名手配って事か？」

「違……あぁ、まぁ、準指名手配だ」

（どっちみち犯罪者扱い）

「もし罪を犯したなら、そいつのランクに合わせて討伐チームが派遣される。
その基準がランクだ。
ＳＲが強力で、その内容が稀少な奴ほど高いランクに載っちまう」

「オレも……入っているんだな？
でもその前に、芹真事務所には４人しかいない。
２人多――」

「お前が知らないだけだ。
芹真は他にも準事務所員として２人のＳＲを抱えている。
聞いた話だと、お前はその内の１人とは何度も会っているらしいじゃん？」

「記憶に無いね」

「考えるのはやめとけ。
ところで、お前のランクはいくらだと思う？」

「C、か？」

「残念。
お前と同じ力を持った奴がこの世に、今まで何人現れたか知っているか？
五指にも満たない。
そんな一世紀に1人発生するかしないってほど珍しいSRがC程度のはず無いだろ？」

「B？」

「お前が前に戦ったらしいアヌビスや黒羽商会の認定憑依と牛人、クリーニング店の錬金術師がそのレベルだ。　が、違う。
お前はそんな平凡な場所にはいない」

「……Sか？」

「お前の母親はそうだったが、残念。違う」

（え……？
どうして母さん――？）

「色世　時はA級のしかも19位にランクされている」

再三、コントンがトキの視界から消える。

「お前……母さんを知っているのか！？」

「当たり前だ。
オレはこれでも協会だぜ？」

「っ……！
もう一度聞くが、何でこんなことをする！？」

電柱に背をあずけ、手元で大型拳銃を自分の首に当てるコントンを見つけて距離を測る。
５メートルも離れていない。
確実に拳銃の射程範囲内であった。

「じゃあ、ちょっと付き合え」

コントンが電柱から離れるのと同時、トキは自分の身に起こった異変に気付いた。

（これは――体が動かない！？）

足が、手が、意識は正常だが五体は一切動かない。
そんな状態に焦り、戸惑いを隠せないトキ。

トキのタイムリーダーは確かに効いているはず……影響しているはずだった。
未だに動き出さない桜雪。
しかし、動き続けるコントン。

銃口はトキのこめかみに向いていた。

1人焦るトキを見て、コントンはハンドガンの引き金を絞る。
静止世界に――放たれる．５０ＡＥ弾――響き渡る銃声。

「何でこんなことをするか？
意味無くやっても良かった。
この時期にやったのには、色々理由があったのさ。色々とな……」

見開いたままの目でトキは現実を再認識する。
音の無い、光の無い世界。
止まった時間、止まった桜雪。

そして、銃弾。

目の前の男、コントンは協会のＳＲで、四凶の1人。
自分の額にわずか触れる銃弾が熱い。

「ハハッ！　今さ、世界は破裂寸前なんだよ」

「殺す……気か？」

「話聞かなかったらな」

最初にタイムリーダーを発動させた時から気になっていたことがあった。

何故か、コントンにはタイムリーダーが適用されていない。

「わかり易く言えば、中身入れすぎた風船みたいなもんさ。
みんなの殺意が溜まりすぎた。
だから、そろそろ爆発させてやろうと思ってさ」

「そんなことをして意味はあるのか？」

「有る。
大いにな。
まず、オレ達は批判され、場所を失いかける。
そこから世界が変わる」

「はぁ？」

「協会の中でも煙たがられているのがオレ達。四凶さ。
最初は誰も四凶なんて属性は望まなかった。
そういう力だったが、慣れた今となっては幸せに思える力だよ」

「望まなかったって、どうして？」

「どうして？
どうしてと来たか。

なら聞くが、お前は自分から自分の夢を諦めてまで、世界の敵になりたいか？
どんなに頑張っても親しくなれない世界に、どう足掻こうと諦めざるを得ない未来。
望んでいないのに備わってしまったアビリティ。お前も、こんな現実なんて望んだか？」

コントンの指が現実を指し示していく。
倒れた友人や桜色の雪、銃に止まった時間。
芹真事務所と出会う前のトキなら、確実に現実であることを否定したであろう現実。

「誰だって望まないだろ？
幾千万の夢を語ろうと、曲げられない現実が世界を支配している。
常に何かに縛られている。
それが一般論であって現実だ」

「夢は夢、現実は現実。
そう言いたいのか？」

「そんな現実を忘れたのか？
お前は芹真事務所に出会ってから今に至る。　そうだろ？
じゃあ聞くが、夢のような現実とありきたりで常識的な現実が、いつでも手を取りあって踊れるほどに密接した世界の存在を、一度でも考えたことや信じたことがあるのか？」

「……」

「望んだモノが手に入るなら人類皆幸せだ。　幸せ過ぎて明日に死んでも文句無いってくらい幸せだ。
だが、ここに矛盾がある限り、矛盾が発生した以上、誰かが不幸になっちまう。
逆に、望まないモノばかりが手に入ったら、人類はどうなる？
不幸すぎて殺し合いでも始めるか？　それとも、逆に助け合うようになるのか？」

「……わからない」

「そう。
誰にもわからない。
しかし――垣間見た者、出会った者にしか分からない現実だってある」

「それが……ＳＲか？」

「でもな、そんな現実を知らない奴らに取っちゃ、オレ達の戦い続ける世界はゲームや映画の中も同然なんだぜ？
あり得ない世界。
現実でない世界。
現にこうして向かい合い、影響しあっているのに現実じゃない。
なら、俺たちは何だ？」

人が得る情報は人から伝わるモノが大半を占める。
書籍も、映像記録も。
古い情報（モノ）からリアルタイムで起こっている何かまで。
伝播していくことで事実としての味を深め、その密度に比例して忘却しがたいものへと変わってゆく。

「生き物なのか、それとも架空の人物なのか？
仮に俺たちが架空の人物なら、現実とは誰のものだ？
誰が現実で、それは本当の現実か？」

「止まれ……」

小声で言うトキにコントンは笑いかけた。

「止まらないさ。
より深く、時間から抜け出した者が優先される」

微塵も動かない体。
平然と動き続けるコントン。

「さて、お前に聞こうとしていたことが――」

「止まれ……！」

「お前の友人は何発耐えられると思う？」

「――なっ！」

轟音が鼓膜を打つ。

放たれた凶弾が、まっすぐ岩井の胸を目指して飛ぶ。

が、トキに向けて放たれた弾丸と同様、皮膚を突き破ることなく直前で停止した。

「やめて欲しければどうするんだっけ？」

「話を続けてくれ！
今度は聞き逃さない！」

「ハハッ、いい子だな。
ちょっと聞きたいんだけど、これくらいの小さな物――黒い金属の塊みたいだけど木の破片みたいに軽い物、知らないか？」

コントンが示す何か。
大きさは５ｃｍ程度の黒い何か。

コントンはトキのリアクションに期待を寄せて返答を待っていた。
が……

「知らない。
それは、プラスチックか何かか？」

「プラスチックじゃない。
金属のように硬く、表面もけっこう滑らかでツルツルなんだけど、金属じゃないんだよな～」

「……わからない」

「本当にか？」

トキは頷く。

コントンには残念という他なかった。

尋ねられた物質を見たことも、また聞いたことも無い。

コントンは身振り手振りもう一度説明し、今度は別の方向からアプローチをかけた。

しかし、それでもトキは素顔で知らないことを伝える。

「家のどっかに置いてあるとか、誰かから預かっているとか、そういうのはないのか？」

「ああ。全く心当たりが無い。

悪いが、俺は本当に知らないんだ」

返答するトキの顔は真剣そのもの。

嘘をついていないことが声の調子からも窺える。

ついついため息がこぼれた。

コントンは下げていた銃口を再びトキに向け、引き金を引く。

左足太腿。

またしても銃弾が止まる。

2発目の銃撃を目の当たりに、トキは叫んだ。

「知らない！　本当に知らないんだ！
それがどうしたんだよ！？
何で俺にそんなことを聞くんだよ！？」

「お前の母親とその背後についた妖精共に盗まれたからだよ、ザコが」

笑顔のまま、しかし青筋たてながらコントンは次の銃弾を放つ。
右肩。

「全部で9個盗まれたんだが、そのうちの6個は取り返したんだよ。
一番大きな物を盗んだのがお前の母親でな。
そのせいで探し物も探せなくなっちまったわけよ」

「そんな……
でも、俺は知らない！
母さんがそんなことをしたことも！」

「知らなくてもいいさ。
ところで、このやり場の無い怒り、どうすればいいと思う？」

再び放たれる弾丸。
右太腿。
前の4発同様に体を貫く前に停止する。

「もしお前が普段から持ち歩いている物の中に紛れていたら……そう考えるとちょっと腹立つんだよなぁ」

6度目の銃撃。
銃口の向く先は左肩。

「お前……！
どうする気だ！？」

トキの質問にコントンは銃撃で答えた。
狙いは友樹。
次々と放たれては停止する．５０ＡＥ弾。
友樹に向けて放たれた銃弾も停止し、８度目の銃撃が智明へと牙をむいた。

「そこで、トキ。
お前に思い出してほしいんだよ。
色世サツキがお前に残した物――何でもいいからさ。何かなかったか？」

マガジンを取替え、新たな銃弾を飲み込んだデザートイーグル．５０ＡＥ。
コントンは2度引き金を絞り、トキはその銃口が奈倉に向いてい

ることを確認した。

「早く思い出さないと、銃弾はいつまでも止まっているわけじゃない。
知っているだろ？」

「クッ……！
本当に知らない！
何も、何かを預かってなんかいない！」

「お前もこの力を知っているよな？
時間が永遠に止まっていることは無い」

コントンは笑う。
必死でもがくトキ、思考を巡らすトキ、固まるトキ。　そんな行動の一つ一つがコントンを楽しませていた。

「何――だって？」

「お前も体験しただろ？
時間が止まるのは一時的なモノ。
後は、ゆっくりと……動き出す」

真実を突き付けられ、トキはクラスメイトに目を配る。

岩井は心臓。

智明はノド。
友樹、左目。
奈倉は眉間と心臓。
コントンの放った弾丸全てが急所へと突きつけられていた。

「お前――待て！
信じてくれ！
俺は本当に、何も知らない！
何に誓ってもいい！」

「クフフッ……！」

免れられない死。
それは自分にも言えることだった。
五体全てに突き付けられたマグナム弾。

「……もし、俺が死んで、探し物が見つからなかったらどうする！？」

「さぁ、どうしようか？」

この、まだ停止している世界で誰かを助けられる人間はいない。
全力で説得しようとするトキの言葉を吟味しながら、コントンは楽しんだ。

「俺が見つけたら、お前に届ければいいのか！」
「見つける？
何も知らないお前がか？」
「それは……」

コントンが笑い、頭を抱える。

「しかし、面白いな。
悪くない。
だから、もう少し付き合って貰おう」

デザートイーグルを服の下に収め、静止したトキの右手首を掴む。

「右手だけ、いまの世界でも動かせるようにしてやろう」

リンクが始まる。
意識だけが通常時間世界から飛び抜けたトキ。
その右腕に時間が流れ始めた。

（動ける！

どうして！？）

「フフフッ……後は好きなようにしな」

右手の動作を確認し、右手以外が動かないことを確認したトキは、額に接触した銃弾の消去にかかった。

（クロノセプター！）

・５０ＡＥ弾から時間を奪い、弾丸そのものを消滅させていく。
奪われた時間は掌に集まり回遊を始める。
額の銃弾を消し、次の銃弾を消す。
左肩、右太腿、右肩……

その光景にコントンは満面の笑みを浮かべていた。

いままで出会うことの無かった仲間がそこに居たのだ。
自分と同じ力を持ち、且つ、自分と違う力も持つ者。

色世　トキ。

（こいつには保存されたモノを管理するだけの権限があるんだろうな……フフフッ）

混乱した頭でトキは最後の銃弾の除去に取り掛かった。

コントンの意図が読めない。
自分が脅されているような、何かを迫られているような……試されているような気がした。

ＳＲの存在について。
協会とナイトメア。一般人とＳＲ。認識された現実と認識されない現実。
母が奪ってきた何か。
そのために銃を向け、引き金を引き、質問をぶつけてくる。

理解できない右手だけの解放。
トキにはとっては十分だった。
右手だけでも銃弾を消すことは出来る。

（あれ？
左手が――動いた！）

それは思ってもいなかった事が起こった。
意識に体が伴わなかった状態からほんの僅か、体が動かせるようになっている。奪った時間が左腕を通して左手に通い始めたのだ。
銃弾を消す過程でトキは、奪い取った時間を無意識のうちに体の各部へ流し、その結果、凍結していた時間が動き出したのである。
左手に続いて右足、左足、ついには全身から感覚の復活を感じ、トキは足を前へと踏み出した。

それと同時――

「さぁ、トキ。
時間が動き始めたぞ」

コントンは告げる。

「諦めな。
どう頑張ってもその状態じゃ間に合わない」

重い足を一歩、前に出す。
自分の中に流れる時間が足りない。
それが原因で、通常時間通りの速度で行動が出来なかった。

コントンが笑う。

トキは一番手近に居る友樹ら、3人に歩み寄った。
一歩一歩が重く、なかなか思い通りに進まない。

「間に合う！」

桜雪を踏みしめ、トキは進む。
誰一人死なせるつもりは無い。

「自分の現実は自分で護る……お前の母親はそう言っていた」

耳を貸さないようにしながらトキは進み続ける。
3人のもとにたどり着いた時、銃弾は肌に触れる直前まで迫っていた。

トキはまず智明、友樹の銃弾から排除を始めた。
眼球とノド。
即死は間違いない。
仮に助けられたとしても、失うものが大きい。だからこの2人を優先した。
右手で友樹を、左手で智明に向かう銃弾を消し去る。

「ハハッ……魔が見える、魔が見えるぞ、トキ。
やっぱりお前も俺と同じだ」

奪取した時間を体に与えるとスピードが増し、一歩一歩の重さが軽減する。
岩井の前に移動し、銃弾から時間を奪う。
銃弾の一つ一つからさほど時間は奪えない。

（この雪にだって、時間はある！）

右手で銃弾を消しながら、トキは降り積もった雪からも時間を奪った。
銃弾以上に奪える時間の少ない桜雪だが、量なら銃弾の比ではな

い。
降る雪、積もる雪。
全てから時間を奪っているほど余裕があるわけではない。
岩井を襲う銃弾から時間を奪い、銃弾そのものを消し、トキは奈倉の方へ向かった。

「お前の原動力は“護ること”か？
それとも、同じ能力を持った俺に“負けないこと”か？」

「どっちでもない！」

反論と同時に、コントンの顔から笑みが消える。
完全に消え去ってしまう。

「どっちかにしろよザコが……」

重い声の響きと共に伝わる重圧、莫大な殺意。
再び時間が凍結していく体。
それでも諦めず、顔だけ振り返るトキ。

「お前の原動力に興味があるんだよ」

「じゃあ、あんたの原動力は何だ！？」

反論を続けるトキ。体の不自由が次第に強まっていく。
目の前に横たわる奈倉に向かった銃弾は、すでに皮膚との接触を始めていた。
筋肉や骨を突き破る前に銃弾を消さなくては手遅れになる。

「……俺？」

トキが力み、無理やり全身を試みようとした瞬間、一度強まった不自由が弱まった。
予想だにしなかった反論。
初めて受ける質問内容にコントンは隙を見せた。

（さっき拘束よりは動ける！）

自分のポケットに手を伸ばし、トキは財布を取り出す。

――緊急事態にこんなものが使えるはずが無い。

考えを改めた。
決して使えなくは無い。
トキは躊躇なく、左手で財布から時間を奪っていった。

財布全体の質量から平均的に時間を奪い、体中に時間を流していく。
紙幣よりも硬貨が多く入っていたことも幸いし、銃弾十数発分の

時間が手に入る。

再び走り出すトキを見て、コントンは笑う。
今までにないくらい、嬉々とした表情を見せ、空を仰ぎ、笑った。
不愉快な笑い声をＢＧＭに、トキは全力で奈倉を襲う2発の銃弾から時間を奪う。

「俺の原動力か！
そうだな……初めて悩んだ！
いい質問、かどうかはさておき、何だ！」

一度収めた得物を取り出し、トキの後頭部に向け、次に自分の眉間に押し付ける。

銃弾を消去したトキは振り返り、コントンの銃を掴みにかかった。
興奮して考えるコントンの銃を掴むことは造作も無かったが、問題は――

「好奇心だけで動くということは原動力なんかじゃなかったとしたら、生存と保存が最終的な欲望に摩り替わっているのか？」

１人話しながらコントンは自分の銃を手放し、もう片方の手でトキの顔を掴む。
コントンが手放したデザートイーグルを持ち替え、トキは至近距離でコントンの胴体に向けて引き金を引いた。

強烈な反動と、痛烈な銃声が鈍き世界に響く。

ふと、トキはアヌビスとの戦いを思い出した。

（あの時に使ったリボルバーと同じくらいの反動……！）

そして、相手には効いていない。

コントンは銃口に掌をかざし、空中で銃弾を止めていた。

「いや、生存と保存は死命の経過点でしかなく――何だ！？

つまり……そうか！　そうだな！

最も基本的な理由、“在り続けること”のみが俺たちに残された

原動力とでもいっておくべきだな！」

トキはもう一度トリガーを引く。

再び響く銃声と、容赦なく伝わるリコイルショック。

だが、伝わらない銃撃。

「というわけだ、トキ！

あと3発。だが、お前はもう引き金を引けない」

「いいや……引ける！」

3度目のトリガー。
指が震える。

しかし、3度の銃撃でコントンに届いた銃弾は1発も無い。
3発の銃弾全てが空中で静止していた。

「残り、2発。
その辺にしておけ。
正直、俺はお前に期待をしちまってる。
だから、今回は運を試して終わろうと思うんだよ」

顔を掴まれたトキはもがき続け、コントンに蹴りを放ち、肩に銃口を突き付ける。
今度は至近距離というレベルではない。

ゼロ距離射撃。

だが、いくら指に力を入れようと、体が引き金を引くことを拒否した。

「素人が片手撃ちなんかするもんじゃないさ。
あと1発で手首がイッちまうぞ？」

コントンは掴んだトキを持ち上げた。
それは体格からは想像も出来ない圧倒的な力。
頭骨を締め付けられる激痛に悶えながらも、トキはデザートイー

グルを両手に持ち替える。

（負けるか！）

反動、轟音、衝撃、返り血。
トキはがむしゃらに引き金を引き、コントンの肩を撃ち抜いた。

「放せっ！」

「……へぇ」

声を震わせながらコントンはトキからデザートイーグルを奪い取る。

「なるほど、そんなにキツイ運試しをやってみたいか～！」

再び笑顔を取り戻し、コントンは円を描くように移動する。

指と指の隙間からトキはその光景を見て青ざめた。
円弧を描くように回転する２人。

コントンと自分の間にある、それ――空中で静止した３発の．５０ＡＥ弾。

（こいつ……！）

「生きていたら破片を見つけて俺に会いに来い。
生きていたら、な。
期限は5年以内だ。その方が生き甲斐があるってもんだろ？」

今になって、ようやく気付く内側の殺意。
未だに理解できない脈絡の無い言葉。

（コイツは……初めから俺を殺すつもりだったんだ！）

「わかったか？」

トキは手を伸ばし、銃弾に触れようとした。
銃弾が少しずつ時間を取り戻していく。停止位置から少しずつ、トキに向けて進み始める。

「生きていたら5年以内だ。
5年以内に意識取り戻したら、船の破片を見つけろ。
そして、俺のところに持ってこい。
いいか？　間違っても協会の連中に渡すなよ。
もし渡した時は、お前のお友達を1人1人肉塊に仕上げていく」

「待て！　フネってのは――」

左手で触れた銃弾を消し、残り2発。
少しでも時間が欲しかった。時間を奪うための時間が。

「お前も一緒に来るというなら教えてやるぜ。
って、言いたかったところだが、お前は若すぎて、しかも弱すぎる。
だから、そんな奴に教える価値はない」

再びデザートイーグルを収め、コントンは拳を握った。

締め付る手から逃れようと必死にもがくトキだが、万力のような掌はビクとも動くことなく、開けた指と指の隙間からはコントンの構える様が覗けた。

「……チクショウ」

ただ見ていることしか、ただその結果を認めることしか出来ないトキの頬を涙が伝った。

恐怖もあったが、コントンからみれば、トキが恐怖に涙しているようには見えなかった。

「悔しいか？
残念ながら、時間はすぐに元通り動き始める」

笑うコントン。
哂う四凶、渾沌。

そして――拳は放たれる。

風を切る拳打。
時間を乗せた打撃。
襲いくる衝撃、反動、激痛。
その一撃は、黒羽商会の牛人のそれとは比べ物にならないパワーによる打撃だった。

（ク、クロノセプター！）

後悔の中、トキは最後の抵抗を試みた。
衝撃が体を吹き飛ばす瞬間、残り2発のうちの1発を両手で掴み取る。

両の掌に包まれた銃弾は、全体的時間と部分的時間を同時に奪われ、一瞬で消滅に至る。

同時に最後の――消し損なった――1発がトキの胴体を貫いた。

強力な拳打と銃撃がトキを遥か後方へと吹き飛ばす。

「フフッ、これが俺に許された時間だ」

遠ざかる視界。
縮まりゆくコントン。

再び降り始めた桜雪。

激痛。
しかし、己の身と同じくらいあの場に取り残されたクラスメイトのことが心配だった。
汗と涙が混じり合い、逆流する血に呼吸が遮り、口から零れる。

視界に映る黒が、一体何なのかわからない。　夜空の黒なのか、夜闇の黒なのか。

（――死ぬからか？）

落ちる目蓋の感触に気付き、トキは黒を感じた。

死ぬこと。

初めてでない死。
未遂を含め、何度目なのかわからない死の感覚。

着地の衝撃。

雪が着地の衝撃を和らげたのも束の間だった。
縁石に体を打ちつけて跳ね上がり、地面を転がりながらフェンス

に激突し、トキは停止した。
慣性によって止まるまで8秒。
銃撃のダメージ。
強力な打撃の負傷。
吹き飛ばされて出来た傷など、それらの痛みで立ち上がることが出来ず、また、時間を奪うことすら出来ないトキは、確実に死へと向かっていった。

「今日はさよならだ。
もしかしたら永遠にかもしれないけどな」

数十メートルもの彼方へ消えたトキに別れを告げたコントンは、足元に目を配っていた。
欲望侵食の術で眠りに落ちたトキの友人たち。　必死で護ろうとしていたモノ。

「赤髪の男に、長髪の女、警察の娘に……
魔倉の番犬か」

しゃがみ込み、コントンは一人一人の顔を間近で覗き込んだ。

「あん？」

微笑んだ表情が、満面の笑みに移り変わる。
眠りについた四人。
その中に、興味を引く存在があった。

「これって、魔倉のスペアキーじゃん！」

それは奈倉愛院の手に握り隠されていた物。
すばやくポケットにしまい、コントンは嬉しさのあまりケルベロスの頬に平手を見舞った。

「お前たちは面白いな……
何が原因だ？」

それだけを言い残してコントンはその場を歩き去る。
金品も拝借しておこうか悩んだが、金には困らないことを思い出してすぐ撤退することに決めた。

（あんな状況になるんだ？）

笑いが絶えない。
おかしなことが今日、この街で起こった。

夏の吹雪。

だが、コントンはそれ以上の異変を発見した。

（ＳＲの発芽因子を持った人間がまだ他にも居たなんてな……）

一度歩を止め、トキの吹き飛んでいった方へと向き直る。

理由など無いはずなのに、コントンはそちらへ体を向け――

「うおっ！」

同時に状態を逸らした。

（色世トキ！？

こいつ……！）

それは完璧な虚を突いた攻撃だった。

音も、予兆も、気配さえない。

血と雪と土に汚れたトキの背後からの一撃。

長く生きてきたコントンにさえ恐怖を抱かせる程の圧力――殺意――を帯びた攻撃だった。

しかし、コントンの直感が奇襲を喰らう直前、トキの殺意を感じ取って体に回避を命じた。

「なるほど、褒め……あれ？」

コントンが向き直った瞬間、短剣による刺突を放ったトキはそのまま地面へと倒れた。

「何だ。お前、惜しいよ。
久々に俺をビビらせてくれたじゃないか。
今度は生き延びて俺を驚かせてみれくれよ……」

笑いながらコントンはデザートイーグルを取り出し、トキの左足の腱を撃ち抜いた。

「うん。そう……そうだな。
面倒な奴等が来たから、次会うまで寝てもらおうか。
クフフッ……そうだな、１０年分の俺の睡眠時間を与えてやろう。
どれだけ早く起きられるかな？
５年という期限に間に合えるかな？」

笑い声を響かせ、コントンはトキの頭を鷲掴みに、そこから自分の中の時間をトキへと移していった。

「俺にはな、トキ。
時間を奪うことはできない。
だが、与えることは出来るし、お前よりも長く通常時間から抜け出すことができる」

立ち上がって右足の腱へ銃撃を繰り出す。

破壊される両足。

コントンはトキが追撃不可能になったことを悟り、今度こそその場を立ち去った。

「じゃあな」

五感全ての機能が停止したトキへ、コントンは申し訳程度の挨拶を残し、夜闇の中へと消えていった。

―第２７話―

―トキｖｓ渾沌！桜雪白州唯の戦い―

「こちら衛星。
各員、作戦は終了。任意で撤退してください」

『おい、レッドキャップとの連絡がつかないが、どうなっているか教えてくれ』

「レッドキャップは１７２秒前に捕縛されました。
ですから、これ以上無駄に戦力を失うわけにもいきませんので、可能なら速やかに撤収してください」

『了解』
『俺はまだ負けてねぇ！』
『斬潮、了解』
『待てギュン！
もうちょっとで芹真――ブゴッ！！』
『これより撤収する』

「気をつけろよ」
『こちら警察署前、疑真化身。
アヌビスチームに７０％のダメージ。面倒臭くなったので帰る』
「お疲れ様」

数分にわたり、衛星は他のメンバーとの更新に勤しんだ。
撤退をよしとする者がいれば、未練を口にする者も居て、あからさまに不機嫌な者だっていた。

「ご苦労様」

労いの言葉も尽きかけてきた頃、最後のメンバーからの通信が入った。

『こちら四季。
衛星、いまから確認してもらいたいものがある』

「こちら衛星。
何でしょう？」

『シキヨトキの連れと、哭き鬼、それから依頼主コントンの現在位置だ』

「お連れの方々は微動だにしていません。
哭き鬼は移動中。目的地はシキヨトキの家だと思われます」

『肝心の依頼主は？』

「……わかりません」

『色世トキのように？』

「はい。
お連れの方々の近で止まっていたことから、その近辺で目標と接触したものと思われます。
その時はしっかりと存在を確認できたのですが、断続的に確認ができたりできなくなったりと……」

『了解』

「あ、ちょっと待ってください！
協会のＳＲがその付近に接近中です！」

『その付近とは？』

「……あ、えぇと、目標のお連れの近くです。
間違っても近づかないように気をつけてください」

『……わかってる。
で、近づく協会の者とは？』

衛星は返答に迷い、問題の場所に接近する者が依頼主と同じ名で括られている者であったことに困惑した。

「四凶です」

第27話―桜雪白州唯の戦い！―（後書き）

やりきれない想いを必死に押し殺し、男はトキを見下ろした。

目の前に転がる現実。

予想はしていたが、実現までが予想外に早すぎた。

「やっぱりテメェだったか……コントン」

協会所属、遊撃隊登録の四凶のＳＲ、トキに左手を奪われた男。

トウコツ。

怒りに震えた手をトキの胸へと手を伸ばし、生死を確認した。

（微かな鼓動……

このままじゃ、死ぬのは時間の問題か）

トウコツの額に青筋が立つ。

自分を楽しませた男を、むざむざ見殺しにするつもりはない。

だが、敵と認識したトキを助けることに抵抗があった。

敵は助けない。

それがトウコツの方針であり、戦場での常識である。
ましてトキは、メイトスを殺すと言われるＳＲだ。
そんな敵を生かしておいた所、後の災いとなるだけである。

「……くそっ！」

頭では理解していた。
いままで惚れた女も助けたことのない自分が、今はなぜか、トキを救わなくてはいけないと全力で訴えている。

「未練ってやつか？」

左手を奪われ、しかし、トウコツはトキの母の命を奪っている。
自分が助けていいものなのか迷いつつ、トウコツはトキの体を掴み起こした。

「俺と戦うまで死ぬんじゃねぇよ……」

その言葉が本音なのか、自分でもわからない。
だが、呟かずには居られなかった。

自分の知り合いが、自分の認めた敵を先に撃ち破る。　獲物を横取りされ、気分は最悪以外の何ものでもなかった。

背中の斧6本を投げ捨て、代わりにトキを背負う。

警察署へ向かうか、病院へ向かおうか悩み、トウコツは警察署に進路を定めた。

足元に横たわるケルベロスに蹴りを放ってから地面を蹴り、路上から民家の屋根の上へと飛び移る。

背後でケルベロスが咳き込み、それを確認したトウコツは疾走した。

「お前を死なせはしない」

トウコツが警察署に着く頃、白州唯を桜色に染めた雪は、夏の熱気によって跡形も無く消えていた。

第２８話－Ｎｏ　Ｖｉｓｉｔｏｒｓ　ａｎｄ　Ｔｒｅｓｐａｓｓ－（前書き）

３４度１０分３０７時世界離れた人から～～

“明けましておめでとうございます。
人それぞれが持つ独特の世界が失われないことを、個性が輝く世界を祈りつつ、非連続の世界の完成を第１目標に、執筆を頑張っていこうと思っていま～す。だって！”

「……ボルト、誰と話しているんだ？
正月はまだ先だぞ？」

コーヒーカップを傾ける手を止め、芹真は１人呟くボルトを見守り、頭が痛くなるほど元気に働く電話の受話器を取った。

第２８話－Ｎｏ　Ｖｉｓｉｔｏｒｓ　ａｎｄ　Ｔｒｅｓｐａｓｓ－

１２月２５日　ＰＭ　０８：４３

粉雪の降るホワイトクリスマス。
冷たい雪と風が踊る白銀世界。
その中を光の魔女は携帯電話を片手に、なるべく人通りの少ない散歩コースを進んでいた。

「もしもし、ナインちゃん？」

寒さで、携帯を当てた耳が痛む。しかし、少女の顔から笑顔は絶えない。
電話の向こう側に知り合いの顔――僅かに驚く表情――が浮かぶ。

『どうしたの？』

「うん。
トキの事なんだけどさ」

『あ、鍛えて欲しいっていう子……やられちゃったんだ』

通信端末越しに心を読む彼女にボルトは肯定した。

「それでね、当分目覚めそうにないんだ。
だから、連れてきた人たちと一緒にどこかのホテルで待っててもらえないかなぁ～、って」

『それならバッチリよ。
実は、いまチェックインしたところなんだ』

「へぇ……いい所見つけたんだね」

携帯電話越しに相手の状況を把握するボルト。
電話の向こうの彼女は嬉々とした声を上げた。

『インちゃんとホムラちゃんが気に入ったみたいなんだ。
でも、ちょっとヤバイかなぁ、ってこともあってね』

「あ、もしかして、クロードって人？」

声音が一変し、向こうの彼女はため息をついた。

『また何かやっちゃいそうでさ。
今は、カーチスとホムラちゃんが必死に言い留めてくれているからいいけど……』

「長くは持たないみたいだね」

深い、深いため息。

『下手するとこっちの世界でも無差別始めちゃいそうな勢いなの』

「え～？　ナインちゃんがやっちゃえばいいじゃん」

『そうしたいけどクロードってさ、あれで意外と殺気に敏感なんだよ？
捕まえる前に正当防衛～、とか何とか言っちゃって凶行に出るだろうし……それに面倒くさいもん』

「後で酒樽届けてあげるから。
ね？　頑張って」

『え、ホント？
じゃあ、頑張っちゃうかな』

沈んだ声色が少しずつ喜びの色を取り戻す。　異世界の友人の嬉々とした声を聞き、ボルトは早速酒の種類を脳内リストからピックアップした。

「うん。
あと1、2ヶ月待ってちょうだい」

『ＯＫＯＫ！
みんな死人だからゆっくりこの世界を堪能しながら待たせてもら

うから』

「うん。
用事はそれだけ。じゃあねぇ」

『はぁい』

通話を終え、ボルトは携帯電話をコートのポケットにしまった。
冷えた手を光で包んで暖めながら散歩道を外れ、大通りに出て病院に向かう。

（まだ起きないのかなぁ、トキ）

今日という日付を思い出しながら考えた。

“一体、何ヶ月過ぎたのか”

彼女はそれを考えていた。
暖められた病室のベッド。

横たわる彼女は、隣接されたベッドの少年の手を握ったまま思案を続ける。
夏の一件からどれだけ時間が過ぎたのかを考え、今日が何月の何日なのかを思い出し計算する。

（本当に、この方法で彼を救えるの？）

約５ヶ月前から続けられているこの方法。
どのように現在まで至るのか、その経緯も思い出しながら彼女は自分の役割を思い出し、同時に様々な感情が湧き上がった。

次々と浮かぶ疑問。
募る不安。
拭いきれない絶望。

彼の手を握り続ける――この行為に意味があるのだろうか。

（でも、芹真さんの言うことが正しかったら）

それは一縷の望みであり、いまトキを覚醒に導く唯一の手段だった。

見えない目を彼に向け、本当にそこにトキがいるのか時折疑問を抱く。しかし、握った手の感触から、確かに彼の存在を確信し、疑問は霧散する。
いつでもそこに在り、微動だにしないその手。

生きて居る、死んで居る。

そういう意味で、彼は居るようで居なかった。

(私は……空が好き。
青い空も、
赤い空も、
白い空も、
黄金の空も。
毎日、違う姿を見せてくれる。
だから、好き)

光を完全に失った彼女の目に、2度と空が映ることはない。
視力の落ちていく日々に、彼女は盲目(それ)を予測し、理解し――だが、
それが実現してからというもの、自分の好きな空がそれまで以上に
鮮明に脳裏に浮かび上がり、恋しくなった。

「色世、トキ。
あなたには、何か好きなものがありますか?」

静寂。
無言の時間。
定期的に鳴り続ける心電図の音と暖房の動作音。

一切の返答がないベッドの上。

何ヶ月も眠り続ける少年の手を強く握り、彼女は聞き続ける。
返答はない。
意識もない。
それでも聞く。

「何も好きになれず、生きていくって……難しい？」

無回答。

「いつまで、眠り続ける気……ですか？」

咳き込み、彼女の質問が止まり、働き過ぎた暖房が止まる。
隣で寝続ける少年は答えない。　応えられないから眠っている。
眠っているから答えられない。

長い長い眠り。

しかし、それは眠りというよりも、幽閉と言った方が的確であり、またそう言っても過言でないほどの事態がトキの中で起こっていた。
色世トキの意識は、コントンという男の未来の睡眠時間が覆い隠していたのだ。　睡眠が睡眠を誘発し、トキは覚醒に至ることが出来ず、毎日毎日夢の中を駆け回っていた。

芹真や藍には分からないことだが、毎日手を握り続けている彼女にはそれがわかった。

――それは、トキ自身が望んだ眠りではない、強制睡眠。

眠りにつく度に、毎夜トキから伝わってくる夢の断片。
1日たりと途絶えたことのない凶夢・悪夢。
望まない幻想。
忘れたい過去。
思い出したくない記憶たち。
曖昧な境界線の上で踊らされ続ける眠り。
決して自分の意思で目覚めることのできない夢。

しかし、その夢の中にトキ以外の誰かが存在していた。
夢であるにもかかわらず、トキとは違う別の存在として夢の中にいるのだ。

（また、今日もいる）

握ったトキの手から伝わってくる夢の断片。
そこに、自分とさほど変わらない年恰好の女子がいた。

トキの過去をリプレイして苦しませる夢の中、彼女はトキを悪夢から逃し続けていた。
夢の中でトキを導く彼女がどういった存在で、何故トキの夢の中に居るのか。手を握り続けることしか出来ない彼女に、それをしる術などなかった。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第２８話－

－Ｎｏ　Ｖｉｓｉｔｏｒｓ　ａｎｄ　Ｔｒｅｓｐａｓｓ－

『現在、協会ではコントンの捜索に全力を注いでいます。
その為、警護に回せるほど人材に余裕がなく……』

芹真事務所。
お決まりのデスクに腰かけ、芹真は受話器に向かって呆れ顔を作り、手中のコーヒーカップを定位置に戻した。

「そんなことはどうでもいい。

問題は今回の事でナイトメアに動きがなかったか、だよ。
まさか、何もなかったと言うつもりじゃないよな？　まさか。有り得ない」

『それは……』

「ジャンヌ。
アンタなら話す権限も持ち合わせているはずだ。
俺たちは被害者だ。
話してもらわないと矛先があんたたちに向くかもしれないんだぜ？」

『あなたたちが被害者だからこそ、話したくないのです』

「どういうことだ？」

『あなたたちの介入で厄介な事態につながる可能性を考慮した結論です。
内容を聞いてもナイトメアの肩を持つ恐れがないと判明したら報告するつもり――』

「意外と親切なんだな。
悪いが、俺たちはテロリストに肩入れするつもりはない」

『本当ですか？
あなた方自身がテロとして見られているとしたら？』

「そんなものにはならないさ。
そう見られたとしても、黒幕をとっ捕まえて真相を暴ければいいだけの話だ。身の潔白を証明しろと言われたら証明するまでだ。

で、誰が俺たちをテロリストと認識するんだ？」

電話の向こうからため息が漏れる。

『軽はずみな行動は至極避けてもらいたいものです。確かにあなた方のバックにはワルクス・ワッドハウスがついています。　が、彼だって万能ではない。

こちらからの任務だって背負っているのです。　妙な調査を押し付けることは可能な限り控えてください。

彼はあなたが親友だからこそ依頼を聞くのであって、そうでもなければ話を取り合っても貰えないはずです。

それに、あなたたちの行動がナイトメアに影響を与えていることはご存知ですか？』

「ワルクスが万能じゃないのは知っているし、ナイトメアの連中にも僅かながら影響を与えているのだって知っている。

だからこそ、説明して欲しいんだよ」

『そんな……』

「それでも言えないか？

じゃあ、これだけ教えてくれ。

どう動いたとか、誰々のメンバーが怪しいとか、どこの組織がどう評価しているとか、そういう事は一切言わなくていい。

だから、最低限これだけは教えてもらいたい」

英雄のため息が電話越しに伝わってきた。

コーヒーカップの取っ手を握り、芹真は持ち上げる。

『何です？』

「動いたのは武装派か？　それとも非武装派か？」

『武装派です』

潔すぎる即答に芹真の言葉が詰まる。

協会の体勢が夏以来少しずつ変化してきていることを芹真は感じ取った。

「……わかった」

『くれぐれも妙な行動は起こさないよう、慎んでください』

「ああ、わかってる。

そっちこそ、四凶の動向には気をつけろ」

『十分に心得ています。

コントンを除いた3人はすでに監視下に置いてあるのです。

それから、Ｍｒ．芹真。　会長から伝言ですけど――』

今度は芹真からため息が漏れた。

「いつものあれだろ？
“協会に戻って来い”ってやつ。
毎日通り、お断りだ」

『ですが、本部でなら色世トキの療養も――』

「設備はいいが四凶がいる。だから却下。
これからもトキの護衛は、俺たちが独自で行っていく」

『そうですか……わかりました。
では今日はこの辺で』

「ああ」

芹真は受話器を戻してコーヒーを口に運び、その様子を正面から凝視していた藍に、会話の内容を伝える。

「動いたのは武装派の連中だ」

それまで静寂を貫徹していた藍が即座に応える。

「でも、あの夜襲撃してきたのは非武装派のＳＲたちだった……どういうこと？
なぜ武装派が動くの？」

「内部抗争さ。

今回は規模が違うだけで分かりにくいが。
非武装派が動いたから武装派も動いた。　だが、それだけじゃない」

芹真の目が、四凶全員の顔写真とプロフィールが転載されたファイルに落ちる。
ワルクスと孫に頼んで集めた四凶に関するありったけの資料。

「“非武装派は協会と接点を持っている”――そんな流言に武装派は焦っているんだよ」

「どうして非武装派とコントンが一緒に……ワルクスならわかるかしら？」

「いや、あいつにはわからないだろう。
ボルトやヒーローズ、協会長にさえ把握できなかった行動だ」

会話を続ける2人の脳裏にワルクスから伝えられた言葉が浮かぶ。

“叛乱”

あの夏吹雪の夜、ワルクスは非武装派のＳＲ一人の捕獲に成功していた。
妖精のＳＲ――レッドキャップ。
協会が彼らに質疑応答を繰り返し行った結果、妖精はただ一言“反乱”と言葉を残して自殺を謀った。

唐突な四凶の行動。　武装派と非武装派の対立の激化。　根も葉もない噂の数々。

何かが起こるということは予想できるが、その何かがどれだけの規模で、いつ起こるのかわからない。

それは大きな不安の種であった。

「藍、今日は俺がトキを護衛するから、お前は休め」

壁掛けの時計を確認し、芹真はコーヒーを飲み干す。

「芹真さん。
今日は私に護衛させて」

「……ん？」

イスから立ち上がった藍が放った言葉に、芹真は不意を突かれた。

「この１ヵ月間ほとんど寝ていない。
知っているのよ、夜中に外出していること」

「いつ気付いた――って、１ヵ月前か」

「行き先はワルクスの所？」

芹真はうなずき、藍は更に追求した。

「ワルクスへの用件なら私に任せるって……」

それは藍が白州唯高校へと通う理由のひとつであった。

「情報はな。
ただ、情報の行き来だけじゃ足りなくなってきたんだ」

「どういうこと？」

「もし、気になる噂が流れていたならその日の内に真相を確かめておく。
あの日はそれが決定的な敗因だ。
電撃的スピードで非武装派（ヤツラ）は仕掛けてきた。それはわかるだろ？」

藍は頷くしかなかった。

誰を護るでもなく敗北を喫した夏吹雪の夜を思い出す。
擦れ違ったマスターピースに一撃見舞うこともなく敗れ去った藍。
敗北に伴う後悔――もし、あそこで負けていなければ、トキを助けられたかもしれない――自分の弱さを改めて認めた夜。

「だから、今日くらい芹真は休んだら？」

「残念ながら今日も出かける用事があるんだよ」

「トキの方は私に任せて」

「いいのか？
今日はクリスマスだぞ？」

「だから？」

数秒の思案。
芹真は少し考えてから藍の提案を受け入れた。

「まぁ、確かに。
藍が行ってくれるなら俺も楽なんだけど……本当にいいのか？」

「問題ないわ」

彼女は頷き、時間を確認した。

「問題だらけだっつぅの！」

粉雪降る寒空。
寒さを忘れてしまうほどの怒りが男のうちに湧き上がった。
時計を確認しながら髪を逆立てた男が公衆電話に怒鳴り散らす。

「病院に行け！？
お断りだね！」

『何故です？
病院とその周辺を警護するのはいつものことでしょう？』

「芹真事務所に盗聴器仕掛けろって命じたのはどこの英雄だよ！
えぇ、ジャンヌの姉さんよ！」

右耳にはめ込んだインカムから、男は録音した音声を再生した。

『どうしたんです？
何が嫌でそんなに拒絶反応を見せるのですか？』

「アネさんよぉ、分かって言ってるだろ……」

『もしかして、哭き鬼ですか？』

「やっぱり分かってんじゃねぇか！」

『当たりでしたか。
しかし、命令は命令です。それにこれは私からの命令でなく、予知部隊からの指名です』

電子マネーで通話時間を延長しつつ、予知部隊の構成員の顔を思い浮かべる。

「なんか、私怨めいたものを色濃く感じるのは気のせいか？」

『私怨？
予知部隊に恨まれることでも仕出かしたんですか？』

「……っ、何にもしてねぇよ！」

口から反対の言葉を放ちつつ脳裏に浮かぶ反論・反抗・講義・嫌がらせの数々。

（絶対にあいつらの仕返しだな……）

トウコツは半ば諦め、叩きつけるように受話器を戻して病院へと向かう。

“願わくば、鬼と出会いませんように”

芹真事務所はコントンの一件で神経過剰になっているという話があった。

同じ四凶にカテゴライズされる身であるトウコツにとって、コントンの及ぼした影響は迷惑極まりない。

四凶であるというだけで同罪疑惑。

（このクソ寒い中、何で病院なんかに……）

公衆電話を離れて４分。

文句をつぶやき、コントンと非武装派の襲撃に関するデータを頭の中にに並べて整理しながら歩くトウコツの前――病院の２００メートル手前――に、

「え？」

「ありゃ、ヤベ……」

５分も経たないうちにトウコツの願いは粉々に砕け散った。

曲がり角から姿を現した――哭き鬼。

２人の目が合った最初の数秒間は静寂と静止が続き、やがて、最も避けたいなマッチングにトウコツは踵を返し、哭き鬼は道端の自転車を持ち上げ、投げつけるという行為に出た。

屈伸で飛び掛る自転車を躱わしつつ、次の自転車の未来位置を予測して回避を続ける。

藍は自転車から理壊双焔破界に得物を変え、追撃を始めた。　が、その頃にはトウコツは人ごみに紛れて逃走を始めていた。

「死になさい！」

哭き鬼のあからさま過ぎる殺気。
殺意の籠った言葉を聞き流そうと努力しつつ、トウコツは必死に逃げ道を探した。
こんな事態が容易に想像できた。　だから、嫌だったんだ。

（あぁ、クソ！
全力で断っときゃ良かったぜ！）

5分ほど前の通話を思い出し……
しかし、後の祭りであることを認識し、四凶は逃走に全力を注ぐ。
雪の降る白州唯の街で本物の鬼との逃走劇――鬼ごっこ――が始まった。

そんな2人――協会の四凶と芹真事務所の鬼――病院前を去ったのと同時、分厚いコートと帽子に身を包んだ男が病院を視界に捉えた。
右手に花束。
左手でコートの雪を払い、足を1歩ずつ前へと進める。
紅き双眸に映るものは、協会の所有物のひとつ――楼塔病院。

男は目の前に存在する施設の破壊如何について考え、破壊を後回しにすることにした。

緩やかな坂道を登り、凍りついた平らな道を進み、１００メートルほど歩いたところで敷地内に入った。

自動ドアをくぐり、暖気と寒気が入り混じる。　クリスマスムード一色に染まった施設内を見回す。

イスに腰かける高齢、車椅子の若者、受付嬢、付き添いやお見舞いで訪れた人々、看護師、看護婦。

巡回する警備員に男は確信した。

（間違いなく、トキはここに居る）

男は受付に入り込み、事務内の管理用端末を操作して色世時の病室を探した。

誰にも止められることなく、咎められることなく検索を終え、男は受付を後にする。

階段を上る最中に汗が滲んでいることに気づき、コートの前面を開く。暖房の効いた屋内は男にとって暑すぎた。

患者、付き添い、看護婦、看護師、警備員。

誰一人、男に気付くことなく擦れ違ってゆく。

人々との衝突を避け、目的の階まで最短コースを進み、トキのいる階へ辿り着いた男は目的の部屋を探して回った。

（３つ先か）

はじめの角を曲がってから一度、男は足を止めて手中の花束を握り直す。
自分とトキが会うには早すぎる気もしたが、状況が男を駆り立てた。

世界中の状況が、芹真事務所や協会が考えているよりも遥かに酷い方向へと急進を始めている。

ＳＲの世界を分裂させている原因である四凶の謀反疑惑。
拡大し続けるナイトメアと協会の対立規模。
武装派の今まで以上の不審な動きと、四凶との繋がり。
非武装派と協会を繋げる流言。
国連所属のＳＲの不可解な動向。
協会の本部へ仕掛けようと目論む非武装派。

過去にこれだけ慌ただしく動いたことは、少女たちの魔法使い狩り以外に例がない。

それだけ危うい状況の中で更に、幾つかの小規模集団が独自に動いていた。
芹真事務所を筆頭に、ホート・クリーニング店、ＦＴ学会、黒羽商会……ｅｔｃ。
その中でも特に大きく動いているのがＳＨＭサーカスであった。

（武装派の動きを封じるためにサーカスが動きだした可能性は極めて――）

病室の出入り口まで歩いたところ、男は振り返った。
そのすぐ背後には知っている顔があり、それが見知った顔であることから男はわずかに身構える。
背後に立っていた男が笑みを浮かべた。

「やぁ、完全否定」

「協会長ともあろう男が、こんなところで油を売っていていいのか？」

協会長：オウル・バースヤードは首を横に振り、
完全否定のＳＲ：メイトス・シュラヴァイトフ・ジヴィアはその返答を鼻で笑った。

「私に用事か？」

「お見舞いのついでにな」

そこでメイトスはバースヤードの手に果物が詰められた籠が握られていることに気付く。

「それでさ、ちょうどいいな所で会ったな」

「ほぅ？」

藪から棒に放ったバースヤードの言葉にメイトスは警戒を強めた。
予測される攻撃、仕掛け、完全支配のＳＲの特徴。それらがメイトスの頭に浮かび上がった瞬間――

「実はオレさ、結構恥ずかしがりなんだよ。
だからさ、完全否定の力でオレの存在を知覚できないようにしてもらえないか？」

予測は大きく外れた。

「断る」

「即答かよ……」

メイトスはスカを食らった感覚に少々苛立ちつつ断った理由を述べる。

「やれと言われて素直に自分の力をさらけ出す馬鹿が、どこに居る？」

「オレは何人か知っているけど？」

「私は知らない」

「そっか。
まぁ、それじゃあ、一緒に入ってくか？
それとも別々に行くか？」

「独りで言っていろ」

陽気に振舞うバースヤードを無視して病室の扉に手をかけ、メイトスは病室内へと足を踏み入れた。
その後を追うようにバースヤードが入室する。

それと同時、バースヤードの視界からメイトスが消えた。

（知覚否定か。　自分をこの世に存在しない者とし、人の視覚から逃れる方法……）

状況を冷静かつ迅速に分析しつつ、バースヤードはトキのベッドを探す。
不意に、静まり返った病室に若い女性の声が響いた。

誰、という質問が自分に向いていないことを確認し、バースヤードは一番奥のベッドを目指す。
声の上がったベッドを覗き込むと、そこには何本ものチューブにつながった少女と、ベッドをできる限り近づけ、手を握られたトキの姿があった。

「もう1人？」

彼女が自分の存在に気付いたことを悟り、バースヤードは自ら姿を晒した。

「やぁ、はじめまして。
協会長のオウル・バースヤードという者だ」

バースヤードは情報どおり、ベッドの少女が盲目であることを確認しつつ手に持った籠を掲げて見せながら聞く。

「お見舞いで来たんだが、持ってきたモノはその辺に置いておくけど、いいかな？」

「……本当に協会長さんですか？」

「本当だ。　っていいたいけど、キミが信じてくれないのなら俺は誰だっていいし、お見舞いの品が果物じゃあなくなるもんな」

目が見えないことをいいことに、協会長の名を借りた誰かかもしれない。
目が見えない相手だから、果物と偽って爆弾を置いていくことも……不可能ではなかったが、バースヤードはその気になれなかった。

「信じます。
あなた方が来たことは――」

「出来たら芹真とかワルクスには言わないで欲しいなぁ」

そう言いつつも、頭には読心術を習得している光の魔女の姿が浮かんだ。

「わかりました。
その代わり、今日はもうお引取りください」

強く言われ、バースヤードは確信した。　その娘のＳＲの正体。

「果物は脇に置いておくよ。
それじゃ、トキが目を覚ましたら1度は協会に来るように伝えてくれ。　それじゃあ」

手早く話を切り上げ、バースヤードは病室を後にする。

「あなたも帰ってください」

見えない視界に知覚した、存在を一切感じられない男に彼女は言う。

しかし、協会長と違って男は、メイトスは動く気配がなかった。

「トキ。
お前が私を殺すと言われた日、私はお前の死を遠くから見ていた。
雨の日で視界が悪かったとはいえ、なぜ今日まで生きていた？」

周りに聞こえないはずの声を聞きながら、彼女はトキの手を強く握り締めた。

生きていることに疑問を持たれる。

そんな屈辱的な言葉を受けているのが自分でないのはわかっていても、なぜか腹が立った。

「あの日死にさえすれば、こんな目に遭うこともなかっただろう。
何がお前を生かした？
死んだお前は、自分が生きていることに疑問を抱かないのか？」

「帰ってください」

「君もだ、風間小羽（カザマ コハネ）。
通常なら自らを死に至らしめるＳＲを持った君が、なぜ今日まで生き長らえている？」

ふいに、対象をトキから自分へと変えた男に恐怖を覚えた。

それは自由な体を持つ彼と、不自由な体を持つ彼女の決定的差。
自然と不利な状況であることを思い知らされる。
自分に出来ることが何なのか、それすら霞んでしまうほど……自由に動く体であるなら、すぐにでも逃げ出すであろう絶望的状況。

「生きてはいけないんですか？」

恐怖を押し殺しながら慎重に言葉を選び……反論する。

「死すべき者が生き続けて良いと、本気で思っているのか？」

「僅かな可能性で生き延びてはいけないの？
それに、あなたはどうなんですか？」

沈黙が降り、完全否定と盲目の少女は成立しない睨み合いを続けた。

死者の人生。

それがどういうことなのか、小羽という少女は少しだけ知っている気がした。
様々な死の定義が存在する世の中で、小羽が経験してきた短い人生は、不自由という意味での死。
何事も自分から臨めず、いつしか夢を望まないようになり、理解すればするほど気が重くなる。人以上に他人（ヒト）に頼らざるを得ない生命。

他人にかけるその“迷惑／苦労”はいずれ矛となって自分に向き、いつか命を絶とうと迫ってくる。

自分の命が他人の人生を暗闇にまで追い詰めてしまい――それでも生きていたい――やがて、自分もそこに引き込まれていることに気付き――いや、死んだ方が皆を幸せにできるかもしれない――取り返しのつかいない場所まで来てしまったことに、心の暗闇が深さを増す。

その繰り返しが彼女の短い人生の大半だった。

生きていては迷惑をかけるばかりだが、生きていた。

しかし、自分ひとりでは何一つ決めることもできない。　右も無い。左もなければ、進むべき道さえ見えてこず、また選ぶことができない。

唯一、彼女が周囲の“不幸”を吸収することで、不幸を吸い取られた人々に笑顔が灯る。他人の不幸を取り除き、幸福と出会わせること。

それだけが、たった一つの救いであった。

自分が不幸の原因。　それを自分で拭う。

自分にしか出来ず、しかし、自分からできる唯一のこと。

「私達と同じではないんですか？」

メイトスが言ったことに間違いは無い。

彼の言葉を認めつつ小羽は、芹真と出会わなければ何年も前に死んでいたことを再認識する。

それと同時、メイトスの口が動く。

「お前達2人の命も、いつか私が正す。
不正な魂を裁くのはアヌビスだけでないことを忘れるな」

「……あなたは、不正ではないと？」

「その矛盾には疲れている。
結果だけなら既に出ているさ。不正な魂全てを裁いたら自害する。
この考えは変わらない。変えてはいけない」

メイトスの顔が一度トキに向き、それから踵を返して病室を去る。

「……頑張って」

最後に、メイトスの背中に小羽が送った言葉がそれだった。

病室を出てすぐ、肩に腕を回してくるバースヤードを躱わし、メイトスは復路を急ぐ。
急ぐメイトスを追いながらバースヤードは声を掛けた。

「初めて自分と対になるＳＲに出会った感想は？」
「貴様に話したところで価値はない」
擦れ違う人々の目がバースヤードに集まる。
その原因は、メイトスが他の人々の目に映っていないことにあった。
「俺は驚いたね。
まさか、あんなシンプルで厄介なＳＲが、未だ確認されていなかったとは……」
「黙れ」
階段を降り始めた所でバースヤードは1度口をつぐみ、降りきったところで本題をぶつけた。
「君は四凶をどうしてほしい？」
その問いにメイトスの足が止まる。
バースヤードはメイトスの横を通過し、喫煙所と隣り合った休憩室を目指した。
「無論、根絶してもらいたいが、お前はそうしないのだろう？」

「損得勘定の観点でいうなら、どちらでも構わない。
が、道徳的私見を言うなら根絶した方が断然いい。
しかし、永くこの世界を見てきた者として意見するなら、根絶はあまり望ましくない」

自販機の前に立つバースヤードにメイトスは次の言をぶつけた。

「私の目には優柔不断としか映らないが、間違いかな？
Ｙｅｓでもあり、Ｎｏでもあって、またどちらでもないとは。
それでよく協会長という座にいられるな」

「有能らしく立ち回るのは得意なんだ」

わざとらしく肩をすくめてから自販機に硬貨を押し込み、ボタンを押す。
熱い缶コーヒーを片手にバースヤードは長椅子に腰を落とした。
ただの呑気にしか見えない協会長をメイトスは見下ろす。

「特にコントンとトウテツ。
この２人は真っ先に処分すべきだ」

「個人的にはキュウキを最優先でどうにかしてあげたいものさ」

「凶翼嘘口には個人的恨みがある。
そいつの処分はいずれ、私が直に行うから安心しろ」

「そうか……そりゃ助かる。
ところで話は少し変わるんだが、問題があるんだよ」

缶コーヒーを一気に飲み干し、バースヤードは続ける。

「四凶の奴ら、どうにかして自分達の遺伝子情報を次世代へと残すつもりでいるらしい」

「何だと？　それは本当か？」

メイトスが話しに食いくのを確認し、バースヤードは続ける。

「確信には至っていないが、可能性は高い。
そこで現在、千里眼部隊に四凶の名を冠する者全員を監視・追跡させている。
また、遺伝子情報を記録できるＳＲや研究機関、病院も全てマークし、監視中」

「協会ではお前以外に誰がそのことを知っている？」

「答えても俺に得は無い。
それとも、協力してくれるのか？」

見上げた先で、メイトスの顔から冷静というマスクが剥がれてい

た。

「当たり前だ！　四凶は人の理を紙くずのように破る！　貴様ら以上に許されぬ存在だ！」

「もう少し声のボリューム下げてくれ。こんな所で、あんたと話し合っているってだけで世界はへそ曲げちまうんだ」

周囲を見回す。　幸いにも、待合室には2人を除いて他の人間はいなかった。

咎められたメイトスが長椅子の反対側に座る。

「……その情報は確かなんだろうな？」

再度確認するメイトス。

背中を向け合う2人。

間を置かずバースヤードは答えた。

「英雄達の中に、コントンの言葉を直接聞いた者がいてな。命令違反を犯していたんだが、それが幸いし、現場に居合わせたんだ。上でトキを見てきたろ？　四凶の保存には、どうしてか色世　時も関わっている。直接関係しているのはトキの母親だろうが、もしかすると、今は

トキが直接関係を持っているのかもしれない」

「なぜトキなのだ？」

「わからない」

「四凶の保存か……単純な交配生殖の可能性は？」

「それは無い。
単なる交配でＳＲが生まれる可能性はほぼ零だ」

言い切るバースヤードの言葉を否定するようにメイトスはひとつの可能性を挙げた。

「だが、人狼の一部や鬼、妖精、アヌビスの間には人為的にＳＲを継承させる方法が伝わると聞くが？」

「それはない」

「単なる噂ではないと聞いたが？」

「確かに継承方法は実在する。
だが、そういった方法はすべて収穫済みだ」

「収穫済み？」

「例えば、この国でＳＲの伝承方法を持っていた部族は５つあった。
陰陽師、忍者、哭き鬼、天狗、銀狼。

世間に流出する恐れのある者から潰していったんだ。
まぁ、陰陽師だけは未だに逃れ続けているが……」

「ある意味で乱獲だな。反吐が出る」

「ああ。
実行を命令しておきながら、後味の悪さに未だ目覚めは最悪さ。
もし、という事で四凶全員調べてみたんだが、誰にもそういった方法を盗むに至った奴はいなかった」

「んっ？
どういうことだ？
話が飛んでいないか？」

「話す順番狂ったな。悪い。
つまり、継承方法が流出する前に一族を壊滅に追い込む作戦を展開したんだが、四凶の奴らほぼ全員がそれらの作戦に参加しているんだよ」

「しかし、継承方法を得た形跡は無い。
故意に話を改竄するなよ」

「わかってる。
継承方法を得たという証拠も無い。
日本だけでも結構暴れたからもしかすると、と思っていたのだがな……」

「自分の手駒を掌握しきれないとはな。
それでよく完全支配などと名乗っていられる」

「まぁ、立ち回りは苦手じゃないからな」

「継承方法はお前達が管理しているのか？」

「ああ。管理場所は極秘扱い。
その居場所を知っているのは俺と、英雄達の……」

「ジャンヌ・ダルクか？」

「そっ。彼女」

「迂闊に手は出せんな」

「それでも、四凶はどうにかして遺伝子情報を残そうとしている」

「だが、極稀に単純な交配からでもＳＲは生まれるのではないか？」

「天文的確率でな。
しかし、四凶との交配に限って、関わった者は例外なく天国の扉を拝める。　知っていたか？」

「……」

メイトスの思考が一瞬停止する。

刹那の沈黙。
その直後に浮かび上がる可能性。

「器実験というものは、一般人をＳＲにできるのか？」

「ああ。
だが、その為には何らかの因子を持っていないといけないことが最近の調査で判明した」

「その因子とは？」

「……」

「誰ならわかる？」

「ナイトメア非武装派にはひとり、Ｄｒ．マティス・フォーランドのみ。
武装派は複数いるぞ。
まず、ビッキー・ジャレイ。
ルチアーノ・メランドリ。
エルネスト・ロアイザ。
ヘーン・ポック。
オリヴィエ・ロダン」

６人の名を挙げたバースヤードが逡巡したのをメイトスは見逃さない。
答えていいのか、また答えた結果メイトスがどのように動くのか気がかりで、バースヤードは踏みとどまっているのだ。
ＳＲを遺伝させる方法を知る者達は、世界中に２０人もいない。
その内の半数以上は協会で保護対象として管理している。
問題は協会の管理下にいない数名のＳＲ。

「他は？」

しかし、言いかけて答えない場合のメイトスの反応も懸念に値するものであり、半ば賭けで協会長はその名を口にした。

「ＳＨＭ（セブンス・ヘヴン・マジック）サーカスのパントマイマー、アルター・ノーヴィス。それから、見習い兼花配りの男だ」

メイトスは横目で協会長の背中を睨み、８人目の名前を求めた。

「陸橙谷アサ」

その名がバースヤードの口から出たのは、一分もの沈黙の後だった。

「最後の男の顔は知らないな。後で顔写真を拝借しに行く」

「その必要は無い」

メイトスが立ち上がる。バースヤードは前を見つめたまま深呼吸し、回答を用意した。

「その理由は？」
「外見はトキと瓜二つだからだよ」
「……本当か？
そんなことが――」
予定通りの質問と予想通りの反応。
それを確認したバースヤードが続ける。
「事実さ。
俺も最初は驚いたよ。　いや、本当。
色世　時と陸橙谷　麻に血縁関係が無いか、両家の血筋を遡って調べてみたが、全くのシロ。
両家には一切のつながりは無い」
「それでいて2人は世界に大きな影響を及ぼすＳＲ同士。
まさに奇跡、だな」
振り向きながらメイトスは腕時計を確認する。
時計から目を外すと、目下に居た協会長は忽然とその姿を消していた。
「外に出ようぜ」

左側へと顔を向け、メイトスは視界にバースヤードの姿を捉える。
往来する人々の間を縫って外界を目指し、足を進めるメイトスとバースヤード。
玄関口を後にし、雪の降る路上を2人は並んで歩いた。

「どうやら四凶の中でもトウコツは関係が無いらしい」

「トウコツか。
なぜ断言できる？」

「ジャンヌのお陰だ」

「そうか。彼女が言うなら間違いないだろう」

「それに、死にかけのトキを病院に運んだのもトウコツだ」

「そうか。
それより、問題は保存方法だ。
如何な方法を用いて自分達を保存するつもりなのか」

「全くだ。
それが分からないうちはどうしようもない。
なぁ……今、一時的に協会の一員として――」

「断る。
四凶も許せないが、お前達とてさして違わぬ。許すつもりなど毛頭無い。
ただ、矛先が同じというだけだ」

バースヤードは無言で頷き、反論を開始する。

「それは間違いだ。
俺はＹｅｓあって、Ｎｏでもあり、また、ＹｅｓでもなければＮｏでもない。
必ずしも矛先が同じというわけではないわけさ」

「やはり、どうあっても互いに受け入れることは無いようだな」

「完全否定よ、人は誰しも生きている。
だから殺すな――とは言わない。
しかし、価値に関わらず存在し続けている限り、その生命は輝いていなくてはならない。　その輝きはいずれ価値を生む。違うか？」

バースヤードの頭に、隣り合ったベッドに横たわったトキと完全受容の姿が浮かんだ。

運命に逆らった生命、人生。

人一人の行動では、世界は決して動かない。
しかし、集合することによって世界は動き始める。　社会、国、集合から成る組織。人から成る人類。同じ血を分けあった者からなる家族。共通の目的を持つ同志。

バースヤードやトキ、メイトスもまた人々の関わり合いがあってこそ、今日まで生きている――生きてこられた――のだ。
家族や夢・思い出に動かされ、人は人を、人類は社会の中で次世

代を育んでゆく。
それが生命の連鎖であり、生きとし生ける者の生存本能であり、歴史である。

ひとりで何も出来ないと嘆くより、何かを出来るように支えあう。
そうした繋がりが人を輝きへと導くのだ。

「違うな。
生きているなら死ななければいけない。　過ぎた輝きはいずれ非予定調和を生む。
その時、犠牲と言う名の鎖は打たれ、永く、果てなく繋がれていく。　命が輝きは続けることは至極当然だが、必ずしも世界の何かを照らし続けるとは限らない。時には影を生む。
分からないわけではあるまい」

「例えば、陸橙谷　麻」

「他にもいるだろ」

「彼はその典型的例じゃないか。
それに、芹真事務所やハンズ・ブリジスタスも」

メイトスが鼻で一笑する。
バースヤードも自分の言葉におかしさを覚える。

そんな2人の間を風が通り抜けた。

雪は強さを増し、少しずつ視界が白に支配されていく。

「まぁ、それはまた後で話し合おう。
頼みがあるんだが、聞いてもらえるか？」

その瞬間、メイトスは耳を疑った。

――頼み。

それはつまり、協会長直々の依頼ということ。
相容れない関係、敵対する間柄でありながら依頼をしてくる彼の神経に、メイトスは怒りとも驚きとも取れる感情を抱いた。

「武装派と非武装派、それから無所属の連中を3：5：2の割合で攻撃してくれないか？」

「……その理由は？」

「来年にはわかる。
非武装派が大きな計画を立てているらしい。
協会とナイトメア、非武装派と武装派の対立、四凶の件、小規模集団。
猫の手借りても足りないほど忙しくなってきたんだが、立ち向かう価値はある」

「猫でなく虎だったらどうする？」

「虎なら間に合ってるさ」

「キュウキだがな」

「ダメもとで言っているんだ。
ただ、あんたが動いてくれれば、ナイトメアとの戦争は早期終結を迎えられる」

「協会のひとり勝ちか？」

その質問にバースヤードは数秒の間をあけた。
不意に浮かぶ笑み。

「君次第なんだよ。メイトス」

その一言に足が止まる。

「どういう意味だ？」

「協会のひとり勝ちを望まないなら、是非とも君に動いて欲しい」

「何をするつもりだ？」

「だから、戦争促進さ。
その為、ナイトメア非武装派は既に動き出している」

戦争促進。
その言葉がメイトスの思考に絡みついた。
“戦争の終結”
すなわち、協会の転覆かナイトメアの壊滅。
それ以外に考えられなかった。

この戦争で厄介なのだったのが、２つの勢力争いが途中から３つの勢力による争いに変化したことである。

遥か昔から存在する協会。
それを転覆させようと存在をあらわにしたナイトメアの現武装派。
武装派の過剰なやり方を見かねて派生・分裂したナイトメア非武装派。

ナイトメアのどちらかが潰れても、残ったもう片方が戦争をやめることは無い。　打倒協会の言葉を掲げ、命すら惜しまず向かってくる組織である。
過程は違えど、目的は武装派も非武装派も変わらない。

だが、協会は潰れる可能性が皆無に等しかった。

例え、ナイトメア両派が元通りの一大勢力として結集したところ、良くて協会が六分、ナイトメアが四分という実力差。
お互いの消耗は測りきれず、また圧倒的物量で有利な協会に消耗戦は挑めない。

それでも、

「非武装派は協会に立ち向かう気か？」

「多分な」

「……ずいぶんと軽く言うものだな。大した自信だ」

バースヤードは鼻で笑う。

「まぁ、全ては君次第なんだ」

「私としては、協会とナイトメアへの攻撃割合を教えてもらいたかったのだが？」

「ああ。いいぞ」

「いい、だと？貴様……」

「別に。俺は部下を失わなければいくら攻撃されても構わない。もし、君が協会とナイトメアに攻撃をかけるんだったら、その割合は８：２だ」

「何を企んでいる？」

「言っただろう、戦争促進だって」

強く、風が横から吹きつけた。
遮られる視界から相手を見失うまいと2人は向かい合い……
風が止んだ時、2人の姿はそこになかった。
突風が協会長とメイトスの2人を隠してからというもの、完璧のSR：ワルクスと、呪術師のSR：クワニーは顔を見合わせ、困惑した。
「いまの、会長だったよな？」
「もう1人は、写真で見たメイトスと瓜二つだった。
一体、何が起こっているんだ？」
冷たい汗が額を伝った。
再び顔を見合わせつつ、2人は考えながら病院へと入っていく。
協会長とブラックリストの頂点にいる最強のテロリスト。
なぜ2人は病院から出てきたのか。
なぜ2人は肩を並べて歩いていたのか。
可能性を片っ端から模索し、考察しながらトキの病室へと向かう。
如何なる理由があろうと、あの2人が肩を並べて歩くということが全く想像できないし、理解できない。
見間違いであることを祈りながら2人はトキの病室へと入る。

暖められた室内で最初に口を開いたのはクワニーだった。
眠り続けるトキの様子を見て、ワルクスが口を開く。

「やはり、外部からの呼びかけには一切応じることが出来ないらしいな」

「しかし、前回来た時よりはいくらか悪夢が薄れているようだ」

「わかるのか？」

「だからココに来ているのだろう。
この娘がトキの睡眠を順調に奪っているからだ」

小声で話す2人の目がトキの隣で眠りについたばかりの小羽に向く。

「しかし、覚醒にはほど遠い……」

「どれくらいかかるか分かるか？」

尋ねるワルクスに対し、罪の呪術師は首を横に振った。

「計りきれん」

「そんなに長いのか？　トキの、これからの睡眠時間は」

「ああ。
芹真にはどう説明する？」

「ありのまま伝えてくれ。
ただし、“解決法がみつかるかもしれない”という説明を添えて」

「光の魔女にはバレるが？」

「かもな……」

２人が読心術に対する暗示に関する講釈と、実際にトキを目覚めさせる方法を模索し始めてから約４時間。

本日の護衛である哭き鬼が姿を見せた。

「さて、そろそろ失礼させてもらうよ」

立ち上がったクワニーと、今来たばかりの藍の視線がぶつかる。
それを見てワルクスも立ち上がり、クワニーを後ろから押して藍に交代の旨を伝えてから、早々に退室した。

（後は任せる……ね）

ＰＭ　１５：２３

四凶の追跡を切り上げ、ワルクスたちと交代してから2時間。
藍は、いま自分がもつ仕事の責任の重さについて、改めて考えてみた。

協会が注目するＳＲの持ち主、色世　時。
芹真はトキを大切にし、滅多に人と親しくならないボルトがトキを認め、ディマや奈倉はトキの持つＳＲに興味を抱いている。戦力として注目しているらしい協会長と、それに賛同するワルクス。

（私は、トキをどんな存在だと思っている？）

自問と自答。
沈黙と静寂。

同じＳＲ。
同じクラス。同じ日本人。
記憶の中にある遠き人と同じ顔。

ため息が漏れた。

自問自答を始めて半時間、もっとかかると思っていた問題の答えが出た。
認めたくなかっただけなのかもしれない。

（トキを、死んだ兄様と重ねている……）

未練だと認めざるを得ない、現実の感情。それが自分の弱点であることも認めなければならなかった。

亡き者たちを思い続けることが、善か悪か。

彼ないし、彼女達を覚えておくことが生者の務めだと思い、数時間して、それが根拠の無いただの言い訳でしかないと気付いた。

（忘れるなんて……私にできるの？）

トキの顔を注視しながら藍は考える続けた。

忘れようと努力はした。

その努力を無為にするかのように知ってしまった、色世　時という存在。

顔を近づけ、藍は決意した。

（起きたら、勝負しよう）

自分はアサに勝てない。

もし勝ってしまったのなら、それはアサじゃない。　トキだ。

「本気でね」

病院の規則どおり、面会時間一杯まで病室にいた藍は病院を出て、真っ直ぐ芹真事務所へと帰還した。
数時間の静寂が病院前に舞い降りた。

世界は平凡な人間ひとりを欠いたところで止まりはしない。遅滞はするが、必ずしも全体に影響を及ぼすわけではない。
色世トキも例外なく、赤の他人からすれば気に止める理由など一切持たない外部情報の一つでしかない。
しかし、特定の者達にとって、色世トキの存在は非常に大きく、親しい故に心配でならない要素であった。

「バレるって！」

１２月２６日　ＡＭ００：５０

『大丈夫だって、私に任せな。
１０分だけセキュリティ騙すだけなんだからよ。
今まで一度もミスったことはないんだ』

通信機越しに自信の程を語る奈倉　愛院（アイン）。

「そうだぞ友樹。

たまには彼女のことを信用してやりたまえ」

楼塔病院の５０メートル離れた場所で友樹はエロティカの言葉にため息をついた。

「これ本当にお見舞いなのか？」

友樹とエロティカの背後で訝しむ岩井が２人に聞いた。

「確かに……これじゃあ、ただの犯罪者だ」

「トキの家に侵入して、今度は真夜中の病院に忍び込もうってんだからな」

「場所が病院というだけであって、私は友に会いに行くだけだ」

かじかむ手を擦って暖めようと試みる友樹。

疑問を拭えない２人の傍ら、エロティカは自信に満ちた顔で言った。

傲慢なその態度に通信機の向こうから文句が飛んでくる。

“じゃあ、手伝ってくれねぇ？”

直後、友樹の携帯に準備完了の合図が告げられ、３人は凍りついた路面の上を急いだ。

堂々と正面玄関から入り、静まり返った院内で奈倉と合流する。

「あと8分。
トキの病室は5階の０５０６号室だ」

４人は出来る限り音を立てないよう、気配を悟られないように慎重に進んだ。
１０分という、決して長いといえない時間の中、発見されるわけにはいかない。　見つかっては面会どころではない。

暗い病院の通路を進み、エレベーターを使おうとする友樹を制止しつつ、４人は階段へと急ぐ。
すれ違う医師達の姿はなく、ナースステーションは奈倉の麻酔ガスで経過し、無事４人はトキの病室へと辿り着いた。

「あれ？」

突如、奈倉は疑問の声を上げた。
他の３人も足を止め、扉にかけた手を離し、１歩下がって扉の文字に注目する。

“ 面会謝絶 ”

それは道徳的、社会的に大きな障害となる４文字であった。

「ダメじゃん」
「これは予想外だ……」
「ということは、トキはそれだけ重態ってことか？」

「よし、入ろうか」

エロティカが再び取っ手を握り、扉を横へスライドさせた。
不法侵入していることを思い出し、諦めた岩井がエロティカの後に続く。

「ヤバイって！」

小声で咎める友樹を他所に、奈倉も2人の後に続いて病室に足を踏み入れた――その時だった。

「そこの4人、何しているんだ？」

暗闇に男性の声が走った。　その声は、先に入室したエロティカと岩井にも届いていた。
男の出現に友樹は肩を震わせ、奈倉は麻酔スプレーに手をかけ、岩井とエロティカは室内で息を殺すようにして固まる。
通路の奥から全身黒尽くめの男が歩いてくる。

（この匂い……アヌビスか！）

奈倉は麻酔スプレーから懐のナイフへと得物を変えようとするが、それより早くアヌビスは警棒を取り出し、友樹の眼前で足を止めていた。

エロティカと岩井が病室から出てくる。

至近距離で男と向かい合う友樹は、握られた警棒を目にした途端、恐怖を忘れ、湧き上がる闘志に駆られて男を睨み返していた。

「面会時間はとっくに過ぎてる。
さぁ、とっとと帰れ」

奈倉の鼻が同属の匂いを嗅ぎつけ、また、暗闇になれた目がアヌビスの正体を明確に捉える。

（ハルバート・アヌビス……よりによって、コイツかよ）

仕事中であることが、普段より綺麗な言葉遣いから容易に把握できる。

抵抗する気概を失い、４人は病院の外へ連行された。

外へ連れて行かれる途中で、ハルバートアヌビスは自販機でココアを購入して４人に渡した。

――大人しくしといてやる。だから、とっとと帰れ――そういう意味を込め、ハルバートは奢ったのだ。

「なるほど。
ダチが心配ね。なら、来んな」

それだけ言って、アヌビスは踵を返した。
再び雪の降り始めた空を見上げ、岩井や友樹はため息をつく。
無駄足。
顔をしかめる3人を差し置き、エロティカはアヌビスの背中を追い、すかさずアヌビスの警棒がエロティカの鼻の頭に突きつけられる。

「大人しく帰れ」
「わかった。大人しく帰らせてもらおう。
その代わりに、トキという男にコレを届けて欲しい」

持ち上げられたビニール袋を奪い取り、アヌビスはその中身を確認した。

「マフラー？」

わずか疑問に頭を回転させている間、エロティカは逃げるように走り出していた。
それに伴って奈倉や岩井、友樹も走り出す。

その内の1人が滑って転ぶのを目撃してから、ハルバートは肩を竦(すく)めて病院内へと戻った。

「どいつもこいつも……

色世トキは面会謝絶中だ。不法侵入お断りだぜ、馬鹿野郎どもが」

1人呟き、再び院内の巡回を再開する。

その途中でトキの部屋を覗き、意外と不法な侵入を果たした面会人が多かったことにため息を漏らした。

「あ、もしもし、ナインちゃん？」

『う～ん？』

「あのさぁ、ちょっとお願いしたいことがあるんだ」

『何々ぃ？』

「前にさ、シンソウ、とか何とかに潜れる人いるって、言っていたよね？　というか居たよね？」

『神層ね。
言ったけど、今回は連れてきていないよ？』

「連れてこられないかなぁ？」

『来られなくは無いけど……時間かかるよ？』

「どれくらい？」

『１、２ヶ月くらいかな』

「実は今日ね、友達がトキを調べていたらゲートみたいなのを見つけて、そこからトキを睡眠側から覚醒側に連れてこられるんじゃないかなぁって、言っていたんだ。

だから、そのゲートみたいなのまで潜っていける人が必要なの」

『見つけたって、面会謝絶中でしょ？』

「うん。
でも、私達はフリーパスなんだよ。
だから、連れてきてもらえるかな？」

『会えるんなら、あとは探すだけだから大丈夫。
じゃあ、明日から探しに行って来るから、こっちのメンバーもたまに見て頂戴ね』

「任せて。
悪いことしそうになったら、ちゃんと叱っておくから！」

『うん。あ～……
やっぱり今から見つけてくるわ。
ボルトちゃんが言っているのって、もしかしなくても無我のことでしょ？』

「えぇと……うん！　そう、その人！」

『わかったぁ。じゃあ、行ってきまぁす』

「お願いね」

第２９話－そこにいた彼女－（前書き）

一体、何ヶ月続けているのだろう。

遭遇しては、止まり。

逃がされても、次の遭遇で逃がされる前の状況に戻ってしまう。

だが、それは昨日までの話だ。

少女は外部での作業が順調であることを悟り、今まで以上に気合を入れてトキの救出へと向かった。

第２９話－そこにいた彼女－

上空をカラスが通り過ぎていった。
夕のオレンジが暗やみ、暗い夜の訪れを報せる。
人気の無い通りで、トキは１人蹲(うずくま)っていた。

人は常に迷い続け、いつかは途方に暮れる。

生きていくための標。
死までの経歴。

その一環が、迷走。
個々に程度の差はあるものの、迷走は必ずしもやってくる。
問題は、その暗闇に囚われ続けないか否かである。

「やっと見つけた」

蹲るトキの前に立ち、周囲を見渡す。

ここはトキの中。

周りの景色は、トキが見てきた暗い記憶。
母を失ってからの孤独な生活。いじめの絶えない学校生活。

「さ、立って」

目の前に立つ、サイドテールの少女を見上げながら、トキは差し伸べられた手を取って立ち上がる。　そんなトキの目の前を空き缶が飛び過ぎていく。

次の空き缶が飛んでくる前に少女はトキの手を引いて走り出していた。

夕焼けを背に受け、夜闇を目指す。

暗い道を走り続けると、真昼の校舎裏に出た。

そこで握っていたトキの手の感触が消えたことに気付いて、周囲に目を配り、トキの姿を探す。

「早くやれよ」

背後へ目を向けると、そこには指の数ほどの年上に囲まれた小学生のトキがいた。

手には薬品の入った瓶。

足元には、逃げられないようカゴに閉じ込められた兎。　兎は体毛の所々が短めに切られていた。

そこで何が起こっているのか、少女は瞬時に理解する。

「殺さないと、お前殺すよ?」

トキを取り囲む上級生らが脅迫を続け、兎に目を落としたトキは固まったまま動かない。
それは典型的な暴力による虐め。
小学生の――精神的に塞ぎこんでいる――トキに、この状況を切り抜けるだけの力はなく、また度胸さえ備わっていなかった。
抵抗する気概はないが、トキには兎を殺せない理由があった。

（あの事故のことが頭から離れないのね……）

本能的に“死”というモノを理解しているのだと解釈し、少女は少年達の輪に歩み寄る。
トキの経験してきたことが警鐘を鳴らし続けていた。

少しでも液体を降りかけてしまえば、兎は死んでしまう。
この兎はそれほどまでに弱っている。
自分が、殺してしまうのか。

「ほら！早くかけろよ！」

「いやだ……」

震えを必死に止めようとトキは声を出したが、上級生の1人が手首を掴み、力任せにトキを促し始めた。
力では勝てない。抗えない。

薬瓶を握った手が兎の頭上で止まり、傾き始める。
そうなる前に瓶を捨てれば良かったと後悔するが、遅い。打開策がひとつも浮かんでこないまま瓶は少しずつ角度を変えてゆく。

トキの目じりから涙が滲み、流れてゆく。

「どうせ、お前のクラスの奴らが泣いてあげるんだからさ、いいだろ？」

泣き出すトキに、上級生達は無理やり迫る。
トキの泣く様に嗜虐性をくすぐられ、強制・強迫が加熱し、蓋の外れた薬瓶が更に傾く。

懇願するトキ。
零れ始める濃硫酸。
短く切られた体毛では、濃硫酸から皮膚を守ることは出来なかった。液体が付着し、脱水作用を起こし、発熱が起こる。
必死で液体から逃れようともがく兎。
トキは目を逸らしながら懇願を続けたが、誰も聞く耳を持たない。

罪悪感と怒りで周囲の景色、トキの記憶が歪む。

「行こう。トキ」

歪みが校舎のコンクリートにひびを入れた瞬間、あらゆるものが停止する。

零れる液体から、歪む景色、上級生、風の音や車の騒音まで、何もかも。有機無機を問わずに行動や現象が止まっていく。
そんな停止した時の中、トキは上級生の腕の中から抜け出し、足元の金網を外し、痙攣する兎に触れた。
手を当てたまま数秒、十数秒、数十秒と経過していく。
が、トキが動き出す気配はない。

「無駄よ。
ここは記憶の中。
現実にあったものの反映で、現実だけど過去だから、いまそこに無い。
仮想よ」

「……」

「クロノセプター」

沈黙を続けるトキの姿が、小学生から中学時代の制服姿へと変わる。
触れていた兎は消え、再び夕焼けが2人を包んだ。

ー第２９話ー

ーそこにいた彼女ー

膝をつくトキを立たせようと少女が腕を伸ばしたが、それよりも早く、別の腕がトキの方へと伸びていた。

「大丈夫かトキ？」

（この人は確か……村崎翼）

「あ……あぁ」

力なく答えるトキに対し、通称：エロティカで名の通る翼はトキを立たせ、それから笑顔で質問を始めた。

一体何に悩んでいるのか。

言い難いものか。

深刻なのか、等々。
立ち上がったトキと翼は信号が青に変わるのを待ち、少女もトキの隣――翼の反対側――に立って、信号が変わるのを見守った。

「本当に大丈夫なのか？」

「まぁ……な」

「顔色はいたって正常、とはお世辞でも言えないぞ？」

寝不足だと答えるトキの手を、少女は強く握った。
小学校時に比べていじめや陰湿なイタズラは減っていたが、全くなくなったというわけでもなかった。金銭目的でトキに群がる上級生や、上下関係を知らない後輩の嫌がらせに、頭を抱えていたのが、中学時代のトキである。

「そりゃ……」

本気で心配してくれる翼に、トキは言葉を詰まらせた。

直後に響く轟音。
巡り巡っていた思考が、その音によって遮られた。

数メートル先で起こった衝突事故。

金属のぶつかり合う音。

コンクリートを擦る音。
吹き付ける爆風。
弾ける飛ぶ残骸。
周囲に衝撃を撒き散らし、トラックと乗用車が炎上を始める。

信号を待っていた多くの人々がその衝撃で地面に伏していた。
トキや翼、少女も例外なくその爆風から逃れようと地面に伏したのだ。が、

「事故だトキ！」

起き上がった翼が叫ぶ。
事故の起こった一帯が惨憺たる有様であることは明確だった。

爆発による怪我人。
二次災害に巻き込まれた人々。
撒き散らされた火炎。
集まる野次馬達。
混乱に理性を掻き乱された人間たち。

「携帯を持っていたな！
消防に連絡……――」

翼が気付くより早く、少女はトキの異変に気付いていた。
顔を抑えてもがくもがくトキに手を伸ばし、両手を押さえて顔を覗き込む。

（ガラスの破片）

爆発の起こった場所に目を向け、トキへと視線を戻した。
少女の目とトキの目が合い、右目に視線を注ぎ、現状を確認する。

斜め下から、眼球に刺さっている。
破片の形状は細長く、非常に鋭利なものだった。

少女の手を振り解こうとトキがもがく。そんなトキの両手を押さえて伝える。

「抜いちゃ駄目。
それを抜いたら、目から光が消える」

「抜くな！　トキ！」

少女の行動に、翼の行動が重なった。
両腕を押さえ、懸命に叫び掛ける。

「現実……じゃ、ない……だろ？」

ため息をひとつつき、少女の左手がトキの右目を軽く覆う。

「止まって」

宣言と同時、周囲のざわめきが消え、静寂が訪れる。
静止した世界の中で、少女は左手に意識を傾けた。
突き刺さったガラスを抜こうと伸ばしたトキの手が、少女の意識を揺らす。

手をのけると、トキの眼に刺さっていたガラスの破片は消え、傷も綺麗に消えていた。

「これで大丈夫だから。
さぁ――」

更に止まった世界に少女の声が響く。
右手をトキの頬に当て、

「あっちに行こう」

止まった世界にトキを引き込む。

「え――あれ？」

負傷した右目を押さえるトキの手を取り、少女は走り出す。

何も言わずに走り出した少女に連れられ、トキは夕方の街を抜け、海に出て、すぐに引き返して教室に戻り、そこから商店街に出たところでふと、気付いた。

「君は……いつも俺を引っ張っているけど、誰？」

「誰でしょう？」

見向きもしない少女は蒼穹を見上げ、周囲に目を配って行き先を決める。

「やっと、私に意見できるようになったんだ」

商店街を出て、高校の体育館に移動した時、少女はそう言った。あまりにも長い間に、トキは自分の投げた質問内容を忘れかけていた。

「え？」

コウボウや友樹の質問と同時。

タイミングの悪さにトキは台詞の前半を聞き逃し、遺憾なことにもう一度聞く余裕などなく、また与えられなかった。

「こっち！」

体育館の2階ギャラリーへと続く階段を上り、そのまま放送室を目指して走る。

手すりから見下ろす階下では、見慣れたジャージに身を包み、バドミントンにうちこむクラスメイト達の姿が見られた。

「順調に覚醒に近付いている」

「え？　な――？」

「自分がいま、どんな状況にいるかわかる？」

放送室の扉に手をかけるのと質問を受けたのはほぼ同時だった。

トキは周囲と自分の服に目を落とし、ありのままを伝える。

が、少女はその回答に首を横に振った。

ドアノブを握ったまま少女は現実で起こっていることをありのままトキに伝える。

「眠っているってわからない？」

「眠っているって、何で――」

普段施錠されているはずの放送室の扉が開く。
少女は口をつぐみ、トキもそれに倣う。

2人は暗やみに飛び込み、踏み入れた足が揺れる足場を捉えたことに軽く戸惑った。
ソレが暗い場所から明るい場所に出た時、自分達がどんな状況に置かれているのか確認する。

「っ……電車？」

「この電車は覚えている？」

少し間を置いてトキは頷き、後をふり返った。
そこには揉める青年と老年の男の姿があり、周囲には2人の揉める様を他人事と決め込んで傍観する他の乗客たち。
その中にが1年3組中立派の顔もみられた。

「……友達との旅行で、行きの電車の中で喧嘩が起こって大騒ぎになって、それで――」

「目覚めは近いわね」

遮られた台詞にトキは肩をすくめる。

寝ているという気がしない。　ここが夢という実感が無い。

それらの感覚がトキにデジャヴュを実感させていた。
寝ているらしい現実。現実のような夢の中。自分の記憶の連続。
今回が初めてではない、この感覚。

「でも寝ているの。
行こう。　ここにいても現実に辿り着けない」

「現実……本当に、俺は寝ているのか？」

２人は人気の少ない車両を探して歩きまわり、最前車両まで来て足を止めた。
後の車両で起こった喧嘩のため、車掌は運転席に居なかった。
オートパイロットで走り続ける電車の外に目をやる。

「ここが現実だと思っているの？」

「そんな気もするんだ」

「それはそうよね。
これらはトキの過去だもの」

少女の手がトキの手を取る。
今見ているこの景色が自分の記憶の一部だということを認めたトキだが、

「でも、悪いが俺の記憶に君は――」

「今初めて見た、見たことが無い、でしょ？」

心の内を読まれたトキの口が止まる。

少なくとも、トキは目の前の少女と出会ったことはない。

「……君は、ＳＲか？」

「止まれ」

騒音と振動が消える。

静止した世界で、トキと名も知らぬ少女の２人だけが動いた。

「タイム……リーダー？」

「トキも使えるはずよ？」

握られた手を振り解き、トキは少女と距離を置く。

自分（トキ）の意思を反映させたわけでもなく止まった世界。　平然と世界を止めてみせた少女。

予想外な自分以外のタイムリーダーとの邂逅。

「この使い方も、トキにはできるのよ？」

しかし、少女に敵意や殺意はなく、むしろトキに協力しようという姿勢を見せ付けていた。

「この使い方？」

「うん。
トキは今まで、誰かをこういう世界に引き込んだことはある？
今までは、自分ひとりだけが静止世界を動いていた。それは分かるよね」

言われてトキは自分の能力を再確認する。
イマルの時も、ウラフの時もそうだ。
静止した世界で自由に行動していたのは自分ひとり。

それと比較して、いま置かれた状況を整理してみると、

（電車の揺れが止まっている……人の声も聞こえない）

完膚無き時間静止。
タイムリーダーの効力と一致する現象。
しかし、今までと違うところは静止世界に2人いることだった。

「君が、俺を引き込んだのか？」

「もちろん。
これはトキにも出来ることよ」

少女が手を伸ばす。
トキはその手に目を落とし、素早く少女の顔に視線を持っていく。

「この悪夢から救ってあげる」

「悪夢……」

差し伸べられた手を取ろうか、トキは迷っていた。
本能が何かを訴えている。
警告のような、推奨しているような、警鐘のような……

「ここにいたら、あと2年は眠ったままよ」

「2年も？」

「ええ」

「君は誰だ？」

唐突な質問に少女は笑みを浮かべるだけで、電車の窓を指差す。

トキは連れられ、そちらに顔を向け、体を向けるが、そこに特別な何かが見えたわけではなく、また何かあったわけでもない。

「そこから出るよ」

「出るって、窓から!?」

「そう。
窓から行くわよ」

「ここ鉄橋の上だよ!?
しかも、下は谷――!」

「行く、の!」

少女に手を取られ、トキはその怪力に虚を突かれ、少女と共に窓を割って外に飛び出した。

割れた窓ガラスと共に宙を舞う2人の目に――目前に――地面が迫った。

（……これは!）

トキの視界に、夏の学校敷地内の風景が飛び込んだ。
快晴の日差し。
揺れる新緑。

静寂に包まれた白州唯高校と、その周辺一帯。
少女はその場に膝をついて着地し、トキは着地に失敗して地面を転がり、その拍子にガラスの破片で皮膚と肉を切ってしまう。

「逃げなきゃ……」

「どういう状況かわかる？」

「イマル・リーゼって奴がいて、学校の皆を夢の住人って言う兵隊にしているんだ！」

「思い出した？」

少女の質問に、踵を返したトキの足が止まる。

「毎日毎日、同じような夢ばかり見て、それでも異変には気付かない」

「……」

振り返ると、目前に彼女はいた。

「……そうだ。俺は自覚していなかっただけだ」

「思い出せた？

毎日毎日、似た悪夢を繰り返していることに」

瞬きしたトキの視界から少女が消える。
ふり返り、背後にその姿を見つけてから、少女の背中を追う。

「不思議なことに、初めて会う気がしない。
そして、必ず夢のどこかにいて、俺の手を引いていた」

「そこまで思い出せたのなら、もう少しよ。
トキはここで起こったことを覚えている？」

左手で校舎の壁を指し、少女はトキに向く。
トキは頷いて答える。
忘れるはずない、と。

２人は移動速度を今までよりも僅かに早めの速度で移動し、玄関の扉を押して、日陰の校舎内へと入った。

「問題はこの先よ」

扉を潜る頃、トキはガラスの切り傷が跡形も無く消え去っていることに気付き、一呼吸置いてから応えた。

「何がある？」

「今までと同じ。トキの記憶。
ただし、ここから先は……この先が最も厳しいわよ」

扉を潜ると、そこはに暗闇が広がっていた。
背後からの光は無い。
どこが地面で、どこが壁なのか。
立ちくらみさえ起こるような暗黒空間。

ただ、前方に1つの光る扉があるだけで、他への寄り道を許さなかった。

不意に暗闇の中にひとつの輪郭が浮かび上がる。
人の形をしたそれは、トキにとって初対面ではなく、友好な関係を持つ者でもなかった。

「コントンよ」
「ああ、分かってる」

正面から歩み寄るコントン。
2人は足を止めずにコントンに向かって行った。
少女が先頭となって進み、トキはその後を必死で追いかけながらコントンを睨む。

「私は、私の残留思念だ。
何も出来ないから恐れることは無い。ククク……」

両者がすれ違う瞬間、先に口を開いたのはコントンだった。

「墓穴を掘ったわね」

少女が放った言葉の意味を考えながら振り返ると、2人の背後でコントンは光の粒子となって散り、その姿を消した。

「前を見て、トキ。
全力で走るよ」

「走る？」

光に向かって暗闇を歩き続ける2人の視界に、オレンジが差し込んだ。

「行くよ！」

少女に促され、トキは走り出す。
前を走る少女の後を必死で付いて行こうとし、暗闇を抜けたそこに、オレンジ色の街を見かけた。

足元の金属。

左側へと曲がった少女を追う。

「止まれ！」
「一段‥薄！」

少女の声と、彼女の叫び声が重なる。
その声に、トキは辺りを見回した。

（この光景は、アヌビス！）
「急いで！」

トキは躊躇わず、全力で階段を上った。
芹真事務所の裏口、階段。

脳裏にこの後の屋上でのアヌビスとの戦闘を思い出し、トキは奥歯を噛みしめた。

静止した世界を2人が駆けて行く。
階段を上りきり、コンクリートの敷き詰められた広い屋上が目の前に広がった。

屋上に出た2人は反対側を目指して走る。

「起きる気か？」

2人の足が止まる。
男は止めるつもりでそこに現れたのだ。

「ええ。
トキはあなたに探し物をして来いと言われたからね。起こしてあげるのよ」

「そりゃあ、傑作だ」

笑うコントンの横を通過し、2人は鉄柵に手をかけた。

「何もかも忘れ、やり直したいと考えたことはないか？」

鉄柵を乗り越え、建物の端に立ち、コントンと向かい合う。
やり直しを考えたことは無いか。
失敗も、成功も問わない。
大きかろうが、小さかろうが、もう一度挑みたいと。
違う結果を得たいと考えたことは無いか。

「無くはないわよ」
「……俺も、無いとは言い切れない」

少女とトキは並んで答え、少ししてからコントンは笑った。

「今ならまだ間に合うぞ。
全てを忘れて夢から醒めれば、今まで通りの世界が君を待っている。
どうだ？　トキ。魅力的だとは思わないか？」

「俺の夢を一度でも見ればわかるさ。
いままでの俺になく、いまの俺に必要なモノ。
それが自分から面倒や困難に立ち向かっていけるほどの強い意志だ」

茜色の景色が歪む。

辛いことから目をそむけ、生きてきたトキ。
これといった主張を持たないまま自分の世界を形成してきたトキ。
望むだけ望み、実行に移すことがなかったトキ。

傍らの少女と走り抜けてきた記憶の中、トキは自分の不甲斐なさを幾度となく目撃してきた。
今までも何度か考えてきたことだ。
弱い自分と決別するために必要なもの。得手不得手に関せず、自分から踏み出していく一歩の大切さ。

「つまり、戻る気はないんだな？
これからお前のの人生が辛い殺し合いの連続で、死ぬまで続くとしても」

「生き残ってみせるさ」

少女がトキの手を引く。
引っ張られ、2人は屋上から身を投げ出した。
着地まで2秒とかからない。

「なら、生き残ってみるがいいさ」

顔を上げてみると、そこは車で埋まった駐車場だった。
素早く体勢を立て直し、2人は走り抜ける。

「ここが近道だよ、トキ！」

車の上を飛び越える。
その背後を銃弾が通り過ぎ、無数の同一人物が駆け抜けていく。

（藍、それに……トウコツ）

様々な音が交じり合う駐車場を横切り、路上と駐車場を遮るフェンスを目指す。
ウィンドウが砕け、フェンスが歪み、車の片側が浮く。
金属が断ち切られ、ボンネットがひしゃげる。

ぶつかる剣と金棒。

「アイツがお前を助けたって、知っているか？」

フェンスを乗り越える最中、コントンはトキの背に向け言った。
フェンスを登るトキの手が止まり、背後で藍と戦うトウコツ、次にコントンへと視線が移る。
停止したトキを少女が戒める。

「トキ！」
（どうして……トウコツが？）

考えながらトキはフェンスを越え、一気にアスファルトまで飛び降りる。
振り返ってフェンス越しにコントンと向き合い、トキは質問を始めた。

「お前は、何を探しているんだ？」

「破片だよ。言っただろう。
黒い金属のような、木のような物だ、と」

少女が手を引く。
より一層力強く、強引にトキを夕闇の中へ引っ張っていく。

「少し教えてやろう。
舟の破片だよ」

「船？」

2人の姿が夕の闇に消える。
それを見送り、コントンの体が光の粒子となり、空気中に散った。

騒然とする協会の会長室で、バースヤードは静かに報告を受けていた。

四凶の動き。
世界中のナイトメアの動き。
協会の内の動き。
小規模集団のの中での動き。

それらの中から特に変わったものを中心に対処法を考え――それらの情報の中――1つの報告に我が耳を疑ってしまった。

「ちょっとみんな、静かにしてくれ。
それで、ピーター。何だって？」

「妖精組合がＳＨＭサーカスと協定を結びました」

一斉に静まり返った室内に会長と指名された少年の声が反響する。

「そんな書類は見ていないぞ？」

「どうやら勝手に結んだようです」

騒然とした室内でざわめきの度が増す。

バースヤードは、それについて詳しく検討する臨時会議を午後の予定に入れ、一通りの報告を終えてからジャンヌを室内に呼んだ。

「芹真事務所の様子はどうなった？」

「妙な行動を見せてから今日で２ヶ月。

先程、トウコツからの報告でその詳細が分かりました」

「見張っておいて正解だな。

芹真事務所は何をしようとしていた？」

「聞いた話では、トキが目覚める、と言っていたらしく、そのことからトキを覚醒させる方法を見つけたのだと」

「なるほどね」

重ねられた書類の山から一冊の報告書を抜き出し、ペンを運ぶ。

「クリーニング店は？」

「しっかり芹真事務所を監視しているようです」

「なら良し、と。
この書類を送ってくれないか？」

「分かりました。
それで、午後の会議のメンバーはいかがいたします？」

「実行部隊と千里眼部隊、それから映像通信で仙太郎、ジーク、トウコツを呼び出してくれ」

「了解」

「あぁ、それとその書類。
内容は機密扱いだからさ、間違っても覗かれないように色々施しておいてくれ」

「わかりました。
どれくらいやっていいんですか？」

「触れた瞬間に心臓麻痺起こすくらい、かな」

了解と一言残して室内を去ったジャンヌにバースヤードは冷や汗を覚えた。

――過去に放ったジョークのどれもが実現したっけ？
――そういえば、彼女に冗談は通じなかったような……

5、6人が医務室送りにされる様子が易々と頭にイメージとして浮かぶ。
死人が出ないことを祈りつつ、バースヤードは再び妖精組合とSHMサーカスの情報について頭を回転させた。

（四凶の動向に注目している最中にこれか。　彼らも何かを掴んだな……）

数分の思考の果て、SHMサーカスと接触させるべきSRのメンバーをまとめた。

火炎に包まれたトキと少女は、全力で壁から時間を奪ってそこに穴をあけていた。

「しつこく聞くが、これは本当に夢なのか？」

「しつこく答えるわ。感触があるのは当然よ。
これはトキが過去に経験したことのリプレイなんだから。
炎に触れなくても火傷はするし、どんなにその場から離れていて

も実際に切られたところが切れたり、撃たれたところに穴が開いたりもする」

壁に大きな穴が穿たれる。
少女が火炎に包まれた監獄から救った娘を抱えて空に飛び出し、その後にトキが続いた。

「ねぇ、トキ。
あなたは何処まで行ける？」

「え？」

「おそらく、次が最後にして最大の試練になると思うわ。
きっと逃げたくなるし、諦めるかもしれない」

現実を避け、夢の世界を生きてゆく。
容赦なく続く現実から逃れ、仮初の理想で安泰を望む。

「現実まで行ける気はする？」

空中に飛び出したトキは、景色が雲と夜空に彩られた高空から、周囲を民家に囲まれた桜色の白州唯の一画に変わったことに僅か動揺した。

周囲の変化と同時に体中に激痛が走る。

意識を遠ざける痛みの高波。
頭に、体中に、心に響く痛み。
足が地面に着く頃、トキの顔は痛みで歪んでいた。
体を支えていた両足から力が抜け、その場に崩れるのを少女は見届ける。

「それ以上の痛みが外の世界には待っているんだぞ？」

激痛に耐えながら見上げるトキの視界に、残留思念のコントンが映る。
少女の双眸もコントンを捉え、３人の間に重たい静寂が降りた。

「これ以上の……痛み？」

「今のそれが最大級の痛みだと勘違いするなよ。
世の中、お前が想像するよりも遥かに巨大で絶望的なダメージが存在する」

それがコントンからの最後警告だった。

「引き返せ、トキ。
いま起きると、お前の人生は決して楽しめるものにはならない」

「だからって……寝ていて、俺の人生が明るく……なるわけじゃないんなら……」

這いずるトキの傍に少女は移動し、腕を貸して立たせる。
僅かな動作に伴う激痛に耐えながらもトキは言葉を繋ぐ。

「つまらなくても、進めば……それは、俺の現実だ」

肩を借りて立ち上がったトキは、1歩ずつ前進してコントンの脇を抜ける。
傍らでトキを支える少女は口をつぐんだままコントンを睨む。

「トキ。
近い将来、私の本体がお前を絶望の淵へと追い込むだろう」

「やって……みやがれ」

咳き込みながらトキは重たい足を1歩前へと出す。
その背後でコントンは粒子となって散った。
コントンの残留思念が消滅して数秒、少女が静寂を破る。

「トキ。
あなたが進むなら私はいつでも、いつまでも見守っている」

静止した世界で2人は前進を続ける。

少女の言葉を理解することが出来ず、トキは困惑したまま耳を貸した。
すると、多くの傷を負ったトキを支える腕を解きつつ、少女はトキの背後に回り、

「トキはさ、もう覚悟しているんだよね？」

「え？」

「これから起こる現実……すべて受け入れられるよね？」

唐突に切り出した少女の言葉にトキは無言で頷き、少女の言葉を待った。

「トキのお母さんがどうして死んだか、知っている？」

「……なっ！？」

顔を向けると、背後にいたはずの彼女はいなかった。
周囲に視線を配るが見当たらず、しかし、少女の声はトキの耳に伝わり続けていた。

『全ての糸を裏で引いていたのはコントンなのよ』

次にトキは自分の体の異変に気付いた。
先ほどまでの激痛が消えている。
トキは夜の白州唯を駆け、暗闇の中に続く道を直進し、記憶に映っていないコントンを目指した。

『トウコツとクワニーの組み合わせもコントンによる改竄よ』

その疾走速度にトキ自身軽く驚きを覚えつつ、姿を消した少女の身を案じて走る。
積もった雪を踏みしめ、冷たい雪を押しのけ、暗闇の奥へ、奥へと突き進む。

『ある日、コントンの計画に気付いた私たちは、その計画の鍵となるモノの一部を分割し、部品としてそれぞれ隠し持ったまま世界中に散らばった。
しかし、妖精と絶対神判による計画阻止は、コントンの逆鱗に触れた』

「計画？」

『四凶の保存よ』

「四凶の、保存？」

様々な考えを巡らせながらトキは走る。
四凶の保存。

それが何を意味するのか、トキには見当がつかない。

『激怒したコントンはいくつもの布石と何重もの罠を張り巡らせ、部品を隠し持つ者を1人ずつ追い詰めて行った』

「母さんも、その1人だった……」

『……それでも、1つだけ誤算があった。
コントンは私達が分割したパーツの入手に至らなかった。
自分で張った罠が仇になって回収が困難になったのよ。その現場に誰が居たかわかる?』

トキの脳裏に罪の呪術師が浮かび、トウコツが浮かぶ。

そして、色世　時の復活。
1人の目撃者も許さないほど追い詰められた状況で、コントンは破片の回収を諦めざるを得なかった。
また、目撃者がたった1人というわけでもなかったこともあったのだ。
視認できず、知覚出来ないが、クワニーやトウコツ以外の誰かがあの場所を見張っていた。

「君は、母さんを知っているのか?」

『よく知っているわ』

「母さんとコントン。

どちらが強いかはわからないか？」

『そこまで分からないけど、どっちもどっちだと思うわよ。
トキ、あなただってそう。
自分に出来ることに全力を注げば、誰だってそれなりに現実と立ち向かっていけるもの。コントンとも対峙できる』

視界に光り輝く輪郭が映る。
コントン。
暗闇の奥に向かって進むその途中、背後から迫ったトキへと振り返った。

「だが、忘れるな。
ここがお前の記憶と半覚醒意識の狭間だから、俺に近づけるだけだ。
現実で同じ通りに行かない」

「わかっている！」

トキの手に光が集まる。
それが――時間による創造――トキの力。
光はトキの持つナイフのイメージを模り、次に質量を持つ現実へと昇華させる。

『残留思念を――！』

トキの短剣による刺突がコントンの胸を捉える。
その直後、傷口から目が眩むほど眩い光が漏れ出した。
温かい光。
優しい光。
柔らかい光。
それらがトキを包み、暗闇の白州唯を白闇に染めていく。

（温……かい？）

目を開くと、トキはそれまでと一変した空間に居た。
明るい白に包まれた空間。
上下左右の概念が通じない純白世界。
そこは時間さえ感じさせない。生命さえも。

「……ここは？」

「あれ？」

突然、景色の変化に戸惑うトキの背に、若い男性の声がかかった。
振り返ったトキは背後の日本人少年の姿を確認して戸惑いを深化させてしまう。
自分と同じくらいの年恰好。

「もしかして、シキヨトキ君ですか？」

「……そうですが、あんたは？」

一見大人しい風貌をした少年だが、トキは警戒を解かなかった。
親しそうな態度を取っているが、ここが自分の記憶であると言われた以上、目の前にいる少年は一般人ではない。

「ボルト何とかさんに頼まれて君をここから連れ出しに来たんだけど……いや、君の神層も中々珍しいものだね。
これだけ明るい神層なんて今まで数回しか見たことないよ。数回といっても、一人の神層を何回も見たってことだけどさ」

「……はい？」

奇怪なことを言う少年が周囲に目を配りながらトキに歩み寄る。
思ってもいなかった言葉や聞きなれない言葉にトキはスカを食らった気分になり、思わず肩から力を抜いた。

「えぇと、俺は無我。
無我　ユウ」

差し出された右手。
握手を求める手を握り返し、それでも訝しむトキを察した無我は

説明を始める。

「信じてもらえないだろうけど、俺、この世界の人間じゃないんだ」

「へ――？」

トキは――異世界の人間――その言葉が脳裏を掠めた瞬間、性別が裏返った夏の日を思い出していた。

が、体の異常はどこにも見当たらない。

当然といえば当然だが、ここは心の世界である。精神に性別などない。養われていく知識が男女という概念をつくっていくのだ。

よって、この世界で性別が反転していようがしていまいがトキはトキであって、自分の性別が男だと認識され無意識の中のひとかけらとして植えつけられた観念が優先される。

「俺達の世界じゃ、この場所は神層って言っているんだ」

「シンソウ？」

「意識的迷子は大抵ここに迷い込むんだ。

だから、意識不明者を起こす場合はまずここに来て、ここにいなかったら他を探すっていうのが俺の仕事だったんだ」

「それで、今は俺を？」

「みんな心配してたよ」

「……いま、帰れるんですか？」

「俺が帰してやる」

無我はそう言って自分の胸に拳を当てて誓う。
トキは疑心暗鬼で、目の前の少年に聞いた。
信頼できる人間であることは直感でわかる。

「どうして異世界の……しかも、赤の他人である俺を助けるんですか？」

トキは、無我という人物が本当に信頼できる人間であると確信を持つためのもう一押しを求めた。
世界を超えてまで現れた少年。
今日初めて会うのに嫌そうな表情一つ浮かべない少年。
無我　ユウ。
彼の回答は単純だった。

「俺にしかできないからだよ」

トキの中で針が音を立てた。
何かがはまり、同時に何かが外れる。
それが何なのかも分からないうち、トキは自分の意思を無我に伝えていた。

「お願いします」

無我は四の五の言わず、トキの両手を取って握った。
握られた手から無我の熱が伝わり、指先から透き通るような感覚が全身へと巡りだす。

「目を閉じていた方が良いよ。
何ヶ月も寝ているんだから、いきなり目を開けたら痛いだろうし」

無我の忠告を聞きながら、透けていく体を見回しながら、トキは先ほどまで一緒に居た少女のことを考えていた。
悪夢に遭遇する度にその場（ゆめ）から自分を遠ざけ、救ってくれた彼女は一体何者だったのか。名前も聞いていない、何故助けてくれるのかも聞いていない、聞きたいことは山ほどあった。

『気にしないで。
私はいつでもここにいるから』

「え？」

何の前触れもなく、再び少女の声がトキの頭に響く。
虚を突かれて声を上げたトキに虚を突かれ、無我が肩を上下させてクエスチョンマークを浮かべる。

『どんなに辛い現実とぶつかっても、私はずっと――』

少女の声が少しずつ変わっていく。

幼い声は、少しずつ年を重ねて重さを帯びていき、やがて聞き覚えのある声へと変わった。

「その声――！」

「どうした？

何かあったか？」

完全な透明になってゆく体と比例し、トキに伝わる少女の声は小さくなっていった。

白い世界を去ったトキの目に、次に映ったものは薄暗い白で染められた病室の壁だった。

第２９話―そこにいた彼女―（後書き）

「あ、起きた」

室内に居た十数人の顔が一斉にトキに向いた。

一斉に顔を向けられたトキは戸惑い――

戸惑うトキの横で小羽は軽く寝息を立てていた。

「え……えぇ、と、ただい……ま？」

戸惑うトキを見た１人がベッドの横に移動し……

なぜか蹴りが放たれ――ミドルキック――トキの顔面を直撃した。

第30話－ＣｌｅａｒＳｐａｃｅ／Ｓｔａｒｔｉｎｇ　２ｎｄ－（前書き）

“地獄を見ている時は、そのまま進み続けろ”
――ウィンストン・チャーチル

その言葉に対して、彼女は思う。

（私は地獄か天国にいるのか、地獄を装った天国、天国を装った地獄のどちらかにいるのでしょうか？）

今は亡き人よ、教えて欲しい。

ここは何処なのか。

天国か、それとも地獄か……

第30話－ＣｌｅａｒＳｐａｃｅ／Ｓｔａｒｔｉｎｇ　２ｎｄ－

今、夢の中に落ちて行く彼女は尋ねた。

答え無き質問。

それなのに、出会ってしまった言葉に答えを求める自分。

風間　小羽という人間は、生きていていると断言していいのだろうか？

あらゆる病を内に取り込み、自分自身を死に追い詰めている現実。

逃げ出せない力の呪縛。

それでも辛うじて繋がれている命。

選択肢を持たない者は生きているのか、死んでいるのか……

いままで幾度となくその答えが浮かび、浮かんではその都度消えていった。

答えが頭から消えてしまう理由を、彼女は考えたことが無い。

理不尽なミドルキックを食らったトキは、顔を抑えて男を見上げる。

ベッドの真横に背の高い金髪の男性が立って向いていた。

面識の無い初対面の人間。

それにも関わらず、流血を誘うほど強烈な蹴りを放った男。

「やっと起きたなこの野郎！何ヶ月待ったと思ってんだ！？
どんだけ殺るの我慢したか分かってんのか？
まっ、関係無いだろうけどな！
さぁ、とにかく退院祝いだ！　飲んで喰って踊りまくんぞテ――！」

男の後頭部に平手が叩き込まれる。
初対面にも関わらず怒鳴りまくる外国人。当然、呆然とするトキ。
祝ってくれているのか、喧嘩を売っているのか判断しにくい男から視線を外すと、トキは馴染みあるメンバーに顔を向ける。
そこで初めて自分が病院にいるということを自覚した。

見上げるトキに芹真が会釈し、藍は軽く笑みを浮かべていた。その隣でハンズが鼻を鳴らす。パイロンが芹真同様に軽く会釈。ディマは無言でトキを観察し、ボルトは間髪入れず、また、容赦なく抱きついた。

「あの……誰ですか？」

飛びつくボルトを躱わそうとするが間に合わない。
組み付いたボルトの腕を解こうともがくが、逆に泥沼化。抵抗するほどボルトの拘束は強まり、それを悟ったトキはボルトを無視して質問した。
対象はこの場にいくつかある見覚えの無い顔。今日初めて出会う

人々。
そんなトキの質問に答えるため――芹真やディマを押しのけ――1人の女性が元気よくトキの前に姿を現した。

「初めましてトキ君！
ボルトちゃんから聞いていないかな？
これから君の訓練相手を務めるからのが私達、第3特殊空師団：クリアスペースのアタッカー！　そういうことでよろしく～！
と、言っても私はクリアスペースのメンバーじゃないけど！」

爆発的的元気な長髪外国人。
初見の彼女に対するトキの第一印象がそれであった。爆発的無邪気さはボルトをも上回るのではないかという不安も同時に生まれた。
その流されそうな元気と共に放たれた言葉の意味を真剣に受け止めて考え、トキは部屋のそこかしこから送られる視線を逆に辿る。
そうして見知らぬ顔を一つずつ見回していく。

ミドルキックを放った金髪の若い男。
目が合った瞬間にウインクする赤髪の女性。
立派な髭を蓄えた褐色の肌の男性。
金髪のポニーテールで、立って寝ている白人女性。
壁際から無表情で窺う黒髪の男性。

軽い困惑に陥ったトキを見て、ボルトはトキから離れて紹介を始める。

「トキ、この人たちが訓練相手！」

窓側から順番に指差し、トキの目がそれを追う。
一度、ボルトに目を向けてから再び5人に目を戻す。

「で～、これが私の友達！」

次に、嬉々とした表情でボルトが指差したのは爆発的な笑みを振り撒いている長髪の女性。間髪入れずにボ指名された彼女が自ら名乗り始める。

「フィルナ・ナインで～す！」

「色世時……です」

差し出された手を握り返し、トキは他のメンバーに顔を向けた。

「何だよ？
名乗れってか？」

目が合った瞬間に不服をこぼす金髪男。
金髪男を背後から、しかも思い切り殴りつける赤髪の女性。
その傍らで髭の男性が時計と窓の外を確認し、壁際の男はトキを観察し続ける。

ポニーテールの女性は立ったまま寝息を立て続けていた。

「えぇと、窓際からカリヴァン、カーチス、インスタイル、ホムラ、クロードだったよね？」

「うん。当ったりぃ～！」

ボルトはナインに確認を兼ねて聞いた。

窓から外を覗いている髭の男性がカリヴァン。
壁際の男がカーチス。
立って寝ているのがインスタイル。
赤髪の女性がホムラ。
そして、金髪の男がクロード。

（5人……か）

「本当はあと3人いるんだけど、連れてこられなかったんだ」

「えっと、ジムと、シャなんとかと……ミナだっけ？」

必死に記憶検索をかけるボルトにナインが笑い、クロードが笑う。
そしてカリヴァンの動きが一瞬だけ止まったのを芹真とディマは見逃さなかった。

「ジムしか当ってねぇじゃん！」

大声で笑うクロードを押さえるホムラ。
それと同時に、藍の一言がトキとボルトの意表を突いた。

「シャティとミーナよ」
「よく覚えていたわね」

ボルトが思い出せなかった名前が鬼の口から出た。
その名前を聞いて芹真も思い出し、ボルトは納得。　クリアスペースの面々は各人個別の反応を見せ、ナインは覚えていた藍を誉め、トキはそんな藍に質問した。

「藍は、知っているのか？」

「少しはね。私はあなたより少しだけ長く事務所にいるのよ？
この人たちは前にも来たことがあって、その時は８人だった」

トキの目が再び５人――金髪、赤髪、ポニーテール、顎髭、黒髪の東洋人――これから訓練相手を務めてくれる面々を捉え、僅かに思考してから頭を下げた。

これからの訓練、よろしくお願いします、と。

そんなトキの傍ら、ベッドの空いた場所に赤髪の女性が腰を据え

てグローブを填めた手を差し出した。

「こっちこそ。よろしくな。
出来る限り手加減がするが、正直、普段からそんなことしないから出来るかどうか不安なんだよ。
間違って殺したらゴメンな」

「え……？」

固まるトキに笑顔が向けられる。

「おい、脅すなよホムラ」

「……なんて。
安心しろ。最初はカーチスとカリヴァンが面倒見てくれる」

背中に指摘を受けたホムラが肩をすくめて指を差す。
顎鬚の男性：カリヴァンと、壁際の男性：カーチス。
少し間を置いてから今度は金髪の男：クロードと、ポニーテールの女性：インスタイル。
それから赤髪の自分を指差し、

「インやクロード、それに私は人にモノを教えるのが苦手だからさ、お前の腕がある程度上がってからじゃなきゃ相手できないんだよ。
冗談抜きに間違って殺しかねない」

「そ……そうなんですか」

「だから、脅すなって」

軽く相槌を打つトキの目が、ブラインドの間から差し込む暗い光にひかれ、再び室内を見回して全員の服装に注目し――年中特攻服のハンズを除いて――冬服であることに気付く。

どれだけの時間が経っているのか。

思い返してみれば、ここにいる理由は何だ。

最後に覚えているものは――コントン――、一体何だ?

視線をホムラから外して芹真へと向けて聞く。

「芹真さん。

俺はどれだけ眠っていたんですか?」

「約半年だ」

トキの質問を予想していた芹真は即答で応えた。その回答に思わず月数を呟き、トキは視覚的に窓の外と内を遮る物に手を伸ばそうとした。

ブラインドの向こう――窓の外の世界はどうなっているのか。

桜色の雪が降ったことが昨日のように思え、トキは乾燥した空気や晴れ渡った夏の空を必死に連想した。

しかし、その一瞬後、ブラインドに手が届く前にトキの体がベッドから落ちる。

（何だ！？
足が、おかしい！）

下半身に起こった異変。
あまりにも突然すぎる異変。中途半端に自由の利かない体に初めて気づいたトキは、支えとなる物を必死に探した。
しかし、一瞬の出来事。人の意識を有する行動よりも自然落下の方が早い。
右手が虚空を切り、無情にも床が迫る。トキに余裕は残されていなかった。

「やっぱり足に問題有か～」

ベッドから落ちるトキを見たボルトの感想がそれで、そんな呑気なボルトの言葉に芹真やディマは頷き、藍とパイロンは焦った。
そんな中でナインは笑う。

「寝起きなのに凄い元気だね」

同時、床との激突に目を瞑ったトキの体に異変が起こる。

すぐには意識できない。　一瞬後の衝撃を覚悟したトキであったが、予想された衝撃が伝わらない。
数秒目をつむっていたトキだったが、衝突までの不可解な間隔と、衝撃はおろか微塵も伝わらない床の感触・接触に、トキは目を開いた。

「え？」

痛みが伝わるまでの、床に接触するまでの時間の長さ。
停止した光景。
ボルトたちの声。
時間（せかい）が止まったわけではないが、時間（トキ）は止まっていた。
直感で理解する。

（助けられた）

そして、改めて視認する。
ベッドから上半身だけ落ちた状態。　しかし、体は床上十数センチという所で完全にストップしている。
呆気に取られているうちにトキの体が持ち上がり、ベッドの上に戻る。

「まだ無茶しない方が良いね」

「やっぱり最初はカーチスからだな」
「鬼教官じゃついていけないだろうしね」
「ってことは、俺らまた当分ヒマ！？」

「誰が鬼だ」

顎鬚のカリヴァンに睨まれ、金と赤の男女が黙り込む。

「今のうちに言っておくけど、最初にどれだけ動けるのかテストさせてもらうわね。
それから近接戦闘とか射撃とか教えていくから～。
さて、今日はこの辺で帰りましょう。一応トキ君は病み上がりなんだし、騒げば迷惑だし、っていうか、もう大分迷惑かけてるし」

「特にクロードがな」

トキの体に自由が戻るのと同時、退室を宣言したナインが踵を返し、その後に5人が続くボルトはナインを中心としたメンバーの見送るため共に部屋を出た。

7人が退出すると、それまで黙り込んでいた面々が一斉に口を開き出し――

「何なんですか芹真さん！
あの怖い人たちは！？」

これがパイロン。続いて、

「まるで隙が無かった」

珍しく弱気に呟くハンズ。
そして、ディマはひとり納得して頷いていた。

「話に聞くと見るのでは大違いね。
特に壁際と金髪の男。
芹真。前に会ったことがあるのなら、彼らが何のＳＲかわかるわよね？」

芹真は肩を竦め、藍がため息をつき芹真の代わりに説明を始める。

「確かに彼らは特殊能力者ではあるけど、ＳＲじゃない」

「じゃあ、生身の人間か？」

「必ずしもそうとは言い切れない」

藍の答えにパイロンが疑問を浮かべる。

ＳＲでなく、しかし人間とも言い難い。

真横で寝ていた白人からＳＲという力の波動らしきものや、人外の匂いは一切漂ってこなかった。
普通の人間となんら変わらない彼ら。しかし、藍は違うと言う。是非とも疑問を晴らしたいハンズは説明を求めた。

「大きな事件で体の作りが私達の常識にある人間よりも格段に丈夫になっているの」

「肉体強化か」

「と、いうことになるらしいわね。
でも、厄介なのはそれぞれが持つ特別な力……私達が言うところのＳＲについて言うと、彼らはその力を持つ者のことを“コントローラー”と呼んでいる」

コントローラー。
トキとハンズは家庭用ゲーム機を連想し、ディマはテレビのチャンネル、パイロンは何故か漁船を連想した。

「さっきの赤い髪の人も？」

ハンズに続こうとトキが質問を投げる。その質問で我に返る３人。
藍は体の向きを変えて答える。

「三広（ミヒロ）ね。
名前はホムラ。金髪の男と窓の近くにいた東洋人とチームを組ん

でいる人よ」

「……へぇ。殺人鬼と殺し屋ねぇ」

ディマの読心術が藍の持つ情報を読み上げ、その両脇でパイロンとハンズが同じ場所に目を向けた。

藍の説明が続く。

金髪の男の名をクロード・ハーツ。

元の世界で数百人余りを殺めた殺人鬼。近接戦を得意とするが、銃撃も拳銃からロケットまで使いこなす。

壁に寄りかかっていた男はトニー・カーチス。

やり方は二流だが、任務の成功率９０％の殺し屋。遠近ともにこなし、どんな時でも冷静さを欠かない男。

顎鬚のアラブ人がカリヴァン。

本名不明。銃の知識に長け、独自の銃器開発を行っている元々テロリスト、元軍人。

寝ていた金髪ポニーテールの女性の名前はインスタイル・フィーラー。

仲間内では寝起きの最悪さで有名であり、戦闘に於いては『暴脚』と呼ばれる女傑。足癖の悪い完全独学主義者である。

「興味ありますね」

「よし、ちょっと挑んでくるか！」

好奇心に突き動かされる男2人。
ディマもその後に続いたが、

「……子守に行ってくるわ」

その表情は至極嫌そうな顔をしていた。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第３０話－

－ＣｌｅａｒＳｐａｃｅ／Ｓｔａｒｔｉｎｇ　２ｎｄ－

部屋に残された芹真と藍は揃ってトキの方に顔を向ける。
ベッドの上でトキは僅かに青ざめ、俯いて脱力していた。

「もしかしてビビッたか？」
「無理もないわ。
目覚めていきなりこれじゃあ……」

顔面を襲った蹴り。唐突な人物紹介。眠り続けていたという事実。
自由の利かない体。
困惑に至るだけの要素はいくらでもある。
やり切れない思いが沸くものが多々ある状況の中、あらゆる事が
唐突に、しかも連続し過ぎた。

「トキ。
ボルトが戻って来たら、まず足を治そう。
それまで何か聞きたいことがあったら聞いてくれ」

トキの顔が上がる。
しかし、その目は芹真に向いておらず、藍に向いていた。
聞きたいことは山ほどあったが、今一番に気になることは、これ
からの訓練相手について。　その詳細である。

「さっき、ベッドから落ちた俺を止めたのは誰？

壁のところにいた人か？　それとも赤い髪の人か？」

トキの予測について、藍の首は横に振られた。
止めたのは5人ではないと前置きし、僅かの間を置いてから答える。

「ナインよ」

ボルトのような明るさを振り撒いていた長髪の女性。
トキは質問を重ねる。

「あの人たちは、本当に異世界から来た人たちなのか？」

「それは断言できる」

言い切る芹真の言葉を飲み込み、トキは自分の体を見回した。
自分の体に異常が無いことを確認し、次いで芹真と藍の姿を改めて確認するが、いつかのように性別が反転していることはなかった。

（あれ？）

「もしかして、ボルトが言っていた事って本当なのか？」

逆に芹真がトキに聞く。
トキが眠っている間に聞かされた性別が反転した時の話し。
頷くトキに芹真はフリーズし、今度は藍は自分の体を見回した。

「本当だったのか……」

肩を落す芹真に向け、トキは第３の質問を放つ。

「今は、何月ですか？」

数分前からトキの体に温感が戻っていた。
それ故に、暖房の温かさと部屋中に漂う空気の乾燥具合、窓際から漂う肌寒さを初めて実感したのだ。
窓の外から差し込む光の暗さと、室内であるにもかかわらず冷たいと感じられる空気が、トキの脳裏に冬を連想させた。決定打となる、確信へと繋がる最大の理由はやはり服装であり――

その時、藍がブラインドを上げた。

「２月１０日よ」

トキは俄かに現実を疑った。

楼塔病院で起こっていることはすぐさま彼らに伝わった。

『愛院だけどさ、トキが目を覚ましたぞ！』

『本当か！？』

電話の向こうから自動車の発する騒音に負けじと叫ぶ愛院に、ハンズフリーにしたまま放置された家電をめがけ、数人が押しかけた。

その後、お見舞いという名目で１０名近くがトキの病室を訪れることになる。

「つまり、いつかはあの殺人鬼の人や殺し屋とも戦わなくちゃいけないと？」

「ああ。

彼らは能力者ではあるが、人間であることに変わりない。

俺や藍みたいに狼や鬼になれるわけじゃない」

「でも、彼らの戦闘能力は私達と同じかそれ以上だから注意が必要よ」

「同じって……嘘、だろ？」

ベッドの上で両足を伸ばしながら光に包まれた膝から下を見守り、トキは聞く。

藍と芹真はトキの質問に答え、時折ボルトも話に加わった。

「嘘じゃないわ。

3、4年前だけど私や芹真も戦ったんだから」

「いや、俺はやって――」

「それでね～、藍ちゃん3人まで勝ったんだけど、4人目で負けちゃったんだ～」

トキの両足を癒しつつ、ボルトが解説する。

前回の藍の戦績。

1人目のカリヴァンを寸止めで降伏させ、2人目は今回来ていないシャティという少女で、これも寸止めで勝利を収めた。

3人目に出てきたのは立ったまま寝ていた彼女、インスタイルであった。

人外としか思いようがない馬鹿げた脚力の前に苦戦しながらも、辛うじて当て身が成功し、勝利。

「4人目は？」

「三広　炎よ」

自ら語る藍は、その日のことを鮮明に思い出していた。

哭き鬼と赤髪の戦士。

２人の戦闘は壮絶を極めた。

圧倒的火力の哭き鬼に対し、光速に近い移動速度で撹乱・一撃離脱戦法を多用するホムラ。

しかも、お互いが遠距離・近距離用の攻撃手段を持っていた。

華創実誕幻とＳＭＧ＆クナイ型榴弾。　理壊双焔破界と両刃の大剣。

更に鉄壁に等しい防御手段まで両者は持っていたのだ。

勝負は長時間・広範囲に及び、死闘の末、藍はホムラに僅差で敗れた。

「生身の人間が藍ちゃんに勝ったんだ。

それだけでもすごいのに、芹真さんまで負かしちゃったんだよ～」

「芹真さん負けたのっ！？」

「……」

「生身の人だから、ということで３対１を申し込んだのよ。

それを受け入れたのはクロードとカーチスのペア。＋ホムラ」

芹真には高速移動があった。

ホムラ程度の速度なら、離されることはあろうとも視界から失うことはない。

そういった自信と若さ故の勝気があり、結果的にそれが敗因へと繋がった。

「言い訳のようだが、1人は触れないし、1人は見えないんだぜ？
そんな2人相手に3人目を相手にする余裕があるか。
しかも隙がない。
おそらく、あの3人なら一個中隊だって相手に出来るさ。協会のヒーローズも出来るだろう」

「ホントに言い訳だ～♪」

トキのベッドの横にイスを持ってきて座っていた芹真の額に青筋が浮かび、一瞬後には何かが切れる音がトキと藍の耳に届いた。

「藍、今晩の飯はボルトの分少なくしろよ」

ボルトにとっては衝撃的な台詞だった。
頬を膨らますボルトに、笑う藍。

藍にとっても、芹真にとっても彼らとの戦闘は有意義なものだった。
だから、是非ともトキにも戦ってもらいたい。

「もし、だ。
トキがこの3人組を倒せる程の実力つけたのなら、協会のSRの大半には勝てる。確実に」

聞きながらトキは自分の足が回復に向かっていることを実感して

いた。
指先に灯る感覚。熱。体温。

「えと……3人組って？」
「ホムラ、クロード、カーチスの3人だ。どこ聞いていた？
ちなみにこの3人は協会のSR数名を行方不明にしたことが――」
「現在も行方はわかっていない、って事になっているんだ～」

トキが固まる。
ため息が芹真から漏れ、藍の眉がつり上がる。笑顔のままボルトは説明を続け、

「一晩のうちにヒーローズ含めた7名が行方不明になっちゃって大騒ぎだったよね。
しかも誰の仕業かも分かっていないし～」
（それが厄介なんだよ、ボルト）
（本当に晩御飯を減らしたい……）

「え、じゃあ、芹真事務所イコール殺人もやっちゃってるんですか？」

3人の顔が一斉に向き、トキは戸惑った。
ボルトの顔から笑顔が消え、惚けるような表情が浮かび、

「え？　今更ぁ？」

当然、とばかりの口調に頬が引きつる。
目線をボルトから逸らしても、

「今の7人の話は俺達がやったわけじゃないからな。その辺誤解するなよ。
それに、この前トキだって黒羽商会の連中と戦っただろ」

「いや、そうじゃなくて……
なんか、こう、匿(かくま)っているみたいなのがなんか――」

「トキはそういうの嫌い？」

ボルトが顔を覗き込む。
芹真と藍はトキの態度に同情した。
正直、ボルトの連れてきたメンバーが問題を起こし、その後始末を任されているのだ。　自分たちの知らぬ所で問題を起こされ、それを隠し通すため必死に手を回し、隠蔽し続けてきた。

芹真は素直に事実を伝えるべきだと考えたが、ワルクスや藍がそれを止めた。

絶対に仕返しが来る、と。
相手が悪かったのだ。

「あんまり好きじゃないな。素直に申し出た方がいいんじゃないか

？」

「無理だよ」

即答するボルトを見て、藍はため息をついた。

トキの意見に賛成だが、ボルトの意見も間違いでないとわかっている故、何とも言いようがないのだ。

「だって、その人たちを殺り始めたのがクロードだし～

勝手に訓練相手、ってことで他の世界の人連れてきちゃっているんだし～

違法に違法を重ねた上に違法を犯しているんだから、申し出るなんて出来るわけないじゃん」

「……というわけなんだ、トキ。

諦めてくれ。俺は諦めてる」

そして芹真は、再びこちらの世界にやってきた殺人鬼が問題を起こさないことを全力で祈っていた。

ただでさえ大事な時期に余計な問題を抱えたくない。

無言で頷くトキの足を包む光が次第に明るさを失っていき、最終的に完全消明する。

「はい、終わり～」

ぺちぺち、掌で叩きながらボルトが告げた。
言われてすぐにトキは両足をベッドの上で動かしてみせ、次にベッドから足を下ろして床に着ける。
藍がすぐにでも支えられるように備え、自力で立とうとするトキを見守った。

トキが復活したことを悟り、ナインは歩きながら1人頷いた。
その背後で金髪が暴れ、赤髪と黒髪が必死にそれを押さえ、ポニーテールは呆れ、同じく顎鬚も呆れていた。そしてため息の連続である。

「殺らせろぉぉぉ！
暇だぁあ！
ヤリテぇェ！」
「いい加減にしろ！
さっき殺りかけてただろテメェ！」
「声がでかいぞクロード！
少しは抑えろ！」

露骨過ぎるクロードに振り向きながらナインは、

「ほい♪」

この騒音公害マシーンを沈黙させるべく、クロードを視界に捉えた。
手首を軽く返すと同時、左右から押さえられたクロードの首が――寸分の狂いもなく１００度――右に曲がる。　それも一瞬で。
ほどなくして静寂が訪れた。

「さぁ、とっとと帰って温まろぅ～」

気の抜けた調子で同意を求めるナイン。
頷く２人に、クロードを脇から支える２人。
しかし、わずか数秒の静寂を破ってクロードは目覚めた。

「――っと！
やる気発見！」

両脇を抑えつつ支える２人の腕からから抜け、クロードは背後に体を向けた。
ホムラとカーチスが再びクロードを抑えようとするが、寸での所で取り逃がしてしまう。
その原因らしき人物数名を背後に見つけ、ホムラたちの足が止まる。

（あの３人、さっき病室に居た……）

全員の視界に特攻服と中華服の男と、全身を黒で包んだ1人の女性が映った。

「何でココにいるんだ？」

「……まさか」

「俺たちと遊びたいらしいが、どうする？場所が悪いぞ。人が少ないとはいえ、街中だ。銃が使えない」

「剣もね」

「どこか良い場所ない？」

「ない」

闘志剥き出しの5人に即答するナイン。

「一銭の価値にもならないんだから、早く帰ろうよ～」

ナインの口調と態度から、全員が空腹とアルコール切れを悟った。その場に4人の輪が形成され、会議が始まる。

「カリヴァンとインスタイルはナインを連れて先に帰っててくれ。こっちはクロードを何とかして――」

「それならカリヴァンは必須だろ？」

「私もナインより、クロードの野郎を相手にしている方が楽でいい」

「……ってことで、イン。ナイン任せられるか？」
「嫌よ！
ホムラこそどうなの！？」
「え？　それは、何だ、ほら？
私はミーナほど、そう、ナインには気に入られていないからさ！」
『ここにいる４人全員そうだろ！』

話し合いの結果、ナインのお守りに選ばれたのは、

「改めてよろしく。フィルナ・ナインで～す！」

「ヴィラ・ホート・ディマよ」

多大な疑問を抱きつつ、影の魔女は光の魔女が連れてきた異界の友人のお守りという仕事を遂行した。テンションの高さがボルトを連想させ、似たもの同士気が合うということを思い改めた。
あらゆる疑問が頭を掠める最中も、対峙するメンバー間に間断なく約束が取り付けられていく。

「一般人は巻き込まないこと」

ちなみに、ここは住宅街の真ん中である。

「人気の無いところでやろうぜ」

それにも関わらず、ほぼ全員が大声で、

「バラしてもばれない様な所でな！」

レクリエーションを兼ねた勝負を宣言した。

『勝った奴の勝ち！』

ハンズとクロードの低脳極まりない台詞に、元来保護者役の２人は溜息をつき、遠ざかりながら見守った。

ナインとディマのような溜息こそつかないものの、明らかに乗り気でない者もいる。

そんな奇妙なメンバーを、誰よりも遠くから双眼鏡越しに見守りつつ、現場の誰よりも青年は大きく溜息を吐いた。そう、誰よりも……

ふと、その時になって気付いた事があった。

トキは今一度病室を見回し、探しているモノが見つからないことに疑問を抱き、芹真へと顔を向ける。

「芹真さん。さっきの人たち、何の仕事しているんですか？」

「今は無職だ」

「じゃあ、前は？
クリア何とかって一体……」

芹真の目が藍に向き、藍の目がボルトに向く。
トキもつられてボルトに視線を注ぐ。

「ナインちゃんのお仕事は未来予知で、他のみんなはクリアスペースのアタッカーだよ」

「アタッカー？」

トキの思考が停止するまで残り数秒、というところで藍が詳細を伝える。

「第３特殊空師団：クリアスペース。
それが彼らの仕事場――って言っていいのかしら？」

「全員終身刑なんだよ～」

「はい？」

「犯罪を処理するために集団化された元犯罪者たち。
彼らはその一部で、警察から軍人、はてはスパイ業務までこなす連中だ」
「それでね、交通整理とか警備員の代替もやるんだって！」

何がおかしいのかトキは理解できないが、職業人であることは分かった。

「つまり、警備から戦争まで出来るっていう……」
「うん！　できるできる！」
「そうらしいわね。特に彼らの場合、荒事が中心らしいわ」
「タンカーを制圧したり、研究所を爆破したり、戦争したり、核壊したり～」

トキの頭には十数分前からの情報が整理され、整頓されていった。
約半年の睡眠。　訓練相手。　クリアスペース。　能力者。
そこから、些細な疑問が湧き上がる。
窓の外の景色に目を向けながらトキは質問の準備を整えた。

（第3特殊空師団。クリアスペース。
戦争屋……いや、戦闘屋みたいなものか。
全員で8人。
ホムラ、クロード……イン何とかと、アラブ人、壁に寄りかかっていた人。
それで、今回来ていないのが3人）

唐突過ぎる事態ではあったが、トキの探している名前がその8人の中にないことを改めて確認し、窓の外からボルトへと顔の向きを変える。

「なぁ」

「ムガ？
彼は、おなか減ったから帰るって言ってたよ～」

夢の中で会い、おそらく最も謝礼を述べるべきだろう人物はすでにこの場を去っていた。
トキは肩を落し、僅かに息を漏らす。
あまり言葉を交わしたことがなくとも、現実の側に誘導してくれたのは彼だ。
次の機会があることを祈りつつ、自分の横たわっていたベッドに目線を送る。

「じゃあ、帰るか。トキ」

「いいんですか？」

「ああ。まだ眠いか？」
「いえ、何ていうか、勝手に出て行っていいんですかね？」

「足はもう治ったろ？」

「はい」
「撃たれた所も治してもらったし、別に問題ないだろ？」

言われて初めてトキは自分の体をまさぐる。
その様子を見て芹真は続けた。

「じゃあ、ココにいる理由はない」

「ここね～、協会が持っている病院なんだ～。
だから私達は一刻も早くここを出たいんだ～」

笑顔の内側に殺意のようなものが見え隠れしているボルトを無視しつつ、藍の方に顔を向けるとそこにも殺意を内に秘めた無表情があったことにトキは驚いた。

「なるべく借りを作りたくないからさ」

「そう……ですか」

軽い圧力に押されるのと同時――

彼らはやって来た。

廊下からざわめきを立てて、やがて室内へに押し寄せる。
その勢いは怒涛とは言えずとも波濤ほどの勢いは有していた。

「元気かぁ、トキ！」
「起きてるかぁ？」
「あなたたち、静かに――！」
「温かいな。やっぱ」
「……」
「こんばんわ」
「居た居た居た！」
「起きてるね」

お見舞い＋厄介＋騒がしい＋訪問理由が不明、等々の見慣れた顔の者達により構成された大所帯を目の当たりにし、今度こそトキの思考はフリーズした。

「ちょっと電話しに行くか」

トキと一緒にフリーズしたボルトの肩を叩き、芹真はボルトと一緒に病室を出た。　元々トキにＳＲの素質があったとはいえ、ＳＲ同士が争いあっている世界に引き込んだのは自分達である。その自覚があったからこそ、芹真は病室を去った。

トキが眠っている間に得た様々な情報から、四凶や武装派のＳＲたちが激動を始めるのはこの先、早くても半年から2年以内という予測が立っているのだ。ワルクスを通して協会の上層部と非公式な会合を開いた末に辿り着いた予測ではあるが、可能性は非常に大高かった。

全面戦争が始まれば、国境など関係ない。
あらゆる国、様々な場所、無差別な時間帯に戦闘が発生する。
仮に日本でそうした戦闘が発生した場合、芹真事務所は国外への移住を考えていた。藍とボルトはその考えに賛同しているが、トキの意見がまだ揃っていない。断るかもしれないし、受け入れるかもしれない。

だから、いつ友人達と別れることになるか分からない状況故、芹真はトキに普通の学生生活を満喫して欲しいと願っていた。今しか味わえないものの一つだ。

「って、何かもう立ってるし！」
「……大丈夫なの？」

トキに押しかける４人。
そんな４人を見守る３人。

この時、初めてトキは芹真が病室を去ったことに気付いた。

「だからあなたは来る必要なかったのよ？」

「委員長として声掛けに来たんだが、何か問題でも？」

「あら、票稼ぎかと思っていたわ」

場所をわきまえずに対立を始める委員長（表ＶＳ裏）。

もしここに芹真が居たのなら、是非とも止めてもらいたかった。
ボルトでもいい。

「それで、委員長2人はここに喧嘩しに来たの？」

口論を開始した2人を見て、藍が間に割って入った。
智明やコウボウが胸を撫で下ろし、我関せずと言わんばかりにエロティカがトキに絡み、藍は2大委員長の返答を待った。

弁解の語を口にする委員長と、そこから荒を探しては突く裏委員長と、そこを更に原点回帰や道徳的理由を以て粉砕する藍。時々外から間違った言を訂正する崎島。
厄介な2人＋藍が説教を続けている間にトキに離しかける面々。
トキが眠っている間に出された罰則レポート。　蓮雅先生引率による京都旅行。　学校の改築や留学生。
トキの家の管理や、トキの家の使用や、トキの家に勝手に住み込んでいることをありのまま話す岩井。体調を気にする崎島と智明。
いつから復学できるのか、ということを気にし続けているエロティカ。何はともあれとトキの肩を両側から叩くコウボウと友樹。無言でミネラルウォーターを差し出す灘仁美（なだひとみ）。他のベッドに寝ている人を見つけて黙り込む春蘭穂。

「とりあえず、今日は帰っても大丈夫みたいだし」

芹真が高城、奈倉を率いて戻った頃、トキは完全に冬服へと着替え、手作りのマフラーを装着して帰宅準備を完了していた。それか

らトキを中心に、芹真事務所やクラスメイトは病室、病院を後にして、それぞれの帰路についた。

藍とボルトは芹真事務所へ向かい、トキは友人に囲まれて自宅を目指す。トキを囲むクラスメイトたちは、トキが寝ている間に起こったことを次々と口にし、時には事細かに説明し、時には針小棒大に加筆修正し、時には捏造して事実を歪め、また時には根も葉もない噂に尾ひれをつけ加えて事態の悪化を謀りつつ伝えた。

夏休み最大のイベントとなったレンガ先生引率の京都旅行。
上級生同士の交換留学で訪れたイギリス人女子。
授業の進み具合。
実践術部の合同実践講座。
内容自由なレポート課題という罰則。
これからのテストに関する話。

他にも選挙の結果や為替株価の話から国内外の犯罪等の情報。
お得な買い物情報。
安い店の話。
新たに発売されたゲームソフト。
ゲームセンター：バーテックスに入った新たなアーケードゲーム機。
クラス内の対立構造の微妙なスチューデンツバランスの変化。
興味あることないこと。

それから、

「トキは特別なテストを受けなきゃダメみたいだぞ」

コウボウに言われてトキは何故と聞き返したが、答えはシンプル且つ簡単で情報によって破裂しそうな頭にもすんなりと入ってきた。
夏休み明けのテストを受けていないから。　以上。

思考回路が停止するトキの肩に手を乗せる友樹。
帰路の半分を過ぎた辺りから集団の移動速度が低下する。
残り半分の帰路を使って裏委員長と崎島、高城による簡略路上授業が開講されたのだ。
そんなこともあって、トキが帰宅を果たしたのは夜中の１２時を半ば過ぎてからだった。エロティカやコウボウが泊まると言い出し、それを委員長や裏委員長、崎島が阻止したお陰もあり、トキは独り静かに自室のベッドで天井を仰ぐまでに至った。

久々とは思えない我が家。　実感の湧かない空白。

冷静に観察してみると、家中のそこかしこに冬対策が施された跡があった。
電気カーペットに、ストーブ、コタツ。温かめに設定された空調。
ベットに入る前にトキは自分の部屋を探った。
物色した形跡アリ。
見覚えの無い物が増え、配置が少し変わっている。誰が物色したのか予想しながら探索を続ける。その結果、都合８ヶ所に異変が見られ――しかし、これといった害の無さから――トキは探索を中断した。

明日からはいつも通り学校に行くべきなのだろうか。

ベッドに入ってすぐに考えたことがそれだった。
約半年。
退学処分になっていないか不安があった。それだけ長い期間休ん

でいたのだ。クラスの皆とどれだけ学力差がついたのかわからない。

「あしたにでも中立派（みんな）に聞いてみよう……」

明日取るべき行動を考えつつ、トキは久しぶりに自分から眠りについた。

5時間というコントンの強制睡眠とは違う夢の中で、トキはいつか見た夢を見た。

高い高い場所で四凶と向かい合うトキ。

冷たい風に、オレンジの空。

「招待状を見せて貰おうか」

「コントン……」

冷たく強い風が吹き付ける。風の音に掻き消されまいと声のボリュームを上げる2人。

鳴り続ける警鐘。

次第に鮮明になってゆく景色。

「トウコツに渡されたはずだ。返してもらおう」

「持っていない」

口元だけが笑うコントン。黒ずむ背景。落ち着いた自分が信じられないトキ。
冗談をよせとコントンは言った。
どうしてか、トキにはその言葉が予測できていた。ここが夢の中というのが原因かもしれない。

（前にも、一度あった？）

改めて自分が置かれた状況を確認しようと周囲に目を配る。が、目に見える範囲で特徴的なのはオレンジ色の空、風の強さから上空であるということ、コントン、コントンの背後だけが黒いということだけ。
いつか見たものとほとんど同じだった。
僅かに違うものといえば、コントンの背後にある何か。

「これは“種の保存の為”なんだ」

四凶の保存。
そこまで言われたトキの頭にコントンの要求が浮かぶ。
同時に背後の黒いソレが一部の輪郭を顕わにした。

――黒い樹のような、プラスチックのような、あまり大きくない物。　それを探して持って来い。

背後の黒が特徴の一つと合致し、コントンの顔の横に僅かな窪みが見られた。
情報の合致。持って行くべき場所。
夢の背景を見たトキは、一体全体、コントンの背景にあるソレがどんなモノなのか見上げて確認をとろうとし――
夢は途切れた。

第３０話－ＣｌｅａｒＳｐａｃｅ／Ｓｔａｒｔｉｎｇ　２ｎｄ－（後書き）

翌朝、トキが目を覚ますのと藍がインターフォンを押すのはほぼ同時だった。
寝惚け眼のまま階段を降り、玄関の扉を開錠してから訪問者を確認し、急いで着替える。
部屋の中までついて来た藍は登校に関する事とこれからの予定を話していき、トキはできる限り急いで身支度を整えながらその話しに耳を傾けた。

本日の登校は不可。
早くても明日、またはそれ以降の登校になる。

「それで今日１日は、クリアスペースの人たちと訓練よ」

ＡＭ０６：０１
朝方に降った雪の上を２人は並んで歩き、芹真事務所を目指す。
遠方から響く車の音。弱々しく差す太陽光。吹き付ける冷風。
歩きながらトキは、自分の軽装に後悔した。

「今日は初日だから、手始めにナインが計測する」

トキが後悔する傍ら、藍はこれからの訓練についての説明を始める。

最初に行われるのが計測。
そこから弱点につながるものを見つけて強化計画をたてる。訓練が始まるのはそこからだ。

「どうやって計測するんだ？」

「すぐ終わるわ」

トキがその言葉を理解するのは、実際にその計測を体験してからだった。

第３１話 ― パンドラの復讐 ― （前書き）

「私は……ナイトメアを抜けたい」

非武装派の研究者：マティス・フォーランドは言った。

２度と蓋を開けるようなことはしたくない、と。

しかし、パンドラの器（じっけん）はすでに砕けて存在せず、Ｐａｎｄｏｒａ（さいや）ＳＲ（く）をこの世に散らしていた。

第３１話－パンドラの復讐－

明日の空は何色か。
青く晴れ渡った空なのか、灰の色に染まった曇天、或いは白の吹雪きなのだろうか。　予測は出来るが確定は出来ない。
それが人の限界であり自然の力である。

『はいもしもし、ただいまお茶漬け――』

受話器の向こうから気だるげな声が伝わる。
人気の無いビルの屋上で携帯電話を片手に１人の男が空を仰いで笑った。
暗い暗い雨雲の下。傘も差さず、雨に濡れることを厭(いと)わず、男は笑う。

「寝言は寝てから言えよトウコツ。
ククッ、マジックサーカス団が動いたぞ」

明日の空が何色なのか、誰も確信を持って言うことは出来ない。
それは世界の動きも同じだ。
電話の向こうの男の動揺が伝わる。
気だるげであった男の声に緊張感が現れ、僅かにトーンが下がる。

「行き先は日本だ。
おそらく……」

『芹真事務所かトキだろうな。
それで？』

「そこでだ。
直接俺が会いに行きたかったんだが、少々面倒臭いことになっている。
それは知っているな？」

知っている、と電話の向こうの男は呟いた。
雷光が黒雲を灰色に変える一瞬、電話を握る手に篭る力が増す。

『だから俺に行けって言うんだろ？
それは別に構わないが、コントン。お前はいま何処に――』

電話の相手が自分の頼みを受け入れたことを確認し、男は通話を切り上げて雨空を睨んだ。
相手に質問はさせない。
相手の意見を汲んではいけない。
少なくとも、今は下手に自分の場所を悟らせるわけにはいかなかった。　敵にも、味方にも……

（舟の位置は掴んだ。
後は、妖精組合の連中と、サーカスの奴らをどう排除するか、だ

な)

雨に打たれながら怒りに沸騰する頭を冷やし、コントンは歩きながら考え続けた。

長く考え、深く思い、居場所を悟られないように移動し続け、自分の存在と必要性、本能という言葉に縋(すが)らない生の目的を模索し続ける。

自分がここに居る理由。

あらゆるモノを失い、その結果得たモノは何か。そもそもあったのだろうか。

なぜ協会長は自分を生かしておいているのか。

自分が世界に要る理由とは何だ。

そんな世界の中で曖昧になってゆく自分という輪郭を持っていた像(それ)。

“これは自分なのか?”

自力で生きているのか。それとも見えない誰かに生かされているのか。

疑問の中で自我の境界は次第に輪郭を失ってゆき、生まれてから積み上げてきた自分という像の崩壊がいつしか始まり、気付けばいまのいままで続き、尚もとまることなく続く。

自分の中、自分にしか見えないその崩壊を止める術を他人は知らない。

知るはずなど、無いのだ。

“それが、君の運命だ。多くの人を殺める”

「俺は、どこに向かう？
どう抗い続けたら、突きつけられた呪縛から解放されるのだ？」

あの日、自分が自分でなくなることを予感しながらも彼は運命に従った。
運命に巻き込まれて飲み込まれるくらいなら、自分から飲み込む。
飲み込もうと抗い続けた結果、彼は今日という時間まで至り、彼の挑戦／目論見は悉く打ち砕かれてきた。
敗戦に次ぐ敗戦が彼を更なる悪循環に落し入れ、いつしか運命の歯車の中に取り込まれていたのだ。

誰も殺さずに生きる。
彼の人生はそれに失敗し、悪循環を深化させ続けていく。

（もし、生まれ変わったのなら……）

それは誰もが一度は考える夢想。
自分の過去を振り返りながら目を瞑り、雷鳴と降り続ける雨を知覚し、静かに吹く風に耳を傾けた。

暗き空の下を突き抜けるために必要な、光り標。
形成されるべき夢を砕かれ、闇の暗示を受けたあの時。

“運命だ”

「誰がそんなもの……」

炎が勢いを増す。
思い返して怒りが増し、体の熱を上げる。

そして、野望は滾（たぎ）る。

「フッ。まずは妖精どもを排除しないとな」

雨と風が強さを増す。
その中をコントンという名前の男は歩き続け――

翌日、風邪をこじらせ、４０度もの高熱にうなされた。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第３１話－

トキの訓練が始まってから2ヶ月と数日。

それはトキがこれまでに体験したことないほど充実した2ヶ月となった。

日常生活、訓練、進級試験対策の繰り返しとその中で起こる変わったイベントの数々。

必ずしも楽しかったわけではないが、楽しいことに加えて辛いことや新鮮なこと、恐ろしいことなど、いままで妄想の世界でしかなかったことを現実に体験した。パターン化された日常よりも、印象が薄いわけがない。

ためになる訓練。

死に直面した訓練。

欠点を思い知らされた訓練、勉強。

教わるだけではなく、トキ自身も持てる知識を絞って訓練相手の人々を相手にした。

料理や部屋の片付け方。

ゲームの攻略法からお勧めの映画。

こちらの世界にしかない食べ物や飲み物についての説明。

そういった生活の中で改めて、人と人は支え合って生き、栄え、発達していくものだと実感した。

「……」
「……」

毎日のように繰り返される日常。
しかし、毎日少しずつ違う味を持つ日常。

白州唯高校　1階職員室

本日の曜日は青い字で書かれた『土』の日。
週休6日制に戻った現代とはいえ、午後ともなれば校内に残っている生徒の数はまばらで、多くても普段の半分程度であった。
補習かまたは部活動で残っている生徒たちの声が時折校舎に響いては、静まり返る。
そんな普段よりも静けさを増した学校の職員室で、1人の教師と生徒が長い沈黙の中で見つめ合っていた。進級テストの結果発表である。向かい合うトキと、クラス担任の登竜寺蓮雅先生の姿を中立派＋αの面々が廊下から覗き、見守っていた。

「進級試験は、合格――」

『良しっ！』

廊下で聞き耳を立てていた男子生徒2人が手を叩き合わせる。
それをスズメバチこと崎島恵理が止め、覗き見グループは再び職員室の中へと、静かに視線を注いだ。

「――したからといって、気を抜かないように。
では改めて、今年も私があなたの担任です。よろしく」

頭を下げようとするトキの前に手が差し出され、トキはその手を握った。
何度目かはわからないが、廊下からは聞き慣れた声で奏でられる喜楽の声が聞こえてくる。十数分前から続くその騒ぎを見かね、堪忍袋の緒が切れた教頭先生が立ち上がる。

「ところでトキ。
芹真先輩に頼んで欲しいことがあるの。聞いてくれない？」

「え？」

囁くような小声で言う担任に不審の感を覚えつつも、反射的にトキは頷くいていた。
話を聞いている途中で2人が師弟のような関係にあることを思い出し、納得する。

「隣の県で起こっている事件は知っているわね？
それについて調べて欲しいのよ」

「え？　事件……ですか？」

「隣の県。
そう言えば分かると思うわ。お願い」

頷くトキだがそれが一体全体どんな事件なのか分からない。
情報皆無で、しかも初耳である。

「え？　トキは知らなかったの？」

真昼の帰路。
中立派＋αに囲まれたトキはコウボウの質問に頷く。

「まぁ、最近トキは勉強で缶詰だったし」
「多少世間に疎くても仕方ないな」

「……仕方ないのか？」

同情する智明（ちあき）と岩井。
容赦ない友樹。

3人を眼中から外し、崎島が説明を始める。隣接する県で起こっている出来事。
それが、

「連続殺人よ」

テレビで報道された内容をありのまま伝える。

最初の犠牲者は在日アメリカ人の軍隊崩れで、推定死亡時刻は３月２２日の深夜ＡＭ０１：４０～０４：３０。

遺体として発見された場所は街中の路地裏だった。男の遺体は顔と胴体、右足の大半を失い、天を仰いだ状態で発見されたという。

「腹のところがバッサリ消えていたって話だぜ？
上・下半身が見事にサヨナラだとさ。
しかも、顔なんて顎んトコから頭上にかけてパーツが紛失ときた」

「何度聞いても気味が悪いな」
「ヤクザ絡みの殺人の可能性が――」
「うげぇ、グロ……」

警察は犯人像の輪郭、使用された凶器の特定を急いだが、現場からは犯人の髪の毛すら発見されなかった。
目撃者さえいない。
犯人特定にいたる決定的なモノが何一つ残されていなかった。

「これは裏委員長から聞いた話だけどさ、どうやら刃物じゃないらしいんだ」

同じような傷痕を持つ死体が発見されたのは、第1と思われる犯行からわずか6日後のことだった。
死体の有様は前回と同じく、死因は体の部分的消失である。
2人目の犠牲者は同県の県民議員だった。通りすがりのタクシーによる通報を受けて、日にちが変わろうという時間に自宅で死亡が確認された。
1人目の犠牲者と明らかに違うのが、致命傷にいたる傷口、その痕である。

「2人目の犠牲者は下半身が完全に紛失していたそうな」
「そうそう。
しかも、その議員の場合、自宅の一部までもが消えていたんだって」

「それから第3の犠牲者が出たのは、今から1週間前の4月10日――」

前回の犯行から12日後。
次の犯行現場はゴルフ場だった。
乱開発によって開拓されたゴルフ場の一画で、朝方に死体となった男と護衛、震えるキャディが発見された。
死因はやはり部位消失によるショック死。または失血死で、暗闇に紛れて護衛もろとも男性を殺害。
先に起きた2件との違いは、3度目の現場で初めて目撃者が現れたことのみ。

「つっても、その目撃情報が全く使えないらしくてさ」
「決定的特徴をつかめたわけでもないらしいわ。
それでも、犯人が男女かということと大まかな年齢が分かったそうよ」
「あれ、もう分かったって言ったっけ？」
「新聞読め」

犯人の性別は女性であること。
これはキャディが物陰に見た姿からの浮かんできたであった。
僅かな光に照らし出されたその人物の服装がスカートであったこと。

「女性か……」
「それで、年齢は１０代～２０代前半らしい」
「問題は、動機だな」
「殺された奴らには一切共通点が無いみたいだしな」

友樹からため息が漏れる。

「その事件に関して裏委員長はおっかない顔してたし……」
「類家ウィルスなんか妙に興奮していやがったしよ」
「他人事と決め込んでいるんだろ」

「……愚かしい」
「高城先輩なんて、珍しくナーバスになっていたぜ？」
「へぇ」

殺人事件は少なからずクラスにまで影響を及ぼしていた。

「奈倉さんも様子が変だったわね」
「普段からツッパっているが、こういう話が苦手なんじゃないか？」
「ビビってたしな」
「そう！
それで最近やたらヤニ臭いわけよ！　マジで迷惑なんだよね、あの人！」
「お前、タバコ苦手か？」
「おう。苦手であって嫌いである。
消えて無くなれと思っているが、何か？」
「愛煙家に謝れ」

「きっと暴力団絡みだぜ？」
「ヤクザさんか？　そうなると委員長も怪しいな」
「私は快楽殺人だと思うけど……」
「どっちにしろ、あんまり関わりたくないな」

少しずつ逸れていく話。
それに拍車をかけたのがエロティカこと、村崎翼（むらさきつばさ）だった。

「ところでトキ、情報料ということで何か奢ってくれないか？」

第1から第3回目までの犯行に共通するのは、体の部位消失が死因であること。
犯人を特定するには情報不足で、しかも被害者に共通性がない。

「南屋のコロッケでいいからよ～」
「あ、俺も食いたいな」

一貫して凶器が不明である。
それがもっともこの事件を深遠足らしめる要因であった。
快楽殺人の可能性があがり、現場付近や街一帯では夜間警備が厳重化。
その波は白州唯にまで影響していた。

「そうだな。たまには奢ってくれよ」
「テスト勉強も手伝ったろ？」

連続した殺人。
凶器不明の、動機不明。
犠牲者の共通性不特定に、浮かび上がってこない犯人像。

「わかった。コロッケでいいんだな？」

しかし、ここにいる学生の大半が猟奇殺人事件に深い関心を持っているわけではなかった。

「魚肉コロッケ頼んでもいいか！？」
「俺達もいいか？　トキ」
「もちろんメンチコロッケだろ」
「ミソカツ！ミソカツ！」
「ここは普通、山菜コロッケでしょ」
「……じゃがいも」

真昼の帰路。
他の生徒達より少し遅い帰宅。
空いた小腹を満たそうと中立派＋αによる寄り道が決定し――

「魚肉売り切れ。
メンチ売り切れ。
ミソカツ売り切れ。
山菜売り切れ。
カボチャもミートも全部売り切れだよ。　タイミングが悪かったな、学生達よ」

『……』

出鼻は挫かれた。

目の前の現実に嘆く友樹とコウボウ。

肩を落す、または竦める岩井と智明。
灰と化すエロティカ。
無言のまま立ち尽くすトキと崎島。
何かを見つけたらしく、メンバーから離れる藍。

「売り切れって、まだお昼をちょいと過ぎただけっすよね？」

「ああ。
しかし、申し訳ないがコロッケ類が完売ってことは事実だし……」

嘆きが深化する。
財布の中の小銭をポケットに移していた友樹、コウボウ、そしてエロティカ。

「買い占めていった奴はどこのどいつですか！？」

激情顕わに友樹が南屋コロッケのおばちゃんに尋ねる。
すると、店主であるおじちゃんの指が自販機の前にたむろする３人の外国人に向けられた。

日に焼けた黒い肌。
全身を黒で統一した服装と、所々に見られる戦闘用に鍛えられた丈夫な体躯。

「あの人たちが買い占めていったよ」

「コロッケ全部？」

「仕事あがりだとか……」

「コロッケ全部？」

血眼で迫る友樹の迫力におじちゃんが一歩後退。

友樹を羽交い絞めにしながらコウボウが笑顔で謝罪し、崎島が３人の方へ目を向けながら唸り始める。

（あの３人って、アヌビスじゃん……）

思ってもいない遭遇にトキは驚き、心の底で平穏を願った。気性の荒いハルバートアヌビスと、バッファローと呼ばれる先走りタイガーヘッドの友樹がぶつかり合わないように、と。

「８４、５５、８５といったところか」

遠巻きに３人の内の一人、ジャベリンアヌビスのスリーサイズを服の上から大まかに測る翼（いつの間にかエロティカモードに切り替わっていた）。エロティカの呟きが聞こえたのか、遠目から見てもわかるほどジャベリンは赤みを増していく。頬を引き攣らせ、目に殺気の炎を宿していた。

「１個くらい譲ってもらえないかなぁ？」

「外人だぞ？
学校で習っている英語じゃ通用しないと思うぜ」

「てか、あの人たち英語が通じるのか？」
「アメリカ人には見えないな」
「イギリス人にもね」

どうしてもコロッケを口にしたいらしい智明と、半ば諦めモードの岩井。
そんなトキや友樹、智明らに気付いた眼鏡のアヌビスが慎重にトキら、集団を伺ってから歩み寄った。

「どうかしましたか？」

何となく、トキの口から出た言葉がそれだった。
その言葉にアックスは笑みを浮かべて口を開くが、

「それはこっちの台詞だっつぅの」

言葉の発声はアックスよりも僅かハルバートが早かった。

ハルバートの背後ではジャベリンが1人の人物に対して色々な意味で熱い視線を注ぎ――どちらかというと睨み――それに応えるよう、その人物は視線を送り返していた。

「あ～、コロッケ買おうとしたんだけど、全部売り切れたって聞いたから」

「悪いな。俺達は仕事明けでな。
明けっつっても、また2時間後に仕事なんだ」

ハルバートがそこまで話して静まる。
入れ替わってアックスが口を開く。
アックス自身は１００近いコロッケを食べるよりも軽食屋に足を運んで優雅に、静かに休息を取ることを望んでいた。
ファミリーレストラン、回転寿司、ラーメン屋、カレーハウス…etc。
特に日本の麺類に興味があったアックスとしては、是非とも貴重な休憩時間を利用してラーメン屋という分類の店に足を運んでみたいところだった。が、ハルバートがそれを断固拒否。
結果、街角で販売している手ごろな値段のコロッケに至ったのだ。

「正直、１００個もコロッケを買ったのはハルバートだし？
欲しかったら譲るよ。むしろ譲るよ。本心言うなら、容赦無く減らしてくれないかい？
邪魔で邪魔で、ホントに邪魔で困っているんだよ」

「あ、じゃあ、友達の分も含めて貰っていいですか？」

すかさず阻止に入るハルバート――

「俺が黙って見過ご――！」

――だったが、拒絶姿勢を見せたハルバートの鼻先を何かが掠めた。

誰の動体視力でも捉えることが出来ないくらいのハイスピードで通過した何か。

何が掠めていったのか視認はできなかったが、それは的確にハルバートを黙らせることに成功していた。

「好きなのを持っていってくれ」

「おい、テメ――！」

今度は耳を掠り、その高速摩擦から生み出される熱に耳を押さえるハルバート。

足元のダンボールに詰め込まれたコロッケに目を落とすトキ。

そんなトキの行動に友樹や智明、コウボウはコロッケの食感を期待した。

「じゃあ、選んでもいいですか？」

「ああ。ゆっくり選んでくれ。

邪魔はさせないから」

上機嫌なアックス。
不機嫌なハルバート。
殺意らしきオーラを纏ったジャベリン。

軽く驚きながらコロッケを選ぶコウボウ。
動揺しながらコロッケに噛り付く友樹。
2人だけの世界に突入する岩井と智明が、そのまま2人の世界モードのまま周りの状況を省みず、帰路を行った。
無言のままコロッケを手に取り、アヌビスに頭を下げる崎島。
アヌビスと目を合わせたまま微動だにしないエロティカ。

動かないエロティカの分のコロッケを手に取り、トキはアックスに礼を述べる。

「それじゃあ、遅くならないうちに帰るんだぞ、学生達」

笑顔を振り撒き、アックスは踵を返す。
そんな彼らの背中に、

「偉そうに指図するな……何様のつもりだ?」

年上嫌悪癖を持つコウボウが反抗の言葉を吐き捨てる。
アックスは肩を竦めて見せ、ジャベリンの肩に手を置く。

「俺達はこれでもケーサツだよ。クソガキが」

反抗的態度のコウボウにハルバートが答える。

「物騒なのが出回っているんだ。
知らないわけじゃないはずだぜ？　連続、猟奇、殺人事件。ん？」

「ふん……」

発言を抑えてコロッケに噛り付くコウボウ。

「一般人の犠牲者なんて見たくないんだよ。
だから、夜遅くの外出は控えろ。
出かけるにしても多人数で行動しろ」

その言葉を最後に3人は完全にその場を去った。
トキは掛けられた言葉の意味を考えながらコロッケをひとかじり、咀嚼する。

「警察だったんだ……あの人たち」

つぶやく友樹の方を振り返ると、友樹の後方でコウボウが背を向

けて歩き始めていた。
不機嫌が最高潮に達したことが原因で独り走りを始めたコウボウだが、たった今忠告を受けたばかりである。
話題の猟奇殺人の動機が不明な以上、単独行動は危険だ。

「昼間だからといって、犯行が起きないわけじゃないのに」

崎島の呟きに不安を覚えるトキと友樹、そしてエロティカ。
遠ざかっていくコウボウの背中を見て、トキは一歩足を踏み出した。
追いかけて行けば間に合う。
トキと同じことを考え、しかし、実行力が違う友樹は、誰よりも早くコウボウを追いかけた。

「じゃあ、またな！」

「は？」

別れの挨拶ということで友樹は走りながらトキたちに手を振った。
早足で去っていくコウボウに追いつき、肩に手を回して歩いて行く。遠ざかる2人を見送りながら崎島が納得する。

「私もあの2人と一緒に帰ろうかしら。
それじゃあまた。来週」

別れの言葉を告げる崎島。
岩井と智明の姿はすでに視界になく、友樹とコウボウも角を曲がってその姿は見えない。ほどなくして崎島の後姿も角の向こうへと消える。

静寂。真昼の陽光。春の香り運ぶ風。
残されたトキとコロッケに噛り付くエロティカは無言で歩き始め、住宅街へ向けて進んでいた。

……はずの足はいつしか、商店街へと向かっていて、気付けばトキはエロティカに肉まんを奢っていた。

「あ、そうだ。翼。
少し手伝って欲しいことがあるんだけど」

「トキの方から頼みごととは珍しいな。
して、手伝って欲しいこととは？」

ピザまんを飲み込んだエロティカが耳を傾ける。
歩きながらトキは僅かに悩んでいたのだが、手伝い程度なら心配はないと判断し切り出したのだ。

「ちょっと、俺の家で探し物を手伝ってもらいたいんだ」

「探し物か……ではさっそくトキの家に行こうではないか！」

何か邪なものを秘めた笑みを浮かべるエロティカ。

「と、やはりその前に、前払いということでカロ■ーメイト奢ってもらえないかな？」

「え？」

「今すぐじゃなくてもいいさ。
今週分のメシということで……」

間をおいてから頷くトキ。
廃工場に住んでいる村崎翼という人間の食生活を知っているトキは、頭に自宅の冷蔵庫の中身を想起する。　安定した食事を摂っていないのがエロティカの日常である。　日々の余裕を全てバイトに注ぎ込み、辛うじて食い繋いでいた。
他人に頼ってくることもあるが、そういう事例は数えるほどしかない。
奢っても良かったが、携帯食料の他にも手作り料理の方を最優先で食べさせようと考えていた。

「わかったよ。
手伝ってくれたら食い物の詰め合わせをやる。保存食も込みで。
それじゃダメか？」
「いやいや！そこまで言われては断れないさ」

上機嫌な笑みを浮かべる翼。
インスタントやファーストフードの味に飽きが来ていたのだろう。

「ていうか、ほとんど誘導じゃなかったか？」
「かも知れないな。
ところで、探し物とはどういった物なのだ？」

改めて商店街から住宅街へ。
移動の最中、トキはコントンに言われた物の大まかな特徴を話し、必ずしも家にあるとは限らないという旨を伝えた。

トキ自身もどこにあるのか知らない。

「黒い金属のような塊で、木片のように軽く且つ、小さい物か……」

板チョコを丁寧に分割して口に運ぶエロティカの脳裏をこけしが横切った。

「つい最近発売されたバック用のバイ――」

「いかがわしい物じゃないからな。
ていうか、真昼間から何度もエロモードに入らないでくれ。
前に自分であんまりよくないって言ってたじゃん……」

角を曲がり、信号で足を止める。

「ところで話を戻すけど、翼は不安じゃないのか？」

「不安とな？」

「また廃工場に戻ったんだろ？
さっき皆で話してた猟奇殺人のこととかさ……」

心配するトキに対して節介無用と笑みを浮かべる翼。
彼にとって、近隣の県で起こっている殺人事件よりも明日の食料の方がはるかに深刻な問題であった。
それにまだ春先とは言え、お日様の出ない日は気温も低い。冬に比べればだいぶマシだが、それでも骨身に染みる。

信号を通過し、角を曲がって直進する。

「トキは私の愚かさを知っているだろう。
夢を果たすまでは死なん」

「それはわかっている。
けどやっぱりさ、現実的に考えて死んだら元の子もない」

トキの心配に自分の夢と信念と野望を改めて言い聞かせるエロティカ。
住宅地に入り、角を曲がる。

半ば現実逃避気味な翼。

そんな彼の体が僅かに仰け反ったのは、角を曲がった瞬間だった。
伝わる僅かな衝撃と、小さく短い悲鳴。
コンクリートの上に転がる小さな篭、中からこぼれ落ちる花。

2人の足が止まり、目は衝突して倒れた人影へと向く。
自分達よりも身長が低く、全身をゴシックロリータ服で包んだ子供がそこにいたことを認めた。

「だ、大丈夫か？」

ぶつかった翼が声をかけて安否を確認し、トキが慌てて手を差し伸べるようとする。
上体を起こそうとする少女の姿を見た2人は、その子が隻腕であることに気付いた。

その場に座り込んで2人を見上げる少女は、トキの手を見て警戒し始める。

「失礼した。
こちらの前方不注意だった」

謝罪する翼の目が地面に落ちた花々に向く。

「これは……この霞草は君のだな。配達の最中か何かかな？
いや、どちらにしろ失敬。本当にすまなかった」

警戒するばかりの少女を見て手を引っ込めるトキ。
輝くブロンドの髪の奥に見え隠れする黒い双眸に、自分がどんな風に映っているのか考えながら次にかける言葉を捜した。
どうすれば警戒を解いてくれるのか。

連続殺人が近隣の県で起こっている。
そんな緊迫した状態の中、見知らぬ人間との遭遇は場合によって恐怖に繋がりかねない。

トキ自身の経験が言い聞かせる。
怯えられても仕方が無い。
警戒するのも当然だ、と。

1人で霞草を拾い始める翼。
そんな翼を凝視する少女。

「仕事中だったのかな？
いや、それだったら尚のこと申し訳ない。とにかく謝らせてくれ」

電柱に背を預けて右手を口元に運ぶ少女。
トキも翼に倣い、落ちた霞草を拾い集めて篭の中に戻す。

「元通りかどうかわからないけど、一応戻しておいたから」

電柱に背を預け、地面に座り込んだままの少女に翼が手を伸ばして立たせようとする。
僅かしてから気付く。爪を噛む音が少しずつ大きくなり、少女の指には紅い液体が滲み滴り始めていたことに。

「翼！
その子の指！」

「むっ！？」

指摘された翼は手を伸ばし、無理矢理少女の腕を掴んで引いた。
引き離した右手の親指の爪は剥がれ、皮膚を破り、そこから肉を覗かせて流血が招いている。
明らかな深爪。
不自然なまでの警戒。
何に怯えているのかトキには全く理解できない。
翼にもその子が流血するまで爪を噛み、不安がり、警戒する理由が理解できなかった。が、

「“少年”……言葉はわかるかね？」

それでも何とか不安を取り除こうと笑顔を見せ、話しかける。
完全に対応に困っていたトキは静かに2人のやり取りを見守った。

「悪気はなかった。
許してくれ。怒る気だって全くない」

「……」

震えるその子に翼は頭を下げた。
言葉が伝わらないなら動作で。
伝わるまでとは言わないが、誤解が解けるなら土下座もするし、
諦める覚悟も一応あった。

「こちらこそ……すいません」

予想もしていなかった事態が発覚する。
風貌から外人だと分かるその子の使った言語は日本語で、しかし、
それ以上に声のトーンが女性のものとは思えない高さであったことに固まる。
初めて口を開くその子が、少女でなく少年であると知ったトキは
軽く困惑し、人が見かけに依らないものだと改めて思い知った。
翼は頭を上げて、掴んだ少年の腕を引く。少年を立たせると花の
入った篭を渡し、意味もなく笑顔を送る。
隻腕の少年を見回した翼はトキに耳打ち、携帯食料を要求した。

「ふむ。
私は村崎翼と言う者だが、もし風呂に入りたかったら……あっち。
あの方角に古い廃工場があるのだが、そこに来たまえ。私の部屋だ。

ただで水浴びが出来るぞ。
無理に来いというわけではない。ただ、気が向いたらどうぞ、という事さ」

2人の会話からトキが推測したことは、女装した目の前の少年も家無き子である可能性が高いということ。
トキは村崎翼という人間の持つ、人の現状を見抜く力を大いに認めていた。
水浴び＝翼にとっての入浴。
それを他人に勧めるということが自然とその可能性を導き出していた。

住宅街の遥か向こうに見える緑の山々の麓を指差した翼に、感謝の言葉を述べて去る少年。

「よく少年って分かったな。
女の子だと思ってた」

再び歩き出した翼を追うトキ。
その時零れた言葉に翼は口元を不敵に歪めて見せた。
同じ家無き者、不安定な生活を続けている者にしかない共通点があの子供にあったと翼は言う。
少年の性別を見抜いたのは腕を掴んだ時だ。

「性別を見抜くことなど、私にとって朝飯前よ」

「朝飯が食えるかどうかがまず問題だけどな」

怯む翼と放った言葉によるダメージに気付かないトキ。
少し経ってから、覆しようのない現実を突きつけたことを自覚し、トキは翼が黙り込んだ理由に辿り着いた。
『旧知の仲にも礼』と崎島が言っていたことを思い出しながら、どんな言葉で謝ろうか考えるものの、いざ実行に移そうとなれば中々切り出すことが出来ない。

静寂の時間が続く。
トキが思考のぬかるみに嵌って数分。沈黙は、翼が先に口を開いて破った。

「なぁ、トキ。
世界はどうしてこうも苦しいのか考えたことはないか？」

「……苦しい？」

返す言葉に頷く翼。

「いま世界中で不法入国者やホームレスが爆発的に人口を増やしていると今朝のニュースで聞いたのだが、一体何が原因なのか考えたことはないか？
何が原因で安心して暮らせる場所を得ることが出来ないのか」

トキは静かに、口を開かず翼の放った言葉について考え始める。
なぜ路頭に迷う人々が現れるのか。

「金の所為、かな？」

「それもあるだろうな。
さっきの子もそうだし……あそこにいる外人たちもそうだろう。
確信は出来ないが、あの集団も安住できる場所を持たない」

滅多に通らない路地の向こう側。
警官2人と身振り手振り、激しく口論している外人数名の姿が目に飛び込んだ。
上下を白いジャージで包んだ男2人、女3人。

「不法入国が特に問題視されているいま、この世界は狂っていると思えないか？」

「思えなくはないな」

人口増加に伴う様々な問題。
治安から食糧、エネルギーに至るまで、多くの問題を抱えた人類はあらゆる危険を迎えていた。

翼のように家を持たない者は食料・治安に関して多大な不自由を感じ、ついさっきぶつかった子供のような外人のホームレスは自由な外出さえ気が気でない。不法入国者の件で各国が騒いでいるこの

時世、身分証明は過去最大と言えるほどの厳しさで実現されている。

そんなホームレスたちに逃げる場所などあるのだろうか。

どの国に逃げても現実がその人々を追い詰める。

逃げることが出来ない。それが現実だった。

「なぁ、翼。

やっぱり俺ん家に住んだ方がいいんじゃないか？

その方が――」

「断る」

ダメもとの質問に、翼は当然の如くダメを押した。

「私は、そんな現実に打ち勝ってみたいと思い続けて今日まで生きてきた。

時には弱みを見せてトキに頼ったりもするが、人間一生のうちに一度か二度は弱気になるものだ」

「まぁ、確かにそうだが……

でもやっぱ、さっきの連続殺人の話みたいにさ。わかるだろ？」

終わってしまったモノは2度と始まらない。

トキは根本に帰った。それが命だと。

人間である条件であり、自然の下に発生した人間にも当然備わった循環機能のひとつ。

どんな人間だろうとその命が終わってしまえば次は無い。たった一度の人生は自然にも終わるし、人の手でも終わらすことは出来る。だからトキは心配して言うのだが、翼はそれを聞かない。

「もしだ。
私が猟奇殺人鬼に殺されたとしよう。
誰かが私を覚えておいてくれるなら、例え自己満足と言われようが、私はそれでいい。
そこで終わり、それまでを誰かが覚えていてくれる。
それが私の現実だったというまでの話さ」

「随分諦めがいいんだな」

「それはお互いだろう」

言われて自分も諦めがつきやすいことを自覚した。

いざ殺人鬼に遭遇した場合、自分は潔く死を選ぶのか考えつつ、トキは歩を進める。
翼はトキに伴って歩み、話題を変えていつもの調子に戻り、トキの家を目指した。

トキが帰路についた頃、芹真は改装されたパイロンの店を訪れていた。

テーブルにつき、正面のディマや隣に座るワルクスらと現在起こっている殺人について話し合っていた。
巷で騒がれているの猟奇殺人事件である。

「つまり、殺された3人は揃って元武装派の関係者というわけだ」

「ああ。
パンドラプロジェクト時代にまで話は遡る。
その当時、研究施設のうちの一つであった屋敷の警備に当たっていた軍人が最初の被害者だ」

定番の部屋に揃ったメンバーの顔をいま一度見回す芹真。
夢中で料理に食らいつくボルト。
あからさま不機嫌な表情で佇むディマに、真剣な面持ちで臨むパイロン。
調査結果を持ち込んだワルクスと、関連する情報を持ち合わせる孫悟空の知り合いであり、物資輸送長兼厨房主任の沙悟浄。

「2人目は？」

「2人目もそうだ。
2人目の議員は元々パンドラプロジェクトに対する出資者であり、日本支部で幹部の位にいただけ人物だ」

ワルクスが手元の資料を読み上げていく最中、芹真は脳裏にとある廃墟を思い浮かべ、改めてパンドラプロジェクトがどういうもの

か思い出していた。

素質ある人間を意図的にＳＲへと変える、人員増強・拡大をはかる無所属ＳＲ達による協会への対抗計画。

第一人者であるマティス・フォーランドを始めとし、様々な人為的ＳＲ発現実験が行われてきた。

実験方法はそれぞれ異なり、中には特別な儀式を行い発現させるものや、予防注射のように簡単なものまであり、多種多様で無限に近い可能性を秘めていた実験が世界中で行われてきたのである。

「3人目の男は、入野雅晴（いりのまさはる）。

元武装派の金づるで、協会でも前から必死で保護しようと行方を追っていた男だ」

「まさか死体で見つかることになるとは思ってもいなかった」

「協会の捜査能力も、大分落ちてきたわね」

棘を突きつけられたワルクスは肩を落し、ボルトは雲呑麺に没頭する。

最近の協会の力が目に余るほど低下しているということを思い出し、パイロンはディマの苛立ちを僅かながら理解した。

ナイトメアの蜂起。　ＳＲによる犯罪の急増と過激的鎮圧の繰り返し。

トキとメイトスに見出された未来。　四凶の離反。

（よりによってこんな時にパンドラプロジェクト絡みのＳＲが出てくるなんて……）

「目撃情報では女性の可能性があると言っていたな？
たぶん俺の船を沈めた奴と同一人物だと思う」

視線が前掛け姿の沙悟浄に集まる。
ボルトは沙悟浄の思考を読みつつ羊肉炸焦に箸を伸ばし、そんなボルトの思考をディマは読み取り、考察した。

孫悟空と共に密輸を繰り返すライバルであり、幾度も海軍や海自の網を潜り抜けてきた密輸の猛者：沙悟浄。
そんな彼の自慢のひとつである自前のステルス高速輸送艇が沈んだのは１ヶ月と数日前のこと。世間で“騒がれている／確認されている”猟奇殺人は今のところ３件だが、彼は自分の船の中でその３件と同一の特徴を持つ殺人に遭遇した。

（犯人は不法入国者か……）

真夜中の航路で突然の悲鳴が上がり、数人がその船室に駆けつけた。
悟浄も当然駆けつけ、悲鳴の原因を探ろうとしたが、あまりにも特異なその空間に思考が停止する。

中の壁には大きな穴が穿たれ、肺から下を失った骸が血溜まりを作ってうつ伏せ、潮風と波飛沫に晒されていた。

悲鳴を上げたと思われる人物――死体を落ち着いて観察すると、顎の部分も体と同様にどこかへと消えていた。
無くなった部位が一切見つからない室内に悪臭。混じり合う血と潮の臭い。
騒ぎ出す他の乗客たち。
悟浄が部下に身元確認を指示し、被害者の身元が判明するまでに現場を部下に観察させた。

死因は後に起こる3件の殺人と同じ、ショック死か失血死。凶器は不明。犯人像は不明瞭。

それだけが判明した直後、彼のステルス艇は足を止め、沈没を始めた。

（何が原因で沈没したか不明……ね）
（きっと犯人の仕業だ）
（どう考えてもＳＲだな）

ため息をつくディマとお茶を流し込むボルト。
ふと――2人の脳裏にとある話が思い浮かびあがり――光と影の魔女の意見が一致する。

『何年か前――』

重奏。向かい合う光と影。
魔女2人の行動が不一致を始める。

「何年か前、プロジェクトの末期に研究施設の一つが炎上した事故が報告されていたわよね？」
「ねぇ、パイロン。
菊華石榴鶏と翡翠炒帯子のブロッコリー少なめのやつと西米露と鳳梨蝦球のエビ多めのマヨ少量。それから家常豆腐と叉焼飯、辣子鶏丁。それぞれ５皿ずつね」

注文を受けてパイロンが部屋を出ていく。
ディマの話にワルクスが頷き、芹真が確認を求める。

「確か、カナダの孤児院じゃなかったか？」
「それよ」

「確か、ヒーローズのアイツもそこの出身だったよな？」
「本部にいるかどうかわからないが、これから確認を取ってみる」

テーブルから離れた沙悟浄は、パイロンの手伝いに向かう。

「一般人と正ＳＲ、パンドラＳＲを含め、４０名余りの死者を出し、それでも犯人が誰なのか特定できなかったあの……」

ディマが頷く。

ワルクスにとっても、芹真にとっても盲点だった過去の事例。

「確かにあの時、体の一部を失くした死体がいくつか確認されていたな」

「ああ。

言われてみれば、今回の被害者と死因が一致する」

「最初はメイトスが関与しているのかと疑われたけど、手口が単独犯によるものじゃないことなどからメイトスである線は完全に消えた。

そして凶器不明、犯人不定。捜査は難航して打ち切られた」

「ということは今回の事件、その孤児院と同じ犯人による可能性が高いってことだな」

「或いは孤児院の出身者という可能性が……」

「おそらく孤児に因るものだろう。パンドラＳＲの制御不能による事故は何件か確認されていたんだからな」

絞られてゆく犯人像。

芹真はそれを慎重に確認し、ワルクスは芹真の質問に答える。

孤児院炎上事件解明に加わっていたディマの脳裏に写真で見た諸々の死体や、直接目の当たりにした焼け跡が浮かび上がった。

どんなＳＲが死体調査を行っても一切手がかりが掴めなかった怪事件。

姿の見えない凶器。刃物でなく、銃器の類でもない。

他に考えられるものは、ＳＲの力をおいて他にない。

（正体の分からなかった凶器が、今回でその正体を掴めるかもしれない）

「ワルクス～、その孤児院から生き延びた人はいる～？」

功夫茶を啜りながらボルトは質問する。

少なからずＳＲの生存者がいるという確信めいたものがあり、今も生きているのなら貴重な情報源になりうる存在であった。今回の事件を解く鍵になるなら護衛が必要になる。

関係者ばかりが狙われているというなら、生存者というだけで狙われる可能性だってあった。

「ほとんどが行方不明だ。

当時確認された生存者は指の数ほどしかいなかったはずだ」

「最初の軍人もか？」

頭を抱えるワルクス。

助け舟にならないかと犠牲者のことを思い出す芹真だが、しかし、

「いいえ。

彼らは確認されてはいけない存在のはず。秘密裏に雇用されてい

た。
ＳＲと一般人に守られた研究所だった」

ディマの代弁にワルクスが頷く。
その事件の通報は協会にとってあまりにも印象が強く、当時連絡を受けたＳＲはそのことを克明に報告書へと電話越しの様相を書き残していた。
その資料にはディマもワルクスも目を通していた。

「でも～、当時パンドラに関わっていた誰かがこの近くにいることは間違いないんじゃないの～？」

「そう、ボルトの言う通りだ。その可能性は高い。
それで、清水峰警察署長にも協力を仰げるよう手配してもらった。
その事件に関わっていたと思われる人物の特定、現在地などを確認してもらっている」

芹真はそれまでの話の中に、少しだけ気になる箇所を見つけた。
過去に起こった孤児院炎上事件。
生存の確認された者たちだ。

「なぁ、孤児院の生存者を確認、または目撃したのは誰だ？
現場に居た誰かってことだよな？」

芹真の質問にディマ、ワルクスの動きが止まる。

ボルトは新たに茶を取りながらディマらの心境を読んでいく。

「誰なのか……それが、わからないんだよ」

「匿名の連絡があって、それで協会の部隊が駆けつけた。どこから掛けたのか特定する暇もなく電話は切られ、半信半疑で現場に急行したが時既に遅しよ」

「通話を録音していないのか？」

「当時の協会は大規模な改装・メンテナンス中。その他にもあらゆる条件が重なって録音はしていない……というより録音されていなかった」

２人の説明に納得して芹真は頭を切り替えた。

いま自分に出来ることは当時の生存者、或いは関係者を護衛すること。うまく事が運べば事件解決の糸口を掴める可能性もあり、また解決にまで至る可能性もあった。その代わり、犯人からの接触があることを可能性に入れると、そのリスクは以外と大きい。

それでもそれが自分にできることなら、やらない理由は無い。

「じゃあ、ワルクスはアヌビスや署長らと連携して夜間の巡回を強化してくれ。

ディマは孤児院事件に関する資料を取り寄せられないか？」

「可能よ」

「頼む。
俺の事務所で生存者を探してみる。
殺人が終わる気配がない以上、近隣に生存者や関係者がいるのは間違いない」

ワルクスの眉がつりあがる。
何を根拠に芹真は“終わる気配がない”と言ったのか。

「芹真さんの勘だよ～
こういう時に限って、ほぼ確実に当たるんだ～」

ワルクスですら知らない一面を語るボルトが、新たな皿に手を伸ばす。
伸びたボルトの腕を掴むディマが芹真に向く。

「芹真、あなたの口から聞きたい。
あなたはこの事件をどう思っている？」

「なら、先に心を読むな。
俺は、これがただの復讐劇ではないと考えている。
犯人がパンドラの関係者とはいえ、それ以外の関係者複数人が何の理由も無く、同時に一つの国に集まるとは思えない」

あくまで仮説である。
幸運にも研究施設である孤児院から生き延びた者、またはそれに

関与していた者達が、ほぼ同時にそれぞれ違う経緯を経て同じ場所に集まる。
偶然とは考えにくい。
一応偶然も可能性に入れておくにしても、その確率は極めて低い。

「もしかすれば、近隣の県の何処かで器実験が行われようとしているのかもしれない」

詳しい動機が掴めない犯行。
少しでも可能性があるものといえば、パンドラの系統実験“器”である。

「……確かに」

不自然な現状に気付き、ワルクスは手元の資料にメモを始める。
ディマは席を立ち、扉へと向かった。

「芹真。器実験は私達が見つけて潰す。
あなたは関係者達の発見に全力を注ぎなさい。
特にボルト。いいわね？」

「言われなくてもわかってるも～んだ！」

影の中に消えるディマ。

すれ違いで入室するパイロンと沙悟浄。
運ばれた料理に目を輝かせるボルト。

リニューアルしたパイロンの店の食材の半分がボルトによって消費された頃、空はオレンジ色に傾いていた。

協会が四凶の動きに注目するようになった矢先、自分の近くで起こった異変。
芹真は心のどこかで四凶の気配を感じていた。

（例えば、悪を生む悪。キュウキ）

人を自然に暗黒面へと導く者。
今回の殺人が導かれた殺人だとしたら、黒幕の最有力候補に挙げられるのは四凶だろう。
しかし、それが芹真には理解できない。
仮に黒幕が四凶だとしたら、何が目的でこんなことをしているのか。

（犯人の目的は何なんだろう？）

リビングでテレビと、カレーに夢中な翼へと交互に目を配るトキ。
テレビで流れる特番を見て、トキは自分なりの殺人事件に対する感想を抱いた。
凶器不明、動機不明。
頭に浮かぶ翼の言葉――狂っているとは思わないか？――そのこ

とについても真面目に頭を回す。
人が悪いのか、国が悪いのか、人類が悪いのか。
“そもそも何が悪い”などという概念は必要なのか。本当は何も悪くなんかないのではないか。

（悪が悪くないんなら、正義が悪いのか？）

そこでトキは自分の思考に発生した矛盾に気付いて一度考えるのをやめた。

（私にも分かんないや）

腹を満たされたボルトは夕焼けの空を見上げながら思った。

正直、怖いと。
猟奇殺人がＳＲの仕業によるものということは理解できた。
しかし、犯人のＳＲという凶器に対しては、まったく予測が立たない。
空間圧縮の魔法でも、まして火炎、重力、光撃のどれとも違うものが被害者の傷口に僅かだけ残っていた。
未知の何か。その何かが理解できない。
魔法の類による殺人なら、ディマやセンを始めとする魔法使い達、そして協会が黙ってはいない。魔法使いにも掟はある。自分のように軽々と掟を破る者は滅多に出てこないという確信もある。

だからこそ、恐怖すべきものがある。

テレビで騒がれるほどの大事。大胆すぎるＳＲを用いた殺人。
一般人まで巻き込む決意。
浮かばない犯人像。　素顔の割れない候補者。　未知の殺傷能力、ＳＲ。
自分が心の底から怖いと思うこと自体久しいボルトは、珍しく芹真と手を繋いだまま事務所まで帰った。
“せめて最も犯人像に近い候補者さえ絞れるのなら……”
不安を紛らわすために芹真を勝手に読心し、その意見に賛成した。
（居ない？）
藍が初めて彼女の異変に気付いたのは１ヶ月前。事件が流れ始めた頃からだった。
挙動不審から始まる連続殺人に関する異常な反応。
その結果、藍は色々と気になり、ここに来た。
表札に記された『奈倉』の２文字。
互いにＳＲを持つ者同士、腹を割って話してもらえないかと密かな期待を抱いていた。
しかし、今回の事件は藍が思っていた以上――
奈倉愛院はこの事件に特別な思い入れがあるものだと――彼女の部屋に不法侵入をして――初めて知った。
荒らされた部屋。
床に散らばる弾丸やナイフの数々。
防弾チョッキや符術士が使う対魔用の攻符に護符。

呪詛を封じ込めた呪術用の剣など、数え切れない凶器が部屋一面に散らばり、壁や床を傷つけていた。

「まさか……彼女も関係者の1人だったの？」

部屋の一角で写真を拾い上げ、その中に彼女の姿を確認する。
焦りと苛立ちが募り、藍は踵を返して部屋を後にした。
無人の個室に静寂と得物達が残され、部屋の一角に散らばる写真が僅かな風に揺れる。

彼女（なぐら）が妙な行動を起こさないことを祈りつつ、藍は全速力で芹真事務所を目指した。
部屋を出る際に手にした写真と共に。

第３１話－パンドラの復讐－（後書き）

「嘘……だろ？」

４月１８日――翌朝の早朝。

白州唯の国道沿いの交差点にて――

４人目の犠牲者が確認された。

その日のうちにテレビで報道された情報はごく僅かで、しかし事件の発生に白州唯の街は騒然とした。

あまりにも身近な殺人。

現場となった自分達の街。

知らない人の死。

しかし、死んでしまった知人――アックスアヌビスの死。

ハルバートの携帯電話が音を立てて落ちる。

それは初めてのＳＲの殺害。であり、同僚との死別。

受け入れられない同僚の死に、一頭のアヌビスが哭す。

同じ街に残された数少ないアヌビスというＳＲ。

それは日本を中心とした様々なＳＲ達に強い影響を及ぼした。

第32話－Judgment of innocent black－（前書き

第32話－Judgment of innocent black－

その鎖縛の始まりは、怨恨と生への執念。

一切の在り方を隠し、消し去る。
戻りはしない。
戻しはしない。
飲み込まれたのなら、元には戻れない。戻されることというは決してない。

（あの力は、まだ健在なのか……？）

最初は何が起こっているのかわからず、私は意味もなく混乱していた。
理性が戻るにつれて純粋な恐怖が湧き上がり、気付けば自分の部屋を飛び出していた。持てるだけの武器を隠し持ち、行くあてもなく今日という日を無事に乗り越えられることばかりを祈り続け、彷徨い続ける。
そんな無計画な彷徨の3日目。
この事件が自分の過去となんら関わりの無い、同じ力を持った赤の他人による仕業であることを望み始めた。

今日もまた夕日は傾き夜を迎える。
最も恐れるべき時間帯。
あの力を最も避けにくい空間の展開、避けられない暗闇の刻。

脳裏に刻まれた圧倒的破壊力と、寒気を誘うほどの純粋な殺意。

おぞましき存在力。
そして、その力の内側に秘められた混沌とした意志。
古い夢にうなされながら、彼女は3日目の夜を乗り切った。
誰が現れることもなく、また誰が消えることもなく。

（これで今日も学校に行けるな）

朝焼けと共に訪れる安堵。
明けゆく夜に別れを告げてコンビニエンスストアへ向かう。その足取りは軽く、わずかな恐怖は残っているものの、餓死の危惧に比べると微々たるものというまでに小さくなっていた。
何はともあれ食事である。食わなければ生は繋がらない。
菓子パンとコーヒー、サラダとタバコを購入する。
その頃になると、わずかな恐怖も消えかけ、元の日常が彼女の中に戻ってこようとしていた。店内に流れるラジオ、明るい電飾、一定に保たれた店内温度、色とりどりの商品が並ぶ棚。ラジオから流れる音楽や、レジに並ぶ時、財布を開いて小銭を探す時、身分証明の提示を求められて偽装免許証を取り出して見せる。行動しているうちに、少しずつだが確実に彼女の中から恐怖は磨り減っていった。

しかし……

“臨時ニュース。
今日未明、国道沿いの交差点で新たな死体が発見。警察は発見された死体から一連の連続殺人の可能性を示唆”

それはレジのディスプレイに現れたテロップだった。
不意を突く速報。
早すぎる報道。
新たな殺人。
最も望まない夢の紡ぎ。

今日という日に集中しかけ、忘れられない恐怖を一時でも忘れられようとしていた彼女に、再び恐怖が蘇る。
現実が、彼女を捕らえて逃がさない。
ニュースに目を落としているうちに、彼女の足は現場へと向いていた。

国道沿い。

（ニュースの言う通り、死体にあの傷痕があるなら……）

半ば自棄に、半ば意を決し、前へと足を進める。

心のどこかから沸いて出る反発もあった。
“この事件は、関わらなければ自然に過ぎ去っていく。嵐や台風のようなモノだ”
“自ら死に行く必要があるのか？
もし、この凶行が自分の知るＳＲの仕業なら、知ったところでどうなる？
知ってどうする？”
“自分独りの力ではどうすることもできないということは、自分が最も理解している。そのはずだ”

「ケルベロスが何の用だ？」

考えながら歩くうちに声がかかった。

声を掛けられて立ち止まる彼女の背後に、1体のアヌビスが現れる。

殺人現場に近い公園の手前、彼女はそのアヌビスを匂いで識別し、危険がないと判断して振り返った。

ハルバートアヌビス。

白州唯警察署長：清水峰将人（シミネ マサト）管轄下の外人部隊に所属する、申し訳程度に警官という職業をこなす男。

「たまたま通りかかっただけだ。
何でそんなことを聞くんだ？」

シラを切って、返答に青筋を立てるハルバートを一瞥する。

関わっている時間が惜しい。

だが、ハルバートが殺気と共に質問をぶつけてくるため、下手な逃亡や無理矢理すぎる話の切り上げでは逮捕される可能性があった。

「なら、服の下のソレは何だ？
場合によっちゃ、銃刀法違反でお前を逮捕するぞ？」

「……えらく不機嫌じゃねぇか。えぇ？

悪いが、お前に構っている暇は無いんだよ」

反論する奈倉に対し、ハルバートが得物を取り出す。
自らの名前と同じ武器、ハルバート。
早朝とは言え決して人通りが無いわけではない。それどころか今朝の事件で多くの警察官が動いている。

銃刀法違反を犯しているのがどちらなのか聞きたかったが、奈倉は口をつぐんで正面から目を逸らさないようにした。

「ケルベロス、お前がここにいるのはどうしてだ？それだけ答えればいい。
まさかとは思うが、野次馬の類や実は犯人でした、なんて言わないよな？」

怒りに震えるアヌビスの声。
殺意の篭ったその目が何を求めているのか理解できない。真実を欲するのか、怒りを発散する何かが欲しいのか。第一、奈倉にはハルバートが憤怒に焦がれる理由がわからない。
元々わかり合える仲になれる気がしなかった。

アヌビスは協会所属で、私は無所属の、しかも過去に武装派に関わっていた。
それなのに、どうしてか今日という日まで生き延び、また朝日を迎えている。いつ捕まってもおかしくなかった立場は、むしろ今まで捕まえられなかった奇跡と不思議を思い起こさせるに充分である。

「悪い胸騒ぎがしたんだ。それで、コンビニ行ったらそのニュースを知ってな。
知り合いじゃなければいいと思って確かめに来たんだ」
「お前には関係ない。帰れ」

ハルバートの矛先が首筋に突きつけられる。
露骨過ぎる感情によるその動作は警告とも取れた。その言葉に含まれる殺意。やり場が“発見されない”怒り。

「……まさか、殺されたのは、お前の――？」

何の根拠もない推測。
当てずっぽうに放ったその言葉は、楔のようにアヌビスへと突き刺さり、握られたハルバートを震えるさせた。

入りすぎる力。
入り込んではいけない、触れてはいけない――その筈なのに見つけてしまい、触れてしまった――傷。

張り付いて離れない激怒の面は、心の内を見透かされた遣る瀬無さと憤りもあって、更に紅潮した。
偶然にも真相を言い当てた愛院に対抗するようにハルバートが放った言葉――

「だから、何でテメェはここに居やがる？

犯人にでも心当たりがあるのか！？
そうなのか！？えぇ！」

怒りが作り上げる羅列は、的確に愛院の心を捉えていた。
しかし、その問いに頷くわけにはいかない。長い時間を経て、やっとの思いで安住に至った場所が、この白州唯という街なのだ。
いまある生活を失わないためにも、ハルバートの質問に頷くわけにはいかない。

「言っただろ……胸騒ぎがしたんだ。
やられたのは誰だ？」

沈黙が訪れる。
突きつけられたまま微動だにしないハルバート。視線を逸らさない愛院。
街が喧騒を増していくのを感じ、ハルバートは得物をしまって渋々と口を開いた。

「……アックスだ」

それは、愛院がこの街で初めて聞く、最初に確認されたＳＲの被害者。パンドラプロジェクトと一切関係を持たない者の殺害。
それを聞いてからというもの、しきりに本能が彼女に訴えた。
アックスアヌビスは、犯人と接触し、殺害されたのだと。
間もなくして予測が確信に変わる。

「犯人に心当たりがあるなら教えろ……俺が……
俺が捕まえてやる！」

犯人はまだこの街のどこかにいる。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第３２話－

－Ｊｕｄｇｍｅｎｔ　ｏｆ　ｉｎｎｏｃｅｎｔ　ｂｌａｃｋ－

晴れ渡った青空の下。
暖かさを感じさせるような春空だが、残念なことに今日の風は冷たい。
そんな状況の中、3年3組の面々は校庭にて準備運動に取り組んでいた。

「何でこんな寒い中、外で体育なんか……」
「しかも3年にもなって」
「ぶっちゃけ体育要らないと思うぞ？」
「同～感」
「右に同じく」

ミツル委員長派、男子諸々の小言より。

「太陽光というものには独特のビタミンが含まれているらしく、これは安眠を促進するための貴重な存在であって健康な身体を保つ為には必要不可欠なものよ。
そのビタミン不足によって引き起こされる症状には、骨粗しょう症やーー」
「わかった。
安眠の方法はもうわかったから！」
「へぇ」
「へぇ」
「へぇ」
「ほぇ～」
「ふ～ん……そうだったんだ」

中立派の崎島を中心とした睡眠問題解消のための説明会より。

「……Ｚｚｚ」
「ズバリ！　今回のテスト攻略の要となるのは～！？」
「だから、教科書のＰ．１１２からＰ．１４１までのチェックポイントだってば
「またウィルスが暴走を始めたし……」
「実は、いまだに鉄棒の逆上がりが出来なかったり」
「……」
「……ウゼェ」
「勝負だ！岩井！」
『ウゼェ……！』

騒がしい者と静かな者の差が両極端なマイコ裏委員長派の面々による個性溢れる会話より。

「……授業、させてくれ」

そして、いまいち気の弱い体育教師：新川香春（あらかわかわら）の泣き言より。

グラウンドの中央で賑わう3年3組の大勢。
そんな彼らの周り、グラウンドのトラックを走る遅刻者４人の雰囲気は、他の生徒のそれとは違って明らかに重かった。

「それで、今朝現場に行っていたのか？」

高城播夜（たかじょうはりや）の質問に、愛院はわずかな間を置いてから頷いた。高城の質問に続き、橙空藍（とおそらあいしきよ）、色世時（ときが質問を重ねる。

「やはり、敵はパンドラプロジェクトの被験者なのね」

「この街に来たって事は、まだ片付けるつもりの誰かがいるってことだよね？」

４人が学校に遅刻して来た理由は、今朝の殺人事件である。

殺人現場を訪れた愛院は足元から這い上がってくるような恐怖を必死で気を紛らわせようとし、色世家を目指した。その道半ばで高城と出会い、一緒にトキ宅へ。２人が到着すると、トキが自宅の正面玄関を開錠しようとする姿が飛び込み、その脇に藍の姿があった。

芹真事務所からの朝の特訓帰り――正確には忘れ物を取りにやって来たらしいが――登校時間まで時間があったため、４人はお茶にすることにしたのだ。その席で愛院は今回起こっている一連の事件と関連性の強い、自らの食らい過去の体験を打ち明けた。

「以前、私はカナダの孤児院にいた」

その話を藍は真剣に受け止め、トキは訳もわからないまま聞き入り、高城は彼女の経歴に必死に耳を傾け、語る愛院はほんのわずか

に安堵を感じていた。
打ち明けるべきか悩んだ結果、彼女は自らの過去を語っている。
もし、自分が素直になることで事件を解決できるなら。　永い悪夢に終止符を打てるのなら。

「私は、番犬としてそこに雇われていた」
「傭兵か」

呟く高城に愛院は首を横に振る。
ただの傭兵とは違う特別な扱い、厚い待遇を受けたSR（ばんけん）。

「雇い主の名はゴード・ダリアス。
自分の広い屋敷を孤児院として、養子という名目で親を知らない子供たちを集め、パンドラプロジェクトに貢献していた政治家だ」

「パンドラプロジェクトに貢献、か」

その孤児院で愛院はさまざまな子供たちを見てきた。

どれだけ辛い目に遭い、どれだけ深く心に傷を負ってきたのかわからなかった子供。計り知れない悲しみ、理不尽が生む怒りと絶望。知らされない虚しさ。閉じられた人格・世界の形成で育つ者。
喜びを喜びと感じない子供や、幸福観念を一切持ち合わせていない子供達もいた。
それでも明るい子、元気を取り戻した子、広い友好関係を築く子、

中には立ち直れない子もいて、そういった子供たちを見てきた。

集められた子供たちは大人たちの都合によって戦力に変えられる。だが、そのことを知らない。知らされない。

騙されているとしか思えなかった愛院だが、子供たちを見守るだけで何かをしてあげることはできなかった。

番犬という職を失えば、食料にも寝る場所にも困ることになる。たちどころ自分が孤児となってしまう状況にいたのだ。

「噂に聞いていたパンドラ実験の成功率は約７５％」

子供たちの中には自分と影の重なる者もいたが、移入する感情を抑えるためにも接触は極力控え、ただひたすら見守ることにだけ徹した。

文字通り、番犬として。

「子供たちは全員ＳＲの素質があると言われて集められた子供たちだ。

中には、現協会のヒーローズの１人だっていた」

日々、屋敷の地下で行われる実験は順調に進んだ。次々とパンドラＳＲと化していく子供たち。

そんな、何事も無いかのように過ぎていく日々の中に、それは生じた。取り返しのつかないヒビ。後の事件へと繋がる元凶。

「子供たちの中にな、意図的に実験を遅らせられていた3人の子供が居たんだ。
3人が3人とも似たSRの因子を持っていたって聞かされていた。
どうしてこの3人の実験が遅れて行われたのか、最初はまったくその理由がわからなかったが、あの力を目の当たりにしてやっと分かったんだよ。遅らせた理由が」

孤児院の子供たちが少しずつ減り、少しずつ変わっていく。
その中であまり変わらなかった子供が3人いた。
集められる子供たちは皆、SRになりうる素質を持っているはずなのに、なかなか実験の被験体として選ばれない。当時の無所属は協会に対抗するために必死で戦力を欲していた。
即戦力として何十人か作戦に参加させたという例もいくつかあった。

それなのに実験を遅らせいたのだ。

その理由は3人のSRが過去に発現した例がない、未知で且つ強力過ぎる代物(チカラ)だったからである。

「3人の実験が始まると、だいたい前もって計算して得た予測データの通りになったんだ。
2人目までは」

「3人目は失敗したの?」

藍の質問に頷く。

トキに目を向け、愛院は続ける。

2人目までの実験は成功した。

実験の成功は研究者やパンドラSRに期待を寄せる者たちを大いに活気付かせた。

これまで成功しなかったSRの発現。

協会も対処法を持たない未知のSR。絶対支配を破ることも夢でなくなった。

それが戦局を一辺させるであろう新しきパンドラのSR。

しかし、そこに慈悲は無かった。

実験に伴う痛み。

それが起こす反応。悲鳴。

彼女の耳は一般人のそれよりも遥かに利くほうだった。嫌でも屋敷の中から遠巻きにその結果は届く。

そんな憂鬱な日々が続いた。

実験に伴う悲鳴が時折耳に痛くとも、食って生きていくためには仕事をこなさなければならない。そんな毎日が続く。

割り切って愛院は番犬としての役割を果たした。

侵入者や脱走者の始末。それは黒き青春の1ページ。明確な汚れ仕事。生きるためとはいえ、気分が悪いことは否みたくない。

自分のしている事を正義と思うことができなかった。

「視野の狭いガキだった」

3人目の実験日が来た。

愛院は自分の汚れ仕事がいつまで続くのか考え、普段以上に暗澹としていた。無邪気にはしゃぐ子供たちを見ても沈んだ気分は変わ

らず、屋根の上で感じる陽光も、頬に当たる風も、彼女を暗闇の底から押し上げるには至らなかった。

「失敗じゃない。正確には暴走だ」

そんな時に実験が行われたのだ。
3人目の子供の実験はSRの発現に至っていた。
どんなSRなのか詳しくは知らなかった愛院は、初めてそれを目撃する。

珍しく来客の車で埋まった駐車場を歩いていると、突如複数の悲鳴が耳に伝わった。

「子供たちの反撃か……
その中に今回の犯人もいたわけか」

「確定はできないが、可能性は高い。
同じSRを持っていることは確実だ」

そんな彼女の脳裏には、3人目の実験体となって覚醒し、地下の研究施設から地上へと歩み出てきた少年の姿が浮かんでいた。

それは、圧倒的存在感。
目が合った瞬間に身動きできなくなった自分を、奈倉は今でも覚えている。
何をされたわけでもない。それにも関わらず目からこぼれた雫。

震える足と寒気に支配される体。
なぜ震えているのかという疑問よりも、目の前にいる少年が何なのかという疑問が浮かんだ。

腕から伸びる漆黒のソレ。
一切の理解が及ばす、目に映るものを次々と消し去っていく闇。
時折、何かを形作ったようにも見えた。

「一応聞いておくけど、その……パンドラＳＲの実験体となった子供の名前は？」

哭き鬼の質問にケルベロスは戸惑う。
真剣に話を聞いてもらえることはうれしいが、なるべく関わらないでほしかった。１人でも犠牲者を出したくない。特にこの街の住人の犠牲者は。

トラックのコーナーを抜け、直線をスローペースで進む。
呼吸を整え、足並みを揃えた。

「愛院、余計な心配はするな」

高城の手が肩に置かれるのと同時、奈倉の中に安心と不安が同時生まれ、それがその名を吐き出すに至った。

「その子は、エミルダ……エミルダ・レザロッテ」

罰則のランニングを終えた４人は無言で授業に戻っていく。
その間も殺人鬼はこの街のどこかを歩いているのか、或いは息を潜めて休息に勤しんでいるのか。誰にも予想できず、誰であろうと確信できない。特に学生のトキや奈倉たちには決して。
追う手がかりがない、手立てもないし……
何より学生である。高城は留年生であり、奈倉は出席日数に余裕がなく、また周囲の評価もかんばしくないため滅多にサボれなかった。

――同時刻

轟音の先に見える不法投棄された廃棄物の山。
背後に陳列する駐車の列。
足元の乾いた土の上に生える短い草に、中途半端に敷き詰められた砂利。

高架下の駐車スペース。

短い草の上に腰を下ろしてこぼす息は、妙に熱を帯びていた。
重たい体、悲鳴を上げる頭。落ちようとする目蓋をこすりながら、廃棄物の山の近くに日陰を見つける。
体が重たい訳も、頭の信号の意味も、何が原因かは問わない。
考えない。
ただ、本能にまかせて眠る。
幾分解消されるだろうという感覚があった。

周囲の騒音など意に介さない。
頭にあるのは次の獲物。消さなければいけない人物の顔。
頭の中に叩き込んだ諸々の顔は、確実にその存在を消すまで頭の中から消えることはない。

“それらの人物をこの世から消すことで、多くの人々が救われる。自分と同じ犠牲者は出さない”

それが指針。
揺るがない信念。
今までその一心で続けてきた裁断。
しかし、

『君たちのような犠牲者を出さないため、僕らは裁き続けているんだ。
その為に協会の矛として存在している』

確固たる信念に、わずかな揺るぎを与えた一言。　そう言い放ったのが彼だった。
“アックス”という名のアヌビス。
彼が言い放ったその言葉は、今まで聞いたどんな台詞よりも深く染み込んだ。罪悪感を沸かせ、目的を霞ませ、目を逸らし続けてきた現実を突きつける。

この裁断に意味はあるのか？

挫けそうな自分を辛くも保ちながらここまで来たのだ。

それが今まで生きてこられた理由であり、見えない恐怖のひとつでもあった。
断罪を放棄することで自分がどうなるのか考えたことがない。
まともに考えたことがなかった。

わからないからこそ、落ち着いて考えられるように眠る。
疲れていないかと自分に問い、多大な疲労が蓄積されていたことを思い出した。
考え、歩き続け、彷徨い続け、気付けば裁くべき人物と接触している。

そんな時に現れたのが、アックスアヌビスで――

「廃線予定の鉄橋か……
こんな人気の少ない高架下で見つけられたってのは、幸運なのかもな」

――初めての目的外人物の殺害だった。

体を落ち着け、横になろうとしたその時、昨晩のアヌビスと同じ衣装に身を包んだ男が目の前に姿を晒す。
昨晩遭遇したアックスとは比べ物にならない殺気を放っていたことが、自然と少年の体に戦闘体勢を要求していた。

「エミルダ・レザロッテだな？
これから……お前を逮捕する」

僅かな静寂が降りる。
唐突過ぎる物言いと、殺意に満ちた双眸。
静かに、しかし軽い混乱に陥った眼差し。

逮捕という言葉から予測される男の職業は、警察。
しかし、裁断はまだ完了していない。
その目的意識が少年の、エミルダの首を横に振らせた。

「何かの間違いだとでも？
隠しても無駄だ。
アックスはお前の体にマーカーを付けておいたんだからな」

両手に握られた得物が光る。
斧槍：ハルバート。

頭上に轟く振動が生む音。
周囲から響く、金属の叩き合いによる騒音。

突きつけられる刃物に対し、少年は恐怖を覚えたものの１歩も退かなかった。

「何が目的かは知らないが、お前は人殺しだ。
俺の同僚まで殺しやがって……」

過ぎ去る轟音。

すでに遠くからしか響いてこない騒音。
口元に伸びる親指の爪を噛み始める。

エミルダは脳裏にアヌビスの姿を思い起こした。
名をアックス。
装備も手斧。
アヌビスの同僚で、黒装束のＳＲ。

「何とか言ってみろよ、おい！」

一方的沈黙が続く中、アヌビスは問う。
罪を認めるのか、嘘を続けるのか。
突きつけたハルバートの刃に映る少年の目は、アヌビスが思っていた以上に淀んでいた。
前髪に隠された右目に宿る復讐の意思。
罪悪感と使命感のぶつかり合いに歪む左目。

過去に目の前のそれと似通った目を見たことがあるハルバートは、殺人鬼が理性を失わずここまで来たことにささやかながら驚いた。
憎悪に支配されることもなく、人格を失うこともない。

（むしろ、憎悪と罪悪感の狭間を彷徨っている？）

「なにやってんだ？」

アヌビスと向かい合うこの空間に、更に男が現れた。

その男の出現にハルバートは理解に苦しみ、エミルダは多大な不安を覚えた。

ハルバートにとって知っているＳＲであり、エミルダにとっての知らない人間。

しかし、本能的にわかることがあった。

それは迷彩バンダナの男もＳＲであるということ。

「錬金術師……
どうしてここにいる？ハンズ」

「そんなこと気にするんじゃねぇよ。
それよか、この片腕の女の子は誰だ？　お前にそういう趣味があるとも思ってなかったが？」

「……テメェ、空気読みやがれ」

怒りに震えたアヌビスに対し、迷彩バンダナの男：ハンズは軽い調子で2人の間に立った。

「ディマにさぁ、お前らを見つけて来いって言われたんだよ。
アックスが殺られたばっかしだろ？」

「だから、つけてきたのか？
悪いな。帰れ」

「まさか。
素直にハイハイ言えるわけねぇだろ、ボケ。
俺はただの援護だ。何かあった時のためのな。あまり逸(はや)ったことすんなよ」

2人のやり取りが続く。
内なる怒りを抑えるアヌビスと、無理に明るく振舞う錬金術師。

背後に立ちふさがる不法廃棄物の山。
左右の駐車スペースと道路を隔てるフェンス。
前方のアヌビスと錬金術師。

数分前まであった余裕が少年から消える時、不安のあまりに噛み始めていた爪は剥がれ、その下の皮膚を破り、紅を覗かせる。
肉に雫が滲む。
足の震えはいつしか全身の震えとなり、止まなくなっていた。

目の前の人たちは……邪魔だ。きっと、殺そうとする。
じゃあ、誰が裁断を下す？
この人たちは……やらない。おそらく、誰もやらないだろう。

「こいつがアックスを殺した犯人(オトコ)だ」

ハルバートの言葉が突き刺さる。
錬金術師の視線を感じ、不安が増し、流血が勢いを増す。

「……て」

２人の目が少年に落ちる。

「動くな、クソガキ」

「気をつけろ。うちの店長（ディマ）も理解できないＳＲなんだ」

リボルバーを取り出してエミルダへと向けるハンズ。
周囲の砂利を拾い上げ、錬金を経て弾丸を生成する。

「手錠をかけてしまえば問題ない」

言っておきながら得物の柄を強く握り締めるハルバート。

そんな２人の目の前で、エミルダは右手を口元から左肩へとずらす。

ハンズの目がその動作を追った。
失った左腕がうずくのか、それとも暗器でも潜ませているのか。
様々なケースを想定し、もう１挺の銃――ハンドガン：Ｍ１９１１Ａ１――を作る。

「……そう。そうだね。

どうしてだろうね。どうして……ねぇ、お兄さん」

果たさなければならないこと。
その大きさ、成し遂げる意義を認めてくれる者は居ない。

“自分が潰すのは、あの実験と、それを作り上げている人々。
これは復讐であって、救いでもあるんだ”

少年の意志から迷いが消える。
薄れる罪悪感に反比例する遂行意識。
囁(ささや)かれる目的。果たすべき使命。

混濁していた意識は更なる暴走を始め、そして――

（なん、だ？）

腕の無い左肩に触れた少年の右手に異変が起こる。
何処からともなく現れ、空気のように流れる動き、左肩に集まる黒い何か。

「コイツ……！」

右腕を伝い、右手を伝わって左肩に流れ込む漆黒。

危険を察知したハンズは銃撃を加えた。

狙いは足だったが銃撃と同時に黒い何かが2人の視界を遮り、ハンズは仰け反って狙いを外し、頭部へと弾丸を放った。

（銃弾が消えた!?）

後ろに跳んだハルバートの視界に映った、その異様な現象。
ハンズの放った弾丸が黒い闇の中に消える。
確実に頭部を損傷させるであろう必死の弾丸は、黒く流動するそれによって遮られ、完全に姿を消した。更に着地してから黒の何かに触れた得物（ハルバート）の一部が、触れた箇所だけ消えて無くなっていることに気付いた。
それはこれまでの連続殺人にあったような消滅の痕。刃物でも銃器でもなく、まして鈍器などとはまるで違う殺傷力を有した何か。
それによってつけられた傷痕。

類稀なる殺傷能力を持つＳＲ。
その薄いカーテンのような黒い幕。その後ろに映る少年の姿。
展開した黒が集約を始める。

立ち上がるエミルダの姿を2人は注視した。
変則的だった黒いソレの動きが緩慢になると、2人の眼には黒によって形作られた左腕を有する少年の姿が飛び込んだ。

体と一体化した黒。
腕と化した得体の知れない黒。その消滅力。
決まった輪郭を持たず、絶えず流動し――しかし、遠目に見ると、確実にソレは左腕を形成していた。

異型。

見た目だけでソレを判断して形容するなら、少年の左腕と化した黒は、影の集合体。

（本性を現したか！？）

一部を消されたハルバートを投げつけ、アヌビスは横へ跳ぶ。
入り組んだ地形を利用し、右へ左へ、上へ、背後へ。
同時にハンズの本格的な銃撃も始まった。

「何だってんだアレよ！？」

投げつけたハルバートが黒に触れて消える。再度放った銃弾も黒い腕に触れた瞬間に消えてなくなる。

「邪魔……なんか！」

僅かの数秒だけ完全に左腕として凝縮した黒が、ハンズ目掛けて“解放”される。
伸びる黒、左腕を躱したハンズは柱の陰に移った。

銃撃で抗するハンズを囮に、アヌビスは頭上から迫った。
触れて消されたハルバートとは違う、もう1本のハルバートを構

え、頭上から隙を狙う。ダメージを狙ったものではない。相手の本質を見抜くための攻撃である。

「こいつは特別製だ！」

しかし、ハルバートが少年に届くより早く、左腕が伸び拡がり、本体を黒い腕で包み隠してしまう。

それは同時にハンズの銃撃をも防いだ。

（全方位防御！？）

互いに押し合う黒いソレとハルバート。

触れていても消えないハルバートから伝わる、黒の硬い感触。

アヌビスはその感触から、黒の正体が霊に近い性質だと判断を下した。

しかし、明らかに霊体のそれとは違う。

（何だ、この硬度は！？）

自分の得物を足場とし、器用にエミルダの頭上から退避するアヌビス。

展開していた左腕が再び異型の腕となって襲い掛かる。

通常の霊体なら、どんなにしぶとくても軽石ほどの強度しか持た

ず、アヌビスにとって破壊に困る硬度ではない。
それ故に、初めて出遭う硬度の高さに驚異を感じていた。
退避したアヌビスを追う左腕が方向を変えてハンズへと向かう。

伸びかかってくる黒い腕の一部を躱し、ハンズはコンクリートの柱の影に身を隠す。
視界から逃れ、リボルバーに弾を詰める。
そんなハンズの頭上を、突き出された槍のように左腕が通過し、直径1メートルほどの穴を空けてからアヌビスの方向へと矛先を変えた。

（壁なんか無いも同然ってか！）

触れた箇所をを消滅させるＳＲ。
ハンズは連続殺人の犯人像を改めた。
明らかな殺意を持って存在する少年の姿は、決して照らし消されることのない闇。

「だからってなぁ！」

手中のハンドガンに錬金を施し、得物をアップグレードする。
ＳＭＧ：サブマシンガン：サプレッサー付ＭＡＣ１０。
柱の影から飛び出して弾幕を張る。質量に頼った銃撃。
しかし、気を逸らすには十分だった。
銃弾は本体である少年に届く前に黒腕に遮られてしまうが、黒腕を防御に回しているその隙を突いて、アヌビスが背後から襲い掛か

るだけの隙を作れる。

ハンズの思惑通り黒腕が動き、アヌビスがその隙に付け入る。
奇襲を察知して迎撃にでた左腕を躱す。
躱すことはできたものの、付け入るだけの隙はなくなっていた。

（後ろに目でもついているのか？
何故どの方位から攻撃を仕掛けても察知される？）

舌打ちし、アヌビスは撹乱と奇襲を繰り返すが、悉く黒腕に阻まれる。
その間、ハンズは再装填を行いながら戦況を見守っていた。
拾い上げた砂利やゴミを手中で弾丸に変え、弾丸を集めて空のマガジンを作り出し、排出したマガジンに錬金の力を流し込む。弾丸と一緒に掌に集められた空のマガジンから、完全装填されたマガジンを作る。
間髪入れないように銃撃。しかし、

（コイツ、全然銃弾が届かねぇ！
ディマの戦影魔装にも似ているが、触れないだけこっちの方が厄介だ！）

届かない銃弾。
いくら切りかかっても削れず、弾かれてしまうハルバート。

背後から奇襲を仕掛けたアヌビスも一旦距離を取る。

（ダメだ！
どんなスピードで回りこんでもこっちの動きに対応してきやがる！）

つかみ掛かってくる左腕をハルバートで打ち弾き、直撃を避ける。
黒い腕は動きこそ単調なものの、速度と絶対の破壊力があった。
軌道さえ見切れば躱すことはできる。
問題はいつ、どのように襲い掛かってくるかであった。

近距離で攻撃を続けるアヌビスの動きを見て、遠距離から攻撃するハンズは左腕の動きにいくつかのパターンを見つけていた。
まずは基本となる動きが、腕の伸縮拡大である。これは単純に直線的に左腕が伸びかかってくるものである。速さこそあるが、前動作さえ見切れば躱すことは難しくない。

次に、腕となっている黒が伸び、それから鞭のようにうねる場合。
結果から言うと、これは直線的に伸びてきた黒い腕の動きが途中から曲線軌道に変わり、変則的で見切ることが難しい。

それから伸びきってから弧を描く動き。前後左右への逃げ場を封じ、一気に輪を縮めるその攻撃はアヌビスのような跳躍力がなければ逃れることはできない。ハンズのように、並みの身体能力程度しか持たない生物には対処のしようがない。

そして、曲がって伸びた腕を横薙ぎに振り払うことで広範囲を一気に消してしまう方法。跳ぶか伏せるかしない限り躱すことができない。剣や槍のように固有の形を持った物なら最小限の動きでも躱すことはできる。が、少年の黒腕は違う。決まった形を持っていな

いため、直前で太さを増したり、リーチが伸びることもあるのだ。

（それなのに、この速さ！）

マガジンを取り替える。

アヌビスの連撃が少年の左腕へと襲い掛かるが、効果はない。

反撃の黒腕が背後の車両に触れる。

意思を持った生き物のようにうねり、車の次にフェンスを消し、廃棄物に触れる。距離を取るアヌビスを追撃し、更にフェンスを喰らい、車を抉り、石柱を削ぐ。

ハンズの銃撃が足元を穿ち、矛先を変えようと試みるが少年はアヌビスを追い続ける。

高架の裏面を蹴って地面に着地するアヌビス。

「これは……裁きなんだ」

迫った左腕を躱し、全力で打ち払い、隙を突いて本体を狙う。が、早すぎる左腕の対応がそれを許さない。ハンズの銃撃も黒闇の中へと吸われて消えていく。

「何が裁きだ」

アヌビスが一瞬の変化――ＳＲの解放――を遂げるのと同時、ハンズとエミルダの視界から消える。

背後、左右、頭上。

あらゆる方向から届く跳躍音。

アヌビスの撹乱作戦に気付き、得物を変えるハンズ。ＳＭＧからオリジナルサプレッサー付ＳＰＡＳ１２へ。

高速で移り変わるアヌビスを追おうとするが、斬撃のカウンターが左腕を打ち返し、打ちのめし、起動を変える。

アヌビスを視界で追えなくなった少年の矛先が錬金術師へと向き、少年の視線に気付いたハンズが回避行動を始める。

足元から蛇のように迫って襲い掛かる左腕。正面から突き刺さろうと襲い掛かり、日陰から不意を突いて襲い掛かった。

（相性悪すぎっ！）

回避しながら隙を突いてショットガンで散弾をばら撒く。

柱の影から車の陰へと移り、ガードレールを飛び越しつつ銃撃を繰り出す。走りながらポンプを前後に滑らせ、次の弾を薬室に送り込む。

ハンズが左腕を引き付けている隙にアヌビスが本体に迫る。が、背後からの奇襲を予知されて紙一重、横っ飛びで回避される。再び黒腕がアヌビスを的として伸縮する。

柱の影から歩き回る少年を狙い、引き金を引く。が、真横からの銃撃を防ぎ、黒腕は収縮の後、ハンズへと向いた。

「お前の、何が裁きだ！」

アヌビスのハルバートが黒腕を攻める。
ハンズに迫るよりも遥かに早い連撃。
薙ぎ、突き、平打ち。

暗闇に飲み込まれないその武器の猛打・猛攻に、少年が押され始める。
消し去れない衝撃がエミルダの体を押していく。

バランスを崩しかけ、何とか体勢を保った次の瞬間、アヌビスが視界から消えていた。

「裁きは俺たち、アヌビスの仕事だ！」

背後へと振り返るよりも早く、黒腕が回り込もうとする。

しかし、眼前にアヌビスの姿がなかった。
予想していたよりも後方。
そこにはハルバートを片手に構えるアヌビスの姿と、アヌビスが自分めがけて投げつけた得物が確認できた。投げつけられた手斧（アックス）。

それを防ぐ左腕に、自然と右腕が重なった。

（あの左腕……！

自分は触れてもなんとも無いのかよ！？）

（どんなに強力なＳＲを持っていようが、ガキはガキだ！）

ハルバートの猛攻に加え、ハンズの銃撃。

２体１と言う戦いの流れ。

どんなに多くの人を殺してきた子供だろうと、その体力が大人のそれを上回ることはない。まして、アヌビス相手である。

常識では考えられない体力とタフネスを有するＳＲを相手に、少年はよく戦った方だがハンズは思った。自身も戦ったことのある相手だが、銃撃でもなかなか殺せない種族である。

少年の持つＳＲならば、一撃でアヌビスを屠ることが可能だが、それは当てられればの話だ。

（ガキの黒腕が縮んでる？）

弾切れのショットガンに錬金を施し、ショットガンのポンプ部分とその周辺パーツからハンドガン――ＧＬＯＣＫ１８Ｃ――を生成する。

生成する最中、ハンズは物陰から２人の一方的攻防を覗き見た。

ほぼ全方位に展開していた左腕の黒が、今ではアヌビスからの攻撃を防ぐのが精一杯。　反撃の余裕が少年から消えていた。

それでも止まらないアヌビスの猛攻。

左腕だけを集中的に叩き、ＳＲの消滅を狙って本体を狙うことを

やめた。
　逮捕が目的で、少年を殺してしまっては根本的な解決にならない。動機を知り、原因を突き止める義務がアヌビスにはあるのだ。

「ここはゴム弾の方がいいな」

　アヌビスがエミルダを押す最中、ハンズはショットガンの残り（グリップとその周辺）部分からもう1挺のハンドガンを生成する。Ｂｅｒｅｔｔｔａ　８０００。オリジナルマガジン&非致死性９ｍｍゴム弾装填仕様。
　展開していた黒腕は少年の――右腕と同じサイズまで縮小し、再び――色を除いて通常の左腕を形成していた。

「あなたたちじゃ……裁けなかったくせに」

　少年の腕がハルバートを掴み止める。

「姉さんも酷い目に遭って、皆も酷い目に遭っていたのに……」

　ハンズが距離を詰める。
　アヌビスが盾になって少年を狙撃することができなかった。位置を変えようと柱の影から飛び出し、真横へと向かう。

「秘書さんも、門番さんも、いけない事だって言っていたんだ……」

左腕が薄れる。
アヌビスのハルバートが、黒腕のあった空間をすり抜けて落ちていく。

「みんな……怖がっていたのに。
怖かったのに……」

ハルバートが地面に落ちる。
逮捕するという言葉が口から出ることはなく、アヌビスは構えを解かなかった。

「助けてくれなかったくせに！」

ハンズが移動を終えるのと同時、視界が黒で埋められる。

それは、一度消えたと思っていた左腕の再解放。
勢いよく空へと噴出す間欠泉の如き、黒の放出量。

眼前にいたアヌビスを捕らえようとするが、ハルバートに遮られる。

「ハルバー……！」

錬金術師が引き金を引くよりも早く、アヌビスは黒腕に押されて頭上の高架橋裏まで押し飛ばされていた。
何十トン分にも相当する圧力に押され、アヌビスは高架下から、高架の上へと押し出される。
めり込むアヌビスの体、黒に飲まれて消滅するコンクリートや、枕木、レール。
高架橋を突き破り、線路上に転がったアヌビスは周囲の騒音を耳にしながら気を失った。

「だから、僕と姉さんで懲らしめるんだ！」

高架下に残されたハンズがエミルダに迫る。
視線を上の高架橋に向けている隙に右手のベレッタを握り直す。
非致死性のゴム弾とはいえ、当たり所によっては相手を死亡させる事もある。
確実に気絶させるため、ハンズは走って接近した。

威嚇用のグロックをセミオートからフルオートに切り替え、銃口を少年へと向ける。

引き金を絞るのと同時、頭上から左腕が迫った。

（戻ってきやがったか！）

頭上で起こったコンクリートの瓦解に気付き、それらコンクリートの破片に混じって左腕の黒が迫っていることを知ったハンズ。
瓦礫につぶされる前にグロックのトリガーを引いて左腕に防御させる。
収縮した左腕がそのサイズを変えて盾のようになり、完全に銃弾を防ぐ。

（足元がガラ空きだ！）

グロックの爆音。
フルオートで吐き出される銃弾に混じり、ゴム弾が少年の足元に向かって飛ぶ。

フルオートの銃撃を防ぐのに精一杯の左腕は、ゴム弾を完全に止めることができなかった。

左の脛に2発。
右膝に1発。
右太股に1発。

「っ……！」

少年の顔が苦悶に歪み、膝が折れる。
ハンズはその間に石柱の影へと滑り込み、後退しきったグロックのスライドを確認した。
残弾のあるベレッタと残弾無しのグロックに交換錬金を行い、ベ

レッタをグロック２３に、グロック１８ＣをＡＧ３６グレネードランチャー（暴動鎮圧用特殊ゴム弾仕様）へ。

もう一度仕掛ける威嚇と囮の弾幕、本命の非致死性ゴム弾の直撃。

しかし――

ハンズが影から飛び出すのと、崩れゆく体勢の中、エミルダが左腕を薙ぎ払うのは同時だった。

昼休みの屋上という場所は予想以上にひと気がなく、その人気の無さは４人にとって都合が良かった。

授業中の私語を慎み、大人しく休み時間を待っていた４人は、それぞれの日常の昼休みを蹴ってここに集ったのだ。

「おそらく目的は復讐だ」

愛院の言葉に耳を傾けつつ、藍は横から吹く風に髪を押さえ、トキは晴れ渡った空の下に広がる白州唯の景色を見つめる。

高城は咥えたストローを放して疑問を口にし、愛院は疑問を晴らすために答え続けた。

「具体的には誰に対する復讐だ？　パンドラの出資者達か？」

「関係者全員だと思う」

愛院の話を聞き、その無謀さに眩暈を覚える高城。
しかし、愛院に冗談を口にする余裕はない。彼女の態度からそれを見極めた藍は、高城と違う質問をぶつける。

「襲われた場合の対処法は無いの？」

「ああ……ちょっと吸っていいか？」

「なぁ、奈倉さん。
もう一回だけ、敵の能力を教えてくれないか？」

タバコを取り出す愛院にトキは聞く。
咥えたタバコに火をつけ、フェンスにもたれかかっているトキの質問に答える。

触れた瞬間に、触れた部位を消してしまうＳＲ。

霊体とも違うそれは物理攻撃を受け付けず、傷つかない。

「本体を狙えればなんとかなるとは思うけど」

機先を制されては圧倒的に不利。
本体を狙うなら、狙撃等による距離を置いた場所からの攻撃が有

効だと愛院は言う。

「どいつがこの国に来ているかにもよるんだが……エミルダの他の2人も同じような力を持っていて、中でも目にそのSRを持っている奴は注意が必要だなんよ」

「は？」

「同じ力を持っていると言っても、所有箇所が違う。それぞれ掌、左腕、右目と」

触れた瞬間に消滅してしまうということは分かったが、右目にその力を持っていて“触れる”という事がトキには分からなかった。疑問を抱くトキに愛院は説明する。

「焦点よ。右目のピント内に収まった瞬間に消されちまうんだよ」

「厄介ね……」

「ああ。厄介だよ。孤児院から逃げる時なんて、しつこくそいつに追い回されたんだ」

愛院の言うSRは、本体を仕留める他にないように聞こえたが、それでも藍は対処法が無いものかと考え続け、自分の得物を思い出すに至った。

生死繋綴。
万物を切り裂くと言われ続けてきた秘刀にして妖刀。
物理的なものから非物理的なものまで、実際に切り捨ててみた実績のある日本刀。

「おっと、失礼」

振動する携帯電話を取り出す高城。
愛院はトキの新たな質問に答えつつ、タバコの煙を吐き出す。
タバコを吸いつつ、頭の隅で藍や高城に協力を仰ごうと考えていた。今回の事件は警察だけでは対処しきれないものだろうと。
協会の警察部隊と繋がりのある高城は緊急時の連絡網として役立ち、藍は純粋な戦力になりうると思った。鬼の力に加え、正規のものでないにしろ、オリジナルの陰陽術はもしかするとあの力に有効かもしれない。
問題は、トキである。
訓練を始めて2ヵ月ほど経ったという話だが、それでもトキが戦力になるとは考え難かった。

「え、犯人と？」

張り上げられた大声に、その場の全員が固まる。
それは、あまりも突然すぎる知らせだった。

内容はハルバート及びハンズが犯人と交戦し、負傷したというものだった。

第32話－Ｊｕｄｇｍｅｎｔ　ｏｆ　ｉｎｎｏｃｅｎｔ　ｂｌａｃｋ－（後書き

「トウコツ」

『たまの電話に出たかと思えば、今度は何だよ？』

「君はまだ協会所属のＳＲだ。
完全再生に会って伝えて欲しいことがある」

『あんだよ？
そいつぁ、ジャンヌの姐さんに伝えてもいいことなのか？』

「新鮮な死体が日本に出来上がる。
珍しい代物だ。
フフッ、彼の変質はジャンヌだって知っているハズだ。伝えたところで何も出来ないさ」

『フィング・ブリジスタスに、だな？』

「頼んだぞ」

混乱が続く。
世界の混乱を構築するのは、各地域に発生する小さな渾沌。
矛盾を生み、連鎖を紡ぎ、マイナスを創り出す。
いま、日本のとある場所でそれが起こっていた。

「白州唯か……
つくづく面白いことが続く街だが、何が引き金となっている？
芹真事務所か？
いや、カオストリガーになれるだけの要素が揃っていない。
やはり、貴様が原因か？トキ。ククッ……」

渾沌が行く。
高熱を我慢しながら、海を渡って。

まだ見たことのない、未知のＳＲを目指して。

第３３話－優先される灰咎－（前書き）

衝撃とは、無為を突いて初めて威力を有する。

或いは――

予測しつつも、夢と信じていたいと願ったことの望まぬ実現。

「授業中ですけど？」

「レンガ先生、警察の方からのご指名です。
村崎翼君。いますぐ相談室まで来てくれ」

指名された男子生徒は静かに席を離れ、廊下へと姿を消す。その様子を見守っていた教室内に、重たい沈黙が３年３組へと舞い降りる。

しかし、それ以上に重たい空気を纏っていたのが警察の２人組みが待機していた相談室であった。

「村崎翼君だね？」

「はい」

自分の行動に犯罪というものがないか、と聞かれると決して無いとは言えない。

――なぜ警察がここに呼んだのか。

それでも、翼には何らかの罪によって人に迷惑をかけたことはなかった。

「非常に残念な知らせがあるんだ」

封筒から取り出される数枚の書類。

そこには、見知った顔が2つあった。

「昨日、君の両親の亡き骸が発見された」

彼にとって、世界が暗闇に染められた瞬間だった。

「……あ、あの2人、が？」

自分を見捨てた2人に対し、例え死のうとも決して悲しみまいと誓ったハズだった。

しかし、その話を聞いた翼の心には、確かな悲しみが存在した。

第３３話－優先される灰咎－

風の吹く日の午後。

「抜け出した奈倉さんを探してきます」

「行く先には心当たりがあります」

「複数箇所、ですけど」

その説明に担任の登竜寺蓮雅は数秒悩みつつも納得する。

「じゃあ、６時間目の終わりまでに帰ってきなさい。出来なかったら月末の実践術部のレクリエーションに強制参加よ」

先に正門を潜り抜けて飛び出した奈倉を追って、３人は病院を目指す。

先頭を高城が走り、その後ろにトキと藍が続いた。

時間は遡って昼休み。

警察署のＳＲから高城の携帯電話に連絡が入ってから５分。

愛院はハンズという生きた目撃者に会うため、学校を抜け出す作戦を提案。学校を抜け出した愛院を連れ出すために藍、高城、時が名乗り上げるという作戦。

生徒が生徒を連れ戻す方針を決めた蓮雅は、時間制限を出しつつも3人の外出を許可した。

「まさか、ハルバートが負けるとは！」

高城の受けた連絡の中には意識不明のハルバートや、右腕を切り落とされたハンズのことが含まれていた。

警察に連絡を入れたのはハンズであり、彼は錬金術で自分の体を修復し、一命を取りとめたという。

損傷した高架橋では早急な修復作業が行われ、各電車は運行予定の変更や運行中止を余儀なくされた。

警察では殺人鬼の後を追ったが、足取りは掴めていないのが現状。

芹真事務所とホートクリーニング店は2人のことを聞き、すぐさま病院に駆けつけた。

「子供だ。
ゴス服着た金髪のガキだった」

しかし、ハンズが伝えた情報は僅かそれだけであった。

芹真事務所と学生グループに必要最低限の情報を伝えたハンズは、ディマやクワニーと共に器実験を潰しに行くと言って病院から消え去る。

その時のハンズの表情は、怒りで染まっていた。

病院に残されたのは集中治療室に入ったハルバートと、同僚を心配するジャベリン。

彼女を励ますボルト。
それから芹真と学生グループ。芹真はワルクスに連絡を入れ、藍たちには学校に戻るよう指示した。

「先行ってろ！」

が、愛院は言うことを聞かずに走り出した。
それだけ言って走り去る彼女。
慌ててトキや高城が跡を追いかけると、ハンズたちの戦闘現場に辿り着いた。

「なんてこった……」

愛院は関係者であることを説明し、警察所属の妖精のＳＲはそれを了承した。
現場に入る事を許可してもらう。
追ってきた2人も、高城の顔を見つけた妖精のはからいによってすんなりと現場に入り、その異様な光景に眼を疑った。

穴の開いた支柱。
断裂する柱。
パーツからパーツにかけて直線的に消失した車に、破れたフェンス。
穴だらけの地面。
不法投棄された粗大ゴミ。綺麗に刳り貫かれたような粗大ゴミ。

初めて見るその傷跡に、トキと高城の思考が停止する。
金属も、コンクリートも関係なく巻き込んだ消滅痕。
残された残骸が語る戦闘の激しさ。
銃撃が効かないことを聞かされ、触れる事が不可能な事を聞かされ、トキは初めて殺人鬼に対して恐怖を感じた。

「愛院、大丈夫か？」

消滅痕を穿たれた支柱の前に立つ彼女に、高城は声をかけた。
掘り返したくない、思い出したくない過去との再会。
それが彼女にどういった影響を与えるのか計り知れない。それ故に少しでも安心感を与えようと高城は考えたのだ。
だが、効き目があるとは思っていない。

「……」

沈黙する愛院の目は支柱から地面に穿たれた弾痕へと移る。
あのＳＲに銃撃は通用しない。
それにも関わらず、一錬金術師があのＳＲを退けることができたのは何故だろうか。
あまり多くを伝えてくれなかった錬金術師が憎く思え、しかし、ハンズが口にした最低限の情報で確信に至ったこともあった。

「エミルダだ」

一瞬の静寂。
トキと高城の脳裏に浮かぶ、ついさっきの話に出た少年。

「それって、例の3人目の？」

頷く愛院に高城は納得する。
犯人がわかっているなら、犯人の特徴を知る必要があった。
警戒するにしても、相手の素顔さえ分かっていれば緊急処置マニュアルだって作れる。

（いや、緊急避難マニュアルか）

断裂の入った柱を見上げて考える。
奈倉から犯人像を聞き出せたとして、果たして警察部隊が動くだろうか。
得た情報を少しでも活かして犯人逮捕まで持っていきたい。
しかし、警察側に残っている戦力は心もとなく、かといって本部に増援を仰いだところで、会長秘書が通話相手として出てくれれば増援は期待できない。

（仕方ない……芹真事務所に依頼するか）

意を決した高城は次に、愛院から犯人の特徴を聞こうと向き直り、

愛院の姿がそこになかったことに慌てた。
愛院と併せてトキの姿もなかったのだ。

高城に考えがあり、愛院には思うところがあった。
故に彼女はこの場を離れ、その後姿に不安を覚えたトキは愛院を追うことにしたのだ。

走り抜けた先は、街を見下ろせる高さにある公園だった。
春は桜が咲き乱れ、夏にはセミたちが姿を見せる。秋に落ち葉、冬は雪の積もった丘の上の公園をとなる。
息を切らせながら愛院はトキに聞いた。

「何で、ついて来た？」

愛院の背中を見つめ、愛院の呼吸が整うのを静かに待つトキ。

「一言で言えば、心配だからついて来たんだ」

「……心配？」

風が2人の間を吹き抜ける。

「奈倉さん、ろくに寝ていないだろ？
目の下のクマが酷い。そんな状態で走り回ったら――」

「ぶっ倒れるとでも言いたいのか？」

「いや、さっきの現場を見て本当にやばいんだなって、今更かもしれないけど、俺もそう思ったんだ」

「ホント、今更だな」

呆れた愛院はタバコを取り出す。

空に枝を伸ばす桜の木に触れ、風に靡く髪が肌に触れるのを感じ、肺一杯に吸い込む紫煙を堪能する。冷静を取り戻す思考が思い出させる。

「初めて会ったのも、今日みたいな心地良い風が吹いてる日だった」

「今回の犯人に？」

「ああ。

あいつがまだＳＲじゃない、ただの子供だった時だよ。

自分の姉貴がいなくなったってんで大騒ぎしてな。屋根の上で寝ていたアタシん所までわざわざ足を運びやがってよ……

見てられねぇくらい素直なガキだった」

記憶の中にあるエミルダという少年の２つの顔。

彼を凶暴な魂へと変えてしまったものは言うまでもない。

「なぁ、トキ。

パンドラプロジェクトがどれだけ酷いか知っているか？」

「いや」

「力が手に入るってことが、どれだけ魅力的で、どれだけリスクを伴うものかわかるか？」

「……わからない。
その、エミルダって子もＳＲという力に魅了されて復讐に走っているって言うのか？」

愛院は頷く。
力がなければ復讐は果たせない。
逆に言うと、力を持ってしまえば復讐は誰にでも可能になるのだ。
果てしない怨鎖は復讐・報復によって長く、また永く繋がり、規模を拡大する。
報復に次ぐ報復。
力によって下される裁き。または、能を駆使した反撃。
それが、復讐である。

「力に魅了されて復讐を始めるわけじゃない。
パンドラによって発現を強いられた人たちは、否が応にもＳＲとの生活を余儀なくされる」

愛院は自分を指した。
トキや自分のように、意思によって力を解放できるＳＲもいれば、

意思に関係なく勝手に解放してしまうＳＲも存在することを説明する。
解放、或いは制御しきれないＳＲの存在。

「パンドラの蓋は開けちゃいけない。
伝説通り、あらゆる善悪が詰まっているんだ。
人が開けて、制御できるなんて考える方がおかしいんだよ」

道徳的にも間違っていると愛院は言う。
現在、パンドラという名の実験は消えたものの、その跡継ぎとなる器実験はいまだに行われている。
被験者の希望・非望を問わず、発現を強制するその実験はすべて、協会と対決する為の過程。

「でも、私は彼らを応援したい気持ちもあるんだよ。
器実験さえなくなっちまえば、この世の悲しみの芽をある程度摘み取れるんじゃないかって、そんな気もする……」

「じゃあ、奈倉さんは犯人に遭遇したら犯人の手助けを？」

軽く戸惑うトキの質問に愛院は微笑んだ。

「さぁな。
話しかける前に殺されるかもしれないし」

微笑の内側に恐怖があり、共感があった。
その２つの感情が混乱を招き、判断を鈍らせる。
殺されたいのか、生き延びたいのか、助けたいのか。
自分が何を一番に望んでいるのか分からず、愛院は話を逸らした。

「ところで、ここまで追ってこれたのは、お前のＳＲか？」

戦闘現場からここまで来るのに所要した時間は２分。
ビジネス街を抜け、商店を駆け、住宅街を飛び渡ってココまで来た。距離にして約３ｋｍ。それなのにトキは離される事なくついて来た。
しかも呼吸に乱れがない。

「まあ。そうだけど」

「……そうか。思ってた以上だな」

タバコをもみ消し、熱が冷めたところで吸殻を制服の襟の裏側に押し込む。
トキが訓練を始めたことは聞いていた。肉体トレーニングからＳＲの使い方に慣れる訓練まで、様々な方法によってスキルアップを計っていると。

「もしよかったら、今夜一緒に来ないか？」

「今夜、どこに？」

春風が吹き抜ける。

白州唯に吹く風は、まだ止みそうにない。

「何かな……

思い付きって言うか、そういう気になれたって言うか……

今まで、私の後ついて来れた奴なんて滅多に居なかったからな。

何人かいたけどさ、みんな死んじまったし」

「……？」

「何で怯えていたのか、ここに来た瞬間忘れちまったんだ。

多分トキのお陰だ」

「はい？」

「シメにひとつ質問するが、トキは信頼できる知り合いはいるか？」

突拍子過ぎる質問。

繋がりの分からない会話。

とりあえず主導権が彼女にあることだけは理解できる。

「コウボウとか、崎島さんとか……」

「SRでだよ」

「……それなら、藍に芹真さんにボルトとか」

「私はお前を信用していいか？」

「え？」

逃げ続けることに意味があるのか。
改めて自分に言い聞かせ、ハンズたちが交戦したことを思い出し、彼女は立ち向かうという勇気を思い出していた。

「まさか、殺人鬼を追うとか？」

「手を貸してくれないか？
やばそうだったら逃げ出しても構わないからよ」

トキがどれだけ戦力になるか分からない。
それでも、愛院は信用できるメンバーであの少年に立ち向かいたかった。
1人でエミルダを止める事は出来ない。だが、高城や藍、トキがいれば最悪仕留めることも出来る。

「オレなんかでいいなら協力するけど、犯人の行動は分かるの？」

自分がどれだけ戦力になるかわからない。
トキは自身の力に疑問を抱いていた。
触れたモノから時間を奪うクロノセプターは、触れた瞬間、触れた場所を消滅させるＳＲに通じるのだろうか。
銃弾も通じない、刃物も通じないらしいＳＲを攻略するには、本体を狙うしかないと奈倉は言っていたが、自分にそれができるのか不安だった。
そもそもチャンスがあるのかすら不明なのである。

（殺人を止める。つまり、俺達でパンドラの子を倒さなければいけないってことだよな……）

それは最悪、命を奪うということを意味する。
攻撃のチャンスの有無に加えて、人を殺めないといけないのかと考え、トキは沈黙した。

芹真事務所。
この事件を止める方法を、ボルトは何パターンか思い描いていた。
自分の正体に気づく者が1人も居ない事務所にて、光の魔女は微笑みながら紅茶を楽しむ。

「殺しちゃうのは簡単だけど、折角だから駒として動いてもらいた

いわね」

そもそも、対協会用ということを前提に発現を強制されたＳＲである。

「全く……コントンはやる事成す事、雑ね。
もっと協会を掻き乱し、振り回しなさいよ」

協会が連続殺人犯を捕まえることは出来ないだろう。
ボルト　Ａ　パルダンは笑う。

協会部隊と当たらせるのも悪くはないが、ハンズの話を聞く限り犯人は体力に自信のある子供ではない。
裏で支援するのも悪くないが、今の姿・状態であることをなるべく悟られたくなかった。

「四凶も動いてくれないでしょうし……
あ～、でも、武装派なら動いてくれそうだし～」

協会部隊との戦闘で両者の相打ちも愉快だが、協会が本気で討伐部隊を送ってくることはないだろう。あまり協会の戦力を削ぐことは期待できない。
武装派をこの街に入れても悪戯に死人を増やすである。
最も望ましいのが、四凶のキュウキに誘導してもらうことだが、光の魔女に酷い嫌悪を抱く彼女は期待できない。すぐにこちらの思

惑を見抜くだろう。

「非武装派の人達にでも売ってみようかしら♪」

彼らの戦力こそ今のうちに削いでおかねばならないモノのひとつであった。

ボルトにとって連続殺人鬼など取るに足りないものであった。本当に厄介なものが暗躍する世界で、ボルトが最も注目する勢力が協会とナイトメア非武装派であった。

「珍しいＳＲだから食いつくでしょうね」

事務所のソファに腰掛けた光の魔女の体から光が漏れる。

外に見える夕の空。

やがて訪れる夜を前にし、光の魔女はその姿を変えた。

「……あれ？」

テーブルの上に広がるティーセットにボルトは疑問を抱く。

コーヒーやココアは好んで飲むが、１人で事務所にいるときは滅多に用意して口にすることがない。

自分が寝ていたものだと瞼を擦り、ティーセットを片付け、冷蔵庫の中を漁る。

数秒前の自分がどんなことを考えていたのか、など記憶にないの

だった。

それでも、光の魔女が送り飛ばしたメッセージは、すでに近隣の非武装派ＳＲらに届いていた。

廃工場。

何を腹に詰めようと満たされることはなかった。

夕の空が黒を孕み、刻が容赦なく針を進めていく。

吹き続ける風に軋むトタン板を見上げ、村崎翼は放心していた。

告げられた事実を受け止められず、学校を抜け出し、走り続け、辿り着いたのが住み着き慣れた丘の上の廃工場だった。

静寂に包まれた夕焼けの中、貴重な光源であるランタンのスイッチを捻り、大の字になって空を仰ぐこと数時間。

頭の中は両親の死と、学校から逃げ出したこと、悲しみまいと意を決していたにも関わらず流れた涙のことでいっぱいだった。

アパートの火災によって夫婦が死亡。

焼け跡に残された遺留品の中から身元を判明。次に夜逃げした――焼け死んだ――夫婦に子供がいることが発覚し、報せに来たのだ。

翼には、両親の死が想像できなかった。

自分を置いてまでして逃げ延び、生き長らえた両親。その呆気ない終わり。

身の回りのほとんどを持ち逃げ出し、名前と僅かな服、空き家同然と化したボロ屋だけを残して逃げたあの2人。

いつかは名声を手に入れ、見かえそうと目標を掲げていたのに。

何もない状態から成り上がり、見かえし、救おうとしていたのに……

「何の為に……努力してきたんだ」

初めて受けるあまりにも大きな衝撃。

涙は流したくない。

それでも流れた雫が、翼自身に気付かせる。

どんな扱いをされようと、どんな状況に取り残されようと、彼らが自分の両親であったことに変わりはない。それは何者にも置き換えられ難い事実であり、誰にも譲ることのできない関係だった。

親の為に流す涙に、正誤はあるのだろうか。

涙を流し、想うことは当然なのだろうか。

翼にはそれが分からない。

（この虚しさは、孤独……か？）

風に舞う埃が、オレンジの光を受けて空中に漂う。

暮れる日。

夜に沈む街。
晴れない心のまま過ごす時は、普段よりも重く、長く感じられた。
気を紛らわせる術も知らず、体を動かそうにも思うように動いてくれず、食料も喉を通らない。

夜になっても止まない風の中に、風とは違う音が響く。
それまで動けなかった翼の体に力が戻り、その音の正体が足音であると識別する。
ゆっくりと、警戒しながら中へと入ってくるその足取り。
翼はランタンを、影を動かして自分の位置と存在を示した。

「君は……」

通路の影から姿を見せたのは、先日道端でぶつかり合った少年。
姿は相変わらず、黒いゴシック系の服飾に身を包んだまま。ただ、今日は花の盛られた籠を持っていない。

「やぁ、少年。
外は埃が酷かったであろう。シャワーでも浴びるかい？」

それまでの空虚を心の奥底へ押しやり、翼は少年を手招きした。

はぐれた藍や高城と合流し、全員が学校に戻ったのは放課後も半ば過ぎたあたりだった。
４人、特に奈倉は厳重注意を受け、更に月末の実践術部の活動へ絶対参加するという罰ゲームが下された。トキや高城も参加が決まり、しかし、途中経過を秘密裏に報告していた藍は辛うじて罰則免除。４人が学校を出たのは放課後が終わってからである。

「何かよぉ、戻ってこなかった方が良かったんじゃないか？」

無駄に長い時間説教を聞かされ、げんなりとした面持ちで帰路を行く高城。
しかし、愛院やトキ、藍は首を横に振った。

夜が来る。
殺人鬼を追う支度をする為、４人の足はトキの家へと向いた。
ひと気がないから心置きなく準備でき、相談できる。

４人が色世宅の玄関を通過する頃、夕日は地平線の彼方に消えるところだった。

「ナイトハントになるな」

リビングの窓から外の様子を窺う高城が呟く。
学校指定の制服から黒尽くめの私服へと着替る。ブラックジーンズに、タンクトップ。タンクトップの上から革製のショルダーホル

スターを装着し、銃を収めていく。更にその上に黒いジャケットを羽織って装備を隠す。

「なんねぇよ。
こっちから追うってだけで、余裕があるわけじゃないんだ。何がハントだ……」

煙を吐き出しながら奈倉が言った。
黒いハイネックに首を通し、腕まくりしてプロテクター付ハーフフィンガーグローブを着用する。それから、迷彩の施されたダメージジーンズに取り付けられた専用シースに数本のナイフを収める。刃物の準備をひと通り終えると、次に銃の点検を始める。銃撃が効くとは思っていないが、万一の場合に備えた保険である。

真紅地で黒いチェックのスカートに、デニムジャケットを羽織り、テーブルに立て掛けた理壊奏淵破界（リカイソウエンハカイ）を手に取って振る藍。
触れることのできないSR相手に、対応できるか不安があったが、装備はあるに越したことはない。
ジャケットの下に潜ませた術符も確認し、日本刀を手に取る。

（いざとなったら、生死繋綴（コレ）を使うしかない）

緊張した面持ちで刀を見つめる藍。

その脇でトキは黙々と準備を進めていた。たった一人の子供に会うために、これだけの準備が必要であるということに後ろめたさを

感じずにはいられなかった。
リビングのあちこちに置かれた武器の数々。愛院の持ち込んだ商売道具。
対人用の物から対ＳＲ用の得物まで、剣から銃器に至って揃っていた。どこから取り出したのかも僅かに気になったが、それよりも本当に殺人を止めることができるのかが心配だった。

「気が進まないか、トキ？」

心を見透かされたトキが固まる。
手にしたＨ＆ａｍｐ；ｋ　ＵＳＰ　ＴＡＣＴＩＣＡＬを見つめ、引き金を引かないことを願っている自分に気付いた。

「俺もだよ。
死にたくないし、年下の子供と戦うってのは気が引ける」

頷くトキ。
そんな2人の間に、愛院は割ってはいる。

「それじゃあ、私と藍で街の各所に結界を仕掛けてくる」

トキと高城に言い聞かせ、愛院と藍はテーブルの上に置いておいた設置用の術符を手に取る。

これから行われる計画を簡単に言えば、犯人を自分たちの足で見つけ、トラップを張った場所に犯人を誘導。そこで説得するか、或いは仕留めるというものである。

暗闇の中において、相手のＳＲを躱すことは困難である。そのために藍の術符と華創実誕幻が役に立つ。夜闇を藍の術で照らし消し、確実に回避可能な場所を作り出すのだ。

先に藍と愛院のペアが出発し、術符を設置がてら歩き回って犯人を捜す。時間差でトキと高城が先発した藍・愛院とは違うルートで少年を捜索する。

直接相手の顔を知らないトキ、高城、藍はそれらしき人物を発見したら愛院に伝えるという方法で行われる。

効率が良いとは決して言えない。

途方もない作業であり、今日中に目撃できるかすら怪しい。

だが、誰も異論を挟むことはなかった。

これまでの犯行から、夜の活動が多い。

風の止まない夜に４人が乗り出す。エミルダという名の少年を見つけ、殺人を止めるために。

「なぁ、トキ」

家を出て間もなく、高城が口を開いた。

なるべく人目に触れないように物陰や人通りの少ない道を探して歩いている時である。

緊張して固くなっているトキは、誰かに目撃でもされたのかと心配するが、高城が声を掛けたのは注意や警戒の類ではない。

「上からは内緒にしておけって言われている話をこれからする。今はあまり深く考えずに聞いて欲しい」

「はぁ……」

「今、この街とその周辺には過去に例を見ないほど多くのＳＲが集結している。

芹真事務所を始めとし、

ホートクリーニング店、

中国人密輸組合、

黒羽商会、

ナイトメアの武装派や非武装派、

それから俺みたいな協会のＳＲ、愛院のような完全無所属も……

更に特級風使と空間殺し。それからＭｒ．シーズン。

未確認ではあるが、マティス・フォーランドを目撃したという情報も寄せられているらしい」

緊張で固まっていたトキの頭に、聞き覚えのある名前が飛び込んでくる。

「黒羽商会が？何で？」

「詳しくは知らないが、芹真事務所が呼び寄せたらしい」

脳裏に浮かぶ、飛行艇内の戦闘。

獄炎の中での死闘が鮮明に浮かび上がってくる。

またあいつらが来た。

しかし、なぜやって来たのかがわからない。しかも、呼び寄せたのが芹真事務所。

自分の知らない水面下で何か、事が進んでいる。

「だが、トキ。

一番の問題はセブンス・ヘブン・マジックサーカスのＳＲ達だ」

「え、あの……黒羽商会以外、ほとんど知らないんですけど」

自分の所属する事務所とその経由で知り合ったクリーニング店。

それから高城先輩と奈倉さんのこと以外。

ミスターシーズンなんて、名前こそ分かり易いものの、どんな人物でどんなＳＲなのか一切の情報を持ち合わせていない。

「いま肝心なのは、ＳＨＭサーカスの団員の１人だ」

それ以外のメンバーについては後日詳細を伝えると言い、高城はその団員について話し始める。

「手短に話すと、その団員も元カナダの上院議員に床を与えられた子供の１人だった」

「それって、生存者ってことですか？
殺人鬼と同じように……」

「ああ。
もしかすると、この国で起こっている事件を嗅ぎ付けて来たのかもしれない」

「じゃあ、その人もＳＲ？」

「ああ。その可能性はとても高い。
名前はザイツ・バクライアン。男性で、見習いのパントマイマーということでＳＨＭサーカスに所属しているが、肩書きが見習いというだけで実際のところはＳＨＭサーカスの主戦力に数えられる１人だ」

暗い道を進み、人気の無い場所から人通りの多い通りを眺め、それらしい人影を探す。

「今回の事件……たった１人の犠牲者（こども）が多くのＳＲを動かしている。それは分かるか？」

「わかりません」

「犯人を仲間に迎え入れようと不法に入国しているＳＲも報告されているし、空港や港では逮捕されているやつらも居る」

携帯電話を取り出して愛院に報告する。

それらしい子供を人ごみの中に見つけたが、特徴と僅かに違うので自信がない。
トキに考える時間を与え、その間に掛けた電話の向こうからは特徴を求める愛院の声と、車両による騒音が混じり合って届いた。
視界に捉えた子供の特徴を素早く伝えていくが、愛院は即座に違うことを指摘して電話を切り上げる。

上司たちからこの事件を早めに片付けるため、協力するように言われていた。
白州唯という街で問題が発生するたびに、世界中のＳＲたちが隙を見て日本への侵入を試みるらしい。
目的はわかっている。
芹真事務所とホートクリーニング店の連合。

そして、色世時だ。

圧倒的で巨大な協会という組織に楯突くナイトメアは、武装派・非武装派問わずに人材不足であることを否めない。
世界各国でゲリラ戦を展開することすら最近は危ういという現状にまで陥っている聞く。
そんなナイトメアにとって、色世時やエミルダ・レザロッテという少年は絶対戦力となりうる存在だった。

トウコツを倒し、黒羽商会の牛人と引き分けた学生。トキ。
アヌビスを屠り、圧倒し、錬金術師の腕を切断した少年。エミルダ。

絶大な力を持つことを咎めはしない。
だが、その力を若いうちから披露していては後の人生が厄介になる。

スカウトに次ぐスカウト。酷い場合は、拉致・強迫されることもあるという。

「ナイトメアは、どうしても協会を転覆させたいんだ……」

呟いてみる。

芹真さんや藍、ボルトはあまり協会のことを話さなくなった。

事務所に来たばかりの頃は基礎知識ということで何度か話を聞かされたが、最近はあまり聞かない。

それにあまり真剣に全体のことを考えたことがない。

協会の何が気に入らないのか。四凶を囲っていることは確かに納得がいかなかった。母さんもその犠牲になり、クラスメイトも殺されかけた。

しかし、それだけで戦争を仕掛ける必要があるのか？

思考が途切れる。

何かが頭の隅に引っかかった。

トキはその引っ掛かりが何なのか思い出すことに全力を注ぎ始めると、高城は川沿いへと進路を変えた。

「それじゃあ、今日はまだ何も食べていないのか？」

「はい……」

風が補強された壁の隙間を縫って吹き付ける。
廃工場の中心でコンロに乗ったやかんを囲む２人。

ジャージ姿の学生と、隻腕の少年。
翼は沸騰するやかんを手に取って傾け、蓋の開いたカップ麺の容器２つに熱湯を注いだ。
それを静かに見守るエミルダは、漢字で書かれた『醤油』の読み方をぼんやりと考えてみた。が、読めない。

差し出された割り箸の乗ったカップ。

「このカップ麺は３分待てというところをもう少しだけ待って、３分４０秒経過した頃に食べると中々美味だぞ」

待ち時間に自分が持つ些細な知識を公開する翼。
その話にエミルダは静かに耳を傾けていた。

風除けの板が揺れ、天井の割れた照明が揺れる。
４月にしては適度に温かい夜だった。
久々の来客のせいなのか、翼は自分の口調が軽いことを実感する。
寂しさは紛れたが、今度は空腹が襲ってきた。

（すでに４時間か……）

エミルダが廃工場を訪れてから幾分か時間が経ち、外は完璧に闇で包まれていた。シャワーの場所を教え、体を洗っている間に食料庫からカップ麺を取り出しくる。

汚れに汚れたゴシックロリータ服を預かり、予備の服をエミルダに与え、預かった服を洗濯する旨を伝えた。

それからガスコンロのボンベを確認して点火し、やかんに水を汲んで持ってきて火にかける。

沸騰するまでの時間を利用して2人は自己紹介を済ませ、静かにやかんが声をあげるのを待った。

エミルダがしきりに周囲に目を配っている。

その姿を見て、翼はこの廃工場に住み着いて間もない頃の自分を思い出した。

この工場が元々なんに使われていた工場なのか翼は知らない。が、撤去されることもなく、また誰も近寄らず、住み着いても誰も咎めに来ないことから、翼はここを自分の家として生活を送ることを決めた。

日の当たる場所、水の溜まる場所、風の吹く場所など、廃工場内のあらかたを観察し終え、自然と廃れた人工物が織り成す恵みを最大限に利用して生を繋いでいる。それがこの場所であり、翼の広すぎる我が家である。

食料の保管に適切な場所、服を掛けて置くのに最適な場所、床としてふさわしい場所。

驚くべきことにこの廃工場にはそれら全ての条件を満たす箇所が存在していたのだ。初めのうちはその恩恵に気付くことなく不自由な生活していたが、今ではこの環境に感謝の気持ちを感じない日などないほど恵みを受けていた。

食料が少しでもあるなら、そして冬の寒さが襲ってこない限り、

この廃工場は人が住めない環境では決してない。

「さぁ、食べようか！」

時間が来る。
威勢良く麺を啜る翼。
翼が食いつくのを見て、床に置いた容器から麺を掬うエミルダ。
彼の上手な箸の使い方に翼は頷きつつ、スープを味わう。

何の変哲もない醤油味のカップ麺。
心なしか、いつもと同じ味とは思えなかった。
そんな時である。

「お腹、空いていないんですか？」

一瞬の白闇が思考を遮った。
箸が止まり、舌が止まる。
しかし、何事もなかったかのように翼の思考は再び正常に動き出す。

「いや、腹は空いているが……君はどうだい？エミルダ君」

「……ペコペコです」

エミルダの返答に納得して頷き、再び麺を掬って口へ運ぶ翼。
そこへ新たに質問を寄せるエミルダ。

以前、一度ぶつかり合った時の翼は、もっと明るい人間だった。
記憶の中に刻まれた、初めて会うのに優しく微笑んでいた人。
それが翼だ。

「何か、あったんですか？」

今、翼という人間は悲しみに包まれ、無理に振舞っている。
それがわかってしまった。

質問に再び止まる翼。
しかし、少年に心配掛けまいと否定を表現する。

「ところで、君は大丈夫か？」

今度はエミルダの箸が止まる。
その反応を見逃さなかった翼は、まずいことを聞いたものだと後悔した。

誰にだって関わって欲しくない関係（もの）、思い出したくない記憶がある。

「何が、ですか？」

「君にだって帰る場所はあるだろう。
しかし、夜はなるべく出歩かないようにした方がいい。そう思ってな。
最近この付近も殺人だ何だで大騒ぎしているから――」

「……大丈夫です」

「だが、万一を考えて今日だけ泊まって、明日の朝にでも戻れば大丈夫ではないか？」

宿泊を提案する翼の表情を少年の瞳が観察する。
警戒するエミルダに気付き、翼は自分の置かれた状況を再認した。

ひと気の無い廃工場。
あまり面識のない男。
馴れ馴れしい接し方。

（これでは私が怪しい男だな）

加えてクラス内、学校でのあだ名がエロティカであることを思い出し、変人という意味で間違っていないことに気付く。

怪しまれて当然だ。
この工場内には助けてくれる人など誰もおらず、また住宅街からもある程度距離がある。
更に、ここはよく隔離地域と呼ばれている。

認めたくはないが、隔離された場所という表現は間違いではなかった。
それにこれまでの質問も深読みするように考えてみれば、殺人鬼と勘違いしてしまう可能性だって考えられる。
子供は大人以上に悲愴や殺意に敏感だとも聞く。

「あ、それがダメなら送って行こうか。
２人で一緒に行けば襲われることもあるまい」

「……ぁ、いえ、あの……
翼さんは、大丈夫なんですか？」

「うん？」

雫が右手を叩く。
冷たい何か。
感触が固体でなく、液体であることを教えてくれる。
エミルダに言われ、その感覚を経て、翼は初めて自分が涙していることに気付いた。

「な、あれ？
ハハッ、どうしたんだろ？」

「どこか、痛いんですか？」

「そんな、ハズは――」

半分以上も残っている容器を置き、翼は立ち上がった。
鏡の残っていた部屋へと体を向け、重い足取りで進む。

これ以上、少年に不安を与えたくなかった。
何故、涙が流れてきたのかわからない。
何がそれを誘ったのかもわからない。
だが、初めて会う人間が涙すると、一緒にいる者は気まずくなる。

鏡に映る自分の顔を覗きこみ、頬に雫の通り道ができ、目が赤くなっていることを知った。

「大丈夫、ですか？」

エミルダの前に戻った翼は無言で頷く。
腰を下ろして一息つき、麺の残る容器を持ち上げる。

「ふむ。おそらく、今日の風に乗った花粉にでもやられたのだろう。
そういえば鼻もムズムズするな」

「あの……聞いて、いいですか？」

「ん？
何かな？」

一呼吸分の静寂。

風だけが音を奏でる夜。

その日、翼は初めて自分の知らない、もうひとつ世界に触れた。

「翼さんはＳＲ、ですか？」

「えす……？」

２人の間に訪れる静寂。

風だけが時間の流れる知らせてくれる。

少しは考えてみるが、エミルダが何を期待しているのか翼には理解できなかった。

「それは映画かパソコンゲームかな？」

沈黙するエミルダ。

しかし、目はすでに翼を捉えていない。

その視線の先を辿るよう、翼もエミルダから目を外して周囲を窺う。

特に変わった何かが見えるわけではなかったが、確かな変化が周囲で起こっていた。

それに気付いたのが、窓のカーテンに目が向いた時である。

「風が止んだようだが……？」

しかし、それが異常だった。
朝方から止まなかった風が、一切なくなってしまう。それも一瞬ではない。風が止まったことを認識した瞬間から一斉に風は止んだのだ。
天気予報では、まだまだ吹き続けるという話も出ていた。

「こんばんわ」

風の音に替わり、冷ややかな声が廃工場内に響いた。
翼とエミルダの目が入り口に立つ3つの人影に向く。
子供2人を見据える3人の大人。

穏やかでない雰囲気を読み取った翼は、一歩踏み出してエミルダの前に出た。
相手が何者なのかはわからないが、警察でないことだけは断言できる。

「うん？
何か話に聞いていない人が居ますね？」

「知らねぇよ。とっとと終わらせようぜ。うるせぇ奴らが来ちまう」

「……くすッ」

眼鏡を掛けた男の目が翼に向き、立体マスクをつけた女性が笑う。

２人の東洋人と、１人の外国人。
眼鏡の男と、マスクの女性。
そして、大鎌を持った茶髪の男。
翼の目は、露骨に大鎌を担いだ男で止まっていた。無意識的にエミルダを隠すように手を広げて向かい合う。その姿を見て真っ先に頭の中に浮かんだものが連続殺人鬼であった。

「どうかしましたか？」

相手の意図を掴もうと質問した翼に、外国人が答える。

「あのさぁ、俺らそこの子供に用事あるんだけどさぁ、どいてくんねぇ？」

邪険にされる翼を心配そうに見上げるエミルダ。
その視線に気付き、翼は一歩後退する。
相手の目的がはっきりしないため、下手に距離を縮めたくなかった。
その危機感を十二分に誘発しているのはもちろん、大鎌を持った男の存在そのものである。

「よぉ、少年。
俺達は手荒なことしに来たわけでも、誘拐しに来たわけでもねぇ」

翼の横に立ち、背後に隠れるエミルダに対して男は腰を落として言った。
ただ、ほんの少しだけ話がある、と。
目と目が合う。
入り口側に立つ2人が少年と男のやり取りを見守る。

「お前はパンドラの子か？」

「パンドラ？」

真っ先にその言葉に反応したのは翼だった。
不安ゆえに聞き耳を立てていたが、男から発せられた言葉は予想だにしていなかったもの。
翼は不意を意表を突かれ、つい鸚鵡返ししてしまった。

「お前には聞いていない。
俺はガキと喋ってんだ」

鎌を握る手に力が篭る。
肝心と思った単語を頭でリピートしながら翼は口をつぐんだ。
下手に相手を刺激してはいけないと、人生経験が警告を発す。
まして、相手は狂気的な得物を携えているのだ。素手の、しかも喧嘩とは縁遠い学生には万一の勝機などない。

「ところで君は何者だい？」

大鎌の男に替わって眼鏡の東洋人が翼に質問を投げ掛けた。
一目で日本人でない――高確率で中国人である――ことは分かる。

「ここの住人とだけ言っておこう。
名前はそちらが先に名乗るのが礼儀では？」

「かもしれないな。
私はギュン。ギュン・パクフォンだ。
隣の彼女はキリ。
そして、君の隣の鎌男はダイアンという厄病神だ」

自分から言い出した礼儀を守るために名乗る翼。
その傍らでは質問を終えた男：ダイアンが立ち上がり、翼を見下ろした。

「こいつぁ、ただの人間か」

「ああ。ただの人間だ。
ならば、あんたは何なのか教えてくれないか？」

「ただの疫病神さ」

笑うダイアン。

呆れたギュンは引けと言った。
翼に対してではなく、ダイアンに。

「何らかの誤解を与えたようだから説明するが、僕達の目的は忠告だけだ。
翼君。
君の後に隠れている少年を巡って色々怖い連中が集まりだしている。ここに来る途中も何人か見かけた」

再び風が吹き始める。
翼は静かに、後退した。
目的がエミルダと分かった以上、むざむざ見知らぬ人々に晒すわけにはいかない。

「怪しさなら君も充分だがな」

ギュンの一言に図星を指される翼。
更に心の内を読まれた動揺が重なる。

「逃げるなら急げよ。俺らはここでバラすのも悪いとは思っていないんだぜ？」

大鎌が肩から降り、コンクリートを抉る。
しかし、それ以上動かない——動けない——ダイアン。

「僕らと違って、次に来る奴らは誘拐も平気でする連中だよ？
早く逃げたほうがいい。
これは一切他意のない、君たちを想っての忠告だ。信じるかどうかは別だが」

「クスクス」

ギュンの隣で笑う女性の手に、ショットガンが握られていた。
ベネリＭ３スーパー９０。
本物か否か、翼に判断は出来なかったが、自分達が不利な状況に置かれていることだけは理解し、下手な行動を控えた。
抵抗を諦めた翼を見て、そこで初めてギュンは思い至る。

「あれ？
ところで、出入り口はここ以外ないの？」

「行くならとっとと行きやがれ。
俺らはよぉ、そのガキが奴らの手に渡るのを考えると面倒臭ぇって気付いたから、わざわざ忠告しに来てやったんだぜ。
それも折角のバケーション中に、だ！
わかったら早くここを去りやがれ」

振り上げられる大鎌に恐怖を抱き、それをきっかけに翼は走り出していた。
最低限の道具をポケットの中に入っていることを頭の隅で確認し、

裏口へと向かう。

「行くぞ！エミルダ！」

少年の右手を引いて廃工場の奥へと走り去る翼を見守り、３人は反対側へと目線を移した。

「ダイアン。
あの少年……あの子供は、本当に噂通りのＳＲだったか？」

風に紛れて何かがこの工場に迫る。
風に押されて翼という学生と、エミルダ少年が廃工場から遠ざかって行く。
生命の存在を知覚しながらギュンはダイアンに聞いた。
マスクを外しながら、キリもダイアンの返答に耳を傾ける。

「ああ。間違いねぇ。
ありゃあ、パンドラの遺産だ」

「クス……例の？」

珍しく真剣に話を聞いてくれるキリにダイアンは頷く。
風に紛れて接近するＳＲの迎撃準備を進めつつ、ギュンはその名を口にした。

「“神隠しのＳＲ”か……」

大鎌を素振りするダイアンを横目に、ギュンは風吹く夜空へと飛翔する。

それに続いて忍のＳＲ：キリ、死神のＳＲ：ダイアンが飛んだ。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

―第３３話―

―優先される灰咎（かいきゅう）―

「おい、クソ武者共！
お前らとバーンでそいつら止めろ！」

『んだとゴルァっ！
相手は全滅舞曲だぞ！テメェが足止めに来やがれ！』
『ダメだ！
サイキッカーまでいるし、他にも誰か居――！』
『ハリソンがやられてるぞ！援護しろ！』

悲鳴に沈む通信相手に見切りをつけ、通信機を投げ捨てる。
うまい話には毒があるというのはまさに現状（それ）だった。

1人の魔法使いと、1体の天狗は風に乗って目的のSRを追う。
匿名の情報を得た2人は、神隠しが日本にいることを教えられた。
今すぐ接触するなら捕獲は容易い、というアドバイスも添付されて。
日本に在中のSRで且つ有力で拉致に向いた能力の者達を集め、
魔法使いは直ちに行動を起こした。
その矢先に無所属派SR3人との遭遇である。
予定外の遭遇は、想像以上の絶望を与えるに充分だった。
死神、サイキッカー、忍者。
落武者だろうと、魔法使いだろうと関係ない。
奴らはこちらの全員を葬れるだけの実力と相性を兼ね備えていた。

「何だってんだよ！」

悪態をつく魔法使いに天狗が警告する。

冷静さを取り戻さなければ神隠しを捕獲することは不可能だと。
本当に相手しなくてはならないのは死神たちではなく、神隠しの力を持つ子供である。

（子供があの力を制御できるものなのか？）

天狗のそれと同じ懸念を抱く者がもう1人いた。
哭き鬼の藍であある。
天狗と違って、実際目の当たりにしたことはないが、肉親からその話を聞いたことはあったのだ。
今になってそれを思い出し、しかし奈倉にはその事を伝えていなかった。

（もし、愛院の探す少年が神隠しのＳＲなら、見つけ出したところで愛院の手に負える相手じゃない……）

過去に藍は兄から教わったことがあった。
神隠しに触れるということは、一切との決別を意味すると。

本来、神隠しのＳＲは自然の中にしか発生しない。
亡くなった者達の“残留思念／未練”が生み出す消滅願望。
個人が他者に抱くその力は、自然にしか発生し得ないものであり、決して生命に宿ることはない。
自然に発生するという性質は、厄介なことに人の意識下にないため発生を予測することは不可能。

それでもアサは藍に幸運だと言い、藍はそれを覚えていた。

（人が復讐の為に使う……
それを止めるとなると、これ以上に脅威を振り撒く力はそうそう無い！）

聞いた話の中には、陰陽術や魔法、抗魔戦術をも無効にしたという前例も含まれていた。
だが、それらはあくまで自然に発生した神隠しについてである。

パンドラがそれを人に宿すことに成功していた。
発現と言うより、憑依に近いものがあるが、しかし、ＳＲの中ではずば抜けて殺傷力が高い代物である。
加えて、自然の神隠しと同じ対処法が効くという保証がない。

「俺達だけで捕獲できるかな？」

そもそも捕獲できるものなのか。それすら疑問だった。
天狗の呟きに魔法使いは怪訝な表情を見せた。
ここまで来て弱音を吐かれても困る。
相手が子供なら苦戦はありえないが、念には念を入れてメンバーをかき集めたのだ。絶対確実を第１に。
集まった人数こそ少ないものの、全員が実力者。落武者だろうが、剣の使い手であることに間違いは無い。相方も魔術師達の中で見れば高い地位におり、また拉致などを得意とすることから人材補給部隊の中でも特別扱いされている。

しかし、集まったメンバーの中で最も始めに不安の声を漏らしたのが相方の天狗のＳＲであった。

第３３話－優先される灰咎－（後書き）

日付が変わり、風が弱まった頃。
白州唯から２つ隣の県で、４人のＳＲは戦っていた。

武装派の器実験場を知り、それを潰すためにやってきた。
高速道路の上から僅かに姿を確認できるほど山に隠れた食品工場。

『ディマ！
第２資材庫に逃げ道があったようだ！そっちへ間に合わないか！？』

４月１９日　ＡＭ０２：１０

工場の正面と裏側の東西入り口からディマとハルバートが突入し、南北の出入り口からハンズとクワニーは突入した。

『売買業者は！？』

『そいつらなら俺の方で捉えた！』

紅蓮に包まれた食品工場の包装区画で錬金術師は任務の失敗に耳を傾けていた。
爆音混じりに伝わるハルバートの声に、クワニーが続く。

『逃げたのは購入者と研究者だ！』

『こっちは厄介なＳＲに足止めされているわ！』

怒声が行き交う中、ハンズは自分の現在位置を壁に掛けられた見取り図で把握し、工場を後にした。

工場の出口から東を目指せば先回りすることが出来る。

それを知り、目標人物らの逃げる方向に自分達の拠点である店があることを思い出す。ハンズは携帯電話を取り出して迷わず芹真事務所へコールした。

第３４話－Ｉｎｔｏ　ｔｈｅ　Ｗｉｎｄ－（前書き）

気だるい。
それでも受話器が鳴っている以上、取らなくてはいけない。
何故ならそれも仕事の内に含まれるからだ。
仕事を怠ったところで給料が増えるわけでもないし、まして給料という概念すらない役職的位置にいる彼のが彼だ。
物質的見返りがあるわけでもないため、精を尽くして仕事に励まなくてもいいのかと聞かれたらそれは間違いである。

彼には世界を管理しなくてはいけないという大きな仕事が科せられていた。

故に、また世界のどこかで面倒な事件が起こったという報告かもしれない電話だろうと、取らないわけにはいかなかった。
先述するなら、彼に電話相手の台詞までコントロールすことは出来ない。

「もしも～し？」

『あんたは協会長で間違いないな？』

「ああ、間違いない。
初めまして。何の用件かな？
ついでにこの番号を知っている理由も教えてくれ」

『偶然教えられたんだよ、この番号は。

そんなことより取引しないか？』

「何を？」

『神隠しのＳＲだ』

「あのＳＲがどこかに発生したのか？」

『パンドラＳＲの中に神隠しがいた事は知っているな？
欲しくないか？』

「別段欲しいＳＲ（モノ）でもない。
そうだな、忠告しておこう。
専門家というわけじゃない且つ、早死にしたくなかったらあのＳＲには手を出さない方がいい」

『忠告ありがとう。
それで、Ｙｅｓ　ｏｒ　Ｎｏ。どっちだ？』

「ただ君の安全を願うばかりさ。
まぁ、そちらの条件次第というのが本心だけど」

『四凶の居場所だ』

「あ～、そう来たか。
しかし、彼らの“欲望”を集めたところで君の目標には程遠いんじゃないか？」

『……なに？』

「ところで、いま日本で起こっている連続殺人がＳＲによるものだとは思っていたが、神隠しとは思ってもいなかったよ。君のおかげで疑問のひとつが消化できた。どんなＳＲが各国の四凶を刺激し、バランスを考えるＳＲたちを動かしているのか、ずっと考えていたんだよ。

なるほど、神隠しか。あのＳＲは誰もが欲する消滅力だ。

例えば、誰かが消えてしまえばいいという思い。これは明らかな殺意を含んだ願望だが、殺意だけで人を殺すことは出来ない。その願望が実現する可能性はまずない。

ＳＲにさえ難しいことなんだ。ただの人間に実現出来るはずが無い」

『常識だろ』

「そんなことが実現可能なら諜報機関など生まれることもないし、国際社会・国際世界の現実は有り得ない。民主主義や平等と言う言葉も要らないな」

『人には誰にでも頂点に立ちたがる欲があるからな。自覚しようがしまいが関係ない。

それくらい俺にだってわかる』

「ここまで話しているんだから他人のフリはなしにしよう。

それとも匿名の一匹狼のままがいいのかい？

コルスレイ・トル……――」

『勝手にしろ』

「じゃあ、欲望侵食とでも」

『……それで、さっきの条件は飲むのか？』

「四凶の誰がお望みか、にもよるな」

『コントンとキュウキだ』

「コントンは全力をあげて行方を捜索中～」

『凶翼虎口は？』

「彼女に関しては教えるわけにはいかないな」

『なんだと？』

「コルスレイ。
君は優秀な人間だ。
知識・面識は無くとも、目の前の現実を越えた選択をでき、有り得ないはずの未来まで作り上げることが出来る。
君なら感じられるだろう？
いま四凶が何をしようとしているのか」

『……この話をなかったことにするつもりか？』

「ＳＲだけじゃない。一般人への影響も大き過ぎるし、強過ぎる。
タイミングが悪すぎるんだよ。
それに、君が捕まえようとしている相手も慎重に対処しなければならない」

『話を逸らすつもりか？
しかもそんなことまで言ってしまって。

協会長ともあろうアンタが、たった1つのSR（かみかくし）を恐れるなんてよ』

「そう。
肝心なのはそこだ。
俺ですらビビってる。それだけ影響力の大きいSRなんだよ。
四凶も……神隠しも」

『なら、この話はなかったことに――』

「意外と諦めが悪いんだな。
そうとってくれ。
それから、神隠しには全力で注意しろ。
あれは物質だろうが現象だろうが飲み込んでしまう力を秘めたSRだ」

『ふん。どうかな』

乱暴に切れる通話。
耳に当てていた受話器を元に戻し、ため息をつく。
突然現れて突然去って行った男。欲望侵食のSR：コルスレイ。

「挨拶くらいしてから切れよ」

目を瞑りながら僅かな思考に耽る会長。
厄介な人物が神隠しとの接触を試みていることを予感し、思わずため息が零れてしまった。

「何事も無ければいいんだけど……」

第３４話－Ｉｎｔｏ　ｔｈｅ　Ｗｉｎｄ－

風が人を止めることは出来ても、人が風を止めることは出来ない。人が人を止めることは出来ても、人は過ぎ去る時間を止めることは出来ない。

例外はある。

だが、例に倣う人が大多数を占める。これが現実だ。

殺人を止めることは出来ても、現実的に起こった殺人を無かったことにすることは不可能である。

トキが躓いたことに気付き、高城は足を止めた。

「急げトキ！」

急かされて立ち上がるトキは擦り剥いた箇所に手を当て、必死に遅れを取らないように前へと体を傾ける。

数秒前、高城は警察からの連絡を受け、それを携帯で愛院と藍に伝えて合流するために走り始めた。

武装派のＳＲと非武装派のＳＲが山の上の廃工場付近で目撃されたという情報が寄せられたのである。両者はその場で戦闘を始め、警察はＳＲの派遣を考えたが、連続殺人の件で現場に近いＳＲが中々いなかった。そこで、遊撃人員として常日頃から待機している高城に連絡が来たのである。

どんな理由で武装派と非武装派が争っているのかわからないが、危険な人物が複数確認されているという情報が寄せられ、高城は愛

院と藍に連絡を入れたのだ。
少年殺人鬼の行方よりも、目下戦闘を展開しているＳＲたちを撃退する為。
協会が定めているＳＲの世界にある秩序の安定を第１の目的とし、高城は走る。
トキは、その連絡がもたらした情報を耳にした途端、ある不安で頭の中が混乱しかけた。

（廃工場って、翼が住んでいる場所じゃないか！）

杞憂であることを願いながら走る。
定期的に仲間と交信する高城の一語一句を聞き逃さないようにしながら戦闘に備えた。
マガジン内の弾丸を確認し、スライドを手動で後退させ、チェンバーに弾を送り込む。高城も電話片手に装備を確認する。
間もなくして２人が合流。愛院は手早く高城に詳細を求めた。
相手の詳細。名前から全人数、個々のものからチームとしての戦力までも。
彼女の質問に対し、高城は必要最低限の情報を次々と口頭で伝える。
魔法使い、サイキッカー、幽霊武者、死神、ほか複数詳細不明。
全員で１１名。
武装派が８。非武装派が３人。
両者の目的は不明。また、どちらが先に仕掛けたのかも、真相は掴めていない。
街を抜けた時、高城の携帯に新たに連絡が入った。

『救援要請が出ましたが、応えますか？』

「は？救援！？
こっちは無理です！他の人を！
アヌビスはどうです？」

『そのアヌビスからの要請です。
ホートクリーニング店とハルバートアヌビスで潰した器実験の生き残りが、この街の周辺を横断する高速道路を通過する可能性が高いらしく、それを迎撃して欲しいとのことです』

「ジャベリンアヌビスに言えばいいんじゃないですか！？」

『彼女は現在、別の任務に赴いているため、間に合うかどうか明瞭な答えが出せないそうです。確実に間に合うのはハリヤだけです』

「しょうがない……よし、わかった！
速攻でこっちを片付けたら向かう。それでいいでしょう？」

『お願いします』

「というわけだが、いいか？愛院。
殺人鬼を追えなくなるが――」
「気にするな！
それより、あいつらを捕まえてとっとと質問しようぜ！」

愛院が微笑を浮かべる。
――器実験の生き残りが向かっている

それだけでも十分な情報だった。少年殺人鬼はどんな方法を使っているか検討はつかないが、必ず逃亡者に食らいついてくるという確信があった。

携帯の電源ボタンを押し、高城は移動速度を上げた。

夜も更けてきたところで人目を気にすることがなくなった為、高城は自分のＳＲを解放し、薄い翼を広げて羽ばたく。

飛行移動を始めた高城に倣って愛院もＳＲを解放し、藍も解放する。念のため目撃されないようになるべく高い場所を“飛んで／跳んで”移動し、そんな3人にトキはタイムリーダーを以て追いついてゆく。小刻みにタイムリーダーを使って加速を繰り返す。

トキが低速時間を解除するのを見計らい、奈倉は作戦を説明した。

「アタシと藍で先に仕掛ける！
その後からハリヤと隙を突け！」

言ってすぐまた跳躍する奈倉。

塀の上を足場に跳び、電柱を蹴って方角を調整する。

未だにナイトメアが神隠しの力を求めているなら、彼らを追うことは神隠しに迫ることに繋がる。

「頼んだぞハリヤ！」
「行くわよ！アイン！」

魔犬と哭き鬼が跳ぶ。

「わかってる！」

先行する２人の後を追い、妖精とトキが疾った。

丘を登り越え、山の斜面を下り続けると平らで開けた場所に出た。
伐採された木のない、削られた山。
剥き出しの土壌に、取り残された切り株。配備された建機の数が伐採現場の規模を物語っていた。
休止中という表示の看板が目に飛び込む。
その文字は配備されているのではなく放置されている建機の醸し出すもの寂しい雰囲気を、より一層虚しきものへと変化させていた。

しかし、それらのいちいちに同情を見せたり、気圧されたり、雰囲気が誘う感傷に浸っている場合ではない。

閑静な住宅街を目下に、翼とエミルダは風を背に受け、足を止めた。
十数ｃｍ先の落差１０ｍにも及ぶ崖。
無傷で下れる自信はなかった。
その間も刻々と背後から迫る何か。誰か。
目の前に現れた崖。
回り道をしている余裕があるのか分からない。
ただ、風だけはずっと２人を前へと押し続けていた。

それでも変わることはない目の前の現実（がけ）。
とにかく急がなくてはいけないと本能が翼を掻き立て、不安な表情で息を荒げるエミルダがそれを更に扇動した。

「そこ、危ないです」

慌てて周囲に違う道を探す翼に、エミルダは声を掛けた。
注意されて初めて気付いたそれは、地面から飛び出した岩の欠片。
翼は再びエミルダの手を引いて斜面を下り始める。

「君は夜目が利くのだな」

「……姉さんが、教えてくれたんです」

木々を掻き分けて横から吹き付けた突風に、少年の声が攫（さら）われる。
掻き分ける茂みのざわめきも加わり、その言葉は翼に届かなかった。
夜闇の中を進む2人の背中を風が押し、微かに金属と金属が擦れ合う音が混じる。
視界の悪い斜面を慎重に下り、ほどなくして2人はアスファルトを踏みしめるに至った。

（後で何が起こっている！？）

歩きながら呼吸を整え、翼は僅かに背後へと振り返った。

風に乗って耳に届いた微かな衝撃音。
それを発している源は何なのか。
再び風に押されるまま移動速度を上げ、２人は夜の住宅街を中心街へと向けて急いだ。
街にさえ着けば、追跡者をやり過ごすことも出来る。
そう願いながら翼は出来る限り急いだ。

斜面を下りきった魔法使いと天狗は目的の子供がどの方位に逃げたのか必死に探った。
魔法使いは山の土による足跡を見つけ、その方向へ進路を取り、天狗はそれに従う。

どこへ逃げようと子供であることに変わりはない。体力が持つ筈がない。
まして、この国で連続殺人を犯している。
先日にアヌビスまで葬っているのだ。精神的、肉体的に余裕があるとは考えにくい。
追っては自分たち以外にもいるはずだ。
協会、非武装派、完全な無所属主義者、闇商人……ｅｔｃ

この中で特に問題と言えるのは、

（なぜ非武装派の連中が？）

あの3人の存在だった。
今のところ最大の疑問がそれである。
どこからともなく沸いてきて作戦の妨害に出て、そのため神隠しを追うことが難しくなり、捕獲計画も修正を余儀なくされたのだ。

（誰か情報を垂れ流している者がいるとでもいうのか？）

風に押されて2人は進む。
非武装派が動いたということは、協会の部隊が動き出すまであまり時間はかからない。通報或いは発見されている可能性も充分に考えられた。
他の誰にも先を越されないようにと、2人は全力でアスファルトの上を駆ける。
付近の探索を終え、一度麓の住宅街で合流し、街へと進路を取る。
人を隠すには人の中。
仮にもＳＲまで葬ってきた殺人鬼である。それくらいの知恵はあるだろうと魔法使いは納得するため自分に言い聞かせ、天狗はその可能性にうなずいた。

市道を1本通過し、交差点に差し掛かると、2人の目の前に2つの人影が飛び込んだ。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第３４話－

－Ｉｎｔｏ　ｔｈｅ　Ｗｉｎｄ－

再び風が弱まる。

住宅街に設けられた公園の中、石造りのトンネルの中で翼とエミルダは乱れた息を整えていた。

翼は激しい息切れを起こしているエミルダを見て、街へと全力で向かうことを断念し、街と住宅街の狭間に位置する公園に逃げ込んだ。

追跡者をやり過ごせるかどうか不安だった。

が、公園の石造りのトンネルに隠れてから5分。追っ手らしき人物は見られなかった。

公園前に設置された自販機から購入した缶コーヒーで手を温める。

冷風に体力を奪われないように翼は少し多めにコーヒーを購入した。

啓蟄の頃のような冷めたい風をトンネル内で実感し、ため息をつく。

「急に走り出してすまなかったな」

「いえ、別に……」

「ここまで来て疲れているだろう。
少し眠りたまえ」

缶コーヒーを飲み干し、翼は外の様子を窺う。
風に揺れる木々の他に動く者が見えない夜の公園。
薄暗く、無機質に発光し続ける電灯。
揺れ葉のざわめきに混じる僅かな車両の走行音。

トンネル内は風の影響を受け、冷え冷えとしていた。
走行でかいた汗も、すぐに冷え切り間もなくに身は震え出す。

「私が見張っておく。気にせず休みたまえ」

そう言って翼は自分の上着をエミルダに被せた。
上目遣いに覗き込むエミルダの頭を撫で、眠って体力の回復を図るように勧める。
最初の数分。
エミルダは目を閉じないままでいたが、１０分過ぎた頃から瞼は静かに降り、程なくして寝息を立て始める。

翼は横になったエミルダを見守りながら、何が目的で彼らが追ってきているのかと考えた。が、一向に検討がつかない。

（パンドラ……パンドラの子。
どういう意味だ？
このエミルダという少年は一体何者なのだ？
パンドラと言ったら、神話だったか何かに出てくる厄災がどうのこうのという箱の事だろうな）

彼か、或いは彼の両親に原因があるのかと、翼は考えながらエミルダが起きるまで考え続けた。
最も可能性の高いものはやはり裏業者との繋がり。
ただでさえ密入国の多発が頻繁に起こっている世界なのだ。
違法な入国許可証や住民票を手に入れるためにはそういった業者と関わることが何かと多い。しかし、業者に関わった者全員がそれらを手に入れることが出来ているのかとなれば、そうでないのが現実だった。
買い手が交換条件を満たせない場合、その条件を飲まない場合。
業者側は自分たちの安全を図る為に買い手を存在しなかったことにすることが多々ある。
命がけの生命線。
いや、生命戦。
業者の存在が表沙汰にならないように。密入国が悟られないように。

世界中で起こっているその現象は、明らかな恐怖を伴うにも関わらず後を絶たない。
自分の国を捨て、他国での生活に望みを託す。

自分の国に留まってさえいれば、死ぬこともなかったかもしれないのに。
それでも密入国者たちは絶えない。

“世界が狂っているとは思えないか？トキ”

何故、あんなことを聞いたのか。
いま思い返して翼は恥ずかしさに俯いた。
国を捨ててまで、生きていこうとするのは何故か。
どうして国から逃げ出す。
原因は何なのか。

ふと、脳裏に浮かぶ両親。
間近で見た顔ではない、写真に残された2人の笑顔。

何故、逃げたのか。
どうして置いて行かれたのか。

「何が、どうなっている……」

風が前髪を誘う。
右から左へと流れる気流と共に、記憶ごと流されて消えろと、願う。

国を捨てる人々。
人を捨てる人々。
消えてゆく大人。
取り残される子供。

それら、逆のケースも存在するこの世の中が、とても正常とは思えなかった。
どうして人は希望のために他人まで犠牲に出来るのか。
翼には未だ理解できないことであった。

――数分前

翼とエミルダが走り過ぎた場所に煌きが生まれた。
予期せぬ攻撃に、武装派の2人はその対応仕切れずにいた。
普段では決して有り得ないハプニングに次ぐハプニング。
その極めつけが、第2の奇襲だった。
夜風を切り裂き、静寂を破る。
最初にその存在に気付いたのは天狗だった。

「華創実誕幻、一段・菫！」

天狗と違ってその奇襲に気付くのに遅れ、リアクションを取り損ねる魔法使い。
前へと踏み出した一歩。
それが彼の敗因となる。
たった一歩で、魔法使いの体は地上から１０メートルの地点へと踏み出されていた。

「なっ……！」

それが重力操作による仕業だと気付いた時、彼の目の前にハッキリ敵だと判断できる者が姿を現していた。
両の手に光る凶器。
抗う術はあった。
しかし、すがる時間もなければ、躱す余裕も無い。

「お前達は何を追っている！？」

空中で体勢を立て直そうとする魔法使いに対し、奈倉は両の手に握ったナイフを突き立てた。
両肩に2本のナイフを。
その一瞬後、追加2本のナイフで両足を穿つ。

頭上で魔法使いと魔犬がぶつかり合うのを目撃し、天狗は戸惑った。非武装派に留まらず、なぜこうも邪魔が入るのか。
あれは裏の武器密売人の中で有名な管理人。
最年少にして確実という実績を誇る魔犬。
そんな彼女がなぜここに居るのか。

「華創実誕幻」

頭の隅で考えつつ、天狗は一度止めた足に喝を入れる。
衣類を突き破って展開する白翼。

真横から迫ってきた陰陽術者に対し、天狗は背後へと飛んだ。
地面を蹴って、後方へ……――

同時、消音器から漏れた銃声が夜闇に吹く風にかき消され、完全な消音を実現する。
２挺の拳銃による銃撃。
住宅街の闇を照らす銃火。
吐きだされる空薬莢。
弾丸は的確に天狗の翼を捉え、２秒とかからず飛行能力を奪ってみせた。

「先輩！」
「任せろ！」

銃撃を止めたトキの頭上を高城が飛び越す。
地面を背に、高速で滑り落ちる天狗に急接近して右手首を狙う。
高城の手の中でわずかな光を反射する手錠。
しかし、

「明日薙ぐ突風！」

手錠が嵌められるよりも速く、天狗の術文が風の向きを変える。
突風に背を押され、顔面からコンクリート塀に叩きつけられる高城。
その一瞬の隙に上空の相方の様子を覗き見るが、すでに落下をはじめ、激突を免れない状況にまで陥っていた。

（やられたか……）

「同段・桜！」

天狗が隙を見て相方の様子を探ったように、哭き鬼も隙を突いて天狗の捕縛を始めた。

充分すぎる間隙（かんげき）。

十二分すぎるタイミング。

藍には、確実に捕らえることを実現できるという確信があった。

（これは……この術は、我流の陰陽術！）

天狗は初めて風の中に哭き鬼の姿を見つけ、その姿が女性であることを確認しつつも1人の男の面影を重ねた。

地面と背の摩擦が終わる時、両腕に異変が生じ始めたことに気付く。左腕が地面に、右腕がコンクリート塀の中に沈んでいくことに。

肘まで石の中に沈んだ所でそれは止まる。

（哭き鬼の、陸橙谷（りくとうや）の家の子か！）

完全に動きを封じられ、天狗は抵抗を諦めた。

奇襲と先制攻撃。

これを許したのが決定的敗因であることは火を見るよりも明らか

である。
相方の魔法使いも硬い地面の上に落ち、その時の様子から戦闘続行不能と見て取れた。そんな状況の最中、魔法使いに追撃を掛けた魔犬が降り立ち、顔面を打ち付けた妖精も体勢を立て直す。
更に拳銃を手にした少年と陸橙谷の娘を目の前にし、天狗と魔法使いには抗うだけの術は残されていなかった。

「おい、寝るんじゃねぇ！教えろ！
お前達は何を追っていた！？」

戦闘が終わり、質問が始まる。
真っ先に天狗に噛り付いた奈倉を、藍は手で制した。

「あなたは天狗のＳＲ、黒河さんですよね？」

「……君はやはり“砲撃の森”の？」

「三女の藍と申します。
どうか教えてください。なぜ貴方が武装派と共に動いているのですか？」

僅かな沈黙。
抗議のために口を開こうとした魔法使いを見つけ、前もって殴り静める高城。

「貴方は武装派にも非武装派にも肩入れしないと誓った人のはず」

「神隠しのSRがこの近辺に現れたんだ。
そんなことに拘っている場合じゃないだろう。数ヶ月前から続く連続殺人だって神隠しによるものだ……君なら分かっていただろう？」

鬼と天狗の会話から、武装派の目的が神隠しであることを知り、奈倉は魔法使いに聞く。
どちらから来て、どの方角に逃げたのか。
しかし、奈倉の予想に反して2人は首を横に振った。

「見失ったよ」

その言葉に奈倉は言葉を失った。
高城はすぐに上司に連絡し、身柄を拘束した2人の連行を依頼する。

「少し聞かせてください。
廃工場から来たんですよね？」

「それがどうした……」

憎悪の念をこめて睨みつける魔法使いの視線を受けとめつつ、トキは質問を続けた。

「あの廃工場には知り合いが住んでいるんですけど」

「知らん。
我々の前に非武装派の連中が居た。
工場の中を探す暇どころか、奴らの攻撃で隊はズタズタだ！
おまけに俺たちが来ることを予知して目標を逃がしやがった！だから追っていたんだ！分かったか！？」

魔法使いの言葉を聞いて、トキは走り出す。

「ちょ、何処に行く！？」

「翼が心配だから見てくる！」

「ツバサ……それって、村崎君のこと？」

共に走り出した藍が尋ね、トキはその質問に頷く。
高城に2人の処置を頼み、奈倉も2人の後を追って走った。
斜面を駆け上り、頂まで上ったところでなだらかな斜面を下って行く。起伏を越えて山から丘へと移り、廃工場が視界に入る。
奈倉はその地域に入り、風に血や硝煙の匂いが混じっていることに気付いた。

「注意しとけ！」

喚起するのとトキが工場に入ったのは同時だった。
トキに次いで藍が入り、奈倉が入る。
夜風に晒され、時折金属の軋む音を響かせる廃工場。
しかし、人の気配は無かった。

「誰も居ないみたいね」

3人で手分けして廃工場内を探し回ったが、翼はおろか、ナイトメアのSRすら見かけない。
1階、2階、外回り、各部屋。
襲撃・待ち伏せを警戒しながら捜索を進めるが、戦闘の痕跡すら見当たらない。
唯一発見できたものと言えば、工場の一角に置かれたガスコンロとまだ温かみを残しているカップ麺の容器。
3人は顔を見合わせた。
トキは翼がここに1人暮らししていることを教え、藍はカップ麺と箸が2人分あることに疑問を抱いた。この廃工場の住人が1人と知った奈倉は、

「もしかして、エミルダと一緒に居るんじゃ？」

新たな予測が立ち、3人は天狗と魔法使いの2人と遭遇した方角へと走り戻った。

当てのないまま始めた捜索が、初日で一気に終わりへと向かおうとしていた。
所在が不明確の神隠しを追って同じ目的の武装派と非武装派が戦闘を展開する。
止まない夜風を受け、少年を追うために走る。
時間が容赦なく刻まれていく。
丘を登り、街に下り、右へ左へ。
ある者は来た道を戻り、ある者は風に身を任せ、中には痕跡となるものが残っていないか探す者もいて、またある者は匂いで追おうとする。が、強さを増してきた風に、嗅覚捜索を断念した。

（神隠しは、何処へ行った！）

学生ＳＲグループが走る。
白州唯の隣、黄立（きたち）の広大なオフィス街を抜け、県境沿いに走る高速道路を目指し、神隠しと関係のある人物を捕らえる為に。

押し寄せる睡魔と戦いながら、白んできた空を覗き見上げる。
公園の時計に目をやると、時刻はすでに朝の４時を回ろうとしていた。

「姉さん……」

翼の頭から睡魔が引く。
少年の寝顔から零れたその言葉に、翼は使命感を感じていた。
孤独と不安。
不安定な生活と希望なき日々。
誰の助けも無しに、1人の子供が異国で生きていくことが可能とは思えない。
そもそも、異国の子供が1人でいること自体がおかしかった。
しかも、家を持たない子供である。業者に追われて家族と離れ離れになったのか、彼だけが生かされたのか。

(泣いている場合なんかじゃないな)

一呼吸置いて零れてきた涙を拭い、翼はエミルダを追っ手から守ることを決意した。
真実がどうであれ、彼が1人の身であるという確信があった。彼は1人で工場を訪れてきたのだ。
誰かと一緒でなく、たったの独りで。
エミルダの目じりから零れた涙に、共通するものを感じ取り、翼は周囲を窺った。

誰がエミルダを追っているのか。何故追うのか。
不明な点こそ多いが、守り通すという役割があるのなら、翼はそれをやり通すまでだった。
細かな理由や、些細な動機など必要としない。

(そうだ、トキなら)

「……泣いて、いたんですか？」

意表を突く少年の言葉。

突然目を覚ましたエミルダに驚き、翼はあわてて自分の顔を探り、涙の後が残っていないか確かめた。が、対応は少し遅かった。

「どうして、泣いていたんですか」

「……疲れは取れたかい？」

「はい」

話の流れを変えようと尋ねる翼。

布団代わりに掛けた上着を翼に返して膝を抱えるエミルダ。薄暗くて分かりにくいが、涙の跡が翼の頬に残っていたのだ。

「ちょっと両親の事を思い出していてな……」

「両親が、どうかしたんですか？」

「私の両親はな、私が幼い頃に家を出て行ったのさ」

正面から向き合い、翼はエミルダに自分の両親のことを教えた。

翼は両親に見捨てられ、歩き回っているうちに丘の上の廃工場に辿り着き、そこが捨てられた場所と言うことを知り、自分の拠点と定めて今後のことについて考えを巡らせた。

それまでに得た知り合いとの伝(つて)を活かし、低年齢でも行えるバイトを探して自力で学費を稼ぎ、また、バイトで知り合った先輩や同年代の親友からの援助で無事に中学を卒業し、高校への入学を果たす。

しかし、冬の寒さに震え、夏の暑さに悶え、僅かな収入のために尽くす精に虚しさを感じ、拭えない孤独が誘う寂寥を紛らわすことだけはできなかった。

学校やバイトでのみ紛らわせるものもあれば、どんなことをしても払拭できない暗闇もあった。

人と決定的に違う家族の有無。

他人に無く自分に無い肉親とのつながり、絆。

「昨日、になるな……亡くなって見つかったんだよ」

初めて所在を知った時、両親はこの世にいなくなっていた。

死は誰にでも等しく訪れるということを実感しながらも、心のどこかで否定している自分。

本当に平等なのか疑い、遣り切れない気持ちが胸を締めつける。

これが夢ならどれだけ気が楽になるだろうか。

「僕と姉さんも、両親に捨てられているんです」

「姉さん？」

「名前を貰って、あとは孤児院を回って歩きました」

「日本のかい？」

「……カナダ、です」

「カナダか。ずいぶん遠くから来たんだな。
ところで、君はどうして日本に来たのかな？エミルダ。
こんな国じゃなく、もっとマシな場所があったんじゃ――」

視線を翼から外し、トンネルの外へと目を向けるエミルダ。
気まずい質問だろうが、いつ追っ手が現れるか分からない以上、原因だけでも知りたかった。
直接的な原因でなくとも、少しでも核心に近づけるような話を聞いたかったのだが……
しかし、エミルダの焦点は中々戻ってこない。

「うん……そうなんだ」

「エミルダ？」

翼の問いかけに、少年は明後日の方向を向いて独り言を始め、答えているようで応えていない。
風が止みかけている朝の公園で、少年はトンネルの外に姿を晒し、来た道へと顔を向ける。

「あっちに行けば、いいんだね」

ぐるりと、顔が反対側へ向く。
何が起こっているのか翼には理解できなかった。
持ちえる常識が通じない、何かが少年の中で起こっている。
独り言、定まる行方、決意を宿す瞳、殺意の篭った双眸。

「来るんだね。
一緒に、懲らしめよう、姉さん」

語られる第三者。
向きを変えた風に押され、前へと体を傾ける少年。

その一言の後、エミルダは走り出した。
意表を突かれた翼はトンネルで頭をぶつけ、出遅れる。
頭を抑え、駆け出したエミルダを追うが、すでに少年の姿は眼中から飛び出していた。

――同時刻

朝日を反射する黒い塗装の車がアスファルトを踏みしめていた。
3台の車が高速道路を下り、黄立の中心街へと進路を取る。

それはナイトメア武装派の器実験資金提供者、マクシミリアン・ウェインとその護衛たちにより編成された一行であった。

「もっと急げ！
アヌビスに追いつかれる！」

ドライバーに怒鳴りつけ、スーツに鍛えられた恰幅を隠した男がリアウィンドウから後方を覗く。
後衛の防弾車が無事に高速から下りてくるのを見守り、一息ついた。
黄立の街まで逃げてこられたのは奇跡に近い。
器実験の最中に襲撃を受け、僅かな部下と共に逃げてくることには成功した。しかし、いつ敵に追いつかれるかわからない。

（去年の夏ごろからこんなことばかりだ！）

因果応報。
マクシミリアンはその言葉を、今日ここまで逃げてきて初めて思い出していた。
知り合いから聞かされ、教えられた言葉。
過去の善悪が、いつかは逆転して返ってくるという意味を身をもって体験していた。

ナイトメアの武装派と関係を持つきっかけは脅迫であった。
だからといって、自分の悪行が嘘なのかと問われても否むことはできない。

脅され続け、生き続けたい一心に武装派に服従した。器実験の為に資金提供を続け、必要とあらば部下を用いて孤児や浮浪児をさらい、生命の存続に関わることもある危険な実験の糧として提供してきた。

いつかは来るだろうと覚悟していた筈である。

因果は必ず応じ、報す。

回り続ける因果から人は逃れられないと知人は言い残し、神隠しに呑まれた。

その時のことを思い出し、自分も同じ結末を迎えるのかと頭を抱えて悩む。

（私の番なのか……？）

「諦めないでくださいミスター！必ず、我々があなたを護り通します！」

「もうすぐ迎えのヘリがこちらに見えるはずです。それまで気を確かに」

それまで運転にのみ集中していたドライバー兼護衛の男と、助手席で後方の状況をサイドミラーで確認する護衛が口を開いた。

朝焼けに染まる晴天をガラス越しに見上げ、ハンドルを切りながら諦観に沈みかける主人を激励する。

自分の主人がどんなことをしてきたのかを知っている故。罪悪感を忘れない人間である故。

ナイトメアの武装派と名乗る組織から派遣された部下に脅迫され

なければ、こんなことになるハズはなかった。
神隠しや武装派、ＳＲさえ知らずに生きていけたはずなのだ。
ただの一般人として、ただ有能な議員として。

家族を養い、国のためにと尽くし、ルールと人の在り方を尊重する。

知ってしまった世界の真実。
――Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ
それは、真実に到達するまでの現実を夢とでも錯覚させるほどの衝撃力を有した世界。
――ＳＲ
すべてが夢のような話。
物語が実現してしまう存在。
人の欲深さと意地汚さ、生に対する執念と死に対する恐怖。
それらを極め、その果てに現実を歪めてしまう力を得る現象。その現象から編み出される特殊現象。連鎖は止まることなく続き、今日へと至ってしまう。

ＳＲという力がどれほど魅力的なのか、ドライバーもウェインもその魅力が理解できなかった。
どんな力だろうと、平和な世界に力という存在はあまり必要とされない。
力の存在は争いの源でしかなく、それ故に3人はＳＲという人員を欲するその異常なまでの執念が理解できなかった。
協会という組織がトップに立っていて、それが気に入らない。
それだけで戦いを挑む者も、戦い続ける者もいると聞いた。
まるで、子供の喧嘩と大差ないように思え、それでも逆らうことの出来ないという現実を思い出して悲痛が湧き上がる。

自分の死を予感して男は、最期になるかもしれない思案に暮れた。
どうして、Rという力が在るのか、という事を題材に思考が始まる。

誰が予測するでもなく、彼らはそこに集う。

偶然が生み出す一致。
一致に伴う確立の高低で偶然とも必然ともとれるのだろう。
それは偶然か。
なにが必然か。

もしこの現象をその二択で分類するなら……――

第３４話－Ｉｎｔｏ　ｔｈｅ　Ｗｉｎｄ－（後書き）

何気なくとも、それが終幕なら人はそれに従ってしまう。

復讐と言う罪が優先されようとも、本来の目的の達成如何を問わず、終わりはやってくるのだ。

そこには納得も不満もない。誰しもの考えが適用されるわけでなく、全てが汲まれることなど滅多にない。

しかし、それが終わりなのだ。

誰も逆らえない。

誰もが気付くわけでない結末。

終わりとはそうあるモノなのだ。

第３５話－それは降り注ぐ陽光のように－

その街へ。
何を告げるわけでもなく、風は無常に吹き付けた。
狂気を導き、過去を靡(なび)かせ、欲望を呼び込む。
神隠しという風を観測し、それぞれのＳＲ達は各々の結論を持ち、それの実現に辿り着こうとした。
ある者は仲間にしようと。ある者は神隠しの持つ特殊性を得ようと。また、ある者達は殺人を辞めさせようと。
それぞれが走る。

協会。
武装派に非武装派。
小規模集団。
そして、完全無所属のＳＲまでもが、１人のＳＲの為に行動を起こしたのだ。

脅威、希望、恐怖、信念。
それが１人のＳＲの持つ力の影響で、他に与える様々な媒介である。
神隠し本人はそのいずれも望んでいないにもかかわらず、他者はそれを求めて彼を探し回り、１つの国に辿り着いた。

日出所。
極東の小さな島国、日本。

（針小棒大過ぎる……）

雲無き快晴の空を彩る陽光。
光を受けて反射する人間文明の結晶。
静寂に包まれた中心街。
その静寂を切り裂かんばかりに集う者々。
これから上がる太陽の熱に暖められるであろうアスファルトの上を駆けるＳＲたち。
間もなく車の吐き出すガスに汚染されるであろう街中で、彼らはそこに集う。
しかし、その規模を知らない。

偶然のようで、必然のような……

確信と疑念に満ち、欲望と念願に駆られた“毀劇／悲劇”が今、結びを迎えようと彼らをその場所に集めた。

その中の１人。
欲望侵食の名前で通るその男、コルスレイはぴくつく米神を押さえながら眼下に広がる街を見下ろした。
キタチという街。
現在、神隠しとその付き添いらしき人物が逃げ込んだ街。そして、それを追って様々なＳＲが集い始めている街である。
これだけのＳＲが一箇所に集まり、平穏が続くはずがない。必ず騒ぎになる。
それを理解しているからこそ、彼はこの街を訪れたのだ。
自分の存在の証明も兼ねて。

（いま一度だけ協力しますよ先生。
あんたが見込んだＳＲ、色世トキ。彼がどんな欲の持ち主か、見

せてもらいます）

見下ろしていた街へと降り、コルスレイは両腕を広げる。
ほとんどの生物が眠りの中にあるこの時間帯なら、彼の力の影響速度は師のそれと同等のものであるという自信があった。

間もなく、住宅街のそこかしこから黄金の反射光が漏れ始めた。

奈倉の足が止まる。
風の中に紛れる急ぎ足のタイヤが上げる摩擦の泣き声。
比較的交通量の少ない場所での急ブレーキと、急加速。

「藍！無音結界頼む！」

「範囲は？」

体の向きを変える奈倉に、トキも足を止めた。
歩道から反対側の歩道へと目を移し、道沿いに建立されたビルの向こうに耳を傾ける。
奈倉はそこに不審な車の存在を感知していたことがわかった。

高城の情報通りなら、器実験からの逃亡者。
つい数分前に寄せられた情報では、黄立（きたち）で高速を降りたと聞いて

いた。

「この辺に全域に頼んだ！」

「トキ、愛院の援護を！」

「わかった！」

魔犬により蹴られたコンクリートにヒビが入る。

信号機を越え、ビルの壁を蹴り、隣の国道へと移る奈倉。

柵を越えて道路を横断し、もう一度柵を乗り越え、トキはビルとビルの僅かな隙間へと滑り込み、奈倉に追いつく。

ビルとビルの隙間から日の下に戻ったトキの目に、爆炎と黒煙の狂演乱舞が飛び込んだ。

数百メートル先で起こっている事故。

その衝撃で頭は軽い混乱を覚えた。

混乱を覚ましたのは、急ブレーキという運動が奏でる摩擦音と、アスファルトと金属の擦れ合いによる独特の騒音だった。

ガラスが砕け、燃え盛る車に衝突し、摩擦によってアスファルトと金属が火花を散らす。

慣性で車が止まった頃、路上には凄惨な光景が展開されていた。

車の中で生焼きに晒される男。

クラッシュでフロントガラスに頭を打ち付けた者。

車の屋根、フロントガラス、フレームごと何処かへと消え、その巻き添えを食らって上半身を失った者たち。

「あれだ！トキ！」

奈倉が消滅痕を残した車を指し、自分達の周囲に神隠しがいることを示した。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第３５話－

－それは降り注ぐ陽光のように－

覚悟はしていた。

これが最期の思考になるだろうと諦観していた。

今日の朝日を浴びることは出来ても、明日は無い。
最期が今日で、これは運命。
回り続ける因果の鎖は誰にも絶つことが出来ず、抗おうにもそれすらが鎖の運命。
パンドラと器。
２つの狂気の差は、名称だけで中身の外道さは変わらない。
死の報せが届けられて当然。

邪悪を援けたこの身は裁かれて然り。
それでも、心の奥底では生きて償いたいと願って止まない自分が居た。
裁かれてもいい。でも、死にたくない。

贅沢な願望に失望の念を抱いた瞬間、衝撃が視界の中に飛び込んだ。

（死ぬ……）

前衛車両が黒い腕の中に消える。
飲み込まれまいと急ブレーキを掛ける運転手。
しかし、ブレーキと同時に後衛車両が対応しきれず、トランクに突っ込んでしまう。
速度が災いし、後衛車両は反動で空中へとその身を投げ出し、屋根から地面へダイブ。
幾度も車体を転げ、衝突させ、摩擦し、満身創痍の車体が迎えた結末。それは、オイル漏れとアスファルトと金属の摩擦の間に生まれた火花がもたらす最期。
炎上だった。

「生きて、いる……？」

トランクを潰されたものの、マクシミリアン・ウェイン自身は軽い打撲程度で済み、自力で車から這い出るだけの力は残っていた。

ウェインの脱出に伴い、ドライバーも辛うじて車からの脱出に成功する。

助手席に座っていた護衛は頭を強打し、すでに息を引き取っていた。

前衛後衛のドライバーたちも半数以上が命を落とし、ウェインを護ろうと立ち上がることが出来たのは、僅かの3人だった。1人は流血にふさがれていない目で次の攻撃を警戒し、1人は火傷した左腕を垂らしたまま片手で銃を構える。運転手だった男も銃を構え、ウェインの安全に細心の注意を払った。

焼け苦しむ仲間に止めを与える護衛。

サプレッサーから噴出した銃火に、ウェインは目を逸らした。

乱れた息を整えながら運転手はヘリの降下地点へと体を向けなおす。

自分たちの主人がそこまで辿り着けば――

「おはようございます」

予想外の場所での受けた予想していた攻撃。

回収地点への移動を始めようとした一行に向かって、その者が放った言葉がそれだった。

「子供？」

彼らの目の前に現れたのは、左腕の無い少年だった。
日本人でないことは言語で分かる。

戸惑う護衛と、絶対的恐怖に対面したウェイン。
知ると知らないの差。
両者間に生まれる違和感。

震えだす主人を見て、護衛の１人が引き金を引いた。
理由はわからない。
それでも、自分の主人が目の前の子供に震えていることは明確だった。

銃声。

崩れ落ちる、人影。
理解できない現象、ＳＲ。

１人の護衛の上半身が消え、彼が放ったはずの弾丸は少年に届いていなかった。

「フ……ッ！」

仲間の死を認めたその次の瞬間、片目を閉じた護衛の上半身が首

及び下半身と別れることとなった。
誰が引き金を引くよりも早く。
何が彼らを消滅に追い詰めているのか。その得物の正体を知った時、護衛の頭は混乱に見舞われた。

黒い、何か。
影とも違う。
それに触れが銃が消えた。
影なら、例え暗闇の中にあってもその姿を見失うことはない。
逆光の中からはみ出ているその影を、影と呼んでいいものだろうか？

「神、隠し……」

ウェインの呟きを最期に、運転手の視界が暗闇に支配される。
上半身を飲み込まれた最後の護衛。
取り残されたウェインと、少年の目が交差する。

狩るモノと、狩られる者という明瞭に分割された立場。その状況下に置かれたウェインに、絶対の死が訪れようとしていた。

避けられない死。
奇跡的に蘇生するなどということはない。
神隠しの一撃は刃物よりも確実で、銃の如き速く、そして、拳打よりもリーチに優れている。
また、盾よりも確実で、防弾ベストよりも絶対安全な攻防一体の神隠しが作り上げる左腕。

必然、避けることのできない死。

「殺す為……来たのか？」

「はい。
僕と姉さんを苦しめた、あなた達にも同じ痛みを味わってもらいたいんです」

左腕が、燃え盛る車を丸呑みにする。
炎が消え、金属の塊が消え、燃え盛る音が消えると、間もなくして風と2人の呼吸を残して一帯は静まり返った。

絶対的消滅力。
取り残された怨恨と憎悪が生み出す心中。
一方的に接触できず、一方的に触れようと襲い掛かる存在。

「見逃して、もらえないか……」

「あなたは何人見逃してきましたか？」

左腕が空へと掲げられる。逆光をで陰ると思われたその姿は、あらゆる現象を覆す。
逆光を得て、左腕を構成するそれらがウェインの視界に飛び込んだ。

その鎖縛の始まりは、怨恨と生への執念。

生きたくてもその願望は実現しない。
パンドラという狂気が生み出す凶行。
それに伴う矛盾と痛み。
矛盾が信頼を崩し、痛みが生を死へと標を示す。

目の前の神隠しは、そこに縛られ、自分の命を奪おうとしている。
当然の結果といえば当然だと、ウェインは自分に言い聞かせて冷静を取り戻そうとするが、時間が足りなかった。
混乱のまま、頭の中の整理が終わるよりも早く、己の命が消えてしまうという予測が思考の片隅にあったことに気付き……

「もしや、君は双子の……」

「はい」

次の瞬間、左腕は振り下ろされ――
同時、ウェインの右腕に衝撃が走り、視界から神隠しの少年が消える。

「やめろ！エミルダ！」

反撃の為に動き出していた左腕が、朝日に照らされる突撃者の顔を見て止まる。

「門番……さん？」

触れようとしていた左腕が消える。
地面を背に倒れ、２人はお互い距離を取って立ち上がった。

「大丈夫ですか？」

一瞬視界に飛び込んだ見知らぬ女性の姿。
見失った神隠しの姿。
何が起こったのかウェインには理解できない。
混乱した頭では僅かな変化も目まぐるしい変化も同然だった。

混乱に返事を返せないウェインを見て、トキは焦りを覚えていた。
流血を起こすほどの外傷は見られるが、どれの傷も浅い。
目の前で起こっていることが現実離れしていて、あまりにも突然だから混乱しているのだろうか。
ウェインを押し倒したトキは急いで深刻な外傷がないか探った。

「大丈夫ですか？」

血の気の引いた顔を見て、とりあえず生きていることを確認する。
トキは少年を止めると言って突撃した奈倉の方へと体を向けた。
その方向に顔が向くのと同時、車の屋根と街灯の頂点が地面に落ち、甲高い音を響かせ、砕ける。
また鉄柵やアスファルトは消滅したのも同時だった。

路上に散らばった車両の残骸や、上半身を失った死骸もその暗闇の中に飲み込まれていく。

爆発と飛翔。
展開と消滅。

ガソリンを撒き散らした車両が燃え盛る。
爆炎から脱し、トキの真横に着地する奈倉。
アスファルトを焦がす火炎を飲み込む、神隠し。パンドラＳＲ。

（あの子……この前ぶつかった子！）

爆炎を消し、残骸を消す。
爆心地に残ったのはただ1人、神隠しの少年のみ。

炎に蝕まれ襤褸（ぼろ）切れと化した服を、左腕が包んでいく。

「そいつは生きているか？」

「ああ。混乱しているのか、唖然としたままだけど」

３人の目に、神隠しの黒で即席の服装を作り上げていくエミルダの姿が飛び込んだ。
それは見た目に反して絶対の防御力を誇る鎧。
触れてきたもの全てを飲み込む鎧袖一触。
一切の接触を拒む、黒装束（ドレス）。

その力の前に、銃も刃物も、鍛えられた肉体も大差ない。触れた瞬間消える運命に変わりはなかった。

（隠力で服を作りやがって……まともに触れるのは、右手と首から上、膝下程度か）

風が吹き抜け、その風に乗り、エミルダの殺意が3人の足が竦む。

「あなたは……」

トキと少年の目が合う。
僅かな笑みを浮かべ、少年の顔は奈倉へと向く。

「生きていたんですね、門番さん」

「お前もな。エミルダ」

「そこを退いてください」

か細い右腕が上がり、右手の人差し指がウェインを指す。

「この年寄りに何をする気だ？」

「僕達と同じ痛みを味わってもらうんです。そうすれば、姉さんの気も晴れ……」

「ふざけるな。憎いからって人を殺していい理由にはならない。もうやめろ、エミルダ。お前は頑張って生きてきたじゃないか」

右腕が下がり、左腕が上がる。

「はい。頑張って生きてきました。だから、もう少し頑張れば終わるんだと思っているんです」

滾(たぎ)っているかのように大きさを増す黒腕。
その先端がウェインに向いた時、愛院は持参した刃を晒した。
足止めにすらならないだろうと理解しながら、せめて自分に矛先が向きを変えてくれることを願う。

「だから――」

「絶対退かない」

「え？」

「もうやめろよ、エミルダ。
こんなこと、何万回繰り返したって終わりは来ない。
今まで頑張って来たんだろ？それを無駄にする気か？」

「……」

「一生を、人生を台無しにして、誰が喜ぶ？
お前はそれで満足なのか？」

左腕が僅かに下がる。
今頃になり、ウェインは立ち上がろうとした。
トキはウェインに肩を貸し、立たせてエミルダと向き合わせる。

少年の目や腕、体と意志は、完全に愛院へと向いていた。

「……だって、誰も許さないんだ」

左腕が萎む。
膨れていた黒が縮小し、色を除いて何ら普通の腕と変わりないモノを形作ってゆく。

「だから、僕達で捌くんです」

「……たち？」

その瞬間、トキの頭にあの音が響いた。
同時に爆発的展開を始める左腕。
ガチンと鳴ったその音に喝を入れられ、トキは左腕が展開するよりも早くウェインを連れて避難していた。

「エミ――！」

その展開に、愛院は口を閉じた。
飲み込まれてしまったと思ったトキと、器実験支援者。
喰らっていない。
確かに2人は神隠しから逃れている。
度肝を抜かれた愛院は滲み出た冷や汗を拭い、エミルダへと顔を向けなおす。

「やめろ！」

表層を失ったアスファルトの上に2人の死体はなく、エミルダは愛院の視線を追って初めて2人の生存に気付いた。
愛院の言葉に耳を貸さず、トキだけに視線を注ぐ。
目的の人物を消すためにはあの男が邪魔だ。と、逡巡による判断がトキを新たに消すべき人物と断定した。

殺意を含んだ視線。
ウェインに肩を貸したままエミルダへと視線を傾けるトキ。
本気で殺そうとする少年の狂気。
自分が肩を貸している人間の支援してきた狂気。

優先すべきはどちらなのか？

外道か復讐か。

すでに罪人である両者に、校正の余地が残されているのか。

神隠しがトキへと牙を剥く。
低速世界の中、ウェインを誘導しつつ神隠しを躱わす。
悠長に考え込んでいる時間はない。
横薙ぎに襲い掛かってくる。屈んでも避けることは出来ない。
ウェインの体を支えながら車のボンネットを駆け上り、屋根の上から飛び降り、神隠しを越える。

着地と同時に低速世界が解除される。
振り返しの左腕が2人の背後に迫った。

「エミルダ！」

右腕を取って叱責する愛院を、エミルダは睨み返した。

「こいつが最後だって、そう決めたんだ。姉さんもそれで許そうとしているんだ！
門番さんだろうと邪魔はさせない――誰だって邪魔しちゃいけないハズなのに！」

翻るドレスに呼応し、トキとウェインに襲い掛かっていた左腕が愛院へと矛先を変える。
握った少年の手を離し、後方へと跳ぶが、回避が間に合うかどうか自信がない。
迫撃する左腕が2本に割れる。

奈倉の立っていた場所を神隠しが飲み込み、距離を取った愛院を追撃する。
2本に枝分かれした神隠しの1本を躱わして空中へ。そんな、足場から完全に離れて愛院にもう1本の神隠しが襲い掛かった。
逃げ場のない空中での攻撃。それも、触れただけで効果を発揮するという防御不可能の追撃。

（マズった――！）

「一段：菫」

黒い腕が奈倉に触れるよりも早く、小石が彼女の脇腹を捉えた。
僅かに汗が噴き出るほどの痛み。
一瞬にして神隠しの軌道から滑り出る身体。
真横を通過し、オフィスビルのガラス面に傷を残す左腕。

（藍か！）

華創実誕幻一段：菫の効果を思い出す。
数時間前も天狗と魔法使いに対して先制する時に使用した術。
重量変化。
それにより、先に魔法使いを、そして今自分の身体を小石で弾き飛ばせるほど軽くして見せた。
街灯を掴んで着地に至る愛院に、枝分かれした左腕が襲う。
1本は愛院、1本はトキへ。

「藍！トキが連れている奴を連れて逃げろ！」

「断るわ」

街灯が倒れ、衝撃でプラスチックのカバーが飛散する。

三角跳びや広いスペースを利用して逃げ回る愛院を神隠しの左腕が追う。

肩を組んだままのウェインとトキも、出来る限り回避を続けるが、それも限界に近付いていた。

衝撃続きのウェインの足が縺(もつ)れ、ついには転倒してしまう。

殺人鬼――復讐者にとって最大のチャンスである。

しかし、肩を組む2人に異常は訪れない。

攻撃が来ないことを怪訝に思ったトキは背後を振り返り、すぐそこに藍の姿を確認した。

エミルダ以外の全員がその光景に目を奪われた。

神隠しに触れて飲み込まれないモノ。

スーツの男・ウェインを殺さんと鬼気迫る神隠しを止める1本の日本刀。

（止めた……のか？）

（生死繋綴！？

哭き鬼の一族だけに伝えられてきた秘刀！

しかも、オリジナルじゃねぇか！）

奈倉はその得物に驚いた。
対魔・対人用戦闘用具。
ＳＲ界隈に於いても稀少とされ、神器に数えられる得物の一つ。

柄を握る藍の腕に力が篭る。
アヌビスの時とは比べ物にならない反発力に、エミルダの全身に力が入る。
互いに押し返そうとするが、量でエミルダ、質で藍とそれぞれが勝り、差し引き零という状況が生まれていた。

神隠しが2本枝から1本の腕に戻り、更に質量を増す。同時に藍もＳＲを解放し、腕に込める力を増す。
エミルダは左腕を引き、もう一度押した。
しかし、鬼は体勢を崩すことなく左腕を刀で弾く。
再び枝分かれした神隠しの1本が鬼を迂回、孤を描くようにウェインを狙った。

「トキ！」

奈倉は掛け声と共に、トキの走って逃げようとする先のアスファルト目掛けて剣を投げつけた。
背後に迫る左腕から逃れるため、トキはその剣の柄を掴む。が、

「それを踏み台にしろ！」

判断を誤ってしまう。
藍の日本刀のように、神隠しの攻撃を防ぐことの出来る武器を期待していたトキに、奈倉のような発想はなかった。
混濁する意識が手伝ってか、ウェインの動きは時間の経過と共に鈍り、既に対処の使用がない状態まで陥っていたのだ。そんな状態で西洋剣を踏み台に出来る自信もなかったし、すでに選択を誤っている。
しかし、トキには死に直面するであろうこの現状が、絶大的危機と思えなかった。触れるだけで死に至る可能性もあるハズなのに危機感が意識できる程度にしかなかったのだ。
いつの間にか、肝を冷やすような恐怖は何処かへと消えていた。
右肩の重しを外す。
鞭のように迫る神隠しを眼前に、咄嗟にウェインを突き倒して左腕の軌道から逃す。
タイムリーダーを使う余裕が無かった。低速時間が展開する頃には左腕が自分の身体を通り抜けているだろうという直感した。

「トキ――！」

だからトキは、敢えて右手を迫り来る黒腕の前に晒したのだ。
低速世界の展開よりも僅かに早い、ウェインに添えていた右腕のモーション。
奈倉から受け取った剣の半分が消えていることに気付く。
助け舟として剣を投げた奈倉はその現象に戸惑い、藍は数秒してから気付く。
その直後に起こった出来事に最も戸惑ったのはエミルダ。次にウェインだった。

「え……？」

通過した左腕。

「なん――？」

その軌道上、トキは自分の無傷に疑問と希望を見出しながら立ち尽くしていた。

全てのモノを触れただけで消し去ってしまう。

それが神隠しの本質だった。

「大丈夫なのか？

平気かトキ！」

頷くトキを再び左腕が襲う。

「そんな……そんなことがあるもんか！」

だが、到達するよりも早くタイムリーダーが展開する。トキは低速に包まれた世界で屈み、アスファルトから時間を奪い、タイムリ

ーダーを解除する。
陥没した地面に逃げ込み、頭上の神隠しをやり過ごす。更に周囲のアスファルトからも時間を奪い、両手の平に奪った時間を回遊させ、左腕が引くのと同時にエミルダへと迫った。

「無茶しないで！」

「藍！その刀貸せ！
私とトキで足止めしているうちに、あの男をどっかに隠せ！」

２本の左腕がトキへと殺到する。
低速時間と通常時間を切り替えながら躱わし、距離を詰め、時間を奪って、その時間を利用して左腕を弾く。

（まさか、あんなことが出来たなんて……）

先ほどの一瞬、左腕は確実にトキに触れていた。
それにも関わらず、トキは無傷のまま。服の一部を消されただけで一切のダメージを負っていない。
何が起こったのか。
説明がつく唯一の要因は、色世時という人間の持つＳＲ。

「ダメよ愛院！
生死（これ）繋綴は、あなたじゃ使えない！」

「何でだよ！？」

「この刀は色々な理由があって、使える人は限られているのよ！」

「何すりゃ使えンだよ！」

「刀に選ばれない限り、何をしても無駄よ！」

接触を求める左腕に対し、トキは両の手を駆使してそれを防ぐ。

神隠しが触れる。

その瞬間、掌にストックした時間を流出させると、消滅を防ぐことが出来ることをトキは発見した。

絶対だと思っていた左腕の攻撃を防がれたエミルダは、トキを牽制しながらウェインを狙う。が、鬼と門番の2人によってボールの如く投げ渡されるウェインを、なかなか捉えることが出来ない。

藍がウェインを高速で空中に放ち、その数瞬前に跳んだ奈倉がそれを空中キャッチ。今度は藍が神隠しから離れ、奈倉のダイレクトパスを受け取る。

生死繋綴とトキの突撃によって、エミルダは思い通りに攻撃出来なかった。

先ほどから左腕に伝わる、奇妙な感覚。

数日前に翼と共に居た彼が触れるたびに消滅力を失う左腕。

理解できない現象は少年の中に混乱を生み、それを深めていくのに充分な気持ち悪さを兼ね備えていた。

薙ぎ払ってもいなされ、足元を掬おうにも躱わされ、真正面から打ち抜こうとしても軌道を逸らされる。

全てが彼の掌に触れて変わる。

望んだ結果が実現しない。
優先されている願望の実現。
今までの相手と違う、怯えもせず、逃げもしない。どんなに攻撃しても躱わし、攻め上げてくる人。
トキと呼ばれる男。
昨日まで殺してきた人間の、誰もが逃げようとしていた攻撃にも拘らず、全力で立ち向かってくる。

（こんな、所で……！）

脳裏に浮かぶ赤。
赤の次に訪れる黒と白。
混乱して灰色が生まれ、頭の隅に黒と白が密かに残った。
左腕がこんなことになっていたのは、その頃からである。

「どうして、僕らが間違っているんだ！」

再び左腕が1本に戻る。
背後から戻りつつ襲う枝腕を躱わし、トキはエミルダの前に立った。

「誰もやらないから、僕と姉さんであれを止めようとしているのにどうして……どうしてみんな、僕達が間違っているみたいに言うんだ」

エミルダの左腕がトキに向き、トキの掌がエミルダに向けられる。
その様子を愛院は遠巻きに見守り、その間藍は誰にも悟られないように現場を離れ、ウェインをビルの屋上へと隠した。

「……君にはお姉さんがいるのかい？」

「僕と、フェリル姉さんがどんな嫌な目に遭ってきたのか知らないでしょう？
だから僕たちは同じ目に遭わないように、みんなの事を思って捌いているのに」

「いや、だからって殺すことが許されるわけじゃ……」

「それじゃ、あなたはどうなんですか？
例えば、家族の誰かが殺されても黙っていられるんですか？
家族じゃなくても、大切な人とか、いませんか？兄弟や友達が――」

差し込む朝日が2人の右目と左目の瞼を下ろさせた。
左目と右目で互いを捉えあいながら向き合い続ける。
静寂に包まれた空間。
見守る藍と愛院、向かい合うトキとエミルダの熱を冷ますかのように風が吹き抜けた。

5分前。
黄立の幹線道路沿いにたどり着いた時、翼は初めて自分の疲労に気付いた。
全身に噴出した汗、震える足、乱れた呼吸。
混乱する頭には少年に関わることしかなかった。
たった1人。
突然走り去り、見失ってしまう。
正体のわからない追っ手がいるにも関わらず、迷いのない疾走による失踪。

「どう、なっている……？」

自分の体力残量に気付いた翼は次に、黄立の街に漂う異様な雰囲気に気付いた。
早朝から職場へと向かう車や通行人、新聞配達員。
彼らのように、1日の早いうちから仕事に精を出す人々の姿が、普段は意識することもないほど当たり前と認識していたそれらの存在が今朝はひとつも見当たらなかった。

風の音すらここには響いていない。
時間帯から考えても決してありえない。
ボランティアで何度も黄立の街で活動を行ってきた翼にはそれが異常だとわかる。一切予測の立たない何かが起こっている。

（異常は昨日から続いているが……）

足を前へ進めながら昨夜からの出来事を思い出してみる。
エミルダと共に食事を摂っている最中に不審者が訪問してきて、逃げろと半ば脅迫気味に説明した。
走って逃げる。廃工場を出て、丘と山を越え、麓へと下り、当てもなくアスファルトの上を逃げ回る。
休憩を取るため公園に隠れた。休憩中、幾度も背後に感じた殺気について予測を立て、エミルダ少年について考え、なぜ自分がこんなことをしているのか反省し、追っ手と少年の関係を考えた。
そこで何も知らないまま走り回っている自分に気付く。
目を覚ましたエミルダと言葉を交わし、不意を突くように公園を走り去るエミルダを追って現在に至る。

常人的な生活とは到底言えないスタイルで人生を歩む翼。
そんな彼だからこそ、エミルダという名の少年を放っておけなかった。
下手を打てば命に関わるであろう深刻な問題に直面している。
それは廃工場を訪れた3人との会話ですぐにわかった。彼らは、次に工場を訪れるであろう人々は自分たちよりも性質が悪いと言い、更に逃げ出すようにも促したのだ。

（アレでまともな方だと？）

脳裏に浮かび、その中で輝く刃。
アスファルトを割る大鎌。
その次に浮かんでくる言葉（モノ）。
パンドラ。

少年と不審者とパンドラ。
その中にこれといった共通点は見当たらない。
子供、カナダから来た孤児、東洋人、鎌、女性、大人。
パンドラがそもそも何を意味するのか。何かの隠語なのか。
それすら検討のつかない翼に元凶となるものが見えることはない。
呼吸を調整しながら進める足が止まる。

最初にそれを捉えたのは耳だった。
金属のぶつかる音と、何かが爆ぜる音。
僅かに震える地面を捉えた足が急発進する。
一度限りの爆音を頼りに、翼は走る。その先にエミルダが居るという確信はない。
ただ一心に、爆発が起こった場所にエミルダが倒れていないことを願った。
1人の少年が、静寂に沈む街を駆け抜けていく。

（どうなっている？）

そんな光景を、彼は建物の頂から見下ろしていた。
今この街で一般人が動けるはずがなかった。
その原因となっているのが自分と分かっている以上、男の――コルスレイの混乱は深まる。
眼下を走る少年は何者なのか。
爆発の起こった方角を目指して懸命に走っている。その方角に何があるのか知らないのだろう。

故に、疑問が生まれる。

（なぜ、一般人がＳＲを目指す？
どうして奴は眠らない？）

“キタチ”という名の街はすでにコルスレイの術中に落ちていた。
去年の夏、白州唯が桜色の雪に見舞われた時と同様に、一般人は悉く眠りの中へ沈んでいる。
ＳＲも、種類によってはすぐさま夢の中へ落ちていくほどの術が黄立の街を覆っているのだ。

しかし、少年は動く。

（まさか、同じ或いは似通ったＳＲ同士だと効果が充分に発揮しないというのか？
先生の理論にあったように、本当にそうなのか？）

走り行く少年を見送る。
予定外因子を見つけ、コルスレイはそれをどのように利用できるか考え……

「よし」

風と共に、少年と共に神隠しを目指した。

少年の後を付ける最中、コルスレイは翼の意思となっている欲望を探り、笑みを浮かべる。
生きていくという本能。
自分よりも年下で似た状況の生活を送る子供と一緒に住みたいという願望。
本能と願望が生み出す欲。
その副産物として生まれる同情の感性。

神隠しと知り合ったらしい少年は、思っていた以上に神隠しの子を想っていた。

戦闘現場に着く直前、コルスレイは待ち伏せしている無所属ＳＲに気付く。
サイキッカー、忍者、死神。
どれも個体としての戦闘力は侮りがたく、一般人の彼を足止めするに充分過ぎる力を持っている者達だった。

しかし、コルスレイの敵ではない。

翼の後を追尾するコルスレイの存在に、真っ先に気付いたのがくのいちだった。
彼女の異変に気付いて他の２名もコルスレイの存在と接近行為に気付く。が、コルスレイが３人の目の前に立った時、３人は完全に動きを封じられていた。
３人の体を包む水晶。
輝く水晶の表面に映る、各々の記憶。

「ついでだ。お前たちの“嫌忌たる日々（クリティカル　デイズ）

”を貰ってこう」

表面の映像に触れつつ、眼下の神隠しと向き合う複数名を見下ろした。

本命と向かい合う誰かと、その仲間と思われる女性2人。

そこで初めて気付く。

コルスレイがこの場で求めた欲を持った人物が神隠しの子、パンドラSRであった。

しかし、当初の目的であったパンドラSRと向かい合う人物に目が移ってしまう。

去年、訪れたこの街の近辺で対面した少年。

コントン程の実力者が目的とするほど特殊な人間で、先生も稀代と評価を下したというSR。

（あれは、色世トキ？

何故ここに？）

「何故、なんかじゃないと思うんだ」

沈黙を破る。

睨み合いを続けていても意味がないと気付き、トキは考えに考え、その言葉を放った。

「殺されたからって、殺すのはいいことじゃない。
俺も最初はそんなの分かりきったことだって、思っていたけど。
でも、結構わかっていないものだよ」

「それこそ、わかりきった……――」

「俺も母さんを殺されたから1人暮らしなんだ。
親父は海外の刑務所だし」

エミルダの反論が止まる。

「この前ぶつかった時、俺と一緒に居た奴が言っていたんだ。
もし住む場所に困っているなら、同居でもいいなら歓迎するよ、
って。そいつは廃工場暮らしなんだけど、面倒見はいい奴だし――」

「歓迎するから……って、どうしてですか？」

隠れていた右目が陽光を受け、浮かんだ涙を輝かせる。

「実際どうか分からないが……困っているんだろ？
家に困っているなら寝る場所とか貸すし、お腹が空いているなら
ご飯を出すって言う、それだけだよ」

「……どうして」

エミルダが言葉に詰まる。
それと同時、藍は初めて自分達以外の存在に気付いた。

（誰か来る？）

「なあ、エミルダ君。
俺だって器実験は許せない。
前に学校が襲われたんだよ。器の為とかっていう理不尽な大義名分でね」

「じゃあ、どうして動かないんですか……」

再び目に力が篭る。

「落ち着けエミルダ！」

諌める奈倉だが、その声は届いていない。
藍には、エミルダの視界にトキしか映っていないように思えた。
十分冷静になのか、トキを瞬殺するだけの自信があるのかまでは分からない。
或いは、怒りに半混乱状態にあるのか……

突き付けられる左腕に動じることなくトキは答える。

「俺は訓練中だ」

女性2人から血の気が引く。

この場合の膠着状態において、最も避けたかったのが相手を逆撫でることである。

トキにその自覚は無いだろうが、現実にエミルダは遣る瀬無さに後押しされ、左腕を一度引いた。

あとは前へと腕を押し出すだけ。

『エミルダ！』

たったそれだけの動作で目の前の男を葬ることはできた。

できたのだ。

しかし、現実に左腕は後退したまま、そのままの状態で静止した。

彼の行動を止めた2つの声。

偶然重なった台詞だが、実質エミルダを止めたのは奈倉の声でなく、足を止めて肩を上下させている彼の声だった。

「翼！」

「翼……さん」

僅かに下げた自らの左腕に気付き、エミルダは再びトキへと黒を突き付ける。
対して、トキも万全に備えてエミルダに掌を向けた。
奈倉は翼の存在に混乱し、藍は翼の介入が少年にどういった影響を及ぼすのか気がかり、静観を再開する。

自分達のクラスメイトの名前を知っているということが、2人の面識の有無を自然と答えだし、それが混乱を深めた。

「こ、ここで何をしているんだトキ！」

「それはこっちの台詞よ。
どうして村崎君がここにいるの？」

対峙する2人に向けて叫ぶ翼に、藍が質問で返す。

「その子には、何らかの人に話せない事情が、あるようでな。あからさまに危険な大人たちに追われているんだ。
逃げなくてはいけないんだ」

「なぁ、翼。どうしてお前はこの子を追って来たんだ？」

「私とエミルダ君は、まだ食事を終えていないからだ」

一斉にクエスチョンマークが浮かぶ。ただ1人、沈黙するエミルダを除いて。

沈黙の理由は翼の視線だった。
出会った時にはなかったものが今はある。それも異形・異色の部品として。

「その腕はどう……した？
エミルダ、大丈夫か？」

「――これが、僕です。翼さん」

風が消える。
そして彼が、少年少女達の前に姿を晒す。

「神隠しの力だ」

翼とエミルダの会話が始まり、トキの意識がエミルダに、藍と愛院の関心が翼に向いた瞬間だった。
3人の足が固まり、異変の起こらない2人はそれが男の仕業であると気付き、矛を向ける。
神隠しと拳銃。

トキとエミルダに睨まれながらも男、コルスレイの顔からは笑みが消えない。
愛院は自分の眼前にどんなSRが降り立ったのかを再認識して震えた。
藍は必至に足元を固めている結晶を取り除こうと力を込めて地面

を砕き、掘り返す。が、足そのものが結晶に覆われていると知り、無意味な行動を極力控えた。

翼は1人、何が起こっているのか理解と把握が出来ずに混乱していた。

「初めまして。俺は魔法使いだが何か質問はあるか？」

「その子に危害を加えるな！」

真っ先に叫ぶ翼に、魔法使いは頷く。
俺は危害を加えない、と。

「あんた、コルスレイ、だな！
欲望侵食の魔術師！」

「その通り。
そして俺は協会でもナイトメアでもない。
だから、一般人がいようと――」

コルスレイの指が翼に向き、釣られて愛院とトキの目も翼に向く。
少し遅れてからエミルダの視線もそちらへと移る。

「関係ない。
これから色々話す。処分されるのはお前達か、それともその翼と

か言う学生だけか……」

「な……っ！卑怯だぞ！」

「そこで提案がある。
色世トキ、エミルダ・レザロッテ。お前達2人が戦え。
勝った側の条件を飲んでやる」

2人の目が合う。
それぞれ目的を持って此処に来た2人は、同じ考えに至り、同じ行動に移ろうとし――

「下手なことはやめた方が良い。
俺には今、この場の全員をオブジェに変えることが出来る。難など無い。
しかし、それでは結論へ至る面白さと楽しみに欠ける。まぁ、楽しめたことなど殆どないが」

左腕の根元から僅かな結晶が発生し、手中の拳銃が黄金で包まれる。

「時間はないんだろ？
もうすぐナイトメアの連中も来るし、協会の奴らだって来る。
分かったらさっさと戦え」

コルスレイという男を睨みつけ、２人の少年の視線が交差する。

「戦う？
やめるんだトキ！それに、エミルダも！
そんなことをして何になる！？」

３人の距離が広がる。

「何が望みだ！？コルスレイ！」

「俺の通り名を叫んでおきながら、何故そんなことを聞く？
いつものことだ。
欲望……もっと、人を創り上げる欲が必要なんだ」

コルスレイの目が翼に固定され、同時に翼の結晶に包まれた下半身が動き始める。
自らの意志で動いているわけでない体に不快を覚えつつ、翼はこれから戦うという２人を見守った。

「私達を人質にでもしたつもり？」

「ああ。ハッタリは効かないからやめておけよ」

翼が愛院と藍の中間地点で止まる。

「君らも見ているがいい。
神隠しというものが発生する理由を」

（神隠し？）

「発生する理由だって？」

質問する愛院を嘲笑するかのように、彼女のプロフィールを口にするコルスレイ。
エミルダと同じ屋敷に居たこと。
パンドラ実験を見て見ぬ振りし、喰ってきたこと。
実験事故を経て、初めて当たり前の保護を受けたこと。
自力で日本の白州唯という場所に居を得たこと。

「しかし、未だに抜けきれないものがある。
例えば魔倉。
どうしてこんな平和の国に来てまで武器の裏ルートを取り持つ必要が有る？
まるで戦争を促進しているようにしか見えないが？」

「愛院はそんなことをする人じゃない。
協会の暴走に備えているのよ」

「そういうお前達は備えているのか？芹真事務所。
それ以前に、哭き鬼の元第一長姫候補――陸橙谷藍（りくとうやあい）」

翼が知らないクラスメイトの素性に触れた時、アスファルトの一部が消える。

「体力的に見るならトキが有利。
しかし、ＳＲの持つ殺傷力では神隠しの方が断然上か」

トキは掌に時間を集め、必死で左腕を捌いて直撃を避ける。
圧倒的火力の差は分かりきったことだ。
問題は、いつまで避け続けることが出来るのか。

「さっきから神隠しだパンドラだと、一体何のこと何だ?」

翼の疑問を背に受け、コルスレイは答える。

「君の知らない現実だよ、村崎翼君。
君の両隣にいる彼女達はそれぞれ魔犬と鬼人。それからあの黒い腕の少年が、神隠しを植えつけられたパンドラの子だ」

「それが現実だというのか?」

「疑うことは結構。
なら、目の前のあれは夢なのか?」

エミルダに無かったはずの、黒い左腕がアスファルトや金属を無差別に飲み込んでゆく。
その左腕から逃れ続けるトキは、瞬間的な移動を連続で実行する。
常識の及ばない現象。
現実の歪曲。

「いや、歪んでいるのは現実じゃない。
それまで培ってきた常識だ。
マティス・フォーランドっていうＳＲ研究者がいるんだが、そいつが言うにＳＲとは現実の崩壊から始まるケースが大多数らしい」

車が飲み込まれる。車体の右半分を丸ごと削り取られ、残された部品が倒れる。

「自然に発生する神隠しとパンドラ神隠しの決定的な違いは、目的の有無ではない。
誰の為に、何を消すのかだ」

「何が目的だ！？」

「言っただろ。欲望だと。
俺が直接手を下しては意味がない。だから、タイムリーダーにやらせているのだ」

「タイムリーダー？
トキの事か！」

肉薄する左腕を躱わし、必死に距離を開けようとするトキが目に飛び込む。

トキの行動は観戦する４人に同じように伝わった。
自分から攻撃はしない。

「欲望が欲しいとはどういうことだ？」

「この世界に初めて触れる君に分かるはずないだろう」

「だから聞いているのだ！」

激昂する翼に落ち着くように言い、奈倉も詳細を求めた。
具体的に、欲望が欲しいというイメージが湧かない。
観戦を続け、３人に背を向けながらコルスレイは語り始めた。

「真に人を形成するのは欲望だ。
これは俺の真実であってお前達の真実ではないかもしれない。
だがな、原始思考に戻って考えてみろ」

「原始思考？」

「何故人は生きているのか？
多くの者は死ぬ為だ、幸福の為だ、我思う故に我在りだ、それが奇跡なんだとか、あらゆる言葉で答えを飾ろうとする。
しかし、何の為に人は死ぬ？

幸福はどこから来る?
自分が存在し、思考が在るのは何故だ?
根源に帰った時、そこに答えはない。それらの疑問に明確な答えなんか用意されていない」

奈倉の頭上にクエスチョンマークが浮かぶ。
藍にも翼にも全てを理解することはできない。
ただ“何故生きてきるのか”と聞かれたら、いま出てきた回答例の一つを答えていただろうという、図星を指された感があった。

「俺は違うと思う。
何故生きているのか、それが分からないから人は生きている」

街頭が三分割される。
破片から時間を奪ってエミルダの脇をすり抜ける。

「盲目のままに人は生き、その人生で答えを得られるかどうかという試練に立ち向かう」

左腕がトキの太腿を掠る。
殆どダメージはないが、一瞬の恐怖がトキの動きを鈍らせた。

「その生を支え、答えへと導く可能性を持っているのが“欲望”だ」

「それは違うぞ」

低速世界がトキを包む。
遅れた分の時間を取り戻そうと、意識は未来を想像し、脳が命令を下す。体は加速を始め、致命傷へと至らしめようと左腕を構えたエミルダと脇をすり抜ける。
時間が通常速度を取り戻す――と、同時に左腕が形を変えて変則攻撃に移った。
突き、薙ぎ。
追撃。

「生きる理由など分からなくても人は生きていける。
欲など、生きていくうちに少しずつ身についていくものだ」

「なら、何故赤子は泣く？
人を生かし続けているのが欲望だということが分かっていないようだな」

「それが貴方だけの真実だからよ」

藍の加勢を受け、翼は反論を続ける。

「赤子が泣くのは、遺伝子がそうさせているのだ。
生存の為の危険信号が体の芯から発せられ、その不快に泣くのだろう」

（じゃあ、何故その不快から逃れようとする？）

口には出さずにコルスレイは振り向く。

「君が追ってきた少年もトキも、君も俺、鬼と魔犬も欲望あってここにいる」

コルスレイの指が藍から翼、奈倉、自分、エミルダ、トキへと移り指していく。

「トキに死なないでもらいたい。共に倒したい奴が居る。
エミルダと一緒に暮らしたい。孤独から逃れたい。
忌まわしき過去に別れを告げたい。神隠しという恐怖を忘れたい。
俺は神隠しの欲望が欲しい。あわ良くばトキの稀な欲も手に入れたい。
あの少年は、復讐を果たしたい。理不尽な大人たちの戦争に巻き込まれたことに対し。姉を失ったことに対し。ＳＲという世界を強制された恨みを晴らしたがっている」

「な……！エミルダの姉は死んでるのか？」

コルスレイは奈倉の言葉は拾われない。

「姉さんは死んでいない！」

トキを追うエミルダが否定する。
叫びながら左腕を横に薙ぎ、並ぶビルの支えを次々と消去しいった。
程なくして、太陽光が傾斜するビルによって遮られる。

「エミ――！」

倒壊。
大きな瓦礫がトキへと降りかかる。
神隠しで全身を纏ったエミルダに、圧死の心配はない。膨大な瓦礫が彼を押しつぶすより、神隠しがコンクリートを飲み消すほうが遥かに早いのだ。
衝撃で砕けるコンクリートとガラス。折れ曲がる鉄骨。それに混じって降り注ぐのは、ビルの内へと運ばれたオフィス用品。
逃げ場は残されていない。
そんな時間も残されていない。
前に神隠し。後に倒れかけてくる2棟と1本のビル。

絶望的といって差し障りない現状。

「止まれ」

目の前の瓦礫が地面に届いたのなら、どんなことが起こるのか。

静止した世界でトキはそれを考えつつ、先立って降り注いだ小さな瓦礫などから時間を奪い、消し去っていった。特に、翼や奈倉、藍らの近くに降り注ごうとしてた物から。

小さい物は右手で瞬間的に消去し、ある程度大きな物は左手で全体から時間を奪う。

すでにトキの掌には相当量の時間が集められ、回遊していた。

世界が僅かに速度を取り戻す。

顔を上げると、巨大なビルという塊が飛び込んだ。

3つ。

（いけるか？）

細かな破片を掻い潜り、巨大なビルに触れる事のできる場所を探す。

地面から数メートル離れた位置にあるそれを消すには、何らかの足場が必要だった。

空中に浮くコンクリートやワークデスクを踏み台にし、トキは空中移動を始める。

最も手近にあるビルの壁面に達し、両腕を突き出す。

巨大な物から時間を奪うのは初めてであるが故、トキにはどれだけの時間がかかるか想像できなかった。

左手に意識を集中し、ビル全体から時間を奪い始める。

ここ数ヶ月の訓練でクロノセプターの性能を少しずつ理解してきた。

素材にも依存するが、携帯電話ほどのサイズなら4～7秒で消滅

させることができ、ワゴンほどの車なら3分弱もかかる。

（5分じゃ終わらないか……）

時間を奪い続けながら考え続ける。
ただ時間を奪うだけではない、もっと効率良くビル倒壊の被害を防ぐ方法はないか。

時間を奪い続けて1分。
壁面を叩き、拳の型をハッキリと残すほどまでに硬度を失ったビルだが、それでもまだ堅さを残していた。
地面と激突した場合の衝撃と飛散する瓦礫が、どれだけの破壊をもたらすのか大体想像はできる。
身動きできない翼や藍たちに逃げる場所は無い。

そして、この方法では間に合わない。誰も救えない。

（イチかバチか……！）

ビルから離れ、地面へと向かって飛ぶ。
着地と同時に一瞬だけ低速世界を解除、

「止まれ」

両足に伝わる衝撃を堪えながら、トキはまっすぐ足を進める。
その道半ば自分の左肘に右手を沿え、時間を流し込んだ。
訓練で得たクロノセプターの使い方の一つである。
奪った時間を自身の体に流すことで、その時間を得た部位は決して傷つかなくなる。
この方法の欠点は効果時間の短さにある。車一台から時間を奪ったと仮定して、効果が現れるのは僅か1分前後。

肘に手を当てたまま、トキは足を止める。
目の前の静止した黒を前にし、深呼吸して覚悟を決めた。

左腕を神隠しへと突き出し、黒い幕を突き抜けていく。
静止した世界であるにも関わらず、エミルダの左腕の力は健在だった。触れたモノを時間に関係なく飲み込もうとする。
消滅に至らしめようと働く神隠しを、与えた時間が相殺していく。
消滅する力と創造する力がぶつかり合い、零を生み出していた。

「今だけでいい。力を貸してくれ」

神隠しの幕をくぐり、トキの左腕がエミルダに触れて時間を与える。
静止世界が低速世界へと変わるのは同時だった。
世界が加速を始める。
その中で唯一動けたのがトキだった。
が、今、神隠しの少年――エミルダも、低速世界において通常速度を取り戻した。

「聞こえるか？エミルダ君」

左腕を神隠しの幕から抜き、話しかける。

「お願いだ……聞いてくれ。
皆を助けたい。その為に君の力を貸して欲しいんだ」

黒い幕の狭間から顔を覗かせるエミルダ。
その前で、トキは持参した銃を1挺掲げ、分解してみせる。もう1挺銃を取り出してグリップをエミルダ、銃口が自分へと向くようにして差し出す。

「これがあなたのＳＲですか？」

「ああ、そうだ。
頼む。助けてくれ。このままじゃ皆ビルに潰されるか、ビルの破片で大怪我をする」

全身を包んでいた神隠しのカーテンが開ける。
完全にトキを信用したわけじゃない。
だが、翼を助けようとしているトキの意見を放って置くことができなかった。

「どうして……」

「ん？」

「僕達は殺しあわなくちゃいけないのに」

左腕がトキに向けられる。

「君は俺を殺す気なのか？」

「それで僕の願いが叶うなら」

「それは――何ていうか、自己中心的じゃないか？」

エミルダの目がトキの背後で、釘でも打ったかのように止まる。
世界が加速を続け、それまで静止にも等しかったビルの落下速度が上がったのだ。

「なぁ、エミルダ」

少年の目がビルから翼へと向く。
ビルの倒壊地点の直前。
死んでもおかしくない距離。

トキの左手が右肩に置かれ、エミルダは肩を震わせた。

「誰にだって、願いはあるだろ？
相手の願いも聞かずに人を殺すことはよくないよ」

「へ……？」

エミルダの中に多大な焦りが沸いてくる。
それと反比例するように、目の前の男：トキは冷静さを増していった。

「だいぶ前に翼に言われたことなんだけどさ、どんな悪いことをした人でも心のどこかで謝ろうとしているものなんだよ」

顔を覗き込み、震える肩を抑える手に力を入れる。

「だからさ、器実験の関係者を殺す前に、その人に謝ろうっていう気持ちや後悔が無いのか聞いてみなよ」

「……」

「俺も実験潰しを手伝う。だから、お願いだ。力を貸してくれ」

少年の目蓋が降りる。

次の行動をトキが目の当たりにする、トキの感覚で3分前。

「認めようが認めまいが、誰にだって結末は訪れる。
それまでに何を望み、何を拒んできたのか。終わりに向かう途中経過によって結末は無限に変わる」

倒壊するビルを目の前にしながらもコルスレイは言葉を続けていた。
藍と奈倉は必死に足元の結晶から抜け出そうともがき、翼は目の前のそれが現実なのか疑った。
不自然に倒れるビルと、その現場に居合わせた自分たち。クラスメイトと共に見上げる非日常。
濃厚に漂う死の予感。
最善を尽くして抗おうとする自分も居れば、生きることに諦観している自分も居る。

（結末……）

コルスレイという男の言葉が脳裏に木霊する。

「あの少年の望みは復讐。
あの少年を生み出した者達の願いは協会転覆。
協会長（あのおとこ）の欲望はわからなくとも、四凶というカオストリガーを持っていることが決定的な原因」

3人の足を固める結晶が変色を始め、黄金の光を放つ。
太陽光を浴びて光を反射する純金。
コルスレイの捕縛魔術、黄金侵食。

「協会が伝統として続いてきたこと、協会長という位置に1人の男が居続けることも間接的には原因だ。
長く続いてきた体制に不満は募り、協会を快く思わない輩が続出し、ついにはナイトメアという組織の団結にまで至った」

全身から力が抜けていく感覚に気付き、藍はそれが睡眠促進系の捕縛術であることを知った。
身体から力が抜けたら次に、意識が夢の中へと引きずり込まれていく。
そうなると、ビルの倒壊現場から逃れることはできない。

「なぜ四凶を処分しないのか。
絶対的悪の根源を担う彼らを放置するわけにもいかない、という名目に納得する者は意外と少なく、疑問が生まれ、反発を買い、現実に四凶に関する様々な問題が発生して、現状が生まれた。
四凶の言葉を使っていうなら、意見の分岐・対立が起こり、渾沌が発生した。
その渾沌の中、無所属及び小規模集団の面々の中にパンドラ実験を生み出すものたちがいて、それを利用して協会を自分達のものにしようという者・よりよき全人類のための協会を再構築しようという者達が現れた」

その道理が間違っているにも関わらず、実験は回を重ねるごとに規模を増し、成功確率を増していった。

ついには中規模な組織での実験が行われるようになり、人間からの資金援助を受ける者や、専用施設を所有する組織まで現れるに至ったのだ。

「僅かながら神隠しが噂になった時期もあったな。

期待はされていても実現は夢のまた夢といわれた時代。

神隠しの発現には大きなリスクが必要だった。なにせ自然に発生する神隠しを人工的に真似て作るんだ。人の存在を完全に消せるだけの欲が必要だったんだ。

この陽光（ひかり）のように、人は一生に必ず誰かに消えて欲しいと願うものだ。

避けて通ることができない道だが、ＳＲとして発現させるには並大抵の消滅要求だけでは発現しない。

心の奥底から殺したいと、片時も願い続けてやまない“器”が必要なんだ」

それまで夢だと思われていた実験も、成功に至った。

エミルダ・レザロッテという器。彼の存在は成功例のひとつにあり、失敗の原因でもある。

パンドラ研究所の一施設――私設孤児院――を失陥させたことが、ＳＲの完成度の高さを証明した。

多くの犠牲の上に発現したパンドラＳＲ、神隠し。

「あの力を発現させるに至らしめたのが、復讐の結末という欲望だ」

背後の3人の下半身全てを黄金が固めていく。

「あの少年には復讐しか残されていない。
全ての引き金はケルベロス――お前も知っている、少女だ」

「フェリル・レザロッテ……」

巨大な瓦礫の影が4人を飲み込む。

「これほどの力を引き出すほどに、エミルダ少年の欲望は珍しいモノなんだよ。
おそらく彼は、あと十数年間は復讐の為に神隠しを続けるだろうな」

コルスレイは倒れ掛けてくるビルに向けて左手を伸ばし、掌を見せる。
4人を包む影をかき消すかのようにまばゆい光が掻き消す。
収束する光。
コルスレイはそれを放とうとはしない。
ビルに触れた瞬間に、巨大な瓦礫を粉微塵にできる自信があった。

（破壊力ならパンドラ神隠し3人の中で、ダントツ1番だな）

光がビルに触れようとした、その瞬間に、４人は再び光に照らされた。

「うん？」

日陰から日当たりへ。
暗順応が始まるよりも早く、生まれたての影は消えた。
周辺を見回し、僅かな混乱がコルスレイを襲った。

「何だ？」

目の前のビルが消えたことを理解できず、欲望侵食は背後の３人に目を配る。が、３人は身体の半分を黄金に固められて自由の利く身ではなく、ビルを消すことなど到底できるわけがない。

「動くな」

その一声がコルスレイの心拍を上げた。
コルスレイは指示に従いつつ、背後の人物を感覚で特定する。後ろにある欲望を色で表すなら、虹。
通常の人間には在り得ない複数ものメインカラーに、更にそれが２本分も存在する。

これだけ稀な欲望を持った人間はそうそういない。

「トキか」

「3人を放せ」

ガチリと撃鉄が倒れる。薬室に弾丸が送られ更に背後を取られている。

欲望侵食にこれを防ぐ手立てはない。

第一、トキがどのようにして背後を取ったのかも判明していないのだ。

「ビルを消したのはお前か？」

コルスレイはトキの要求を飲み、音を立てるように黄金を解除する。

上半身へと侵食を続けていた黄金の動きが止まり、やがて独りでに酸化を始め、まもなく侵食していた黄金が金属灰となり崩れた。

「俺じゃない。エミルダだ」

コルスレイの視界に息を切らせた少年の姿が飛び込む。

ＳＲの使いすぎで体力を切らせたことが見て取れた。息を切らせて肩を上下させ、左腕の黒い神隠しもほとんど見えなくなっていた。

銃を向けたままトキは立ち位置を移し、コルスレイの前方に回り込む。
トキは全員がそれぞれ立ち上がるのを見守りながらコルスレイに焦点を合わせ――
背後から鋭い音が届いたのはそれと同時だった。

「エミルダ！」

愛院が叫び、翼が真っ先に走り出す。
何が起こったのか急すぎて分からない。急変が連続しすぎて対応が追いつかない。
それでも理解の為に身体は動き、頭は回る。
トキがそちらへ目を向けると、銀色の槍に右腕を貫かれたエミルダの姿が映った。

「アヌビスか」

一瞬の隙を見計らい、コルスレイはトキから離れた。
トキが顔を戻す頃にはすでに射程圏外。
更にトキは彼の放った言葉に軽い驚きを覚えていた。

コルスレイはパンドラ神隠しの欲望を諦めざるを得ない状況にあることを悟り、自重して撤退した。
トキに背後を取られ、しかもそんな状況でアヌビスが現れたのだ。

その後方には罪悪の呪術師、錬金術師、ノクターン・バベル。
芹真事務所と、その加担者たち。
更にアヌビスとは別方向から向かってくる協会部隊の存在も確認できた。

（先生も居るようじゃ勝ち目も薄いか……）

名残惜しみながら欲望侵食は黄立の街を去る。
そうすることが吉であると言わんばかりに、風が彼の背中を押した。

そんな彼と入れ違いでホートクリーニング店の面々は現場に到着した。

「見つけた！神隠しだ！」

ハンズやクワニーの視界に目標の姿が飛び込む頃、すでにアヌビスたちは先制攻撃を仕掛けていた。
任務とはいえ、子供に対する厳し過ぎる灸。決して適切とは思えない方法。
死角（うえ）からの投擲。

（右腕を斬り落としてやがる！）

得物は的確に獲物を捉え、持ち主の望んだ結果を描いていた。

黄立の街に悲鳴が木霊する。

ハンズたちとは別の角度からその光景を目の当たりにした愛院は、エミルダの右腕を切断したその槍を見て驚いた。

それは自らが製作に携わった、数少ない複製武器。協会部隊との戦闘で失った商品倉庫の1つに保管されていた商品、ガエ・ボルガ。

（アヌビスが持ってたのか！）

奈倉の足が動いた次の瞬間、神隠しの少年に対して一本の矢が飛来し、左腕に妨げられることなく少年の右足を貫いた。

走り寄る翼を見て、トキも全力でエミルダへと向かった。

しかし、翼が走るよりもアヌビスがエミルダの前に降り立つ方が圧倒的に早い。更に、その行動の一つ一つから殺気が溢れ出し、邪魔になるであろう翼を排除しようとメインの獲物が振るわれる。

ハルバートが煌く。

その軌道は正確に翼の首を刎ねようと走る。

凶器が振るわれる。

翼の視界に、その刃は映っていなかった。

速度と状況が視界を縮めている。

人の目では追えない速度の斬撃。

しかし、力を解放したトキはアヌビスのそれよりも早い。

「エミルダ！」

アヌビスの攻撃に気付かずにエミルダに駆け寄った翼は、急いで傷口の止血に掛かった。ハルバートを消したトキも、足に刺さった矢を消し除き、奪った時間をエミルダへと送る。

「どけ！トキ！」

力任せにもう一刀の振られる。

トキでなく翼を狙った斬撃だが、タイムリーダーとクロノセプターを併用して時間を奪い消す。

ハルバートを相手にするトキ背後、激痛に苛まれてのたうつ神隠しに対しクロスボウを用いて狙撃するジャベリン。

しかし、放たれた矢はケルベロスによって防がれる。

二方向からの攻撃を防いでいる隙に、藍は翼と神隠しの少年の元に急いだ。

「そいつが神隠しだ！
何で邪魔をするんだ！えぇ！？」

「それが子供を殺してもいい理由なのか！」

激昂するハルバートに翼が食らい付く。

「頭がおかしいんじゃないか？
相手は子供だぞ！？」

「そいつが話題の殺人鬼でも俺の頭がおかしいっていうのか！
どうなんだ！？」

言葉に詰まる翼の脇で、藍が治療用の術符を取り出す。
右腕の切断面に術符を巻き、接合を始める。

「そんなに殺しがしたいなら、あの世で思う存分やればいい！
俺達がその理由にされちゃ堪ったもんじゃねぇ！
協会にだって限界はあるんだ！世界中の全部を護れるはずがないだろ！」

怒鳴り、必死に涙を堪えながら次の得物を取り出すハルバート。
同時、一度言葉を呑んだ翼が再び口から言の葉を放った。

「だから、殺すのか？
それではこの子と同じではないのか？」

エミルダを殺人鬼と仮定し、翼は言う。
現実に殺人鬼であることを知っているハルバートとジャベリンの両アヌビスにとって、その言葉は大きな矛盾を突きつけた。
人々の為に神隠しを消したい思いと、殺人鬼と同じくなりたくな

いというという思いがぶつかり合い、葛藤を生む。

そんな、次のリアクションに困り果てたハルバートの肩に手が置かれる。闇影の魔法使い、ホートクリーニング店店長・ヴィラ・ホート・ディマの手が。

「答えは出たわね。

エミルダ少年はパンドラプロジェクトの犠牲者よ。

幼さゆえの過ちを許せとは言わないけど、これからのことを考えて正しいことを教え、示していくべきよ。あなたやジャベリン、翼のように似通った“痛み”を知り、抱えている人たちが」

トキが集めた時間をエミルダに与え、痛みを和らげる。

「行くべき道が閉ざされているなら、私達が新しい道へと導いてあげればいい」

ハルバートが得物を収める。

ジャベリンはクロスボウを投げ捨て、無言でその場を飛び去った。

遣り切れない思いはハルバートにも、ハンズにも、愛院にもあった。それぞれ失ったモノがあるのだ。

しかし、それを報復で返すことはできない。

泣きながら手を引かれて立ち上がる少年を見守りながら、全員がそれを認識・再確認した。

静かに風が吹き抜け、朝日が照らし出した。

2日後。

トキは1人、考えながら坂道を上っていった。

パンドラ・プロジェクトがどういったものなのか、それを次ぐ器実験がどんな悲劇を生むのかを知った。

奈倉愛院やエミルダ・レザロッテのように生きながらえる者もいれば、その実験中に命を落とす者、駒として作られて戦闘で命を落とす者もいるという。

訓練が完全に終わったワケではない。

しかし、

(起きているかな?)

早朝の散歩。

訓練をサボってまで出てきたトキは、翼の廃工場を訪れていた。

SR同士の戦争。

その原因が協会にあるのかもしれないが、それに対抗しようと人

体実験をするナイトメアも何かがおかしい。
やり過ぎとしか思えなかった。

「おはようトキ」

朝早い時間でもあるにも関わらず出迎える翼。
工場内に設えられた寝室エリアに入り、新たに増えた家具（ベッド）の上で寝息を立てるエミルダを見て、2人は工場の出入り口まで移動してラジオ体操を始めた。

「トキのおかげで何とか2人暮しもスムーズに行きそうだ」

2日前の戦闘後、エミルダは翼の言葉に耳を貸して謝罪を始めた。
死に至る痛みを体験し、改めてそれがどれだけ深刻なことなのかを考え、その重さを知ったのだ。
その後、マクシミリアン・ウェインの後悔を聞き、エミルダはウェインの殺害を取りやめた。生きて償うと誓い立てたウェインを信じ、見逃す。
その代わりにウェインはエミルダや芹真事務所、ホート・クリーニング店にとある情報を渡した。

「今日さ、これから器実験場を潰しに行くんだ」

「これから、か？」

「ああ。それでさ、今日ちょっと遅刻していくかもしれないからさ」
「わかった。伝えておこう」

無音のラジオ体操を続ける2人の背中を、起きてきたエミルダは見守った。

「器実験を潰すということは、それなりの危険が伴うということか」
「まぁ、そういうことだな」
「気をつけてください」

背に声かけたエミルダへと振り返り、トキは頷いた。

「君のように、誰かが酷い目に会う前にがんばって潰してくる」
「もう行くのか？トキ」

頷くトキに、翼は手を差し出した。
差し出された手を握り返し、トキは行ってくると告げる。
翼の手が離れると、エミルダの左手が差し出された。
握手を交わし、トキは廃工場を後にした。

エミルダはトキによって与えられた左腕を確かめ、小さくなって

いくトキの後姿を見守る。

「まだ馴染まないか？」

「え？

いえ。ただ、自分の左腕の感覚が懐かしくて……」

「いつかは慣れるさ」

トキが無事に帰ってくることを望みながら、翼は改めて現実を定義していた。

目の前で起こりうることが現実なら、起こったと言う例も現実だ。嘘の可能性もあるが、嘘を嘘と決め付けるには、実際に自分の目で見て確かめるのが早かった。ＳＲという世界を知り、世界の全てを鵜呑みにすることも、疑うことも容易でないことを再認識し、思い改めるに至った。

しかし、それでも現実はここにある。

例え、同居人が殺人鬼だったろうと、人は生きていける。

問題は非一般的な力の使い道を間違えないこと。

それを自ら制御できることにある。他人へ自らの能力をさらけ出すようでは一般社会に溶け込むことは不可能。

ＳＲという人種は、能ある鷹は爪を隠すという言葉を忠実に実行しなくてはいけない人種なのだと気付かされた。

２人は食料庫に足を運び、朝食の準備を始める。

その日、芹真事務所が器実験場を潰滅させたのは正午の頃だった。

第３５話－それは降り注ぐ陽光のように－（後書き）

『今回のアレ、どう思う？』

『アレって、どれ？』

『トキの力だろう』

『なるほど……その為に俺達は集まったのか。時間の無駄だな』

『口を慎みなさい。トウコツ』

『それよりトウコツ。お前から見て、今のトキは脅威に数えられるＳＲとして成長しているか？』

『何で俺に聞く？』

『あなたが一番近くにいるからよ』

『美味そうに仕上がってるか？』

『あのなぁ、俺はジャンヌの姉御に目ぇ付けられてんだ。滅多に自由行動なんてできないんだよ』

『だが、たまに覗いているんだろ？』

『……あぁ』

『それで？』

『俺の意見でいいなら話してやるぜ。
トキはA級ブラックリストじゃあ、納得いかない。どう考えてもSランククラスの能力を持っていやがる』

その言葉に、四凶の全員が頷いた。

第３６話－Ｄｒａｓｔｉｃ　Ｔｅａ　ｐａｒｔｙ－（前書き）

白州唯高校襲撃事件。

黒羽商会。

神隠し事件。

「なるほど……いずれも、トキ自身が直接解決に導いたわけではないが、強く関連しているんだな。こりゃ面白い」

『面白くありません。
いま何処にいらっしゃるんですか？』

「ん？
明日の茶会の用意を、な」

『は？』

「つまり、明日は有休！ってことで」

『え！？待ってください会ちょ――』

「ふ～……電源切っとこう」

強制且つ大幅に予定を変更し、完全支配はアウトドア用品の点検

に移った。

「さぁて、“長い”から色々準備しとかないとな（ページ数的な意味で）」

第３６話－Ｄｒａｓｔｉｃ　Ｔｅａ　ｐａｒｔｙ－

「――ということで、明日は遠足なので皆の者、浮かれていないで聞け。
おやつは３００円以上とバレないように持ってくること。
うまく誤魔化して持ってきた者にはプレゼントがある。
全員、明日は学校をサボらないように。
特に時と四式（よしき）。わかったか？朴念仁コンビ。興味が無いとか寝坊したという言い訳は受け付けないからね」

「はい」

「Ｚｚｚ……」

どういうわけか。それは大した問題ではないのだ。
例え学校行事で数少ない楽しみであったスキー教室が潰れようと。
例え、その代わりに行きたくもないような場所への遠足という退屈な行事が増えたとしても。
例え……前に一度行ったのにまた行かなくてはいけない場所であろうが。

兎に角。
肝心なのはその行事が楽しめるかどうかである。過去が如何なるものであったかは置いておくのが肝心だ。
しかしやはり、予めその行事自体がさして面白くないと分かっている場合、それをどうやって楽しいものにするかがポイント。これはある程度の労力と下準備が必要なのである。が、前々から何度も

その話をしているので皆、準備にぬかりはないと旨を張って言えた。
　3年3組という問題クラスを構成する生徒の1人1人に担任の登竜寺蓮雅が求めることは、プレゼンテーション力とエンターテインメント性、それから、規範を守りつつそれらを実現できるかである。
　スキー教室がなくなりやがった代わりに、同じくらいにそのイベントを楽しめるようになって欲しいと願いつつ、それでも我関せずとばかりに自然を堪能することもない輩が出没するであろうことは容易に予測できた。その対策を練るために蓮雅は頭の中にブラックリストを構築していた。

『というわけですよ芹真さん』

　どういう訳か、理解する気など毛頭ない芹真だが、非常時に備えてその日のうちに蓮雅へと連絡を入れた。

「よし、復習だ。
もしもテロに遭遇したら？」

『全力抵抗。隙あらば情報収集』

「蓮雅の予測を教えてくれ。
得物を持ってきそうな生徒は何人だ？」

『3人。常に動けるような子たちよ』

「使えるんだな？
なにはともあれ、気をつけろ」

『……ありがと』

電話を終え、芹真は屋上へと顔を出す。

学校を終え、真っ直ぐ事務所へと足を運んだトキの訓練風景が視界に飛び込む。

藍はそれを見守り、ボルトの連れてきた訓練相手の面々もそれを見守る。

明日、隣の県までバスで移動し、自然の中で集団行動・状況適応判断の大事さを学ぶという理由付けされた遠足が行われる。

（……）

「……ふぅ」

明日という日が近付くのに比例し、芹真とボルトの中に胸騒ぎが起こっていた。

何かが起こる。確たる証拠や予兆がなくとも、直感がそう告げている。或いはこの胸騒ぎこそ予兆なのかもしれない。

しかし、それは2人だけに限った話ではなかった。トキの訓練を見守る藍も言い知れぬ感覚に見舞われ、教師を演じて白州唯高校に潜入しているワルクスも芹真やボルト同様の不安にかられ、隠し持ち込む武装を考え始めていた。愛院や高城らもそれを感じて連絡を入れ合っていた。

胸騒ぎを感じたのは白州唯高校に関係する者達だけではなかった。明日の遠足に合わせて色世トキへの接触を試みようとした非武装

派の2人、ベクター・ケイノスとリデア・カルバレーも不審を抱きながら明日の接触可能な時間と場所の確認を急いだ。

内から零れる紅を拭いながら男は壁に体重を預けて立ち上がる。
クレアボヤンスのSR：ミギスは、それを必死に引きとめようとするが男は足を止めなかった。

「無茶だ！
そんな体で行くなんてどうかしている！今は治療が――」

滴る流血が創り出す痕跡を辿って他の部下達が男を止めにやってくる。
が、誰一人、彼に触れることが出来ない。
例え命脈が尽きかけていようと、男にはまだこの場を完全に“支配／糸配”するだけの力は残っていた。

「あのSRたちに会える、最期の機会だ……せめて、意志だけでも――」

霞む視界が傾き始める。
誰にも支えられることなく、マスターピースと名乗るSRは意識を失い、冷たい地面の上に倒れた。

ナイトメア非武装派のリーダーが倒れる。
その報は瞬く間に世界中のＳＲたちへと伝播していった。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

バスに揺られること1時間。
日も高くなって来た頃、トキはバスの中で安らかに寝息を立てていた。
　クラスメイトの殆どがカラオケや会話、ミニゲームなどに熱を傾けているという、はっきりと言うなら騒音の中、まるで静寂に包まれてでもいるかのように穏やかな顔で夢と向かっていた。

「すごいよな。四式ですら寝ることが出来ていないこの状況で……」
「ホント、珍しいよな。トキが仮眠を取るなんて」
後部と横からトキの寝顔を覗き込み、コウボウと友樹は顔を見合わせた。
「今のうちにちょっと拝借しておくか」
言うが早いか、2人はトキの鞄を物色して携帯ゲーム機を取り出す。
しっかりと人数分持参したトキに感謝の念を込めてスイッチオン。
そんな2人以上にテンションの高い他のクラスメイト達は、
「次の私な！」
「レイズ！」
「結構山が綺麗だな」
「だからそこの攻略は赤だって」
「そいつがババだよボケがぁ！」
「あ、それ俺の嫁ね」
「やはり構造上このバスも後部座席の方が比較的酔い易い傾向が……」
「もっと面白いのあるよ？」
「やっぱり？」
「う〜ぅ、気持ち悪いぃ〜」
「これなんてどうかな？信弥くん」

（やべ……可愛すぎる）
「――眠ぃ」
「蓮雅さんこっち見てないよな？」
「行くぜ！“変態革命”！」「マイク取り上げろ！」
「大丈夫か？」
「何でバスとかって飲食禁止なんだろ？」
「公共故」
『……』
「死んだ～」
「おっ、いい車」
「現地についてもあんまり下らない事すんなよ」
「ワカリマシタ。イインチョー」
（こいつら……）
「席交換してくれ」

ノンストップで騒ぎ続け、それでも疲れの色を微塵も見せない。
空元気というよりも自棄に近いものが原動力となって皆を突き動かしているのだ。
喧騒と喧騒と喧騒と……とにかく喧騒が混じり合う車内（バス）。
そんな中で、蓮雅は静かに観光案内の地図に目を落とす。

（狙撃に適する場所は3ヵ所か……
芹真先輩は藍を配置するように言っていたけど、大丈夫なのかしら？）

真横に目線をずらして彼女を盗み見る。
窓際に位置する席で、静かに書物へと意識を傾ける橙空藍。

藍のことを芹真は信頼していたが、蓮雅は信頼していなかった。
実際に藍が戦った場面を見たわけでもない。耳にしたことはあっても、それが信頼につながるわけではない。

（ただでさえ危なっかしい雰囲気で赴いている子が何人かいるのに……）

蓮雅が自分の席を立ち上がり、騒ぎまくる子供達の中に要注意すべき生徒を確認する。

慌ててタバコを隠す奈倉。
鋭い目つきで窓の外を眺めている高城。
確実に何かを企んでいるであろう、委員長と配下の馬鹿共。
確実に羽目を外しすぎるであろう、お嬢と愉快（且つ不愉快）な仲間達。
現地で揉め事を起こす可能性の最も大きい友樹と、それに付き合いかねない連中×４。
翼が破廉恥な行動を実行しないように計画を練りつつ、視線を通路を挟んで反対側に座る藍へと向ける。

（漢詩？）

藍の読む書物の内容を盗み見るが、蓮雅にとって専門外の分野であったため追求をやめて再び計画の立案に頭を回す。いざとなったら手伝ってもらおう。芹真との通話を思い出しながら蓮雅は地図に目を落とす。

一方、盗み見る者が居たことにも気付かないほど、書物に意識を傾けていた藍は僅かに焦っていた。

（天段の“ホウセンカ”が発動しない原因は……ダメ、これでもない）

蓮雅が漢詩と思い込んだそれは、藍の家族が残した数少ない文書。華創実誕幻（カソウジッタンゲン）の習得書だった。

緊急時にホウセンカほど便利な術を藍は知らない。その為、緊急時に備えて習得しておきたかった術だが、難易度の高さが最高級であるため未修得のままである。

（藍の奴、何読んでんだ？）

席に座っているＳＲの各々は、たった１人を除いて同じ感覚に見舞われていた。

バスが目的地に近づくにつれて強まる胸騒ぎ。

藍はあらゆる事態に備えて陰陽術を復習・習得するために勉強し、愛院は気を落ち着かせるために火の点いていないタバコを銜（くわ）えていた。のんきに読書する藍も気になるが、それよりも胸騒ぎの原因が何よりも気がかりであった。

高城は脳内で持参した装備を思い浮かべ、どんな事態にまでなら対応できるかというイメージトレーニングを繰り返し重ねた。

（クソッ……この感覚、孤児院が陥（お）ちた日と同じじゃねぇか）

（まさか、このバスを追ってきているんじゃないだろうな？）

それから約３０分後、バスは目的地に到着した。
見渡す限りの緑。所々に見られる人工色。
山に囲まれた山村。
村でありながら観光名所とされている場所。

『奥の自然処』

高速道路を降りて5分ほど車を走らせると辿り着ける場所である。
国道から市道に入ると到着するという、ごく単純な道のりで辿り着けるのだ。

電気も通っていれば水道も通っている。
山に囲まれているからといって不便することも、災害に苛まれることも滅多にないという場所だ。
観光所であるため自販機や食堂も存在し、また人が歩くための道も自然にそって敷設・整備されている。
キャッチコピーは“自然とふれる村”であった。

「それでは皆さん、学生として、人として恥ずかしくないよう行動してください」

学年主任からの諸注意を終え、自由時間が始まる。
昼食時間まで完全に自由行動。
グループも3人以上なら組み合わせを問わないというものだった。

早速集合する生徒もいれば、孤立する生徒もいる。

そんな中で藍や高城らはすぐに集まっていた。

集まるやいなや、自分達の不安・胸騒ぎを告げ、それぞれの不安を更に深めた。

「じゃあ、お前らも……」

「嫌な予感は今でも絶えない」

「俺はむしろ、ここに着てから格段に酷くなった」

3人はトキの姿を探しながら会話を続ける。

いつから始まった胸騒ぎなのか。どういった感覚でそれを体験しているのか。

藍は軽い息苦しさ、愛院は背筋に走る寒気のようなもの、高城は妙に落ち着かない己に気付いた。前者2人同様、これまでの人生経験を元にこれから何かが起こると予測した。

そんな中、トキはどうなのだろうか？

もし、この虫の知らせが間違いだったら。

そんな僅かな期待を膨らますため、トキの意見も聞いておきたかった。

しかし、見つからない。

「何処に行きやがった！」

舌打つ愛院の横で藍はトキの降車後の行動を思い出していた。
バスの中で目を覚ましたトキはすぐに車酔い組みとなり、お手洗いへと肩を借りて連れて行かれていた。それに付き添っていたのは――

「翼はどこ？」

「エロティカならカメラ持って食堂に行ったけど？」

村崎翼。
彼を探して藍と愛院は道を進む。
その間、高城は工芸処やお土産コーナー・公衆電話・バス等を確認し、トキが戻っていないかを確認した。

――8分前

村に入る前に諸注意を聞く為、生徒達は駐車場に集められていた。
一刻も早く入村したい生徒もいれば、行事自体に不満を隠さない生徒・一切興味を示さない生徒までいて、当然早く長く面倒な話から解放されたい生徒がいた。そんな生徒達とは別に、車酔いした生徒達は一足早く村に入ってお手洗いに連れて行かれていた。
中には肩を借りなくてはいけないほど重度の酔いに見舞われた生徒もいる。
3年3組の生徒では色世トキと、類家香織（るいけかおり）の2人がこれに該当し

た。

しかし、トキは本当に酔っているわけではなかった。他の生徒達よりも早く村に入ることを目的とし、車酔いを装って他の生徒達よりも早く入村を実現したのだ。

トキが誰よりも早く村に入りたかったのには理由がある。

いつか見た、目的地に着く直前にみる夢のようなビジョン。前回は黒羽商会の時。今回もそれが見えたのだ。新緑と斜面を進み続け、その先で待つ誰か。ハッキリとその人物の顔を見ることができたわけではないが、場所は確実にこの村であるとわかった。この村を、奥へ進み、山に入り、直進して開けたところにそれが待っている。

敵か味方かわからない。かと言って放置するわけにもいかない。

だから、確かめに行くのだ。

その為にバスから降りる直前に翼を捕まえ、付き添いを装ってもらった。

「本当は酔っていない？」

お手洗いの直前でトキは翼に伝えた。

「もしかしたら、誰かがこの村に来るかもしれないんだ。

それが敵なら先に倒しておかないと」

「確かにその方が犠牲者も減る。しかし、お前はどうするつもりだ？」

「どうって？」

ため息をついて翼は貸した肩を解く。

「無事に帰ってくると誓えるのか？」

「わからないな」

「トキ……まさか、ゲーム感覚で行こうとしていないか？」

首が横に振られる。

トキには自信を持ってそれを否定することが出来た。

ゲーム感覚で戦うなと、訓練で教わった。嫌になるほど体の芯に、リアルに刻み込まれた。その中でも特に“ゲームのように次の機会があると考えて戦いに望まない”ということを手ってして教育された。

一度きりのチャンス。常にその気持ちを念頭に挑め、と。

「頼みがあるんだ。

藍たちが知ったら心配するから、俺のことを聞かれても知らないと言ってくれないか？」

「……帰ってくると約束するのなら、な」

トキが首を縦に振る。
それを確認し、クラスメイト達が村に入ってくる前に行動に移った。翼が他言しないことを信じ、トキはタイムリーダーを発動して静止世界の中を進む。一気に村の道を駆け抜け、タイムリーダーが静止世界から低速世界に変わる前に山の中へと入った。
警鐘と導き。
バスで見た夢の場面一つ一つを思い出して道を辿る。

（黒羽商会の時もそうだったけど、どうしてこれからのことを見るんだ？）

茂みを掻き分け、小川を越え、山の斜面を登り、時に下る。
陽光を浴び、森林のざわめきを聞き、木々の間を風が吹き抜ける。
人工物に囲まれた街を離れ、自然に囲まれた場所。

（俺に、予知能力でもあるのか？
まだ俺自身が知らない力があるってのか？）

木々で装飾された空間が開ける。
トキの目がまぶしさに細められた。
視界一杯に広がる新緑。
真上に広がる快晴。
ぽっかりと開けた草の茂る平地。
タイムリーダーの発動と解除を小刻みに繰り返しながら辿り着いた場所。

（翼……嫌な思いさせて悪い。
たぶん、あそこに何かいるんだ）

山の中腹の平坦な場所に設えられている緑色のターブテント。
トキはそこにＳＲの存在を確信し、複数の人影を視認した。

「おい翼、トキを知らないか？」

「敵がいるかどうか確かめてくると言っていた。
頼む、探してくれ」

同時刻。
あっさりと約束を破った翼は、３人にトキを追ってくれと依頼した。
心の底から心配していたが故に出てきた言葉だが、頷いたのは女子２人。
高城はその意見に同意しかねると、異論を口にした。
反対の意見を口にした理由は単純で、自分たちがこのクラスを離れた瞬間に、他のＳＲにクラスメイトが襲われたら誰がそれを阻止・防衛または救出するのか。それを考えて全員で捜索に向かうのは得策といえないと意見したのだ。

「人探しは愛院が得意だ。
俺は残る」

今度はその意見に異論が挙げられた。

「私が残る。
チームプレイなら私よりも、播夜と愛院の方がうまくいくと思う」

「でも、1人でクラスを護れるのか？」

愛院の言葉に頷き、高城も納得して護衛を藍に任せ、クラスメイトに見つからないように集団から抜け出す。

正直、高城にとって藍の申し出は大変ありがたいものだった。実力的に自分よりも遥かに格上の藍なら心配は無用である。しかも、鬼のＳＲでありながら陰陽術まで使えるのだ。力で攻めてくる敵にも、遠距離攻撃の敵にも対応できる実力を兼ね備えているため、これ以上ない戦力であり、敵にとって脅威となる。

走り去る2人の背後を藍と翼は見守った。

（どうか、何事も起こらないように）

申し出た藍にもクラスメイトを護りきる自信はあった。アサの暗殺以来、今日まで必死に命を護るため術の修練に励んできたのだ。

何も起こらないに越したことはないが、妙な胸騒ぎが止まないう

ちは警戒を緩める理由もない。
唯一不安があるとすれば、それは自身にではなくトキにであった。訓練で確実に力をつけ、経験値を上げているとはいえ、まだファーストアタックには弱い。最初にペースを奪われるとすぐには立ち直れない。それが今のトキの弱点であるのだ。そういった現状に付け加えて、この地形である。山林茂り、傾斜複雑。こういった地形では潜伏することや奇襲・襲撃を掛け易い。
戦闘が起こらないことを祈りつつ、警戒を怠らないよう自分に言い聞かせた。

トキを信じろ。

テントの中から新たに現れた人影を視界に入れた途端、特急風司は声を張り上げた。

「色世トキだと!?」

「落ち着いて下さい隊長。
……これも、あなたの仕業ですか?」

興奮するリデアの腕を押さえながら、魔術師ケイノスの目が主催者である男に向いた。
テントの下に集ったＳＲは新たに現れたトキを合わせて５名。
ケイノスが知る限りでは最悪の集まりだった。何故これだけの場

に自分たちが招かれているのか。
リデアとケイノスの2人は理解に苦しんだ。

「やぁ、トキ」

テントの日陰に入ったトキに声がかかる。
その時のトキの反応から、先に席についている面々は主催者とトキが初対面であることを悟った。

「……どうも」

申し訳程度の挨拶を返し、このテント内で最も権利を有しているであろうその人物、長テーブルの中央に座る男を見回す。全身を濃緑色のアウトドアを満喫している一般人にしか見えないが、警鐘の大きさから、彼がＳＲだとすぐに判断できた。
自分の名を叫んだ隻眼の男も、それを諫めた人物もＳＲだとわかる。ずっと瞑想している迷彩男も然り。このテントに集まった者は全員ＳＲだ。

中でも特に大きく警鐘が鳴り響くのは、瞑想している迷彩着の男。
その次にアウトドア着の男。

「歩いて来たのか――って、そうだよな。こんな山中じゃそれしかないし。
悪い悪い。つまらないこと聞いたな。何か飲むか？」

「どうしてこんな所に？
あんたはＳＲか？」

トキはすぐに質問を始めた。
この中のリーダー格。
ダークグリーンの上下を身につけた男。

「そう。ＳＲだ。
ここに存在する理由は君と話すためだ。
それから、彼らと話をさせるため」

「……余計なことを」

瞑想していた男が初めて口を開く。
重い声から不機嫌の様がひしひしと伝わった。

その様子から、トキは疑問を抱く。
彼らは同じ組織のＳＲではないのだろうか。
漂う雰囲気から和気藹々としたものは感じられず、むしろ重い何かを嗅ぎ取ることができた。真っ先に考えたのは、ナイトメアの武装派と非武装派である。
彼らには自分と接触する理由があった。協会と対峙するための戦力としての勧誘――

「その前に自己紹介と行こうか。　俺は完全支配のＳＲ、オウル・

バースヤードだ。
職業は協会長。よろしくな」

―第３６話―

―Ｄｒａｓｔｉｃ　ｔｅａ　ｐａｒｔｙ―

「さあさあ、まず座りなよ」

目の前に引かれたイスが存在していたことに気付き、トキはその背もたれに手を掛け、着席する。
テーブルの上には紙コップと水筒だけが人数分用意されていた。
中身は空だが。

ノドの渇きを我慢しつつ、もう一度全員の顔を見回す。

冷静を欠いたトキにそれぞれの特徴を見つける余裕は残っていない。

思いもよらない面会によって驚異を覚え、そのせいで戦闘態勢をとるべきかどうか迷った。協会の方針に反対する芹真事務所に所属している以上、敵でなくとも味方ではない。攻撃をされても文句を言えない立場だ。

しかし、相手は協会の頂点に立つＳＲ。完全支配。一切の情報を持ち得ないトキは本能的にそれを理解してはいたが、考慮に含める余裕はなかった。

「あ……あなたが、協会長？」

「そうそう。よく言われるよ。

俺みたいな軽そうな奴が本当に協会長なのか、って。今まで億単位の人に言われてきたから慣れてるけどさ。嘘をつくメリットなんて無いんだし、嘘をついた所で余計な揉め事に発展するだけだから、いつも正直に名乗り出るんだけど……

現実はそう簡単にいかなくてな、なかなか信じてもらえないんだ。それに関してはここ数百年ずっと苦労しているんだよ。１人の人間を意のままに動かすのは呼吸と同じくらい簡単なのに、“関係の支配”が不調なんだ」

自分をアピールするが、信用は限りなく零に近かった。

どんなに言葉を紡いだところ、相手にそれが伝わらなくては意味を成さない。

意味の為に紡ぐ言葉を選ぶ時間がないため、バースヤードは次の

手段を考えていた。自分の証明に苦労するのは最近よくあることだが、改めて自分のやり方を見直すと非常に効率が悪い。

（どうして協会長が？）

「だから、君と話すためだよトキ。ＯＫ？
さて、最後の１人が来るまでわずかな時間があるから、それまで少し情報交換でもしないか？」

長年の人生経験を生かした会話の発展方法、勘が織り成す会話の支配。
少しずつ自分の力を見せつつ相手に確信してもらう。それが協会長であるバースヤードが最近よく使う手段であった。

「少し待て協会長！
君だけで自己紹介を終えてしまっては、我々が空気の如くなってしまうではないか！」

隻眼の男が、今度はバースヤードへ向かって大声を張った。先程隻眼の男を諫（いさ）めた人物もその意見に賛同。
協会長の納得を得て、２人はトキに体を向けなおす。
最初に名乗ったのは隻眼の魔術師：特級風司。特級風司は挨拶の後に手を差し出した。

「私はリデア・カルバリー。魔法使いのＳＲで、いまはナイトメア

の非武装派に所属している」

一瞬、差し出された手を取るべきか悩み、トキはその手を取った。交戦の意志がないなら無理してでも拒む意味はない。

このＳＲに対して警鐘は一切鳴らなかったが、リデアという男の顔には不敵な笑みが浮かんでいた。何かを企んでいることに間違いはないが、警鐘は鳴る気配がない。

リデアの次に声を掛けたのは空間殺しの異名を持つＳＲであった。

「僕はケイノス。ベクター・ケイノス。
隊長と同じく、魔術師のＳＲです」

もう1人の魔術師は無表情かつ機械的に挨拶を述べた。色世トキという人物を分析するため、感情の一切を押し殺して冷静を維持していたのだ。その様子がトキの警戒を強めた。

警戒を解くべきではない現状。一瞬の油断が命取りになるこの場に於いて、トキの肩から力が抜ける。それはいつでも相手の攻撃に対応できるようにという反撃の姿勢。いつでも戦闘に移行できるようにと訓練された証である。

（少しは鍛えたわけか）

挨拶を返すトキを見ながらバースヤードの分析が進む。

索敵レベルこそ低いものの、トキの対応能力は高い。短いリーチを補えるＳＲを持ち、トキ自身その力の有効活用方をある程度理解

している。この現場で3番目に強大なＳＲ。
つまり、立派に脅威として数えられるＳＲの1人である。

（僅か数ヶ月前まで問題視するほどのＳＲではなかったのに……）

直に会って伝わる色世トキという人物のＳＲ。
協会長という地位に居て、絶対支配という力を持っている自分でさえ底を測ることが出来ないＳＲの持ち主。
存在型や理論型のようでもあり、創造型でもあるような感覚。それほど特異な力の持ち主。

色世　時。

バースヤードの視線を受け、寡黙を守りながら耳を傾けていた男がため息を漏らす。
出来ることなら名乗りたくはなかった。何故なら、このテントの下に集まったＳＲの中で将来的に最もトキに関係する人物が自分であると分かっているからだ。
だから、名乗りたくない。
折角リデアが交戦を避けてくれたのに、自分が火種となる恐れがある。
出来ることなら顔も合わせたくなかった。

「ほらほら、みんな名乗っているんだ。
大丈夫だって。交戦は起こらないさ。この場は俺が支配しているんだ。
わかるだろ？

誰にも拳は振らせないし、剣も握らせないし、引き金も引かせない」

バースヤードの視線に加え、魔術師2人の目が向き、更にトキの視線までが迷彩服の男に集まる。

「まったく……」

集まった視線の重さと僅かな支配により諦観に到る。

一呼吸置き、男は親より授かった己が名前を名乗った。

「メイトス・シュラヴァイトフ・ジヴィア。　いまは、この茶番に付き合おう」

腕を組んだままのメイトスと凍りついたトキの視線が交差する。

2人がどういう関係なのか。

バースヤードはもちろん、魔術師2人もそれを知っていた。

『メイトスの名を持つSRを殺すSRが、ニホンに誕生する。そのSRを持つ人間の名は“シキヨトキ”』

現代のSR界最強のテロリストと言われるメイトス。その名前を知らない者は少なく、同時に顔写真を見たことがある者も少ない。

が、その名は多くにとって脅威となるものだった。魔術師2人も、名を知り顔を知らない類であった。

（こいつが、メイトスだったのか！？）
（あれ？　こんな人だっけ？）

トキにとって、メイトスという名はいつか会うのだろう大事な名前。避けて通れない敵の名と、最初は考えていた。
しかし、実際に会ったこともない人間を敵を決め付けることがどれだけ罪なのか考え、認識を改めた。

（この人がメイトス……俺が、将来殺す人）

気が重くなるよりも早く、協会長の一声が全員の意識をまとめた。

「さて、いまの協会がどういう状況か皆に伝えておこう」

虚を突くかのように放たれた言葉。
それに真っ先に意識を傾けたのはベクター・ケイノスだった。

「自己紹介も終わっただろ？
だから本題に入ろう。
もう一度言うが、ここにいる皆に協会の現状を教えよう」

メイトスが目を瞑るのを確認し、バースヤードの説明が始まる。

「現在、協会本部では四凶の監視・探索に全力をあげて戦力を世界各地に散りばめている。
ヒーローズの三分の一は日本周辺に配置、三分の一は世界中で任務に就き、残りの三分の一は本部の防衛や待機要因として配備。
また、内部で四凶反対派と賛成派、中立派による意見の衝突が増えてきている」

「中立派とは何かな？」

「いい所を指摘してくれたよ。リデア。
協会内での内部分裂の規模を拡大するのも縮小するのも、彼ら中立派が鍵となるんだ。
どちらの肩を持つべきか。自分では決めかね、流れに身を任せたり、他人に依存して自分の身ばかりを案じる。或いは――」

「四凶の存在を理解しているからこそ、深く悩み、悩み続けようが答えを導くことができない」

メイトスの言葉に会長が頷く。

「さて、魔術師のお二方。それからトキ。
君達に聞きたいんだけど、四凶と聞いてどんなイメージが頭に浮かぶ？」

「ドス黒い負の渦だ」

即答するリデア。

「平静を乱すモノ」

次いで答えたケイノスの回答。
2人の意見を聞き、メイトスからため息が漏れる。

「トキはどうだい？」

「え……と、急に聞かれても」

「何でもいいんだ。パッと頭に浮かぶイメージだよ」

四凶という言葉を耳が受け取る。
最初に浮かんだイメージはトウコツだった。次にコントン。
トキ自身が関わった四凶。
実際に交戦してみた相手。

「人、かな？」

メイトスの目蓋が上がり、会長は頷く。
トキの回答を理解できないリデアは眉をしかめた。が、人それぞ

れ違うイメージを持っているのだと自ら納得し、質問を控える。
だが、ケイノスは質問した。

「どうして“人”なんですか？」

「うーん、何となく……」

ケイノスとトキの間に会長が口を挟む。
それが道徳的に最も正解に近い、と。

「協会（ウチ）で四凶の排斥に反対する人間の多くはソレを主張するんだよ」

「生命（いのち）」

メイトスの呟きにリデアは固まる。
四凶と括られるＳＲも結局のところ一基の人間でしかない。

「しかし、彼らが人々にもたらす不幸の大きさは、時として戦争という規模にまで発展し、多くの命を奪ってしまう。
だから、排斥賛成派はそういう未来が起こる前に四凶を処分すべきだと主張するんだよ。多数の犠牲よりも少数の犠牲ってな。どうにかしなきゃ大変だよ。ホント」

「どういうことでしょうか会長さん。まるで将来、戦争が起こるとでも言わんばかりの言い草に思えるのですが、僕の考え過ぎでしょ

うか？」

ケイノスが噛み付く。
しかし、その質問はバースヤードの支配の一環であった。
これから伝えなくてはいけない大切なこと。

「ああ。
四凶が引き金となる戦争が、あと7年8ヶ月と22日±1日で起こる」

「な、何だと！？」
「本当……ですか？」

立ち上がったリデアを押さえるケイノス。2人を横目で見ていたメイトスは歯を食いしばった。
トキはその話が非現実的にしか思えなかった。戦争の発生を予測することが可能なのか。もし、知ることが出来たとしたら、人類にそれを阻止することは可能なのか。
わからない。

「どうやってそれを知ったんです？」

「今は亡き預言者が残した最期の予言だよ」

リデアがケイノスの腕を振り切る。身を乗り出してテーブルを叩

き、抗議を始めた。

「貴様、それでも世界を牛耳る協会長か！？」

「ああ。会長だが何か？」

「その戦争の被害でどれだけの一般人が苦しむと思っている！？」

「人類の９２％が戦火に巻き込まれ、築き上げてきた文明の６８％が消滅する。
国境は曖昧となり、食糧難、エネルギー枯渇、環境汚染の深刻化、爆発的人口減少が起こり、人は未来を失う。
はっきりと言うとさ、人類史最大最悪規模の戦争になるんだよ」

リデアの頭に火が灯る。
ケイノスはそれを押さえようとはしなかった。

「そこまで分かっているのなら、戦争を回避する道を教えるんだ！
今すぐ！
人類の為なら致し方なくも協力する！」

「無差別テロに見せかけて、学区内に押しかける作戦を立てる君を？
俺が信用するとでも？」

２人の目がトキに向く。
リデアは口篭り、ケイノスは沈黙を続ける。

言葉を続ける会長。

「冗談だよ。安心しろ。
今日、ここに集まったのは他でもない、戦争を回避したいがためさ」

「何？」

沈黙していたメイトスが露骨に疑問を浮かべる。

「まず、俺が知っている未来の一部を教えよう。
数ヵ月後、協会本部で大規模な戦闘が発生する。現在の世界情勢を一気に塗り替えるだけの事件だ。
肝心なのはここから。
その場には、君達全員がどういうワケか居合わせているんだ」

それぞれの視線が交差する。
リデアが居て、ケイノスが居て、トキ、メイトスが協会の本部に居る。
協会長の予言を怪訝に思わないのはメイトスだけだった。逆にトキは先ほど会長の一言一言が信じられず、何故このような場を設けたのかという疑問にまで到った。

「それは本当ですか？」

「わかるよ。戦争もキャストも信じられないだろう？
俺だって信じたくない。戦争なんて起こらないことに越したことはないんだ。平和が一番。ちょっとした歪みは必要悪だが、やっぱ平和に代えられるものなんてない」

同情するバースヤードを他所に、メイトスが聞く。

「もし私がその場に行かなかったら世界はどうなる？
私がそこに行くことで戦争を回避することができるのか？
両方の答えを聞かせてもらおう」

「いいぜ、メイトス。
もし来なければ別の可能性の未来が生まれる。ただそれだけだ。
単純で分かりやすいだろ？
逆に来てくれるなら、戦争の未来を回避できる確率がぐんと跳ね上がる」

十指を絡ませ、協会長は前へと乗り出す。

「言っておくが俺は戦争反対だ。極力回避したい。
戦争ほど自己中心的で汚いものはないからな。誰だって嫌だろ？
もしかしたら親友になれたかもしれない奴らと銃火を交えるなんて。
なぁ、メイトス。君ならよぉ～く分かっている筈だ」

「……あぁ」

「世界大戦なんてもうやっていられないっての。今の時代はグローバルだもん。って、だいぶ前からか。
まぁ、それでも戦争仕掛けたがっている奴らは何人かいるけどな」

自国の為。利益の為。己が威信の為。
戦争をする理由はそれ以外にも多く存在した。それでも戦いが起こらない理由は、人々がそれを望まないためである。

「それはさておき、世界中で俺たちしか知らない事実を伝えたんだ。次はそれに関連することだ」

メイトスが足を組む。
協会長の口からこぼれようとしている言葉は、とてつもなく冷たい事実なのだろう。まじめに取り組もうとしているその姿勢から重みが伝わってきた。真剣な態度に比例する責任感の強さ。
メイトスだけでなく、リデアもそれを感じ取っていた。とてつもなく巨大な真実が告げられようとしている。

「今まで起こったすべての戦争の原因に四凶が深く関わっている」

「四凶、が？」

「どうして分かる？」

質問しつつ、リデアは乾いた喉を潤すために手元の紙コップを手

に取り一気に煽った。
その隣でケイノスが、いつ紙コップに液体が注がれたのか不思議に思い、困惑していた。トキも気付く。
誰もコップに何かを注いだわけではない。
それなのに、リデアの取ったコップにはしっかりと何らかの飲料水が注がれていた。

「何を根拠に断言している？」

「俺が会長だからだ」

「協会長なら何でも分かるとでも言うるもりか？」

「違う違う。分かっているから会長勤められるんだよ」

ケイノスが手元の紙コップを調べるのと、トキも同様の行動に移った。
手元のコップに飲み物を注いだ覚えはない。
その筈なのに、容器は液体の冷たさに汗をかいていた。透き通ったハーブティ。高価な茶葉を使ったものでないことは匂いでわかるが、問題はそれじゃない。いつ注いだかである。

「正確に言うと、四凶によって戦争が生まれてくるんだよ。
戦争の原因とされる人物全員に四凶の属性が強く現れてな、これが何らかの出来事を境に更に強まり、周囲に大きな影響を与え始める。それが連鎖して連関すると、最終的には戦争が発生してしまうんだよ。だから四凶の属性がある人間を管理するために協会がある

んだよ」

「四凶の……？」

（属性？）

一同、聞きなれない単語に頭を回す。

属性という単語自体日常的に使うことのないリデアはもちろん、ゲームや娯楽系の書籍で度々その単語を見聞きするトキでさえ理解に苦しんだ。

四凶という言葉に加わる、属性という意味。

微風がテントの中を吹き抜ける。

風が止むのと同時、協会長がトキの背後を指差した。

「おっと、意外と早かったな。最後のメンバーがご到着だ」

６つの目がそちらに誘導される。

足を引きずるように光の下を進む人物。

水色の眼鏡をかけ、衰弱した男。それが第一印象だった。

新たに現れたその人物が誰なのか、トキを除いた４人は理解していた。

「やっと来たか、絶対糸配。

倒れたって聞いたけど大丈夫か？」

「マスターピース殿！？　どうしてココ――！？」

リデアの口がひとりでに閉じる。本人の意思に反するその閉口は、絶対糸配の成せる技であった。

絶対糸配：マスターピース。

彼は急いでいた。余計な質問を省き、必要なことだけを聞き、考え、伝えなくてはならない。

急ぐ必要があった。

残された時間は僅か。誰かに理解して欲しいわけではない。ただ、現実的に時間が残されていない今、自分に課せられた役目を全うしなければならないと、何度も強い使命感が訴え続けていた。

ケイノスはマスターピースの衰弱がただの体調不良によるものでないことを悟り、自分の腰掛けていた椅子を差し出す。背後に椅子が置かれると、マスターピースは崩れ落ちるように座り込み、呼吸を整えて顔を上げた。

開口できるようになったリデアもケイノスと同じ考えに至った。立っていることさえ辛いほどにマスターピースは弱っている。

その原因を理解することはできずとも、時間に余裕がないことは十分に理解できた。

「ナイトメア、非武装派の……マスターピースだ」

息絶え絶えに彼は名乗る。

それからすぐ、真っ直ぐトキへと手を差し出し、握手を求めた。

「サツキさんの子……だよな？」

「母さんを知っている？」

「あの人のおかげで俺は……生き長らえた」

瞳に映ったマスターピースの姿が、トキにリデアらと同じことを悟らせた。

目の下の隈の濃さが男の疲労を物語る。決して暑くはない気温の中で止まらない大粒の汗。絶えず上下する肩に、荒い呼吸。

握った手に感じる氷のような冷たさ。恐怖のせいか、寒さのせいかわからない震え。

マスターピースという男に触れ、トキはそこから自分の時間を僅かだけ彼に流し込み、彼に残されている時間の少なさに驚かされた。

「リデア……僕が来るまで、どんな話をしていた？」

「現在の協会内部の状況であります。

四凶排斥派と賛成派、中立派に分かれ、また戦力も世界各国に分散し、本部は手薄だと。

それから、将来四凶が原因の戦争が起こる可能性が強いという話を」

リデアの視線が協会長とぶつかる。

「さぁて、マスターピース。

俺は君に聞きたいんだが、そのダメージはどうした？
誰にやられた？」

「俺……も、聞きたい。“オリヤ”という女は協会のＳＲか？」

腕を組んだままのメイトスと、震える体を必死に抑えるマスターピースの視線が交差する。
風が止み、鳥や虫たちの存在感の一切が消え、静寂が始まった。
協会長の首は横に振られ、メイトスは遺憾を顔に表し、魔術師２人は唖然とした。
トキも死に掛けている男にどう言葉をかければいいのか悩んだ。
そもそも初対面の相手で、しかも関係上は敵対関係にもある男に、何と言えばいいのか。

「何者だ？　そのオリヤという人物は？」

メイトスの声が静寂を否定する。

「マスターピース。正直、私は貴様ほどのＳＲがそこまで追い込まれるなど、一生有り得ないだろうと思っていた。
お前を追い詰めた相手は何者だ？どんな力を使った？」

「期待に……添えなくて、悪かったな」

「それより、非武装派のトップだからな。立場的には協会長（オレ）と近いんだ。指揮の方は大丈夫なのか？」

支配の言葉に糸配は頷く。

「お前たち協会は、そこの2人を中心に崩していける……」

「なぁ、同士。
非武装派には後任に選べるSRが何人いる？
そもそも組織としてやっていけるのか？」

「いけるさ！」

言い圧されるマスターピースの助けにリデアが立ち上がる。

「こちらには神父もいれば自由四季もいる！」

「ああ……リデアの、言う通りだ。それに、ミギスやフォルトンもいる」

「そうかそうか。
言われてみれば厄介な奴ばかりだな。
天啓神父に自由四季、衛星千里や絶夢までいるとなれば、非武装派は安泰だな」

しかし、メイトスは頷く協会長と逆の反応を見せた。

（終わりだな……）

「何か変なことでもありましたか？」

挑発的な視線を送りつつ質問するケイノス。

「魔術師の２人は知らないんだな。
数日前、協会内部に非武装派へ通じている人物がいると情報が流れてきた」

「な……！」

「内通があったと情報を提供してくれたのは完璧のＳＲ。
完璧のＳＲに情報を伝えたのはデストロイ・マーチ。芹真事務所の社長だよ」

「芹真さんが？」

「こちら側の内通者が誰なのかは完全に把握できた。
対処方法については検討中だが、いつでも排除可能なため今は泳がせている」

「非武装派（こちら）にも内通者がいるのだな！
それは一体誰だ！？」

まず落ち着け、と手をかざす絶対支配。

リデアと同様に心動かされた糸配が追求する。
誰が何の為に協会のＳＲと内通しているのか。

「ナイトメア側の内通者の正体は掴めていないが、候補者数人は絞れている」

「その内の１人が非武装派の背骨と言われる、天啓神父ことパパ・テスタメント。
次に、絶夢：フォルトン・ドラーズ。
第三候補、原初悪夢：ナイトメア。
第四候補、超絶潔癖：ギュン・パクフォン」

協会長の口からではなく、メイトスの口でその名前は挙げられた。
それを聞いたマスターピースの顔色が悪化する。
挙げられた名は非武装派の最重要戦力ばかり。１人も失うことが出来ない貴重な人材たちだった。

「それは……本当なのか？」

「ああ。メイトスの言っていることに嘘はない」

激しい息切れに襲われるマスターピース。
メイトスはそれを静かに見守った。
終わりの時は近い。
もう、長くは持たない。

「なぁ、同士。
今ならリデアに耳を傾ける余裕があるんだ。
伝えるべきことを伝えろ。
その為ここに来たんだろ？」

1人の重々しい呼吸音が場の空気を塗り替えていく。
連続し、必至に生の動作を紡ごうとする呼吸に反比例し、刻々と近づく終わり。

「リデア……」

「ハッ！」

「ケイノスと共に、ナイトメアを抜けろ」

「了……かぁっ！？」

直立したリデアの姿勢が崩れる。その隣ではケイノスも動揺を隠せずにコップを握りつぶしていた。

「どういう、ことでしょうか？
意味が……言っている意味が全く――！？」

「今日、誰のところにも行くな……内通者がいるのなら、非武装派はもう、終わりだ」

予防策としてマスターピースは2人にナイトメアを離れて欲しかった。が、肝心の2人はその意図を掴めていなかった。
説明する時間も無い。

「ぐっ……！」

口元に手が走る。
前後する上半身。直後に噴き出す赤飛沫。

それを見て真っ先に動いたのはトキだった。
コップを手に取り、マスターピースの目の前に差し出すと、

「飲めますか？」

トキの次に動いたのがケイノスであった。
差し出されたコップを持った手の首をケイノスが握りとめる。

「彼（マスターピース）に何をするつもりだ？」

「ただ生きて欲しいと思うだけだ。それに、苦しそうだから――」

手首に痛みが走る。

トキの言葉にケイノスは怒りを覚え、力を強めながら説明した。

「僕にはＳＲという力の作用を目で見る能がある。
嘘をつくな。
そのコップに、中身に何をした！」

協会長が笑みを浮かべる。
にらみ合う2人を他所に視線はマスターピースに向き、同様にマスターピースの目は協会長の一挙手一投足を捉えていた。

「そうだぞ、トキ。
お前が良かれとやっていることも、実は当事者にとって厄介以外の何者でもなかったら、それは嫌がらせか或いは強制なんじゃないか？」

まずは2人を落ち着けようと協会長がトキを、

「慌てるなケイノス。
仮に、それに盛られた物が毒であろうがなかろうが、オレの死はもうすぐ目の、前にあるんだ」

マスターピースが言って聞かせ、それでも反論しようとするケイノスを糸で以って着席させる。空間魔術よりもマスターピースの糸配が格段に早い。

着席したケイノスとは別に、トキは立ち尽くしたままコップを持ち直した。直に伝わった死へのカウントダウン。

今の自分になら、それを少しだけ延長することが出来るという自信があった。

クロノセプターでコップとハーブティから僅かな時間を奪い取り、マスターピースへと与える。

（誰だって生きたいはずだ）

「それは偏見だよ、トキ」

各々の視線が入れ替わる。

協会長とトキが向き合い、リデアとメイトスの視点がトキへと向く。ケイノスはマスターピースを見守り、認めがたい現実に歯を噛み締めた。

「人が人であるために避けて通れないモノが“死”だ。

いつか終わってしまう自分という物語。２度と再現されることのない自分という一つの世界。

終末への恐怖が人を突き動かし、衝動を感じ取りながらも抑制させ、関係を創り上げていく。或いは、諦観へと突き落としたり衝動を開放する。利もあるが害もある。

生き物である限り、それは不変のエンディングだ。絶対にその結末を曲げてはいけない」

「何が言いたいのかわからない」

コップを手にしたまま投げ掛ける質問。
こうしている間にもマスターピースの生は消費を続けている。
出来るだけ急いだほうがいい。　その筈なのに、どうしてか気づいた時には質問をしていた。

「いまこの瞬間、彼は死に対する恐怖と死に至るまでに自分がしなくてはいけないという責任、それから使命感に駆り立てられて会話に参加している。
それに初対面のトキは知らないだろうが、マスターピースの基本寿命はとうの昔に尽きている」

「尽きている？
じゃあどうして――？」

どうしてココにいる？

言いかけて悪寒が走った。
人のことを言える立場ではない。言えはしないが疑問が解消するわけではない。
寿命の尽きた人間がどうして生きているのか。
理解できないことに人は恐怖を覚えるという台詞をトキは理解した。どんなメディアで頭に入ったかは覚えていないが、納得した。
不可思議が謎に変わり、謎が驚愕に変わる。更に変化し、感情がたどり着く境地は恐怖である。

「君の、母に助けてもらった」

生と死。

単純と思う人と思わない人がいるのは当然だ。人は皆価値観が違う。

それでも、言葉でない現実的な意味でのその単語は、非常に重たいものだった。生が生を紡ぎ、死は生を断つ。その逆は無い。死から死は生まれない。生が死を拒むことはできない。常識として人はそれを学び、知り、気付かぬうちに生死という重石を背負う。

「母さんに？」

「本当は重大なルール違反なんだけど」

協会長とメイトスの目が合う。

「本来なら命脈に従って生きていることは出来ない。それなのに生きているということは、多くの人間――特に繋がりを持った他人に多大な影響を及ぼすことになるんだ」

家族や友達。

自分が彼らと別れることで彼らが歩み始める未来。その未来が変わる。大抵の場合が、悪い方向・結果へと向かって動き出すのだ。

「アヌビス達にそういう不正な魂を処理させているが、追いつかな

くなっている」

「だから私は生かされているのか？」

全てを否む眼光。
バースヤードはその視線から逃げるようにでもなく、言い切った。

「生かされている人間なんていない。
ただ人は、運命っていう便利な垂れ糸をよじ登り続けているだけだ
さ」

沈黙。
ため息をつき、それ以降メイトスは椅子を離れるまで口を開かなかった。

「さて、トキ。
君はそれでも彼に時間を与える気か？本人の意思を確認もせずに」

全員の視線が集まる。
新緑に包まれた空間に漂う選択の責任。絶命に追い込みかねない圧力。
ハーブティの入ったカップを手に取る会長。沈黙するメイトス。
トキの判断の善悪に悩むリデア。トキの行動を邪魔し、後ろめたさを感じるケイノス。

トキと目が合ったマスターピースは、ゆっくり重たい首を横に振った。

「いつかは、来ると思っていた……事だ。
今度は、潔く受け入れよう」

掌の中で、在り処を求める時間が機械的に回流し続ける。
理解できない彼の選択。
理解して欲しかった自分の選択。

「死ぬ気、ですか……？」

「一度、死の淵を見てきた。
生きていることの素晴らしさを……知り、生き延びることの罪深さも知った。
これ以上は望まない。
ただ――」

マスターピースの手が伸びる。トキの手にあるコップを取り、それをテーブルの上に置く。
手を取られたトキはチャンスを逃すまいと時間を流し込んだ。
が、すぐに手は振り解かれてしまう。

「使命のため、１０秒の猶予を受けよう」

歯噛みしてメイトスは堪えた。
ＳＲの能力による僅かな延命を許さずに戦ってきた。
そんなメイトスにとってこの例外を見逃すことは、今まで貫き通してきた信念に背くことを意味する。老若男女問わず、幸・不幸など意にも介せず数多の命を断ち切ってきた。その時に発生した苦心が踏みにじられる。罪深き自分という存在の輪郭が明瞭にあらわれる。

ここだけの例外を見逃して良いのか？

「気にするなメイトス」

唯一、完全否定の苦悩を理解してたバースヤード。
その言葉を受け止め、トキとマスターピースの会話に意識を集中させた。
死に掛けの糸配が、時に何を伝えるのか。
予定に無い、予想・予測外のアクション。

「色世トキ。
ナイトメアを知り……協会を見て、無所属を考えろ」

「それは、仲間になれってことか？」

否定。
説明、焦燥。

白んでいく視界が男に死期の到来を告げる。
鼓動が途切れる。それを感じ取っていたケイノスは目を逸らし、
リデアはうなだれた。

震えを極力押さえて糸配と向き合うトキ。
これが最初にして最期。2度と叶わない対話、会話。
目の前の男から疲労の色が抜けていく。

「仲間にならなくて、いい。
……世界の構図だ。　知れ。お前の、目に映る以上のモノを。
人も、SRも……
四凶も――」

一瞬。
輝かんばかりの笑顔。
一度振りほどいたトキの手を最期に握り、

「理想的平和（マスターピース）など、無い。
それを……知――」

笑顔の次に現れたのは、鬼気に彩られた“人”。
ナイトメア非武装派のリーダー、絶対“支配・糸配”のSR：マスターピース。

新緑と遺憾の念に包まれ、静かな最期を迎えた。

2002

第３６話－Ｄｒａｓｔｉｃ　Ｔｅａ　ｐａｒｔｙ－（後書き）

全てが白色に染まる瞬間、マスターピースはトキに僅かな期待を抱いてしまった。

（そうか……これが、色世トキの力か）

直に触れて読み取った――偶然見つけたトキのＳＲの根源。

（もし、トキが味方だったら、我々と協会が共に歩む世界が実現していただろうな）

最期に迸る願望。
叶えることのできなかった夢。
現実（そこ）に無き理想的平和。

だが、直前で垣間見たトキのＳＲさえあれば――

（サツキ、さん。
貴方は名も無き俺を助けてくれた。そして名付けてくれた。万人にとっての平和をもたらす者になれ、と意味を込めて。
すいません……ぼくも――）

2003

最後の最後、僅か指先にあるトキという人間の感触を確かめながらマスターピースの意識が消えていく。

（あなたに救われた時のように……ぼくも、あなたの息子をたすけて……あげ……――）

命が途切れようと。
意識が無くなろうと。

握られた手はつながれたまま、時間を与えられ続けていた。

2004

第３７話－深緑の死圧－（前書き）

つまり、そこが終わりじゃない。

故に、いつか終わることを望む。

第37話 ― 深緑の死圧 ―

沈黙を破るのは得意だ。なぜなら時代が沈黙を始める度に、いつもそうして展開を発生させてきたのだから。

沈黙（それ）が悪循環の一種であることに気付いていない人間が多いのは何故か。深刻な沈黙に出会う度に考えてしまう。

人々は沈黙について考えないのか、それとも悪循環について考えないのか。

しかし、それは別の話。置いておこう。

この場を支配しているのが自分だという自覚が十二分にあるだから。この茶会の主催者も自分である。自分から始めたことなのだ。

停止した手を、口を、頭を――次へと進めるきっかけを与える責任があった。

「ここにマスターピースがいたのは何故だ？」

彼はここに、見守られて逝くために来たわけではない。伝えたいことがあって来たのだ。

味方である魔術師2人、初対面であるトキのために。

誰に問うわけでもなく、協会長は言う。

「全員、意味を汲み取り損ねてはいないよな？

警告と今後。

誰が何をすべきか、全員が決まったわけじゃない。が、半数は決した」

魔術師2人が顔を上げる。
会長の台詞はどれも気に入らなかったが、間違いではなかった。マスターピースは死を目前にし、残された僅かな時間で2人に今後の標を示した。　彼が現れなかったら非武装派内に協会と内通している者がいるという事に触れることはなかった。それだけ考えてみても、マスターピースがここに足を運んだことには大きな意味があった。

（マスターピース殿は、私たちに夢を託したのだな……）

（高レベルの糸配というＳＲを追い詰めたＳＲとは、一体どんなＳＲだ？）

リデアとメイトスが沈黙しながら目をそらす。ケイノスが静かにトキを見守る中、会長は言葉を続ける。

「さて、属性のことについて知らない者がいるようだから教えようじゃない」

組んだ手を解き、水筒を取って中身をコップに注ぐ。
注いだ茶の澄んだ緑色を楽しみ、独特の香りに心を和らげ、味を堪能する。それから一息つき、トキへと声をかける。

「いつまでそうしている気だ、トキ？
死人は死人。
機械のように電池を入れ替えれば再び動き出す、なんてことはないんだぞ？」

「……」

事切れたマスターピースの体に触れ、自分の持ち物・周囲の自然から時間を奪い、それを流し続けるトキ。
冷たいマスターピースに触れながら悩んでいた。
自分から死を望むということが理解できない。なぜ簡単に生を諦められるのか。
聞きたいことができた。
出会って言葉を交わしてみて、質問が生じた。
母さんに会ったことがある。それは本当か。
過去に一度死んでいるというなら、どうしてここまで来れた。それも生きて。
なぜ、２度目の死を迎える。受け入れるのか。

マスターピース、とは何だ？

「時間の無駄だぞトキ」

相手がトキでなければ会長は力ずくで引き剥がすつもりだった。
例えＳＲであろうと相手は学生。子供だ。
しかし、あえてそうしないのにも理由はある。トキの力が未知数であることと、トキをいますぐ敵に回すのは得策ではないからだ。

「まだ……間に合うはずだ！」

両手が地面に伸びる。
緑の地面が枯渇を始め、土からは水気が失せてゆく。

「やめないか！」

会長が言葉による制止を試みる中、風の魔術師は直接止めに入った。
トキの顔面を風の塊が打ち、体勢を崩す。
バースヤードの言葉に耳を貸さなかったトキだが、不意打ちを食らって妨害された。

「これは、マスターピース殿の望まれた選択だ。
なんで貴様ごとき一学生がそれを妨げようか……」

立ち上がったトキと、震えるリデアが対峙する。
その震えの原因が何なのか分からないものはいない。
明らか過ぎる動揺。
それが余計にトキに混乱をもたらした。目の前のＳＲがマスターピースの死を受け入れていないことは一目にわかる。それなのに、どうして彼の蘇生を拒むのか。

リデアの脇でケイノスが臨戦態勢を取り、2人を見守った。
会長や隊長の言葉に否定的なトキはいつ攻撃に出るかわからない。
そもそも、こちらがトキという人物を完全に把握していない以上、敵意をむき出しに襲ってこない可能性がゼロだとは断言できない。

「この人が――死んでもいいのかよっ！」

「もう死んでいる！」

風が押す。
それに負けじとマスターピースに腕を伸ばすが、直前で腕が止まる。風の仕業ではない。
見えない何かがトキの腕を押さえていた。

「落ち着けトキ。
リデアは正しいことを言っているんだ。
これはマスターピースの選択だ。特別な関係があるわけでもないマスターピースを生かそうと必死になるその姿は、実に人間らしく正しい行動だ。いや、むしろ、命の重さが軽視されがちな今という時代においてその姿勢は立派だよ。ある種の正義感が強いようだな、トキは」

「どうしてだ……
どうしてあんたらは興味なさげな態度を取るんだ！？
人が死んでいるんだぞ！
見殺しにしたんだぞ！？」

「見殺しじゃないって、さっきから言っているだろ？
これはマスターピースの選択だ」

奥歯を強く噛みしめるトキ。
その姿にケイノスは同情の念を隠せなかった。俯き、こみ上げてくる悔しさを必死に堪える。
マスターピースと同じ、非武装派のＳＲでありながら、自分にはマスターピースを救う手立てがなかった。そのため、救おうと行動することもなかった。諦観に支配され、ただ彼の終わりを見守ることしか出来なかった。
それに引き換え、トキは初対面のマスターピースを助けようと必死に力を駆使していた。

「選択なら……何でも許せるってのか！」

なお叫ぶトキ。
その体に、上から圧力がかかる。体感する不自然な重力。
ＳＲの仕業であると気付くまで時間はかからなかった。気付けば体はイスの前にあり、重力もそこで急激に重さを増す。
この時点でトキは、先ほどの不可視の圧力とは別の力が働いているのだと気付いた。

「まず、座ってください……それから少しずつ、話していきましょう」

震える声を耳にし、目は自然と若い魔術師の方へと向く。
一目でどんな力を使っているのか予想できなかったが、確実にマスターピースの死を悲しんでいることだけは伝わる。
ケイノスという魔術師の目に浮きかけた涙がそれを示したのだ。

「僕も納得いきません。
選択だったら自殺も正しいんですか？」

「よ～し。
リデアも席に着け。ひとつずつ解決していこう」

不敵に微笑む会長に向かって3人は椅子と姿勢を正した。
マスターピースの選択は、選択として在るべきものなのか。　選択すべきだったのか。
その答えを、オウル・バースヤードは少しだけ持ち合わせていて、それを3人に教えるべきだと判断した。

―第37話―

―深緑の死圧―

「まず言っておかなくちゃいけないのが、今回のケースは“特殊”だということ。
いいか？
“マスターピースは１０年以上前に一度死んでいる。それを色世皐（サツキ）というＳＲが復活させた”
この時点で今回のケースの特殊性がわからない奴はいるか？」

「一度死に掛けて蘇生した。それのどこが特殊なんだよ……」

「違うんだよトキ。
やっぱ、勘違いしているようだな。
マスターピースは死に“掛けた”のではなく、“本当に一度死んでいる”んだよ。
これならわかるだろ？」

分からないトキではないが、分かりたくはなかった。
死んだ人間が生き返る。

人のことをいえる立場ではない。
そんな過去を身をもって経験してきたからこそ、分かりたくはなかった。

「まぁ、いまは認めなくてもいいさ。無理はするな。
問題はこの選ばれた死というものがどういうものなのか。実は、落ち着いて考えれば簡単なことなんだよ。別段難しい話じゃない。
ＯＫ？　今からそれを説明しよう」

（人が死んでいるのに、簡単も難しいもあるかよ……）

景色が歪む。
空間の魔術師の頭上で空と陸がどろどろに融合を始める。

「言いたいことがあるのは分かるが、落ち着けよ空間殺し。
さて、前述した通りマスターピースは過去に絶命したことがある。そんな彼を救ったのがトキの母親だ。どんな方法を用いて復活させたのか、それは未だに予測の域で確信には至っていない。　だが、予測の中にはもしかしたら正解かもしれないというものだってある。特に、最も可能性のあるとされる予測の“死を延期させた”という説なんかな」

「……死の延期？」

「トキ。君は母のＳＲの内容を知っているか？」

「ＳＲだったこと自体知らなかった……」

「色世皐のＳＲは絶対神判。
あの力は有罪と無罪、即決と延期を持って相手を処分するＳＲだ。
超絶ワガママを実現することもできれば、理不尽な死という結果の判決に異議を唱え、延命することだって出来るらしい。まぁ、本当かどうか眉唾物だが」

「でも、彼女とマスターピースの死は――」

「慌てるなって、ケイノス。
メイトスのように、ほら、こんな寡黙になれとは言わないが、結果を焦ると肝心な見落としによって悪循環にも陥るんだぜ。な？」

「……わかりました」

「よしよし。
マスターピースは完全な死から復活した。
ここが最大の問題なんだよ。
いまこの世界に1世紀半以上も命が続いている人間が果たして何人居る？
俺の知っている限りでは9人。うち3人は２０世紀以上も世界を渡り歩いている」

「に、２０世紀もか？」

「君だって会ったことがあるはずだ。リデア。
光の魔女と闇影の魔女。いずれかには出遭っているはずだ。……っと、話が逸れそうなので戻すぞ。
マスターピースは魔術師でもなければ、光や闇の寵愛を受けたＳＲでもない。ごく普通の人間として生まれ、ＳＲという力を得て高

い位置まで這い上がった努力家だ。
努力家ではある。
若干２０代後半で組織のトップに立ったのだからな。
しかし……どんな凄い努力家であろうと、結局のところ彼は一般人でしかない。特別な力を持っていながらも、明確に定義された“寿命”という時間枠から外れているわけではない。彼の寿命は普通の人間と同じなんだよ」

寿命が尽きても死ぬ。不慮の事故に遭っても死に至る。
病気で命を落とすこともあれば、自分で命を絶つことだって出来る、出来たのだ。

「少しだけ他と違うが、しかしありきたりな運命の輪のなかに組み込まれた1人の人間、と言っておけば少しは納得するかな？」

（は？）

「運命なんて安い言葉で納得しろとでも？
隊長やトキさんが信じるかどうかは分かりませんが、僕は運命なんて信じたくない。そんな不確かで目に見えないもの……」

「君は信じないか。
まぁ、そういうこともあるさ。いずれは運命を感じる時が来る。
二度目だな。話を戻そう。
ケイノスが信じない“運命”というもの。　その中に組み込まれたマスターピースはすでに死んでいる。それなのに今日まで生き長らえた。一度死んだ日から今日という日までな。
だが、死という結果が変わったわけじゃないんだ。ただの先送り・

延長だ」

メイトスの瞼がわずかに動く。

「マスターピース自身は理解していたんだよ。いつか帰らねばならない場所があるということを。

ただし、それは仲間の輪でも、冷たい故郷でも、思い出の場所ではない。

かつて迎えるべきだった“死”に、今日到達しただけだ」

「そんな……」

「有り得ない！

死が帰る場所だと？

我々をおちょくっているのか！？

マスターピース殿は――！」

「おちょくるつもりなんかないさ。認めたくないのはわかる。偉大な指導者を失ったんだからな。

それでも、少しだけ静かにしてくれないか？

四凶達にこの場所がバレる」

一瞬の静寂は、会長の口から生まれた。

短い　四凶　という単語で。

「なに……？」

「四凶がこの近辺にいるというのか！？」

どんなに言っても声のボリュームが落ちないリデアの口が閉じる。
２度目の閉口。
協会長の強行手段、絶対支配による人体操作。それを目の当たりにし、ケイノスは戦慄を覚えた。

「どうして四凶がいるって分かるんだ？」

向かい合う会長と、恐れを知らないかのように質問するトキ。
どうにもケイノスには理解できなかった。
色世トキという人物は強いのか、弱いのか。或いは賢いのか、愚かしいのか。

「ここに招かれるべき人物は招き終えた。だからさ、余計な邪魔が入らないようにこの一帯を支配させてもらっているんだよ。
今ごろ何人かが見えない壁を相手に戸惑うなり怒るなり、何らかのアクションで無駄な時間を潰しているだろうな。
下手をすれば、四凶と戦っているかもしれない」

「四凶の誰が来ているんだ？」

「焦るなトキ。
お前を連れ戻そうとこちらに向かっていた２人は無事だ。まだ四凶と遭遇すらしていない」

「2人？
俺を連れ戻すって、誰が？」

「ケルベロスと妖精。
奈倉愛院と高城播夜。クラスメイトだろ。
それに、魔術師2人の連れも無事だよ」

リデアとケイノスの連れとは自由四季と呼ばれるSRで、Mr.シーズンと呼ばれる男だった。
緊急時に備えて2人を前衛にしシーズンは後衛を務めると山の中に潜んだ。
しかし、それが裏目に出て不可視の壁に阻まれ、茶会の席までこれなかったのだ。

「問題はその他の学生と村人達だ。
いま6方向から四凶に狙われている」

「学生とは、トキの学校のか？」

声を抑える意思を表したリデアの口が解放される。
この場所を訪れている学生は白州唯高校の生徒をおいて他にいない。
トキは焦りを覚えつつ質問した。

「その生徒……俺の学校のみんなを狙っている四凶の中に、俺の知

っている四凶はいるのか？
教えてくれ、会長」

「それを聞いてどうするつもりだ？」

「あんたが支配のＳＲなら、俺の考えも読めるんだろ？」

イスから腰を浮かせた瞬間、両肩と背中、膝に重力がかかった。
抵抗するが圧倒的重圧に負けて再びイスの上に収まる。

「これが俺の支配の一部。
だから、さっきから言っているだろ。
焦るなよ、トキ。
過程も結論も」

「皆が狙われているんだ！
ゆっくりなんかしていられないだろう！」

テーブルに手をついて体を支えて立ち上がろうと試みるが、そのアクション以降、腕はは微塵も動かなかった。
自分の纏っている空気だけが重くなったような感覚が強まる。
自分にかかっている重圧は、テーブルに何の影響も及ぼさない。その証拠がいまの抵抗だ。テーブルに手をついているにも関わらず、テーブルは微動だにしなかった。全く傾かない。

「確かにトキのクラスメイト達は狙われていて、それが生命的・存

在的に大変危険な状況であることに間違いはない。
だが、いまは打って出るべきじゃない。
それから俺は読心術者じゃない。よって、他人の思考が読めるかと聞かれれば、Ｎｏと答える以外にないのが現実だ。
わかったか？
俺は別に他人の思考が読めるわけじゃない」

「じゃあ、どうしてあんたはさっきから人の思考を読んでいる……みたいな喋り方をするんだ？」

こちらが睨みつけたところで相手は動じない。
なぜなら協会長。
何故なら絶対支配。
芹真や藍、ボルトが最終標的として倒そうとしているＳＲ。一口に言えばラスボス。

（そうか……）

ボルテージを上げるトキに気付き、ＳＲという力の世界の先輩として、リデアはトキに言って聞かせる。

「落ち着きたまえ、トキ。
会長の力は絶対支配。それも協会という巨大組織の頂点に君臨できるほど強力なものだ。
そこから導ける答えは一つ。奴はすでに我々の発言を支配しているということだ」

「そうそう。
リデアの言う通りだ」

頷く会長。
トキの肩に手を置いた特級風司。
更に空間殺しが加勢に入る。

「僕たちを誘導してどうするつもりですか？」

「ここに一時的とどめるのさ」

黙秘すると思われていた質問に答える会長。ケイノスは次を考えた。
ここに自分達を留めておいて何のメリットがあるのか。
何が本当の目的なのか。

「協会長っていう位置にいる俺の仕事を教えてやるよ。
バランスの調整がメインで、たまに書類にサインしたり電話をかけたりする。バランス調整の為に何万ギガという情報と格闘するのが日課さ」

『は？？』
「何だって？」

メイトスを除いてクエスチョンマークを浮かべる3人。そんな3人に構うことなく、会長の口は休むことなく動き続ける。

「今まで光影の魔女だけで結構苦労してきたんだが、1世紀半前辺りから少しは楽になっていたんだよ。でもな、また近頃になって采配が難しくなってきたんだ」

「いきなりだな……何を言っている？」

突如として変化した話題に混乱を隠せない3人。
その中で唯1人、メイトスだけが静かに茶番の終わりを待ち望んでいた。

「俺の力は絶対支配。
絶対じゃないんだけど、みんなからそう呼ばれるようになった。
その由来に大した理由はない。
ただ他人より長生きで、2世紀も生きられない他人（ヒト）から見れば読心術のように思える言動も、本当はただ長生きだから次に言おうとしていることや考えていそうなことが直感的に分かってしまうだけなんだ。　それでだ、本当の俺は読心術なんか使えないし、予知も出来ない。ただ部下に恵まれただけのちょっと若作りな老人だ」

そこでケイノスは質問した。
最初のうちは自分で訂正していたのに、どうして今になって――

「話を逸らしていませんか？」

「逸らしてなんかないさ。
順を追っているだけだ。第一考えてみろよ、ケイノス。俺が話を逸らす理由はあるか？
あ～、そうだな、あるといったらあるな。
何故なら君らをここに留めるため～って、説明したすぐ後だもんな」

「なら、教えろ。
どうしてここに留めるんだ？」

あからさまに話を逸らし、言い訳で時間を稼ぐ会長だったが、トキの質問とその真剣な表情を目にした途端に笑顔を保つ理由を失った。
どんなに朗らかに言っても通用しない相手が目の前にいることを認める。
これ以上、下手に誤魔化すのは危険だ。

「どうしてだと思う？」

トキの質問に答えるために質問を返す。
にこやかな表情は次第に溶け始め、

「ここにいて、こうしている場合じゃないからだ。
どうしてもここにいなくちゃいけないんだ？」

無表情だけがトキらの目の前に残る。

「ここにいる全員が　四凶筆頭候補　だからだ。
そしていまは打って出るタイミングじゃないんだよ」

そして真実は告げられた。

「いま打って出ると、ここにいる全員が本物の四凶になっちまうからだ」

同じ制服に身を包んだ学生や、各地方から訪れた一般人で賑わう村。
その中心に足を運び、藍は敵が迫っていることに気付いた。

（確実に２０人以上居る）

新緑の奥に潜む脅威。観光客らに紛れる殺意。山の中から村を狙い伺う視線。

（そのうち5人が鬼のＳＲ……それも、この頭の奥がざらつく感覚から白鬼の可能性は極めて高い）

村の地図を片手に戦闘準備を始める。
推定２０超対少数。
敵は四方八方、近距離・遠距離に分かれて村を包囲している。加えてこちらは一般人を守りながら戦わなくてはいけない。

（理壊双焔破界や生死繋綴を使うこともできない。術符も難しい）

使用できる技は、滅多に媒介を必要としないオリジナル陰陽術もどき。華創実誕幻（かそうじったんげん）のみ。
一段とつぶやき、いつでも術を繰り出せるように準備する胸騒ぎの原因が分かったところで深呼吸し、冷静を得る。

（今のところ問題となるＳＲは白鬼ね。　高城が戻ってくるまで耐えれば、勝機はある。あと問題なのは――）

この村を包囲しているのが武装派なのか、非武装派なのか。
可能性が高いのは武装派だがリデアたちの前例を聞いている以上、非武装派の可能性も捨て切れなかった。
最終的な不安は相手の情報不足にある。誰が敵としてこちらを向いているのかさえ分かればそれ相応の対処をすることができる。

「藍、ちょっといい？」

陽気な表情を見せながら近寄ってくるのは担任のレンガだった。

「高城やトキがどこにいるか知らない？」

しかし、彼女の目は楽しんでいるという雰囲気を一切あらわにしていなかった。顔こそ明るさを表しているが、すでに彼女の眼には闘志の炎が灯っていた。そのことから不審者の存在に気付いたのだとわかる。生徒を守るという使命感が強く感じられた。

「……危険な空気が漂っています」

「知っている。
芹真から聞いているわ。手伝ってくれる藍？」

「もちろん」

笑顔のまま2人は手早く会話を終わりへと導く。

「私は食堂方面を片付けるから、工芸方面の不審者をマークしておいて」

「片付けますよ？」

「できるならそうして。
その方が助かるわ。私を含め、特別な力を持っていない人たちが」

わずかに曇った表情が再び陽気の仮面を取り戻し、それを機に会話は終わる

「そう。見かけたら教えてちょうだいね。
トキとハリヤの２人には課題を出しているんだから」

いかにもらしい打ち切り方で会話を終え、踵を返して村の出入り口付近へと向かうレンガ。
その背中を見送り、藍はレンガの経歴の一部を思い出していた。
いつか事務所で芹真から聞かされた彼女の過去。　ベトナムのジャングルで傭兵として芹真と共に戦い、ただの人間でありながらＳＲを葬った経験を持つ人物。その気になれば素手でＳＲに立ち向かい、破壊することも可能な戦闘の鬼才。それが、登龍寺　蓮雅という人間であると聞いている。

（芹真が認める人……
人でありながら人の領域をはみ出しかけているという元傭兵）

それでも、いま相手にしなければならないのはＳＲだ。場所も入り組んだ場所などではなく、見通しの利いた村で、しかもこちらに

は戦力といえる戦力はなく、武器も余裕もない。

「一段：茨」

広域に防御・迎撃に向いた術を敷き、移動を開始する。
歩き回りながら村の各所に術によるトラップを仕掛けていく。
高城が戻ってくるまでが勝負だ。催眠術で一般人を残らず夢の中へと落とせば、全力で敵を討つことができる。

拳を強く握るのと同時、村の中をそれぞれ歩く藍と蓮雅の視界に、一瞬だけ新緑の奥に潜む影達が飛び込んだ。

「私達が四凶だと！？」

魔術師が立ち上がるる。それに伴い、イスが倒れ、テーブルに衝撃が走る。
バースヤードは大声を張り上げるリデアに対して頷き、他3名の反応を確かめた。

「トキもケイノスもメイトスも俺もみんなそうさ。
ここに集まった全員には――」

「僕たちが、四凶だからここに留めているのですか？」

空間が歪み、風が巻き上げる。草木は踊り、空と山、景色同士が溶け合う。

戸惑い以上に怒りをあらわにする魔術師２人。対峙するバースヤードの顔には恐れも予想外というリアクションも、予測の的中に喜ぶ嬉々とした表情もない。先ほどまで幾度か見せた微笑みも何もない。

「その通り。
特にこの場に集まっているＳＲないし、人間全員に四凶の兆しが現れている」

「なんだその兆しというのは！？」

リデアの魔力と共鳴して吹き起こった風が止む。
融合した空と山も通常の光景を取り戻す。
何かが２人の体を後ろから優しく抑えていた。

「それを今から教えよう」

トキも不可視の圧力を感じた。
こうしている間にもクラスメイトたちに危機は迫っている。そう考えるといてもたってもいられなくなり、すぐに脱出を試みようと頭が動いて脱出経路とプランを考え浮かべてみる。

しかし、その思考と判断を中断するようにと、警鐘が鳴った。

「四凶というものは、、誰でもなることができる。
ただ、人によってはその人生においてなろうとしても成ることの出来ない存在であり、成りたくないと願ってもそれを必ず回避できるというわけではない現象である。わかるかな？」

「わかりませ――」
「それで？」

「数千年前に発見され、十数年前に確定した四凶の法則がある。実際のところ、法則と言っていいのかどうか微妙なところなんだけどな。数百年に一度、起こるか起こらないかっていう珍しい現象なんだよ。
世界各地で同時に四凶が発生しようとするのは過去に４度の実例がある」

同時という言葉にメイトスの顔が静かにあがる。
その反応に気付いた会長は頷く。

「そうだメイトス。察しの通り、
いま、
この瞬間、
全世界で、四凶が発生している」

歪む。

否定の顔が怒りにより変形を始める。

「この国はここが現場だ。
せめて二十カ国は救いたいんだが、どうやらそれもままならないらしい」

「ここが現場って、まさか……」

唖然とするケイノスとリデアの前にモバイルフォンを取り出してテーブルの上に置く会長。
差し込まれたイヤフォンをはずし、音量を最大にする。
一目見てそれが通信機器であることを理解し、流れてくる音声に耳を傾けた。

『こちらフィンランド担当部隊、クロース。
残念ならが手遅れだ。四凶を始末する』

『こちらアメリカ、サンフランシスコ！アヌビスクレイモアだ！
こっちじゃすでに犯罪が発生していやがる！一般人が多すぎる！
増援を頼む！』

落胆と怒りに彩られた声。
スピーカーから流れてくる声に含まれた感情が、リデアやケイノス、トキに訴えるかのように響く。
会長の言葉通り、たったいま、四凶が全世界で同時多発しているのだ。

「３時間前には中国。　２時間前にはチリ。　３０分前はオランダとカナダ。
１９分前にイタリア、１４分前に韓国、１０分前にオーストラリア――」

『こちらエジプト方面担当部隊！
応援頼む！敵大勢は重火器で武装！部隊は半減……！』

『メキシコ、四凶の発生阻止に成功。指示を仰ぐ』

『アメリカ、ハワイ部隊。四凶の処理を完了。
他チームの、援護に向かう！』

刻々と伝わる戦況。
自分たちの知らない場所で――世界各地で戦闘が起こっている。

四凶と協会部隊の戦い。
発生したての四凶は、ＳＲというよりはどちらかというとまだ人間である。ただ、他の人間に比べて不幸の原因になる可能性が大きく、現実的に無関係な人々へ不幸を撒き散らす原因となる存在であった。中にはＳＲに目覚めた者もいる。

「７分前にスリランカ。
５分３８秒前にアラスカ。
４分前１秒前にナイジェリア。
３分前２４秒前にモロッコ。

２分５８秒前にブラジル。同２分、９秒前インドネシア。
１分４７秒前クロアチア、２１秒サウジアラビア――」

「馬鹿な！
これは……これでは世界の終わりのようではないか！？」

叫ぶリデアを押さえ、ケイノスは会長の言葉を聞き逃さないように勤めた。
告げられる時間は一分を切り始める。

「５５秒前に朝鮮、３９秒前にイタリア、３０秒前にアルゼンチン。
２７秒前がインドとカンボジア。
２２秒前にロシアとレバノン。
１６秒前にミャンマー。１５秒前にベルギー。１１秒前にドイツ」

会長の口が止まり、入れ替わるようにスピーカーが騒ぎ始める。

『こちらトルコ！手遅れだ――』
『ネパール阻止成功』
『バングラディッシュ、状況危険！市民の誘導が困難！』
『パキスタン処理が追いつかない！援軍を――』
『ボリビア、これより援護に向かう！』
『誰か……――！』
『こちらニューヨーク！テロ阻止失敗！
現在、四凶（はんにん）を追跡中！被害拡大阻止に努める！』

自然の風が吹き抜ける。緑が揺れ、各々の髪をなでる。
静寂の中に響く怒号・怒声。助けを求める声や、焦りを顕にした声。飛び交う声の中に、希望あるものなどひとつもない。

無線機の向こうの戦争。
緑と僅かな平静に囲まれた自分達。

「これが四凶だ。
そしてこれが、数百年に起こるかどうかという現象、四凶の同時多発を確実に発生させて利用し、協会への反旗を翻す作戦だ。
協会、ひいては人類への報復を始めるというプラン。首謀者は現在四凶の中でトウテツの次に長生きといわれ、四凶全体の頭脳であるキュウキ。奴が描いたシナリオだ。
ついさっき得たばかりの情報では作戦名“ＥＲＲＯＲ　２７０８”とか言っていたが……」

「待て！
本当に四凶が全世界で発生しているのか！？」

「あぁ。冗談抜きにな。
この国にも発生しているんだよ。いま、目の前で」

会長の手が上がり、指が真っ直ぐに伸びる。
その先に、

「……俺？」

トキはいた。
当然、指差されたトキは困惑しする。

「おっと、悪いがちょっとどいてほしいな、トキ」

全員が動くよりはやく、轟音は届いた。
改めて全員の目がトキの背後――離れた場所――村の方へと向けられる。
その時、爆音と黒煙が産声をあげた。
衝撃波が木々を揺らし、悲鳴と銃声が遠くから伝わる。

「君たち以外の四凶はあそこにいる全員を殺す気だ。
君ならどうする？　ベクター・ケイノス」

「……」

会長の指が別に向く。

「君ならどうする？
リデア・カルバリー」

「もちろん助け出す！」

勇み立つリデアに続き、ケイノスも無言で立ち上がる。

「行くぞトキ！」

リデアが手が肩に触れる。
予想外の共闘申し出。
しかし、ありがたい。

「行くよな、トキ。
君達がここで四凶に立ち向かわなければ、君達も四凶になる確率がぐんとあがる」

「確率がなんだ！
凶行から一般人を守る！それがＳＲの存在意義だろうに！」

「ＳＲでなくても、犯罪は阻止するべきですよ隊長」

静かに立ち上がるトキを不信な目で見つめ、ケイノスはリデアに呼びかけた。

「しかし隊長、彼（トキ）はまだ行くとは言っていません」

「ケイノス君。解答はすでに出ているだろうに。
それとも君はトキと共に戦うことが嫌なのかな？」

自分が信用していない、またはされていないことを認識し、トキとケイノスの視線は交差する。

「好きとか嫌いとかの問題じゃありません。僕は色世トキが信用できないだけです。背中を撃たれないという保証はありませんから」

「君達は、俺のクラスや他のクラスの人々を助けてくれるのか？」

信用無しと断言されたところで逆に聞き返す。

ケイノスがトキを信用していないように、トキもまたケイノスやリデアを信用してはいなかった。

「もちろんだ」

「そういうトキはどうなんですか？僕達と同じ敵と戦うんですか？それ以前に戦えるんですか？聞いた話によると、貴方はまだ発展途上だとか」

リデアは頷き、ケイノスは挑発を含んだ質問を返す。

生粋の魔術師である2人に比べ、トキのＳＲに対する知識や理解度、それを用いた戦闘での経験値は微々たるもの。2人から見れば、トキは新米でしかない。目に見えた不確定要素である。

人命のかかった救助作戦に赴き、足を引っ張る恐れが十二分に考えられた。いくら期待されたＳＲでも、信用に値するかどうか試す余裕がない以上、イレギュラーとなりうる要素は省いておきたかった。

「……確かに、あんたらに比べて俺は全然この世界のことをわかってない」

「そうですね。下手についてこられてはこちらが迷惑です」

「ケイノス君！」

言われ、トキの頭には今までの敗戦の記憶が次々と蘇る。

学校での喧嘩や、コントンやアヌビス、事務所の仕事で足を引っ張ってしまったこと、ＳＲでもない訓練教官たちに徹底的に打ち負かされたこと。

悔しさはあった。だが、それを誤魔化しきれない前例があり、トキは返す言葉を失っていた。

が、ケイノスの意見に反対の意が飛び出した。

「いや、トキは絶対に行くべきだ」

動いたのは会長の口。

「まず、この面子の中で最も四凶に近いのがトキだ。
四凶になる確率を下げるには自ら四凶が関わる事故・事件から巻き込まれる人々を救うのが手っ取り早いんだ。これが第一の理由」

「第二は何ですか、会長？
そんなものが当てになるんですか？」

「第二に、ケイノスはトキの能力を侮りすぎている。
先ほどから観察してわかったことだが、トキのＳＲは日本語が表す通り、“時間（トキ）／Ｔｉｍｅ”だ。
最悪の事態を考慮した場合にもそこそこ使える回復の力を持っているようだ」

「会長はトキのＳＲを知っているんですか？」

「いや、全然。
話はほんの少し聞いているがな。
回復に使えると言ったのは、さっきマスターピースに対してやっていたことで分か……分かるよな？
やたらと時間を流し込んでいただろ」

（そうなのか？）
（あれは、時間だったのか）

沈黙する魔術師２人に会長は空振りを覚え、隠すことに失敗した。

「まさか、動揺して分析できてなかったか？」

『……』

「あ～、まぁ、仕方ない。
それから第三の理由。これが最悪の理由なんだが――」

実際のところ、第二の理由でケイノスは反論を諦めた。
もし自分達が失敗を犯して一般人に犠牲者が出たとしても、トキに回復の能力があるのなら怪我人を治療できる。こちらも怪我人を気にせず全力で敵を撃退できるのだ。

「最初にトキが聞いた質問の答えでもある。
あの村に、トキにしか対抗できない奴が入ってきやがったんだ」

椅子を下げ、質問を投げかける。
自分に対応できないＳＲ。それはやはり、コントンのことなのか。

トキが質問する傍ら、リデアやケイノスたちもその人物が何者なのか、気になって仕方がなかった。これまでどんなＳＲと出会っても、光と影の二大規格外魔女を除いたＳＲで、対応できなかった者はいない。それが今日初めて、対応できないと言われて癪に触れたのだ。

「そうだ。
時の中からはずれ、元在るべき世界から脱し、それでもあり続ける個。
誰が名付けたかわからないが、それが奴の通称。

時元脱存、コントン。
奴がここに来ているんだよ、トキ」

「やっぱり、あいつがいるんだな！」

今にも飛び出しそうなトキを、再び会長の支配が抑え込む。

「そこでだ。
相手がコントンなら、正面からぶつかっても自殺しにいくようなもんだ。
だから――」

「狙撃か？」

「いや、タイミングを見計らって飛び掛かれ。
俺がそのタイミングを教えてやるよ」

「タイミング？」

「もしケイノスとリデア、それからＭｒ．シーズンが協力してくれるのなら、この作戦の成功率は――なんと９９．１６％」

（妙に細かいな……）

トキはこれを疑わずに耳を貸す。
リデアも数値を気にしながらも作戦に協力する旨を伝える。

「さて、“眼帯越し”に聞くがＭｒ．シーズン。
いつまでリデアの左目を経由して覗いているつもりだ？」

最初からこの茶会を覗いていた人物に呼びかけ、バースヤードは全員の意思を聞く。
いますぐにでも作戦を聞きたがっているトキ。
同じくリデア。
リデアを補佐しつつ一般人を護るために協力するケイノス。

『私は何をすればいい？』

ケイノス同様、自由四季――Ｍｒ．シーズンは作戦参加を表明した。

「ＯＫ。
じゃあ、まずＭｒ．シーズン。君にはあれを降らせて欲しいんだよ」

リデアの左目の眼帯を覗き込みながら会長は説明を始めた。

『あれ、とは？』

「俺さぁ、実は白州唯に降らせたっていう桜色の雪を生で見てみた

かったんだよ～」

『……』

作戦の説明を始めたのではないのか。
Ｍｒ．シーズンも含め、全員が同じ事を思った。
明らかに私情を挟んでいる会長こそ、本当に不信に思うべきなのではないかと。

「そうすれば、全員眠らせてやることができるぜ」

しかし、会長の目に悪戯によって輝く光はなかった。
絶対的確信に満ち満ちた強い何か。
その自信がいかなる根拠から来るものなのか、誰一人として理解できるものはいない。

木陰から眺めおろす村は平和そのものだった。
樹と木の間を飛び回る鳥や虫、視界に映り、動く物々。
穏やかな平和といっても形容にならず、また遜色ない現実がここにあった。
しかしこれからすぐに消えるだろうことを思うと、事前に遊びに来ればよかったと後悔が沸いて出る。

「さぁて、誰が何人消せるか勝負してみねぇか？」

手中のサブマシンガンにサプレッサーを装着しながら無線に語りかける。

『いいねぇ、乗った』
『悪くないな』
『いいのかぁ～？　俺は誰にも負ける気がしないぜ？』

無線機越しに笑い声が届く。

『頭撃ち抜いたらポイント倍にしようぜ』
『それじゃ刃物持った奴は何をすれば倍になるんだ？』

声に混じり、自分の周りで銃器を扱う音、または刃物をこすり合わせる音が伝わってくる。

『……ゲス共が』
『お前もやりたいんだろ？』
『素直じゃねぇアマがいるみたいだな』
『邪魔さえしなきゃ空気でもいいさ』

パーティーを前に、亀裂に気付く。
会話の内容が気に入らない奴をひとり発見。

『それよかあの女教師さ、気のせいかこっちに気付いているみたいな素振りなんだが……』
『生徒の中にもそんな感じのがいるぜ？
黒髪の長髪の女だ』
『ああ、あいつはビンゴだ』
『知っているのか？』
『哭き鬼の次期姫だった女だ』
『哭き鬼？』
『あぁ、噂の生き残りの……』
『厄介なのはそいつくらいか』

『あいつらだけじゃない。さっき、ケルベロスも見かけた』
『何でもいいさ。
あいつらが戦うとすれば、一般人を護りながらに決まっている』
『いえてる。あいつら協会のＳＲでもないクセに、協会の定めたルールはしっかり守っていやがるんだからな』
『えぇと……つまりさ、こっちの優位は変わんないわけ？』
『そんなことも分かんねのかよ、アホが』

『なぁ、さっきからケルベロスだ、鬼だと、御伽噺の話はその辺にしといた方が……』
『黙ってろオッサン』
『暗号だよ、俺らの暗号』
（ったく、誰だよ……ただの人間連れてきやがった野郎は）

状況を理解し切れていない社会人を発見。

撃鉄を下げる。

刃の輝きを確かめる。

新緑の奥に潜む陰が、村を目指して輪を縮め始めた。

『人一人１０点な！』

『下らん。もっと単純に人数を競うべきだ』

『一発でしとめたら追加ポイントは2倍がいいな』

『1人でやってろ』

『そうだ。シンプルに人数でいこうぜ』

『俺は村の出入り口でおいしい汁を吸わせてもらうよ』

『あ！テメェ！そこは俺のポジ――』

『お前達……

これから何をしようとしているか分かっているのか？

遊びじゃ、ないんだぞ？』

再び彼女が問う。

なぜ人殺しを楽しめるのか、と。

『お～お～、自分がどんな場所にいるのか理解していないシアワセな雌犬がいるぜ』

『貴様こそ俺達と共に何をしようとしているのか分かっているのかな？』

しかし、彼女は話せば話すほど浮くだけだ。
いまはそういう状況が出来上がり、誰も降りることのできない舞台が幕を挙げ始めている。その最中だ。

『必要な分だけ攻撃すれば充分だろ。皆殺しにする必要はないはずだ』
『……お前、どこのモンだ？』
『アホは放っとけ』

『いや、俺も皆殺しに反対だ。
あそこにめちゃくちゃ可愛い娘がいるんだぜ。勿体無い』
『本当か？』
『なるほど、体の発育は良いみたいだな』
『お、俺はそれより、あのあた、頭良さそうなのがい、良い』
『あのメガネかけてた、いかにも優等生みたいなのがか？』
『き、きっといい話あ、相手になってくれる』

『確かに、皆殺しはよくないな。
あの中にもＳＲとしての素質をもった人間が何人かいるのなら、無駄に殺す必要はないしな』
『あわよくば仲間に～ってか？』

『お前ら……どうあっても必要以上に暴れる気なんだな……』
『あんたの本心は？』
『だ～か～ら～、放っておけっての』
『俺達のやり方に反対なら、いますぐこのヤマをおりるんだな』

そこで初めて、女は長く沈黙した。

『……いや、私は依頼されて、ここにいる。降りはしない。仕事の分だけ働いたら撤退させてもらう』

『そうかい。
じゃあ、あんたさ、こっちに気付いてそうなあの女教師、わかる？　あいつ殺ってくんねぇ？』
『それがいいな。ところで、雌犬、あんたの装備はなんだ？』

『ＤＳＲ－１。私は雌犬じゃない』
『あんたの名前なんてどうでもいいさ。それより、狙撃銃なら哭き鬼も狙撃してくれ』
『なら、俺達ぁ食堂の方に仕掛けるぜ』『じゃあ、こっちは池の近辺』
『私達は出入り口へ向かう』
『工芸屋の方をやらせてもらう』

こうして四凶たちは一斉に動き出した。

まず最初の３０秒で村の出入り口を制圧。
対物ロケットによる砲撃で駐車場のバスを爆砕する。
直後、四凶たちは六方から村になだれ込み、狙撃担当の四凶らは四方から村に銃弾を送り込んだ。

最初の爆発で近辺の人間全員が混乱状態に陥る。
四凶たちが銃を持ってなだれ込み、その凶弾によって最初の犠牲

者がでると、集団は恐怖に駆られて完全なパニック状態になる。

何が起こっている？

混沌とする光景の中、誰かが唖然としたままそう呟いた。

目の前で銃弾に倒れる者。

状況を理解できずにただ叫ぶ者。

悲鳴と怒声の中に入り混じる凶気乱舞する哂い声。

工房と食堂から火の手が上がり、路上や芝生は流血に濡れた。

四凶らは村の人間を中央に追い込むよう誘導し、輪をコントロールし、少しずつ縮めていく。

最終的に、四凶らが村の全員を中央に集めたのは攻撃開始から８分後のことであった。　この結果、この所要時間は、四凶たちが当初予測していた時間を大きくオーバーするものだった。

無抵抗な人間を中央へと追いやり、逃げ出したり、無意味に騒ぐものを射殺し、それでも５分とかからない。

そのはずだった。

しかし、現実に結果は予定を大幅に違えるものとなっていた。所要時間、チームの損害。

３４人いた四凶チームは、その数を２５人にまで減らされていたのだ。

その原因となったのが、一部の教師とその生徒達による猛烈な反撃であった。

第３７話－深緑の死圧－（後書き）

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

Ｎｅｘｔ

０８／１０　投稿

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

※夏ばて防止のため、不完全燃焼という精神的重石を外すため頑張ります！という勢いです。例外的になってスイマセン……（汗

それから、いつも長くてスイマセン。（前後書きも、本文も、言い訳も）ｏｒｚ

第３８話－ＣＯＤＥ：ＥＲＲＯＲ　２７０８－（前書き）

新緑の山々がざわめき、四凶を報せる。
だが、それに気付く者はほとんどいない。

なぜならソレが四凶。
気付かないうちに進行する病。
認識することの出来ない不幸。
無意識が繰り出す本能的悪性。

だが、気付く者もいる。
自らが意識できない四凶である者。
本能的に不幸から身を護ろうと感じ取る者。
本能的に同類の不幸に近しき所を感じる者。

老若男女など関係ない。
誰にでも善があり、
誰にでも悪がある。

しかるに、
現実と非現実、
人間と怪物という概念による分け隔てはなく、素質ある者達はそれを感じ取っていた。

最終的には、それを知覚するかどうかの問題だ。
認める認めないの範疇にそれを含んだ時、初めて彼らは四凶という存在に気付くのだ。

結果はこうなる。

平和を受け入れた彼らに、進んで不幸と困難を瞬時に受け入れるだけの心構えなどなかった。

だから、死者を多数出したのだ。

第３８話－ＣＯＤＥ：ＥＲＲＯＲ　２７０８－

最初にマシンガンを持った男が目に付いたとき、彼らは瞬時に攻撃体勢へと移行していた。

「不審者だ！」

３年３組の委員長：ミツルが叫ぶ直前、山の間に銃声が木霊する。山の斜面や新緑の中からの狙撃に気付き、急いで建物の影へと走りこむ。銃撃を受けない場所に身を置くと、急いで携帯を取り出して岩井や函音カイなどに連絡を入れる。クラス内において腕に自信を持ち、且つ信頼できる者達だった。

不審者が銃を過信して距離を詰めてきたところを見計らい、一気に反抗にでる作戦を伝えた。

敵が完全に村の中に入るまでこちらの作戦意図が読まれないように努める必要があった。だが、ミツルの考えは、何も考えずに敵に向かっていく数人のクラスメイトや大人たちの、果敢ではあるが無謀とも言える行動で補われた。

「わかっているな！
緊急マニュアルとさっき言った通りに対応しろ！
行動は常に複数だ！まずは武器を奪え！出来る限りでいい、死んだら元も子もないんだ！」

同時刻。
裏委員長のマイコは自分を慕うクラスメイトと共に、安全な場所を探して村人たちと走り回っていた。

「先生！
そっちはたくさん撃たれるから行っちゃ駄目！
佐野代くん！あそこに座り込んでる人を助けて！」

教師と生徒、村の責任者が急な事態の対応に追われる。
そんな中、彼女は辛うじて事態に対応していた。

非現実的だと思いつつも、心の奥底ではいつかこんな日が来るのではないかと思っていた。
人口爆発がもたらす格差社会。
職の有無や市場の激動、さまざまな燃料を巡った国と国の対立。
そこから生まれる各国の不安定。国の不安定は国民へと伝播し、より国を不安定にさせる。犯罪の原因にもなり、それはあらゆるメディアを通じて世界中にも犯罪の種を撒きかねない。

（犯罪伝播……）

いつしか来るであろう、小規模犯罪から大規模犯罪への転移、爆発的変化。
それがいま、目の前で起こっていた。

この国にも銃犯罪が浸透してきていると実感し、ぶつけようのな

い怒りに身を震わせた。

泣き叫ぶ者。
流れ弾に傷つく者。
非日常的な光景にありながらも生きようとする者。
しかし、銃声は止まない。
銃弾が命を奪い、村を壊し、それまでの現実を崩す。

不条理な現実の前で自分にできることを考え、マイコは自分に言い聞かせる。
今此処で不審者に向かっていけば、自分は無駄死にするだろうことが目に見えている。何せ、相手は銃器を所持しているのに対してこちらは素手だ。勝率はほぼゼロに近い。相手の銃器さえ奪い上げてしまえば、村人やクラスの全員で抑えることができる。しかし、現状でそれは実現不可能である。
なら、自分がいますべきことは、少しでも村人や他の生徒らを安全な場所へと導き、無用な混乱を避けることではないか。
それしかできることがないのなら、その現実を受け入れつつ、その現実に立ち向かうことこそがリーダーたる者が選択すべき行動規範だろう。

悔しさを押し殺しながらマイコは誘導と救助を繰り返し、安全な場所を目指して走り続けた。

――何人無事でいられる？

実際のところ、ミツルとマイコの2人はうまく行くとは思っていなかった。
担任の蓮雅に不審者対策のマニュアルを貰ってはいたが、そのマニュアルの中に銃器を所持した複数と遭遇した場合の対応方法は記

されていない。そもそも、いざ実戦となって今まで学んできたことを瞬時に発揮できる学生は少ない。それが長い間を置いているならなお更である。
それでも、

「二段、下段：紫苑（しおん）」

同時刻、現実を守ろうと彼女は戦い続けていた。
哭き鬼が芝生の上で照準をスライドさせている四凶たちから視界を奪う。
派手な攻撃を行えない藍は、小声で術を発動させ、確実に相手の戦力を削いでゆく。

「さぁて、少し頭を冷やしましょう」

同じく、生徒達を密かに支援する協会のＳＲがいた。
水の魔術師は四凶を池の中にさらい、１人ずつ減らしてく。

攻撃が始まって2分。
四凶という属性を持った人、あるいはＳＲを相手に、３年３組と協会の護衛ＳＲはそれぞれ戦闘を展開した。
駐車場、工芸屋、食堂、池の周辺。

（来たわね……！）

村の奥寄りの道端。
もっとも現実離れした戦闘が展開されているのがここだった。

銃弾が飛び交う中、藍は比較的刀身の短い刀を持った3人が歩み寄ってくるのを確認する。
白鬼のSR。
他の鬼に比べて戦闘経験が豊富で、代々荒事の処理屋として稼いできた一族。
どんなに弱い白鬼でも一個中隊並みの戦力を有しているほどだ。

「よぉ～、哭き鬼のお姫様。
俺らと遊ばないかい？」

「私と遊びたいのなら、周りの暴漢を片付けるのを手伝ってからにして――」

言い終える直前、1発の銃弾が制服の肩部を掠って破る。
思わぬ銃撃に藍は一歩後退し、それを機に白鬼3人は一斉に襲い掛かった。

「聞こえねぇな！」

「何で理壊双焔破界を使わねぇ！
素手で俺達に勝てるつもりか？あぁ！？」

問答無用の攻撃。
前髪を刃が掠める。
突きを躱し、振り下ろしを紙一重で避ける。

「それとも何か？
お前は貧弱な人間のフリでもしてるってのか？
そんなにこの学生達が好きか！？」

「関係ないでしょ！」

足元から伸びる茨が、前後から襲い掛かった刀を2本絡み止める。
巻き止められた刀を放棄し、白鬼たちは哭き鬼から離れた。

「へっ！これがアサの妹と恐れられた哭き鬼かよ？
人間を大切にするなんざ、おかしくておかしくて――笑えなくなってくるって！」

白鬼は、哂っているが笑ってはいない。
哭き鬼は、気にとめるつもりはなかったが、こみ上げる怒りを抑えられない自分に気付いた。
それが挑発だと分かりきっていても、抑えられない感情がこみ上げてくる。

「お前はアサよりも弱いな」

「ていうかよぉ、カンナの方がもっと怖かったぜ！」

「いやいや、スミレの嬢ちゃんよりもひどいな」

地を蹴る。

抉れる地面。面を捉えて蹴った足が土を舞い上げる。

白鬼めがけて突進し、拳を振り上げ、力いっぱい見舞いする。が、

白鬼は一瞬早く回避を始め、哭き鬼の拳撃を躱していた。

芝生の上から舗装された道の上へと移る鬼達。

藍の放った一撃で砕け散るコンクリート舗装の道。

飛び散る破片の隙間を縫うように飛来する複数発の銃弾。

茨が銃弾を叩き落とす。

その隙を突き、白鬼2人はコンクリート片を掴み取って全力投球。

常人の数十倍もの爆発力を持つ筋肉から放たれる破壊のエネルギー。

投げられたそれが小石でも、強化ガラスを傷つけるだけの衝撃力は

充分に有していた。

茨がそれを弾く。銃弾も叩き落す。

「ほら、隙をつくりやがった」

刀の峰が茨の退いた空間に滑り込み、鎖骨へと食い込んだ。

短い悲鳴と共に茨が怯む。

更に大きくなった隙に付け込み、白鬼の手が伸びる。

手刀。

狙いは、心臓。

「だっらぁあ！」

一瞬の影。

激痛を覚悟した瞬間、不意を突くように誰かが目の前に現れる。

窮地に現れた男に、全員の意識が集まった。

盛大な空振り。

「大丈夫か、橙空！」

死を覚悟したその瞬間に現れたのはクラスメイト、

「宮原……？

さがれ！こいつらまともじゃない」

目の前に現れた男子が自分のクラスメイトであることを認め、後退することを進言する。

が、手遅れだった。

「何でテメェラは俺のクラスメイトに手ぇだしてだよ！ァァッ！？」

不曲の宮原。

その名に恥じない猪突、或いは猛進を始めた彼を止めることはで

きない。言葉による制止は不可能。藍は荷物が増えたことに焦りを覚えた。いかに腕に自信があろうと、相手が悪い。
というより、勝負にならない。

「威勢がいいな！」

「そこのお嬢ちゃんが言うように、俺たちゃマトモじゃないんだぜ。後悔しな！」

左右から挟撃を仕掛ける白鬼に対して宮原は片方を完璧に無視し、片側だけに集中する。
無謀すぎる作戦。
タフネスに自信があるのかどうか分からないが、相手は鬼のＳＲだ。一般人のパワーとは比べ物にならない破壊力を持っているのだ。常人なら拳打一発で破壊されかねない。
藍は不安定な体勢のまま宮原が放置した側の鬼を目掛けて突進した。

「何が橙空だ！
そいつの本名はそんなんじゃねぇんだよ！」

予想だにしていなかった攻撃速度の速さに僅かな脅威を覚え、白鬼の１人は精神へと揺さぶりを掛けた。
精神的揺らぎが出来ればスピードも落ちる。そうなれば必然、反撃もしやすくなる。

「そいつの本名はなぁ、陸橙谷(りくとうや)っつうんだぜ！
知ってたか？」

「知らん！
だからどうした！」

宮原は曲がらない。精神は揺るがない。
興味すら持たない。
ただ倒すと決めた者を倒すためだけに彼は攻め続ける。
それが完了するまで他一切に頭は向かない。

白鬼の顔面を拳が捉える。
顎を打ち、こめかみを捉え、顔面を叩く。
しかし、鬼は倒れないし、ふらつかない。

「お前らは騙されているんだよ」

「騙してなんかいない」

宮原の肩越しに藍の手が現れる。
右手の親指と人差し指の付け根の間が白鬼の喉を触れ、その状態から藍は力任せに白鬼を押し飛ばす。　反対側へと宮原が急いで振り返ってみると、そこには転んだ状態から立ち上がろうとしている男の姿があった。その様子からわかることは、藍が男を転がしてこちらの援護に来たということ。

「やるな橙空！」
「藍でいいわ」

日本刀が空を切る。
藍が日本刀を握る鬼の手を押さえつけ、その隙に宮原が拳を敵の頬へと叩き込む。

「額を打って！」
「デコか！」

交差する左右の腕。
右の正拳に続き、左の正拳が打ち込まれる。
思わず宮原は目を丸くした。顎を打っても頬を打っても怯みさえしなかった暴漢が、目を瞑るほど痛みを訴えていた。

「もういっちょ――！」

連打。
流血。

「調子に乗るなよ……陸橙谷ぁ、テメェらが常人（ザコ）護って戦うのは勝手だがな、誰が勝手にこっちのことを教えていいっつったあ！？」

宮原の突き出した拳が朱に塗れる。
宮原にとって、激痛よりもむしろ目の前の光景の方がより衝撃的だった。
白く鋭い何かが自分の拳を貫いたということまでは理解できる。
問題は、何が皮を破り、肉を裂き、骨を削ったのかである。

「鬼に逆鱗はねぇが、ダイヤ並みに硬ぇ角があるんだよ！」

「あなただって、勝手に私の本名暴露したでしょ！
一段：菫（スミレ）！」

白鬼が角を突き出すのよりも早く、藍は宮原を叩き飛ばした。
菫の効果は重量変化。
術による軽量化を施したのち、体を回転させて手の甲で宮原の胸部を軽く打つ。生卵すら割ることができないほど脱力しての打撃だが、それだけで宮原の体は数十メートル後方へと飛んだ。

銃弾が右側二の腕の肉を削ぐ。
しかし、痛みを意に介してチャンスを逃すことだけは避けたかった藍は、痛みを押し殺して攻撃に移る。額の中心に白い角を生やした白鬼の後頭部へと、回転に乗って掌底を叩き込む。それと同時、

「3段：蕗薹（フキノトウ）」

後頭部に触れた瞬間に術を発動する。

蕗薹の効果は睡湿塗濁。
直接触れなければいけないという条件付きだが、確実に相手を夢なき眠りへと陥れる術である。相手によっては3日間も眠り続けるし、相手の相性がいい場合や疲労が溜まっている場合は半月も効果が現れる術であった。
例に漏れず、白鬼は前傾姿勢のまま崩れ、芝生に顔面から伏していった。同時に白い角が額の中へと戻る。

「人の命を護り、鬼の力を綴る。
あなたたちは忘れているようだから教えてあげるけど、それが哭き鬼の掲げる理念よ」

残った白鬼2人は、目の前の哭き鬼を再認識した。
哭き鬼最大の特徴は何か。
それは魔でありながら他の魔を学び受け入れる存在。鬼の中では最弱の部類に属するが、総合力なら日本の魔物総勢とも互角に渡り合える可能性を持った集団である。

「やっかいだな」

「あぁ、あの術な……」

華創実誕幻（かそうじったんげん）。
それが哭き鬼最大の取り柄であり、他の鬼に対抗できる数少なく且つ、強力な手段であった。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第３８話－

－ＣＯＤＥ：ＥＲＲＯＲ　２７０８－

食堂から紅蓮が立ち上る。
ガス管と衝突した銃弾がもたらした爆発は、老人と学生を僅かながら巻き込んでいた。銃弾がそこかしこを飛び交う。
その中、蓮雅は大勢の生徒や村人が誘導されていることに気付いた。
村の出入り口へ向かった集団が逆流を始め、山の中へ逃げ込もうとした生徒達もきびすを返して村の中を右往左往と走り惑う。
中央へと少しずつ集まる人々。周囲に確認できる火線の向き。

（確実に、追い込まれている……！）

建物の影から飛び出す。

すると、

「レンガ先生！」

１人の女生徒が自分の背後に向けて指を突き出していた。

咄嗟に振り返るとそこには敵と認識すべき人物と、こちらとの遭遇に驚く相手の表情があった。

マシンピストルを持った男。

目が合う。

身長は１７０強。

相手の寸法を確認した直後、蓮雅の腕は精密動作をこなす機械へと化す。

スローイング。

手馴れたその行為で放たれたボールペンは的確に相手の眼球を穿ち、照準を狂わせる。敵が狙った射撃をできなくなったところで、がら空きとなった左側を目指して回り込むようにして接近する。

けたたましい連射音。

抉れる地面。

蓮雅は排出された薬莢を拾い、火傷に耐えながら手中で空薬莢の向きを変える。

接近して、銃を持つ腕へと新たにボールペンを追加（つきさす）。相手の片目

が向くのを見計らってもう片方の目へ打撃を加え、その時に指と指の間に挿(はさ)めた空薬莢でもう片方の眼球を破壊する。

直後に食堂から2度目の爆発が起きる。

銃を持った男の背後から爆風が襲い、衝撃波が周囲を逃げ戸惑う人々を薙ぐ。

爆発に紛れ、蓮雅は男の頚動脈へカットインして命を絶つ。更に事切れた男を盾として爆風から身を守った。

（武器……！）

男が持っていた銃器：ＭＰ７Ａ１を手に取り、背中を焼かれた男の体を探る。

目的の予備マガジンを見つけると、早急に服の中に忍び込ませる。発見した予備マガジンのうち1本は本体に取り付けられている空のマガジンと取り替えた。

しっかりと銃を握り、爆風に煽られた生徒の腕を引いて起こす。ここが安全でないことは分かっている。分かっているからこそ、混乱が抜けないのだ。

「しっかり立って！逃げるのよ！」

「は…い……」

「先生駄目よ！

逃げ道をふさがれてる！」

駆けつけた裏委員長のマイコが叫んで伝え――そのすぐ横に現れる敵――蓮雅は間髪いれずに引き金を引いた。
マイコを背後から狙う突撃銃の銃口。
しかし、インサイトもトリガーも蓮雅の方が断然早い。セミオートによる3度の射撃は1発たりとマイコを掠ることなく、男の体だけを捉えて死に至らしめた。

「岩の影に隠れ――！」

刹那。
ＭＰ７Ａ１の上部に取り付けられていたダットサイトが粉々に砕け飛ぶ。

（っく――狙撃！）

１０時の方角からの奇襲。
そこまで理解した蓮雅はマイコを押し倒し、自らが的になるのと同時に狙撃者を自分の射界に入れるために移動を開始する。
スピードにささやかな緩急をつけながら、平地から物陰、物陰から物陰へ。
１発の銃弾が脇を通過するのと同時、僅かな段差の影に隠れることに成功する。

その時、いま対峙する狙撃手のものとは違う2種類の銃声を確認した。

標的は自分ではない他の誰かだ。つまり、自分達が狙われていることに間違いはない。

（スナイパーは何人いる？）

陰から飛び出す。

予測される弾道から体を退かせる。直後に予測は実現し、体を外した弾道上を．３０８ウィンチェスター弾が通過する。次の銃撃までの間隔が長いことから、対峙する狙撃手の得物がボルトアクション式のライフルであると予測できた。

一瞬覗いた銃火。

連射していれば当てられたであろうタイミング。射界に妨げとなりうるものがなかったのだ。それなのに撃ってこない理由は弾切れか、次弾装填による間隔なのか。大きく考えられる理由がその２つ。或いはこちらを誘っているのかもしれない。

一気に距離が縮まる。物陰へ飛び込む瞬間を狙ってフェイントをかけ、狙撃は見事それに引っかかった。弾道は蓮雅から２メートルも離れた場所に着弾して弾痕を創る。

物陰から見える敵に向けて弾丸を放つ。狙撃から逃げ切れているのが自分だけだと考え、全力で他人の援助に尽くす。力有るなら無きを助けよ。芹真の言葉が頭で繰り返され、それは蓮雅を奮い立たせるに充分な効果を持っていた。次々と照準を切り替え、敵を撃ち、生徒と格闘する敵の足を狙撃して援護する。

相手は１人たりと倒れはしないが、隙をつくることには成功していた。

銃声。

それと同時に村人が命を落とす。

狙撃手の狙いは、物陰から出てこない蓮雅から逃げ戸惑う村人へと移っていた。それが村人や生徒を助けるために物陰から出てこない蓮雅を引きずり出すための行動であるということがわかる。

蓮雅は飛び出し、狙撃者に対して横へ横へと直角に移動しながら少しずつ接近した。

狙撃手にとって物陰から飛び出すまでは予想通りだった。しかし、そこからの行動は、殺戮に酔った頭を覚ますには充分な薬となった。

（敵のスナイピングが下手過ぎる）

率直な蓮雅の感想。　それに対し、蓮雅とレティクルを合わせようと必死になる男。焦りばかりが爆発的に膨れ、事態は最悪の結果へと繋がってゆく。

ほぼ直進で接近してくる者に対しては正確な狙撃を行うことは造作もない。だが、真横に動く敵を仕留めるには骨が折れる。素直に言うなら難しいのだ。

そんな高難易度の狙撃に加えて蓮雅はスピードに緩急をつけている。更に地形が理想的狙撃を拒んでいた。

（いける）

生い茂る木々が盾となり、蓮雅への被弾率を格段に下げる。登り斜面の移動でも蓮雅の移動速度はほとんど変わらず、自然を味方につけ、結果無傷で狙撃手への接近に成功した。

近距離戦ではスナイパーライフルよりもマシンピストルの方が小回りが利くため圧倒的有利になる。しかも入り組んだ地形も助けて、分はよりこちらに傾く。

距離を詰める蓮雅は相手が予備兵装に切り替える場面に出会った。二挺拳銃。多くの場合は銃を体の各所に取り付けたホルスターに収めて携帯するのものだが、いま目の前にいる狙撃手は、珍しい場所に予備兵装を設けていた。一挺は狙撃銃のストック。銃床という肩に当てて命中率を上げると同時に射撃の安定化のはかるための部位（パーツ）に取り付けていたのである。もう一挺は銃身。トリガーよりも前方で、アサルトライフルでいうマスターキーやグレネードユニットを取り付けるバレルアンダーに取り付けられ、その拳銃を後付の持ち柄――フォアグリップ――として扱っていたのだ。予備兵装（それ）こそが男の命中率の低度／程度の理由だと、蓮雅は理解した。

（M９２F）

しかし、タイミングが悪い。

狙撃手は蓮雅が同じエリア、木々のある斜面に入った時に武装を切り替えるべきだった。

敵を目前にして得物を選んでいる二流に未来は無い。戦闘とは、備えあるべき者に軍配が上がるものだ。蓮雅と狙撃手の対決も例に漏れず、狙撃手は蓮雅に対し一発の銃弾も当てることなく命を落とす結果となった。

狙撃手が２つの銃口を向けた時、蓮雅の得物はすでに相手を射界に捉え、指は引き金を押さえつけていた。

連射　対　速射。

勝負は、斜面を利用して回転しながら相手の銃撃を回避し、且つ相手の絶命を意識して銃撃した蓮雅の圧勝に終わる。

（サコーのＴＲＧ－２２）

倒れた敵の武器を取り上げてマガジンを確認し、その場所からスコープと肉眼を用いて村を窺う。
老若男女を問わずに展開される銃殺・刺殺。
脅迫。追い込み。無差別殺人。混迷。
それがスコープ越しに映った村で行われている全てだった。

村で暴れまわっている彼らを支援している狙撃手がいる。彼らがいるからこそ、村のメンバーも思いきり暴れられる。
蓮雅は村を挟んで自分と反対の側にいるであろう狙撃手を探した。
存在が予測される狙撃手は３名。うち１人を倒し、残り２人。

（いた）

緑の中に溶け混じる男性狙撃手。こちらに気付いてはいない。
蓮雅はレティクルを男から外し、村で堂々と銃弾をばら撒いている敵に狙いを定める。
発砲。
放った弾丸は蓮雅が思っていたよりも上に着弾する。狙った箇所は横隔膜くらいの高さに位置する背中だったが、弾丸は男の首筋を撃ち抜いていた。男が倒れる。その結果を元に銃のクセを把握した。
それからもう１発。村人に銃を向ける男の腕を狙って射撃。弾丸は的確に男の腕を撃ち抜き、戦力を半分以上に減滅する。
２度の狙撃データを記憶し、蓮雅は本命へと照準を合わせる。

相手はこちらに気付いていない。レティクルの交差に男を合わせて引き金を絞る。

一発。銃弾は男の左耳を捉えた。

男はまだ絶命に至っていない。

自分が狙われていることに気付き、照準を村から対岸の斜面へ向け、蓮雅を探す。

男が蓮雅を見つけるよりも早く、2発目が撃ち込まれる。

喉。首の左半分の肉と内容を吹き飛ばすと、さすがのSRも生命の危機に陥る。

駄目押しの3発目。

背中を向けて逃げようとする男の後頭部を撃ち抜く。

（2人――！）

撃破数、2。

3人目の狙撃手を探そうとスコープから目を離し、マガジンを新たに装填した瞬間、逆に狙撃が蓮雅を襲った。

青葉を貫き、一直線に飛来して着弾。

飛び散る木片。

狙撃そのものは失敗だったが、蓮雅の体勢を崩すには充分な一撃であった。　斜面を転がり、辛うじて体勢を整えたところに次の狙撃が襲い掛かる。またしても狙撃自体は失敗だが、着弾に伴う破片が蓮雅に刺さる。

（気付かれたか）

敵の第３狙撃。
蓮雅はそれまでの狙撃から相手の位置・方向を割り出し、その方向に負けじとＴＲＧ－２２で撃ち返した。

（１０時の方向……！）

４度目の狙撃。相手は囮を使うこともなく、堂々と蓮雅を狙う。
蓮雅自身も相手の態度に気付く。その証拠にたった今、蓮雅は相手を視界に捉えた。斜面を歩きながらこちらに銃口を向ける女性狙撃手。

（武装は、ＡＭＰ　ＴＳ　ＤＳＲ－１）

４発目の銃弾が近くの枝を折る。
移動を始めた蓮雅という的に対し、それまでの狙撃に比べて相当正確な狙撃を見せていた。
蓮雅は木陰に身を隠し、相手の狙撃に対して狙撃で応じる。

陰から陰へ身を隠しながら素早く移動する蓮雅に対し、女性狙撃手は身を隠すことなく、歩きながら狙撃銃を構えて進む。
お互いの武器はスナイパーライフル。
使用する弾丸も共に同じ。

（この感じは……？）

５度目の狙撃に合わせ、蓮雅も引き金を絞る。
交差する銃撃。
行き交う．３０８ウィンチェスター弾。
悪地形を移動しながらの狙撃は滅多に当たらない。
木々が２人の被弾を拒み、山の斜面が２人のバランスを許さない。
ボルトを操作して次弾を装填する。マガジンを取り替えて銃弾を補充する。
狙い、外し。当たると確信し、裏切られる。
対峙し、撃ち、進み、繰り返し、いつの間にか２人の距離は５０メートル程にまで縮まっていた。

緊迫した状況下で、２人が狙撃銃を捨てるのは同時だった。
そして、互いが強力な敵であるということを肌で感じあったのも同時。２人は斜面沿いに走りながら銃撃を繰り出す。

蓮雅はＭＰ７Ａ１を右手に取り、相手女性狙撃手は左手にステアｌＳＰＰを取り出した。
マシンピストル同士が向かい合う。それまで徒歩と競歩ほどの速度で距離を詰めていた２人が同時に走り出す。　マシンピストルで弾丸をばら撒きながら木々の間を縫うように、それでいて確実に相手に被弾させるように、高速で場所を確保する。遅れれば身を隠すことに失敗し、ただちに死に繋がる。
互いの距離が１０メートルをきったところで２人はそれまでと違った行動を取った。山の斜面を利用して登りより早い、降りという行動に伴う物理法則を利用した横へのスライドステップ。

数秒の浮遊。
陽光と新緑に包まれた戦場に流れるＢＧＭ（じゅうせい）。

空間を切り裂く鋼の応酬。
弾丸は景色を。殺意は相手を射抜く。
実現する光景と現れない殺意の願望。

だが、その中にひとつだけ非常識が紛れていた。

（この、ＳＲ――か！）

蓮雅の放った弾丸は確実に相手の体に穴を開けているはずだった。
高まる緊張に伴って分泌されたアドレナリンの作用で、蓮雅は弾道の全てを目で捉えていた。　厳密には目視したわけではない。相手の銃口の向きと、自分が放った弾丸の連続して隣り合う弾道を目で確かに追えていたのだ。
連射に伴う弾道の連続、数量から予測できるバリスティック。
それは確実に敵狙撃手の体に触れていた。行動不能にしていてもおかしくない攻撃だった。

しかし、相手は平然とした顔でマガジンに手を伸ばしている。
銃創もなければ流血もなく、ひるみさえしない。
蓮雅が相手の正体に気付いたのは斜面を転がり、斜めに生え伸びた木に背を預けた時だった。敵狙撃手は蓮雅よりも早く体勢を整え、斜面を下りながら連射を繰り出す。

（まさか……！）

マシンピストルを投げ捨てた蓮雅は慌てて樹木を盾にする。

自分の考えが正しければ、彼女が次に取る行動は、

「逃がさない」

それが実現する。
蓮雅の予想通り、相手は追撃の機会を逃さない。
マシンピストルを肩からさがるホルスターに預け、彼女本人は樹木を透過し、瞬く間に蓮雅の首を掴んだ。

「投降してください」

右手で首筋を掴まれ、背後から左肩に銃口を突きつけられている。
蓮雅は背後を取られた状態で相手の位置を確認した。
背後、左寄り。
右腕で抵抗したところ、相手に届かない。
定石通りといったらそれまでだが、こちらの勝率が極めて低いのは事実である。

「どうしてあの村を襲ったの？」

「……命令、だからね」

蓮雅は両手をゆっくりと上げ、手の後ろで組む。

「殺戮が命令？
あなたの主義は何？」

「……降伏するのか、しないのか。ハッキリして貰いたい。
体を言葉に合わせるか、言葉に体を合わせるかしないと始末します」

「私の質問はたった2つ。いま言った事だけ。たったのそれだけよ」

両膝を折って反抗できない姿勢を示し、蓮雅は口を閉ざした。

「なら……いや、先にこちらの質問に答えてもらう。
あなたは何者だ？
ただの教師ではないな？」

左肩を銃のバレルでつつき、答えを要求する。
わずかに、蓮雅はその質問に寂寥を覚えた。

「協会か？
それとも、ナイトメアか？」

「どちらでもない、ただの教師よ」

静寂が降って下りる。

言われて彼女は悟った。この教師はＳＲのことを知っている、と。

「なら、教師になる以前は何をしていた？」

「生きるため、戦争をしていた」

蓮雅の言葉に、狙撃手の思考が一時停止する。
目の前にいるのは現教師。
そして、元――

「傭兵、だったのか……貴様」

「背中が熱いわ。私を忘れたの？
ビアンカ・ハルモニアさん」

２度目の沈黙が訪れるのと同時、２人は村から銃声が届かなくなったことに気付いた。

「……私を知っているのか？」

「元々はゲリラ。それから元傭兵。
いまは国連所有の切り札で、ワンマンアーミーとまで言われた過去を持つ女性エージェント。
徒手格闘から武装戦闘もこなし、あらゆる任務を完璧に遂行してきた。得意な得物は狙撃銃よりも拳銃。銃器だけでなく格闘戦もこ

なし、戦地の地形風土に合わせたカモフラージュは念入りで、頭髪にまでペイントを施す徹底ぶり。兵器に関する広い知識と柔軟な戦略対応性の高さを最大の武器とし、幾度も死線を潜り抜けている。

両親と夫、娘を数年前のテロで失うも、任務から身を引くことなくいまにいたる。

相手の殺意に敏感なエージェントはテロ遭遇後、かねてより持っていた直感に磨きがかかり、そのことを端に、戦場では殺意に反応する殺人者として恐れられ、また飼い主達からもシンプルながらも純粋な畏怖の念を込めて“ザ・キラー”の二つ名で呼ばれるようになる。

これが、私の知っているあなた」

「……どうやって知った？」

「あなたを調べようとしない人間はいない。まして、一度戦った相手を分析しない愚か者は傭兵を続けていけない」

「誰……どこから私の情報を得た？

言わなければあなたの生徒を殺す」

「一度自分の目で見たことを再確認するため何十、何百もの情報屋に話を聞いて回った。そのいちいちを覚えていない。

それに信じないでしょうけど、私の持つ情報の半分以上はあなた自身から聞かされた」

蓮雅は嘘を言わない。

ただ、それが真実として相手に伝わっていないだけだ。

眼前の教師に答える気がないと判断したビアンカは、ＳＰＰを村の方へと向ける。

「この距離でマシンピストルを用いた場合、正確に狙いを外すことが出来ると思う？」

「出来ないことは知っている。
あなたがベトナムでした大量殺戮も」

蓮雅は続ける。ビアンカも続ける。

「お前が従えていた生徒は大体把握できている。
まして、中央にほとんどの人間が集められているんだ。どんなに拒んだところで死体の製造は避けられない」

「また焼き殺す気？
それとも毒殺？今度もガスボンベをどこかに埋めて隠しているの？」

２人の目が村の中央で止まった。
村にいた者、訪れた者たちのほとんどが中央に集められ、銃口と向かい合っている。
一箇所に集められた人々と、それを囲む四凶たち。

「もう勝ちはない。一切を……諦めろ」

「今度は誰の殺意が気に入らないからこんなことに参加しているの？

それとも、誰かの殺意を感じたいからこんな仕事を承ったの？」

風が山の斜面を撫でるように吹き上げ、新緑を揺らす。

『いつまで続ける気？』

そんな時であった。

風が止み、ざわめきが収まるのと同時、２人が口を開き、同じ質問を投げ出したのは。

「頼むから、行動と言葉で抵抗しないでくれ……」

「ビアンカさん。あなたがこんな任務に参加したことに疑問をいだかずにはいられない。

あなたはそんな人じゃなかった」

２人は視線を固定したまま続ける。

村の様子から目が放せないのも現実だが、お互いに殺し合いたくないのも現実に発生する感情だった。

「さっきから何だキサマ。私とどこかで会ったことがあるのか？」

「本当に分からないんですか？」

蓮雅の唐突な質問に、ビアンカの焦点が変わる。

「私のこと、覚えていない？」

後ろで組んでいたほんの少しだけ手を解き、右手を翻して掌を見せる。

生命線と交差する切傷、厚い刃で貫かれた傷がそこにはあった。

「ベトナムでの傷よ。初めは殺しかかってきたが、まだ新成人程度だと気付いたあなたは私を見逃した」

伏兵の蓮雅に、ビアンカは大型ナイフを片手に奇襲を仕掛けた。

サイレントキルは失敗に終わる。

国内と近隣まで巻き込む規模の戦争時の１ページ。カルテルとゲリラが覇権を巡って争っていた時代の記憶。

「お前、あの時の……レンガか？」

掌の傷を作った本人の口から、確認の言葉が飛び出す。

脳裏にはその時のことが鮮明に再生されていた。

「そう。私よ。

次の日、敵同士だった私達は共通の敵に立ち向かっていった。覚えている？」

突きつけられた銃は下りない。

ビアンカは目の前の彼女がかつての知り合いだと気付き、様々な感情に揺るがされていた。

「たった１２日だけの共闘だったけど、大切な思い出になった」

蓮雅の狙撃銃を蹴り飛ばしたのは誰か――私だ。

一突きに彼女を殺そうとしたのは誰だ――それも私だ。

しかし、殺せなかった。

「もう、忘れたの？」

蓮雅も同様である。

２度と会えないだろうと思っていた人物との再会。

「あなたの強さに魅せられ、私も前に進み始めた」

あの時、ビアンカが全力で襲い掛かってきていたら今日までの自分はなかった。

あの時、右手を犠牲にしても絶命を免れる自信はなかった。
でも生きている。
彼女が必死の抵抗を認めてくれたから。

「だから、色々な人にあなたのことを聞いて回った。どこに消えたのか、とかね」

「……すまない」

「私はあなたから銃を学び、芹真から応用を学んだ」

「忘れるものか……と、言えないか」

硬い感触が消える。
いま、銃口はおりた。
改めて蓮雅は質問する。

「無理もない。私もあなただと信じられなかった……ねぇ、それより教えて。
私たちの生徒を襲う理由は何？」

「それは言えない。一応、任務の最中なのだから」

「じゃあ、あの犯罪者達を見逃すというの？」

言って蓮雅は気付く。

ビアンカ自身もこの作戦に参加した時点で同種、犯罪者である。
まして、戦争や暗殺を主な仕事とする彼女は職業犯罪者。肩書きこそ国連所属のシークレットフォースだが、中身は大量殺人者でしかない。

「レンガ。あなたはこれをどう思う？
この世界、いま何が正しく、何が間違っているのか……私はもう、考えが追いつかない」

「誰も望まないことを、果てしない質疑のひとつを強制するように実現する。そんな彼ら（あいつ）が憎い。
私はそんな奴らから私の生徒を守りたかった」

日本の平和に慣れたせいだと言い聞かせつつ、蓮雅は答えた。
戦争を望まない国に、戦争を持ち込む。
それに慣れていない国民は混乱するだけだ。
現実としてそれを捉えない者も出てくるだろう。

その結果そのものに実感がわかなくとも、そうなることはある程度予測できる。
ならば何故、分かっていながら戦争を持ち込むのか。

「早まらないでレンガ。
彼らの中には私のように、都合があって参加している“人間”もいる」

「ＳＲは何人？」

「私を含めて３０人。
そのうち鬼のＳＲが５人、ゴーストのＳＲが２人、絶対世界が１人……問題は他のメンバーだ。
定義で言うなら残りのＳＲ、２２人は四凶に分類される」

だが、四凶全員が自分のＳＲという力に気付いているわけではない。
目覚めたてや無自覚の中にしっかりと力を把握している者が混じっている、と言った方が正確であった。
経験の浅い者を盾に本格的な四凶が場を仕切る。
現場でそれを把握している者は少ない。誰が利用し、誰に利用されているのか。それすらも理解できずに犯行に参加しているのだ。
分かっていて殺人に参加する者もいれば、騙されて参加する者、何も聞かず本能にのみ従い戦う者。

「四凶って、大多数が忌むっていう、あれ？」

「悪や不幸につながる４大要素にして、人の本性の影。
闘争、食欲、孤独、反発。
だから、彼らに慈悲はあっても、罪悪感はない。いや、むしろそれ故に四凶と言った方が正確か」

ビアンカの言葉の後に響く銃声。
２人の視界に、人質となった教師の１人が射殺された瞬間が飛び込む。
悲鳴と、それを黙らせるための銃声。

誤射と偽り、新たに1人射殺する。

「芹真さんは、こうならないために協会と国連が秘密裏に手を組んだと言っていたけど……
これは、未然に防げなかったの？」

「ええ。事前に防止しようと試みて、失敗に終わった。
それどころか、その失敗を逆手に取られ、上層部は協会との手を切ることを決定し、私にこの任務を……」

「どうして？」

「上は偽の情報に踊らされて取り返しの付かない失敗をし、自棄になっている。
そんな状況下で内部に四凶がいることが発覚した」

「脅迫でもあったの？」

「わからない……けど、その可能性は高い」

俯くビアンカ。

「なるほど、やっぱり失敗したのか～」

その背後から声が発せられる。
2人は面目無しと項垂れ――刹那の間を置き――我に返ってそこ

にいた男に気付く。

（敵――！？）

（気付かれたか！）

2人が振り返って銃口を向けるのと同時、男は名乗り始めた。

「待て待て。敵じゃない。

俺はオウル。オウル・バースヤードだ。

君達に頼みたいことがある。是非手伝ってほしいんだ」

微笑みながら男は2人に銃を渡しながら自分が敵じゃないことを説明し、証明してみせ、僅かながらも2人から警戒心を取り除かせた。

「他はすでに配置に付いた」

2人はそれぞれ得物を手に取り、男が話す作戦に参加していた。

なんとなく手渡された銃がそれぞれ得意な得物だったことを認識した時、蓮雅は男に対して畏怖を、ビアンカは想像以上の支配能力に驚きを隠すので精一杯だった。

「さて、これで反撃の準備は整った」

不敵な笑みが蓮雅とビアンカに確信めいたものを感じさせる。
自信に溢れた目。
疑いたくなる言動の中に隠された確信。
全てを話していないはずの男をどうしてか、2人は信じることが出来た。

「トキ（しゅやく）が飛び出すまで待機だ。
それがスタートの合図だからな」

第38話－CODE：ERROR　2708－（後書き）

――2分前

「いいか、トキ。
それからリデアとケイノス。絶対に成功する作戦を教えてやるから聞き逃すなよ？」

『はい』
「わかっている！」

「よし。
まずはトキ。
君がこの作戦の主役になる。
集められた人質の頭上から敵に近づく。危険だがやれるな？」

「はい。敵に近づいたら速攻で倒せば――？」

「指定がある。
ここから見えるかどうかわからないが、銀色の角を持った鬼と、金色の角を持った鬼の男女ペアがいるんだが、こいつらには手を出すな」

「わかった」

「この2人は哭き鬼の子に倒してもらう」

「じゃあ、先に藍を助ければいいんだな？」

「そうだな。先に言っておくが、敵を倒すより先に、全員の銃器を破壊しろ。そうすれば反撃もたやすい」

「分か……りました」

作戦通達に伴い、トキは救出を手伝って貰っていることを思い出し、言葉遣いを変えた。

協力者に馴れ馴れしい話し方では人として疑われるだろう。礼儀を知らない愚か者と思われかねない。

「次にリデア。

君は風を使って、トキを村の上空まで運べ。

君自身は村の西側にある山の斜面で待機。トキが戦闘を始めてから、ゆっくりと5カウント数えろ。そうしてからトキの援護に向かえ」

「5カウント？

ダウンか、アップか？」

「カウントはダウンの方がいいな。

君への注文は、いますぐ風を吹かせてもらいたいことだ。ただし、いきなり突風、ってのはやめてくれ。徐々に風を強くしていってくれ」

「何故？」

「この作戦はトキの奇襲に賭かっている。より相手にトキの存在がばれないようにするためにも、君の風が必要なんだ」

「なるほど。そういうことなら今すぐにでも始めよう！」

無駄に声を張り上げたリデアは村の方へと体を向け、大気の操作を始める。

「さて、次はケイノスだ。
君は、君が最も得意とする空間魔術のスライドで人質を一気に移動させてもらいたい」

「え？
待ってください。移動するにしても、彼らの人数を見てください。２００人近くいるんですよ？
僕１人では厳しすぎます」

「大丈夫。
厳しいだけで、不可能ではないんだろ？
それにさ、そうやって言い逃れていたらまた嫌な気分になるぞ？」

「ぅ……出来なくは……
出来ますけど、そのためには四凶たちの囲みを一部でも解かなければ実行できないんですが？」

「俺がその囲みを破る」

「と、トキは言っているがどうする？」

「わかりました。それならやりましょう。
ただし、そうなるとトキの負担が増す気がするのですが？」

肯定、肯定。
会長もリデアもその意見に頷く。
トキ本人にその自覚はないが、メイトスもその意見に肯定し、負担が増加することを遅れて自覚した。

「まぁ、その辺は近くにいる狙撃手2人と学生2人に何とかさせるさ」

たったいま思いついた案を口にし、会長は足元のバックに手を伸ばす。

「さて、後は自由四季とメイトスだ」

全員の配置説明が終わると、会長は学生2人組みの場所を目指して移動を始め、その2人との接触が終わると、次に狙撃合戦をしている女性2人のいる場所を目指した。

反撃の準備は今、整ったのだ。

第３９話－反撃のＳＲ連合！－（前書き）

風向きが、再び変わる。

しかし、それが緑を揺らすわけでも、熱を冷ますわけでもなく、ただ流れとしてその場に吹きすさぶのみ。

理解しない。
自重はない。

その流れが何を動かし、何を見せ、何を変えるのか、それに自覚がなければその機会もない。

ただ、流れとして吹き抜ける。

超えられない、抜けられない壁が待ち受けているとも知らずに。

第３９話－反撃のＳＲ連合！－

耳が痛い。

銃声が止まないのは、目の前の現実（これ）が夢だから？

炎が触れる。

暑い……いや、熱い。

何が触れたのかわからない。

ただ、今まで味わったことのない高熱。

のぼせた時や風邪を引いた時の高熱とも違う、激しい痛みを伴った熱。

熱い。

何が、と聞かれても答えることができない。

なぜなら自分でもどこが熱くて、どこが痛いのか、全然わからない。

足が熱いのか、手が痛いのか。

燃えているのは体か、焼けているのは頭か。

（助けて……信弥くん）

自分の何かが燃えている。

それだけを理解し、３年３組の女子――秋森智明（あきもりちあき）は傾いた景色を見失わないようにと、途切れそうな意識を必死に保っていた。

耳を打つような激しい銃声も、いつしか遠くにしか聞こえなくなり、鮮明に色を捉えていた眼も、輪郭の取得が難しくなっている。

いま寝てしまったらどうなるのかと考えて恐怖し、助けを待った。
誰も助けることのできない、誰も助けにこれない状況の中。
ただ一心に願い続けた。

（助けて……信弥くん……）

緑の上に横たわる彼女を見つけた襲撃者の男がその光景に首を傾げた。
外傷は一切ない。
それなのに体は震えている。が、痙攣しているわけではない。
季節的に寒いわけでもない。
顔を覗き込んで見ても、気絶しているわけではない。
わずかだが口が動いていた。
耳を近づけると何かが聞こえる。
何かを呟いているが、聞き取ることができない。

（パニックで頭がイっちまったのか？）

優越感に浸りながら体全体を見回す。
発育は未熟ながらも、肌はお世辞抜きに珠のようで、肉付き具合も男の好みだった。良き戦利品の発見に心が躍る。
どちらがより優位な立場にいるのかわからない相手ではないと確信し、その女生徒に手を伸した瞬間だった。

「あん？」

伸ばした手が、男に混乱をもたらす要因となる。
混乱は痛覚をも吹き飛ばし、数秒、消えてなくなった手首より先を見つめた。
銃火交わる戦場で、数秒の混乱を経て男が激痛に叫ぶ。
焼滅が続く。
ただ、本人がその消滅が何によって続いているのか理解できない。
男の背後で追い込み猟が終わりに近づこうとしていた時のことだった。
消滅は手首から腕を伝い、肩を消し、皮膚を焼きながら身体全体へと伝播する。
どこが燃えているのか、どこが痛いのか。
自らの感覚で異変を認識することができない。
焼滅が骨を蝕み、筋組織や細胞を焼き尽くし、電気信号までもを喰らい始める。

猟が終わる頃、男は誰の目に止まることもなく、体の全てを失っていた。

４分前。

目の前で無差別殺人が行われているにも関わらず、キリングマシーンの二つ名で呼ばれる男子生徒は異常と言えるほどに冷めていた。
怒り故の冷静か。　落胆故の冷静か。
冷静故に誰かの為に戦えている事実に気付くことなく、またそれ

を考えている時間など見つけられるはずもなく、彼は戦い続けた。
それが彼女を護る事になるのだと信じ、3年3組男子――岩井信弥は拳を振るう。
クラスメイトとの連携により、相手の銃器を殴り飛ばし、挑発と罵倒で逆撫でてこちらのペースに乗せる。
相手の銃器を奪うことはできなかったが、お互い素手で向き合うという状況にまで持ち込めた。

「テメェッ！」

逆上した相手が追撃と猛攻を仕掛けてくる。
予備動作が大きすぎるために攻撃の種類や軌道を予測することは簡単だったが、スピードはあった。細身のためもあって、パワーはないが速度とナイフが足りない殺傷力を充分に補っていた。

「岩井！」
「逃げろ！」

他2人のクラスメイト――隅田幸平と、函音カイの後姿を追い、岩井を含めた3人は資材小屋の中へと駆け込んだ。

「逃がすかぁ！」

男が追ってくる。銃も拾わず、自分に攻撃を加えた岩井を目指し

て一直線に向かって。
ナイフと拳で以って勝負を決めようという男の考えを哂い、距離を取る。
銃弾が飛び交う外から手近な建物の中へと逃げ込む。

「よし！追ってきた！」

「扉を閉め――！」

ガラス戸越しに男が迫り来る様子を冷静に分析する。
土ぼこりのたまった薄暗い小屋の中で、岩井ら3人は出入り口から距離を置き、攻撃に備えた。

駆け込んだ3人の後を追って、男がガラス扉を打ち砕いて小屋の中へと入ってくる。
男がガラスを突き破るのと同時、隅田は適当に置いてあった角材を顔面狙って投擲した。男はそれを紙一重で躱し、岩井目指して突っ込む。
カウンター。
しかし、男はそれをも躱し、逆に拳打を打ち込んでくる。

が、不安定な体勢から放たれた打撃は、特筆するような威力を有してなどいない。軸足、体の向き、打ちこむ角度もタイミングも、全てが総合してそんな結果を生み出した。致命的と言っていいほどの威力不足。
ボディブローの衝撃に耐えながら反撃の体勢を整える。
相手は逆上すると周りが見えなくなるタイプの人間らしい。現に背後から迫ったカイと隅田に気付いていない。外から差し込む陽光

が生む影に気付いてもおかしくはない状況だった。それにも関わらず、男の目は自分しか見ていないことが分かるのだ。

カイが背後から男の両脇を抱えて動きを止める。
直後、新たな角材を見つけた隅田がフルスイングで男の左わき腹を殴打。痛みに男の顔が歪んだところに追撃の一撃を喰らわせた。

岩井の全力の一撃。
親友や担任、智明たちから止められていた本気の拳撃。
それは男と、男を抑えているカイを一緒に後方へと押しやってしまうほどの威力を有していた。
男の肋骨を折る感覚と、久々の本気に伴う自らの拳への衝撃を痛感する。
岩井はカイの生存を確かめ、男の気絶を確認し、

「こいつ、日本人じゃん」

「意味がわかんねぇ！
なんで俺達の学校が襲われなきゃなんねぇんだよ!?」

「そんなことより、コイツを縛っておこう。それ……ほら、拳銃だろ？
それで皆を助けれるんじゃないか？」

岩井が男のサイドホルスターに手を伸ばした時、割れ落ちたガラスが軋むカイが反応した。カイに続いて隅田、岩井とその音の鳴った方へと顔を向け、そこに新たな敵が立っていることを確認する。
銀髪の男。

その相手は銃器を一切持たず、代わりに厳つい金棒を持った大きな体躯の男。そいつの持つ金棒が全員に童話に出てくる鬼を連想させた。

「へぇ、そいつも一応ＳＲなんだけど……よく素手で倒せたな。誰がやった？」

余裕綽々としたその表情が癪に障り、隅田は角材を投げつけた。が、苦もなくそれは掴みとめられ、握り潰され捨てられる。

「テメェもすぐにそいつみたいになるんだ。妙なこと言ってんじゃねぇよ」

「無駄にしゃべるなよ、コウヘイ。とっとと終わらせよう」

隅田とカイの会話に男は笑う。

何がおかしいのか分からない。理解する気など毛頭ないし、分かりたくもない。

「そこまで言われちゃ逆に色んなこと言いたくなるだろうが。それとも、誘導してんのか？」

男が言うのと同時にカイと隅田は物を投げつけていた。

植木鉢と鎌。
そのどれもが止められると、今度は肥料の小袋を投げる。

「俺は鬼のＳＲでな――」

あらゆるものが男の片手に握られた金棒で叩き落とされていく。
見た目に反して軽々と振られる金棒は脅威以外の何者でもない。
カイは背後に回り込めるのか懸念しはじめた。

「ちょっとは名のある鬼なんだぜ？
本当は先祖が有名ってだけなんだが、いまは俺がその名前を継いでいる」

隅田が投擲の予備動作に移ったところを叩かれた。
スローイングの一歩手前で金的と顎への蹴りを食らう。止めは後頭部への回し蹴り。
隅田が顔面から地面に崩れ落ちる。

「白鬼のＳＲ――」

カイが背後から新たに見つけた武器で攻め掛かる。
振り下ろされるスコップを見向きもせずに躱し、金属の先端を足蹴にして止め、金棒を振って破壊する。更に柄を分断され、反動で体勢を崩したカイの左手を金棒が襲った。

骨を砕き、肉を貫く。
悲鳴があがるよりも早く、今度は右手を潰すために金棒が振られる。左手とは違い、右手は勢いよく打たれ、手の甲から手首に掛けて骨にヒビが入って肉に刺さり、指はあらぬ方向へと折れ曲がった。
止めは前蹴り。
鳩尾にノーモーションで蹴りを入れられたカイの体は、小屋の壁を突き破って外へと飛び出す。地面から何メートルの高さを飛ばされているのかも理解できずに意識を失う。
予想だにしない速度、衝撃。
鮮明に予感できてしまう死。
背中から地面に叩きつけられ、それでもカイは辛うじて生きてはいた。

「銀角っつぅんだ」

金棒が振られる。
小屋の中に取り残された岩井は攻撃を躱し続け、銀角と名乗った男の足のつま先を思い切り踏みつける反撃に出る。
しかし、男は止まらない。
金棒を振る速度を上げ、更に蹴りや投げへと派生する掴み技も繰り出す。

金棒を持つ手を打ち、武装解除を狙うが男は全くひるまない。
ダメージを感じさせない。

「なぁお前、ＳＲか？」

「は――ッ！？」

わけの分からない質問に耳を貸したことが原因となり、岩井はペースを崩した。

１発の蹴りが入る。

辛うじて防いだものの、実際に食らってその馬鹿げた威力に冷や汗が噴出した。

まともに喰らったのなら一撃で内臓を破られるであろう高威力。

カイが心配になり、しかし、いまこの状況下でもっとも死に近いのが自分かもしれないと考え、岩井は男に集中する。集中こそすれど、ペースを失った岩井は防戦一方となり、

「ＳＲなら本気だせよ。そうしたら俺も本気で戦ってやるからさ」

絶望的な実力の差に戦意を削がれた一瞬、銀角の両手が岩井の胸に当てられる。

打撃ではない。

投げ技でもない。

ただ常人離れした腕力による、押飛ばし（プッシュ）。

それだけで岩井の体はカイ同様に小屋から飛び出した。

天上を突き破り、陽光に晒され、新緑と惨劇に囲まれた景色の中に岩井は溶け込む。

視界が濡れる。

「なんだ。やっぱただの人間か」

池の中に落ちた岩井を眺め、銀角は金棒を肩に担いで池へと足を運んだ。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第３９話－

－反撃のＳＲ連合！－

最初の質問は“あなたは誰か”などではなかった。
初対面であるにも関わらずに。
正確には顔と名前こそ写真で知っていたものの、実際に会うのは

今日が始めてだったのである。

「何故、協会長のあなたがここに？」

思惑の外からやってきた存在に疑問が絶えない。
動かないと思っていた人物が目の前まで足を運んできているのだ。
誰が協会長の直接干渉を予想できただろうか。

ビアンカの質問に会長は笑顔で答える。彼女の慌てぶりが予想通りで愉快だったのだ。

「どうしてかと聞かれても、迷える者を導くためというしか答えは用意していない。
なぁ、ここで眺めていてもあそこにいる人々を救うことはできない。それは分かっているよな？」
「……もちろん」
「わかっている」

「良し良し。結構結構。
そこで質問だ。２人とも狙撃は得意か？」

「得意よ」
「３００メートル以内なら」

蓮雅、ビアンカと続けて答え、会長はその回答に大きく頷く。

「じゃあ、頼まれてくれないか？」

「あなたが信頼に足る人物ならね」

「私の上司は協会と戦線を共にしないと怒り狂っていたわ」

男の笑みが増す。

「俺が信頼できるかできないか。それは生徒たちを救った後に判断してくれ。

それからキラー。君の全ては君の上司のモノなのか？　君は感じているはずだ。この任務でどれだけ今までの自分を裏切り、傷つけることになるか。理解しているはずだ。自分がしていることに付きまとう背徳と自責。それがどんなに今後の任務で支障となるのか」

初見の男に言われ、２人は顔を見合わせて頷いた。

「何を手伝えばいい？」

「ただのスナイピングだ。

条件は時間だけ」

背中に背負ったゴルフケースを降ろした会長は、中身を取り出して２人に手渡す。

「標的にこれといった指定はない。
ただ、狙撃を行う時間だけを指定したい」

「理由は？」

「無駄撃ちをさせないためさ。
その結果、より多くの人間を救い出せるんだからな」

「保障は？」

「言ったろ。
救った後に判断してくれ」

渡された狙撃銃：Ｈ＆ａｍｐ；Ｋ　ＳＬ９を操作しながらビアンカは質問を始めた。
蓮雅も支給された狙撃銃：ＳＲ－２５のマガジンを確認し、チャンバーに初弾を装填する。取り付けられたスコープの倍率を確認し、ストックを肩に当てて感触を把握する。

「何人救える予定か教えて欲しい」

「悪いが時間だ。俺は最終調整に入る。
これから指定時間を伝えるから聞き逃すなよ」

狙撃の準備が整ったところでバースヤードは時間を伝え、最後の仕上げに入るために２人の狙撃場所を離れた。

白州唯高校3年生と付き添いの教師、それから村人らは一箇所に集められていた。周りには凶器を持った犯罪者達。

ミツルとマイコは並んで不安に陥った生徒をなだめようとし、それでもこの状況をどうにか切り抜けようと可能性を探り、考えを巡らせ、好機を待っていた。

だが、現実にはこちらの負傷者は多く、武器といえる物は何一つ手中にない。また反撃はすでに失敗に終わっているため、2度目のチャンスも潰えていた。相手はこちらの戦力を把握して迂闊に近づこうとしない。腕のたつ者をあらかじめ負傷させ、或いは早急に始末しようと銃を突きつけて行動の自由を殺していた。

「……委員長、ちょっといいか？

玄路（くろみち）と光陽（みつひろ）、それからカンカンと渡良瀬（わたらせ）の、その、死亡を確認した……」

北島幸哉：コウボウと愛称で呼ばれているクラスメイトが悲しい報せを伝えた。

クラスメイトに死者が出ていないことを確認してくれと頼んだのはミツル自身だったが、いざその事実を耳にすると受け入れたくないものがあった。しかし、コウボウはこれだけの混乱のなかを必死に探し回って伝えてくれた。自らが撃たれる危険も顧みずに。それを依頼した自分が拒んでは、コウボウと殺されたクラスメイトと達に申し訳がたたない。

あらゆる懸念がミツルの脳裏をよぎる。
目の前の犯罪者達は騒いだ者から殺すと宣言していた。ここで揉め事を誘発してしまっては自殺も同然。
つまり、残されている選択肢は事実を受け入れることだけである。
怒りをぶつけることも、自分の不甲斐なさを悔やむ余裕はない。

「そうか……そうかよ、ちくしょう……」

負傷した左拳に痛みが走る。
だが、負傷（からだ）は後悔（こころ）と比べて軽症。
現実に無差別テロが起こっているのだ。訓練とは違う。次というモノはない。今生きていることが何よりも重要で、これを無駄にするわけにはいかない。
怒り半分に頭を回す。
いまは静かに嵐をやり過ごすしかない。例え未来が無かろうと、生きている限りどんなことも実現できる。死にさえしなければ、次のチャンスは必ずやって来る。

「き、君さぁち、ちょっと話がしたいんだ。こっ、こっちに来なよ」

敵の1人がクラスメイトの1人を誘導する。
向けられた銃口に抵抗するでもなく、彼女は静かに立ち上がり、男の後をついて行く。

（崎島……）

（恵理さん！）

「……委員長、トキとか智明を見かけなかったか？」

「いや。
見つからないのか？」

小声の会話を繰り返す2人の間に銀色の刃が差す。
2人の視線は自然とそれを差し出した人物に向き、そこに1人の犯罪者の顔を見る。
無表情。
眼帯をした男は優しく警告を始めた。それと同時に表情に色が付き始める。

「万に一つもお前達に勝ち目はないんだ。
それともお友達の姿が見つからないのか、えぇ？」

「……」

男からため息が漏れる。
ミツルとマイコは、他の犯罪者と何かが違うこの男こそ、反攻の鍵になりうると考えて顔を記憶した。

「何か言えよ。せっかく集団の中に入ってきたんだからさ、俺との会話は俺が許すんだから遠慮せずに言いたいこといいまくれよ。他の奴に文句は言わせないからさ」

「じゃあ、まず善人ぶるのをやめてくれねぇ？」

「北島！」

年上嫌悪癖のコウボウが真っ先に喧嘩口調で発言する。
表裏委員長の予想を裏切り、相手の男は笑顔でコウボウの発言を歓迎した。
本人の言葉通り、許可されたのなら発言しても撃たれたり、斬りつけられることがないとわかった。僅かな安心が訪れる。

「その調子だ。
まず自己紹介だ。俺は……あ～となぁ、ホットドック。
ホットドックだ。よろしくな」

「ぁん？
じゃあ、俺はポテトサラダだ、畜生」

無駄な会話が続く。

お兄さんよぉ、なぜ笑っていられ。なぜここを襲う。友達を探したいからお前のお友達に話をつけやがれ。つぅかさ、どけよ。
お前さ威勢がいいな。素晴らしい覚悟だ。お前の探している友達ってのはさ――

「色世トキのことか？」

「は……なんでトキを知ってんだ？」

男が眼帯を外すと、コウボウはそいつがオッドアイであることに気付く。

白と金。

次の瞬間、白い目は緑色へと変色し、その変化に伴い顔面の形まで変化する。

「顔が……！」

「どうしてトキって名前を知っているんだ」

「だって俺達、四凶だぜ？」

聞きなれない言葉に一様の疑問が浮かぶ。

しきょう。

司教？

四強？

「“悪”というジャンルに区別される行為と原因と存在のことさ。

ついさっきまでこの村で行われたこと。

隣国……って、島国か。まぁ、同じアジア圏内で行われていること。

正確には、いま全世界で行われていること。

君達にそれを知覚することはできないけど、俺にはできるんだよ」

『……？』

「まぁ、早い話、俺達は全ての個人が持つ黒いイメージを具現化できるだけの力を持った厄介ってことさ。
“黒き物事の始まり”
ついでに言っておく。俺やトキ、それからゴツい銃持った変態どももそうだ。四凶さ」

「つまり、トキはお前らとグルってことか……？」

「お前は馬鹿なんだな」

笑う男。
殴りかかろうとするコウボウと、それを必死で抑えるマイコを見て更に笑顔は歪む。顔面も歪む。変態していくその形にミツルは吐き気を覚えた。

「周りの奴らも聞いているんだろ？
それなら俺の方に注目な。あは、おもしれ。
こん中に色世トキはいるかぁ？」

銃声が耳朶を打つ。
短い悲鳴と殺意を剥き出しにした怒声が上がり、男は皆の意識を誘導した。

「おいおい、何勝手に質問してんだ？」

「あぁ、俺のお気に入りが友達探しているって言うからよ、こん中にいないか確かめてんだよ。
死んでたらつまんねぇだろ？
逆に、探し出してやってさ、こいつらの目の前で殺したら面白くねぇ？」

僅かな希望が2人の中で同時に潰える。
仲間と話している間も男は隙がない。いつでもこちらを絶命に至らしめる手段を隠し持っていると、本能がそう警告した。
それに気付いてもらうように男はそうしていた。
殺気を放ち、下手に殺されないように生徒を威圧し、仲間とは話をつける。

「ふん……まぁ、それも悪くないが、そいつが死んでいたらどうするつもりだ？」

「そうだなぁ～、誰か一緒にお散歩しないか？
お手々は自由じゃないけどさ」

手錠を取り出し、刃の峰を肩に置く。
笑顔で選択を始める男と、睨みつけるコウボウの視線が交差し、選定は終わる。
散歩の相手はものの数秒で決まった。

この村とその上空一帯を感覚的支配下に置き、自分の存在を村人や生徒、四凶たちに悟られないように処理を施す。
バースヤードは上空で待機するトキを目指した。
リデアの風とケイノスの空間魔術が作り出した不可視の足場に佇むトキは、静かに真下の状況を眺めていた。

一体何を考えているのか。
この世界で支配しきれない数少ないＳＲのトキには、直接それを聞くしか知る術がない。

「これが最も多くの人間を救い出す方法だ」

下ばかりを見ていたトキは軽く驚き、面と面が合ってから返す言葉を捜し始める。
微笑みかけ、バースヤードは説明を続けた。

「そう……ですか」

「すまんな。
すでに３０人前後の犠牲者が出ているってのに、最後の１人が殺されるまで待たなくちゃいけないってのは。
そんなのが反撃開始の“合図”だってんだからな」

風が吹きつける。

黙り込むトキとバースヤード。
時間が来るまでの僅かな時間、バースヤードはトキの纏う空気からトキの持つＳＲを断定しようと小規模な支配を発動した。
人が纏う空気は、そのまま当人の性格や経歴を物語る。
だが、支配がトキに届かない。

「どうして最後の１人が死ななくちゃいけないのか考えたんですけど」

「どう考えたのか、是非とも聞かせて欲しいな」

「奴らが油断しきるから、なのかなって……」

会長が笑う。

不覚にもトキは、その反応で落ち着ける自分に気付いた。足下では同じ学校、同じ年・近い年の人が殺されているのに、不謹慎にももらい笑みを浮かべてしまった。
絶対に成功すると信じていたい。
もし自分が失敗したら、皆殺しにされる可能性だって考えられなくはない。
不安を隠そうと必死になっている自分。それでも失敗のイメージが浮かばない現実。

「やることはわかっているな？
時間を武器にするＳＲ、色世トキ」

「わかっている……まずは相手の武器を破壊してから、包囲の解く」

役目を再認しながら両腕に溜めた時間を凝縮していく。

マスターピースから気付かぬうちに逆流していた時間、会長のアウトドア用品から奪った時間、リデアの流す空気から集めた時間。

その中に自分の時間を僅かに流して混合させる。コントンに敗れて以来、地道に続けてきた訓練の中、自力で発見に至った時間の使い方がこれだった。

ゼロから新しい物を作り出す時間。

時間が腕を伝い、両手に集中し、輪郭を構築し始める。

空間に重力を発生し、存在を得、物質として価値を生み出す。

（なるほど。外（せかい）の時間と内（おのれ）の時間の複合か。

異なる流れの2つの時間を組み合わせて新しく時間を創り出すわけだな。

しかしトキ……それはすでに錬金術の域だ）

トキが頭に思い浮かべたのは藍、ハンズ、それから何度も殺された過激な訓練。

時間を両手に集約させ、物を創造しながら彼らを思い出す。藍は理壊双焔破界を、ハンズは銃器をそれぞれ生み出していた。

どちらも媒体を介しての武具現装。

いま最も必要な武器が何なのか、この状況に適した武器が何なのか。

残念なことに自分に判断するだけの経験は伴っていない。

だから、自分が最も理解している武器を創り出すのだ。

（双剣か、って、おま――！！）

出来上がった剣の柄を取る。しっくりと落ち着く握り心地の武器。
これでどれだけの学友を救えるかわからない。だが、やらなくてはならない。
剣に誓う。
全力を尽くして敵を殲滅するのでなく、全霊を掛けて生の道を切り開くと。
創造の後に剣を確かめるトキの肩を、会長の手が叩く。

「なぁトキ。お前の創造能力は過去に一度でも見た物を具現化するというものか？
もしそうだとしたら、その剣をどこで見たか教えてくれ。是非っとも！」

「え？
思いつくままにイメージしただけだけど……何か問題が――？」

「その剣、二振りのことを知っているか？」

言われ、陽光を反射する二振りの剣を眺める。
少なくとも自分よりも会長はこの剣について何か知っていることは明らかだった。

「……まぁ、いまはそれは置いておくとしようか。邪念が入っては失敗の可能性が高まるだけだもんな。
ところで、トキはその武器が得意なのか？」

「訓練の時に使ってみて、一番しっくりきたスタイルだったからコレにした」

「以前は銃を使っていたらしいが、そっちの方はどうなんだ？
別に必ず使えと言っているわけじゃないんだが」

「……銃は一旦やめることにしました」

「そうか。
ひとつ、人生の先輩してアドバイスするが、聞く余裕はあるか？」

頷き、真下の異変を見守る。
上空からでは見慣れた友人さえ見つけられない。
眼下でどんな会話が繰り広げられているのか、想像すらつかない。

「俺と散歩しようか」

真下で何が起こっているのかトキには理解できない。したくない。
自分が探されていることさえ知らず、ただ状況の行方を見守るしかない。
今にも殺されそうなその生徒がコウボウであることにも当然、気

付けなかった。

「俺から始末する気だろ……」

「そのトキって奴を探してきてから考えるよ。
真っ先に殺すかどうかは別な話だが――」

「その時は俺がそのガキを殺してやるから安心しな」

横から現れた白鬼の言葉に頷き、顔を別人のものに変えた男はコウボウの手を引く。

認識する世界の違いが生んだ悲劇だった。
トキの知った世界。
コウボウたちが未だ知らない世界。

「ふざけんなテメェ！」

散歩が始まろうとする。
連行されるように集団から選び抜かれたコウボウ。
それを引き止めるかのように親友の友樹が飛び出し、顔を変形した男に殴りかかった。

（動くな……殺される！）

今すぐ飛び出すことが出来ても、未来的にそれが多くの人命を救助することには繋がらない。
死機。
それが今だと会長は言う。
更に、最も多くの人間を救い出すタイミングは一瞬だけしか訪れないとも言った。そのタイミングを掴むことができればクラスメイトのほとんどは助かるというのだ。

「早死にしてぇ奴がいるみたいだな！」

殴りかかった生徒の髪を見、その生徒が転んだところでトキは気付く。友樹であったことに。
動揺して友樹最大の特徴であるタイガーヘッドに気付けず、誰も殺されないことばかりを願い、忘れていた。
横では会長がいまにも合図をくださんばかりに顔を歪め、片腕を曲げて掲げている。
時は近い。

「やめなよ大橋！」

銃を突きつけられて尚、殴りかかろうとする友樹の耳元で女生徒が呼びかけた。
近いはずのタイミングが待ち遠しい。
すかさず女生徒に銃口が向く。
会長を一瞬だけ盗み見て、合図が出されないものかと焦った。

「おとなしくしていよ。ねっ？」

友樹自身、誰に止められたのか自覚したのはその女生徒に１発殴られてからだった。

同じクラスの和霞瀬癒桜。

一度も話したことのない彼女の大胆行動に友樹は度肝を抜かれ、喧嘩っ早い自分に対して平手を入れるほどの勇気を持っている一面に驚ろかされた。見守る学友たちも同様。

クラスメイトのほとんどが呆気に取られる中、マイコは彼女を引き戻そうとした。

（君は誰だ？）

友樹が銃を突きつけられ、その代わりとなるように誰かが前へと出た。

女生徒。

撃たれようとしているのは誰か。

クラスメイトか、他クラスの生徒か。

教師ではない。制服だ。

「トキ。もし、自分の力が自分で測りきれないほどの代物なら――未知数ならば、自分の行動に全力で願いを乗せろ」

「願い……？」

「それを忘れるな。
何を願っての行動か。例え失敗に終わろうとも、自分の志や意思が損なわれるわけじゃない。
信念を持って負を貫け」

「すいません……何を言っているのか、わか――」

「思うがままに動き、走り、戦え。
相手は敵と呼べる誰かじゃない。
目の前にある、自分が最も認めたくない現実。
弱い自分でもいいし、自分がすべきだと認識する現実でもいい。
戦い続けろ」

四凶たちが声高らかに笑う。
学生の言葉が可笑しいのか、行動が馬鹿らしかったのか、どうして笑っているのか理解できない。

理解する必要などあるのか？

銃声。
乾いた小さな爆発が、わずかな殺意と共に響き渡る。

そんな音を人生で聞くことはこれ以上ないだろう。
無いことを、心から願っていた。

「敵の作戦――“ＥＲＲＯＲ　２７０８”は始まったばかりだが、ここを抑えることさえできれば」

拳銃が女生徒に向き、突き付けられる。
威嚇。
彼女が会長の言う合図――最後の犠牲者だろう。

（すまない……すまない。
俺は、今すぐ助けられるのに……）

銃声が上がるまで時間はかからない。
死を覚悟する。
現実を認める。

「下手に動いたら殺すと言ったろ？」

銃口を突きつけられる。
銃口が突きつけられる。

次の、その――瞬間

「生きなきゃ駄目だよ、大橋」

凶弾が眉間を撃ち抜くいた。
同時に震えるトキの背中に会長の合図が与えられる。

反撃の始まりであった。

恐怖と絶望の渦が取り巻く空間を裂くようにトキは奇襲を仕掛け、それを合図に他のＳＲや援護者たちも一斉に動き出す。

トキはまず空中で落下しながら双剣を投げつける。二振りの剣は拳銃を握った手をさげようとする男の腕を断った。

この段階でトキを敵と認識できた四凶はいない。

着地と同時にタイムリーダーを発動し片腕を断った男へと肉薄する。レンジ内に目標をおさめ、右手を振るう。

停止しかけた世界で反撃の恐れはない。

右手が敵四凶に残された片腕に触れた瞬間に、時間の掠奪を始める。

服飾と肉体から瞬く間に存在（じかん）を奪い、戦闘力を損なわせる。男が持つあらゆる凶器を両手で時間を奪って破壊。

時間の流れが正常化に向けて動き出す最中、双剣を拾って男に止めを刺す。

トキが低速世界から戻ってきた時、初めて四凶達は（トキ）という存在を認識した。

「だっ――！？」

疑問の声が上がるよりも早く、トキは人質となったクラスメイト達の前で二人目の四凶から時間を奪った。

この場を支配する者達の無力化。

それが自分に出来る救出の可能性であり、自分が最も望む結末への条件。それに気づいたトキは容赦ない攻撃を繰り出していた。

（ボルトみたいに……）

光の魔女のように不可思議で、強力な攻撃。
相手がこちらの手の内を理解する前に絶命に至るような、攻撃力。
混乱し、戸惑うような幻惑させる力。

（芹真さんみたいに……！）

早く、速く。
一度見た芹真の動きは高速でありながらも正確性を欠かさない。
迅速でありながら正確無比。
人質がやられないように、やられないうちに、四凶だけを狙って剣を振るい、時間を奪う。

（藍みたいに！）

流れるように距離を詰めて武器を破壊する。
無駄なく、それでいて全てが致命（クリティカル）。
凶器の全てを打ち砕き、切り落とす。破壊できない得物は時間を奪い、右手の力――部分的存在の消去でもって無力化する。

タイムリーダーの発動と解除を小刻みに繰り返し、トキの体感時間で1分、正常時間で0．8秒――四凶たちは一切の武装と、半分

近い人数を失った。

「誰だお前――っ！？」

「俺の銃が！」

「ばかな……」

戸惑う四凶、命失う四凶。

それぞれの反応の中、混乱を極めたのは人質となったクラスメイト達だった。

自分達の知った人間が、今まで見せたことも無い動きで支配者達を圧倒している。

「トキ……お前、か？」

ざわめく人間。

怒り立てる四凶。

友樹、コウボウが半ば放心気味に質問する。

敵味方を問わずに視線を集めながらもトキは落ち着いていた。

作戦は始まっている。

些細なミスも許されない。

「トキなのか！？」

信じがたい光景が彼らの脳裏に刻まれようとした時、同時にそれは降り出した。
四凶も村人も、学校関係者も、誰もがトキに焦点を合わせたその瞬間を狙って彼らは作戦のメインプロセスを実行したのである。

「え――なんだ、コレ？」

（ピンク。花びら……じゃない！）

「これは、雪か？」

桜雪が目を引く。
全員の視線がトキから上空へと移り、その隙をついて数人の四凶を葬り去る。
新緑に紛れて桜色の雪を操作していたＭｒ．シーズンは桜雪を止め、真夏のような暖かい風を流し込み始めた。それに呼応して特級風司が頭上に流れてきた雲を流し退ける。
温風と陽光が村を吹き抜け、また、差し込んだ。

「やれ、忘却妖精（たかじょう）」

意識が雪に集まった一瞬、煌きがＳＲ以外の者全ての脳裏に刻まれる。陽光を反射し、燦とした光の中に溶けた催促催眠術が、何を意識するでもなく夢魔を呼び起こす。

一斉に数十人、数百人の人間が現実を離脱する。
強制睡魔が意識を蝕むのと同時に3発の弾丸が、3人の四凶の頭部をそれぞれ貫いた。

「命中」
「こちらも命中」

「狙撃は嫌いだが、やるっきゃねぇ！」

蓮雅、ビアンカ、愛院の狙撃で囲いが完全に解ける。
続けざまに思いもよらない攻撃を受け、四凶達は浮き足立った。
そのタイミングを見計らい、空間魔術師は夢に落とされた人質達の空間を圧縮し始めた。

（空間を十分の一に圧縮。
会長、後はお任せします）

「ははっ、いいぜ。
魔法を使ってみるのは何百年ぶりだろうな」

空間を圧縮するケイノスと圧縮された空間を別座標へと移転するバースヤード。
人質という盾を失い、四凶の矛は完全に反攻ＳＲに向いた。
形成が逆転したいま、彼らにはそれしか残されていない。
真っ先に的にされたのは当然トキであるが、

「暴れて来い、トキ！」

その時を誰よりも望んでいたのはトキの方だった。

凶刃や銃口が人質に向いていたのでは下手に動けない。だが、それらが全て自分に向いてさえいれば、何も懸念するものなく無力化することが可能である。

「ただし、コンティニューはないから気をつけろよ」

銃を失った四凶たちが周辺から凶器となりうる物を手に取り、多方向から一斉にトキに襲い掛かる。

（こいつらのせいで、何人死んだ！）

前後左右からタイミングをずらして４人が迫る。中には懐に隠し持っていたナイフや銃を装備して襲い掛かった。

（こいつらのせいで……）

警鐘が頭に響く。

鐘に打たれて体は瞬発力を得、殺意と憎悪は爆発力を生み、トキ

を“起こした”。

「邪魔しやがって！」
「ぶっ殺してやる！」

最初の1人が襲い掛かる。
焼けた木材を用いての右側面からの打撃。一瞬後にナイフを持った四凶が反対側から襲い掛かり、次に前後の2人が後頭部と脚部を狙って攻撃を繰り出した。

交差する4人。
僅かな血液がトキを四方から汚し、強襲者と奇襲者の間に決着をつける。

すれ違った瞬間に、4人が絶命し、その結末が周囲の四凶達への見せしめとなった。

「負けた！？」
「こいつもSRか！」
「だが、見たことねぇぞ！」

この凶行の原因が彼らなら、四凶を討つことで人々が救われるのなら――

「他の誰でもない、俺が――なんて言われようと、お前達を討つ！」

４つの骸が大地に伏す。
怒りが言葉となって放たれるのと同時に、次の四凶に向かって走り出す。

一瞬だけタイムリーダーを発動してＳＮＳ（サタデーナイトスペシャル）の銃撃を掻い潜り、双剣を振るう。両腕の腱を切って武装解除し、次いで背後に回りこんで両足の腱を切断する。

どこを切れば人が機動力を失うかは覚えている。問題は実戦であること。
それは訓練で繰り返し口酸っぱく言われていたことだ。教科書が実戦で必ず役に立つとは限らない。それは誰もが知る事実である。
だが、実践できたのなら不利はありえない。

（何の躊躇いもない行動速度だな。トキのこの動きは）

上空から見たトキというＳＲの速度は、完全に目で追うことが出来ないほどのものだった。
協会長であるバースヤードも例外でなく、それを見切ることは出来ない。
高速移動ではない。かといって、空間転移でもない。

（時間を味方につけているようだが、それでも光速のレベルに達しているな……）

解放されたＳＲが牙を向く。
何もない空間に火炎が生まれ、空気を焦がす。

だが、その攻撃は警鐘によって予測が立っていた。
焼撃空間から体を退け、四凶魔法使いに向けて剣を投げつける。
空間の燃焼だけでは止めることのできない投擲を前に、魔術師は剣の軌道から逃れた。

だが、逃れたその先で、トキは待ち構えていた。
左手の二本指で魔術師の両目に触れて時間を奪い取る。
部分的消去でなく、全体からの平均奪取。右手と違って触れた箇所が即座に消えるわけじゃないこの攻撃は、箇所を消すのではなく全体から時間を奪うもの。
結果、その攻撃は眼球全体に能力の低下をもたらした。

「邪魔だ！」

投擲して空中にある状態の剣を拾い、すぐに視力を失った魔術師の顔面を蹴り抜く。次の標的は魔術師の背後から迫った男。
銀色の角を持った鬼に向かって跳躍する。

「面白ぇ武器持ってんな、色世トキ」

（いける！）

無意識の跳躍。
ただ、無力化だけを願った迫撃。
そんなトキに冷静を呼びかけるよう、警鐘が今まで一番強く打たれた。

3本の得物が交わる。
双剣と金棒。
複数の棘と絡み合う2本の剣。
双剣を止めたのは、殺意を棘の形に模り乗せた金棒。

「へぇ、俺の理懐葬媛八解を止めるか。鬼以外で俺と打ち合える奴がいるとはな。なかなか筋もいい」

向き合って初めてその男の強さに気付く。
最初こそ互角に押し合っていたつばぜり合いだが、男が解説した直後から押し負け始める。
男の正体はリカイソウエンという言葉を口にしていたことで大体理解した。圧倒的腕力もそれで説明がつく。

「鬼か！」

「俺は銀角ってんだ」

笑み。
直後、トキは体を逸らして高速で空間を薙ぐ凶爪を躱す。
背後に回り込んで双剣を振るうが、鬼の肉体を斬ることはできな

い。銀角の硬い肉体の前にトキの腕力は微々たるもの。押す力、引く力ともに鬼の耐久力の方が遥かに上回っていた。
つまり、トキの斬撃は効かないのだ。

「力不足だったな！」

鬼が振り返る。
回転に乗じて振られる金棒を躱し、今度は前に回りこむ。
両太腿を切りつけるが、効果はない。
一回転して戻ってくる鬼の金棒。辛うじて躱す。

（こいつに剣は効かない！）

「どこでその剣を手に入れた？」

金棒の射程から逃れ、斬りから突きへと攻撃の種類を変えるために構えを変える。

「聞いているのか？
その剣、どこで手に入れた？」

「それを聞いてどうする！？」

質問と質問が重なる瞬間、両者の距離は一気に零へと至る。

「まさか名前も知らずに使っていたとは！」

打たれ、離れる。
構え直して突き進む。
突き、打ち、避け、斬り、躱し、衝突。
何合打ち合ったか分からなくなるほどに、両者は速く激しくぶつかり合う。

「第一そいつは二振りの剣であって、双剣として使うものじゃない」

「だからなんだ！」

「その剣はお前みたいな四凶が使う物じゃない」

「何！？」

「英雄の剣を、渾沌であるお前が振っていいと思ってるのか？
それともお前には四凶という自覚がないのか？」

不意を突いて狙撃が銀角を捉える。
だが、硬質な体を前にして銃弾もまた無力に等しく、皮膚を破ることすらなく芝生の上に転がり落るだけだった。

「俺が四凶だと、どうしてわかる！」

「別に俺は教えてもらっただけだ。金角にな」

（金角……もう1人居るのか！？）

連続で叩き込まれる銃弾を意にも介さず銀角が歩み寄って仕掛ける。

銃撃も斬撃も効かない相手に対し、トキは双剣を投げつけた。

（こいつは、銃でも剣でも倒せない！）

二振りの剣が弾き落とされる。

剣を捨てたトキは全力で駆け、タイムリーダーを使って銀角の見る時間から消え、背後へと回り込む。

「星黄畏天（せいこういてん）を捨てるか！

素手でこの俺に勝てるつもりか？」

左手の掌底が腰を打つ。ダメージは無い。

理懐葬媛が迫り、トキはタイムリーダーを駆使して躱す。

左脇に掌底を打ち、反対側へと一気に移動してわき腹に強く打ち込む。

（何だ、この感覚……！？）

太ももに平手。
拳打が打ち込まれる回数が増えるにつれ、銀角は自分の体の異変と弱体化に気付いた。
だるさ、痒さ、僅かな痛み。
何よりも本能が訴える存在の危機。
失っていることにこそ気付いていないが、銀角はトキの接近に警戒しはじめた。

拳速は上がり、立ち回りが攻撃的になる。ダメージを貰わないよう、下手な接近を許さないように力の限り一定の距離を保つ。
お互いが全力で攻め合い、攻撃を食らわないように努める。

（こいつ、速くなった！）

優位が逆転する。
最初圧倒していた銀角は、次第に脅威の度合いを増していくトキを前に生命の危機を感じ取った。

トキの方へと体を向けても、その瞬間に背後へと回り込まれる。
視界から消える。
打ち込まれるたびに背筋に寒気が走った。
日本の銀角と呼ばれた自分が、二十歳にも満たない子供に殺されるのかと考えると憤怒が込み上げるのだが、

（右――左か！）

怒りよりも遥かに巨大な恐怖を、色世トキというＳＲから感じていた。

眼前の敵（トキ）に向けて拳を突き出す。

一瞬、トキの姿が視界から消え、拳ひとつ分横に移動した。銀角はその瞬間を確かに見た。

錯視に近い感覚の現象。意識した座標から、気付かぬうちに移り終えている。

理懐葬媛を握った左腕を右手で握りとめられ、左手の平手が顔面に打ち込まれる。

「こちら会長。聞いているか、ビアンカ。
トキが鬼から時間を奪った。撃て。今なら倒せるぞ」

銀角から距離をとってもう一度接近し、左腕を右手のクロノセプトで切り離す。

銃弾が銀角の肉体を穿ったのはその直後で、この好機を逃さないようトキは止めに向かった。

星黄と畏天を拾い、四肢を紅に染めた銀角の首を狙う。

誰が脅威で、誰がその脅威を取り除くべきなのか。
何が悪で、何が正義か。　誰が犯罪者で、誰が被害者か。
彼らが攻めてきた理由はわからない。
何故自分達が巻き込まれているのかもわからない。

だからこそトキは首を狙ったのだが――この瞬間、警鐘は鳴らなかった――両足が重なった瞬間を狙撃された。

「ぐっ！ぃっ――何！？」

「何しているの蓮雅！」

よろめく銀角を前にし、トキは地面に伏して負傷に顔を歪めた。

（やばい！クロノセプター！）

「私は生徒の殺人を認めるつもりはない。
いまトキには、鬼への止めよりも藍を助けに行ってもらいたい」

木々の間で蓮雅はビアンカに説明した。
銀角はトキのクロノセプターによって銃弾が有効なまでに弱体化している。トキが相手するほどのＳＲではない。
問題は村の隅で行われている戦闘。
藍と、もう１人の鬼。

「おそらくあそこにいる娘が金角」

「なら、哭き鬼でも充分対処――できていないだと？」

蓮雅は狙撃の最中にその光景を目端に捉え、一度スコープを介して現状を覗き込んでいたのだ。
鬼同士の肉弾戦は、負傷と体力の消耗が激しい藍の圧倒的不利で展開されていた。

「すぐトキに伝えるよう、会長に言って」

（伝えてって言われても……あの子の負傷はどうする気？）

両足に銃傷を負っているトキが村の隅まで移動できるのか。
レティクルを銀角の後頭部に合わせてトリガー。
次いで様子を見るためにトキをスコープ内に収めると、そこからビアンカが予想もしていなかった光景が飛び込んできた。失った肉体を外部から取り込んだ時間で補い、銃弾で貫かれた肉体を修復していたのだ。

（錬金術か……肉体を新たに作り出すほどのレベルとは。
なるほど、蓮雅はこれを知っていたから躊躇無く撃てたわけか）

撃たれた理由を考えるよりも傷の修復に全力を尽くすトキ。その目の前では銀角が片腕付いて倒れるのを堪えていた。
ビアンカと蓮雅はそこにありったけの弾丸を叩き込み、完全に戦闘不能状態にまで追い詰める。

（会長、銀角を撃破。
トキに伝令をお願いします。１１時の方向、味方鬼が交戦し、苦戦。至急援護に向かえ、と）

流血が止まり、銃痕が消えるとの同時、トキの頭には会長を経由して戦況が直接伝えられた。

第３９話－反撃のＳＲ連合！－（後書き）

戦場からわずかに離れた山の中、斜面を流れ往く小川のせせらぎを聞きながら完全否定は彼女を見つけた。
本当の偶然で、新緑の中からトキらの活躍とその実力を目測するために移動し、その最中に倒れ込んだ彼女を見つけたのだ。

小川に片手を浸け、息を荒げて顔を苦痛に歪めた秋森智明を見て、メイトスは思わず息を呑んだ。

「アンナ……？」

彼女を中心に焦げた大地に気付かず、メイトスは熱気が渦巻く異常空間に足を踏み入れた。
熱気よりも、その空間の異常よりも、メイトスにとって彼女の容姿が自分の愛した娘のそれとまったく同じであったことが何よりも信じられず、混乱した。
類似という次元ではない。完全な写し身と言ってもなんら間違いのない姿格好。

（まて！落ち着け！
別人……別人だ！）

分かっていても今まで抑えてきたものが込み上げ、完全否定を完

全否定でなくす。

触れてはいけないと言い聞かせつつも、気付けば体は自然と智明に触れていた。

（この熱……まさか、ＳＲなのか！）

触れた手を離した直後、指先に激痛を覚える。

中指の爪先から火種も何もなしに体が焼滅してゆき、人差し指、薬指へと焼滅箇所が拡大する。

（いや、これはパンドラの後遺症！

アン……いや、この娘はパンドラＳＲだったのか。

この症状、おそらく自らのＳＲに気付いていない。無自覚のうちに薬を投与された可能性が高いな。全くコントロール出来ていない。

この状態からして、薬を与えられたのは少なくとも2、3年前……最悪の場合、初期型パンドラ。なるほど、この娘も無自覚の犠牲者か）

指先の存在を否定し、自分の存在を部分的に存在しない物質とし、焼滅を防ぐ。

（これでよく生きてこれたものだ……）

関心しつつ呆れ、葛藤を抱きながら干渉を始める。
メイトスが外部から智明の力を制御し始めた頃、村での戦闘は完全に決着していた。

第４０話－Ｃｈａｏｓ　Ｔｒｉｇｇｅｒ－（前書き）

襲撃作戦開始から約5分前。
先行して村に入る学生の中に面白い者を見つけ、男は胸を躍らせた。　面白いもの、といっても予めそういった者が存在することを耳にしていたので、男の嬉々とした表情は出会えたことよりも、発見した者が予想以上に良質であることによって作り出された。
付き添いである教師の肩を借りて歩く彼女の前で男は足を止め、声をかけた。

「どこか調子が悪いのですか？」

「車酔いですよ。特にこの子は酷くて、それでバスでゆっくり休めようと」

顔面蒼白で息を荒げる少女をバスに連れ戻そうとしていた教師が怪訝の眼差しで男を射抜く。　女性教師の後に、流暢に日本語を操る外国人が続く。

「やっぱり……私もさっきまでそうでした。
この薬をどうぞ。よく効きます」

カプセルを取り出して教師に差し出す。
だが、受け取る気はない。表情からそれが見て取れる。確実に断

るだろう。

「即効性の高い薬です。飲んですぐに吐き気は止まって、気が楽になります。
それから子供にも人気のオレンジ味」

「先生……貰おうよ。
バスの……備品、ほとんど効かなかったん――！」

ビニール袋が動く。
内容物を吐き出した後に苦しむ彼女を見て、教師は心苦しみ、男は嘲笑した。

「心遣い感謝します」

教師が薬を受け取ると女生徒はすぐそれに手を伸ばす。
備わった素質、それから彼女と自分の相性がここまで良く合うものであることに、思わず笑みが漏れてしまい、彼女はそれを目撃し、思い違いを始めた。

「ありがとう、お兄さん……なんかもう、少しだけ楽になった気がする」

「そんなはずはないだろう。ちゃんと“良くなる”まで休みな」

「あの、つかぬ事お聞きしますが、医療関係の方ですか？」

教師の質問に男は一瞬止まる。
それが誰にも認識されないほどの停止だった故、教師はその男を警戒することはなかった。

「えぇ、まぁ。
凶源の薬剤師ですよ」

「私は類家。類家香織。ありがとね」

「フッ、コントンだ。しっかりと休みな」

「ねぇ、まだここにいる？
具合が良くなったら、もう一度お礼に来たいんだけ――」

口元を押えてこみ上げてくる嘔吐を堪える類家。その様子を見て、コントンは休むことを優先するよう伝え、バスに向かって歩き出す2人の後姿を見送った。

「私、白州唯高校の3年3組――蓮雅っていう先生のクラスだよ！」

笑顔で見送り、2人の姿が遠くに消えるや否やコントンは声を上げて笑い出した。知っていると。
また、2度と会うことはないと呟きもした。

「もし、貴様が俺のようになれたら、会ってやろう。
それまで生きていられたのならな。ククククッ……」

呟いてからコントンは新緑の中に消えた。
後に残るは静寂。
嵐の前の静けさ。

それから程なく、四凶達による攻撃が始まった。
力と素質を持った人々による、一般人への一方的なテロ。
自覚なき者と自覚した者たちによる暴力。
それを眺めていたコントンは思わぬ反撃に感嘆の声を漏らした。

「まさか、これだけの面子がこの村にいたとは……フッハハハハッ！
いいぞ。これはこれで面白い！」

協会、ナイトメア、無所属。
異なる3つの勢力が連合して四凶達を撃退していく。その様にコントンは頷いた。どのみち、今後はこのような場面が幾度も展開されると予測していたからだ。狼煙となる今日、初日からこれだけ面白い内容のものを見れるとは思っていなかったし、大きな収穫である。

今後はそれぞれの勢力にも変化が見られるだろう。
分裂していた世界が一つにまとまってしまう。

「しかし、挑む価値はあるか。フフッ」

反撃は続き、村を襲撃した四凶達は連携を絶たれ、各個撃破されて半分以下になっていた。

第４０話－Ｃｈａｏｓ　Ｔｒｉｇｇｅｒ－

新緑が風に揺れる低い山の間に悲鳴と怒号が反響し、大地が機嫌を崩してゆく。
その中に組み込まれ、トキは四凶でありながらも人として戦闘に介入し、結末を求めて力を振るった。
逃げない、臆さない、目を逸らさない。
怒りはあっても語らない。矛盾があっても迷わない。
迷えば泥濘（ぬかるみ）から抜け出せないことを直感が告げ、故に戦闘が矛盾で満ちていようと突き進む以外に方法はない。それ以外を知らない。

（哭き鬼の姫が苦戦している。
相手は黒鬼の若姫だ）

（藍が苦戦！？）

（相手は“金角”と呼ばれる実力者だ。
今の黒鬼の若姫（そいつ）というのが千里眼所持でも有名な少女だ。
早い、重い、正確の三拍子揃った強敵だ。なめて掛かるなよ）

傷を治したトキは銀角の理懐葬媛に両手で触れて時間を奪った。
完全な武装解除と体力の回復。それが終わってすぐ、双剣を拾って走り出す。新たに補充した時間を以ってタイムリーダーを発動し、連用して現場へ急行する。途中で凶器の残骸や四凶の死体から少しずつ時間を奪い、タイムリーダーが解けないよう時間のストックを保ちながら全力で前へと進む。

背後に轟音が生まれ、爆炎が立ち込める。震撼する空気にあてられ後ろへと目を向ける。直後、爆炎が風に吹き消され、更に火炎が縮小し奥の新緑を妨げる黒煙と火炎を消した。それが魔術師2人の援護であることを、直接頭にコンタクトしてきた会長によって知らされ再び前へと集中する。

芝生の上を駆け、池を迂回し、小川を飛び越え、家々の間を抜ける。

ほどなくして、金属同士がぶつかり合う甲高いような、それでいて重鈍な物を連想させるような力強い衝突音を耳に捉えた。

木造りの長屋。

裏庭の方に動体が覗く。

対決する、角を持った2人の女性。

2つの影のうち1つが藍のものであることに気付き、援護のためもう一方の人物に奇襲を掛けようと試みた。

物陰からタイミングを見計らって飛び出す。

それと同時、トキの攻撃は予見され、逆に金角の攻撃がトキよりも先に奇襲者(トキ)へと向けて放たれていた。

（しまっ――！）

濃厚な殺意が空間を滑り襲い掛かる。

熱気を帯びた凶器が目の前を通り過ぎ、前髪を焦がす。

紙一重で攻撃を躱したもののトキは体勢を崩し、相手は次の攻撃準備を終えていた。

第二撃が来る。

「一段‥蓬！」

咄嗟に繰り出された藍の捕縛の術を黒鬼は躱し、金棒‥裏壊爪焔破開を振り下ろす。

背後からの陰陽術を躱しつつ、金棒をトキへと振り下ろした黒鬼――金角だったが、一瞬生じた隙に漬け込まれ、攻撃を回避される。

藍が隙を作り出してくれなければ確実にやられていた。

そのことを自覚し、トキは双剣を握りなおす。

相手の特徴は千里眼。物を透してこちらを見ていた。だから奇襲に失敗したのだ。相手には物陰から向かってくるこちらが何の隔たりもなく見えていた。そうでなければ奇襲を見破ることなどできなかったし、正確に顔面を狙って金棒を振ることも出来なかったはずだ。

千里眼の力を念頭に置き、今度は不意を突かれないように仕掛けた。

「トキ……」

トキと入れ替わった藍は口元の血を拭い、理壊双焔破界を持ち直す。直そうとするのだが、力の入らない手に理壊双焔は重すぎた。

歯痒い気持ちを押し殺してトキと黒鬼の戦闘を捉える。

黒鬼相手に確実に攻撃を躱して反撃を試みるトキと、同じく千里眼を用いてトキの攻撃を予測して反撃を繰り出す黒鬼。速さはほぼ同等。ただし、力比べとなれば圧倒的にトキが不利。加えて金棒‥裏壊爪焔破開はその外見以上に強力な武器であるのだ。得物同士がぶつかり合う度に裏壊爪焔から火の粉と火炎が零れ落ち、足元の雑

草を焦がし、熱し、トキの服装をも侵食していく。
馬鹿力と高速度、そして火炎による攻撃。
それに対し、トキは果敢にも攻め立てた。

（訓練の成果はあったのね……彼女の攻撃を一発も貰っていないなんて）

右の剣を捨てて掌を相手の金棒に伸ばすが、黒鬼はすでにその攻撃を予見している。
トキの右手を躱し、蹴り飛ばそうと左脚を振りぬく。が、タイムリーダーを使って瞬間的に攻撃軌道上から退くトキには掠りもしない。
両者はダメージを与えることに失敗した。

（この鬼、物を透かして見るだけじゃない……確実にこっちの攻撃も読んでいる！）

（この学生は早い。けど、甘い！）

「トキ！彼女と力比べをしても勝ち目は無……！」

藍の助言を受けながら剣を拾う。
仕掛けてきた黒鬼の攻撃を受け流し、そのまま火の粉を掻い潜って懐へ切りかかる――警鐘――警告と同時にタイムリーダーを発動して離脱する。空振る裏壊爪焔が空間を熱す。その隙を狙って突撃を試みるが、金角は残った片腕でこちらの腕を握り潰そうと掴みか

かった。躱して再び距離をあけた。
間髪入れずに危険を報せる警鐘が次を告げる。
敵、正面、掴み。安全圏に至るは後退のみ。
それでもトキは敢えて踏み込み、最初の一撃を躱して双剣を振るう。懐にさえ飛び込めば力も半減するだろう。そう見越しての突撃だった。
しかし、その予測は彼女の予見の範疇であり、好機でもあった。
一刀は裏壊爪焔に阻まれ、もう一刀は黒鬼の黄金の角で弾き返されたのだ。

（だっ、無理か……っ！）

「無駄よ。抵抗を諦めて投降しなさい」

反撃を予測していたトキからすれば予想外、同時に理解できない言葉であった。
か弱い力で押してくる刀を押し返し、距離を置いて一旦構えを解く。
トキが構え直すと、金閣も裏壊爪焔を構え直し、しかし口では投降を推奨してきた。

「私たちが争ったところで何の益もありません。
身体の無事を願うなら抵抗はやめてください。
抵抗しないのなら、哭き鬼の姫君にも手を出さないことを約束します」

「投降する理由はない。それ以前に信じられない」

藍へと近づくトキに向かい金角が突進する。
突き出される裏壊爪焔が地面を抉り、土と雑草を焼く。
刀が奔り、金棒が黒鬼を狙う。
左右を藍とトキに挟まれた形になっても金角は両者の攻撃を躱してみせた。
トキを攻撃ごと裏壊爪焔で弾き飛ばし、藍の攻撃を飛び避けて蹴り飛ばす。

「大人しくしてください。私は人質に手を出すような卑劣な真似はいたしません」

「なら、どうしてこんなことをする？」

火炎が消え、同時に木々が消え、緑が大地の上から消えてゆく。
この瞬間、周囲の新緑はその緑を深いものに変えていた。

「お前と一緒の……他の奴らは、やりたい放題やっていたってのにか？
信用できるか！」
（トキ――これは、トウコツの時の……！？）

１人のＳＲを中心に特定の物質が姿を消し、外見を変化させ、内容にまで時間的影響を及ぼしていく。
円を描くように違う流れの時間が支配する空間が展開し、特定範

囲内の時間がトキへと集約し始める。
その衝撃波を金角は予見できなかった。

「たくさん殺しておいて――お前、片棒を担いでるって自覚は無いのかよ！
それでも卑劣だなんて言えんのかよ！」

（何――これ！）

金角の動きが緩慢になった瞬間、トキは一気に背後へと回り込み、充分に溜めてから全力で2本の剣を振り下ろす。
その動きはしっかりと予見され、振り下ろした双剣と金棒が火花と火炎を散らす。

その衝突――衝撃で裏壊爪焔は砕け、一瞬速く後方に飛びのいて致命傷を免れた金角だが、代わりに最も信頼する武器を失った。

「それにもう人質はいない。
お前こそ投降しろよ！」

「なんですって？」

距離を取る金角。
トキはそれを追った。息切れが始まっていることにも気付かず、ただ目先の敵を目指して仕掛け続ける。

「人質は全員助けた！だから俺達に投降はない！」

人質があってこその作戦を崩した今、彼ら乃至彼女らに戦う理由はないはずだった。

トキは続ける。人質を包囲していた四凶たちは悉く討たれ、今も掃討のために魔法使い2人とスナイパー3人が攻撃を加えていると。

「しかし、魔法使い程度なら銀角がいる限り――」

「そいつはもう倒れた」

折れた裏壊爪焔で斬撃を防ぐ金角の動きが僅かに止まる。

剣撃を防ぐたびに金棒は傷つき、削れ、形を失っていく。

業物から鈍への強制退化。予見できなかったあの攻撃で、裏壊爪焔から一気に時間を奪われ、得物としての完成形を迎える前の状態に戻されたのだ。

同時に警鐘が強く、非常に強く打ち鳴らされた。

「止まってトキ！」

満身創痍の藍が金角との間に身体を滑り込ませる。

それは金角の能力や言動以上にトキには予測できないものだった。

振り降ろし掛けた双剣を全力で止める――間に合うか？――慣性

が剣を完全には止めさせてくれない。タイムリーダーを発動し、少しでも自分の速度を落とせる状況にしつつ、双剣から時間を後退させて切れ味を落とす。
タイムリーダーの解除後すぐ、藍の無事を確かめる。　際どくも刃は彼女を傷つけるに至っていなかった。

「彼女に戦意はない」

「な……私は！」

刃を目の前にし、藍は戦闘の終わりを告げる。
だが、金角は藍の背中とその言葉に抵抗した。

――まだ私は立っている。なぜ戦意がないと、しかも哭き鬼に断言できるのか。決め付けるな。

哭き鬼を挟んで敵（トキ）と向かい合う。
目の前に敵がいるのなら。まして自分が倒れていないのなら、戦闘を放棄する理由などない。

「聞いてトキ。
ここで彼女を殺めてしまえば、トウコツと同じよ」

「どうして？」
「それが、四凶よ。
これ以上戦いを求めてはいけない」

「でも、こいつらが――」
「偽っても駄目」

「認めろって言うのか……いろんな人が殺されたことを」
「自分を偽っても駄目。
トキも、殺したでしょ。私だって……」

言われて前へと出ようとしていた足が止まり、背筋は凍りつき、身体は震え始める。
差し出された藍の得物が目につくと、それは倍加した。
冷静でいるつもりだったトキは自分で気付かないうちに熱くなり、無自覚のうちに剣を振るっていた。藍の言葉で戦うことを前提に――救うことよりも殲滅することを念頭に立ち回っていたことに気付かされる。諫められなかったら金角を仕留めるか、もしくは絶命寸前に追い込むまで戦闘を続けていただろう。
金角が言った通り、この戦いに利益は無い。四凶になりかけているSRのどちらかが死ぬだけで根本的な解決にはならない。

「誰が望んでこんな事……」

金角の裏壊爪焔の先端が地面を向く。
認めざるを得ない事実に立ち向かっているのはトキ一人ではなかった。金角は藍の言う通り、目の前で戦う意を失っていた。

銀角が倒れたというなら、これ以上もがいて生きる意味も自信も無い。

「誰が――」

黒鬼に続きトキも戦意を失った。

その涙が戦略なのか、あるいは本物なのか分からなかったのだ。

策略なら構え続ける意味はあるのだが、悲しみからくるものなら無駄死にさせないため、戦闘を中断しなくてはならない。また、どうしてこのような凶行に手を出したのか聞き出すためにも生かす必要があったため、仮に戦闘を再開しても相手を生かさなくてはならなかった。

「四凶なんかに……！」

藍と金角の言葉を聴いて思い知る。それが全ての元凶であり、その言葉があらゆる人間を動かして今回の事件は発生したのだと。

望んでいない立場。

予想だにしなかった存在への素質。

中には理解していながら凶行に参加している者もいたが、金角のように望まずに参加しているＳＲだっている。

自分が世界に及ぼす影響。

個人と言う一個から始まる、他の連鎖とは桁と質が違う、大きな影響力を持った負の連鎖。

「鬼の……金角、君も四凶なのか？」

頷く金角にトキは自分も四凶であることを伝え、彼女は知っていると呟いて本心を明かした。

「四凶でなくなるために参加したのに、どうして邪魔をする……あなたは、四凶という立場の恐ろしさを分かっていない！」

「あぁ、たぶん分かっていない。
でも、四凶を抜け出す方法を会長に教えて貰った。
それが自分のためにも、皆のためにもなって聞いたから実践しただけだ。君の四凶予防を邪魔するつもりなんてない」

藍は2人の会話を聞き、互いが持つ情報に食い違いがあることに気付いた。トキと黒鬼の彼女は、それぞれの行動に四凶という属性から抜け出すという目的があり、その結果の実現を強く望む信念がある。
だが、肝心の方法がそれぞれ違い、両者はぶつかり合った。

「私の首を、刎ねてください」

「断るね。
君が四凶のうちは殺さない。
何ていうか、俺が邪魔したようなら次からは手伝う。俺も四凶のままはイヤだし」

「それまでに何人を不幸にしてしまうか……私は、それが怖い。
だから、四凶でいるくらいなら――」

そもそも次があるのか。　この戦場から帰還することができるのか。

黒鬼と言う実力主義一族の中において、肉体的実力を持っていても権力を持たないお飾りのシンボルに帰れる場所などない。

誰も受け入れてくれないことが容易に想像できる。

金角はそれを説明し、故に首を刎ねてくれと再度頼みを乞う。

「そうね。

帰る場所がないのなら、ここで死ぬのもひとつの手ね」

「哭き鬼の結晶鬼、藍……手数をかけます。

正直に言うと、私はあなたのように強く生きていける自信がない」

「でも、あなたを待っている人はいるはずよ」

「私を待つ者などいません。皆が私の後継ぎを狙って立ち回っている……」

状況が悪い方向にしか進まない中、打開策を見つけるために突き進んできた。せめて四凶という属性から外れ、それから時勢に流されようという考えだったのだろう。

過去に金角との交流経験のある藍は、彼女の器や厳格さ、なによりも優しさを知っていた。たった一度の交流だが、互いの短所を指摘し合い、鬼の次世代を担う者同士ということで互いの精進を誓った。故に彼女がどれだけ辛い状況の中に身を置いているのか、察す

ることは容易だった。

「金角、君は本当に死ぬ気か？」
「はい」

藍が聞くよりも早くトキが質問し、金角はそれに即答で応える。
他に方法を知らないとばかりに頷いた。

「死ぬって事がどういうことか分かっているのか？」

「四凶となっても、皆に迷惑を掛けない唯一の方法です。理由としては充分――」
「それは間違いだ」

トキの腕が伸び、左手で金角の喉に触れた。
自分のものよりも細い首に高密度な時間の流れを感じ取りながら否定を続ける。四凶が死ぬ理由になるはずが無い。なぜならトキ自身も四凶でありながら若い。校正の時間は十分にある。

「論点が違う。あなたは四凶であっても生きていける」
「何が違って、どこが違う？　じゃあ、何で今を生きている？」

藍と金角の目の前で、喉に当てられた左手が淡く光り始める。金角の意識はそちらへと向いてしまい、反論の言葉がうまく浮かばな

かった。　しかしすぐ、光が収まってから金角は自らの異状に気付いた。

「――っ！？」

「声をあげる前に感じてくれ……死ぬってのは、そういう事なんだぞ！」

トキは銀角の発声器官と呼吸器官を退化させた。喉に触れた左手が皮膚と筋肉越しに直接体内へと時間干渉を施したのである。次に左手は喉から金角の胸部まで下り、そこから時間を奪い始めた。肺から時間を奪って著しく機能を低下させる。

年齢不相応の肺活量では呼吸もままならず、更に発声はおろか、一声すら出すことのできない身体にされたのだ。

それまで気丈に振舞っていた黒鬼が体勢を崩し、膝をついた。発声できないという突然の異状に困惑し、次いで呼吸困難が冷静を奪った。喉や肺を中心に広がる激痛に汗を、変化してゆく視界に寒気、終わりへと向かう己の存在にただならぬ恐怖を覚えた。

そんな状況の中で金角は――ままならない呼吸によって、必死に繰り返そう、取り戻そうと生にすがる自分に直面した。

「……どうだ、君が望んだ死ってやつは。
首を斬られなくても死ぬことはできる」

苦しさに汗と涙を流し、目と口を大きく開いて苦しむ黒鬼に言い

聞かせながら、両手に時間を集めて回遊させる。
地面に倒れこみ、必死に身体を震わせている金角がいま、死を目前にしていることがわかる。奪った時間と共鳴し、その感触がはっきりと伝わってきた。

「いいのか、こんな所で意味もなく死んで。
ここまで生きてきたことを、今までを全て投げ捨てるのか？」

「トキ！」

「金角、君は四凶のまま人生終えるのか？」

両手が喉と胸に触れ、同時に時間を流し与え始める。金角から奪った時間とストックしていた時間により、彼女の身体を修復しながら痛みを和らげていく。程なくして彼女は今まで通りに呼吸を繰り返し始めた。息を荒げながら自力で立ち上がり、汗と涙を拭ってトキを睨み付ける。

「トキの言う通り。
金角、あなたの気持ちは分かります。負の原因というレッテルを貼られたまま生きていくことがどれだけ辛く惨めなのか。私もそれを味わってきた」

「……」

「私に備わっているらしい四凶属性は――トウコツ。
でも、それさえ分かっているのなら抜け出す方法はいくらでもあ

る」

「……属性がキュウキ、でも？」

「あるわ。

銀狼の芹真は知っているでしょ？

彼もその属性の中にあるけど、未だに誰かを欺いたことはないし、暴力以外に人を傷つけたこともない」

藍の言葉に金角は沈黙した。

もし、哭き鬼の彼女の言葉が真実なら、方法は一つしか無いと自分に伝えた人物こそ、四凶なのではないか。そう考えた。

自分に備わっている素質がキュウキだから嘘に関する事柄には多少持論を持ち合わせている。

――私が何の解決方法も心得ていないところに付け込み、計画的に私を駒として操作しているとしたら、騙したその人物も四凶ではないか。

言葉による嘘と暴力、負の連鎖の始まりを創り、紡ぎ始めるのが四凶：キュウキである。それが裏で糸を引いている可能性は高い。これだけの規模の作戦である。事前に仕組まれていても不思議はない。

「私は、騙されていた……？」

「何なら騙したと思わしき奴の外見的特長を教えてくれないか？

もしかしたら知っている奴らかもしれん」

藍とトキによって自分の過ちに気付きかけた黒鬼。その目前に忽然と協会長は姿を現した。

「な――！」

（どこから近づいてきた！）

「会長？」

思わず身構える金角だが、トキの言葉と態度から敵でないと判断し、警戒はしたままに構えだけを解く。

初めて目にする協会長。その姿は思っていたよりもに若々しく、それでいて無言の圧力を周囲に放っていた。隙のない実力の持ち主であることが否応無く伝わり、更に密かな想いを強く押し殺している印象を受けた。目に宿る輝きは話で聞いた会長のそれとは全く違う、年齢を感じさせない力強さを持っていた。

人であることを疑わせる。

「もしやと思うんだが、君に四凶を抜け出す条件を語ったのは、紅いスーツでウェーブのかかった金髪の女性じゃないか？」

「……はい」

「それさ、“本家”だよ」

3人の目が会長に集まる。

念を押して会長はもう一度、今度は分かりやすく真実を伝えた。

「その女は現キュウキの最高位だ。頂点にして原点を超えた者とまで謳われた。

嘘が得意な戦略家で、今回のテロの立案者だ。同じ属性の女性のみで編成した私設組織まで持っているくらいだから、今回の計画もかなり以前から企画していたものと推測できる。まぁ、正確には把握しかねるんだが」

「会長、質問いいですか？」

「何でもいいぞトキ」

「四凶でなくなる方法は必ずしも一つなんですか？」

「そんなことは無い。

俺は実際に何十パターンも経験してみたが、最後まで四凶から抜け出すって言う意気込みを忘れさえしなければ、大抵どんな方法を用いても失敗することはない。どんな方法を用いても、な」

「え――そ、その意気込みとは！」

「自分が騙されていたことには気付いたみたいだな、金角。

そもそも四凶とは負の始まりとなる存在のことだ。自分が原因とならないように人を思いやり、時には自分から前に出、時には前に出たい衝動を押し殺して自重する。人の思いを受けること、自分から思ってやることも大事だ。

つまり、自ら場の空気や発生している関係、相互の認識された世界観を承認し、ある程度リセットできる人間で居続けなければいけないということだ。

が、しかし、これがまた実践となればなかなかうまくいかない。最初の時点で躓いて、抗おうとしたその反動で逆に四凶の属性を深める者も少なくはない」

「……そうですか」

「会長の言う通りよ。金角、人は誰でも四凶という属性を持ち合わせている。その素質が高いか低いかの違いだけで、誰にでも嫌な関係を生み出す瞬間はやってくる。だから、あなただけが元凶となるわけじゃない」

トキに加えて会長の説明を受け、後押しのように放たれた藍の言葉を聞き入れたこの瞬間。

黒鬼、金角は絶命の選択を捨て、降伏する意を伝えたのであった。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第４０話－

－Ｃｈａｏｓ　Ｔｒｉｇｇｅｒ－

魔術師2人から連絡が入って敵四凶部隊の壊滅を確認したのが、金角の投降から1分以内であった。

敵総勢30名、うち降伏が4名、捕虜が1名。

この現場の名目上四凶の指揮官であったSRは、トキの奇襲により死亡。副官の四凶はリデアの狂風魔術の前に倒れた。司令塔となる人物を失った四凶たちは各個に戦い、しかし狙撃と分断による挟撃と電撃的な圧倒によって瞬く間に壊滅へと追いやられた。

「投降した者はこちらの4人だ」

村の中央に反四凶連合として戦ったSRたちは集まり、互いの無事と戦果を確認しあった。

藍とトキは負傷した者を手当てし、愛院とMr.シーズンは周囲に残敵が存在しないか用心して警戒。会長は狙撃手2人とリデアを含んで今後の方針について話し合いっていた。

「君は国連のザ・キラー：ビアンカ・ハルモニアではないかな?」

「そういうあなたは特級風司のリデア・カルバリー。
現在の協会の態度と四凶が気に食わないと言う理由から、度重なるテロとも嫌がらせともとれる行動を重ねる魔術師」

「投降、ということは今回四凶の手助けをしていたということか？」

「ええ。していたわ」

「ほぅ、それは是非納得のいく理由を聞かせてもらいたいものだな」

脱線。険悪に傾く雰囲気を会長が止めつつビアンカに助け舟を出し、同時にリデアを納得させる。並行してビアンカを味方に引き入れた蓮雅のことも説明した。
その傍ら、投降した４人は連合を組んだＳＲたちの会話に耳を傾けつつ大人しく処分を待っていた。唯一、金角だけは申し訳程度の傾聴で、頭では別のことを考えていた。

（それにしても――）

「それにしても、化け物だな。色世トキは」

金角の表情に気付いた銀角が呟く。
大人しく地面に座り込んだまま周囲を見回す金角と銀角の視点がトキで止まった。

「……銀を助けてくれるとは思っていなかった」

「全くだ。死んでさえいなけりゃどんな傷でも治せるんだからな」

金角との戦闘から戻ってきたトキは風前の灯火となっていた銀角に時間を与えた。

完全に消えた銃創のあった箇所を指先でいじり、銀角は色世トキというＳＲの可能性について考えを巡らせた。メイトスを絶命に至らしめると言う予言の噂も、実際にその力を目の当たりにして納得したし、メイトスや協会どころか、ナイトメアのＳＲ達までも味方に引き入れようとする理由も頷けた。時間を味方にするという馬鹿げた、しかし、現実に無敵といって過言でない能力を持っている時点で申し分ない戦力となり得る。銀角個人としても確保しておきたい戦力だが、芹真事務所と哭き鬼の彼女がそれを許さないことは目に見えている。

もしかすると、協会のヒーローズにも対抗できうる力であるのだから。

（強大な力を持っているからこその四凶属性なんだろうな。

トキを見ているとそう思えちまう）

「トキには感謝しなくてはいけない。銀と死別せずに済んだ……」

無言で頷いて銀角はため息をついた。目の前では作戦の要だったトキやケイノス、高城、ビアンカら戦闘に協力した全ＳＲに対して会長が賛辞と感謝の言葉を送っていた。　感謝と悲しみ。　会長はこの面子が敵として立ち向かい会わないことを祈り、しかしそれが叶わないかもしれない願望であることを心底で認めつつ、この瞬間を噛み締めていた。

状況が不安定なこの時勢にそれが叶うか考えつつ、銀角は沈黙を再開する。

「さて、諸君。
そろそろお喋りをやめにして、警戒しようじゃないか」

『警戒？』

各々の思考が駆け巡る中、意図しない言葉が皆を一つの方向へと導いた。
全員の目と意識が会長に集まる中、トキはひとり、反対側へを顔を向ける。会長の発言と同時に殺意を感じ取ったのだ。この中の誰のものとも違う種類の殺意。　五体に感じる突き刺すような圧力。初めての感覚ではない。一度だけだがその殺意の前に立ったことがあった。結果的に仮死状態にまで追い込まれた、あの敗戦時に感じた力。

（やっぱり、コントンがいるのか！）

タイムリーダーの展開と同時、視界の端に動く影が映り込む。
一瞬の出現。確信を抱かせる輪郭。
静止した世界で人の陰から人の陰へと移動する敵。
コントンを除き、停止した時間の中を自由に行き来できる人間をトキは知らなかった。

「出て来い。ここにいる皆はやらせない！」

「ククククッ、知らない知らない、見えない、見ない」

静寂を切り裂くように声を出し、コントンはトキの前に姿を晒す。
自信がなければ出来ない大胆な行動に、トキは双剣を取り出して構えた。

「気にしない気にされない、気付かない気付けない」

何一つ変わらない凶気が目前に在った。
前回同様デザートイーグルを片手に、銃口を自分のこめかみに押し付けながら喋り続ける。

「暇なし暇なし、意味なし理由なし」

「コントン……これはお前の仕業か？」

「クッククク、明日なし記憶なし存在侵食。
知らない知れない宿命螺旋、結末始原触れることなし。
解し介さず、遭いて逢えず、時のまま流されるままに」

絶えない笑み。
止まない戯言。

「何が言いたい……」
「何が言いたいと思う？」

行き交う視線。
ぶつかる質問。
静寂を破る狂気。
異質を際立たせる静寂。

「ククッ、リクエストしたものは見つけたか？　黒いアレを」

「まだ見つけていない」

デザートイーグルの銃口がトキに向く。
だが、前回と同じ凶器を前にしても脅威は感じなかった。真に恐ろしいのは銃器よりもコントン自身のＳＲ：時元脱存。
時間という流れの中から脱け出し、己だけに許された特別な時間を手にする力。

タイムリーダーと同様・同等の能力。

「今日は期限の変更を伝えに来ただけだ。
お前には何もしない」

「変更？」

「1年以内。
そうだな、貴様が学校を卒業するまでとしようか」
「……期限内に見つけれなかったら、どうする？
当ても保障も無いんだぞ」

現実にコントンの課題はトキに僅かな負担を与えていた。勉学と訓練の合間に探してみたものの、実際に見たことない物を探し出せというのだから簡単には見つけられない。口述したように当てもなく、また発見の見込みも極めて薄い。家中をくまなく探し回ったが、それらしいものは一つとして見つからなかった。自分の部屋から両親が使っていた部屋、台所から洗面所のいたる所、果ては天井裏にでも隠されていないか確かめに潜ったこともあった。
結果、収穫はゼロ。手がかり一つさえ見つからない。

「見つけられなかった場合は徴収に行くさ。　お前の友人を伴ってな。フッ、ククク」
「……だから俺を殺さないのか？」

目を瞑って笑うコントンへの質問は、疑問の解消手段でありながら準備であった。
それが何なのか、トキは未だに理解していない。
する気などない。

「それ以外にお前の生命価値はない」

――俺の時間で止まれ

トキの低速世界が展開され、静止していた会長や藍、リデアらが僅かに動き出すのと同時、双剣がコントン目掛けて奔った。
デザートイーグルの銃身を切り捨て、もう一刀で頬を掠める。

「確かに今、俺にお前を殺すことはできない。
お前は利用手段でありながら、唯一の手段でなのだからな」

「残念だな、コントン！
俺はお前のやり方が嫌いだ！そして俺にはお前を殺せる！」

「ハハハ！
結構！やってみればいいさ！」

体勢を立て直すトキの目の前でデザートイーグルが復元する。
切り捨てた破片は落下時の軌道をそのまま逆走し、凶器としての性能を取り戻す。銃口が右肩に向けられ、引き金が動く。
タイムリーダーを発動して射線上から逃れるが、その延長上に会長の姿が目に止まり、トキは慌てて銃弾を叩き落とすように剣を振るった。コントンはそこへ更に銃弾を追加する。更にコントンのタイムリーダーがトキから速度を奪う。
コントンの時間で世界は動く。
低速の世界に嵌められたトキは咄嗟にタイムリーダーで流動時間を更新し――自らの望んだ流れ方にすると同時、コントンの作り出した流れに自分の流れを重ねて主導権を奪う――流れを緩やかにし、

再び弾道から身を退ける。コントンを双剣の間合いに収めて、太腿や手首を狙って刃を振るが、更なる時間の低速化によって躱される。

（腕を上げたなぁ、トキも）

低速世界が上書きされていく中、会長は微動だにせず2人の交戦を見守っていた。

銃対剣。

遠距離では当然銃、近距離では剣が有利。威力は双方共に必殺保障。だが、両者掠りはすれど、当たりはしない。

（コントンの目的は本当にトキだけなのか？）

再び銃弾が自分に向けられて飛んでくる。が、度重なる低速化の結果、銃弾が今すぐ自分に達する心配はない。が、目に見える凶弾に脅威を感じないわけではない。

攻撃と時間の更新、回避が繰り返される度に低速化していく世界は、やがて静止世界を迎える。その光景の中に溶け込み、バースヤードは初めて体験する無音の世界に感動を覚えつつ、コントンの本当の目的について思案を始めた。

今回のテロ事件の発案者はキュウキだが、実質四凶という属性を持つ人々の頂点にいるのがコントンである。実力的にも関係的にも、この事件の主犯であることに違いはない。コントンは敵の総帥と言っても間違いないのだ。

（おそらく目的は別だな。
俺の暗殺か？　しかし、俺がここにいることを知っている人間はおろか、ＳＲさえいないはずだ。
或いはビアンカか……国連の持つ戦力を手に入れたならば更なるテロ行為の持続が可能だ。しかし、ただの人間を傘下に取り込むなどコントンは絶対にしないはずだ）

目の前まで迫った銃弾が弾き飛ばされる。

「本当の目的は何だ！」
（おっ、よく聞いた）

「ククッ、何故そんなことを聞く？」

「黒い欠片が望みなら、わざわざこんなことをしてまで会いに来る必要はない！」
「大有りさ。
喋らなかった場合は人質をとって脅迫する。そうやって答えを聞き出せるんだからな。
フフッ、逆に聞くが、ここまでやられなかった場合、俺が会いに来たとしても何ひとつ答えなかっただろ？」

「当たり前だ！」
「ふん。可愛げのない。
まぁいい。俺は気に食わないが――」

マガジンを取り替え、峰に銃弾を叩き込んで斬撃を防ぐ。
強い衝撃が鈍い痛みとなって伝わる。

「トキ。俺達の仲間にならないか？」

「断る」

再びデザートイーグルを切断する。
銃身を斬り、薬室と装填された次弾、トリガーとそこに掛かったコントンの指を斬り飛ばす。が、得物は再び逆再生し、武器として蘇生する。指はコントンのタイムリーダーの上書きと共に切り口から再生した。

「お前ほどの四凶、はたして芹真事務所は押さえておけるか？
協会でも同じ結果だろう。
自覚しろ、トキ。
まだお前は気付いていないかもしれないが、お前は世界中の誰もが思っている以上に危険な存在だ」

「じゃあ、お前はどうなんだ？」

再生した銃身を更に斬り飛ばすが、その都度再生されて埒があかない。
銃弾の軌道を反らして身を護りつつコントン本人を狙うものの、致命傷を与えるに至れなかった。タイムリーダーの使い方を訓練で

学んでは来たが、現実にコントンは自分よりも遥か上をいく存在。レベルが違いすぎたのだ。訓練で埋まった差は僅かでこそないものの、肩を並べるほどでもない。

（ハッ、ハハハハ！
思っていた以上に腕を上げているな！）

冷静を装っているトキの表情だが、その内側には激情の火炎が垣間見えた。振られる剣を通してそれが伝わってくる。
グリップで鎬を打ち払い、腰を引かせて剣撃を躱し、わき腹目掛けて鉛弾を見舞う。だが、十二分の余裕を持ってそれを避けられ、反撃の剣を手の甲に貰う。
鎬打ち。
引き金にかけられた指が力を失い、銃撃が途切れる。トキの攻撃はそこに集中した。
得物（デザートイーグル）を破壊するのではなく、叩き落すように攻める。

「トキ。
世界から見たお前の存在とはどういうものか、考えたことはあるか？」

「お前はあるのか？」

「あるさ。
ククッ、世界世界といえば広くも取れるし小さくも取れる。その意味を解する者もいれば、意味なくして感じ取れる者もいる。

意味は違えど世界というものは結局、スケールの中だ。インサイダーとアウトサイダーで構成されている。　平素ならば、どんなに外側の存在を目指そうと、常識と理解で追う内は決してそれに到達することはない。それとは逆に俺たち、凶源（カオストリガー）は外側に在りながらスケールの中に填まり込もうと必死にもがく。

クフフハハッ、わからないだろ？

揉め事の原因になれる素質が大いにある。だから他人とのコミュニケーションを意図的に断ったり、自分だけの世界を確立させて他への影響を極力減らす。そんなことをしたことはないか？」

「それがお前の考えか？　今日最大の意味不明だ！」

「やっぱり理解できないか。思った通りだ。

自分が持つ影響力を少しでも考えたことはあるらしいが、本当に微々たるもののようだな。自分の価値を知らない、自分の物差しでしか尺を知ることができない。全くめでたい奴だな、お前は。これからは否応無く世界がお前をリクエストするだろうに、何も知らずにその場に立ち会うのは難だろう？

それ故さ。

だからキュウキは言った。“トキに世界の真実を教えてやろう”とな。　もう一度聞こう。　一緒に来ないか？

俺達の正義と世界の正義の違いを見せてやろう」

双剣を喉に突きつけられながらもコントンの顔から笑みは消えない。

押しているはずの刃は皮膚に切れ目を入れることすらなく、接触したまま止まっていた。トキの攻撃は完全に止められ、逆にコントンの時間がトキを支配し始めていたのだ。

「芹真はお前に何も伝えないだろう。
だが、俺達なら隠し事などせず、真実をお前に伝えることができる」

「何を知っているから俺を口説くつもりだ？
悪いが俺は――」

「会長の秘密、とかな」

「コラ、俺の秘密を何でお前達が知っているんだ？」

この瞬間、コントンの顔から笑みが消えた。トキも意識だけそちらに向け、会長の行動を知り――何故動けるのか――疑問と冷や汗を覚えた。２人の意識を自分へ誘った会長が両手を組み合わせ、手に力を込めた。その光景を見守っていたトキとコントンの前で、静止世界は解除してしまった。
交差した両手が離れ、再びゼロ距離へと戻る。たった一度の拍手。それが支配地域下で対峙する２人の力を完全に無力化してしまったのだ。

静止世界が解かれてざわめきが戻る。
３人を取り巻く中、最初にその光景に気付いたのは愛院だった。

「誰だトキ、そいつは！」

視線を受け、コントンの顔は笑みで染まってゆく。

高城や愛院が首をかしげつつ身構え、魔術師2人はだだ漏れる圧倒的力の差にたじろぎ、鬼3人と蓮雅は新たに姿を現してトキと対峙する男を囲み、ビアンカは見覚えあるその顔から名前を口にした。

「四凶のコントン！？」

「……フン、まぁいい。
日本時間の今夜、9時。
俺たちは協会を中心とした世界に宣戦布告する」

コントンの目が、集まる視線のほとんどを排して会長からトキへと移る。

多勢に無勢。
トキと会長さえいなかったら苦もなく殲滅可能だった。しかし、自分と同じ時間の中で行動できる2人がいては無傷で済まないことは必至。
殲滅が無理なら、次回へ持ち込む他なかった。

「会長、近いうちにお邪魔する」

「わかった。茶でも入れて待ってる」

捨て台詞を吐き、あっさりと撤退していくコントンの背中に会長は余裕の返事を送る。が、それはコントンよりもリデアや鬼達に強烈な釘を刺すことになった。殴り込みを連想させたコントンの台詞

に対し、会長が放った言葉には充分に含みがあった。すでに対策は出来ているといわんばかりの態度と口調。充分な余裕。

「だ、大丈夫なのかね、会長？」

「ああ。大丈夫だ。
たかが３００万程度の四凶で攻めてくるんだろうが、その程度じゃ問題ないさ」

「いや、それは軽視しすぎではないか？
仮にも敵は四凶。それに、何らかの策も用いてくるはず」

「確かに敵は四凶。
ＳＲ、非ＳＲを問わず、世界には何十億もいる。その中から精鋭だけを選抜しても１００万はくだらないな。
しかし、烏合の衆」

会長は続けた。
四凶が動くのは今回が初めてじゃないと。
だから対策はいくらでもあった。　例えば、各国家やあらゆる機関の軍事力の全てを以って四凶の殲滅にあたる作戦を展開することも、四凶を一箇所に集めて核攻撃で滅することも、協会長であるオウル・バースヤードには可能なのだ。

「でもそんなことはしない。そうすれば困る人間がいるんだよ」

全員が疑問を浮かべる。
核を用いるプランは確かに過激だが、四凶を滅することで困る人間などいるのだろうか。
負を絶つことで、悪循環とその連鎖・感染は抑えられるのではないだろうか、という意見を耳にして会長は頷く。

「残念ながら、その考えは間違っている。
トキ。君はさっき、コントンの口から凶源（カオストリガー）という言葉を聞かなかったか？」

「聞きました」

「人は不幸無しに進歩しない。みんなそれを忘れていないか？」

数人がその言葉に気付き、納得し、数人が会長の答えに疑問を浮かべる。
認めざるを得ない状況に苦虫を噛み潰す思いを抱きつつも、金角は質問した。

「しかし、それが連鎖の原因になるのでは？」

「そう。
だが、不幸を知らなければ、いつか始まるであろう連鎖の開始を防止・或いは連続を止めることはできない。
仮に知らないまま生きていくとしよう。結果として、その人物は何も知らずに四凶となる。どういうことか分かるかい？
君のように、多くを知らずにもがいて他人とぶつかり合う。これ

も、四凶という属性がもたらす必然だ。無自覚の暴力さ」

全てを理解したわけではないが、いくらか心当たりがあった。
そんな会長の言葉の前に金角は黙り、入れ替わって銀角が質問する。

「それじゃあ、四凶がいなければ人類全部が無自覚のままその属性を得る、ということか？」

「全部ではないが、まぁそういうことだ。
知ると知らないでは両者に大きな差が生まれる」

そもそもの始まりが零。幸をプラス、不幸をマイナスとした時、それぞれの積み重ねが一定以上に達した時に分岐は始まる。
積み重ね、分岐し、時として反転する。これの連続である。
経過と過程。
教養数学のような数字で取り扱うことの出来ない感情と思考。それらをプラスとマイナスのどちらに積み重ねるかは環境とタイミング、それまでの経過によって左右される。

ここまでを聞かされて理解できたのは蓮雅ただ1人。会長はさらに続けた。

全てが無知ならそれは零であり、始まりである。
幸せも悲しみも知らない。これからという様々な未来を経験し、価値と感情、欲求や暗黙を覚えて内に蓄積し、知り得てきたそれらに新たな考えを見出して更新、伝播する。

歴史においても人々はそれらを既に体験している。　偉人――マルセル・ブルーストが言うように、人には幸せも大切だが、精神を発達させるために悲しみも必要なのだと。四凶という存在は時として必要以上の悲しみや怒りを人に与えるが、しかしそれは――

「理屈上、四凶とは人類に“欠かせない存在”ということ？」

「その通りだ。蓮雅先生」

四凶という存在は、人類を前進させてきた要因の一つである。戦争や大事件、衝撃的な悲しみや怒りの根源が彼らであり、その結果、人類は同じ悲劇を繰り返さないと誓いを重ね、進歩を続け、意識の共有を始めた。

会長の口から放たれた結論に鬼たちは黙り、愛院と高城は混乱、魔術師と蓮雅、ビアンカは複雑な心境となった。呆然とするトキの顔を覗き込み、今度は会長が質問する番である。

向いている方向こそトキだったが、会長はこの場にいる全員にそれを聞いていた。

「それでも君達は四凶を根絶やしたいと願うか？」

異なる善と善のバランスが崩れた世界を待っているのは、本物の渾沌。

トキの内心で、コントンという意味が少しだけ変わった。

アウトサイダー。インサイダー。

全く理解できなかった会話の一部が、パズルの欠片と欠片のように噛み合う。

本物の渾沌（ソレ）を知る者と、現在進行形でソレに向かっている世界。本物を知らない世界はどんなに背伸びしようとそれに至る事はない。それになる条件は流されること。背伸びせず、縮こまらず、ただ流れるがままに流れ、その果てに絶望して初めて気付くこと。それがインサイダーからアウトサイダーへと変わるということ。

また、渾沌を知る者が知らずに突き進む者たちの中に溶け込もうとするのは難しい。本物を知る故に感じるであろう知らぬ者達から発せられる温度差。もがいているつもりなのか、抗っているつもりなのか、本物を知っている者には理解できない。アウトサイダーがインサイダーという大多数の中に溶け込み、またその中に填まり込もうとするというのは非常に難易度が高く、そして――

世界のバランスを整える負の役割、“本物の四凶”こそが、今回の敵である。

それを認識してトキはコントンの言葉を思い出していた。

「さて、そろそろ面倒くさくなるので、ここらで解散するとしよう」

一様に皆戸惑った。難題を出されてすぐに解散宣言である。

突き放すような、あるいはそれが宿題とでも言いたげな――現に会長の表情はそれらしく――しかし、口裏合わせが間に合わないと分かっているこの状況では、潔く会長の案に従うのが上策。襲撃側だった金銀の鬼からすれば手厚い助け舟でもあり拒む理由はない。

「帰れって言うのか……」

「ん？　帰りたくないのか、トキは」

言い終えてからトキのクラスメイトが襲われたこととを思い出し、会長は珍しく言葉で躓いた。

今更言葉の綾だったとも言えない会長は、完全に忘却していたことを悟られないよう、慎重且つ迅速に言葉を選んで取り繕う。が、その言葉は半ば本音を含んでいた。

「何よりもまず、トキは考えてくれ。ゆっくりでいい。四凶とは本当に必要なのか、または不必要なのか。それを考えるためにも落ち着こうじゃないか。な？」

メンバーはすぐに解散した。蓮雅、ビアンカ、会長、高城の４人は現場に残り、魔法使い３人は飛び去り、金銀の鬼は山に入って姿を消し、愛院は人知れずどこかへと走って去った。藍はトキに事務所へ帰るように勧めたが、トキはそれを無言で断る。

静寂の内。

新緑に包まれた村の出入り口をくぐり出る瞬間に、トキの視線はバースヤードの視線とぶつかっていた。お互いが四凶であり、ＳＲであり、人間である。同じ敵に向かい、しかし異なる勢力に属し、また立場も学生と協会長と、明確に分かれている。

多くを知らない者と、その逆の英知者。

それでも共闘できる事実にお互い喜びに近い感情を抱いていた。

抱いてはいたが、最後の最後で同じ疑問が脳裏をよぎり、２人の視線は外れた。

『お前の四凶は一体何？』

２人は同様に、今まで出会ってきた四凶のどれとも違う気配を互いの内に感じ取っていた。

第４０話－Ｃｈａｏｓ　Ｔｒｉｇｇｅｒ－（後書き）

虚しさが精神の大半を占める中、午後の空とともに見上げる自分の家は、どうしてか温もりが感じられなかった。

しかし、今までも温もりというものを滅多に体験してこなかったトキにとって、自分の家というものは温もりある場所というより、自分だけの世界が展開される勝手気ままが通じる場所であった。

自分の望む娯楽、何者にも縛られない時間。全て自己責任で片付けることのできる独り身という自由に満ちた空間である。

「どうして……俺は帰ってきたんだ」

今、トキの目に映る自宅は何の魅力も感じさせない、ただの物質の集合でしかなく、そこに自由や気楽を見出すことはできなかった。

それでも――

第４１話 一四凶宣戦！渾沌に沈む世界 一

トキが家に入って最初に行ったこと、それはうがいと手洗いだった。

小学校の頃から言われていた衛生管理だが、中学に上がってからは疎かになり、高校になると完全に怠るようになってしまった、忘れられた管理行動である。

混乱する頭を少しでも覚ますためにと実行したが効果は微々たるもの。

次にしたことは家中に掃除機をかけ、夕飯食材の確認である。それからテレビのスイッチをいれ、２階へ登り、携帯ゲーム機を部屋から見つけ出して１階に戻る。携帯ゲーム機の電源を入れたところで飲料水を探しに冷蔵庫へと向かい、その過程で窓から差し込む夕日に目を細めた。フローリングの床が冷たい。いつもなら感じることのない冷たさにふとした疑問を浮かべた。ここは自分の家なのか。その自覚が薄れ、疑問が疑問を生み、連鎖してゆく。何故そう感じるのか。どうしてこんなに余裕がないのか。混乱している。

コップを食器棚から取り出し、棚のガラス戸に映った自分の姿を再認する。村から戻ってきた時のままの汚れた制服姿。暗いリビングでため息が漏れる。僅かに気が楽になった錯覚に陥り、コップ一杯の炭酸を一気に飲み干す。それからゆっくりと２階に戻って私服に着替え、再び階段を降る。コップに二杯目を注いでゲーム機を手に取り、スタートボタンを連打する。約３分ほどの静寂。ゲーム機の音量をミュートにしたままプレイしていたトキだったが、どうにも気が乗らず、音量を上げてみるものの無残な結果に伴う効果音ばかりがリビングに響くだけだった。電源を切ってゲームを終了し、テーブルの上に置いて２度目のため息を漏らす。テレビでは小学生

向けのアニメが流れ始めた。気の滅入るままに、トキはチャンネルを回してみるが、すぐに気力を失ってテレビの電源を落とし、2階へと上がった。　自分の部屋に入り、持ち込んだコップをパソコンデスクの隅に置いて、ノートパソコンの電源を入れる。冷却ファンの起動と共に画面が色を帯びる。準備が次々と整う中、完全にパソコンが起動するまで椅子の背もたれに身体を預け、汗をかくコップに手を伸ばす。

　この時、距離の目測を誤ったトキは手の甲をぶつけてしまい、パソコンデスクの上からコップを落としてしまった。

　しかし、コップと中身の炭酸飲料が床に到達するよりも早く、トキのタイムリーダーは展開した。空中でコップを手中に収め、零れた液体を空中で回収する。一滴残らず右手に持ったコップで掬い集め、最後に左手でコップに蓋をする。タイムリーダーの解除と同時に器と蓋の中で液体が跳ね、掌を濡らした。

「ふぅ……」

　改めてコップをパソコンの画面前に移し、部屋中を見回してティッシュを探す。手を濡らした炭酸飲料が床に零れ落ちないように注意しながら椅子を離れて部屋を探し回る。積み上げられたゲームソフトの山の中に埋もれた箱の角が目に付き、手を伸ばして一枚取る。液体を拭き取り、ゴミ箱目掛けて丸めたティッシュを投げ捨てる。ちょうど起動したパソコンに向かい、トキは早速インターネットに接続して、莫大な情報が行きかう海でサーフィンを始めた。　主に海外のニュースを中心にリンクしてゆき、複数のサイトを同時に並べ、眺めて情報を求めて泳ぎ回る。だが、トキの求めた事件や速報は一切上がっていなかった。ネットサーフィンを中断して部屋のカーテンを閉め、蛍光灯のスイッチを入れて再び画面と向かい合う。

公のニュースサイトや、個人運営の新聞サイト、ニュースブログにもトキが求めた情報は何一つ載っていなかった。

しかし、会長は世界中で同じ事が起きていると断言していた。

四凶達による一斉蜂起。

多くの国でそれは成功し、少数の国は辛うじて予防・阻止したという。その中で日本も、予防こそできなかったものの半数にも満たないが多数とは言えない、しかし決して少数ともいえない犠牲で四凶集団を壊滅させるに至った。成功とは言い難いが、失敗とも言い難い。

数十人もの死者が出ている時点で成功とは言えないだろう。

「……」

もし、そんな事件が世界規模で起こっているのなら、ニュースの速報等で報道されていても不思議はないはずだった。が、それにも関わらずその類のニュースは一切流れていなかった。事件の片鱗さえも見せない報道の沈黙。何が起こっているのか考え、しかし一切の見当がつかないことに苛立ちを覚えた。頭を切り替えて椅子から立ち上がって画面内に浮かぶ全てのウィンドウを閉じ、パソコンの電源をオフにして上着を羽織り、椅子をデスクの下に収納して部屋の電気を消す。扉を潜って階段を降り、1階に下りてきたところで一度深く深呼吸。息を吐いてからリビングに入り、ガスの元栓を確認してから廊下へと戻り、玄関へと進む。使い古しの靴を履いて外に出る。鍵を閉め、アスファルトの上を歩み行く。

どこへ行こうという宛てはない。

無計画のままトキは歩を進めた。

歩行中に頭を埋め尽くすものといったら、四凶事件を中心とした様々な色濃い一日だった。四凶は何を求めて蜂起したのか。自らも四凶ならいつかは同じ事をしでかすのか。今後もこんな事件（こと）が繰り返されるのか。　四凶とは本当に必要不可欠なものなのか。

凶源：カオストリガーとは、真実なのか。

会長が言った通り、それこそがこの世に最も必要である最低限の不幸だとしたら、他の四凶達は何なのか。どうして存在するのか。

茜に染まる街をひたすら真っ直ぐ歩き、喧騒に包まれた隣街に至り、更に足を進めて街中を通過する。

騒音が消え、人影がまばらになり――なくなり、人工と自然の色合いが入れ替わってゆく。金属やガラス、大きな電飾看板が姿を消し、代わって海と空の稜線が視界に飛び込む。　ふと、トキは海岸に到達していたことを自覚した。長い長い道のり、岸壁の先まで歩いて来た結果がこれだった。この先はない。戻る以外の選択を許さない状況になって、初めてここまで来たことに気付き、そして驚いたのだ。この場所に来るのは今日が初めてであり、すでに夕日の半分は海の彼方へと隠れていた。家を出て約一時間。無自覚のままここに来れた自分が俄かに信じられなかったのだ。

「……」

踵を返そうとしたトキの視界にそれが飛び込む。滅多に見ることのない夕焼けの海。オレンジを乱反射する波と、沈み行く夕日。押し寄せる小波のざわめきは、遠く背後から伝わる人工物の騒音を掻き消した。潮風に鼻腔をくすぐられ、もどかしくなった鼻をすする。

所々砕けた人工物の上から眺める海に足は止まり、同時に、それまで意識していなかった疲労が湧き起こって膝を折り、疲労と感動の前に観念したトキは汀（みぎわ）に腰を降ろした。
回復を待ちながら沈んでゆく夕日を眺める。
夜空が背後から頭上へと差し掛かり、夕日もその姿のほとんどを地平の彼方に消した頃、トキは腰を上げて立ち上がり、僅かにオレンジ色を残す空へ向かって声を上げた。

「俺は何だ？」

岸壁から少しだけくすねた時間を用いて右手に剣を作り出す。会長や銀角、愛院を驚かせた双剣の一振り、畏天（いてん）。元々は三国志に登場した英雄が使っていた剣を元に創り出されたと言う、裏の武器商たちの間では有名な代物（コピー）。伝説の贋作とまで呼ばれたその剣は、コピーというにはあまりにも優秀過ぎた。その使い勝手の良さはオリジナルをも踏襲しており、畏天という剣そのものがオリジナルの域に達していたという。
トキにとって驚きだったのはその武器より、前の使用者が自分の父親であったことの方が遥かに衝撃的だった。

（どうして四凶なんだ？）

村から出る直前に銀角は言っていた。力があるからこそ、それゆえの四凶だと。
人質になったクラスメイトや村人を救う直前に会長は言った。他の四凶を妨げることが、自らの四凶という属性を弱めることに繋が

ると。

力があって何故それが四凶になるのか。

「四凶でさえなければ、もっと多くの人を救えたんじゃないか……」

立ち上がり、誰に言うでもなく言葉に虚しさを乗せて放出する。

脳裏に浮かぶ女生徒の死。眼下で起こった銃殺、クラスメイト：和霞瀬（わかせゆお）癒桜との別れ。あまり会話を交えたことがなかったものの、険悪な関係のクラスメイトではなかった。誰にでも親しく等しく付き合う素直で柔和な女生徒だった。

しかし、命を落としたのは彼女だけじゃない。何十人もの学生や村人達が殺されたのだ。

自分の目の前、足元で。

「何で俺なんかに……」

畏天が右手の中に消える。

戦闘と長距離移動による疲労が再び足を震わせていた。そこにやり場のない怒りとぶつけようのない力が混じって葛藤を生んだ。震える身体を落ち着けようと膝を折り、荒ぐ呼吸を整えようと深く呼吸し、熱を覚えた身体を冷まそうと左手は冷たいコンクリートの堤に触れる。

「何で……どうして俺なんかに」

左手の中で時間の回遊が生まれる。足場のコンクリートに触れていた左手が時間を奪い続けた。

「こんなモノがあるんだ！」

右の拳が叩きつけられると、岸壁には巨大な割れ目が走った。

時間を奪うということ。

砕けた拳骨と破れた皮を左手に溜まった時間が修復を始める。が、それより速く左手に剣を生成させる。　回復は止まり、生み出されたもう一振り：星黄（せいこう）の刃が左手に食い込む。皮膚が切れ、肉を擦り、朱を滴らせる。だが痛みはない。心苦しさに比べたら、無痛にも等しい虚しく、だが確かな痛みであった。

星黄を分解しながら傷口を塞いでゆく。自分に何度も落ち着くように言い聞かせつつも、頭の中は後悔と疑問で混乱していた。

何故自分にＳＲがあるのか。なぜ四凶になったのか。晴れない疑問の曇天に苛まれ、思考に悪循環が生まれようとした。それを何とか冷静を呼びかけて思考を廃棄するのを防いだ。

（ここなら誰にも邪魔はされないし、それに……時間はある）

傷を治したのち、血で汚れた服の修復に取り掛かろうとした時だった。

「大丈夫ですか？」

膝をついた状態のトキに声を掛けた女性がいた。

彼女は外見年齢で言うとトキよりも若かった。　少女。黒髪の彼女は、知りえる限り藍と同じくらい独特の美しさを持っていた。和風という言葉に違和感を抱かせない現代人。

それよりも、トキは僅かの間を置いてから、自分が唖然としていたことに気付く。　右手や血に濡れた服を隠すように身体の向きを変えてからやっと、トキは彼女の質問に頷いた。それを確認した彼女はトキの隣に無言で腰を下ろし、真っ直ぐに前を見つめたまま言った。

「迷惑だったら言ってください」

それだけを言って彼女はトキの隣で夕焼けの空を見守った。　迷惑だと言いたくても言えなかった。彼女のおかげで新たな疑問が浮かび、息苦しさが増した代わりに、僅かに気が楽になったのだから。しかしトキには質問する気が全く起こらなかった。　誰だ、と聞くことも。ここで何をしているのか、と聞くつもりもない。

自分が四凶なら、相手と知り合うことで不幸を始めてしまう可能性がある。その可能性が１％でもある限り、下手に相手と知り合うことは避けるべきだと考えての“行動／抵抗”だった。

「……」

「……」

静寂が過ぎ、夕焼けが夜闇に染まっていく。星明りと灯台の光が存在をあらわにし、潮風は容赦なく熱を冷まし始めた。

ひびの入ったコンクリートの上に腰を下ろすこと1時間弱。長く続いた静寂を少女は破った。何の前触れもなく。

「私のお姉様はとても大雑把な人ですけど、とっても人想いです」

「……そうか。お姉さんがいるんだ」

「はい。
そのことなんですが、覚えていますか？」

「は？」

姉がいる。大雑把だが人想いという性格の姉が。

そこまでは理解に苦はなかった。だが、その後に続いた台詞には難があった。いきなり覚えているかと問われようものの、去年から初見となる人々との接触記憶は多々あるため混乱し、困惑した。

どれか、誰か、誰だ。　少女の顔を観察しつつ、それに近い顔立ちの人物を必死に検索する。真っ先に思い浮かんだ顔は藍の横顔。だがこれは間違いだろう。

（和風、整った顔立ち、黒髪……）

そもそも去年から今日に至るまでに起こった出会いを全て覚えているわけではない。希望の薄い攻略法にすがっていたトキだったが、記憶検索を打ち切って素直に覚えていない旨を伝えた。　それを予測しいた少女はかまわないと答え、次いで姉とトキの顔合わせがほんの一瞬の対決だったことを教える。

「戦った？」
「はい。あなたはお姉様と戦いましたよ。ゲームで」

ゲーム。
その単語を聞いたトキの脳裏に行き着けゲームセンター：Ｖｅｒｔｅｘ　の店内映像が浮かんだ。記憶を深く、深く潜り探っていくと、何日分かの記憶が検索に引っかかった。

「踊るゲームで競っていたでしょ？」

決め手を得て、検索はある日で止まる。
トウコツと初めて戦った日。
その直前まで確かにゲームセンターにいた記憶があった。学校で面白くない出来事が続き、その憂さ晴らしにと友樹らに連行気味に来店し、ゲームを繰り返して、テンションの浮き沈みを繰り返した後、得意のゲームで調子を取り戻し始めたところで彼女は現れたのだ。

ゲームの対決で初めて負けたのがこの時だった。

「あぁ、あの時のＭＡ●３００が得意なお姉さんか」

「覚えていてくれましたか？」

「まぁ、な」

「お姉様がもう一度あなたと遊びたいと五月蝿くて仕方ありません」

笑み、口元を軽く押える彼女を盗み見、トキなりに考えてみる。彼女の姉はもう一度自分と遊びたがっているということは、彼女の姉もここに来るといことだろうか。ここで足止めして、時間稼ぎをしているとも考えられなくはなかった。

「どうか、お姉さまに見つからないようにしてください。破綻しますから」

「破綻？」

「お姉様はゲームと小うるさい音楽と野蛮なことを好く人です。しかし、そのせいで生活は苦しいのです。主にゲームにお金を使って、ろくな食生活も送れない状況です」

トキの考えとは逆の現実が少女の口から語られる。

「なるほど。それを注意しに来たというわけか」

「あ、いえ。注意というか。その……あまりゲームセンターには近づかない方が。
お姉様は負けず嫌いな人ですから、一度狙われたら厄介だと思ったのです」

「わかったよ。ゲームセンターに通うのはなるべく避けるよ。
そんな余裕ないし……」

謝罪の言葉を述べる彼女に了承の旨を伝え、謝る必要がないことを証明した。再び訪れた静寂と沈黙が熱を帯びた頭を冷やす。
生活がままならないということは、この娘は苦学生か何かだろうかという疑問が頭をよぎった。

「ところで、君は高校生か？」
「いえ。学校には行っていません」

「中退とか？」
「……いえ、そういうわけじゃないんですけど」

「もしさ、ご飯とかに困っているなら一緒にどうだい？」

苦しむ者を助ければ、四凶は弱まるのだろうか。疑問を抱きながらもトキは彼女の返答を待つ。
しかし、あまりにも唐突且つ大胆で予想外な一言に少女の顔は怪訝に曇っていた。目の前の男に常識は無いのかと問いたい衝動に駆

られつつも、口を硬く閉ざしてトキの真顔を覗く。見事なまでに考えを読ませない表情が彼女に苦笑いさせた。

「大丈夫です。そこまで困っていません」

「そうか」

言って彼女はトキの様子を探るため、左手でトキの右手を握り締めて見せた。得たいの知れない男だが、安心は出来る。彼女は一つだけトキという人間の特徴を理解した。触れてみて理解できた。この男子の中に邪なものが無い。正確には価値を持っていない。

人気のない岸壁の端、灯台の光からも遠く、遠くからの音も波に掻き消され、周囲は暗くて見通しが良いとは言えない暗さを含んでいる。単刀直入に言うなら、性犯罪にはうってつけの場所ということだ。これまでの生活の中で、少女は幾度となく襲われそうになり、その都度、姉と共に男たちを撃退してきた。

少女の知る男達と比べ、隣の年上ではあるが少年には、そういう面が全く見られなかった。変わっているといえば変わっており、しかし、僅かながらも信頼はできた。

「私は、スミレと言います。
自己紹介が遅れてすみません」

「それを言うなら俺もだよ。
先に名乗っておくべきだったな。俺はトキ」

挨拶を交わしたところでスミレの顔に疑問が浮かぶ。　トキ……

トキ？　どこか聞いたことがあるような無いような。安定しない生活を続けているせいもあってか、あらゆる人々と話し、自己紹介し、知り合ってきたのだ。主にアルバイトだが。気のせいか聞き覚えがある名前に逡巡し、投げやりにそれを考えるのをやめた。

「ところで、お姉さんは働いているのか？」

「まぁ、今頃喧嘩でしょうけど」

「喧……嘩」

「大丈夫です。お姉様はゲーム以上に喧嘩が得意ですので。正直に申し上げれば、それで毎日食いつないでいるのです」

素直に驚き、そして感心した。

喧嘩で稼ぎ、生活を続ける。そんなゲームじみた話を現実に聞く日が来るなど思ってもいなかったし、そんな人間が実在するのかということすら疑っていたトキにはちょうどの良い再認の機会だった。世界とは個人が考えるよりも遥かに複雑に構築されている。構築する人々もまた個人が考え、想像して思い描いたもの以上に多種で多様な性質を持って相互に関係しあっている。

トキ自身のように親を亡くした者や、スミレのように生活に困っている者、藍や芹真のようにそれでも強く生きていく者、世界を支配する協会長。ボルトや四凶のように、正直に言えば全く予測できないアクションで世界を動かす者達。間違ってはいけない事実は、世界を動かしているのは存在する全ての人々、全ての物々。決して個人ではないこと。

（あ――そうか）

思考の果てにトキは、マスターピースという亡き者の思考に辿り着いたのであった。

世界を動かすのは人じゃない。

人と物。

物と環境。

目に映る物質と映らない物質。目に映るものは当然物質であるモノ達。人と人の関係性や人が使役する道具、それらを生かす環境。開拓と保護を繰り返して人類が辿り着いたのが今日。　世界はそうやって動いている。人が動かし、物がそれを助け、環境とその関係が融合して明日を切り開く。文明というものはその開拓の成果。道具を使って森林や荒野を開拓するように、人が物を使って新しいモノを作る。街や道、文明。

真にそれらを作り上げてきたのは前に挙げた三要素ではなく、その三つを連続させるモノ――つまり、関係という繋がりである。

「要素なんだ……」

「え？」

会長が支配しているという世界の中。しかし、会長自身も要素でしかない。

コントンをはじめとする四凶もそうだろう。

どんなに強大な力を持ったところで結局のところは個人であって、全体を構成する要素の一因でしかない。

「ヨウソがどうかしました？」
「いや……ちょっとだけ悩みが解決した」
「何かをお悩みでしたか」
夜闇が深くなり、星の輝きがより明るく見えるほどに夜が深まった頃、初めてトキはここにいる理由を問われた気がした。
しかし、いま抱える悩みを話すべきか、否か。
「……」
「申し上げ難いことでしたら無理にとは言いません。ただ、私で良いのでしたら話相手程度はできます。話さないより、少しでも話した方が気が楽になるかもしれないので」
否。
話すべきではなかった。
「私は昔から2人のお姉様や、お兄様の悩みにたくさん付き合ってきましたから、愚痴にも慣れています。心配はありませんので、話せるのなら話しておいた方がすっきりと眠れますよ」
念を押す彼女に圧され、トキは自分が四凶であることを認識しつつも口を動かした。

「ちょっと、事件にさ……今日、事件があって、俺の学校の人たちやその場に居合わせたたくさんの人たちが犠牲になったんだ」

「事件……それは、一体？」

「銃とか刃物とか、危ない奴をたくさん持った人たちがいきなり現れてな。

俺もそこにいたのに、誰も救えなかった……」

トキの肩が落ち、視線が足元のコンクリートに落ちるのを見て、スミレは質問を重ねた。

「襲われたんですか？」

「あぁ」

「辛いですよね……知り合いが亡くなるのは」

「俺のせいだ」

強い風が吹きつける。身震い一つしないトキの身体に寄り、聞き取り難くなった言葉を零さぬように拾う。

トキが目の前で知り合いを失った気持ちはよく分かる。自分の肉親が目の前に亡き骸として転がっている時の虚構と絶望感。あれは言葉で表すことができないほど深く、大きく心を抉る。寂寥と悲壮、憤怒が混じり合い、理性を損ねて暴力を目覚めさせる。

「いえ、それは間違いだと思います。
それが事件なら、悪いのは襲った人たちです。トキさんは被害者です」

「……四凶、という言葉を知っているか？」
「いえ、初めて聞きます」

「良くない物事の原因――その素質を持った人達のことを指す言葉らしい」
「良くないこと……今日の事件も、それが原因だというのですか？」

「そうらしい」
「らしい？」

「今日それを嫌なほど自覚させられたし」

会長やコントンは四凶というものがどんなものかを説明した。初めて聞く言葉でなかったにしろ、四凶という意味内容の理解が追いついていなかったのは事実だ。それを踏まえて銀角の言葉を聞き、自分が持つＳＲという強い力がその源になっていることを認めた。

――いや、認めたのはたった今だ。

「それでも生きてここまで足を運んでいるでしょう？」

頷く。ただ、自分が生きていていいのだろうかという疑問が浮か

んだ。何故村が襲われたのかという理由を大半の人間はそれすら知らずに襲われたのに、自分はその理由を知りながらも説明することが出来ない。

コントンが言っていたように、アウトサイダーとインサイダーは同じ世界で生きていくことが難しい。そもそも価値観や方法・過程の差異を始めとし、持てる資質の違いが生む温度差の高低は高く、容易く馴染めるものではないのだ。

「酷な言い方ですが、死者には蘇生と後悔を祈願せず、凛として送るべきだと思います」

「……そうだな。悲しんでいる場合じゃないよな」

「違います！

悲しんであげることも鎮魂です。ただ、いなくなった人達のためにも自分が立ち上がるんだという強い意思で、生きることに諦観しないで下さい」

面と向き合い、スミレの気迫に押されるトキ。とても他人事と思えない圧力を帯びた言葉と真剣なその顔が、芹真事務所と知り合ったばかりの頃の記憶を喚起させた。

これで終わりではないのかと嘆いた自分。それが始まりだと現実を突きつけた藍。ＳＲという世界のもうひとつの顔を知った以上、そこから逃げ出すことは出来ないとも。　だから死なないように守り、エスコートすると。

まただ。これが終わりじゃない。

四凶が存在する限り犠牲者は絶えない。会長は必要不可欠な四凶

も存在すると言ったが、トキの知りえる四凶の中で必要不可欠と思える四凶は、コントンや今日の事件を計画したキュウキじゃない。彼らが生きていれば犠牲者の数は増加する一途を辿るだろう。四凶が何かを企てているという話しと、コントン自身が言っていた今夜9時に始まるという四凶の声明発表からそれが推して測れる。

「それも、その通りだな」

「焦ることはないですよ」

ポケットから携帯電話を取り出して時刻を確認する。午後7時22分。ゆっくりと帰れば放送開始時刻には間に合う時間だった。吹き付ける風に寒さも感じ始めていた。隣に座るスミレを見送るべきか考え、悩んでいる時間がもったいないという結論が出て、トキは立ち上がってスミレに聞く。

「ありがとう。おかげで色々楽になったよ」

「どういたしまして」

屈託のない笑みで応えるスミレに、微かな違和感を抱きながら見送るという旨を伝える。トキに倣って腰を上げるスミレは表情を変えずに遠慮の意思で返した。

「私は大丈夫ですから」

「あ、そうだ。話を聞いてくれたお礼と言ってはなんだけどさ、もし困ったことがあったら芹真事務所ってところに来てくれれば――」

「芹真、事務所？」

「俺もそこで、バイトみたいなことをしているから」

逡巡するスミレの返答を待ち、僅かしてから了承の答えを聞き、トキは別れを告げてから踵を返した。夜の街へと向かうように歩き始めたトキは、スミレの言葉を繰り返し再認しながら、これから来るであろう現実に対して逃げないことを決意した。

今後、特に注意すべきは四凶の動きだ。芹真さんやボルトが何か動きを掴んでいるかもしれない。あの2人の情報網はインターネット並に早い。うまくいけばコントン達の居所を掴めるかもしれない。

しかし、この時点でトキに知る由はなかった。芹真とボルトは揃って四凶の動きをさして警戒するでもなく、申し訳程度の情報で観察を続けているだけだったということを。その情報の中にトキが欲する内容はひとつもないのだ。なぜなら、2人が最も警戒している勢力は以前から変わらず、協会なのだから。

「あ……！」

背後に漏れた声に思わず振り返るトキ。その目には顔を険しく歪めたスミレが身構えた瞬間が映った。何事かと眉をしかめたトキの頭に警鐘が打ち鳴らされ、小さく、小さく響いた。

（攻撃か――！？）

「いよおぅ！少年ん！
久しぶりだな！」

トキが身構えるよりも速く、肩から首にかけて衝撃が走る。感触から腕を回されたのは分かるが、相手は――

「カンナお姉様！
失礼が過ぎます！」

相手を理解した。つい先ほどまでの話に出ていたスミレの姉、カンナという女性だった。
あまりの衝撃で倒れそうになったが、辛うじてふんばり、顔を確認して姉妹であることに納得する。ただ、性格はスミレと違い、この通――

「バチタイじゃんか！ゲーセン行っとくか！」
「カンナお姉様今月はもうやめてください！
先月からの家賃がかさんでいるのですよ！」

「問題無いって。
さっきので大金が入ったんだよ。ほれ、４０万！」
「よ……！
それは、どのようにして？」

とりあえず空気の如く放置されそうな状況から逃れるべく、トキはカンナの腕の中でもがいた。
距離を置いて改めてカンナという女性を見てみると、スミレをそのまま大きくし、そこに藍やディマのような長い髪を加えたような外見の女性だった。スミレとは対称的と言っても過言ではないだろう。

「7人ほどぶちのめしたところで、いかにもソッチ系みたいな怖ぇ兄ちゃんが来てな、そいつを半殺しにあげたら命乞いしてきたんだよ。じゃあ、有り金の半分でいいから置いて去れ、って、冗談で言ったらマジで置いていきやがったのよ。笑えっだろ?」

「笑えません!
それに、人を揚げ物みたいに言わないで下さい。命が軽く聞こえます」

呆れるスミレをよそにカンナは笑い、トキへと振り向く。

「まぁ、それはとにかくだ!
久々だな少年!アタシのこと覚えてっか?」
「MA●300が得意なお姉さんだよな」

「おし!話が早ぇ!
行くぞ!」
「カンナお姉様!」

さっそく腕を引いてゲームセンターに直行しようとするカンナに抵抗する。

「あ、あの、ちょ――！
スイマセンが、今日は見たいテレビがあるので……！」
「テレビぃ？
そんなことよか踊ろうじゃねぇの！ゲーセンで！」

テレビが理由にならない今、そして彼女の強引さを知ったトキは半ば諦めかけた。人のことを言える立場ではないが、この人も相当ゲームに憑かれている。

「か、カンナお姉様。その、トキ様が食事をご馳走になると申しておりましたが――」

どうにか彼女の猪突を止めたかったスミレの口から出た言葉がソレだったが、トキとしてはその程度ならどうにでも繕える為、帰宅するのにいい口実だと感謝した。親指を立てて見せられてもスミレからはため息しか出てこなくなった。

「マジか？
ご馳走すると言われちゃ断れない性分なんでね。悪いが遠慮しねぇよ！」

頬を緩ませたカンナの足が止まった。ゲームよりもやはり食事の方が優先だということは分かった。そのことからどんな食生活を送っているのかも大まかな見当はついた。必要最低限の栄養量を摂取し、空腹に耐えながら過ごしてきたのだろう。

「ぅし！とっとと行こうか！」

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第４１話－

－四凶宣戦！渾沌に沈む世界－

はじめまして人類。はじめまして不自由。
私は不自由を代表する駒。
まず、ここでこうする理由からお話しよう。
人々の生の始まりが何の装飾もなく始まるように、この蜂起がこうして始まるのも、大規模だろうが演出でなく、派手だろうが“飾ろう”という考えから来る行動でもない。
ただ向き合うため。
その目的のみで今、世界と向き合っているのだ。

『私達のことを一言で呼ぶなら“四凶”。
この世にあるべき生物の姿本来を保ち続ける者だ』

多くの人々は知らないだろう。
あなた方が手にしている自由というものが、許可され与えられた自由であるということを。ごく一部の人間を除き、この事実を知る者は世界中で１００人にも満たない。
しかし、

『事実の無知を恥じることはない。知れずにいて当然の支配と支配者が跋扈しているのだから』

そもそもこの世界に存在すべきでない、始原は彼であり、隷属する者達の存在を許可して共存を試みたのも一人の男が始まりである。

世界に叫ぼう。
いま、この世に何十世紀と生きながらえている人物がいると。
君たちを歓喜させる偽りの自由をも操作し、支配している人物がいることを。
彼は事実上の支配者。

『しかし、その支配とそれを行使する者に対して、我々は異議を唱え、その為に立ち上がることを宣言する』

彼らは自由を奪ったのだ。
暗黙を創って無意識の内へと刻み、常識と偽って抑制と抑圧を始め、本来発揮されるべき個々のそれらは迫害された。その果てに人という階級が現れ、本能は無意識という暗く深い森の奥へと追いやられた。

人々に聞こう。
理不尽さえ感じさせない巧妙に仕組まれた理不尽をどう思う。

何も知らされずに生かされているということに。
認識の外側から監視され、いちいちの行動が筒抜けであった事実に。
寿命による辛苦の別れや苦悩を抱えて生きているにも関わらず、そいつは寿命を知らないかのように生き続けている現実に。更に、それによって世界へと害をなしているということに。

『本物の自由なんか無い』

違和感を感じたことはないか。
自分の必要性や孤独にも似た浮遊感。理由なき悲しみ、根拠無き怒り、意味の無い繰り返しと無駄でしかない抵抗。

自分の価値を認識したことは無いか？
自分に値段をつけるならいくらだ？
今、自分を取り巻く環境は、自分の値段に見合った扱いをしてくれるか？
また、自分からそうしているか？

違和感を感じたことはないか？

『自分で選びたかった道を選べない理由。
その道理が通らない理由はわかりきっているろう、と声高に叫びたい衝動を抑えている人間もいるだろう。個々の我儘が通らないのは、お互いが関係を持ち、関わることができ、つまりネットワークに当て嵌められているからであるからだと。一つの我欲が多数の欲に感染し、引き金となってしまう。そこから悲しみは生まれる。
そう、言いたいのだろう』

だがもし、その理論が間違っていたらどうする。
理解理解と口を揃えて同種の答えばかりを返す者達は、実際にその答え（せかい）を見てきて胸を張って言っているのだろうか。果たして、その理論が必ずしも正しいと言えるのだろうか。
支配者に問おう。
これがお前の求めた世界と、創り上げたかった世界なのかと。

『人々よ、聞かせてくれ』

今の世界は幸福と言えるだろうか。　一人の人間の独占によって今日まで続いてきた。この地上の状況を客観的に見て、万民は安泰の下に生と時間を刻んでいると言えるだろうか。

繰り返されてきた戦争。
飢餓と貧困。
真の侵食と偽りの創造。
人種や宗教、格差による差別。虐待、虐殺。
莫大な資源の消費と生産。
食糧難が起こっても手を差し伸べない、環境破壊の阻止を訴える今日において化石資源の採掘を援助し、戦争を予知・予見していながら何の手立ても打たずに終局までを眺め見ている。時には小さな犯罪すら行ったことのない人間の暗殺を命じ、大罪を犯した人間を生かす。事故に見せかけたり、悪運に見せかけるほどの工作を施す。個人的に言わせてもらうなら、卑怯この上ない手段をも平気で使うソイツを支配者として黙って見過ごすわけにはいかない。

『我々人類が、たった1人の男に支配されていいのだろうか?』

故に我々は行動に移った。
個人による支配がもたらす自由から抜け出し、本物の自由を手に入れ、より自然な人間による社会を築くために。

『いつ認識できるか。我々多くの人類にはそこへ辿り着く術はなく、よって、彼の者を本来あるべき場所に返さなければ真の自由はない！』

「……」

この放送で人々の心を掴むことは可能なのか、男は画面を眺めながら思い出していた。

一切の装飾を取り払うなら、この放送によって得られる支持は皆無といっていい。それを踏まえたうえで彼らは事に望んでいるのだから、その事実が現実であっても何ら問題はなかった。計画の範疇である。

テレヴィジョンの明かりだけが弱々しく光る室内で、男は電話に呼び出され、その間も画面内で演説は続いた。

「もしもし？」

『予定通り、今の放送で約２１％の人々が呼び起こされた』

『私達は無闇に人を傷つけたくないがため、皆に不幸や悲運までをもコントロールされたこの世界から抜け出すために立ち上がって欲しいと思っているのです』

「そうか。第二段階まで残り３０時間弱。それまでに予定通りの数値を実現してくれ」

『問題ない』

「頼んだぞ、絶夢――フォルトン・ドラーズ」

『植え付けは順調だ。うまく行けば予定より早く協会に攻め込むことができる』

日本首都、都内のシティホテル。
人工ではあるが綺麗に装飾された夜景を見下ろすことが出来る上階の一角。そこにある部屋のうちの一つである、３ベッドルームスイートの扉が叩かれた。
部屋を借りた主はその音にわずかな苛立ちを覚えながら、気が乗らないままに浴室を出て、扉の向こうにいる何者かへ入室を許可する。なるべく人を寄越さないようにと言いつけたはずだった。誰にも会う気がないし、話す気分でもない。しかし、来てしまったからには断る理由はない。

「失礼します。至急、オリヤ様にお会――」

部屋に入るなり、制服に身を包んだ小奇麗なボーイは顔を赤らめて背を向けた。
失礼しましたと言って動揺を隠そうとし、部屋を出ようと試みる。が、部屋を借りた人物である彼女はそれをさせない。

「用件を教えて。
何？」

回れ右したボーイの膝が折れ、床につくのと同時に握ったドアノ

ブが根元からもげ、退路を失う。
青年は観念して、赤面しつつ用件を伝えた。
気まずいこの空間から逃れる術は、早く用件を済ますこと以外思いつかなかった。

「取り急ぎ、オリヤ様にお会いしたいという方が見られていまして、上階のラウンジでお待ちになられています」

用件を言い終えたボーイの目が盗み見た。この部屋の利用者である彼女には羞恥心が無いのだろうかという疑問が止まない。
水滴を滴らせる髪は、シャワーから上がったばかりであることを知らせた。全く拭いていない。
そして問題は髪だけでなく、全身が同じ状況であり、また何も羽織っていない状況であることにあった。

――全裸で、恥ずかしくないのか？

しかし、盗み見た彼女の顔に恥じらいの色は皆無。すべてを曝け出しているにも関わらず、顔色ひとつ変えずにこちらを見据えている。
だが、邪な考えよりも、得たいの知れない恐怖が青年の心底を支配していた。

「名前は？」
「それは、先方からは名を伏せろとの――」

「君の、だよ」

予想外の質問と不敵な笑みに、赤みを帯びていた顔に青が浮かんだ。

裸体を目にしたことを言いつけられるのか、という予測が先にたった。何故なら、この職業にありつけたのは今年になってからだ。必死に就いた職をむざむざ失いたくないという思いが何よりも優先した。人口爆発により職に就くのが困難なこの時代に、一度失職することは今後一切の希望を失うことを意味するのだ。

「申し訳ありませんでした……」

「別に怒っていないよ。誰にも言いつけたりはしないから、力を抜いて――」

言いつけもしない、怒ってもいないと言われたことで再び顔は赤面を始めるが、本能による警告は止まない。

しかし、喪失感が消え、体の自由をどうしてか失った今、この状況で出来ることは考える以外に残されていなかった。首に濡れた手が絡み、筋を沿って肩へと這い進み、腕に触れ、肘を通過し、手首を握られて腕を持ち上げられる。生暖かく、それでいて甘い吐息が首筋を襲い、一般的に云うまともな思考を阻害した。

自らの意思で動かせない身体には、どうしてか恐怖を感じず、また青年はその精神的異変に気付くことが出来なかった。

「名前は？」

「古山修（こやまおさむ）……です」

首と目だけで彼女の姿を追い、視界の隅に彼女を捉えた時、突如として部屋の照明が落ちた。しかし、完全な暗闇となったわけではない。落ち着いた色合いの間接照明が照らす薄暗い室内の暗色が濃くなったのである。

目に映る全てが薄黒いフィルターにかけられた。

それだけではあるが、修青年に恐怖を呼び戻す効果は十分にあった。そもそも何故、突然部屋が暗くなったのかが理解できず、理解できないという知的恐怖が冷静を蝕み殺す。

壁際のスイッチまでの距離は遠くないにしろ、背後から絡んでくるオリヤという女性の手が届く距離ではない。

では、何がこの暗さを生んでいるのか。

「ねぇ、修さん」

「は、はぁっ！」

視界が黒みを強めていくのに気付き、この時初めて底知れぬ恐怖というものを実感した。

何かが起こっている。

自分の周りで。

その原因は背中から抱くように密着する女性――いや、まだ二十歳ではないから少女――彼女が原因だ。

「ここに着た時からずっと欲しいと思っていたの」

「は……ぃ？」

絡めた腕が水平に持ち上がる。
僅かに盗み見れた彼女は、視界の片隅で屈託のない笑顔を咲かせていた。

「上着（これ）、ちょうだい」

最期に聞いた言葉を理解することもなく、修という人間はより濃い黒に包まれる。
それは痛みも、冷たさも、音さえ無く――上着だけを残し、身につけていた一切と共にこの世から姿を消す――何の比喩でもない、正真正銘の消滅だった。

連絡を受けたオリヤが指定した場所に姿を現したのは、重大放送（せんせんふこく）が始まった頃だった。設えられたテーブルで、コーヒーカップを傾けながら時計を睨みつけていたキュウキはわざとため息をついて見せる。

「遅かったわね」

微笑で応える彼女の服装を見て原因を理解する。

このホテルの従業員の上着に身を包んで笑うオリヤの異常を見て取り、早めに用件を済ませようと話し始めた。キュウキから見た彼女は、精神疾患以外の何者でもなかった。

「あなたが求める色世トキの情報だけど、厄介なことになっているわ」

「何か、問題があったんですか？」

「協会の精鋭部隊と会長本人による監視がついていて、下手な詮索が出来ない状態なの」

「そうですか。じゃあ、どうすればその人達と会えますか？」

「会う……？

まさか、協会の部隊よ。潰す気？」

「協会が何なんですか？」

予め頼んでおいた紅茶をオリヤに差し出しながらキュウキは警戒を強めた。ＳＲに成り立ての人間は協会の存在とその恐ろしさを知らない。これは一般人が触れることのできない世界だったため、仕方のないことだった。そもそも協会という存在は巨大でありながらも世界規模で黙視され、今日まで一般社会にその名が漏らすことがなかったほど保守規制が徹底された組織なのだ。

しかし、オリヤは決して新人ＳＲではない。

「会長を倒さない限り、トキに近づくことが出来ないと言いたいの。申し訳ないけれど、トキのことは諦めるしか……」

「イヤです」

「無茶を言うのね。会長がどんなＳＲか知らないわけではないでしょう。今この瞬間、世界を支配し続けている絶対者なのよ。現状ではね。それを護衛する部隊や、また親衛隊もかなりの手練れよ」

「協会長さんが死ねば問題ないですよ」

首を横に振りながらコーヒーを含む。体では呆れてものも言えないという風に見せたが、実際にキュウキは内心微笑んでいた。

得体の知れないＳＲを持つオリヤは、どういった関係があるかは把握しきれないが、トキを追う姿勢だけは執拗の極みである。磁石の異なる極のように求める。その執念はまさに、キュウキにとって都合の良い駒となる逸材（そんざい）なのだ。

「簡単に言わないで。

この数十年で会長が協会本部を出たとう話は1、2度しかないのよ。加えて協会本部は、臨時拠点も含めて3箇所。中でも総本部の兵力は、一国程度の軍事力で相手に出来るほど柔（やわ）なモノじゃない」

「それで？」

「しかも、独自に造られた海上要塞は接近すら困難なの。対空防御、対海中防御。それらの全てに最新兵器とＳＲを余すことなく充てていて、簡単に言うなら防御は完璧。衛星軌道上からの攻撃も想定された迎撃設備まで備えている本部には――」

「死角はあります」

「……それは興味深いわね。是非聞かせて欲しいわ」

「私です」

青筋が立つ。同時に、理解不能の念があふれ出す。

が、それを必死に堪えながらキュウキは聞いた。

「どういうことかしら？」

「私は、存在すら協会に確認されていません。新規に登録するために本部に行くことは可能ですよね？」

「ええ。確かに可能ね。

でも、登録で本部に連れて行かれる可能性があるとしたら、危険人物隔離のためよ。それからあなたの持つ力の解明のためにね」

キュウキの予想を超えたオリヤの献身的な行動力は、確かに死角だった。

オリヤという少女を知ったのは数日前、マスターピースを監視している最中だった。派遣した尾行に気付いたマスターピースは裏路地に逃げこみ、そこでオリヤに遭遇した。協会長と似通った能力：糸配（しはい）を以ってオリヤを逃がそうとしたマスターピースだが、それが最大の間違いであった。

一般人ではなかったのだ。

オリヤは尾行者2人をマスターピースの前で殺して見せ、次にマスターピース本人へと襲い掛かった。何が起こっているのか理解できず、キュウキ自身はカメラ越しに唖然とした。一勢力の大将である実力者を、何の苦もなく撃破してのけてしまう計り知れない力。

それを平然と駆使して命を奪う少女：オリヤ。

四凶であり、過去に多くの同胞や他人を葬ってきたキュウキだが、それを見ている間は滅多に感じることのなかった恐怖に身を震わせた。

何者かという疑問もそうだが、どんな力なのかという謎が遥かに大きく、同じ卓についている今も、敵でないと明確に分かっていながら警戒し続けていた。

「会長は絶対支配のＳＲよ。万一潜入に成功しても、彼を討てるかどうかはまた別の話」

「支配、ですか。それなら大丈夫だと思います」

紅茶を一口味わい、冷たい笑顔を顕わにする。

「何日か前に会った男の人もそんな感じの力を持っていたらしいですけど、私には“通じない”みたいですから」

計画通りに動こうと自らを売る少女。

苦笑う顔を見せながら時計を確認し、それでも内心笑いが止まないキュウキは席を立った。

順調に計画は進むだろう。うまく行けば思わぬ戦果を得られるかもしれない。

「細かいセッティングが必要ね。

あなたの自信を買って、全面的に協力してもらいましょう。詳しいスケジュールは後日通達するわ」

「なるべく早めがいいです。彼が届かないところに行かれると困りますから」

同じく席を立ったオリヤは催促して背を向ける。

「最後に聞かせて。
あなたは、トキとどんな関係なの？」

笑顔でいながらも心から笑っていないオリヤ。彼女の小さな背中にかけた質問は、彼女を足止めしてしまった。

キュウキは無回答を予測していたため、その停止に悔しさが湧くのを感じ取った。オリヤが会長の討伐に自信があるように、キュウキにも性格の分析・把握に自信があったのだ。

しかし、キュウキの思っている以上にオリヤは異常で、一口で言う例外というカテゴリにオリヤは当てはまった。

だから、回答を予測できなかったのだ。

「大切なモノを取られました」

「え……？」

「私が貰うべきだった、とても大切なモノを」

言い終えて僅かに振り返る彼女の顔は無。何の修飾もない、それを表情といえるのかどうかも怪しい未修飾だった。

言い残したそれが本音かどうかを考える前に、キュウキはその話の利用できないものかと、画策しながら彼女を見送った。

第４１話－四凶宣戦！渾沌に沈む世界－（後書き）

『トウテツだ。
イタリアを制圧開始。約５時間後に制圧を完了する。いやぁ、録画はいいね。思ったよりサクサク動けるよ。予め撮っておいて正解だったな。あの宣戦布告は』

『こちらフォルトン。
現在ドイツ空軍基地を包囲中。抵抗者は排除、投降者は傘下に組み込む。
それから、別働隊からの報告だ。フランスで小さな波紋を立てることに成功』

『フフッ、コントンだ。
イギリスとフランスのトップを消去した。ついでに警察を血祭り、一般人の間に波紋を立てたが、他に注文は？』

「了解。
作戦は順調ね。こちらも今、不確定要因との接触を終えたから、現地（フランス）に向かい、到着次第、矛と合流するわ。
さて、トウテツは現在地点を制圧の後、ミラノを経由してスイスを包囲。
フォルトンはベルリンを中心に植え付けを継続して手勢を増やして。援軍が到着次第、ポーランドとチェコに隊を二分し、東へと勢力を拡大して。
コントン。あなたには誰よりも早くイギリスの協会支部への突撃、撹乱及び戦力削減を任せたいけど、いいかしら？」

『いいぞ、全く以って素晴らしい幕開けだ。ククク！』

『こちら剣。
エジプトの首都にて扇動完了』
『同じく剣、アメリカにて扇動完了』
『ロシアも同様だ、完了したぜ』

「ではエジプト方面隊はスーダン、リビアへと隊を分割して侵攻、それぞれの現場部隊と合流し、植え付けが完了した民衆を扇動し、誘導。
アメリカ部隊は首都圏へと進行、同じく民衆を誘導した後、相手の戦力を出来る限り削減して。
ロシア方面隊は各自の判断で西方と南方を任意に目標として進行。先々の扇動を助け、植え付けの完了した者達で部隊を編成」

四凶がそれぞれ連絡を取り終わる数時間後、世界各地では暴動と混乱が合い混じり、炎と怒声が飛び交った。

僅か数百人規模だった四凶という勢力は、いまや数億という規模へと爆発的に拡大し、確実にその力を増していった。
ＴＶによる暗示と、僅かだが確実な洗脳。
それら“洗脳／煽動”によって戦争に組み込まれた民衆を誘導する四凶達。
全世界に一斉放送した内容を覆すような、正義というものを微塵も見せない反抗作戦。それは一度も滞ることなく進行し、日付が変わった頃には世界中の軍隊は四凶ＳＲ達の攻撃によって、全戦力の８割方削られていた。

第42話－In my home……Successive attack!

酷いものだ。
嗚呼、酷いものだ。
酷い酷い。

ククククッ！

理由などない。
ただ感じたまま、想ったままのことを言葉にして形を与え、口にしてそれを発生させたまでだ。

理由などない。
それが酷いことに理由などない。
なぜなら理由は理由という名を呈していながら諸悪の根源に近しき存在であるのだからだ。
理由を求める事こそが一般にいう悪というものだ。

少なくとも、俺はそう考えている。
あくまで個人的にだが、俺はそう考えている。

クックックッ……

故に、自分を評価する大多数の他人がどうなろうと、俺には全く関係のないことである。

また、偉人の言葉に則ってみると、自論で孤独である現状にたどり着きながらもこの状況に不満を覚えない自分は強者である。

真に強き人間とは孤独に耐えうる者、とは限りなく下らない話だがそこそこ的を射ていると思う。

しかし、強者でいるつもりもない俺にはやはり下らない話であって、俺の興味は鮮烈な過去か、熾烈な未来に向く事はなく、ただ整然とした今を壊す事にのみ、ベクトルは向いている。

だってコントンだもん♪――ってな、ククク……

第42話－In my home……Succcessive attack!

――協会本部

刻々と悪化する状況の中、会長は数分前まで1人静かに衛星から中継されて送られる映像を眺めていた。

“アヌビス部隊が敗走”
“サルヴァドルで戦域が拡大”
“EU配置のヒーローズが総敗北”
“現在第1支部が攻撃を受けている最中、救援要請確認”
“オーストラリア首都および補給支援基地が制圧された模様”
“ウルグアイの資材拠点陥落”
“南アフリカ共和国で戦闘激化”
“オーストリアにてホート・クリーニング店の支援を確認”

バースヤードが覗き込む画面の隣、フィルムモニターには最新の戦況報告が文章として映し出されていた。

その内容からは四凶の動きをいくらか読み取ることが出来る。彼らの目的は明らかに協会（こちら）の部隊を壊滅に追い込むこと。正確には、派遣先から本部へと追い詰めること。こちらの戦力を一箇所に集めたところで大規模な、例えば核爆弾か何かの攻撃を仕掛けてくるつもりだろう。制圧した軍の基地から大量の兵器を奪取し、戦闘に用いているという報告もあった。相手は先導した四凶を持つ市民達を武装させることにより、全体の戦力を底上げした。つまり圧倒的物量で以って怒涛の勢いを得た。　今、こちらの守備戦力でこれを抑えきることは不可能。

（仮に核を使うのなら、次は本部の防衛機能を無力化しようと攻めてくるだろうな。
そうなると先陣は……ＳＲのみの特攻隊。　第２陣に一般人とＳＲの混成部隊。それ以降の第３、第４部隊等は一般市民多数とＳＲごく少数による編成だろう。そして、一般人と防衛部隊が戦闘を展開したところを一気に核攻撃）

予想される相手の攻撃、戦術、作戦。
しかし、敵四凶にはキュウキがいて、現在の状況に至っている。
予想外だった市民の加勢と武装、各戦線の不利。
残念ながらバースヤードには彼女の思考を先読みできるほどの能力は備わっていない。予め対策を立てることができなかったのがその証拠である。　作戦を立案する能力では圧倒的に彼女の方が高い位置にいるのだ。つまり――

（俺の考えていることはすでに知的経過済み……か。
二手も三手もこちらの先を読んで虚を突いてくる。愚策を取らないよう選択するのが俺にできる最善の抵抗。それが俺の抵抗。
なら、最も考えられる今のフローチャートをベースに、この案を捻るとすれば何処だ？）

“ノルウェー大統領官邸にて銃撃”
“中東の資源基地が奪取”
“中国で一般人と黒羽商会が戦闘を展開、援助と判断して加勢を許可されたし”
“北海で国籍不明の船団が大型貨物船をジャックし、イギリスへ進

路変更”
“イタリアの空港が制圧”
“アルゼンチンの首都で大規模な人為的火災発生”
“アメリカのワシントン、サウスダコタ、アラバマ、ケンタッキーでダムが占拠”

頭で今後の四凶の行動を考えつつも、衛星が送る映像が――1人のSRが、バースヤードにボルト狩り事件以来の危機感を呼び起こしていた。
協会長の興味と危機感は、四凶よりもこのSRに向いていたのだ。

初めて見る人物。
完全支配という監視下から抜け出したわけでもない、最初から支配の中にカテゴリされない存在が液晶に映し出されていた。

（オリヤ……何者だこの少女は？）

映像の中の彼女と衛星が向かい合う。
見上げる彼女、その映像を送る衛星。
大気圏外から監視しているはずの衛星が見えているかのような仕草に寒気を覚える。もし、オリヤという少女に監視衛星が見えているのなら、すぐさまブラックリスト入りである。が、残念なことにまだそれを確定するだけのことを彼女は行っていない。

（マスターピースの坊やはコイツにやられたと言っていたが……どうして今までこれほどの存在に気付けなかった？

それがこの娘のＳＲなのか？
もしそうなら、一体どんな）

およそ考えられる可能性は、彼女の四凶属性。
世界中で四凶たちが一斉に蜂起した今、彼女の力が何らかの要因とシンクロを始め、その結果彼女という存在が初めて輪郭を持ったということ。理屈では有り得るＳＲの中に“天涯孤独”という存在がある。ただ、このＳＲは今までに１度も確認されたことがなく、また実質発生に至るまでには幾つかの矛盾が付きまとうので、存在は理屈で表現できても、実在させることなど不可能なのだ。
バースヤードは天涯孤独の可能性を控え、別のパターンを考慮する。
過去に存在を近く出来なかったという例は存在するが、オリヤの場合はその例に当てはまらない例外。前例の人間は知覚され支配下にあった
人間のＳＲへの覚醒であって、その覚醒に伴う存在の曖昧化が原因となったのだが、一方のオリヤは初めからＳＲとして知覚され、それでも支配下に置くことが出来ない存在であったのだ。果たしてそれは人間であるかどうかを疑わせた。

彼女は年恰好からして高校生あたりの年齢。それなのに“一般人”として今までの十数年間、知覚することができなかったであろう存在。
いつからＳＲなのかもわからず、また、持ちえる力の内容も強弱も不明。

（コントンの属性である可能性５３％、トウテツ２８％、トウコツ１４％、キュウキ５％。

しかし、目的は何だ。四凶だと仮定して、なぜコイツだけ動きが違う？）

彼女が発見されたのはつい3分前。

場所は日本だった。

渾沌に揺られるこの世界において唯一、四凶たちの洗脳と扇動が本格化していない国である。彼女がトリガーである可能性も十分に考えられた。四凶らによって切り札として匿われていた可能性だって否めなくはないのだ。滅多に有り得ないが。

未だに荒波に揺られていないあの国にいる彼女が、引き金であるか否かで今後の姿勢も変わる。

（どう対処するべきだ、コイツは困った……）

密かにではあるが、バースヤードは芹真事務所に期待を寄せていた。

彼らなら、この状況下でも自分達（きょうかい）を有利に巻き込んでくれるだけの行動をしてくれるだろうと。

だが、仮にオリヤの目的が芹真事務所――最悪、トキだった場合はどう対処をすべきか。

また、光の魔女の激怒も不安を醸し出す要素の1つであった。それが芹真事務所最大の脅威であり、不確定要素。現在の日本国内の運命はこの最大級の不確定要素2つの動向によると言っても過言ではなかった。

（今現在、ボルト・パルダンがどの段階にあるのかにもよるが、こ

れをオリヤが下手に刺激しなければいいんだが……）

最近の報告では過去の記憶――夢の殻を破り、昔の人格を取り戻しつつあるという話を聞いていた。Ｈ・パルダンやＡ・パルダンまで目覚めているのなら、四凶の蜂起よりも厄介である。持てる戦力の全てを投入しなければ抑えることは出来ない。協会どころか人類の存亡にまで発展しかねない。

「何だかんだ、四凶が動き出したことで他の人間も連鎖するように行動を始めたわけだ」

画面内でオリヤの腕が空、衛星のカメラに向かって掲げられ、手のひらが開かれる。

バースヤードは動き出した彼女の行動と、口元に注目した。

“トキは何処？”

ノイズが走り始めた画面。そこに映るオリヤの口の動きと使用するであろう言語を予測し、読唇術で内容を汲み取った。

安定を失う画像が数秒後には完全にブラックアウト。

衛星一基を失ったことを悟り、バースヤードは最も信頼に足る精鋭部隊に令を下した。

予想していた最悪の展開その2、である。

「ジャンヌ、任意で手勢を選抜した後、すぐに日本へ飛んでくれ。

白州唯周辺に潜伏しているであろう、オリヤという少女の身柄を確保し、連行してきてくれ。ここに直接だ」

『了解しかねます。
四凶の狙いは会長です。今は少しでも本部の護衛を――』

「却下だ。
残念ながら、いまは指示通り動いてもらう。これは会長命令だ」

『了解しました。
しかし、代わりに飲んでいただきたい条件があります』

会長はうなずき、それに応えた。
全ては四凶から本部を防衛するためにと、ジャンヌは言った。

――四凶宣戦25分前。

世界で今、どんな大事件が起こっているのかも知らず、この国の人々は変わらない流れのなかで1分1秒を謳歌していた。
小さな事故や殺人を問うほどの事件、目に付くかどうかというほど小規模な犯罪。現状の世界のそれとは比べ物にならない、平穏な空気が未だこの国には充満していた。

当然、白州唯の街も例に漏れず大多数の人間が通常の夜を過ごし、その中でトキは通常とは違う夜を――しかし平穏な時間を――過ご

していた。

「あ、酢が切れた」

キッチンにて。

誰かに料理を作るのは何時以来だろう。
最近は訓練だ四凶だと、物事のめぐりが今までに比べて激しいせいか思い出せない。
が、とりあえず今は――

「料理うめぇなトキ！誉めテつかＷａス是！」

「気にしないでくださいトキさん。どうしてか、カンナ姉さまは機嫌が良いと酔いやすいのです」

酒を煽って料理を食らう、知り合って僅か数時間の姉妹に料理を振舞った。
いきさつや現状を気にせず最後の一品を作り終えることに集中しよう。久々の来客で、行儀は決して良いとはいえないが、客は客だ。失礼や不快はお互い無い方がいい。

（いや、やっぱ遠慮の欠片が見られないところが少しは不快だが……）

配膳されたチゲをわずか十秒足らずで平らげ、そのまま炒飯に箸を滑らせ、山を半分ほど削り食べたところでビールジョッキを煽る。
大きな一息。
豪快な飲みっぷりに思わずこちらの喉も鳴る。　不快な思いは確かに感じているが、悪意はないのだろう。カンナの意識は完全に食べ物へとむいている。

「本当にすいません。これだけの物をいただいて」

「気にせず食べなよ。俺一人じゃ結構腐らせちゃうし」

これで食費が一日分は浮きました、と頭を下げてスミレも炒飯に箸を運ぶ。

「おぃ、スミレぇ、普通そういうことは言わねぇんだぞ」

「え？」

「食費浮くだなんてよ、もしかして、お前も酔っているのか？」

「え、え！？」

こちらに目が向き、再びカンナへと視線が戻る。何を慌てているのかはよく分からないが、そこはそっとしておいてあげよう。
フライパンの中で焼けあがったホットケーキを皿に移してバターを乗せ、最後に蜂蜜を添えて料理を完成する。中学校以来作ることのなかったメニューだが、思いのほかうまく焼けたことが素直にう

れしい。　気がかりは味だ。上手く焼けるのと美味しく焼けるのとではわけが違う。

「デザートってことで作ったけど、蜂蜜とかは苦手？」
「いや、全っ然！」
「苦手ではありません」

即答するカンナと申し訳なさそうな顔で答えるスミレ。　顔立ちは似ていても、性格に大きな違いがあることは十分に分かった。態度や言葉遣いにそれが顕著に反映しているため非常に分かりやすい。
卓上の空いた皿とホットケーキの皿を交換し、配膳と回収を終えたらガスの元栓を締めに戻りつつ、食器を洗剤につける。
ホットケーキを絶賛しながら頬張るカンナがビールで喉を潤す。その脇でスミレは炒飯を租借していた。ホットケーキに至るまでまだかかるだろう。

新たに空いた食器を回収しようと調理スペースを離れた時、玄関のチャイムが来客を知らせた。
この時間帯に来客するという予定を聞いていないし、誰からも聞かされていない。確実に郵便等の類でもないことは時間帯が証明する。

ならば誰だ？

「ゆっくりしていて大丈夫だから」

2人にそれだけ告げて足早に玄関に向かい――勝手に扉を開けて入ってきた――翼とエミルダの2人に固まってしまった。
直後、とある予測が浮かぶのと同時にソレは的中してしまう。
こんばんわ。飯を。

「こんばんわ。トキさん」
「飯を食わせてくれ、トキ」

「飯、か……」

黒いジャージ姿の翼と、相変わらずゴシック風の女性着に身を包んだエミルダ。
2人の要求は晩御飯だった。慣れている事態とはいえ、調理を終えたつもりだったタイミングで翼が来ることは少々予想外である。
いつもならもう少し早く訪れる。

「む、都合が悪かったか？」
「翼さんが今日のことでお話ししたいことがあるって、それを兼ねて来たんです」

とある嗅覚に常人離れした反応を示す翼の別名はエロティカ。
それが、その五感が高速で現状を把握する。　この家で滅多に感知することのない“女性の匂い”を。

「私達2人は先客を気にしない」

「え……ぁ、はい。気にしません」

「そうか。
じゃあ、先に来た2人にも聞いてきてみる。
ダメだったら晩御飯代渡すけど、それでいいか？」

『もちろん』

悪い返事が来ないものかと心配しつつ、リビングでビールを煽るカンナとホットケーキと真剣に睨み合うスミレへ簡単に事情を説明した。

似た者、というか知り合いが来たんだけど、同席しても大丈夫そう？

「おう、こっち来い！」
「構いませんよ」

この返事を伝える前に翼はエンター・ザ・リビング。迷いながらエミルダも翼に続いて入室し、卓に着いた。
カンナは聡明に2人を迎え入れ、スミレは無表情で翼を迎え、ゴスロリ装束のエミルダに僅かな疑問を抱きつつ物静かに迎えた。

「どうも。トキのクラスメイトの翼です」
「おぉ、クラスメイトか！　おっしゃ、飲もうぜ！」
「カンナ姉さま！失礼です！それに未成年――」

「いやはや、中々話が早く、また分かる人だ！
そう思わないか、エミルダ！」

「あの、まず自己紹介し終わってからの方が」
（え、男の子！？）

お酒と煙草は二十歳を過ぎてから。
法律違反を目前にしたスミレだったが、エミルダの服装と性別のギャップに違反を指摘する余裕を失った。

四人の会話を背後に、トキはせっせと料理を再開する。
ガスコンロの片側にフライパンをかけ、もう片方のコンロにやかんをかけてからコーヒーカップと新たな皿を準備する。
幸い、４人は揉める気配も無く自己紹介を終え、会話を弾ませていた。主に弾ませているのは速攻で意気投合した翼とカンナであり、付き従うような立場のスミレとエミルダは黙々と見つめ合っていた。

（あの人数なら、から揚げでも作った方がいいな。つまみにもなるだろうし）

冷凍庫から弁当用のから揚げを取り出し、揚げ物鍋をセットして油が温まるのを待つ。
静かに揺れるガスの炎。
煮える油。
大声を上げるやかん、それから翼とカンナ。
時計に目をやり９時からの放送に十分間に合うことを確認してから、翼とエミルダに焼き鮭とご飯、それからカンナとスミレにコー

ヒーを運ぶ。運び終えてすぐにやかんのお湯の残りをポットに移して食卓の脇へと運び、から揚げの状態を確認する。
それと同時、ホットケーキのおかわりを注文する声がカンナからあがった。

『手伝います』

幾度も往復するトキを見て、年少2人が名乗り出て立ち上がった。
それに対し、年長2人はそれぞれ空腹を満たさんとご飯に、コーヒーにと必死だった。

ふと、申し出た2人の動きが、同時に立ち上がったところで止まる。
この2人が中々意気投合できていないのは様子を見ていてわかった。初対面で緊張があるからだろう。年端も近い。
しかし、ぎこちなかったのは最初だけで、2人はよく手伝った。揚げ物を皿に移している最中にスミレが食器を洗い、エミルダが水を切って拭き、邪魔にならないようキッチンの隅へと運ぶ。隙を見てはから揚げの皿を運んだり、食器を回収したりもした。

2人の助力もあって料理は予想よりも早く終わり、トキも4人と同じ卓について一息ついた。

いつもより遅い晩ご飯だが、いつもより賑やかな晩ご飯。
他愛のない会話の展開と共に進む箸。
昼間の四凶事件が夢のように思えるほどの平和に包まれ、食事は終わりへと近づいていった。

――――――20：58

重大なテレビ放送の2分前。
トキを含めた5人が卓を囲むリビングに、再びチャイムの音が鳴り響いた。

「食べてて」

「そうさせてもらおう」
「片付けておきますね」
「ビールまだあるか？」
「カンナ姉様っ！」

冷蔵庫を指差してから玄関へと向かい、覗き口に近づいて扉の向こう側に立つ人物を確認する。
翼以外、これだけ夜の更けた時間帯に家を訪れてくる人物はボルトや自称訓練教官のナイン、若しくは芹真か藍くらいである。いずれにしろ、事務所の誰かであるという予想しか立たない。
が、それは外れた。

――カチッ

扉のレンズを覗く直前、警鐘で危険を知らされたトキは咄嗟に覗き穴から顔を退かせた。
警鐘が伝える。
敵襲。

直後に砕ける扉の覗き穴。

銃が扉越しにこちらを向いている。

砕け飛んだレンズと共に扉から離れた。

金属製の扉を貫いて襲い来る弾丸を躱し、連続で飛来する銃弾群をひとつ残らず掴み取る。

弾は・３２ＡＣＰ。

銃撃回数は７回。

（コルトガバメントか！）

消音器を装備していると理解したうえで、トキは堂々と扉を開けて襲撃者と対峙した。

扉が開くのと同時に相手は逃げ腰になっていた。

私服に身を包んだ若い、金髪の日本人男性。

物腰から手練でないことは明らか。

扉越しの暗殺に自信があったのだろう。

だが現実にそれが失敗し、リロード中にターゲットである色世トキは姿を現したのだ。直前になって逃げようとしても遅い。

（こっちは大事なテレビがあるんだ！）

右手を伸ばしてコルトガバメントに触れ、消音器から銃身へとクロノセプト。

グリップとマガジンだけ残されたガバメント。力を失った銃をを握り続ける男に向け、ガバメントから奪った時間によって作り出し

たコルト・ベスト・ポケットを向ける。小口径の護身用拳銃だが、この距離での発砲なら即死も十分に有り得る。

「誰にも言わないから帰れ。あ……いや、その前に聞かせてくれ。誰に頼まれてやった？」

質問の答えも聞かぬうちに、第２の警鐘が伝える。

路上から玄関前のこちらを狙っている。敵、１人。

金髪の男を巻き込みながら弾痕が襲い掛かり、トキの肩を穿ち、玄関のタイルを割り、扉を歪ませた。

（Ｍ４Ａ１、こいつどこから！）

拳銃よりも遥かに強力な突撃銃を装備したそいつもまた、佇まいから訓練を受けていない俄か兵士であることが見て取れた。

低速世界に入り、突撃銃の連射をすべて避けつつ懐に潜り込む。

拳銃（ガバメント）と同様に右手で銃身からメカボックスへと向かって時間を奪い、戦力を削いでから男に質問する。

「目的は何で、誰の差し金だ？」

「うるせぇよ」

突撃銃を失い、予備武装（ハンドガン）に手を伸ばす男だが、それを手に取るよりもトキが予備兵装の時間を奪うのが早い。拳銃の次にナイフを取

り出すが、それも根元から時間を奪われて無力と化す。質問に答える気のない血気盛んな男の鳩尾と喉に、時間による加速を得た拳打を叩き込んで気絶に追い込んで完全に敵を無力化する。
銃弾から奪った時間によって生み出したコルトを物質から時間へと還元し、更に４つの凶器から奪った時間を以って、金髪男の銃痕を消す。幸い虫の息であって、気を失ってこそいるがまだ死んではいなかった。

「外もかよ！」

銃声を聞いて飛び出してきたカンナの腕を掴み、伏せるように振り回すが簡単に振りほどかれてしまう。
喧嘩で日銭を稼いでいるだけのことはあって素早い。

「大丈夫か！」
「中に入っててください！まだいるかも知れ――」

２人の人間を無力化したところで初めて気付く。
色世家宅を囲む近所が、四方約５０メートルに渡って消えていた。ブロック塀ごと消えた両脇の隣家。向かいの低い平屋。斜向かいも、明かりや人気がないのでなく、家そのものが消えていた。
つまり、トキの家だけが周囲から孤立した形になっていた。周囲が道路のアスファルトを残して一斉に更地と化していたのだ。

「この人を運んでくれ」

「いまのは銃声か、トキ！？」

飛び出してきた翼を捕まえ、カンナは倒れた男を運ぶのを手伝うように言い聞かせた。

トキは周囲の様子を慎重に確認した。なぜ周囲の民家が消えたのか。

理由は何か。

（退路の遮断？　一般人を巻き込みたくないから？

しかし、それならこの２人は一体？）

疑問渦巻く中、突撃銃を失った男を脇から抱えて引きずる。カンナと翼が金髪男の足と脇を持って運ぶのに続きながら、他に襲撃者がいないか警戒し続ける。

外の２人を家の中へと運び、リビングへ戻ると、そこには新たに倒れている男２人がいた。襲撃者は全員で４人。いずれも銃や刃物で武装していた。トキが玄関に向かってすぐ、１人が２階から現れ、１人がキッチンの勝手口から侵入してきたという。翼の皿投擲とスミレの柔道技で早期鎮圧し、また階段を下って現れた男はカンナの咄嗟の拳（クセ）であえなく撃沈。

一切の被害なく４人の男を撃退したのだ。

（狙いは、俺か？）

状況を鑑みて、トキは４人に泊まっていくことを進言した。

もし、先に襲ってきた４人が偵察なら翼やカンナたちもすでにマークされているかもしれない。

護りきる絶対の自信はないが、そこそこ程度の自信はあった。

「泊まっていいんですか？」

（いや、大丈夫なのかを聞くべきだろ、エミルダ……）

「ああ。

予備の布団は十分にある。自由に使ってくれ」

「待つんだ、トキ。

またこの２人のような輩が現れたらどうする。

私とエミルダはともかく、彼女ら２人を巻き込んでしまうぞ？」

翼は昼のことと今の襲撃がつながりを持っている可能性を指摘し、トキも同じく四凶が糸を引いているのではないかと考え始めた。

何にせよ、２人の男から依頼者を聞き出す以外に敵を知る方法はない。

偶然この場に居合わせたカンナとスミレを外に放つわけにはいかない。

（確かに……帰してあげることができない今、泊める以外の安全は無い。だが、ここも決して安全とは言えない）

「問題ありませんよ、翼さん」

安全策の思索に全力を傾ける翼と、現状の息苦しさに焦るトキを、エミルダの声が道を開いた。

「そうですね。この状況ではお互い協力するしかありません。ならば、それぞれを把握しておく必要があります」

ホットケーキの最後一片を摘まんで口の中に無理やり押し込むカンナの隣、険しい顔で2人の男を見下すスミレは言った。

リビングの中、現状をよく理解していたのはスミレ、それからエミルダの年少2人だったのだ。

故に、

「それぞれを把握とは？」

「この人達も、ＳＲです」

全員が目の前の現実を、もう一つの現実として意識した。

同時にその瞬間、第二波はやってきた。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉａｒｔｕａｌ

－第４２話－

－Ｉｎ　ｍｙ　ｈｏｍｅ……Ｓｕｃｃｅｓｓｉｖｅ　ａｔｔａｃｋ　Ｒｏｕｎｄ．２！－

まず、奇妙なほど静まり帰った世界に気付いた。いくら色世家が住宅街のど真ん中に位置していようと、一切の騒音が遠くに聞こえないことは異常である。

次いで５人は、独特でけたたましい車両の駆動音を認めた。地面との間に生まれるグリップに伴う摩擦音。ヘッドライトがカーテン越しに通過していくのが分かる。騒音が家の中まで届き、その音の大きさから４人は、複数の大型車両が家の前に停車したことを知った。４人は静かにその方向へと顔を向けたまま静寂を守り、やがて日本語でない言語が飛び交うのを確認し、初めて危険を確信した。

やがて奔る鉄の飛来。
冷たい殺意の奔流。

道路側のガラスとカーテンを破り、蛍光灯を大口径の牙が砕く。
石膏ボードを貫いて壁を穿ち、壁紙や家具を散(バラ)にする。破片と粉塵を撒き散らし、飛び散らし、静寂と平静を侵して象(かたど)られた物の一切に対して破壊という印を刻んでゆく。テーブルを砕き、椅子を折り、液晶テレビが割れ、グラスが散る。
凶器の繚乱。
刹那の閃光が恐怖を植え付け、降り注ぐ破片が残酷なほど素直に生命の危機を耳打ちする。
日本という、銃刀法違反という枷に守られ続けてきた国民にこれを理解することなどできない。殺されるべき理由を持たない者なら、力無き者なら尚更であり、この場では翼がそれだった。

翼だけだった。
そうでない人間がこの場にいるのも、“常識”で考えられない奇襲同様、矛盾を抱えてはいるが事実であり現実であるのだ。

生命の危険を知らされたトキは４人を同時に突き飛ばした。
低速世界の展開。
４人が凶弾で負傷しないように突き倒し、直撃する可能性のある弾丸全てを両手で掴み消して時間を奪い、反撃の態勢を整える。

「そうです！　私たちもＳＲです！」
「ぁんだと、スミレ！こいつらもか！？」

「それは本当かエミルダ！」
「はい！」

驚異が脅威よりも優先し、恐怖を緩和した。

４人の頭上を弾丸が通過する。
砕けたプラスチックが、ひしゃげた金属が頭上から粉塵と共に降りかかる。

必要最低限の弾丸を消したトキはすぐ2階まで駆け上り、自分の部屋に飛び込んで窓の外を確認した。
１０人以上。
先の襲撃者４人とは比べ物にならない大人数が自分の家を取り巻いている現実に恐怖――と同時に憤怒――を覚え、別の部屋へと移った。別方角の状況を確認し、どの方角にも１０人以上の敵影を確認して四方を敵に囲まれていて、数的不利を認めなくてはならない状況であることに舌打ちした。

「なんて事だ……包囲しやすいように周りの家を消したのか！」

十数台の攻撃車両が家を囲み、車両の陰から複数の襲撃者たちが家にむけて一斉射撃を実行している。
敵にＳＲがいる可能性が生まれ、急いで部屋を飛び出て階段を下る。悠長にしている時間はもとよりなかったが、そこに緊迫感が加わった。
降段途中に手すりから時間を奪って手中に得物を作り出す。
二振りの剣。黄金の刃と青赤二色の宝石装飾を施された星黄（せいこう）と、黒刃白峰の畏天（いてん）。

敵の一斉射撃が止み、僅かな静寂が空間を包む。。
階段を降り終えると同時に敵は玄関扉を蹴破って突入を開始した。

投げ込まれた閃光手榴弾を右手で握り消す。更に銃口が定められるよりも早い、剣の投擲。投げ放たれた畏天はサブマシンガンを縦に切って割り、暴発を誘って、持ち主の両手を吹き飛ばした。後続の敵は暴発を免れ、物陰から突撃銃のフルオートを仕掛ける。

マズルフラッシュで照らされた敵の姿は、特殊服と防弾ベスト。

（本格的にどっかの特殊部隊か！？）

暴発の小規模な爆炎に飛ばされた畏天を空中で掴み取り、玄関の外を目指して走る。

タイムリーダーの完全展開。

銃弾の雨を潜り抜けて玄関を飛び出し、手首の動きだけで出入り口の両脇に潜んでいた敵３人の銃を切捨て、両足に斬撃を与え、目に付く予備兵装を片っ端から切り飛ばして武装解除した。

玄関脇の３人、続いて路上の６人にも同様の攻撃を加える。

６人を切り伏せたところでリビングに銃弾を叩き込んでいた軽攻撃車両と敵影を確認する。ファーストアタックを仕掛けてきた車両の銃座についている兵士へ、ボンネットに駆け上って屋根へと足場を移し、Ｍ２機関銃の銃身と機関部をそれぞれ切り落とす。矢継ぎ早にガンナーの両腕に軽い切れ込みを入れ、更に両肩に二振りの剣先を交差させて突き立てた。

後部座席より降車する敵に頭上から肘撃ちを見舞って脳震盪を誘発しつつ地面に降りる。念を入れてそいつの四肢にも斬撃。

ここまでの撃破数１１。玄関を飛び出してからというもの、敵に認識されることなく１１人もの人数を無力化できた。

玄関前車道の敵を無力化し、撃ち砕かれたリビングの窓から家内

へと戻り、トキは４人と合流した。
窓ガラスやテーブルの破片、砕け散った陶器や破れたアルミカンなどに囲まれ、伏せていた翼たちはすぐトキへの質問を叫んだ。

「撃たれてないか？」

「ト……！」
「どこ行っていた！」

「外だ。完全に家を取り囲まれた」

『囲まれた！？』
「敵は銃で完全武装している。
見た感じ３０人以上はいるな」

４人を目の前にしてトキは用意していた言葉を捨てた。
逃げ道を確保した旨を伝えるつもりだったが、スミレやエミルダ、翼に至るまでが力に屈しまいと強い意志を瞳に宿していたのだ。
恐怖は有るが、容易にそれを認めたくないそれぞれが在る。

これを援(たす)けて、４人を死なせてしまう可能性は？

そんな、考え悩むトキに対してカンナとスミレは立ち上がり、エミルダの言葉を思い出させた。
この少年が言ったように、私たちはＳＲである、と。
同時、再び銃弾が壁越しに襲い掛かり始めた。

「ったく！スッゲぇ日だ！
お前らもＳＲだったなんて、マジ驚きだよ！
なぁ、カスミ！」

「べ、別段驚きはしませんが……カンナ姉様が酔って気づけなかっただけですよ」
「あんか言ったか！？」

仲間を見つけたという想いが“言葉／瞳の輝き”を通して伝わる。

「ぉし、うまいメシのお礼だ！
私らが半分――いや、残り全部片付けてやるよ！」

「なん……！？」
「安心してください、トキ様」

銃弾の飛び交う空間にあって、カンナの容姿に変化が始まった。
変化の開始と同時、カンナの体に衝突した弾丸が跳弾する。
一方、スミレはどこからともなく取り出した札をサイドポケットに突っ込み、次いで右手に金棒、左手に日本刀を握り締めた。

「哭き鬼のＳＲ、陸橙谷カンナ！」

「同じく、哭き鬼のＳＲ。陸橙谷　菫、滅尽（や）らせていただきます」

トキと翼の2人が、初見の彼女たちが戦闘において最も信頼できる彼女(アイ)と同じ力、同じ苗字を持っている事に多大な衝撃を受けたのは言うまでもない。

驚愕に状況を忘れかけた瞬間、翼の背後で勝手口のドアが爆ぜた。宙を舞う粉塵、踊り狂う破片、畳み掛けるように撃ち込まれる銃弾、破壊の雨。攻撃車両のヘッドライトが夜の闇をまばゆくかき消し、その明るさにエミルダは目を細めてしまう。そこへ狙撃、すかさずスミレはそれを叩き落す。

キッチン側の壁一面を爆破し、そこから複数の敵がなだれ込んで来る。しかし、鬼の姉妹は閃光の中でどうしてか敵の位置を完全に把握していた。

「華創実誕幻(かそうじったんげん)、一段‥椿！」

オリジナルの陰陽術が唱えられる。詠唱終了と同時に加速したのは術を唱えていない、スミレの方であった。カンナは実妹であり、相棒であるスミレに真っ先に強化術式を施したのだ。

瞬速の接敵。

壁を爆破されてから1秒。鬼姉妹は侵入者たちの殲滅を開始する。

スミレは日本刀で武器ごと腕を斬り飛ばし、金棒で骨ごと肉体を砕き、瞬速と怪力を以って武装集団を圧倒していく。

「同段‥菫！」

カンナは自分の両腕に重量変化の術をかけてから攻撃車両へと駆け寄った。

自然の法を破った質量を得た四肢が開放される。
振り下ろされるはスピードに乗った鬼の一撃。それは術によって見た目以上の重量を得ていたのだ。
一発の左拳打で、たったの一撃でボンネットは完全にひしゃげ、有り余る衝撃はフロントガラスをも歪めてフレームから外し、エンジンを咳き込ませ、1トン以上もある車体を浮かせて見せる。
1発の拳打のもたらす結果だけでこれである。その後に続く右拳、前蹴りのパワーコンボに車体は完全にひっくり返ってしまった。一瞬浮いたところに打ち込まれた右拳がボンネット内のエンジンを外側から完全に歪ませ――この時点で車体はすでに半回転経過――次の前蹴りで車体は完全に空中で一回転し、ヘッドライトどころか前面を過剰に破壊され、後方へ飛んだのちに数人を下敷きにして天井から着地した。

（玄関と、柏さん家方面はこの2人に任せて大丈夫か。問題は――！）

リビングで2人の活躍をわずかに見守っていたトキも、すぐに立ち上がって戦闘へと身を投じる。
銃弾は四方から飛んでいた。
玄関の壁に向かって2本の剣を投げつけ、同時にタイムリーダーで廊下に飛び出し、星黄畏天の二振りに意表を突かれて一歩後退した敵を討つ。　左手のクロノセプターで相手の左腕から――掴んだ手首を始めとして腕、肘と左腕の半分から――時間を奪い、そこに右の掌底を叩き込んで関節を折る。　時間を奪われた人体の脆さは訓練で知っている。それを掴んだトキの感覚でいくなら、時間を奪った関節は細い枯れ木の枝程の強度しかない。
止めに喉へ平拳を叩き込んで1人沈める。

後ろに続く散弾銃のそいつも同様、壁に突き刺さった星黄畏天の刃に触れて刀身から時間を奪い、再び手中に星黄畏天を新たに作り出す。　味方に気を取られて隙を生んだ2人目の敵の懐に潜り込み、両膝に刃を突き刺す。　動きが完全に止まるのを見越して両足ヘクロノセプト、更に両肩から時間を奪って四肢の時間を、筋組織の強度を奪取する。

「大人しくしていれば助けに来る。それとも刃向かって死ぬか」

やってみせ、言って聞かせ、倒れた敵から突撃銃と散弾銃を取り上げ、それぞれの予備弾倉・弾薬を持てるだけ持ってリビングへ戻る。

そこには神隠しの左腕で銃弾の雨を凌ぐエミルダと翼の姿があり、トキは躊躇わずそこに入って2人に武器を渡した。

「これでなんとか凌げそうか！？」

「ト……まさか、銃を持つ日が来るとはな！
できるかどうかわからないが、この状況だ！やってみよう！」
「翼さんは僕が護ります！」

「頼む！」

「大丈夫ですか？
防弾チョッキを奪ってきましたので、お使いください」

トキに次いで2人に生存率を高める道具を持ち込んだのはスミレだった。
１０人分もの防弾着を片手で運び、放り投げて被弾から2人を護る。
スミレに今の方面を任せ、自分は反対側の敵を一掃する旨を伝える。
了承を得て、エミルダの神隠しに護られている翼ら5人のもとに襲撃者が到達しないよう、素早く敵を殲滅する必要があることをお互い確認しながら戦場に戻った。

「止まれ！」

静止世界が騒音の一切をキャンセルし、夜闇が暗さを増し――

が、一瞬の静寂の後――夜がごく僅かな明るみを取り戻し、つまり――

世界は鈍い音を取り戻した。
タイムリーダーの完全展開が終了したのである。

（なんっ……！使い過ぎたか！）

通常時間へと戻り出す時間の中、戸惑いつつも全力で最寄の敵に接近する。中途半端に離れることはできない。　乗りかけた船には乗ってしまえという偉人の言葉に従い、剥奪者は走った。

突撃銃や相手の関節から時間を奪い、その他にも様々な物質から時間を奪った。手中に時間を溜め、それを以って体力の回復を図る。
再び静止世界の展開を試みるも、やはり効果は一瞬で切れてしまう。
低速の凶弾によるファランクスを躱しながらできる限り早く剣を振る。射界から逃れつつ一人ずつ確実に無力化し、時間を奪い、低速世界の展開を幾度も試行する。だが、結果が変わらない。
一秒以上展開することはなかった。

（ダメだ！今日一日でかなり多用したからか！？）

停止世界の展開を諦め、低速世界での行動に専念する。
まだまだ銃弾は躱せ、指で摘まめる程度の速度であった。

その矢先だった。
低速世界の流れが一気に通常のそれに近づき、同時に3人の敵が視界に飛び込んだ。
視認と同時に真横を通り過ぎる．５０口ＢＭＧ（ビッグフィフティ）。風圧で僅かに顔の筋肉が上下する。背後で家の壁に大穴が穿たれ、反対側の景色を僅かに覗かせた。

「デカブツ持ちか！」

ＳＭＧの弾幕を紙一重で避け、側面から回り込むよう3人へと急接近する。
こちらの接近に2人はそれぞれＳＭＧと対物ライフルで備え、１

人は腕を組んで状況を眺めていた。気になるのは銃を持った2人でなく、接近されているにも関わらず組んだ腕を解こうとしないソイツ。その堂々たる態度がSRであることを予想させた。

「なるほど。どおりで拙いわけだ」

大きな閃光と小さな連続する閃光。
複数発の大小異なる銃弾を突破して2つの銃器を破壊する。銃身を斬り、片方の足と腕、肩を斬りつけて、とどめに2人を殴り倒す。

「そうか」

初めて3人目のソイツは組んだ腕を解く。

「その通り」

右手に持ったナイフ一本で、3人目の男はトキと対峙した。

「そうだ。
色世時、この戦争に巨大な点はない。無数の小さな穴が存在し、それらが特定の結末へ向けて集結と連鎖を展開して見せているだけだ」

タイムリーダーの低速効果が半減した状況で、トキは男に仕掛けた。
双剣の下段薙ぎ。
対する男は、

「最悪なことというのは、俺もトキもその点にカウントされているということだ。
しかし、救いはある。
俺たちが戦う。
それが、唯一四凶と協会の舞台（シナリオ）から降りる術だ」

不明の質問と回答、回答への返答を終えた。
必要な言葉を告げ、現状を伝え――やっとのこと、トキの殺意をまともに受けたのだった。

「お前を試させてもらう。場合によっては殺すがな」

静寂を切り裂く小さな戦場の一角で、３本の刃は交差した。

初撃。

この夜、最後の戦場にて。

先制攻撃をかけたトキは、自分の負った傷に戸惑いながら膝をついた。

第４３話―予見来撃！チート・ザ・フルスロットル！―

低速の世界が自分の中に入ってくる。
人が生み出した時間という万物の共通を目指す概念に反抗し、流れの中から外れる。
だが、これは決して自力によって成せる業ではない。

「まず、聞かせてくれ。その力に気付いたのは何時頃なのか」

低速の世界が自分を包んでゆく。

外からの時間と内からの時間が融合し、対峙する者との時間を共有し始め、解読し――部分的に超越し――問答の開始へと導く。

最初の質問に答えるのは、銃を斬り落とし、双剣を振りきるモーションで完全静止したままのトキ本体から飛び出した、もう１人の半透明なトキ。

「去年の春の終わり頃だ」

半透明のトキが仕掛けるのと同時、半透明のトキから更に色素の薄いトキが、右腕を持たない状態で現れ、最初に出現した半透明のトキは左手の剣で突き、右手の剣を上段で構えた突撃状態で静止していた。

本体と半透明が静止した状態で、右腕の無いトキとの会話をはじめる。

「なるほど。どおりで拙いわけだ」

右腕の無いトキへ聞く。
同時に静止世界というルールが破れ、極超低速の世界が展開した。
静止と低速。
現実と未来。
矛盾を犯す、境界を超えた問答。

「では、四凶という存在を知っているか？」

「知っている」

低速で動き始めた世界でトキ本体が動き始め、半透明のトキ、右手のないトキも一緒に動き始める。
右腕の無いトキの斬撃。左の剣が内から外へ流れ、手首の返しで以って外側から襲い掛かる。低速に縛られない唯一の存在がそれであるのだが、刃先が触れる前に世界が更新される。

「お前自身もそれだと言ったら、疑うだろ？」

「いいや。もう、知っている」

隻腕だったトキの中から顔の右半分が欠けたトキが現れて答える。
自らが四凶であることを知ったのは今日の今日で、四凶という存在の重さを十分に知ったと言う。

「そうか……」

見回す戦場には車両の残骸と倒れた仲間しかない。
壊れた兵器と、人間だった物質達。
誰がどのＳＲにやられたのかは、骸をみれば一目瞭然だった。ミンチなら鬼、部分消失なら神隠し。　幸運にも武装解除ならトキである。

左手をかざした状態で半分顔の無いトキは静止する。

「真相を知らない第三者から見たこの戦争の主役は“四凶　対　協会”だ。
しかし、それはあくまで真相を知らない大多数から見た映像であって真実ではない。お前は分かっているか？
本当の主役が何なのか」

「……四凶の狙いは協会じゃないのか？」

両肩を持ち、しかし左腕だけ無いトキの質問。
それは、確信こそ無いものの真相に限りなく近い、的を射た質問

だった。

「その通り」

四凶の描く戦争は、協会をも巻き込む大規模なものというだけであって、厳密にメインターゲットは協会ではないのだ。

「本当の主役がいないのは、アクションを起こすべきキャラクターがあまりにも多過ぎるからだ。わかるか？」

左腕だけ無いトキの内から左側へと、赤色と右目を欠いたトキが現れる。

「まさか、“四凶　対　四凶”」

右目と赤色の無いトキには、本体と比較して更に欠けている物があった。

両手の双剣が消えていることに気付き、男は僅かながら警戒を強める。

目の前のトキは、現実のトキ本体が実現可能な未来のひとつだからである。剣を手放したのか、或いは投擲でもしたのか。

しかし、剣はどこを見ても見当たらなかった。

「惜しい。
と言いたいが、そうだ。それも間違いではない。
色世時、この戦争に巨大な点はない。無数の小さな穴が幾万も存在し、それらが特定の結末へ向けて集結と連鎖を繰り返し、変動と流転と逆転を持って無限に等しい回数の展開してみせているだけだ。
今はまだ、初期段階に過ぎない。これからはもっと変動が激しさを増す」

左腕だけ無いトキの内から右側へと、緑と左目と双剣の無いトキが現れ、更に赤と右目、双剣を欠いたトキから青と両目、両手首を失ったトキが現れる。

『意味が分からない……』

本体を除いた全ての欠けたトキが答え、全ての時が通常通りに動き出す。
時間が戻るのと同時に、本体から飛び出た欠けたトキたちもオリジナルの中に戻る。

「知らないならそれでいい」

トキの攻撃が再開する光景を眺めながら1人呟く。

そもそもの生まれつきが一般人であるトキに、ＳＲ界の激流の如

く流れ変わる情勢を把握しきることは不可能である。一、学生であるトキにはそれを知る力も、情報網もない。
当然、四凶という概念も、ある程度までしか理解できない。

（いや、理解云々の問題ではないな。
そもそもトキがＳＲという力を持って、これからどう社会に対して姿勢を向けるか。問題はここにあるな。
相反する現実と非現実。これとどう向き合っていくのか）

ＳＲを封印して一般人として生きていくか。ＳＲとして協会に属するか。
無所属として今の立場を維持するのか、四凶となって生きていくのか。

（いや、何を考えている。
俺はトキを四凶にしないために来たんだ。
その為には三択。一般人か、協会、無所属のいずれかを選択してもらわなくてはならない。選びかねる場合は殺そう）

時間は止まっている。
ゆっくりと瞼を閉じて自らに問う。

四凶をどれほど理解しているのかを把握する必要がある。
自らを四凶だと自覚しているのはいいが、それを間違って認識していてはその属性を強める結果になってしまう。場合はによっては予想すらしない最悪の未来を招いてしまう可能性がある。よって、

把握が最優先となる。

（お前の母のようにな）

もしもその属性がコントンなら。

色世皐やヴィラ・ホート・ディマ、協会長ですらが完全に回避できないそれは、知っておくことと大まかな予測を立てて備えることが最善の対策となる。

「四凶の成長を止める方法を知っているか？」

双剣の軌道から体を反らしつつ返答を待つ。

手中でナイフを握り直し、今一度周囲の状況を確認する。　手勢の7割は死亡。部隊は壊滅。現状での生還率は1％もない。

「干渉しないこと」

1％未満の生還。

その僅かな可能性を秘めているのが目の前の人物、色世トキだ。

鬼が2人いる戦場。神隠しもいて、目の前には最大の障害でありながら最大の突破口であるトキがいる。

もし鬼が参戦してきたら、真っ先にトキを撃破することで如何（いかよう）様にも逃げられる。

「お前は自分の四凶を理解したうえでそう言っているのか？」

「協会長たちから直に教えられましたから。
それに、自分でも薄々そんな気がしていた……」

「協会長が？」

予想外の人物の登場に驚きつつも、トキが断言する理由に納得する。

「しかし、対策としてそれだけでは不十分だ。
不干渉が通用しない時がいつかは訪れるだろう」

「どういうことだ？」

「四凶とはそういうものだ。
望まない“時間をもたらす者”であることを忘れるな。いま起こっている戦争を見れば分かるが、四凶は無数の一般人たちの中に眠る四凶属性を利用している。
わかるか？
四凶とういものは誰しも持っている一面なのだ。それがどれだけ表に出、また裏に隠れているかで、周囲に与える個体の影響力が変わる。
幸せをもたらす者、逆に不幸を呼ぶ者。
平和を好む者、戦を好む者。
喰う者、喰われる者。
創る者、壊す者。

与える者、奪う者」

「お前も四凶なら、お前の四凶は何なんだ？」

「そうだな。それも含めて名乗らせて貰おうか。
戦前の儀式としてな」

低速化した世界が動き出し、半透明のトキが消えて本体が動き出す。

双剣が空を斬り、トキの背にナイフを走らせる。
狂気的に鋭利な凶器が衣服を裂り、皮膚を破って刃を赤く濡らした。

「俺はトウコツと、キュウキの四凶。
予見のＳＲ：チート・ザ・フルスロットル。
覚悟はいいか、色世時……」

（チート！？）

体勢を立て直すトキを待ち、男：チートは自ら仕掛けていった。

―第４３話―

―予見来撃！チート・ザ・フルスロットル！

／Ｅｎｄ　ｏｆ　ａ　ｌｏｎｇ　ｏｎｅ　ｄａｙ―

最初に仕掛けたまでは覚えていた。

だが、最初にダメージを受けたのは構えてすらいなかった敵ではなく、速攻で相手を無力化しようと仕掛けた自分である。

高速移動ではない。

空間転移でもなければ跳躍した訳でもない。

（必要最低限の動きで背後に回り込んだ！？

しかし、これじゃあ……！）

「そう。俺はお前の行動を先読みできる。完全に、な」

手中の時間を背中の傷に回し、最低限修復し、流血を止めたところで再度仕掛ける。星黄を投擲し、残った畏天を以って切りかかる。だが、チートと名乗った男は投擲の回避準備を終えており、トキが仕掛ける頃には近接戦の準備を始めていた。

距離が縮まり剣とナイフが触れる。

ぶつかり合ったのは最初の一合のみ、二撃目にチートの腕を狙ったトキだが、チートはそれを寸分狂わず予見。

世界が低速化してトキ本体の中から半透明のトキが飛び出し、チートに向かってきたヴィジョンがそれである。

（なるほど、肩を狙ってくるのか）

半透明のトキが本体の中に戻って消え、低速の世界が解除する。

すると、直後にトキは半透明のトキが行った斬撃をそのまま実現した。当然チートはその軌道上から身を退かせた。回避し終えていた。

空振る畏天。

それを握るトキの手の甲にナイフの刃が走る。

背筋を伝う痛みに奥歯を噛み締め、落としかけた畏天を強く握りなおし、手首を返してもう一度畏天を振る。

「お前はその程度の力でこの戦争に参加しようとしているんだぞ？自覚があるのか、それともないのか分からないが、戦争を舐めているとしか思えないな」

再び半透明のトキが飛び出し、仕掛け、答える。

「舐めてなんかないし、それに戦争が起こっているとはとてもじゃないが思えない！」

「お前だけだ。もし生き延びることができたのなら誰かに聞いてみろ。
いまは戦時中か、とでもな。
それを自覚していないＳＲは、お前くらいのものだろう」

半透明のトキが本体の中に戻る。
時間が戻る。
トキの本体が半透明の分身が辿った未来を辿る。

脛を蹴り抜き、バランスを崩したトキにナイフの刺突を繰り出す。
辛うじてチートの斬撃を防ぐトキ。
黒い刃と刃がぶつかり合い、そこから鍔迫り合いに持ち込もうとするトキだが、しかしチートはそれを予見して後方に飛んだ。

「今までの考えを捨てろ。
最悪なことに、俺もトキ（おまえ）も戦争を動かす要因（てん）の中にカウントされている」

「何？」

半透明ではないトキは疑問を抱き、僅かな躊躇を突かれて斬撃を躱されてしまう。
畏天を躱したチートが腕に切り掛かる。

「ぐっ……！」

「しかし、救いはある。
こうして俺とお前が戦うこと。それが唯一、２つのシナリオから降りる術だ」

「何の、ことだ！」

相手の能力が何であろうと切り伏せるという一点のみに集中し、トキは連撃を仕掛ける。
剣術と体術。
相手をリーチの外に逃す前に追う。攻撃が外れてもがむしゃらに、最初の一撃を当てるつもりで、そこからコンビネーションへ繋げられるよう、執拗に追う。

しかし、剣も拳足もチートには届かない。
リーチ云々の問題ではなく、繰り出す直前にチートは回避を終えている。
完全に予見されている。

「遅い」

（速い！）

ナイフの斬撃が腕と背中に集中する。
攻撃を仕掛けるたびに背後か側面を取られ、一方的にダメージをもらい、蓄積していく。

（ヨケンのＳＲ！？
よけん……予見！未来読みか！？）

畏天を持ち替える。
右腕の感覚が消えかけている今、こちらで剣を振ることは難しい。
ましてコントロールなど不可能に等しい。
左手に剣を持ち替えたところでチートに攻撃が当たるわけではない。
的が右腕から左腕に変わる。

「その通りだ。
流石サツキの子だ。感付くのが遅い。」

「何！」

「恵まれすぎているお前には分からないだろうな」

「一体全体、何の話だよ！さっきから！」

空振りの後に低速世界が展開する。
本体から飛び出すトキの攻撃を躱しながらチートは会話を成り立たせる。

「俺が芹真事務所に護られていって言いたいのか？」

「ほぉ、その自覚はあるのか。
ならば何故自分の意思で抜け出さない。
迷っているのか？　不安なのか？」

動き出す現実。
攻撃を回避して太股を斬る。

「ぎっ……！」

「善悪だけで世界を分別する時代などとっくの昔に終幕している。
お前は現代人だ。ゲームばかりやっていないで、もっと現実的に物を見、将来を考えてみるべきじゃないのか？
芹真事務所は必ずしも正しいのか？　協会はどうだ？
四凶は間違っているのか？　間違っているとしたら何が間違っているのだ？
そもそもそれを判断する者達が間違っていたとしたらどうする？
真実とはどこだ？
お前の本心はどう叫びたい？　どう叫んでいる？」

半透明のトキは答える。

行動を第一の未来として映像化し、言動を第二の未来として音声化するチートのＳＲの前で、トキの本音はチートのそれに応じた。

「わかっている！
芹真さんやボルトのやっていることだって、覆しようの無い犯罪だってことぐらい、頭の悪い俺にだって分かる！」

「じゃあ、どうしていつまでもそこにいる？
お前はその犯罪に希望でも求めているのか？」

「そうじゃない。
コントンを討ちたい。あいつだけは許せないんだ」

「それだけか？」

「……、……俺自身が、芹真さんのところでなら変われると思ってもいるからだ」

実現。
回避、反撃。
腿を刺突されたトキの膝が折れる。

「芹真では無理だ。
お前が本当に自分のＳＲに気付くことができれば、誰の助力も必要としない。
たった１人でどうとでも変われる」

「ちくしょう！」

切り上げ。
躱される。
反撃が来る。防御。
畏天を予測攻撃軌道上に置き、世界は低速化した。

「悔しいのなら選び取って見せろ、お前の未来を。
お前が憎む存在（もの）とは何だ？
大切にしているモノはあるのか？
お前はこれから、何を優先して生きるつもりだ？
これらの質問に対する答えを持っているか？」

「俺が憎むモノはコントンだ」

「嘘はやめろ」

低速化した世界が更に低速化する。
半透明のトキの中から更に半透明なトキが飛び出す。　攻撃をしてくるわけでもないそのトキは、剣を握っている“だけ”であった。

「平気で他人を殺せる奴が許せない」

「それは後天的（がくしゅう）によって発生した感情か、それとも心底から湧き上がる先天的感情か？」

更に色素を薄めたトキが現れ答える。
そこまでは分からないと。

「ただ、知り合いが殺されたり巻き込まれるのは我慢できない」
「当たり前だ。誰だって抱く感情だ」

「巻き込んだ奴らを討ちたい……」

「なるほど、それが本音か。
結局のところ、お前は殺したくないくせに、自分の知り合いが巻き込まれた途端に犯人である人物を殺したくなるという矛盾を孕んだ自分に葛藤を覚え、自分で自分を恐れているだけだ。
中途半端な善悪論、道徳、現実と非現実の境界を見失いそうになる恐怖――」

色素の薄いトキが全て消え、トキ本体の攻撃全てが虚空を切る。
リーチの外に避難したチートは笑った。

「なるほど。やはりお前は、完膚無き“一般人”だ」

息を切らせながらトキは攻撃を続ける。
タイムリーダーで加速しつつ、畏天をも投げつけ、地面に触れて土から奪った時間で右手と両足の切り傷を塞ぐ。チートが動く前に距離を詰めてナイフの刃を手中に収めた。

「やはりこの程度。
努力はした方だが、全く以って話にならない。死んだ方がマシだな」

タイムリーダーが発動するよりも早く、ナイフは走った。
チートの得物を握った手が――指が――根元から離れて地面に落ちる。

無痛のままに進む現実は、トキに一切の時間を許さない。

右手の指5本を斬り落とされ、次の瞬間に両腿に斬撃が走り、鎖骨を打ち、鳩尾、金的、顎、額、胸部へ拳足の連撃が入った。
回し蹴りで脳を揺さぶられ、意識が飛びかける。
朦朧とする意識を激痛が覚醒へと強制する。背中に刻まれた縦長の切り口。
鮮血が宙を舞う中、チートはトキの視界の中で畏天を広い、ナイフとの二刀流として構えて追撃をかけた。

足の甲を刺し、手首の腱を斬り、前蹴りで下腹部を打ち、膝を折って崩れ落ちるトキの顔面に膝蹴りを入れる。
すぐ背後に回りこんで畏天の刀身で後頭部に峰打ちを見舞う。

「そのまま死ね。
お前の力は俺が貰って行く」

前傾に倒れ、顔を地面の土にうずめたトキに言って聞かせる。

生きていようが死んでいようが関係ない。とりあえず言っておくだけだ。
トキに使いこなせなかったＳＲを他の誰かに与えて、或いは自分が世界のために使役すると。
倒れたトキの両腕にナイフと剣を突立て、頚動脈へと手を伸ばす。

（辛うじて息はあるか。
だが、時間の問題だな）

まだ残っている生命も、５分と経たずに終わりを迎えること必至。
それほどまでに目の前の生命は弱っていた。
色世時という一個の世界の終わりである。

（これで彼女の関心は俺に向くか……フン。因果という奴かな）

横たわるトキの背中に手を伸ばし、傷口に沿って体を探った。
トキの持つＳＲの根幹となっている部位が存在するかどうかによって、力の奪取方法が変わってくる。ＳＲの中には稀にそういった人物がいるのだ。体のどこかに力の源となっている部位を持つ人間が。
そういった者達は共通して特異で、強力なＳＲの持ち主である。
トキも十分にそのレベルに達していた。

（目か、これまた珍しい場所――）

「お前の、声が……聞こえたぞ」

小さな声がチートの意識を呼び寄せる。
まだトキが話せた事に軽いショックを受けつつも、チートはトキの顔へと手を伸ばして笑って見せた。

「大人しくしていろ。お前に出来る事はもう何もな――」

そこまで言いかけたところで違和感を覚えた。
悪寒にも似た感覚。
何に違和感を覚えたのか。
恐怖のような曖昧な感覚。
トキが話せたことにも違和感は感じていたが、それよりももっと前からこの感覚はあった気がし始め、本物の悪寒が走り、恐怖が沸いてきた。

「何だと？」

「小学校の頃は……よく、翠眼（これ）でからかわれていた……高校生になっても変わらないなんて思っ――」

言い終える前に頭髪を鷲掴みし、目出し帽を被ったチートと汚れた顔のトキの目が正面からぶつかった。

（この眼は、まさか――！）

「あんたは、ミスっている」

交差した視線。

その結果トキには理解できないが、確実な動揺をチートは見せた。

意識が眼に向いているうちに、トキは両腕の腱を完全に修復し終えていた。駄目元でチートの隙を狙い、手中に作り出した2連装デリンジャーの引き金を引く。

先ほどから雨のように降り注いだ銃撃に比べれば、物静かで小さな銃声が微々たる月光に照らされた夜の戦場に響いた。

「っぐ……な、なるほど！

サツキの遺物がそこに収まっているということか！」

「彼女の関心が向くってのは何だ……？

彼女ってのは、誰だ？」

右足の脛を押さえてチートが距離を取る。

触れている地面から時間を奪って両腕の傷口を治す。両腕を留めている2本の凶器を腕ごと持ち上げて地面から抜き、ナイフの方から時間を奪いって完全に傷口を塞ぎ、機能を回復する。ナイフが終わった次は剣。

土と、ナイフ、畏天から奪った時間で出来る限りのダメージを緩和し、流血を止める。

「俺の力を奪ってどうするつもりだった？」

「どうするつもりだったと思う！」

ヒップホルスターから銃を抜いて連射するチート。

この行動も、トキからすれば選択ミス。チートに攻撃が通用しないように、銃撃をやり過ごす術をトキは備えているのだ。

訓練やこれまでの実戦で繰り返してきた方法を正確に実行する。

銃弾の一発から奪える時間は微々たるものだが、数でそれを補えばデリンジャーを創り出す程度は可能で、切り傷のひとつを完全修復することもできなくはない。

しかし、トキは拳銃を創り出した。

「お前も四凶を倒すつもりなのか？」

言い終えた途端、トキは膝を折った。

銃弾を全て消されて動揺したチートだが、トキの受けたダメージが大きい事には間違いがないと確信し、予備のナイフをシースから抜いて構えて仕掛けた。

（なんて澄んだ眼をしていやがる！）

この時、チートは完全に動揺して、同時に驕ってもいた。
最初に気付くべきだったものは、四凶という属性でない。
力の根源だった。トキの翠（みどり）の目には力と同時に、四凶の属性が内包されていたのだ。

チートが先程同様に警戒し、慎重に行動していれば、トキのこの行動を見落とし、油断する事はなかった。

（……クロノセプター）

膝を付き、体を支えんと地面に伸びた左手。
本当の目的は時間の補充である。

体力を補うための時間でありながら、武器を創り出すための時間。
訓練のことを思い出す。
同じような状況を、すでに経験している。
その時も当然苦戦した。
だが、攻略もした。

（この男、チートは覚悟があるかと聞いた。
俺の覚悟とは何だ？）

指が地面を離れるまで地面へのクロノセプトを続けた。
攻撃が来る。
全身が問題なく動くまでに四肢の機能を回復したトキは、突撃しながら銃弾をばら撒くチートを視界に納めた。

（俺の力を奪いたいのは、どうしても俺の力が必要な状況にあるからか？
もし、その原因が四凶と協会なら、俺は――）

銃弾を掴み消し、触れ消す。
時間のストックが増え、その時間を用いて外形だけ作った銃の中に、マガジンを創生していく。
右手に思い出すその感触は、黒羽商会との戦いで初めて握ったものと全く変わらないソレ。

Ｓｐｈｉｎｘ３０００のグリップを握り正し、銃口を向ける。
反撃の銃弾。

チートはそれを予見して躱し、マガジンを取り替えてグロック１７のトリガーを引く。
やがて零になる２人の距離。
ナイフがトキの頸動脈めがけて走り、トキの右手が自らの銃を消し、チートの銃を消しに伸びる。

展開される低速世界。

（この後どう動――！？）

低速世界で２人はぶつかり合う。
トキの右手がグロックから時間を奪って銃口とバレル、フレーム

を消し、同時にナイフによる斬撃を左手を犠牲にして防いで見せた。
突き刺さったナイフの刃に顔を歪める事もなく、その状態から時間を奪い始める。

「何だと！」

「俺は死なない。
死ねないし、今はまだ死にたくない！
やること全部やって、戦争を終わらせてから死んでやる！」

チートの服を掴む。
同時に警鐘が強く響いた。
危険を知らせる前兆だが、無視してトキは力でチートを押す。

「やれるものなら、やってみろ！」

頭を後ろに引き、上半身のばねを利用して前へと勢いよく頭を突き出す。
チートの頭突きに対し、トキも同様の手段で対抗した。
激突する額と額。
骨振動に軽い麻痺を起こす互いの脳。
切れる額、流れる鮮血。

「彼女が誰であろうと！」

意地による衝突。

「お前には無理なんだよ！」

反動を省みない触激。

「トキ！」

連続する激突。

次のぶつかり合いに合わせ、トキは新たにアクションを起こした。相手の頭突きを誘って紙一重で躱し、側頭部でチートのこめかみを打つ。

更に一瞬怯んだところで右手を自由にし、チートの脇腹に拳打を打ち込む。1発ではない、5、6発連続で、早く、同じ場所に打撃を集中した。

「無理じゃない！
やってもいないのに決め付けんな！」

僅かの呼吸。吸い込み、吐かない。

再び右手でチートの肩部に触れ、防弾ベストから一気に時間を奪う。

「止まれ！」

一瞬だけ展開される、静止世界。
それだけで十分だった。相手の防弾ベストを完全に無力化するのは。
両肩のつなぎ目から時間を奪い、ベストを落とす。

（どうしたことだ！
先とは動きがまるで違う！）

トキが展開した低速世界に対抗し、チートも予見の低速世界を展開する。
次に来る攻撃は何か。
どの角度からどういったタイミングで、どのような種類の攻撃を仕掛けてくるのか。

「お前に、彼女を止める術なんか――！」

無かった。

チートの視界に映るトキは、本体ただ一つ。

数瞬後の未来に起こるであろう可能性が、一つも視覚化していな

いのだ。

（なんだと！
こいつの未来が、読めない！）

詰まるところ、トキはどうとでも動く事ができるのだ。
ついさっきまで不可能だった、無限の選択。

強い意志でいくらでも変えられる未来。
トキもそれを思い出していた。

時間を自らの内にストックする事により、相手の予知・予見を躱す方法を。

近接に持ち込んだトキの拳が胸に刺さる。
鋭い拳打と左手の掌底に肺の空気が押し出される。
矢継ぎ早に次の痛みが走る。
右手の掌による顎の打ち上げ、肋骨を打ち、足の甲を踵で踏みつけ、肘を突き出して鳩尾を打って押し飛ばす。

（いきなりやれるようになりやがって……！）

今度はチートが膝をつく番だった。
切れた口の中に広がる鉄の味を引き金に、押さえていた怒りが爆発する。

「あんまり図に乗るなよ！」

接近するトキに向け、腰に隠し持っていたカスタムコンデンターを構える。

装填されている弾丸は００バックの１２番ゲージ。

ハンドガンを強引に散弾仕様に仕立てたカスタムメイド・ハンドショットガン。

しかし、銃口が向くのと、一瞬トキが視界から消えたのは同時であった。

「乗っていない！」

反論と同時に、チートの顔面を左足での蹴りが打ち抜いた。

鼻血と土が舞う。

立て直したばかりの体勢を崩しながらも、銃口はトキを捉えていた。トリガーに躊躇はない。

発砲。反動。

「言え！彼女ってのは誰だ！」

散弾が銃口から放たれた瞬間、トキの右手はピッチングモーションで銃口を塞ぐように迫り、放たれた散弾の全てが掌の中に消える。

「そいつも四凶か！」

奪った散弾の時間を体力の回復に回し、もう一度、一瞬だけのタイムリーダーの完全制止を実現。
側面に回りこんで肩に拳打を見舞う。

距離を取ろうと後退しつつ、チートはコンデンターのバレルを下ろし、空薬莢を取り外して新たな散弾をセットする。

2度目の発砲と同時にコンデンターを蹴り飛ばす。
明後日の方向に小さな土柱を立てる散弾。
終いにチートの両足に銃撃と、再び創り出さした畏天による斬撃で機動力を奪った。

「投降しろ、そして答えろ！
彼女ってのは一体誰だ？　そいつは四凶か！？」

そして、いつの間にか回収されていた星黄（せいこう）。
念を入れたトキは拳銃の時間を変換して完全に傷を塞いだ。

両膝を地についたチートに、双剣を構えるトキが支配するこの状況から逃れる力は残っていない。
勝負は着いた。

「答えろ」

「答えたところでお前はどうする？
そいつを討つのか？　それとも助けるのか？」
「聞かなきゃどうしようもない」
目だし帽に隠されたチートの顔が歪む。
「それじゃあ、お前は死ぬな」
「何……それはどういうことだ？」
「言葉通りだ。
殺すつもりも無い、救うつもりも無い。　そんな心構えで彼女の前に立つなら、待っている結末は死のみだ」
星黄を突きつけて見せるが、チートは動じない。
頑として素直に答えず、わざとらしく呆れて文句をつけた。
「そんな状態だから言ったのだ、死んだ方がマシだと。
今すぐ、ここで死ねとな」
「死ぬ気はないから諦めろ。
言え、彼女ってのは誰のことだ。四凶のキュウキって奴か？」
「残念ながら外れだ。もし……

もし、彼女に会う覚悟があるのなら、俺を刺してみろ」

「断る」

「はぁ……もう、やってらんねぇ。
そんな生ちょろい考え方だと殺されるぞって言ってんだよ。いい加減分かんねぇか？」

いい加減うんざりしてきたのはトキも同じだった。
冷静に振り返ってみよう。今日、何があったか。
遠足に出かけてその先で会長らとお茶会、気が付けば遠足先の村は四凶たちに制圧され、多くの死傷者が出た。どうにか撃退する事ができたものの、疲労は計り知れない。強敵と言えるＳＲ数人がいて、何とか解決に至ったものの、クロノセプターを用いても回復しきれないだけの疲労を抱えて帰宅したのだ。
そのままやりきれない思いのまま隣町の港まで移動してしまい、ぼんやりしたままスミレとカンナに出会い、ダイレクトに帰宅。２人に料理を振舞って、波状攻撃でも仕掛けるように翼・エミルダコンビが来客し、そしてこいつらである。
本音を言うなら、早く休みたい。
しかし、それ以上に気になるのが、自分を殺してまでタイムリーダーのＳＲを必要とする理由、それからその原因と思わしき人物の詳細。最低でもそれだけは知りたかった。

「私もだ。早く終わらせたいから、とっとと結果を選ばないか。
私を殺してシナリオから抜け出すか、それとも私を生かして今までとさして変わらない四凶の、戦争の駒として生きるか」

「そこもよく、分からない……」

「……何が分からないって？
お前ひょっとすると頭悪いのか？
四凶が始めたこの戦争、お前は自分が関係ないと思っているからわからないんだ」

いま世界では戦争が起こっている。
その原因は四凶で、オリジナルの彼らが四凶とうい属性の発現していない一般人の四凶に呼びかけ、波紋を起こして呼応させ、味方の軍勢として手足のように動かしている。
それが現状だ。
最新の情報によると、６ヶ国のミサイルサイロを占拠され、９ヶ国の首相らが暗殺、３つの情報都市と１１の貿易都市が四凶の手に落ちている。

この戦争を客観的に見て分かる事は、四凶の属性を持っている人間は漏れなく巻き込まれている。
特定の人間を除いて。

「それだけの話だ……足の感覚が無くなってきた。そろそろ殺すか助けるかしろ」

「あんたにとっちゃそれだけの話だろうが、俺にとっては理解できない話だ。
何が目的で四凶はそんなことをするんだ？」

土から時間を奪ってチートに止血を施し、痛みも少しだけ和らげる。

「マジで直すのかよ……くそっ、仕方ない。
四凶の目的が、単に戦争でないことは明らかだ」

「そう言い切る根拠は？」

「四凶共の行動速度の遅さを考えれば分か――おっと、ただの学生には理解の外か。
つまりだ、四凶を観察していた者達から見れば、これほど遅く動く四凶は珍しく、こういった場合は大概何か裏があるのだ」

再度確認するが、トキが聞きたいのは襲う理由とその原因となっている人物だ。
それを聞くのも億劫になりつつある中、やはりチートはそれを話そうとしない。

「教えてほしいなら選べと言っているだろう。
俺を殺すか、お前が死ぬか」

「だから、それじゃあ意味が無いじゃないか！」

「いいや。世界の未来を見つめろ。
俺たち2人、どちらかの死で戦争の結末は大きく変わる。人類の未来も変わって行く。
無意味と言うのはやはり、お前が理解していないからだ」

「だったら教えろよ。くどいん――」

瞬間、チートは余力の全てを一つの行動に使った。

剣を突きつけるトキに向かい、体を前に倒したのだ。

当然、刃がチートの体に触れ、鋭い刀身は容易く衣服を破り、肌を裂いて肉を断った。

「っ、お前――！」

「お前が選ばないからだ、トキ。

ったく、こんな終わり方かよ、俺も……」

心臓を貫いた剣。

激痛に顔を歪ませながらもしゃべり続けるチート。

「……オリヤだ」

その言葉の中に混じる、彼女の名。

「あいつには気をつけろ……お前は知らないし、直接奪っていないから自覚は無いだろうが……大切な、モノ――」

吐血が目出し帽の生地を飛沫となって抜け出す。
すぐにクロノセプターで時間の予備を両手に集めるが、それよりも早く、チートは手榴弾のピンを抜いていた。
安全レバーが飛び、同時にチートの蹴りがトキの腹を正確に捉えた。
尻餅ついてから気付く。
（自殺する気か！）
間に合わない事を警鐘が報せた。
蹴りの反動が吐血を誘い、大量の血液が宙を舞う。
手榴弾の爆発までコンマ数秒しか残されていない。
そんな状況でだった。
男は上半身を起こして大きな事実を、静かに語った。
今夜初めて戦った敵。　チート・ザ・フルスロットル。
決着の間際に初めて見る覆面の下の素顔。
しかし、それは初めて見るモノではなく、
「すまんな、トキ。オリヤを頼む。俺たちはお前を孤独にしてしまうが――」
爆発が、交差した視線を遮る時、初めてトキは身内の人間で敵で

あったことに気付いた。

「ツツジおじさん？」

立ち込める爆煙の中に横たわる、生き物だったそれ。

傾いていたはずの耳が、言葉に集中していたはずの頭が、善悪と利害の一切を抜きにして“彼女”と言われた人物を求めた個人が、1人の男の死に混乱していた。

「何で？　どうして……？」

土の上に横たわる亡骸を探り、混乱は深まった。それは間違いなくトキが知っている叔父の体であり、脇腹の銃痕は幼い頃に浴場で見かけたものの正にそれだった。

問題はどうしてここにいたか。

何故戦ったのか。

どうして、いつもと違う声で話しかけてきたのか？

「これが……私たちの答えだよ、トキ」

女性の声。

振り返り、叔父の前に倒したサブマシンガンと対物ライフルを持

っていた2人が上半身を起こす所を目にする。
混乱するトキを余所に時間は容赦なく分秒を刻む。
2人の手には叔父同様、破片手榴弾が安全ピンを抜かれた状態で握られていた。

「俺たちは世界を四凶たちの良いようにさせたくないんだ」
「もちろん、協会にも……サツキさんや、陸橙谷の家族、銀狼の一族みたいな犠牲者を出さないためにも」

1人の手榴弾が爆ぜる。
隣で爆風と飛来した破片の痛みに顔を歪めながら、もう一人は目出し帽を取った。

叔父同じく、知っている顔。

「如月のおばさん……」

「全部を話してやれないのが酷だが、時間がないから仕方ない」

いつ安全ピンが抜かれたのか分からない手榴弾。
現状でトキに出来る事は少ない。
叔父の死を目の当たりにし、何もしなかった自分に出来る事は、本当に少ない。

だから、それらの行動を無理だと諦める前に、全ての可能性を試行する。

「止まれぇっ！」

直後、数メートルの距離が一瞬にして詰まる。
展開するは瞬間的だが完全静止の静寂世界。

親戚の如月めがけて全力で地を蹴った。

りんごが爆ぜる前に触れる。
時間と時間。
一方は奪い、一方は奪われる。
結果、りんごは形を失い、機能を失う。

アップルグレネードを完全に排除したトキは、息を切らせならが親戚の生存を確認した。

「どうして、こんな……」

「トキには驚かされっぱなしだ。まさか、こんなことも出来たなんて」

銃声の止んだ戦場で向かい合う2人。
如月夜深（きさらぎよみ）。
親戚の集まりで何度も会ったことのある人物で、親戚の中ではみんなの頼れる相談であった女性だ。

トキは戦う羽目になるとは夢にも思っていなかった。
理由もない、戦えるだけの力を持っているとも思えない。
それなのに今夜、彼女はここにいた。

正確には彼女だけでない。
ツツジの叔父もそうだった。
一般人を装ったＳＲ。一般人の中に溶け込んでいたＳＲ。

「おばさんもＳＲなのか？」

「まさか……私はただの人間さ。ちょいとばかり腕に自信がある程度の」

「……どうして、こんなことをするんです？
オリヤというのは何者ですか？」

トキの質問に、血に濡れた夜深の顔から柔らかさが消える。
何が語られようとしているのか、トキはその表情から身構え、真剣に耳を傾けた。

「オリヤは、トキの大事なモノを取りに来る。
それは殺してまで奪うかもしれない」

「殺すって、俺はオリヤなんか知らない……」

「トキが知らないのも無理はない。
私たちだって、実在するのを知ったのは１ヶ月前なんだから」

それまでオリヤという人物の実在を疑っていたと夜深は言う。

「何者ですか？」

「母親思いの優しい娘だ。
けど、母親に最期に吹き込まれたことで異常をきたし、そのまま今日まで生きてしまった。正常に戻ることなく個性を創り上げてしまった可哀想な娘だよ」

「……と、言うと？」

「彼女の本名は、オリヤ　アキ。
織物の織と書いて、夜。それでオリヤと読み、アキは四季の秋。分かるか？」

「織夜……秋」

復唱しながら頭にフォントイメージを形成する。
織夜秋。
これが、マスターピースを殺した人物の――

「そう。それが彼女の現在（いま）であり、彼女の欲するものだ」

「――？
それは、どういう意味――？」

ふと、遠くから自分を呼ぶ声が上がった。
虚を突かれ驚いて振り返ってみると、歩み寄ってくる鬼の姉妹と、家の中から顔を覗かせて手を振る翼とエミルダが目に飛び込んだ。

「織夜秋（シキヨトキ）。
それが、彼女の本当に手に入れたがっている名前だよ。
その為にはトキ、お前を殺さなければいけないと吹き込まれている……」

「それ、だけですか？」

はたと気付く。
再び夜深の手中に手榴弾が握られていることに。
しかも今度は破片でなく、焼夷手榴弾。

それはトキが振り返った瞬間に用意した、夜深の最期。

「アキにとって、トキが唯一の敵であるんだ。
彼女の四凶はトキ次第とも言える。
アキは、まだ幼い。
会って色々と教えてやってくれ」

眩い明かりの後に炎が如月の体を覆ってゆく。
夜の闇を裂いて。

静寂を破って。

テルミット反応による熱と光に包まれ、世界に平穏を、個人に希望を願い、ひとつの命が消えてゆく。

燃え盛る夜深に触れ、時間の補充による回復で助け出そうと突っ込むトキを、カンナが慌てて止めた。

「お前、死ぬ気か！？」
「離してくれ！今ならまだ――！」

「トキさん。その方の生命反応は消えています」

「まだ、俺なら――！」

直後、3人の背後で爆発が起こった。
一つではなく複数。
そのどれもが爆発物による爆発であることがすぐに分かった。

カンナの手中で暴れていたトキが落ち着き、同時にそれを直感した。
爆発が起こった場所は、全て自分が切り伏せた者達のいた位置。

（……まさか！）

ツツジと夜深、親戚2人の言葉が引っかかり、悪寒を覚えながら

トキは爆発場所に駆けつける。

“　俺達　はお前を孤独にしてしまう”

“これが　私達　の答えだよ”

確認する先々で、悪い予感は悉く的中してしまった。

（まさか、この人たち――！）

爆煙を払って覗き込む敵だった者たちの顔。

中には顔面を損失して判別できない者も居たが、半数近い素顔を確認してトキは悟った。

ここで息絶えた“全員”が、親族であった。

老若男女、自分の知りえるいとこ全員が揃っていた。

人数と体格から誰がどの家の人間かを判断していき、その途中で気付いた。

ツツジ叔父の言葉。

孤独にしてしまうという謝罪の意が込められた台詞。

「おかしいだろ……」

家の周りを一周して確認して歩き、ツツジの亡骸のもとへと戻る。

改めて、ツツジの言葉が実現した事を理解する。

呆然とするトキと、状況を飲み込めずにトキの異変を気遣う４人。
その耳に遠くから聞こえるサイレンの音に捉えると、カンナとスミレは逃げることを進言し、翼とエミルダの２人もそれに賛同し、トキに異議の有無を確かめた。

「どうしたんだトキ！」

「あたしが背負ってく！逃げんぞ！」

そう言ったカンナはすぐ、トキの腹に強力な拳を一発見舞った。
大きな衝撃を受けて前かがみになったトキを、カンナは無理矢理背負った。翼は自分の住居に向かおうと提案。姉妹はそれに応と答えた。
ほどなくして走り去る４人。
途中ですれ違うパトカーをやり過ごし、翼とエミルダの住む廃工場へ向かった。

揺れる背中、朦朧とする意識。

トキはどうしても納得ができなかった。
何故死ぬ必要があるのか、何故自分なのか。
自分を孤立させる理由は何なのか。
原因は何だ。オリヤか、それとも四凶か。

分からない。

視界に飛び込む見慣れたむき出しの鉄骨。
それが翼の住居であることを報せた。

報せたが、理解はしない。ただ、無気力なままに感じ取っただけである。

（分からない……）

カンナの背中から伝わる振動が消えた頃、トキは完全に意識を失っていた。

「ここなら安全なんだろうな？」

声が遠のく。
いつも風が吹き抜けるこの廃工場は、気のせいか穏やかだった。

「ああ。私とエミルダの2人でここに住んで1ヵ月は経つが、何のお咎めもない。
それに私はここに長い。
なぁ、トキ」

工場内が暗いのはいつものことだが、今日は蝋燭の光さえ見当たらない。

「カンナ姉様！
トキ様が……！」

もしかしたら、これは夢かもしれない。
現実ではなく、夢の中の話。
出来の悪い悪夢。
C級映画にありがちな夢落ち。
佐倉の叔父も、如月の叔母も、死んではいない。
夢の外ではいつも通りの生活を送っているはずだ。

（結構疲れたな、今日は……）

長き一日の終わりに、トキは多くの“者／物”を失った。
クラスメイトを。
居場所を。
親戚を。

絶望。
現実逃避。
容赦を知らない現実。
しかし、そんな深く、巨大な闇の中を僅かに照らす光があった。
長い一日の終わりに――意識を失う直前に――トキは、唯一あの戦場に、父の亡骸が無かったことに気付き、思い出していた。

第４３話―予見来撃！チート・ザ・フルスロットル！―（後書き）

「行方不明？
トキが？」

『そうです。
つい先程、本部の予知部隊からトキの存在をロストしたという報告が入りました。数分前まで戦闘をしていたのですが、開始数分で突然ロストしたそうです。ですからアナタに捜索し、位置報告をして欲しいのです。分かりましたか、トウコツ』

「分かりましたも何も、目と鼻の先でトキは寝てるぜ？」

『えっ？』

「予知部隊もとうとう箱払いって時期なのか？
俺はずぅ～っと、見失わないように追っかけていたんだけどな」

『それは本当ですか？』

「当たり前だろ（トキが死んだら決闘できなくなるし……）」

『そうですか。
助かります、トウコツ』

「ぅ……ぉう、あ、つぅかよ、速攻でこれから言う位置を知らせてやんなよ。俺も腹減ってきたしさ」

以上、日本より。

同時刻、インドネシア。

「色世トキを見つけた！？
それは本当か！」

『ぅす、間違い無いッス。
鬼、神隠しと共に廃工場に逃げ込んだところを見かけました。
暗闇で、背負われていましたが、間違いなくトキだってことを確認できました。そう呼んでいましたし』

「分かった。
僕はこれから日本へ向かう。色世トキを見逃さないように観察しておいてくれ！」

『了解ッス！』

通信を切り上げるのを待ち、特級風司・リデアは口を割った。

「私達2人がナイトメアを抜ける理由はトキにもある。丁度良い機会だ。君も直に会ってみたまえ。
マスターピース殿の右腕だった君だ。歓迎はされなくても、突き放される事もあるまい。何なら私が紹介しようか？」

「隊長～、隊長だってそこまで親しくはないでしょう」

「心遣い感謝する。
だが、このミギス・ギガント。既に組織の構成員でない君たちを従えて赴く事は出来ない」

「誇示は充分だ。
考えてみたまえ、君の“衛星千里”でも捉えきる事の出来なかったトキだ。もし敵対した場合、君は彼をどうにか出来るのかね？」

「それにミギスさん、僕達はほんの僅かですが面識があります。半日ほど前のことですが、共に四凶と戦ったのです。僕達が同行する事に僅かながらも意味はあると思います」

「……なるほど。それもそうか」

「よし！そうと決まればすぐ大気圏へ向かおうではないか！」

以上、リデアのケイノスを従えた、現ナイトメア最高指令であるミギスの説得より。
同時刻、四凶たちは特に興味を示す事も無く、進行を続けた。

――十数分前。

「もしもし～、藍ちゃん？」

『どうしたのパル？』

「うんとね～、いま事務所襲われたんだけど～」

『襲われた？
相手は？』

「雑魚ばっかりだよ」

『そう……』

「それで～、トキの事がちょっと心配だな～って、芹真さんが言っていたから、藍ちゃん見てこれないかな～って、電話したんだ」

『了解したわ。
急いで見てくる。連絡は確認後にするから』

「はぁ～い。お願いね～」

折り畳み式である携帯電話を閉じ、ボルトは携帯電話を芹真に返した。

「言ってくれるようだな」

「うん。オッケ～、だって」

芹真は数人の分の四凶が重なって出来た骸の山を足蹴にしつつ、残敵の有無を確認し、その傍らでボルトは少し早いカキ氷に頭を痛めていた。

第４４話－孤立した島国で－（前書き）

彼方に暁が見える。
他に抱く悪意も、掲げるべく善意もなく。
ただ水のように、雲のように、流されるようにして動いている。

源を司る者達が強く、激しく渦巻いている。
司者の使いとなった人間が、築いてきたモノものを崩す。
優しさとも情熱とも違う熱が空を焦がし、実のような虚が大地を揺るがす。

現実を哂う。抵抗を嘲う。
侵攻、奪取、崩壊。
それまで護られてきた者達による矛盾の連鎖、否定の拡大。
法が消え、秩序が消え、暗黙が破られようとしている。

とりわけ深刻なのが、現実を侵食するもう一つの現実。

暁の雲が流れてくる。
穏やかな、しかし絶大な流れに乗って。
圧倒的な威圧感と恐怖、計り知れない混沌と矛盾を孕んだ雲が、頭上へと迫っている。
逃げられない、避けられない。
衝撃の暴風と、悲しみの豪雨を撒き散らすであろうそれに対し、個人はあまりにも無力。
この小国にそれを回避する力はない。

人々が暴風と豪雨に巻き込まれることは必至。

どんなに隠れても風は必ず吹き付ける。
どんなに頭上を守ろうとも雨は必ず個々を濡らし汚す。

私には傘すらない。
傘どころか、混沌の雲に抵抗することさえ叶わない。

風に立ち向かうことも出来なければ、雨を耐え忍ぶことも出来ない。
誰かに頼らざるを得ない。
ただここに居て、流されるのを待つのみ。
屈せずにいることが、唯一の抵抗。

悲しくて辛い、無力の露呈。
幾度も経験してきた苦汁。
今までと何一つ変わっていない自分には、その苦汁を回避する術すらない。

……

暁が私を飲み込もうとしている。

いや、私だけでない。

意思を保つ全てを飲み込もうとしている。

(芹真さん……私にできることは、到来を知ることだけです)

病室の窓から青空を見上げ、平和の針を刻む時計(しらすい)の街並みを見渡

す。

もう、夏がそこまで来ている。

そして彼ら。

四季に便乗するかのように伝わる混沌の波も。

少しずつ、じわりじわりと這いずって、逃げ道を潰しながら迫るように。

鳴らすことの出来ない、自らの内に宿ったギャラルホルンを憎みつつ、風間小羽（かざまこはね）は今日も、憂鬱な一日になるだとうと予測した。

第４４話－孤立した島国で－

痛みは無い。
それが夢でも現実でも、身体は痛むことを忘れていた。
しかし、身体が痛みを忘れた代わり、心が絶え間なく悲鳴を上げるようになっていたのも事実である。

痛みは無い。
されど心苦しさに悲鳴は零れる。
痛まない身体の中に存在する、止まない痛みを抱えた心の闇。

己の愚考、無力、無責任。
流動し続ける世界から逃れ、一心に平穏だけを願った果てに辿り着いた孤独と矛盾。
必然的に生まれる葛藤、孤独と矛盾がもたらす回帰の願望。

それらが身体を苛むことはないが、心をきつく締めた。

しかし、それでも痛みが無いのは、男がそれほどまでに鈍くなり、余裕を失い、疲れていたからであり――僅かな希望を持って、命を諦めずに居るからだ。

（そんな……）

早朝。
ベッドの上。

長いこと白い部屋に閉じこもっていた彼は汗、そして涙と供に夢より覚醒した。

「皆が、反抗を決意した……！？」

酷くうなされた原因は怖い夢を見ていたからではない。境界を超えて報せに来てくれた者の言葉を、何の身構えもなく耳にしたからである。

夢の中で聞かされた現実に起こった出来事。

その言葉にただならない寒気を喚起し、同時に恐れおののく自分に対する怒りと不甲斐無さ、これまで何度も繰り返してきた葛藤を改めて自覚させられた。

ベッドの枕元に置かれた鏡を覗き込み、汗ばんだ自分を落ち着かせる。汗を拭い、額に張り付く髪をかき上げ、呼吸を整える。

「キョウ……もう迷っている時間は無いよ。

息子さんに会いに行かないと！」

夢の中で事実を伝えてくれた彼女が、現実に話しかけてくる。

直接部屋の中に姿を晒すことなく、ソレの中から彼女は息子に会うように勧める。

ここに居続ける意味はもうなくなった。

「いま息子さんを助けることができるのはキョウだけでしょ？　それに、渡す物もあるって……」

「分かっている……わかって……いる、ハズなのに、また僕は逃げ出したいほどの、恐怖に震えているんだ」

沈黙に包まれる白で統一された小奇麗な独房内。
男は布団から出てベッドに腰をかけたまま数分、沈黙を続けた。

「キョウは父親なんでしょ？
アナタは自分の子供を大事に出来ない人じゃないでしょ？」

無言で頷く。
弱々しくもそれを認め、頭を抱えて数秒考えた後、男：キョウはベッドから腰を上げた。

「今が、恐怖に打ち勝つべき時なんだろうな」

「そうよ。
逃げたくなる前に、やることをやろうよ、今度こそ。ね？」

「あぁ……」

壁のデジタル時計に目をやり、起床した時刻を確認してから身支度を始める。
ＡＭ　０６：０１。
睡魔は完全に頭から去る。

汗ばんだシャツを脱ぎ、予め用意しておいた私服に着替える。
1人、独房で。
下着ごと取替え、タイトジーンズを履いて皮製のベルトを通し、一度深呼吸。それからワイシャツの袖に腕を通して前ボタンと袖ボタンを留める。

協会に頼んで隠れ蓑とさせてもらった部屋との別れに未練はない。ただ、世界の歯車の一部として自分が戻っていくことに恐怖を感じていた。
一度逃げ出した世界への復帰。温度差は大きいだろう。

最後のボタンを留め損ねる。
震えが大きくなる手。指先。　また逃げ出しそうになる自分を叱咤する。
誰かの励ましが無かったら再び逃げ出していただろう。だが、今は逃げない。心強い味方がいる。
それに今、自分にしか出来ないことがある。

四凶という舞台に戻り、協会長が描く世界へと戻る。

しかし――

（皆が反抗すると決めた以上、僕1人だけ逃げ出すことは出来ない）

自分を取り巻く親族たちが決めた運命を確実なものにする。　それは四凶や協会長が描くシナリオへの明確な反逆行為。
彼らの計画を認めない、小さな否定。

しかし、自分たちはそれを直に行うわけではない。

「アリス。トキは、どんな力を持っていた？」

小さな机の上に眼鏡を置き、整髪スプレーを取り出して髪を整える。

数少ない味方であるアリスはそれにどう答えて良いものか悩んだ。

「四凶に対抗しうるだけの経験を積んでいたように見えたか？」

「……いいえ。
四凶に対抗することはまだ無理だと思う」

質問を変える。

四凶に対抗できるだけの力ではなく、四凶の“誰か”に襲われた場合、トキはそいつらから逃れるだけの力を持っていそうか、と。

それに対して彼女の返答は思いの外早かった。

「はい。撃退は無理でも逃げることならね」

「そ……そうか」

ジャケットを羽織り、眼鏡を胸ポケットに差し込んでから再び深呼吸して自分を落ち着かせる。

着替えが終わったところで机の引き出しを探って小さな手作りの巾着袋を取り出す。
以前、これが原因でトキが殺されかけたと聞かされた。
時が来たのだろう。
事実を告げなくてはいけないが時が。

「もう迷えない……そうだよな。
お願いだ、一緒に付いて来てくれないか、アリス」
「もちろん、そのつもりよ。
私が一緒に行けば、キョウが死ぬ確率は無くなるんだから」

脱いだ服を綺麗に畳み、ベッドを正す。
机上の写真を除く、一切の物をゴミ箱へ落とし、同様に引き出しの中身も全てゴミ箱へと移す。

そんな、独房を発つ男の行動を監視カメラは捉えていた。

「ありがたい。
四凶から息子を護る、その手伝いをしてほしい」

監視カメラは音声も拾っていた。　キョウという人物が特別待遇でここに収容されていることも、見ている側は承知済みだった。
収容というにはあまりにも待遇が良過ぎて疑問しか浮かばないが、所長クラスでなければこの囚人の事情は知らされない。聞くことも許されていなかった。

加えてキョウは部屋を出ようとしない、大人しい人物であった。

それが原因となり、監視側は職務を怠慢しがちになっていたのだ。現にキョウの部屋掃除を見ていたものは、真面目に映像を送り続ける監視カメラ一台のみ。会話を拾っているとは言え、録音に頼り、リアルタイムでその会話を人間が耳にすることもなかったのだ。

「絶対に逃げないんですね？」

「もちろんだ」

監視カメラは音声と映像を拾っていた。

1人分の声と行動、成り立っていない会話と理解に困る行動を。

しっかりと映像を拾っていた故に、監視者が色世境（しきよきょう）の行方不明に気付いた時の混乱は尋常でなかった。

監視カメラが捉えた映像を繰り返し再生しても、そこには成り立たない会話と、私服に着替えた色世キョウの部屋を片付ける姿、最後に何の前触れもなく画面内から姿を消す瞬間しか映っていなかったのだ。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第４４話－

－孤立した島国で－

本日が晴天でも、明日が雨だと分かっていればテンションが半減する。

これって、俺だけ？

「確実にお前だけだよ」

日本　ＡＭ　０８：００　白州唯。

遅刻間際であるにも関わらず、大橋友樹と北島幸哉は談笑しながらゆっくりと通学路を進み、２人の後ろを歩く崎島恵理の歩調も自然と２人に合いつつ、その目は文庫本に落ちたまま反れることなく通学路を歩んでいた。

「だって、雨って鬱陶しいじゃん？」
「なぁ、友樹。
愚痴を言えば誰だって鬱陶しさを感じるものだろ。恵理もそう思わないか？」

「そうね。
感情の負の面というのは非常に連鎖しやすく、感染し易い。
正確には共感によって左右され易いということで、一般的に感情の共有・同感・同情と言った概念で括られる心的要因が――」

朝から聞きたくも無い半ば説教じみ、また心理学じみた解説に友樹のテンションは劇的低下を見せた。
肩を組んで絡んでくる幸哉に、分かったかと聞かれて渋々頷く。
身をもって体験した。
愚痴でなくともテンションは下がる。

「テンションなんてさ、その場その場の状況で予測できるかもしれないけど、必ずしもどうこうやってテンションが変わるなんて有り得ないんじゃないか？」

「はいはいはいはい。
朝から面倒な話はやめよう。何言いたいのかまったく分かんなくなってきた。　それよりさ、今日も智明（ちあき）は学校来れそうにないって？」

「あぁ。岩井から電話あったよ。

熱が下がらないんだってさ」

話が切り替わると、数秒前までとは打って変わり、口数が一気に減った。

“奥の自然処”、村の襲撃事件から1週間。

あの日、救助された村人と白州唯高校教員および生徒達は警察によって保護されていた。

「それにしても、まるで夢みたいだよな。

いきなりテロリストが現れて、国連の人が対処して、駆けつけた警察のお陰で皆殺しにされなかったなんてさ」

幸哉は不機嫌を隠すことなく顔に表して言った。警察に保護されたことには感謝しているものの、幸哉は年上嫌悪症。素直に感謝しきれないところが、大人に助けられたという所が気に食わないのだろう。

友樹は感謝こそしているが、未だ事件に巻き込まれたことを信じられずにいた。

今まで体験したことのない危機に感覚は麻痺し、恐怖を恐怖と認識出来ずにいたのだ。

そして、もっと違う何かを見ていたような気がする。何故だろうかと自分に問うが、答えは見つからないし、その何が具体的に思いつかない。

錯覚に似た歯がゆい感触に脳が熱を呼び起こす。何かが靄のよう

に浮かび上がってくるのだが、それを掴むことができない。複雑に絡み合った糸の玉の如く、端を現すこと無き掴めそうで掴めない厄介な記憶。まるで夢。

「トキは？」
「智明同様、まだ学校には来れそうにないってさ」

クラスメイトが7人減った。
5人は村でのテロで命を落とし、2人はそれぞれ意識不明と重傷による長期入院による退学。　学校に来られなくなった生徒だけでそれだけ居るのだ。不登校になった生徒はそれよりも遥かに多い。
失ったことで心に傷を負った者、恐怖によって精神を苛まれた者、戦火によって四肢のいずれかを失った者、それらが原因でリハビリ生活を始めた者達。

「昨日は何人来たっけ、俺らのクラス」

「23人よ。
来られなくなった7人を抜いて、今は全32名……昨日の不登校はトキ、智明、岩井、翼、奈倉、高城、夏山、類家、五十嵐」

「俺も学校サボりてぇ～」
「いいのかよ、幸哉。そんなこと言ってると、委員長が黙っちゃいないぜ？」

「分かってるよ。こんな時こそ学問に励み、規律を守るべきだ～、ってんだろ。　とてもヤクザの息子とは思えないよ。うちの委員長

は」

現実（がっこう）は、被害者となった生徒達だとろうが容赦無く、全ての生徒に対して平等に厳しかった。

辛い目に遭ったにも関わらず、行事予定表通り登校せよ、通学に支障がない限り登校せよ、と通達したのだ。

しかし、目の前で殺戮を目の当たりにした生徒は少なくはない。その為、3学年の半数以上が精神的・肉体的ショックによる登校不可という状況なのである。

その為、学校側と保護者側で衝突が起こっていた。ＰＴＡに訴える者もいれば、教育委員会に持ち掛ける者もいた。

「まぁ、他のクラスよりは登校人数がダントツ多いんだから調子に乗ってんじゃないの？」

律儀に学校の言いつけを守っているのは3年3組くらいだった。

二大委員長を始め、佐野代、両金（もろがね）、樋口など、共に辛い現実を経験をし、挫けそうな今だからこそ頑張ろうと激励する生徒が居たおかげと、1人1人を訪問して回り生徒を落ち着かせて歩いた担任：蓮雅の援け、この2つの大きな要因が生んだ結果である。

数名の不登校がいるものの、全員が連絡を取れる状況にあるため目立った不安や心配は少なかった。少なくとも現時点で自殺を考えている生徒は1人もいない。

「まぁまぁ、委員長も委員長なりに気を紛らせようと頑張っているんだ。

悪口はやめようぜ、友樹。お前だって気分悪くなるだろ？」

「むぅ……」

「それより、今日こそ智明とトキのお見舞いに行かない？」

崎島の言葉に2人は顔を見合わせ、一拍置いて互いに頷きあった。

話はすぐに纏まる。

崎島が2人の元へ予め連絡を入れて、幸哉はフルーツ、友樹が溜まった配布物を2人分持って訪問することになった。

この日、白州唯高校3学年は、あまりの出席率の低さを理由に午前中で学業を切り上げたのだった。

フランス北部。

現地時間　ＰＭ１３：５７。

それまで協会支部の制圧に全力を尽くしていたキュウキは十数時間の戦闘の疲れを癒すべく、制圧を完了した支部のカフェでハーブティーの香りを楽しんでいた。

愛用のスーツに身を包み、よく手入れされた髪を背中へとまわして整える。

片手にティーカップ、片手にタッチペン。

テーブルに置いたスクリーンをペンでタッチし、送られてきた戦況メールに目を通していた。

他の部隊の侵攻状況を確認しつつ、次のステップへの移行タイミングを計る。主要都市の制圧状況、抵抗戦力の詳細、味方戦力の効率等、夥しい情報がスマートフォンに送られてきた。

「……なに？」

送られてきた新しい情報を流すように読んでいた最中、キュウキは小声だが、声を漏らすほどに同様した。

彼女を驚愕させるほどの情報がいま、日本から配信されてきたのである。

それは一週間前にも聞いたはずの話だが、たった今その詳細に目を通し、初めて驚愕に値するほどの事件だったと知った。

（色世時が佐倉躅躅（さくらつつじ）こと、チート・ザ・フルスロットルに襲われるもこれを撃退!?

チートの他にもトキの親族ら、ほぼ全員参加による襲撃テロ……確認された生存者はトキのみ。

他の親族であった者達はすべて死亡が確認。

現在トキはショックによって倒れ、意識不明の状態――）

画面を睨んだままキュウキは考えた。

これから実行しようとしていた計画、それに生じてくるであろう確実で、しかも大きな支障の影。

冷静に分析し、最悪の事態であることを認めた。

沈黙。

カフェから一切の他人が消えた時、卓上のスマートフォンが拳によって打ち砕かれた。

「何てこと！　まさか、トキ1人を残すなんて！
ここまでやれるとは、私が彼らを侮ったというわけか！」

ティーカップを手の甲で叩き飛ばす。
通話用の携帯電話を取り出して日付を確認し、通話ボタンを力任せにプッシュ。

『コントンだが、何か？』
「色世に関わる人間共が集団自殺をしたわ」

『ほぅ。計画の変更が必要なのか？』

「えぇ、オーロラ作戦の開始時刻を早めるわよ」

『何時だ？』
「1週間後よ。
それまでにあなたは出来るだけ多くの協会メンバーを潰して。
出来る限りでいいわ。上位を潰して貰えれば助かるけど、無理にとは言わない」

『クク……言われなくても』

向こうから通話は切り上げる。

それからすぐ、キュウキは叩きつけるように携帯電話をテーブルの上に置いた。

（全く、あいつらほどの四凶、真っ先に支配下に置いておくべきだった！

――いや。

こうしては居られない。部隊を四分しなくては！

まず……第一隊はトウテツと６００万の軍。これで中国領を侵攻。第二隊はフォルトンと３００万でオーストラリア方面へ移動し、そこからインドや各諸島の制圧。第三隊は私が率いていけばいいが、問題は第四隊とコントン。彼が軍を従えてくれるかどうかによって戦況は大きく変わってくる。うまく動くならロシア・北極方面へ展開してもらう。

それからもう1人……）

脳裏に浮かぶ顔は無邪気そうな表情。

殺意によって作られているにも関わらず、その表情が込め過ぎた殺意によって生じたものだと知らない少女。

（オリヤ……今頃協会部隊によって連行されているだろうか。

うまく行けばいいが、果たして本当に信用できるのか？）

今更になって浮かぶ不安。

それは色世家の親族たちの思わぬ行動がもたらした副産物でもあった。

オリヤは色世時を狙っている。もしかすると、過去に何らかの因

縁を持っているのかも知れない。最悪の場合、どこかで繋がりを持っている可能性だってある。もし、それが実現した場合、色世家の親族同様、キュウキに支配しきれないオリヤは、こちらの想い描くシナリオの全てを水泡へ帰す引き金になりかねない。

彼女はその可能性を十二分に秘めていた。

廊下を移り、管制室にて放送機具を操作する。

「第一支部を制圧した全部隊に告ぐ」

マイクを手に取り、咳払いをひとつ。

「これより軍の再編成を行う。各員は第1から第4格納庫に集合せよ。15分以内。
以上」

施設全体に放送し、キュウキはカフェに戻って散らかしたカップとスマートフォンの残骸をゴミ箱へと運ぶ。

燃えないゴミと表記されたプラスチックの大型容器の前に立つのと同時、キュウキの頭に一つ、1人の名前が浮かんだ。

（待てよ、死者の中にトキの父親の――色世境の名はあったか？）

疑問が半ばでも確信に近づいた時、キュウキは4部隊とは別の特

殊部隊を3つ編成することを決意した。

時と場所を、日本の正午に戻そう。

買い物を済ませた翼とスミレは廃工場へ全速で、最短ルートを辿って帰還する真っ最中だった。

「それで、トキさんはゲームに嵌ったのですか？」

「いや。トキは出会った頃からゲームに取り憑かれれていたのだ。トキの性への興味への無さは正直に言えば異常なのだよ。異性が嫌いでもなければ、同性愛者というわけでもない。まるっきり興味を持っていないのだ」

重たい袋で両手を塞いだ2人は、いまだに意識を取り戻さないトキについて話していた。

最初に聞いたのはスミレで、質問の内容はトキと翼の仲についてだった。

「男としても心配だが、それより友人として心配だ。あの調子では生涯を独身で終えかねない」

「確かに、聞く限りではもう少し、異性に興味を持った方がいいで

すね、トキさんは……」
「そう！
その為に私はトキにＡＶを与え――！
一般に言うところのエロゲを与え――！
現実に何人かの女性を紹介し――！
撮影現場まで連れ出し――――とにかく！　ありとあらゆる方法で性に関するアプローチで攻略を図ってみたのだ！」
「それが悉く失敗に終わったわけですね……」
頷く翼に聞こえるよう、凄い朴念仁なんでしょうか、と零すスミレ。
最後の坂道を登って工場の出入り口を通過する。
輪郭を顕わにしてきた夏の色で染まり始めた外を見回して、尾行がいないことを確認し、つい最近取り付けたばかりの横戸を閉める。
工場内は差し込む光だけで十分に照らされていた。走り回っても怪我することがないほどの光が差し込んでいて、それは貴重な光源であり、冷たい風を凌ぐ数少ない手段なのだ。
いつも食事を摂る広場を通過し、右奥に存在する元資材庫で横になるトキと、トキを看病する面々に差し入れを渡す。
「サンキュー、翼！」
「悪いな」
「ありがとよ」
「お疲れ、スミレちゃん。それに翼も」

ふと、翼は４人を見て気付く。
カンナ、藍、高城、奈倉。
本来見張りの番であるはずのカンナがどうしてここに居るのか。
翼と同様の疑問を抱いたスミレは、翼よりも早く質問した。

「だってよぉ、暇で暇で――」
「暇でも！それがお仕事なんです！」
「また敵が来るかもしれないのですよ、カンナ姉さま」

舌打ちしてアイスを2，3本取って哨戒に戻るカンナ。目の前でアイスを取られた高城が石像と化したのはコンマ3秒後のこと。

「では、私と藍姉さまは結界の補強に行ってきます」
「何かあったら電話にかけて」

言い残して工場の裏口へ移動する鬼姉妹。
続いて正気を取り戻した高城が情報を集めてくると行って工場を去り、それから愛院が広場に戻って買い物袋の中身を分別し始める。エミルダもそれを途中から手伝い、資材庫にはトキと翼の2人だけが残った。

色世家襲撃の夜から一週間。
ここに逃げ込んで以来トキは目を覚まさず、ずっと横になったきりであった。　原因は不明。
考えられる原因として戦闘による過労と心労が挙げられたが、事実はトキ以外に知るところなく、ただ目を覚ますのを待つしかなか

った。

「皆がお前を待っているのだぞ。早く目を覚ましてくれ、トキ」

存在を証明する鼓動に触れ、脈動を確認する。
動いている心臓。死んでいないはずなのに、一向に目を覚ます気配を見せないトキ。
意識が戻っていないのか。
確認する術がない現状、ＳＲですらない翼は誰よりも無力であることを自覚した。

「お前が倒れた後、皆が必死で襲い来る者たちからお前を護ったのだぞ？
今もそうだ。
トキを護るためにと、交代で見張りに立ち、実際十数人を撃退している」

襲い来る者全てがＳＲではなかった。凶器で武装した一般人も多く、そのせいもあって命を落とす者もいた。
全員を生かして返すことはできなかったものの、確実にトキを狙って彼らがやって来ていることを掴めた。

「護られているだけでいいのか？
私と違って、お前には力があるだろう。どうして戻ってこない……」

この一週間で翼はトキが体験してきたであろう世界の片鱗を味わってきた。
不意を突いて襲い来る者たち。　見たこともない凶器。味わったことのない狂気。
時間を問わずに襲い、事情に関係なく仕掛け、酷い時には場所さえ弁えずに牙を剥く者達。

鬼3姉妹や高城、愛院、エミルダがいなければ10回以上、確実に命を落としていた。
SRにも対抗できない、武器を持っただけの人間にも対抗できない、まして武装したSRになど立ち向かえるわけない。

不謹慎にも翼はトキを羨んだ。
自分にもSRという力があれば、トキやエミルダを護ってあげられる。

しかし、これが現実である。
予想だにしなかった状況を目の前にし、初めてそれを望む。
SRという力だけに限った話ではないが、局所的に、しかも突発的に欲すモノは大概手に入ることのないものばかりなのだ。

「頼む、トキ。目覚めてくれ。
皆気丈に振舞っているが、限界が近づいている。
敵の強さもどんどん上がっているのだ」

無力を知り、非常を知り、非情を見て、諦観が漂い始めた廃工場

内で、翼は自分に出来る唯一を続けた。
トキが起きるまで語りかけよう、トキが早く起きるように話しかけよう。
そうしなくては、いずれここを護るメンバーに死傷者が出てしまう気がした。

静寂に包まれる廃工場。

鬼が出て、
妖精が山を下り、
残るは子供と番犬のみ。

それを上空から確認し、廃工場を見下ろす3人は、互いに顔を見合わせて確認し合い——急降下を始めた。

何年ぶりに帰ってくるのか、正直に言えばうろ覚えだった。　白状しても、ここにはそれを咎める人間は1人もいない。

「家が、どうして……？」

現実に、いないのだ。
色世家は無数の銃痕と発破痕により、半壊以上全壊未満という状態で、辛うじて存在していた。
とても人が住めるような場所でなく、当然猫の子1匹足りと気配

を感じない。
廃墟同然となった、懐かしき我が家を前にした色世キョウは身を震わせた。

「……アリス、あっちの世界からトキを探し出してくれないか？」

最寄のカーブミラーに向かって言い、キョウはポケットにしまった紙切れを取り出し、そこに書かれている番号を暗記する。

「私は、この事務所に行って宛を見つけてくる」

『1人で大丈夫なの？
そこって、光の魔女と銀狼が――』

「過去に面識はある。
こちらは心配ない」

短い会話を終え、2人は別々の方角に向かって移動を開始した。
キョウは息子の行く宛てを聞き出すために芹真事務所へ。
少女アリスは、自分の得意とする世界と現実の世界を比較して、より高密度な力の波動を感じる場所を目指す。SRは一般人と比べて少ない。この街に20人もいることはないだろうと踏み、検索を始める。

間もなくして。
幸か不幸か、住宅街のはずれにある廃工場にて、先にトキを発見したのは、白く染髪した少女：アリス・アンダーグラウンドであっ

た。

同時刻。

四凶のコントンは只ならぬ怒気を含んで電話に向かって語っていた。

「ほぅ？

それで、現地のアホ共を使ってトキを拉致しようと？　どうしたんだ、キュウキ。お前らしくない。何をそんなに焦っているんだ？　言ってしまえば俺達の計画は半分近い目標を達成した……それなのにどうして今更奴らを使おうとする？」

『アナタの怒りも短絡的ね。

そもそも、彼らを真っ先に処理したほうがいいと話したはずでしょ？　ちょうど良い機会だし、彼らは良き駒よ……なんて、そういう過去の会話は抜きにして、私はここが大局と見たわ。思うほど単純じゃない。むしろ、私達の計画の合否はここで大きく左右する可能性が高いわ』

理解できない状況が展開されていた。

日本を除くほとんどの国は四凶によって麻痺・混乱状態にあるのだ。

日本だけが世界から取り残された、言うなれば逆鎖国状態である。

この戦況は協会だろうと簡単に変えられるものではない。

計画通りに事が進んでいるなら、いまあの国に近づくのは極めて危険なのだ。四凶であろうと簡単に命を落としかねない。

「パンドラ共を放ったんじゃないのか。　そこにどうしてこちらの有力者を放つ？」

『有力者？
どうやら私達相互の価値観の間に大きな差異があるようね。
私はあの３人を信用していない。
例え、彼らがナイトメアを脱し、手土産に数億もの軍資金をぶら提げて来たところ、所詮はナイトメアのＳＲ。駒である一般人と何ら変わりない、弱い四凶しか持たない者達よ』

「しかし実力者だ」

こうして話している間にも、日本にはパンドラＳＲや器ＳＲたちが逃亡し、真相も現実も知らずに集結している。

「分かっているのか？
あいつらは今後も役に立つ。いまここで捨てるべき駒じゃない。もっと大切な場面で使い捨てるべきだ」

『あの中に１人、限りなく信用できないＳＲが居たとしてもストックしておくのか？』

「ほぅほぅ！
ソイツは誰だ！？」

携帯電話が軋む。
怒りが力へと変わる。
日本の方角へ体の向きを変え、コントンは移動の準備を始めた。

「ギュン・パクフォンか！？」

『いいえ。先に言っておくけど、死神：ダイアン・デューティフリーでもない』

「ということは……そうか、アイツか！」

準備を始めていたコントンが手を止める。
予定変更という予定を元通りに修正する。

『そう。
三人の中で唯一の女性、唯一の日本人にして、最も行動が予測できない奴』

「忍のＳＲだったな？」

『ええ。国連所属時のコードネームは“斬潮”。潮の満ち引きさえ分かつと言われた早業・奇術の使い手。
今世紀最大とも謳われる暗殺者よ』

その人物、そいつが信用できないということに関してはコントンも僅かながら同感だった。

3人の処理をするように言った事は覚えている。理由はその女がどうにも測りきれないからだ。他の2人は戦力として申し分ない。忍のSRである女もそうだ。

だが、制御しきれる気がしなかった。

「陸橙谷アサの暗殺を成功させた奴だったな？」

『ええ。

本名は、桑谷美里（くわたにみさと）――』

「……」

小さく舌打ちし、コントンは通信を切った。独り静かに頭の中でキュウキの計画を計算し、納得せざるを得ない答えを出してしまい、再び舌を打った。

改めて出た答えには、この局面の重要性が色濃く現れていたのだ。トキを匿っている者達との遭遇、処理、こちらが抱える不確定要素のテスト、場合によっては処理。

（ハハッ……しかし、キュウキ。お前の計画は確かに成功に近づくが、俺の計画は水泡に帰す可能性が高まったんだよ、全く）

不本意ではあるが、コントンはトキとその周辺を応援することにした。

直接干渉する訳にはいかないが、気持ちだけは届くだろう。

トキにはどうしても生きてもらいたく、また、捕まらずに例の物を探してもらいたい。

「お前も世界の運命を左右する、重要な駒なんだ。休んでいるのなら歩け、疲れ果てたのなら止まって休み、前進に備えろ。俺に返す物返すまで死ぬなよ。フン……」

雄丘を目指してコントンは歩を刻む。白銀の草原で独り、日本のある方向に向いて呟いた言葉がそれだった。

工場の一角から黒煙が立ち上る。

爆音。

爆発。

不自然すぎる故に直ちに認識できる異変。

外部でそれに気付いた面々は急いで廃工場へと引き返した。

工場内にいたエミルダと愛院はすぐに戦闘態勢を取るが、その直後に体の自由が利かないことに気付き、焦りと恐怖を覚えた。

天井を破って2階の足場を爆破し、一気に1階の床を踏むに至った敵が、粉塵の中から姿を現す。3人だが、1人はシルエットだけを見せて粉塵の中で行方をくらました。

「ノックもせずに失礼。
ここに色世トキという少年はいないかな？」

眼鏡をかけた男性が愛院に問う。
足は地を捉え確かな感触があるのにも関わらず、どうしてか足首よりその上を全く動かすことが出来ない。
愛院は目だけで男を観察し、非武装でありながら相当な余裕と自信を持っている佇まいから、ＳＲであることを察知した。加えて金縛りにも等しいこの不可解な現象。
ＳＲである確率は極めて高い。

「よぉ、ガキ。久しぶりだな。
俺様の事覚えているか？　えぇ、おい？」

眼鏡をかけた男の隣では、黒衣に身を包んだ男がエミルダに話しかけていた。しかし、今の愛院に２人の会話を理解できるだけの余裕は残っていなかった。

「この２人は僕が抑えておこう。
ダイアン、君は外から来る連中の一部を足止めするか、キリと一緒にトキを探せ」
「わかってんだよ、ギュン！
いちいちいちいち、マジでうるせぇんだよ！」

頭上の鉄骨に刺さっていた大鎌を抜いて肩に担ぎ、死神のＳＲは工場内の探索を始める。

「キリぃ！
テメェは2階から見て来い！」

「もう見た」

身動きひとつできない2人の視界内で、死神と姿なき女性の会話が成り立つ。
それらの言葉を聴く限り、トキはこの一週間で最も危うい状況にあると悟った。
2階の探索を終えたという言葉。　共にトキを探し始めた現状。
自由を奪われた現実。
打開策が思いつかない、考えうる限り敗北に近い、絶望的展開。

『華創実誕幻！』

粉塵の止む頃、裏口と正面口から同時にそれは発動した。

『一段：茨！』

重なる詠唱。

一点に集う視線。
詠唱の直後、自由を失った2人の足元に淡く光を放つ円陣が現れ、その円に沿って自我を持った茨が生まれてくる。　護衛に多用されるオリジナル陰陽術の茨。その凶悪な鞭の群れを前にし、超能力者のＳＲ：ギュン・パクフォンは上へ跳び、空けてきた穴をくぐって2階の足場に移った。

すれ違うように2本の金棒が地面に突き刺さる。
頑丈なコンクリートに易々と突き立った金棒を見て、ギュンは寒気を覚えた。一発でも食らえば即死に繋がる一撃。

「鬼が来たぞギュン！キリ！」

「知ってんだよ！そう来なくっちゃなぁ！」
「……」

工場内でトキを探索していた2人が殺意を纏う。
死神は哂い、忍も微かに笑った。

3人の敵に対し、トキを護ろうと鬼の3姉妹、魔犬、妖精、神隠しが戦闘態勢を取った。この一週間で現れた敵の中ではトップクラスの強敵であることを認めながら、2人一組で1人と立ち向かう。

サイキッカーに向かうスミレと高城。
死神と踊る奈倉とエミルダ。
忍と対峙する藍とカンナ。

「やっと、会えましたね」
「――」

早速交戦に移る2組。
飛び交う攻撃を意に介さず、藍とカンナの姉妹は忍のSRと向かい合ったままだった。
両者の距離は6メートル。
この廃工場に忍者が降り立ったのは1分ほど前。藍がここを訪れて寝泊りを始めたのは6日前。カンナがトキを担いで駆け込んだのは一週間前。

藍とカンナの誤解が解けたのは、4日前。

「藍、こいつか？
アサを殺った暗殺者ってのは？」

剣戟と破砕音、金きり音と銃声。
諸々の騒音が混じり合い、工場内に木霊する中で3人の足は自然と人気の無い一角へと向かっていった。

「はい、カンナ姉様。
彼女が、私が見た暗殺者です」

鬼の証人が告げると同時、忍の顔は歪んだ。

その顔に怒りを覚えたカンナは指を鳴らした。
妹である藍の言葉を信じられなかった自分への不甲斐なさ、それを利用されて藍を仇だと思い込んでいた自分への怒り。必死で生き延びてきた自分たちを完全に葬らんと暗躍し続けてきた者達への憎悪。
その根源・禍央に位置する本当の敵がいま、自分の目の前にいる。

「今が本物の弔い戦だな」
「はい！」

3人の足が行動をやめる。
剥き出しの鉄筋が幾本も床と天井を繋いでいる、半ば崩壊しかかった暗い一角で3人は止まった。

一瞬の静寂。

それは同時に全ての音が消えた時だった。
1本の太い鉄骨の陰に忍が消え、攻撃に備えた2人の足元に複数個の手榴弾が転がる。
藍がそれをすべて弾き飛ばす。
同時に銃弾が襲い掛かった。
ＳＭＧの連射。
マズルフラッシュは真横に。
一瞬で距離を詰められたことには驚かない。
カンナはすぐに弾幕を受け止めつつ柱に向かって拳を突き出した。
金属の柱が折れ曲がり、そこに吊るされていたＳＭＧが解体される。
一瞬で距離を詰められたことには驚かない。
だが、忍の行動はどうにも理解できず、カンナの中に混乱をもた

らした。突き出した拳と腕に襲い掛かった忍の攻撃は銃撃でも斬撃でもない、スタンガン４つを用いた電撃。　しかし、完全でないにしろＳＲを開放している今の状態で電撃は効かない。
スタンガンを払いのけようと腕を振り回すが空振る。

再び視界から忍が消えた直後、藍の弾き飛ばした手榴弾群が一斉に炸裂する。
まず一瞬光を放出し、次に騒音を立てる。視覚と聴覚に強い刺激を受けた直後に火炎が生まれ、火炎は破片を伴って周囲に飛散した。
破片を弾く鉄骨。
炎によって僅かに明度を増すステージ。
視覚への干渉によって、２人は忍を見失っていた。

「逃げたか！？」

「いいえ！」

爆炎に怯まず得物を構える。
背中を合わせて索敵する２人。
四方八方上下左右で仕掛けられた小さな火薬が爆ぜる。

――どこか？

暗中。
忍の攻撃を、藍はすぐに感知した。
向かい合う背中のちょうど真上から釣り下がるコンポジションＣ４炸薬。繋がれたコード、信管、受信機。

姉を突き飛ばして金棒を振るう。

「理壊双焔！」

金棒が暗闇を走る。
すぐに爆発が起こった。
破裂と閃光、爆風が生まれる。
しかし、爆心から広がった炎と熱は、理壊双焔の走った軌道をなぞるように導かれ、無人の一角に灼熱と破壊を振り撒いただけで、カンナと藍に触れることはなかった。

同時、地面を這っているものと見紛うほどの低姿勢にて、忍が高速で接近してくるのをカンナが見つける。

軌道予測とタイミング合わせを瞬時に行い、カンナは突撃してくる忍に対してカウンターの右ストレートを放った。
抉る。
砕く。
しかし、肉の感触ではない。冷たく硬いコンクリート。
忍はカンナよりも早く状況を知覚し、処理し、対応したのだ。
放たれた拳を紙一重で躱し、地面を叩いて鬼の足元から腹へと高さを変える。
瞬間。
爆炎をいなした藍を目にするのと同時、小さな痛みが胴体に、複数発生した。

「カンナ姉様！」

忍の抜刀と抜筒。
左手の小太刀が鬼の太股と脇腹、脹脛（ふくらはぎ）を切り裂き、右手のマシンピストルが脇腹、下腹部、鳩尾、胸へと弾丸を掃き出していた。
直後、トラップとして仕掛けられたクロスボウの矢が、正面から時間差でカンナに襲い掛かった。背中に5本の矢。

忍と鬼交差した瞬間に起こった討ち合い。
一方的ではあった。
カンナの攻撃は空振り、忍の攻撃は数え切れないほどヒット。
しかし、一方的ではあるものの、それは外見的なものに過ぎない。

「どうした！」

カンナのダメージは皆無。無傷ではないにしろ、反撃・攻撃・防御など、戦闘行動には一切支障がなかった。
背中の矢を抜いて投げ返す。
更に、手近な鉄心を捻じ切って武器とし、キリの逃げた方向へ全力投擲。
新たに仕掛けられていたショットガンを貫き、鉄心は鉄骨と衝突し、原型を半分以上失ってから地面に落ちた。

「藍！
お前はアレ仕掛けろ！」

「いいんですか？」

「今度は二度目だ！
うまくやれるさ！」

承諾の言葉を合図に藍は走った。
暗い一角の隅を目指し、壁沿いに沿って走り続ける。
懐から術符を取り出して壁、天井、床、鉄骨と、手当たり次第に符を貼り付けていった。
それをキリは見逃さない。
何かをされる前に阻止せんと、数枚剥がした所でカンナから飛んでくる横槍を躱す。それは文字通りの横槍であった。鉄骨丸々一本を地面と天井から抜き取り、ぶん投げる。
当然、これはカンナによるキリの阻止妨害であった。
早業師のキリには鬼のような耐久力はない。

「待ちやがれ！
そんなんでよくアサをやれたな！チクショウ！」

疾風の回避。
すれ違いざまに走る斬撃、銃撃、打撃。

しかし、どれもダメージにはならない。
少し仰け反る程度の衝撃がぶつかってくるだけで、痛みなど無い。
鬼のＳＲを完全開放し、更にオリジナル陰陽術で自己を徹底強化しているカンナには、対戦車ライフルでさえ通じないのだ。

「４０ｍｍで殺れると思ってんのかよ！」

銃弾が跳ねる。

常軌を超越した強靭な肉体に通常兵器は無力。皮膚を傷つけるのが限界である。

――直後。

カンナの絶対束縛術とキリの切り札が空間の殺意を飲み込む。

藍の懸念も同時だったが、術陣を完成させる事に必死だったためにカンナを咎める余裕など無い。思い切って話しておけばよかったと初めて後悔した時だった。

懸念が現実となる。

銃でも剣でも殺せない鬼を、どうやって忍者が鬼（あに）の暗殺に成功したのか。

「雨之常太刀（あめのとこたち）」

初めて六文字以上を口にするキリ。

その刀の名：雨之常太刀。

得物の名前が耳に届く。

離れた場所で戦っているケルベロス：奈倉愛院は、その名に動揺して死神の回し蹴りを急所に貰ってしまう。

（雨之常太刀って、最初に盗まれた十本のうちの一つじゃねぇか！）

裏取引でしか名前が出てこないその刀は、愛院が魔倉と呼ばれる武器庫を管理し始めて間もない頃、持ちうる品の中では高価でいながら買い手が全く付かないという曰くつきの妖刀だった。愛院自身も触れようとはしなかったし、関心すら持てなかった。

盗まれるまでは。

（何でソレを持っているんだ！？）

雨之常太刀という名は愛院の集中力を大いに乱した。
その威力を愛院と、藍は知っている。

（人を切り――）
（魔をも斬り捨て妖刀。あらゆるＳＲをも斬ることが出来る曰く付き！）

アサが殺された時にも確かに見た。
黒一色で作り上げられたシンプルにして実戦向き、特異な必殺の得物。
刃の触れた空間に切れ目が生まれた。

同時刻。廃工場内のメイン広場となっている場所では、サイキッ

カーの攻撃で床が爆ぜ、死神の大鎌で複数の支柱が一斉に斬り倒れた。

「君たちでは僕らに勝てない」

不可視の衝撃が妖精を打ち上げる。
遠のく意識を辛うじて繋ぎ止めた高城の銃撃がギュンに向かうが、放たれた全弾は軌道を変えて地面を穿つばかり。
選手交代し、死神が妖精に追撃を掛ける。
高城を護ろうと死神に向かう愛院にギュンの衝撃が襲う。同時にエミルダの左腕も不可視の圧力で押しつぶされてしまう。

「これでもナイトメアのＮｏ７なんだよ！」

鎌が奔る。
空中でできる限りの姿勢制御で斬撃の直撃を躱す。
狙いは首、できる限りの前傾。
空を切る凶刃。
それは直撃を免れる瞬間であり、妖精の羽を削がれる瞬間であった。

重力が高城に憑き、そこにギュンは僅かな圧力を加えて落下を後押しした。

「ハリヤ！」

援護妨害。
不可視の衝撃に吹き飛ばされて壁に激突する愛院。
高城が地面を砕いたのは同時、次に死神はエミルダに向かった。
上空から高速で迫る死神に対し、エミルダの攻撃は正確性に欠けているため紙一重で躱されてしまう。
大鎌が止まる。スミレが止める。

「理壊“双焔／奏淵”！」

大鎌の刃を交差して止めた金棒2本が、鬼の得物が吼える。
片や炎を纏い、片や奇妙な振動を発する金棒。
それら2つの力が死神の刃を砕く。

「コイツ、鬼か！」
「さっきからそう言っているだろう、ダイアン」

鎌を放棄して肉弾戦で鬼に仕掛ける。スミレは打撃に怯まず打ち返した。
完全解放ではないにしろ、鬼のＳＲは一般人と比べて強靭な体を持っている。
生身の人間の近接攻撃などたかが知れている。恐るに足らず。

「かかったな」

反撃に出たスミレ。
幽体と化すダイアン。
金棒二振りの攻撃を半物質化で以って躱す死神。透き通る身体。
ゴースト状態になった死神の体越しに映る、サイキッカーの攻撃姿勢。
気付いた時には自由なし。
不可視の力に四肢掴まれ、体の自由を奪われてしまう。

愛院はスミレを解放しようとギュンに仕掛けるが、死神によって阻まれてしまう。
素手で武装解除され、踵で踏みつけられた足の親指が折れる。
小さな悲鳴と同時に各急所への連撃が奔る。
笑う膝、嗤う死神。
奥歯を強くかみ締め、死神を無理やり振り切ってサイキッカーへと仕掛ける。

「愚かな」

暗器を握った直後、ギュンの攻撃――自由を失ったスミレが愛院目掛けて飛来した。
血の上った頭ではそれを瞬時に理解することは出来ず、コンクリートの上に砂埃立てて転がってからやっと理解が追いつく。

スミレを武器としてぶつけてきたのだ。
四肢の自由を奪われたスミレには抵抗できない。当然、その攻撃が予想外だった愛院にも。

ギュンが2人の戦力低下を確認している最中、死神は妖精の戦闘不能を確認した。
流れ弾が暗闇の奥から届く。
爆発。
熱と衝撃を生み、工場の出入り口付近を焼き焦がす。
サイキッカーと死神は目を合わせ、互いに頷き合う。

得物を拾った死神が忍の援護に向かった。
この場を任せろとアイコンタクトを図ったサイキッカーは質問を始める。

「さて、この状況で君たちの勝率は限りなくゼロとなった。
トキが何処に居るのか教えてもらおう。
思考を読めば手っ取り早いのだが、とてつもない疲労に見舞われるからそんなことはしたくないんだ」

神隠し：白。
それを目の前にし、ギュンは尋ねた。
目的は殲滅ではなく、トキの勧誘であると。

「拉致・誘拐の間違いなのでは……」

沈黙を破らないエミルダに代わり、スミレが答える。
自由を失ったのは体のみ。

「なるほど。君たちからすればそうなるだろうな。
状況が状況だ」

エミルダの視界からスミレが消える。
直後頭上に生まれる破壊音。破れた天井から差し込む陽光と、一緒に振り注ぐ破片。
すぐに視界の中に戻ってくるスミレ。
天井を破って空中に飛んだ後、地面に激突する。

「やはり鬼は丈夫だな」

二度の衝撃を経て、スミレが受けたダメージは微々。
外傷もなく、鼻血だけが僅かなダメージを物語るだけだった。
再び不可視の圧力がスミレを飛ばす。
鉄骨をひしゃげ、何枚もの壁をぶち抜き、置き去りにされた大型機材を変形させ、何度も何度も地面に叩き付けられる。

「時間を無駄にしたくないし、鬼を殺したくない。
さぁ、色世トキはどこだ?」

左腕を伸ばしてみるが、すかさずサイキッカーはスミレを盾にし、攻撃を許さなかった。神隠しを変形させて回り込もうにも、奇襲にしっかり対応するサイキッカーに死角はない。

「じきこの国も混沌に沈む。
そうなる前に我々はトキを確保したいのだが、もし君たちが素直に居場所を教えてくれるなら約束しよう。
ここに居る全員を苦しみの淵から救ってあげると」

進退窮まった状況でエミルダは考えた。
彼らは何者なのか。
かつてナイトメアと名乗っていたが、ナイトメア二派のいずれなのかを知らない。武装派なのか非武装派なのか、それによって対応はまったく違ってくる。仮に非武装派なら考える余地はあるが、武装派ならば考えるまでもなく答えは否認。そもそもナイトメアに渡すこと自体、本当は許容できない。
それはエミルダ自身がナイトメア武装派の行ってきた凶行をよく知っているからである。

「認めません」

やはり神隠しは沈黙を続け、鬼は抵抗を続ける。
サイキッカーの一方的な攻撃が再開し、工場の内装が急速に崩れ、止む。

「僕も……認めません！」

断言するエミルダ。

無言で顔を伏せるギュン。
否定の返事こそしたものの、エミルダにこの状況を切り抜けるだけの実力はない。今すぐにでもサイキッカーの矛先がエミルダにも向くだろう。
――どうにかしてサイキッカーを討てないか？
それを見越してスミレは神隠しに言葉をかけた。
「エミルダさん、私のことは気にせず、ここに在る魔を討ちましょう」
すれ違う視線。
互いの焦点がそれぞれ合った瞬間、スミレはＳＲの完全解放を、エミルダは左腕神隠しを全力で展開した。
白い煙のような、消滅の力を持ち固有の形を持たない左腕がギュンへと襲いかかる。
当然阻止せんと発動する見えない衝撃。
しかし、ギュンの攻撃がエミルダと神隠しを遮ることはなかった。
「響け、理壊奏淵（そうえん）」
それまでしっかりとスミレの手中に収まっていた得物が地面に落ち、コンクリートを砕いて音を発する。

地面に触れて生まれる音。
金棒が哭く。
可聴域とも低周波とも違う振動が、不可視の力を相殺し始めた。

「はあっ！」

僅かな可能性を目の前に、エミルダは左腕神隠しを突き出した。
一直線にギュンの心臓を目掛けて。
同時、束縛が弱まった機を見てスミレは奏淵を拾って十字砲火を狙う。頭部へ振り下ろす双振りの金棒。
が、ギュンはそのどちらも凌(しの)いで見せた。

神隠しを透明な圧縮空間の回流で受け流し、スミレの奇襲を紙一重の空間転移で躱しつつスミレの真横に移る。更に真横で地面を抉るスミレの四肢から自由を奪おうとしかける。

が、完全にコントロールを握ろうとした瞬間、それは再び鳴り響いた。
理壊奏淵破界。
２種類の金棒の棘がぶつかり合い、こすれ合い、片方からは火の粉が零れ、また片方からは不思議な振動が発生する。

空気を震わせ、神隠しを迎え撃とうとするサイキックを殺す。
四肢の自由を奪おうとする力を無力化する特殊能力。
阻止を妨害され、サイキッカーは逃げるほか無くなる。
空間転移でエミルダの背後に回り込み――それを予測していたスミレの攻撃をも――躱す。
２人の頭上に躍り出、十分の余裕を持って圧力をかける。半径１

0メートルにも及ぶ広範囲サイキック。

「鳴らせるか！」

不可視の攻撃を無効化しようと腕を振るスミレより早く、もう一つの力が足元でスミレとエミルダの体勢を崩す。

それによって奏淵は空を切る。

圧し潰そうと上から掛かる力と、持ち上げようと下から圧す力。

2人と一緒に浮いたコンクリートが圧力の狭間で砕け散る。

空中で吐血したパンドラ神隠しを打ち飛ばして省き、力の狭間に哭き鬼を残す。

（まだいける！）

上下からの圧力に耐えながら理壊双焔を投げつける。

ギュンは下方からの攻撃を中断して前面に防壁を展開し、空中で火炎を纏った金棒の投擲を止めようとした。

「ソウエン！」

サイキックによる地面への叩き付けに耐え、双焔と同じ方向に奏淵を低空で投げ放つ。

2本の投擲間隔は0．2秒。

奏淵はギュンを狙ったものではなく、先に投げた双焔を援けるも

のであった。
地面に触れて擦れ、振動を生み、空気を焦がす双焔を阻む不可視の抵抗を無力化する。
が、ギュンはそれを咄嗟に予知した。
上下からの圧力を弱め、余力を全て予知に注いだのだ。
結果、投擲を予知し、軌道を読み、スミレの攻撃を完全に見切る。
目前を飛び過ぎて行く双焔。
高熱でギュンの目が乾き、頭髪の数本が溶けて消える。
ささやかな痛みを覚えたギュンは怒りに身を震わせた。
思ってもいない反撃と、一発も食らわないと考えていた故の予想外。
少々てこずっても、ダメージを貰うような面子はここにいないと踏んでいたのだ。
触れられることを嫌うギュンは、敵対する相手の攻撃を許さない。
許せない。

「返してやろう！」

通過し、壁と衝突して火の粉と炎を撒き散らした双焔。
激昂したギュンはそれを拾い上げて地面に伏すスミレの頭部に高速で返却した。
こめかみから生えた角に直撃した双焔は炎を撒き散らす。
同時に、激烈な痛みを訴える声が上がった。
工場内に木霊するスミレの悲鳴。
それまで一切の攻撃に怯まなかった鬼が啼いた瞬間である。ＳＲ

の完全解放に伴う最も敏感な部分の露出。鬼のＳＲに共通する弱点がこれであり、ギュンはそれを知っていた。

激痛に耐えるスミレが、強く握った拳で地面を叩き割る。

「まだ終わるか！」

悲鳴を怒気を孕んだ声が上回る。

スミレの四肢から自由を奪って持ち上げ、再び空中で振り回し、ぶつけて回す。

鉄骨に打ちつけ、先鋭化して破れた天井や壁に向かって真横から押し付け、地面にスタンプし、先に倒れた妖精や神隠しにぶつけ、最後に上空まで持ち上げて地面へ急降下させる。単純にしてシンプル、且つ強烈な痛みがスミレの意識を確実に削いだ。

爆音と粉塵が工場内に生まれる。

それは激突の衝撃。

地面と激突したスミレは微動だにせず、それでも怒りの静まらないギュンは何度も横たわるスミレに圧力をかけ、鬼のＳＲという形を完全に消そうした。

「……何やってんだテメェ？」

広場に戻ってきた死神は、ギュンの展開する光景に呆れ、漏らしたくもないため息をついた。すでに意識を失っている鬼の娘一人に対し、蛇足以外の何ものでもない攻撃を繰り返していたのだ。

地面には５０センチほどの窪みができ、そこかしこに血が飛んでいる。

「潔癖すぎんだろテメェ。
それとも何か？
おまえ実はロリコンで、ガキを痛めつける嗜好があったってか？
聞いてねぇぜ」

そこまで言われたサイキッカーはようやく自我を取り戻した。
肩で呼吸し、ずり落ちたメガネの位置を正す。
攻撃をやめてダイアン、振り向くのと同時に戻って来たタキに理由を話した。

「俺に、触るのが悪い。
それに俺はガキが嫌いだし、いたぶるのは趣味じゃない。こいつが触るのが悪いんだ……」

「あ～、やだやだ。
そんなんだから“超絶潔癖”なんて呼ばれるんだよ」

「クスッ……彼女は触れていないのにね」

嫌がる死神と笑う忍の言葉に苛立ちを覚えつつ、ギュンは２人が戻って来た理由を確かめる。

「鬼の姉妹は、終わったのか？」

その質問に忍は微笑、死神は面倒くささを全面に表しながら肯定した。

「完っ全、無力化だよ」

暗闇の奥から聞こえてくる音は風以外ない。

ダイアンの言葉とキリの態度で確信を得たギュンは、一度目を閉じて熱くなっていた自分を落ち着かせる。

呼吸と冷静を取り戻し、工場内でトキの探索を再開した。

「残りは、そっちの区画だけだぜ」

3人の足は未だ探索していない区画、資材庫へと向いた。

その光景を小さな穴から覗き見ていた翼は、トキの傍らに置いておいた鉄パイプを手に取って部屋を出た。

向かってくる3人のＳＲを前にし、翼は鉄パイプを握り直して構えた。

「トキは渡さん！」

ただの人間の抵抗にギュンは唖然とし、キリは沈黙した。

2人の背後を歩いていた死神だけが翼の行為に苛立ちを覚え――

四の五の言わずに大鎌を投げつけた。

第４４話－孤立した島国で－（後書き）

「もしもし、アリスです。
息子さんがいる場所を見つけましたけど、どうやら襲われているみたいよ。
本人は戦っていません。仲間の人たちが戦っていますね。
はい。
トキは戦ってません。寝てますよ」

鬼の姉妹が倒れる。

「もしかしたら起きれないのかもしれない。
家があんなでしたから、負傷していてもおかしくないし……」

妖精が倒れ、番犬が気を失う。

「とても強い敵が３人。
攫われるのも時間の問題かと。
助けた方がいいかな？」

神隠しが倒れ、二刀流の鬼が倒れる。

「じゃあ、助け――ダメ？
どうして？」

探索を再開する3人の前に一般人が歩み出る。

「あ～、一般人いるし。
だからダメなの？」

鉄パイプを握り締め、構える。

「彼が最後の1人みたいだよ？」

死神が大きな鎌を持ち上げ、投げる。

「やっぱり、助けるね。私達はトキに会うことが目的だし、攫われたら元も子もないんだから。
それじゃ、交信終わり！
場所は山の廃工場ね！」

通話終了。
同時、死神の右腕が地面に落ちた。

第45話－Sign of GreatWar：The March of S

ＳＲも実は大して強いとは言えない。何故なら人間の形を捨てることが出来ないほどに心が弱いのだから。

ｂｙ――マティス・フォーランド（パンドラプロジェクト創始者）

第45話－Sign of GreatWar：The March of S

ここが住み慣れた場所でありながら、ただ居るだけで不安になり、生命の危機を十二分に感じるには理由があった。

理解できる理解できない、そういう尺度で物事を測れる状況ではないということ。重要なものは認知だが、状況が自分を取り巻く現実への経過をそうさせてくれず、平素を失った自らを立て直す術を会得しているわけでもない。

エミルダと共に暮らしていくと誓った日以来、いつかは来るだろうと予測はしていた事態が、たった今、目の前に展開している。いずれ自分もSRという非現実に立ち向かわなければいけない時が来ると、何度も意識し覚悟し、決意したはずだった。しかし、現実で対峙してみると頭での処理が追いつかない。

予想以上の非現実を展開され、混乱と恐怖が思考を蝕んだ。閉鎖的な空間に異常な空気が混じり狂気を生む。自分よりも力を持った仲間を次々と撃破した敵は、改めて口にして言うまでもなく強大で、いつでもこちらの命を奪えるだけの力を持て余しているのだ。

「トキは渡さん！」

自分へ渇を入れるが、震えと噴出す汗は一向に止まらない。

手持ちの得物はひとつ。護るべき人は、いまひとり。対して敵は三人。手練が三人、いずれも特異。

どう状況が転ぼうと勝機はない。

（なるほど……トキは、こういう気持ちだったから引き篭もったわけか）

力量の差が天地ほども開いたと錯覚するこの状況に遭い、翼は己の無力故にこみ上げて来た心悲しさに逃げ出したくなっていた。

護らなければいけないものがある一方で、それでも生き延びたいと叫ぶ本能と無様な現実を避けたいと思い、心濁らす自尊心。待っているのが後悔と分かっていても、しかし自分が持てるたったひとつの命を投げ出すだけの勇気が、先行する護衛の願望についてこない。

震える足をどうにか落ち着けようと、荒くも大きく呼吸して肺を十分に駆動させる。僅か収まる震え身、潮の如く緩やかに繰り返すうち引いていく汗と恐怖、加えて混乱。微々たるものではあるが、数秒前の混乱は半ば消えかかっていた。

冷静を取り戻す翼と、一般人の出現に困惑する襲撃者のうち2人。軽装の韓国人と重武装した女性。

襲撃者の2人を差し置いて、死神と名乗った男は手にした大鎌を投げつけた。

虚空裂く狂気、凶器。目に余る得物には、一片の慈悲もなく、ただ獲物を切り裂くことばかりを考慮されて作られた趣だけが面に現れていた。大きな刀身は大人子供、華奢肥満関係なく切断できる寸法を有し、鋭利極めたその刃は鋼をも易々と断つ。

そんな物が正面きって投げつけられた時、翼は自分の死を予想する暇さえ失った。混乱が再来し、引率されて再び恐怖が侵食を再開した。

投げつけられた鎌は翼の右肩を掠り、勢い良く通過して壁に突き刺さった。

「あぁ？」

同時に奇妙な事が翼の目の前で起こった。

投擲という予想外の攻撃に目を見開いていた翼は、次に起こった、死神と名乗る男の腕の分離現象を目撃した。死神は痛みに声を上げるよりも早く、自分の身に異変を察知し、本来あるべき場所に無い自分の右腕の姿形を地面に転がるそれと一致するものと悟り、初めて悲鳴を上げた。乾いていた工場内に新たな液体が滴る。

哭する男が死神でも何でもないと、迸る流血に現実を取り戻そうとした翼だが、不意に襲った不可視の衝撃と急激に縮まった距離のせいで動揺と恐怖を再起され、非現実と呼んだ現実の目の前に総身を晒される。宙に浮く身体にワイヤー等で吊るされている感触は皆無だった。

「お前、何者だ？」

眼鏡をかけたアジア人に問われた翼は無言、首だけ横に振って答えた。

「正直に話せば良し。
さもなくば、彼女達のように痛い目に遭ってもらうが、どうする？」

「クスッ……」

眼鏡男の傍ら、微笑する女性は身悶える死神を見下ろしていた。
のた打ち回る様を眼に焼付け、憤怒罵声の言葉ひとつひとつを哂う。
これがある程度計算されていたものとは知らず、翼はその尋常ならざる光景に寒気と悪寒を増して感じた。

同時。
女性も、忍のＳＲ：キリも異常事態の発生に作り笑いを前面に出しつつ、死神の悶える姿に焦りを感じつつ索敵を始めていた。

（ギュンの捕まえている子は、ＳＲじゃない）

キリの心に浮かべる感想を、ギュンは眉ひとつ動かさずに読心して頷いた。

（確かにこいつはＳＲじゃない。
だが……人間という感じもしない。どこか根底で既に人間離れしている）

（私もその匂いは嗅ぎ取れたけど、確実にＳＲでない以上その子の仕業じゃないのは確かよ）

サイキックで持ち上げた翼少年の身体を隅々まで見回す。

暗器を忍ばせているわけではない。そもそも前に出てきた時の武装姿勢から素人だと判断でき、戦闘経験の無い一般人だとすぐに分かった。あべこべの構え、こちらが銃を装備していたことは分かるはずなのに選んだ武器が鉄パイプという選択ミス。勇気だけの無謀な匂い。

しかし、現状で死神：ダイアンの腕を切り落とす理由を持った、且つ行動可能な人物は彼しかいない。

（……キリ、本当に鬼の姉妹を始末したんだろうな？）

（始末はしていない）

（何？　どういうことだ？）

（アレはまだまだ利用できる。だから、半殺しでやめておいた）

（……わかった。今まで君の判断が間違っていた事はないからな。何か考えがあるんだろう）

（対無所属連合用。ところで、そっちも確認したい。番犬と鬼は片付けたの？）

頷くギュンに嘘はないし、鬼を粉微塵にしようと逆上していた場面を2人は見ているはずだった。加えて現状、トキを護ろうと必死になっていた者達は一般人がただ一人のしか残っていない。ＳＲが一般人を見殺しにすることはざらだが、ここにいる護り手たちに限ってはそれを覆すようなワケあり者ばかり。弱者護衛の志を捨てない哭き鬼、クラスメイトの番犬と協会所属の妖精、協会長直々に特例を受けて一般人と暮らす神隠しの子。

誰もが、窮地にある一般人を見捨てるような人間ではなかった。
キリ、ダイアンの調べでＳＲ各々の過去は覗いてきたし、それを証明する過去の事例もいくつか目に通した。

故に、唯一調査不足だった人間：村崎翼という人間を疑うのだ。
ただ一人だけの、感知できない特殊なＳＲなのかもしれない。
例えば、完全否定――メイトスというＳＲのように、人間か怪物かを感知できないＳＲが実在するのだ。

（本当にこいつはただの人間なのか……じゃあ、誰がダイアンを？）

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第４５話－

－Ｓｉｇｎ　ｏｆ　ＧｒｅａｔＷａｒ：Ｔｈｅ　Ｍａｒｃｈ　ｏｆ　Ｓｉ－ｘｉｏｎｇ！－

ここには夢がない。
風もなければ、水もない。熱も知らない。
白く長い廊下を進むと、何が光源でなぜ泥足でも床が汚れないのか考えさせられた。
あらゆる疑問を湧かせる見覚えのない純白の通路。どれだけ進んだのか覚えていない。しかし、後に戻る事のできない廊下。後ろへ歩を進めても壁が追いついてこないこの廊下では、つまり前進しか許されないのだ。
そんな廊下を進み続けると、見えない何かにぶつかり足を止めざるを得なかった。トキは見えないそれに手を当て考え始める。
感触はある。気のせいか、ほんのりと温かさが伝わってきた。
もしかすれば、鏡や硝子なのかもしれない。遠近法や反射則を意識したことが滅多にないからどちらが正しいのか判断できない。

「おはようございます」

霞のかかったような、それでいて明瞭に覚醒した意識のトキを呼びかける声が上がる。
同じ身の丈の女。
確かに在る、見えているのか見えていないのか曖昧な壁を挟み、トキは彼女と向かい合った。

「……誰だ？」
「お友達の危機を伝えに来ました」

視線を落とし、彼女の影を確認する。
毛先だけが水色がかった白色の少女は、明らかに日本人のそれとは違う顔立ちをしていた。海兵隊の着用するセーラー服にベレー帽、右手にはリボルバー：コルトパイソン。
そこに込められている物が弾丸と殺意なら、すぐにでも彼女を片付ける理由が成立する。しかし、開口一番名乗りもせず、友人が窮地だと伝えた彼女を敵と判断するには材料足りないし、早合点であろう。

「どうして君がそんなことを？」
「あなたは今、横になって体の回復を待っている。
それを護ろうと戦っている人たちがいます。見ますか？」

返答を待たずに彼女の手が壁に触れた。
透けている壁なのか、反射している鏡なのか分かりかねる綺麗な壁に映し出される映像。
網膜を介して飛び込む現実世界。

「いま、敵は3人。
味方は5人以上いましたが、全滅といって過言ではありません。
辛うじて息をしている者ばかりで、死者は出ていません」

壁に映る像の中で、藍とカンナが共に倒れ、高城と奈倉がそれぞれ地面と壁を崩して伏し、スミレとエミルダが気を失い、或いは大量に出血して倒れていた。
場所は翼の住んでいる工場。
廃墟を更に破壊した3人に見覚えはなかった。

「どいてくれ……」
「強いです」

映像に触れ、そこに確かな壁があることをもう一度確認する。

「このガラスは君の妨害か？」
「妨害のつもりはありません。ただ、皆が必死に護ろうとしたあなたを、試し――」

2人の手が一線を、一枚の壁を挟んで重なる。
同時、トキは彼女が敵味方いずれであろうと構わずに押し退けて進むことを決意し、それを実行した。

「クロス、セプター」

一瞬。
彼女が手を引くよりも早く、トキの力は壁の向こう側の彼女を侵した。

（これは！？
私の世界で――トキは精神だけなのに、直接私に攻撃できている！）

重なった手から流れて走る微弱な電流。
しかし、それだけで2人を隔てる壁は消えた。それがどんな攻撃なのか、彼女――アリス・アンダーグラウンドには理解できなかった。
何故、精神世界で物理的攻撃を使う事ができるのか。そもそもトキに使用権限は無い。

「アリス。君にダメージは無いだろ？
俺は君を敵だと思っていない。味方とも思っていないけど、翼が危ないってことを伝えてくれた。
ありがとう。それから、勝手に読んだことを謝るよ。ごめん」

敵対の意思が無いことを伝え、逆に警戒させてしまったことと勝手に侵したことを謝罪する。
アリスはねめつけてくるばかりだが、仔細を口頭で説く時間はなかった。

「……一体、何をしたの？」

「Ｌｖ．３：クロスセプター」

彼女の真横を通過する。
敵対の意思がないのは彼女も同じで、しかし、疑念に満ちた質問が口から沸き出た。
一体いま、自分が作り出した不可視の壁をいかなる方法で取り払ったのか。それがお前のＳＲかと、回答を求めて止まない。

「教えてくれたら、友達助けを手伝う。後処理も。これでどう？」

「じゃあ、翼を安全な所まで連れ出してくれ。
俺は敵をやる」

足は止めない。
出口はこの先、すぐそこにある。
この純白の通路から出て行くには、その出口をくぐるしかない。
それがアリスの頭から流れてきた情報。

「なぜ、私の名やここの出口を知っているの？」

互いに同じ壁に触れていた故に共有し、しかし一方的にその情報を読み取る力を使って得た。これがトキの真相である。
触れた物質から時間を奪い、時間という概念を失った物の存在を無に帰す、或いは与えて物を強化・創造するクロノセプター。それに対し、クロスセプターは触れたモノと時間をリンク・共有させ、

一方的に相手の持つ新しい情報を順に読み取っていく力。
そして――

「つまり、こういうことだ」

後ろから追ってきたアリスの手を握り、一発でそれが伝わるようにクロスセプターを発動する。
頭の中で整理した新たな力の性能が、握った手を介してアリスの頭に直接伝わってゆく。

（これは……）
「驚くのは後回しにして、助けに行こう」

触れた手を介して行き来した情報に戦慄を覚えながらも信頼に足る実力者であることを認め、アリスは急ぎ足のトキに続いた。

目覚めて最初に自覚したのは背中の感触。年季の入ったマットレスは、コンクリートの地面ほどでないにしろ、ベッドの柔らかい感触を知っているトキにすれば硬いものだった。
アリスに言われた通り、自分の体は横になっていた。問題はここからである。一週間運動していない体がこれからの戦闘に耐えられるのか。

（まぁ、とにかく敵を減らすか）

深く考えるのをやめ、タイムリーダーを展開する。

静止時間は3秒、低速時間は4秒。この限られた時間内に敵との距離を詰めなくてはいけない。

しかし、問題はなかった。

一週間寝続けていても、意識は夢の中でしごかれ続けていたのだから。

（行くぞ）

上体を起こしてマットレスを離れ、部屋を隔離するドアを体当たりで破り、退出と同時に直線上にいる女性ＳＲに突撃する。

突如現れた新手のＳＲに3人は身構えるが、時間の助成を得たトキの方が早い。接近を終えたところでタイムリーダーを一時解除し、すぐにまた展開する。世界が静止するのと同時に両手の銃から時間を奪い、次にヒップホルスターの小銃と倭刀、レッグホルスターの苦無（くない）、手榴弾、拳銃と、目に付く武装を悉く解除する。

あらかた片付けた所で低速世界が訪れ、キリという――クロスセプターで知った敵の1人――忍のＳＲ：キリと呼ばれる女に打撃を加えた。

時間が通常速度へ戻る前に超能力者に目標を切り替え、Ｌｖ．２：ＣＣ（時間による創造）で生み出した拳銃：Ｓｐｈｉｎｘ３０００で以って銃撃。不可視の壁を前に通常弾丸が無力である事は十分に

認識していた。肝心なのは、超能力者もそれに理解した上で銃弾を“止めようとする”ことにある。

トキは対策を終えていた。芹真事務所で行われてきた訓練でも、同じシチュエーションは存在した。それは芹真やボルトがサイキッカー対策としてトキに施した訓練であり、現に今、それが活きていた。

銃弾に余分な時間を纏わせ不可視の力が展開する空間へと差し向ける。間違っても翼を射線軸上に置かないよう避けて。そこで予想通りの停止が起き、不可視の壁による防御は銃弾を完全に静止させるに至っていた。だが、ここでトキの放った弾丸は余分に与えられた時間を受けて再動する。一度停止した銃弾が回転力と速度を取り戻し、見えないが確かに存在する不可視の壁を突破して超能力者の肉体を抉る。

3発の銃弾を受けた超能力者が驚愕の表情を隠しもせずに崩れ落ちる。

「アリス！」

不可視の束縛が消えるのと同時、空中にあった翼が忽然と消えて居なくなる。

『避難させました』

彼女の報告と超能力者が伏すと同時、前後から二種の凶刃が迫った。

背後からキリの鉄鉤、正面から大鎌による斬首。

衝撃波。その後に続く土煙は、一時的に襲撃者2人の視界を遮るほど酷く立ち上がった。

ぶつかり合った金属同士の感触から2人は冷や汗を覚えた。色世トキは今の攻撃を喰らっていない。得物を伝ってそれを理解する。

落ち着きだす土煙の中で、理解が映像を得て確信へと変わる。鉤爪を黒刀白峰の剣が、大鎌を黄金剣がそれぞれたったの一刀で止められていた。

（勢いに乗っていた斬撃を――！）

（こんな餓鬼が、止めやがっただと！？）

腕を眼前で十字に交えたトキは、握った剣を通してクロスセプターを見舞う。

忍のSRには降伏とも威嚇とも取れる言葉を直接頭に響かせ、もう一人からは死神のSR：ダイアンという情報を得る。

次に時間による加速。

その場で膝を折って死神と忍の得物が衝突するように2人を躱し、それぞれの機動力を奪うべく脚へと斬撃を加える。

予想外の展開は何一つない。キリは低速世界において高速移動によって通常速度でダイアンを飛び越えて回避し、死神は咄嗟に非物質化してキリの斬撃による顔面への損傷を免れた。そんな死神へ、背後から黒刀白峰の剣：畏天（いてん）を深々と脹脛へ斬り込んだ。畏天には霊体を斬ることが可能なように、藍が独自の術文を込めてくれている。非物質化によって銃弾の雨を躱すことや斬撃の暴風を躱すこと

ができようとも、畏天の刃だけは避けることが叶わない対幽体用の得物でもあるのだ。

（死神の脚は切――っ！）

銃火。

指の先に嵌めた指輪から微かに覗くストリングスの煌きが、トキの集中力を削ぐ。重力に縛られて高速移動にも制限が生じる空中で、忍が採った回避方法は糸による軌道の制御である。上下左右に巡らせた糸を手繰り寄せて斬撃を躱しつつ、新たに隠し持っていた銃器を取り出して引き金を絞る。太い筒から放たれる４０ｍｍという大型の弾は、爆発を巻き起こす炸薬弾ではなく、眩い光によって相手の視力を奪う照明弾（スターシェル）を放っていた。

閃光を放つ弾がトキの眼前を通り過ぎ、地面にぶつかって這うように遠ざかり、壁に激突する。

（閃光弾だったか！）

（好機！）

頭上から迫る脅威に対応する。警鐘によって知らされる危機。視界を奪われた今を狙って、確実に仕留めようと忍は構えている。上から。銃を捨て、刃物で。

以前よりも少しだけ性能を理解したタイムリーダーは対応への自信を生み、警鐘は相手の位置は正確に把握する為に活きた。　問題は照準。いま忍に銃を向け、一発の弾丸で動きを止める自信はそれ

ほど大きくはない。複数発あるなら話は別だが、いま両手に回遊させている時間の中から視力の回復に時間を使ったとして、その場合に作り出せる銃は１丁、銃弾は１発が限界である。

当然だが小口径の銃では用が足りない。作るなら最低でも２２口径以上の弾を使用できる銃。

左右の目を両掌で隠すように覆い、両目に時間を与えて視神経の時間進行を早送りする。数時間後の未来の視力――閃光から完全に回復した視力を得るのと同時に、星黄をＳｐｈｉｎｘ３０００へと作り変える。引き金に指をかけ、腕を伸ばして銃口を向ける。照星と照門の一致を待たず、必中の感覚による銃撃をキリに与える。同時に深い切創を負ったダイアンの反撃を、銃を片手で握り直しつつ避ける。銃弾は忍の左肩を捉え、躱した大鎌は数本の頭髪を攫って空を切る。

空中で体勢を崩すキリ、得物を制御しきれないダイアン。

トキも体勢を直す。既に立ち上がっていたダイアンの蹴り脚を銃を握った腕で受け止め、畏天でもう片足を突く。骨に当たる感触を見つけた所から剣を外側へと奔らせると、死神の血飛沫が土ぼこり積もり始めた地面に滴い落ちた。それでも死神は止まらない。両膝を地面に落としながらも片手で振る大鎌は的確にトキの脳天を目指して奔っていた。狂喜の笑みと共に振り降ろす大鎌には溢れんばかりの殺意と、持て余した怒りの念が込められている。

死神は目標である色世トキの拉致を完全に忘却し、敵対するＳＲとして始末に掛かっていた。どう咎められようが、この怒りだけはコイツにぶつけなきゃ収まりがつかない。

対するトキは別段驚くわけでもなく、但し、勇気を出して大きな一歩を踏んだ。

斬撃の射程を外して刃を避けるのと同時に、死神の得物の長い柄を肩で受け止める。肉と骨に生まれる熱を神経が痛みとして伝え、衝撃は片目の瞼と右手の銃器を落とすだけの威力は十分に備えてい

ることを語る。覚悟の勇気が無ければ確実に後退していただろう攻撃を、一時的に止めた所で死神の今最も危険であろう凶器から時間を奪い、自らの得物を作り出す。奪った時間で右拳を包み、両膝をついた死神の顔面を打つ。が、

「捕まえたぞテメェ……」

死神はトキの拳を踏ん張って堪えていた。打ち込んだ右手の首を捕まえた死神は、大鎌を手放して力任せにトキを引き寄せる。

逆襲の顔面を狙った拳打。

頭部を後方へ傾けて打撃を躱すトキの視界の片隅に、新たな得物を手に取った忍の姿が飛び込んできた。死神もその姿を捉えてトキを放さないよう握る手に力を込めた。いっその事握り潰そうとも考えたが、前のめる姿勢でそれを実行できるほど時間的猶予はないため、握った手で以ってトキを下へと引っ張った。自分と同じ高さに頭部が来るよう腕に力を込め、空振りした手も加える。

（乗る！）

腕を引かれたトキはあえて抵抗することではなく、されるがままに流れていくことを選んだ。

抗うばかりが良き手段ではない。

一歩、体勢を崩したように見せかけて死神の射程内深くへ入り込む。踏みとどまるように足を出し、予測される相手の攻撃を誘うために五体を死神の射程内に置く。直後、死神は腕を手繰りつつ頭を後方へ逸らした。暗器でも銃器でもない、頭部による頭部への打撃

衝撃。

「低速」

時間の流れを緩やかにし、トキは死神の手から離れる。

一度距離を取って武器を拾いなおし、Ｓｐｈｉｎｘ３０００を時間分解して再び掌に時間を回遊させたまま死神の顔を、打つ。踏み込みと、腰・肩の回転、手首のスナップによる一連のアクションから繰り出される平手打ちは、相手の視界を麻痺させるのと同時に鼻を折っていた。衝撃後に鼻孔から噴出す鮮血が、両足からの流血に混じる。

顔面を打たれたことを認識した死神は、次に後頭部を襲う衝撃で地面が迫るその圧力に狂喜の表情を完全に失った。僅かな間意識を保っていたが、次第に霞がかっていく視界と共に訪れる脱力感へと心身を委ねて夢の世界へ。

トキは背後へ回り込み、全力で死神の後頭部を蹴り飛ばしたのだ。

（ダイアンが、やられた……）

加勢に走ったキリだったが、目の前でそれを打ち砕いたトキに初めて冷や汗を覚えた。

流石は色世皐の子供。

（予想通りに絶対神判の加護と芹真事務所の存在が、ありえない速度でトキ自身のＳＲを成長させている！）

トップスピードで忍が疾駆する。
ＳＭＧ（サブマシンガン）：ＭＰ５Ｋを両手に構えて弾幕を張る。連射の途中で片方を捨てて棒状手裏剣をトキと左右の仕掛けに打ち込む。弾幕さえ避けきったトキに飛び道具が通用しないことは充分に理解できた。だが、囮として使えるかもしれない。　もう１丁のＳＭＧも投げ捨てて破片手榴弾を複数個天井目掛けて放り投げる。二秒ヒューズに作られた特注手榴弾の炸裂までに他のトラップも起動させる。トキの頭上を飛び越えつつ斬撃を試み――肩を狙うも手応えなし――置き土産として手裏剣を見舞う。
直後、手放したばかりの手裏剣全てが消え、そればかりかトキ本人も視界から消えていなくなる。

「！？」

いま、キリは銃弾を躱せるほどの速度で動いていたのだ。だから銃弾と手裏剣が同時に目標を穿つように仕掛けて回れるのだが、それほどの速度で移動して回っているにも関わらずトキを見失ってしまうのはどうしてか。

（時間、か）

物理法則を破って久しいキリだが、未だかつて時間という概念を破るＳＲに出会った事がない。この出遭いによる衝撃は思いの外大きかった。銃弾より速く、亜音速すら超越する現象。確信には至っ

ていないが、トキが消えた理由は時間の止まった世界を移動したから。
認め難い予測を頭の隅に追いやり、キリはトキの捕獲を諦めた。

（トキが、これほど使う者など聞いていない）

一旦、集中力を平常域まで戻して低速に見えている世界を通常通り見えるように戻す。
髪に吹き付ける風を感じ取って切り札である刀を抜き、トキ渾身の斬撃を阻止する。

（銃弾と手裏剣が全て消えた……）

（反応した！？　これが忍者のＳＲなのか！）

星黄を受け止めた刀は小太刀。トキがこれまで得てきた実在・非実在合わせた、あらゆる日本刀という得物から構築した日本刀というイメージを下回るサイズの刃物。
黄金宝石の剣を弾き、虚空を奔る雨之常太刀（あめのとこたち）が見せる斬撃軌道。刀身の短さ、トキの回避という状況から斬撃が直接ダメージを与えるには至っていなかった。
互いに距離を取って得物を持ち直す。
トキの二刀流、キリの一刀一鞘。低速世界の展開とキリのトップスピードによる撹乱攻撃の開始は同時だった。
側面から鞘による打撲を畏天で武器防御し、上半身を腰のバネを使って半回転させ繰り出す雨之常太刀の斬撃を屈んで躱す――警鐘

――後ろへ飛び退いたトキはキリの暗器を警戒した。今、何に対して危険を知らされたのかが分からない。

（まだ隠し武器があるのか？）

（もはや勘が良いという話ではない。やはり絶対神判の加護が憑いている）

地面を蹴り、鉄柱を蹴って立体的に動き回って死角を探る忍。隙を突かせまいとトキも物陰へと滑り込むが、身を隠した先では安全ピンを無くした手榴弾に出迎えられ、急いで元来た方へと身体を戻す。爆風が横顔に熱いものを運ぶ。飛沫は凶器と共に散り、兵器としての役割を果たす。鉄柱の裏側から伝達する破片による攻撃。しかし、これが囮であることは言うまでもなく理解できる。

左右いずれかより現れるであろう攻撃に備えて双剣を十字に組む。その時、頭上で金属同士の衝突音がトキに同様をもたらした。

（上――っ！？）

顔が向くのと鞘が真っ直ぐに鼻頭に落ちてくるのは同時だった。見る前に斬る。頭上で星黄畏天を交差し、鞘を三等分にする。これも囮だと気付くのに、刹那ほどの僅かな時間を要した。

鞘はトキの視線を上へと上げる囮であり、キリ自身は足音を立てずに真正面から肉迫していた。地面を滑るように走り、低腰状態から鞘の囮に気付いたトキへと斬撃を見舞い――しかし、トキはその斬撃を紙一重で受け止めた。

星黄に止められた雨之常太刀が滑り込んで切りかかるところを、畏天で十字の受けを作って完全に止める。両手が斬撃の防御に回ったところで放たれる蹴り足。足の親指を踏みつけ、脛と膝を蹴り、鳩尾を打つ。一瞬のうちに貰った攻撃四つ、うち大きなダメージが一つ。親指の骨がひび割れたことを感覚で知りつつも、小太刀を押し返して一歩踏み込み、反撃の二刀流を見舞う。

初撃の畏天による袈裟懸け。しかし、刃は忍に届かず、

「何？」

虚空で止まる。

キリの小太刀が止めるわけでもなく、畏天は何も無い空中で静止してしまった。何も、無いはずの空間で。色や形と言う概念で言うなら確実にそれは無いはずなのに、どうしてか、畏天の柄から響いてきた震動は金属の感触であった。

「動くな」

顔を上げ、刃先が喉元に突き付けられていることに気付く。

畏天の感触と忍の強気な態度から、トキがそれに気付いたのはすでに危地置かれてからだった。

「包囲した」

首と眼球の動作だけで自身の周りを確認し――何も無い虚空に警鐘を打たれ――畏天を受け止めた見えない刃物の存在を感じた。

「それがその刀の力か」

「そう」

小太刀がアスタリスクを描くように奔る。すると雨之常太刀の力が、鋭い痛みとなってトキに伝わる。

刃が通過した空間に触れる。通過したはずのそれは、まだそこに存在していた。

斬撃ならぬ残撃。

「なぁ、その刀って、カマイタチとは違うのか？」

「違う」

「刃を残す？」

「いいや、斬撃」

言葉を交わす間も忍の斬撃は続いた。前後左右、上下柱の裏側まで隈なく残撃によって包囲され――

「……これで封じたつもりか？」

切り札、というつもりはトキになかった。ただ、使い所ではなか

ったけで。
忍の腕が止まる。
確証無くとも直感がトキの底の深さを伝えていた。まだ、何かある。

念を入れて両腕の剣を弾き飛ばす。
身体を自由に動かせない状況にあるトキはそれに抵抗することもなく、飛ばされた剣の行方を見守る事もなく、ただ眼前の敵対する忍にのみ視線を送っていた。
柱に手を触れないように忠告し、妙な動きを取らないよう促す。

「質問二つ」

しかし、トキに動揺や焦りは微塵も伺えない。
キリにトキの自信がどこから湧くのかがわからず、早急に用事を済ませるしかなかった。

「黒い欠片。どこ？」
「知らないし持っていないし、そもそもソレをどうする気だ？」

「渡す」
「四凶にか？」

笑う彼女の顔、その額から汗玉が流れ落ちてゆく。撃たれた左肩が痛むのか、徐々に笑顔が崩れていった。

「仲間、いつでも殺せる」

釘を刺してからキリから第二の質問が飛び出す。

「会長の秘密とは？」

「知らない」

白を切ったものと判断したキリの腕が苦無用シースに伸びる。得物を数本つまみ取り、伏して倒れる哭き鬼：スミレの間近に突き刺さる。

気を失った事によってＳＲを解除している彼女は普通の人間と大差ない。そんな彼女の身体に、コンクリートに突き立つほど鋭利な苦無を止めることは出来ない。

「芹真事務所、会長の秘密知って協会抜けた」

「本当に知らない。聞いてくれ」

キリが何を求めているのか分からないが、何の情報も持っていないのだ。そもそも、芹真事務所の全てを理解しているわけでない。

「俺もいま、黒い塊を探しているし、芹真さんに聞きたいことがいくつか出来た」

「逃がせ、と？」

笑顔はあまり残っていなかった。

苦無が飛ぶ。

金属同士の激突音。

苦無は、スミレに刺さることなく、弾かれた数本がコンクリートの床に、数本が錆びた鉄骨、朽ちた壁に突き立った。

（哭き鬼……）

「藍！」

同時に視界に飛び込んだ結末は、スミレへの投擲攻撃を防いだ藍の、満身創痍でありながらも闘志を失わない気迫を持った鬼の姿。

肩を上下させて呼吸するほどの重傷を負っているにも関わらず、背を丸めることも左右に揺らぐこともない、ただ大きく呼吸するばかりが動きの仁王立ち。頭部と右半身から夥しい流血を見せる藍だが、キリに畏怖を感じさせるには十分すぎる気迫だった。

「結晶角の鬼……姫鬼だったか」

忍の呟きと同時にトキは両腕を左右に展開した。不可視の斬撃で腕を失わないように注意しつつ、タイムリーダーと２つのＣＣを連続して使用し、複数箇所腕を切りながらも両腕を肩と同じ高さに上

げる。

柱を背に両腕を開いたトキは、磔に処される人間のように見えた。そう見えてしまったが故に、トキの行動が攻撃の類だと警戒するのが遅れた。

哭き鬼に気を取られているうちにトキは加速していた。

両腕を広げ、口から出る言葉、

「止まれ」

視界は仄かに白みがかっていた。

それはトキにも、キリ、藍にも同じ色が見えていたものの、何が起こっているのかを理解しているのはトキ1人。

藍もキリも同様の感想を抱いていた。何が起こり、これから起ころうとしているのか分からないが、トキの勝ちは近い——或いは確定するという予感があった。

決着は呆気なく、予感が脳裏を過ぎる頃に勝負は着いていたのだ。

二つ、溜息がそれぞれの口から零れた。敵を無力化したトキと、それを見守っていた藍の二つ。

完全に停止時間の中に取り残された忍のSRを見て、藍はトキの著しい成長に安堵の息を漏らした。敵勢力の沈黙を確認したところで膝は折れ、肩が降りる。握っていた金棒も濡れた手の中から滑り落ちて地面に伏す。

前傾に倒れる身体を左腕で支える。

「大丈夫か！藍！」

両腕を上げたまま、両の掌を握って拳を作る。

それだけの動作で周りを取り囲む無色無形の凶刃は、その効果・現象は失われた。包囲を解いてすぐ星黄畏天を拾いなおして時間分解し、藍の元に駆け寄って手中に得た時間を与えた。

致命傷が一つ、深手が七つ、軽傷が三十と九つ。

常人ならば複数回死ねるであろうダメージを負いながらも、いまだ生をつないでいるのはＳＲのお陰と、藍自身が抱く忍に対する執念によるところが大きかった。

時間を与えるＣＣと同時にクロスセプターで垣間見た藍の心境は、復讐の炎に燃える自身とそれを鎮めんと冷水を放つ自身の、葛藤と冷静のせめぎ合いだった。兄の復讐を遂げるか、報復を捨てて禍根を水に流すか。

兄の復讐は平穏と四凶化の進行をもたらし、もう一つの選択はその逆をもたらす。

（四凶と協会の関係悪化、四凶問題の激化……その情報を得たから、最近の藍は復讐を遂げるべきか否かで迷っていた、のか）

最後に覗き見た一欠片には、彼女は苦悩に寝食ままならない日々を送っていたことが記録されていた。

四凶にならない。

忍と同じに四凶にならない。なりたくない。

自分のためにも、再会できた家族の為にも、事務所の為にも――トキや、コハネの為にも。

込められていた思いを知ったトキは地面に手を当てて時間を補充する。

「俺は、一週間も寝ていたんだって？」

「……ええぇ」

背中に刻まれた大きな縦一線の切創を修復し、大きな傷が全て消えたのを確認し、次にスミレの回復に臨む。

傍らへ、懐から術符を取り出した藍は膝を着いて同じ作業に取り掛かった。サイキッカーによって振り回されていたスミレの傷は藍よりも酷い。外傷よりも内部の損傷が激しかったのだが、それでもまだスミレに息は残っていたため、トキと藍の施す術で回復できた。これが亡骸だったものなら手の施しようがなかったものの、鬼の生命力とは不思議なもので、まだ死には遠い。

「トキ。あれは、どうなっているの？」

肋骨の刺さった肺を直し終えたところで、藍は忍のＳＲが固まる空間をわき目に見た。

「アレって、忍者のこと？」

「ええ。止まっている、みたいだけど……死んでいるの？」

「いいや。死んでいない。
あ～、でも、動けないって意味では死んでいるけど、でも生きているといったら生きているよ」

「止まっているの？」

「それより、藍はお姉さんの方を助けに行ってくれ」

言われて雑念が吹き飛んだ藍は、頭の中で姉の受けた攻撃が自分よりも多く、深いことを思い出して駆けた。
光の当たらない、暗く、中央エリアよりも粉塵の酷い廃棄されたエリア。そこで姉は中央エリアに向かって這って動いていた。十数メートルもの移動跡は床の埃具合と血のラインが証明している。

「藍……あいつらは、どうなった？」

「動かないでくださいカンナ姉様！今直します！」

少し痛むことを告げてから術式円陣を作り出し、その上でカンナの身体に刻まれた傷を癒していく。
術符による回帰回復と、再生促進回復で以って、流れ出た血液の生成をも促す。

「高城先輩！大丈夫ですか！？」

一方、トキは高城、エミルダ、それから奈倉の回復に大量の時間を其処彼処から手当たり次第時間を奪い、三人のＳＲとの戦闘で大いに消費した学友らに時間を与える。

最初に目を覚ましたのはエミルダだった。時間は与えることが出来ても意識を復活させる事はできない。感謝の意を伝えるのは意識を取り戻してからにしようと順序立て、トキは３人の傍を離れた。この時、スミレが気絶の淵から復活を遂げ、一変した状況に我が目を疑った。

「止まれ」

奈倉たちの傷を癒してすぐ、タイムリーダーで低速世界を展開して死神と超能力者に接近する。

彼らの傷は治さない。

だが、見殺しもしない。

忍のＳＲ――キリを静止させているのと同じ“タイムリーダー”で死神と超能力者を隔絶する。これで彼らを捕獲したも同然である。これから芹真事務所に電話して応援を呼び、同時に彼らを回収してもらう。

質問をするのはそれからだ。

誰が雇い主で、黒い塊をそもそも何に使うのか。

質問は三人だけではない。芹真にもある。

――会長の秘密とは何なのか？

「おい、トキ！大丈夫なのか！？」

問うべき事を頭に浮かべているうちに愛院は意識を取り戻していた。大声を上げるほどの元気と勢いで立ち上がり、エミルダと共に歩み寄ってくる。

「大丈夫だよ。奈倉さんは？　エミルダも何か痛いトコとかある？」
「大丈夫だよ」
「問題ありません」

確認しあった三人の目が固まった超能力者の蹲る（うずくま）姿に止まる。
怨嗟に歪んだ顔を僅かに覗かせる韓国人を見て、愛院は藍と同じ質問をトキにぶつけた。
――これは、止まっている、のか？
高城が目を覚ます頃、トキは全員の目の前でそれを実証しようと藍とカンナが戻ってくるのを待ち、翼が戻ってくるのを待つべきかどうか悩み――待たないことにした。

愛院、エミルダ、カンナらの前で両腕をそれぞれ左右外側に伸ばし、開いた掌を閉じて見せた。

これが、最も安定感のある発動方法。

両腕をそれぞれ側面に伸ばし、肩と同じ位に持ち上げ、掌を素早く握り閉じる。
それだけの動作で自分を中心とした薄黒く巨大な半円球が生まれ、全てを平等に、選り好みせずに解かしてゆく。

「助けてくれぇ！」

全てが純白の室内から明かりが消える。
監視カメラ、椅子と机、食料、壁、床、人、ＳＲ。
何ものが空間内にあろうと、彼女の前では等しく“消滅できるモノ”でしかなく、彼女を少女と見縊(みくび)り、小さな密室を選んだ監査官達は後の祭りと分かっていても助けを求め、必死に生へと縋った。

「嫌だ！死にたくない！死にたくないんだぁ！」

全力で叩いて危機を伝える唯一の出入り口である扉。
その扉さえ、今では薄黒き半円球に解かされ、扉としての機能を失っていた。消えていく者物。部屋の照明が消え、予備証明が部屋を照らすのも束の間、絶えない消滅の半円球は完全に部屋を飲み込んでいた。

「緊急事態！誰か応答してくれ！
誰かっ！おい誰か出てくれチクショウ！」

狭い部屋の中、屈強な体格の男達は誰一人として彼女に近づこうとせず、それぞれ部屋の隅や壁際へと逃げていた。しかし、逃亡が無意味ということに気付かされた男達は少女を無力化させようとＳＲを解放した。

それが無駄に終わった瞬間から、男達は必死に助けを求めた。

「頼むから誰か応答してくれ！魔法が効かないっ！」

扉を叩く手が砕けるて形を失う。

解けた肉体に残された時間は僅か、しかし扉は肉体よりも堅固。

解ける速度が等しくても、結末に至るまでの時間だけは違った。

先に崩れ始める肉体。外部へ伝わらない叫び。

機密性を重視して設えたこの“質問部屋”は、いくら叫ぼうとどんな音であろうと決して外に漏らさない。例え銃を持ってきたとしてもこの部屋で使う事はできないし、ガスを使うにしても唯一の出入り口は死んでおり、今や完全な密室と化していた。

「会長はどこ？」

少女の――織夜秋の、一切の熱を感じさせない声音に男達が身体を震わせた。

常時進行する死への解き。

殴りかかろうにも身体は崩れるほどに脆くなっており、更に近づこうにも中心部ほどＳＲによる効果の無力化も強く、解きも早い。

震える男達を一通り見回し、この部屋の誰もが使い物にならない

と悟った瞬間、部屋を飲み込んだ薄黒半円球の中に――両掌を半ば開き――男達の胸に濃黒小球を現す。
部屋を薄黒に染めた黒の効果で死を約束され、濃黒の小球でもって即効性の死を確約される。

「消えて」

掌が再び拳を作った。
直後に、騒ぎ立てていた男達の声が一斉に止む。
濃黒小球に触れていた男達の胸には大きな穴が開き、穴の形成直後に小球は消え、筋組織や血流は通常通りの動きを展開する。零れ落ちる雫を踏み鳴らし、死体を跨ぎ越え、部屋の壁を透過して展開する薄黒半円球を解除し、壊れた扉に濃黒小球を複数個発生させて扉を消して部屋を出る。
扉に大穴を開けて灰色の通路に出たところで、秋の目の前に新たな男が姿を現した。

「会長はどこ?」

誰彼構わず質問する秋。
抑揚のない声に男は返答する。

「俺が会長だが、一体どんな御用かな?」

織夜の身体は完全に固まって動けなくなる。
目と目が合った瞬間に支配は始まっていた。何もさせない為に、何を考えての行動か聞き出すために四肢を止めて首を固定し、余計なノイズが耳に届かないように聴力を制御する。
人として制御できることを知ったオウル・バースヤードは、織夜秋の支配を全て解いた。

「トキの監視網の解除をしてほしい」

「もうしたよ」

それだけ言って踵を返していく会長の背を見送り、通路を曲がって消えたところで秋の足も動く。
会長の後ろを追うように朝日が昇ろうとしている海の見える通路を真っ直ぐに進む。間接照明の優しい光は決して強い光ではないにも関わらず、灰色の廊下はハッキリと灰色であることを認識できる、不思議な通路だった。

（頭痛が止まった……）

協会の地面を踏んで前日より止まなかった悩みの種が、突如として芽を引いたことに驚いた。
エレベーターの中で扉が閉まらないようにボタンを押し続けている会長の隣まで歩き移る。
ここは何かが変だ。

「どうしてトキの監視網を解除、なんてのを望むんだ？　良かったら聞かせてくれ」

「トキを殺す為に邪魔だから」

上昇を始める箱の中、二人は視線を眼前に固定して口の上下を続けた。

「どうして殺す必要が？
何か嫌がらせでもされたのか？」

「彼を殺して私は“ひとり”になれる」

「それは一人前か、それとも孤独？」

「一人でいい。孤独でも、一人でいい」

エレベーターが減速を始める。
織夜秋というＳＲを知覚しながらオウルは考えた。
彼女の異常は見た目では気付けないほど深刻で、しかも重症である。どんな状況を作り出して織夜秋という人間が形成されたか似通った記憶を鑑みた。

「どうして色世時なんだ？」

「どうしてもシキヨトキだからです」

「その名前に意味はない。そもそもお前は自身を示す名前を持っているだろう。織夜秋というちゃんとした名前を」

「その名前に意味はあります。今の私は、母がくれた仮の姿を名乗っているだけ」

長い廊下に出て、一度曲がり大きな扉の前で足を止める。

指紋と声紋と網膜スキャンによる開錠を済ませて協会本部最高セキュリティレベル中央部、本会長室に二人は入室した。

バースヤードの後ろを歩いてついて来た秋は、何も考えずに会長の後を追って来たことを今更になって自覚し、広大な部屋と自動点灯した照明に意識を持っていかれる。椅子に腰掛ける会長の背後では、壁一面がスクリーンとなって白空と薄ら満ち掛けた月、空の光を乱反射する大海の波模様が映し出された。

「どうしても殺さなければいけないのか？」

「それが唯一の方法だと――」

「誰が言った？　キュウキか？」

「母が――教えてくれました。シキヨトキ。それが本来、私が得るべきものだったと」

「……そうか」

デスク上の書類群から関連するファイルを探して目を通す。幾つかの予測を元に、つい最近取り揃えたばかりのファイルであり、すべて眼前の彼女とまともに会話を繰り広げる為のアイテム。

「君の母親の名前は？」

「コト」

「フルネームは？」

「？」

途中までは、秋の反応に予想外へとカテゴライズされるものはなかった。フルネームの問いに対する反応前は。

「ふるねーむ？」

「名を“コト”というのだろう？
じゃあ姓は？」

「せい？
一体、何が聞きたい……？」

二人の間をクエスチョンマークが飛び交った。
ここに来てある意味で不測の事態に陥ったオウルはどう伝えよう

ものかと頭を押さえた。一方で秋は協会長の放った単語について必死に頭を回して該当する単語を検索するも、検索単語に一致するデータが存在しなかった。

数分の沈黙。

静寂を破ったのは秋で、会長への質問をぶつけていた。

「どうしてトキを護るんですか？」

「大変な人物だからだ」

「……大変って？」

二人の表情は遭遇から一片もしていなかった。如何な言動や行動を見せようと不変。織夜秋を探りつつ見定めようとするオウル、素の状態で余計なリアクションを見せない秋。

「君は四凶を知っているか？」

「名前なら」

「秋、君にトキの包囲網について情報を提供したのはキュウキだろ」

「確かそんな名前でした」

淡々と返答する秋の答えは半ば予想通りで、しかし半ばは予想外の回答であった。

この少女は四凶軍の回し者でない。
心の中にはトキの顔とデータが全面的に先立っていた。会話を交わしている今も、秋の頭は名前を取り戻したいという執念が力強く渦巻いている。

「お前は利用されているつもりなのか？
それとも利用しているつもりなのか？」

「どちらでもありません」

「そうか……
秋の目的は四凶の勝利貢献か？」

「いいえ。トキです」

「じゃあ、ここに留まっていな」

「どうしてです？」

「近いうちにトキが来るからだ」

再度訪れる静寂は、熱を帯び始める秋に冷静を呼び戻すには十分な時間であった。
執念という熱を読み取ったオウルはタイミングを見計らって次の言葉を放つ。挑発にならないよう、織夜秋を協会に留める為に。

「これから数日中にキュウキが攻めて来る。

当然、ここの戦力だけでは防ぎきれないと予測が出来ている」

「……戦場になる」

「俺は芹真事務所に応援を求めるつもりだ。
彼らが呼応してくれる確率は極めて高い」

(戦場……)

二人の頭に仮想の戦火が浮かぶ。

「来なかったら?」

「いや、来る。確実にな」

根拠に四凶が強く絡んでいることを再認識し、ある提案を秋に持ちかけた。

「トキが来なかったらトキの家に連れて行ってやろう。
それまでどうだ? 秋自身の四凶を判定してみないか?」

「あなたはトキに死なれると困るのでは?」

秋の両腕が左右に上がる。

「さぁ……
実は確証なんて無いんだ。困る可能性もあるし、実は無害かもしれない。その辺は色々試して見なきゃ何とも言えない」

「殺すよ。トキも、あなたも」

「ああ。だが、それはトキが来てからにした方がいいだろうよ。その方が一回で始末できるんだ」

「……今すぐ消してあげるよ？」

「いいけど、但し“ここに頭痛薬はない”ってことを肝に銘じておいてくれ」

再三の静寂は先の二回と明確に違った。
それまで平静を保ってきた秋の目が始めて動揺の反応を見せる。

「どういう意味？」

「いや、なに。必要なら解消方法を教えてあげようと思っただけさ」

矛を止めた言葉は事実で、オウル・バースヤードの魅力的な提案を秋は呑んだ。
悩みの解決法を知ると同時に協会長という男はトキをある程度知っていることが見て取れた。

「さて、じゃあ、計測といくか」

協会本部、日の出前の１５分に交わされた会話であった。

――同時刻

協会の第一支部を制圧した四凶軍１０億が協会本部を、１００万が第二支部を目指してそれぞれ進軍を開始した。

第45話－Sign of GreatWar：The March of S

四つの軍が三つの国を目指して進軍を開始した。
それぞれ二つの軍はフランスよりロシア、オーストラリアを目指した。

大軍の進攻の裏、秘密裏に少数精鋭部隊が日本へ向けて放たれた。

色世時と風間小羽の確保、或いは殺害という任を受けて。

第４６話－色世境の帰宅と－（前書き）

『エイプリルフールは４月の１０日じゃない！？』

『はい』

『テメェ、嘘言ってんじゃねぇよな……』

『はい』

『本当に４月１日なんだろうな？』

『はい』

『……て、ことは』

『トウコツさんが騙されていましたのですよ、キュウキさんに』

『あンの野郎……！』

これが――四凶トウコツと水の魔法使いセンの会話の一部である。

『俺は、てっきり４月１０日かと……マジで思っちまったじゃねぇかよ』

『あまり落ち込まないでくださいトウコツさん。

４月１日に“本当は１０日がエイプリルフールだ”って嘘をつくことに罪はありませんよ。その日が嘘つきの日なんですし』

『クソ、あの虎女め……腹が立ってしかたねぇ。アホ狩りにでも行くぞ！』

『ちゃんとミッション報告書を出してくださいね』

『わかってるよ』

以上、トウコツが４月１日と４月１０日を間違えていた日より。

※本編とは関係ありません。申し訳ない※

第４６話　色世境の帰宅と

「南極基地でも見つからなかった！？　それでは作戦に大きな支障が出てしまうのよ！分かっているの？」

『ククッ……分かっているとも。計画通りに事を進められないことも、お前が取り乱すことで士気に影響が出てくることもな』

「相手を間違えているでしょ……それで、どうするつもり？」

―ＡＭ　０８：４３　ロシア　西シベリア上空―

ノートパソコンと向かい合っていたキュウキは、突如電話を掛けてきたコントンの話に我が耳を疑った。

オーロラ作戦の要であるコントンが提案した切り札――いまは破片が行方不明で起動不可能な兵器の一欠片が、最も重要な局面に来て見つからないと彼は言うのだ。

「トキが見つけた可能性は？」

『限りなくゼロだ』

「会長は？」

『知っているだろうが果たして事漏らす可能性はあると思うか？』

「それこそ限りなくゼロに近いわ。　コントン、あなたの言う最大

兵器ってのが本当に協会本部のどこかに隠されているなら、わざわざ起動させなくても他の使い道が――」

『盾とするより、矛とした方が何倍もの効果を期待できると言ってもか？　フフフ……うまく行けばその日のうちに協会を消すことだって不可能じゃないんだぞ』

苛立ちを喚起する笑い声に青筋を抑え、キュウキはとある予測をコントンに、抵抗はあったが計画を優先して一説を持ちかけた。

「黒い欠片よね？」

『それがなければ例の兵器の中には入れない』

改めて確認してから過去と現状を口にする。

「協会所属時に本部を探り、謀反して第一支部、第三支部を調べまわったものの結果は“収穫なし”。昔、その欠片を持ち逃げ出した妖精たちの大半は死去し、主犯格である色世皐もこの世から消え去った……」

『そいつらの子孫をあたるも、やはり収穫はなし』

「……コントン。あなたは“泣き虫キョウ”って、知っている？」

切り出す話にコントンは名前と略歴を知っていた。持ち合わせる情報を確かめるように綴る。

「色世家の純血を継ぐ一人っ子で、妻に絶対神判の色世皐を持つ、知る人ぞ知る大泣き虫のチキン・オブ・チキン」

『妻に従って何度か従軍した経験を持つが、いずれの戦闘でも恐怖におののき終始涙に暮れて目を腫らせたとか。そこから病気に発展したこと複数回。敵前逃亡回数は余裕で指の数を超えるらしい。戦場で人を撃って一ヶ月寝込んだという話も聞く。言うなれば、筋金入りの雑魚だ』

「そう……色世皐が死ぬまでは」

端末を高速で叩きいて表示画面を変更する。

現在作成中のシミュレーションを一時停止し、フラッシュメモリを差し込んで保存していたデータを展開すると、ファイル名“色世”の中身が画面最前に表示される。その中には複数個のメモ帳があった。

「黒い塊を探すようになったのも、ソレが行方不明になったのも、色世皐がそれを持ち逃げした前後からだったわね？」

『ああ』

「前から少しだけ引っかかることがあるの」

『ほほぅ、それはキョウも関係するのか？』

「色世境の服役だけど、彼は妻を見殺しにしたという理由だけで檻の中を望んだらしいのよ」

『何？
そんなことで隔離を――』

僅かな沈黙後に受ける否定。
もしもコントンが欺かれていたのなら、という憶測が色合いを強める。キュウキはそこに自分が予測する可能性のひとつ、現状では最も怪しい点を、混沌に加えた。

「色世境が、その黒い欠片を隠し持っているとしたら？　むしろ、真っ先に調査すべきだったのでは？」

言われたコントンの頭には色世皐の死に際の顔、言ったキュウキは協会が管理するカリフォルニアのＳＲ刑務所の堅牢なセキュリティを思い浮かべていた。
あの場所なら一切の外敵から身を守ることが容易になるし、会長の許可さえ下りれば牢屋だって貸してもらえる。“ＳＲに関わった一般人保護”という、協会の存在理由として頻繁に使用される名目で。

「つい先程だけど、同刑務所の房内から行方不明者が出たという情報が流れた」

『激変の可能性か……分かった。今からそれを確かめる。おそらく日本だ』

「お願い。私はカリフォルニアに部隊を派遣して刑務所の中を探ってみる」

『ああ。　期待はしていないがな』

「それはとても正しい期待ね。
くれぐれもキョウを殺してしまわないように」

通話を切り上げるのが同時――直後、二人は同時に携帯をしまいながら、薄ら笑みに顔を歪めた。

―日本―

廃工場から続く坂道を下り、住宅地を進みながらトキは質問攻めに振り回されていた。
駆けつけたアヌビスや警察署長らに現場を譲り、少年らは落ち着ける場所を目指して歩む。

「じゃあ、本当にお前があの三人を？」

「ああ」

「トキさんがやった技は、僕の左腕を作ったのと同じアレですか？」

「そうだよ。クロノセプターとＬｖ．２：ＣＣ（時間による創造）だ」

「どこで銃を手に入れた？」

「作ったんですよ、高城先輩」

「ひとまず飯といこうぜ。腹ペコで動く気力が空っケツだ。なぁ、トキ」

「何か食べたいものがあるなら作るけど……出来る範囲で」

「失礼ですよカンナ姉さま！」

「お姉さま、自重を」

－ＰＭ　１３：０９－

色世家に向かって歩を刻む足取りは、そのどれもが疲労と心労で重く、常時の平均移動速度と比べて遅々とした。

その中でもトキは疲弊による翳りが明確だった。気丈に振舞ってこそいたが。

（親戚の一斉自殺後だってのに、意外とヘコんじゃいないな）

（トキさん、無理して笑っているのかな……）

（こいつ、意外とクラスメイト思いだったからなぁ……それに従兄弟の死だ）

（クラスメイトの死と親族の死が重なり、相当に疲れていると思っていたが……コイツ、意外と心は強いのかもしれない）

（自重してくださいカンナ姉様。いまトキさんに負担を掛けては――！）

（わかってるっての！じゃあスミレ、お前が何かして気を紛らして見せろよ！）

一同の中でトキの印象が一気に変わる。疲れを隠そうとしていることに同情の余地あり、或いはその気丈さを賛辞を浮かべずにはいられない。

その中で藍はトキの疲労を測っていた。

（芹真の話が本当なら、トキは寝ている間も訓練を受けていたことになる。

これまでの訓練は大体２時間でダウンするような内容だったから、それが一週間……しかも、昼夜などの概念が存在しない心層世界での実施。仮に一日２４時間の訓練で計算するなら7日×１２ダウンで８４回分の訓練をこなした事になる）

それでも、納得の出来ない速度でトキは変化を遂げていた。特に、最後のあの忍を止めた技。

「ところで、翼が先に行ったって本当か？」

奈倉の言葉にトキは足を止め、しっかりと頷いてみせる。
返答を聞いて真っ先に安堵したのは当然エミルダ。次いで高城だった。

「先に家に行っているって連絡があった」

工場を出る直前に、翼を逃がしたアリスは先に家へ向かうと言葉を残した。初見である彼女に殺意はなく、完全に味方するつもりでアプローチをはかってきたことがクロスセプターで判明している。
アリスの加勢と同時に“来訪／帰宅”した人物がいる事も。

「よし、それなら急ごう。いよいよこの一帯も安全とは言い切れなくなってきた」

「この一帯？　どういうことだ高城」

「四凶の戦争はもう始まっているってことだ。いまだ崩れていないのは日本ぐらいだ。すでに大陸の半分が四凶によって占拠されている」

進行速度が上がる。

全員が急ぎ足で家へと向かい、道中にトキへの集中砲火を自身が受けようと、高城播夜が集中砲火の的となるため真実の現状を一同に伝えた。

「大国はほとんど陥落して、いまや４０憶を越える人数にまで膨れている」

「協会は動かなかったのか？
それに、国の陥落を軍隊が見過ごす筈が――」

「四凶の軍は一般人とＳＲによる混成軍隊。
協会のＳＲには一般人を、一般人にはＳＲをぶつけた。協会の掟でＳＲが一般人に危害を加えることは難しい。なんたって殺しちゃ駄目、傷つけちゃ駄目っていう条件だ」

「はぁ！？　んだそれ？
それであちこち占拠されているってのか！？」
「カンナ姉様落ち着いて……」

「ハリヤ、お前はどこまでの情報を持ってる？」

「四凶が欧州と南北アメリカを制圧し、アジア・アフリカ圏への進行を開始したというところまでだ」

「形勢は？」

「四凶が圧倒的優勢だ。協会の支部も制圧されたという話だが……」

「やっぱり会長の首が狙いね」

「あるいは協会の制圧だよ、藍」

見慣れた景色が目的地までの距離を算出させる。あと1分足らずで一行は色世家に辿り着く。
足を止める者はいない。足取りこそ重いが止まる者はいない。
彼女らが姿を晒すまでは。

「お待ちしてました」

1週間前に半壊したはずの色世家は完全に復活していた。
玄関先に佇む影は3つ、横たわる影が1つ。
うち1つは村崎翼のもので、残る3つは個人によっては理解できるものであったが、共通してそれを認識することの適う面子ではなかった。

「あの白髪は、アリス・アンダーグラウンドか」

「敵か？」

「何が起こっているんだ……？
あいつは、ナイトメア武装派のドッペルゲンガーじゃないか！」

「敵か！？」

「親父……」

「お――――！？」

軽い混乱に見舞われた一同の視線を動かすのは神隠し。一目散に翼の元に駆け寄って抱きついた。

万一に備えてエミルダの後に続く高城、奈倉、カンナ。

一方で立ち尽くすトキの傍ら、藍とスミレは混乱を深めていた。突如として出現したトキの父親と並列する翼の存在、ダウンしたナイトメアの容態。

「藍姉様、トキさんのお父様は服役中では？」

「えぇ……そう、聞いているけど」

トキの父親：色世境（シキヨ キョウ）の――汗玉を浮かべて強張った――顔を見、真横のトキの唖然とした顔を覗く。トキも混乱していることを見て取り、藍は状況の進展を望んだ。おそらくこの場でもっとも肝心であろう2人がアクションを起こさない限り、取り付く島などないだろう。

色世境が何を思っているのか、読心術を持つボルトならすぐにでも対応しただろうが、生憎とこの場で読心術を持つ者は折らず、遠からずともそれに近い力を持ちながら、しかし心中を語る気配をトキが見せないのはフリーズ状態のため。時折口を開きかけるも声は出ない。2人の視線は交差したまま微動だにせず、抱き合う翼とエミルダや、倒れ伏したドッペルゲンガーを調べる高城とカンナに構う事もなく文字通り向かい合ったまま、2人は1歩も動かない。

「ほら、キョウ」

横から肘で小突かれ、それまで固まったまま汗を浮かべていたキョウが一歩を踏み出した。ギクシャクとした人型機械のような嫐娜に欠いた動き。

それを見ても無感動のトキ。緊張を見て取った藍とスミレらは記憶の片隅にある“泣き虫キョウ”という名前が浮かび、それがすなわちチキンでもある彼の性格把握に至る。

「ただ……た――」

絞れゆく声で伝わる緊張の度合い。しかし、トキはそれを理解できていない。まずどうして父が目の前にいるのか、そこが理解できておらず、処理と整理が追いついていないのだ。

「ただイま――トキ」

緊張でアクセントがおかしくなるも、ちゃんと帰宅の言葉を伝えたキョウを見守り続けていたアリスの口から溜息が漏れた。それを見た藍は返事するようにトキを突いて我に返るよう促す。

「おかえり……」

「さぁ、まず家に入って落ち着きましょう。ね、キョウ」

アリスの提案に元来の家主が頷き、目線で返事を求められたトキもそれに応答した。翼や藍たちにも家に入るように促し、一同は藍とカンナを殿に色世家の玄関を通り抜けた。

屋内を見回すトキら5人は驚愕に足を止めた。一週間前に破壊されたはずの物件がどうして何事もなかったかのように存在し、確かな手触りを感じさせるのか。無数の弾丸を穿たれた壁も、吹き飛ばされた壁も、砕け散った数々の家具の一切も、全てが一週間前の破壊より前の姿を取り戻している。

「トキ、台所を貸して。私達でお茶を淹れるから」

「あぁ、いいよ……」

足を止めた5人を動かさないことには進まない。それを見て取った藍は労の労いも兼ねて台所へと移った。先頭を行く奈倉、藍に続き、翼、トキ、エミルダ、スミレ、高城、アリス、境、カンナ、藍と順に靴を脱ぐ。

廊下から色世父子と翼、アリスを除いた全員がリビングに入る。リビングに集まった面々を見て、4人は2階へ続く階段を踏み出した。見慣れた景色、初見の景色の中に銃痕がないものかと探すトキとアリス。先を歩く3人が踊り場を通過した所で翼は足を止めて踵を返した。

「翼？」

「トイレ使わせてくれ」

それだけを言って階段を駆け下りてゆくクラスメイトに、トキは心細さを覚えた。

再開する足取りは真っ直ぐトキの部屋へ。

我が子の部屋が近づくに連れて激増する緊張に逃げ出したい境だったが、すぐ横を歩くアリスがそれを悉く阻止して隙を見せない。

（息子の前でしょ？　もっとシャキっとしないと幻滅されかねないわよ！）

（わかって、わかっているけど……！）

部屋への扉を前にして足を止め――トキと視線を交え、アリスの視線を受け止め――勇気を出してノブを手に取る。止め処ない罪悪感を胸に、謝罪の勇気すら表せない自分を嫌悪して入室を果たす。

この家、この部屋に自分が戻ってくる資格があるものか。

（ここまで来たのに、また檻の中が恋しくなったの！？）

「なぁ、親父……」

アリスの後押しで刑務所を抜け出た時の覚悟を思い出し、しかし、その半ば程が現実のトキの声を聞くや、ひび割れて挫けそうになってしまう。

必死に自分を落ち着けようと呼吸し、指を動かし、忙しなく目配せするが、唯一の助け舟であったアリスは『ごゆっくり』と言い残して部屋から去っていた。

「ハ、はい、どうした？」

「……ほら、たくさん知り合いが来ていたけど、大丈夫だったかなぁって思ってさ」

「いや、嬉しいよ」

沈黙。

突如として訪れた静寂は、トキの理解不足に因るものだったが、キョウにとってはとてつもない不安への因子となった。

「嬉しいの？」

「あ、いや、何と言うか……受け入れてもらえるのか不安が……」

本心を語り始める父の言葉に、トキは理解が追いつかない心地良さに満たされ、同時に矛盾と判明できるものを抱く自分に気付きつつ耳を傾け、また進んで問いた。

「刑期は終わったの？」

臆病を知らせる警鐘と、これから訪れるであろう巨大な危険を知らせる音がトキの頭をノックした。　父親の態度から冒険をしない性格であることは十分に予測ができた。だが、過去に送られてきた手紙の中に1枚だけ、刑期が20年近いという内容の手紙があったのを覚えている。

だから父親がここに居ることに疑問が尽きず、何故ここに至るのか詳しい経緯も聞きたかった。獄に入った本当の理由も含めて。

「……いや」

「脱獄したんですか？」

「最初から刑期なんてありはしない……」

「え？」

扉が閉まる。現在この部屋の主がトキだ。元の主であるキョウはベッドに腰を下ろしてトキを正面に構えた。

部屋中に散らばるゲームや本の数々に誘惑されることなく、柔らかい寝床の感触を羨むでもなく、正面から注がれる視線から逃げ出そうとしている自分を全力で奮わせ、正面から息子の目を覗き込み、思ってもいないことを確認する。

忘れようとしていた影が、息子の瞳の中に輝いていたのだ。

皐はトキを護りきった。

「協会のことは知っているか？」

「ＳＲの協会？」

「……会長は、いつでも出て行けと言った。投獄初日に」

「やっぱり、親父に罪は――」

「罪はある。皐とお前を護れなかった。
それどころか、私は……あの日、に、逃げ出していた」

両親と離れて十数年。
トキは初めて当時の両親を知った。
誰も教えてくれることなく、どれだけ必要だと説いて尋ねても決して聞かされることのなかった現実。
それは、父が子に話したくなかった真実だった。
生きる。
ただそれだけの筈なのに、誰もがそれをコンセプトとした人生を歩んでいる筈なのに、恥じずには居られない過去。
決定的な違いは、捨てたか否か。
その境を跨いで人は誇りと恥を学び、積み重ねて人生を彩ってゆく。

キョウの口から出たモノは誇りではなく恥。人生を先駆ける年配として若者に話せるような内容とは程遠い、忘れたくても忘れ得ない過去。

「皐はお前を護るため走っていたのに、私は皐の言葉を真に受け、

生きたくて生きたくて、怖くて走って逃げていたんだ……お前を護るという、親としての義務を、放棄して」

再度訪れる沈黙の中、キョウは後悔、トキは混乱に沈んでいた。
顔色ひとつ変えないどころか、無表情を貫き通すトキは落胆しているのか、それとも怒りを覚えているのか。
額に汗を浮かべ、目じりに涙を浮かべる父が、羞恥心と臆病を押し退けて打ち明けたそれは、どこか眠気を誘った。

「どうして、逃げる必要が？」

床に腰を下ろしてベッドに腰掛ける父親を正視する。

「ＳＲの問題だ。
皐が四凶という者達の計画を妨害した為に報復を受けた」

「コントンのこと？」

「ぁ……知っているのか？」

「はい。一度殺されているし。それに――」
「それは、やっぱり本当なのか？　コントンに殺されたってのは」

「あぁ。前は負けた。
けど、次は負けない。
それに、コントンはクラスメイトを人質にするって言っていた。

条件は俺が卒業するまでに、とも。だからその前にアイツをどうにかしなくちゃいけないんだ」

「黒い欠片のことでか？」

衝撃は内より来たるもの。発生の拠り所となった父の言葉に大きな鼓動がひとつ。

何故知っているのかという疑問は同時に、過去に一度捨てた可能性に焦点を、必要以上のスポットを当て始める。

「どうして？」

「あいつ等の探し物の場所を知っている。まだ勘繰られてはいなかっただけで、時間の問題だった。

私が檻を抜けたのは、お前が殺された事と、ツツジさん達が四凶に対して反抗の戦歌を口にしたからだ。

残されたのはお前だけだが、今度は私も戦う。　護らせてくれ、逃げ出しはしない。

ＳＲもある！」

それまでに見せなかった凛とした眼差しに見つめられて安心しつつも、それを覆すほどの言葉にトキは返そうとした言葉詰まらせた。

「……え　？　本、当にＳＲが？」

「見てみるか」

ベッドを離れて部屋中を見回す父に倣って立ち上がり、何を探しているのかと尋ねようとした所で父の身体の向きが一方に定まる。

夏冬の服装をしまい込んだ大型クローゼット。中に入っている物は服飾以外にも古本や完全攻略したゲームソフトなど、隙あらばと余分な物が詰まっている大きな箱であった。右手を取られ、引かれるがままに引かれていくと――

「鏡の中？」

クローゼットの大きな鏡の中に消えていく父の背中に怖気づくが、引かれるままに鏡面へと近づき、手首が面を透き抜けた所で恐怖は消えた。父の身体はすでに鏡の中にあり、自分の身体も半分以上が鏡の中にあるのだ。一切の不快感や抵抗無く、同じ空気、同じ湿度、温度――内容の左右反転世界が目の前に広がった。いわゆる、

（鏡の世界……）

「ここへのアクセス権限は私しか持っていない」

左右の反転した世界で境が部屋を出る。握った手を解き、階段の手摺を辿って1階へ。後ろを歩くトキは周囲が完全に左右反転していることを確かめながら父の背中を追った。

「信じてくれるか？　これが私のＳＲ。最近名隣の房の人に“鏡幻燦画”と呼ばれたが、呼び名が欲しかったわけじゃない」

構造や装飾品の絵柄・文字まで反転した世界で、境が何処を目指しているのか。僅かな懸念はそれだけだった。

「い、一応だけど……ここを使って何人かのＳＲを倒したんだぞ」

「倒したって、ＳＲを？」

「追跡する人たちをな」

リビングに入って手頃なサイズの鏡を探し、境は鏡面を指してトキに覗かせる。その鏡には映るべき者が存在せず、映らぬべき者が姿形を持って運動していた。

翼や藍たち。

それを境は元の世界と指して説明し、改めてトキは鏡の中の世界に入り込んだことを実感した。

「私とアリスはこっち側から元の世界を撃つことが出来る」

「撃つってのは銃を？」

「そう……ごめんなトキ。ある意味で私は、間違いなく犯罪者なのにお前に会いたくて刑務所を抜け出てしまった」

「いや、気にしてないよ。ちょっと恥ずかしいけど、本当は嬉しいなとも思ってるし」

静寂。

本心を打ち明けた2人の間に下りた静けさは当分去る気配を見せず、そのこそばゆさと重圧に負けた境は指先で鏡に触れる。

指先が鏡面を離れるのと、鏡から音声が流れ始めるのは同時だった。

『じゃあ、あの人がトキさんのお父さんなんですか?』

静けさを無理矢理飛ばす第三者の声、始めに耳へと達した声はエミルダの質問だった。

鏡の中でリビングまで移動し、現実世界のリビングで交わされている会話を映像と音声で見ているのだ。　そう分かった瞬間トキは、これが盗聴の類にカテゴリされるのか、頭の隅で悩み考えつつも会話に耳を傾ける。

会話の中心にいるのは奈倉とアリス。そこに高城と翼が加わり、決して穏やかではない空気を醸し出していた。

『色世境って、見てられないくらい逃げ腰な人なんだけどね……どうしてか見捨る気になれないのよ。気にさせる、っていうか何ていうか、何か隠し持っている感じもするし』

『で?　その色世境とどうしてブラックリスト30位の君が行動を共にしていたんだ?』

『何時から一緒なんだ？　つぅうかよ、昔貸し出した剣返せ』

2、3の質問を同時に処理するアリスを見て、トキはそこはかとなく母が持ち合わせていた強気をアリスに被り見た。

『見捨てられないからよ。境は命を狙われていたし、私なら護れたし。

スイマセン、魔倉さん！　壊されました！』

『はぁ！？　誰にだよ！

お前に貸したのパチもんだが、２００万はする代物だぞ！？』

『なら後で２００万返します。絶対に返します！

もちろん利子付きで！』

『ＯＫ。絶対だぞ』

『約束は破ったことがありませんから御安心してください』

（Ｂ８１Ｗ５３Ｈ７９の……Ｂカップか。スタイルは決して悪くないが髪の色が視聴者受けするかどうかだな。なぜ毛先だけ水色？海外ではああいうのが流行っているのか？）

気のせいか、翼の心の声が聞こえる……が可能な限り無視し、気のせいだと必死に思い込みつつ他の面子の会話を傾聴する。

『それで、どこで知り合った？』

『半年前。刑務所に忍び込んだ私を助けてくれた恩返しに話し相手を務めたり、外の情報を集めて教えたりしていたの』

「アリスの言っていることは本当なのか、親父」

「……事実だ」

『何はともあれ全員が無事でここに居て会話できるのも、アリス君とトキの父上が助けに来てくれたからであろう。でなければ今頃私は骸となって工場内に転がっていた』

『それは違うよ翼さん。私はトキを起こしただけ。境は催眠術者を撃破しただけで、私と境はあの工場であなた達を襲ったＳＲに指１本触れていませんから。

撃破――捕獲したのは全てトキの力よ』

父と合う視線が面映い。それは、信じ難いといった眼差しの中に確かな褒賞の念が含まれていたことに気付いたからであって、決して言葉として聞いたからではない。

トキは照れて顔を伏せつつ、この鏡中世界では表面に出かけた思いが感覚として伝わり易いという性質に気付いた。鏡の外の翼の心境が声として伝わってくるように、鏡の中の世界に居る者の声も周波数ではない響きで伝わる。一種の読心術のようにも思えるが、見境のない解釈は果たして読心と言えるものか考えどころだった。

「でも、素直に会話できるから私はこの空間が好きだ」

「それに静かだし……」

ここなら近所迷惑とか気にせずゲームを大音量で遊べるだろうというトキの声もしっかりと伝わっていたが、境はスルー。それよりも話さなくてはいけない、渡さなくてはいけない重要な物が懐に待機しているのだ。

逝去した妻より託された時間の破片。それを再認識した瞬間に浮ついた気持ちは一瞬にして引き締められ、額には水玉が浮かぶ。圧し掛かる責任と恐怖。果たしてこれを遺言通り力を付け始めているトキに託すべきなのか。

胸に手を当てると内ポケットに潜むそれの圧力を思い出す。

「どうしたの？　どっか具合が悪いとか？」

感付いた息子に戸惑いの色を窺わせたことで境の選択は絞られた。決定への焦燥は、手を内ポケットに走らせて巾着袋に触れる。

「トキ、大切な友達はいるか？」

「……あそこの、テーブルの傍に居る翼、それから奈倉さんに高城先輩、藍とはクラスメイトだよ」

「友達が四凶に狙われて護りきれる自信はあるか？」

「どうして？」

「私も少数だが敵に狙われていた。しかし、いずれも強敵でなかったから今まで逃げ切ることができたし、協会の施設に護ってもらえた。

だが、それもそろそろ限界のはずだ。正規の四凶達が世界各国を陥落させている。この国も安全じゃない。それどころか、十億を越える四凶の軍団を防ぐことは不可能だ」

「四凶の戦争は知っているよ。それに親父、言っただろ。俺はすでにクラスメイトを人質に取られているも同然だ。卒業前にコントンの要求するものを見つけなきゃいけないんだ。

だから聞かせてくれ。母さんの遺品とか隠し物が何処かに残っていないか、心当たりはない？」

「何を探しているんだ？」

「コレくらいの、黒いプラスチックみたいな物体らしいけど、全然見当がつかない。具体的にそれが何なのかも分からないし、心当たりも全くないから探し様もないんだ……」

「卒業するまでに見つけてコントンに渡す気なのか！？」

「それでクラスの皆が助かる」

「……代わりに、世界中の人間が大勢死ぬとしても、クラスの救出を選ぶのか、お前は」

「え？」

「コントンがそれを何に使うか、知らないのか？」

「親父は――何を知っているんだ？」

「答えてくれ。クラスか、世界のどちらを助ける気なのか」

「それは……両方を選べない？」

「無理だ。私が見つけた“ＥＲＲＯＲ：２７０８”という四凶の計画が潰えていないのなら、コントンの要求は呑むべきじゃない」

「それじゃあ、クラスメイトを見殺しに――」

「しかし、それで７０億を超す人々の命が助かるんだ。いいか、トキ。私と皐は四凶達の一大計画を掴んだ故に命を狙われたんだ。誰の援助もなしに妨害活動を始めた皐は……皐が殺されたのは……本当はこんな事聞きたくはないが、答えてくれ。皐が四凶に殺されたのを覚えているか？」

「覚えてる。
大雨の日で、山道を逃げている途中に落石があって、それで車が潰れて車が燃えて、トウコツが現れた。
俺も刺されたのに、それでも俺だけ助けられて――」

鏡を覗きながら返答するトキの首に腕が絡まる。
後ろから抱きついて謝る父に怒りを覚えるはずない。同時に、悲しみも起こらなかった。

「トキ……コントンの探す物は私が預かっている。皐から」

2度目の衝撃がなければ動揺も当然ない。それはこの世界が伝わりやすい場所だからかもしれないし、父の突然の期間がある程度事態を予測させもした。

引き受ける覚悟は出来ている。

腕から伝わってくる震えは、父が何に対して恐怖を抱いているか分からないが、今までとこれからを大きく分かつ言葉を後に控えているからだろうと理解できた。

「お前にコレを渡したくない」

「どうして？」

「人々の死を選択しなければいけなくなるからだ。

ずっとお前を放置していた私に言う資格などないだろうが……父として、子供のお前にそんな重責を押し付けたくない」

「……でも、このまま何もしなければクラスの皆が殺される。

遅いよ、親父。

俺はもう人の命を背負ってしまった。だから――」

絡み付く腕を押しのけ、鏡面より視線を移して父の目と合わせる。

不安でいっぱいの親の顔に罪悪感を感じつつも、すでに決した意を曲げるつもりはないと態度で示す。

父が言うように世界中の人々の命が掛かっているのかもしれない。

しかし、実感が湧かない。それもあって確実に実感できるクラスメ

イトの生命を、遥か強大で凶悪な敵から守るために、目先しか見えていないと笑われようと、罵られようと、叱責されようと、守るべき人々と決めた命を見捨てるなど出来ない。

「クラスメイトを守って、コントンを殺す。
そうすれば四凶の軍団も少しは弱体化するんじゃないか？」

「トキ……簡単にものを言うな」

首を横に振った境は鏡の外を指差す。

「例えば、いまこの瞬間に彼らが四凶に襲われてもすぐに駆けつけることができるのか？」

「ああ」

「不可能だ……この世界から出るには私の許可が要る。それに、私は四凶に立ち向かえない。逃がす事は出来ても、四凶を討つことなんて叶わない。相打ちすら私には望めないんだ」

「じゃあ、親父を脅迫してでもこの世界を出て行く。出してもらう。それから俺が四凶を倒す。親父は皆を逃がしてくれればいい」

1歩、後ろに踏み込む境。向き合うトキの顔は無表情に近くも、瞳は闘志の高熱を孕み、決意と相俟（あいま）って殺気に変わっていた。読み取れる表層心理から四凶に対する敵意が尋常でないことを知り、境

はその態度に危険を感じた。

「分かった……そこまでの決意なら、本当にやれるかもしれないな。お前にコントンを確実に倒す勝算はあるのか」

「やらないことが“負け”だからな。俺なんかが頑張ることで皆が助かるんだ。負けない限りな。クラスメイトの中には結構お世話になった人たちもいるから、恩返しってわけでもないけど、少しは役に立ちたいし」

「……勝てるのか？」

「負けられないよ」

人助けを望むトキを、境は一瞬でも我が子なのかと疑った。アリスや協会から提供された話によれば、トキは引き篭もりだった。

それが今は弱志の片鱗さえ見せない。どれ程の目に遭って来たのか想像できないが、予想を大きく上回る変化を遂げている。

「それでも条件がある」

引いた足を前に戻し、逃げ腰をそれ以上退かないように据え、境はそれを提案した。

「これも言いたくはなかったが……お前は、コントンとの対峙を望むのだろう？」

「アイツのリクエストを渡す瞬間に討ち取れないかと考えている」

返答に目を瞑り、一度抜いた手を再び内ポケットに潜らせて巾着袋を取り出す。

袋の口紐を解き、右手の３本指で中身を摘み取る。

はたして黒い欠片がその姿を露にした。

「これを持ってコントンに接触したいなら、まず、その……」

口篭る父の本音が伝わる。

この空間を父が好むと言った理由が何となくわかった。口の達者でない父が本音を手っ取り早く伝える手段として、この空間は確かに便利で、手早かった。

「学校をやめろ、って……どうして？」

「本当に恐れるべきはコントンじゃない。キュウキだ……」

それ以上の発言を捨て、境はトキの手を引いて鏡の外へと出た。

「トキ……！」

リビングで話していた面々は、突然現れた2人に身を固めて息を呑んだ。

沈んだ面持ちの父親と、戸惑いの中に怒りを含む息子の間に漂う空気が場を重くするに十分な力を持っている。誰も動くことが出来ず、下手に口を割ることもできない。2人の間でどんなやり取りがあったのか、知る術もない。

「学校の皆を思うなら考えておいてくれ。現実に、選択の全てから人々を救い出した人間なんてごく僅かなんだ。

それでも、クラスの友達を守りたいなら、もっと自由に動けるようにした方がいいと思う。

無数之時象(じかん)に余裕を作らないと駄目だ」

トキに背を向け、トキと共に行動していた少年少女らを一通り見回し――冷や汗を覚えたところで――境はソファに横になり、手近なクッションを手に取り、頭を覆って顔を伏せた。

『？？』

一同、その行動を理解できずにお互い顔を見合わせて疑問符を浮かべた。しかし、アリス唯一人がソファにうつ伏せた境を理解でき、褒め言葉を送れた。

「よく頑張ったよキョウ！
ちゃんと伝えること伝えられたんだから、キョウはもう臆病者なんかじゃないって！」

『……』

一同、唖然。
送る言葉に困る状況に直面する各々の中、トキは１人悩み、藍はトキを見て、父親である色世境が放った言葉について考えていた。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第４６話－

－色世境の帰宅と非武装派の合流－

専用のエレベーターで上階に上り、厚い会長室の扉を叩く。
返答を待ちつつ浮かぶ汗をハンカチで拭い、手元の資料を確認して姿勢を正す。

「ジャンヌか？」

「はい。そうです」

答えた後に開くドアをくぐり、珍しく荒れている会長室の内装に動揺しつつもファイルを最優先で協会会長、オウル・バースヤードへと手渡す。
会長が資料に目を落としている間、ジャンヌは散らかった部屋の一角に頭を抱えて蹲る少女の後姿を見つけた。　オリヤという名の未確認だったＳＲ。会長直々に連行して来いと伝えられた危険人物。
この部屋で何があったのかを深くは詮索せず、ファイルのページを捲る会長に言葉での説明を加えて、現状を造り上げる情報を素早く伝える。

「四凶の軍がそれぞれ港湾を経ちました。予想される第一波は総勢5億程かと。
大量の人間と少数のＳＲより編成された混成部隊による物量作戦の展開の可能性が大」

「空からも来るな」

「おそらくは。
時間差で出撃するとして、航空機での先制爆撃も予想され、最も可能性の高い攻撃時間は今から１６４分後かと。最初の軍団で指揮を執ると思われる人物は５ページ目にまとめておきました」

「それで、他の伝言は？」

ファイルを読み進めつつジャンヌの本当の目的を促す会長。その目が一瞬だけオリヤに向くのを見て、片腕で壁を探りながら立ち上がろうとしている彼女に、会長はどんな思いを抱いているのかジャンヌは思案しつつ、複数の客人訪れてきたことを伝える。

「リデア・カルバレー、
ベクター・ケイノス、
ミギス・ギガントが面会を所望しています」

「レーダーの上に案内しておいてくれ。すぐ行く」

「レーダー、ですか？」

「うん。そう伝えておいてくれ」

「分かりました。そのようにお伝えします」

頭を下げて会長室を出て行くジャンヌは、扉の前で一度オリヤの面を覗いた。

額に汗と青筋を浮かべ、頭を押さえつつ肩で息をしている彼女に何があったのか、皆目見当がつかない。

（苦しんでいる？）

「こっちを見るな……」

「失礼しました」

溢れる殺意が行動に変わる前にジャンヌは退室する。

扉を閉め、改めて会長のオリヤに対する特別な扱いが不当なものだと考え、言い知れぬ不安と違和感を抱いた。

今まで会長が無償で誰かを会長室に招いたことは一度足りとない。

オリヤが今まで存在し得なかった異質な存在であることは十分に理解しているつもりだが、それは彼女のＳＲに限った話であって、ＳＲを抜いて語る彼女のレベルは決して高くはない。非常識という意味でなら相当なレベルの異常者だが、オリヤ自身の態度から自分で自分を確立したわけでないことは明らかになっていた。

（誰かに仕込まれた性格……洗脳ともマインドコントロールとも捉えれるけど、彼女にはしっかりと自覚というものがあった。

言われた通りに動いているとはいえ、オリヤ自身もそれを“加速の糧”としている気配がある）

厳密に洗脳ともＭＣとも違う。

強いて言うなら純粋な信仰に近い感じだが、それを覚えさせるオ

リヤのトキに対する執着はやはり理解できない。
トキを殺害し、果たして色世時の姓名獲得に結びつく方程式が解けない。

「これから上階へ案内します」

待合室で会長を待っていたリデア、ケイノス、ギガントの3人を別所に案内する最中もジャンヌの心には分厚い雲がかかっていた。
そもそも色世時とオリヤアキを結ぶものは何なのか。名前に拘るあたりからヒントを感じるものの解答には程遠く、名前に起因する因果関係が何なのか、解けたところで2人を取り巻く周囲の関係も曖昧過ぎて真相に近づけない。

（名前、なまえ……オリヤアキ、シキヨトキ。
日本人？
折、檻、織、澱――もしや“漢字”にヒントがあるのでは？）

「おい、そいつは今どこに居る？」

協会本部――人工島の中央にある司令本搭の、更に中央に位置する多目的レーダー搭の作業用エレベーター内で、オリヤについて考えを巡らすジャンヌの心をミギスは覗き見て憤怒に声を震わせていた。

『え？』

直前まで平静を保っていたミギスを知る風魔術師：リデアと空間魔術師のケイノスは揃って間の抜けた発音をしてしまう。

誰が何処にいるという質問が、どうしてこの場で出るのか。考えられるのはミギスの――衛星千里よ呼ばれる――透視能力。読心術までこなすその眼が、ジャンヌの中に誰かを捉えたのだろうか。

「オリヤアキは会長室に居るんだな？」

「何だと！オリヤがここに居るのか！？」

追撃を掛けるミギスの言葉に今度はリデア、静寂を保ってはいるがケイノスも沸き起こる怒りに身を震わせた。

忘れるはずもない、反協会体勢組織：ナイトメア非武装派の若き指導者：マスターピースを死に至らしめた名前の人間がここに居るのだ。それも、この人工島の創造主の部屋に居ることがマスターピースの片腕だったミギスの千里眼によって確定し、魔術師２人に怒りの炎を点す。

「マスターピース様のことは会長を始め、多くのＳＲが遺憾に思っております」

「そんな言葉よりもそこへの行き方を教えたまえ！」

「それは会長との対話が終わり次第、許可を求めて認可されたのな

らそう致します」

「……どうして会長の部屋に居るんですか？」

声を荒げるリデアとは対称的に発せられた、低く沈んだ声がジャンヌに寒気を覚えさせた。

冷たい視線も覚え、振り返るとその先に居たのはベクター・ケイノス。

訪れたナイトメア非武装派3人の中で最も若く、また非武装派の誰よりも伸び代が大きいと噂される人物である。

「オリヤがここにいるのは会長より連行せよとの私に命が下り、それを遂行した結果です。

本来なら特別監視棟に監禁すべきところを、会長の特命で軽レベル尋問室に入れました。が、良くないことにオリヤはいとも簡単にその部屋を出て、しかも同室した全員を殺害しています。それにも関わらず、会長は自室でオリヤと対話をするという冒険に出ている最中。いつオリヤが牙を向くか不安でなりません。

これが私から言える今までの経緯と事実、それから個人的心境です」

「本当だな？」

「本当ですリデア様」

潮風の向きが変わる。

正面から吹き付けていた風は、気付けば背後から流れていた。

気の治まらないリデアの殺意と供に流れ来る風を背に受け、ジャンヌは漏らしたい溜息をひとつ、それから教えたくなかった事実を3人に伝えた。

「オリヤを発見する直前、協会（われわれ）の監視衛星が1基、消失しました」

「何だと？

そいつは……オリヤも、千里眼所持者なのか？」

「わかりません。

会長はそれを調べると言って自室にオリヤを招かれましたが、今のところなにが判明したというお話はあまり出ていません」

箱が減速を始める。

かくして4人の前で開く扉の反対側に協会長のバースヤードが姿を現した。

今更ながらもナイトメア3人にとって、会長が直に会うことを許可したことに改めて衝撃を覚えた。

そんな3人の前でジャンヌは言葉を失っていた。

レーダー塔に案内するように言われたものの、会長室を出たのは5分前であり、1分前に会長室へ連絡を入れてレーダー塔への進入許可を会長本人に確認したはずだった。数分間、塔の上で潮風と共に待機するであろうことを予測していた故に、珍しく神速の移動をなした“会長の本気”に驚きを隠せなかったのだ。

「ようこそ。協会本部へ」

笑みと共に掛けられた言葉。その真相を探らんとミギスの千里眼は光った。真相というよりも、オリヤの場所を覗き見ようと試みるが、そこは完全支配のＳＲ――普通なら遮ることの出来ない心を読み取る視線を、いとも簡単に断ち切ってしまったのだ。

（流石は会長と言うべきか……）

「そんなことよりも。さぁ、こっちだ。君達に用件があるように、俺にも君達に頼みたいことがある」

エレベーターを降り、潮風に風化を促進された金属の狭い通路を会長が先頭を切って進む。その後ろをミギス、ケイノス、リデアが順列して続き、僅かに距離を置いてジャンヌがナイトメアの３人を警戒しながら最後尾を務めた。

時計回りに続く階段を登った先はメンテナンス用の空間を兼ねた見張り台。

そこに禿頭の男がひとり、手足をそれぞれ組んで足元に敷いた莚（むしろ）の上に座していた。

（予知部隊のＳＲか）

「やぁ、敵の数は掴めたか？」

「駄目だ会長。私の遠視でも数隻しか捉えられない」

「そうか……わかった、ご苦労だった。下で他の奴の手伝いをして

やってくれ」

男が去るのを5人は見送り、ある程度距離が生じたところを見計らってミギスは会長に話を持ちかけた。

「俺のSR（め）で確認出来る敵艦隊は80。戦艦の数は大小合わせて千を超える。その中の1隻に――なるほど、こいつだったのか――裏切者（フォルトン）も見つけた。甲板で一般人と花火の準備してやがる」

ミギスの千里眼が伝える言葉の意味を解し、バースヤードは笑顔で右手を差し出した。

「花火か……なるほどな。
おし、まずは宜しくだ」

差し出された手を握り返したミギスは、許された会長の心に触れて真相を知った。

――会長はこの展開を既に読んでいる

しかし、読まれていたことに不快を抱きはしない。協会本部に乗り込んできたのはこれが目的であったの。

「では改めて、君達の用件を聞かせてもらおう」

「はい。私はナイトメア非武装派のミギス・ギガントです。
我々、現非武装派は――故マスターピース様の遺志に従い、また、マスターピース様以外の多くの同志による賛同を基に、今後は対四凶の旗を掲げると同時に、ＳＲ協会とは無期共同戦線を展開したい所存にあることをここに宣言し、宣誓します」

「あぁ、こちらも異存はない。協力を感謝する。
そちらの条件は協会の内部矯正だけでいいのかな？」

「それだけです。
そうする事によって次なる四凶らの“反乱／氾濫”を未然に防ぐ事も可能になってくるでしょう」

協会が東西と南の三方から包囲された日。
誰も夢に見たことのない、ナイトメアと協会の停戦協定が成立した。

「そうだな。その為にはまず、目先の大戦に勝利しなくてはならない。
早速だが、こちらの戦闘配備に従って欲しい」

「了解した」

協会本部に迫る四凶軍先鋒５億。
軍艦や武装した民間船を水平線の彼方に捉えた頃、ＳＲ世界の勢

力図は大きな変化を見せ、四方を敵に囲まれつつある状況の中で協会本部の士気は過去に例を見ない激動に熱を帯びた。
現在までに確認された四凶軍の総勢は約５０億。
対する協会は、ナイトメア非武装派と締結したことでその勢力を２万にまで拡張した。

「早速だがリデア、台風の準備をしてくれ」

いまここに、四凶軍が予想だにしなかった協会・ナイトメア連合軍が形成されたのであった。

第４７話－Ｒｅｄ　Ａｇｅ－（前書き）

人の世に生まれ、人を知り、人の時を生きる。

人を外れ、人の醜さを知り、人を様々に思う。

喜んだ始末、悩んだ結果、苦しみの先、とある仮説が生まれた。

悦楽を経て、苦悩に頭を抱え、絶望の淵に落ち込んでみて、とある結論が輪郭を現し始めた。

「人の生態が迎える限界が、ここか」

目の前で少女が暴れている。

破壊の限りを尽くそうとしているのか、何を考えているのかさえ分からない彼女を正しく理解してあげることは出来ない。

「生と死さえ曖昧になっている……」

一冊のノートを机上で焼き、一冊のノートをゴミ箱に丸めて捨て、一冊のノートを閉じ、最後にノートのタイトル記入欄に貼り付けていた付箋を剥がす。

“仮説Ｌｖ．４”

付箋の下から現れたタイトルを指でなぞり、視線を上げて暴れるオリヤに声をかける。

協会長：オウル・バースヤードは絶望の淵に立ち、最後になるやもしれない考察に頭を回した。オリヤのＳＲとは何か、という規模としてはあまりにも小さな疑問に……

第４７話－Ｒｅｄ　Ａｇｅ－

始まりとは些細な事象。
それに異を唱える人間は思いの外多い。
始原が小さいという人間は自分に酔っている人間だと、四凶は言った。

始まりは帰結への連続原始であり、事象の１つとして始まり。次へ次へと緩急自在に移り変わり、“完結／結果”を迎えて初めてひとつの現象と成る。

現象をサイズで考える四凶の彼女に対し、別の四凶は異を唱えた。

“大小に拘るよりも、現象（それ）全部を成功させる方法でも考えろよ”

言われた瞬間、彼女は溜息と共に青筋を額に浮かべつつ眉間を右手で押さえたという。

－ＰＭ　１５：２３　協会本部　会長室－

壁に掛かった時計が記す時刻に気付いたのは、会長が用事ありとだけ言って部屋を出て行く直前だった。
ここに来るまでに通過した灰色廊下の仕組みを知り、協会本部自体が大きなスクリーンのような物で覆われ、世界のどこかが迎えている夜明けの空を映し出していたことを知った。それはそのまま協

会長の道楽とも思える趣向を垣間見たような、異常を感じさせた不思議でもある。

なぜ、現実の空がオレンジの美しき彩を見せているというのに、どこの空かも分からない夜明けを頭上に映す必要があるのか。

痛みに歪む視界で、床についた手の上に汗が落ちていくのをハッキリと見る。

「あれが、絶対支配」

徐々に沈静化していく頭痛を体感しながらオリヤは、オウル・バースヤードというＳＲについて思考を始める。

絶命を恐れず、トキの来訪を断言し、頭痛の仕組みを教えてくれた。

どうしてか話そうとする内容を先読みするのに、微塵も嫌悪感を抱かせない。

前に出会った男とは別の支配力を持つ人。

『君の力は“否定”に近くもどこか違い、“神隠し”よりも純粋な破壊をもたらすが、それとも違う』

ならば、この力は何なのか。

額の汗を拭って立ち上がり、僅か残る頭痛に顔を歪めながら、破壊の爪痕が刻まれた会長室の硝子辺に立つ。そこから見下ろす海は

夕日に焼け、視線を手前に移すと金属の陸と凶器の群が目に入った。
いつの間にか朝焼けだった空には夕方が戻っていた。

『四凶に利用されているつもりか？　利用しているつもりか？』

落ち着いた頭に響く会長の言葉が、じわじわと心に厚い雲を掛け始めた。

欲しいモノはシキヨトキなのに、どうして四凶が関わってくるのか分からない。なぜ協会がシキヨトキを囲うのか理解できない。
邪魔な存在でしかない。
四凶も、協会も、シキヨトキの名を持つあいつでさえ。
取られたものを取り返すことの何が悪いのか。
どうしても返してくれそうにないから、殺そうというだけの話なのに。

どうして咎められなくてはならない？

『それが分からないうちは痛み続けるぞ』

会長は言った。頭痛は反動。
最初に教えてくれた言葉の半分は理解できたが、残る半分は理解が追いつかなかった。痛みが攻撃の反動なら、何故この反動は生まれるのか。そもそも何が原因で、何が痛んでいるのか。
両腕を持ち上げて掌を開閉する。
眼前のガラスを消し、吹き込む潮風に全身を晒す。

「なにが痛い？」

夕日を直視して目をつむる。

力を使ったのに反動が襲って来ない不思議。謎を抱き、初めて抱く遣る瀬無さに呟きが漏れる。

「全部、色世時のせいだ」

顔を濡らす汗と涙が混じりながらも、その瞳は再び燃えるような色で輝く夕日を捉える。盛る炎の如き怒りを思い出し、やり場のない熱に身を震わせた。

ーＰＭ　１３：５６　日本　白州唯一

芹真万全事務所のデスクで当社長はジャンヌと受話器越しの会話に頭を抱えていた。　内容は決して穏やかなものではない。

一週間ぶりに聞くジャンヌの言葉を、芹真は真顔で聞き受けていた。乱れかけた黒髪を整え、大きく深呼吸して姿勢を正す。

『それでは“受諾する”という方針で話を進めていいのですね？』

「ああ」

『それでは、改めて芹真万全事務所にミッションを依頼します』

無数の赤ペンチェックが入った新聞の上で拳を固め、コーヒーの入っていた紙パックを圧縮する。限界まで固めたところでゴミ箱目掛けて放り投げ、次にノイズの自重しないテレビ画面に目を向ける。海外のチャンネルが全滅していることを確認し、リモコンを操作して電源を落とした。

『現在、協会本部は四凶の何億という軍団によって包囲状態にあります。

四凶の軍全てを防ぐことは困難を極めます。本部防衛の戦力はどんなに掻き集めても2万程度。陥落した第1支部から落ち延びてきた者を含めても物量的劣勢は覆るはずもなく、圧倒的な敵の数量を前に士気の低下は著しく、時間が経つにつれて投降者が出てくるでしょう。

そこでまず、四凶の包囲網が完全に完成する前に敵戦力を削り、ある程度足止めします』

「決死隊か？」

『特攻を依頼するつもりはありません。

敵艦隊を叩き、尚且つ帰還できる人材が必要なのです』

「確かにその任務をこなせば、僅かでも士気は上がる。

ただし、失敗した場合は死期を早めることになるぞ」

『それを承知の上であなた方に依頼をしたのです。
敵艦隊は一般人多数とＳＲ極少数によって編成されており、一隻一隻の戦力はそれほど強力なものではありません。
あなた方にはこれらに対して攻撃を仕掛けてもらいます』

「分かった。それで？」

『この作戦のメンバーは２２人。芹真事務所から何人参加するかで最終的な参加人数が確定します』

「なら、俺とボルトの２人だ」

『哭き鬼と色世時は不参加、ということですか？』

「ああ。あの２人は参加させない」

理由を説明しながら机上の新聞紙を折り畳んで隅に退ける。ボルトが外出から帰って来たのは同時であった。
電話中であることをボルトに手話で伝え、ついでにコーヒーを淹れるように頼む。　笑顔で頷き、光の魔女は豆の缶を取りに棚の前へと移った。

「――というわけだ」

『では、四凶属性の深化を防ぐ為参加させないということで、途中参加を認めないことになりますが構いませんね？』

途中参加を認めないジャンヌに疑問を抱き、芹真は胸中を語ってジャンヌの心境を試した。

「……俺は、あの2人には四凶として誤った道を進んで欲しくない」

『はい。こちらも同じことを望んでいます。四凶問題は何者にとっても深刻で、また簡単に結論付けすることの出来ない難題です。発生を抑えられるのなら極力抑えて貰いたいです』

相槌を打ちながら芹真はボルトの差し出すコーヒーを受け取り、受話器を持ち直して聞く耳の左右を変える。

「もし、俺とボルトが失敗した時は……2人を協会で保護して貰えないか？」

『2人とは、風間小羽と色世時のことですか？』

（なるほど、いま協会での優先保護順位はトキとコハネが重要なんだな）

ジャンヌが真っ先に口にした名前にはこれまで一度も出てこなかった少女の名があった。

半年前と比べ、四凶やナイトメア、無所属ＳＲたちの状況が激しく移り変わったのだが、特にその中で四凶の属性を持つＳＲたちは、

その危険性を指摘されてブラックリストの上位へと食い込み始めていたのだ。それまで注目されることのなかった弱小ＳＲさえ、今ではリストのトップ１０に名を連ねている。

芹真事務所では、藍がそれに当てはまった。これまではＢクラスの注意人物でしかなかった彼女だが、四凶問題の深刻化に伴ってＡクラスブラックリストに移り、要注意人物と認定された。

乾きかけの口をキリマンジャロで潤し、ジャンヌに名の挙がらなかった藍の処遇を頼み込む。

「そうだ。

できれば藍もそうして欲しかったが、叶わないだろう。藍には戦地を与えて欲しい」

『何故？』

「藍の属性は、トウコツ。

深化する可能性も否めないが、彼女に破壊の欲望がないという結論が出ている。むしろ、人助けを進んで買い出る人柄だ。藍には命を守るために戦地に赴いていて貰いたい。うまくいけば四凶の属性を完全に消せる」

『……それは、仮に今回の任務であなた方が命を落とした場合、です。

縁起の悪い話はまた後ほどにしましょう。繰り返しますが、それはあなたが任務に失敗した時の場合です。が、今回選抜したメンバーは誰もが成功を約束してくれるであろう猛者ばかりです。

私の目に狂いがなければ作戦の成功率は不確定要素を考慮しても８６％です。失敗を想定することも間違いとは言えませんが、まず

はご自身が生き延びるために戦うという心意気で望まれては如何でしょうか？』

「あぁ、そうさせて貰うよ。いまの話は事務所員の保険だ。こんな俺でも一応社長だしな」

『心得ています。もし事務所の存続が危うい時は協会を頼れと会長も――』

「……分かってる。わかているから、会長の言葉だけは聞き飽きた」

毎日恒例、会長からの帰順勧告を丁重に断る。

最後にジャンヌから迎えのテレポーターを派遣するという話を聞かされ、細かい内容を了承したところで通話を終えた。

「協会は爆弾を抱えているみたいだ」

「え？」

受話器と2つ目のコーヒーカップが交差する。

啜られる、極度に熱いコーヒーと台に戻る受話器を交互に目で追いながら、ボルトの視線は芹真を捉えて注がれた。

「爆弾？」

「藍の話題の時点で話を切り上げたが、その辺りから焦りのような

ものを感じた。
ボルト、今夜協会本部の防衛任務を依頼された。行けるか？」
「うん！」

魔女が光を纏うのと同時、事務所の扉が静かに動いた。
それは芹真が望んだタイミング、ボルトが予知を外した瞬間でもあった。
扉の向こうには見慣れた顔が３つ、初見が２つ。
トキ、藍、高城。それから白髪の少女に気絶しているらしい男。

「よぉトキ、もう大丈夫なのか？」
「はい。それより芹真さん、聞きたいことがあるんですが――」
「ダ～メ。教えないよ」

デスクの前まで歩み寄ったトキに、ボルトは先制して禁を捺した。
見上げて薄ら笑うボルトに対し、トキは不機嫌の表情を向けた。

「おい、ボルト。俺が質問されているんだ。せめて内容を聞いてから否応を決めようじゃないか」
「だって、会長の秘密を教えろって言うんだよ？」

トキに続く言葉を高城が口にした。

――芹真事務所は協会長のどんな秘密を知っている？

現役協会所属ＳＲの質問である。

誰も知らない秘密を知っているからこそ、今日の芹真事務所はあるのだ。　短い期間でも協会に所属していた芹真事務所は、会長の秘密を知って協会を抜け出たという噂も一時だが囁かれていた。

「それを知ってどうする。会長に脅しでもかけてみるのか？」

芹真が高城を突き放す。

沈黙する妖精に変わり、哭き鬼が２人に食い突く。

「芹真、そろそろ私も聞かせて欲しい。

会長の本当の秘密。

歴史を覆す何かを秘めているという素性以外の秘密を――」

抑止の手が上がる。

デスクに着いたままの芹真が挙げた掌に、藍は言葉を止めた。

今一度、芹真はここにいる面子を確かめ、全員が本気でいることを認めた上でボルトに目線を送る。すると、光を纏った魔女は小女から少女の容姿へと変化を遂げていた。

ボルトも説明することをある程度認め、会長の危険な一面を話し始めた。

『仮説Ｌｖ．』

「かせつ……」

「えるぶい？」

「四凶も潰したがっているプロジェクトだ」

立ち上がった芹真がコーヒーメーカーの前に移る。右手のカップに、溜まった黒い液体を注ぎいで一口飲む。一息つき、食器棚から人数分のカップを取り出そうと歩む。それを手伝おうと藍も足を進めた。

「その計画を発動する条件は一切不明だけど、発動後に人類は激減か或いは死滅しているはずよ」

ボルト・Ｓ・パルダンの言葉を高城は認めることができなかった。協会とは異能力者による一般人への事件など、被害を防ぐために組織・体制化され、それぞれを管理・監視することを目的とした団体なのだ。

自らもそこへ所属し、何人もの人間を救うために貢献してきた。

それなのに、その組織のトップが人類を減らそうと目論んでいると、光の魔女は言ったのだ。今でも正義に最も近しき組織と信じているのに、芹真事務所は組織を危ぶんでいる。

「馬鹿な、本当にそんなことが……！」

「ある。
だから俺たちは協会に与さない」

「一時的でも協会に所属していたのは、会長の素性を暴くため」

カップを運んできた藍が芹真の言葉を裏付ける。

「退会する時に、私達は会長の親衛隊による追撃を受けた。これは、会長の秘密を芹真さんが掴んだからなんだ」

「それなのに、協会を抜けて数日後に会長直々によるカムバックコールだ。
高い地位と権利を約束するだの言われ、ヒーローズ以上の行動・戦闘の自由権を許可するとも言われた。
正直、かなり執拗に戻るよう言われている。因みに今日もその声があったんだぜ。ついさっきのことだ」

「何か変ね、それ」

それまで沈黙を決め込んでいたアリスが1歩、前に出て藍からコーヒーの注がれたカップを受け取る。

「キミは？」

「アリス・アンダーグラウンド。

ねぇ、協会の戦力ならこの事務所を潰すくらい容易いはずよ。どうして説得に切り替えたのかしら？」

「そこだよ。アリスの言う通り、会長は何かが奇妙なんだ。何か裏があるのは確実だが、解明に繋がりそうな手がかりが１つもないんだ。

いくら調べても経歴が出てこない上に出身地や本名、身内すら浮かび上がってこない。

年齢、血液型……性格類型すら不詳だ」

「でも、ほんの少しだけ収穫はあった。

さっき言った“仮設Ｌｖ．”には、とてつもない感情が込められていたことがわかったの」

「感情って――憎悪とか？　一体何を憎んでいる？」

その問に芹真は沈黙し、代わってボルトが暗澹な面持ちで答えた。

「人の世界」

「“仮説Ｌｖ．”は今のところ発動する気配はない。

だが、いつ発動されるのか、その計画の発動条件が分かっていない以上、四凶達が下手に刺激を与えないように穏便に物事を進めたかったが、衝突状態になった現状では理想の進行を計ることは最早不可能だ」

「だから今夜。協会本部の護りに行って来るの」

ボルトの発言に高校生3人が固まる。

「今夜!?」

「待って!いきなり出向いたら――」

「大丈夫だ。ジャンヌからの依頼で出向くんだ。予約は済んでいる」

唐突が高城に混乱を招き、藍に焦りを呼び込んだ。

四凶の行動に対して沈黙していた芹真事務所が行動する。それも、協会を助けようと動くのだ。協会にとっても予想外の動きなら当然、四凶からして見ても相当な驚異となる。

戦果を期待できると踏んだ高城だが、しかし――

「芹真さん。出発は何時ですか?」

「ねぇトキ。芹真さんからトキと藍を連れて行かない、って直接聞きたくないよね?」

再びボルトとトキの視線がぶつかる。

「今日はもう帰るといいよ」

向けられた笑顔を脇目に芹真へと移す。　カップをデスクの隅に

置いてネクタイを正す芹真は無言で首を横に振った。

「連れて行けないんだよ。トキ」

「何でだ？

俺は行かなきゃいけ――っ！」

瞬間、光がトキの首を絞める。絞られる筋肉が音を発し、内の流れに支障を生む。

光の魔女は締め付けたまま持ち上げ、潰さんばかりの勢いで顔面を天井に押し付けた。

「トキが殺すべき敵はキュウキじゃないでしょ？　それに、私たちは戦争をするために行くんだよ。未成年の来場はお断りします」

丁重に断っているつもりのボルトでも、顔面を天井に押し付けられ擦り付けられたトキは天井ごと破壊し、その断りを断固拒否した。

時間奪取と回復を同時に行う。

「キュウキなんてどうてもいい！　俺が会わないといけないのはコントンなんだ！」

「わかってる」

「うん。トキはコントンと戦わなくちゃいけない」

「じゃあ、何で同伴させてくれない？」

光が解ける。

着地と同時に一歩踏み出そうとしたところでトキは躓いた。一見解除されたように見えた光の拘束だが、実の所首元から足首に束縛場所を移しただけで、ボルトはトキを支配し続けていた。

前のめりに倒れ、膝から地面に接す。

腕を立てて転倒の衝撃を和らげるトキにボルトは伝えた。

「コントンは、私たちの予知でも捉えきれないＳＲ。だから、ここを空けるわけにはいかないの」

「予知出来ないというのは……それはどういう事だ？」

軽い困惑と恐怖に苛まれた高城が、トキの傍に歩み寄って魔女に質問した。

「別に、コントンだけに限った話じゃないのよ。

どんな千里眼所有者でも探知が難しいＳＲはいるの。　トキだってそうだし、コントンもその類。

いまハッキリと分かることは、協会を包囲している艦隊の中にコントンはいないということだけ。　だから、トキが行ってもあまり意味がないんだ」

世界に数人しかいない特殊な存在。
その代表格がコントン、メイトス、トキ。
そういった者達は高い確率で創造型のＳＲであり、あらゆる過去を踏襲する力と強大な四凶の属性を持っていた。

「原因は未だに不明。
どうして見ることが出来ないのか、心霊学者や哲学者達が一様に頭を抱えている。
協会の研究テーマでもあるくらいよ」

「常人と何が違うのか。具体的要因と言ったらＳＲの有無と、他ＳＲと比較した場合の特異性だろう。
しかし、トキと同じようにＳＲを持った学生だって存在するし、同レベルと言ってもいいＳＲを持ち、使い慣れている奴だっている。
世界に唯一という珍しいＳＲの持ち主もだ」

だが、それらの例を破って、トキを含む複数人のＳＲは予知の外にいた。

「特に異彩を放っているのがコントンとお前だ、トキ」

「俺が？」

「常に消えているわけじゃないの。
さっきまで予知出来ていたのが、突然消えるのよ。レーダーに映っていた影が何の前触れもなく消える感じ」

魔女の手が伸びる。
頭頂部に触れた温かい掌に、トキは抵抗をやめた。

「もしもの事態に備えて私たちの動きを教えるよ。
キュウキは協会の第1支部を制圧後、部隊を陸海空からそれぞれ大軍を協会本部に向けて放った。
陸路はロシアを通過して日本の北を通過するルート。それからフランスからオーストラリアへの直進ルート……」

「海路はイギリスからブラジルへの経由で向かい、ブラジルの湾口からそれぞれアメリカ行きと協会本部行き、オーストラリア行きと三方に分かれて進軍」

「空は？」

「……各国の空軍はまだ殆どが出撃前の準備状態よ。協会本部に最も近いオーストラリア空軍を除いて」

沈黙に彩られる芹真事務所内で、高城は声を失い、藍は目を伏せ、トキは立ち上がった。

「それで？
どうして一緒に行っちゃ駄目なんだ？」

「わからないでしょうね。だから今から教える。
私が予知夢で見たキュウキの進軍は、陸海空の洗脳行軍とは別に、

日本を目的として動く者たちを見たの」

「でもそれは夢だろ？」

「えぇ。予知夢、ね」

「……確率は？」

「今まで外れなし、というパターンの夢だったよ」

「そこでだトキ、藍。

２人にはどうしても護ってもらいたい人物がいる」

高城の視線を受けたトキの視線が藍へと注がれる。

それを止める藍には心当たりがあった。

「コハネね」

『コハネ？』

「病院にいる娘だ。藍に教えてもらえ。

とにかく、キュウキが小さな動きを見せている以上、こちらもそれなりの備えをしておきたい。ウチで狙われやすい人物の筆頭がコハネだ」

「そうね。ベッドから降りることもできないし……」

納得する藍を余所に、高城は同行を懇願した。

高城にとって協会は貴重なライフラインのひとつであり、長く所属した協会という組織は自分の家族も同然。その危機を見過ごすことに耐えられず名乗り出たのだが、ボルトはそれを否定した。

「ねぇ、妖精さん。
足手纏いを抱えたまま部隊が素早く動けると思う？」

「なんだって？　足手纏いだ！？」

「邪魔って言いたくないけど、日本には適材適所って言葉があるでしょ？
あなたの戦場はあそこじゃないの」

ボルトの襟元を引っ張る高城を藍が抑える。
激昂する妖精に変わってアリスが答えを聞く。適材適所に従い、妖精の戦場が協会本部の防衛でないとするなら、彼に適した戦場とは何処か。

「ロシア支部よ」

見守っていた芹真が頷く。　現在、協会のロシア支部は３００万四凶軍の猛攻に耐えている。四方から難を逃れて来たＳＲらを合わせても５０００人の防衛では制圧されるのも時間の問題である。攻撃開始から5日が経過しているが、その士気は本部の比ではないほど高い。

「本部を防衛する者達との決定的違いは、猛攻に対応できる精神力の確保が役割として確立しているからなの。
英雄（ヒーローズ）による圧倒的火力。サイキッカーによる遠距離攻撃の無力化。創造者による拠点内栽培での食糧確保、及び負傷者の修理。千里眼者による敵動向の予知に、計略看破。
でも……その中で最も肝心なのは、睡眠時間を守るＳＲの存在よ」

「睡眠時間を守る？」

「ボルトの言う通りだ。
高城みたいに他者の睡眠を促進させられるＳＲは、戦場の狂気で興奮した兵士を眠らせるのに重宝する。それが短時間でも、深い眠りなら精神的にも安定するし肉体の疲労も素早く回復させることができる。
分かるだろ？
催眠術を少しでも扱える君は、最前線に加わるよりも窮地での防衛を影から確実に支援すべきだ。ロシア支部が陥落すれば、四凶軍はそのままその地の戦力を奪い取り、協会本部の攻略に力を注ぐ」

「だから俺は本部に行くべきでないと？」

「別に。ただ、ロシア支部の健闘はそのまま本部の士気にも貢献できるだろうし、うまく行けば四凶を追い返せると思うからな」

「……そうか。言われてみればそうかもしれない……」

素直に引き下がる高城を見て、次はトキが質問した。
コントンがこの国に現れる予知が外れた場合は、協会本部に出向

いていいのか。

「どうしてもダメ」

「行かなくちゃいけないのに？」

「何をしに行くんだトキ。そもそもお前の本当の目的はコントンか？」

懸念は四凶にある。

トウコツがトキの属性であるのなら戦闘への参加自体許可できない。

コントンでも同様だが、しかしトキに選択を強要ばかりさせ、流れのままに流し放っておけばトウテツの属性を深めることになってしまう。

「みんなを助けに行くんです」

「皆ってのは誰のことだ？」

「人質のみんな、ですよ」「でも、本心では会長にも会いたがっているよ」

食いつくトキの心に魔女の目が光り、口が真相を暴露する。

これまで何度も厄介と思ってきたボルトの読心術だが、今日ばかりは堪忍袋の緒が切れかけていた。

「勝手に覗かないでくれ、ボルト」

「事実でしょ？
それともそうやって嘘を重ねてキュウキの属性を肥大化させたいわけ？」

魔女の言い分に返す言葉を失うトキ。そんな、真実に沈黙する少年を動かしたのは携帯電話の振動だった。

テレビをつけて海外の状況を確認する芹真と、それを眼で追う高城。

「もしもし？」

―ＰＭ　１４：５６　芹真事務所―

通話の相手がクラスメイトの大橋友樹であることを確認してから通話を始めた。

その通信でトキは――携帯電話から流れた大声と悲鳴を耳にした藍は、信じられない事態が学校で起こっていると把握した高城は――すべてを投げ出し、真っ直ぐに白州唯高校へ向かって走り出した。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第４７話－

－Ｒｅｄ　Ａｇｅ－

殺意が東の海に集中していることを感じ取れた。
長くこの世界を渡り歩いてきた者や特殊なＳＲらに、四凶と協会の激突が間近であることが光の如く伝わる。
メイトスにも、風間小羽にも。
あらゆる境界を超え、それを感じる者達は一様に願う。　協会と四凶の戦火が世界の過去の全てを焼き尽くさないように、と。

「これは……ああっ！」

五感は失ってもＳＲを感知する力だけは損なわない風間小羽が、

暗闇の中でトキを追った。
事務所から学校へ向かおうとしている。
それを見えない目で追い、向かう先でトキが遭遇する未来を見てしまった。

「そっちは駄目！」

重たい右腕を上げ、緊急用にと芹真に渡された携帯電話を取る。
指先の感触だけで通話ボタンを探し、これまで何度も繰り返してきたリダイヤルのコマンドを入力する。
通信先は“芹真携帯”。いつもなら3コール以内に通話ボタンを押してくれた芹真だったが、火急の今に限って通話の始まる気配が一向に訪れなかった。

「お願いトキ、止まって……」

何度も電話を掛けて芹真を呼び出そうとするが、どれだけ掛け直しても芹真は出ず、無機質な電子音だけが緊迫を煽った。
電源ボタンで切る。掛けなおす。
返ってくるものは通話中を告げる音ばかり。

「どうして？」

脳裏をよぎった未来は、明らかに予知のものだった。

これまでに何度も見てきたから間違いはない。
その予知の中でトキは戦っていた。
四凶になったばかりの、幼爪。
現実世界から第二の現実世界へ。
しかし、世界のもう1つを見てもその四凶に動揺はなかった。
むしろ、新たな現実と得た力の新鮮味に溺れて善悪と前後を忘れ、己が欲望にだけ従順な悪鬼と化している。
トキの四凶に悪く影響するものだ。その未来を飲ませるわけにはいかない。トキには私のようになって欲しくない。

もし、垣間見た未来が実現するのなら、それが意味するものは――

「自滅への生」

無数選択の有限化。

その恐怖に、一切が見えない今日の目を憎む小羽。
もし、この目が安定して万物を見ることが出来るなら、携帯電話の中に芹真以外の番号を登録しておけただろう。
もし、この身体があらゆる病を跳ね返しきれたのなら、真っ先にトキを止めに行っただろう。
しかし、それが叶わない。

芹真事務所に救われて数年。
庇護はもう、欲しくない。
欲するは自力での生。
叶わずとも願わずにはいられない願望。

小羽を知る人間は皆知っている。
他人の不幸を取り込んでしまう力。
完全否定のＳＲ、メイトスと対を成すＳＲ。

「誰？」

「ＳＲよ」

彼女を知っている者達は皆思う。
もし、自分の抱えている不幸を彼女（こはね）が全て持っていったら、不幸を失った自分は幸せになれるのだろうか。

――何を基準に幸不幸を判断すればいいのか？

だが、他人を不幸にしてまで自分が幸福になりたいとも思わない。
逆に小羽を幸せに出来ないかと多くのＳＲが考えた。

「メイトスさんのお知り合いですか？」

「……ええ」

真っ先に動いたのは芹真事務所。
癌を患った壮年の男からそれを引き受けた小羽は次に、視力を失った人々から暗闇を取り込んだ。
人狼は見るよりも臭いを嗅ぐことによって小羽の病気と、原因になっているＳＲを突き止めた。

「私を殺すんですか？」

「いいえ。困っているから助けに来ただけよ」

携帯電話を与えられ、治療法を探していると勇気付けられた。
芹真と話して世界が広がり、ボルトと接して元気と光を貰い、藍に触れて忘れかけていた人の温かさを思い出した。
事務所に護られている。
そのことに気付いて幸せすぎることの不幸を知った。　強く意識しなくても、他人の不幸を自分のものにしてしまう私のＳＲは、幸福に長く浸らせてくれない。
絶望、諦観、空虚。
何もかもが突然のように襲い掛かってくる。それは時に食事中、時に検診中、ひどい時は芹真さん達との会話中にやってくる。

「安心して。これでも一応協会所属だから――」

「特殊部隊、暗殺機構の方ですか」

何もかもを取り込む私の四凶は“トウテツ”の属性にカテゴリーする。
全てを食らう者。
人の不幸を食らう。その中にはＳＲという呪縛から逃れたく、力を放棄したがる者だっている。そういった望まぬ力さえ私は身につけてしまう。

「読心術まで持っていたのね」

「ぁ……すいません。これは、入ってきたものです。
それに、今日は目が見えなくて、よく――色々分からないんです」

「それで、トキをどうすればいいの？」

単刀直入に彼女は聞いてきた。
余計なことを聞かず、ただこちらの助けを呼ぶ声を聞いて馳せ参じたと言った。

「トキを四凶の人と戦わせないで欲しい。
彼が本物の四凶になっちゃう……」
「場所は教室ね？」

「はい。白州唯高校の3年3組です。場所はここから――」
「場所は分かっている」

声の発生場所で彼女の居場所がわかる。
目の前。
ベッドの前に立っている。
まるで氷を思わせるような冷めた声。

「相手の情報が欲しいわ。どんなＳＲ？」

離れようとする彼女に、私が予知の中に見たものを伝える。
白州唯高校の汚れた教室。
阿鼻叫喚の地獄。
必然の消滅。
果敢。
だが、無謀。
必死の抵抗も長くは続かない。
四凶は1人、その惨状をつくった者のみ。

「そのクラスの人が、四凶になっています」

そんな空間にトキは飛び込んで行こうとしている。
待っているものは過酷と残酷であることを知らず、知ることもできずに四凶へ走っている。

「学生が四凶になってしまったのね」

「はい、もう成っています」

その言葉を最後に、扉の前で彼女の存在感を見失ってしまう。
それだけで私には彼女のＳＲを理解できた。

（“否定のＳＲ”

協会にも居たんだ……）

完全に気配を消した彼女を思い出し、高度な否定の力を持つことを認める。

入室と退室の瞬間を知ることも出来ず――

何よりも、心を覗けていたにも関わらず、氏素性に関する情報を見ることができなかった。彼女が読心術に対して防御を行っていたことは明らか。

自らの情報を任意にブロックできる技術を持っていることが、どれだけ高レベルなＳＲなのか。

小羽がそれを知っているからこそ、トキを止めてくれるだろうという希望と同時に否定のＳＲへ多大な不安を覚えた。

街を抜ける。

「四凶が本部へ攻撃開始！？
分かりました。すぐに向かいます！」

道中で高城は協会からの呼び出しで警察署へ向かう。

「私はキョウたちに知らせてくる！」

アリスが色世家に連絡のため走る。
残る藍とトキの2人は、白州唯高校へと続く通学路を只管（ひたすら）に急いだ。

事務所で受けた友樹からの電話は助けを求めるものでもあり、同時に一切の呼び出しに応えるなという警告を含む内容だった。
途切れた通話から推測出来たことが幾つかある。まず何者かが学校にクラスメイトを呼び出していること、集まった級友は全て人質になっていること。次に、状況が悪い方向に傾いていること。怪我人という単語と男女の悲鳴が通話の背後から聞こえていた。

「藍、煙だ！学校の方！」
「急ぐわよ！」

――トキの相手はキュウキじゃない

ふと、ボルトの言葉を思い出す。

立ち上る黒煙の元に急ぎ、正門前で足を止める。　グラウンドを二分するコンクリートの道端は随所で砕け、真っ直ぐ伸びたその先で学生玄関が原形を失い、職員室の窓からは黒煙が溢れ、時折灼火を覗かせていた。玄関ロビーには複数の教職員だった者たちが転がっていた。それらを一見して全員が刺殺されたことに気付き、敵襲されたことと相手の武装が刃物の類いであることを理解した。

「二手に分かれるわよ」
「俺は教室に行く！」

ロビーで別れた2人はそれぞれ職員室と教室へ急ぐ。
往来に慣れた校内をトキは最短ルートで駆け抜ける。階段で三階まで登り、長く続く廊下に出て、その途中にある自分のクラスを示すプレートが視界に飛び込んだ。

（皆は無事か？）

祈りながら、1週間前の四凶襲撃を思い出してしまう。
クラスメイトの死。
指の数ものクラスメイトが消えた日。たった1時間にも満たない惨劇。
教室のドアを乱暴に開ける。勢いに震える戸硝子と、クラスメイトたち。
期待と現実が衝突する。
散乱した椅子と机が窓際に山積みとなり、色のある液体が床を汚していた。

「……トキ！」

一ヶ所に集まっていた級友たちから声が上がる。最初に名を呼んだコウボウを視界に捉え、次ぐように怪我人複数が飛び込んだ。

（全員が揃っているわけじゃないのか！）

教室の片隅には負傷した腕利きの面子が並んでいた。
全員と言うには人数が足りない。

クラスの全員が揃っていないことを確認し、誰が欠けているのか頭の中のクラス名簿と比較して検索する。　誰が欠けて居るのか把握する間に、少しでも状況を把握するために冷静を保っていそうな級友を探して質問した。

「これはどうしたんだ？」

意識を失っている桃山“正”委員長を介抱する木田村“裏”委員長は、トキの問いに無言で首を振った。その横ではクラス最強で通っていた岩井が、外れた右の肩と折れた腕の骨を自力と他力で押さえながら息を荒げていた。頭にシャツを巻いて止血している者、壁際で震える者、涙を流す者。　怒りに震える者。

「意味が分からないままだ、誰にもな……！」

男は立ち上がり、トキの眼前まで歩み寄った。全身に汗を浮かべ、何回転もして捻れた足を引きずって。

「佐野代（さのしろ）、その足――！」

「何でノコノコ学校に来た！　大橋から電話があっただろう！
これは罠なんだよ！俺達を訳もなく殺そうとしてる奴が居るんだ！
分かったら逃げろ馬鹿野郎！」

全力で食いかかる佐野代。
彼が自分を良く思ってないのは知っている。原因は言葉と現実のギャップ。

「何から逃げるんだ？
みんなはどうして逃げないんだ？」

「強がるんじゃねぇ……逃げたくないから俺はここに居るんだ。
それに怪我人放り出して逃げる人間が何処にいる！
クラスメイトを見捨てる奴はここには居ねんだよ！」

腕が伸びて予想通りの行動を取る。　襟元をつかんで手繰り寄せ、平手打ちが目覚まし代わりに打ち込まれた。
もう一発。
平と甲で打たれた両頬の痛みを堪えつつ正面から佐野代を見据える。

やはり彼も年相応の少年であり、同級生であることを思い改めた。
平手よりも遥かに激しく痛むであろう足の負傷に顔を歪める。血色の悪さはそのまま出血量の多さを示す。

「雑魚は引っ込んでろ……」

「……足手纏いは引っ込んでろ」

瞬間、集まっていたクラスメイト全員がトキに注目した。
異常によって崩れた日常の場所であった教室内。そこで初めて、多くの級友はトキの強気な発言を聞いた。
しかも相手は過去に幾度となくトキを打ちのめした男子。ジェイソンの二つ名で通る加減を知らない血の気の多い佐野代である。

「足手纏いはお前だろ。とっとと逃げろ――帰れよ」

掴んだ襟を放す佐野代に、トキは掌を突き出した。
若干の抵抗はあった。今まで自分を殴るだけ殴ってきた男に対し、まともに正面からダメージを伴うであろうアクションを実行するのだから。後に来るであろう報復が怖い。
しかし、1歩の勇気はある。佐野代を凌ぐ恐怖と痛みをこれまで体験してきている。それと比較すれば――

「ちょっと我慢してくれ」

「何だって？」

やっぱり怒っている。
ドスの聞いた声を閉目して受け止め、1拍の間を置いて拳を突き出す。
腹部。
背後では2人を止めようと複数人が立ち上がった。眠り魔の樋口や万年受け手の藤峰達、普段は自ら動かない面々が喧嘩を始めかねない2人を見て抑えようと慌てた。
普段動かなかった者達が動かざるを得ないほど、このクラスに残っている戦力は乏しい。普段なら喧嘩が始まれば我関せずと無視を決め込むのだが、今はそれもままならないほど切迫している。
怪我人を抱えているというのが最大の原因である。
佐野代のように外傷で重症であることが分かる者もいれば、桃山委員長やのように外傷が一切皆無でありながらも意識を失っている者もいる。
重症が7人。
そのうちの1人である佐野代に、トキは時間を打ち込んだ。
誰の目に留まることもなく――時間による創造と回帰――負傷した左足を復元する。
「あぁ？」
打ち込まれた拳に痛みを感じない佐野代は、不思議な感覚を抱きながらもトキの行為を倣って殴り返す。
（あと、6人！）

打撃に傾く視界の中で佐野代から視線を外し、外れた肩の激烈な痛みにもがく岩井に向く。
鳩尾に返ってきた拳に耐えつつ1歩踏み出そうとした、その時だった。

「やぁ、トキ。
やっと来てくれたんだね」

理解し難いことが目の前で起こった。
佐野代の居た場所に、それまで居なかったクラスメイトが現れたのだ。

「え――？」

ジェイソン佐野代こと佐野代勇司が姿を消し、それに代わって“ウィルス”と呼ばれる、彼女が現れたのだ。佐野代の繰り出した腹部への打撃、その姿勢をそのまま再現して。
予想外のタイミングで警鐘が打たれる。
あまり仲の良い人物ではないにしろ、クラスメイトが敵として攻撃を繰り出してきたのだ。
それも殺意を抱いて。

「類家香織――？」

刃が襲いかかる。
煌く凶刃の一撃を後退して躱しつつ、距離を取ってその姿を窺う。
右手にナイフ。
左手を鮮血に染め、満面の無邪気が彩るものは笑みと狂気。

３年３組　３５番女子（るいけ）　類家（かおり）香織。

学校指定の制服を赤黒く汚して立ち尽くす彼女が、確実に第２の世界に触れたことを実感させる。

「黒い欠片を頂戴。
じゃなきゃ、みんなを殺すよ」

瞬間、背後から４名の男子が類家に襲い掛かる。タイミングを計り、村越と多名中（たなうち）が左右後方、宮原と函音（はこね）が真後ろから、それぞれ必死の形相を着けて殴りかかった。
が、類家は１歩も動かず、笑みをトキだけに向けていた。
その時を見逃さない。
何が起こったのか、先ず理解しようと観察を試みた。

（避けない！？）

理解できない事態が起こっていた。
背後から迫った４人の攻撃は、確かに類家香織を捉えていたはず。

それにも関わらず一瞬後、トキは我が目、我が身を疑った。類家の立っていた場所に自分の身体があり、類家に襲い掛かった４人の攻撃が自分の背中を捉えている。

『くそ！しまった！』
「大丈夫か、トキ！？」

「卑怯だぞ類家！正々堂々と勝負しろ！」

背中に走る痛みを堪え、片目で彼女の姿を追う。
俺の立っていた位置に彼女が居る。
村越と函音の言葉から彼女がコレをやったのが初めてでないということが分かり、同時にそれが答えとなる。
この惨状をつくったのは、コイツだ。人間でなくなった類家香織だ。

「雑魚に用事はないよ。黙ってて宮原。
さぁ、トキ。
黒い欠片を頂戴。持っているんでしょ？」

「持っていない」

類家が消え、黒髪角刈りの宮原が現れる。

『え？』

（これは――！）

宮原と類家の位置が入れ替わっている。

警鐘の報せる方向へと身体を捻りながら右手にＬｖ．２：ＣＣで剣を作り出して握る。

背後でぶつかるナイフと畏天。　短い刀身を力で押し返し、左から右へ横に薙ぐ。

その斬撃を類家は両腕を後ろに回して受けようとする。剣筋は真っ直ぐ彼女の首へ。

彼女自身が剣筋に乗ろうと動くのを見て、トキは直前で斬撃を止めた。

抑止した彼女の行動は予想通りで、２人の立ち位置を入れ替えてしまう。

「もう気付いた。

やっぱりトキもこの力を知っているんだ！」

頚動脈の間際で止めた剣。それが入れ替わってナイフになる。

刃物を突きつけているのが類家。

首を晒しているのがトキ。

幸いだったことは畏天とナイフのリーチ差が開いていたこと。

横薙ぎに払ったところでナイフは首に届かない。

しかし、次の攻撃はどうあってもナイフの方が早い。喉仏を狙った右手ナイフの刺突。対する畏天はまだ身体の真横を通過して防御

に駆けつける最中。

「トキは何のＳＲ？
私はね――」

刺突を躱す。
上半身を捻って銀色刃に空を切らせ、手首を取って畏天の柄でナイフを握る手を殴りつける。

逆転。
２つの姿勢をそのままに、２人の人間が入れ替わる。
畏天を握る手を、類家がナイフの柄で殴りつける。

「ぐっ！」

「四凶だよ！」

感覚の麻痺した手から畏天が離れる。
右腕を掴まれたまま肘関節に圧力がかかる。
折るつもりだ。

「ふざけんな！」

肘が悲鳴を上げるのと類家が離れるのは同時。
２人の間に割って入った宮原がナイフの斬撃を受けながらも類家に猛進していく。
ナイフを持った類家――しかも、ＳＲに対して宮原は果敢に徒手空拳で挑んだ。

「下がれ！
こいつは普通じゃない！」

言って宮原は一度距離を取り、非現実的な脅威をトキに告げた。
同じ言葉をそのまま返すが、宮原はそれを素直に聞く人間ではない。

トキの言葉を半ばほど聴いたところで再び仕掛ける。
迎え討つ類家は、黒板の真ん前でナイフを前方に構えたまま。
しかし、目線だけはトキに向いていた。

（――しまった！）

類家の言動と行動に戸惑っていたトキは完全に出遅れた。
低速世界を展開するよりも早く、類家のＳＲに捕まり、意思とは関係なしに場所を強制交換されていたのだ。
ナイフを構えていたのは宮原を打つ為。
逆転した立ち位置が生む結末は、宮原の加速ストレート心臓打ちと、硬直しかけていたトキの右手が捉える宮原への設置顔面カウンター。衝突の衝撃はそれぞれを背後へと仰け反らせた。

「一瞬……！」

黒板が衝撃にたわむ。

類家が宮原を踏み越えてナイフを突き立てる。

止まれ。

幾度となく繰り返してきた時間停止と低速化。

一瞬だけの発動で斬撃軌道から身体を退かせ、反撃に用いる時間を黒板から奪う。

劣化した緑の板面をナイフが切り裂く。そこへ再度、武装解除を試みた。

黒板を切り裂いたナイフの刃を掴み、クロノセプターによる時間分解に処す。

「あれれ？」

消えた刃先に気付く類家が小首をかしげる。

僅かな危機感が彼女のＳＲを発動させる。

それがトキにとって予想外の力であった。

ナイフを無力化した類家に当て身を食らわせようとしたトキだが、瞬時に立ち位置が代わってしまう。それはすなわち攻防の反転。

必中の攻め手と直撃必至の受け手。

結果は当然、仕掛けたはずだったトキがダメージ。

（嫌な夢でも見ているみたいだ……！）

類家が連続した打撃を打ち込んでくる。

拙くも相当の威力を秘めたコンボは、佐野代や岩井以上に脅威であった。２人の攻撃が残撃のように一瞬の激痛を伴うものと例えるなら、類家の放つ打撃は毒のようなもの。重く響き、鈍く長く痛みを忘れさせない。

（夢を見ているみたい！　私が誰にも負けていない！）

加速する類家。

トキも独自の加速をかける。打撃を流して一瞬の静止世界にて打突。

喉仏を捉える親指と人差し指の付け根の感触は、始めて触れるクラスメイトだった女子のもの。

――クラスメイトへの攻撃が心を締める。

接触、逆転、衝撃、再衝突、逆転。

一方的に攻める者が、一切の攻め手を見せない者よりも深刻な状況に追い込まれる。　現実を崩す第２現実の世界。

ただのクラスメイトに目は向かない。向けるつもりがなければ向ける暇もない。

眼前の脅威は兵器を凌ぐ。

ＳＲ、四凶、私情。ここにある世界は３つ。現実と敵と自分。

攻撃、防御、逆転、一撃。

――夢想すらしなかった事態の中心に自分が居て、それを自覚した瞬間に彼女は笑う。

圧倒することの愉悦が外敵の圧力全てを無力化して、反撃を逆転し、退がる相手に対して一方的に攻めた。

トキの落とした剣を拾い、間断を与えない。

奔る畏天が肉体を切り刻む。必然の流血が床に新たな染みを作り、それぞれの制服を濡らした。

「トキの四凶は何？」

頭頂へと切りかかる畏天。

咄嗟に星黄を作り出して斬撃を防ぐ。弾け飛ぶ刃の破片に顔をしかめてしまうが、類家の斬撃は止むことを知らない。

「黒い欠片を頂戴！

そうすれば私がコントンさんと一緒に行けるんだ！」

連撃と逆転の果て、畏天は正面からトキの心臓を穿っていた。

時間による加速で行動しようが、彼女への攻撃は全て逆転されて意味を成さない。

静止世界での攻撃も、結果として彼女に残ればそこから逆転・反転が始まり、攻撃を与えた者と受けた者が入れ替わってしまう。

残る結果ごと、相手と位置を入れ替えるＳＲ：逆転。

純粋な殺意を孕んだ類家の目がトキを覗く。

視線を返しながらトキは、結果を逆転させてしまうＳＲの攻略法を既に見つけていた。

第４７話－Ｒｅｄ　Ａｇｅ－（後書き）

第４８話－崩壊感染源－（前書き）

喋る、聞く、現実となる。
聞く、伝える、嘘に変わる。

“また根も葉もないこと言い散らしてやがる”

無を有に。
噂を情報に。
霞に輪郭を。
知の無を有へ。

“一体如何なる根拠があって言い張るんだ?”

話す、教える、訪れる静寂。
知る、感想を求む、新たな世界に塗り替えられる。
感動する、“有る／在る”ことを報せる、傾く耳の少なさに自身を疑う。

“それ本当?”
“前のお話が嘘となってしまったので、私にはどうしても信じられませんわ”

人が言葉を信じられなくなったら、何に縋ればいいのだろうか。
初めはみんな、私のことを嘘つきと呼んだ。
１つの情報を、私１人だけが独占したくない思いがあってみんなに教えていただけなのに。持ち得ない情報を教えてあげることの何が間違っていたのか、それに悩んでいるうちに私は巷で嘘つきでは

なく“キュウキ”と呼ばれるようになっていた。僅かな期間だったが。

“外国の人が凄い形相で怒っていたな”

根も葉もない嘘とは果たしてどれか。

私は外国人と接した事もなければ、関わろうとすら思ったこともない。その上、本物の外国人なんて、中学校の授業で会った経験だけが当時の唯一。怒らせたこともなければ、喜ばせたこともないし、悲しませたことすらない。そもそも触れてなどいない。

“嘘つき”

“信用できねぇ奴だな”

“お前のせいだ……全部っ、全部失くしちまっただろうが！”

中学を卒業する頃、私のあだ名は3度目の変化を遂げた。

それは同時に親しかった全ての人との決別であり、善悪の全てを忘れ、ただただ話すばかりの自分に変貌を遂げた瞬間であった。何のために情報ばかりを仕入れる生活を送ってきたのか、何を思って伝えることに意義を見出していたのか、今では思い出すことすらできない。全て霞のようにぼやけ見失った真実。

何が嘘で、何が真実なのか。

もう何も考えたくない。

私が口を開いても信じてくれる人間はいない。

嘘をつく勇気なんて無い。余裕もない。

ありのままだけを話す。話そう。

何も考えず、聞いたままを伝え、知ったままを教え、私は何も脚色しない。

『いや、それは違うよ』

再び日常を取り戻せるだろうと予感した高校1年生の春。
高校生活で初めて私の“嘘／間違い”を指摘した男がいた。

『何が違うっていうの……え～と、君』

『確かにKO●Iのソレが映画化するって話は出ていたけど、製作費が馬鹿にならないって理由で製作中止になったんだよ』

きっかけはあまりにも些細なことだった。
得意げに話していた私を、影ほどの存在しか持たなかったソイツは静かに、しかし確実に挫いたのだ。

『何よ！たまたま情報が古かっただけでしょ！』

『ああ』

『――何？　教えてくれてどうも。でもさ、いきなり後ろから話しかけないでくれる？』

『わかったよ。気をつける』

そいつとの会話を端緒に、私のウィルスという名前がどこからと

もなく蘇った。

思い出したくない名前が、気付けば影のように付いて回るほどにまで肥大化し、気付けば私は類家香織と呼ばれるよりも、ウィルスの名で呼ばれることが多くなっていた。

全てを掘り返す原因を造ったあの男が悪いんだ……無感動で、中途半端で、引っ込み思案で、そのくせカラーコンタクトをいつも付けているような半端な目立ちたがり屋。喧嘩も弱い、勉強も平均以下。世事に疎く、書物とも縁遠く、気配りもからっきしなゲームオタク野郎。

それなのに——色世、時——私よりも信頼されているのは何故？

第４８話 ― 崩壊感染源 ―

全くの予想外に遭遇することが、最近は多かった。
学校での危険物採掘――ガス漏れ事件という話もあった。関連性の薄いクラスメイト同士がこぞって同じ内容の夢を見たり、桜色の雪を見たと妄言する者や遠足先での悲劇的遭遇。
ばらばらになっていくクラスメイト達。他のクラスよりも特殊な編成で在学を許された3年3組だが、感情の起伏を欠いた人間は数えるほどしかいない。
鉄面皮は1人。　面倒臭がり屋が1人。　無関心が1人。
現在3年3組の教室で目の前の光景を見ている者全員が我が目を疑った。
それまでどんな揉め事に対しても無関心に振舞っていたトキが今、集まっている全員の目の前で狂気に触れたクラスメイトの暴力に立ち向かっているのだから。

「――コントンさんと一緒に行けるんだ！」

類家香織が二色の剣を振るう。
トキの命を奪わんと攻め続け、反撃を一瞬で立ち代って躱し、ついにはトキから奪った剣を胸元に突き立てた。

「トキ！」

僅かに膝を震わせた宮原が類家へと突撃する。剣がトキを襲っている今なら武装解除ができ、それがトキの救出にもつながると考えての突進であった。が、類家のＳＲはその危機にしっかりと対応する。

トキと自らの位置を入れ替え、宮原のタックルでトキを吹き飛ばす。教卓に後頭部をぶつけるトキと、手首を挫く宮原。

「くっ！すまん！」

「宮原、時間を借りるぞ！」

攻略法を１つ、トキは見つけていた。

逆転による防御は後手が必須条件。

（類家がコントンとどこかで接触したのは確かだ！

問題は、類家が事の重大さに気付いているかどうか！）

両腕を開く。

それぞれの掌を開閉させると同時に、本物のＬｖ．３：クロスセプターを発動する。

Ｌｖ．１：時間奪取と、Ｌｖ．２：時間創造の両方を任意に発動させることの出来る空間を生み出す力がこれである。力加減で他人の心を読むことも可能となり、また、こちらの思考を伝えることもできる。

これの発動で宮原の時間を完全に停止する。廃工場を襲撃した３人を捕縛した時のように。同時に、僅かな時間を固まった宮原から借りて開いた穴を塞ぐ。

「ねぇ、宮原の様子が変よ！」

（銃刀法違反……）

（トキも類家もどうなっているんだ？）

（クソッ！俺にも今のトキみたいなスピードがあれば！）

「やめて類家ちゃん！」

（ウィルスの名を本物にするんじゃない……！）

（何でトキが戦っているんだ？）

（腰抜けだったトキが、しっかり戦えている。ということは夢か？）

（類家もだ。２人とも喧嘩するような人間じゃないし――）

（何だ？　あの白い球体みたいなのは？）

時間の止まったクラスメイトの様子に気付いた級友が声を上げる。

類家と色世の２人を交互に見回し、彼ら気付いた。学校の生徒・教職員から異世界と呼ばれる３組で、本物の異世界が展開されていることに。類家の凶行、そこにトキが加わったことによるある意味でのカオスが成立していた。

トキが乱積した机に触れて机が消える。

類家が剣を振ってトキを攻めつつ、再び動き出した宮原の攻撃を完全に避ける。

「止まれ！」

叫ぶトキに全員が困惑を示した。
大声が意味するものは何か。何を願っての発言と行動なのか。
全く先の読めない戦いを目の当たりにし、喧嘩が日課とも言える岩井は恐怖を感じていた。

「あれは、トキなのか？」

誰に質問するわけでもなく呟いた岩井の言葉に、多くの男女が同じことを考えた。

“トキの物理法則を無視した動きは果たして現実なのか？”

集団催眠術という言葉が複数人の脳裏に浮かぶ。が、しかし、負傷を負った者達は疼くその痛みに現実であることを知らされた。
認めたくない現実に諦観の印が上下に混乱する。認めたくない、認めざるを得ない。

切りつけ、剣を作り出し、突き、宮原に時間を分け与える。

（刺されたはずの傷が塞がっている！）
（何で？）
（え、どうしてどうして？）
（有り得ないだろ！どうなっている！？）

突然の轟音が鼓膜を震わす。室内に響いた銃声にほぼ全員が指や手を当てて耳を護ろうとした。

銃対剣。

トキが乱積した机から時間を奪取して作り上げた物が、マグナム弾を使用する大型自動拳銃。

大型の弾丸で刀身を撃ち、軌道を変えつつ持ち手に衝撃を伝えて武装解除を狙う。麻痺。

両手をグリップに沿え、引き金を絞る――2度目の衝撃を逃れようと、類家は逆転を使わずに大きく回避行動に出る。

教室の壁を44マグナム弾が貫く――穿たれた大穴と銃口に殺意を感じ取りながら、類家は剣を構えなおしてトキの腕に斬り掛かった。

躱して照準――射線に身体を乗せる。

咄嗟に銃口を類家から外すのと、位置が逆転するのは同時――直後、類家の斬撃がトキの脇腹を掠め、トキの銃弾はクラスメイト達の足元へと飛んだ。

「コントンと行けるだって？　それはどういうことだ!?」

「トキは行けないから欠片を頂戴！
それから消えて！」

デザートイーグルのフレームで星黄を受け流して照門が削り飛ぶ。

拳を打ち込むだけの余裕が十分にある腹部を目の当たりにするも、打ち込んだ瞬間に位置が逆転すれば類家の剣がこちらを貫くだろう。

「何処へ行く気だ！」

「何を言っても信じない人たちに教える意味なんてないじゃん。例えば――！」

マガジンを新たに作り、銃身も別物に取り替えたところで斬撃を躱す。

懐に飛び込んで肘を見舞おうとするトキの前で類家は他者と入れ替わる。

クラスメイト達の中に紛れる四凶。

「こいつとか！」

木田村委員長と入れ替わった類家は、木田村委員長の膝を枕に介抱されていた桃山（とうやま）委員長の肩に星黄の切っ先を埋め込んでいた。

鋭利を極めた剣先に触れて破れる皮膚の下から鮮血が零れ、僅かな呻きを周囲の悲鳴がかき消す。

「こいつとか」

委員長の次は、クラスで木田村委員長に次いで腕の立つ女子――額からの流血をハンカチを当てて止血していた春蘭穂（はるらんほ）が標的となった。

顔面に拳、平手。

倒れた春の親指を思い切り踏みつけて、最後に無傷の側の足に星黄の刃を入れる。

「こいつも」

男子、北島幸哉。
彼はトキといつも昼食を一緒にいただく仲の、クラス内対立において非暴力を徹底した中立派のリーダー的な存在だった。
見慣れた彼の姿に変化が現れる。四肢の損傷。
失った腕の口から流れるとめどない紅。

「こいつらも……」

類家香織が次々と入れ替わってゆく。
教室は紅の色を深め、所々に黒が生まれる。
1人の人間が放つ、蓄積された過去が周囲を焦がす。
止まらない彼女の怒りが伝播する。
憎悪が憎悪を生む悪循環の端緒。

「クロノセプター」

逆転と反転を繰り返す類家の肩に、北島幸哉（ゆうじん）の四肢を元通りに復元し終えたトキの手が触れた。

「類家は何を恐れているんだ？」

「……はぁ？」

逆転。２人の位置関係が変わる。
しかし、目線は互いを結んで離さない。
無言でにらみ合う２人だが、類家の先制によって静寂は破られる。
腕を引き、腸目掛けて突き出す鋭刃。
致命傷は必至。
だが、あえて躱さない。
切っ先が腹を捉えて内蔵をズタズタに裂き千切る。　その痛みに息絶えることは簡単だが、生かんと耐えることは至極困難であった。

剣が身体を貫く。
想像に絶する痛みに、一瞬で意識が飛びかける。
最初の極痛を耐え、続く激痛に顔歪める。
死ねたらどれだけ楽だったことか。
噴き出す汗が筋を作る。

「――――！！」

まるで電撃。
激痛が全身を駆け抜ける。
腹部に受けた刺突。受けが切り口に触れて更なる痛みを呼び、何度も意識を持っていかれそうになるのを辛うじて堪える。
そんな深刻なダメージをもらいつつ、デザートイーグルを握った手を類家の肩に置き、もう片方の手で星黄の刃に触れる。
クロノセプター。

時間を奪取して痛みを和らげる。
延命措置を施す最中に、類家は阻害を始めた。
負傷した腹部へと、手刀を傷口に見舞ってきたのだ。

「……っ！」

「私はいま、何も怖くないよ。
トキどころか、軍隊にも負ける気がしない」

押し殺していた悲鳴が口から零れ出てしまう。
顔色ひとつ変えず、類家の手が体内を探りまわす。傷口から迸る鮮血に腿を汚しながら彼女は苦痛に歪む表情を楽しんでいた。
クロノセプターで得た時間を回復に充てても、彼女の手が抑えようのない、触れるという攻撃を続けている。それが続く限り痛みを消し去ることは出来ず、反撃すらままならない。

「コントンを……裏――っ！」

細い指が臓物をかき回す。
五臓に触れるたびにこみ上げる嘔吐感と寒気、激痛。

「いいよ。私は何も信じていないし。
“そこ”へ連れて行ってもらうだけで良いの」

「ど――ぐっ！」

絡まる指が内臓を挟み掴む。
嫌悪感に大量の汗を吹き、涙が滲み、体の震えが抑えられなくなる。　呼吸さえ苦しく、激痛は意識を濁し、姿勢を保てという電気信号の往来に支障が生じる。
崩れ落ちそうな身体を類家は支え、更なる痛みを提供し続けた。
そんな彼女に触れ、クロスセプター。
接する類家が抱く感情の、哀怒の混色烈火が伝ってくる。　そこに見えた戸惑いと恐怖、それから巨大な虚勢。

「トキは消えて。
あ、その前に欠片の場所を話して。じゃなきゃ、他の人も死ぬよ。例えば、さっきのあいつらとか――」

立っているのもやっとな状態で全身の力を両手に集中し、もう一つのデザートイーグルを作り出す。
瞬間創造。
両肩に腕を乗せ、そこで生む大型拳銃２つ。内容は最大口径。
類家の死角で。
半信半疑で引き金を絞ると再度、爆音が教室内に木霊した。

その一撃は銃声の二重。　相手は銃声の大きさ・衝撃力を知らない女子高生。
一瞬の静止世界で引き金にかけた指が作り出した結末は、トキが予想していた通りの未来を生み出した。

・５０ＡＥ弾の炸裂音は、他の拳銃弾よりも口径のサイズに比例

して大きい。
聴き続ければ難聴を誘うに容易であろう音量を放ったデザートイーグル。
両耳の傍で爆音に遭った類家は、当然耳を押さえて踏鞴（たたら）を踏んだ。
体勢を崩して尻餅をついたところで逆転を始めるが、すでに類家の中に結果は残っている。三半規管の麻痺。立ち位置が逆転したところで耳の痛みや異変は残り続けるのだ。

「……おい、じっとしろトキ！」
「カーテン持って来い！」

類家が転げた場所――トキの現立ち位置はクラスメイトらの眼前。
逆転したトキは類家の代わりに地面を背にし、必死で駆け上がってくる激痛の波に耐えていた。それを見て駆け寄る級友と、頭を抑えて痛がる類家を取り押さえようとする級友たちが一斉に動いた。
しかし、類家は活動を停止したわけではない。

「傷口を押さえろ！」
「大丈夫か！？」

「クロス、セプター」

握られた手を振り解こうと、傷口に応急処置を施そうと近寄った級友達を止める。
ＳＲの戦いに極力巻き込まんと願った故の制止。
白色の半透明の空間に触れた者が次々と止まる。

「大丈夫だ」

床から時間を奪う。

傷に充てた僅かな時間で最低限の回復を終え、立ち上がって類家と視線を結ぶ。先に押さえにかかった宮原を躱し、樋口と多名中(たなうち)を斬り伏せ、村越を一蹴した類家の目は、怒りの純度を高めて大炎と化し、揺らめき盛っていた。強度の落ちた星黄を強く握り、耳を押さえて顔を顰(しか)めながらも殺意だけは絶やさない。

「みんな、逃げろ！」

両腕を開いたトキの肩に、近寄ってきた岩井が手を置いた。

何をする気なのか。

一切理解できない行動を続けるトキに質問しながら、傷ついた身体で不退の姿勢を示す。

「逃げろって誰に言っている？

ふざけるなよ。クラス最弱って言われるお前が頑張ってんのに……」

正面から飛び掛る宮原を躱す類家。

そちらに目を向けながらも、トキの耳は岩井の言葉を聞き逃すまいとよく働いた。

クロスセプターで空気から僅かずつでも時間を集め、それを岩井に送る。外し壊された肩に触れられた岩井は目を見張った。ありえない速度で回復していく自分の身体とそれを促進したであろうトキを交互に見回す。我に返って今度は類家へと顔を向ける。

「テヤァァッ！」

宮原がまたしてもいなされる。木田村委員長が床を転がり、多名中と村越が額同士をぶつけ、藤峰は腕に深い切傷を負った。

逆転と受け流し、打撃と斬撃。

トキに後れを取るまいと立ち上がった彼らだが、誰一人として類家を止められず、触れることすらままならない。

そんな光景を意識を取り戻した桃山委員長も立ち上がりつつ眺めていた。

「……組の乱れは、俺の統率力不足によるものだよなぁ？」

岩井とトキの目線を受けつつ、肩の切り傷による痛みを堪えて立ち上がる。夏使用の制服を破り捨て、拳を鳴らして類家と向き合う。

右の岩井、左の桃山委員長を見てトキは時間を集める。

傷を癒さなくては。

両手を開いたトキに、桃山委員長は言った。

「トキよぉ、お前凄いことができるじゃねぇか。

それでテメェの傷は治せるのか？」

「まぁ」

「ひでぇ汗だな。俺達の傷はいいから、テメェを治せ」

ＳＲを目の当たりにしても全く動揺しない桃山に安心し、遠慮なく頷いてクロスセプターを始める。

今度は岩井がトキに時間を与えようと言った。

「俺とミツルで時間を稼ぐ。お前ならあいつを止められるだろ？」

「あぁ」

「へっ、まさかテメェのクラスに異能持ちが居るとはな……行くぞ、岩井！」

２人が仕掛ける。

先に戦闘を展開していた木田村委員長らに加勢し、類家を抑えようと攻めた。

桃山は木田村と。岩井は宮原と。

やくざの息子と警察の娘、才色兼備と堅固不屈が四方から逆転のＳＲを囲む。

しかし、どれだけ集まろうと類家は押さえられない。その確信があるからこそ、トキは一秒でも無駄にしたくないと願い、必死に空気中から時間をかき集めた。

委員長達がどれだけ持ちこたえられるか分からない。ただ、長く

持たないことだけは理解できる。
いま、類家は怒りに震えている。
手中の剣で級友を切り捨てる可能性は高い。それは先ほどの態度で十分にわかる。類家は何の躊躇いもなく凶刃を繰り出すだろう。

（ごめん、数秒だけ頼む……）

目を閉じ、両腕を広げた状態で時間を収集する。
空気中から時間を得ることは難しいが、成功さえすれば物質から奪うよりも多大な時間を得られるという利点があった。速攻で時間を得るなら物質だが、時間量でいうなら空気の方が多い。
ただし、成功すればの話だ。僅かな集中の乱れがすべてを水泡に帰すことに繋がりうる。

「マイコ、下をやれ！」

戦闘開始すぐに桃山の声が上がった。
血の香漂う教室内、喧騒と悲鳴を背景にトキは時間の獲得を続ける。
失敗は許されない。暗闇の中で集中し、周囲に漂う確かな時間を掌に集める。

「うるさい！」

類家の声があちこちから響く。
逆転と移転。
対峙する者と入れ替わり、見守る者と入れ替わる。攻めと守りを入れ替え、本命を狙おうと剣を振るう。

だが、岩井ら8人が全力で類家を阻止した。
剣を落とそうと攻め、躱され、羽交い絞めにしても入れ替わり、視界に納めてもすぐ逆転して誰かと入れ替わって逃げられる。
だが、どんなに躱されようと8人は我武者羅に類家へと攻撃を繰り出した。
同士討ちさえ怖れず、怯まず、阻害を完遂する。
宮原を中心に岩井、木田村が武器を落とそうと掴みかかり、藤峰・多名中は押さえつけようと背後や足元を狙い、桃山ら3人は無力化しようと殴りかかる。

「うるさい！邪魔をすんな！」

暗闇の世界で類家の罵声を耳にする。

この瞬間、現実世界の中で類家は僅かな変化を遂げていた。　立ち位置の逆転。そこに僅かでも任意を含むという能力。

「何だ！俺の手に剣が――！？」

藤峰の驚嘆が集中力を乱す。
続いて殴打の響き。それから一拍置いて再び斬撃の空切り音、飛

来する冷たい液体。
集中を切らす要因が相次いで襲い来る。何が起こっているのか理解出来ないが、兎に角急がなくてはいけない状況になっていることは間違いないと焦る。失敗は皆の抵抗を無駄にすると思い改め、出来る限りの自分を落ちつけ、力を集めて時間を手繰る。
最後の収集。内臓の機能を修復して痛みを消す。皮膚・筋組織も必要分の回復を終え、手中に畏天を作り出して瞼をあげる。

十数秒程度押し殺していた雑念が一斉に乱れ蘇り――
類家の言うコントンの行き先、
皆は無事か、
助けられるのか、
委員長はＳＲのことを知っているのか、
類家のＳＲ発現はいつからなのか、
戦争には間に合うのか、
いま、目の前に居る彼女を落ち着けるには死ななければいけないのか？
――同時に開いた視界に飛び込む新たな鮮血飛沫に恐怖を覚えた。

「退がれ！宮原！」

十数秒間の暗闇から晴れた向こう、類家は８人中５人を完全に無力化していた。
木田村麻衣子が四肢の腱を断ち切られ、藤峰徹は後頭部を強打して意識不明。多名中豊は蹲って微動だにせず、村越貫二は顔面を赤色に染めて床に転がり、樋口四式は頚動脈を穿たれて止まっていた。
立っている３人もすでに満身創痍。宮原以外、岩井と桃山両名は

虚勢状態。

「馬鹿は退け！」

実質残っているのは宮原のみ。

類家が動く。

岩井の横に並ぶ宮原と入れ替わり、息を切らす岩井へと斬撃を見舞う。それを警戒していた岩井は膝を折って避け、余力を振り絞って一気に懐まで詰めた。

宮原も背後から迫る。

それを見越していた類家が岩井と入れ替わった。

不曲と呼ばれる宮原の攻撃パターンは一つ。そのパターンを見切った類家は、岩井の居た場所、つまり宮原の1歩先で隙を突くために構えていた。先端が打突を目的に膨らんだ星黄の柄。それが宮原の鳩尾に食い込む。

体勢を崩す宮原の後頭部に、跪く形で姿勢を崩した宮原の首を斬り落さんと星黄が唸りをあげて迫る。

「させるか！」

衝突する星黄と畏天。

滑り込んで斬撃を防ぎつつ宮原を突き飛ばす。

「いい加減に黒い物の場所を教えなさいよ！」

類家が歪む。
宮原と入れ替わって背後からタックルで組み付き、マウントポジションを獲得したところで再度の問い掛けがやってきた。
コントンと同じものを望み、コントンへの献上を目的とし、しかし――それでも、後悔を抱きながら虚勢を張り続けることで自分を保ち、混乱を自らへ誘いながら級友への攻撃を続けてもいる。

矛盾する意義と行動。
それの酷く忠実な実現。

「嫌だ、絶対に渡さない」

跨(またが)って剣を左腕に突き刺す類家を目で捉える。畏天を彼女に受け止めてもらうように低速で振る。その間、感覚が激痛の熱で麻痺している左手を力いっぱい開く。
手首を掴んで畏天の斬撃を止める類家。
その目が自分だけを捉えていることを認め、認め返し、掴まれた右手から畏天を解放する。両手が開いたところで彼女は射程内に存在した。
逃げ道はない。逃がすつもりもない。
手放した畏天に違和感を覚えた類家の目が見開く。だが、次の移転を始めるよりもクロスセプターの発動が早かった。

「こんな、どうして私が――！」

刹那、白い空間が2人を包む。
明確な攻撃が来るわけでもなく、結果として痛みを伴う攻撃に過剰反応する類家香織のSRは、トキの痛みを伴わない時間制止から逃れることに失敗した。一瞬の迷いが逃れられたであろう僅かな時間を見送ってしまった。

“どうして、私が？”
“何で誰も騙すつもりなんてないのに”
“私が黒い欠片を持っていけば……”

トキは返す言葉を失いかけた。
犠牲者、それが類家香織の四凶から受けた影響。

“間違っていただけなのに、うそつき？”
“騙してもいない外人からキュウキなんて呼ばれるのはどうして？”
“うそつきなんて呼ばないで……呼ぶな”

クロスセプターが彼女の言葉を拾う。

“どうして気持ち悪いトキの方が信頼されているの？”

同情することもなければ、憤怒を抱くこともない。
類家の質問はトキ自身にも解けない難題だった。
人の信頼度というものは自分で設定することのできないステータス。他人と触れ合うことによって初めて生まれる繋がり。

『色世、時――私よりも信頼されているのは何故？』

『ごめん類家。

それは俺にもわからない』

完全停止の一瞬前、極低速時間の中で2つの精神が交流した。
心と心が作り出す夢層の入り江に、2人の魂は反映する。
あらゆる殻を取り払う、クロスセプターが生み出す空間の一つ。
その中に類家を連れ込んだのはトキの意思だった。

『コントンとは仲が良いのか?』
『……私を利用しようとしているけど、私のことを信じてくれた人』
『利用?』
『そうだよ。私は見たの。あの大きな影』
『それは一体?』
『あの大きな影が何かはわからないけど、知った以上後戻りは出来ないって言われて……でも、嫌な感じがしたの。あの影は触りたくないくらい大きくて、冷たくて、永くて、深い』

交わる2つの心が形を成していく。裸体に近い形状の精神を構築し、類家香織の心に残っている背景が2人を包み始めた。

オレンジ色の空。
空高くにある塔の天辺。
そこに存在する黒く大きな影。
強風に前髪が揺れる。
類家の髪留めが攫われる。

『これは！』

『これがコントンさんの目的。この影を動かすためにトキの持っている破片が必要なんだって。これが動けば世界を一瞬で変えることが――人間を根絶やすことが出来るん切り札』

かつて、夢で見たことのある光景にトキは固まった。

類家は自分の中に留めていた情報のすべてを吐き出し、その内容が示そうとしている狂気に震えた。両腕を絡めても震えは止まらない。

『そんなに怖がるなら、どうしてコントンに破片を渡そうと？』

逆転。

『私のこの力なら、コントンさんを止められると思って……』

『それだけの理由でクラスメイトに手を挙げたのか？』

『だって、私が言っても誰も信じてくれないんだ！

それとも私と違って力を持っていない人を連れて行って、コントンさんを倒せると思う！？　やらないと皆殺されるかもしれないんだ！学校も家族も友達も、皆死ぬかも知れないんだよ！

他に誰がやるのよ？　誰に頼めばいいの？　信用ない私が誰にどう頼めばいいって言うの？』

『確かに信じないかもしれないけど、でも――お前のことを認めている奴はいる。
それに口先だけで類家は信用できない、って言ってる奴がほとんどなんだぞ。
お前はそいつ等を知っているか？』

『――嘘でしょ？』

『嘘なんかじゃない。
俺のグループだとコウボウ以外、お前のことを嘘つきだとは思っちゃいない。マイコ委員長もそうだし、ヨシキなんかお前の話をラジオ並に楽しんでいたこともあった。』

景色が夕焼けの空から暗色灰色のトンネルへ変わる。
記憶から心境へと変化を遂げたのは、類家の動揺が原因だ。
暗い石造りの構内は漏水が壁を濡らして寒さを感じさせた。冷たいコンクリートに拍車をかけて冷気を連想させるトンネル。奥へ行くほど暗さは灰から闇へと近づく。
類家の背後の明かりと、今日を境に奥へと続くトンネルの明るさは火を見るどころか火が欲しくなるほどに暗く窄んでいた。

『それにこんなこと言っちゃ癪かもしれないけど……類家の力でコントンを倒すことなんて不可能だ』
『何で？　どうしてそんなことが言い切れるの？
それじゃあ、皆と別れる為に力を振るった私の努力は無駄だっていうの！？』

『それが間違いなんだよ。

どうして嫌われて離れようとするんだ？』

怒りに輪郭を揺らめかせるトキ。
漂う嫌悪感に一歩後退する類家。　ふと、

『……なにコレ？』

類家はトキの背後に見るコントンの素顔を見た。
それは自分の知るコントンの腹黒い笑顔とは段違いで危険な本性。
桜色の雪のようなものが舞う中、トキの記憶である映像が目まぐるしく動く。攻撃の一切を無力化し、時間と銃器を用いて嬲り殺しにかかる。　一瞬での移動、停止時間中を動く自由、何処からともなく取り出す銃器。
類家は言葉を失った。自分の挑もうとしていた相手が予想の遥か上を行く凶悪な人物だったことち、それに挑んだ自分がどんな風になっていたのかを想像して。
万に一つも勝ち目はない。

『コントンは俺が必ず倒す。その代わりに協力してくれないか？』

『協力？　どうして私にそれを言うの？
北島や大橋に頼めばいいじゃない。仲がいいんでしょ……』

『仲が良ければ頼めるってわけじゃない。
ハッキリ言っておくけど、今の君はクラスで1番に強い。だから――』

『だから何？　トキの代わりに何かしろって言うの？』

頷く男に彼女は首を横に振る。

『正気じゃない……そんなに戦いたいわけ！？
確かにコントンさんは悪い人だけど、でも、どうしてあんたが出しゃばる必要が――！』
『ある。
俺がコントンに会わなければ、クラスの皆が殺される』

『みんなが？』
『頼む。あんなことをした後だろうけど、みんなを護って欲しいんだ』

『は……あは、無理に決まっているじゃん。私はもう樋口とか殺したんだよ？』
『いや、殺していない。
聞いておきたいんだけど、首にナイフ入れただけで殺したつもりでいるのか？』

『普通死ぬじゃん！　何？　頸動脈を切ったのに樋口は生きているっていうの！？』
『ああ。俺が治した』

飛び血で濡れた教室の光景が背後に浮かぶ。その中で、鼓膜を銃声に打たれた類家が血眼でトキに向かってくる光景が鮮明に映し出

される。負傷した樋口や村越を最優先で延命しながら類家を躱す場面が来る。絶命寸前だった樋口を辛うじて意識不明状態にまで持って行き、昏睡しかけていた村越を軽い気絶にまで回復した。

『すぐに目を覚ますはず。
それに、類家は嘘つきじゃない。さっきから聞こえてきた声の中に少しだけ知っている名前があった。お前は四凶達に利用されていたのかもしれない』

『利用？
私をコントンさんが？』

『類家、覚えておいた方がいい。
いま俺達の敵は四凶って呼ばれる奴らだ。
コントンもその1人。
キュウキもだ』

『キュウキって、それ……じゃあ、私は四凶の奴らに嵌められていたってこと？
でもどうして？』

『詳しくは分らないけど、過去にどこかで遭遇したのは間違いないと思う。
そうだ！
こういう条件はどうだ？　俺が証拠を持ち帰る。その間だけクラスを護る！』

景色が変わる。

一週間前の遠足先。その惨状、その直後に。
アレを繰り返さないための決意がそこに現れたのだ。

『証拠って、どうやってよ？
トキが？』
『あぁ、どうにかする。
これから四凶のいる戦場に行けると思うし、俺も四凶の奴らに用事があるし』

『……クラスが人質、っての？』
『他にもある』

類家の視線を追い、自分の心像が映すものに注目する。　四凶による攻撃が始まる前の茶会。
協会長、メイトス、魔術師2人、マスターピースという一勢力の指導者。その中に混じる自分の無知は鮮明に覚えている。マスターピースの警告も、会長の告白も。

『頼む！』
『やっぱり無理だよ。
私はあんたのことが嫌いだし、それに皆に酷いことしたばっかりだし』

再度、背景が変わる。

何度目の変化か覚えていないが、類家にとって今度の映像はあら

ゆる意味で衝撃だった。
そこに映っているものは、色世家・2階・トキの部屋・ゲームプレイ中とういもの。

『なぁ、類家。
お前が俺にムカついているのはいいけど、自分の間違いを償おうっていう気はないのか？』

ゲームしているトキと、真顔で説教を始めるトキを見比べてしばし回路がフリーズする。

『引きこもりのゲーオタ野郎』

『悪かったな。でもさ、そんな引きこもりでゲームオタク野郎の俺から一つ言わせて欲しいことがある。
類家さ、お前逃げすぎだよ』

『ゲーム中毒者に言われたくねぇ……』

背景のトキがコントローラーを放棄する。
立ち上がってパソコンの前に移動し、攻略サイトの名前で検索を始める。が、マウスのポインタをサイト名に当てたまま数秒思考し、最終的にデスクトップの電源ボタンを押して再びコントローラーを手に取り、自力での攻略を再開した。

『お前、何か最後までやり遂げたことはあるか？』

『うわぁ……真顔で聞いてるし。
無いけどさ、トキはあるの？
まさか、ソレとは言わないよね？』

『俺のは良い例じゃないかもしれない。
でも、おかげでゲームでクリアできない物はない。発売中止と糞ゲーの極み以外。
大抵のゲームは最高難易度で全部クリアしたし、縛りプレイも一通りクリアした。
わかるか？
たかがゲームだけど、世界の一つは極めているんだよ』

『きめぇ……』

全力で逃げ出したい衝動に駆られる類家だが、ここまで真剣なトキを初めて見ることと、そんなトキを言い負かしたい衝動に心揺らいで足は後退を選ばない。

『ゲームなんか極めてどうすんのさ？　それが世界？　随分ちっぽけな世界だね』
『あぁ。籠っている間にその小さな世界を征服してみた』

青筋を抑えて背景として動くトキを一瞥する。

『学校サボって自分の世界ね。それでよく今まで生きてこれたね。
こんな奴に負けたなんて……』

『あのさ、ここ精神世界みたいなもんだから丸聞こえだぞ。
それにお前また言い逃れしようとしてないか？』

『言い逃れ？どうしてそうなるの？』

『俺でも気付けて、他人に言われて改めて納得した人生の攻略法がある。
“一つでもいいから何かを極めろ”
そうすれば未来の見え方が変わってくる。類家ならうまく皆と打ち解けることだってできたかもしれない。本当はそう言いたかったんだけど、聞いてくれないかもしれないから遠回しに話してみたんだ。逆効果っぽかったけど』

『……本気で私に皆を護ってくれって言いたいの？』
『本気だ。頼む。1、2日でもいい。お願いだ』

ブラックアウトする景色と、土下座するトキ。
しかしよく見ると背景は黒一色ではない。仄かな白色を含んでいる。

『……そこまでする理由って、何？』

次に目に飛び込む背景は敗戦。
流れ始めた映像はトキの敗北の数々。

独りの生活、暗い日々の合間に挟まれる生死を分かつ程の敗れ方。学校で悔しさに震え、家で孤独に耐え、新たな出会いを経て更に敗北を重ね、遂には死亡する。

だが、生き返る。トキを殺さんと多くのＳＲが現れ、しかし殺めんとするＳＲも増え、敗戦は増す一方。ＳＲと学生の両面を持つことで悔しい思いをする日々が増し、それでもゲームで精神を安定させることによって乗り切る。

『友達の為だ。でもそれは、誰か一人を護ればいいってわけじゃない』

ＳＲという世界に触れて視野が変わった。類家もその感覚を知っている。まだ己の内に蟠(わだかま)っている。

画面が目まぐるしく動く。　雨に濡れる駐車場、人で埋まった校庭、燃える飛行機内、朝焼けの街、屋上での対峙、月光に浮かぶ更地での戦い、粉塵舞う廃工場。

全てトキの記録。

『友達のため』

打ち明けられた敗戦の中に自分との共通点を見つけ、鼓動が一つ、大きな波を立てた。

『友達の現実を護りたい。俺はどんな罰でも受ける。だから頼む。皆の“現実”だけはできる限り拡張したくない』

『そうだね……いいこと無いもんね。
私よりも強い人が出てきたら嫌だし』

例えば腕力。それで言うなら類家はトキに勝てる自信すらない。
知力でトキに勝っていようとも、クラス・学年の中で見れば中間程の能しかない。

『悔しい……私がトキ何かに説得されるなんて。
いいよ。クラスの皆は護るけど、代わりにお願いがあるの。これは大事なことよ』
『何だ？』

『現実で私を許して欲しい』

『都合よく許してもらえると思う？』

『全然……だからお願いしているの。
こんな頼み方も色々癪だけど、クラスを護るためにはまず――』

『クラスの全員に許してもらう必要があるな。
類家がちゃんと謝るって言うんなら俺は手伝うよ』

『コイツ本当に大嫌い……ねぇ、どうして助けてくれるの？』

『いや、だって困っているだろ？　それを助けるってだけだよ？』

『世間じゃそれをウザいと……あ～もう、参った。降参よ降参！

絶対に謝るんだから！
もう、こんなことしないんだから！
だから今すぐ消えてよキモオタ野郎！』

さまざまな思考の果て、類家は謝るという口約束を結んだ。
そこで限界が来た。
火山が周囲で爆発する。
噴火口から剣やら銃やら飛ばし、震える怒りを熱き血とマグマの混合で爆発させた。

『こいつは反省と前進を知らないのかな？
分かった。じゃあ、先に現実に戻っている。数分したら元通りに動けるから、ちゃんと謝れよ』

『うるさい！余計な御世話だ！』

トキが形を崩して行くのを睨み続け、目に寄った皺を掌で覆う。
一斉に込み上げてくる悔しさを堪える中、類家は遺恨と同時に安堵を覚える自分に出会った。

『あいつ、何で私のこと信じるんだ……』

極超低速の世界が解け始める。
心像を映す空は闇となり、瞬間的に映像が横切って行く。
トキの見てきた世界と自分の内にある世界が比較を始め、如何に

自分が過去を引きずっていたのかを思い返す。

『図星な私が悔しい』

トキに家族は居ないに等しく、学校ではとても低い地位に格付けされている。オタクや引き籠りと罵られても、動じていないようで我慢し続けている。誰にも話さず、すべて一人で抱え込んできた。

しかし、その先は私と違う。一人で抱え込みながらも解決を目指してきたトキに比べ、私は行動を起こすことがなく、解決しようと志したことすら稀。目を空押して次へ次へと振り返らずに突き進んできただけ。

何も解決していない。

そういう意味では確かに逃げ続けている。さっきもそうだ。

だからこそ、目が覚めたら“トキに行動でモノを言わしてやる”その為にもまずクラスの全員に謝らなくてはいけない。

逃げてる、なんて二度と言わせないために。

私がつきたくて嘘をついていないことを知らしめるために。

類家香織が星黄をトキの喉元に向けたまま微動だにしない。

戦闘を見守っていた誰もがその光景に目を疑った。先ほどまで忙しなく入れ替わり、立ち代り、殴り、蹴り、斬りかかっていた類家が、石像のように固まって動かない。

そもそも、先ほどから連続している事態は現実なのか。そのいち

いちを頭で考えている人間はもちろん、ある程度さばけた頭を持っている者でさえ、2人の対決を完全に理解しきれる者はいなかった。見せつけられたどれもが現実の範疇を大きくはみ出している行為ばかり。

怪我人を癒し、触れた机や椅子を消滅させ、何処からともなく取り出した銃刀、瞬間的な移動。化学的証明が不可能なことばかりを実現させていた2人。

完全に静止した類家と、いつの間にかマウントポジションから脱出し、黒板の前まで移動していたトキを追う。

トキの左手が黒板面に触れ、接触面を中心に黒板は大きな音を立てて崩壊を始めた。それはまるでガラス細工のよう無数の破片と化した。

「どうなっている、トキ」

廊下側の壁に背を預けた桃山が聞くと、トキは無言で頷きながら立ち上がり、再び両腕を上げて拳を開閉させる。

散乱した黒板の破片や周辺の物々から時間を集め、クロスセプターの範囲――白く透いた空間――を頭のなかで教室いっぱいにまでイメージし、現実にそれをフィードバック。全ての怪我人を範囲内に収めたところで白色空間内で余時間の回遊を始める。警戒する級友に大丈夫だとだけ伝え、怪我人を最優先で治療した。

（これがＳＲってやつか……）

感触を覚えさせるような時間に触れ、白い空間の中で桃山は傷が塞がっていく様を目の当たりにした。

「トキ。お前はいつからこの力に？」

「委員長は、ＳＲを知っているのか？」

多くの人間がトキと、ＳＲという存在を知る桃山委員長へ視線を注いだ。

「俺は知っている。
おっと、勘違いするなよ？　俺自身はフツーの人間だ」

「そうなんだ……俺は去年から。
どうして委員長はＳＲのことを――」

「やいやい！さっきから聞いていれば第2だ、現実だと、一体何の話をしていやがる！
それはコイツとも関係ある話なのかよ！？」

不曲の宮原は頭の出来も大変シンプルでストレートな発想の持ち主である。
やくざ委員長相手に謙ることもなければ恐れを抱くこともなく、聞きたいことだけを必要最小限の態度に示して問う。

「“ＳＥＣＯＮＤ　ＲＥＡＬ”
直訳して第２の現実。俺も詳しくは知らねぇ。
ただ、祖父がそれの古株なもんでな。たまたま親族にそういったのが居るってだけの話だよ。　まさか、俺のクラスにも居やがったとは夢にも思わなかった」

「家の人がそうなのか……」

「なんか協会がどうこうって所に所属しているが、トキはわかるか？」

今度はミツルがトキの答えを待った。
そういう界隈があることは知っていても、ミツルはそれほど関心を抱いていなかった。しかし、トキと類家の話を聞いているうちに興味が湧き、現実に自分のシマに被害が出た今、そちらの世界の事情というものにも何らかのパイプが必要であると悟ったのだ。戦闘中に往復した言葉から、色世トキというクラスメイトは自分よりもその世界に詳しいとも気付いた。

「協会所属のＳＲなのか？」

「詳しかぁ、わかんねぇけど確かそんなこと言っていた気がする。英雄がどうとかも……」

ヒーローズ。
その中に桃山と似た苗字の人物がいたか、必死に思い出して照らし合わせる。芹真事務所でヒーローズのリストを見せてもらったの

は何週間も前のこと。当然ながらすぐには出てこなかった。

「何だよＳＲってのは！」

教室内で響く宮原の言葉にトキは足を止めた。
どう説明すればいいのか。
それだけに悩んだ。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第４８話－

－崩壊感染源－

多くの級友が見守る中で、真新しい傷口を僅か数秒で完全回復させてみせる。

時間の取り扱いに慣れてきたトキからすれば当たり前のような行動だが、それを目撃した殆どは驚愕に言葉を失った。切創、骨折、火傷、銃創等、トキはあらゆる傷を自らの身体に刻んでは治し、言の葉ではなく実で演(の)べる。高校生ともなると個々の治癒能力をある程度理解し、計算できるようになるものだが、3年3組の多くはそう言った常識とは到底言えない、現実離れした現象を目の当たりにしたのだ。

「ありえない……」
「そういうのがSRなのか？」
「つまり、ちょっとお得な力を持っている、みたいな感じ」
「傷が無くなっている」

教室内は異常な空気に包まれていた。トキを囲う者達、停止した類家を依然警戒している者達。

トキの施した時間による治療で怪我人は居なくなったものの、精神的安定を取り戻せない生徒や佐野代のように未だ教室に戻ってこない生徒が懸念となっていた。それでも元気を取り戻した何人かを見て僅かな安堵の息が漏れた。

しかし、冷静に考えてみるとこの環境へすでに適応を始めているクラスメイト達は明らかに他の学年やクラスの生徒達とは違う。

「何をしていたんだトキ？」
「どうしてそんな力を手に入れたんだ？」
「まさか、犯罪に使ってはいないでしょうね？」

冷静すぎる分析は、むしろトキに夢でも見ているのかと錯覚させる。

「類家はどうなっているんだ？　全然動かないけどさ……」
「よく分からんが助かったぞトキ！」

数名、いまだ現実として受け止められない生徒も居るが、宮原のようにまず感謝と掌を合わせる者も少数いた。
恐怖を強制される空間に居たクラスメイトは、類家という脅威が停止したことをトキから聞かされた初めて安堵の息を漏らす。張り詰めていた空気の緩和に、必死で理解を追いつけようと許容量の限界まで頭脳を絞る者も現れ始めるくらいだ。

「みんな、お願いしたいことがある」

衆人が注目する中、トキは告げる。

「類家を許してやって欲しい。
あいつはずっと前から騙されていたみたいなんだ。人生を歪めら

れるほどの嘘によって」

『騙されていた？』
「いいわよ」
『え！？』
「騙されていたって、誰にだ？」
『ちょ！委員長（×２）！』

「そいつらをこれから捕まえに行ってきます。
それで、俺……何て言うか、うん。
学校やめます」

『は？』
『あ〝ぁ？』

トキの告白に男女の間から不満の声が上がった。
更にこの瞬間、教室内の気温が不思議なことに５度も上昇した。

セカンドリアルとは何なのか。
一般常識から外れた能力を手に入れた者達の呼称で在りながらも、その名称にはどこか後悔の念が込められているように思えてしかたがない。大多数の人間が生まれ持った自然や法律の中に存在する世界を現実と言うのなら、第二の現実とは一体如何なるものを指し示すのか。

全てを支配する男。　未来をも読む予言者。
光と影の魔女。　幻想を実現する魔術師。
全てを否定する男。　最も欲に忠実な者。

学校で教える歴史すら覆す彼らの存在は、時として人々を救い、また時として戦争の火種として良くも悪くも世界と共に、人と共に歩み続けてきたのだ。

支配者協会長と反逆者たちの対立構造。協会という組織体制。

この中に不思議と不安と矛盾がいくつも内在していた。まず、現在四凶に包囲されている会長は本当に完全支配と言われるだけの資格を持った人物なのか。奇しくも会長の存在が今日の世界の安定に貢献しているというものなら、なぜその安定に反抗する必要があるのだろうか。なぜ対立する。どうして反逆者らをみすみす生かしておき、果ては組織化するまで見過ごすのか。ＳＲが起こす問題を、一般人に悟られないように解決するのがＳＲ協会の主な仕事のはずが、最近の協会は仕事効率だけを見るのなら無残なほど処理能力に欠いている。

（全ての歯車が狂った明確な瞬間を、私は知っている……）

夕焼けに身を焦がし、目に飛び込むスコープの映像から数百メートル先の白州唯高校３年３組を見守る。

日本で唯一、完全支配の影響を免れた白州唯の街は、言ってしまえば混沌の生じ易い特異地帯である。協会長の支配は人と人の衝突を回避することも、また恋にぶつけることも出来るほど強力なのだ。それで護られている場所が確かにある。その点白州唯という街は混沌という危険と無限に等しい自由を許された空間であった。

（色世時……いや、正確には“色世家”が四凶の全てを宿したことが始まり）

僅かに吹く横風の中、狙撃銃の銃口が真っ直ぐ教室内の人物に向いていた。

スコープのレティクルと被る人物がクラスメイトであったことを思い出し、小さなため息と共に僅かな安堵が漏れた。レンズに映る光景に向け、引き金を絞る必要はすでにない。

セカンドリアルとは何なのか。

他の誰が何と言おうが自分だけの理論を曲げない――それが自分の考えるＳＲである。

当分変わることはないであろう真相、真実、個有現実。

望める力と容れられる力を持ち、今日までを生きてきた。ＳＲを使いこなし、協会の門を叩き、必要とされるまでに貢献して別格の地位を得た。人とは違う、自分だけの強み。世界の中から飛び出し、常識というルールを破るアビリティ。

狙撃銃：ＡＷＳ（アークティク・ウォーフェア・サプレッサー）のグリップを握りなおし、今一度トキを見改める。

芹真事務所が抱える最大級の不確定要素。

協会が最も欲する予知能力者――風間小羽の予知が絶対なら、完全無力化されている状態の類家は脅威と言える存在なのか。これ以上の戦闘は有り得ず、彼女以外の下階に展開していた四凶軍メンバーも皆、陸橙谷藍によって既に撃破されている。

（……類家香織は負けた）

敵が居ないのだ。

トキを取り巻く現状で、運動ができ、且つ敵対することができる四凶は１人もいないのだ。四凶化の可能性を孕んでいた級友達も、類家を非現実的に止めたトキに対して敵意を見せるどころか感謝の言葉を述べるまでに順応し始めていた。まるで類家香織という危険が完全に去ったかのように、停止した類家に近づく者もいるが、間違いなく四凶はまだ力を持っている。

ただ止まっているだけの話だ。

（しかし、あれは何？）

両腕を広げ、白色空間がどういった原理かわからないが発生――そもそもＳＲを原理ではかること自体が間違いなのだが――前例が無い程に特異なトキの力に触れた瞬間、類家香織は凍り付けにでもされたかのように行動をやめた。僅かながらも事前に話は聞いていたが、現実に人間が時間を操る瞬間を目の当たりにし、知り合いの中に大きな脅威となるＳＲの存在を認めた。

（時間を止めることは当たり前のようにできるようね。

見た限り、体感時間の拡張・外部からの奪取・周囲ごと凍結させるアレが現在の戦法。

どう考えてもＡクラスレベルの注意人物じゃない……）

昨年の夏、コントンが白州唯を訪れた時期にトキの危険クラスはレベルAだった。　時間を使い、ある程度の銃器経験があり、黒羽商会などとの交戦経験も複数ある。“戦闘になって初めて脅威となりうるレベル”とジャンヌ秘書も手紙に記している。

だが、現状は違う。

すでにトキは自ら戦闘に加わる気概を知り、理由を持ち、あらゆる時間を手繰る可能性を秘めている。

（混沌、人、命、四凶、連続……）

ここ1週間を思い出し、どれだけの命が失われたのかを数えた。

何が原因かと問い、その都度出てくる答えが四凶であることに溜息が洩れそうになった。

醜欲が生む悪と、純粋ゆえに周囲を破壊してしまう悪。

コントンのように自覚ある者を悪と、無自覚なトキのような人間を罪と会長は言う。

今、この世界で急激にＳＲへの資格を得た人間が増えている。

その原因がトキとコントンの2人だ。その中でも色世トキと関わった人物は高い確率で日常に異変を感じるようになっている。厄介なことに、一般人だけでなくＳＲにもトキは影響を及ぼしている可能性があるのだ。

（1週間どころじゃない。　2年前から……すでに異変は始まっていた）

色世時の裏を取りって調査し、解析していく中で見つけた答え、それは過去に出逢ったどんな四凶よりも性質の悪い“属性力”である。

それ――トキの変化が明確に発現した原因は芹真事務所。そしてトキの四凶を確たる属性として覚醒させたのは、トウコツであった。トキを取り囲むあらゆる環境にＳＲ――感染覚醒者が出現し始めたのは、桜雪が降った夏の日から。兆候だけなら入学当時からソレと思えなくはない兆候はあったが、確たる判断に繋がるような徴は一切なく、多数のＳＲが気付くことなく見過ごしてしまたったのだ。

類家香織、宮原漣太、灘仁美（なだ ひとみ）、岩井信弥（いわい しんや）、秋森智明（あきもり ちあき）――少なくとも3年3組のこの5人はＳＲとしての兆候が協会派遣の監視部隊によって確認されていた。

（しかし、本覚醒に至る危険性がある人物は秋森智明だけのはず。そうすると、類家は外部からの要因があってこそ覚醒に至ったということになる、のかしら？）

感染している5人には、共通した色世時への認識がない。

類家のように良く思わない者でも、佐野代には微々たる兆しすらない。　岩井信弥と秋森智明の2人は恋仲であり、智明がクラス抗争においてトキと同じく中立派の構成生徒であって面識があるものの、ただ仲が良いグループ員というだけで、互いに特別な感情を抱いているわけではないし、仲が悪いという訳でもない。宮原漣太、灘仁美の2人に至っては接触したことすら回数的に指の数で収まる程。クラス内には毎日のようにトキと接するメンバーがいるにも関わらず、感染発現・覚醒の徴に至る者は極端に少ない。

そもそも、ＳＲが感染するという事態が稀代の現象と言えるにも

関わらず、トキによる感染者達には覚醒への共通因子が判明していないのだ。

（やはり1週間前の村に、何者かが器かパンドラ実験の薬物を持ち込んだいう話が本当だったのか……）

ライフルをコンクリートの中に埋設した保存ケースに隠し、表面偽装を施してアパート屋上から撤退する。

夕日の中で陰る階段を降り、ふと気付いて足を止める。不覚にも屋上の片隅に日用品を忘れてきたことを思い出した。

「これか？」

ＰＭ　１６：１３

「安心しろ、ジャンヌ指揮官からの命令だ。
俺以外の協会員と至急合流せよ、ってな」

「高城播夜。妖精がどうして私の姿を捉えることができる？」

高城が同級生の背中に声を掛け、ついでに忘れ物を指で摘んで掲げる。

１歩ずつ、ゆっくりと背中に近づき、腕を伸ばして肩越しにソレを渡す。

「なにも人目を盗むのは暗殺者だけじゃない。妖精だって日々、人目につかないように研鑽しているんだよ。
俺達はな、人に見られる妖精は三流以下って罵倒しまくってる世代なんだぜ」

「そう。それで？」

眼鏡を受け取った少女が踵で回り、妖精と向き合う。

「正直お前がＳＲで、しかも同じ協会の所属とは思っていなかったからかなり驚いているよ。　いままで気付くこともできなかったし、上層部に教えてもらった今でも半信半疑だ。
まさか、同じクラスに暗殺者が居るなんて誰が想像できる？」

「口を慎め妖精。任務があるのなら優先して報告しなさい」

「そうカッカするなよ。崎島恵理（さきしまえり）」

端正な輪郭に収まる冷たい双眸を眼鏡で隠し、妖精の口から零れた我が名を自分の中に当てはめようと試みる崎島。
だが、高城播夜が妖精として現れた以上、崎島も協会所属のＳＲとして対応するしか出来なかった。何の前触れもなく本性に触れてきた高城に、いつも通りの女子高校生である自分で振舞うことが出来ない。

「任務？」

「あぁ、そうだ。
崎島特務員、俺はロシア支部に行くよう命じられた。そこでアンタには――」

「本部の防衛かしら？」

「そう。確かに本部だ。
ジャンヌ司令を通じ、協会長からアンタへと言伝がある」

妖精の透明な羽が夕日で僅かな輪郭を顕にする。妖精の目は、協会内でも強く秘匿と守られて来た暗殺者をつま先から毛先に至るまで警戒を注いだ。

「“今夜、色世時を協会本部の会長室へ連れて来い”とさ」

「了解。ミッションレベルは？」

「は？」

「……ミッションレベルを聞いていないの？
それとも聞きなれない単語だからすでに忘却したの？」

「そういや、そんなこと言っていたな。ミッションレベルは確か……5だったはず」

「了解。任務を更新し開始する」

最後に一言残して階段を下っていく崎島。

その背中に一声かけておこうか迷い、高城は無言のまま屋上へと上って行った。

第４８話 ― 崩壊感染源 ― （後書き）

飛び血に濡れた3年3組の教室では、トキを中心に据えて多くの学友が質問を投げつけていた。これは現実なのか、その力は誰でも得られるのか、どうして類家はお前を殺すと言った等々。

崎島恵理や高城播夜、村崎翼が揃っていなくとも、今後の生活に支障をきたす大きな可能性を持つ現実を問う。冷静に対応しているように見えても、実のところ動揺皆無というわけではない。興奮冷めぬ者に恐怖拭えぬ者、静まらない怒りに震え続ける者だっているし、体力を多く消耗して息を切らす者もいる。

「委員長、俺は――」

「どうして類家がいきなり殺しにかかってきた？」

「コントンってのは誰？」

「類家が騙されていたって？」

「ＳＲってのは、さっきみたいな奴だよな？」

「その力って俺らも使えんの？」

「もらえる？」

「最近この辺の治安が悪いのもお前たちの所為か？」

「危うく皆殺しにされるところだったんだぞ！　お前が元凶なんだろ！」

「詳しく教えてくれないか？」

「助けてくれてありがとう……」

「危ねぇ野郎だ。今まで一緒に居たってこと思い出すだけで気分が悪ぃ」

質問攻めに不慣れなトキは口を噤んで周囲が鎮まるのを待った。
しかし、クラスメイト達は止まらない。

「どうして隠していた？」
「黙っていないで何か喋れやコラ」
「聞いてる？」
「おい、お前らあんま責めるな。もう少し丁寧に聞けよ」
「早ク喋リヤガレコノ野郎」
「どういう事情でこうなった？」
「闇金か？」
「俺らに何か恨みあって謀ったとかじゃないよな？」
「非常識」

気が滅入ってきたトキは溜息とともに口を開いた。

「だって、結構死ぬんだよ？
それに、知ったら何回も殺されかけたりする。そういう世界なんだ」

やっと口を開いたトキに、今度は周囲が沈黙する番だった。

「俺は去年だけで死にかけが５、６回。
今年は２０回以上死にかけてるし、実際に死んだ回数も３０を超

えて……」

「ま、待て待て！
死にかけたとか死んだとか、何の話だ！？」

普段からトキと一緒に行動する北島幸哉も、突然の発言だけは信じられなかった。類家との戦いはしっかり現実と受け止めていたのに、だ。

今の話から幾つもの矛盾を見出し、流石の北島も混乱した。死にかけたと言う友人の体には生傷一つなく――先ほどの治癒によるものだろうが――３０回以上死んだのが本当なら、いま目の前にいるトキは幽霊か或いは幻か。

「ＳＲって世界だと、俺の力って――」

星黄と畏天を両手に作り出して見せ、幸哉に渡す。

２刀を受け取った幸哉は、重量・触感等どれもが見た目以上の金属とは思えない軽さと柔らかさなのに、その刃は息を飲むほどに鋭利で不撓の鋼刃を連想した。一瞬だけペーパークラフトやプロットブレードと思ったが、刀身から溢れる冷気のようなものは本能に危険を呼び起こすだけのリアリティを秘めており、実戦と無縁に等しい幸哉の背中に冷たい走らせた。

「――結構珍しいらしくて、拉致しようだの勧誘しようだの沢山人が来るんだ。　いきなり銃を突き付けられたことだってあるし、撃たれたこともある。

そんな、本っ当に危ない世界なんだ」

2人の委員長が幸哉から二振りの剣を奪い取ってトキの前に出る。
桃山充（とうやまみつる）が畏天を取り、木田村麻衣子（きたむらまいこ）が星黄の柄を握る。幸哉を押し退けて前に出る2大委員長。

「それで？　さっきチラっと出た退学の理由はそれなの？
第一、蓮雅先生と話はした？
許可は下りているの？」

「トキよぉ、そんな不当な理由が認められるわけないだろう。俺のクラスを抜けていいのは学ばない奴と死人だけだ。
そもそも頭（トップ）である俺が許可してねぇのに勝手に話進めてんじゃねぇよ」

切っ先を突き付ける桃山委員長に対し、柄を逆手に持ってトキへ突き返す木田村委員長。

「トキ。私はちゃんとした正当な理由があるなら類家の暴行も、ミツルの位も、村崎君のセクハラも許すわ。
でも、誰も認めない理由を突き付けての離脱は許さないわよ。
あなたが抜けることで困ることが――」

星黄を受け取ろうと手を出すトキ、とタイミングを同じくして、類家香織の移転によって離れた場所に飛ばされていた男が教室のド

アを蹴破って戻ってきた。

「――彼とかね」

手足を血に染め、木製の重いドアを打ち破って入室してきたのは佐野代勇司。

眼に血を走らせ、鬼のような形相でまっすぐトキだけを捉えていた。理由は分からずとも、相当頭にきていることだけは一目で判った。

「何で？」

他人の退学に佐野代が怒りを覚えるのは何故か、トキにはどうしても理解できない。

そんな表情をありありと表に出しているトキの態度を見て、佐野代は堪えていたもの全てを吐き出しつつ人間の域をはみ出したクラスメイトに殴りかかった。

「ちょっと面貸せ」

第４９話－Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ　ｉｓ　ｗａｒ－（前書き）

“勇気とは、１分だけ長く恐怖に耐えることである”

ｂｙ　ジョージ・Ｓ・パットン将軍

――どんなメディアで出会った言葉か覚えていないが、トキはそれがつい最近触れたゲームか映画で出てきた言葉を思い出していた。
疲労に下がる肩を落とさないように持ち応え、正面から迫るジェイソン佐野代という恐怖に立ち向かう。

めちゃくちゃ機嫌が悪い。
そんな佐野代と、疲労を隠し通そうとしているトキを交互に見比べ、ギャラリーと化していた者達が動き始めた。
大股で距離を詰める佐野代とトキの間に割ってはいる男女。３年３組の面々は、この２人に殴り合いをさせまいと肉体障壁を築く。
その障壁に入れ知恵をし、２人を接触させない策が施されたのは障壁形成５秒後のことである。

「邪魔だお前ら！」

佐野代の大きな怒声が教室内で反響する。

同時刻。
佐野代の怒声が白州唯高校３年３組の教室を震わせたように、数億もの人数で協会本部を取り囲んだ四凶軍もまた、大声による大合

唱で太平洋を震わせていた。

第４９話－Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ　ｉｓ　ｗａｒ－

陸ではない、海の上で始まろうとしている。
無所属だろうが、小規模集団だろうが見境なんかありはしない。
それは否応なしに伝う空気。
固めたかのように質量を感じさせる夥しい殺意がつくる寸法は、群れというレベルが発することのできない域に達していた。

現地の二大勢力、その主力ＳＲ達もそれを感じ取っていた。
激突へのカウントダウン。
衝突の時。
いつ火蓋が切られてもおかしくない状況下、長く続く沈黙の方が不自然で不気味だった。

心地の悪さは過去に例を見ないほどのもの。極まる不愉快は、大量の生命の消失が目に見えているからであって、その一端を自分たちが担っているという自覚を持っているからだった。
四凶や、ただ感じているだけではあるがリデアもそうだ。
これから殺し合いが始まる。

だが、例え全ての人が死のうと、それは果たして個人個人の責任と、必ずしも言い切れるのだろうか。
疑問と共に、オリヤを含む多くのＳＲが予感に近い感覚に見舞われていた。

“始まる”

－ＰＭ　１６：００　太平洋沖－

協会本部を取り囲む艦隊が戦陣の半分を整え終えた頃、２億の大音声が協会ＳＲ達の士気を挫かんと空海の間に木霊した。

オレンジ色の景色を震わせる殺意の籠った音響と質量による圧力。潮風をかき消すほどの“大音声／合唱”は、戦前の勝利を祈る儀式そのものであった。

「キュウキの作戦です。

まずこちらの士気を損なわせ、団結力を鈍らせたところで質量に任せた総攻撃を仕掛けてきます。

第一波は艦隊による陣形整列、この数億の大声が第二波。おそらく次の第三波は遠距離からの威嚇射撃かそれに準じるものでしょう」

予想通りの攻撃が繰り出されたのは十数分後。砲弾やミサイルが協会本部の上空で爆ぜた。

四凶の包囲に備え、艦砲射撃対策に配備された魔術師と超能力者による部隊が展開する不可視の結界があらゆる物理攻撃を無力化する。

その最中、協会司令部管制塔ではジャンヌによる各防衛線の最終チェックが行われていた。

「防衛海岸の展開は？」

「たった今１００％完了しました」

「照明の用意」
「完了しています」

「迎撃システムは？」
「ＣＩＷＳ起動チェック、異常なし。
ハープーンの準備完了。
転送パネル異常なし。
チェーンガン、ガトリング砲台、レーザー照射砲、どれも異常は認められず」

夕焼けの地平線を隠す大船団の中に一際大きな船を見つけたジャンヌは、考えられる敵の攻撃パターンへの対抗策を練って備える。
レーダーに映る船団は漁船から空母、小型観光船から弩級戦艦まで多種多様に並び荘厳な陣形を整えていた。敵の総数が明確に分かっていない現状では常に全体へ気を配らなければ簡単に隙を突かれ、そこから瓦解していく。戦場では思いの他そういった些細な見落としが敗因となることが多い。特に少数機動の部隊は叩くことよりも見つけることの方が何よりも重要である。海上四方１００キロ近くに渡って展開する四凶軍の配置配分を把握しきることは不可能であり、つまり対策はあらゆる事態に対応・対処できるよう事前に備えておくことだけ。

「なぁ、ジャンヌ司令。会長は本気で反抗するつもりなのか？」

協会の司令官であるジャンヌと並び、協会と合流したナイトメア非武装派の現リーダーであるミギス・ギガントは拭えぬ疑問をジャ

ンヌにぶつけた。いくら協会本部を武装包囲しているとは言えこちらはＳＲ、向こうはただの人間と少数のＳＲ。
四凶の強みは数だけ。戦力のほとんどが一般市民である以上、戦力は有って無きに等しい。第一、一般人を攻撃するということ自体、協会が掲げる理念に反する明確な矛盾である。

「会長がどうして反抗を望むのか、私にも分りかねます。ですが、ここで我々が屈してしまえば、四凶が跋扈する明日を迎えることになります。それだけは肝に銘じておいてください」

「そわは分かっている。
だが、一般人を大量に殺そうとしていることを忘れるな」

頷く司令に顔は微動だにせず水平線の向こうを射抜いていた。

（キュウキ……そろそろ勝負をつけましょう）

船の群れに隠れた向こう側。
しかし、確かにジャンヌの意思はキュウキに届いていた。
現場での指揮を執り行う時もワインレッドのスーツで佇むキュウキは、協会本部へ向いて鼻で哂って見せた。

（そうね、ジャンヌ。どちらが上か、ちょうど良い機会だから決めるとしよう）

－ＰＭ　１８：００－
若造りの古老２人はそれぞれ新たに指示を出す。

「まずは防衛海岸を突破する。各指揮艦、作戦を開始せよ！
工作部隊は行動開始。
標準を協会レーダー塔に設定。艦砲射撃、撃ち方始め！
それからトウテツへ連絡。１９００を以て海岸へ突撃せよ」

四凶が動く。対して協会も、

「こちらジャンヌ。聞こえますか、結界部隊。あなた方は結界の密度を落としても構いませんので守備範囲を第一防衛海岸まで拡大してください。
次、生源創水。あなたは敵船団が突撃を始めたら第１０波までを海面を用いて返してください。
その次、海岸の海岸防衛部隊聞こえますか？　恐らく敵は海中から海岸の攻略にかかるでしょう。バーナーとスピア、爆雷を用いて敵を撃退してください」

万を超える大群に数千の集団がそれぞれ攻守の動きを取る。
再開する怒号の砲撃。
闇色に染まる空を、煌々と噴炎が煙を引いて走る。
頭上で煌く爆炎に、海上を揺らす衝撃波が人々の心に大きな変化を与える。
興奮、恐怖、“狂気／狂喜”、悲愴。
動じない者達は次々と戦況の数手先を読んで指揮を執り、指示を

待ち、或いは独断で行動を開始する。

砲撃と共に四凶の上陸部隊が船を走らせ、それを防衛海岸の機銃掃射が出迎えた。

艦砲射撃や上陸船からの攻撃を結界部隊の防壁が９０％近くを無力化し、逆に迎撃システムの前に四凶船団の第一波は一方的にダメージを受けることとなった。後続の第二波も生源創水こと、水の魔術師：オリベイル・セスナムが作り出す荒波、高波の前に多くの船舶が転覆する結果に終わった。

第一波を片付け終えた防衛海岸の迎撃機構は第三波を迎え撃とうと照準を変えた、その時だった。艦砲射撃が止むのと同時に航空部隊が第三波の頭上を飛び越えて来た。

結界で守られた防衛海岸に対してハリヤー、フルバックなどの航空機が、ガトリングやミサイルでの迎撃システム破壊を狙い、西から東へと抜けるように飛来した。

「砲撃部隊、敵が第一防衛海岸を突破したら爆撃を開始。
魔術部隊は第二防衛海岸が突破されたら四方から敵軍団へ攻撃。
ロシア支部の状況は？」

「各突撃艦へ通達。直ちに協会防衛海岸へ突撃せよ。
突破後はαゴースト部隊を降下。
コントンとの連絡は？」

海上を揺るがす咆哮の中、２人の司令官は上々の戦況に首を振った。

（ロシア支部健闘……嬉しい予想外ね。
ならば計画通りに会長に促しておこう。
問題は、援軍としてやってくる小規模集団が謀反を起こさないか。
下手に崩されれば数に押し潰されかねない）

（コントンとの音信途絶……またか。
トウテツで全ての防衛海岸を突破することは容易。ならば、フォルトンと吸血鬼にも早々に動いてもわないと。
やはり問題はこの大軍を保つための兵糧。２４時間以内に勝負を決めなければ待っているのは自壊だけ）

砲火と音声とＳＲが乱れ飛ぶ戦場はオレンジが去り、夜の帳が下り始めていた。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第４９話－

－Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ　ｉｓ　ｗａｒ－

崎島恵理は、クラスで最も冷たく厳しいツッコミとして分類されていた。

的確すぎるツッコミは冗談の域を超越することもしばしば、あまりにも棘のあるその言葉に撃沈した老若男女は数知れない。

当然、3組の派閥争いから逃れた中立派の中でもその役職と言って差し支えない立場は変わらない。中立派5人のリーダーである北島幸哉が緊張感に欠いた人物であり、大橋友樹は草食の皮を被った肉食で、そもそもボケてスベる立場の人間だ。秋森智明もどちらかというとボケ率が高い。特に、岩井信弥を彼氏として迎えてからの呆けっぷりは目に余るほどだ。色世時などボケてもボケきれておらず、ツッコんでいるつもりなのだろうがツッコミになっていないという始末。

誰に対しても平等な彼女の指摘は、協会内でもコードネームをスズメバチのあだ名に改名されるほど厳しかった。

ある会長曰く、聖人並に無差別だ。

ある秘書曰く、絶対上司にしたくないタイプの人物よ。

ある四凶曰く、机上に持ち込まれないようにして逃げる。それが最善の策。

そんな崎島さえ固めてしまうほど、言葉を霞とぼかすほど夕闇に沈む3年3組の教室は混沌を極めていた。

「俺にもその人形くれ！」
「俺も！」
「僕も！」
「私も！」
「最優先であたしに寄越しな！」

荒れた教室内で色世トキを囲むクラスメイト。
その足元に転がるぬいぐるみの数々。
出入り口まで退避している数名を除き、１人輪に入りきれていない――むしろ輪によって弾かれている男：佐野代勇司（さのしろゆうじ）。
通称：ジェイソン佐野代。

「邪魔だテメェら！」

「あ～、犬を作ってくれ！」
「俺ワニ！」
「リス！」
「僕はダンゴムシがいい！」
「ウナギだ！」
「エイだ！」
「ヒトガタは！？」
「プレ○ター！」
「チャッ○・ノリス！」
「やる○だろ・ｊｋ」
「コ○ナント」
「○ム・キャリー」

「や〇ないかの人！」
「そろそろ版権と地球外生命体はやめなさい」
「ポチ！」
「いなば！」
「ニャンコ！」
「キリンさん！」
「――いぃ」
「凸」

勢いだけで佐野代とトキを引き離すクラスメイトたち。
疲労の色を隠せない佐野代だが、トキに対して怒りを覚えている今、疲労の一切を忘れて全力で殴りかかること間違いなし。それを理解していたからこそ、委員長を中心に大勢で佐野代の妨害に入った。交渉役を外側に残し、類家香織という脅威からクラスを救った功労者を護るために。

「落ち着け佐野代！
類家はもう動かない！」

「トキが止めてくれたんだ！」

「そんな馬鹿な話しがあるか！
どうせグルだったんだろ！？
そうじゃなきゃトキにさっきの類家を止めれるハズがねぇ！」

車輪戦法に巻かれて佐野代と引き離されつつ、雑ながらもクロノセプターで人形を作る。

回る、廻るクラスメイトの中心で人形が落ちる。
佐野代と話さなければと思うも、回転し続ける陣形に阻まれて叶わない。
廻り阻む人垣。超えようと思っても時間を使い過ぎてスタミナ切れも間近。精神的にもだ。それにこの輪を抜け、佐野代と面を合わせて言い合うことに若干ながらも抵抗があった。

「テメェらケガは大丈夫なのか！？」

堪忍の緒がはちきれた佐野代の暴力が、無差別に車輪を削り始める。

さっき――色世トキが現れてから、類家香織が戻ってきた。そして気付けば、教室から一階の体育館に移っていた。クラスから離れた場所に飛ばされたのは類家香織の仕業だろうが、原理や仕掛けの検討は未だにつかない。
目の前で起こった異常。
学校内に出現した非日常。
それが無性に腹立たしかった。
しかし、トキが全てを丸く納めたという結果が何よりも信じられず、驚きを通り越して陰謀でないか疑わしく、腹立たしく腹立たしく、とにかく苛立ちが止まらない。クラス最弱の引篭もりがどうして非現実的な暴力を振るう類家に太刀打ちできよう。現実的に考えてありえなし、そもそも発生している事態すら現実的ではないのに、何がどう転んで引篭りゲームオタク野郎が暴力を止められるものか。

クラス委員長を殴り飛ばし、岩井を崩し、宮原を剥ぎ取る。男女

問わずに突き飛ばし、蹴り飛ばし、投げ飛ばし、トキとの距離を縮める。

「何しているの？」

佐野代の手が襟を掴むのと同時に担任はやって来た。藍に肩を借りて。

『げぇ！レンガ先生！』

フリーズ。

ただ現れただけの登龍寺蓮雅（とうりゅうじれんが）を見るや、半分以上の生徒がその場に正座した。佐野代やトキ、二大委員長達は正座こそしていないものの、動きは完全にフリーズ。数秒遅れて委員長2人が正座。背筋を伸ばして緊張に面を強張らせた。

「喧嘩は、私のいない所でやれと言ったはずよ？」

視線がトキと蓮雅を往復する。

構えた拳を解こうか考え迷った結果、襟を力一杯下へ引いてトキを座らせてから自らも腰を据える。やりきれない思いを拳に乗せて地面へ放つ。鈍い音と共に砕ける拳骨。

組んだ腕を解き、黒板の縁に肘を掛けて教室を見渡す。

床の半分を塗り替えたそれが血であることは何よりも早く理解で

きた。割れている窓も、散乱した机も、質量的減少を見せる室内のあらゆるものからSR同士の戦闘を見出すのも容易。ただ、そんな戦場跡といっても間違いないであろう場所に、真新しいぬいぐるみが山のように落ちていることだけは理解ができなかった。

「まず全員、元気のある者を中心に動きなさい。
机&椅子を寝台代わりがてら、全て廊下に並べなさい。
割れた蛍光灯と窓ガラスは私が手配しておく。数名理科室よりランタンを持ってきて。
負傷者は――」

「蓮雅先生、怪我人はいません」

佐野代以外。

「“誰が”綺麗に治したの？」

セカンドフリーズ。
まるで何があったかお見通しと言わんばかりの蓮雅に、流石の生徒たちも対応しきれなかった。
的確に個人を指名してくるあたりからも勘だけの発言でない。
そのうえ視線はトキをロック。
ついには指名。

「説明してトキ。

これだけ荒れた場所に負傷者がいないというのはどうしてかしら？
床の血溜まり後は明らかに個人のものではない」

「え～……」

「先生、これは俺達の血じゃありません。さっきまでいた暴漢のものです」

「そッスよ。俺らで全員ボコり返してやったッス！」

「誰も怪我してませんよ？」

「ただ、色々壊されちまっただけで」

「えと……私達よりも先生の方こそ肩大丈夫ですの？」

起立するトキの援護に複数名が口を開く。

必死に取り繕っても蓮雅はトキ以外の話に耳を傾けていない。

周囲を意に介さず、長く続く担任と一生徒の沈黙が溜息によって終わりを迎える。

「はぁ、校長に何て言われるか。

そうね、ここにいる皆は“セカンドリアル”を見たのかしら？」

即興の口裏合わせが途切れかけ、まっすぐな性格の宮原など蓮雅のフェイントに掛かり、ストレートにイエスと答えていた。

『宮原ぁ！』

「それならいいわ。

中途半端に見ていないというよりも、自分たちが何を見たのかしっかり正面から考えてゆく事も大切だから。
聞いておくけど、それを目撃したあなた達が今後気をつけなければいけないことは何か、それを理解しているかどうか聞かせて欲しい。さぁ、グループで考えるも良し、個人の意見でも構わないわよ」

担任の宣言と同時に正座を崩す生徒たち。
その中で、

「黙秘」

真っ先に口を開いたのが崎島恵理であった。

「俺も同じ考えだ」
「私もよ」

次いで二大委員長。
両委員長に続いて2人、3人と同意を示す者がグループを形成する。

「いや、でも今後のこと考えて警察に言うべきだろ？」

「……混乱」
「いや、出頭はまずいだろ」

「報道でもされたら面倒だ」

「あのさ、ＳＲだっけ？　そいつが居たら俺らも危ないんじゃねぇ？」

両金（もろがね）生徒の言葉に同意を唱える者も少なくはなかった。

「どうする、ＳＲ」

あえて名を挙げずに蓮雅は言った。

「学校を出て行くべきだと思います」

蓮雅の質問に対するトキの返答は退学だった。
それを聞いた佐野代は肘を見舞う。ふざけるなと付け足して。
擁護派と追放派の出現を見た蓮雅は思い切って質問した。

「この中で、自分がＳＲだという人間は挙手した後、それを証明してみせて」

訪れる静寂の中に、驚愕の色が３つ浮かび上がる。１つは微々たる変化だが、蓮雅はそれを見逃さなかった。

「でも、蓮雅先生……それは」
「トキ。
あなたは学校をやめたいの？
それともやめたくないの？」

この状況で躊躇うトキの正しさに蓮雅は次の質問を繰り出す。

「何か未練があるの？
それとも一般人には喋ってはいけない法律でもあるの？」

藍がそれに答える。
協会という大きな組織が提唱する掟として、ＳＲは公の場に存在を証明してはならないという掟があると。
それが同時に自白を意味していることを蓮雅は理解していた。芹真という師を持つため、少なかろうが彼の元で働いている藍への戦術指南補佐などを勤めたこともある。当然、ＳＲであることを知っているし、それはトキに対しても同様の認識である。

「……まさか、橙谷さんもＳＲなの？」

「隠していてごめんね、麻衣子」

片手に棘付き金棒：理壊双焔を取り出し、床に付いた。
ひび割れる床に戦慄を覚える者は少数。この場では困惑に言葉を

失う者が大半だった。
いつの間に取り出した凶器か。それを銃刀法違反だと取り締まるべきか。そもそも何故そんな物を持ち込んでいるのか等、不思議極まりない手品にクラスメイトの疑問は尽きない。

「はい、それじゃ皆に重大な事件を教えるわ。
藍も座りなさい」

割れたガラスと黒板だった物の破片を拾い、倒れた教卓の机上に鋭利な破片の角を入れる。
削れる卓の表面を盤面とし、蓮雅は大きさの異なる3つの丸を刻んだ。

「聞く耳をしっかり傾けておきなさい。
知りたくなくても、今を乗り切るためには必要な知識よ」

「先生、何の事件ですか？」

麻衣子の質問に蓮雅はこう説明した。

「香織が目覚め、藍が生きてきた世界。
トキがこれから戦いに行く世界。
そこで起こっている世界大戦の事よ」

複数の視線を集めて、トキは頷いた。
それが真実であることを認めるのと同時に、担任へ続けるように促す。
確認を取れたところで最初に大きな丸を指差す蓮雅が続ける。

「これはＳＲと呼ばれる人間だけにしか伝えられない世界よ。そこでは厳密な体制によって情報が管理されてきた。普通なら私たち一般人にはＳＲに関する情報は一切入ってこない」

人とＳＲを隔離する壁を作ったのは大きな丸――ＳＲ界における最大勢力：協会である。
人とＳＲの衝突を避けるために何千年もそういった姿勢を近年まで保ち続けてきた。

「あなたも何か知っていみたいね、恵理？」

指名されたにも関わらず涼しい顔をした崎島に視線が集まる。
素知らぬ顔を貫き通していても、指先に現れる動揺を蓮雅は見逃さなかった。
組んだ腕に隠されている指の動作はこれまで観察してきた生徒の数少ない癖。このクラスにどんなＳＲがいるのかある程度理解している蓮雅でも、崎島が動揺している姿は意外でしかなく、村崎翼のようにＳＲと共生している可能性も否めなくはない。
或いはもっと別の可能性――脅迫、裏取引、もしかすれば崎島自身がＳＲであるという可能性もある。

「いいえ。ただ、知り合いにその手の類を思われる人がいるので…」

「後で聞かせて。
さぁ、次。
協会という最大勢力は実在する。構成する人物は殆どがＳＲ。ごく少数だけどＳＲに関わってしまった人間が保護されているという話も聞くわ」

挙手。生徒の質問が説明を遮る。

「あの、先生はどこからそんな話を？」

「私を拾い、育ててくれた師がＳＲなのよ。
更に言うなら彼は今、トキのバイト先の社長を務めているわ。この街で」

３年３組に大きな衝撃が走った。
生徒一丸になっても太刀打ちできない担任には、師がおり、しかも今はクラス内最弱候補の１人であるトキをバイトとして雇っているというのだ。
数人は“だから類家と戦えたのか”あと納得し、数人はあからさまに警戒。宮原は声を上げて感心し、岩井は唖然。佐野代だけが、それがどうしたと言わんばかりに口元を歪めた。

「そっちの界隈の情報は全て彼からのものよ。
話を戻すけど、協会が界隈の約8割方を占めるのに対し、残りの2割は反抗勢力と中立派という構造になっている」

そこまで聞いて3人の人間が首を捻る。
正委員長、裏委員長、中立派リーダー。3年3組を分ける3つの勢力は、このクラスにいる誰にとっても分かりやすい対立構造の“例え”であった。

「ミツルのグループを協会とする。
そうした場合、マイコのグループはナイトメアと呼ばれる反抗勢力。
コウヤの中立派は小規模集団と呼ばれるSR達よ。ナイトメアと小規模集団では圧倒的にナイトメアの方が人材は多い。
今までの対立構造というのが、主にこの“協会　対　ナイトメア”だった。
しかし、ある種の――グループに依存しない存在の謀反によってこれまでの対立構造は大きく変わった」

四凶。
トキの呟きに、グループごとに纏まろうと座った状態で移動していた生徒が一斉に止まる。
その呟きを間近で聞いていた佐野代は一瞬、トキに恐怖の念を抱いた。

（こいつ、何て眼をしてやがる……）

「トキが言った通りよ。
四、それから凶と書いて四凶。
こいつらが大規模な反抗を始めたことで協会とナイトメアの一部は停戦。ついさっき、共同戦線を締結したという連絡が入ったわ。
“協会&ナイトメアｖｓ四凶”という構造が出来上がったの」

「先生。四凶って、何ですか？
ナイトメアってテロリストみたいなものですよね？
それを上回るテロリストってことですか？」

北島の質問に対し、トキはイエスともノーとも違う回答で応えた。

「四凶は誰の中にでもある。
俺にも、類家にもあった」

「私にも。
人種や性別、地位、貧富さえ関係なくそれは誰の中にでも在るのよ」

藍の助勢を受けて説明を続ける。

「だから、四凶は一般人をも巻き込むんだ。
いま、四凶は協会に対して戦争を仕掛けている。四凶の軍は殆どが民間人なんだ。ただ、四凶の属性を持っているというだけで」

『？』

「最近テレビで海外のニュースを見かけたことある人は？」

蓮雅の質問に大勢が首を捻る。

見覚えがない。

言われてみれば、ノイズ掛かっていたり、規制中・トラブル解消中というテロップ、或いは録画してあった古い映像の再放送ばかり。

リアルタイムの映像はここ数日間見たことがない。

「一週間前のテレビジャックを見た人は？」

その問いに対して半分以上が手を挙げる。

「それが四凶よ。

あのテレビジャックは海外からのもの。そして、海外のテレビ局は殆どが全滅している」

部屋が凍る。

あまりにも現実離れした話しに頭が付いてこない。

辛うじて理解したところで不思議と恐怖が頭を支配して先へ進ませない。

ただし、関心の薄い数名を除いて。

「トキ、香織は四凶だったの？」
「はい。四凶でした」
そのやり取りに委員長が嘘であることを願った。
「香織はまだ運がよかったわ。
戦場でなく、ここに来た。
皆は辛い思いをしたと思うけど、でも香織を攻めちゃ駄目よ」
「どうしてだ蓮雅先生。俺ら殺されかけたんですよ？」
「落ち着けコウヤ。
その説明はトキがしてくれるはずだ」
類家がトキを嫌うように、北島幸哉（きたじまこうや）は類家を嫌っていた。
まして、類家に突如として斬撃を食らった後である。怒りに震え、
彼女を許せない気持ちは理解に易く、鎮めるに難い。
「類家は、四凶に騙されていたんだ」
「それを信じろっての？」
「いまは証拠もないから無理だろうけど」

頭を掻いて幸哉は溜息をつく。
トキがどれだけ嘘の下手な人間かは知っている。ボケることすら下手な人間だ。だからこそ、大抵の発言は事実に即したもので、更にこんな状況で流暢に冗談をかませる人柄でもないため、本当に類家が騙されていたのかもしれないという気にされた。

「どう騙されていたの？」

類家香織と特に親しい仲の女子、橋本雪兎（はしもとゆきと）。
もう一つのリアルがあると語られたこのタイミングにおいても、雪兎の関心は類家に向いていた。

「類家は人を騙したっていう、嘘のレッテルを貼られていたんだ」

「俺は実際に騙されたけどな」

類家香織と同じ中学校出身の幸哉が類家を嫌う理由。
僅かな言葉で多くを失った経験。
誰にでもあるようで、共感に遠く難い辛苦の記憶。

「確かにそうらしいな。
でも、さっき類家に聞いてみたけどさ、騙すつもりなんてなかったそうだ。良かれと思って吐いた言葉なんだって」

精神世界に彼女の本音は溢れていた。
攻撃の理由も、封じていた気持ちも。懺悔さえ。
許されるのなら罪を償いたいと心の隅で願っていた。

「皆を攻撃したのも、彼女が四凶によって追い詰められていたから」

「香織はそんなに深刻だったの？」

眉を寄せる蓮雅の問いかけに頷くトキ。

「はい、犯罪の肩を持つようにと――」
「肩、だと！？　そいつは本当かトキ！？」

宮原の声が教室内に反響する。
耳を塞ぐ者たちと混じり、その話をすぐに信じた者たちはただちに怒りを覚えていた。

「ウチのモンを騙すたぁ……」
「女の子の一生に傷つけるとは不届きな！」

桃山の委員長（カシラ）が震える。
３組筆頭の卑怯者、隅田幸平（すだこうへい）が拳を作る。

「俺ら何にも知らずに類家を邪険にしちまった」
「あたしのカワイイ香織に嘘ついた挙句、犯罪を手伝えだって？」
「クラスへの危害を許すつもりはないが、まずはその四凶って奴らにケジメつけねぇとな」

後悔の念に沈む御倉嶺（おくられい）。
その隣で女王様臭全快の夏山陽子（かやま）が額に青い筋で交差点を作る。
桃山委員長に感化されまくっている函音カイ（はこねかい）も自分の身内（クラスメイト）が嵌められていたと知るや、普段見せることのない怒りの面を表にした。

「そうですわね。まずはその方々を血祭にして、刎ねた首でも香織さんに貢ぎましょう」
『いや、お嬢、類家喜ばんだろソレ』

たまにぶっ飛んだ発言をするお嬢こと、冬谷紗月（とうたにさつき）は何の儀式を始める気か、類家を騙した者の首を奉ろうと提言。さすがの3組一同もツッコミを入れた。

「さて、話を戻すわ。
今夜、トキは四凶のいるであろう戦場に行きます」

『ゑっ！？』
「え？」
「へぇ？」
「ひょぇ～マジ？」

ツッコミを入れたメンバーが色んな意味で止まる。
お嬢も驚く。
実際は蓮雅も半ば受け止めきれずにいた。

「間違いないのトキ」

「はい。行くつもりです。
芹真さんがダメと言っても、俺は行きます」

「待て！　どうしてお前なんかが行く！？」

佐野代が襟元を掴んで力を込める。

「大体何をしに行くつもりだ？　戦争？　ついにゲームと現実の区別も付かなくなったのか？」
「四凶を止める。その為に行くんだ」

顔を近づける佐野代。血の登った頭に、言葉が届くかどうか自信がなかったが、それでもトキは告げる。
戦場へ出向く理由、その価値を。

「ある夏の日、一人の四凶が俺に言ったんだ。
黒い欠片を持ってこい。さもなくばクラスメイトを全員殺す、っ

て」

「それこそ嘘なんじゃねぇのかよ！
下らねぇ脅しに乗ってんじゃねぇ！」

佐野代の拳が上がる。
顔面。しかし、

「止める四凶は2人だけ。
指揮している奴と、俺を半殺しにした奴だ」

額で拳を受け止めたトキに新たな質問をぶつける。
半殺しにされておきながら再び無謀に突っ込む気なのか、と。

「今度は負けない。
そのために何度も殺されてきたんだ」

「何？」

「類家にも約束したんだ。
四凶を止めて、証拠を持ち帰る。その為に俺はそこに行く。人を殺しに行くわけじゃない」

「じゃあテメェのすることは間違いだろ！」

流石に行動を抑えていた面々も佐野代に苛立ちを覚えて腰を浮かせる。
宮原や委員長はすでに取り押さえる準備を整えていた。が、

「証拠を持って帰って来ることが大事だろ！
何で自主退学の話が先なんだ？　本当は証拠なんてないのか？
それとも端から類家の潔白証明する気が無いのか！　どっちだ！」

「いや、そういう訳じゃ――」
「じゃあ、まずは証拠を持って“帰って”来い。
ケジメはそれからだろうが」

胸に一発、やや軽めの拳を送ってから一瞥し、その場に座って黙り込む佐野代。
一男子の約束を聞き、クラス中にある種の熱が伝播した。

「おう、トキ。しっかり落とし前付けろよ？」
「今度は半殺しにされんな！」
「類家の仇だ！」
「討たれてないけど」
「自分たちで殴りこみにも来ない野郎に負けんな！」

「つぅか、俺らにできることある？」
「この数で行ってフクロにできそうか？」
「いい？　スタンガンで狙うなら脇腹を――」
「今のお前ならタイマンで負けることはねぇ！」
「間違っても誤射すんなよ！」

「俺も行く！」
『黙れ宮原』

「まだ教えてほしいことあるからさ、ちゃんと帰ってこいよ」
「ＳＲとか、類家とか……」
「橙空のことも」
「ゲームも～」
「行く前に出席日数確認しろよ！」
「ガンバ」

「話のケリはテメェが帰ってきてから着ける。
いいか、逃げるなよ？
死んで帰ってくることだけは絶対に許さねぇからな」

帰還祈願、声援、暖かな拳。
親しい者も、親しくない者も、等しく彼らは言葉を送った。
予想から外れた応援。
その風にトキは、

「え？？？」

口をポカンと、呆然。
その表情には『理解不能』の四文字が浮かんでおり――
３組一同、ぶち壊された“イイ雰囲気”にキレかけた。

波間を漂う有象無象に剣を突き立ててみる。
傾く骸は、しかし海面に接することもなく、違う残形の上に横たわる。
海上は満員だ。
泳げるだけの隙間を見つける方が手間なくらい、いまこの海は埋まり、汚れている。

「ジャンヌの姐さん、俺の出番はまだかい？」

インカム越しに通じてもいない相手に愚痴を零す。
ついでに股間の息子も汗を流す。
不発弾にひっかける小便というのもスリルがあって良い。命を奪わんと降ってきた物が、いまでは無価値に海面を漂っている。藻屑に紛れるこのミサイル、ちゃんと使えるかもしれないのにゴミ同然の扱いを受けているのは何故か。
答えは簡単。
これが戦争である。
浪費し、乱費し、消費した挙句の果て、掌中に掴むは僅かの宝玉、或いは石ころ。捨てた金貨は山をも超える。

「ヒ～マ～だ～。
戦らせろ～、殺らせろ～、掠奪らせろ～！」

無数に漂う残骸の上を、トウコツは独り歩きまわっていた。
ここが敵地の真っただ中であることを十分に理解し、いつでもパーティーを始められるように前座の余興として馬鹿をやっている最中である。
夜の海ということもあって、未だ索敵には掛かっていないはずだが、むしろトウコツとしてはとっとと発見してもらいたかった。そうなると自衛を理由に襲い来る者を相手にすることができるのだから。

しかし、残念ながら四凶軍はトウコツの徘徊を完全に予測し、対策を整えていた。
“あからさまに闘りたそう奴がいたら極力無視しなさい。剣を持っていたら尚更、声を掛けるどころか、気付く素振りも厳禁”と、キュウキ直々のお達しであったのだ。
つまりトウコツは既に索敵に引っ掛かっており、しかし、無駄な兵力の消費を抑えるための措置によって完全に無視されていたのであった。

―PM　22：21―

キュウキはトウコツの本陣離れを完全に読み、第一海岸を突破、第二防衛海岸突破の指揮を他の旗艦に任せて長考に入っていた。
配下の指揮艦が相手にする第二防衛海岸の機能を、キュウキは未だかつて目にしたことがない。予備知識だけしか持ち合わせていない防衛機能を前に、危険な橋――四方よりの一斉突撃を避けかた。
いくら人数で勝っていても、四凶軍の質は圧倒的に低い。貴重な人数を少しでも保つために、ある程度の知識を持ち合わせていた部下に前線を任せ、他の軍は突撃に万全を期すための準備にかかっている。

攻略法が見つかり次第順次突撃予定――と、表面上は動いているが、すでに予防措置は施している。
第一防衛海岸の突破と同時に、トウテツを送り込んでいたのだ。

「キュウキ司令、東部司令艦の指示により一個大隊が第二防衛海岸に突撃しました」

「第二防衛海岸の動きは？」

「今のところありません」

数で押すこちらに対し、協会は徹底的に殻へ籠るか、或いはこちらの数を減らし続けるか。
いずれにしろ向こうが長期戦の備えをしていることに間違いはない。

（ナイトメアの武装派を取り入れきれていたら、もっと別の方面から切り崩せたか。
ロシア支部が健闘していることはマイナス、協会の仕掛ける長期戦もマイナス。加えて圧倒的な質量負けに、全体の指揮・連携の不届き。この状況で私たちの勝率は４：６。
本部に取り付くことさえできれば、どれだけＳＲがいようと無理押しすることもできる）

「第二防衛海岸が動きました！
第一、第二防衛海岸の間に潮流が発生しています！」

オペレーターの報告に、キュウキは驚きよりも不思議を覚えた。
協会の第一防衛海岸は迎撃兵装、新たに判明した第二防衛海岸は巨大な潮流発生装置。
後援部隊の到着、先発部隊の消滅、突撃部隊の現状を把握し、協会が次に切るであろうカードを予測して腰を上げる。

「潮流の速度は？」

「はい、報告による発生した潮流の速度は現在２９キロ。あ、たった今３０キロに達しました！」

円形状の防衛海岸の回転機構はある程度聞かされていた。
第一防衛海岸にターレットが設置されていたことは予想外だったが、水の魔術師による津波攻撃や海流による防御も想定内である。

（回転機構、海水の流れ、水の魔術師……これ自体は防御設備じゃない！
そうなると、次は確実にアレを使うな！）

「東部の突撃部隊が流れに飲まれました！音信不通！」

「――！
協会の魔術部隊が結界を縮小！」

「やはり……よし！
我が隊はこれより前線に移動する！

ダミーとコピーを準備、南北部隊は即刻突撃。
制圧した第一防衛海岸を仮拠点とし、そこへ停船。停めた船を攻撃壁として敵の海路を塞げ！」

四凶の司令が動く。
協会本部から２０キロ離れた旗艦の艦橋を発ち、潮風に髪を靡(なび)かせる。
キュウキは甲板より協会本部へと飛び立った。

四凶の司令官が自ら前線へ赴いたことに気付いていない協会司令部では、第二防衛海岸による“充電”の完了を合図に大規模な反撃の合図が上がった。

「司令、光の魔術師たちが配置と準備を完了しました」

「電力の予備は？」

「３００％を超えています！」

第二防衛海岸が生み出す海流。それを利用した巨大タービンの回転で生み出された電力が、協会本部――司令部の根元付近に隠された砲台へと集まってゆく。

「“フォルト”の発射プロセスを最終段階へ」

「了解。レーザー照射砲：フォルトを照射段階へ移行」

「エネルギーチャージ完了」
「魔術師より報告！
光波増幅準備が完了したとのこと！」

協会という巨大な人工島の中央に聳（そび）える司令塔が発光を始める。
それは四方の海上からハッキリと確認できた。トウコツからも。
夜闇切り裂く白光。水銀灯を凌ぐ明るさ。協会司令部の根元が輪郭を明確にする程の輝度光量。

「2番を照準、目標は西の艦隊」

キュウキは予想通りの光を海上から見た。
第二防衛海岸は、それ自体が防衛機構ではなく、レーザー砲のエネルギーを作り出すための発電装置。そうでなければ潮流による防御力など高が知れる。

（おそらく、光の魔術師による強化が施されているはず！）

翼を強く羽ばたかせ、潮風を切って海面の際を高速で飛行する。
急がなければ光は一瞬で無数の命を焼く。
光の線から逃げなければ敗戦の決定打となる。
翼を持った虎が協会までの距離を半ば過ぎた頃――

「来る！」

「照射」

――光が太平洋上を走った。

海面を光が照らし、熱は無数の命を消し飛ばす。

金属を溶かす。

人を焦がす。

その一撃、空気を震わす光撃は、四方から本部を囲む四凶の艦隊を同時に襲撃した。

第49話－Second Real is war－（後書き）

教室を抜け出て街へ向かい、その途中で鬼の姉妹に捕まる。

「何してんだ？」

鬼姉妹の姉を説き、同行者が増える。
警察署の前を通ると今度は妖精が現れた。

「気をつけろよ」

掛けられた声から、妖精もまた戦場に赴くだろうことが読み取れた。

「どこに向かっているんだ？」
「ヘリポートよ」

崎島恵理を先頭に歩くトキと鬼3姉妹。
隣町へ入り、住宅街を抜けて漁港へと出る。あらゆる寸法の船舶がいくつも並ぶ湾内で、一際大きな船に乗り込み、船員に話しかける。

「本部まで」

それだけで船員らは慌しく動き始めた。そのうちの1人がトキらを船内に誘導し、リクラゼーションルームで待機してもらうよう説明する。　出されたお茶を啜りながら、船が動き出すのをエンジンの唸りで知り、それでも崎島が入ってくるまで4人は黙っていた。

「これからトキを協会本部へ連れて行くわ」

「私ら3人は？」

鬼の3人に留守番を推薦する崎島。
淡々とその理由を説明した後、トキに同行を求めた。
船内から甲板に出で、潮の香漂う夕闇の海上を見渡した。
ここまで乗ってきた船に、隣接する二回り大きな船。その甲板に、暗闇の中で冷たくも存在感を露わにする人員輸送用ヘリコプターが静かにローターをまわしていた。　巻き起こる旋風が潮風にぶつかり乱流を生む。潮風の中に僅かな油の匂いが混じっていた。

「協会本部はすでに戦場と化している！
海上から本部に上陸することはできないわ！」

「それでヘリか！」

背中を3姉妹に見送られながらトキはヘリへと乗り込む。
望んで臨む戦場。
クラスメイトを人質と言う危険な立場から救い出し、四凶との因縁に勝負を着けるための参戦。

「気をつけてくださいね！」
「頑張れよ！
おい、藍。お前も何か言ってやれって！」

「……トキ！」

離陸を始める機体。
巻き起こる旋風に髪を遊ばせながら鬼は1本の金棒を投げた。
搭乗口から身を乗り出していたトキはそれをクロノセプターで軽くし、質量分解して、普通の人間でも持てる重さに加工してから取っ手を掴んだ。

「藍の、リカイソウエン」

「使い終わったら返してね！」

垂直離陸で船を離れる。
ベルトで体を固定し、崎島と向かい合うようにしてトキは座った。

「崎島さん。

君はＳＲかな？」
「そうかもね。どうして？」
「何か落ち着きすぎているよな～、と思って」
「それはトキもでしょ」
「そうかな？」
「そうよ」
「……」
「会長はあなたに伝えたいことがあるそうよ」
「四凶のことかな」
「詳しくは私も知らされていない」
「……もう、協会は戦場になっているんだよね？」
「えぇ」
「コントンとかも戦っているんだ」
「いいえ。まだ四凶の根源が目撃されたと言う情報はないわ。特にコントンは千里眼所有者達が必死で探しているけど見つからないの」
「戦場って、酷い？」
「何を基準に酷いと言っているの？
殺人？清潔？破壊？
それとも善悪論？
敢えて言うなら、間違いなく穏便という言葉に疎遠な場所よ」
「あぁ……」
「善悪は存在しないし、壊れないものなどない。

すでに裏切り者が出てくると言う憶測が飛び交っているし、海上は血の色に染まっているそうよ」

水平線の向こうに夕日が沈む。
それを眺めながら崎島は溜息をついた。

「コントンを倒したいの？」
「あぁ。あいつだけでいい」

「キュウキは？」
「討てるのかもしれないけど、討たなきゃいけない」

「トウテツは？」
「……誰？」

「じゃあ、味方のトウコツとは共闘できそう？」
「……たぶん」

単調に続く海原も、夜の闇に染め上げられてはろくに見下ろすことも出来ない。
機内の僅かな明かりと、それを反射する崎島の眼鏡だけが距離を掴む数少ない手がかりだった。

「簡単に命を落とせる場所よ。
生きて帰れないかもしれないけど、覚悟の程は？」

「きっと、最終ステージだろう。
難易度は極めて高く、コンティニューも不可能。誰もコインを入れてくれない状況だ。
でも、今更引けるはずはないし、逃げる気も起こらない。コントン倒して証拠を持ち帰らないといけないからな」

強い眼差しと共に返された言葉に不安は絡んでいなかった。
どうあっても生き延びて帰る。そんな意思が色濃く現れていた。

「でも、トキ。
ここを最終にしていいの？」

「え、どういうこと？」

「ここが最終ステージなら、貴方は相応のエンディングを迎えなくてはいけない。
問題は、エンディング以降に問題があっても関与しない、したくないという宣言を貴方はしていることになるけど、どうなの？」

「はい？」

「つまり、この戦場を最後の舞台にするなら、帰るべき場所に帰った貴方を、この戦争とは関係のない誰かが襲ったら無抵抗に終わる気かしら？」

「いいや」

「なら――ここが最後、これが最終という言葉はやめておきなさい。

縁起という側面から見ても良くない言葉よ。
最後を実感してから、ここが最終ステージとでも言いなさい。私も咎めたりはしない」

「あぁ、そうだな。
藍にこれ返せとも言われてる、佐野代に帰ってこいと怒られたし、類家に証拠を持ち帰るって約束したからな。
言葉には気をつけるよ」

2人の会話が終わる頃――ヘリの操縦席からは、煌々と夜を引き裂く光に包まれた協会本部とその周辺を取り囲む四凶、無数の船舶で埋め尽くされた太平洋が視界一杯に広がっていた。

第５０話－協会ｖｓ四凶！－（前書き）

色世トキと崎島恵理が人員輸送ヘリに乗り込んだその時、太平洋上ではすでに多大な熱気が狂気をつくり上げていた。

海の上に浮かぶ金属。
それらを操る人、ＳＲ。

間もなく、開戦の標は上がったのだ。

第５０話－協会ｖｓ四凶！－

（ヴィラ・ホート・ディマ――魔法使いのＳＲ。
詳しい誕生のルーツは不明）

例えば、どれだけのメモ用紙を用意すれば空が埋まるのかを考える試みに、その果てしない詮索は似ていた。
影がどこから生まれ、闇がどうして付きまとうのか。
存在そのものを問う疑問に諦観が訪れるのと同時に、脱線していた自分に気付いて本題へと戻る。

（闇や影など物体が生むものから、人の心に掛かる暗部にまで干渉する魔女。
過去の戦闘で敗戦の記録は無し。
物理攻撃と精神攻撃の両方を使い分け、あらゆるＳＲに対抗できる強大過ぎる個体。
自らと対を成すボルト・パルダンとは血の繋がりない“姉妹”か）

協会司令部。

レーザー照射砲：フォルトが放つ白光はここに居ても眩しかった。
もし、ここにマスターピース様が居たらこのやり方に反対しただろうか。
やらなければ押し潰されるだけというシビアな状況であることは理解していたが、やはり一般人を討つことには気が引けた。

“復活の秘策有り”

四凶の軍に攻撃を仕掛ける最後のセイフティーアンロックが協会長が口にした言葉だ。

“とりあえず”邪魔な駒は排除しておけと言ったのだ。

殺しても蘇らせる方法があると。

ジャンヌは会長の言葉に素直に従ったが、俺には出来そうにない。

私――ミギス・ギガントは、本名こそ捨てても不殺の決意を捨てたわけではない。一人だけだろうが、私を紳士と認めてくれる者がいる限り、ソレを軽々しく捨てるつもりはない。

「いいんですか、ミギス司令。
ファイルの検索をしているだけなんて……」

「問題ない。
指揮はジャンヌ司令一人でも事足りている。
さぁ、次だ。
否定のＳＲ、メイトス・シュラヴァイトフ・ジヴィア」

円形上の司令本部は二つのグループによって成り立っていた。

四凶蠢く戦場を動かすジャンヌ司令官と各部署に指令を飛ばすオペレーターらのグループ。その一方で、司令部の一角に置かれたコンピュータより協会のマザーデータベースにアクセスし、ミギス・ギガントの未来千里に映ったＳＲを片っぱしからリストアップするグループ。

混沌の直前にある現状で、これから参戦するＳＲの中で特別注意

が必要なＳＲは5人。

光撃魔女：ボルト・パルダン
戦影魔女：ヴィラ・ホート・ディマ
完全否定：メイトス・シュラヴァイトフ・ジヴィア

「次は誰です？」

「名前は分からない――あ、コイツだ。
“コルスレイ・トルメイトス”
確かにこの顔だ。俺達には“欲望”としか名乗らなかった。
何者だったのか知りたい。プロフィールを表示してくれ」

指示に従うオペレーターの肩を叩き、画面に映る略歴を読んでいく。
並ぶ文字の羅列を追ううちに、ミギスの眼は驚愕で大きく見開いた。

「誕生は１７世紀。
本名不明、両親不明。
１０歳から１９歳までの９年間を　ボルト・パルダン　の保護下で過ごす。
９年間の間に魔法使いとして覚醒。
得意とされりＳＲは光と催眠術と推測……もっと明確なデータはないのか？」

「はい。どんな魔法を使うか記録しているのはこのデータ以外には無いようです」

「……18世紀から今世紀にかけて幾度か戦場で目撃。
追跡と生活の記録はすべて失敗。
コンタクトも悉く失敗に終わっている、か」

これ以上の調査が不可と分かったミギスは次の人物の名を挙げる。

「ヒラリー・マトン」

「はい、出ました……っと」

「魔術師のSR」

顔写真の無いデータを目で追い、背後の喧噪を耳で追う。

「トウテツがレーザー砲に接近！」

「食材は？」

「全て食われました！」

「予備の食料を撒きます！」

狼狽するオペレーターへ冷静に新たな指示を出すジャンヌを確認し、ヒラリー・マトンという人物の詳細へ意識を傾ける。

（完全魔術師の二つ名で知られる最大級の物理法則違反者、その一人。
豪華客船の神隠し、人攫い、金銭詐欺、高層ビル消滅疑惑……ｅｔｃ．ｅｔｃ．ｅｔｃ、数え切れない犯罪の容疑をかけられているな。
ＳｅｖｅｎＳ　Ｈｅａｖｅｎ　Ｍａｇｉｃ　Ｓｕｒｃｕｓ――第七天国魔術演芸劇団。その団長を勤めている。
こちらも私生活の一切が謎に包まれている。国籍不明、推定年齢３０代、素顔を見た者皆無。ＳＲに関する情報もこれといった共通性がない。
それなのに古代魔術や陰陽式、超能力者顔負けの空間術、動物を凌駕するほどの体格不釣り合いな身体能力を隠し持っている。しかし、なによりも厄介なのは他の団員達との硬い結束と柔軟な連携力だ）

小規模集団最大規模の人数を要するのがＳＨＭサーカスである。
構成員全てがＳＲで、しかも平均して危険度の高い連中が揃っていた。ただでさえ近付き難い魔術師は、部下と言う厚く強力な壁によって護られている。ヒラリーの過去に取った行動は全て団体行動で、戦場に単独出現したことは未だかつて記録されていない。
問題はやはり、これほどの実力者が１人だけで戦場に赴いてくることが有り得ない、という点だ。

「……これから来る全員がブラックリストのＳクラスだ。
単身で軍隊を壊滅できる奴が２人。
国を相手にできる奴も２人。
世界を相手にした魔女が、１人」

「本当に来るんですか？
今までこんなことはなかったのに、本当に来たら世界の……」

「終わりだな。
下手をすればそうなりかねない。
だから、俺達は戦闘指揮をジャンヌ司令に任せ、その間に対策を練って備えておくんだ」

無線機で待機中のナイトメアＳＲに指示を飛ばす。
これから来るであろう５人は、四凶と協会の戦争を根底から持っていく可能性が高かった。戦争を白黒の決着で終わらせようとはせず、横から入って全てを沈黙させしめる力を、そいつらは持っているのだ。

「この戦争の結末を四凶が掴むか、協会が掴むか。
果てまた、何にも縛られない者達が終わりへ辿り着くか」

完全に予想の範疇を超えるイレギュラーの参戦。
ミギス個人としては、芹真事務所が協会の依頼を受けたという話を聞かされただけでも多大な不安を覚えたのに、未来読みの中に芹真事務所をも上回る面子がこの戦場にログインするということを知った瞬間、背筋に夥しい電撃のような脅威を見出した。

イレギュラーの存在は予知能力者にとって最大の障害である。
彼らの参加によって未来が変わる可能性は大きく、また読めるはずの未来が変化し始めることによって読めなくなったりするのだ。
四凶軍の攻撃を予知で以て防いでいる協会としては、どうしても

予知の邪魔だけはしてほしくない。そうなる要因にも極力関わらないでもらいたい。

（すでに彼らの参戦は確定だろうな）

ディマ、ボルト、メイトス、コルスレイ、ヒラリー。

ジャンヌはこの面子が参戦するという予知を知らされた瞬間に停止した。一瞬の凍結から動揺しつつも立ち直り、新たな伝令を下して四凶軍を粉砕して見せた。早々に手を打っておかなければ敗北の色が濃くなる。

「それだけのＳＲが一同に集まったら何が起こるか、私なんかに予想は出来ないし、対応策を用いても足止め程度が限界でしょう」

目に見えぬ不安が募ったところで四凶軍は第二防衛海岸の攻略を開始した。

険しい状況が差し迫りつつあることを自覚し、各ＳＲが忘却の彼方に押しやっていた恐怖を取り戻す。

圧倒的な敵勢力、狂気と戦争、死。

皆に恐怖が戻ってきたことを悟った2人の司令官は、互いに顔を見合せて早々に次の手を打った。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第５０話－

－協会ｖｓ四凶！／　Ｉｒｒｅｇｕｌａｒ　が生むモノ－

キュウキが下した命令はごく単純なものだった。

残骸を足掛かりとする。

まずは小さな船舶。その群れの中に中・大型の船を交えて突撃させる。何らかの方法でそれらが撃墜される。そこまでは予想通りに実現した。ミギス――光と影の魔女の後輩である水使いの津波攻撃も想定の範囲内。　海上に無数の残骸が散りばめられるのを待って兎部隊を走らせる。残骸の上を跳んで海岸まで迫ってもらい、機銃の餌食になって潮水の上に浮かぶ。そうやって少しずつ海上に波以外の障害物を作って進路を確保。

　ある程度包囲を縮めたらトドメに最大積載量で質量を増した大型タンカーによる一斉突撃。タンカーを盾にして大勢の人間を防衛海岸に上陸させ、無人攻撃システムを無力化する。

こうして第一防衛海岸の制圧は上陸から僅か6分で完了した。

「トウテツ、聞こえる？」

『ん～？　どうした？』

前線に移動しながら主力の1人に連絡を入れる。

キュウキは向こう側からの返事と雑音に、どういう状況が無線越しに展開されているのか容易に想像できた。

「食事中なの？」

『あぁ。なんか、いきなりたくさんの野菜が降ってきたからな。誰もいないみたいだし、勿体ないから俺が頂いているってわけさ』

「……そぅ。

ところで、水は欲しくない？」

『水か～、海水ちょっと飲んだばっかりだからなぁ』

「鉄分とヘモグロビンと薬味の入った水がある場所を知っているけど、どう？試食してみたくはない？」

『是非とも』

四凶の1人、トウテツ。

キュウキの知る限り、トウテツに並ぶ大食漢などこの世には存在しない。

龍人のＳＲでありながら過去の影響によって無限の食欲と変化しない体質を手にした男。
実の所キュウキは、トウコツ以上にこのトウテツを危険視していた。
何故ならこの男は食べ物のある方へ簡単に寝返るほど根の軽い人間なのだ。食事の約束させ取り付ければ誰にだって味方に引き込める。
それなのに――単純な消滅力だけなら、四凶中トップクラスの威力を有するのだ。
但し、逆を言うなら食べ物がある限りコントロールは効く。量と種類さえ調達すれば子供にだって買収できる。

「あなたのいるレーザー砲付近よりも下よ。海が回っている所があるでしょ？」
『お～、良い感じにシェイクしているねぇ～』

死骸、残骸船舶、薬品、金属……ｅｔｃ．
元が何だったのか判別できない物まで海流に飲み込み回るそれは、第二防衛海岸の海流発生機構。
第一防衛海岸と第二防衛海岸の挟間に仕掛けられた巨大発電システム。

「各指揮艦へ指令！
第一、第二防衛海岸のどこかに外側、あるいは海中から海水を取り込む吸水口がある。それを見つけ出して海流の供給を断て！」

『キュウキ司令、こちら南部旗艦ですが質問をよろしいでしょうか

？』

「どうした？」

『吸水口を完全に塞ぐことは実質不可能かと思いますが……』

「いいえ。可能よ。

こちらの戦況を有利に運ぶためにもここの攻略はできる限り迅速に行いたいわ。力を貸してくれない？」

通信を切り上げてトウテツにつなぐ。

『いまテイクオフしてる』

「テイクオフ？

脱衣（キャストオフ）の間違いでしょ。

しかし、もう第二防衛海岸に到着したというの？」

『おう！

そんじゃあ、たらふく飲ませてもらうぜ！』

マイクから走るノイズに耳を塞いで顔を歪める。

耐水性の通信機を用意しておくべきだったと、後悔したところで後の祭り。気を取り直し、早急に第二防衛海岸の吸水口を発見して防ぐよう、催促の指示を飛ばす。

トウテツが回転層内に飛び込んで数秒後、彼がＳＲを発動した結果が明確な数値変動として協会司令部に伝わった。

「司令！
レーザー照射砲の充電効率が２５０％に低下しました！」
「何が原因はわかる？」
「現在吸水口をチェック！」
「各吸水口に異常は見られません」
「残骸などは排出システムによって除去されています」
「タービン正常！各部署からも何の問題提示はありません！」
「冷却システムにも異常なし」
「充電棒正常」
「波力発電、摩擦発電ともに異常なし！」
「これは……！
わかりました！海流発電システムの中にＳＲがいます！」

レーザー照射砲への電力供給率が２００％まで低下するのと同時に原因が判明する。
水中カメラで捉えた四凶のＳＲは、潮水の中で満足げな顔を浮かべていた。
全裸で。

（これが“全身過食”か……レーザー照射砲の破壊を中断したのも発電システムに気付いたから）

ジャンヌの頭にはトウテツの行動に続く、第二防衛海岸の突破作

戦の方法が浮かび上がった。四凶は第一防衛海岸と同じ方法を用いるつもりだ。

焦りを覚えたジャンヌとは対称的に、キュウキは新たな通信相手との交信に機嫌よく顔の表を変えていた。

2人のシナリオがリンクする。

“第一、第二防衛海岸間の造りは巨大な溝に変わりない。水位が下がったところでタンカーを始めと、無数の船舶を第二防衛海岸の中に落として無理やり足場を作る”

突撃は同時に潮流を利用する発電の効率を低下させる効果も兼ねている。

更に、船を足場にしつつ隠れ場とすることで四凶軍の進軍は安全性を増す。少なくとも機銃掃射を免れるだけの隠れ場は出来上がるだろう。

「ミギス司令、間もなく第二防衛海岸が突破されるでしょう。そうなるとレーザー照射砲も使用に制限が生じます。

そこで、早々にＭｒ．シーズンを動かして貰いたいのです」

「了解。

すでに準備は終わっているという連絡が来ている」

「では、第三防衛海岸から敵艦隊の最前線より後方５キロまでを対象範囲として環状降雪、早々にお願いします」

無線を使ってジャンヌの要求をＭｒ．シーズンに伝達。

かつて、白州唯の街を桜色の雪で染めた男が、二つ返事でＳＲを

行使する。
間もなく、四凶軍の前線艦隊から第二防衛海岸に上陸した者達の頭上へ、白く小さな氷の結晶が静かに下り始めた。

「雪？」

水位が十数メートルも低下し、第二防衛海岸内へ強引に船舶を突っ込み始めた四凶軍のそこかしこで降雪を驚く声があがった。真夏と言うわけでないにしろ、初夏に堂々と降る雪は、敵味方問わずに多くの人間の感動を誘った。

「お～い、オリヤ。
お前も見てもろよ、初夏の白雪だ」

特に雪を見てゴキゲンになっていたのが協会長だったりする。
眼下の戦火に混じる雪を眺めている隣で、オリヤはつまらなさそうに生命の消失と銃火を見下していた。

「……雪」
「温かい時に降る雪ってのも新鮮でいいなぁ～
若干、潮風とはマッチしないけどさ」

溜息が2つ、同時に同じ長さで零れた。

「雪は嫌いか？」
「わからない」

オリヤの視線は眼下の殺し合いに注がれていた。
雪など既に眼中にない。

果てしない命の浪費を彼女がどう感じているのか、完全支配というSRを持ちながらもそれを把握することは出来ない。

「バースヤード、会長」
「オウルでいいぞ」

片付いた会長室の窓際で、オリヤの手が取り替えられたばかりのガラス面に触れた。

「ここみたいな場所を戦争というの？」

「“戦場”だよ。
それを何処かで行うこと、または意識することを戦争と言うんだ。
目の前の赤い海を見てどんな気持ちだ？」

流血に穢れた海面はハッキリと赤く染まっていることがわかる。
それほどの血が既に流れている。
レーザー照射砲の閃光が夜の帳を裂く。

真っ直ぐ地平へ伸びるように進む光の筒に触れ、金属の艦隊が溶け、焼け、爆ぜ、消えてゆく。
その中に生命が混じり溶けていることは言うまでもない。

「これは明確な大量虐殺だ。
それを許可している人間が俺なんだぜ？
今どんな気持ちだ？
俺たちの足元では大量の命が消えている。大量虐殺を命じているのは俺。俺を討ち取ればこの戦争は終わる。言ってしまえば、後どれだけの命が残るかは俺の存命如何だ。
もし君が俺を討てば、オリヤアキという人間は英雄として祭られるだろう」

「そうなんだ」

横目で盗み見たオリヤの表情は再び苦痛に歪んでいた。
やはり判らない。
完全支配のＳＲで操りきれないオリヤは、ＳＲの特性も謎が多過ぎる。
特性から予測した頭痛の解決方法も、結局はその場凌ぎ程度の効果しかない。

「お前はトキにしか興味がないのか？
下で繰り返される殺し合いを何とも思わないのか？」

「……何て思えばいいの？
私に何て言って欲しいの？」

「別に、ただ君がどう思っているのか聞いてみたかっただけさ」

「……」

こめかみを押さえて防衛海岸の光景を見つめる。

オリヤは考えてみた。

あそこに何を思えばいいのか、私の感想を会長が聞いてどうするのか。

「それが頭痛の原因だったらどうにかして取り除いてあげたくてさ。ただ、それだけだ」

四凶の放つ砲弾が空中の結界に止められる。

止め処ない白と赤の閃光の中、防衛海岸の狭間で煙を上げる人物を見つけた。

「トウテツか」

「とうてつ？」

疑問で返すオリヤに、四凶のひとつであることを簡単に教える会長。

ふと、空を見上げると星の輝きは厚い雲に遮られていた。雲の動き、風の流れ。それぞれが協定を結んだナイトメア非武装派のＳＲ

たちの力であると気付くに時間は要らなかった。
数秒の間をおいて覗くオリヤの表情からはすっかり苦痛の色が抜け、無表情と冷たい視線だけが海上に注がれていた。
言われて何かを感じようとしているのか、或いは既に何かを感じていたのか。もし後者なら、言葉を持ち合わせていないだけという可能性も十分にありうる。何故ならオリヤは多くの言葉を知らない。言葉を知っていても使いどころを間違ったり、意味をまったく理解できずに混乱することが、この数時間の中で幾度もあった。

「もし、色世トキの妨害をする者が現れたら、力を貸してくれるか？」

「殺すよ。邪魔するならオウルも」

彼女の目が向く。
取り戻した殺意は視線の冷気を完全に溶かして消すだけの熱量を充分に蓄えていた。
イレギュラーＳＲであるオリヤを宥めようと会長は肩を竦める。

「俺は邪魔しないよ。
寧ろ用事があるから傷つけるなんてことは言語道断」

「誰が邪魔をする？」

彼女の思考に置いてけぼりを食らわんと全力で頭を働かせる。

誰が邪魔をする
誰がトキを妨害するのか
トキの妨害をするのは誰だ［↑Ａｎｓｗｅｒ！］

変換完了。

「おそらくトウテツ」

「あの煙が出ている人？」

「そう、湯気立っている奴。
でもそれ以上に――」

新調したばかりのガラスに空間が生じる。
オリヤの触れた箇所に円形の虚空が輪郭を思わせると同時、流れ込んできた潮風に会長も手を挙げて敵を指差す。
人差し指の向く先にあるモノは四凶軍の艦隊。

「おそらくアレら、船の群れがトキにとって相当な邪魔になるはずだ」

ガラスの穴が拡大する。それと同時に色をあらわし始めた黒球がサイズを増していく。
オリヤのＳＲを見て、会長は黒球に触れないように後退した。

「今のうち消しておくのか？」

「そうすればトキは早く来るんでしょ？」

質問を質問で返し、会長に驚きを残したオリヤは穴の開いた窓から数十メートルもの高さへ飛び出した。

慌てて会長はすぐにオリヤを視線で追った。この真下にあるものは、記憶違いでなければレーザー照射砲のはず。更に照射砲の連射間隔を考えれば、オリヤの落下は見事に斜線と被る。

ガラスに映える白光は、会長の記憶が正しかったことの証明でもあるが、同時にオリヤアキ＝織夜秋の呆気ない消滅をも意味する。

そんな会長の心配を余所に、秋の頭の中は疑問と憤りで混ぜ返していた。

（トキ……どうしてあなたがトキなの？
どうして私はオリヤアキなの？
お母さんは教えてくれなかった。
トキが知っている。
取り返せと言った。
何を？　名前？
トキを？
シキヨトキって、何？
私からその名前を盗ったワケってなに？）

地面は頭上の方にあった。

上昇気流に髪をはためかせ、目を瞑って戦場の阿鼻叫喚を小さく

意識する。
思考はトキで埋め尽くされ、落下の時を一瞬たりと意識することはなし。
落下の先にある結末に死というものを見出していないが、白光だけは閉じた瞼越しにも明るい色を知らせ、無意識のうちに彼女のＳＲを発動させた。

光はこの身を飲む。

照射レーザーが放たれる。
ここで落下中の織夜が射線と重なった。
が、光よりも早く、白が触れる前に黒球は彼女を中心に広がっていた。
半径５０メートルという大黒球。
濃色暗黒の黒は闇夜のそれよりも深く、触れた光が逆に織夜によって消滅する。
黒球の中に消える白光の大量殺戮光線。
この一瞬、レーザー照射砲：フォルトが一基、織夜が無意識のうちに展開した黒球に飲み込まれ消滅した。

「壊すな～」

会長室に残ったオウルは呟き、口元を不機嫌に歪めた。
時間をかけて大切に作り上げた兵器を壊されることに怒りは覚えない。ただ、それを用いて始めて生き残ることが出来る部下達を失うかもしれないという事実に恐怖と、その結末へと現実を導く行動が許せない。

『会長、緊急事態です。
西側のレーザー照射砲が一基、織夜によって破壊されました』

「知っているよ、ジャンヌ」

『それからもう一点あります。
ミギス・ギガントの千里眼が新たなイレギュラーを捉えました』

「メイトスか？」

『はい。
しかし、彼だけではありません。
ボルト・パルダン、コルスレイ・トルメイトスの魔法使い２人に、闇影の魔法使いディマも。つまり、光と影の具現と結晶魔術師が来るそうです。
更にＳＨＭサーカスも』

「……そりゃ良い」

『如何いたします？』

「放置しろ。
俺達は俺達の戦いをするだけだ。
そうすれば結果が得られる」

『放置、でよろしいのですね？』

「明確な敵意を持った奴だけを討てばいい」

ジャンヌからの思念通信を一方的に遮断して会話を切り上げ、足早に壁に設置されたインターフォンを操作する。
オウル・バースヤードの決意が進んでいく。
世界中の人間を敵に回し、それでも自分を護ろうと戦ってくれる者達がいる。そんな彼らのためにも新たに助け舟を出す必要性を見出し、使うことはないだろうと踏んでいた秘密回線を呼び出し、出撃命令を下した。

「コード：７－５８．　Ｇｏｉｎｇ　ｄｏｗｎ」

極秘裏に命令が下っている最中、戦場には織夜の出現とレーザー砲の破損によって大きな衝撃が走っていた。協会にとっての焦り、四凶にとっての好機。第二防衛海岸を半ばまで攻略した四凶軍が、次の第三防衛海岸に迫る。
次の海岸までの距離は僅か2キロ前後。
レーザー照射砲が足下の四凶軍、第三防衛海岸に取りかかったＳＲたちを排除するためにエネルギー供給を断たれながらも照射を続けた。が、十分な電力供給を得られない照射砲に戦艦を溶かすだけの熱量は無く、人を焦がす程度の殺傷能力にまで落ち込んでいた。光の魔法使いによる増幅でも補いきれない損失。攻撃力の低下。
第二防衛海岸の損失は予想の範囲内ではあったが、タイミングという面から言えば早すぎる陥落だった。しかも、レーザー照射砲自体の損害は、四凶軍の仕業でないにしろ完全に予想外の出来事。

「西側の海岸が手薄だぞ！」

数万の群れが安全路に集中する。
しかし、協会側も黙ってそれを通すつもりなど毛頭無い。

「地上砲撃部隊、撃てぇいっ！」

第三防衛海岸の砲台が第二防衛海岸と、第一から第二海岸間を爆撃する。
立ち込める爆発、黒煙の壁。
サーチライトが照らす粉塵の奥から無数の兵士が押し寄せる。
水柱。高熱に立ち込める水蒸気。爆発による水飛沫が兵士たちの興奮を冷やす。
爆風がどれだけ多くの兵を巻き込もうと、数万の兵士全てを止めることは不可能。しかし、四凶が協会本島到達することを遅らせることは十二分に可能だった。

「再生部隊！今だ！」

特大の砲弾が１２８の方角に撃ち込まれ、同時に巨大な柱をつくり上げた。
その１２８の火柱を、再生のＳＲ３人がループで再生する。
火柱、血柱、水柱。
爆風と灼火、爆音と周辺に散った破片を着弾から爆発までを力の限り再現再生させる。
人工海岸の残骸散弾、水面の衝撃長短波、粉砕した死体が撒き散らす鮮血の霧雨。

「うろたえるな！
爆風と爆風の間隔は広い！
盾を持ってそこを進――！」

対策を講じた四凶軍の指揮官ＳＲが狙撃を受けて絶命する。
一基のレーザー照射砲を失った西側で、それまで照射レーザーの増強を行っていただけの魔法使いが直接光撃を始めたのだ。
焼き殺すレーザーではなく、極細の切断する光線で。

「駄目だ！
装甲板でも耐――！」

横へ薙ぐように走るレーザーが海中を潜行する工作部隊や、第二防衛海岸で機銃を構える兵士、スピードボートに乗り込んだ者たちを容赦なく切り裂く。
切断面を焦がした人間が火柱に飲まれ、発電システムの中に落ちる。

しかし、光撃は長く続かずに止まる。
これはキュウキの読み通りであった。光の魔法使いは光源あってこそ力を発揮するＳＲが殆どであり、闇の中に光を作り出せる者など過去に聞いたことがない。つまり、夜闇に包まれたこのステージで即攻性の高い光の魔法使いは短時間しか活躍することができない。
夜闇の中で光を集めて攻撃に用いる疲労は、時に術者の命を危険にも晒し、最悪の場合は夜闇に溶ける原型崩壊を始めてしまう。人

としての形を失い、粒子として大気中に散って死に逝く、光を使う魔法使い特有の現象。
それを抑えるために魔法使いは休憩を余儀なくされるのだ。

四凶軍はその機を見逃さずに殺到する。
ループ再生される爆発と爆発の隙間を掻い潜り、限定された侵攻路を死体や残骸に隠れながら進み、砲撃陣地である第三防衛海岸を目指す。

「四凶共を近づけるな！
チェーンガン撃て！
砲撃も絶やすな！」

「トウテツ。第三防衛海岸を食べて」

『お～ぅけぇ～い！』

海上を1人のＳＲが走る。
第三防衛海岸へ直進し、陸に足を着けても止まらず、横目を振ることもなく砲台へと突撃して体当たり。
しかし、トウテツのそれは体当たりというよりは“喰い付き”と言った方が正確だった。全裸のトウテツが触れた砲台が、接触箇所だけを食われて機能的な死を迎える。
第三防衛海岸には協会の正規防衛部隊も展開していた。そんな彼らの眼前にやって来たトウテツは、これまでに見てきたどんなＳＲとも違う異色を纏った裸漢（おとこ）だった。
囲むＳＲは２０人。
銃器を揃え、ＳＲを解放し、いつでも何者でも叩き伏せる準備を

終えていた。それにも関わらずトウテツの意識にはまだ、防衛部隊のＳＲ達は映っていなかった。

「炸薬うめぇ」

喜々とした表情で大砲の残りに触れる。
掌で触れた場所が消え、肘が触れた場所が消え、四肢、関節、先端から付け根、肛門から男根、果ては髪の毛に至るまで、トウテツの体を構成する全てのパーツに触れたものが消える。

「こいつ……トウテツか？」

「“全身過食”と呼ばれる奴だ！
全員、距離を取れ！」

現場指揮官のＳＲが引き金を絞る。
が、その一瞬前にトウテツは身近にいた1人の喉を食った。遠心力に任せた大ぶりの右、手のひら。
喉を食われてコントロールを失った銃が発砲を始めた。零距離でトウテツに対して銃弾を吐き続ける。
砲撃に掻き消される連射音。
だが、闇の中に輝く銃火が周囲に異変を教える。
ゼロ距離でフルオート射撃を受けたはずなのに、トウテツは出血・負傷ともに皆無だった。やがて弾倉は空になり、首という大切なパーツを失った隊員が地面に頽(くずお)れる。膝で離れ落ちた頭部を食い、頭部を失った亡骸の心臓を足の甲で軽く触れて摘み食う。

「撃て！撃ちまくれ！」

２つの密集陣形より放たれる十字砲火が始まる。

トウテツはその中で飛んだ。一度の跳躍で戦陣を組んだ協会兵士の胴体へ蹴り足一閃。上下で二つに別離したそれの頭部を足の裏で触れて食し、同じ要領で攻撃範囲内のあらゆるものを喰らう。

銃器、防護服、人体。

触れた腕が人を喰い、走る度に空気を吸い、際を打つ波飛沫は背中に飲まれて表皮から消える。

「速い！？」

防衛隊員らは突撃銃から拳銃へ持ち替えるが、トウテツは照準されるよりも早く懐に潜って抜き手を繰り出している。

正面から突き出した手で心臓を食い、側面から浴びせられる連射を全てを味わう。

今日初めて味わうそれに機嫌は上々。

離れようとする協会兵を、死体を踏み台に跳躍して追撃し“接触／捕食”する。

こうして２０人のＳＲは全力を出す間もなく、全員が原型を留めることなく絶命した。たった１人の四凶によって。

更に協会の被害は増す。

防衛部隊を排除しながら食事を続けるトウテツは、東部から南部

までの防衛機構を食い荒らして走った。

『聞こえるトウテツ？
上空にいる結界使いを排除して。すでに3人を撃ち落としているけど、まだ砲弾やミサイルを防ぐだけの硬度を保っている。あなたで2、3人倒してくれれば一気に勝負をつけれる』

「いいぜ」

「させるか！」

瞬間、トウテツは灼熱を味わった。
周囲を赤く染める炎が、柱となってトウテツの命を狙い伸びる。
しかし、高温という武器を以てしても――

「火炎放射機か、珍しいな。協会がこんなの使うなんて」

“全身過食”
その名に恥じぬ異常食性は火炎さえ軽く飲み込んでしまった。

「くそぉ！
俺はナイトメ――！」

果敢にも火炎放射機を持ち出して背後に迫った筋肉質の少年は、

最期に四凶に優しく抱かれた。

「あ～、ナイトメア非武装派か～」

後頭部と腰に手を添えられ、引き寄せられて四凶の体に密着する。
火炎放射機はすでに飲まれ、次の瞬間に自分が飲まれていることを自覚しかけた。しかけた、その瞬間に少年は死に至った。

名も知らぬ少年を真正面から丸呑みにしたトウテツはげっぷを一つ吐き、随所に転がる協会防衛兵の突撃銃を手に取る。弾倉を確認し、試射に数メートル離れた場所に隠れて怯える誰かの尻を蓮根にする。

「あ～たま隠して、しり隠さ～ずぅ～」

音程もなにも無い歌は、セリフを無理矢理にテンションで変換して生まれた騒音。

「なぁ、キュウキ。
協会ってこんなに弱かったか？」

『いいえ。正規部隊の殆どがロシア支部で戦っているのよ。
それに、こちらに残っているはずの正規部隊は未だ確認されていない』

試射の終わった突撃銃を上空の結界術者に向ける。
フルオートのけたたましい音も、今日に限ってはろくに聞こえない。
レーザー照射砲が機能を失い、更に第三防衛海岸の守備力も４分の１程食われて消えた今、残されている脅威は正規部隊とジャンヌ、そして会長のみ。

『まぁ、正規部隊が出てきた所で対策があるから問題ないわ』

弾倉を取り換える。

「なぁ、吸血鬼のアイツはいつこっちに寝返ってくるんだ？」

『まだそのタイミングじゃない。
もう少し私達が攻めるか、協会が新たに戦力を投入してからよ』

クラスター爆弾の爆ぜる上空に向かってフルオート射撃を再開する。

『撃ち落としたらレーザー砲を食べていいわよ』
「本当か！？
あのさ、さっき気付いたんだけどアレ結構いけるぜ。
長年潮風に晒されていたのが理由かもしれないけど、スッゲェ塩味がマッチしてんだよ」

『……そうなの』
「あとさ～、出来れば第二だっけ？
あの回るところに戻りたいな～なんて思うんだよ。
やっぱさ、皆が乗ってきた船がどんな味するのか食べられなかったからさ、ただの足場になった今なら食っても大丈夫じゃないかと思ってさ」

『・・・分かったわ。
そこの残骸は確保しておいてあげるから、まずはレーザー照射砲：フォルトを潰して頂戴』
「やったら食っていいのか？」

『いいわよ』
「よっしゃあ！
とっとと落ちろよ魔法使い！
さぁさぁさぁさぁ、さぁ！！　さぁ！」

結ばれた約束を果たすため、十数個の弾倉を使ったトウテツは５人の結界術師を撃ち落としてみせた。同時にキュウキもトウテツとの約束を果たす為に新たに指示を飛ばしていた。

「制圧した第一防衛海岸の陣地は？　準備が整い次第突撃するように伝えよ。
前線に臆する者は集合せよ！
これより第一防衛海岸から第二防衛海岸にかけて足場を作る！使う材料はこれまでに粉砕されてきた船舶の残骸の中から使える物を選別して組み上げよ！必ずチームで動け！

銃撃が激しい場合は後退も許可する。が、そんな中で最も広く足場を築いた者を戦功第一とする！」

西部から北部へ移動したキュウキは空より降り続ける雪を気に留めた。

数十キロを飛行して移動してきたキュウキだが、体感温度はすでに夏のものではないことを悟った。降り始めて1時間も経っていないとはいえ、既に各方面で影響が出始めているという報告がある。

寒さによる士気の低下。

だが、狙いはそれだけじゃないのは明確だった。

「各方面旗艦、現状を報告せよ」

『こちら東部方面旗艦。

現在１０万人が第三防衛海岸に接近。

その後方で第二波、第三波の９０万人が足場の構築作業を開始。

第四から第八波の２１００万人が第一防衛海岸周辺で準備中。

第九波以降は艦隊ごとに整列して待機中。

現在被害は９万強です』

『こちら南部方面旗艦。

現在２万人が第二防衛海岸で陣地を構築中。

なお、先行したトウテツは現在西部レーザー砲の破壊中。

敵レーザーによる被害は……１００万に達すると予想されます。

構築改装作業は２０万で開始。後続の６００万を加え、急ぎ次の防衛海岸へと足を延ばせるように仕上げるつもりです』

『こちら西部方面旗艦。

南部方面部隊同様、レーザー照射砲による被害甚大！死傷者多すぎて不明！
くそっ！どんどん砲弾撃ち込めよ！
レーザーは壊れたが、本部から変なＳＲが現れた！足場の構築作業は当分かかりそうだ！
すまねぇが期待しないでくれ姐御！
絶対にでかして見せっから！』

『……こちら、北部方面旗艦。
緊急事態。
協会のＳＲが単身突入し、こちらの艦隊に甚大なダメージを与えている。
敵ＳＲは“トウコツ”
ＳＲ要員の少ないこちらの部隊で太刀打ちは不可能。しかし、足止めはできるはずなので、全力を以て協会の主力であるトウコツを足止めします。
それから報告です。
現在、こちらの損害は協会の攻撃で２８万３３０９人が死傷。トウコツの攻撃で２万１９７人が死傷。
人工平地の構築作業に要する時間は３時間半前後と思われます』

「各方面艦隊、了解。
数がこちらの強みよ。
ＳＲは極力消費しないよう、慎重に攻めるのよ。
北部方面隊はトウコツを西側へ誘導。
西部方面隊は至急、決闘場を確保。どんな手段を用いても構わない。
南部方面隊はトウテツへ連絡。トウコツを西側へ誘導し、そこでトウテツを当てて討ち取る！」

『了解！』

緩急に動きを見せる各艦隊の中心で、空母から補給を終えた艦載機や輸送ヘリが飛び立つ。

同じ頃、協会では対空防御を固めるために忙しない配置変更を終えようとしていた。四凶が次に繰り出してくるのは航空戦力だと確信を持ったジャンヌにより、結界魔術師達は強度を増して範囲を縮小し、第二防衛海岸の大半は命辛々後退を終えた。　第三防衛海岸に防衛戦力を集中する。

「緊急事態！キュウキ司令！」
「これは――！ジャンヌ司令！」

二つの巨大な勢力、戦争を彩る2人の司令。
彼女たちの指示により震え続ける海上の戦場という会場が――最前線が、固まったのは2人の意識が完全に戦争へ戻った瞬間だった。

「何てこと！」
「あまり良くないタイミングで来てくれわね……」

2人はそれぞれ違う方角を見て、それぞれ違う敵を意識して毒づいた。

「東部方面隊より連絡！艦隊の後方より無数の結晶及び、黄金の侵食が伝染しているとのこと！」
「侵食を防げません！味方の船が沈んでいます！」

「黄金と結晶、侵食。
あいつか」

キュウキはコルスレイという魔法使いの名前を思い出していた。
黄金と結晶を操る魔法使い。
同じく新たに出現したＳＲ達の存在に協会司令部も騒然とした。

「四凶西艦隊の図上、第一防衛海岸上空に複数の強大なＳＲ反応！」
「生体確認！
ＳＨＭサーカスです！」

「あのサーカスが……ヒラリー・マトン。
彼がどう動くかで私達の対応も変わる……彼らと交信できるか試みて！今すぐ！」

西側の空で、Ｍｒ．シーズンの雪と共に桜色の花びらが舞い下り始める。
東側の様子を確認したジャンヌは、そちらにコルスレイが出現したことを知らされて動揺した。
ボルト・パルダンの直弟子とういだけで相当な脅威であることに間違いはない。現に、東側の艦隊は黄金に侵食され、どこからともなく生成された結晶に貫かれ、無数の艦船が輝きを放って海の底へと消えている。

「コルスレイの本体は！？」
「ノイズが酷くて確認できません！」

西側に巨大な水柱が立ち上る。
船を巻き込み、人を呑み込み、混沌を撒き散らす。
水を操るサーカス団員が、水柱の登頂に乗って急降下を始めた。
軌跡のように水使いを追う柱。水柱を形作った大量の海水。それらが艦隊の隙間を縫って走り、甲板に姿を晒していた四凶軍の歩兵たちを海へ押し落とした。
疾走する姿は水龍の如く、衝突の威力は津波の如し。

西側の空から見下ろす協会本部。
その損害にセブンス・ヘブン・マジックサーカスの団長：ヒラリー・マトンは銀色仮面の鼻頭を指でなぞり、上空で待機している全団員に告げた。

「さぁ、古来中国式のお清めは終わった」
「マトン……やり方が間違っているぞ」

傍らで腕組みする副団長の獣人が突っ込むも、銀製マスケラに目元を隠した団長は聞く耳を持たない。

「ミミーの水掃除は終わった。
やぁ、こんばんわ。

皆、この戦場に足りないモノが何か、気付いている者はいるかな？」

「はい！笑顔！」
「はい！余裕が足りていないと思います！」
「右に同じく」
「笑顔に一票」
「う～ん……自我、とか？」
「入場料だと思う。うん、入場料。入場料だ」

「残念っ！
みんな外れぇ！
そして、ノーヴィス君は入場料しか言わないから、後で厳罰だぁ！
さて、残りは2人。
どう思う、ポルシカ」

銀仮面の奥で眩さを錯覚させる眼光と一緒に質問を放たれ、副団長のポルシカは目を瞑って考えた。

「はたして我らがサーカスの誇る“万獣王”こと、ゲイリー・ポルシカにこの答えが分かるでしょうか！
さあ、人と獣の知性がいっぺんに試される時が来ちゃったぞ」

「やかましい！余計な御世話だ！
この戦場に足りないものだな？　俺なりの解釈を言うなら“音楽”だ」

団長の視線が移る。
最後の未回答者、サーカスで一番最後に入団した日本人。

「お花配りさん――陸橙谷麻(りくとうやあさ)君。
君はここに何が足りていないと思う？」

「僕はポルシカさんの意見に一票入れます。
が、敢えて僕だけの意見を言えというのであれば、それは“華”
だと思います」

「いいよいいよ。ノーヴィス君と違い、それが僕の答えに最も近い。
さぁ、諸君！
今宵、我らの頭上に月が無いのは幸運だった。
まるで雲が我々に騒がせと言ってくれているように思えないか？」

団長が手をかざす。
その挙動だけで団員達はＳＲを解放した。

「厚い雲、協会の塔。
すでに天幕は出来上がっている」

「観客は四方八方」
「雪が降る時まで我らを待ち」

「来る我らに目を上げ」
「手を伸ばし」

「さあさ踊れと」
「歌えと熱打ち」

「我らが第七天国の扉を閉める。だが、まだ閉めてはいけない」
「花（チケット）はまだ、揃っていない」

高くかざされた手が足下を目指して降りる。

「構わない。
ならば、我らは永久に付き纏われようと、全ての笑理者（しょうりしゃ）揃うまで
見せ続けて待とう。
準備はいいね？
ゲイリー・ポルシカ。
ナタ・ナナナ。
スミス・ガンナー。
アルター・ノーヴィス。
ラブ・タフ、ラブ・ラフ。
ザイツ・バクライアン。
陸橙谷アサ」

即興が終わると同時、四凶艦隊西側にこの日最大級の水柱が天へと迫った。

「サーカスが来たぞぉ！」

水龍が海中に消える。

同時に劇団の7人が四凶軍艦隊に襲いかかった。

団長のヒラリーが手を叩くと船は泥船と化して沈み、スミス・ガンナーによって戦闘艦をシージャック。その奪った戦艦をザイツ・バクライアンが操船して隊列を大いに乱す。それと同時に、四凶によって制圧された第一防衛海岸でも、混乱は深化していた。　ゲイリー・ポルシカを始めとしたサーカスの体術員たちの大暴れ。

それだけで第一防衛海岸の西側は大量の赤色に塗替えられていく。

鬼の金棒が唸り、獣の爪が切り裂き、パントマイマーの壁が人間をすり潰す。人ごみの中をアクロバッターは蛇のように通り抜け、綱渡り師は攪乱のために四凶軍の頭上を走り回った。

反撃の銃弾はすべてヒラリー・マトンのマジックによってボールガムへと変わり、一切の殺傷力を失っていた。ナイフを抜けば刃物の形をしたキャンディーが現れ、手榴弾を投げれば中から爆ぜ出てくる物は紙テープというパーティクラッカー仕様。落ちている破片を拾ってもクッキーに変わり、懐から拳銃を取り出すと水鉄砲。

何を手にとっても殺傷力を得ることは不可能だった。

さすがの四凶軍も、素手で勝てない相手であることを悟って後退。後退というよりも逃走と言った方が正しい程の慌てぶりだが、現場指揮官が誰よりも慌てふためいているために起こった現象である。両軍の最高司令2人から見ても逃亡ではなく後退の範疇だった。

「完全魔術師と呼ばれるヒラリー・マトンに、万獣王のゲイリー・ポルシカ!?

それに、あの金棒を持った奴って、哭き鬼の陸橙谷アサじゃないか！」

指揮を執るＳＲの不安は現実になっているものと、これから現実になろうとしているものがあった。

団長のヒラリー・マトンによる魔術で装備のすべてが日常用品に変わり、副団長のゲイリー・ポルシカによって第一防衛海岸の仮設拠点の大半が陥落した。戦闘開始からわずか5分で成った異変である。

極めつけの一撃を放とうとしているのは鬼のＳＲ：陸橙谷アサだった。

「華創実誕幻：天段――瞳断銃矢（どうだんつつじ）」

途切れたと思われたレーザーの閃光が再び艦隊を薙ぎ払う。衝撃波を伴う特大光線の一撃は、アサの意思で上下左右に射線を移して艦船のみならず航空機や潜水艇に至るまでを吹き飛ばす。

爆発の連続。

逆立つ波に混乱する四凶軍を、サーカスは更に叩くのだった。

同時刻。

協会本部の会長室では静かな説明が始まっていた。

「――いいか、芹真。メイトス。

それを君らに頼みたい」

否定と人狼の回答は肯定。
任務を請け負った2人が会長室を退出するのと、ディマが入室しようと取っ手に手を掛けたのは同時だった。
意外な人物の登場に驚く芹真。
予想だにしなかった2人組に眉を動かすディマ。
魔女に道を譲ってから部屋を後にする2人。
改めて闇影の魔女と向き合ったオウルは渋々、気の重さを全体で表現しながら一枚の紙を渡した。

「それが協会で掛けたロックだ。
制限時間はどんなに長くても3分だ」

「分かっているわ。
それでも危ないくらいなんだけど……」

光の解除コードを手に、早速ディマは大量の闇を自分の中に集め始めた。幸いにも今は真夜中で、暗闇は掃いて捨てても溢れるほどに満ち満ちている。

「ボルト・パルダンを完全に解放するわよ」

確認の一言を告げて闇影の魔女は部屋を後にする。
部分停電させた会長室の暗闇の中、オウル・バースヤードは新た

な采配を頭で確認し、暴走の可能性と勝利の確率を計算し始めた。

南側にメイトス。

北側に芹真。

そして、最終防衛線でありながら、新たな反撃砲台としてＳＲ最強の火力を有するボルト・パルダンを解放する。

この面子をぶつければ四凶軍の大半から本部を護ることは可能だ。正直な所、彼らは防衛海岸よりも信頼出来る防御力を誇る。それに護ってもらえるという贅沢を噛み締めつつ、頭の中に2つの思考を高速で巡らせる。

イレギュラーＳＲの目的は何か、織夜秋のＳＲは何か。

（すでに四凶側の死傷者は億を超えている。

それなのに死体から何か、光のようなものを採取しているコルスレイ。

四凶軍を観客に見立てて攻撃するサーカス。

彼らにこの戦争に参加する理由があるのか？　恩を売ろうなどと考える人物でもない。かと言って彼らが“舟”を目指して来ているとは考え難い）

（ここから降りていく時、織夜の展開した黒い球状空間に光が消えた。ディマの影絵：空腹の土、と似たような印象を受けたが、影に触れていなかったレーザー砲の先端をも飲み込んだことから闇と影に影響するものではない）

集結したイレギュラーの中で特に異彩を放つのがヒラリー・マト

ン。不気味を漂わせているのはコルスレイ。しかし、誰よりも激しく命を消滅しているのは織夜秋であった。

イレギュラーがイレギュラーを惹き付けたのか、それとも“自分”がこの戦場を想い望んだのか、オウルは思考を停止して席を立つ。

自分が呼んだのか、彼らが望んで足を運んだのか。

「しかし、すでに時間だ」

色世トキが協会本部に近づいていることを直感し、同時にコントンが戦場に紛れこもうとしていることを感じ取った。

この2人が戦場に降り立った時、本当の渾沌が訪れる。

カオストリガー。

2人という根源が生み出すカオスを覗こうとは思うが、見続けようとは思わない。それが会長の願いだ。

だから、

SRと人の渾沌を見届けた後——この世界をリセットしようと——

—別れをオウル・バースヤードは孤独に決意した。

第５０話－協会ｖｓ四凶！－（後書き）

眼下に広がる光景はまさに地獄だった。
未だかつて見たことない大勢の人間が人工島である協会本部に殺到しているのだから。

無数の人間、大勢のＳＲ、無残な殺し合い・壊し合い。
そんな地獄へトキは視線を凝らせて送った。

「トキ、まずは会長へ会うことが重要よ」

崎島に止められながらも目線だけは眼下の人波に向けられていた。
この艦隊のどこかに倒すべき四凶２人がいる。そう思うと飛び出したくて仕方がなかった。
ヘリが結界の中に入り、崎島のＳＲによる偽装が解かれる。比較的安全な本部のヘリポートが西側にあることを伝えられて旋回を始める。
ふと、トキの視線がある人物を捉えたのはその時だった。

「――――」

本部から少し離れた金属の海岸で、一際目立つ戦い方をしている少女と視線がぶつかる。

「トキ」
「――誰だ？」

直後、織夜は時と出会い、トキはオリヤという存在を初めて見たのである。

トキが不思議な感覚に見舞われる中、アキは黒球を遠距離から操り、ヘリを撃墜し、協会長室へと墜としてみせた。

第５１話－戦場の禍央－（前書き）

ふと、キュウキは思いつきで小さな謎に気付いた。

（あぁ、なるほど）

それはこれまで滅多に気に留めることのなかったナゾナゾのようなもの。

深く考えることもなかった。

（確かに。

彼が人類最初のＳＲにして、人類最長寿のＳＲであるという話は聞いたことがある。

それで彼のＳＲが支配。

仮にその力が原因で多数のＳＲが生まれたとしたら、彼が全てのＳＲの親とも言える。

“オウル・バースヤード＝Ａｌｌ・Ｂｉｒｔｈ－Ｙａｒｄ”と名乗っているのか）

雑念に駆られた飛翔中のキュウキは、飛んできた死体と頭同士をぶつけた。

第５１話　戦場の禍央

『ジャンヌ司令！
特殊工作員のフィング・ブリジスタスより連絡！』

『フィング・ブリジスタスですって？
ホートクリーニング店に所属しているとはいえ、今までなぜ連絡を怠っていたか……音信不通だった理由を最優先で聞いて』

後に、四凶の乱と呼ばれるこの戦争。
最も激しい戦域に集うイレギュラーに混じり、その男は協会の地を踏もうとしていた。

―協会　ロシア支部―

本部から下された命令が四凶軍の猛攻を防ぐ全ＳＲに伝えられた。

“コード　７―５８：Ｇｏｉｎｇ　Ｄｏｗｎ”

その命令コードの内容を知らない下級ＳＲ達は上官の命令でその内容を知らされた。
ミッションレベル７のケース５８――それは、全員が可能な限りＳＲを常時解放しておけというもの。

これが会長より下された命令である。普段から穏便な姿勢を貫く協会のものとは思わせない凶悪で、理不尽を覚えさせるような命令のために抵抗を覚える者はたくさん居た。いくら敵が四凶だからと言っても、そのほとんどが武装しただけの民間人。

『全員、解放せよ』

それでも、殆どのＳＲは四凶軍に解放状態で臨み始めた。

世界を二分する境界の混濁。

当然、それは協会本部でも起こっていた。

―協会本部　海上―

ただならない気配にコントンが動く。

人ごみに紛れ、海上から火の手上がる防衛海岸と協会本部を見比べる。予想通りの進軍具合と、予想外な協会の反撃気配に携帯電話を取り出してリダイヤルボタンをプッシュ。協会本部から漂ってくる気配で、向こうの本気が窺えた。ほぼ全員がＳＲを解放している。

「キュウキ、コントンだ」

『コン――今までどこに？』

「北極だ」

『北極？
どうやってここまで？』

「ちょっと前に知り合った奴がいてな。
そのテレポーターに頼んでここまで連れてきてもらった」

『……舟は？』

「なかった。だからこっちに来たんだが、やばい状況だな」

第一防衛海岸を上り、船の残骸を超えて双眼鏡を構える。
突撃した第三防衛海岸の光源が全てダウン。協会本部の明かりも、必要最低限の非常灯を残して港湾部から司令部へかけて順に消えてゆく。闇が第二防衛海岸まで伝播する。協会の光源設備だけでなく、四凶軍の用意した野戦装備も悉く光を失っていく。

「狙撃だ！」

どこからともなく飛来する弾丸に闇が広がり、恐怖が軍隊を麻痺させてゆく。

「キュウキ、これはマズくないか？」

『本気が来るわね、協会の。
ところで、舟が両極になかったら次にあると予想すべき場所と考えるのは、協会本部なの？』

「あぁ、ちょっとした証拠も得た。
おそらく協会本部――あそこの、どこかに隠しているはずだ。ノアが」

不機嫌を表情に零す。通信端末の向こうからキュウキの舌打ちが聞こえた。本部、協会本島から溢れる気配は人間以外の存在から放たれるものだ。

まさしく渾沌と呼ぶに相応しい渦に、興奮が疲労を吹き飛ばした身体を向ける。

そんな、ただならぬ存在感に多くの四凶軍ＳＲ達は気を取られ、僅か数秒でも戦場に静寂が降りたことに気付き、遅れた。

「何――？」

いくら渾沌に慣れていると言っても、戦場の最前線に訪れる静寂に不気味さを感じずには入られない。

コントンが走り出した直後、第二防衛海岸が紅蓮に包まれた。右から左へ炎の波が移り、海面に火炎色を映す。高熱と破壊力を持った突風が走り抜ける。爆発に飲まれた人影が宙を舞い、残骸と化した者物が海面に触れて水飛沫を上げる。

レーザー砲充電装置である溝に転覆したタンカーに達すると、今度は背後で爆発が起こった。

（フクククッ！ジャンヌめ、予め防衛海岸に爆薬を仕掛けていたか！）

振り返ると第二防衛海岸と同じ大火、破壊と殺戮の光景が広がっていた。苦労して制圧し、奪い取った攻撃拠点がたったの一手で覆されたことを自覚する。同時にそれが狼煙代わりであることも。

「協会のＳＲだ！
ＳＲが来たぞぉ！」

協会本島を取り巻く3つの巨大リング：防衛海岸、その内の2つが赤に染まった直後、陸海空とおよそ人が交通手段を得たフィールドに敵の正規戦力が堂々たる出現を果たした。
彼らの出現によりキュウキも自軍のＳＲを中心に編成した部隊を前面に出した。後退を見せては突き崩される恐れがある。
そういう意味で四凶に選べる行動は限られていた。

近代兵器と神話と理想が混じり合い、消し合い、奪い合いを繰り広げる戦場は、阿修羅であろうと長生きは難しい。どんな強力な殺人兵器があっても等しくＳＲに通じることはないし、どんなＳＲを持っていようと、皆がそれを無限に展開させることが出来るわけでもない。長引けば長引くほど、多くの死者がでることに間違いはなく、その中で人はＳＲより命を落としやすく、ＳＲは人より多くの他人に影響できる。
しかし、そんな渾沌の渦中において誰よりも長生きする者達（れいがい）がいるのもまた事実であった。

「おやおやおや？」

コントンの知る限り、頭上に現れた男もそういった類のＳＲ――エースとでも言えばいいのか、とにかく人よりも生き残る力に長けている人物だった。

「こんなところに“渦”が巻いているじゃないか！」

「ヒラリー・マトンか……渦はあそこで、だろ？」

燕尾服に赤いマント、銀色のマスクという変態劇団長の目線と言葉に付き合い、協会ＳＲ部隊による蹂躙が始まった第三防衛海岸を指差す。

真に渾沌が渦巻いていると言えよう景色。

先制攻撃を仕掛けた四凶軍に言えることではないが、あれは明確な侵攻、そして虐殺である。

「いやいやいやいや。本物の渦はゆっくりと、穏やかに回るものだよ。

時に激しく回ることはあっても、回って回しているならそれが渦という役になってしまう。果たして君がそれに気付かないということは有り得るのか、或いは――」

「何が言いたい？」

第一防衛海岸に降っていた雪が第二防衛海岸まで降雪範囲を変え

る。

雪の降る夏の夜、太平洋上で完全魔術師と呼ばれる男が仕掛けた。

虚空から手に取ったナイフを、粗暴ながらも四凶の急所を狙って投げ放つ。一度に複数本。途中で分裂し、倍増した多数のナイフがコントンに迫った。が、この攻撃が挨拶程度の仕掛けでしかないことを双方理解していた。

デザートイーグルとＭＡＣ１０サブマシンガンの銃弾が迫るナイフの大半を落とし、無限の刃弾激突を繰り広げる。

スローイングモーションからナイフを取り出す素振りを一切見せずに新たなナイフを手に取り、投げ飛ばす。対するコントンもリロード動作を見せずに二つの銃器を酷使する。

遠距離戦では勝負が進展しないことを悟った2人は急激に距離を詰める。落としきれない相互の得物がそれぞれ、コンマ数秒前に体のあった空間を駆け抜ける。

無傷のまま2人の距離は一気にゼロへと変わった。

互いの得物が空中に弾け飛び、雪に混じって金属の破片が降る。

「君のタネは空間操作か時間操作といったところかな？

でも、本質はもっと別のようだね」

海上から空中へと高度を変え、第二防衛海岸頭上を通過する2人。

飛来する銃弾も意に介さず、躱すなり無力化するなりして質疑応答を始める。

銀のマスクが光り、混沌を正面から見抜く。そこにはタネも仕掛けもない。

混沌に言葉による奇襲は通じない。何故なら混沌。既に己の中にソレは過去として渦巻いている。

「分かるのか、この嘘が」

睨み合いながらも2人は備えていた。
弾け飛んだ武器、それぞれが落下して戻ってくるのを。

「さぁ、どうだろうか」

得物が入れ替わっても、獲物が入れ替わることはない。
デザートイーグルの銃口から吐き出された9発のショットシェル。
コントンはタイムリーダーで加速し、幅広く襲ってくるそれらを最低限の斬り落としで躱し、一気に間合いを詰める。
魔術師も詰める。銃を頼りに遠距離を保とうなど考えてはいなかった。今夜のメインパーソンが目の前の混沌であろうと“マジシャン”の自分が行うべきことは唯一、来客を楽しませ、歓待することだった。

「ククククッ！
そういう貴様のタネは全くワケが分からんな、ヒラリー・マトン！あ」

「ヒント。
巷で“完全魔術師”なんて呼ばれているんだ。
君も聞いたことがあるだろう？」

ナイフを魔術師の心臓に突き――立てた感触はあった。
だが、残された結果は予想を裏切った。一瞬腕を伝った刺突の手応え。
しかし、ヒラリー・マトンという魔術師はその瞬間にコントンの背後に回っていた。

「コレをお返ししよう」

低速世界を展開。
振り返りざまの斬撃。逆手に握ったナイフの刃先がデザートイーグルを弾き飛ばす。
胴体部分に大きな隙が出来た。　一瞬の停止世界で、腕を外側に開いた魔術師の頭上に回り込む。踵落とし。二度目の違和感は手応えの消失とはまた違う感触だった。

（風船！？）

ヒラリー・マトンが一瞬で風船に代わり、破裂音を立てながら形を失う。
次の出現は眼前だった。
但し、殺意を纏うわけでもなく、僅かに覗く口元を笑みと浮かべ、言葉を述べるだけという不思議な行動である。

「種も仕掛けも、仕込みもありません。それでは、良き夜を」

微動だにしない2人の頭上を、負傷したヘリが通過してゆく。

（あのヘリは、協会の？
何故今頃？）

（おや？
シキヨトキの匂いがするぞ？）

潮風にマントをはためかせながら、空中をスライドバックで退いてゆく。
協会本部の、しかも会長室があったと記憶している場所に向かって墜落していくヘリを見て、コントンは無言で魔術師に別れを告げた。

「ハ、ハハハッ！来たわけだ！」

ヒラリー・マトン同様、ヘリの搭乗者を見破った四凶は走った。
防衛海岸を通過し、協会本島の地を踏み、しかし其処で我に返る。
待て、いまはトキの相手をしている場合じゃない。
優先すべきは舟だ。全ての隠れ家を探りつくした。ならば、残されている場所は本部以外に有り得ない。

（もしかすれば、トキの方から出向いてくるかもしれない……）

笑みを零して着地、同時に周辺のＳＲ５人を静止世界に入ることで暗殺し、コントンは誰の目に留まることなく協会本部へ侵入を果たす。

その直前、コントンは色世時を目指す別のＳＲを感じ取った。分かる者には取り巻く殺意に含まれる個人名さえ、目で見る以上に理解の速い執着心が名を結んで伝える。それがキュウキから聞いたオリヤという少女であることを悟り、舟探しに邪魔者が入る可能性が減ったことにツキ回りの良さを自覚した。

－ＡＭ　０２：３３　協会－

突然安定を失ったヘリはまっすぐ協会本部司令塔に向かって墜ちた。

閃光の絶えない戦場のある意味中心部に突っ込もうとするヘリの中、トキはクロスセプターで白色半透明の半球を創り出し、ヘリの全搭乗者を半球内に収めた。機内で騒がしいほどに働く警報に戸惑いつつも、ヘリの操縦者らは色世トキのＳＲがどういうわけか発動している、と理解していた。

夜景に薄ら浮かぶ塔の輪郭が迫る。衝突までわずか数秒しか残されていなくても、トキにとってそれは十分な時間であった。

「シートベルトを外して！」

騒音に負けないように大声で呼びかける。
タイムリーダーの発動。
低速世界の中で動くローター、移り行く景色、否定のＳＲで低速世界に入り込んでくる崎島。

「何をする気？」
「脱出だ！」

白色半球が色素を失い始める。
質問したばかりの崎島はすぐにその意図に気付いた。ヘリのパイロットはＳＲとはいえ弱小なＳＲの持ち主で戦闘に向いた人物ではないし、ヘリの墜落に耐えられる人物でもない、免許を持っているというだけで協会内のこの職にありついた人間だ。　そんな人間が今、トキの白色半球内で、色世トキ同様に“動けている”のだ。

（時間の共有……見た所、トキと同じ体感速度になるようね）

否定のＳＲを解除し、トキの時間に触れて気付く。
低速化している世界では音の伝わり方も、物の動き方も違って見える。それなのに、自分というモノは低速世界に縛られない。
激突するであろう壁の接近が僅かに遅れている。すぐに来るべきだったものが来ないという事態に僅かな戸惑いを覚えつつも、いますべき事を理解したし、良き手段だと思った。考察している最中にパイロットらが後部へやってきた。

「装備はいるか！？」

慌てながらメットを投げ捨てた軍服がトキらに問う。申し訳程度といいながらも榴弾発射機付突撃銃と拳銃を取り出して渡す。

金属のひしゃげる鈍い音が機体全体に伝う。回転羽はすでに衝突を始め、ついで操縦席がつぶれ始める。低速だった世界が徐々に時間を取り戻し始めたことに気付き、トキは最終確認ということで次の行動を説明する。

ヘリはいま、丁度中間のガラスが張ってある階に突入しようとしている。これは、壁に阻まれて下に落ちるよりも非常に生き延びやすい状況であると。

「やるべきことは簡単だよ。
ヘリが半分でも建物の中に入ったのなら、そのまま部屋に飛び移るんだ」

それはいとも簡単に、言った通りに実現した。

壁面を破壊して協会本部の中央塔に突っ込んだヘリから、妙に広い部屋へと飛び移り、急いで部屋の外へと避難する。不時着の轟音が戦場の演奏を瞬間的に掻き消し、直後の爆風は外より伝う振動よりも強く内装を震わせた。

衝撃が収まってすぐ、崎島は安全確認と部屋の位置を確認するため周辺に目を配り、そこで初めて感情を表情に表した。目線を追うと、そこにはネームプレート『Ｒｏｏｍ　０』という文字。

「か、会長室……！」

暗闇の廊下を照らす火炎と短絡電光の中、崎島の発言と共にパイロットの2人が倒れこんだ。何の前触れもない2人の傾倒に、トキと崎島は周囲への警戒を最大限にまで高めた。まだ四凶軍が協会本部に侵入したという報告はない。だが、まだ謀反という可能性が残っている限り、決して四凶軍の仕業でないと確信することはできない。

「やっと来たか」

暗闇に溶ける“何か”が崎島の警戒を解かせ、トキに多大な危機感を与えた。何もなかった空間に突如として存在を現した人物の、その声から協会長：オウル・バースヤード本人のものであることは分かっていた。

分かったからこそ、トキは彼に対して違和感を覚えたのだ。前に会長と話した時は、もっと無垢で清々しい人間と言う印象があった。しかし、暗闇の中で輪郭を得始めた会長からはどうしてか、渾沌とした雰囲気が真っ先に感じられた。どうしてなのか見当がつかない。人として最低限の輪郭を得た会長のつま先から毛先まで改めて見回しても、明確な変化はないはずなのに雰囲気的な違和感を拭えない。

「さて、パーティーの主役2人がやっと揃ったわけだ」

「……会長？」

暗がりから一歩踏み出した会長に、崎島も違和感を覚えて気を引き締める。ここにきてドッペルゲンガーというＳＲを思い出し、今目の前にいる会長がそれではないかと疑った。

ゆっくりと、時計の秒針よりも緩やかな歩幅を刻む会長の眼はまっすぐにトキだけを捉え、口は理解を求めない言葉を物静かに語り紡いでいる。

「俺の予想が当たっていれば織夜秋のＳＲは全てに対するサインであり、同時に大きなきっかけとなるだろう。

織夜秋を確立させるために必要な者は彼女に求められた人間でなくてはいけない。且つ終焉に対するある程度の知識と経験値を有し、それに抗ったり覆すことのできる力の持ち主であること」

距離４メートルの位置で足を止める。

彼がＳＲを使っていることに気付いたのは、ヘリの不時着場所である室内からの煙がはたと止んだ時である。火炎の熱も遮断されて冷たい空気が張り詰め、短絡による電光も途絶え、しかし、会長の立っている通路の壁に埋め込まれた非常灯だけが通常作動していた。

「色世時を連れて来てくれてありがとう。崎島、君は帰ってもいいぞ」

「え？」

「さて、トキ。

君に会ってもらいたい人間がいる」

暗闇の中、上下を黒のスーツで飾った会長の顔から一切の表情が消える。切れ長の目は金属のように無機質で、いままで気に留めることもなかったウェーブが若干掛っている少し長めの髪は非常等の光を受けて４色に輝いていた。

何が起こっているのか分らないが、確実に会長は以前に言葉を交わした人物とは同一でないと分かった。

「待ってください会長、パイロットの２人が――」

「あぁ、じゃあ一緒に寝ていてくれ」

時間を止める。

トキがＳＲを発動することを予測していた会長はトキの感覚を盗み、制止世界の中に侵入して行動を始めた。一気に距離を詰めて当て身を狙う会長の前に立ち、肩と腕を正面から押える。

「待ってくれ！

どうして崎島さんを攻撃するんだ！？」

「これから起こること、その結果選ばれる未来、知った人々がどういった行動に出るか予想に苦はない」

冷たい瞳を正面から見返し、まず最初にその色が絶望によって塗られていることに気付いた。会長が何に絶望を覚えているのか、逡巡した隙を突かれ、掴まえた会長をあっさりと後退させてしまう。

幸いにも会長は次を仕掛けることはなかったが、不幸なことに崎島は否定のＳＲを用いて会長の言葉を聞いてしまった。

「世界中にＳＲが発生した」

崎島の疑いはますます強まり、目の前の会長を偽物と確信し始めた。　横に並ぶトキは会長の瞳に新たな色を見出していた。業火というレベルを超越した怒り。まるで、それが足元からなる全てを作り上げているような錯覚を伝えるほど濃密な憤怒。

「四凶も増え、戦争を始め……」

拳銃と金棒を構える。

「ついには“色世時／織夜秋”という名前で始終が形を持った」

大きな振動が協会本部司令塔を揺らす。
気付けば解除している制止世界に驚き、トキは慌てて照準を会長に合わせた。照門と照星が重なる向こうで、会長は更なる変化を見せていた。
絶望から憤怒。
怒りから悲しみ。

「でも、まだ織夜がそうと決まったわけではない……だから、これは賭けになってしまう」

劇的な変化を繰り返す会長の様子に、崎島の疑問は爆発的に増えた。　彼は本当に会長なのか、そもそも偽物ならなぜこんな戯言を繰り返すのか、トキに何を伝えようとしているのか。

何一つ理解できない状況だからこそ警戒態勢を簡単には解かない。これが罠でないと言い切れない限り。　それなのに、

「織夜秋がここにいる？」

トキは警戒を解いていた。

「そう。
君の対は確かに居る」

虚ろ目ながらも会長はトキを観察している。
どう考えても目の前にいる会長はいつもと様子が違う。本人であることを証明する力を使ってこそいるが、様態の異常さは今までに例を見ないし、聞いたこともない。渾沌とした戦場の中心に在りて、会長の中にも渾沌が生じたのかと懸念する。それと同時に会長は、

「会ってみないか？」

トキが知っているあの時の――遠足先で知った会長に戻っていた。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第５１話－

－戦場の禍央－

協会本部。

この巨大な人工島を上空から見れば菱形（ひしがた）をしていることがわかる。

北西のエリアに軍事施設。

南東のエリアに生活（娯楽を含む）施設。

その中央に聳え立つ司令塔。
対角線で分かたれた境界線。
この巨大な人工島を囲むのは3重の防衛海岸。

北西エリアの防御力は一国の軍隊を簡単に跳ね返すだけの仕掛けがあり、南東エリアは軍事施設以上に凶悪な防御機構が待ち構えている。司令塔にもレーザー照射砲が隠されており、防衛海岸も艦隊や航空戦力から潜水母艦に至るまで、あらゆる敵に対応できるように作られ、配置されていた。
だが、それはあくまでも限定された数に対応できるという家庭の話で、つまり非現実的な数に対する対応の可否は含まれていない。どんなに出方を先見できようと、数億という大軍を相手取るシミュレーションは行われない。

―協会　司令部―

その原因が圧倒的数であることは理解していた。むしろ、それを踏まえて始めたシミュレーションと比較してみた現実の被害は実の所小さい。まだ許容範囲内である。

「ナイトメアの皆さん、よろしくお願いします」

協会長秘書でありながら、司令官でもあるジャンヌの合図に彼らは動き出す。

「ケイノス、頼む」

『了解です』

現ナイトメア非武装派のリーダーが指示を飛ばす。
まず最初に応えたのは空間を操る魔法使い、次いで風使いと四季使いだった。

「リデア、台風をインターセプト。
シーズンは雪を続けてくれ。
各員の圧縮が終わり次第、ケイノスはリデアの台風を出来る限り凝縮。それを防壁として1時間保て」

『了解！』

受けた命令を、3人は直ちに実行して見せる。
不安定な大気をリデアの風が一つの流れにまとめ、突風を生み出す。
ナイトメアの“たった3人”により、四凶軍は前線部隊と後続部隊を分断されてしまった。
リデアの台風が完成するまでに要した時間は2分。３００ｋｍ級を空間圧縮で１０ｋｍという超小型台風に変え、同時に破格の破壊力を有した風の壁が成立したのである。

一西部　前線一

特に後続と最前線の挟間に位置する部隊は、全滅に等しい結果を迎えようとしていた。協会本部からの攻撃に加えてイレギュラーの

出現、悪化し続ける天候は雪から雪嵐へ。転覆する船舶が進退を窮める害因となり、突如として途絶えた通信に指揮系統は麻痺して怖気逃げ出す者達を作り始めた。簡単なコントロールを植え付けられた一般人だけでなく、自我を以て協会に挑んでいるＳＲ達もである。

何故なら、協会の“本命”部隊は未だに確認されていないのだから。通常戦力だけで数千万もの被害が出ている。いくら味方の数が圧倒的に多かろうと、消費される命の殆どが無意味に等しい死を辿るなら自ずと士気は下がるし、逃亡者が出てくることも至極当たり前の反応であった。

「こちら西部艦隊！
敵ＳＲのものと思われる台風により被害拡大！」
「弾幕も一向に弱まる気配がねぇ！」
「最前線の奴らから応援要請！」
「泣き言は後にして突っ込め！」
「怯むでない！
南西からの侵攻が比較的容易ぞ！」

「……何だ？　あの、たくさんの小さな光は？」

暴風が壁となる。
前後で分断されて混乱する艦隊。
眼前の嵐はすでに風ではなく鉄壁と変貌を遂げ、触れるもの全てを呑み込み、切り刻み、すり潰し、あらゆるものを跳ね返す巨大な兵器となっていた。

異変はその中。外からも内からも見ることは出来る、とても小さ

な光の群れ。
レンズ越しに観察したそれは光の蝶々。
それを目撃した四凶軍の誰もが疑問を抱いた。
なぜ暴嵐の中を羽ばたけるのか、あの蝶は一体何なのか。
疑問と旋風が渦巻く戦場で、嵐の内側に閉じ込められたキュウキは報告でその蝶のことを聞かされて驚愕した。

「もうか！
全軍構えろ！　協会の英雄部隊（ヒーローズ）だ！！」

衝撃波が嵐――すでに巨大竜巻と化している旋風の障壁を揺るがせた。

『こちら北部艦隊。
敵は鏡装、ペルセ……――っ！？　撃ち返せ！』

『南艦隊。部隊がシンドバッドとその直属部隊により甚大なダメージを受けています。
指示を……求む』

「北部艦隊！ペルセウスに銃器を向けるな！体術で挑め！
南部艦隊はまず船長を孤立させることだけを考えて行動！捕獲や殺害は二の次！」

『東部艦隊ですが、英雄とイレギュラーが戦闘を開始。これより潜航して協会本島への侵入を試みます』

『キュウキ司令！西部だけど、桃太郎の奴が来やがった！
悪いけど援護出来そうにねぇ！』

「東部艦隊、侵入が成功したらそのまま市街地を抜けて協会本部まで侵攻。分断されることに注意し、後続部隊のためにも侵攻ルートを確保・死守せよ。
西部艦隊は桃太郎を引き付けつつ、後続部隊が建造中の島の作業を急がせろ。そこで無理は禁物よ。分かった？」

協会の第一防衛海岸に風の壁。
八方から囲む四凶軍。
四方に現れたイレギュラーと英雄。

現状を把握してキュウキは翼を広げた。
この暴風が協会のものでないことは通信で分かった。協会最高の風使いであるシンドバッドは嵐の外で戦闘中。それならば考えられる人物は1人――直前に協会と協定を結んだナイトメア非武装派の自称：特級風司、リデア・カルバレーをおいて他にこれだけの嵐を生み出せる魔法使いはいない。

（こちらの本命部隊はまだ後方……ちょうど良い位か。
しかし、分断されてしまった以上、これから数時間は指揮系統に難が生じることは確実。この台風の継続時間如何に拠るか）

第2防衛海岸を通過して協会本島の港を目指す。
本部頭上の結界魔術部隊が急激に結界を縮めた理由は嵐の他にもあると睨み、速攻でそれを攻略するために飛翔した。

リデア・カルバレーが居るとしたらより風を身近に感じ、且つ操作しやすい場所と限定される。何せ、これだけ巨大な嵐を手繰り、協会本島を護るという大技を繰り出している以上無駄な消費を抑える。そのためにより力を長時間駆使できる場所に陣取っているはず。

（レーダー塔の頂きか！）

大風の障壁が海上に現れてから3分、キュウキは特級風司の居所をすぐに看破した。

―西部　嵐外―

嵐の中で輝く光の蝶々を目にしたサーカスの団長は、目を輝かせながら四凶軍の無力化を続けていた。

今まで思いつきもしなかった光る蝶。しかも、一羽一羽に人と同じ重さの命を感じる。

嵐に揺らぐこともない蝶のなんとも幻を想わせることか。

つい部下から目を離してしまい――我にかえって部下を思えば、不思議なことが起こっていた。

「見つけたぜぇ！　アサァ！」

四凶軍を蹴散らす鬼に、同じく四凶軍を蹂躙する協会の個人が挑もうと突撃してきた。

空母のデッキで戦闘機が爆ぜる。

タンカーから空母へ飛び移るアサ。甲板上の四凶軍を金棒の一振りで無力化し、無駄なく人体を叩いて人肉ショットガンを見舞う。十度もそれを繰り返せば甲板上には広いスペースが出来上がってしまう。

武装した四凶軍の大半は人間。銃器を用いても倒せない哭き鬼を前にし、残された人々は逃げ出した。我先にと艦内に逃げ込み、海に飛び込み、甲板は人骸と無数の塵屑、血溜まり、鬼のＳＲを残して無人と化した。

そんな場所にトウコツは着地したのである。

「おぅ、テメェよく見りゃトキにそっくりだな！」

「何の用でしょうか？
今は協会に弓を引く気はないのですが？」

金棒を二振り構えた鬼に向かうのは四凶――そいつの戦闘力がどれほどのものか思い出して胸が躍る。どちらかが死ぬ。それを理解しているトウコツからこそ余計に興奮が冷めず、頭だけが戦う為冷静になっていく。

背中に四本の大きな剣、両太腿には軍用拳銃。右手には双刃剣、左手にマチェットバヨネット付リボルバー：コルトパイソン。両のリストバンドに一個ずつ手榴弾を備えて佇む四凶のトウコツ――彼がどんな四凶で、なぜそんな男が自分の前に現れたのかは考えるまでもない。

「俺も協会に協力しているテメェらを皆殺しにするつもりはねぇよ！

それでもな、わかんねぇか？
どうしてもテメェと闘（ヤ）りてぇんだよ！」

「次回にしてもらえませんか？」

面と、死体の海に立って向かい合うアサの金棒、左手の理壊装円破解（リカイ　ソウエン　ハカイ）の切っ先が空母の管制を向き、直後に謎の爆発で管制から大炎が噴き上がる。

「僕はいま、四凶の大軍を抑えることに忙しい」

静かに話すアサの死角から奇声があがる。
果敢にも生身でＳＲに挑もうと、声をあげて仕掛ける四凶軍の人間たち。
アサは飛ぶ。破壊して炎上する管制塔の上に足場を移し、次なる船へと移動する。
当然、逃げるように移動を始めたアサを追うトウコツ。と、その前――本命とぶつかる前の準備運動として湧き出てきた一般人を片付ける。
こんな奴らに弾丸がもったいないと、全てを刃物と体術で命を奪ってゆく。近接戦で挑む人間の攻撃を躱して斬撃を与える。流れるように、風に乗った落ち葉のように、誰にも触れることなく全ての攻撃を避け、隙間を掻い潜って移動しながら、剣を振りながら、殺しながら、アサを追う。

――戦争も何も関係ない

良くも悪くもそれがトウコツ。
戦い続けることに意味を見出した者達が辿り着く四凶属性。

「……それだけに、戦い方に関しては詳しいと思っていたが」

漁船の上に着地したアサは振り返り、血飛沫を散らしながら追ってきたトウコツを視界に入れて疑問を抱いた。
誘い出されていることに気付いているのか、いないのか。利用されようとしていることに気付いているのか、いないのか。
正直分からなかった。トウコツという種類の人間には相手の作戦を知識や直観によって看破する者が比較的多い。

「だから若輩と呼ばれていたのか」

「逃げんなオラァ！」

鬼は覚悟を決めて足を止め、金棒を握りなおし、上空から仕掛けてくる四凶の挑戦に応じる。理由はいくらでも後付けできるが、落した命を二度も救ってもらえる保証はない。
ただでさえ、不自由な魂になってしまったのだ。これ以上死にたくはないし――もし、機会があるのなら、姉妹たちにもう一度遭いたい。

「華創実誕幻：天段」

銃弾をはじき落としながら、トロール漁船の舳先でオリジナルの陰陽式を唱える。

より簡単化された、調和を目指す鬼――ひいては妖怪なら誰にでも使えるようにと生み出された簡易陰陽術。それが華創実誕幻（かそうじったんげん）。

「大紋慈双（だいもんじそう）」

激突。

金棒と双刃の剣が火花を散らした瞬間に、その術の効果で新たに2人のアサがトウコツの両サイドに生まれた。

（マジか！？）

左右のアサはそれぞれ頭部と脚部を狙って金棒を振る。

リボルバーと双刃剣を捨て、咄嗟に右金棒の上段攻撃を素手で受け流し、左側の下段攻撃を最低限のジャンプで躱す。が、その行動は決定打の回避でこそあって、アサ本体の攻撃を躱せないほどの隙を作る行為でもあった。

胸に入った攻撃は蹴り足。金棒による攻撃でなかったことは幸いだが、火力は鬼のソレ。吹き飛ばされて艦橋外周の鉄柵に激突し、変形させたら今度は金属の壁を破って艦橋内の設備を変形させる。それだけの衝突を経て、吹き飛ばされたトウコツはやっとのこと止まった。

起き上がって大剣2本を手に取ると同時に、3人のアサがトウコツを囲んだ。

「少しだけ相手をしよう」

「へぇ！　嬉しいじゃねぇの！」

四凶と協会の戦争そっちのけで互いの得物をぶつけ合う。

そんな男2人の舞闘を眺め、マトンは声を出して笑った。

―東部　嵐外―

黄金の結晶で埋め尽くされた第一防衛海岸東部。その海岸から四凶の艦隊、最前線まで伸びる黄金結晶の道。

その上を光の魔法使い――ボルト・パルダンの教え子であった男は悠々と歩いていた。

（協会の本格的なSR部隊攻撃はまだまだこれからだな。

四凶軍はどこまで攻めることができるか、見物させてもらおう）

輝く石の上に腰を据え、飛来するクロスボウの矢を光で包んで溶かす。

狙撃手など眼中にない。

例え相手が英雄だろうが、それでも自分の実力を知っている魔法使い――コルスレイは遠慮などしないし、大きな目標を達成していない今、死ぬつもりなどなかった。

（ん？
この気配は、先生か？）

多くのＳＲが戦う戦場の中に、微かな光を感じ取った。
懐かしい光。
見知った光。
恐ろしく、純粋な光。

（いや待て、何でこんな状態なんだ？
協会は自滅するつもりなのか？
こんな混濁した場所で先生を起こしでもしたら――）

嵐に伴う強風で転覆する戦艦が高波を立てる。
多数の人間が一瞬の内に死に、或いは一瞬の内に多数の人間が死ぬ。
いったい開戦から今までにどれだけの人間が死んだのか、最早カウントできる域を超越している。

それなのに、協会はボルトを起こそうとしている。

レーザー照射砲の光もつい数分前から完全に途絶えたことを思い出し、それらのエネルギーを先生に集めているだろうという予測していた。
戦場の渾沌が気に入らないコルスレイではあったが、自分の目標を達成するためには理想的と言える収集環境がここには出来上がっている。問題は、先生が目覚める前にこの戦場を立ち去るか、それ

とも説得して収集を続ける許可を貰えるかだ。

（数十万の“欲”を集められたから良しとするか？
しかし、内容が薄いからすぐに無くなるだろう……さて、どうしたものか）

頬杖をついて、組んだ足の首先を遊ばせる。

英雄とその部下たちが海上の四凶軍を射抜く。四凶軍は黄金から距離を置いて海中からのアプローチを続ける。
そんな戦況を暇つぶしに眺めながらコルスレイは強大なＳＲの出現を願った。
出来れば、協会本部にかすかに感じた黒い誰かと、つい先ほど出現した色世トキとの遭遇を、切に願って溜息をこぼした。

（無理だろうな）

―北部　嵐外―

銃声どころか砲撃音すら掻き消される嵐の中、四凶軍艦隊は他方面部隊よりも甚大な被害に遭っていた。

「銀狼が来たぞ！」

「そっちは駄目だ！ペルセウスがいるぞ！」

艦隊列に火の手が上がる。
嵐を破ろうと放たれた艦砲射撃が、弾道を逆走して戦艦を襲った。

「銃を使うな！返されるぞ！」
「剣で挑むな！とても太刀打ちできるレベルじゃねえ！」

『じゃあ、どうやって戦えってんだよ！？』

四凶軍を防ぐ北部防衛戦力は、ＳＲ５人。

芹真事務所社長、銀狼：芹真
協会所属の鏡装英雄：ペルセウス
黒羽商会の古参の霊装銃士：ギムレット
協会のアヌビス執行部隊のエース：アヌビスチェーンソー
ＳＨＭサーカス副団長、万獣王：ゲイリー・ポルシカ

対する四凶軍は３００万。
だが、戦況は一向に四凶軍の有利に変わる兆候を見せない。

「相手はたったの５人だぞ！
臆せず進めっ！」

３００万の大軍が５人によって止められていた。

芹真の銀爪が夜と肉を切裂き、対物拳銃（アンチマテリアルハンドガン）が船舶を穴だらけにして沈め、人狼特有の瞬発力を活かして目にも止まらぬ速度で人間を消し飛ばしてゆく。殴り、蹴り、投げ飛ばし、斬り、撃ち、嵐の轟音の中で咆哮を上げて恐怖を呼び起こす。

眼前に在るは人に非ず、肉を喰い、血を啜る人狼なり。

同じように、サーカスのゲイリー・ポルシカの戦いぶりも芹真のものと大差はなかった。但し、破壊力と速度という点では芹真よりも一段と速く、そして肉体が繰り出す火力は幾分も強かった。

一撃の拳で十数人が吹き飛び、投げつける人間がボーリングのピンの如く人を弾いて空中に投げ出される。右を抑え、左を潰し、頭上を飛び越えようと試みた者の喉を食いちぎる。ハイエナのようにしぶとく、豹のように素早く、ゴリラやゾウのように力強く、広い視野の中に移る全ての四凶を嗅ぎ分けて噛みつく。

「速ぇ！」

「人間じゃねぇ！」

押し寄せた者から順に死んでゆく。

だが、この海岸には隠逃静観していても死んでいく場所があった。

「後退させないよ。

ブレン・ゴースト」

霊装銃士：ギムレットのディフェンスゾーン。

芹真とポルシカの中間より少し下がった場所。まさにそこであっ

た。弾道亡き銃撃が攻め手達の体に弾痕を刻んで絶命に追いやる。体感速度に自信のあるＳＲ達でさえ、この銃撃を避けることには失敗していた。

何故ならそのエリアの銃撃には弾道亡し。ギムレットが武器として扱っている銃器が浮遊しているのも銃器自体が幽霊であるからこそであり、もちろん弾丸に至るまでが霊体であるのだ。

しかし、弾痕（けっか）だけは実弾のそれと同じという異常。加えて１人の射手に１００近い銃口という悲劇――

「ＭＧ４２・ゴースト」

それは黒羽商会古参のＳＲ、ギムレットという男の通り名につながっている。

右手を敵の群に向けて翳（かざ）すと、数十もの銃口が一斉に光を放った。厄介なことに、弾丸はリロードを必要とするも、その数量は無尽蔵に等しい。過去に世界中で使われてきた分だけ弾丸を撃ちまくることができるのだ。

加えてギムレット自身がＳＲを解放した現状で幽体化しているため、物理攻撃に対しては無敵状態という、まるでチート・裏ワザ。

霊装銃士の攻撃が行動を制限し、制限された道をさらに獣人たちが塞ぐ。人狼とアヌビスとキメラ。

そんな面子の支援をこなしているもう１人が、鏡装英雄：ペルセウスであった。

飛来した弾丸を、同じ弾道を通わせて射手に返す。

銃器を封じるという他のＳＲにない特殊な力で相手の銃撃跳ね返していたのだ。弾道を逆走する銃弾は、密集して仕掛けてくる四凶軍の誰かに必ずと言っていいほど当たった。

牽制の銃撃も味方に返ってくる状況を理解できないほど四凶軍も馬鹿ではない。すぐさま銃撃を返す元であるペルセウスに白兵戦を仕掛けた。だが、元々ペルセウスは武術家である。鈍器や刀剣を持ったところでペルセウスに傷を与えることは困難だった。慣れていない近接武装戦、窮屈な密集戦法などが折り重なり、大半の人間が攻撃を防ぐ間もなく切り殺された。血肉がこびり付かないほど低摩擦な剣と、銃弾のみならず斬撃まで跳ね返す銀色の鏡の如き輝きを放つ盾。

「駄目だ！
後退しろ！体勢を立て直すぞ！」

戦艦が轟沈し、揚陸ボート群も藻屑と化し、嵐に混じって血の雨が降り注ぐ戦場。
恐怖が極限に達した集団が、個々を我先にと後退させる。が、

『逃がさん』

銀狼と万獣王が追撃を開始する。
それに加えてアヌビスと銃士も、

「カラビナー・ゴースト」

「俺にも何か貸してくれ」

「ミニガンで我慢しておくれ、アヌビスや」

血飛沫が海面の赤を深く塗りたくったのは言うまでもなく、５人の戦闘時間が僅か１０分だけだったにも関わらず四凶軍の損害は１万に軽く達していた。

―嵐内　協会本部　会長室―

完全支配というＳＲの存在を、実は信じている人間は少なかった。それは単に会長がＳＲを使い続けているということに気付けないということ、その影響が今日を地球規模で駆け巡っていることなど誰にも理解できない所が大きかった。

物心付いた時から協会のＳＲとして戦っていた崎島恵理もその１人。会長という人物がどんなことをやっているのか、時折耳にしたことはあってもそれらの中で信憑性を欠いたものなどなく、素直に信じることが出来なかったし、出来ることなら夢であって欲しいと願いもした。

「さぁ、片付けは終わったよ。
座ってくれトキ」

つい数分前、この場所にはヘリが墜落した。

「崎島、君は倒れた２人を医務室まで運んでおいてくれ。頼む」

「……了解」

会長に勧められたソファの座り心地は最高と賞賛できるだけの造りをしていた。それなのに、部屋に2人残った瞬間から居心地の悪さがどうしてか消えない。

会長はワークデスクに、トキはソファに、それぞれ座して沈黙して時の経過を見守った。

何故2人きりなのか。

沈黙している理由は何か。

「俺は別に何も待っていない」

何度目か分からない変化を見せた会長の顔が冷たい。嘲笑する笑みの方が幾分も熱を感じさせるし、作り物のそれよりも寒気を覚えさせる表情は不気味さと不思議も併せて呼び起した。

「紅茶でも飲まないか？」

返答を待たずに動き出した会長が指差した先にはティーカップ、更にグラスポットと受け皿、角砂糖とミルクの控えた小さな瓶が2つ、確かに何もなかった空間に有無を歪めてしまうほどハッキリと輪郭と現実を纏って並んでいた。

「会長、俺は――」

「例えゲームでも、操作を中断するシーンというものは必ず挿入されるだろう？
何故なら連続してのプレイは遊び手の消耗を早めるだけで、急いだところで望める結果を得られるという保障はないんだからな」

突如現れたテーブルにティーセット。
それらがオウル・バースヤードのＳＲ：完全支配と如何に関連するのか考えてみたが、複雑に現象を捉えられるほど落ち着き払っているトキではない。冷静の欠如だけでなく、今の一言で集中力にも亀裂が入っていた。

「でも、最近のゲームじゃシナリオスキップやリザルトスキップなんて当たり前で、結構コアな人たち向けの糞ゲーとも呼ばれるような物もありますよ？」

「知らん。
俺が何と言ったのか興味ないが、まずは落ち着け。紅茶を飲め。
そして」

次にトキが気付いたことは、会長が向い側で新たに出現したソファに腰を落ち着けていたこと。
やはり移動に気が付けなかった。デスクワークから数メートルもの距離を一瞬で、しかも物音立てずに素振りさえ感付かせない。

「織夜について話そう。互いの知る限りな」

「……織夜を、知っているんですか？」

「トキはどれだけ知っている？
僕は微々たるもので、彼女に関するデータの殆どが憶測だ」

手にしたカップの湯気で、自分の手が何を持っているのか知る。
完全支配というＳＲを前にし、意表を突く事が次々と起こってやまない。
それまで無かった家具、ティーセットやそれをいつの間にか供にしている会長、付き合う自分。

「織夜秋が欲しがっているモノは俺の名前」

「あぁ、それは知っている。
ついでにその執着も」

ダージリンを一気に飲み干した会長から協会の損害が伝う。
監視衛星まで落とす織夜のトキに関する固執は明らかに常軌を逸していた。

「いいかトキ。
ここからが私の推測であり、確信への一手を欠いた説だ」

「一手……」

「大きな欠片が足りない。
彼女のSRは四凶でいうトウテツだ。それも、現在最高峰と言われる破壊力を持つトウテツに並ぶほど凶悪なものだ。
――正直、アレは僕にも制御しきれる存在ではない。少しは分かってもらえると思うが、現状でトキやボルト、コントン達のように全人類を支配しきれているわけじゃない。それなのに、ナイトメアのように完全なる支配を僕個人に求める人間がいる。
――だから望んだのかも知れねぇ。終わりって奴を。その果てに現れたのが織夜なんじゃないかって睨んでいる」

「すいません、もう少し分かりやすく」

「馬鹿が……つまり、この世界の大半を支配してんのが俺なの。
――自ら望んで世界を再構築したというのに、今度は自身の消滅を望んでしまったんだ。それも過去に前例が無いくらいに渇望してしまった。
それがいけなかった。
支配という私の力はある程度の創造力を持っている。その為にこうしてテーブルや紅茶を体験できるんだが、厄介なことに私の支配は世界の未来さえ左右してしまう。その為に人を創り出してしまうこともあるのだ」

「創ることも支配、なんですか？」

カップに注がれる液体の音が戦場の轟音を上回る不思議。
落着きを取り戻して改めるこの環境は細かい所にまで異常を垣間見せていた。
さっきよりも小さく伝わる振動、爆音、阿鼻叫喚。いつの間にか回復している照明。

「本来の流中において、概念レベルから存在しなかったものがこの世界にはある。
それがＳＲだ。
十人十色どころじゃない種類の現実が実現してしまうのもそれが原因だ。
君の時間操作、私の支配、メイトスの否定、ボルトの魔法、鬼やアヌビスのような伝承の存在。どれもが存在を許されたモノではない」

「会長、それはつまり、ＳＲの起源がアンタだってことですか？」

頷きながら時計を確認するオウル。
挙動の一つ一つに不審を抱くトキ。
刻々と変色を続ける戦場。
まだ静かなその中央部。
しかし、不穏の最中。

そんな場所での告白。
ＳＲ全誕の庭を知らせた。
年齢を問わず誰も信じないという自信があった故の回答。
非現実という言葉以外が不相応な現実の仕組みの解説。

「――あぁ、俺が人類最古のＳＲで、他のＳＲという概念への根源となってしまった禍央だ」

「あんたがＳＲを？」

「トキ、今の問題はそこじゃない。
俺のせいでお前と織夜を成立させてしまったということだ。まぁ、まだ欠片が揃ったわけではないけど」

「そうだな、その辺を詳しく聞きたい。
揃ったというのはどういう意味なんだ？
俺と織夜に何かあるのか？　何を知っているんだ？」

身を乗り出す会長から距離を取る。
次に会長の口から出てきた言葉は謝罪だった。
織夜のような人物の出現を許してしまったのは自分の怠慢であると。

「いまこの世界は半ば程の暴走状態にある」
「暴走？」

「――四凶が主な原因では、決してない。
恥ずかしながら某の中に於いて、大きな二分した感情が衝突している故、完全な支配が出来なくなっておるのだ」
「支配が出来ない？　大きな感情って？」

「うむ。それはお主と織夜、２人の今のようなもの。
トキは織夜を正そうと願い、織夜はトキを誅したいと願う。無論、逢うたならばその場でだ。
某の場合はこれが一個体内で発生している。他人同士が抱くべき異なった観念と思想を己の内に閉じ込めているのだ。
違う意見が指の数ほどか、或いはそれ以上。彼の者達はそれぞれ

思と志を持ち、日頃から議を重ねて論じ合っている」

鈍感なトキも、さすがにここまで来れば理解を始めた。
会長が1人じゃないこと。
複数の魂を持っていることを。

「じゃあ、意見が合致しないからって、完全に支配出来なくなったっての？」

「その通り。
――話が逸れたね。
トキとアキ。それぞれ2人は、違う考えを持つ僕たちの望み、そのどちらかを叶える力を持ったＳＲになってしまったんだ。ここで君は疑問を抱くだろうから説明しよう。
――我々の推測だ。トキの力をこの目で見て、言葉で以てアキに触れ、君たちを比較して気付いたことがいくつかあった。
――色世時のＳＲは未だ謎が多いが、その根源には“創造と再生”、未来を生む力が強く、
――その一方で織夜秋には“奪取と抹消”がＳＲの源泉となっていて、彼女の力は未来を破壊する事に特化している」

「抹消って、やっぱり織夜もそれなりのＳＲを？」

「――Ｙｅｓ．持っている。
それも君が今現在得意とするクロノセプターに匹敵、或いはそれを上回る強奪力を有しているのだ」

蛇足になるかもしれないが、相当なＳＲを持つ彼女にも当然四凶の気は一般人のそれよりも強い。トウテツという四凶の中では間違いなくトップクラスの実力を備えている。

「――私共の見立てでは、少なくとも一国の軍隊を相手にするには充分な実力者かと」

「彼女はどうして俺を狙う？」

「君がそれを知らないなら、恐らく私にも分らない。ただ、アレがどういったものかなら教えることができる」

「どういったもの？」

「――ＳＲだ。もし俺達の推測に間違いがなければアイツは相当厄介な相手だ。それこそ攻略本が欲しくなる程のな」

カップを手に取り、二杯目のダージリンを飲み干す。

「お前のＳＲが時間奪取なら、彼女のＳＲも時間奪取だ。但し、お前は与える事に秀で、彼女は奪うことに秀でている」

「それが織夜秋のＳＲ」

「――我らの中の臆病者は、彼女のことを“全てに等しき死”と呼んで怖れている」

トキは一杯目の紅茶を飲み干してから聞く。
何人いるのかという質問に、会長はそういう者も居ると言いながら自らの心臓に手を当てた。
会長の1人が見出した特徴を復唱し、そこから織夜のSRを予想する。

「全てに等しき、死……」

「――終焉のSRと俺は考えている
――もしくは死のSR
――だが、平等のSRとも考えられる
――純粋なトウテツという可能性も否めない
――もしくは渾沌
――あまり渾沌とは思えないが、某は神隠しに近しきものと思っている
――詰まる所、我々の織夜に対する評価は“絶大な消滅力”である。彼女が万物の死に触れることが可能ならば、世界を成立させる時間を操る君を求めるのも納得できる。過去が未来に追いつこうとする為、人と言う形を手に入れ、SRという力を手にした」

創造をトキが、終焉をアキが。
黒色短髪、翡翠の片目を持つ色世時はその内に母親を残している。
オウル・バースヤードは織夜秋にも等しく魂のすぐ傍に支援者の存在を感じ取っていた。

解答はシキヨトキ。
可能性は一気に色世という苗字に向いた。

連鎖から外れていたと改めて思わせる連中の中に、オウル・バースヤードの1人が予測する核心犯は居た。確実に色世家の誰かであることまでは分かっているが、最後の一欠片はこの目で確かめなければ埋まらない。

「色世時にお願いだ。織夜秋に会ってくれ」

瞬間――カチリ――と、金属同士の噛み合う音。
視線を上げると、会長は後頭部に銃を突き付けられたまま三杯目の紅茶を注いでいた。

「何!?」

金棒と拳銃を両手に取り、トキは向かいの会長の背後に立つ自分の写し身に戒めの態度を示す。
ジェリコという拳銃のグリップを両手で握りしめ、銃口と目線を会長の後頭部に注ぎ、そのトキは言った。

「久しぶりだな、トキ。
アヌビス戦以来……かどうかは正確に覚えていないが、いま会長が喋っていることを信じるな」

「君か、完全再生」

「アンタはもしかして、フィング・ブリジスタスか?

再生のＳＲの」

トキの質問に完全再生されたトキは頷き返した。それと同時に、フィングは外見再生を中断。漆黒の髪が特徴的な白人（ほんたい）が現れる。
落胆する会長に反撃の気配は見られない。
それどころか一瞬でも動揺による硬直を見せたことがトキにとっては驚きだった。

「フィングさん、信じるなってどういう事なんですか？」

「そのままの意味だ。
お前が会長の言葉に従うなら、直ちにリセットボタンは押されるだろうよ」

「――お前はそれをどこで知った？」

ポットを置いてカップの縁を指でなぞり遊ぶ。

「――我々を測りきったつもりか？
――僕らを見極めたつもりか？
――君の言葉を信じる価値は？
――何を根拠に不信を推す？
――というか、どうやってココに入ったんだ？
――――我々に弓を引くということは、存在そのものを消される覚悟を決めてやって来た、ということだな。良し、まず話を聞こう」

いや、聞かせて貰おう。

「お前は舟を知っている。だから、こんなことが言えるんだな？」

「あぁ、龍を知っているぜ」

銃口はそのままに、言葉だけが会長の心を撃ち抜いた。

フィングに向けていた銃と構えていた金棒を時間分解し、一切の騒音を排除した静寂に沈む部屋で同じ方向を見ながらも会話を成立させるオウルとフィングの2人を見守る。

「トキ、お前も聞いておけ。大事なことだ」

そう言って銃を構え直し――ホート・クリーニング店の店員であり、錬金術師：ハンズ・ブリジスタスの兄である彼は説明を始めた。

会長の計画していたことと、用いようとした手段について。

第５１話－戦場の禍央－（後書き）

――――――――――――――――――――

どうも。

最近シナリオ分岐でやたらと頭を抱える鳥です。

ぶっちゃけ、集中力がやたら低下していたり、本々弱かった頭が拍車を掛けて弱くなってしまったこともあり、更に執筆時間もあまり取れなくなったりします。

そのために文体や表現がヘンチクリンだったり意味不明だったりというものが多多多々々々あります。

現在作成中のものに、

・キャラファイル
・外伝集（訓練編）
・外伝集（誰得編）
・外伝集（脇役編）
・本編（次話）
・本編（何十話か飛んだ後の話）
・本編（勢いだけで劇場版風味！編）

ｏｒｚ

ぶっちゃけ低迷中――というか、混乱中です。

それはそうと、日頃よりご愛読いただき誠に有難うございます。

いまどれくらいの読者がいるのか確認する術がないですけど、皆様のおかげで何とかここまで書いてこれました。

本編の如く長くなってしまいましたが、これからも「ＳＲＶ」をよろしくお願いします。

――ふぅ。これでいいのか、コントン。

……クックックッ、さあどうかな。

――約束通り喋ったんだ！俺の枕を返せ！

……こうでもしないと本音を喋れんカスが、それが人にモノを頼む態度なのか？

――え、ぁ！？

……ロクな口を持っていないようだな。クッ、フフフ。

――ちょ、金属の筒冷……ぐもっ！

……バン！てな

――（気絶）

……ハハハハッ！

アホが。誰に感謝もしないとは、愚の極みではないか。

ＳＲＶ（？）の下剋上劇場（嘘）――終劇

次回：アキＶＳトキ！

第52話－Air of a Confrontation－（前書き）

戦闘開始から10時間経過した時点での両軍の損害はそれぞれ――

協会：178
四凶：259，694，417

――となっている。

これを見た協会司令官のジャンヌは芳しくないと口元に手を当て、四凶軍最高司令であるキュウキは仕方がないかと妥協を織り交ぜつつも笑みを浮かべた。

（第一から第二までの防衛海岸は四凶の手に落ち、第三防衛海岸もトウテツによって甚大な被害を受け、結界部隊にも被害が出ている。この嵐で前線部隊とキュウキらを分断出来た。この嵐の内でまず前線部隊を叩く。
おそらく、嵐を解く前にキュウキは前線に移動しているはず……そこを見つけて頭を叩く）

（突破した防衛海岸もあの嵐じゃ長くは持たない。レーザー砲台の再生も時間の問題。
あちらにとって結界部隊が頼みの綱ということはよく分かった。
徹底防戦――と見せかけて大規模な反撃に出てくる確率は強。そうなると人間だけの部隊では太刀打ち不可能。駒の無駄遣いになる。
あの策を使うしかないか……ならば、私が前線に出て囮になって時間を稼ぐしかない！）

ジャンヌが海上と海中の状況をオペレーターに確認する。
数が頼みの四凶軍は手変え品変え攻略法を持ち出してくるだろう。
四方八方に加えて上下からの一斉攻撃。
嵐の壁で敵が見えないのはお互い様。感じ合えこそするものの、
フェイクという可能性も十分に考えられる。

「再生部隊はレーザー砲台の修復急げ」

一方でキュウキは水平線の彼方に控える本主力艦隊に通信を入れた。

「現時刻を以てアーツ部隊を解放。
四方より本艦隊前方に“城塞艦”を構築せよ」

嵐が晴れるその一瞬を勝負不沈の分かれ目と見た2人の司令は、
想い描いて揺るがない勝利を確かめるためにそれぞれ次の行動へ移るのだった。

第52話－Air of a Confrontation－

－嵐外　西側－

右の血溜まり。
左に死神。
真ん前に絶望を眺め、背後では業火がさあさおいでと手招きしていた。

逃げ場を失った者から消えていく戦場は、ある意味神隠しのスポットとも言える。血肉の一片も残さず死に逝く者など、神隠しとでも言って誤魔化さなければ救いようがない孤独な終わりを迎える。

「まぁ、死人を助ける奴なんかいないけどさ」

海上に火柱が上がる。
炎上したタンカーが太平洋の暗闇を切り裂き、周囲の惨状に輪郭を灯し、突風は鳴き声を上げながら艦隊を薙ぐ。
洋上の大火が誘う無数の声を背景に、随所で激闘の火花が散った。
嵐流に拐われて消える音声。
まるで火炎の如き燃え盛っては散る無数の命。

四凶軍と協会ナイトメア連合。
イレギュラーと四凶。
イレギュラーと協会。

嵐に護られた協会本部を取り巻く彼らは、一切の躊躇を持ち合わせずに戦争を進めていた。

「……なぁ、ここまで来たのはいいけどさ」

艦隊を薙ぎ払う者、近代兵器の悉くを紙細工に変える者、死体と残骸の壁で侵攻を阻む者。

津波と爆炎が景色に色を塗り、銃火と無数の剣戟が暗闇に線を引く。

旋風の壁を突破するために船を再生する者や部隊を立て直すのに必死な者。

黄金と透明の結晶に埋め尽くされた一帯だけは風が穏やかだった。

「あたしらどっちの味方すればいいと思う？」

「私は芹真事務所の助勢をすれば良いものかと。藍姉様もお世話になっていますし」

「……」

無数の光に切り裂かれた闇の中、三姉妹の視線は一方向に注がれていた。

その先には当然だが戦場が広がっており、あらゆる残骸が大量に宙を舞い、海上に漂っている。

ただそれだけなら別段、三人が三人揃って注目することもないのだが、そこに共通して姉妹の意識を惹きつけるモノがあった。

「なぁ、藍。
あたしが思うにあの気配はやっぱり――」

「はい。アサ兄様のものかと思われます……」
「私も藍姉様と同じ意見です。気配の中心に感じたイメージは、以前のアサ兄様のものと同じです」

嵐に高まる波の挟間、鬼3姉妹は海面で膝を上げて立ち上がった。塩水の上に立って臨む嵐は、夢も絶望も全てが溶け合い混沌としているかのようだった。

「アサの野郎を説得するぞ。本人だったらな」
「はい」
「では、私が周囲を足止めします。お姉様達は説得を」

3姉妹の向う先に吹き荒れる烈風は圧縮台風だけが原因の破壊ではなかった。

「いい加減に本気だせよ哭き鬼！」

鎌鼬（かまいたち）が戦艦を細切れに刻む。
ばらけた人間大の破片を鬼の金棒が殴り飛ばし、闘志の四凶が纏う風により金属の塊は野球ボール大のブロックに細切れにされる。

血飛沫舞う海上で鬼と鎌鼬は激闘を繰り広げていた。

銃器と刃物、鈍器がぶつかり、それぞれの手段を陰陽術と妖(あや)し風が潰し合い、互いの拳足が身体を捉えて衝撃を与え合う。残骸や船団を足場として跳び、時には海上を走り、残骸を武器とし、人ごみを壁としながら破壊力の限りを尽くして戦場を走り回る。

「ほぼ全力だ。
ただ、風纏斬魔(ふうてんざんま)と呼ばれる君の実力を知りたかった」

「だからどうしたぁっ！！」

人間弾丸を見舞うトウコツ。人間を意思なき肉塊に変えるアサ。
トウコツはアサを知らないが知ろうという気は皆無。ただ勝てればよかった。興味があるのは生死を賭した勝負のみ。自分が生き残れるかどうかだ。
どうすれば鬼に勝てるのか。
一方でアサはトウコツの実力に興味こそあったが、本心は協会本部へと向いていた。命を救い、死者を匿ってくれたサーカスの団長は、会長の判断でＳＲが一般人への攻撃が許可されていると漏らしていた。

（会長に何があった？
かつての会長も人間としてどこか分離した思考の持ち主だったが、ここまで突飛な判断と命令を下すような人間とは思えない。
測り損ねていたのか、僕は？）

本体の陰陽術で生み出された2体の写し身がトウコツに仕掛ける。

正面斜め上と背後は海中から。
しかし、流石はトウコツ。高い戦闘能力に豊かな戦闘経験、加えて動物並かそれ以上の嗅覚を以て正面の攻撃を受け流し――体中に纏った風がワンテンポ遅らせて正面から仕掛けたアサの腕を切り刻む――背後のアサへ斬撃と銃撃を同時に叩き込んで回避と反撃を同時にこなした。

「なるほど、風を纏う魔物か。納得せざるを得ない」

「だから何だ！」

「君たち四凶を経験しておきたかっただけだ。
“風纏斬魔”
“全身過食”
“凶翼虎口”
“時限脱存”
僕の結論はこうだ、単純な戦闘力なら君は４人の中でトップだろう」

「ヘッ、ボケがっ！」

トウコツから発せられた突風がバランスを崩したアサの分身を吹き飛ばす。トウコツ本体が迫る一瞬前に体勢を立て直して金棒の一撃を躱し、完全接地した姿勢から鳩尾狙って肘打ちを放つ。だが、アサもただでは喰らわない。肘打ちを金棒を持った側の手の甲で受け止め、もう片方の手でトウコツの髪を掴んで引く。
衝撃と反動。
姿勢を崩した２人が海に落ちる。

強風に荒れる太平洋の波に飲まれ、水に取りつかれながらも殴り合う2人。
水の抵抗が鬼の筋力を減衰させ、トウコツの手刀と纏った僅かな風が水を切り裂き、減衰を無きに等しい状態まで変える。

（うっ……海での殴り合い！？）

入水してすぐは意識しなかったものの、戦闘に若干の余裕が生まれた途端にアサは置かれた環境を意識するようになり始めた。
アサの攻撃速度が鈍り、その隙をついてトウコツは鬼の胸元に肉刃を突き立てる。
初めて抉る鬼の肉体から離れた指が、海水中に違う色の液体を導く。
だが、微々たるダメージすらない。
速度こそ落ちている者の、鬼から闘志が消えうせたわけではない。

（何でいきなりトロくなってやがる！
舐めてんのかよぉ、哭き鬼！）

海中と言う理由だけに収まらないアサの減速に不思議が尽きないトウコツ。
何故スピードが落ちた？
学がないなりに考えられる理由は二つ、金槌かあるいは暗所恐怖症か。しかし、夜間戦闘をそつなくこなしていたアサに暗所恐怖症は考えられない。

（もしや鉄鎚野郎なのか！？）

当たらずとも遠からず、トウコツの予測は事実に近いモノがあった。

同時刻、海上にてそれが証明され証言されようとしていた。

「華創実誕幻。一段：蓬（よもぎ）」

気配のした戦場に辿り着いた藍が最初に行ったことは術は発動だった。

その妨害をさせまいとカンナ、スミレの姉妹は周囲を蹴散らしていた。

数メートル先に感じた兄の気配。だが、視界の中にその姿を捉えていない。

必然的に至る答えは“海中”である。

「急げ藍！」

「分かってるわよ！」

捕縛の術が海中の中に激しい生命二つを感じ取り、絡め取る。

そしてその二つを海上まで引っ張ってみると、

「何だこりゃぁ――って、テメェの仕業か哭き鬼ぃ！

って、増えてるし！？」

最初に水揚げ――ではなく、捕縛の術によって海面に現れたのは四凶のトウコツだった。

戦好きの男がここにいることは十分に理解できる。

何故なら戦場での狂喜こそトウコツと呼ばれる人間の所以であり、ＳＲである。彼らにとって戦を差し置いて好まれるモノなど考えられないのだ。

「おい藍、これ敵か？」

「はい」

「ちょっと待て！　俺は協会所属のＳＲだぞ！」

「で？」

「戦死ってことにしてあげる」

「カンナ姉様、思い出しました。この人は私達の村に制裁と称して攻撃を仕掛けてきたＳＲの一人です」

「おぉぉぃっ！」

天地の逆転した視界の中、トウコツは哭き鬼姉妹の殺意がビジョンを顕わにする錯覚を覚えた。

手が早いであろう雰囲気をこれでもかと言うほど醸し出していた哭き鬼――カンナと呼ばれた女の手が伸び、首根っこを掴む。

「ぬっ殺してやろうか？」

しかし、一方的な展開が眼に見えている状況にありながらも、トウコツは怯まない。

鋭い視線二つがぶつかり合う最中、完全に姉妹の視線を集めたトウコツとカンナの真横に海中から2人目のＳＲが引き上げられて来た。

そこには見慣れ、懐かしく、そして誰よりも再会したかった鬼の――若干情けないが――確かな気配を纏う兄弟が居た。

「あ、アサ兄様！」

「アサ兄様！　大丈夫ですか！？」

「なんだぁ、アサ。まだ克服してなかったのか？」

「なんなんだ？」

「……げほっ……」

水揚げされたアサのへたり具合を見て、藍は生存をひたに喜び、スミレはアサの容態を見て心配し、カンナは呆れながらも嬉しさを顔に出さないよう堪えていた。

この姉妹が離れ離れになっていたことを知るトウコツは、カンナという鬼の言葉が気になって仕方がない。

そこで思い切って質問してみた。

鬼は水が苦手なのか、と。

「はっ、冗談！
あたしらどっちかと言うと泳ぎは達者な方さ！
ただ、アサだけちょっとした事情があってな」

「泳ぎが苦手なのか？」

「違います！
アサ兄様は“暗い水の中”が苦手なだけです！
ちゃんと泳げますから！」

「あぁ？　暗い水の中が苦手ぇ？」

「カンナ姉様が昔見せたホラー映画のせいで……」

「あれな、“仄暗いみ――」

瞬間、５人は同時に目つきを変えた。
タイトルを思い出しながら言葉を続けていたカンナの口が閉じる。
アサを絡めた捕縛の術を解こうとしていた藍の手が瞬間的に止まる。
図上から迫るそれに気付いたスミレはトウコツを持ち上げつつ、オリジナル陰陽術の詠唱を始めた。

「ミサイル来たぁ！」

真っ先に動いたのはカンナだった。
頭上から迫る無数のミサイル群が狙う場所はここ。四凶でありな

がら協会に与するトウコツと、イレギュラーの中でも恐ろしく高い火力を有したアサを抹殺するための艦砲射撃である。

「華創実誕幻、三段：覇鼓(はこべ)辺！」

「華創実誕幻！天段：亜時砦(あじさい)！」

藍の援護が届くと同時、カンナはそれら金属の爆発物を素手で破壊し始めた。

殴り潰し、蹴り曲げ、抱いて鯖折る。

爆炎もなんのその。

不可視の膜に守られた姉鬼が空中を跳びまわる。

「やるじゃねぇか！負けねえぞ！」

トウコツも飛ぶ。

風を纏い、背中に背負った4本の大剣を武器に、ミサイル群を切り落としていく。

「大丈夫ですか、アサ兄様？」

「藍……君か？」

青褪めた顔の兄を確かめ、藍は数枚の白い術符を取り出した。

「どこか痛む場所はありませんか？」
「大きくなったな」
「え……ぁ、ありがとうございます。
負傷はないですか？」
「そうだな、怪我はないよ」
「……出来れば教えて欲しいことがあるのですが」
「どうして僕が生きていたか、ということかな？」
周りで水柱が上がった。
海面とぶつかったミサイルの残骸が起爆して風と水柱を立て、爆発は周囲を照らす。
「あの夜、招いていなかった客人は“２人”いた」
「犯人ともう１人、誰かが？」
「僕を救助したのはそのもう１人――セブンスヘブン・マジックサーカスの団長だ」
「サーカスが？　サーカスがどうして？」
「彼が僕に密かに会いにきた理由は“華創実誕幻”だ。
当時、僕らだけが取得に成功していた陰陽術の秘訣について質問しに来ていたんだ」

見れば見るほどトキと姿の重なる実兄。
その眼が空中のカンナとトウコツに向いたことに気付き、藍は最も肝心な質問を思い出した。
どうしてここに居るのか。
どんな理由でこの戦いに参加しているのか。
そう聞かれたアサは数秒の間を空けてから答えた。抵抗も逡巡も無駄と知り、観念しての白状だった。

「僕はまだサーカスに何の恩返しもできていなかった。だから団長の意向に従い、四凶と協会の戦場に居る。
でも……私用も少しだけある。
少し、だけどとても大事なことだ」

「大事なことというのは一体？」

「藍、君は芹真事務所にいると聞いた。
おそらく聞かされているだろうから話すが、今僕が身を寄せているサーカスも芹真事務所と同じ秘密を手に入れた。
まず、協会長が多重人格者であること。
それから、その会長の中には二つの異なる意見が存在し、常に対立し合っているということ」

視線を藍に戻し、更に言葉を続けようとしたアサだったが、開いた口はそのまま静止した。
あれ？
傍らで膝をついて身を寄せていた藍の表情には、なんのことやらと疑念が言葉でなく表情としてはっきりと浮かび上がっていたのだ。

（知らなかった……のか？）

（芹真さんは時期が来たら教える、って言っていつも誤魔化していたけど……もしかして、この事？）

「2人とも避けろぉぉ！」

戦場の真っただ中、唖然として向き合う鬼の兄妹を見つけて叫んだのはトウコツだった。

兵器の立てる轟音を上回る大音声に、会話を中断した2人は緊急姿勢へと移る。

瞬時に切り替わる頭、姿勢は一気に危機へ向き、両手にはそれぞれ得物――アサの理壊装円破解、アイの理壊双焔破界――二振りのリカイソウエンハカイが破壊兵器に向き、空中から迫る大凶器に備えた。

『天段――』

空中でミサイル相手にしていたカンナでも、分裂するクラスター爆弾の全てを破壊することは叶わない。

トウコツが手伝っても物量の前に完全に阻止することは叶わなかった。スミレも空中の2人を陰陽術で強化しつつ、自身も魚雷の破壊に専念するがラインは押されるばかり。

だが、そこにアサとアイが加われば、

「緒深苗刺（おみなえし）」
「鎖斬渦（さざんか）」

助勢に加わる2人の術。
唱えられたオリジナルの陰陽術が海中と空中に多大な衝撃波を生む。
アサのオミナエシが水中から迫る魚雷群を不可視の尖（とが）り糸で細切れにし、空中のクラスター群を藍のサザンカという斬撃突風が切裂きながら駆け抜けた。

「カンナ姉様！理壊双焔破界（りかいそうえんはかい）を！」
「三段：蕗之薹（フキノトウ）」

クラスターの全てを空中で解体したものの、子弾の半分は残っており、いまだに爆発力を有している。
だが、半分だけである。トウコツの風纏と剣術、カンナの徒手空拳に加えて藍から投げ渡された炎の金棒によるバッティング、アサとカンナの陰陽術等の破壊手段の前に、爆弾はほぼ全てが無力化されていった。

『こちらジャンヌ。聞こえますか、トウコツ』
「あぁん？　どうした！？」

『南及び南東、北東より防衛海岸を突破した部隊が現れました。
現在、嵐で四凶軍を分断していますが、内部にいる軍隊だけでも

これだけの進行を許している現状です。
後方に控えている戦力全てに侵攻されてはひとたまりもありません。そこで――』

「“突撃”それから“足止め”せよってか？」

視界の中で鬼の姉が特攻する。
艦隊に向かって一人、それを追って妹が一人。
おそらく単身艦隊を潰す気だろう。

『5分後にナイトメア非武装派による攻撃が始まります』
「非武装派の連中が？」

『なるべく敵陣深く潜り込んでください。
風の障壁間際まで敵が移動してくるように、突出し過ぎと見せかけるために“あなた方5人”はそのまま西部で暴れまわってください』

（5人って、こっちの現状が見えてんのかよ……）

相変わらず底の知れない司令を嵐の内側に思い浮かべる。
突撃していった2人の鬼へと向きを変え、集中砲火に晒されている女性2人の援護を頭に思い浮かべた。
その途端、一刀の冷たい物が喉元に突き付けられた。
戦火に輝る刃を追い、柄の先に見える鬼の手は白州唯の街でさんざん見てきた彼女のもの。

「最終確認よ」

「今はお前らと遊んでやれねぇな。俺さ、任務は更新されたわけよ」

「……つまり？」

「一旦協定でも結ぼうか。
共闘して、余計なこと全部終わったら話着けようじゃねぇの」

先行した2人の鬼をアサが追う。
どんなに離れていたと言っても、彼と彼女たちの関係が兄妹であることに間違いはない。
それを知ってトウコツは藍にもう一押し、共闘を申し込んだ。

「お前はどうすんだ？
確か、俺が嫌いなんだろ？
理由は分かるけど、また身内を見殺しにする気か？
俺はあっちへ行く。
そこにはお前の兄妹もいる。
どうする？　お前だけここで足を止めるか、それとも一緒に邪魔者を排除するか？」

「アサ兄様達とは一緒に戦う。
でもトウコツ、私はあなたを信じられない」

「何でだ？　俺が四凶だからか？」

「それもあるけど……もし、あそこに飛び込んであなたに裏切られでもしたら、いくら私達でも命を落としかねない」

別段、藍の言葉を理解するのに難はない。だが、皆無に等しい信頼を得るための手段を持たないトウコツにとって、共闘を受け入れさせるのは至極困難なことであった。

「俺はなぁ――――なら、ちょっと待て」

一度顔を不機嫌に歪めたトウコツ。
四凶の右手を追うと、右耳の通信機に伸びた。その間、左手は腰のトランシーバらしきものに。
呼び出しボタンを押し、トウコツは鬼の目の前で通信を始めた。

『こちらジャンヌ。
どうしました、トウコツ』

腰の通信機がスピーカの代わりとなり、藍にも協会司令官の声が届くように調整したトウコツは、本題に移った。

「ちょっといいか？」

『はい、何です？』

「ジャンヌの姐さん……じゃなくて、ジャンヌ。
好きだ」

『駄目です』

この瞬間、藍の頭上には二つのクエスチョンマークが“縦長いモノ＝！！”付きで跳びだした。
どこか頭の捩子でも吹き飛んだのかと怪訝にトウコツを観察する。
何が起こっている？
どうしてこうなっている？
理解できるものが兎に角足りない。

「いや、冗談とかじゃなくて、マジに好きだ、です。
一発惚れだ、した」

『……ト、トウコツ。言葉使いが変になってますから、まず普段みたいな――』

「あぁ！もう我慢できねぇんだよぉ！
俺はアンタに惚れてんだ！
俺なんかで悪いが、ジャンヌあんたマジ可愛いんだよチクショォオオオ！」

『はいぃ！？？！！？？
落ち着きなさい！　ま、まず――！』

「俺はあんたの為ならどんな命令にでも従うぜ！
パシられても文句はねぇ！

靴だって舐めてやる！
ムカつく奴らは全部叩きのめしてやる！
経済学だって勉強してやるぜ！
だから、言わせてくれ――いま、俺は！戦争よりもジャンヌが好きだ！」

目の前に狂人を見て、藍は放心した。

同時刻、協会司令部では誰も見たことのないジャンヌ司令の赤面と、初めて直面するトウコツの告白シーンにほぼ全員が戦争を忘れかけた。

それを冷静に見守っていたミギス・ギガントだけが、“あぁ、彼もある意味四凶だ”と違う意味で納得していた。

『じ……却下です！
何ですかアナタは！？
非常識にも程があります！
まずは状況を考えて眼前の脅威を排除してください！
それに今のあたなの発言でどれだけ我々が害を受けるか考えていたのですか！？
ほらソコ、手を止めない！
いいですか？まずは課せられた仕事を誰もが納得するほどに完遂してから人に物を言いなさい！なんなんですかイキナリどうしてそんなことになったんですか！？あなたの言い分や理由や言葉とか本性とかは後でたっぷり聞いてあげますから、まず鬼の方々と艦隊を沈めてください！まずそれが出来なければお話になりません！
あ、そう！そうです！先ほどのあなたの真意を確かめるためにも、

鬼の方々とうまく連携しなければいけないこと！それを前提条件として、直ちに戦艦を３０隻以上沈めてきなさい！それがノルマです！それができなければ帰ってこなくて結構です！
それでは通信終了しますよ！変なことで掛けないで下さい！敵を倒すまでそちらからの通信は一切禁止です！わかりましたか！？』

「――はい」

『わ・か・り・ま・し・た・か！？』

「はいはい！分かったって！ＯＫだ！
ミスったら割腹でも厭(いと)わねぇ！
良い返事待ってるぜ！」

通信終了。
気のせいか戦場の音量が元通りの大きさに戻ったような感があった。
もしや、全ての回線と繋がっていたのかという疑問を抱かざるを得ず、しかしまったく理解できないトウコツの行動に頭上の記号が消えてくれない。

「……というワケだ。よろしく敵をぶちのめそうぜ！」

（どういうワケなのかしら？）

疑問を抱きつつも赤面気味のトウコツが“共闘を望んでいる”ことだけは、とりあえず理解した。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第５２話－

－Ａｉｒ　ｏｆ　ａ　Ｃｏｎｆｒｏｎｔａｔｉｏｎ－

－嵐外　東－

刻々と変わる戦場の中で眠ってみると、やはりいつもと同じように夢へ落ちることは出来なかった。
文明の爆ぜる音に、嵐で渦巻く乱風。
駆使する兵器の鳴き声もさることながら、人の阿鼻叫喚も騒音以

外の表現に適さない音量に達している。

それでも、結晶に埋め尽くされた海上は他方の海岸に比べて格段に静かだった。有機も無機も関係なく石の中に飲み込まれ、光を放ち続ける光源結晶の数々が夜海に現れた無数の宝石を照らした。

東の海、海上に突き出した巨大な黄金結晶の上から眺めるは協会本部。

風の障壁の向こうに懐かしい光を感じ取り、結晶を生み出した主：コルスレイは瞼をあげた。

「誰だ？」

黄金結晶から海上を覆うエメラルドの上に降り、単身で歩み寄って来た男の名を問う。

「メイトス・シュラヴァイトフ・ジヴィア。
お前に話があって来た」

「聞いたことがある。
否定のＳＲだったな。
どんな話があって俺の前に来たって？」

「言いたいことが少々と、聞きたいことが2、3。
それについてどんな意見を持ち合わせているのか、参考にさせてもらいたく足を運んだ」

結晶の上を歩きながら無防備な風を見せつけて歩み寄り、正面に至って足を止めて腕を上げる。否定のSRが何を聞きたいのかが手に取るように分かる。

先ほどから戦場の中央に零れ始めている光だ。

メイトスは上がった腕の先で指が一本、協会の中心部に向いていることを目で追って確認した。コルスレイというSRに読心術の能力があったのか、記憶の中から目の前の個体に関する情報を思い出しつつ頷いて応じる。

「先生が起きようとしている」

「その通りだ。

協会はボルト・H・パルダンを利用して四凶軍を消し去るつもりだ。

しかし、私には協会がボルトを制御しきれるなどとは到底思えない」

「それで？」

「ボルトを御すことは可能か？」

「無理だ。

前例（まじょがり）があるだろ」

艦砲射撃が再開し、協会本部を取り巻く旋風の壁に無数の炎が灯る。

その光景を眺めながらメイトスは、予想通りの回答を即答してくれたコルスレイに次の問いを渡す。

「次の質問はお前自身だ。
この東部方面の四凶軍は結晶侵食のおかげで壊滅状態に近く、この海からの接岸と侵入を遅れさせた。言ってしまえば――」

「俺の行為は協会に利をもたらした、とでも？」

「その通りだ。
コルスレイ、そんなお前を会長は一時であろうが協定を結ばないかと思案し、考えてているようだ」

「断る」

二度目の即答を前に、メイトスは理由を問う。
この戦場で、協会にも四凶にも属さずに、只管（ひたすら）これだけの事を続けるつもりなのか。
結晶に飲まれた人々から欲望を集め、何をするつもりなのか。

「協会と四凶の戦争は、俺になんら利害ももたらさない。
ただ、死体を大量生産してくれるというなら、それらからも欲望を集められる俺としては大いに有難い話だ。これまで大量の欲を集めてきたが、目標まであと少し欲が足りないんだ。だが、この戦場の欲望全てを集めることができたのなら――」

「死人でも蘇らせるつもりか？」

「――それも出来る。

その為にも組織に縛られることなく、どこへでも自由に行ける立ち位置が必要不可欠なんだよ。

この戦争が一方的になったらより多くの死体は望めない。可能な限り中立を貫き、より多くの上質な欲望を持った者達に死んでもらい、俺がそれを回収して回る。それが俺の理想、この戦争で唯一参加するに値する理由だ」

「お前の収集を認可すると会長が言っていたとしても、か？」

「有り得ない」

「当たり前だ。“特別”なのだから。

本来なら有り得ない話だ。

だが、ボルト・パルダンに関して、お前が今のところ数少ない直々の弟子であるのだ」

コルスレイは言う。

彼女がどんな人間であり、ＳＲであるのか。初めて見せる怒りの顔で否定のＳＲにデータベースに無い話を語り始める。

「いいか、メイトスのボウヤ。

ボルト・パルダンは昔から孤児や浮浪者を相手にしてきた女だ。

素質のある者には例外なく生きるすべとして魔法を教えてきた魔女なんだよ。

いいか？

１７世紀の魔女狩り――ボルト・Ａ・パルダンと協会の戦争がどういう結末で終わったかお前は知っているのか？　データで知ったか？　そもそもどこまで知っている？」

「魔女狩りの原点となったボルト・パルダンは十字軍に軍事支援をしていた協会の殲滅を目論み、単身協会支部に殴りこんだ。
挙句、自らの行為が無数の人間に卑しき心を芽吹かせた責任と言い、協会のＳＲのみならず、魔女狩りに参加していた多くの市民を大量に焼き殺した」

それが協会のデータベースに残る数少ないボルトの情報である。
だが、実際に決着の場にいたコルスレイと、データでしか魔女狩りを知らないメイトスの間には見方に大きな違いが生じていた。

「数多の焼け野原をつくった後、対となる闇影の魔女：ディマとの対決でボルトは敗れた」

「そう、それが協会だ。
平気で事実を歪曲させる」

「……しかし、ボルトは完全に消滅することなく、厳重な封印によって長い眠りにつき、十数年前に突然原因不明の覚醒に至る。
協会本部から零れ流れていった。
それから中国でボルト・パルダンと同行しているというＳＲからの連絡で本人を確認。
数年後にその小規模集団――芹真事務所を協会本部は一時的に傘下に組み込み、現在は協会の下を離れて小規模集団として芹真事務所に所属するに至る」

現在のボルトがどうなっているのか、実際に白州唯の街を訪ねた

コルスレイは知っていたし、それよりも協会の魔女狩りのことが気になって仕方がなかった。
訂正を求め、一度下した手を再び上げる。

「先生はディマになど敗れていない」

「そう言いきるのは、その場に居たからか？」

「あぁ。
17世紀、先生の元には2人の弟子がいた。
それが俺ともう1人の魔女だ。
戦場について行くことを先生は許さなかったが、どうしても恩返しをしたかった馬鹿な俺達2人はしっかりとその戦場にいた」

ちょうど、こんな暗い戦場だった。
黒煙で陽光は遮られ、漂う死臭が正常な精神を蝕み、怒号と信仰が人々を狂気に陥れる。存在する悉くを消し、勝手な思想のために無差別な蹂躙が場所を問わずに繰り広げられる。
決まって彼らは言った。
主のために、神のためにと。

「宗教の風潮が強かった時代ということもあって、協会の抵抗は現代のものに勝らずとも劣らない気概を持っていた。
それに対して先生は1人……俺とエイリスも光の魔法使い」

上げた手の中に光の球体を作り出してメイトスに差し出す。

「この光は先生に貰ったもの。
やっと叶う恩返しと、喜び勇んで赴いた先は戦場だ」

「そこでボルト・パルダンの敗北を目にしたと？」

「自爆だ」

「何？」

「先生は誰にも負けちゃいない。
開発中だった新しい魔法の発動に失敗し、自分の形を保てなくなっただけだ。
二度と間違えるな。
先生は誰にも負けていない」

頷いて了承し、最終確認を取る。
協会に与する気はないのかと。

「俺は誰にも与さない」

「四凶にもか？」

「当たり前だ」

「……そうか。
ならこの件、これ以上は問うまい。

最後になるが、これは私からの進言だ。
この結晶による人間の再生、うまくは行かないぞ」

「ボウヤに何が分かる？」

「分かるのには理由があるからだ。
それでは、邪魔をしたな」

背を向けて去る否定の男。
コルスレイは光球を作った掌を男の背中に向けて放った。
攻撃ではない光。
それをメイトスは受けて足を止めた。
与えた光は攻撃ではない。
情報であった。

「ソレが先生の使用した虐殺魔法だ」

「……まさに、荒唐無稽（こうとうむけい）。
こんな事が出来るのか？」

「出来るから知る人間全てに危険視されるんだよ。
先生はそれが悲しいって何度も言っていた。
そもそも使う気もしない、開発を再開する気も起らなかったという新術。
とにかく、もしそれが発動しそうだったら直ぐに暗闇へ逃げ込み一切の光から身を眩ませることだ。それが叶いそうにないなら空間を操作できるＳＲと一緒に行動しろ。少なくとも即死は免れる」

「――感謝」

結晶の影に消えてゆくメイトス。

真っすぐ協会本部を見直すコルスレイだが、そろそろ愚痴を零したくなるほど不愉快な事実が、メイトスとの会話中に協会内部では進んでいた。

零れてくる光から分かることがいくつかある。

まず、いま協会内には覚醒したボルトがいること。間違いなく。

そして残念なことにボルト・H・パルダンであること。協会が望む最高火力を彼女には望めない。

（確かに瞬間火力は高くない方だが、その分長時間光撃を持続することができる。

ある意味で、最も望ましい力を持った先生が出てきたってことか？）

しかし、ボルト・H・パルダンの状態でメイトスに伝えた魔法を使おうと準備をしていることも事実だった。

協会内部に莫大な魔力の流れを感じた。まるで密林の中にいながらナイアガラのように荘厳で巨大な滝を耳や肌で感じるように。

（広域探知に優れたボルト・S、　予知に優れたボルト・N、　持続力に優れたボルト・H、　破壊と再生に特化した　ボルト・A―最も安定していた最上のボルト：Aでさえ発動に失敗した光撃を、Hの状態で撃とうなど、協会はよっぽど自爆したいとみえる）

死体からの欲望収集急ぎ、コルスレイは最悪の事態に備えた。

―協会本部　会長室―

銃を突きつけるという行為がどういったものか、非銃器社会が日常の日本に住みながらも、一個の生命体としてトキはその意味を理解していた。引き金に指を掛けた者が突き付けられた者の生命を左右し、それは同時に行動の制限にも繋がる。

そんな状況が目の前にあるはずなのに、銃を突き付けられている協会長が凶弾を受けるイメージが全く湧いてこない。加えて、突き付けられている会長からは自由が消えていなかった。再びポッドの中身を注ぎ、挙句飲まないかと引き金に指を掛けたフィングに勧めてきたのだ。

「自慢の茶葉だが？」

「遠慮だな！
包み隠さずトキに話せ、お前の本音！　計画を！」

「まぁ、慌てるな。
トキ。俺の机にインカムがあるからそれを取ってきてくれ」

「動くなトキ！

インカムで何をさせるつもりだ？」

銃を脇のホルスターに収めたトキをフィングは呼び止め、会長に目的を訊ねる。

罠でないという保証がどこにあろうか。

協会長はこの段階にあって尚、自分の手の内を味方にさえ明かしていない。フィングはそんな会長を信頼できなかった。

「急いだ方がいい。

“彼女”が来る。それにインカムを付けていれば少し離れても会話は出来るだろう」

「彼女？」

「――どのみちココが分岐点だ。

それをより確実なものにする為にも、今からお前たちに教えてやろう。

何故この俺が四凶の持ちかけてきた戦争に応じたのか」

その名は挙がらずとも、トキは衝撃に駆られていた。

彼女がここに来る。

予言されただけで体は会長の机に向かっていった。フィングが会長の解説に苦しむ中、手を伸ばして会長の支配でそこに置かれたインカムを掴む。

「まずは俺達の意見だ。

この世界にはＳＲという本来流れの中に存在しなかったものが存在する。原因は間違いなく俺だ。俺自身がこの世界にとって流れの中に組み込まれていなかったモノ。それを無理矢理支配した結果、無数のＳＲを蔓延らせることになった」

「ケッ、何様のつもりだよ」

「――神様になったつもりは無いが、近づいた自覚ならある」

銃口を強く押しあてられながらも会長は続ける。

「――人が育ち、文明を築いて科学を進め、文学を生み、宗教を広め、誰もが支え合い、貢献し合う人間の社会が構成された。

私の中で二つの意見が対立を始めた原因はそれにある。

人が育つのはどこの世界でも同じだ。成長しない人間など存在しないし、全く他人に貢献しない人間も有り得ない。誰もが貢献していると言って過言でないこの世界は、ある意味で完成度が高い。

――それでも、その影で消えていく人々……理不尽に塗（まみ）れた人々の割合が、常に過去最低を更新しているの。残念なことに、それは予想外の悲劇でしかなかった。原因は先述したように、この世界に不穏の流れを創った私にある。ＳＲという力が、元々混沌を内包した世界に更なる混沌を招いた」

（女？）

「――そこで、我々の中に希望と絶望、この両端から世界に下す結末を論議する瞬間が生まれた。

絶望が生むＳＲ、ＳＲが生むＳＲ、ＳＲが生む絶望。

この連鎖。これは誰にも止めることができない激流だ。

――でも、人の強さを最後まで見守りたい。

こんな禍々しい生き物が跋扈する世界だろうと、それが生命であることに変わりない。だから、

――俺の中では二つの意見が対立しているんだよ。

この世界に絶望した、だからこの世界にピリオドを打ってやろうという俺達。一方で、この世界のパターンを体験するのは初めてだ、それにどんな理由があろうと、この事態を理解していない者達を皆殺しにするのは人が作り上げてきた道に反する事。

同じく人の道を歩き、その道中でＳＲになって今に至るだけの俺達にリセットボタンを押す価値などないと主張する俺達」

「リセット……それって、人間を滅ぼすってことか？」

「違うぜトキ。

会長が滅ぼそうってのは人間じゃない。

この世界“そのもの”だ」

「――Ｙｅｓ」

立ち上がり、ジェリコの銃口を前にゆっくりと席を離れ、窓際まで歩くバースヤード。火器を持つフィングを意にも介さず、穏やかなその眼は外の台風に向いていた。

「俺様が消そうとしているのは全部の命、色、線、流れ、連続、熱。

この世の全てを消す。

リセットとは次を考えての発言だ。
その中に君たちは予定していない。何故なら、まだ君たちを評価しきれていないのだから」

「何言ってやがるんだテメェ！
それじゃあまるで“もう一回世界をつくる”みたいな口ぶりじゃなねぇか！？」

「……本気なんですか、会長」

静かなる支配者に怒りの表情を向ける完全再生。
その傍ら、トキは真偽を問いた。

「――何故この力を“セカンドリアル”と呼ぶのか教えようか、フィング？
まぁ、教える気など皆無だがな。禁忌に等しい。
私が本気かどうかと問われても、答えは本気以外に用意されていない。それに私が言ったようにそれを試験するため、我々だけでは下せない決断を世界中の君たちに判断してもらおうと戦争に応じたんだ。
ここは差し詰め試練会場。
四凶が私に何を見せてくれるのか、協会に従う者達がどんな未来を導くのか、イレギュラー達が何をもたらすのか。
私はそれを見て決断を下す。
その中で、色世時と織夜秋の邂逅は特に大きな判断要因だ。死を具現としたＳＲと、創造・生存を叶えるＳＲの対決。世界の流れが望むのはどちらなのか、それを踏まえてこの戦争の結末を臨み、流れの先にある結末を吟味熟考して、リセットの如何を決める」

「それは、結末まで生きていられたらの話だろ！」

銃弾が心臓めがけて飛ぶ。

弾け飛んだ空薬莢がテーブルの上で跳ね、銃火にカップの水面が光る。

空を切った弾丸はガラス面を直撃し、白く小さな弾痕を防弾使用の面に残す。

「当たらずと分かっていながら撃つか。

――しかし、その行為。抵抗は絶望に対する無謀な挑戦だが、明確な未来を希う（こいねが）足掻きだ。我々にとって望ましい姿勢だよ

――足掻いて足掻いて、足掻ききった先に、君たちの未来はあるのだからな。もっと必死になるべきだ。特にフィング。こそこそ逃げ回らず、男らしくこの戦場で戦功の一つでも上げてみたらどうか？」

会長は硝子辺から机の傍まで移り、弾道上から退いていた。

険しい剣幕で銃を向け直すフィング。涼しげな顔で微笑む会長。

2人を見守っていただけのトキだが、この部屋にいるだけで会長のSRによる効果を受けてしまうことを、直後に身をもって知ることになった。

フィングの照準とトキの抜き撃ちが重なる。

この場に割って入って来たフィングに、トキは別段敵意を覚えているわけでもない。そもそもこの場で、この面子に銃を向ける理由

などない。

（腕が……なんだ！？）

オウルの完全支配が動く。

直に味わう強力な支配が上げようと思ってもいなかった腕を持ち上げ、掌は銃把を握り、指は引き金を、照準は次弾を撃ち出そうとしているフィングに向いていた。

「何っ！」

思わぬ場所から飛来する銃弾にフィングの照準がずれる。

こめかみの髪を攫って壁に埋もれた銃弾は、少しでも回避が遅ければ確実に頭部を破壊していたであろう一撃だった。

トキの拳銃――サルシルマズＳＴ１０の銃口が完全再生を追う。

そんな銃撃が間断なく続いた。

「トキ！何を！？」

「――フィング・ブリジスタス。

お前の目的はノアだろう。何故遠回りをする？

トキに代役を期待するは無意味。

直接聞けば俺の中のいずれかが答えたであろうものを……」

これまでにないほど冷たい口調で告げる会長の眼がフィングを追う。

言われたフィングは歯を食いしばった。９ｍｍ弾が腕の肉を抉り、会長の言葉が心に刺さる。これ以上ないほどの図星。

テーブルを足場に飛び、ソファを盾とし、ジグザグに後退して銃弾を躱す。

それでも壁際に追い詰められ、死を覚悟し、壁を背にした瞬間銃撃は止んだ。

「――テメェがトロトロしてっからよぉ、来ちまったじゃねぇか」

「え？」

「何ぃ？」

「――Ａｎｇｅｋｏｍｍｅｎ」

気の抜けたトキの声と同時、フィングの足も止まる。

支配が解けたことを五体に確認したトキは、急いで銃のマガジンを取り換えた。

会長の口からついて出た到着という言葉に体中の細胞が連動する。協会長の支配は終わっていない。全身に警戒を喚起し、この部屋中に最後になるかもしれない平穏の時間を意識させた。

フィングも無意識的にそれを感じ取り、壁際から飛ぶように離れた。

同時だった。

大きな振動は外のもの。
だが、一切の音もなく部屋の隅に生まれた黒く大きな球体は確かな、振動以外の衝撃を伴っていた。
壁と言う物を飲み、触れたその部分だけが黒の中に溶けるように消える。
壁に開いた穴を潜って現れたのは少女。
両手に血まみれの銃器を持った、独りだった。

「見つけたよ、トキ！」

「アキ……」

黒髪の、雰囲気だけで暗く黒い物を連想させる不思議な圧力を持った少女。
両手のＰＰ－９０Ｍ１サブマシンガンが咆哮を上げる。
一拍ずらし、視界の中にアキは黒い何かを放った。
直感でそれが壁に穴を開けた球体にまで膨れて大きくなるのだと感づいた。

明確すぎる脅威を前に、初めて聞く、頭が割れそうなほどに巨大な警告音が痛むように響いた。コントン以上の脅威。
自分の真正面から迫る少女――会長にも、フィングにも横目を振らず、ただ正面だけを見据える――敵。
銃弾が無造作に放たれては通過していく。
照準も何もない乱射。
一見無暗な銃撃に思えたが、退路は確実に限定されていた。

（何だこれは――闇！？）

黒い球状の空間がトキの視界、トキの顔に触れる。

急いで顔を反らしてみると、球体は黒色を増していることがわかった。

「やっと逢えた……！」

薄暗い部屋の中。

突撃してくる初見の少女。その顔に戦慄を覚え、背中には冷たいものが走った。

咄嗟に後ろへ飛ぶ。同時に黒い空気に触れた拳銃が壁同様に触れた部分だけを失う。

少女の銃弾が痛めつけた防弾ガラスをクロノセプターで分解し、会長室から協会本島上空へ飛び出す。

数秒前まで立っていた場所に大きめの黒い球体が現れ、室内の闇を一か所に集めたかのような錯覚を催した。

（アレに触れちゃいけない！）

「今行くよ、トキ」

オウル・バースヤードとフィング・ブリジスタスの視線を釘付けにした織夜秋の、その眼には空中に飛び出したトキしか映っていな

かった。
躊躇することなくトキを追って乱流潮風吹き込む硝子辺を蹴り、混沌とした戦場の空へ躍り出る。

オウルの知る限り彼女に飛行の能はない。
フィングもトキに対して同じ考えを示し、2人の飛び出した先を急いで確認した。
自殺は考えられない。
トキはコントンに勝つ為努力をしてきた。それを棒に振る行動を取るとは考えられない。

（飛び出して大丈夫なのか！？）

「聞こえるか、トキ」

消えた防弾ガラスの尖鋭な消滅痕の端に手をかけ、落下していく2人を真下に見つける。

（こいつがオリヤアキ！）

（トキを殺せば私がトキになれる！
母さんとの約束を守れる！）

ＳＭＧ（サブマシンガン）の放つ弾丸をクロノセプターで吸収して落下し、潮風から僅かずつでも時間を奪って力をためて両手を広げ、再び現れた黒い球体に備える。

見た目からクリーニング店のディマのように闇や影を司るＳＲと思ったが、銃が飲み込まれたところを目の当たりにして違う気がした。

（黒い球に触れて消えたという事からどちらかというとディマではなく、エミルダの神隠しと似通った性能）

「聞こえているだろトキ。
織夜秋はお前を殺すことで自分が色世時になれると信じている。
それも宗教のような信仰レベルで、それは十分に人が殺せる域に達している」

落下の最中、高速摩擦する空気にインカムの音は遮られていた。
それにも関わらず、会長の言いたいことはしっかりとトキに伝わっている。
どうしてか分からないが、直感で理解できることがあった。

彼女は止まらない。
織夜秋は色世時になるまで追いかけ続けてくる。

（冗談じゃない！）

両腕を広げ――2人は同時に目を疑った。
トキは表情に驚愕を浮かべ、アキは狂気の笑みをそのままに固め、目を見開いていた。

同じフォーム。
両手に武器を持ったまま、お互いに何かを発動しようとした構え。
初見。
そのはずなのに、相手はまるで鏡映し。

だが、それで一手を控えるほど余裕のある2人ではない。
両者手中に得物を握りながら掌を小さく開閉する。

「消えろ！」
「止まれ！」

祈りの呪文は結末への原因。
片や深い漆黒の夜空を思わせる冷たい消滅の黒、片や悠久を思わす温かな日差しの如き静止の白。

二つの展開された世界が溶け合う様を眺めていたオウルは、一歩引きながらフィングの肩を引いた。
理解できない行動を取ったオウルに疑問を抱くフィングだが、直後にその理由が飛来する。
硝子辺の足元が音と紫電、炎を以て小さく爆ぜた。

オウルはそれを見て記憶か、と零した。

「何だ今の電撃は！？」

「――やはり」

二度目の空間展開が始まる。
アキの展開する黒。
対抗して白色空間を展開すると、黒色空間は侵攻を緩める。ついには停止を迎えるがそれは一瞬のこと。
次の瞬間、二色の空間は接触して混色状態となり、混色部位に向けて縮小を始める。

「――やっぱり織夜のＳＲは消滅だ。
――対するトキも、予想通りタイムリーダーが根底じゃないことはこれでハッキリした。
――あぁ。オリヤの展開するあれは直接有機・無機を問わず全てのモノから形や時間を奪う口。トキのクロノセプター左手と同じように、触れたモノの全体から時間を奪うこともできれば、クロノセプター右手のように触れた場所だけを消滅させることも可能なようだ。
――本来ならそれを打ち消すことは不可能。おそらく、ディマやボルトにだって対抗術はないだろう。それを完全に止めているトキは何だ？」

「それよか今の電流みたいなの何だ！？」

２人の展開した空間が混じり合い、消滅し、紫電を生む。
二度目の電撃が壁を走って登ってくる。
それは最初の空間消滅時と同じ条件で発生し、空気中で四方に散り、物体に触れては爆発を誘った。

「――触れるな！」

電撃が防弾硝子を完全に砕いて炎を散らす。

「憶測だが、アキの“死”を殺しているのはトキの“創”だ。
その対衝突が混じり合った場所に生死の概念を生む。
本当に恐ろしいのは、そこにメモリーを形成していること！」

「その記憶がこれだって言うのか？」

「そう、記憶は容器を求める。
だから人に向かって走るんだ！　しかし……！」

近づく地面に白色空間の展開を中断し、クロノセプターで時間を集める。
着地の衝撃をどれだけ耐えるか、その覚悟で次の一手が大きく変わってくる。

両手の銃を黒で分解、肉体を強化して着地と同時にトキへ仕掛ける準備を整える。

（トキ……トキ！）

「間に合え！」

気掛かりはアキの行動だった。
両手の火器を自らの力で消すという行動が、クロノセプターでの時間奪取と酷似していた。ならばアキも着地に備えている。やはり着地前後に仕掛けてくるだろう。
地面はすぐそこ。
柔らかい土など存在しない。金属で出来た人工島でそんな場所は望めない。しかもここは協会本部。頑丈な金属に固められた高強度区。
タイムリーダーでほんの少しの間低速世界を展開し、手中により多くの時間を集める。それら収集した時間で肉体を時間の膜で包む。訓練で見出した高所から落下した時の対処法だが、正直役に立つものとは思っていなかった。

（まずは着地！）

無数の船と上空の爆発が起こっているのを存分に確認できた空中から地面へ。着地と言うよりは落下。
背中から地面へ。
数ｃｍの隙間を空けて、トキの時間の膜で覆われた身体は落下運動を止めた。
莫大な時間を用いて作り上げたクッションが空気中に時間分散する。

（それで！）

急いで状態を起こし、すぐ頭上に迫ったアキを黙視する。

右手を黒い球体と共にかざし、一直線に消滅を狙ってくる。
真っすぐ過ぎる落下。
着地のことを一切考えていないと思える無謀な攻撃。

（何か着地の術でも持っているのか！？）

自分に出来ない芸当をこなそうとしているアキに驚きを覚えた。

若しくは、あまり考えられないことだが、着地のことを考えていないのか。
どちらにせよこの攻撃はまだ躱せる。回避は間に合う。
回避は。

「さよなら」

考慮すべきは逃げる手段ではなく、相手がどうこの回避を潰してくるか、だった。
警鐘が周囲に危機を伝える。
逃げ場は上下にしか残されていないと。
目前まで迫ったアキから目を離せない今、直感で周囲の状況を掴むしかなかった。

目を閉じるに等しい。

右手でクロスセプターナックル、左手はクロノセプター。
左手を掲げ、アキの右手を止める。

黒球の消滅をクロノセプターの時間供給で相殺し、右手の金棒を握った拳で左手の拳を打ち止める。

瞬く間に左手から予備時間を奪うアキの消滅力に寒気を覚えた。

骨を伝い走る右手の電撃は、顔を歪めるほどのダメージを受けたもののアキが敷いた回避対策の攻撃を読み取ることに成功する。１６の黒球を周囲に配置して包囲、逃げ場を上下に限定するというもの。そこにアキ自身が上方から攻撃を仕掛けることにより、実質残された逃げ道は地面すれすれの僅か十数ｃｍの隙間のみとなっていた。

（止まれ！）

左手と右手の指が絡み合った瞬間、白色空間を展開してアキを瞬間的に止める。

欲を言えば数秒間はアキを止めていたかった。だが、本能が不可能というサインを出していた。

――彼女には通じない、突破される、油断を生むな、隙を見せるな

それならば、彼女を止めるのは一瞬だけでもいい。

とにかくこの囲いを抜けるタイミングは今を逃せばもうないだろう。

「――ッ！？」

白い球状空間に触れたアキが止まる。

その間に絡まった指を解き、両手を引いて黒球の下を急いで滑り抜ける。
だが、静止から低速へ戻るアキの速度は、これまでの誰よりも早く、異常だった。
静止が約0．5秒、低速状態から通常時間帯に戻ってくるまで僅か3秒足らず。

（逃げるな！）

（早い！？
しかし、大抵こういう能力系をメインに仕掛けてくる敵は肉弾戦の火力が乏しい！
なんとか組み付ければ……！）

黒球を潜り抜けたトキを目で追う。
右手を伸ばし、拳を作る。
距離を開けるトキの進路上に新たな黒球を生み出し足を止める。
今度はUの字を描くように配置し、更に上下に逃げ場を作らないように上中下の三段で構える。
トキを逃がさない。
その為だけ、殺すためだけに追走する。

「おっ！」

黒い球体が形成した壁を前に足を止める。
自ら衝突して命を落とすという失敗は許されない。どんなミスで

も起こりうるのが戦場（げんば）だと教えられてはいたが、コントンを討つまで命を落とすわけにはいかない。クラスメイトや協会の人々の命がかかっていることを再認識し、反撃の意に熱が加わる。

アキが駆けて詰める。

足を止めたトキが身体を向け直す。黒壁に阻まれ、己に問い直し、未来に備えて何をすべきかを考え直した結果だ。

加速するアキの姿勢が攻撃のものへと移る。跳躍からの蹴り足。

それを受け止め――ることに失敗する。

予想外の衝撃力に前方防御のため交差させた腕は弾かれ、その勢いで足は踏鞴を踏み、後ろへと体は押され傾いた。

黒い球の壁は妨害と攻撃を同時に実行できる力を持っていることを知り、初めて織夜秋というＳＲのタイプを理解した。

（この火力……万能設置型か！）

タイムリーダーで数メートルの距離を取ろうが、それを先回るようにして黒球を設置したり、自分を中心に広域をカバーする黒色空間を展開したり、腕に纏わせて直接消滅に乗り出す。

加えて、アキ自身の身体能力もずば抜けて高い。

跳び蹴りの威力、そこから更に繰り出す空中からの足技。

（滞空時間が長い、長過ぎる！）

空中で蹴り足を連続で放ち、そこから宙返りで高度を上げ、視界

にトキとその周辺を捉えて腕を横薙ぎに払う。黒の壁を背にするトキを更に包囲する。黒色円陣。
再び黒で囲んで頭上にも黒球を配置し、包囲の輪を一斉に移動して包囲を狭める。

（この黒は移動もするのか！）

「これで私が――」

黒に触れれば消滅は必至。
だが、これを止めることができると分かっている今、アキ本体の攻撃力に比べれば黒球は余力を残しても対処できる攻撃と速度だった。
両腕を広げる。

それを消滅黒球の外側から知覚したアキはトキと同じ構えを取り、白い球体を発生しようとする敵目がけて距離を詰める。
半透明の黒色球体だが、夜の闇と上空で起こる疎（まば）らな爆炎の生み出す光の移ろいは、黒の向こう側にいる人間を視認させ辛くするのに十分な阻害効果を併せていた。
頭に響く警鐘を頼りに、トキは可能な限りアキを目で追う。

包囲黒色をクロスセプターとクロノセプターの白色空間で止める。
展開され、球体を止めたトキの白色空間にアキは新たな球状黒色空間をぶつけた。
双方向衝突ではないから記憶は発生せず、しかも後発の黒が白い時間空間を呑み込む。

黒に飲み込まれた白が、アキの中にエネルギーとして吸収されていく。

右手の拳に乗せる黒球。
対して、それを迎え撃ったのは右の掌。

消滅空間に飲み込まれているにも関わらず消滅の兆しが見えないトキがいて、それでも消滅を疑わない自身を貫くアキ。
再び結ばれる視線がそれぞれの願いを訴える。

（何故その名を奪ったの？）
（どうして“トキ”という名前が欲しい？
それを得ることに何の意味があるんだ？）

先に動いたのはトキ、次にアキだった。
消滅から身を守ったトキの術――左手の全体からの時間奪取による消滅空間の高速弱体化を見せつけ、更に持ち替えた金棒でアキの腕を狙う。

（トキになって、私は人間になれる！）

金棒の打撃を防ぐアキの一手は、消滅させてきたあらゆるモノを掌中に集めて物体として再構築するというもの。
トキの得物が腕ではなく、日本刀の柄に阻まれて止まる。

（君は人間だろ！
なのに、どうして人間を目指す必要がある！？）
（じゃあ、どうして私の名前を奪ったの？）

二色の空間がそれぞれ消滅する。
包囲黒球が消え、静止空間が消え、互いに奪い合い、吸収し合った力から2人は武器の構築した。
金棒：リカイソウエンと黄金剣：星黄（せいこう）。
アキは上下逆様のまま、黒を纏わせた日本刀で突きを繰り出す。

（俺は君から何も奪っていない！）
（いいや、奪った）

防御に掲げた星黄の刀身が消滅を纏った日本刀によって折られ、咄嗟にアキの攻撃を真似て静止の白を纏わせた金棒を繰り出す。
衝突は灰色。
火花とともに紫電の記憶が夜闇の中を走った。

交差を見せない心の声にトキは焦りを、アキは静かに怒りを思い出していた。

（今の君が人間じゃないのなら、一体なんだって言うんだ！？）
（分からないから怖い。だから分かるようになりたい）

牽制も偽装もなく、ただただ感情のままに刀を振る。

小賢しくもそれを悉く防いで躱すトキに空いている掌を向け、顔面に至近距離で消滅小黒球を放つ。上体を反らして避けたトキへ斬撃の追跡をかけ、邪魔なトゲ付きを排除しようと黒を創りだす。
だが、どんなに攻めてもトキは紙一重で躱し、防ぎ、未だに血を流すこともなく無傷に立ちまわっていた。

しかし、一発だけ確実に響いている。
先ほどアキに見舞われた蹴りがそれであった。
防御した腕の感覚がおかしい。相当な衝撃があったことは間違いないが、それでもクロノセプターを使って消しきれない戦闘での痛みはこれが初めてだった。時間を充てての回復も、治癒促進を施しても痛みは引く気配を見せない。

走る得物に、生まれる電光。
無人の軍事演習エリア間際に剣戟の音が響き、周囲を警戒状態で待機していた協会ＳＲらの視線を集める。
会長オウルも移り戦う2人を空中から見守った。トキとアキというＳＲの持つ可能性について、傍らのフィングを話し相手に語った。

「どうします隊長？」
「いま司令部に問い合わせた」

剣戟と紫電は多くの兵に不安をもたらした。
風と爆音に混じり、金属の衝突音は次第に大きくなっている。はっきり電光と分かるそれがもたらす小爆発も、すでに視界の中に入るほど近くに生じていた。

（アキ、君は誰にそんなことを言われたんだ？
俺を殺しても、君が得るのは名前だけだ）

（誰も私を知らなくていい。
私がトキになれればそれだけでいい。それだけでいい……！）

大黒半球の範囲外に逃れ、時間操作し一気に距離を詰めながら黒を相殺しつつ、アキの特性に新たな能力を見出す。
近くにいればＳＲの効果が気のせいか弱体化してしまう。
それである程度納得は行く。
コントンのように時間の流れの中から抜け出すのとは違う方法で同じ時間の中に戻ってくる。
低速時間から回復するアキの刀の軌道を読み、金棒を軌道上において防御。同時に再構築した星黄の一撃を見舞う。今度は消滅を受けないようリカイソウエン同様の時間処理を施す。が、消滅されずともアキはそれを難なく流して見せた。

「エリアＷＳ、６から８を担当する防衛部隊は直ちにＳエリアへ移動せよ」
「いいのか、トキを援護しなくて？」

上空から眼下の兵士たちの耳元へ直接声を飛ばすオウル。
その背中で若干の不安を覚えながら、視線を自分の足よりも低い場所で得物を交える２人へ戻すフィング。
同じ高さで見るのとは違ったものが交戦する２人の間に発生していることがハッキリと見え、フィングはそれに寒気と興奮を覚えた。

（仮にトキが生、オリヤが死を具現化したＳＲだというなら、この周囲への影響も頷ける）

星黄を持つ手の首を柄で殴り、刃でソウエンを持った腕の斬り落しを狙う。

実力は拮抗。

だが、オリヤには躊躇がなく、トキには殺意が皆無という決定的な違いがハッキリと現れていた。

２人の注意は周囲に漏れず、ただ互いだけを意識の真ん中に置いて剣を振るう。

剣戟に伴う金属音と、生じる記憶の炸裂音が周囲に少しずつ間近な恐怖を募らせてゆく。

（どう考えても巻き込まれるのが当たり前の距離……それなのに、２人の衝突で放たれる記憶ちおう紫電と爆発は未だ誰にも触れていない）

会長は叫ぶ前に言った。

記憶は容器を求めると。

電撃が最も近くに在る物ではなく、もっとも近くに居る者を目指すのも容器を求めているからだと。記憶はそれ自体に意思がなく、意思を得て初めて記憶として存在を始めることができる。

何もない伽藍には０も１も書き込めない。

理屈でわかっていてもフィングは府に落ちなかった。

（そんなモノが何故あの２人の衝突から生まれる？）

不謹慎と心の底で僅か思いながらも、好奇心は顔に笑みを思い出させていた。

つくづく理解不可能なＳＲ２人を前にネクロフィリアの知的好奇心は最高潮に達していた。会長の存在も、その周囲、更には己が戦場にいるということさえ忘れるほどに。

（生と死がぶつかって記憶？
トキが生を創り、オリヤが死を導くから？
記憶が容器を求めるなら生をトキを優先するのでは？
なぜに無差別に記憶は飛ぶ？
オリヤがトキを死地に立たせているからか？
それともトキが一度死んでいるから記憶はトキに向かって走らないのか？）

「フィング」

一際大きな衝撃が走る。

ぶつかり合った金棒と刀はそれぞれ別の奪取力に包まれていながら、接触した部分にヒビを走らせていた。十分に踏み込み、振りかぶり、振って、その果てに激突を迎えて生んだ結果である。

より大きな衝突を見せた金棒と刀、トキとアキの力がぶつかって生む紫電となって現れる記憶もより大きく、またこれまでになかった複数の同時発生を起こした。

「フィング・ブリジスタス」

足場が平面から斜面に変わり、その変化に体勢を崩す。
晒した隙をタイムリーダーの加速で立て直し、ついでに周囲の状況把握にも努める。
これまでは本部司令塔周辺の何もない平面続きを戦いながら移動してきた。なだらかな斜面が始まったのは、中央エリアから別のエリアに入った証拠であった。
暗闇の中、戦火に灯された人工島の上には軍事演習エリアが広がっている。
大破した戦車の残骸、土と金属片の入り混じった丘陵、実践訓練用に設けられた塹壕、トーチカ等、様々な状況を想定して造られたバトルフィールドに踏み込んだことを意識し、再び視線をアキに戻す。

「聞いているか、フィング。完全再生」

「あ……？　あぁ」

トキの背丈が低くなった理由を解する。
斜面に移ったのだと。
気付けば消滅の力で消えていたフェンスを潜り、暗闇を切り裂く上空の爆炎に淡くも照らされる先には、不安定な足場を容易に連想させる錆色の小丘が連なっていた。
後退しながら戦うトキを止めるならここしかない。
上下、高さを生かした攻撃を繰り返せばトキを討てるという自信と予感が湧いてくる。

この薄暗く凸凹した状況なら、母と何度も体験した。
体勢を崩したかのように見えたトキが一瞬映る。

「“一応”協会所属の君に警告する。
隠れろ」

「逃げろってのか――何？」

妙な気配に足が止まる。

ただならない悪寒に動きが鈍る。

互いの行動に異変を見てとった2人でさえ、一度距離を取って顔を見合わせ、それから同じ方向へと視線を移した。

嵐の内外問わず、多くの人間がＳＲの有無を問わずにその気配に行動を停止していた。

銀狼、鬼、妖狐、魔術師、四凶、人間。強き者も弱き者も全て等しく。

誰もが協会本島司令部に目を向けていた。

（戦場が静まり返った！？）
（嵐が止む……何が来る？）
（スッゲェ、極上の匂いがするじゃん）
（ククククッ！　どうするキュウキ！

最悪の極みと言っていい魔女の出撃だぞ！）

戦場全体の異変に驚くトウコツ。

静寂よりも協会を包み護っていた嵐の壁が消えることに次の攻撃への対策を考えるキュウキ。

命令を無視して食に徹するトウテツの鼻は新たに現れたＳＲに対し、とてつもない美味を感じ取っていた。

コントンは、２人の魔女が制限を完全解除して現れたことを認識しながらも、目線は戦闘を再開するトキとアキから離さないように下していた。

“魔女が来る”

第52話－Ａｉｒ　ｏｆ　ａ　Ｃｏｎｆｒｏｎｔａｔｉｏｎ－（後書き）

（夢……夢？）

最初に思い出したものがそれだった。

何もない。

何も持っていない。

錯覚かもしれない心地は、気のせいか心地が良かった。

それこそ、夢でも見ているかのように。

体か心を包む浮遊感と居心地の良い暖かさ。

「ボルト」

感覚が頭から次第に覚醒へと誘われ、寝ぼけ眼ながらも聞き覚えのある優しい声に僅か、瞼を持ち上げて自らの中に色の定義を送り込む。

視界に映るは白、黒黒黒、闇。

重力を感じない何処か。

真っ暗闇の中に独り、眠っていたらしい自分の上体を起こして伸びをひとつ。

欠伸の零れる口を片手で隠し、もう片方の手は眠りを要求する眼を擦るために上がった。

「おはよう、ボルト」

半開きの眼で見る自分の手は光に包まれ白い輪郭を保っている。
本当に薄い、光の膜が。

「おはようお姉ちゃん」

頭を掻きながら姿無き彼女へ挨拶を返す。
暗闇の中で自由に漂う長い金色の髪の毛先を手元に引き寄せて弄びながら瞼を下ろし――もう一度押し寄せる睡魔と格闘しながら――立ち上がって目を開く。
深呼吸して目を開くと睡魔は何処かへと消え去り、重かった瞼も既に軽い。

しかし、この闇はボルトにとって堪えた。

「あれ？
お姉ちゃんどこ？」

暗闇の中を泳ぐように走りまわって姿なき姉を探す。
例え血が繋がっていなくとも、人間とは違う肉親概念を持っているボルトは必死に彼女の姿を探した。

「お姉ちゃんどこぉ？
ねぇ……」

心の底から姉を欲して叫び、走り、眼尻に涙を浮かべながらも必死で探しまわる。
無限に続く闇の中、夢幻を忘れたボルトは無我夢中で闇の中を突き進んだ。

「お姉ちゃん！」

瞬間、ボルトを包む光の膜が厚みを増す。
姉である彼女はその光景を見て確信していた。
ボルトを災厄として完成させてしまったのは“私”だと。

「置いていかないって、約束したのに！」

ボルトを災厄とさせただけに留まらず、彼女を悪い方向へ深化させてしまった原因も自分の身勝手な思い込みによるものだと確信し、心苦しさばかりが増す。
魔女狩りの原因となってしまったボルトを世に送り出してしまったのは外でもない、自分。

「ごめんねボルト――」

「うぅ……！」

一声。

たったのそれだけで、厚みを増していたボルトの光膜は瞬時に霧散した。

必死に走り回っていたボルトの首に手を回し、背後から優しく抱き止める。

「ご飯の支度に時間がかかっちゃったの。怖かった？」

「ぅ、ううん！

怖くなんかなかったよ。お姉ちゃんがいるから怖くなかったよ！」

抱きしめたボルトから零れ出る力に、姉は忌まわしい記憶を呼び起こすほど懐かしい匂いを覚えた。

「……ボルト、よく聞いて」

「うん？　なにぃ？」

涙を拭うボルトに、闇影の魔女：ヴィラ・ホート・ディマは優しく、耳元でゆっくりを告げた。

「あなたは今、Ｎの状態にある」

「？」

「今から……Ａの状態にするから、ちょっと我慢してほしいの」

「えー？

……でも、お姉ちゃん。みんなが欲しいのはＨの私じゃないの？」

首を捻ってディマの顔を確認するボルト。

「えぇ。協会の誰もがボルト・Ｈ・パルダンを望んでいる。

でも私はそれを認めるわけにはいかないの」

「どうして？」

「髪が乱れているわね。

梳いてあげる」

その場に膝を抱えて座り込むボルトを、背後から見つめてディマは説明を再開する。

「協会が望んでいるのはボルトの高火力・広範囲光撃魔法よ」

「そうなの？

じゃあ、Ｈでもでき――」

「あの魔法も？」

「う～ん……たぶん“コウトウムケイ”はムリかも」

「失敗すれば、今度こそ私でも助けられないわよ。いいの？」

「いや！」

「でしょ。だから、コウトウムケイの知識が皆無に等しいHの状態じゃ駄目なの」

「うん。そうだね」

手櫛で梳くボルトの髪は見た目以上に軽い。
変わらない手触り。
人間の髪とは違う、暖かさを持ったボルトだけの黄金。

「だから、外見だけをHの状態にして中身をAまで持っていき覚醒させるわ」

「イギな～し」

「そう。
最後に聞くけど、いまボルトはどれだけの魔法が使える？
あまり無理はさせたくないんだけど……」

「大丈夫だよお姉ちゃん！
百火光乱でしょ、落下光跡、一輝刀閃なんて余裕で使えるよ」

「他は？」

「えっと、他には光塵晩浄とか、軟光敷烙とか、光黎一火！
あ、それから慟光囲曲や光爆夢致も！」

（コウトウムケイは無理のようね……）

長い時間をかけて揃えるボルト自慢の長く、金色に靡き輝く髪がひとりでに流れを統一して揃い始める。

「あ、そうだお姉ちゃん！前に言ったあれ覚えている？
後で一緒にやってみようって言ったあの魔法！」

「あの魔法？
それって――」

立ち上がったボルトが踵で回って向き直る。

「ほら、一緒に寝る時に何回か言ったじゃん。
いつか“サテライトフルムーン”って呼べる魔法をやってみようってさ。
もしかして、忘れちゃった？」

「……ごめん。忘れていた。
でも、今思い出したわ」

「じゃあ、やろうよ。ね？」

満面の笑みを浮かべたボルトがディマの手を引く。

「ほどほどに、ね」

不安だらけの妹に引くがまま引かれていき、ディマは暗闇の中をボルトと共に飛び出す。

いつまでも甘えてくる懐かしい妹に戸惑いながら、闇影の魔女は光の魔女を連れて現実世界へと舞い戻った。

第５３話 ― 夜明けの月光、追い詰める陽光 ― （前書き）

８歳――ボルトという名を得る
１２歳――ディマという同族に出会い嫌いあう関係が始まる
１９歳――ディマよりボルト・パルダンの記号を得る
２８歳――ディマを姉として慕い始める
６９歳――度が過ぎるとディマに怒られて独り暮らしを学ぶ
２０９歳（？）――ディマとの同棲再開
５７３（±１０）歳――第一次記憶喪失
１０２２（くらい？）歳――ディマと共同魔術開発開始
１８８７（と推測）歳――第二次記憶喪失
２０？？歳――“魔女狩り”と呼ばれる事件発生。ボルト、永い眠りにつく

どんな経歴があろうと、彼女がかけがえのない存在であることに間違いはなかった。時には小憎らしく、時には煩いことこの上なく、時にはまともなことを話すが、それでも稚拙な人間味は滅多に抜けない。

「起きて、ボルト」

優しく話し掛け、椅子に座ったまま部屋中に光を振りまくボルトを覚醒へと導く。
無人の食堂を照らす光は暖かさと虚しさを同時に振りまきながら、あらゆる生物にその光を等しく知覚させた。

しかし、ディマだけが乱れた黒髪を直すことさえ忘れるほど特別な感情に浸っていた。

果たして彼女を起こしていいのだろうか。

協会の所望に反するこの行為は未来を壊してしまわないだろうか。

もし、覚醒して最初に抱く感情が圧倒的憎悪、取る行動が感情に伴う破壊行動だったら止められるだろうか。

数えることはできても、計り知れない被害を伴うイフに悪寒が止まない。しかし、心の底にはこれを望んでいた自分がいるのもまた事実。

「――あ、お姉ちゃん」

光に包まれていたボルトが立ち上がり、瞼をこする。

寝起きと勘違いする者もいるだろう。

しかし、いま目の前にいる長い金髪を揺らすボルトは、数分まではボルト・パルダンという年少魔法使いの少女でしかなかった。数百年前に“夢の殻”という封印によって長い眠りについていた魔女が、今目の前にいるボルト・A・パルダンであり、SRという人種の歴史の中において、特に多くの人命を消して見せた最上級の魔女である。

「おはよう」

ボルトを夢の殻に閉じ込めたのは複数のバグと妖精と魔法使いだった。

その1人の中にはディマも入っており、報復や恨みつらみをぶつけられないかとディマは懸念していた。だが、覚醒したボルトは負の感情を見せることなく、むしろ仕草の一つ一つからある懐かしい雰囲気を醸し出していた。

「おなか空いたけど、何かある？」

かつて、食卓を共にした頃の親しげなボルトだけがそこにいた。

「朝食の準備は出来ているわ。
さ、こっちよ」

第５３話 ― 夜明けの月光、追い詰める陽光 ―

静寂の戦場。

それは戦争が膠着状態に陥って初めて迎えるべき光景であり、開戦・武力衝突から経過した１１時間という、規模と苛烈さを抜きに言えば始まったばかりと言える時間帯を迎えながらも、両軍は一時ながらも戦争を忘れていた。

明確に分かれた攻守、圧倒的な物量差、激しい衝突と無数の因縁に渦巻かれている戦場。

ここには静けさを吹き飛ばす要因は無数に転がっている。

それなのに人々は四肢のみならず思考すら止めていた。

「嵐の内側に……魔力を含んだ光を確認」

戦乱に染まる海上で、線を超えて人々は霞むような妖しい光を見た。

濃密に圧縮された巨大旋風は、内の閃光すら外側に届けないほど厚い壁である。そんな厚い壁の内側に確認された魔女の光は、誰の目にも等しく届いており、不思議と人々の視線を引いて釘付けとする。

遥か地平線には微かな青色。

今朝に染まり始めていると言っても、海上はまだ闇が蔓延る暗黒のフィールドである。しかし、多くの人間にとって三等星が如き淡いその光は、不思議と平静に似た何かを錯覚させた。

一方で、少数の者には関心よりも得体の知れない恐怖を腹の底か

ら呼び覚ましていた。

「あの光は、魔女か！？」

この戦場で初めて、四凶軍各艦隊は後退を始め、包囲網を崩さないようにしながら後退する四凶軍艦隊を見て、協会の司令部では士気高揚に伴う歓声が上がっていた。

しかし、いくら四凶軍が包囲陣の中に退路を用意していようと、ボルトの光を確認したところで後退を始めたのでは手遅れであり、それを理解している司令部は勇んで次の指示を待ち、ジャンヌは一層警戒を強めた。

（相手が悪かったわね）

オペレーターに反撃の合図を送る指示を出す。

「リデアに嵐の“一時停止”を要請。
ボルト及びディマへの連絡系統、非武装派の各部隊へ準備状況を最終確認。
第一目標、防衛海岸四凶軍。
第二目標、敵主力艦隊中枢。
第三目標、敵補給艦――」

その光は芹真や藍、トウコツやコルスレイ、メイトス達にも等し

く映っており、やはり彼ないし彼女らを例外なく足を止め、腕を下ろし、朧月のような静かな光に視線を奪っていた。

「レーザー砲台：フォルトの修復状況を確認して。
南部から生活エリアに侵入した敵部隊の排除状況を送れ。
グラント隊に交代命令、休息支援部隊は展開用意。
次に、ベクター・ケイノスに蝶々の用意を。
瀬賀駆滝（せがくろう）には大量の火の粉を準備するように通達」

「リデアから時間指定を求める通信があります！」
「5分以内と返して」
「了解！」

「影光の魔女から連絡、朝食が終わるまでもう少し時間を要する、とのこと」
「急がなくていいと返して」
「了解」

戦場に爆炎と轟音が戻るのと同時、ジャンヌはボルト・パルダンがディマの食事に付き合うほどに本来の姿を取り戻していることを認めた。

「ナイトメア非武装派、配置につきました！」

「それでは現状を維持。指示が下り次第攻撃を開始せよと返して。
ＮＭ：Ｌチームは艦隊の奥に引っ込む敵主力艦隊への強襲、
ＮＭ：Ｍチームは敵補給艦を主目標として遊撃、

ＮＭ：Ｓチームは第一から第二、第三までの防衛海岸を占領する四凶軍の殲滅」

「了解、伝えます！」

その光が消える頃、サーカスの団長であるマスクの男：ヒラリー・マトンはこれまで飾り続けてきた笑顔を忘れていた。

賑わいを忘れた舞台をつくったのは小さく淡い光。

暗闇の中に浮かぶそれは蛍光にすら及ばないであろう程、輪郭に乏しい弱光であった。

しかし、マトンがその光を見て表情を忘れたのには理由があった。

いま何が起こっていて、これから何が起ころうとしているのかを。

「レーザー照射砲：フォルトの復旧率現在６６．２％との報告」

「修復を終えた砲台はある？」

「はい。北部の砲台は機能・外装共に完全修復を完了したとのこと」

「予備電力での緊急照射モードによる準備を急がせて」

「了解」

「南部生活区の敵四凶軍の除去率８０％強！」

「１００％まで急げと返して」

「了解、生活区の敵排除を急げ！」

「ベクターから連絡！準備完了、指示を待つとのことです」

「了解。２分待てと返して」

「分かりました！」

「セガクロウから火の粉の量に細かな指示がないかと連絡が入って

きました！」
「雨のように火の粉を降らせてと返して」
「了解です！」

新たな指示と状況確認を更新したところでジャンヌは別の場所の様子をオペレーターに訪ねた。

「トウコツと哭き鬼の様子はどうですか？」
「現在トウコツが南西の海上で４隻目を撃沈。
哭き鬼は、長兄が南の海上で敵艦隊の中心に飛び込んで善戦しています。
３姉妹はそれぞれ、長女が西で艦砲射撃を引き付けており、三女は北西艦隊を焼いており、次女はそれぞれ長女と次女の支援をしつつ西艦隊を叩いています」

「東の海に動きは？」
「ありません」

「北部のペルセウスや芹真ら５人は？」
「健在です！今のところ接近してきた四凶軍艦隊全てを跳ね返しています！」

再開する戦闘の一角、協会が重要とするＳＲの中でも一際異彩を放つ人物の現状を問う。
ジャンヌではない、もう１人の司令官が。

「……色世時は？」

司令部の根元で戦っていた2人を見守っていたナイトメア非武装派代表――衛星千里と呼ばれる千里眼所有者のミギス・ギガントは2人の生存を確認しながらオペレーターに聞いた。

「色世トキはアンノウンと交戦中！」
「2人の戦っているあの辺りは何だ？」

「西北西の軍事演習エリアです。現在配備されている部隊は居ないので問題はありません」
「いや、問題だ」

若き司令の言葉に、人生において先輩であるジャンヌは同意の言葉を掛けた。

「2人の魔女は高確率で広範囲攻撃魔法を用いるでしょう」
「下手をすると巻き込まれるかもしれないぞ」

ここに来てジャンヌはミギスの、またミギスはジャンヌに共通した認識を抱いた。

色世時というSRの重要性。それを巡る小さな戦いが水面下でのみ行われてきた。これまでには。それに比べ、今はこうして明確な敵が目の前にいる。メイトスを絶命させると予言されたトキを巡っては多くの命が消費されてきたのだ。トキの親族であった佐倉躑躅（さくらつつじ）

や、パンドラプロジェクトの第一人者であるマティス・フォーランドなどその一例であり、彼らは協会に与することはなくとも世界を調整していく上で、また進化させるために欠かせないＳＲであった。トキとその未知なるＳＲを巡る戦いに巻き込まれて命を落としていなければ、共に戦っていたかもしれない者達。

そんな彼らの、人種や年齢のみならず勢力まで問わずに命を奪って消すのは、いつも協会で注意していなかった新たな誰か。

そして、その裏には共通した名前が上がったことはただの一度もない。

（唯一、佐倉躑躅とマティス・フォーランドの2件を除いては……）

（“コト”という人名だけ）

現在確認されている数少ないキーワードは、何処の誰とも分からない者の名前だけであった。

しかし突如、トキの前にヒントが現れた。姿なき新たな敵の正体を掴む数少ないチャンスとなる人物が。トキとアキの2人を生かすことが影に佇む敵の目視に繋がるかもしれないであろう人物、織夜秋が。

『急いでトキに連絡を！』

司令官2人が同じ指示を出すのと同時、各方面からの情報を収集するオペレーター達に衝撃が走り伝っていた。

―協会本部　食堂―

朝食と言うには空が暗すぎた。

場の明度を理由に口を尖らせた彼女を宥めたのが5分前。しかし、今では笑顔で並んだ皿をゆっくりと消費しているほど機嫌は回復している。

「それでね、新しい色が見えたんだ」

「色？」

―ＡＭ　０３：２２―

過去に協会本部の中でこの第一食堂を貸し切った人物は協会長を除いて他にいなかった。この食堂を使用するのは主にジャンヌのような高級文武官や特殊作戦部など、言ってしまえば重役達や協会創設メンバーのような年寄りばかりである。

そんな場所を貸し切りにしているボルトとディマは、会長やジャンヌに許可を得た訳でないが、しかし、誰も不平不満を漏らすことがなかったため気兼ねなく2人きりの食事を満喫できた。これまで幾度かこの食堂を目にしてきたディマも、食事が必要と言う理由を得て便乗。本当の目的はボルトの最終調整だが、共に食事をし、言葉を交わし、互いを感じ合うことで知った。

“最終調整の必要が見い出せない”

微温湯を一口含み、ボルトはゆっくりと味わいながら飲みつつ頷いた。

「あれじゃトキが皆に狙われるのも納得できるわ。私やお姉ちゃんみたいに、他の人に比べて持っている色がとても濃いんだもの」

「相変わらず素敵ね、ＳＲの違いを色として視覚できるなんて。それで？」

「芹真さんや藍ちゃんも濃いけど、トキの色はそれ以上。しかも、これって言う特定の色を持たないから見ていて飽きないの」

「定色を持たない？でも……いえ、それでじゃあトキが多重人格者だというの？」

白い紅茶が揺らめくカップを置き、ディマは手元のサンドイッチを口に運ぶ。

ボルトもガーリックトーストを口に運び、口でパンを挟んだら姉の推測に首を振って答えた。

「違うよ」

横に振られる首。
ディマは真剣な面持ちでボルトの返答について考えた。

「私にもよく分らないけど、トキが持っている色はたくさんあるんだ。
それでね、もしかすればそれが――皆がトキを欲しがる理由、なんじゃないかなあと思うの」

「ＳＲが一つじゃない……確かに、前例があるからそうかもしれないわね。
“複合ＳＲの創造”　それを量産する目的がパンドラプロジェクトの過程にはあった。
マティス・フォーランドが提唱した新型ＳＲとしての進化系統としてね」

長い金色の髪を耳にかけたボルトがスプーンを取る。
湯気の上るスープに銀製の食器を入れ、淡いオレンジの照明に変色を見せるコーンを掬う。

「タイムリーダー、クロノセプター、クリエティヴィティクロノ、クロスセプター。
今トキが使える技はこれだけ。
これだけ、なんだけど……」

「なるほど、明らかに複合ＳＲね。
時間静止、時間奪取、時間による創造、外界との時間共有。

タイムリーダーは己を加速させているのか、或いは世界を止めているかで大きく意味と価値が変わってくる。　時間奪取はある意味で最高峰の火力と言えるし、時間による創造は幅広い応用が利く。
クロスセプターに至ってはサイコメトリーまでできる優れた術と言うに相応しい効果を持っている。
つまり、総合して色世時という人間の持つＳＲは極めて強力且つ、特異」

「うん」

指先のパン屑を皿の上で掃い、ロイヤルミルクティーの注がれたカップを取る。

流麗な黒髪に目を奪われながらも、ボルトは向かいに座って話を聞いているだけのディマに自分の考えを打ち明けた。

「ねぇ、お姉ちゃん。
私はトキのＳＲが昔研究していたアレなんじゃないかって、時々思うの」

「アレって、まさか……」

否定の言葉を返そうとするが、熱い紅茶を流し込んで留める。
言われて言葉に詰まりながらも、数か月前まで自分も同じ考えであったことを思い出す。
カップを置いたディマは顎に手を当てて考えた。

「しかし、それでは会長が黙っているはずがない。それに予知部隊の誰かが気付くはず」

「でも、トキが例のＳＲならそれを覆すことは――」

決して不可能ではないのだ。

事実、幾人かのＳＲがトキという人間の重要性に気付いて接触を試みた。それもごく最近の事である。

仮にトキが生まれついてのＳＲなら生誕以前に予知されている上、協会から厳重管理されるが、規模こそ小さいもののそれが実行されたのも接触者同様につい最近だった。

姉妹が共有するその可能性が、直接言葉として口から出てこない理由は、単に姉妹揃ってそれを認めたくないからであった。トキのＳＲは未知だが、“あのＳＲ”であることを容易に認めることは出来ない。

「それでね、お姉ちゃん」

口の周りについた汚れをナプキンで拭い、ボルトは朝食の終わりを告げた。

「場合によってはトキを消そうと思うの」

「……その理由を聞かせて」

ボルトの思案に質問してみたものの、ディマの中にもトキを排除しなけるばならないという危機感はあった。

「トキは似てるの」

「それは、色世　皐（さつき）に？」

再び横に小さく頭を振りながら、ボルトは椅子の背もたれに預けていた自前の白い戦様ローブを掴み取り、立ち上がって羽織り袖を通す。

心開く妹の中を覗き、ディマはそこに控えている名前を読んだ。

「フィング・ブリジスタスに？」

「お姉ちゃんの部下だったよね？　クリーニング店の」

同意せざるを得ないその名は、完全再生又は完全再現と呼ばれる危険なＳＲである。協会でもブラックリストの最高クラスに分類され、ナイトメアや無所属集団などにコネクションを多数持っているという噂もまことしなやかに囁かれている。

しかし、何よりも厄介なのは完全再現・再生というＳＲだった。

「フィング・ブリジスタスは２０人以上のＳＲを再現・再生（リプレイ）できる。それに等しく、トキはあらゆる時間に触れることが出来るの」

「確かにあの２人は危険なＳＲではあるけど、彼らだって影を持ち、光を纏っている」

「今は、ね」

「……どういう意味？」

静かに質問しながら立ち上がり、ボルトと対を成す黒色の戦様ローブを羽織って椅子を食卓の下に押し込める。

「２人共まだ、成体じゃないってことだよ」

椅子を戻して薄闇の中に出入り口を探すボルトの顔は、どこか物寂しい形をしていた。

ボルトとトキが芹真事務所で時間を共にして１年と経っていない。それなのに、トキを排除する件が出た時点で表情は曇っていた。ボルトと長く付き合ってきたディマは、それが惜しみを帯びた顔であること知っているが、過去にこれほど大人びた顔を見せたことがなかったために動揺した。

「行こうお姉ちゃん。皆が待っている」

朝食と言うには空が暗すぎた。
しかし、夜明けを迎えるであろうこの海は、日の出とともに地獄へ変わる。
生きて日の目を見ようとするのが人間だが、ボルトを相手にする人間に関しては全くの逆と言えた。

今この瞬間こそが最後の静寂となるやもしれない。
何故なら、ボルト・Ａ・パルダンは誰の妨げを受けることもなく、またディマの微々たる助力を受け、自ら封の印となっていた夢の殻を破壊して目覚め、本当にただの寝起きであるが如く現在にいるのだから。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第５３話－

－夜明けの月光、追い詰める陽光－

飛来する火線に対し、青く輝く光線が協会本部から走った。
レーザー照射砲：フォルトによる攻撃は一瞬にして四凶軍の兵隊数百人を焼き殺して見せるが、それでも四凶軍の強みが数にある以上、協会の数的不利は覆しようがない。
それでも協会守備部隊のＳＲたちにとって、フォルトの閃光は大きな鼓舞となり、防衛者たちの指揮を高く奮った。

だが、戦場の一角ではその光を意に介さない人間が僅か、トキやアキなどのような戦争そっちのけで戦闘する者達もいた。

片の名を色世時、片の名を織夜秋と言う。
数分前まで初見であったこの２人は名前を巡って術と言葉を掛け合っていた。

「どういうことだ！？」

「私がトキになれば……何でもできるようになる」

鋭い前蹴りを打ち落すように防ぎ、胸部に反撃の掌底を見舞うがどんなに攻めてもアキは怯まない。確実に打撃を加えているにも関わらず顔色一つ変えないし、激しい運動を連続しているのに息一つ切らさないどころか、汗一つ浮かべない。

（どうなっているんだ！）

「お願いだから抵抗しないで死んで。あなたが足掻くと私がトキになれない、何も出来ない」

大振りの右手を屈んで躱し、そのまま懐に体当たりを決める。が、アキは想像を遥か上をいく背筋とバネでトキのタックルを止め、持ち堪え、遂には押し返し始め、驚愕に彩られたトキが我に返ると、身体は異様な膂力の前に投げ放たれて空中にあった。

単純な力でトキの攻撃を受けて止め、瞬間的な隙を見せたトキを両手で掴み、空中に投げ放ったアキ。

左手は消滅黒球を展開する準備を終えている。

後は――

（振るだけ……！

アキのＳＲの強さはそこだ、あの黒い球を近いトコから離れたトコまで簡単に作りだす！

片手一本で必殺が成立する！）

「母さんに認めてもらえないの」

十数個の黒球が包囲する。

対抗策はクロノセプターと時間による創造の複合技。

相殺。

（時間がないんだ！）

光が弾ける。記憶と言う名の紫電に目を細めながら、働く重力と注がれるアキの殺意に汗が噴き出す。

宙で回転する身体がどれだけの高さにあるのか、落下しながら暗闇に紛れる地面を探した。

（どうして俺が――！）

“まだ、本命の敵とすら遭遇していないのに”

ひとつ、この状況に至って頭に浮かんだことがあった。訓練でも試したことのない本当の思い付きであるが、無意識に近いところでトキのその思い付きは僅かな予想と、その結末が生む“ＮＥＸＴ”を思い描いていた。

（初めて会う奴に――！）

体内に残っている時間を両手に集め、残量を感覚で把握したらそれを均等に、全身を包むよう巡り走らせる。

視界の中に映ったアキは次の攻撃を始めようと腕を曲げていた。

黒球が来る。

（ワケも分からないまま――！）

重力は忠実に働く。

アキはそれを本能的に理解し、トキの落下する軌道を予測してその先に黒球を配置した。

特別に濃度の高い消滅黒球である。

それは触れた個所から瞬時に形を奪うほどの威力を有しており、密度の高低や性質に左右されることもない。アキ自身がその高濃度黒球で多くのモノを消して来たのだからその威力は完全に把握済みである。

（――殺されなきゃ、いけないんだ！）

アキが前に出る。トキの抵抗は予想済みだが、違和感を覚えたからだ。

自ら前に出て消滅黒円球を追加展開し、白い空間の展開による相殺へ備えた。

今度こそ仕留めると強く出る。

「聞いてくれ！」

それまで滅多に表情を崩さなかったアキの顔が驚愕に崩れる。

落下軌道の予測は間違いなかった。

自信はあった。

だが、落下軌道がおかしい。
トキは黒に触れるどころか、掠りすらしていない。
風に吹かれたり、横から何かに押されたり、何か別の力が加わったわけではない。

（とんだ……？）

黒球を避けるように空中で身を翻すトキ。
その姿にアキは羨望と憎悪の念を同時に覚えた。
やはり、トキ。
その名を得るだけの意味は大きく、恩恵も尋常ではない。

（飛べた！）

驚きつつも本心は飛べるだろうという予感を持っていた。
黒球を避けるように空中を移動し、数秒以内に体の動かし方を全力で把握しながらアキの眼前にまで迫る。
延命が実現したところでトキは喉にまで持ち上げて用意していた言葉をアキに伝えた。
この場で彼女を倒すことが出来ないなら、止めるまで。
敵を倒すだけがクリア条件ではない、ここはそういうステージなのだと言い聞かせて怒りを堪える。

「俺の名前が欲しいならやる！あげるよ！
名前を交換しようじゃないか！」

「――え？」

アキは驚愕から無、無から呆然とした面持ちへと、完全に予想外な言葉に混乱し、思案し――後ろに蹲き、すぐに立ち上がり――空中から迫るトキに無防備を晒しながら言葉の真意を求めた。

「こう、かん？」

「そうだ。
俺の名前が欲しいなら君にあげよう。
俺がアキで、君がトキだ」

身振り手振り、トキは必死にアキに近付きながら提案する。
両肩から力が抜けているとは言え、険しい剣幕でいるアキを警戒しながら返事を待つと、アキは一言、吹き飛ばしてはいけないこの場の空気を吹き飛ばすような記号と共に質問を投下し、返してきた。

「“こうかん”ってナニ？？」

「……ぇ？」

「コウカンって、何をするつもり？」

現実はいつも思いの逆さを読んでくれると誰かに――誰かではな

く親戚の叔父だ――に言われたことを思い出し、トキはアキの正気と頭を疑った。

「いや、なに、何と言うか……似た物を取り換える？
え～、今の状況でいうなら、俺の名前を君にあげる。だから、君は君の名を俺に渡すってことだよ」

アキが構えを解いたのには理由があった。
トキの名を有する男がこれまで見せてきた姿勢には、少なからずとも殺意のような触れ心地悪い気迫があり、それを本能的に認識して敵と認めることができたからである。しかし、初めて聞く言葉を発すると同時に、トキの中からそう言った不快なモノが影を薄めた始めたのだ。これまで出会ってきた大抵の人間は、自身を前にして殺意を放ってそれを怠ることなどなかった。それなのに、トキを名乗るこの男はそれまでの人間と違っている。
どこかおかしい。
本能的にしか状況の理解が追いついていないアキだが、それでもトキが自分に対して何か良い施しをしてくれるという雰囲気だけは確かに感じ取っていた。

不愉快が消える。
しかし、それでもまだ拭えない不安はあった。
それを確かめるため問うのだ。
眼前で急に浮遊を始めたトキに、浮いたまま顔を近付ける男に。

「それがコウカン？」

「――そうだ、俺を殺さなくても名前を手に入れる手段だ」

予想外の言葉に目を白黒させるアキだったが、正直なところ驚く以外のリアクションを知らないのはトキも同様であった。

思ってもいない方向からの攻略法発見を素直に喜んでいいものなのか、それが些事とは言え納得如何は人間心理において重要な分岐要因である。

そもそも名前を交換することが前提で話は進んでいるのだ。

「本当なの？」

そしてアキは本気でそれを飲み込もうとしていた。

「あ……あぁ」

断ればどんな展開が待っているのか、そのビジョンが脳裏を掠めた。

否定は戦闘の再開を意味する。

彼女の行動や言動からその未来予測は容易に行え、それはコントンと対決する前に命を落としかねないリスク高き選択であった。アキの戦闘能力は高い。それを直に交戦し、体験して知った今、なおさらその選択肢を選ぶことはできない。

「ただ、どうしても聞いてほしい願いがあるんだ」

アキはトキの名を欲している。
理由は知らない、経緯も分からない、彼女が何者で何を企んでいるのかなど知る余地もない。
しかし、トキはトキで居なくてはならない理由があった。

「この戦争が終わったら必ず俺の名前を君に渡す。
だからせめて、コントンという男を討つまで俺をトキで居させてくれ……！」

この瞬間、少女の耳には戦場の轟音が届いていなかった。
唯一トキの声だけが木霊して――トキになれる――眼前の男が地面に降りるのをただ呆然と見つめていた。

「頼む！」

トキが、何故頭を下げるのか分からなかったが、アキはその条件に頷いた。

「コントンを消したら、コウカン」

微かな笑みを口元に浮かべるも、アキの頭は疑問で溢れそうにな

っていた。

――本当にコウカンしてくれるのか？

疑問というより疑惑。

――どうしてさっきとは違う顔をしている？

疑惑と同時に困惑。

それは、アキにとって嬉しい流れであったハズ。

気付けば名前のコウカンを持ち出され、相手を殺すという順を飛ばせるという、ある意味での僥倖。

「あぁ……絶対だ」

トキは初めて気付いた。

アキは本能的に理解を始めていた。

今日、ここに至って自分が何を手放そうとしているのか。

目の前の男が顔を変えた理由はおそらく自分との約束だと。

親から与えられた名前。

自分の望み欲する名前。

その名前が今日まで生きてきた自分という人間を表すラベル。

自身が大切に想い、欲し、願ったそれは、相手にとっても重要なモノ。

あらゆるステータスを内包し、共に育ってきた掛替えのない存在証明。
手に入れるためならどんな手段も厭わず躍起になれたステータス。
手放してはいけなかった、亡き母が残した数少ない思い出。
名前に育った自分を手放すという行為、それがもたらす――
“同じ”
それが、名前の入手を確定したアキに笑顔を作らせない理由だった。
「カナシい？」
悲痛を表したトキの顔を見ていると響くものがあった。
見知った表情作りに、どうしてか伝わってくる心。痛み。
失ってしまい傷つく、目に見えない痛み。悲しさ。
アキの異変はクロスセプターによるものだった。
人命を破壊してもなお入手を憚（はばか）らない執着心。会長室での衝突を初見とし、落下中に執着の度合いを知り、地面の上を走り移りながら戦って気のせいじゃない物悲しさを覚え――ここに来て、織夜秋という“人間／ＳＲ”にも人並の感情があることを初めて知った。
目の当たりにした彼女の顔は、それまで見せていた狂人のものとは思えないほど人間味を醸し出しており、まるで同情しているかのようにさえ思わせたし、現実に同情していた。

「悲しみが……分かるのか？」

言ってから己の無礼に気付いたトキだが、謝罪の言は出てこなかった。

「わかるかもしれない」

その理由は、困惑をわずかに混ぜたアキの表情だった。
狂気と困惑の中に僅かな喜びの微笑みが混じるも、その目には明るみが無く、どこか虚しさを訴えているかのようにも見える強がって浮かべる消えかけの笑み。

「なら、君も人間だろう……俺を殺す必要なんて元々ありはしないんだ」

「必要――ないの？」

質問の上書きは、再びトキのペースを崩す。
知りたいことが若干増えた。

――アキさん、あまり頭の良くない俺に言う資格があるかどうか怪しいが、とりあえず言わせてくれ。

“あんた学校は行っているかい”

『色世トキ、聞こえますか色世トキ』

あまり言葉を知らないアキに気を取られていたトキを我に返したのは協会部隊最高司令官：ジャンヌからの直接脳へ語りかけるという、文明の利器を無視したＳＲならではの機密通信であった。

『オリヤアキも』

「……え？」

突然頭に響く声にアキの両腕が上がり、周囲へ警戒の線を配る。
視界に移る闇、闇、閃光、時、闇、闇。
２人は一度視線を合わせてから害がないことを無言で感じあった。

『私はジャンヌといいます。
急な話ですが、これから修復作業に取り掛かります。
そこであなた達２人の協力が必要となります。
数十秒後に迎えのＳＲが見えるので、その者の誘導に従って現場に向かってください』

「え？え？」
「キョウリョク？」

あまりにも唐突過ぎる任務にトキは固まり、アキは新たな単語に戸惑っていた。

予想だにしなかった和解と、早過ぎる協力要請。

ともあれ、奇妙な形で出会った2人はジャンヌの計らいによって手を取り、まず最初に殺し合わないように努力と協力を始めたのである。

キュウキにとって、嵐の向こう側に隠された部隊が悲惨な結末を迎えたことは既知だった。

しかし、トウテツが知らぬ間に嵐の外側へと移動していたことは全ての部隊に伝わっていなかった。特に綿密な情報網を敷いておいた司令官らにとって、その伝達速度の遅さにはただ驚くばかりである。

余計な混乱が生じ、敗走と誤解した者達は士気を挫かれ、ただでさえ苦しい状況が拍車を掛けて厳しく傾いてゆく。

（これほどの情報遅延が発生したのは何故？）

戦場の最前線をあらゆる方法を用いて高速移動しながら情報を収集する。

各方面に配置した情報官と接触して直に状況を知り、移動し、テレポーターに配置換えを依頼してはまた走り、次々と指示を飛ばしながら新たに戦略を練るなど、キュウキは戦場の一か所に留まらずに協会に縫い込む場所がないかと目を光らせた。

「キュウキ司令、西部艦隊より入電！
“城塞艦の具合は８０％超！　直ちに起動す！”」
「まだだと伝え！」

北部海上で西部からの連絡を受けたキュウキへ、次にやって来たオペレーターは不可解な報告を始めた。

「協会司令部の通信を傍受しました！」
「……何ですって？」

艦砲射撃に照らされているであろう鉄塔――司令部の場所に目を向けると、ジャミング装置と電子戦特化の結界ＳＲ部隊はいまだに健在であることが感じて取れた。
それなのに通信を傍受できるとはどういうことか。

「傍受した通信隊には千里眼所有者がいるのかしら？」

翼のはためきを止め、キュウキは駆逐艦のデッキに降り立つ。
潮風に髪を抑える女性オペレーターが提示したものは音声の録音記録であり、それをヘッドフォンで確かめ、間違いなく協会オペレーターの聞き覚えある声であることを認めた。

（電子戦用ＳＲを控えさせておきながらこの情報管理の甘さ……本部直下に灯った淡光と何か関係が？

……しかし、この戦力差を覆すには堂々の反攻などあり得るのか？

頼みの綱である英雄部隊は二分されているし、光学兵器も復活したとは言え明らかに性能が落ちている。非武装派のメンバーもすでに掌握済みだから、向こうの防衛手段はほとんど予測の範囲内。無所属や小規模集団にも脅威は認められるが、それでも戦局に大きく響くほどの要素ではない）

特に気になるのが向こうの大きな目標３つ。

主力艦隊、補給艦、占領した防衛海岸への攻撃。

防衛海岸はまだしも、主力艦隊と補給艦を叩きに出てくる手段が如何なるものなのか、キュウキはそこに重点を置いた。

（海中部隊で足元は完全に埋められているからあり得ない。

空も同様、制空権はこちらにある。

考えられるとすれば――テレポーターや水使い、あるいは超長距離砲台による狙撃。

背後からの挟撃は対策済みだから問題ない。対空警戒も抜かりないよう徹底している）

色の変わり始めた空の端に目を奪われながらキュウキは初めて、これまで予想だにしなかった最悪の事態を想定し始めた。

「……魔女か？」

白い闇の現れた空が思い出させてくれたのは、協会が管理する最高級と謳われた魔女２人の後ろ姿だった。

１人は戦影魔装と呼ばれた漆黒の闇。

もう１人は、神攻聖女と恐れられた閃白の光。

（まさか、あの２人――いや！

どちらか１人でも出てくるというのか！？）

言ってしまえば悪夢、そう呼べるだけの事態が起こったものなら最早全力投球すらも危惧すべき選択肢となってしまう。例え全軍を投入できても協会本部に辿り着ける者はごく僅かだろう。辿り着ける者が少数ならば、会長を討つ確率は零と断言できる。

「急いでトウテツとコントンに連絡を！

単独でもいいから突入させなくては！突破口すら開けなくなる！」

或いは、すぐにでも切り札を切らない限り状況は最悪から動かない。

数分前に嵐の中に灯った淡い光も、それがボルトの発光によるものなら納得がいく。稀代の魔女：ボルトは万人に等しく光を見せることができると噂される時期があった。昼夜どころか天候、視界の良し悪し、目の開閉すら問わない根本的に自然のそれとは違う光。

元は迷い人を導くための光だったそれは、今では導く始終が逆になっている。

（協会は自滅も想定している？
しかし、ジャンヌがそれほどリスキーな選択をするとは思えない。
ボルト・パルダンは芹真事務所で安定状態にあったそうだが、それはあくまで弱体化したボルトであって、いまこの戦場にいるボルトがその状態である可能性は極めて低い。
かと言って昔の状態を取り戻したところで精神と肉体の調和、記憶が安定しない限りあの時の二の足を踏むだけ――何か予防手段でもあるのか？
そもそも本当にボルトか？）

考えるのを止めて部下から拳銃を受取り、スライドを後退させて薬室に弾丸を確認する。視線を上げて協会が敷く嵐の障壁が消失しつつあることを見てとり、頭の中で作戦に伴うタイミングを書き直す。

（光の魔女：ボルト、制限解除で焼け野原を作れるが不安定――安定化に必要な光、影でも代替できるとか……ヴィラ・ホート・ディマか。
そうなると朝焼け間際である今は最悪、光と影の両方が成立する。間違いなく“光撃”と“影絵”の両方に晒され、こちらの損害は計り知れない。
切り札の武装派から受け取ったアレを使わざるを得ない。もっと状況が進展してから使おうとした物だったのに……これでチェックメイトの可能性は限りなく低くなった）

ＳＲを解放して４枚の白翼を広げる。

「各方面旗艦に通達、協会のＳＲ部隊が来る、大規模な反撃が本格的に開始されると！

それに伴い我々は予てよりの作戦、“オペレーション・ダウンスプライト”を５分後に早める！

トウテツ以下、サーベルポインツは協会部隊を引きつけよ、その間、次段階の“アースイータ”の大地を完成させよ！」

「了解！伝えます！」

超短期戦をさらに早めることはある意味で自滅を意味していた。

それだけ強力な火力を持っている敵に対し、こちらは貧弱な装備で挑むしかないということを認めることにもなるのだ。

キュウキにとって、協会側から烏合の衆と見られることだけは何としても避けたい、おそらく体面を冷めたままにはしておけないだろう、それほどに耐え難く絶対に誇りが許すことなきもの。

それを覆すための作戦、重要な一手だったが故に最も重要な局面にまで温存しておきたかった。

「半日から６時間前にＥｖａｎ－１０を服用し発現が認められた艦隊と兵隊は第１から３戦線に移るように。

それ以降にＥｖａｎ－１０を服用した者の中に発現した者がいたら主力艦隊に集合せよと」

通信兵の返事を確認してキュウキは艦を飛び立った。
鉄の香混じる潮風を嗅ぎ、流れるウェーブのかかった髪を見て風向きと強さを把握する。
海面の波は敵ＳＲの嵐によって荒立ち、跳ねる飛沫は鮮血と交じって青い舞台を赤黒く染めていた。
咽返るような悪臭は前線に近付くにつれて強烈さを増す。

（思い切ったボルトの投入――予想外もいい所だ。
やはり、私はジャンヌに及ばないか。
いや、逆に考えれば協会にはそれほど打つ手がない。協会にとってもボルトは出来る限り触れたくない手段のはず……）

朝日を迎え始めた明けの空に飛び立ったキュウキの顔は不安に染まっていた。
この戦場をコントロールする者、コントロールに従う者、抗う者。
同じ制する側に居るはずなのに、何故かいつもジャンヌに遅れをとってしまう。それが、今後世界の命運をかけたこの一戦でまで現れてしまうことに不甲斐無さと悔しさが同時にこみ上げ、それまでどんな抵抗にも自信を保っていたキュウキを不安に陥れた。例え艦隊が沈められようと、ＳＲが減ろうと、人数という強みが消えない限り戦い方はいくらでもある。
但し、ボルトとディマ、２人の魔女さえいなければ。

（あの規格外相手にどこまで戦力を保てる？）

数ある懸念のうち、最も恐れる事態が人数の激減であった。魔女2人が相手となれば、一瞬の内に数億が消される可能性も捨てきれない。震える手を押さえながらシミュレーションを重ねる。

勝ちたい。

しかし、叶わない可能性が圧倒している。

どんなにシミュレートを繰り返しても、データだけでしか戦闘力を知らないボルトに戦力の半分以上を消されてしまう。

（魔女狩りの時、最後に使っていた超広範囲魔法――それを使わないモノと考えても被害は深刻の一言。

南北の艦隊はどんなに持ちこたえても2時間が限界。

どうすれば……）

久しく顔をあわせていなかった絶望が肩を叩いていた。

不安、恐怖、焦燥、遺憾。

我に返って辛うじて表情から不安の色を塗り消す。暗澹として晴れない心情は誰にも悟られてはならない。

第一防衛海岸に到着する頃には辛うじて対抗策が2，3浮かんではいたものの、どれもが不安定なものばかりであり、悩めるキュウキを見た親衛隊員は物言えぬ不安に伝染してしまう。部下の問いを受け、自身の態度が全体の士気に影響することを改め、心晴れないままに辛くも言い繕ってその場を凌ぐ。恨心の眼差しを嵐の壁が消えて姿を晒しつつある協会へと向けた。

“こちらが先に切り札を晒すことになるとは”

胸いっぱいに広がる無念――しかし、この判断は切り札相応の影響力を以って協会を震わせるのであった。

―ＡＭ　０３：２５　協会本部　レーダー搭頂上―

強風は走り回っていた。
潮風は若干の熱を帯び、命の匂いを乗せて多方向から2人の魔女に吹き付ける。
リデアの嵐壁が完全に消えるまで、まだ数分の時間を有すであろう事実をボルトは感覚で掴み取っていた。

キュウキの第一防衛海岸到達と時を同じくして、魔女2人はジャンヌからの最終確認に耳を傾けていた。
数億という大軍勢に囲まれながらも、協会はすでに反撃の砲弾を装填し終え、射線も確保済みであった。問題と思われた四凶軍側の抵抗もまだ緩やかと言える程度で、作戦の決行に障害はない。

この狼煙は終焉の合図ではなく、終戦への決定打を作る布石。

『お願いしますボルト・パルダン、ヴィラ・ホート・ディマ』

「うん！
行くよお姉ちゃん、さっき言った通りにすれば成功すると思うから！」

「そうね。
急いで送り先を確保しましょう」

“光／薄闇”に包まれた魔女の身体が金属の床を離れて宙に浮く。

ジャンヌから全ての準備が整っていると承諾を受け、ディマの冷たさを隣に置き、東の海に生まれかけの陽光を感じ、ボルトはこの戦場にある光の殆どを自分の元へ集めた。

光を奪い取られた戦場は完全な暗闇へと変わり、視界を失ったも同然の敵味方問わずに困惑の悲鳴が上がる。けたたましく咆哮と共に光る銃火さえ、その明りを徴収されて照明代わりにはならない。

「殆どが止まったよ、お姉ちゃん」

「これがボルトの言うサテライト・フルムーン？」

「ううん。こんなの前準備だよ。本番はここから」

一瞬で戦場から光が消えて失せて一点に集約する。

それだけでも四凶の意気を挫くには充分な効果があった。

果敢に攻めても辿り着くことさえ叶わない防衛線、そこに未知の光が煌々と輝いているのだから不気味を抱かずにはいられない。レーザー照射砲・フォルトという猛威を振るった大量破壊兵器の前例が、より一層四凶軍の恐怖を扇動した。ここで四凶軍は恐怖に膝を折らないためにも前進すべきだった。或いは後退や別部隊と合流して対策を練るべきだった。しかし、それも戦場から光が消えうせてしまうという、恐らく協会側の仕掛けと予想出来るで攻撃で行動に制約が生じて動けないでいるのだ。特に戦艦船舶の残骸が夥しく漂流する海域を航海中の小型船舶や、大型船の間を航行している船などは特に暗視装置を積載、準備していないものが多く、随所で衝突

や転覆による被害を出している。悲鳴が下手な行動に待ったの手を掛けていた。

「お姉ちゃんならこの中でも十分見えるよね？」

「前方に北部艦隊、左右にそれぞれ東西艦隊、背後に南部艦隊。芹真、コルスレイ、トウコツ、哭き鬼をそれぞれ発見。前者2人は後退済みだけど、北西から南方にかけて哭き鬼とトウコツの撤退が遅れている」

真っ暗闇の戦場を覗き、ディマはボルトが作り出した暗黒舞台の広さに心から驚いていた。

地平線付近までこの暗闇は続いている。

それも四方に等しく、また陽光ばかりか星光まで阻害して完全な暗闇を形成しているのだ。

遥か図上――宇宙から見下ろせば、おそらくこの海域一帯は巨大で真四角な暗闇に隠れている。そんな形をしているのだろう。

「それじゃあ、やりましょう。
私が敵補給艦を担当するわ」

「じゃあ、私は防衛海岸！」

「そうね。敵主力艦隊への部隊転送は協会のテレポーターとその部隊に任せましょう」

背中を合わせてボルトは腕をあげる。

「まずは、転送先の掃除だね♪」

「1分で終わらせましょう」

魔女2人が魔方陣を宙に描く。

たったそれだけの行動で、見上げていた幾人かのSRは悪寒に駆られていた。

例えば芹真は、ボルトが攻撃することを聞き、大事を取って協会本部の屋内に避難した。また、メイトスは可能な限り現象を否定できるようSRを解放。暗闇の中で戦っていた哭き鬼の長兄：アサは、足を止め、姉妹を呼び集めて直ちに避難を開始、ついでにトウコツも一緒に回収した。嵐の障壁を操作し終えたリデアとケイノスは、自分たちの頭上で魔方陣を作り出した大先輩2人に目を奪われて立ち尽くし、逃げることを完全に忘れている。立ち尽くしながらも、本能からの警告は止まない。だが、身体は動かない。

諸々のSRが敵味方という概念を超えた脅威に直面する中で、若く未熟ながらもトキとアキという2人のSRは足を止めて光を眺めていた。

「何だ？」

警鐘が響く。

暗闇に支配された戦場で唯一光を放つ協会レーダー塔の天辺。

「あれって光の魔女か！？」

海の上を走りながら、哭き鬼の長女は叫んだ。

あらゆる因果を破壊する光が輝いているという事実だけで遁走の理由は十分だった。それが数分前の通信で言われていたボルト本人によるものだとしたら、本格的に逃げて隠れる準備をしなくてはならない。それこそ、避難できる穴があるなら今すぐにでも飛び込んで頭を抱え込みたい。

「うわ～、こりゃ逃げた方が無難だろうな～（棒読み）」

「チッ！やっぱり来るんじゃなかったぜ！」

黒羽商会の社長である妖狐と副社長の幽霊もボルト・パルダンの攻撃から身を守ることが叶わないと知っているが故、腰と本能は闘争でなく即刻この戦域から離脱することを実行したがっていた。

が、協会と提携を結んでいる以上手遅れで、仮に協会本島の空域を脱したところで四凶軍への降服者と誤認されて消し墨にされかねない。

『問題は、これほどの暗闇を造りだしておいて何をする気か、だ』

それぞれが異なる勢力に属していながらも、フィングとコルスレイの抱く意は同じ点に到っていた。

ボルトもディマも、どちらも並大抵のＳＲではなく、単独で世界と渡り合えるだけの実力者であることを２人は知っている。　故に２人が手を組んで始めようとしている魔法がどれほど危険なものなのか、数多の修羅場を駆け巡って今日まで生き長らえてきた２人にも想像がつかない。

ただ、核兵器並か、或いはそれ以上に危険な何かが繰り出されるであろう予感はあった。

「交差（Ｃｒｏｓｓ）心繋（Ｌｉｎｋｓ）化別（Ｔｉｍｅ）同存（Ｅｘａｍ）照隠（Ｍａｔｃｈｉｎｇ）広汎（Ｌｏｃａｌｉｚｅ）――」

（なるほど、ボルトの魔力が私の中で混じり、溶け合っている。これなら私でも一時的に光撃魔法が繰り出せる）

及ばなかった理解がいま、ディマはボルトの試してみたいと言っていた魔法を実感した。

言葉では解せなかったこれが完全な殲滅術であることにまず気付く。次いでこの術は単独でやるよりもディマのような闇影を司る魔法使いがいれば相当な効率化を図れる殲滅術である。

だからボルトは、共に繰り出そうと言ってきた。そのこと理解し――実行し――ディマは後悔した。

暗黒の戦場を照らす、光を放つ小さな月が四方にそれぞれ一つずつ出現すると、戦場はまるで日の出を思わせる明るさに照らし出され、夜の影を微塵も感じさせない。

東西南北の四方に光。その挟間、北東、南東、南西、北西の四方

は未だに影の中に沈んだままであった。協会本島を中心に、パラソルの如き交差する光域と闇域。
最初に四凶軍が受けた被害は光の四方だった。

「光塵晩浄（こうじんばんじょう）」

光に照らされた場所で人間が消滅を始める。
無尽蔵に差し込む光の粒子に触れた人々が姿形を維持できなくなり、崩れるようにして細胞組織単位から消えてゆく。
頭上に現れた、ごく小さな人工の満月より放たれるそれは陽光と言えるほど明るい光線であった。闇を照らすその光は見るもの全てに安堵を錯覚させ、光を求めて集まり始める者たちへそれぞれ圧力を与える。
光を目指した者達は目の当たりにした。光の中で、綺羅と輝く粒子に触れ、暗黒を切り裂く過剰月光に照らされた味方の焼かれるわけでも、溶けるわけでもない、細胞単位で塵となって潮風に攫われて行く死に様を。

人だけではない。船も、プラスチックの盾も、日傘も、あらゆるものを分解していく。消え行く者達に痛みも不快感も、何もない。
それ故に消え行くことにさえ最期まで気付けない者だっている。四肢がなくなろうとも、頭部が欠け始めようと認識できない静かな死。両足を失って地面に落ち、初めて両足の異変に感付く者も少なからず居る。ひたすらの無常なる分解。
それが浸食性破壊光子による無差別光撃、光塵晩浄。

ボルトの魔法が成った所でディマは自分の術を唱える準備を終えた。

“光の中に居ては危険、影に逃げ込め”

闇から這い出そうと明かりを求める蛾のように人工満月を目指していた者達は、本能的に危険を感じ取り、自らの足で闇の中に退避を始めた。

光の範囲は動いていない、触れさえしなければ消滅することがない。

所見でボルトの光塵晩浄に気付く、そんな人間がいるからこそ2人でのサテライト・フルムーンは効率化を図れるのだ。

光が人々を分解する中、闇の中に逃げ戻った人間の処理にディマは取り掛かった。

「影絵・空腹の土」

次に莫大な被害を受けたのは影の四方だった。

ボルトの光撃から逃れた者達、ボルトの攻撃を見て怖気づいた者達をディマの操る影が襲った。暗闇に逃げ込めば光は襲ってこないという特性を見抜いてしまったが故、攻撃を免れた者達はそれぞれ己の影に飲み込まれて消える末路を辿ってしまう。

足もとの影に沈む者、寄りかかった壁に背中から飲まれてゆく者、人工満月の作り出す無数の影が人を呑む。まるで沼に沈むが如く消える人々は縋る藁さえ見つける猶予もなく、暗闇の中で忽然と姿を消した。

各防衛海岸の闇が、後方の補給艦隊を取り巻く夜闇が、無数の質量を何処かへと攫う。

時間にして数十秒の光撃と影芝居。

しかし、この数十秒で四凶軍が受けた被害は大きく――５００万強という――両軍合わせて畏怖を抱かせるに充分過ぎるキルカウントを挙げた。

「スペースつくったよ、ジャンヌ司令さん」

ボルトが司令部へと合図を送る。

ゴーサインを受けたジャンヌは待機中の部隊全てに指示を飛ばした。

魔女２人が確保した四凶軍の隙間へ協会のテレポーターと各部隊が一瞬で移動し、反撃を始める。

防衛海岸の残党、敵補給艦、主力艦隊、それぞれに協会とナイトメア非武装派のＳＲによる混成チームが逆襲を仕掛ける。

防衛海岸の四凶軍は協会の正規ＳＲ攻撃部隊少数と非武装派の支援部隊、その他にも無所属ＳＲ達による怒涛の攻めで蹂躙され、補給艦も次々と炎上を始めた。

「リデア・ケイノスへ。

直ちに休息へ移行し、一時間後の障壁再開に備えてください。

黒羽商会へ。

セガクロウが火の粉を降らせたら後退を許可します。休息が必要なら今すぐにでも後退を開始してください」

随所で水柱が上る。
火炎と煙を噴き上げながら船が沈む。
波に飲まれ、数多の残骸に揉まれる。
銃や剣、爪や牙、殴り殺され、蹴り殺されて消えゆく無数の命。
敵の数を減らすは戦闘に於いて欠かせない手段だが、それを手伝う芹真は抵抗を感じずに入られなかった。

（やはり異常だ。
いくら世界中の人間が四凶軍に与したとはいえ、どうして会長は簡単に大量殺人を許可したんだ？）

拭えない疑問が晴れないものかと銀の爪を振るう。対物拳銃の照準を合わせて抵抗する四凶軍兵士を粉砕する。だが、いくら敵を減らしたところで味方の真意が読めるようになるということはない。

包囲した四凶軍の攻撃に耐え、意表をついた反撃を仕掛けた次は本格的な逆襲に移り、四凶軍の頭脳であり首謀者である四凶を討ち取ろうと“ジャンヌは”考えて行動しているだろう。だが、肝心の協会長にその意思がうかがえない。
協会本島の北側軍事演習場に佇む芹真の横には同じ感想を抱く男――いまは火炎狐だが、ＳＲが１人。

「どう思う？」

「黙れ。これから俺は仕事だ」

海上に上がった無数の爆炎に睨みを効かせ、九尾のＳＲは戦場の火炎全てを支配下に置いた。

「協会長がここに来て民間人への攻撃を許可することも明確な異変なのに、会長が策を施しているという気配は皆無だ」

「芹真……たかがお前に看破されるような策なら最初から用いないモンだろ」

「それならお前は何か気付いているのか？」

「いま仕事中だ」

「言うだけ言ってそれか。
まぁ、聞くだけ聞いたんだ。この場はあんたに任せるさ」

銀色の爪をしまう狼が踵を返す。傍目にその姿を見ていた瀬賀は鼻を鳴らした。

「今度は何をやる気だ？」

「調べる」

「会長をか？　それともジャンヌをか？」

「いや、防衛システムをだ」

無愛想に去っていく若社長を背中で見送り、瀬賀は不愉快にもう一度鼻を鳴らして火の粉の雨を戦場に降らせた。

暗闇と異常月光に照らされた戦場に赤い粉が降る。
それは混乱の渦中にあった四凶軍の恐怖をより一層に煽った。
雨のように降る火の粉が視界を阻み、運が悪ければ眼球や傷口に触れて痛みを喚起する。

「これでいいのか、ジャンヌ司令」

『充分です。
こちらの数少ない火炎魔術師隊で味方への被害は完全に対処しきれていますから問題ありません。量にも、見栄えにも問題はないようなので、５分～１０分ほど継続したら後退してください』

「了解。オーバー」

同時刻。
西の海上から南湾口へと逃げ込んだトウコツと哭き鬼４兄妹は港エリアから中央エリアへと繋がるメインストリートの緩やかな斜面を歩きながら息を整えていた。

――皆大丈夫か？
――あぁ
――問題、ありません
――アサお兄様は？

――兎に角、後退命令が出てんだ。中まで行ってゆっくり休もうじゃねぇの

アイコンタクト終了。

この5人、実はこの戦場で最も贅沢な誤射を僅か数秒の間に幾度となく受けそうになりながらも、どうにか味方（ボルト）の攻撃範囲から逃げ延びて来たのである。ボルトの光撃とディマの影芝居。2種類の魔法に晒されながら、力一杯飛んで走って四凶軍ともども撃破されないよう、2大魔法使いの魔術を遅延させて凌いでみせた。

冷汗が噴き出すほど、心臓は未だに焦りの波に大きく脈打っている。

切れ掛けの息は、魔法使いの攻撃に鬼を脅かすほどの威力が込められているという証拠になった。

白状してしまえばボルトという魔法使いの光撃を甘く考えていたトウコツにとって、鬼達の反応は完全に予想外で光撃から身を守るだけで手一杯だった瞬間も見せられ、本物の脅威が光に込められていることを知った。

「逃げるなよアサ」

「え？」

息が整う頃、5人は協会本島南側のメインである大型商店街の真ん中に差し掛かっていた。

横道を進みながらアサを逃がさないようにトウコツは目を光らせる。

「ジャンヌの姐さんから極秘任務が入った。お前さんを連れて来いだとよ」

「……」

「何したんだよ、アサ」

「ジャンヌって、協会の戦略司令官では？」

「何があるのかしら？」

　哭き鬼４兄妹はそれぞれ得物を背負いながら協会内部へと続く連絡路に到る。

「哭き鬼のお前らが加わってくれなきゃ、正直ここまで都合よく戦況が運ぶことはなかっただろうな。多分、それを褒めてくれるんじゃねぇの？」

　トウコツが漏らすそれは素直な感謝を含んだ予想なのだが、しかし哭き鬼姉妹は決してトウコツを許しきったわけでもなく、寧ろカンナとアイは隙あらばトウコツを討てないものかと画策しているくらいだった。が、それを実現しないのには理由がある。まず、一時ではあるが背中を守ってくれた人物であること、次に魔法使いの攻撃を躱す時に回避経路を教えてくれたこと。恩二つも背負い込んだまま、それを返さずに恩人を誅殺するなどプライドが許さない。

「とりあえず案内するぜ」

微妙な殺意が渦巻く5人グループは協会内部の司令部を目指した。

―ＡＭ　０３：４６―

太平洋に差し込む陽光が空を青く染め、闇を南西へと追いやり始めた頃、戦場は新たに一転しようとしていた。

四凶軍は東西からの侵入をサーカスとコルスレイの両者に阻害され、協会は南北へ戦力を集中。押し返し始めた協会軍は勢いに乗って第一防衛海岸を包囲する船舶の悉くを無力化し、新たな防壁として後方の部隊に防衛海岸を守備させ、制圧部隊は更に前進した。

「行けるぞ！進めぇ！」

軍艦の砲撃は虚しく中空で阻まれ、海上の船舶部隊も海中からの潜航部隊もほぼ壊滅状態。更に復活したレーザー照射砲が時折海上に巨大な柱を作った。

四凶軍は攻めどころか守りすらままならない状態にある。

そう踏んで突撃した部隊は、先に四凶軍の主力艦隊へと攻撃を仕掛けた部隊の顛末を知ることなく、つまり予備知識皆無で突撃してしま立ったのである。言ってしまえば勢いだけで。

『ノック４小隊戻れ！』

突撃部隊が通信に応じたのは敵主力艦隊を目前にしてから。銃火と黒煙に視界を阻まれた激戦区で、その部隊は夢にすら思っていなかった事実に直面した。

『先行したノック３、６、７、９正体は全滅した！』

「何だと！？」

『直ちに逃げろ！
どういう訳か――！』

「隊長！敵が！」

この時、協会司令部はキュウキの持ち出した一つで二つとなる切り札に驚愕を覚えていた。

『敵主力艦隊を守備しているのは、“１０万以上のセカンドリアル”だ！』

それはキュウキが秘密裏にナイトメア、武装派との取引で手に入れていたパンドラ・器実験の産物――常人にＳＲを発現させるという劇薬：Ｅｖａｎ－１０によるものだった。一般人が９割９分という割合を占める四凶軍が戦力の底上げを図るには武器を持つことと、

単純に人外を増やすという選択肢が、協会を陥落させるためには必須。キュウキが出し惜しみしていたのは、薬の数に限りがあるのもさることながら、副作用の危険性を恐れていたこともあった。

新たに協会の部隊が一つ、跡形もなく消滅するのと同時に2大魔女が繰り出した複合技が消え、正しい陽光が戦場に差し込んでいた。影に阻まれることもなく、触れても消滅することない正真正銘の太陽光が。

『キュウキ司令、今のところ暴走者は出ておりません』

「SR部隊を編成し、直ちに防衛海岸を“完全破壊”せよ。ボルト・パルダンは現在魔力の充填中途予測される。攻め討つなら今」

一度優勢に傾いた協会の士気が再び四凶軍は戻り、新たに組まれた四凶軍SR部隊は鬨を上げて防衛海岸に殺到した。

SR同士の戦闘が、夜明けの海上で幕を開いた。

混沌を増す戦場で四凶は動きを止めることなく、協会は敵の攻撃を全て防ごうと、それぞれが必死になって生死を紡いだ。

―3分前―

「ん？」

協会司令部下、外周。

背後に付きまとうアキを潮風避けと考えて有り難く思え始めてきたトキは、両手に時間を以て破損している巨大なレーザー砲の修理に勤しんでいた。

「どうしました？」

通信機片手にアキとトキを見守る男はボルトとディマの後輩と言われる優男。協会の水を使う魔法使いとして筆頭を飾る青い髪の青年：センこと、オリベイル・セスナムであった。

トキの異変にはアキも気付いていたが、それ以上に異様な悪寒に注意を削がれていた。

「なにかいる」

「あぁ……何だろう？」

２人揃って顔を向けるその方角は西。

数秒後、まさに協会のＳＲ正規部隊と四凶軍新ＳＲ部隊が激突する海であった。

センは知覚できなかったが、トキとアキはしっかり脅威となるＳＲの存在を認めていた。

第５３話－夜明けの月光、追い詰める陽光－（後書き）

北部海上では協会が四凶軍を圧倒していた。
東部海上は未だにコルスレイの侵食結晶と黄金が生命を寄せ付けずにいた。

……

西部海上では協会・非武装派連合が新たに編成し繰り出された四凶新ＳＲ軍によって苛烈な消耗戦を繰り広げていた。

……

南部海上は、比較的に静かだった。ただ、戦火が大人しいのには理由があり、それは協会側の誇る最大光撃力と、四凶軍が誇る最凶消滅力がにらみ合ったまま動かなかったからだ。

『トウテツ、聞こえる？』

「どうした？」

『アースイーター作戦を開始できるか聞きたい』

「やってやれなくはないが、多分時間がかかる」

『ボルト・パルダンね。
それなら問題はない。あの光の広範囲光撃が終わってまだ間もな

いから、今すぐ動けば成功率は上がる』

「よし、分かった」

通信を終え、司令塔の天辺で威風堂々と朝日を迎えながらこちらに意識を向けていたボルトから視線を外し、自分のつま先から腹の辺りまでを視界に収めるように項垂れて呼吸する。

「じゃあ、始めるとするか」

－ＡＭ　０３：５９－

四凶の現最高級トウテツ、全身過食が任務に臨んだ。

協会の攻略、中枢部への直進破壊侵攻である。

朝日を乱反射する海の上で、全裸の四凶は一直線に突進を始めた。

↓ＮＥＸＴ　［四凶攻略編］

第５４話－Ｈａｌｆ　Ｔｉｍｅ　ｔｏ　Ｈｅｌｌ－（前書き）

確かに戦場にいて、四凶と戦っているはずだった。

「こちら芹真、後退する……！」

「こちら作者！
気付けば戦争辺だけで１０話近くなりそうだ、応援頼む！」

「！？」

「ぎゃあああああああ！！」

と、現実で爆風に巻き込まれ、僅かな時間気を失っていた芹真は、変な生き物が登場する何とも言えない夢を見た。

（何だったんだろう、あの生き物は混合成獣（キメラ）か？）

爆風で圧し掛かってきた死体を押し退け、芹真は軍事演習エリアから協会内部へと撤退するのであった。

「こちら銀狼、後退する」

撤退の間際、戦線に輝きを放つ夥しい妖光と陽光を芹真は見た。

第５４話－Ｈａｌｆ　Ｔｉｍｅ　ｔｏ　Ｈｅｌｌ－

最初に味わった人間は、唯一無二の親友だった。
不思議な味は口でない別の感覚へと広がり、あらゆるものの排泄を促した。確かに覚えていることと言えば、真心を以て食べることに感謝したのが、後にも先にもそれっきりであるということ。
その食事に殺意があったわけでなく、ある意味で安楽死を望んだ人間とそれを承った人間が、生きる為に違えた選択を行っただけ。むしろ、生を望んだ者は、救いたいと思う一心が、後の四凶となる人間に最後の涙を与えた。

最後の別れは覚えていた。

二度無き別れは、同時にあるものとの別離でもあり、誕生でもある。

幾度の飢餓を越え、繰り返す拒食と過食を骨にまで染み込ませ、そうして四凶――現在のトウテツは生まれたのだ。

－協会南部　第二防衛海岸－

男の背中は大量の海水をかぶり、朝日に照らされ輝いていた。
長い前髪を書き上げ、全身を波と戦場の空気の中に堂々と晒し、羞恥心の欠片もなく胸を張って食欲を満たすべく獲物を探している。
波間に揺れる味方の死骸をつま先で摘み食い、不発ミサイルの上から海上へと足場を移す。

久しく全裸で迎える朝日と海での朝食は、若干の寝不足ながらも目移りするほど大量の御馳走を前に機嫌は上々。飛来する銃弾すら美味しい。

『アースイーター作戦を始めて』

普段なら食事の妨げになるであろう仕事は後回しにするが、この卓(せんじょう)での仕事なら働きながらでも十分な食事を楽しめるので文句は皆無。

潮水で全身を濯いだところで海上を走る。

今まで幾度となく水の上を走ってきた故、海上を走破することに別段問題はない。あるとするなら、若干海水で全身が塩辛くなってしまい、これから口にするモノ本来の味を楽しめなくなるかもしれないという懸念だけであった。

「何だあの変態野郎は！？」

協会正規部隊の１人が気付く。

「どうし――うおっ、裸！？」

「敵か――って、全裸！？」

５人編成の新米チームがひとつ消滅する。

最初に接触した者は四肢の先だけを残して食われ、２人目は手に

した銃器ごと両腕と胸部を、３人目は頭部を掌に食われ、４人目と５人目は背後から腰と胸を食われて絶命した。

「ジャンヌ司令！トウテツが止まりません！」

単独の四凶による突撃は第二防衛海岸まで飲み込んでいた。

自動銃座、砲台などで構成された第一防衛海岸の５％を食し、レーザー照射砲台の充電施設である第二防衛海岸を守備する少数のＳＲ部隊を飲み、その次に控える大規模なＳＲ部隊が控えていた第三防衛海岸へ差し迫る。

キュウキの打った奥の手、その内の一つにより防衛ＳＲ達は防衛海岸よりも前に出撃しており、完全に陣形は乱れている。

トウテツはそこへ突っ込んだ。

「そやつがトウテツだ！

その男を殺せば四凶軍には然程強い奴は残っておらぬぞ！」

四凶軍唯一と言える格別な破壊力の持ち主――それがトウテツだと見抜いたＳＲ達は、一斉と連携を以ってトウテツに挑んだ。

しかし、四凶にとってその行為は攻撃や防衛行動として映らず、ただ食べ物が向こうから口に向かって飛んできたという程度にしか映らない。

海水を使った水撃も、落雷に匹敵する電撃も、協会独自に開発した対ＳＲ用無反動ロケットランチャーだろうが、トウテツの頂点にいる男の前では全てが等しく無力であった。唯一、海の上を走って

止まらない四凶を止めたのは超能力者によるサイコキネシスだが、二度目の干渉を四凶は食い破って見せる。
空間を歪めて物体に干渉するサイキックも、物質ではないにしろ人という不完全な混合物質が飛ばした遠隔思念。一般人に見えない干渉の力もトウテツには視覚化でき、また四凶の中でも比較的長寿のトウテツは、過去に幾度もサイキッカーと交戦した記憶を持っているがため、一方的に触れてくる力に対する食し方を心得ていた。

「やばいぞ隊長！レルネルが……！」

食事で得たエネルギーを一気に消費する――昔覚えた体操術の延長線上に会得した技は、四凶の瞬発力を完全に人外のそれと変え、超能力者は防御する間もなく頭部を食われ倒れる。
トウテツを包囲した十数人が報復を兼ねて一斉攻撃を再開するが、やはり四凶の身体に触れたものから順に全てを喰われ消化される。
食してはエネルギーに変換して爆発力を生んでは消費し、また食してエネルギーを得る。
無限に食って消耗して卓の皿が消えていく。

（アースイーター作戦……この作戦の大事は協会内部での破壊活動だったな。
その中でも情報中枢機関・データコアとかなんとかの破壊工作は協会の情報手段を強制限定させることになって、連携を奪うことに繋がるから味方が有利になる、はず。
でもなぁ……面倒臭ぇ～）

トウテツは第三防衛海岸のＳＲを相手にしながらキュウキの経過を思い出していた。

協会に反旗を翻すために着々と水面下で努力し、一大作戦：エラー２７０８を決行。対抗してくる協会に対し、またそれに呼応するかもしれない無所属や小規模集団への牽制として各地での反乱扇動作戦：ホワイトナイトや、協会支部攻略用作戦のブルーレイン、エアストリーム作戦を強行した。本部攻略として急ごしらえのＳＲ部隊によるオーロラ作戦、内部への強攻突撃と内部での破壊工作を兼ねたアースイーター作戦を号令。

正直、トウテツはこの戦争の勝敗に興味がなかった。ただ、多くのモノを食べられると聞いて参戦しているだけである。

この四凶の中には敵味方という概念が希薄程度にしか存在しないのが真実であった。

協会も四凶軍も大差なく、自分達が築いてきた食卓を守るためだけに戦っている。

ならば、四凶――トウテツと言われる悪食は、人種どころか敵味方の枠さえ越えることができるある意味での平等主義者。今はキュウキと袂を分かつ気になれない故に、全身過食と呼ばれる四凶は協会の卓を食い散らかすことに意義があった。キュウキなら、戦争が終わっても世界のどこかに食卓を示してくれる。

「はい、殲滅（ごちそうさま）！」

第三防衛海岸、南部。

そこに協会守備隊ＳＲの残滓が散らかる頃、協会司令部からはトウテツを避けるように伝令が下った。

水平線の彼方に目を向けると半ばほど姿を覗かせた太陽、塔の天辺には光の魔女が見られ、確実に外出は危険と踏んだトウテツは急いで第三防衛海岸から協会内部へ南部湾口部へ移ろうと目論んだ。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第５４話－

－Ｈａｌｆ　Ｔｉｍｅ　ｔｏ　Ｈｅｌｌ／侵攻－

－ＡＭ　０４：１０　協会内部　第二休憩室－

四凶協会間の開戦より半日以上が経過。

開戦当初から戦っていたＳＲ達はみな、戦線から離れた協会内部

に設えられてある第一休憩室で息を抜いていた。
方角で言うなら北部、島の中央よりの場所である。

大きな休憩室は協会内に二箇所あった。
その内のもう片方がここ、第一休憩室と同じく島の中心部に近い西部の第二休憩室である。
ここではファーストアタックを防いでいたＳＲらに続き、協会へ貢献したＳＲ達が腰を下して休息に勤しんでいる場所であった。
半数は床の上に敷かれたマットで仮眠を取り、残り半数の者は食事や読書、娯楽、談話による休息を大事に消化している最中である。
そんな中に、明らかに他とは違う空気を漂わせる卓があった。

「まず四凶軍の先制攻撃を結界部隊が防いだ」

コーヒー、紅茶、赤ワイン。そこに添えられるナンと辛口カレー、そしてスティックベジタブルの盛り合わせは、誰が見ても変態な献立であった。
既存の献立に載っていない皿を盛り合わせ。大量の資料用紙、それに目を落としながら傾くカップやグラス。摘み食い、話し合いながら食卓を囲んでいる面々は、銀色人狼を始めとした猛者４人である。

「次に防衛海岸だ。無人攻撃ラインやレーザー照射砲を使用して四凶軍に損害を与えた」

休憩室の出入り口を背にするのは銀狼の芹真。その右側には九尾

の狐こと瀬賀駆滝、左手には協会の隠しＳＲ：崎島恵理、正面にはヒーローズの１人――老シンドバッド氏が刺々しい金髪を整えながら話し合いに加わっている。

「そんで本命のＳＲ部隊だな」

「それでも四凶軍はビクともしない。
時間を稼げているということだけが唯一の戦果。向こうにはまだ十数億の人間がいる」

機嫌の良いシンドバッド。
それとは反対に、崎島の顔は不安に曇っていた。普段の彼女を知っている人間であれば、これほど珍しい表情を見せることなど滅多にないと驚く。
だが、芹真や瀬賀は戦争の渦中に巻かれながら、一切の破壊や熱狂に不安を見せない人間こそ珍しいものという考えをしっかりと持っていた。加えて、崎島恵理という人間が歳不相応の大人びた雰囲気を見せているのは、単に場数が一般人のそれとは異なるということに起因するだけで、それでも協会所属のＳＲとして、暗殺者と一般人の生活を両立していながらも、やはり彼女には歳相応の女子高校生が持つ思考もそれなりにはあるのだ。
芹真は一瞬の目配せを悟られないように、手にコーヒーカップを取るアクションで偽装しながら話を戻す。

彼女の不安は正しい。
協会の総勢はせいぜいが１万と中ほど。対する四凶軍は５０億を超える大軍。

「彼女の言う通り、今までの協会の防衛行動が四凶軍にもたらしたものは、最悪なことに“自信”と僅かな被害だけだ」

「主力ＳＲは依然として健在。肝心要のトウテツ、キュウキも未だ討てていない」

この卓で主に会話をしているのは狼と狐。

葡萄酒を一気に煽るシンドバッドも２人の意見には否定の言葉を返せない。

覆しようのない事実として、協会は四凶軍の雑兵を多数削りこそしたものの、戦略の中心となるだろうＳＲは数えるほどしか減らしていないのだ。そんな極小の戦果に対し、被った損害は防衛海岸とレーザー砲台、それに貴重なＳＲを数人。

「状況を見るに四凶軍の優位は揺るがない」

「１００万の兵隊を削ってもか？」

「英雄さんよぉ、戦争の経験はないのか？　えぇ？　数は二の次だろう。一番肝心のは、主力の潰し合いと、次にその結果が大事なんだろうがよ。それくらいわかるよな？」

指先に感情の籠った炎が灯り、揺れては殺意をシンドバッドに伝えた。

「……瀬賀、四凶が次に仕掛けてくるとしたらなんだと思う？」
「あれだけの大軍を動かすからには道が必要だ。全軍での速攻突撃じゃないか」
「理由は？」
「俺を試しているのか？
軍隊を遠征させるにあたって大きな問題となるのは“食料の確保”だ。それも大軍になるほど食料問題も深刻の度を増す。
それで、芹真社長はどう考えてんだ？」

「お前も社長だろ。
四凶軍はどうにかして長期戦を仕掛けてくるつもりだと考えている」

「しかし……芹真さん、あなたはたった今、瀬賀さんに速攻の可能性を訪ねたばかり。それなのに長期戦の可能性を挙げるのは何故？」

口を噤んだ英雄の隣で、崎島の口は潤滑油でも得たかのように普段以上に言葉を紡いだ。

「敵の総司令官がキュウキなら、正攻法には則らないはずだ。
あれだけの大軍も、ただの兵隊として用いるだけとは考えにくい」

「どうにかして“食料を得る”ということを言いたいのか、それとも今のうち世界各地に隠れ家でも作るとかでもするってのか？」

狐に言われて狼は頭部を横に振った。
しかし否定ではない。

わからない。
むしろ両者の可能性が十分に考えられるからこそ、芹真は意見を求めたのだ。
大鵬は既に網中、あとはこれをどれだけ確実に得るか。それをキュウキは行動する。

「なぁ、シンドバッドさん。あんたが四凶ならどうする？」
「俺が四凶ならか？」
「あぁ。船乗りのあんたならどうする？
長期戦で敵は陸、あんたは船の上だ」

考え込むシンドバッドの傍ら、崎島と瀬賀も同じことを考える。
海上という食料に制限の生まれる地形で実行できる長期戦への備え。
そうなると3人の考えは合致してしまう。

「やはり船だろう。食糧貯蔵船か、足の速い輸送船を使った兵站確保とか」
「俺もそのどれかの可能性が高いと思う。敢えて付け加えるなら空輸という可能性もあるだろう」
「……食料問題」

「崎島、無理はするなよ。
知り合いから君が強い人間であることは十分に聞いている。かと言って無理矢理に俺たちの会話に入ってくる必要はあまりないんだ」
「協会で暗殺者勤めるくらいなら当然強いんだろうな」

芹真はあくまでも崎島恵理という少女を高校生として、瀬賀は協会に要求を叩きつける際に体の良い回線となることを期待していた。
しかし、彼女の精神は芹真が思っているほど華奢でもなければ、瀬賀が考えるほど知に欠けているわけでもない。

「それでも、何か思いついたことがあるなら言えばいい。俺たちにそれを聞き流す余裕なんかないんだ」
「では遠慮なく。呪術師の可能性は？」

最初に彼女が上げた可能性は男３人の意見とは違い、同時にそれは疑問としていた敵の食糧問題を解決する有効な手段として、男達の脳裏に苦々しい記憶を蘇らせる現実として焼き付いた。

「大量の死体を用意し、それを食わない、寝ない、滅多に止まることすらない兵隊として使役すれば――」
「なるほど」

正直、思い付かなかった攻法である。
船乗りはその意見に感嘆の手を打ち、なるほどと何度も頷く。
そんなシンドバッドの横では全く別の、狐と狼の反応が新たに質問を投げていた。

「四凶軍にそんなＳＲはいるか？」
「何で俺に聞くんだ芹真？　知るわけねぇだろ」

突然の質問に不快の炎を口の端から零す化け狐。

「撤退間際に大量のＳＲが押し寄せてくるのを見かけた。
ざっとみて１０００人は超えていたが、向こうが全軍と言えるほど大量のＳＲを、重要とも思えないこの局面で打ってくるとは考え難い」

「どうしてそう言い切れる？　虚を突くなり出し惜しみをやめるなりしたとは考えねぇのか？」

「じゃあ聞くが、お前が大群の指揮官だった場合、この拮抗――或いは反撃によって数万を失った後にこんな博打をしかけるか？」

「気でも狂えばそうするさ」

「まぁ、キツネだからな。死んだ振りもするだろうがもう少し真面目に答えろ」

「死んだ振りが得意なのは狼じゃねぇか？　あぁん？」

獣同士で視線をぶつけ合う。
それは目に見えて熱を放ち、溢れる殺意は食器によって表れ、しかし互いに腰を上げる気が起こらないのは戦闘による疲労と利益皆無という未来が火炎以上にハッキリと見えているから。

「お前なら知っているはずだ。器実験……旧、パンドラプロジェクトの遺産。
人を人でなくする魔薬：ＥＶＡＮ－１０の効力を」

まともな返事が期待できないだろうと直感した芹真は本音を明かした。

自分が最も警戒しているのは四凶ではなく、四凶が所持しているであろう薬物であることを。そしてそれは、瀬賀もよく知っている劇薬であり、かつて商品として扱っていた品物である。この男から何らかのヒントを仕入れておくことが何処かで活きる時が来るだろうと考えていた。

「何だいそりゃ？」

疑問を視線と言葉に乗せて送るシンドバッドに、溜息を挟んだ瀬賀が答える。

「一般人をＳＲにする薬だ」

「……パンドラの遺産ね。まだあったの？」

白状した狐の後に続く存在否定。

しかし、今は彼女がどう関わったかが重要ではなく、シンドバッドほど名のあるＳＲが薬や実験のこと自体をあまりよく知らないという事実の方が同席した３人には衝撃だった。

「マティス・フォーランドという男が生み出した悪薬だ。

薬を服用した人間の７７％はＳＲと成ると聞いた。

“どんなＳＲになるか”

それはハッキリと言えんが、敢えて言うならその人間の記憶がＳＲを作り出す」

「記憶から？」

「願望、夢想、傷心、絶望。
何がその人間を構成しているのか、構成内容によって変わる。
だからこればかりはランダムとしか言いようがない。
狼にもなる、犬面人にもなる、サイコメトラーやバグ、ゴブリンだってあれば、妖精や鬼――果ては、純粋な四凶にだってなることがある」

皿の上の最後の一切れを神速で摘み食い、改めて狼は狐に問いた。

「呪術師も生まれるのか？」

「あぁ、できる。
前例もある」

死者が兵士となる可能性を書き留め、崎島は皿の上が綺麗になっていることに今さら気付く。

「マティス・フォーランドと言えば、崩壊のＳＲよね？」
「そうだ。何をトチ狂ったのか、ＳＲと人間の境界線を破壊しようとしたらしい。それで誅殺されたと聞く」

ホットグラスを新調する芹真と瀬賀。
マティス・フォーランドという人物は、ＳＲ界隈に在ってはそれなりに名の通った人物であった。特にナイトメアの参謀を担った人物として知られる面と、ＳＲ研究者として知られる二面性を持った初老の男性であった。彼のＳＲ自体も相当の破壊力を有するため、多くの組織や集団からスカウトされたという記録が協会のデータベースに正式記録として残っている。

「……崩壊のＳＲがこの事態を見越していた可能性は？」
「俺に聞くなよ瀬賀」
「マティス・フォーランドの死亡は確か、芹真の街で真夏の雪が降った日と同じだったはず」
「そうね。協会からのエージェントが任務として彼を討ったという話だけど」

全員が手元の飲料で喉を潤し、一息ついたところで、芹真を除いた３人は手元に新たな白紙を用意する。
話を戻すため、最初に口を割ったのはシンドバッドだった。

「マティス・フォーランドのことは一旦置いておこう。
それで、呪術師の可能性は？」

「“ない”とは言い切れない。むしろ高いと言った方がいいかもしれん」

呼吸が重い。
頭を振って考え直せば、重いのは溜息が混じっているせいだと気づく。
芹真はその可能性が非現実で、実現ではないという未来を全力で支持していた。

「ゾンビ、落武者、首なし、夢遊人……ｅｔｃ、ｅｔｃ。呪術師やそれに類似した能力を持つＳＲの効力は、術者本人を討つことによって消滅する」
「でも、彼らは的に姿を晒さないことを戦術の第一としている。簡単に解決できる問題ではない」

シンドバッドとしてもその可能性が実現しないことを願うばかりだった。過去にミイラ相手に戦った経歴を持ち、蘇生する敵の面倒臭さは嫌というほど、現実に嫌と言った経験者であるがために非現実を願った。同様に崎島にも似通った体験があり、是非とも想定の内に留まってほしいところだった。
しかし、そう願っている自分がいると知るや、狼と否定の内には高確率で術者による蘇生人形による攻撃が行われるという予感が発生していた。

「ならよ、海戦での常套手段としては相手の食料を分捕ったり、魚を捕りにきた船を捕まえるとかの食糧確保――」
「無理だろう」
「それは有り得ない。開戦前にジャンヌに問い合わせたが、海に毒を投げ込むようなことはしないらしい。それどころか協会は予め蓄えておいた食料だけで籠城するつもりだ」

口の閉じないシンドバッドが二人の獣によって言い潰される。

「テレポーターは反撃思念の膜状空間を一枚展開するだけで防げるから盗難の心配はない。
ただし、四凶の軍が内部に入らない限りな」
「敵の艦隊はなるべく早めに潰しておかないと結界部隊が困るな」

辛うじて口を閉じる。そのために使った右腕が、卓上から数枚の紙を落とした。
テーブルの上に広げた紙の余白を見つけては会話の一部始終を書き留める。
４人の中で唯一速記のスキルを持つ瀬賀は簡潔にメモをまとめながら言葉を再開させた。

「本当に備蓄の食料だけで籠城するつもりなのか？」

僅かな沈黙の間に芹真が放った言葉を思い返し、その中に信じがたい計画が含まれていたのを思い出したのだった。
瀬賀が書き終え、次いで芹真、崎島とペンを置く。
コーヒーを体内に装填し、休憩室の空気を肺一杯に補充したところで瀬賀に答える。

「会長に秘策があるらしい」

「秘策？　またか？」
「あぁ、“また”だ」

背もたれに体を預けて天井を仰ぎ、もう一度肺を限界まで使役しての深呼吸。
去年も見上げた天井。
協会はその頃と何も変わっていない様を装い、その内面では大きな変化を遂げている。
事務所――日本に戻った時から協会の頂上にはあからさまな異変が起こり、それまでの規律は無きに等しくなった。協会の一般人への積極的な干渉。それ自体を許可したこと。ナイトメアが身振りを大きくするのも当然だ。

「なぁ、芹真。会長の言う秘策ってのが何なのか考えたことはあるか？」
「一度は考えたが見当付かずでそれっきり……」

「俺はない」
「シンドバッドさん、聞いてませんよ」
「あぁ、知っている。ついでに俺はお前に言っているつもりでもない」

冷たい視線も形無くとも熱は生む。
その熱い視線にいち早く気付くのは瀬賀で、敢えて無視するのが芹真の態度だった。

「喧嘩するなよ2人とも。
人が来るんだ。彼らも交えて話を進めようじゃないか」

そもそもこのメンバーでの話し合いは、正直言えば芹真の望む面子ではない。
“不確定要素／閃き”に欠け、自身も含めて底が予測できる者ばかり。頭の回る人間は2人ほどいるが、最低でも後3人は欲しいところ。
シンドバッドは素直過ぎ、逆に瀬賀はひねくれ過ぎて両者共に扱い辛い。かと言って崎島も、休憩室に足を運んでいたのを呼び止められて一緒にいるだけであり、本来この話し合いに誘おうと考えていたメンバーではない。その上、物静かな雰囲気や真面目な態度から下手に摘み出す理由すらこじつける事が出来ない、その方法が考えとして浮かぶこともない。

だから、まず不確定要素がどこかに転がっていないかと、廊下へ耳を傾けたところ――

「隊長、ここみたいですよ。第二休憩室って」
「うむ」
「ゆっくり休めよ2人とも。また数十分後には戦場に臨まねばならんのだからな」

丁度良いところに人が巡ってきた。廊下から小さく響いてきた声は男3人のもの。
更に、

「おっしゃ！次に備えてメシ喰うぞ！」
「でもカンナ姉さま、彼は……」
「スミレちゃん、今は一緒に戦う仲間よ。やり切れない気持ちは分かるけど、今は抑えましょう」
「ヘッ！そじゃ悪いが一緒させて貰うぜ。そんでアサ、後で俺と立ち会えよ」
「いいですよ」

……留守番を頼んだはずの、聞きなれた鬼の声と初めて聞く声が2、3。
聞き間違えるはずもない藍の声に、クラスメイトである崎島が顔を出入り口へと向ける。芹真と同じくらいに気付いていた瀬賀に関しては、すでに会話に編入させるつもりでいるらしく、1人でも聞き覚えありと声から判明した瞬間に、別席のイスを担いで運び込んでいた。
しかし、狐はケチな性格を剥き出しに、イスは運んでもテーブルは運んでこないので、代わりにシンドバッドが妙なテーブルを運び込んでしまう。

「ムっ！」
「あ……」

果たして芹真は疑った。
彼らはここが休憩室であり、同時に仮眠室として多くの人間を収容している場所でもあるということを、まさかとは思いたいが瞬時に忘却していしまってはいないものか、と。

「貴様はアサ！」
「隊長、それだけじゃありませんよ。その妹のアイも居ます」
「ほぅ、鬼と四凶が並び歩くとは。面白い光景だな」

魔法使い３人は主に１人の男に意識と視線を注いでいた。

「久しぶりですね、リデア隊長さん」
「リデア？　まさか、風使いのリデア・カルバレー？」
「何者？」
「何だアサ、こいつらはよぉ？」
「ナイトメア非武装派の魔法使い３人か。お前らも食事か？」

特級風司こと、眼帯で左目を覆うリデア・カルバレー。その両翼に控える青年と老人はそれぞれ空間使いのベクター・ケイノスと、自由四季の異名をとる奇術師：Ｍｒ．シーズン。ナイトメア非武装派の中で彼らほど有名なピースメーカーはいない。唯一、この世を去った若き指導者：マスターピースを除いて。
揉め事を起こすのは大抵リデア。その始末とツッコミに追われるのがケイノスとシーズンである。

まるで会敵でもしたかのように剣幕を強張らせるリデアに対し、鬼と四凶のグループは穏やかな面持ちで距離を詰め、言葉で対峙し、同時に食堂の芹真達に気付いた。

余計な騒ぎを始められる前に手招きし、廊下の８人を同席を勧め

る芹真。
その申し入れに呼応して藍とケイノスが、リデアやカンナを食堂に誘導する。
流石のリデアも、第二休憩室で横になって休む人の多さを目の当たりにするや、直ちに口を噤んで用意された席へ足早に移動した。

「お疲れ。何か持ってこようか？」

リデアが口を開く一瞬前、芹真は手早く注文を聞いて機嫌を窺った。
しかし、注文は白紙。

驚愕を隠せないリデアや、長女であろう哭き鬼の女性は、初めて言葉を交わす銀狼の事を知っていた。それも鬼の方は指を向けたまま言葉を失うほどに。

そんな狼の苦労を察した狐が着席を促し、藍とその妹らしき少女は飲料運搬の手伝いを申し出ながら簡単に自己紹介始めた。

「陸橙谷スミレです」
「姉のカンナだ」
「長兄、アサ」
「芹真事務所所属、哭き鬼の藍です」

礼儀正しい三女に、不敵な態度の長女が続き、その後に物静かな長兄と貞淑さを持った次女が名乗る。

「ナイトメア非武装派のリデア・カルバレーだ」
「同じくベクター・ケイノス」
「Ｍｒ．シーズン」

どこか納得のいかないという面持ちで名乗る隊長に、最年少の青年が続く。最後に名乗った老人は面白いと笑みを浮かべ、必要最低限の名乗りを終える。

「四凶のトウコツだぜ、ヨロシク」

「協会所属のＳＲ、崎島恵理よ」
「ヒーローズ所属のシンドバッドだ」
「黒羽商会の代表取締役、瀬賀駆滝（せがくろう）だ。夜露死苦」
「……俺は芹真事務所社長を務める芹真。よろしくな」

挨拶が済んだらドリンクバーへ急ぐ。
１２人分の飲み物を3人で運べば一往復だけで済む、それをもう少し多めの人数で運べば一人当たりの負担も軽減されたが、あえて誰もそれを愚痴として零さない。
改めて全員が腰を降ろすのを見計らい、第一の質問がリデアより挙がった。

「これは一体何の集まりだ？」

魔法使いの前に白紙を差し出す瀬賀は、無言を貫き視線だけで理解を求めた。

新たに置かれた楕円に近い「く」の字をした変則大型テーブルに座る１２人。

その中で狐は屈折の地点の外側に陣取り、内側に座る芹真と向かい合った。

ふんぞり返って紅茶を飲み干す瀬賀の右手には非武装派の魔法使い３人とシンドバッド、それから崎島が着席。

反対側には哭き鬼４兄妹とトウコツが腰を下ろし、運ばれたばかりの飲料で喉の渇きを癒した。

「なぁに、普通の井戸端会議さ」

「こら化け狐、嘘を言うな」

早くも方向性を曖昧にしかねない発言に狼は手近なカップの氷を投げつけた。

「これまでの戦果と今後四凶軍がどのように動くか予測し検討、それを元に対策を練り、司令部へ献策するための話し合い――といったところでしょうか？」

「その通りだアサ。四凶の軍勢を打ち破るには策を用いるしかない」

敢えて交えない視線と、この集まりの必要性に共通の意を覚えたアサは、配られた白紙の使い道が情報を記すという本来の用途だけ

のために配られたことに安堵し、一息ついて瞼を下ろした。

この卓での目的を全員が飲み込んだところで、芹真はこれまでのまとめを新たに加わった8人と共有することで再開の緒とした。

－AM　04：34－

改めて、ここが戦場であることと戦争をしているという現実を理解した。

随所で継続される激戦。
進退繰り返す命の攻防。
1人の勝ちが全員の勝ちとならない高難易度のやり取り。
最も重要なのは生き延びること。
他人を殺してでも自分が生き延びなければいけない矛盾。
敵はもちろん、時には味方も殺さなくては生き延びれない。

「なぁ……」

そんな地獄とも言える場所に、自ら足を運んだトキ自身の口からため息が止まらない。
素直に後悔を認めた。
潮風に乗る血の香りも、波間に漂う残骸の諸々も、朝日に照らされた鮮血の海も、立ち上る黒煙の数々も、何もかもが嫌気を振り込

んでくる。
　こんな時こそゲームでもやって気を紛らわしたいものだと、壁に背を預けたまま立ち尽くすアキに声を掛けながら、心の奥底で弱気な本音を漏らす。

「君は座らないのか？」
「どうして？」

　協会本部の司令部は人工島の中央に位置していた。
　頭頂部のレーダー塔天辺は海面から２００メートル以上という高さを有しており、そこから見下ろせない海面など人工陸面に隠れた直下海面以外にない。

　十数分前――協会司令官：ジャンヌの指示により、２人はテレポーターの力を借りてこの場所にやってきた。
　ジャンヌ司令より指名されて向かった作業場で、トキとアキの２人を待ち構えていたのは数十人の怪我人だった。
　レーダー塔頂上に隠れていた彼らには国籍や年齢による共通点はない。
　怪我人は等しく苦悶に顔を歪めるばかりである。
　彼らの唯一共通する点は、彼らのＳＲ：結界部隊だった。その存在の重要性を説かれたトキは急いで時間による治療を施した。

「君は、さっきみたいなＳＲの使い方に慣れていないんだろ？　疲れたりしないのか？」
「つかれ……」

数十人の負った傷を癒す作業を、トキは急ぎ、アキは見守っていた。

途中までは。

トキ独りでなら１５分程かかる作業だったが、アキという交渉前には命を狙ってきた人物の助力を得て、全怪我人の治療は１０分と掛からずに終了した。

その成果あって、現在２人の目線と同じ高さの空中で強固な結界を再展開していた。

（オリヤアキ……織夜秋。

戦ってみた時の印象だと、消すことばかりが力だと思っていたけど、俺と同じ“再生の力”も持っていたなんて）

「トキはつかれている？」

右側に立つアキは潮風を受けて疑問を抱き、質問を投げ、理解困難の続く現状に終止符を求めた。

潮風に冷めた金属のなだらかな壁面から背を離し、座りこんで片膝を立てているトキを見下ろす。

質問の答えは首の縦振りによって返った。

「あぁ、疲れるよ。

こんな場所に来るのはほとんど初めてなんだ」

「だからつかれる」

沈黙が寂寥と安堵を同時に運ぶ。

二人揃って黙り込むこの瞬間が、トキにある種の平静を教えた。

眼前には戦場があって、無数の命が一秒ごとに擦り減っていく。

まるで命の擂鉢を思わせる渾沌とした光景である。

沈黙は心地良いのに――しかし、ここが戦場の中心だからだろうか、トキにはここの静寂が不快だった。

人を助けるため、四凶を討つためこの戦場に出向いてきたにも関わらず四凶と対峙する機会がない。

それが焦燥を募らせ、更に織夜秋と勢い余って交わしてしまった約束と、その約束を疑っているから離れることがないのであろうアキが、出逢って間もないのに付き纏うために自分のペースを取り戻すこともままならない。

これまでの生活に問題があったのだろう。

誰かと居ることが、力付くでも排除したいほど鬱陶しく感じたのは初めてだった。

「分からない」

トキも、現実にはアキも理解が追いつかないことで一杯だった。

四凶を討てば戦争は終わるのか。どうしてつかれないのか。

コントンは果たしてこの戦場に居るのだろうか。彼はわたしにつかれを求めているのか。

そもそも協会は四凶軍という、人類史上例を見ない超大軍に勝てるのだろうか。

もしや、トキは逃げるためにツカれをうかがっているのだろうか。

「コントンを探さないの？」

「……頼む、少し休ませてくれ」

戦場の空気に呑まれていたトキは、それまで僅かに意識していた睡魔の手招きを許した。

思い返せば寝ずにここまで来ている。

翼が住む廃工場で目を覚まし、ナイトメアの３人と戦って帰宅。

帰ったら一切の予告もなしに父が居り、次に芹真事務所に行ってボルトらと話し合い、叩かれ、突然響いた電話で学校へ急行し、類家を戦って止め、そのまま崎島さんに導かれて協会まで同行。

ヘリの中でも睡眠をとることはなく会話に時間を費やし、夜を迎えた太平洋上に協会本島を捉え、不時着。

着地先では会長と遭遇し、会話を進めていたら再生のＳＲ：フィングが乱入し、更にアキが乱入してきてそのまま会長室から落下。

暗闇の戦場でアキを説得してしまい、コントンを討った暁には名前を彼女に明け渡さなければいけないことになってしまった。

（どうしてこうなった……）

瞼を閉じ、両膝を折って腕を回す。
金属の足場と壁、吹き込む潮風の冷たさが妙に心地良い。疲れのままに身体を預けて意識を沈める。
一気に湧き上がる疲労は体のみならず、心からも力を奪う。
睡魔はすぐに意識を拉致し、トキはあっという間に夢の中に降りていった。
僅かな眠りでもいい――半日以上のＳＲ使用は時間による回復だけでは補いきれない消耗があった。

「……」

残されたアキは眠りにつくトキを見守り、潮風に寝息が混じる頃、初めてトキの隣で屈んでみた。

「疲れているから寝る――それなら」

織夜秋は学校に行った経験がない。
そのことは十分に理解している。
学の無さ、治し方の分からない非常識、少ない持ち言葉。一般の同年代と比べて学力が低いのは言うまでもない。
だが、そんな彼女でも信仰の一つは持っている。

「おやすみ」

膝を抱えるトキの右手に顔を近づけ、軽い口付けをし、立ち上がって目線を泳がせる。

――どうかまた、目を覚ましますように――

寝前の儀を終えたアキは一気にやる事を失ってしまった。

（トキは名前をくれるから殺せない。そう約束した）

と、状況を頭の中で再確認し、寝てしまったトキを見下ろし、何かやるべきことがないものかと戦場を眺める。

再びトキを覗く。

自分のそれよりも短い黒髪の彼を、最初は殺す予定でしかなかった。

それがどうして殺さないことを認めたのか、正直、それを認めた自分が理解できず、困惑は深刻なほど深い。

気晴らしに向けた視線の先は、残念ながらどこへ向けても戦場が飛び込んできた。

（この様子を見て、このトキは嫌そうな顔をした）

戦場に目を向ければ絶え間ない轟音と火炎が凄惨を彩り、四凶具の新たなＳＲ部隊投入によって生じた雷光や空間の歪みさえ、ただ

眺める分には綺麗であった。

海面より浮上する無数の残骸が、ひとつ残らず塵へと変わる。
捻じれる戦艦。
自然に逆らう火炎と潮流。
人が舞う宙が一瞬だけ鮮血飛沫で埋まる。

しかし、わからない。
あそこに居るのは同じく何らかの力をもった者たち。
言ってしまえば同類なのに、どうしてトキは嫌悪するのか。

何が気に入らないのか、アキは戦場と空とトキを見まわしながら考えた。
力が嫌なのか、あるいはそれを使うことが嫌なのか。
どれだけ考えようと答えが見えてこない。
まるで分からない。
一つ分かる事といえば、この広い場所からトキの目的を探すことが大変であるということ。探しては休むということが繰り返されるのであれば、トキの名を手に入れるまでに多大な時間を費やするということ。
それはあまり好ましくないことだった。

「ここで何をしている?」

悩む彼女に男の声が掛かる。

この瞬間、アキは確かに体感したことがある。
それまで休むことなく吹き続けていた潮風が、男の声がかかる一

瞬前から完全に停止していた。

「誰？」

「お前こそ何者だ？」

右手、陽光の中より現れたその男は不敵な笑みを浮かべながら銃を向けていた。

壁に寄りかかっている状態とはいえ、アキの凶器もすでにそちらに向いている。

両者共に畏縮することなく、相手の姿恰好から挙動に至るまで、目を光らせて出方を観察していた。

片や少女、片や青年。

共に黒装束をベースに、アキはホテルのボーイから奪った制服、男は防弾チョッキを着込んで沈黙を続けていた。

「……見境なし、ってワケじゃないみたいだな」

「？」

ジェリコの銃口を下げ、男：フィング・ブリジスタスは肩をすくめた。

「フィング・ブリジスタス。

協会所属、ホート・クリーニング店店員。

で、色世トキを探してここにやって来たわけだが、寝てるのかソ

レ？」

アキは言葉を用いずに頷くだけで返答した。
漆黒の髪を掻き揚げジェリコをホルスターに収納するフィングは軽い驚きを窺わせながら聞いた。

「寝てる」

「殺さないのか？」

「え？」

「だってさっきは殺そうとしていただろう。
俺なら今殺すが――もしかして、仲直りしたのかな？」

寝ているトキを見守るフィングは水平線の彼方に視線を移した。

「彼は、私と名前を交換してくれると言った」

「へぇ、じゃあ今の君はトキか？」

「違う、まだ。
コントンという人間を見つけて倒してから」

「そうか。四凶を探しているのか」

風が止んだ所為もあり、トキの寝息がはっきりと耳に届く。
もしトキが約束を守らなかったら殺そうと、話しながら思いつくアキに、フィングは問う。

「倒せるといいが、勝算はあるのか」

「わかりません」

「そもそも混沌というものを君は知っているか？」

彼女へ始める説明は、フィングの興味によるものだった。アキの知的好奇心を試し、その結果、彼女がどれだけ学力的可能性を秘めているのかを見るもの。

「世の中のあらゆるものが混ざり合った状態をカオスという。四凶の混沌は世界を攪拌する人的要素なんだ。乱世を招くこともあれば、混極まった世界をプラスマイナスで零にしてしまうこともある。
この特性を隠し持ったコントンには、あらゆるモノを――」

「？？？？」

……やめた。
話しかけるタイミングの悪さもさることながら、彼女の四凶に対する知識の無さと、言葉ひとつひとつへの理解の浅さがありありと

見て取れた。
ある意味でこれは手強い。
確実に学校へ通うが吉であろう彼女を、これ以上刺激しない為に別れの言葉を告げる。

「すまん。邪魔しちまったな」

「そうですね……」

不機嫌の色を隠さないアキの両手にはあの黒い球が。
小さくともその圧力は機銃と比較して遜色ない――どころか、弾道ミサイル並の脅威を醸し出していた。

「じゃあ、俺は戻るよ。
トキが疲れているようだったら、休息部隊の誰かを捕まえな。医療マークの腕章をした奴らだ。
そうすりゃ、こんな寝心地の悪い場所に付きあう必要はなくなる」

アキに返答の間を与えずに、フィングは再び陽光の中に消えていった。
神出鬼没という言葉を最近学んだばかりのアキだが、まさしく彼のような人間を言うのだろうと実感した――

「確かにあれは神出鬼没といえる人ね」

――矢先、新たな声が頭上から届いた。

天の声かと聞き違えるほど澄んだ声主を探し、視線を上げたアキの頬に何かが触れ、それを指だと理解することにその犯人は眼前に姿を晒していた。

「あ、私はトキの味方ね。
ボルトっていうの」

もう一人、神出鬼没な誰かが上空より姿を現した。
しかも、よく目を凝らせば二人居る。一人は白い外套、もう一人は黒い外套で、それぞれ金色と黒い長い髪をした、まるで対称的な印象を与える。
ボルトと名乗る女性が伸ばした手の暖かさを頬に感じ、こそばゆさに身を引くと背後の壁にぶつかった。

「トキ相当疲れているみたいだから当分起きないわよ」
「……誰、何の用？」

フィングという男も胡散臭かったが、ボルトと名乗るこの女もアキにとっては等しく怪奇な人物であった。
特別な力を持っていることは状況から見てよく分かる。そうでなければ空中を自在に飛びまわれるわけがない。学の無さを自覚しているアキでも重力の法則くらいは知っている。

戸惑うアキを楽しみながら、声を掛けたボルトは笑顔のまま顔を近づけ、まじまじと瞳を覗き込む。

「へぇ、そんなことが出来るんだ。
じゃあさ、私たちと一緒に四凶を倒さない？」

「……え？」

ボルトの読心術に気付けないアキでも、四凶という言葉がこの戦場においてどれだけの意味を持った言葉なのか、完全に把握していないものの、それが目的へ到る為に欠かせない障害であることくらいは十分に把握している。
トキの探す敵、約束までの道のりを築く者たち。
目の前の女性はそいつらを討とうというのだ。目的を果たすため、アキは惜しみなくその申し出を受け入れた。

「いいけど、どこに居るのかわかる？」

「隠れている四凶を見つけるのは骨だけど、隠れるつもりの無い武者も居るから、まずはそっちを倒したいの。
そこで貴女の力を借りたいんだ」

空中から塔の足場に降り立ったボルトはアキの手を取って引き、日陰から出て南西戦線を指差した。
そこは他の方面戦線よりも苛烈な激戦を繰り広げ、協会正規部隊の劣勢という形勢を見せる唯一の戦場である。

戦線も他の方面と比べればかなり深い所まで押されている。
その先頭に立つのは一人の四凶、後に続くは数え切れないインスタントＳＲの群れ。

「あそこ、先陣切って戦う全裸の男性が四凶よ。トウテツって言うの」

ボルトの光量調整により、トウテツだけが戦場の中で光の輪郭を纏い、大勢の目を引いた。
筋肉質の大柄な男は一直線に無数の障害物を食しながら進んでいる。人も金属も、銃弾も火炎放射も関係なく、あらゆるものを呑み込んで協会の中心部を目指す。

「あれを倒せば他の四凶も出てくるよ」

「コントンも？」

「えぇ♪」

目的に近付く。
そう確信したアキはトキが寝ていることを確認し、ボルトに二度目の返事を返した。

「やる」

遠目に見ても分かる強さ。
おそらくトキへの大きな障害となるだろう四凶を倒すには、実力こそ把握しきれないがボルトというＳＲの助力が欠かせない。
直感でわかる事は一つ、ボルトは目の前の四凶を止める秘策を持っているということ。

「どうすればいい？」

眠りこけるトキと名を交換するためにも、戦争の状況打破にも繋がる締結が確立する。

四凶、トウテツを討つ。
トキの、勝利の、あらゆる命の為に四凶を討つ。

少しでもトキに近付く為という、アキの心情を見透かしていたボルトは自分の考えが実現となることに一層明るい笑みを浮かべた。

－ＡＭ　０４：５８　第二休憩室－

１２人会議が開始して数十分、協会本部の室内放送が全域一斉放送で侵入者の報を告げた。

『北部食糧庫で爆発、映像記録から敵侵攻部隊を確認。
今後の行動は必ず集団で取るように注意し、侵入者と遭遇してもすぐには撃退せず、可能な限り捕らえるように。なお、捕獲が不可能な状況ならば撃退も止むなし。
以上、各員注意されたし』

その放送に狼と狐は真っ先に疑問を浮かべた。

「何だこの放送？」
「敵の士気に貢献でもするつもりか？」

次いで、リデアが先の二人に同意を示した。

「うむ。わざわざ侵入されたことを全域放送で響かせるなど、外周の艦隊や上陸しようとする者達にも聞かれるではないか」

「いや、逆に敵を調子付かせようとしているのかもしれんぞ？」

放送に異論の3人に反論したのはシーズン。
あえて敵を内部に誘い込み、そこで討とうという作戦なのかもしれないと説く。

「海上戦から陸上戦へ持ち込むメリットは何だ？」
「四凶軍には高速揚陸艇や密輸艇はあるが、陸地を高速で移動する手段がない」
「金髪ジジイの言う通りじゃねぇか？　私なら得意の市街地戦に持ち込むが」
「カンナだっけ、君のやり方は素手か？　それとも機銃掃射か？」
「確かに侵路は限定できますが……」
「ケイノス君。進路を限定しても重要な内部への連絡口を敵にみすみす渡して、果たして良いものかな？」
全員が残った飲食物全てを一斉に処理する。
「或いは敵にそれを自覚させることが作戦という可能性も――」
「それはないぜアサ。
向こうは大軍、少しでも士気が高まってんなら、勢いがあるうちに多少の犠牲は覚悟して突撃する。それが戦のセオリーだ」
４体の鬼が立ち上がって金棒を手に取る。
トウコツも遅れんと意気込み、日本刀と散弾銃をそれぞれ腰と背中に装備する。
「すいません、協会内部には何か仕掛けとか、迎撃装置はありますか？」
「聞いたことがないな」

「うむ。何かあるとは聞いたことがない」

非武装派魔法使い三人も席を離れながら放送の意図を探る。

「単純に侵入者を見失ったから、とか？」

シンドバッドも最後のピザ一切れを飲み込んでから戦線へ戻る用意を始める。腰の両脇に収めたカトラスに手を伸ばし、樹皮を巻いた柄の感触を確かめる。

「敵が見つからないという説もあるだろう。しかし、発覚した敵の正体が四凶軍ではないという可能性もある」

二挺の対物拳銃を脇に確認し、コーヒーカップを片手に芹真も腰を上げる。

狐もそれに続く。

「反骨の士が居たな、そう言えば……」

全員が新たに浮上したその可能性を聞くために耳を傾けた。

埋服の毒という、戦争では欠かせない奇襲要素はこれまで何度も考えたが、明確に個人を指せるほど情報を有している者がこの中に殆ど居なかったし、誰も聞かなかった。

「芹真、お前が行けば下手な刺激になりかねん。俺が会って、奴の動向を確かめる」

「奴って誰だ？」

「その人は協会のＳＲですか？」

「吸血鬼神――現代のドラキュラと呼ばれる男だ」

狐の、瀬賀の賢明で懸命な判断に芹真は頷くしかなかった。

裏切る可能性の高い人物には早い所消え去ってもらいたいが、或いは協会に忠を誓って四凶を討つやも知れない。とにかく先の読めない人物故に、ただ煽るばかりの芹真には、状況からしても荷の重い役である。やはり適任は瀬賀、狐の仕事としてもうらことだ。

「それでは、私たち３人は西部海岸の援護に向かう」

魔法使い３人がグループから一歩、離れて時刻を確認する。

支給された夏用の戦闘服に着替えた魔法使いが休憩室を後にすると同時、

「じゃあ、俺はジャンヌの姐さんにこの資料を届ける」

トウコツが走り去り、一緒に休憩室から走って逃げだそうとした

アサを、カンナが殴り止める。

「おぅ、アサ。私らで南部海岸の手伝いすっぞ」
「一緒に来てください、アサ兄様」
「私からもお願いします」

「う……ぅん。そうしようか」

丁寧な言葉遣いとは真逆に、鬼の妹達はすぐにでもアサを袋叩きに出来る体勢をとっていた。
何故姉妹から逃げ出そうとしたのか、芹真は一瞬考えたが深く詮索しないよう早々に頭を切り替えた。気付けば崎島の姿がないことに若干戸惑ったが、彼女が特殊工作員であることを思い出して、多忙な身であることを察した。
そんな芹真の肩を叩き、瀬賀は通信機内臓のイヤホンを手渡した。

「俺に何かあったら後はヨロシクな、銀狼よ」
「それはこっちの台詞だ」

メンバーの最後に狼と狐が肩を並べて休憩室を後にする。

芹真は北部へ。
瀬賀は、吸血鬼の巣窟であると聞いた東部第二情報室へ急いだ。

第５４話－Ｈａｌｆ　Ｔｉｍｅ　ｔｏ　Ｈｅｌｌ－（後書き）

誰もが必死で戦っている。
それを理解しているつもりでも、それを認めてくれる人が果たしているのだろうか。

「いや、認めてもらうことよりもまずは果たすことだな、うん」

夢の中で自分に言い聞かせながら色世トキは頷く。

確かに戦場にいて、四凶を探しているはずだった。
それなのに森の中にいる自身に、これが夢だという感覚を導き喚起させる。

どうしてか、森の中。

違和感はあっても、見渡す限りの木々とそれらが作り出す暗闇の深さがどこか真実を隠蔽しているようだった。

何かがおかしい。
何か、何が、何処かが。
足元の硬さに金属を思い浮かべ、触れた木からは確かな時間の流れを感じる。

「僕は認めよう。但し、君がコントンに辿り着くという点を除いて」

「じゃあ、納得させて見ます」

これが夢の中だという自覚はあった。
断片のように現れた景色の中、自分と同じ顔をした誰かが金棒を振る。

強まる違和感。
薄れる景色。

光る森の中で舞闘を繰り広げる2人を雨が冷ます。

（何だこれ？）

止まらない剣舞、敵対する彼の言葉。
何を言っているのか理解できない。
それなのに、どうしてかその言葉の一つ一つが聞き捨てならない。
聞き逃してはいけない気がした。

（何だこの夢は？）

白闇が足元から這い上がり、森林ごと2人を飲み込む。

それが夢の終わりだった。

光る森での戦う夢は、トキに様々な疑問を抱かせ覚醒に導いた。

「……」

酷い目覚めだった。

潮風に冷えた体が軋む。潤滑油の枯渇した機械のように動いてくれない。

あくびを手で覆い隠しながら立ち上がり、背筋を伸ばして周囲を見回す。

アキが居ない。

「あれ？」

レーダー搭の足場をぐるりと一周してみても、やはりアキの姿は見るからない。

代わりにトキは、自分の足元から火の手があがってることに気付き、戦況が大きく動いたことを知った。

手摺りから身を乗り出して下を覗き込むと、東部の居住エリアから無数の煙が上がり、南西の海岸では奇妙な生物が戦線で大暴れしていた。

「いや、状況進みすぎだろ……！」

特に南西海岸の、１０メートルはあろう巨大生物。

寝ている間に何が起こったのか。

理解の追いつかないトキは兎に角、情報を求めてテレポーターか階段がないかと探し回った。

（戦争って、本当に何でもアリなのかよ!?）

第５５話ー暴食、飢餓、全身過食！　ｖｓトウテツ！ー（前書き）

１０日か１１日に投稿すると宣言しておきながら　この遅滞――
ちょっと正座してきます。遅れて申し訳有りませんでした。

奨学金の返還誓約書さえなければ……ちくしょう（；ω；）

言い訳をしても見苦しいので、

口下手だし、

上手に伝えるなんてことも出来ない、

でもやらなければイケないことが溢れている事実から目を逸らせば、

また同じ事を繰り返す。

――悔しいで――

きっと、そう漏らすだろう。

何が、ということではなく、

何かで必ず悔しい思いをするだろうという予想が頭の片隅から離れないから。

一つの事さえ満足に出来ず、

そんな無能に二つを捌くことなど到底出来ず、

上手く事が進んでもそれは偶然。

実力ではない。

それなのに、馴染みの友人は運も実力の内と言う。

それが本当なら、運を掴み取れる人種の実力は大国の首相やプロのアスリートらと同格の努力家であり、実力者なのだろ言えないだろうか。

理解は求めない。

全てを理解できる人間は居ない。

それらを理解しようとしたものならば、人間は無限にも等しい情報の前に己が情報の全てを正常なまま保つことはできないだろう。

ならばと、飛びに飛ぶ話の中で一つだけ結論を最もらしく綴って締めるとするのならば――

人が全ての情報を眺めるには虚無、それから忘却を備えていなければならないということだ。

……

……

……あれは確か、男だった。

戦線の状況を逐一頭で計算しながら次々と采配を振るう協会司令官：ジャンヌの頭の片隅でそんな文句が蘇生していた。

一体どれだけ昔のことか思い出せないが、解離性障害を煩ったSRが怯えながらにして協会を脅迫した事件があった。

破綻に破綻した持論を撒き散らす中、その男は狙撃によって破壊され、ジャンヌはその事件の途中から後始末に渡って立ち会っていた。

頭部を破壊された名も知らぬ男の残骸を処理する最中、突如現場を視察しに来た会長は嘆息の言葉を残していった。

「貴重な痛みが費えたか……ジャンヌ、今後彼と同じような痛みを持った人間がいたら俺にも知らせてくれ」

正直、長年補佐を務めてきたジャンヌにも会長の指す“同じ痛みを持った者”の定義が理解できなかった。

痛みを持つ？

それはどんな痛み？

如何なる傷を抱いている者を指すのか分からない。

「痛み？」

激務の最中に幾度か頭を働かせて見たものの、ついにジャンヌは

答えを見つけることなく、いつしか会長のその忠告を忘れ去ってしまったのだ。

第５５話－暴食、飢餓、全身過食！　ｖｓトウテツ！－

－１５分前－

トキが眠りについてすぐ、ボルト・Ａ・パルダンとの連携を誓ったアキはレーダー塔からの降下を始めていた。

「危険だけど大丈夫？」

魔女の光を借りた自由飛行だが、初めて体験する行動に若干ながらもアキは恐怖を感じていた。

トキは戦いの最中に飛んで見せたが、その行為がこれほど不安を付き纏うものとは思ってもみず、重力に反するという不安に注意力が散漫となる。

「ねぇ、大丈夫？」

アキの異変に気付いてはいるが、敢えて同じ一言だけを連呼する魔女の口端が吊り上がった。

地面から目を離さないほどに緊迫するアキは矛盾に満ちていた。

協会長から聞いた話の中で彼女はトキと共に空中落下を既に経験している。ファーストコンタクトの直後だと。

いま、一体何が彼女の中で恐怖を創造しているのか、心を覗いて

も明確な答えは見つからない。
だが、逆に何も答えを持ち合わせないという事実が“答え”なのかもしれないともボルトは思った。

（驚くほど人としての経験が欠如している。
その所為でボキャブラリーも少ないし、言動の人称や語尾、興味の対象もろくに選定・判断できない。1を理解して9だけを理解していないほど不安定で不完全。
中でも特に良くないのが、自分のSRに対する理解度。使い方も中途半端、相性の善し悪しもわかっていない……）

魔女に観察の目を向けられていることに気付くこともできず、アキは下ばかり見ていた。

地面に向かって急降下しているわけではない。
レーダー塔の壁面に沿って螺旋を描くように、自由落下のそれよりも緩やかに高度を下げている。
これは魔女の力、地面に激突することはない——そう自分に言い聞かせながらも震えは止まらない。
何か予期していなかったことが起こっていて、その原因は自分にもあるということが理解の追いく限界であった。

「大丈夫～？」

三度目の問いに辛うじて頷きが返ってくる。
代わりに声を上げたのは大爆発と人屑、及び気まぐれな血の雨だ

った。
　爆心地を炎すら飲み込んだトウテツが駆け、立ちはだかった防衛部隊を苦もなく食い散らかす。後に続くインスタントＳＲ達も勢いに乗って防衛海岸とＳＲ部隊を突破し、次々と湾口エリアに傾れ込んだ。
　四凶軍の南西から突入した部隊が海上戦から市街地戦に切り替える。

（これ以上勢い付かれたら煩いな～）

「何を、すればいい？」

　視線を戻すと、不安で満たされかけていたアキに余裕が戻っていた。
　地面から目を離し、横へ配る視線からは自らの役割を問う意志と、目的のためにどんなことでも成して遂げようとする曲がらぬ闘志が宿っており、それはボルトにとって何よりも有り難い“駒”であることを証明した。
　唯一の誤算と言えるのは、アキがそう言った目論見に対して鋭い嗅覚を持っていたということである。下手に邪な考えを抱けばすぐにでも嗅ぎつけられるであろう。

「まずはトウテツの前に立つの。全てはそれから」

「すべて？」

「任せて。アレの止める方法はあるから」

目前に迫った地面に光を集めて絶対安全の着地点を作る。
協会本部、地表入口前へと降り立った二人は、互いの体に重力が戻ったことを触れ合うことで確かめ、それから視線を戦場のトウテツへと向け直した。

「会うだけでいいのか？」
「詳しいことはもう少ししてから教える」

歩み始めるボルトと頷くアキ。

そんな二人の背中には、戦場を一望しようとレーダー塔の根元付近まで登って来た鬼の――但し藍を除いた――兄妹が言葉を失い佇んでいた。
潮風に金髪を揺らめかせて光を放つ魔女：ボルトと並ぶのは、虚無と圧倒的な冷たさを凝縮したような少女。
顔を見合わせ、目の前の女性がボルトであることを認める。そして、ここが戦場である事を再認識し、戦争のために普段なら有り得ないＳＲ同士のマッチングが想像以上に発生しているのだ。鬼の兄弟にとって目の前の二人がそれだった。

「何だぁ？」
「ボルト……？」

同時に、初対面同士だろうが力を合わせなければ勝てない程、そ

れこそSRだろうが即死しかねないレベルの戦をしていることに気付かされる。

（ペアか？
ならば、ボルト・パルダンが慎重になる理由とは……まさか、四凶か？）

怪訝を露わにする鬼達の行動をボルトは予見しており、ここを着地地点として選んだのも理由それに準拠する。
魔女にとって、これから実行する作戦に於いて、アキの次に不可欠な人因がこの哭き鬼四兄妹であった。

「さぁて、大切な“力と技”が揃ったね。
この6人でトウテツを討つよ」

『え？』

「いいよ」
「……」

ボルトが沈黙を守ったかのように思えたアサに目を向けると、現実には唖然として硬直している鬼を見つけた。

（やはりか）

「トウテツって、四凶のか？」
「作戦は？」

敵を確認するカンナに背を向け、アキは戸惑う素振りすら窺わせずに作戦というものを肯定する。
燃え上がる戦場へ光の指し棒を向け、明確な敵がその先に舞っていることを示した。
四凶トウテツ。
それだけでカンナは同じ質問を繰り返さなくなる。

（これだけの面子で討てるのか？）

鬼の長兄とボルトの中には共通の予備知識があるものの、他の四人にトウテツに関する詳しい情報はない。
アサの懸念はまた、ベクトルこそ違えどボルトと同じ個所に向いていた。
敵の攻撃を知らない者を抱えての戦闘で犠牲や損失を避けることは至極難しいことである。だが、それを理解したところでアサに妹達を見捨てるつもりはないのだ。言ってしまえば、予備知識の無い彼女らを抱えて戦うことは非常にリスキーなのだ。

「討てるよ。手順を間違わなければ」

このメンバーの脆さを理解しているのは唯一、ボルト。
しかし、それ以上の相性を秘めているメンバーが、自身を抜いた

この5人であった。力も、技も、それらに眷属――或いは源泉となる理も、驚嘆に値するほど揃ってしまうのだ。

「本当か？」

南西方面中心部に集まったメンバーの誰もが抱く疑問に、魔女は頷いてから素っ気なく答える。

現代の四凶の中で最も討伐に手間を要するのがトウテツである。あらゆる攻撃を無効化する全身過食は、万物を飲み込む力で外からの攻撃を防ぎ、侵入など儘ならない。内部からの破壊まで不可能にするSRはまさに“攻防一体”と言える。

トウテツのSRは、ボルトの光撃すら飲み込む可能性を秘めているのだ。

「私が終わりをやるから、それまでを貴方達にお願いしたいの」

「僕ら4人と彼女で？」

長兄の目が横へと流れる。

出撃の出鼻を挫かれた姉妹らと並ぶアキ。

その雰囲気に重厚な危機を感じ取ったアサは、魔女に言葉で従いつつも集まったメンバーに怪訝を隠しきれなかった。

「しかし、四凶のトウテツは――」

「大丈夫。
最初は貴方達の役割じゃない。彼女がやるの」

「……具体的にお願いしたい。私たちは何をすればいい？」

アサ、藍と続く質問に一度ボルトの口が塞がり、視線は光を受け始めている戦場へと流れる。

潮風と朝日の混じり合う海上に降り注ぐ飛沫雨。
幾つも上がる大きな爆炎と水柱が人や物を飲む。
衝撃波は不可視の壁となって島全体に振動を呼び起こす。
塵の如き飛び散る肉片に、深海へ藻屑と消えゆく金属。
紅に染まった港湾の波間に、トウテツは身を投げ出す。

助けを求めた声は途絶え、海中に逃れていた者々が逝く。
赤く彩られた水面にトウテツが顔を覗かせ、岸壁を食い荒らして登り、再び湾岸部からの侵攻に戻る。

そんな光景を目の当たりにした5人は一斉に走り出し、その最後尾にアキは付いて行った。

「最初にアキちゃんにコンタクトを取ってもらうわ。
いい？　アキちゃんは何を話してもいいよ」

走りながら魔女は説明するため、ボルトは全員に僅かな光を配っ

た。
耳周りから雑音を除去できる光振フィルター。
クリアに聞こえる魔女の声に驚いたのはスミレのみ。
その間、頷くアキヘアサに続き、カンナの冷たい視線が刺さっていた。

「もし、会話の途中でトウテツが攻撃を仕掛けてきたら、今度は貴方達4人の番よ」

ボルト・A・パルダンには自信があった。織夜秋という未知ならトウテツを釘付けに出来、上手くいけば通じ合えるかもしれないという自信が。

「トウテツにはなるべく同時攻撃を仕掛けること。1人が中心線を攻めるなら、もう1人は必ず末端を攻撃しなきゃ、あっさり食べられちゃうから。
それから、直接触れることも出来るだけやめた方がいいよ」

その説明に納得できず、真っ先に不利を感じたのが長女のカンナ。

「直接がダメって……あんたはトウテツを知っているのか？」

「うん。5分分だけ」

「あぁ？

ごふんぶん――って、どういう事だ？」

「現代のトウテツがどんなのか“あんまり”知らないけど、私が知っている中では間違いなく最強と言えるトウテツだよ。簡単な原理は理解しているつもり。

あ～、話が前後しちゃったけど、私まだ寝起きなんだ。それで、長い間寝ていたから今の四凶がどんなものかよく分かっていなかったの。けどまぁ、５分くらい前から観測始めたから、トウテツなら少しは理解できたよ～」

スロ～ペィスに、聞き手の頬を引き攣らせるほど暢気に魔女はハクジョウする。現実に白状という分には語弊を否めないが、それでも薄情という意味では戦線へ赴く４姉妹らには絶大な不安を抱かせるだけの連続的意味はあった。

「本当はこっちの意図を気付かれないように、距離を問わずに連携で攻め続けて欲しいんだけど、相手が相手だし、無理は禁物――」

「無理はしてやる。

問題はアンタだよ、魔女さん。

あたしらが四凶の足止めてる間あんたはどうすんだ？」

「チャージ」

彼女の作戦は実に単純だった。

まずは、織夜秋という少女がトウテツと接触する。

邂逅を果たした２人が会話している最中、周辺の戦場に４兄妹が

紛れ込む。
トウテツの攻撃でアキが危機に陥っていると見られたのら、間髪入れずに4兄妹がトウテツの意を引くように攻撃を仕掛ける。
それから――

「何をチャージすんだ？　PA○MOか、WA○Nか？」
「カンナ姉様、それ以上財布の無様は晒さない方が良いかと……」

説明を求めるカンナの横で、藍はボルトが繰り出そうとしている術を予測し、鳥肌を覚えながらも姉を納得させるために一本の金棒をボルトに手渡した。
一本の金棒を、ボルトは直に受け取らずに光を纏わせて宙に浮かべる。そして、有無を言わずに長女の眼前に対象物を持っていった。

「これだよ」

ボルトの言い訳は姉鬼を納得させた。
何の前振りもなく金棒が消えて無くなる様を見ながら、アサも魔女の力に納得しつつ、残る疑問を自力で解決しようと知能の限りを尽くして四凶討伐のプランを検討。その結果導き出たモノはイエスのみ。
不安と危険は大きいが、それ以上に計り知れない損害を敵軍に与えることができる。

（信頼と連携……課題はこの二つ。

織夜秋という彼女がどれほどの力の持ち主か、それが分かるだけでも大分作業が楽になるのに、魔女は僕らに時間を与えないだろう）

未解決の問題としてまず、ボルトの攻撃がどれ程のものなのかという点がある。

先に目の前で見せた光撃も果たしてトウテツに効くのだろうか。

金棒を消すことができても、同等か或いはそれ以上の消滅力を持った四凶に果たして効果は見られるのか。

（光撃が無力だとすれば、必然足止めの僕らは敗北の憂き目に遭うことだって……）

商店街を駆け抜けて向かう先は港エリア。

そこで健闘している守備隊も長くは続かない編成であった。インスタントＳＲには対応できてもトウテツを止めながら他のＳＲも相手にするなど、骨が折れるというレベルの問題ではない。そもそも物理的に止めることが叶わないのだ。

だからボルトは役割を分担する。

守備隊はインスタントＳＲを、トウテツをアキが止め、それらを鬼兄妹が臨機応変に支援し、終止符をボルトが打つ。

（あの少女、アキとか言ったが――どんなＳＲを持っていればあれ程信頼を寄せられるのだ？）

正面から吹き付ける風は強風。
まるで四凶軍の勢いを運ぶかのように吹くソレに悪寒を覚える。
ボルトが４兄妹をカンナとスミレ、アイと自身という二手に分かれた理由を理解し、先行し始めたアキの顔を思い出して冷や汗を浮かべた。
――アレと上手く共闘できる気がしない。
そんな不安をアサとアイは同時に抱き、どうしても懸念を拭えずにいた。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第５５話－

－暴食、飢餓、全身過食！　ｖｓトウテツ！－

魔女は告げた。
何を話してもいいと。

（でも、何を言えばいい？）

アキはとにかく困っていた。
これから敵と向かって何かを話さなければいけないのだが、一体どんな言葉を掛ければいいものか思い浮かばない。

――どう話しかければ相手は足を止めてくれる？

敵前に向かう前に聞けば良かったと後悔しても後の祭り。
進むと決めた足は後退を知らない。止まって鬼を待つことも出来るが、果たしてそこから答えを得ることが出来るのだろうか。

――信用していいのか？

アーチをくぐって商店街から離れる。
そこから単独で港に向かい、トウテツとあわなければイケない。
主要道路を横切り、新たに黒煙を吹く港湾のオレンジ色が視界に飛び込む。
絶えない銃声と爆音、それから悲鳴の波。
相変わらず絶えない血の香りが混じる潮風に、肉の焦げる強烈な匂いが混じり始める。
ふと頭に浮かぶ感覚は“ジゴク”それから“ゼツボウ”であるが、

それを感じた瞬間からアキの進行速度は上がっていた。
トキになるため、ためらわずに進まなければいけない。
脳裏をかすめるトキの寝顔、入れ替わるように現れる写像は先ほど顔を合わせたばかりの他人。
その中に居た男――トキに似た誰か。
しかし、中身が全く違う誰か。
名をアサと言った人。

再び爆音が鼓膜を蹴る。
防衛拠点になっていた係留コンテナ船の内と外から火の手が上がった。
連続した爆発が物語る戦闘の熾烈さを前に、アキの頭から邪念が薄れるように消え始める。

（目標はトキ、1人だけ）

そっくりな誰かが居ようと、中身を覗き間違える心配はない。故に写し身のような他者が居たとしても、それは別段不安を覚える程、真贋を問う程に酷く類似した存在とは思わないし見えない。
自分に言い聞かせるようにアキはトキと、トキに似た別人の顔を思い描いて比較し、違いを見つけては平静を取り戻す。

（敵も1人……）

眼前の火炎が潮風に煽られて踊る。
銃火、閃光、轟音――破壊の意が飛び交うその中心に四凶が居る。
真っ直ぐ港へと続く緩やかな斜面を駆け下りながら、熱に揺れる船上へと意識を集中する。

（見えた！）

アキは気の利いた言葉やその回しを知らず、そもそも社交的な接し方というものを学んでいない。
その特殊なステータスがある意味彼女の強み。
だからこそ、先見の眼を持つ魔女でさえアキの一言目は予想することが出来なかった。

“無言”である。

織夜秋の繰り出すファーストコンタクトは、言葉という文明には遠く及ばないものであり、しかし人間的なものかと問えば遠からずとは決して言えない。
放ったのは黒球。
大きさは成人男性一人を易々と丸飲みしてしまうほど――消滅範囲（拡散）：大、消滅速度：早――の濃色消滅大黒球。それも単発ではなく散弾のように複数個、船の上で展開される乱戦舞台に放ったのである。

距離にして１．１ｋｍ――それだけ離れた舞台で暴れるトウテツだが、熱で揺れる戦場の最中に有りながら異常に冷たいモノを背筋に感じた。

“見られてる？　やられる？”

既に、瞬間的に湧いてきた疑問を解く前に――生と食を求めることを細胞単位にまで染み込ませた四凶の身体は跳躍を選択。跳んでいた。

頭上のガントリークレーンのアームに手を伸ばしてぶら下がり、視線を視線を感じた足下に移す。

弾薬を積んでいたコンテナが爆ぜて、壊滅した守備隊の亡骸を宙に投げるその一瞬、空中に退避したトウテツはこの戦場に来て初めて我が目を疑った。

危機を察知して飛ぶ所までは別段今日初めての選択ではない。しかし、飛来して襲ってくるモノを銃弾か榴弾、或いはミサイルの類と僅かな時間の中で予測していたのだが、現実に来襲したものはそういった金属の類とは全く別のモノ。

「何だあの黒いの……？」

得体の知れない黒球は、皮蛋（ピータン）よりも黒くて丸い。

だが、本当に目を疑ったのは黒球が触れた場所が跡形もなく消失してから。

ガントリークレーンのアームにぶら下がりながら、足元のコンテナ船を見守るトウテツ。その四凶の視界に、黒球の触れた個所だけが消滅するという事態が輪郭と色彩を持って飛び込んだのだ。見たこともない力、ＳＲ。眼下に敷き詰められていたコンテナは協会が防衛目的に強度を高めて詰めた装甲コンテナである。徹甲弾クラスになれば防御など叶わないものの、歩兵やＬＡＢ（軽攻撃艇）が積載する突撃銃や機銃程度の弾丸は容易く弾き返す強度を誇る。

（それなのに、コンテナを簡単に食い千切りやがった……！）

問題は、それを散弾銃でも扱うかのような感覚でやってのけたＳＲが居るということだった。

ガントリークレーンから手を離して重力に身を任せる。

落下の中で先鋭化する視覚を最大限に活かし、飛び込む景色に集中して敵を探す。

“黒球を魅せてくれたのは誰だ？”

四凶の意を集めたことを知る術のないアキは、黒球を見せて直ぐに第二撃の準備を整えた。

“黒がもたらす感触の中に狙った男のモノが混じっていない”

まるで予知でもしたかのように、余裕を持って飛び逃れたであろうトウテツに驚き、ならば今度はと更に小さな黒球、更に多くの消滅力を用意し、腕を前へ掲げて横へ――

「当たれ」

薙ぐ。

対象地点は約１ｋｍ先の港、コンテナ船とガントリークレーン周辺。

標的はＳＲ。

消滅を発現させる。

「小っさ!?」

無数に展開した黒球の幾つかが、落下中のトウテツを捉える。
雨のように空中のあらゆる場所に出現した黒球は、完全に回避するどころか数えることすら不可能なくらい多い。

“もしかすれば触ったらやばいかもしれないからなるべく触れないように攻略していこう”

これが2秒前の目論見であり、現実にそれを許されず回避不可能な状況に陥ったトウテツは耐えるという選択肢を初めて頭に思い浮かべた。
長らく感じることのなかった悪寒を催す攻撃がどれほどのものか。
最悪の場合即死だろう攻撃に挑む。
死んでもいい。
喰ってやる。
喰える分だけ喰ってみせる。
この意思がトウテツなりの抵抗であった。

空中に出現した黒球のうち、四凶の身体を捉えた球は４つ。
頭部の左こめかみを捉え、次に右腰、右太股の内側と続き、右足の踝（くるぶし）と連続して触れる。

「マ……」

その感触は一般に言う“死”に近づいてゆく感覚に間違いなかった。
黒球は徐々に近づく終焉への道のりを、触れたその一瞬で与える効果を持っている。まずトウテツが理解できた黒球の性能がそれ。

しかし、黒球に触れたトウテツの全身から冷や汗が引いた。
この黒球は死である。
触れたモノを終わりへ誘うのではなく、触れた瞬間から死を展開してしまう力。そうであると同時に、四凶になって唯一求めた理想の力が目の前にあった。

（マジかよ！）

この黒い球は死を展開することにより触れたものを消滅に至らしめる。
だが、それだけじゃない。
本当に肝心な黒球の性能はその先にあった。

これは殺すばかりの力ではないのだ。
だからこそ、トウテツは二度と訪れないと思っていた他人への興味を示したのである。
間違いない刺激。
マンネリとした、それでもやめきれずに続けてきた生の中に吹き込まれた新たらしい風。
緊張は緩み、口端は吊り上がり、湧きかけていた必殺の意は完全に感情の深淵へと退く。

（まさかコイツも食えるのか！？）

驚愕と歓喜を同時に覚え、次いで僅かな悲しみと多大な羨望に身を震わせながらも、黒球との接触によって強く弾かれて崩れた体勢の修正に努める。

球体に触れた部位に走る電撃は脅威と言える威力はないものの、反発力だけはショットガンのスラグを全て至近距離で受けた時の衝撃に近かった。

弾かれて頭を中心に回転し、上下左右の感覚が狂う。

回転する景色の中で次の散弾が姿を見せ付けていた。

（これだけの遠距離でよく届く！）

再び黒球が触れてトウテツの身体を無作為に弾き回す。

錐揉みしながら落下する最中、体内を駆け巡る悲鳴がトウテツに黒球の細かな威力を伝えた。

黒球に重力が手助けし、人としての体型を崩しにかかり、悲鳴が増大する。

回転が催す錯覚が着地の成功率を低め、連続する衝撃に関節が軋み、体中がこの状態での着地行為に疑問を抱いている。

しかし、嘔吐感を催すほど神経を刺激する回転景色だが、トウテツの表情が崩れない。

突破してきた防衛海岸も、身体の部位を削られて息絶えるインスタントＳＲ達も、協会本部も味方艦隊も、景色が思考の中に入り込

む余地など既にない。
吐き気はある、怒りも内で再沸の音を立てている。
だが、それ以上に嬉しい現実と出逢ってしまった。

「まだまだ食い方が汚ぇ！下手糞だ！」

この瞬間、横手から差す朝日よりも強く、トウテツはアキに対して眩さを錯覚させる存在感を示した。
それは挑発と同時に生存を伝える、アキの挨拶同様に言葉という文明を介さぬ原始的な、攻撃による接触・返答である。

アキにとって、その一喝は完全に予想の外だった。
これまでに放ったことのない数の黒球に晒されながら、全くの無傷である四凶に脅威を感じずにはいられず、またその存命が信じられない。
間違いなく黒球はトウテツの身体に触れていた。周辺に散りばめた消滅力は確かに物質を消し去っているし、ＳＲだって消せている。

「あれが四凶……」

トウテツへ、アキへ。

二人の視線が交差。
着地したトウテツが先に斜面を進む。

表面を飾る灰色レンガ道の上で二種の消滅が向き合った瞬間であ

った。
対する敵が正面から迫ることを知り、アキは距離の修正を行い再度黒球を繰り出す。
腕を横に払う少女を遠目に見つけたトウテは、減速することなく一直線にアキへと向かう。
全身に纏った食欲が牙を覗かせる感覚、混じり合う空気。
大きな球体が左右に建並ぶ倉庫の壁面を巻き込みながら、壁のごとく横一列に並ぶことによってトウテツの進路を阻んだ。

「効かねぇよ！」

全裸に近いトウテツの全身から水飛沫が跳ねる。
直後、黒球に突撃したはずの四凶は消滅に遭うどころか、弾かれることすらなく黒球のバリケードを突破した。

「……」
「来やがれ！」

再び弾道無き消滅の散弾。
だが、これもトウテツは問題なく走るだけで抜ける。
散弾は広範囲だが一つ一つの破壊力は弾の大きさと色の濃さに比例する。取り柄と言えば相手の意表を容易に突ける発生速度とまともに食らった時の殺傷力のみで、持続力の悪さはある意味銃弾以上。
だが、早くも攻略法を見つけたトウテツにそれが効かないことは、

アキも理解していた。
そこで試してみたのだ。
ばら撒いた散弾黒球の中に、中ほど大きい消滅球を織り交ぜてトウテツの前方左右にそれぞれ配置し、

（建物の壁――！）

球により建物の基礎となる根元部を多く削がれ、壁面が両側よりトウテツに向けて倒れる。
壁を繰り抜き、時間差を用いて倒れる方向を操作し、二枚の壁が四凶の眼前に倒れかかった。しかし、全身で万物を食せるトウテツにとって、この壁面２枚も障害として成りうる物ではない。
巻き上がる粉塵が物語る倉庫の長き仕様歴は、同時にトウテツに腕力での破壊突破も可能である事実を告げる。単純な腕力だけでも突破は可能。
視界を粉塵が遮る直前に見た標的までの距離は約７００ｍ。
粉塵の中に突入し、そこに潜む散弾黒球を全身過食で通過する。
速度は緩めない。寧ろここで一気に加速――

「じゃあ、こっちは？」

黒い散弾を抜けた直後だった。
前方だけに視線と意識を集中していたトウテツの前方、斜め上から声が掛かったのは。

「はぁ！？」

アキは、トウテツに黒球が効かないことを理解した。
しかし、目的は排除であっても自身に課せられた任はトウテツとの会話であり、必ずしもこの瞬間に射止める必要などなかった。
ボルトのチャージが終わるまでトウテツに付き合えばいい。
殺す必要はない。
必要はない。
……だが、現実には殺せそうにない。
肌で感じ、頭に喚起されるその未来予想が無性に腹立たしく、その結果、たった今アキは思い付きだけでの攻撃で足掻くことを試みた。
トキが自分の前で思い付きで飛んで見せた時のように。

“彼がトキなら私にも出来るはず”

完全な思い付きであり、実戦でのぶっつけ本番。
粉塵で四凶の目を眩ませた直後に急接近。
顔面を打ち抜くつもりで拳を放つ。

全身過食の頬にアキの黒色消滅を纏った拳が突き刺さる。
久しく味わう他者からの電撃にも似た感覚を伴う痛み。
その感触は、少女のＳＲは思い描いた通りに凶悪なものであった。
間違いなく食べていることを自ら証明していた。

拳打は外したものの確かな感触――自分のＳＲが四凶にも通用する――という事実が手に残った。
証明される接触の可否。

「お前も相当な四凶を持っているな！」

空中からの奇襲を躱したトウテツの腕が、背後へと着地したアキに伸びる。
捕縛のために迫った腕を裏拳で打ち弾くアキ。
すかさず繰り出される四凶のもう片手。
トウテツの腕が経過した空間から、風に流される粉塵が除去されているところを見て、四凶のＳＲを展開していることを知る。

消滅　対　消滅。
これはそういう戦いであった。

裏拳を放った時に生じた回転を殺さず、もう一回転進みながら左手を出す。
トウテツの拳をアキの掌が止める。
上体を引き寄せ、近づけ、頭部を繰り出す。
頭突きをヘッドパッドで返す。
どちらも繰り出したのは頭、反発力が生む強い衝撃で視界が揺れた。
額か頭かの僅かな違いでも、脳へのダメージはほぼ平等。
衝撃で仰け反る上半身を力だけで前へと傾ける。

次に繰り出される互いの右拳。
横払いの裏拳は同時に空を切った。

空振りの回転から立て直しすのはトウテツが僅かに早かった。
両足で回転を止めつつ、制動の反動を生かして踏み込む。
制止から一瞬、中心線の内側へ向いた回転を加えた左掌底を放つ。

鳩尾に食い込む掌底にアキの身体が浮く。
見た目以上の威力を有した掌底の衝撃に後足を強制され、整列から迫り出たレンガに踵を引っかけ、背中から転んだところで初めて減速、停止に到る。
トウテツも同様、ＳＲを纏わせて放った少女の拳と、全身に開いた自らの口が衝突した瞬間に生まれた反動で身体を後ろへと押されていた。

「おい、お前何？　何モノだ？」

後転してすぐに顔を上げるアキを、潮風の浚う塵が翳（かす）める。
しかめる顔を覗くトウテツが言葉を続けてきた。

「見たところ……いや、実際にお前の拳食らって実感したんだけどさ――お前も喰っているよな？」

「？」

戸惑いを見てとられたか、乱れた髪をかき上げ、トウテツが一歩前へ踏み出した。
黒球の次手を備えて手をかざすと、トウテツも同じように手をかざす。
が、先に掛けられたストップの一言。
それと同時に、苛立ちの原因たるトウテツを消去しようと考えていたアキの脳裏に魔女の言葉が蘇った。

発動しかけの黒球を、眼前のトウテツを避けて後方のコンテナ船上に発現させる。コンテナやガントリークレーンとその周辺を無数の金属を飲み込んで消し、あらゆる事象を中途切断する。落下を始める巨大な金属アームが戦場の一角に土煙と共に新たな混乱を与えた。

「俺は万物を喰う力、お前のは存在や概念まで喰っちまう力――と、まぁ俺たちの違いはこんな感じだが、根本は似ている。
その力をどうやって手に入れた？」

「……前からあった」

魔女は何を話してもいいと言った。
ならばこの程度の会話でもいいのだろうと、アキは包み隠さぬよう、また怖気づかぬよう四凶を正面から見据えて言う。
嘘は抜きだ。

ガントリークレーンの凄惨な落下に意を向けることもなく、二人は視線を固く結ぶ。

「あった？
最初から持っていたって言うのか？」

頷くとトウテツは頭を抱え、後頭部を後ろへと垂らすように上半身を反らした。
両手で頭を押さえてはいるが、いつでもこちらに襲いかかって来

れる実力を持っていることが先ほどの接触で測れたトウテツの強さである。
　それなのに攻撃が来ることはなく、トウテツは十分に間を置いてから両手を垂らして頭部も元の位置に戻し、アキの額から爪先までを見直した後に質問を再開した。

「お前はその力を何だと思っている？」
「私だけのモノ」

「うん。そりゃそうなんだけどね、具体的に“何のＳＲ”なのか考えたことがあるかって聞きたいんだよ、俺は」
「……」

　わかりません。
　それ以外の答えが浮かばないし、アキとしてはむしろ教えて欲しいくらいだった。

「考えたことナシ、か――じゃあ、俺なら“死配”のＳＲと呼ぶな。お前は俺の口を塞いだり、触れた人や物を一瞬で消して見せたり“死”そのものを飛ばしてみたりしてよ。
　近・遠距離を問わずに死を振りまいて配れるなんて、死神か悪魔そのものじゃねぇか」

「アクマ？」

「デビルだよ、デビル。
　しかも、お前はさっきその力で消し去ったモノらを自らの内に取り込み、パワーとして消費してみせた。

自覚あるか？　さっきの飛びかかり際に打った拳、それから裏拳に掌底。
下手すりゃ人間の肉体なんて一発損失ものの威力だったぞ」

もしも金属の板でも殴っていたものなら、確実に変形を遂げていただろう。
少なくともトウテツが受け止めた打撃は、最低でもそれだけの威力を有していた。

ならば、トウテツは何なのか。
普通なら死ぬであろう攻撃を受けて無傷な敵は何なのか、アキはトウテツのＳＲに疑問を抱かざるを得なかった。
相手の力が分からなければ勝ちはない。
分からないわけではないが、分かりたくない。そんな警告が何処からともなく告げられている気がした。

微かに頭を過ぎる疑問を解こうと、アキの身体が行動を始める。
小さい濃色黒球でトウテツの視界を防ぎ、更に膝の消去に球を１つ、上と左右への逃げ場を防ぐように３つ、背後の退路を遮断するために２つの黒球を設置する。
目眩ましから始まる奇襲。
狙いは上半身を反らせて小黒球を避けるトウテツの隙、そこを突く。
一気に跳躍して接敵、至近距離での黒球拳乗。
視界を遮る黒球を貫く直拳。

消滅の能力を纏った黒い拳がトウテツの――狙いは顔面、口元――迎撃に繰り出された右手の手刀で打ち落とされる。

「しかしだ、あんだけ食っておきながらお前はソレっぽっちしか消費しないのな。
ハラ壊すぞ？
つか、それじゃ“痛み続けるぞ”お前」
「な――――！？」

二重、三重とアキは衝撃を受けた。

当てられない。
消せない。
話していないのに知られている。

視界を塞いだはずなのに完全に拳打を防がれ、しかも触れた右手を消すことも出来てない。
直に触れてもトウテツに黒色消滅が通じないことは予測していたが、全くの効果無しとう事態は想定していなかった。

（目を防いでも止めてくる！
それにこの感触――――！）

叩き落された拳に起こった異変は、一般に言う倦怠の状態だった。
あまりにも突然すぎる機能低下。
訪れる意図せぬ脱力感。
それが意味することは“逆に存在を食われた”ということ。
だが、それ以上に深刻な現実として、会長だけに打ち明けた頭痛

を見抜かれたことが大きな衝撃であった。

「これが現実よ。
お前のその動揺は、図星から来るものだろ」

突き出る四凶の顔面への左ストレート。
トウテツは頭部を反らして避け、胴に出来た隙へ蹴り足を走らせる。
前蹴りを防ぎつつ飛び退き、黒を乗せた反撃の拳を繰り出す。
踏み込みに合わせて少女の鳩尾に肘が食い込む。

確実に動揺が見られるアキの首根っこにトウテツの手が伸びる。
触れれば後は食べるだけ。
そうすれば少女アキのＳＲが手に入る。

『華創実誕幻、三段――』

しかし、消滅が始まる一瞬前、トウテツは舌打ちして追撃を中止した。

「向日葵（ひまわり）！」
「蒲公英（たんぽぽ）」

苛立ちと、悔いの表情を向かい合わせた消滅持ち二人の距離が開

く。
やがて突風の如く横から流れ込む大量の火炎が、睨み合う二人の交差を遮った。
藍の炎と、アサの無限増幅による火炎放射が大通りを火の海に変える。
飛び退いたトウテツを火炎は追い、高温でその生命の削ぎを試みた。が、

（ダメ！？）
（やはりトウテツは無傷か！）

トウテツの目が右側倉庫の影に潜む二体の鬼を捉える。
足の裏が炎を飲む。
燃えた衣服の炭を味わい、炎を摘む。
鬼を睨みながら味わう火炎は形容しがたい不味さ。

不愉快極まりない。
邪魔者の排除への一歩を踏み出したトウテツへ、今度は別の鬼がトウテツに仕掛けた。
最初の二人との明確な違いは、新たに出現した三、四体目の鬼が肉弾戦を仕掛けてきたという点にある。

「まだ居るのかっ！？」

得手不得手を問わなければそれは奇襲だった。

が、行為に対して溢れる殺気は、何かの手違いかと敵味方問わず疑わせるほど濃密で、背後から攻めたにも関わらずトウテツに反応されたのはその殺気が仇となったからだ。
しかも個人の放つ殺気であり、闘気である。

しかし、その攻撃を苦もなく飲み込む予想しかしていなかったトウテツにとって、まともに触れ合うことの出来る相手というのは驚異であった。
脅威に成り損ねている分性質は良いが……

「こんなモンかよ！」

……性格は好戦的。
ある意味で性質が悪かった。
気に食わない、滅さなければ気が済まない、という意味で。
女鬼の拳が腹部に食い込む。
軽い衝撃を意中から反らし、反撃の目潰しを繰り出す。
が、横より振り降ろされた金棒に手の甲を打たれて反撃を阻まれる。
痛みはないが煩わしい。
金棒の現れた方へと蹴り足を放って牽制する。

トウテツの中に形ある殺意が芽生えたのは数年ぶりだった。
食せないことへの怒りは、周囲を荒野に変えるほどの力に変わる。
目の前にメインが在るのにサイドから出てきたメニューが酷い。
食べ難い上に味も期待できそうにない。

「カンナお姉様！」

金棒はカットイン、それからフェイクの二重行為。
相手を確認することもなく、この戦場の全て食せると驕り上がった四凶だが、それは間違いだった。
その蹴り足を片手で受け掴んだのは鬼の三女。

足を力一杯に捻り、つい折られまいと足首の回転に体を同調させるトウテツ。
中空。
高速だが、回転する最中に確かに見た。
両足を開き、重心を固定。左右の手は現状と未来に備えて配置され、バランスを取る為適度に身体を傾ける。
回避不可能な空中、しかも防御さえままならない状況下に置かれた四凶の顔面に、狙い澄ました長女の拳が――下段突き――放たれ、正確に中心線の死線を捉えた。
地面へ押しつけるような拳撃。
焦げたレンガの破片がトウテツの後頭部に圧迫され、地面という枠から飛び出す。

「テ……こんなモンなワケねぇだろ！」

直ぐに上体を起こすトウテツの顔面にもう一撃。
だが、今度は鬼の拳が押し続けることはない。

と、その矢先、金棒と拳を同時に叩き込まれて再び後頭部に割れたレンガの感触を味わう。

叩き押されたのは分かる。
敵は二度も押してきた。
ならば今度は引いて見せようと、後頭部で地面を食らい味わう。

「下がれカンナ、スミレ！」

鬼は四人居た。
その中の一人をトウテツは知っている。
哭き鬼の長兄、亡者となったと噂を聞くアサ。
そこから共に闘っているのが哭き鬼の姉妹だろうと予測も付いた。

下がれの一声に従っているあたりがいかにも信頼し合っている関係を思わせ、実際に引く鬼たちが本当に信頼し、互いを理解し合っていることを窺わせる。
普通これだけ押しているなら一気に勝負を決めるだろう。
ＳＲ界隈でもよく見られる攻防だが、はっきり言えば四凶の餌でしかない戦法。
アサはそれを知っており、堅実にそれを回避しようと声を挙げた。
寄せ集めのチームならおそらくアサの実力を知っている者は少ないだろう、素直に従えるとは思えない。更にアサという鬼は率先して集団の頂点を務める人間ではないことも有名であり――でなければ哭き鬼と銀狼間の戦闘はなかった――そんなアサに従う数少ないＳＲと言えば、彼の姉妹を除いて他に思い浮かばない。

「どうだカンナ？」

炎が消え、視界が晴れると哭き鬼と肩を並べるアキを見つけた。
攻撃を始める仕草こそ見せずにいるが、明らかに殺意を抱いていることが分かる。
立ち上がりながら地面を摘み食い、全裸の自分を見下ろして溜息を一つ。

「思った以上にヤベェな。一応幽霊にも触れられるような術使ってんだけど……」

四凶、トウテツが立ち上がる様子を警戒しながら、トウテツを直に殴ったカンナは素直に脅威を認めていた。

「皮膚がちょこっと、消されちまったぜ」
「アサお兄様、私の金棒も術の効果を失ってしまいました。一発です」
「炎もまるで効果がなかったわ」

続くスミレ、それから藍も四凶のトウテツという男が持つＳＲの危険性を十分に理解した。

「触れた都度術を掛け直せ。押し切られれば死ぬぞ」
『はい』「ＯＫ」
「……死ぬ……」

得物を構える鬼に挟まれ、アキの視線はトウテツを通過し、背後の朝日へと向く。
眩むことなく直視した太陽に悪寒を覚え、同時に四凶の熱すぎる視線が織夜秋という人間の理性に触れた。
触れるだけで死に到らしめる敵の男に、力に身体が反応する。
死は目の前に在り、この身を欲して止まない。
あれはシキヨトキへの明確な障害。
殺せ、さもなくば死ね。
「私が奴を殺す」
瞬間、アキは鬼の狭間を飛び出した。
四兄妹の目が追いつく時にはトウテツへ殴りかかっていた。
『な――――!?』
『無茶な!』
おそらく殺せないだろう。
ひとりでは。
頭の片隅でそれを理解したアキは先制を仕掛けたのだ。
物質から奪った大量のエネルギーを両足と右肘に分配し、爆発力

と質量を得て、姿を晒して壁を作るように並んだ鬼らを抜き、視界に収めた四凶の鳩尾に高速エルボータックルを極める。
まともに突撃を食らったトウテツの体が数十メートルも後方へ打ち飛ばされた。

肘や踵が触れる度に煉瓦道に小さな穴を点々と穿ち、そうして触れたモノを食って回復しつつ、停止してすぐ体勢を直す。

思わぬ奇襲を許した理由はある。
単純に鬼達に気を取られていたからだ。

「って、もうかよ」

トウテツが視線をリセットするのと鬼達が援護に向かおうとするのは同時。
しかし、それよりも早くアキの次弾は濃色を露に右手で滾っていた。
再び見せる瞬間接近の歩。
足を止めることなく、零からトウテツへ辿るまでの間に得た加速力殺さずにして拳を突き出す。
脇腹への速度とエネルギーを得たボディブロー。
自分よりも大柄なトウテツの身体がくの字に折れる。

「下がれ織夜！」

四凶に追加攻撃を加えようとするアキを、鬼の長兄は諫めた。

トウテツの顔面に余裕が戻っていることを悟り、まともに渡り合えるアキの負傷を極力抑えようと叫ぶのだったが、しかし、アサが叫ぶより、攻撃者がそれに反応するよりも早く、痛み無き衝撃を受けただけのトウテツはアキの視力を奪おうと、不安定な体勢ながらも手刀を放っていた。

「三段：鳥兜（とりかぶと）！」

そこでカンナの唱えた陰陽術もどきがアキの身体を後方へと弾き、辛うじて接触と負傷を免れる。

一方でトウテツは、立て続けに顔面を打たれて鼻から流血が始まり、同じく後方に仰け反るほど不可視の反発力に強く頭部を打たれたアキも鼻血を流す。

辛うじて藍とスミレの腕に支えられて転倒せずにはいた。

「鬼共が、人の食事を邪魔しやがって！」

舌打ちしてから再び仕掛けるトウテツ。

真っすぐにアキを目指して全身という口を開ける。

ＳＲの完全解放。

全身過食で攻め。

味の是非は問わない。

メインディッシュの為なら仕方なし。

下が溶けて千切れるほど不味い物でも我慢して喰ってやろう。

「二人とも避けろ！」

腕を前で交差させながら体当たりするトウテツを前に、２本の金棒がアキの眼前で交差した。

突撃者とアキを護る金棒十字。

衝突してみると、トウテツは鬼達の腕力に、藍とスミレはトウテツの突進力に驚いた。

人外という域に達している腕力や脚力は、常人にとっては万力も同然の圧倒的パワー。

ならば、ここで相手を効率良く削るに力だけでは不十分。

個性という名のオリジナルが必要不可欠であり、それこそがＳＲ。

必ずしも似ることなく、オリジナルと成りうることもないアビリティ。

（そうでなければ、その消滅力が手に入らねぇ！）

（彼女を護るどころじゃない！こちらまでやられる！）

突進を止められたトウテツが金棒を掴む。

さっきから煩い黒髪の三姉妹、まずはこれらを除ける必要がある。

「邪魔ぁ！」

金棒を握り掴んでそのまま鬼二体をそれぞれ片手で持ちあげる。

交差した掴み、鬼を持ち上げた腕を戻しながら鬼同士の頭部をか

ち合わせ、そのまま放るように奥へと勢い良く押し投げ捨てる。
押し飛ばされた二体が倉庫の扉に窪みを作ると同時に、背後から迫る鬼を知覚する。
右から女、左は男。
身体的特徴からしても兄弟の下っ端であろう2人の腕力はまだ力押しで誤魔化せる範囲内だった。
問題は後方より迫る2人と――

（早いな、コイツ）

美味しそうな少女――織夜秋である。

アキは一歩踏み出していた。
援護してくれた鬼の二人をトウテツが相手している間に、肉体強化の準備は完了している。
地面の密度を奪うことによって己の体に蓄積される密度分のエネルギーを、トウテツの行動を上回れるだけの瞬発力と、同じく密度を高めている敵以上の密度を以て喉元に拳を付き立てる。

（流石に、コイツの攻めは口を開けとかないと、いや、まめに打ち消さないと痛てぇナ……）

激痛に四凶の顔が歪む。
正面からアキの攻撃が入ったことに気付き、助走を付けたカンナが背後から後頭部へと追撃を加える。
アサも続いた。

「――～……駄だって、わかｎないのかよ！？」

棘の付いた得物での打撃。

金棒：理界蒼炎把回（リカイソウエンハカイ）を右手に、前屈みに折れたトウテツの背中に蒼炎を点す。カンナの打撃とほぼ同時にである。

打撲による痛熱に炎熱を加えるつもりでいた。

しかし、打撃や斬撃が効かないならばと、術による火炎とも違った別の炎での攻撃を試みたアサだったが、先ほど陰陽術によって放射した火炎同様に、やはり金棒が纏った鬼火もトウテツの中に消える。

その光景を目の当たりにして後悔した。

「お前らの攻撃はどれもこれも“味付け”でしかねぇんだよ！しかも薄味が過ぎるんだよ！」

物の怪さえ焼ける炎が消える。

飲み込んだ熱を消化し、アキとカンナに殴られたダメージを相殺する。

そもそも、炎でさえトウテツにとってダメージには成らない。

寧ろ食料。傷を癒したり新たな力となったり、多様に変化するエネルギー源でしかない。

（触れちゃダメか！

アサの炎で駄目なら、ウォーターカッターだろうが毒ガスだろう

が持ってきても結果は同じ！
こいつは――！）

右手がカンナの脇腹を殴り、左手がアサの金棒に悲鳴を齎す。

（あらゆるモノを喰って自分のエネルギーにしていやがる！
触れた分だけ飲み込んで強くなる、そういうＳＲか！）

トウテツから離れる2人の兄姉に代わって藍と菫がトウテツの妨害を再開する。
足止めの為の妨害。
自分たちが不利な状況に立たされていることは十分に理解できる。
過去幾度も羨望を覚えた兄妹、上の2人を、多大な実力を持つ鬼に対して四凶は慄くこともなければ、明確な敵として認識することすらない。
ただの邪魔者程度にしか鬼を見ていない四凶は、明らかにＳＲという枠の中でも突出した破壊力を持っている。

人を超えたという次元の話ではない。
そもそも理さえ食い荒らすソイツは、極端な話しを言えば世界の真理と言える。

蹴り足。右の足刀がスミレの振り降ろした金棒を弾き飛ばし、更に並んで仕掛けてきた藍の左頬を打つ。足の返しで左腕に踵を加え、三撃目に空いた胴体の鳩尾へと爪先を突き立てる。
一本足で2人を止めたという事実を認めたくない菫に、二度爪先が突き刺さる。喉と、呼吸と体勢が共に乱れた所で下腹部へ。

（四凶の全員が武芸者なんて、聞いたことがない……！）

後ろ足を踏んで傾倒を堪え、金棒を強く握って構え直す藍と菫。
その脇をアキが抜け出る。

（コイツは敵――）

両足でバランスを取り戻す前に、不安定な状態にあるトウテツの顎へ黒拳で突き上げる。

（コイツは敵、トキへの障害――）

二撃、三撃、中心線に沿って頭部から胸部への黒色連打。
鬼の攻撃を悉く避けて見せたトウテツが防御の構えを取る。
が、アキの連撃は的確に護りの隙間を突いていた。

（敵、コイツは敵、邪魔、障害、敵、コイツは障害、敵、ショウガイ――）

一瞬で受けた三撃によりトウテツの身体が弾かれて宙に浮く。
弾かれたトウテツの進路上から二体の鬼が退き、一方的に攻撃を

加えるアキを見守る。

（敵、敵、敵――コイツが敵、敵だから邪魔、だから殺さないと駄目）

倉庫の壁と激突する四凶に、大きな黒球が追撃する。
訪れる最大級の反発。
それに伴う音は落雷の如く大きく、耳に痛い。
威力は大音量に比例して大きく、人体が鋼鉄の壁を突き破るという異常な反発を成し遂げる。

押し込まれた者はＳＲ、圧し潰そうとしたモノもＳＲ。
黒球と打拳が四凶の体を倉庫の中に押し込み、僅かながらも四凶の口元に新たな流血を誘った。

（オリヤアキ、この子のＳＲは一体……！）

藍はボルトの思惑を疑った。
本当に私たちの援護が必要なのか。

対照的に、カンナはアキの攻勢に良しと言判を賜った。
私たちが四凶の注意を散漫にさせることで押せている。
自分たちの拳が届かないのは不本意だが、それをアキは代弁してくれている。

それでもアサの疑問は晴れない。

この面子でトウテツを抑止していられる時間は長くないのだ。
魔女も理解しているだろうが、この面子にチームワークは有り得ない。誰かが合わせる事は出来ても、先を見越しての立ち回りが出来ない者の方が多い。
連携なくしてトウテツに挑むのは無謀とも言える。
何故ならトウテツは一対一という状況で無類の強さを発揮するのだから。

（本当の狙いがトウテツでないとすれば……）

アサの目が共に戦う姉妹、それからアキへと向く。
ボルトはこの面子に何を思い、何を望み、何処へ誘導しようとしているのか。

視線をアキで止めると、彼女は倉庫の中へ消えたトウテツを追わずに両腕を広げて掌を開閉していた。

魔女の言いつけを守ろうとしていた鬼達の中で、四凶軍最高の消滅力と対等に渡り合うアキの存在はとてつもなく大きなものへと変化を遂げていた。
出会って間もないが、その力が等しく誰に対しても通じるという特性を持っていることに気付き、矛盾を抱えた鬼でさえも彼女の力には脅威と恐怖しか感じなかった。
それこそ、トウテツへの追撃準備を始めたアキを、己の行動を忘れて見守るほどに。

「痛ぇ……ジリ貧、いや、イタチごっこか？」

暗い、倉庫の中は格納庫だった。
海上戦を想定したホバークラフトが二列に縦隊する室内で、トウテツは倉庫外のアキと同じことを始める。

外からやって来る時に空けた穴から見えていた、日の出の中にある協会本部の一景色が、薄黒いフィルターで塗り変えられる。
半透明のその黒が、触れた範囲のあらゆる物が消滅に追いやり、その現象を招いた本体のエネルギーへと変わって物質は跡形もなく消滅する。
それが例え鋼鉄の重扉であろうと、器を越えて外界を食い荒らす力を持った彼女の前に、壁として立ちはだかれるモノは無い。

だから、トウテツはアキを食べたいのだ。
器以上のモノを食べられる力、それがあればどれだけの味を一度に楽しむことができるのか。

「なんというか――」

そのために、ホバークラフトを急いで3台喰ってエネルギーを補充したのだ。
ふと、通信で知った名前が織夜アキだったことと、キュウキが操作に失敗したと嘆いていた人物（げんいん）が同じ名前であることを思い出す。
協会に対して埋伏の毒となるよう仕向けたらしいが、結果は眼前の有様である。消滅の散弾を撒き散らしただけに留まらず、明確に四凶への敵意を覚えている。
どんな説得をされたのか検討はつかないが、オリヤが自らの意思

で四凶に対して殺意を表現し、矛を持っては向けていることに間違いはない。
キュウキが認めた以上、並大抵のＳＲでないことは簡単に予想できる。事実、彼女のＳＲはこれまで幾千幾万もの人間が求め、その悉くが力の輪郭に触れることすらなく終わって行くというほど実現の望めなかったＳＲ。それがあの力の過去である。

「パンドラや器みたいにホイホイ植えて創れるＳＲじゃねぇ」

言ってしまえば貴重、希少なＳＲ。
それでも彼女の力を欲した一人であるトウテツは、アキの消滅力を目の当たりにして垂涎（すいぜん）を堪えずにはいられない。
どんな妨害に遭おうと、どれだけ拒絶されようとあの力を喰わずにはいられない。自分のモノにしないと気が済まない。

「さっきは、下手だったのに今度は上手に使いやがる。もしかして手加減でもしていたのか？」

暗い倉庫内に光が差し込む。
どうしたことかと瞬間的に疑問を抱くトウテツだが、アキの展開する黒い半円球が倉庫全体を丸々飲み込んでいることに気付いて納得した。
この倉庫と周辺を一気に飲み込む心算だ。
鬼も逃げ出すほどの消滅力が外壁を溶かし、鉄骨を折り、崩れたレンガの小山を砂より細かい粒子へと変え、差し込む陽光さえ濁らす。

「お前も俺を喰いたいのか」

光の乏しい倉庫内に居て気付くのに遅れたが、外気と陽光のもと白日となったその攻撃は、非常に興味深い性能を秘めていた。

一歩ずつ。

殺意と力を増しながら歩み寄るアキのＳＲはトウテツが思っていた以上に酷い。

遠距離戦に用いた黒球とは違い、半透明・半円球の黒色空間は触れた途端に全てを食い千切ったりせず、ゆっくりと咀嚼して消化する、言わば胃袋表現。

それも範囲内の対象をアキ自身が選定できる。

視線の往来する範囲内にある障害の悉くが優先的に消滅しているのが何よりの証拠。

足元に転がる残骸は塵となって消え、未だ倉庫内から完全に消えない暗闇は天井や壁を排することで消え、そして敵対する四凶の身体からも徐々に質量を奪い、消した物々はエネルギーと変わってアキの中に消える。

新たな力になる。

（逆光さえ消したワケか！）

奇しくも昇りかけの太陽を背にしていたはずが、一瞬にしてそれを無力化するアキ。

小細工が効かないのは互い様と気付くトウテツの顔が満面に笑む。

太陽光の消滅まで可能なアキを取り込むには力で捩じ伏せ、少しずつ飲み込むしかない。

……というか、それ以外の方法を採れば確実にこちらが喰われる。

消滅同士が向き合うことを理解したうえで、アキもトウテツに対して全力を持ちだす。

それだけやって初めて同等レベルに近づける差があった。

経験の差による使い方による上手と下手。

決定的に戦力差を生んでいる要因はそれ。

死ぬつもりで殺さないと無念すら残せない。何も出来ずに消えていくかもしれない。

（コイツ――）

ただ、トウテツもアキも気付かない決定的相違点があった。

目に見える違い、体験している違い。

既に在るのに二人が気付かない事には勿論理由があり、それは二人のＳＲがそれぞれ出来上がる要因ともなっていた。

そんな事情があるからこそ、二人は決定的な違いを抱いて向き合いながらそれらに気付けず、どうにかして対等、どうかすれば優劣とヒートアップしていく。

しかし――間もなく、孤独と独力だけを頼りに生きてきた二人はその違いによる別離を辿ることになるのであった。

第５５話「暴食、飢餓、全身過食！　ｖｓトウテツ！」（後書き）

どんな夢かを覚えているか、正直に言えばハッキリと答えられないほど多くの夢を見てきて、それら一々に覚えているだけの感情を傾けたことはない。

故に答えは、Ｓｏｒｒｙに限る。

ただ、最近は生きるためにあらゆることを覚えなければいけない状況が続き、その習性がキツイ訓練の成果、それとも死にに死にまくった所為か、夢の内容までちゃんと覚えられるようになっていた。

現在、色世トキ、仮眠中。
そこに、
リアルタイムで、会長、侵入成功。
夢の中で。

「……」

一句目が出てくるまでが長かった。
数秒前までトキは深海に沈む夢を見ていたのだが、それが突如として上下が転じ、慌てて手足をばたつかせた所で両足が地面を捉える。
顔を上げれば会長が居た。

「時間が限られているから手短に話す。
トキ、お前の選択は正しい。
アキを殺せばお前はトウテツに殺されていた」

「……どうして？」

警戒露わに聞き返すトキに会長は続ける。

「お前の知る痛みではトウテツに届かない。
“死ぬほどの痛み”“死にたくなるほどの苦しみ”――トキが連想した痛みはこういったものだろうが、それは全く別モノだ」

「……」

“何が痛み続けているのか”

それが鍵だった。

「いつまで続くか分からない痛みを抱えたまま、お前は何年正常な人格を保っていられる？
いつまで耐えられる？」

「長く持たないと思います」

「何故？」

「なぜって、出来ないものは出来ないから……」

「出来ない理由はなんだ？
自分とは縁遠い仮定だけでしか体験できない話だからか？
――それとも絶対それにならないという自信があるからか？　確かにそれも大きいだろう。だが、現実的原因は、お前がその辛さを知らないからだろ。
情報が全く皆無、環境もなく、自分を誤魔化して生きてきたから今更それを受け入れることも出来ない」

「……何が言いたいんですか？」

海底なのか海面なのか分からない足場を進み、会長の前に移る。

「トウテツを倒してくれ。
その為には奴に負けないほどの痛みが必要だ」

「トウテツって、四凶の？」

「あぁ。現代のトウテツは強い。ハッキリ言って歴代トウテツの頂点に立てるだけの力を持っている。
そのトウテツを創ったものが痛みだ。
食べることと生きること。
この二つの行動に伴う矛盾と、そこから派生した痛みがトウテツの力の源泉だ。
――彼を討つには平等か、それに近い痛みを示さなければならぬ。
トキ、ワシがこうして語るには理由がある」

複数の人格が夢の中に入ってきていることを理解したうえでトキは耳を傾ける。
会長は本格的に夢の中に介入している。
そうまでして何かを伝えようとしている。
……それだけ、現実で何かが急変を迎えているということが伝わった。

「――貴様の望む相手が来たぞ」

「え？」

「コントンだよ。本部の内側に潜伏しやがった。
全く……これ以上四凶に自由奔放やられちゃ後々が面倒なんだよ。
つぅわけでさ、とっとと四凶を減らして欲しいワケ。トウテツ一人でもいいが、出来ればコントンとキュウキの二人も殺して欲しいワケさ」

どんな夢が訪れたのか、トキは語らない。
目標と定めた敵が来た。
戦争に参加した。
事実はそれだけでも十分な衝撃を有し、しかし会長はそれを理由に他の四凶も討てと言う。

「――同時に複数を相手にしても勝算はない。だから、まずは今一番葬りやすい状況にあるトウテツを、確実に無力化して欲しいんだ」

「会長――」

「ん？」

「コントンには気を付けて下さい。
アイツも時間を武器にしています」

「あぁ。
忠告有難う。
目が覚めたら島全体を見渡してみればいい。
何せトウテツは今……」

深海に闇が下りてくる。
ここが深海なのか、それとも海面近くなのかが分からない。上から降ってくる無数の水泡が一層頭に混乱をもたらす。

「織夜秋と戦っているからね。
黒い球体が君の寝ている場所からよく見えるはずだ」

「……そうなんだ、有難うございます」

現実世界でよく理解できない事態が連続していることを知りながらも、トキは僅かな睡眠時間で蓄積された疲労を僅かに抜いた。

深海の暗闇が水の感触を消し、泡の流れを攫い、代わりに軽く冷たい感触を顔にぶつける。
視界や感覚が一度闇に落ちる。

全てが停止した感覚。
直後に蘇る五感の、最初に労働を再開するのは聴覚であった。

潮風の走る音と人工物が生み出す大音量。
覚醒する触覚が背中と足元の冷たく堅い金属を知り、乾いた口の中を伝い、潮風が味覚を刺激、次いで鼻が海上で混じり合う異臭を嗅ぎ取る。

瞼を上げると、物陰と陽光の狭間が飛び込んだ。
上りかけの太陽は数十分前よりも高い位置まで顔を出し、物陰から立ち上がったトキを照らす。

顔をしかめ、戦場に居ることを思い出し、軋む身体に鞭打って会長の言葉を実行する。

（四凶は何処だ――？）

そして、一気に進展した戦場の様子を見下ろし、寝ぼけの手伝う頭に多大な混乱の渦を任せるトキであった。

「って、状況進み過ぎだろう！？」

第５６話－Ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ　Ｐａｉｎ－（前書き）

～協会とその周辺の戦況～

【北部】

軍事エリアへ侵攻した四凶軍と防衛にあたった協会ナイトメア連合は、協会ＮＭ連合の激しい抵抗の前に四凶軍の侵攻は難航。日の出を迎えた時点で辛うじて第三防衛ラインに到達。

未だ協会ＮＭ連合の優勢。数だけなら四凶軍。

【東部】

海上を黄金侵食・結晶侵食の通り名で知られるコルスレイによって制され、協会・四凶両軍ともに戦闘を展開できず、戦場と思えないほどの静寂が下りてきている。

両軍ともにいつでも攻撃できるように待機、或いは秘密裏に別方面へ移動。

【南部】

四凶軍の最高戦力：トウテツの突撃により協会ＮＭ連合に百名近い犠牲者が発生。

港の防衛線も突破され、協会内部への侵入目前。現在、ボルト率いる対トウテツ討伐部隊が戦闘中。

トウテツ対策に集めた人数で後続の四凶軍を攻撃中。

四凶軍が最も侵攻している戦場。

【西部】

中立小規模集団、協会ＮＭ連合、四凶軍の入り乱れる最も混沌とした戦場。

最も四凶軍の被害が大きく、また南部に次いで協会ＮＭ連合の被害が大きな方面。
現在キュウキのいる方面もここ。
北部海岸以上に侵攻に苦労している方面。現在四凶軍は第一防衛海岸まで押し返されている。

【協会中央・上エリア】
協会ＮＭ連合の作戦司令、ジャンヌとミギスがそれぞれ作戦立案と敵の策略を分担してトウテツより“後の策”に備えてる。
レーダー塔の上ではトキが夢の中で夢を見て、また更にその中で夢を見る夢を見ている最中。
ボルトの光撃チャージ率６１％。

【協会中央　??】
コントンが目的のエリアを発見。
どこかで落とした携帯端末を探してルートの逆走を始める。

第５６話－Ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ　Ｐａｉｎ－

何も感じない、何も覚えられない。

そんな時期を過ごして気付いてたことがある。

人が生きていく上で、食べる事とイタむ事は欠かすことのできない機能。

人が人であるためには何がしかイタむものを持っていなければいけない。

知らぬ国の誰かを悼むことが出来れば、傷つく度に痛みを訴える声を挙げられれば、獣から人へと成り上がった人類の伝統と言える痛覚がそこに備えられているのなら、間違いなくそれは人と言える。

（アキの使い方は瞬発力と、そこから繰り出す奇襲。黒いアレを混ぜた一撃を強化するか、瞬間的に最速破壊力を有する黒球を放つかの、とにかく最初が速度頼み。今のところコレ一択！）

人のつもりで生きていた男は、いつしか人でなくなったということに気付き、しかし、何がイタムという事はなかった。

身体も心も痛覚を失い、ただ流されるがままに流されて生き長らえる。

無痛の存在は死さえも忘れ、只管に食べ続けた。

学ぶこともなく、忘れることさえ忘れ、ただ止まった時の中で唯一更新し続けてきた食事が、男の世界の全てに変わる。

あらゆる感情を失って機械的に続ける食事は時に拒食、時に過食

に繋がるが、それでも食べることは絶えない。
止まらない食事。全て、何も感じる必要のない時の中に用意された唯一つの鍵。
しかし、時にはそれすら見失う。
どうして食べる、どうして食べない。
もう考えない。何かに意味を見出すことができない。

（トウテツの使い方は、見ると“たえる”――それから打つ）

何もない。

そんな状況で人として始まった彼女は、鏡が返す自分の姿を眺めて疑問を抱いていた。
全てが理解できない環境の中、冷暖も硬軟も分からないまま、体中が発する悲鳴にだけ耳を傾けていた。
全て理解できないし、それを解決する術も知らない。
受け入れるしかない、流されてゆくしかない。
それは本能的に気付いた対処法。それに彼女は極力疑問を抱かないよう生きてきた。

何か――紛らわすことすら出来ない痛みを抱えながら。

例えば、他人同士が僅かな時間の中で思想を交えた人生観と、経験してきた実体験を話し合うとする。それを数千数万と繰り返したところで万人が共通して見出せる心理など如何ほどあろうか。
充実したように見える時間を過ごして来た人間の幸せがどこにあったのか、共通したものを見つけることは誰にも出来ない。
ただ理解し合うふりを続ける以外に方法がない。

それしか人にできることはない。
絶望的とも言える、他人を知る術を人は認めずに死ぬまで走る。
どんな痛みを抱えようと、それをどんな賢者に打ち明けようと、
結局は表層に絆創膏でも張るかのような応急処置しか施せない。
何故ならそれが人の最上とする手段。
無限に続くかもしれない痛みを、言葉や人間独特の表情で誤魔化
すしかないのが限界。

そんな長い暗闇を歩む二人に共通する感覚が一つだけあった。

孤独を恐れず、周囲の死を悲しむこともない。
そのくせ自分の中の何かが曲げられそうになった時、言い表し様
のない不安に陥る。
何の為に存在するのか。
その問いに対する確立した答えを持たない二人は未だに発展途上、
大人に成りきれていない子供である。
各々食べ続けることで見つけ出した答えは――トキとアキ――ア
キはトキを、トウテツはアキを、それぞれ食し取り込むこと。
それが目的“である／だった”。

「大人しくしろ！」

他人同士で違いを見つけることは容易。
例に洩れず対峙する二人も相違点を見つけることには時間を要さ
ない。
男女の違いや体格差、戦闘経験の多少、持ちうる知識量など、ど
れをとってもトウテツに分があった。
しかし、互いに喰い合おうという点だけは譲らず、また濁りなく、

あらゆる障害と状況を眼前に広げられようとそれを諦めることは決してない。

そんな独り善がりを強さと勘違いしてきた。

（織夜秋……シキヨトキ？

偶然？　それともまさか、彼女は――）

アキやトウテツ同様、自分以外の力を信じられなかった鬼が居た。誰にも頼ろうとせずに全てを独りで解決しようと全力を尽くしてきた鬼が。

当然だが、鬼とは言え頭脳は人並み。伴う成功例は失敗例よりも遥かに少ないが、それでも鬼は誰にも頼ろうとはしなかった。それが例え、尊敬している兄や姉妹らでもだ。何故誰にも頼らないのか、その理由を考えることもないほど、あらゆるものを求めて没頭した。それが理由である。つまり、人は没頭してしまえば世界を観る眼が捉える視界は一気に狭まる。

「……アサ兄様、カンナ姉様、私が彼女を援護します」

半黒球との境界を睨みながら一人、藍は隠し持っていた新たな得物を手に取る。

左右からそれぞれ視線を送る三人は何事かと疑問をぶつけた。

何をする気か。

その問いに、藍は言葉と武装の具現化で答える。

「私ならこの黒球の中でも戦えます。
耳を傾けてください、港が四凶軍の攻撃で押されています」

次女は勧める。
いつ命を落とすか分からない戦場で、人並み外れた生命力と力を兼備する鬼の存在は、敵味方を問わずに大きな壁となりうる。
そんな可能性を秘めている者が、たった一人の敵に釘付けにされていていいものだろうか。

「この二つのおかげでトウテツに触れられるかもしれません」

片方、手にした刀で朝日を返す。
陽光の中に浮かぶシルエットに三人が目を細める。
ここで役割分担しようという意見にカンナは反対したが、アサは承諾し、スミレも不安を露わにしていたものの頷いて肯定した。

「その日本刀がどんな妖刀か知らんし、見たことないその金棒にどんな力があろうと私は反対だ」

「生死繋綴と媛(ヒメ)です」

「はいはい、ヒメとケイテイね。d……ぇあ？」

黒球の中に突入する。
遠のく兄妹の声を意中から外す。
右手に金棒：理壊蒼媛覇界（リカイソウエンハカイ）。
そして、左手に日本刀：生死繋綴（セイシケイテイ）の鼓動を感じ取る。

（哭鬼の村が健在だった頃から、私は孤独だった）

黒に包まれた倉庫のあった場所で、トウテツとアキが殴り合っていた。
大人と子供の本気を尽くした殴り合い、殺し合い。
その風景にふと思い出したのは村での思い出。
悪しき記憶。
反感を買って挑発され、それに乗って大人に殴りかかった時の事。
子供なりの戦争、大事件。

（アサ兄様の統率力、カンナ姉様のような腕力、スミレちゃんのような仁徳。
どれ一つを取っても、私は三人に及ばない……）

まるでここに在った倉庫ように、ずっと暗がりの内に居続けた。
兄妹に恵まれていたことを自覚したのは村が消えてなくなった時。
負の感情を誤魔化して生きてきたと自覚したのは、後の芹真事務所メンバーと出逢ってから。
嫌味のように言われ続けてきた、“哭き鬼の時期女性最高有権者候補”という肩書も、未だにその基準が分からないまま、過去と現代を繋ぐ暗黒への鎖となっていた。

（何故私だったのか……でも肝心なのはそこじゃない！）

トウテツがアキの腕を捕まえる。
その太い腕に、藍は生死繋綴を振り下ろした。

（独りで変われるものじゃない）

骨を折り、肉を潰す。
刃で斬り込めないことは十分に予想済み、ならば力任せに殴るまで。
腕力によって食事の腕を阻まれたトウテツの顔が激痛と憤怒で歪む。
指がアキの手を離しているのを確認し、理壊蒼媛覇界を前へと振り出す。

トウテツの頭部へめり込む乱杭歯。
額を切って流血を誘い、衝撃が脳を揺さぶり震盪を呼ぶ。
身体は宙へ、奥へ。隣倉庫の消えかけた壁を破って、倉庫エリアと生活エリアを区切る金網に衝突し、数本の線条を破ってから止まる。

「てめぇ……マジで俺に喰われたいみたいだな」

黒を塗り替えるほどの殺気を全身の口角から零し、金網を喰いながら立ち上がるトウテツ。
その目が二人を捉えて交互に比較してゆく。

どっちも女。
戦える人間。
鬼と死配者。
どちらも厄介。
力強くて速い。
小細工が無用。
正面から喰い破るしか思いつかない、面倒で味のよく分からない敵。

（アキはまだしも……）

鬼が接触できるなど予想の外だった。
二本の得物はどうしてか口にできない上に、これといった味もない。そのくせ熱いだけ熱い。まるでフライパン一杯の熱湯をフルコースだと偽られ、不意を突かれて目の前に出された気分。
それはそれで許せないが、やはり何よりも許せないのはアキという馳走を前にして食事を阻もうという鬼の魂胆である。人の食事を邪魔する非常識が多くて困る世の中、若い世代にどうしてかそういう連中が多いことに堪忍袋がアラートを連呼していた。

（悪いが、キレ――た）

体勢を立て直したトウテツの顔面にアキの左拳、右足弁慶の泣き所を藍の金棒が同時に捉え、それまで保たれていたトウテツの冷静を断った。

反撃は空中で。

二人の打撃をそのまま回転力に変え、前方へ宙返りするような体勢からアキの頭頂部へ右足の踵、固めた左拳を鬼の額へ――日本刀の柄でそれを防ぐ――放つ。

力任せに放たれた打撃に反比例して稚拙になる体術。だが、そこに生まれた隙を突かせないほどトウテツの一撃は強烈だった。

回転も援けて余剰が過ぎる力は、直撃して尚本体に減速を許さないほどの推進力を纏っており、防御に繰り出した藍の理壊蒼媛が深々と地面に打ち込まれる。

（――っ！なんて勢い！）

起き上がるアキの頭頂部を狙って回転に任せた裏拳を放つが、躱される。勢いばかりで細かな狙いを定めることが出来なかったことが原因である。しかし、スピードはそれを補って余りある。地面と激突したことによってトウテツは接地、体勢を取り戻す。

そんなトウテツに気付いた二人は二撃目を、それぞれ危うくも受け止めていた。

足は地面を砕くほどに捉え、上半身は重心を前へと制し、全力を代弁する両腕は左右に展開。

消費エネルギーはそれまでの食事で得てきた栄養が作り出す人の枠を外れた高密度エネルギー。

人の半生の内に摂取されるだけのエネルギーに相当する破壊力に変えて放つ、ダブルラリアット。

それだけで二人の体はトウテツを押してきたルートを逆走し、数秒前まで倉庫だった建物の在った場所へと戻ることになった。
潮風に湿気た煉瓦の上から、埃の消えたアスファルトの足場へ。
潰れていた腕は数分前の正常を取り戻し、それどころか強化を施され、人に防ぐことの出来ない鬼の腕力に並ぼうとしていた。

「一段：薄（すすき）――！」

二人を転がしたトウテツがアキへ体を向ける。
転げ離れて開けた距離を、トウテツは間髪いれずに縮めようと駆ける。
それに抗する藍。アキを討たせまいと腕を伸ばして遅延をもたらす術文を口走らせる藍。理壊蒼媛の刀身に術を乗せ、切っ先を敵に向け――それと同時にトウテツは体の向きを一転――術を外し、更に標的を変えてきた。中段の横蹴りが胴体に衝撃をスタートさせる。咄嗟に金棒で防いだ藍の体が再び宙へ浮き、同じ術の発動を妨げられた。

邪魔者を退けたトウテツは、顔を上げたばかりのアキが居た場所に視線を戻す。
が、藍を蹴り飛ばしている間にアキは飛び上がっていた。降下。
空振りするトウテツの腕を指先で蹴り落とし、頭頂部、顔面、顎へとそれぞれ一発ずつ拳を打ち込み、胸板に両拳を揃えて一打、鳩尾に左右の拳で二連。最後に、右足を一度引き、左足でバランスを取り、全身のばねを用いて引いた右足を勢いよく前方に繰り出し、金的を極める。
吸収した全てのエネルギーを注ぎ込んだ、一瞬での七連撃。

しかし、これでもトウテツは止まらない。

「カラッ……！辛！
辛ぇんだよぉっ！」

アキにもその痛みは理解できた。
どうしてかトウテツの感覚が伝わってくる。
その感覚が、ある意味でトウテツの無傷を伝える。身体の随所に走った痛みを、電気信号さえ喰ってしまい、別のエネルギーへと変えている。

「二段、下――紫苑(しおん)！」

連撃を耐えきったトウテツが腕を繰り出した瞬間、立ち直った藍は滅多に使わないモノを使った。
その瞬間、風切り音を立てたトウテツの右ストレートがアキの耳朶を擦る。

（コレは何とか……物理攻撃ではないこれなら効果がある！）

視界奪取。
それが華創実誕幻、二段の下：紫苑がもたらす効果である。
が、この段の術は二段の上術と違い、明確な負担があった。
藍の持つ術の中で負担を伴う段位は二つ。対乱戦用の術を中心と

した獄段と、対個体用の鎖縛を成す二段の下。
その中でも紫苑の負担は他術と比べ物にならないほど大きい。

「何だこりゃ！？」

視界を暗闇に阻まれたトウテツが傾倒して地面の瓦礫を食らう。
アキの黒球がトウテツの背中を押して地へと圧する。
抗して立ち上がったトウテツは視界零の中で、文字通り闇雲に手足を振り回して黒球を打ったアキを探す。

「今！」

藍の一声が戦場の轟音を貫いてアキに届く。
左目を抑えて膝を付く藍を目端に視線をトウテツに戻して両腕を揃え、最初の黒球をトウテツの前面にぶつける。
二人の口が喰い合おうとぶつかり、しかし強大過ぎる二人の食欲が強力な磁石同士のように反発する。しかし、トウテツは地面から足を離してしまった。視界が正常だったら浮くことはなく、そもそも黒球に押し負けたりしない、力の分量を見誤らない。そうさせなかったのはアキの黒球がしっかりと不意を突いたからだ。

藍が視力に問題を抱えたことを悟り、アキは考え付く最大級の時間稼ぎでトウテツをもてなした。
後方へと弾かれるトウテツを、予め飛ぶ軌道上に設置した次の黒球で今度は背中を打つ。
弾かれて前へとバウンドしたトウテツに再び前方からの衝撃が走

る。
アキの操る黒球が前後から交互に衝撃を与え続け、トウテツに着地と態勢を整える時間、反撃の隙を与えずに一方的シェイクを加える。
そこへ自らも黒球を纏った拳足を交え、殴り、浮かせ、黒球を打ちこみ、バドミントンのラリーのようトウテツに着地を許さず一方的に衝撃を与え続けた。

（あ……）

暗闇に呑まれた視界。
終わりを感じさせない衝撃の波。
自らが喰われている錯覚。
舌の上にあると思っていた物を見失ってしまう感覚。

アキの黒が与える諸々に、四凶のトウテツは最近の数十年続いた安泰の中で――人が自らも未熟であったことを忘れてゆくように、或いは意図的に記憶の奥底に封印していしまうかのように――記録と忘却の境界に排された昔を思い出していた。

痛み続けていた幼き頃、懸命にそれら痛みから逃れる術を探していた。
ちっぽけな理由だが、そこに大きな決意の杭を打ち込んで以来、人を殺すことも、人の一生を破壊することも厭わずにこなしてきた。
老若男女、人種無差別。
社会的地位など問わない。
一般人だろうが、ＳＲだろうが、四凶だろうが、目に付いた、気に掛かったというだけの大雑把過ぎる選定基準で喰い殺してきた。

その皿、食してきた命は数千、或いは数万に上るかもしれないが、細かな人数に何の意味も感じていない以上、いちいち詳細を覚えてはいない。

そう、全てはこの暗闇のような、枯渇に似た世界での暗中模索。

何処から探せばいいのか、どのように手をつければいいのか。

何一つ好転してくれない暗く、深く。

それでも確かに痛みだけが頭と言わず、全身の、細胞の一つ一つにまで響くかのように、歓迎してくれない世界で笑う。

果てにトウテツが見つけた答えは本能が一つ。

“食”であった。

「おい……ッ！

キュウキ！聞こ――えるか！？」

こめかみに飲み込んだインカムに向け、最も信頼できる者をトウテツは指名する。

代理オペレーターがもう一人の四凶へと繋ぎ、移動を続ける有翼の女が声を荒げて対応を始めた。

『トウテツ、いま何処に居るの？

お願いだから計画だけは乱さないようにって、何度も念を押したじゃない。

それなのにこの通信は何？』

「謝罪は――挙げた首、いでっ！払う！」

黒球に前後左右から押されて平衡感覚を失ったトウテツは、インカム越しにキュウキへと要求する。

「目をやられた！援護くれ！
出来れば３ッ――人だ！」
『何が欲しいの？』

その言葉にキュウキは即答する。

『想定済みよ。送ってあるわ』

予想外な味方の先読みにトウテツは攻撃を受けながらも笑みを浮かべた。

援護が来るまでの僅かな時の間に左右の感覚を取り戻すことが出来れば逆転は容易だろう。

暗冥に身を任せ、感覚だけを来るべき快食の時に備えて整える。

絶対にアキを食するためと、強く握った拳に願いを乗せる。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第５６話－

－Ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ　Ｐａｉｎ－

トウテツがどんな行動に出るのか、キュウキは予めそれが予想出来ないものだろうと予測していた。

四凶軍におけるトウテツの絶対とも言える消滅力は大きな武器であり、ある意味頼みの綱とも言える重要戦力である。

それを本人がどれだけ認識しているか、トウテツの十分は残念ながらキュウキほど深刻な認識ではなかった。

例えるなら、キュウキの場合はパーティー会場に誘われたなら、まず会場までの経路を幾度も確認を重ね、その上で自分の実力であらゆる状況を切り抜けられる程度に限定された経路を選んで初めて出向き、出席する。更に言うならパーティーの最中でも警戒を解くことは、自分のテリトリー中に設けた絶対神聖のマイベッドに戻るまで在り得ない。

しかし、トウテツの場合は違う。パーティーがあると耳にすれば喜勇を隠しもせず、会場のオープンと共にバスルームから全裸のままだろうと直行する。途中の警備員を殴り飛ばす程には妨害を想定する程度の、そんな浅はかな警戒しか彼は巡らせていない。

（念のためにあの五人を送りはしたが、トウテツの居場所は協会の抵抗が地味に強い場所。
港が制圧できても、既に奪回されかけている。
場所が港というのも悪い）

送った五人はインスタントＳＲ含めた、キュウキの信頼する部下である。二階層も下の階級にあるが、キュウキへの忠誠心だけなら親衛隊のそれに劣らぬ者達であった。ＳＲとしてもそれなりの力を持ち、鬼相手にも引けはとらない保証は出来るし、上手く連携できれば優勢に回って討ち取ることも不可能ではない。
問題は、トウテツが直面している二人と、その周辺に居る他のＳＲ数名の明確な戦力分析データが揃っていないこと。送った援軍はバリエーションに富むものの、どれか一人でも討ち取られればたちまちバランスを崩す。最悪の場合返り討ち、という可能性も捨てきれない。

（……本当に援軍が必要なのか？）

キュウキは思う。
トウテツが援軍を請うなど何時以来だろうか。そもそも今まで明確にヘルプと発言したことがあっただろうか。

思い出そうにも思い出せない一言に、キュウキは敵でなく味方の考えを読もうと頭を回した。

（強力なＳＲが居るのは聞いたが、どんなＳＲかは口にしていない）

トウテツは頭に血が上っており、皿を独り占めしようとしている。その上大雑把な要請、それらがキュウキの中の違和感を匂わせた。

今になって援軍を送ったことが間違いだった気がしてならない。

確信なき予感。

長い人生を経て培ってきた直感なのか、口にするどころか心にも思いたくない最悪の事態が、どうしてか頭の隅で存在を可能性を大きく膨らませていた。

そんなキュウキの懸念を他所に、トウテツは黒と闇に巻かれながらアキという存在力の味を夢想して舌鼓を打っていた。

舌の上に愉悦、拳に宿る激昂、身体を震わす前者二つの化学反応。

ゆっくりとしたペースで一片も欠かさず、穏やかに、しかし的確に向かってきた衝撃を、それまでの食事で蓄えたエネルギーで相殺する。

アキという少女も、顔を歪めて両腕の得物を振る鬼も、決して手を止めることなく攻め続ける。無意味だが、その事実に気付いていながらも間断なく攻め続けるには奥の手があるからだろうとトウテツは見ていた。

「良い感じで汗をかいているじゃん！

上手そうに出来上がってくれ！」

額を、頬を流れる汗がアキの焦燥と消耗を代弁する。
片目を瞑りながら一棍一刀を振る藍も、繰り出す挙動の一つ一つは精度を欠き始めていた。

（なるほどな、俺の視界を殺したのは鬼か）

広範囲黒円球が徐々に薄まり、放たれる黒球からは最初ほどの衝撃と反発力を受けなくなった。そのことからアキの消耗を図るトウテツは、同時に聴覚と嗅覚で鬼を追い、荒げた呼吸と乱れて外しかけている攻撃タイミングのリズムから、ある事を推測をしていた。
黒く塗りつぶされた視界がアキではなく鬼の仕業であるのではないかと。何らかの、自らの身体に反動を科してまで鬼が視界を奪ったと考えるのが自然だろう。そうでなければ突然の機能低下を説明しきれないし、何故に鬼は片眼の痛みを訴えるようになったのか説明がつかない。

（相討ちでもあった？
しかし、鬼から血の匂いがしないってことは、流血はナシ！
アキの黒球を食らったんなら、目が潰れる前に額が割れるから、やっぱりこいつぁ鬼の仕業だな！）

広範囲黒円球、設置黒球、纏装式黒球――これだけの攻撃を連続して行い続けているアキの体力は既に限界を目前に捉えていた。
周囲の物質の中でまともにエネルギーに代わるモノが殆ど無くなり、それなのにトウテツは未だ膝を付く気配さえない。

記憶の中にこれだけ黒球に耐えた人間はいない。ＳＲ、無機物でも有り得なかった。

（こいつ……丈夫！）

同じく、左目が伝える激痛と疲労が、藍を脳という部位から徐々に気力を奪い、それが冷静な知的判断と相まって疲労の津波を呼び起こしていた。

華創実誕幻二段の下、紫苑が齎す相手への視界奪取、及び、奪った視界の術者への送信――それが紫苑という術の反動。結果、左目から他人の両目が捉える視覚情報、右目は通常の片側視覚を脳へと生来の働きに従って映像を送られ、しかし脳に送られる情報は三眼分となり、負担とそこから生じる疲労は通常の倍になる。更に言うなら、左目を介する神経は生者一人分の視界を認識。しかも自分の意図しない行動を連続する相手の視界である。画面酔いに似た不快感がこみ上げる。

嘔吐感さえ催す情報量。最悪なのは、戦場の最前線でこの術を使わざるを得なかったこと。それを使ってから後悔してしまったということ。

（アキも、そろそろ限……なっ！？）

助太刀に入った藍だが、正直トウテツとうい四凶がどれほど強力な力の持ち主なのか、下馬評や風の便りから然程のモノではないと侮っていた節があった。最初にそれを覆す現実を突きつけられたのは、兄妹全員で殴りかかった時。兄と姉を問題なく殴り、やり過ご

し、そんな数的不利な状況に一切動じない。それどころか、鬼というSRを眼中に置いてすらいない。

二度目の現実は明確なキャリアが、一対一という状況下で現れ、突きつけられた時。

自らの負担が倍増することを覚悟してまで相手の視界を奪ったにも関わらず、トウテツは視界を奪われたまま、闇の中にありながらも触覚と聴覚、嗅覚など残された感覚を駆使して攻撃を躱して見せているのだ。生死繋綴の斬突を風切り音で区別して避け、理壊蒼媛の打撃を右腕の回転で受け流し、遂には反撃の鉄拳まで繰り出し、見事と言えるほどのクリーンヒットを奪って見せる。

「ぐっ！」

アキの攻撃を受け続けた影響か定かでないが、著しく攻撃力が落ちていたとは言え、トウテツの打拳攻撃力は確実に鬼を怯ませるだけの重圧を有していた。重く鋭い。加えて、冷静を取り戻した様子が見て取れることから推測できるように、攻撃の精度も先ほどの力任せに比べて厄介の度合いを増している。せっかくの挑発も、暗闇に突き落とすことで混乱を加えられると思っていたが、実際に現れた効果は逆。

「どいて」

脇を抑えて顔半分を歪める藍の肩を、アキの汗ばんだ手が叩いた。理解できない一言を無言で、納得のいかない指示を促す手を払い

除けて立ち上がり、得物を構える。
アキの攻撃が中断されていることを確認し、一度大きく深呼吸をする。

「どうして、そんな事を言うの？」

「狙いは私。だから、私がやる」

「どうして？」

互いに視線をトウテツに向けながら理解を相互を求め続ける。

「目が、いたいなら無理は出来ない、でしょ？」

「私の……？
なら、仮に目がもう大丈夫ならここを退かなくても良いわけ？」

怪訝な表情を一度藍に向けるが、トウテツが瓦礫を踏み鳴らすと急いで視線を戻す。
二人揃って大なり小なり呼吸を乱し、急いで呼吸と体制と気力を整えた。

「トウテツは今何も見えない状態よ。
それは私がやったことだけど、その代償に私も今左目がよく見えていない。

でも、トウテツに掛けた術を解けば私の目は通常に戻る」

「ムリはダメだよ」

戦場において解答の是非を問いにくい回答をするアキに、とりあえず頷いて見せた藍は生死繋綴を地面に刺し、空いた手を腰の後ろに伸ばして四枚の札を取る。

半分は緑色、半分は白色の護術符。

一歩前に出たアキの腕に二色の護符を当て、同様の行為を自分にも施して疲労を取り除く。

「あれ？」

トウテツを睨んでいたアキが拍子抜けた声と共に不思議を抱く。

突然消えた疲労と、どことなく取り戻した精神的余裕に、絶望を見失った。

それが藍の護符による効果だと気付くまで二秒を要し、助けを施された時に掛けるべき言葉が在ったことを思い出すも――

「おっ！眼回復！」

トウテツの視界回復が重なり会話の暇が消えた。

消耗を癒されたアキは再び黒球でトウテツを足止めし、更に左目を回復して勢いを取り戻した藍も攻撃に加わる。

（トウテツの弱点を掴むことはできなかったけど、どうにかセカンドチャンスに繋げる機会は得られた！）

前向きに、敵に向き、二つの得物を交差させる。

威を放って構える藍の真横でアキの目はトウテツ、耳は戦場の苛烈を聴き、鼻は死臭に混じる異臭を嗅ぎとり、直感は新たな殺意を捉えていた。

「別の敵が来るよ。そっちを殺せる？」

「新手？」

視界に無き敵を知らせたアキの手が、藍の左腕に伸びる。

「貸して」

この瞬間、藍が晒した不覚は３つ。

妖刀：生死繋綴を手放してしまったこと。次に、一瞬でも共闘を望んだ相手に殺意と不信を覚えてしまったこと。

そして、アキが生死繋綴に飲まれて殺されてしまったと肝を冷やしてしまったことである。

（――え？）

右手に妖刀を取って構えるアキに、藍は疑問を抱かずにはいられなかった。

なぜ彼女は立っている、生きているのだろう。

それが銃器やナイフならまだ分かるが、手にした得物がよりにもよって生死繋綴なのである。

生死繋綴と理壊蒼媛覇界は持ち手を選ぶ呪器。

一般人だろうと、ＳＲだろうと、柄に手を掛けた人物が生死繋綴に選ばれなければ持つことは出来ない。それどころか、選ばれなかった者らは触れた瞬間から不届き者への誅として命を奪われる。

万物に触れることの出来る、全ての生と死を繋ぎ、それら点々とした終始達を綴り字のごとく連ねる武具。人も悪霊も、動物も金属も、人工物だろうが超常現象であろうが、あらゆるモノに切れ目を刻める得物。その代償として、使い手を選ぶ気難しい武器。それが生死繋綴であった。多くの組織から目を付けられた宝具とさえ言われる凶器。会長や、ボルトだって無理だと言って触れようとしない。

“許された”

その点に関して、藍は久しく自分以外に許可を得た他人を見て半信半疑に陥っていた。

「それ、でも、痛くないの？」

「？……返すから」

「大丈夫なの？」

「あなたは？」

返答は言葉でなく、行動で表された。
抉った地面を投げ付けて来たトウテツに妖刀を携えたアキが向かい、背後より出現した敵増援の迎撃に新たな金棒を取り出した藍が向かう。
万全を確認し合っている暇がないことを思い出し、二人はそれぞれの敵へと向けて切っ先を差し出す。

『ボルトだよ～、二人とも聞こえる？』

トウテツと衝突し、五人のＳＲの陣形の中に飛び込む、ボルトからの連絡が入ったのはそれらと同時だった。

『遅れてごめんね～、煩いハエが沢山いたの。
あと“１分持ちそう”かな？』

応、と二人は意気込み、敵を打つ。
朝日がその意気を援けるかのように力強く敵を照らす。

（アキならトウテツに触れても問題ない。それに、生死繋綴もある！
なら私に出来る最大の援護は、彼女の対決を阻害させないこと！）
（藍の術（かのじょ）でトウテツのくずし方がわかった……なら、やる！）

小黒球で投擲された地面を飲み消す。
その影に隠れて奇襲を仕掛けてきたトウテツの蹴り足を、刀に手そ添えて寝かすことによって固定して防ぐ。
軸足に黒球をあてて体勢を崩し、日本刀をトウテツの手の軌道上に置いて防ぐ。

地面を喰いながら足の裏を狙う拳を繰り出す。
上に飛んで躱すアキは、着実にカウンターの方法を取得しつつある。攻撃を繰り出す度に隙を突いてくる。

相手の持つ天稟を十分に認め、一層の食欲がアキという人間の輪郭を強調する。
黒球を受けながらも食事を諦めないトウテツに、今までと違う黒を用意する。

「終わり」

強力なＳＲを除けば、トウテツという男は少し鍛えている程度の大人でしかなく、そうなれば今まで排除してきた邪魔者達と大差はなくなる。
藍が視力を奪わなかったら気付けなかっただろう事実に、アキは便乗し、それを攻略法と見て黒を繰り出した。
トウテツ自身から時間を奪わない、四凶の力を零距離で相殺させる黒を、トウテツの全身に纏わせたのだ。

直接的な攻撃でない黒に、最初こそ疑問を抱いたトウテツだが、その攻撃の本質に気付くまであまり時間を要さなかった。
小黒球で作った膜は完全にトウテツの口を塞ぎ、あらゆる皿を遠

ざける。狙いは窒息にも似た、四凶として全身に芽生えた接触口、これの妨塞である。

（今度の黒……地面も食わせねぇ気か！）

そうはさせじと、トウテツは全身の口を大きく開いて黒を食らう。あらゆるモノを喰わせない今度の黒は反発力を生まない分だけ処理は施しやすい。が、黒い膜が減少を始めるとアキは新たに黒を追加した。

それは熱ある液面に表れた油が別々の模様を描きながらも一つになっていく様に似ていた。トウテツに纏わす黒と、新たに作り出された黒球が互いに結合して厚みを作る。すでに5センチ以上の膜に覆われ、トウテツは確実に食事へ在りつけなくなっていた。

術者のアキを討とうと走るトウテツだが、近付けば近付くほど黒球を躱し辛くなって黒膜が厚みを増していく。

拳足は普段通りに繰り出せるものの、纏った黒と生死繋綴が触れる度に強烈な反発が発生して二人の間に距離を生んだ。体内に蓄積したエネルギーを用いて一気に畳み込もうにも、黒の厚みがノイズフィルターとなって朝日陰を味方につけたアキを捉え損ね、それがエネルギーの浪費につながる。

“これで食事は不可”

ある意味で、トウテツの全身全細胞は数え忘れた昔のことを思い出していた。

これである。

まさしく、この感覚。

食べ物を前にして口にすることが出来ない、手を伸ばしても届かない。

どんなに欲しても食べ物はただ在るだけで、決して自分たちに向いてくれない。

口にしたくば、自らが足腰で向かい、手を用い、口を開いてそこまで運ばねば叶うことはない。

それが単純にして何よりも重要な世の中の真理。

気付かされるまでに生の中で繰り返してきた飢餓、それと同じ感覚をこの黒い幕は忠実に再現していた。

如何なる困難を前にして、食事を諦めなかったことが今日まで繋いだ生の秘訣であり、人が人に最も親しい餓死を回避する唯一の手段である。

世を渡る術も、自分を変えてゆく流れも、全ては自分以外を知って触れ、自ら時間と共に実感して得る。人が成長するに当たり、食糧を必要としない食事は、やはり欠かすことのできない要因。

殴り殺す力の身につけ方も、効率的な殲滅方法の覚え方も、自分の慢心を消し去る喝法も……どれ一つとして自ら開拓の果てに得た成果ではない。

が、それが果たして間違いと言えるだろうか。

例えば子供は大人を名乗る人生の先輩から言葉を覚え、真似、新たに覚えて使うことを繰り返す。また文化ごとの服装や様式を取り入れ、或いは逆らい、そうして自分というオリジナルのステータスを求め築く。零からオリジナルを貫き通す人間など有り得ない。例え意識せずとも人は必ず他人と同じ道を歩み、同じ苦しみを脳裏に刻んで強く噛みしめ、未来に甘美を期待する。

いつか、必ず、次こそは、と。

人なら誰であろうと希うだろうが、しかし、食わぬ者に次という希望や概念は有り得ない。

喰い時を間違えた。
その果てに人は生を縮める。

「？」

走り出し、躓き、動かなくなったトウテツを見たアキが疑問を抱き、

『こちらチャンドラ！トウテツの援護に失敗！
繰り返す援護に失敗！
トウテツがリミッターを、勝手に、チクショウ！外しています！』

交戦中の敵増援を半数ほど打ち倒した藍は、眼前の敵が直前に連絡を始めた事に異変を感じ取り、

『何ですって？』

同時だった。
両軍の指揮官であるジャンヌとキュウキは突然の、あまりにも急の度を過ぎた事態に、一瞬だけ頭の中に描いていた戦場の全体マップをトバしてしまう。

「うんなあらあぁぁぁぁぁっっ！」

現地――協会本部南西部、湾岸倉庫エリア。
そこに居る四凶はかつてない音声量で哭していた。
黒に包まれながら海を目指して傾斜を下り、その道中であらゆる物質に触れて消滅を撒き散らす。何に触れても自分は一切食べることが出来ない、全て黒膜が喰って消してしまう。

触れて消えるという、自分の全身口と似通った性質を持つアキの黒球と、その豊富なバリエーションに対するトウテツの理解は速かった。食べ続けてきた四凶は、いざ食べられると知った時には懐疑的な心境にまで至ったものだが、しかし、本気で相手が一切の食を切り離そうと目論んでいることを知った瞬間に、多大なる矛盾が発生したのだ。それこそ無様と言われても間違いないほど顔を歪め、数種の液体を零し、地団太を踏む代わりに全力で前進を始めるほどに。

それだけトウテツは、触れたあらゆるものを消滅に至らしめる――それこそ我が身さえ――強力過ぎる力を欲していた自分を思い出し、涙し、しかし、彼女はそれを与えてくれない事実、更に奪うこともできなくなった現実に混乱した。

まだ食べ続けて生きたい。
死にたい。何も口にしたくない。
腹の虫は己の意思？
空腹は宿命？
兎に角空腹。
只管に空腹。
何度も絶命を望んだのは現実か？
それともこの空腹こそ夢幻か？

腹が減っては頭も回らない。
食べればきっと何かが分かる。
食べれば……食べたい？
どうしてか食べたい？
それとも食べたくない？

繰り返し響くノイズは痛みと変わり、四凶を深化させる。

「そこで解放されるなんて！トウテツが突破してくるわ！」
「あの馬鹿――！」

その事態を通信で拾ったジャンヌは驚愕し、キュウキは憤怒の形を面に作った。
共通して二人はトウテツの過去を知っている。
その理解深度にこそ共通は見られないが、一点だけ、二人の記憶に共通する経歴があった。
全身過食の名で呼ばれるトウテツは、過去に一度だけ協会へ喧嘩を売ったことがある。もちろん、仕掛けるからには最上の馳走を狙っての真剣であった。

「引かれる――！？」

トウテツの後を追ったアキは、トウテツの進路上に藍が居ることを認めつつも不可解な引力に意を反らされて呼名に到らず、しかも片目を瞑って蹲いてしまう。
四凶が大声を上げていたことが吉と出て、藍は突撃してくる全身

過食を十二分の余力を残して躱し、交戦していた増援ＳＲもそれを避け――だが、そこで生まれた一瞬の隙を突かれて藍に敗れた。

そんな戦場に、不可解な引力が発生する。トウテツの後ろに発生するは、スリップストリームが如き流れる感触。だが、現実にその引力は風のように生易しいものではなかった。

四凶の通過空間を中心に発生し、しかも弱まる事がない。

常に一定に引力を以て、本体の口へとエスコートするよう流れ続けているのだ。

「ジャンヌより南西海岸と付近で交戦中の部隊へ通達！

倉庫エリアから湾口Ｂエリアにかけてトウテツの引力が発生中！

出来るだけ東部または西部へ避難してください！」

「こちらキュウキ！

トウテツが解放してしまった！最寄りの部隊は直ちに援護を！

狙いはボルトだ！ボルトを狙え！」

二人の通信はたちまち戦場に大きな渦をもたらした。

片や危険の発生、片や有利への条件が発生している。

意識が一向、二点に集中を始める中で、その渦流に飲まれんと別の動きを見せる者達もいた。

トウテツが仕掛けている、なるべく離れろ。

トウテツを援ける為、ボルトを討て。

逃げながら戦い、戦いながら敵を探す。

「ホウセンカ、使うか。華創実誕幻、天段：大紋慈双（だいもんじそう）」

そんな戦場に混沌をもたらす。
殺意が集中してはいけない。
この殺意を散（ばら）す。

（うわぁ、そんなに魔力を使うんだ～）

ボルトはチャージとサーチを両立しながら、アサの繰り出そうとしているオリジナルの陰陽術もどきの紡ぐ結末に注目していた。

（なんか嫌なコンボ宣言が聞こえたぞ！）
「カンナ姉様！アサ兄様がダイモンジソウを……！」

姉妹はそれぞれ別れて戦っていたにも関わらず、腕っ節だけが自慢の長女：カンナが敏感になって戦慄を覚えるほどの術に、大抵のハプニングでは動じないスミレが不安を露わに駆け寄った。

「掴まって！」

ただ、姉妹の中で唯一藍は、アキの援助に向かって聴く耳を立てている暇がなかった。

四凶が選んだ強引な手段に力で以て抗うしか術は残っていないが、トウテツが離れていく今はこれが最善の手である。既に数百メートルもの距離が開いている。それでもトウテツの口に向かう引力は一向に弱体の兆しを見せないが、少なくとも終焉が遠くにあることは常用的には好ましい。

地面に金棒を突き立ててポールとし、体を固定したら片腕で流されていくアキを引っ張る。

そうしている間にも無数の物質がトウテツの中へと吸い込まれていく。

（まるでブラックホール……！）

瓦礫が引かれ、死体が寄せられ、粉塵を攫った空気がトウテツ目指して流線を描く。

銃器や硝子などの金属や非金属、有機無機問わず、更に海水や火炎に至るまでが飲み込まれていく。

敵味方の体まで吸い寄せるトウテツを包む、それまで食事を妨げていたアキの黒膜が、内外からの同時干渉によって妨害の効果を失いつつあった。

ここでトウテツの口を再開させることに多大な危機を覚えたアキは、すぐさま黒球を放って黒膜を補強しようと試みたが、トウテツを追って激戦地まで移動してきたことが裏目に出てしまう。

手を伸ばそうにも引力の強さにうまく照準が合わず、また背後から飛来するあらゆる物質が藍の背中に当たっては強い衝撃を指の先まで伝え、黒膜を補強するための精神的余裕がない。

「ねぇ、大丈夫？」

度々衝撃と疑問が襲い来る戦場で、アキは新たな疑問に直面していた。
この女、藍という人間は恐ろしい力を持ちながら、何の厭わも零さず援け手を差し出してくれる。
どうしてそこまでするのか、正直困る。考えとかが。

「怪我はない！？」

一瞬、意識が戦場の外へ飛び出たアキだったが、藍の放った一言はしっかりと彼女の心を叩いていた。

「……え？」
「大丈夫！？
ボルト、トウテツが！」

『分かっているよ。
心配しなくても藍ちゃん、アキちゃん。
実はもう殆ど成功なんだよ』

握られた手に汗を覚えながらも、アキはトウテツに向けていた手を戻し、両手で藍の手に掴まった。

「成功って、教えてボルト！

どうなれば私たちの勝ちなの！？」

『トウテツとの戦いに最も有効なのは、あいつごとブラックホールに放り込むこと。
だけど、この地球上で最上の手段は“ある飢餓状態”に陥れること。
アキちゃんが黒い膜を使った時点で、その条件は満たされたんだ。
まさか、あんなことが出来るなんて正直思っていなかったけど、凄く相性の良い攻撃だよ』

頭に届くボルトの声に意識を傾ける。
藍と魔女が話している。自分たちの勝利を語っている。
トウテツを蔽う膜が完全に消滅したのは、アキの眼が向き直るのと同時だった。

「オオォォォォォォォッ！！」

咆哮があらゆる引力を破壊する。

命を食って四凶。
現実を喰らって尚、四凶。
理を喰い破って四凶、名をトウテツと言う。

黒膜を破ったトウテツの全身目がけて、消化出来なかったあらゆるモノが流れ込む。
生者、死者、無機物。
最悪と言える事態は、ＳＲと兵器の吸収であった。

『アキちゃんの黒膜がなかったら、トウテツをあの状態に追い込めなかったんだよ～。
全身過食の完全開放――自我の在り処を探す道中で四凶になったあのトウテツが見つけた痛みを紛らわす方法であって、矛盾を抱えた生死論争の最中に考えることを中断しなかった概念、食事。
その術であらゆるものを自らの内に取り込んでエネルギーとしてきたＳＲ……』

引力の流れから解放された藍とアキが、咆哮を上げたトウテツへと体を向ける。
朝日の中に在りて、牙と角を覗かせ、隆々と増大した筋肉を晒しつつ、四方八方に無数の残骸に飛び散らせる。

『でもね、行き過ぎた食事は過剰な生命を発現させるんだ。ほら』

レーダー塔の天辺に戻って見下ろしていたボルトは、協会の司令塔にも言葉を送っていた。
食べるという重み。
それが創る次という概念。
代弁してくれたであろうトウテツを待つ結末。

戦場の一角に静観が発生し、その中心にはトウテツ。
死体と瀕死のインスタントＳＲを喰らってトウテツの外見に変化が生じていた。

『強力すぎる生命力はね、光を浴びせることで更に強力になるんだ――よっと♪』

ボルトの説明半ばに、事態までが急変を始める。
トウテツの胸元を一条の光が貫き焦がす。
誰の仕業か言うまでもなく、全員がボルトの光撃を思い出した所で、トウテツの変化が急速に早まった。

「なっ――!?」
「大……きい！」

見上げる、という言葉を頭のどこかに思い出し、藍は唖然とした。

『たくさんＳＲの死体を食べていたもんね。しかも死にたてホヤホヤ。
それだけ沢山取り込んだんだから、外からちょっと変化を与えるだけでも過剰反応するんだ♪
ほら、ジャンヌさんも知っているでしょ、アレ。
合成獣（キメラ）だよ』

巨大化が終わりの兆しを見せる頃には、トウテツというＳＲは人間の規格を破壊していた。十数メートルもの巨体に生まれ変わって。
そんな敵を見上げてアキと藍の二人は無言ながらに思った。
これが本当に勝利なのか、と。

明らかに敵を強大にさせただけのようにしか思えない。
彼女たちだけでなく、ＳＲとしてのキメラを知らない者の悉くは、ほぼ等しく絶望の淵に追いやられていた。

「なるほど、これなら勝てる」

しかし、同時に数名が勝利を確信したのも、まさしくトウテツが咆哮を上げたその時であった。

第５６話－Ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ　Ｐａｉｎ－（後書き）

サーカスの連中、ナイトメア非武装派の連中、協会の面子。
立ち塞がる全てが癪に障るが、それよりも尚腹立たしいものがあった。

敵作戦司令官である。
悉くこちらの出方を先読みして先手を打っている、ヒーローズの頂点に君臨する女は、この戦場のどんなものよりもキュウキをイラつかせた。

（ボルト・パルダンの引き抜き、サーカスの説得、小規模集団やナイトメア非武装派との同盟……全て、こちらの失敗してきたこと）

仁徳や人脈の違いが決定打となった戦力差。
数だけでしか上をいけないこちらの軍を、まるで烏合の衆と嘲るかのように、粗末な手で――しかし正確に――侵攻を止められている。

（……トウテツが出過ぎたこの状況、出せる切り札は残り３枚）

だが、安易に核を使いたくない。
高いリスクが付きまとうものの、核兵器ほど安定した信頼度を誇

るカードはない。これだけ強力なＳＲが多く揃った戦場でこれを繰り出しても、最悪発射と同時にコントロールを奪われてしまう可能性もある故に、実質このカードは愚策でしかない。
消去法で残るカードは二枚。
その一枚が、キュウキの頭に引っかかって離れない。

（ボルト・パルダン。あいつを利用できれば……）

発光する魔女を遠目に見つめながら、キュウキは目をつむる。

（いや、待て。敵はボルトだけではない！
向こうにはジャンヌに予知部隊、更にミギス・ギガントも付いているんだ。
“プレイヤ”を使おうにも先に読まれて対策を立てられる。使うなら、より多くの囮をばら撒いてからでないと……）

場合によっては核兵器以上の戦功を上げる可能性を秘めた、プレイヤというカードを指に挟んでキュウキは策を巡らす。ここは確実に行かなくてはいけない。
読み違いなんてあってはならない。
ならば、一撃逆転の可能性を秘めたプレイヤを用いるなら、数百万の味方をも犠牲にして本命を読まれないように舞台を整えなければいけない。

「――聞こえる？」

インカムのチャンネルを専用回線に切り替え、遥か後方の艦隊に通信を入れる。

「“ＣＰ”の準備を」

指示を飛ばしてすぐ、自らは上空へと翼をはためかせて戦場の全体を見下ろす。

予想外の戦力喪失。

暴走したトウテツを見下ろし、キュウキは奥歯を強く噛み締めた。

第57話－次がれる脅威－（前書き）

【　現在状況　】

＜芹真事務所＞
芹真：北部　で四凶大軍を足止め中
アイ：南西～南部　でトウテツと交戦中
トキ：中央塔頂上　で休憩中
ボルト：中央塔上空　でトウテツと交戦中（準備中）

＜黒羽商会＞
瀬賀：東部　へ移動中
ウラフ：北部　で四凶大軍と交戦中
ジュリー：〃
ギムレット：〃

＜セブンスヘブン・マジックサーカス＞
団長：四凶軍の艦長に変装して一服中
アサ：南西～南部　でトウテツ及び四凶軍と交戦中
他団員：西部　にて、やりたい放題

＜ナイトメア非武装派＞
ミギス：協会司令部　でジャンヌとの交代準備中
リデア：風向き検討中
ケイノス：上空に湿度ある空間を収集中
シーズン：ココアで一服中（ヴァン〇ーテン）

＜四凶（所属）＞
キュウキ（四凶軍）：前線の艦隊中を空間移動し続けながら適宜指示
トウテツ（四凶軍）：南部～南西部にて、アキ＋哭き鬼兄妹らと交戦中
トウコツ（協会）：ジャンヌの指示を待っている
コントン（四凶軍）：隠密活動中

＜Ｏｔｈｅｒｓ＞
会長：会長室にてメイトスと会話中
メイトス：会長室にて会長と会話中
ディマ：海底部　にて魔力の回復中
コルスレイ：東部海上　で欲望を収集中

．．．Ｎｏｗ　Ｔｏｔａｌｉｎｇ…■

第57話 一次がれる脅威 一

太陽光を背に浴びながら、両腕を晴天の空へ掲げ、二つの拳を揃えたら振り下ろす。
接地と同時に立ち上がる土煙は敷き詰められた煉瓦道と、その周辺に建立された時間的伝統を有する倉庫群を粉砕して震わせた証拠。

動作は腕を上げて振り下ろしただけ。
しかし、それだけの動作でありながらも被害は艦砲射撃一発分の範囲に及んだ。
衝撃波は地面を伝い、風圧は塵芥を散布。
飛散する破片は散弾と化し、現実にいくつかの命を絶命に追い込んだ。

「ゲホッ……」
「大丈夫ですかカンナ姉様!?」

「石飲んじまった……！」

南西部より移り変わって南部。
港湾エリアの真ん中にある倉庫と居住を区分けするメインストリートに、トウテツより変化した合成獣が巨体のままに四肢を振るっていた。

「大きいな」

キメラ。
ボルトはそれが狙いだと言ったが、その性質を知らない者には疑い深い言葉だった。
何せ敵は目に見えて戦力を巨大化させているのだ。

しかし、普段のトウテツなら取り込んだインスタントＳＲをただのエネルギーとして扱い、それを生命力や持続力となるスタミナに変換して長期戦に持ち込んだであろう。
ボルトはトウテツの口を壊して特性を殺したのだ。

「ボルト、さっきの光は回復の……！」
『うん。その光だよ。生命を与える光』

多くの者が戦慄を覚える中、ボルトに選抜された半数は異なる視点から巨大化したトウテツを観察していた。

人外の黒い肌は混沌を表したかのように渦巻き、その身体には皮膚や肉を思わせるものがなく、表面を黒い霧状の流動体に覆われていた。
巻けた角に、猛獣の如き生命への渇望に溢れる双眸と混濁に因る涙流。
人と獣に挟まれたかのような輪郭。
全身の殆どを黒色に染め上げた中で、右腕だけに薄く浮かぶトウテツ紋。その形態は不安定、特に指とその先は全体的に見ても、形は不安定で流動的、煙が集合して辛うじて形作っているかのようだった。

（あの右腕……それと口が口か）

ボルトが説明する以前にアキとアサの二人は気付いた。
確かに、巨大化したトウテツは質量的な強化にこそ成功してはいるが、その代償として“全身過食”の名が示す全身の食事口を失っている。
但し、右腕と顔にある口を除いて。

（大きくなってリーチと火力が増大……どうしろって言うのよ、ボルト）

『放置してもいいんだよ～♪』

「はぁ！？」
「カンナ姉様、落ち着いて！」
（やはり、魔女はキメラを知っているか）

「……どういう事か教えてボルト」

各々が体勢を整えた所で巨大な二撃目が降ってくる。
掲げ左、引く右。
振り下ろされる左拳が足場を砕く。
引き左、薙ぎ右。
広範囲を横薙ぎに飲み込む右腕を、生存者達は揃って飛び躱していた。

『トウテツの口を二点に集めたの。
確かに、大きくて重くて硬いかもしれないけど、それは皮膚だけ。
中身は吃驚（びっくり）するくらい柔いんだ』

「藍！大丈夫か！？」
「藍姉様！トウテツが――！」

離れて戦っていた姉妹と、無言で駆けよって来た兄の無傷を確認し、まだ無事を確認していないアキを探す。
右腕がもたらした一帯への被害は、平原と化した周囲を見れば瞭然。
左腕の攻撃は見た目通りの打撃に対し、右腕は相変わらずの消滅力を有しており、飛んで躱し切れなかった者の足を見れば分かる通り触れた分だけ削られていく。
避け損ねれば一片の肉片も残らず、それこそ神隠しのように逝去することになる。

「藍、彼女なら上だ」

目まぐるしく視線を移す藍に気付いたアサが上空を指差す。
その延長線上にアキは居た。
朝空を、誰よりも高く、誰よりも平等に、トウテツの頭部と同じ高さまで跳躍し、意思の有無を読ませない視線を正面から受け止めている。

（食べることが、生きること？）

刹那の狭間。
トウテツという自我を見失った生命。
そこでアキは、充溢（じゅういつ）するほどに与えられた生命力と、他命さえ口にすることを厭わぬ超食力に挟まれ苛まれるトウテツを見破った。

消滅力と溢れる生命力。
これが痛みを伴う矛盾と化し、儚いほどに細りきった自我を見失うまでに追い込まれていた。

同じ空気を吸い、同じ空間にあって、互いに視線を結ぶことにより、互いの共通と差異を認め合う。
そんな経過の果てに、様々な意味での戦いに大きな白黒の星がつけられようとしていた。

「私も？」

黒球を放つ。
それに抉られた皮膚や筋肉の狭間から鮮血を飛び散らしながら、トウテツは反撃の拳を繰り出す。

同時に、四凶の意が空気のようにアキへと伝る。
ボルトやアサ、ジャンヌ、またトウテツ自身が、四凶の死を確信していた。
巨大化してしまったという意味を解し、自身の存在感をコントロ

ール出来なくなったことだと諦め――しかし、アキと言う人間が、人でなくなった巨体の前に闘志を纏って目を向けて来た――心の奥底の、更に最底辺と言える場所から止まらぬ憤怒が湧き出してくる。

人は誰しも四凶を持つ。

どんな聖人も、その者が人として生まれたのなら、それは避けることのできない宿命。

協会長にもある。

純度の高い四凶であった人間はもちろん、まだ四凶やその概念を理解できていない子供たちにも、何時かは四凶としての覚醒が訪れる。

老人も赤子も、男性も女性も、名を変えようが、性を変えようが、国や言葉や文化や流れを変えようが、どんなことをしようと四凶は必ず付き纏う。

特に、トウテツという四凶は多くの人間の中に眠っている。

拒食も過食も、鵜呑みも盗意も、偏食も整食も、人が生きようとするなら社会の内外さえ関係ない。

そもそも生に対してトウテツは憑くもの。

『だから、内外が相互に作用し合うようにしたんだ。

活発すぎるお口に自分自身を食べて貰うの』

（そこにＳＲ界隈でのキメラが持つ弱点が加わる……）

（そもそもキメラというＳＲを創ろうという計画は昔から存在した。

複数のＳＲを融合させ、より強力なＳＲを生むキメラ計画。後のパンドラや器プロジェクトの前身とも言えるＳＲ発現計画が、ナイトメア武装派と呼ばれる者達中心に計画・進行されていた）

強さを求める。
上を目指す。
変化を望む。
言わば変化の過程であるソレらにトウテツは必要不可欠。
言葉を知るも、暴力を覚えるも、それら混ぜ合わせて越えてゆくも、時というものが人の成長に付き添う限り、トウテツが離れることはない。

（特に、トウテツの属性に早くから目を付けていたシリウス・フォーランドはキメラ実験の祖として有名だ。より多くのモノを取り込む力を持ったＳＲを中心にキメラ作成を実行したが、結果は失敗）

『そもそも、キメラの生命はどんなに長くても１日程度なんだ。融合素体が双子であってもそれだけしか生命維持できないのに、赤の他人同士から創るキメラの活動時間はもぉ～っと短いんだ。
生体兵器として用いるにはとっても効率の悪い存在なの。生きた無誘導ミサイル程度の取り扱いが限界なんだ。
それにこのサイズだと……』

「アイ、カンナ、スミレ。
これからトウテツを転ばす。手伝ってくれ。
今のトウテツ――キメラのサイズだと、生命活動時間は１時間と動いてはいられない筈だ」

朝日の中で巨体が動く。

『皆聞こえる？
トウテツの口は暴走状態で、身体はキメラ化している。今なら銃とか大砲撃ってもちゃんと喰らうよ』

アキの黒球を受けたトウテツが咆哮を上げる。
風圧を伴う音声に、多くのＳＲが目を細める。それを止めんと、ボルトの声を受けた防衛部隊の一人が無反動砲を構えてトリガー。トウテツの肩口を爆撃し、そこから飛散した血肉を朝日の中に撒き散らしてみせた。

『大体５分くらいで勝手に絶命すると思うから、出来るだけ被害を最小限に抑えて戦って頂戴。ここからは持久戦だよ』

キメラの右腕によって均（なら）されたメインストリートとその周辺に、巨獣を討たんとするＳＲが集う。
アキはその最前線に着地――咆哮を間近で聴いて三半規管は若干の麻痺――失敗しつつも、その両脇を藍とカンナに支えられて視線をどうにかトウテツに固定できた。

バズーカ、アサルトライフル、スナイパーライフルで装備した防衛部隊８名。
リカイソウエンという名を持つ鈍器諸々を装備した鬼が４名。
上空で光を集める魔女が１。
借りた日本刀を片手に、刀身に黒を纏わせる少女が１。
対してトウテツは１、しかし合成された生命。

周囲を無数に囲まれながらも、双方眼前の敵の見に向かってそれ

ぞれ得物を構え放った。

最初に掛けたのは藍とアサの遅延陰陽術：薄（すすき）。

しかし、活性化した生命力で迫るキメラに対して現れた遅滞効果は微々たるもの。

僅かでも速度を緩めたキメラの足元に向かって、次の二チームが動き出す。

無反動砲を装備した防衛チームと、強化の術を施されたスミレが、それぞれ左右の足へと攻撃を加える。片や脛への砲撃、片や足首への金棒による打撃。

抉れる血肉に顔を濡らしたスミレと、再装填を手早く終えた砲撃チームが入れ替わり、逆の足を攻撃してキメラの足元から離脱する。

まるで破城鎚（はじょうつい）の如く巨大な打撃が迫った。

体感時間は生体のサイズに反比例して伸びるという概念を覆すような速度。拳のサイズは縦にも横にも広く、大型ダンプカーとの衝突よりも効果範囲は広い。

逃げ損ねた防衛隊員が一人肉塊へと早変わり。

「固まるな！個々に惑わして撹乱しろ！」

防衛隊長一声に、全員が武器を扱いながら個々に移動と攻撃を開始する。

足元からの砲撃と銃撃。

跳躍してキメラの左腕に乗って肩まで登り、人で言う頸動脈の通っている首筋へ斬撃。

手榴弾の投擲――を横から飛び出したスミレが金棒で殴り飛ばし、キメラの顔面を爆風が襲う。

踏付け（ストンピング）を躱し、飛散した破片の被弾を極力避ける。

「リロード！」
「右肩だ！撃てッ！」
「応！」

「カンナ姉様、アレ！」

撹乱戦法を採りながらも、その中で少しずつ連携は生じていた。

『華創実誕幻』

「ロケット行くぞ！」
「思っクソにぶち込んでやれ！」

「右腕が来るぞぉぉっ！」
「……！」

大振りを予想させる予備動作に入るキメラ。
絶対とも言える消滅力を誇る右腕が、溜めの動作を終えて次過程に移る。
が、

「オラ！喰ってみやがれ！」

鬼の投擲がそれを阻害した。肉体強化の術を何重にも施して一っ飛びに港まで跳んで移動したカンナは、両腕の力をＳＲの解放と共に全開、停泊していた半壊のコンテナ船を持ち上げ、キメラの顔面に投げ付けたのである。

絶大な質と重量による激突に、首を曲げたキメラは全身のバランスまで崩し、振らんとした右腕で虚空を裂く。

「二段：芙蓉（ふよう）！」
「二段：鈴蘭」

一撃離脱を繰り返す最中、キメラの全身に斬撃の風が見舞われた。藍とアサの連携術がキメラの全身に無数の切創を刻み、そこへタイミングを見計らっていた防衛部隊が焼夷手榴弾を一斉に投擲した。

そこへ三体の鬼も火炎と電撃の術追撃した。

「一気に焼け！」
『おぉ！』
「三段：向日葵！」
「三段：蒲公英」
「二段の上！飛燕（ヒエン）！」

榴弾とロケットの爆発がキメラを転倒させ、アサによって大量増加した藍の灼熱召喚がキメラの足から背中までを燃やす。アサや防衛隊が背面を焼く一方で、カンナは両手から発生した雷にも近い質

量を持ったエネルギーをキメラの側頭部に叩きこんで見せた。鬼が持つオリジナル術のなかで、特に殺傷の具合を加味する術が多く存在する二段において、取り分け飛燕の速度は朝顔（アサガオ）と並ぶ攻撃速度を誇る。

合成獣の上げる咆哮に連動するかのように、転倒した際に人工島の地面に大穴が穿たれる。噴出する爆炎と海水、背に走る激痛と電撃、頭を支配する生への欲求と絶え間ない激痛に苛まれる自我。

重なる激痛に比例する悲鳴を変えゆくキメラ。

そこにアキは想い気付いた。

トウテツが自分と似通った人間（なかみ）を己の中に見ていた、ということを。叫ぶ度に伝わる激情が耳朶と言わず、心と言わず、生命としての根底を打つ。それが食べるということ。出会いも別れも、全て戦いのような引きと押し。駆け引きという言葉に至らないアキでもそれだけは実感した。生きるための食、進むための食、変わるために欠かせない補充と備えの姿勢。人は己の内側に生成機構を持たない。人が創った、例えば乗り物のエンジンがそうであるように、外からエネルギーを生む何かを喰らわせることにより、金属の心臓は初めて鼓動を打つに至る。

だからこそ、食べる。生きて行くため、目的を持った以上、価値を知っている或いは知らないが為。自分という生命体を知ったからこそ、それを保とうと潜在意識は呼びかける。食料を食って蓄えろ、他人の話を聞いて応用しろ、邪魔者を殺して自分の生命時間を確保しろ、限られた時間の中を精一杯に生き延びろ――そのための手段なら無数に転がっている。何を喰らい、何を得るか、それは己が欲するままに喰らい選べ。

（私も、アレと似ているのか）

『皆気をつけて～！
トウテツのボルテージが良い感じで上昇しているんだけど、多分右――！』

海水を飲み込んだ腕が地中から迫って二つの命を飲み込む。
地を割って空に伸びた右腕が再び重力を得て降下を始める。全員が回避に移ったのと同時に、防衛部隊の長が粉砕された足場に移動を阻まれ、体の前面だけを振り来る右腕に攫われてしまう。
ボルトが警告を発し終える前に、キメラの右腕はそれまで蓄積された怒りを発散でもさせるかのように暴れ回った。現実には、激痛に苛まれながらもアキという馳走を混濁する意識と視界の中で探そうとしたため狂乱という行為に印象付けられている。しかし、それでもキメラは足場に無数の穴を空けて足元を走るケーブル類を露出させ、海への落とし穴を穿つ。
それが無意識に近いキメラの“行動範囲の限定”という攻撃であることに気付いた防衛部隊の面々が出来るだけ足場の続く場所へと避難した。
そんな状況下で鬼達は、戦域を離れることもなく、逆に攻勢も見せずにキメラを見上げているアキの元に駆け寄った。行動の全てを紙一重に、荒れ狂うように唸るキメラの右腕を躱しながら、妖刀を握りしめたまま相手を見上げているアキの肩を掴み、藍は問う。

「ここの危険が分からない？　下がるわよ！」

しかし、引く手を振りほどいたアキは、立ち直ったキメラの足元へ全力で向かって走った。
不思議極まりない少女との共闘に、藍は以前の自分を重ね見、か

と言って見殺しに出来る人物でないと悟ったが故に、右腕が頭上より迫ろうとしている戦域に飛び込んだ。

「魔女、さん。聞くけど、トウテツがこれ以上食べ続ければどうなる？」

『痛んで死ぬ』

「それ以外は？」

『以外って、どうして？
私のやり方が気に入らない？
もちろん、それならそれで別の葬り方も存在するけど、とても大変だよ？』

「え……あるの？」

アキの代わりに返答したのは藍だったが、それを聞いていたジャンヌやアサを含める全員がボルトの言葉に自らを疑った。

『キメラを深化させるんだよ』

「しんか？」

「それって、更に生命力を与えるってこと？」

藍の返答にボルトは肯定する。
その方法を言葉として並べればシンプルだが、実現にはボルトのように生命力を与えることのできる能力者が必要になってくる上に、対峙している敵を更に強大化させることを意味するのだ。しかし、

本当の問題はその先にあった。

『でも、やり過ぎればトウテツだけじゃなくて～、付近の戦場も消しちゃう可能性があるんだ』

「……ちなみに、それは光撃による可能性？」

『ううん、トウテツが消える瞬間から巻き込まれて消えるだけ』

「巻き込まれるって？」

『歪曲ブラックホール……あ』

鳴き声が上がる。

右腕を闇雲に振り回して破壊を続けながら、一秒たりとも止まない激痛の波に、しかし自ら発する体液さえ表面に現れる前に体内で消化されてしまう。

コンテナ船を投擲する際に零れ落ちたコンテナを鷲掴みし、キメラの顔面に再び投擲するカンナを見守りつつ藍やスミレはボルトの漏らした小声に悪寒を覚えた。

『やってみる？

トウテツのキメラ化を深化させる――つまり、生命として超過した質量とエネルギーを与えることが必要があるんだけど』

『こら、ボルト。皆が必死になっているこの場で遊び心は禁物よ』

キメラの地団太によって巻き上がる粉塵の中、藍らに安心を与える声が――ジャンヌの指示によって――登場する。ボルト・パルダンと双璧を成す最上級のＳＲ、闇影の魔女：ヴィラ・ホート・ディマ、その人である。過去にボルトの姉として生活を共にしていたこともある彼女には、見過ごせないボルトの慢心が丸見えだった。

『キメラと交戦中の部隊は逃げに徹して。下手に刺激しないように。ジャンヌ、ボルトの提案は理想論よ。惑わされないで』

『えぇ～？　だってぇ、お姉ちゃんが落とした方が手っ取り早くない？』

『いいわよ、あなたが昔キメラと戦った時の事を連想しているのなら、まずその暴走した幻想を打ち破ってあげるわ』

言葉に若干の殺意や怒気を含ませながらディマは言う。かつて経験したキメラ戦時に用いた戦法を、今ここで再現するだけの魔力が回復していないと。というのもその戦い自体が戦法という言葉とは無縁とも言えるほど魔力量による押し切り、力技での決着であったのだ。ボルトがキメラを自我喪失するほどにまで生命体として過剰な光を与え、まともに直立することの叶わなくなったキメラを、ディマの闇が飲み込んでこの世から消去した。

『あなたとのサテライト・フルムーンで結構魔力を使ったのよ。それに艦隊や航空戦力も削っているんだから、キメラくらい貴女の方で落としてもらいたいわ』

『あぅ……ごめんなさい』

『私はあと数分“空腹の地”を使えそうにないから、そっちで自滅するまで見張っていれば私の回復よりも早く事は終わる筈よ』

『あ――――！』

白金と黒銀の魔女二人による会話が終わりに指しかかろうとしたところで、一方の視界に異常事態が飛び込んだ。

ディマからの警告が発せられてから僅か十秒、織夜アキという離令者が現れた。ただでさえ、危険の度合いを計測することが困難なほどに生命力を増幅させたトウテツに、単騎突撃する理由がはたしてボルトにはトウテツの暴食レベルに理解困難であった。

一方で、アキの接近を目の当たりにしたキメラは、トウテツとしての自我を微かに取り戻して恐怖を思い出していた。内に流し込んだ無数の生命がソレを死と認識し、伝播を強制して微かに生き残っていた意思を押し潰す。混濁する意思の全てを彼女に同様の評価を下し、接近に冷や汗と戦慄を覚え、身体の制御を奪って激しい抵抗を見せる。

（散々、食ってきた代償が……今かよ！）

（だいしょう？）

落雷のような左腕を躱す。飛散するコンクリート片の散弾を飛び越え、地面に手形を残したその甲より腕へと駆け上る。

（俺の声が聞こえるのか！？
……なら、幼くても、結構食ってきたお前には分かるはずさ。
食った分だけ生き物は苦しむ。
どうしても食いたい物を欲してよ、短い手を伸ばす時なんか特にだ）

消滅へ向けて最後の抵抗である集結を見せるトウテツの意思。それを無視するように暴力を振り回すのは、混濁した意思より成る生命体の混同固形。煉獄を想わす痛みの中に在りて、その原因どころかその痛感が誰の所有物かすら判別出来ない。痛みの左右も、大小も分からずに輪郭の見えない不快な刺激の襲ってくる世界に恐慌を抱く。明確な殺意が向いていることを見るでもなく感じ取り、体験するまでもなく予め知ってしまい、それ故に巨大な生命体は脅威の接近を拒み、取り付かれた今は必死に振り解こうと身体を勢いに任せる。

しかし、トウテツの犠牲となった無数生命の集合体であるキメラの肩に、アキは日本刀を突き立てて更に加速する。前傾するほどの勢いに体重を乗せて放ったキメラの拳は、攻撃力と威力を両立させることには成功していたが、肝心の攻撃対象であるアキに回避されてしまっては大きな隙を晒すしかなかった。

「行った……！」

見守る四人の鬼がペアとなって左右に別れて巨体へ照準を合わせる。

キメラの体に取り付いたアキは振り落とされないよう深々と突き

立て、刀の柄を握る手に力を込めるその光景を見て、アサは決着を察した。

（ディマはキメラ崩壊まで被害を拡大させぬように言っていたが…藍の生死繋綴を彼女が手にした以上、これは思いの外早く四凶を葬れそうだ）

アサが予想を立てるのと左肩から首筋、項（うなじ）、肩甲骨から右腕へとかけて日本刀で一本の線を描いたアキが、腕から右手の甲に駆けて走り、大蛇のような切創を残してキメラの体から離脱した。

（なるほど、さっきの黒いアレで右腕の消滅力を相殺したのか！水走りの術みてえに体が消滅力の中に沈んでいかないようにして、後は高速で走れば若干の入水も無いに等しい！あいつの黒い膜はどっちかと言うと“球体”　当然、藁よりも断然厚みがある！）

「カンナ姉様！アキさんの援護を！」

姉妹がそれぞれ、得物と投擲用の船舶を手にするのと同時に、妖刀に属する生死繋綴が創った切創に異変が生じる。

（血液じゃない――むしろ空気が流れ込んで行っている！）

藍が観察のため足を止めると同時に、アキは手の甲から離脱し終

えていた。
心配が減った所でそれまでとは違う大声を上げるキメラを確認する。

実際の所、キメラに激痛を与えたアキは、根拠もなしに試したかったことを実現してみただけである。藍たちに読心術があれば呆れていただろうし、諌められていただろう。だが、現実にもたらされた結果はまさしくアキの思い描いた通りのものであった。
ボルトはキメラの内側にトウテツとしての“消滅の力を生み出す根底”が残っていると言い、反して、その表皮外皮は炎や電気のみならず、銃弾などの物理攻撃も防ぐだけの力を持ち合わせていない、外見を除いて人間のそれと大差のない器官の一つでしかなかったということを教えてくれた。そこにアキは矛盾を直感した。内に口、外には保護幕のような皮膚。だが、右腕は剥き出しの口を武器として残している。
乏しい人生を送ってきたアキでも、風船と湯気くらいは最低限知っている。

トウテツがいま、どちらかの状態にあるのなら、消滅までの速度を速めることは可能なのではないかという直感は、体の制御を失ったトウテツや混乱する意識の集合体となりつつあるキメラよりも、ボルトやジャンヌなど味方の方にこそ大きな衝撃をもたらしていた。協会という大規模集団に於いても、キメラという異常なＳＲを目の当たりにした者の多くは初見であり、その外見と圧倒的力量からそもそも撃破するという概念に結び付けることができなかった。ジャンヌによって選抜されたオペレーターも、歴戦の防衛部隊も、中には英雄の称号を関するＳＲでさえ、キメラに対して打破のイメージを描けない者が数的に圧倒した。
しかし、それとは別の脅威に驚きを隠せない者たちも少数ながら存在した。

「ジャンヌ指令、千里眼部隊長から伝言です。
キメラと交戦中の少女の四凶が判明。
トウテツ、だそうです」

その属性を持つ人間は、不可解なほどに閃きや瞬時の応用など、場当たりに長けている。ボルトの光撃で弱体化しているとは言え、キメラに対する新たな攻め方を見せつける彼女が持つトウテツの深度は、もしかすればキメラの中に埋もれてしまった純四凶であったトウテツに匹敵するか超えるだけの要素があるのではないだろうか。

ボルトやディマのように既存の方法に依存するわけでなく、そこに新たな一刀を加えてキメラの崩壊を加速させた彼女は、果たしてどこから発生したのか。協会長でさえ理解できない織夜アキの生い立ちに、ジャンヌは並々ならぬ危機感を抱いた。会長を頷かせ、魔女にも認められ、トキ相手に一歩も引けをとらなかった実力者故、その力の所有者である以上強い四凶属性を持つ者だろうと予測はあったが、実際目にし、耳に届けてもらい、対処の方法を考える必要性に追い込まれた。よりにもよって……

「司令！キメラが海へ！」

「報告、各方面より巨大艦船が接近！総数６！」
「西部第一防衛海岸に巨大船が衝突します！」

戦況が転機を迎えたこの段階で、誰もが味方に対して頭を抱えたくはなかった。

おそらくトウテツはすぐにでも絶命するだろう。アキと鬼、それからボルトの光が追撃している現状から測って、掛かろうが2分以内に決着する。

しかし、現状の向く方角は良好と言える風向きを運びはしない。おそらく、トウテツは今、キメラとしての身体制御を、最後の力を振り絞って掌握するのだろう。両手両足を攻撃のために振らず、身体は西部の艦隊へ向け直し、巨体なりの全力を疾走に充てる。整い並ぶ倉を踏み荒らす。年季の入った屋根や壁に足を取られながらも、キメラとしてのトウテツは一直線に西部海岸を目指した。

キメラを眼で追い、その延長上にある方角に、それまで気に留めなかった奇妙なモノを景色の中に知覚し、鬼達は眉をしかめた。

「何だありゃ!?」

「大きい戦艦、でしょうか?」

(船と言うよりは城塞(じょうさい)だな、まるで)

「……っ! トウテツは突破口を開くつもりよ! ボルト!」

『分かってる!』

防衛設備も、そうでない生活エリアのあらゆる建築物を掻き分け、トウテツは西部第三防衛海岸を突破した。海水を掻き分け第二防衛海岸に突撃して海流装置を右腕で喰い壊しつつ、体当たりで海中まで伸びている防衛海岸の防壁を破壊。そこで右腕を掲げ――ターレットを用いて防衛を試みる部隊を丸呑みにし――同時にボルトの術を誘った。

すぐにでもキメラを仕留めんと、幾本もの青白い光線をを大気中に印すボルトだったが、

『あ……！』

慢心が一つのミスを招いた。

再び掲げられた右腕を焼き切ろうと、充分にチャージした光条を放った。が、それが誘い込みであったことに気付いたのは、第一防衛海岸が光によって焼き切られた瞬間であり、言ってしまえばまんまとキメラの誘導に引っ掛かったのである。

直後に轟くの咆哮は、海上で際限なく繰り返される砲撃の爆音を上回っていた。それが何を意味するものなのか、聞くまでもなく戦場でその光景を目の当たりにした面々は悟った。

「こっちに来るぞ！」

踵を返す巨体に、一度は安堵の息を付いた防衛部隊に再度脅威が蘇る。引き返すという行為だけで恐怖を煽れるほど、トウテツが見せ付けた破壊痕は大きく深い。その光景を見ただけで逃げ出す者もいれば、思考を解凍できずにいる者も居た。

進行方向に若干の修正を加え、キメラは進む。

ボルトを誘導したことに調子づき、しかし、それが最後の行動となるであろうことを十分に理解したうえで敢行する行為は、特攻。狙いは協会本部司令塔、或いはレーダー塔と呼ばれる中央施設であった。そこにどんな人物が居て、どれだけこの戦争に関わっているのか知っているが故に、狙わない理由などない。敵の総司令官がいて、敵軍の総大将が腰を据えているということは、一撃でこの戦争を終結に運ぶことも不可能ではない。

ごく当たり前の摂理に加えてキメラ、トウテツにはリトライの意気もあり、巨体は速度を上げてゆく。

「私を飛ばして！」
「投げて、下さい！」

歩幅や跳躍力を抜きにしても、キメラの突進に追いつく為、二人の少女はそれぞれ兄と姉の鬼に突然申し出た。
時間が無いことを理解していた二人は、揺るがない決意を以ってトウテツに臨む、藍と秋を両手で掴み、助走もなしに巨大な敵の進路上目掛けて投げは放つ。

『ボルト！』

「何さっ！」

空中で山なりの軌道を描く藍とアキの身体をボルトの光が掴み、二人のＳＲに空中での自由時間を与えた。
既にキメラの右腕は塔に触れることができる距離まで迫っていた。あと一歩踏み込めば戦況が変わる。
そんな強敵を前に藍は勇気を、アキは確信に満ちた実験黒球の生成を始めた。会話もアイコンタクトも、一切の接触なしに二人の意は並びを揃えて四凶の迎撃に向かった。立ちはだかるように空中に現れた二人を飲み込まんと、キメラの右腕が伸びる。

「一段‥薄！」

最初にキメラを受け止めたのは藍だった。動体全てに遅延遅滞をもたらす術でキメラそのものをスローペースに落とし、そこにアキが続く。両手にありったけのエネルギーを集め、見慣れた黒を思い浮かべながら両手に“高速変化を続ける”黒球を錬成。

トウテツの右腕にそれを放つ。

一人だけスローモーションの中に落ちたトウテツの放つ右腕が、ゆっくりとアキの作り出した反時計回りに高速回転を続ける黒球の中へと入ってゆく。

トウテツがどんな状況にあるのか、防衛海岸を破壊して司令部に攻撃を仕掛けようとする行動を見てアキは悟った。

過剰な生命力を得て暴走しているトウテツの身体は崩壊寸前。その原因はボルトの作り出した状況もさることながら、トウテツ自身が持ち合わせていた食欲もある。塩分や糖分の過剰摂取が内臓を患わせてしまうように、命あるものが他人の生命を丸呑みにして無事でいられるハズがない。

「必要なら何でも言って！」

藍の声援だけを受け取り、アキは両腕を外側へと展開して黒球を作動する。

二人の身長よりも大きいな、反時計回りに高速回転する半透明の黒球は、瞬時にキメラの身体を分解し始める。数秒足らずで黒球に触れた箇所の表層を全て剥奪し、この方法が有効だと知ったアキは黒球に移動を発令する。これまでに繰り返してきた黒球は投擲のよ

うに、一度放てばコントロールできなくなるものであったが、今度の黒球は違う。条件付ではあるが、この球体はトウテツの右腕から奪った“生命力”によって操作が可能になっている。

（食い破れ……）

黒球が巨体の右腕を削ぎ進む。

腕を素早く引くことも出来ず、抵抗の一つも許されぬままトウテツは右腕を“解放”された。それまでに取り込んだ物質の時間・質量、生命体の意志・感覚、総じて万物の生命力・存在力――それらによって形成されながら、強力なトウテツ腕に喰われんとしがみ付いていた生命力が解放され、霧散を始める。

『生命力の塊がトウテツの全身だったモノ。過剰な生命力の強制で暴走した姿がキメラ。

そしてトウテツなりに全身の暴走に抵抗した結果、右腕に全身過食としての武器を残した……けど、それは同時にトウテツの全霊を掛けて死守していた部位がそこであることを示したの』

キメラの消滅を見守る藍に、同じく見守りながらも予想通りの現実を前に退屈していたボルトが話しかける。

『トウテツに支配できた部位は右腕のみ。これを、外界から取り込んだ生命体のスープと混ぜ合わせて、その部位だけを意図的に動かしていただけ。だから、あの腕だけ元のトウテツ同様の食力を持っ

ていたの。分かる？』

「右腕に全てを掛けていたってことでしょ？」

『そうそう。キメラになれたのは良いけど、実質トウテツだったのは右腕だけで他の部位は全くの他人。でも、生命の集合体となったキメラにとって、アキちゃんは共通した恐怖でしかない』

黒球が右腕を喰い上って肘まで達する。すると、黒球に呆気なく消された表皮とは明らかに異質な白いヒビが発生し、黒球よりも早い速度でキメラの肘辺りから肩、首筋や胴体へと伝播していった。

『最後の最後に、まるでトウテツの意思がしっかりと残っているように感じさせた行動だけど、あれこそ恐らくトウテツの本当の最後の一喝だったと思うよ。

何せ、キメラに成った時点でトウテツは自分と一緒になった他人の命を喰い続けていたんだから』

「……全身過食」

『うん。だから、一緒になった人たちは本当に残念なんだ。抵抗しようにも、そもそも取り込まれた時点で徐々に食べられていく』

内より風と得体の知れぬ破片を吹き散らすキメラの体中に、白いヒビが回りきる。

「待って、ボルト。他人の生命を食べてキメラに成った、違うの？」

『あれ？　藍ちゃんも分かっていないの？
トウテツの口を私が壊したの分かっていなかった？』

「それは、あの攻撃？　チャージするとか言っていた」

『そうだよ。
その結果、トウテツの全身過食っていう異名を作り上げた全身口は暴走。
敵味方まで暴食して、それがキメラになっちゃったの。
で～！
トウテツ最大の武器であった全身過食は消滅。今まで食べた生命の残留思念の逆襲が、トウテツをキメラという“極・超短命生物”へと変貌させたわけ』

ボルトの言葉を意識半ばに受け止める。
この戦場に来て初めてとも言える戦果にアキは無言で四凶の四散を、藍は四凶を撃破したという事実の重さを受け止めきれずにいた。

『食べ続けたことの痛みがトウテツ自身を死に追いやった。
過食と拒食の過度な繰り返して、それでも食べること以外考えられず、夢中になれるものを見つけられなくて長く彷徨っていた。
自分を殺して食べず、他人を殺して食べ、それをフツーの人よりも多く経験した果てに、トウテツはその痛みを知ってしまった。だから、トウテツはキメラにもなれたし、アキちゃんにも惹かれた。
それに～、念願の終焉にも手が届いた』

放心気味に、藍はアキの隣でトウテツだったモノの、ガラス片のような霧散するように消えていく、巨大であり偉大だったかもしれない敵の最期を見送った。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第５７話－

－次がれる脅威－

キメラ特攻の報は、協会司令部にも届いていた。しかし、司令部では自分達が狙われているにも関わらず、トウテツを防ぐ手段を口にする者や逃げ出そうとする者は一人としていなかった。それはジャンヌが他方の戦況打破にのみ集中するため、トウテツには一切触

れぬ新たな指示を飛ばしたからである。

「キメラの活動時間は既に限界を超えています。どんなに足掻いたところで私達に届くことは万に一つもありません。
私たちは敵の次策を攻めます。東部予備部隊は北部へ。
南部及び西部部隊は予備隊を投入。
アヌビスは後退、代わってゴーストを。
トウコツ、準備はいいですか？」

戦場全体に対する新手を打つ中、司令室の中で一人だけ浮いている男が笑みと首肯で司令官に答える。

「直ちにレーダー塔頂上に待機する色世トキと合流。
攻撃目標は追って指示します」

「いいのか、トウテツが突っ込んで来てんだぜ？」

「問題ありません。
いざとなれば切り札もありますし、何より、彼女たちが居ます。
心配は無用です」

魔女と新たな四凶とも言えるアキの戦力を比較し、並べて組み、その戦力がキメラ化したトウテツを防ぐに十分な数値を有することを算出していた。その信頼を脳裏に押しやりながら、ジャンヌは改めて頭を切り替える。

「一二六白陣壁、スタンバイ。
復元部隊は防衛設備と負傷者の回復を急いでください。
それから……敵の大型艦を『城塞船』と命名、これの接岸予測地点を計測。その場に火力を集中できるよう火器を配置し待機。レーザー砲フォルトの回復・充填状態がグリーンに戻り次第城塞船を攻撃。
敵大部隊の上陸が予測されます。
陸橙谷アサ、ヒラリー・マトン及び瀬賀クロウに連絡、砲撃要請。最低一方面」

逡巡を隠しながらもジャンヌは決断を下す。

「織夜アキに連絡。後退して休息を取るように、と。
間違いなく伝えてください」

言葉では休息と言ったものの、本心はアキの四凶属性を深化させないためであった。危険性が高いＳＲには極力戦闘に参加して欲しくない。それは色世トキに対しても同じ感情であったが、おそらく自ら戦場に出向いてきた彼は納得しないだろう。だからトウコツを付けて一度だけ戦闘に参加させ、それ以降は休憩室にでも軟禁しようと考えていた。

（……いや、考えても際限がない。謀反の危惧を読めない者ばかりという居ないわけじゃない。
私がキュウキの策を潰せば、士気も謀反も、戦況も有利のままに

運べる。それがこの数的不利を打破する唯一の方法）

「なぁ、ジャンヌ司令。
君一人で抱えるな」

口を噤み、頭の中を整理せんと黙り込んだ司令官へ、もう一人の司令官が言葉を投げる。

それはある種の援けであった。

協会に於いて、まともな軍師と呼べる人間は唯一ジャンヌ、彼女だけである。元々協会に攻め入る作戦を練る側の立場にあったナイトメア非武装派の現リーダー：ミギス・ギガント、この者は予め敵の戦力と役割を調べる役割りにあたっていたためジャンヌの責務を知っていたのだ。

「非武装派（おれたち）も最善を尽くすし、協力だって惜しまない。肝心なのは、ここに来て変な思い込みを抱いたり、負けん気に背中を押されて判断を誤らないことだ。戦争の中心であるここ、司令部の誰もがそうだ。時には勝手な判断も必要だろうが、それは状況が不足している場合に下すものだ。

加えて、この戦場でヒーローズのトップであるあんたが前に出なくてどうする？

剣を携えて進むか、知で以て皆を導くか……どうか、中途半端にはならないでくれ。死者が大勢出る」

「……それは、アナタの千里眼が捉えた“現状からの未来”？」

ミギス・ギガントは見て、言う。

この戦場の中央と言える場所に連続で、休むことなく指示を出し続けているジャンヌに、多くの仲間が休息を勧めるのだが、それを聞き受ける彼女ではない。一切の休息を断ることもある意味で奮戦ではあるが、しかし頭脳が区切りを拒むことはよろしくない事態である。

どんな人間の頭脳も、外界からの情報遮断が作業の回転効率を高めるのだ。

ＳＲであること、英雄の名を継いだ者としての自負が、人間であるという自覚を薄めている。功績ある人間ほど、且つ死に腕を回した者に共通して見られる間違いを彼女は実践していた。ジャンヌは間違いなく間違ってしまう方向へ流れていた。疲労の蓄積は一般人と変わらないのだ。ボルトの助けが戦況的にそれを僅かに緩和していたものの、それとほぼ同時に発生したキメラ、城塞船、厚すぎる包囲陣に加わる敵増援艦隊という悪因が彼女の間違いを押していた。

「ミギス・ギガント司令。一時的に全権を貴方に委ねますが――」

「分かっています。ジャンヌ司令は三手も四手も先の敵に備えてください。眼前は俺が潰しますから」

十数分の休憩を宣言し、ジャンヌは駆け足で司令室を出てゆく。彼女の去った司令室に一度だけ妖精が通り掛かる。代理指令であるミギスも、オペレーターであるＳＲらも、ジャンヌの足音が消える瞬間を待って呼吸を整えた。

「さて、初めましては言い済ましてあるから必要はないだろうが……」

数秒の沈黙を代理指令が破る。
一方的に話しかけながらも、オペレーター達は気を持ち直して通信コンソールに注意の七割を傾け、残る意でミギスの言葉を待った。
その間も各戦域から伝わる情報を書き留め、記憶し、記録しながら――ミギスもそれを予見の中で知り――方針の変更を告げる。

「ジャンヌの防衛力は見事という他有り得ない。それは彼女の絶大な信頼が作り出す堅強な土台だ。
僕には到底崩せない構えだった。
さて、問題はここからだ。
彼女には悪いが、ここからは違う方針で以て敵を迎えようじゃないか」

四方に八方加えた十二方の戦況を読み取ったミギスが通信機を手に取る。

「こちら、司令室。
ジャンヌ司令に代わってミギス・ギガント。これより代理で指揮を執らせてもらう」

最大の問題は士気ではなく、信頼に有り。ジャンヌという人間が信頼に値することを知っている協会ＳＲは多いが、ナイトメア非武装派のＳＲであるミギスを知る者は少ない。仮に指示を送っても、信頼に足らぬと味方に不動の構えを取られては逆襲どころでなくな

る。
が、ここに来てジャンヌの置き土産がその問題を解決してくれる。
「目的を“粉砕”へと移行する」
配置である。
小規模集団や非武装派の人間をまんべんなく戦場に配置、移動させることで協会ＳＲだけという偏った部隊がどこにも在りはしないのだ。
（ジャンヌも気付いたようだし、トウテツを誘導する通信機も持って行った。
これでキュウキはこれまでにない程苛烈な攻撃を仕掛けてくる。
行ける。押し返せる！）
城塞船の接近を観察しながら破壊の方法を思いつくミギスの考えと、司令部を離れたジャンヌの算段は敵の勢いを変えることにあった。この誘導をキュウキは見落とさないだろうし、確実に警戒もするだろう。だが、四凶軍の弱みは長期戦を臨めない大軍である。力任せに短期戦を挑んでくること必至。
現に、ジャンヌが司令室を離れたという事態をいち早く掴んだ者達は、慌てて戦場へ飛び立つ最終準備を始めていた。
―東部エリア　第二情報室前廊下―

海面に近い階層でありながらも振動が伝わってこない不気味な廊下を歩み、男は指先で小さな火を転がして平静を求めた。

戦場全体を見た時、四凶軍は東部海上への侵攻と上陸を断念していた。その原因は東部海上に突如出現した結晶と黄金の波止場である。防馬柵のように何重にも連なり、またそんな空間を作り出したＳＲ本人の“光撃”も相まって隙らしい隙が一分もなかった。砲火の多少という意味で、東部戦線は多方面に比べて大分静かである。沖合に隙を窺い突撃の時を待つ艦隊が整列しているものの、一向に解除される気配を見せない黄金と結晶の地帯に、他方の支援に抜け出す者達が現れていた。四凶軍のみならず協会の防衛部隊も、である。

（だからって、この静寂は異常だ）

火に飢えた煙草を口で遊ばせながら、妖狐のＳＲ：瀬賀駆滝（セガ　クロウ）は人影一つ見当たらない廊下を足早に進んでいた。確かに南北部の戦線を押し返すためという理由で、この方面の警備を離れた防衛部隊は指の数以上にいるが、しかし、全員が同じ判断を下したというわけではない。ある程度こちらにも戦力が残っているという話を聞いたからこそ、気休め程度の安心を背負って足を運べたのだ。

瀬賀だけでなく、背後を護る防衛チームＥ－０３の面々も同様の不安に駆られていた。数分前まではこの区画にも喧騒はあった。オペレーターが伝える多方面の戦線状況や現場からの応援要請、味方の前線を伝える放送や伝者に、人の心を駆らせるには十分すぎる緊張も、それこそ緊張感の大売出しで感覚が麻痺するほどだ。

それなのに、急転を見せたこの静寂は何であろう。

退避勧告が新たに発せられたわけでもなし、敵が侵入したという放送があったのは十数分も前だが戦闘痕は見当たらない。

「血の臭いだ……」

「血？　まさか侵入者が――！？」

銃火器で武装した隊員らが瀬賀の一言でフォーメーションを整える。

瀬賀と並ぶ先行隊員が一人、通路の両脇に沿って歩を進めるバックアップが三、後方警戒に一、遊撃要員が一。

歩行速度を合わせてくれる彼らを極力意識しつつ、嗅覚を最大限にまで活用して血臭の流れを辿る。その先に提げられたルームプレートを読み取ると、第二情報室の文字。

「……入口を固めてくれ。中には俺一人で行く」

「え、一人で？」

足を止めた瀬賀に部隊長が尋ねる。九尾は敵が一人だけ居ることを表し、同時に戦闘に発展した場合のフレンドリファイアに注意するよう喚起する。指先の炎をちらつかせるが、それだけでも瀬賀というＳＲの通り名を味方に思い出させるには充分だった。異常な静寂を瀬賀同様に感じ取った面々は一縷の隙も作らぬよう周囲に注意を配った。

無人の廊下からデスクトップパソコンの並ぶ白色の室内へ踏み込む。白色の壁と天井に合わせて揃えられた白のデスクトップパソコ

ンとテーブルの整列、それを乱す席が一箇所。そこには灰色の床上にキャスターチェアを転がしながら、両足を隣の椅子へと投げ出している大柄の男が居た。

入口からの距離は約5メートル。

それなのに、部屋に踏み込んだ瀬賀は男の攻撃可能距離に身を置いたこと、どうしてか自分が不利な状況に置かれていることを自覚した。いつ攻撃が飛んで来てもおかしくない状況下、瀬賀の予想に反して最初に飛んできたのは暴力でなく、言葉であった。それも椅子に掛けた容疑者の穏やかな声の。

「誰だ？」

「よぉ、ドラキュラ伯爵」

「……その声は“殲命獄炎”か。どうした、喧嘩でも売りに来たか？」

男は目を伏せたまま椅子にもたれ、一切の入力を見せずにくつろいでいた。まるで戦争とは無縁と主張せんばかりの脱力した態度に加え、デスクトップの前に散乱する酒瓶やスナックの袋が目につき、鼻につき、神経に障った。瀬賀は眼前の男に問いたかった。なぜ戦場のまっただ中で宴会を開いているのか。そもそも、常日頃からダニのように付き纏う忠犬達は何処へ行ったのか。しかし、そちらの質問は心にとどめ、肝心の疑問を吸血鬼に質す。

「聞きたい事がある。お前から漂うの血の臭いは何だ？

ここの静寂とお前の関係を明確にして貰いたい。ていうか、しろ」

「ふん！何で俺がそんなことを口にする必要があるんだ。逆に聞くが、お前は何様のつもりでそんな間抜けた質問をしている？」

穏便の雰囲気が消える。

伯爵と呼ばれる男と狐が互いに溢れる闘志をぶつける。敵対関係の構築が得意な伯爵と、商売敵の生産を特技とする瀬賀は、それぞれ戦争という状況を差し置いても親しく言葉を交わす関係にはなかった。片や協会所属、片やナイトメア武装派の肩を持つ立場と言うことも手伝い、過去に一度は立ち会ってもいる間柄であり、それぞれの危険度は十分に承知しているつもりだった。

「間抜けがどっちなのか、ってその結果はもう見えているだろう」

「俺にこびり付いた血臭のことを言っているなら、確かにそうかもしれん。

全くもって残念だよ。俺が間抜けになっちまった。しかも、ツキにだって見放されかけている。

なんたってよ――」

椅子に背を預けたまま腕を伸ばす伯爵が、キーボード横の濃厚な赤い液体で満たされたワイングラスを取る。すかさず、瀬賀はその液面に火炎を発生させてた。突如として発生した火炎に温まる内容液だが、伯爵はそれを躊躇せずに飲み干してしまう。炎ごとである。

瞬間、

「チッ！　防衛隊逃げろ！」

「――芹真（オオカミ）でなく瀬賀（キツネ）が匂いを辿って仕掛けに飛び込むんだからな。やはり、撒く餌の種類も考えなくてはな」

瀬賀の先制攻撃が第二情報室を紅蓮で埋める。溶岩流の如き激しい爆殺火炎に白い部屋が消える。

部屋の中より吹き出る風は全てを焦がす熱風を宿し、隊員らの体勢を崩すほどの圧で吹きつけた。

壁を背にして回避に専念する防衛部隊員たち。瀬賀が誰かを攻撃したのは分かるが、果たして部屋一つを丸焼きにする程の火力を必要とする相手なのだったろうか。予め瀬賀に聞いておけばと後悔しても後の祭り。

直後、部隊長の疑問は、恐ろしき事態の到来と共に疑問を解消へと持っていかれた。

「はぁぁぁぁっ！」

火炎迸る第二情報室の出入り口から、爆炎と共に床上を滑空して何かが壁を破壊して通過した。燃える部屋から、朝日を浴びて変色を始めた戦場の空へと姿を消す。

部隊長や彼に従う部下たちは現状を把握しきれず、壁に開いた穴とそこから外へ出た何者かを追って顔を覗かせた。それは同時に、天井裏や壁に潜む伯爵の配下に大きな隙を与えることとなった。

瀬賀と絡み合ったまま、闘志を含んだ喝の言霊を吐き出す。高速移動によって生まれるスリップストリームで狐の炎を振り消す。

戦場を室内から屋外へと移されたことに瀬賀は舌打ちする。

「このエリアの防衛隊をどうしやがった！？」

「貴様がそれを聞いてどうする！」

多くの予測が飛び交う中で、少しでも確信したことと言えば伯爵――ドラキュラの名を継いだ男が東部エリアに沈黙をもたらした張本人であるということ。

そして、

「その答えを死出の餞（はなむけ）とするか！」

「こっちの台詞だよ、エセ伯爵が！」

同じ協会本部の足場に体重を預けて居ながらも、瀬賀や協会ＳＲが四凶に闘志や殺意を向けているのに対し、伯爵のベクトルは四凶ではなく協会とナイトメアの連合に向いていた。

行動の一つ一つを取っても躊躇が見られず、瀬賀の頭には謀反の文字と幸運の文字が浮かび上がる。

吸血鬼のＳＲは協会を裏切る気だ。

幾枚ものコンクリートを突き破り、金属の壁をも経て、黒翼を展開した伯爵に抱えられたまま、瀬賀は東部住宅エリアの空中にてその身を脱する。

「エ……フン、良き手土産が見つかり、しかもご足労願えた事には感謝すべきだろうが、しかし！」

再び掴みかかりに背に回される伯爵の両腕を、単純な腕力に火炎のエネルギーを加えることによってグラップルを押し切る。腕力の増強でホールドを防いだ両腕に火炎を纏わせ、伯爵のブラックスーツの胸元に鉄拳の連打を見舞う。覗くシャツを焦がし、それでいて空中を自在に飛行できる吸血鬼に有効的な打撃を与えるために左腕で喉を掴み、右腕は溜めのモーションに移行、後退しようとする伯爵が何らかの抵抗を取られる前に顔面、次いで胸部と右拳を走らせて打ち抜く。意思と空気の供給にノイズを与えた所で今度は左手に力を込める。親指を立てて掴んだ吸血鬼の喉仏の窪みに爪を立てる。対する伯爵の抵抗は、妖狐のそれを上回る握力であった。燃え盛る腕を躊躇なく掴み、岩をも砕く勢いで瀬賀の左腕を潰す。

「私を伯爵と呼ぶのは我慢ならん！
“ニルチェルト・エンデバー”
貴様には是非ともこの名を刻んでから死んで貰う！　そうでなければ腹の虫が収まらん！」

一度離れた二つの影が再度の衝突、再度の離脱を見せ、また繰り返し、徐々に結果を変えつつも繰り返す。
黒線を宙に描き、火炎が空の青を阻害し、火の粉を散らせ、時々血粉を撒く。
高速移動で火炎の熱によるストレスを避けつつ一撃離脱を繰り返

す吸血鬼に対し、瀬賀はその軌道を予測して回避と同時に進路上に炎の塊を放射する。

だが、両者ともに決定打を与えるには至らない。時々触れる拳足や火の粉、硬質な翼が服や顔面を掠める程度で、傍目から見る分に二人の力量は拮抗していたし、実際に二人のダメージは微々。

すれ違い、並走し、衝突しても互いに警戒し合っていることが原因で思うような状況に持ち込めない。

（コイツは俺のＳＲ特性を覚えているな！）

（チッ！　力勝負でも勝ち目は薄いってのに、血まで吸われちまえば勝算皆――――ッ！？）

青に染まり出した濁り空で、狐の炎と複数の黒翼が踊る。

何度目かの衝突を経て、朝日に火炎を揺らした瀬賀は、自分が死地に陥っていたことに初めて気付いた。伯爵と言う強大な敵に気を取られ、また潮風と死臭が漂う屋外に戦域を移されたことも加わり、自慢の鼻が周囲を取り巻くソイツらを察知することが出来なかったのだ。

“吸血鬼だけには包囲されたくない”

“伯爵に対して微塵の隙も晒したくない”

最も忌む展開を実現されて願望砕けた瞬間である。

指の数以上居るソイツらを数えながら瀬賀は舌打ちした。

「やっぱり、金魚の糞共が居やがったか」

「後の祭りだよ猪武者めが。
いや、狐か。
まぁ、猪だろうが狐だろうが大差はない。獣狩りと行こうじゃないか」

おそらく取り戻せないであろう冷静を、少しでも内から失わないようにと周囲へ注意を配る。
東部生活居住エリア空中、地面からおよそ２０メートルの位置。
敵の戦力は、吸血鬼神と呼ばれた男：ニルチェルト・エンデバーとその配下３０名からなる吸血鬼軍団。
これにより包囲され、しかも対抗する戦力は――防衛チームの全滅を傍目に確認して――孤独。
敵吸血鬼ＳＲ最大の強みは自由飛行、それから伯爵の能力である。更に言うなら個々の耐久力と連携。伯爵配下の吸血鬼たちは、協会の中でもトップクラスの戦闘能力を誇り、チーム戦術ではアヌビス一小隊に匹敵するという実力を併せ持っている。

（トドメに武装までしてやがる）

蝙蝠（こうもり）を連想させる黒装束の吸血鬼軍団を前に瀬賀は丸腰である。
最大の問題は人数。質量もそこそこに高い個体が群集と成った時ほど恐ろしいものはない。烏合の衆なら片腕一本でも焼き払えるが、眼前の相手が手練ともなれば己に死点を科さなければ勝利は掴めない。最悪の場合は即死も考えられる。

「遺言くらい聞いてやろう。誰に何と伝えようか？」

質問と同時に吸血鬼達の連携攻撃が始まる。

後方からの高速接近と、それに先駆ける眼下と頭上よりの奇襲。

上下の銃撃を灼熱の壁で溶解し、そこに混じって飛来する斬撃を拳足による打突で受け流し、辛うじて一撃離脱の高速飛来体術を躱す。

反撃の炎が手中で盛る。

足元を通過した吸血鬼に槍を、頭上を越えた奴には鞭を、避けては吸血鬼達の死角から炎の得物を作っては投じる。が、瀬賀の予想通りに集団での戦闘に慣れているそいつらは、ただの一人としてダメージと言える傷を負うことはなかった。単純に、高速移動物体は着火しづらいのだが、それを地でやられると瀬賀は本当の意味で丸腰になる。

「遺言か……チッ！　考えてみっか！」

背後からの奇襲に、ＳＲの半解放で対応する。

炎が象る九本の尾が、間隔をずらして接近してくる吸血鬼らを叩き落す。翼や頭部、四肢を重厚な金属を思わす質量を持った炎に打たれ、初めて吸血鬼達は苦痛を顔に表した。

気絶しただけの吸血鬼には炎を灯して負傷を深刻化させる。多勢に無勢の状況下、少しでも有利に運ぶためには小さなチャンスを一つでも逃してはならない。

圧倒的不利な戦況に挑む瀬賀だが、あらゆる手段を尽くしても、周囲の要素を思い付く分だけでも混ぜて計算すれば、この状況下で自分に勝率が全くないことに気付く。

完全包囲を解かない吸血鬼たちをいつまでも避け続ける自信はないし、そもそも逃げているのは性に合わない。それは吸血鬼の親玉にも言える。

攻めてこその人生。

守りに徹する人生は敗北一色の後悔船路。

強気の舵こそあらゆる状況を突破へ繋げる秘訣であると、そう信じているからこそ瀬賀は諦めないし、吸血鬼たちを攻め続けられる。

ニルチェルトは謀反が露見して包囲される前に決着を望んだ。

焦りは禁物と自分を落ち着かせ、確実な方法で、出来るだけ素早く瀬賀を葬ろうと考えを巡らせる。さもなくば、ここで足止めされては瀬賀と状況を交換することになる。だからこそ、瀬賀に聴き取られぬように速攻の指示を飛ばした。

「俺が行く」

（悪い……ギムレット、ジュリー、アスモデウスズ、ウラフ。黒羽商会はお前達でどうにかしていくしかなさそうだ！）

青空を大火が彩る。

右腕に纏った炎を放射して、複数の飛行する吸血鬼を薙いで叩き落とす。左手で外側から迫る三つの影に着火の粉を放出し、触れた二体を紅蓮に包む。焼けながら右側へと通過していく吸血鬼の背中を踏み台に、頭上で銃器を構えた吸血鬼目がけて急接近し、高熱を纏った蹴りを入れるが、吸血鬼はＧ３Ａ３という長物（アサルトライフル）の特性を利用し、盾として構えて蹴り足を止める。銃器としての機能は奪ったものの、予想以上に早かった防御対応に瀬賀は隙を作ってしまったことに対する焦りの発生に気付く。

急いで足を戻すが、吸血鬼の一体は既に瀬賀の背後で炎の尾をくぐり、首に太い腕を回していた。焦りを覚えた頭に混乱が訪れる。急に締め付けられた首が苦しく、満足に呼吸が出来ない。炎の尾を背後のそいつに密着させるが、腕力が緩む気配はない。背後の男を振り払おうと必死に足掻く瀬賀だが、その間に次々と吸血鬼達が殺到する。

絡まった腕を焼き切ろうと、首に掛かった腕を両手で掴む瀬賀。その隙を突き、正面から突撃した吸血鬼が九尾の鳩尾（みぞおち）に強烈な拳を一撃見舞い、同時に火炎の尾で焼かれる黒翼の回収に二体が真下から迫り、瀬賀から力づくで仲間を剥がす。逃がさんと岩石をも溶かす高熱を右手から発して背後へ振るが、瀬賀の熱は空を切るばかり。勢い良く振りかえった所へ、新たに接近していた吸血鬼が瀬賀の方向転換に合わせ、カウンター気味に顔面へのローキックを極める。酸素供給と意識を短時間でも完全に断たれ、連鎖する脳震盪もあって瀬賀の体勢が一気に崩れる。

（本当に――ッ！）

赤き火装が有翼の鬼を叩き落すが、一対多という状況で独身が不利に陥った場合、敗北の結末を回避することは容易でない。

それを自覚しても諦めないのが瀬賀ではあったが、敗北の色は既に見えていた。

吸血鬼たちは隙を与えまいと更に連続する。上体を揺らす瀬賀の胴体へ滑空タックルを喰らわせ、しかし、地面に激突はさせない。減速して瀬賀の体を地面目掛けて放ち、空中に解放された身体を、今度は背後（じめん）から頭上の青空目掛けて急加速して接近してきた別の吸血鬼に高速で投げ渡す。飛ぶということが非日常である瀬賀は不慣れなGの圧に目を細め、飛びかけそうな意識を繋ぎとめるのに必死

だった。
瀬賀の意識が辛うじて生存のみにしがみ付いている間、吸血鬼たちによる人体高速キャッチボールが繰り返される。瀬賀が反撃してこない様子を窺っては刃物や銃器で、最初は掠り傷から与え初め、徐々に深い傷を全身に隈なく刻んでいく。

（厄介な連中だ！）

黄金に輝く東部海上に乱反射する陽光を横目に、瀬賀は保てぬ高度に地面との距離を縮めていた。
しかし、それでもなお明確な裏切り行為を阻止せんと大火を振るうんは、瀬賀なりの意地でもあった。連続する衝撃に軋む筋肉と砕ける骨格に激痛を覚え、我が身ごと焼いてるものと錯覚させる神経の痛みが中枢へ熱を報せる。一体、吸血鬼たちとの接触でどれだけの個所が折れ、切創を刻まれ、弾痕を穿たれたのかさえ分からない。ただ、間違いなく殺されることだけは再認するまでもなかった。この状況を覆すことは二度と叶わない。
笑い声を零しながら襲いかかってくる吸血鬼を可能な限り躱し――回り込まれ――フォーメーションから脱しようと試みるも数に任せて攻め続ける吸血鬼たちは止まる気配を見せないずに抵抗は無為。続く痛みに流れ出る鮮血、弾丸の気化と吸血鬼の回避に手間取りながら、浪費の果てに己の死を見る。圧倒的戦力差に加え、吸血鬼たちの腹は満腹であることが戦場に混じる空気から嗅ぎ取れた。

（ニルチェルトの野郎め、事前に準備していやがったな……！）

黒の度合いが一層強い伯爵が動く。
それは火炎に憤りを載せて拳に纏う九尾の背後を見つけた時だった。
狐の命を風前に晒してはいるものの、既に二名の部下が焼かれて絶命した。これ以上損害が増える前にニルチェルトは手を打つ。
重傷を負いながらも、時折狐の目はこちらに向く。
まだ炎を隠している……逆転は望めずとも、一矢報るための大火を。

「準備だ」

蒼空を走る黒点、ニルチェルトが部下の影に消える。
部下達の攻撃に耐えながらニルチェルトを目で追い、配下の弾丸タックルを紙一重で避け、凶刃を灼熱の双掌掴み溶かす。震えの止まらない四肢に渇熱を込め、気力で己という風前の灯火をどうにか大炎へと盛らせて保つ。

「何処に、行ったぁ！」

部下の影から影へ。
しかし、吸血鬼の群れが索敵を許さず、執拗に、また果敢に攻め続けた。
移動する黒点を上回る速度で飛び回り、全身に傷を受けた瀬賀を中心に黒い翼が完全な包囲陣を築く。
２０を超す黒点に覆われ、ニルチェルトを見失った瀬賀は対処に迫られた。

「何――――！？」

白。

瞬間、瀬賀は不思議な感覚に見舞われた。

息を切らせながら吸血鬼達と戦っていたはずなのに、激しい運動でろくな呼吸もままならず、銃弾も数発貰って痛みに汗を覚えていたはずである。疲労感は不眠不休の三日間貫徹作業を行った後のように、肩に重石でも乗せたかのような自然とした前傾を誘うほどの蓄積具合であったはず。

この戦場で伯爵に会う前の疲労が完全に抜け切っていなかったという理由もあるが、それ以上に意図的に吸血鬼たちの術中に嵌りこんでしまい、無為に体力を消耗してしまったことは間違いない。

ドロドロとした、体内で何かが渦巻くような不快感の中でも、それでもまだ炎は闘志を反映して盛っている。銃弾を溶かしきってしまうほどのエネルギーを有し、背面に九尾の防壁を展開できた。どんな銃弾さえも直撃する前に融解した。間違いなくそれを自分のSRだと断言できる。

そんな、絶望と唯一縋れる自信の狭間に在って不思議な感覚が全身を支配した。

着慣れたビジネススーツに着替えてから後悔したネクタイの締め具合も、休憩室で火傷した舌のざらつきも、吸血鬼たちによって刻まれた銃創や切創、伯爵の腕力で痛めた後頭部からの流血も、全てが同様に思えた。

いま全身を支配しる感覚の前に多くの不快感が消え、言い表せぬ一つの間隔が瀬賀を襲い――刹那の後、瀬賀はそれの正体に気付い

た。

（悪いな……）

己の重傷に気付くまでそう時間はかからなかった。
ニルチェルトの放った攻撃は、ナイフのように鋭利な“貫手（ぬきて）”による斬撃。
背骨を打ち砕き、内臓を切り裂いて、高速に乗って体内防衛人を突破した肉の刃。
冷えきった金属を思わせる冷たい手に、己の臓物の何らかが絡んでいた。

背から入り、臓を抜け、表へと貫いた一本腕が瀬賀に１００％の終わりを告げる。

「さぁ、遺言を聞こうか」
（芹真……お前をブチのめしてやれそうに……）

灼熱の尾が消える。
肌を焦がす熱が引いてゆく。
九尾の死を確信した吸血鬼が、妖狐の耳元で囁く。
絞っても中々出てこない瀬賀の声にに、貫通した腕を動かすことで回答を急かした。
吐血と痙攣に襲われる体と、それを持ち上げる腕に力を込める。

「お前が俺の手土産になってくれたお礼だ。部下の分は他の奴にツケるとして、貴様にも土産をやらんとな」

辛うじて上がった手でニルチェルトの腕を掴む。

最早、抜くことも抑えることも叶わぬと知りながら、それでも瀬賀は抵抗を諦める心を持ち合わせていなかった。

覚悟があった以上、死ぬこと自体に恐れはない。瀬賀という生命の歩みがそうであったように、最後を目前に迎えた今でもそれは揺るがない。変わらない。知るも知らぬも、どんな人間に対しても瀬賀は己を変えない。どんな状況でも燃え尽きるまで止まらない、止まりたくない。如何なる困難があろうと、人はそれを何らかの方法で乗り越える。

瀬賀の通す我流は――“伝う灼熱”――今も、昔も、何者にも変えられたくない自分を守るため、くだらない自分を信ずる者達を導くため。

だからこそ、もう二度と会えないであろう部下の顔を思い浮かべることもなければ、ニルチェルトに負けた理由も考えない。ただ、この吸血鬼を生かしておくことで自らが体験した死地を、今後世界のどこかで繰り返されるものと想像して嫌悪感の残滓を、死に体である己の内に見つけた。

だからこそ。

自分の築き上げてきた名誉の保存も望まず、後悔も何も残さないし、誰かに自分という存在のメモリーを頼むなどという女々しい行為を拒んだ。

「芹真ぁあああ〝っ！！

ドラキュラ伯爵が裏切ったぞおぉぉッ！！！」

そんなちっぽけな信条を守ってこそ、瀬賀は遺言に自分の足跡を残そうとは考えない。

「！　き、貴様！」

汗と死脂に汚れた顔で必死に笑みを作りながら、両手で己の胸板を貫通したニルチェルトの腕を掴み、歯を自らの口筋力で砕くほどに力み、余力の全てを注いで最後の狐火を灯す。

「なんて面倒な事を……！
お前たち！　俺に構わず起爆してこい！」

両腕を掴まれたまま瀬賀の指先より生じた炎がニルチェルトの身体に赤を着ける。火炎放射さえ受けきったことのあるニルチェルトだが、どうしてかこの炎だけは痛覚を酷く、通常の炎とは異なる悪い刺激を覚えた。

同類である妖怪や悪霊の類を焼き殺している瀬賀の炎が、物理学に乗っ取った真っ当な火であろう筈がない。だからこそ、自慢の一つでもある部下が二名も絶命に至った。実際に炎に触れて質量的違いも体験済みである。
この炎を除いては。

「放せ！放さんか狐が！」

焼けながら密着した二人が落下を始める。

落下に抗おうと翼を大きくはためかせるニルチェルトだが、炎自体の異常な質量に危機を感じ取り、急いで地上へと足を延ばした。

全てが焼け焦げていく。

だが、戦場ではそれが正しい。

燃えぬモノなどなく、残るモノは数えられても少数。しかし、消えゆくモノは無数。

血液も、汗も、己の内から触れるモノ全てを燃やし尽くす炎を発し、瀬賀は天地が逆転した景色の中に燃える朝日を見た。

感覚の消え去った自身。

変色を始める視界。

明るい闇に包まれ、最期の朝日を眺めながら、協会・ナイトメアに大量の銃火器を提供した武器商人、セガ・クロウは地へと落ち着いた。

第57話「次がれる脅威」（後書き）

ある種の絶望と、またある種の安堵感に見舞われながら、四凶のキュウキはしばし考えるのを止めた。

協会との戦争用に作り上げたSRが数体、切り札として後方の艦隊に待機させている。だが、それらは戦功や固体データ上での総合火力などトウテツほど有効な武器とは言えないのが現状である。キュウキにとってのトウテツとは、不安定な得物ではあるが、有用な存在でもあった。

そんなトウテツが視界の中で消滅を果たした。

これだけならまだ精神的、または計画へのリカバリーは余地が残っている。しかし、そんな貴重なものを一通の通信が根こそぎ吹き飛ばした。

『コントンだ。

いま協会内部に潜入したが……キュウキ、ここまでだ。じゃあな』

「……じゃあな？」

その通信を思い出しながら、コントンの笑みを脳裏に描く。

こちらは億単位の被害を被りながら突破口を求めているというのに、あの男は何処から沸き、果たして如何なる方法を用いて“潜入した”と言ったのか。しかし、それ以上に重要なのは最後の一言。

何に対しての別れなのか。

（利用？　何の為に？
私達をここまで誘導する意味は？　協会の転覆が目的じゃない？
寝返った――という雰囲気でもなかった。　これだけの人間を集めて何をする気だ？
核を使ったところで協会は揺るがない。寝返ったところで快く受け入れられるわけでもない）

開戦からずっと通信の繋がらなかったコントンの出現。
理解に窮する突然の通信、発言。

（何か切り札でも持ち込んだ？
内通者が他にもいる？
それとも協会長の存在自体が作り話であるという説を証明――いや、それもない。そもそも、本当にコントンは協会内部に侵入しているのか？）

甚だしい四凶軍の戦力低下、それを認められないキュウキはすぐに確認を取った。通話履歴をチェックさせ、コントンからの通信が“協会本部”からの発信であることが判明し、驚愕した。

「どうやって？」

航空戦力を防ぐ空中結界部隊、海中を支配する水錬部隊、そして海上の主戦力に対して健闘を繰り広げるＳＲ混成部隊。例え列車砲

があっても突破口を開くことの出来ない状況下で、どんな兵器を使えば突破が出来たものか教えて欲しかった。

（……！　まさか！）

コントンの潜入方法を模索し、応用できないか考えていたキュウキの脳裏に電光が走った。

（ここに“舟”が在るのか！？）

思考を重ね、戦場を移り、作戦を与え。
それを繰り返すこと１５分。
オペレーターに連絡してある場所との回線をキュウキは要求した。

「あの、繋がりましたけど……」

「ありがとう。
こちら四凶軍司令官、キュウキ。
そちらは“協会司令支部”でしょ？」

『その通り』

「言いことを教えてあげる。
コントンが貴方達の真下に潜入したわ。
気をつけてね、オーバー」

僅か数秒の交信。

「前線の部隊に通達。城塞船を護衛しつつ防衛海岸を突破し制圧せよ！」

協会司令部の混乱を予想し、キュウキは新たな突撃指令を飛ばしていた。

第５８話－Ｏｕｔｔａ　Ｃｏｎｔｒｏｌ－（前書き）

【四凶（漢字表記）】

とう　てつ
『号虎　歹珍
食　食』
（右の漢字、珍の部分から王を抜く）

『渾沌』

『窮奇』

とう　こつ
『木壽　木兀』

今更ですが、本編で四凶をカタカナ表記にしている理由は上記の漢字にあります。一般的に携帯やパソコンでは表示不可能なためです。

特に、食いしん坊のトウテツと、戦闘中毒のトウコツの漢字は確実に文字化けするので、統一するという意図もあって全員カタカナ表記となっております。（もしかすればトウコツの漢字はこれでも文字化けするかもしれません……）

第58話－Outta Control－

－レーダー塔頂上－

黒煙を誘った爆発を知らずとも、立ちのぼる黒色の数が大きな異変を伝えた。

塔の頂上から見下ろすと、海岸線を基準に設けられているであろう防衛線が突破されていることは直ぐに分かる。南西方面を除き、防衛線を突破された場所は他に見られなかった。最も深く入り込まれている南部海岸でさえ、未だに司令塔と湾口部の中間程度までしか――それも巨人が一体のみ――侵攻されていない。　東部エリアに上がった黒煙が、トキに異常を判断させた理由は一つ。四凶軍は海上で煌々と輝く黄金なのか結晶なのか、遠目には判別できない何かによって侵攻を阻まれているからである。北西南部とは明らかにその侵攻の具合は悪く、海岸にさえ到達していない。その所為で戦火は多方面に流れているため、唯一戦場と成っていなかった場所と推測できた。海上では未だに距離を取って東部海岸の様子を窺う艦隊が見られた。

四凶軍が近づいても居ない場所に、突然爆発痕が刻まれ黒煙が立ち込めたのだ。しかも、海岸ではなく中心部寄りの居住区エリアの真っただ中に。

未だに盛る火炎も見られ、混濁の戦場音に乱れて確かにそのエリアからも銃声が聞き取れた。

「よぉ、こんな面倒臭い場所で何をしている？」

ぐるりと戦場を見渡したトキの背後に、一人の男が現れては挨拶もなしに質問をぶつけてきた。

「……トウコツ、コントンが現れたのか？」

振り返り、刃物と銃器で出撃支度を済ませた四凶に、同じように挨拶なしで質問する。

「いいや。その可能性はあるが見つかっていない。さっき聞いたが、あの煙は裏切り者の証明だ」

「反逆の狼煙、とか言うのか？」

寝起きでありながらも明瞭な意識を持ったトキは、戦時中の裏切り行為の怖さを想像した。

この戦場を見渡した時に理解したことは、協会と四凶軍の間に明確な攻守が成立していること。協会本部という人工島を四凶軍は何重にも囲み、対策として協会は防御の姿勢を維持している。協会に勝利を掴むチャンスがあるとしたら、それは鉄壁の守備で相手の自壊を待つこと。兵糧が尽きるか、主力部隊ないし攻略策を全て跳ね返すことができるまで、只管に耐えることが出来れば数で圧倒的不利な協会が戦争に勝利することも不可能ではない。

つまり、協会は鉄壁かそれ以上に堅牢な守備陣を維持しなければ

ならない。
だが、現実に防御具合は良しと言えるほど守りの態勢を維持できてはいない。

「そうだ。
裏切り者を止めようと名乗り出た馬鹿が一人いるんだが、そいつがまんまと危地にダイブしちまったんだよ。
寝起きで悪いが、一緒に救援行こうか」

「一人で戦っているって言うのか？」
「あぁ、放置すりゃもうじき死ぬ。
個人的に好かない野郎だが、貴重な戦力を失うわけにもいかねェ」

「……救援は俺達二人の他は？」
「いない。まずは俺達二人だ。
細かく言えば俺達が先行、時差で処理部隊が迎える手筈になっている」

背中に携えた四本のクレイモアの柄を一本ずつ手で触れて確かめ、風向きを肌で感じてからトウコツは片足を上げる。レーダー塔頂上の鉄柵を登り、眼下に東部の火炎と狼煙を定める。　四凶の背後に立ったトキは戦闘が好きでやまない男が、一体どんな行動に出るのか見守った。

「俺達の任務を言うぞトキ。
しっかりと聞いておけ。こいつはジャンヌの姐さん直々の任務なんだからよ」

不安ばかりが募る中で、トウコツは両足に備えた銃を手に取ってそれを見向きもせずに投げ渡す。
見たことのない銃を受け取ったトキは、トウコツとの任務に同行を誓った。

「俺なんかでいいなら」

「おう、死ぬなよ。
こっからは状況を教えるが、いいか？
まず救出対象敵は妖狐のＳＲで、『からす商事』『黒羽商会』『クロウ運輸』など、多数の名義で世界中に銃器を密売している小規模集団のボス：セガクロウ。
次に敵は吸血鬼。東部の生活居住区は吸血鬼によって完璧と言えるレベルで制圧されている。あの近辺に味方は居ないから、当然援護も無ぇ」

更に拳銃を手渡される。今度渡された銃は見慣れたもので、イタリア製の自動拳拳銃：ベレッタＭ９　であった。
世界的にも有名なその得物を片手に、レーダー塔屋上の手すりから時間を奪ってもう一丁の銃を生成する。
Ｓｐｈｉｎｘ３００。
ベレッタと同じ９ｍｍパラベラム弾を使用するスイス製の自動拳銃であり、トキにとっては黒羽商会との戦いで使用して以来練習に何度も用いてきた馴染みある拳銃である。
両手に伝わる冷たい金属の感触を確かめると、間違いなく何時も訓練で使っていたものであることが、拳銃を構成するパーツの一つ

一つから感じられた。

「残念なことに、あっちの数は３０で、こっちは二人だ。単純にどっちが不利か分かるよな？
そこで俺達は可能な限りあいつらの謀反を妨害する。
さて、飛ぼうか」

空中に向かって一歩、トウコツは踏み出すが落下することはない。

「俺の風に乗れ。
移動しながら手順を教える」

言われたトキは、鉄柵から更に時間を奪い、トウコツのように空中へ踏み出していくための空間を作る。
が、直ぐには一歩を踏み出せなかった。
眼前でトウコツが上下することも無く、まるでコンクリートの上に立っているかのように直立できている仕組みがトキには理解できず、いまいち信用が出来なかったのだ。冷静に考えてみればトウコツも四凶であり、本来は敵対関係にあっても不思議はないはず。それがあべこべに味方として剣を振ろうとしているのは何故か。

「信用ねぇなぁ……俺はジャンヌさんの為に大将首が欲しいんだよ。
別に協会を裏切りはしねぇ。こっちの側について戦うのが面白そうだしな」

「え？」

「より面白そうな戦いができるから、ここに居る。
それから姐さんがここに居る。
俺の理由なんてそんなもんさ。それよりも味方の狐を助けたいんなら急げよ」

躊躇いながらも、深呼吸しながら一歩踏み出す。
地上までどれだけの高さがあるのか分からないが、少なくとも自由落下した結果に即死以外の結末はありえないであろう高度ではあった。冷たい潮風の中で覚える冷や汗が緊張を報せるが、トウコツの言うことに嘘偽りがないのであれば、味方を疑うという行為が相手の思う壺となってしまう。
味方を信じられなくなったら、その時点でこの戦争の勝率は下がる。
両手の銃を強く握りながら踏み出した一歩、トキの身体は重力の枷を抜けて空中の何もない空間を確かに踏んだ。

「救出任務って、味方がヤバいのか？」

「ああ。対象は瀬賀駆滝（セガクロウ）。開戦直前に大量の銃火器を協会に提供してくれた“ナイトメア中立派”の筆頭密輸人だ。援軍に先駆けて俺らが介入、救出の槍を投げる。
俺は吸血鬼の相手をするわけだが、お前はセガを確保して回復してやれ。
それが終わったらセガを護衛しつつ吸血鬼を攻めろ」

トウコツの第一目的は見敵速殺で、トキの第一目的は対象の回復、それから護衛である。

戦争という状況を思い出しトキは頷く。

セガクロウという、一度は敵対決したＳＲも、現状では手を組んで共通の敵に立ち向かおうとする味方に他ならない。見殺しにする理由がなく、またその戦力は協会のヒーローズの上位クラスに匹敵するとも言われ、協会と四凶軍の数的差が圧倒して四凶の有利だという状況下、少しでも戦力の減少を抑えることは必須と言える。こんな状況で裏切り者が出て、しかも内から味方が減らされていけば敗戦の色は塗り替えられないものになってしまう。

戦略ゲームではあるが、トキはこんな状況を何度か見て、味わったことがある。ゲームによってはプレイヤーの腕だけで覆すことができない、絶対分岐の戦況というものが存在するのだ。

「吸血鬼どもは硬いぞ」

空中に踏み出し、トウコツは目標地点に向かい直ちに滑空移動を始めた。

移動に伴う不思議な旋風を感じながら、トウコツのアドバイスに耳を傾ける。

「お前の銃だと拳を弾くか体勢を崩すのが関の山だ。相手を倒すにゃ“人体の穴”を狙う以外ない！」

風運滑空に身を任せてレーダー塔を降り始めたトキは、小さな警鐘を聞いた。

（何か居るのか？）

「吸血鬼のボスはニルチェルト・エンデバー、元伯爵だ」

風を新たに纏わせながら、眼前の東部生活エリアの乱れ具合を確かめる。

トキと自身の２人で、３０もの吸血鬼を相手にする――雑魚は雑魚として問題ないが、ニルチェルト・エンデバーだけはクリアしづらい問題であった。トキを抱えたまま、伯爵を避けながら雑魚を削っていくのは骨が折れる。ただでさえ、回避だけは得意な吸血鬼たちなのに、一体も削れなかったら間違いなくジャンヌに叱責されるという予感がある。

トキが警鐘に疑問を抱き、トウコツがニルチェルトの脅威とその他吸血鬼の逃げ足の才能に面倒を感じると同時だった。“赤炎／積怨”の蜃気楼に揺れる住宅地空中から、黒い翼を持った人影複数が２人に姿を知覚させるなり急速接近してきた。

「早速来やがったか！　いけるなトキ！」

「やるしかないんだろ！」

『こちらジャンヌ。トウコツへ。

現在西部海岸より南部海岸へ向けて移動中、そちらは吸血鬼と遭遇しましたか？』

「今からカチ合うぜ！」

前に出たトウコツが、すれ違いざまに2体の吸血鬼に斬撃を捺す。目で追いきれなかったその斬撃は、的確に相手の翼と頚動脈を切断し、しかもそれを背中の止め具から抜いてすらいないままにやって見せたのだ。

果たして体の回転だけでこうも上手く敵を、的確に急所だけを狙って倒すことが出来るものか。人外じみた剣術を見せるトウコツに比べ、トキは自分にどんなことが出来るのか考え、出し惜しみしている場面でないことを認めて低速世界を展開した。滑空速度が緩やかになり始め、伝わる音が鈍り、頬にきつくぶつかってきた速度対空は鋭さを失う。

敵の銃弾がトウコツ目掛けて飛来を始めているこの状況、自分にならそれを防ぎつつ敵を牽制できるという自信なら、トキにあった。

「トウコツ！　俺の世界に入れるぞ！」

銃弾が脇腹を掠める。

先行するトウコツの足首を掴み、放たれた弾丸を視認できるほど低速化させた世界を施す。

拳銃を一度時間に分解し、空いた左手を介してトキ自身が体験している低速世界を与えられたトウコツの視界は、突如として速度を失った不可解な世界へと変貌を遂げた。銃弾さえ余裕を持って見切れる世界の中、僅かに明度を失った色調の中で一度だけ振りかえって聞く。混乱も少なからずあったが、それよりも便利、また面白いという感覚がトウコツの中であらゆる負を上回っていた。

「五秒！」

多分。

「十分過ぎんぞテメェ！」

ショットガンの銃口を向け、トリガーと同時に背中の大剣を抜いて銃弾を叩き切る。

ウクライナ製ショットガン：ＦＯＲＴ－５００の口から吐き出される１８ミリの実包が吸血鬼の顔半分を吹き飛ばし、撃ち抜かれたソイツのすぐ背後から連携を狙っていた吸血鬼の手元目掛け、銃身上部へ逆様に備え付けたソードオフショットガンを鳴かせる。手にしたアサルトライフルを砕き、持ち手の指をも吹き飛ばす。同時に大剣の切っ先はトキへと飛来しようとしていた銃弾を防いでいた。

守られている、援護されていることに気付いたトキは低速世界を展開するだけでなく、自らも吸血鬼の銃器破壊に乗り出してトウコツの援護へ臨んだ。

進路上に現れた吸血鬼は2体。どちらも銃火器で武装している上に、体格はトキの倍。トウコツよりも身長があってしかも筋肉質なのだが、これを正面に据えたトキに恐れはない。

「止まれ！」

低速世界を停止世界に変え、重機関銃から繰り出される金属の横雨を避けるように移動し、一方に銃器で銃撃の破壊を行いもう一方

ではクロノセプターを用いた時間分解による機能的破壊を施す。彼らが手にした銃器の無力に気付く頃に、こちらの弾丸ないし剣刃があべこべに彼らを襲っていた。

トウコツが腕を振れば重傷、トキが撃てば軽傷、しかし、双方確実に戦闘力を奪う方法で襲いかかっていた。それに気付いた吸血鬼達はそれまで持ち合わせていた作戦を捨てた。短期決戦は逆に不利、数の利を以て毒の如く削るが最上とフォーメーションを選択する。

が、距離も人数も意味を成さなかった。

銃火器の火線を確保しても、トキの低速世界と静止世界によって銃弾を無効化される。上下前後左右から同時に襲いかかっても間合いを外される。銃撃での削りに焦れて斬りかかろうにも、剣術の腕でトウコツに圧倒的差を見せつけられ、斬りかかった者がその瞬間を感じることもなく斬り捨てられる。離れればトキの銃撃が命以外の力を狙い、近付けばトウコツの斬撃が逆に翼を斬り落とす。

「また貴様か、トウコツ！」

時間が戻る。

そんな事態を見かねて動き出したニルチェルト・エンデバーは、吸血鬼神と呼ばれるＳＲであった。

服の上からでも隆々とした筋肉が解る肉体に、年季の長さを醸し出す厳つい顔つき。中でも闘志で刃物のように変形した目つきは、トキに過剰な戦闘力の所有者であることを認めさせている。だが、トウコツと言う闘うことに半生以上を費やしてきた経験者には過大でも過少でもない戦力評価を、グラフないし現代兵器の個数による代数で正確に測られていた。

「よりにもよってこんな大事な時にお前と剣を交えるとは思ってもみなかった！」

「交える気なんてねぇクセにやたらと吠えるんじゃねぇ！
そいつは狼の専売特許だぜ？
よぉ、トキ。あいつの右腕に救出対象が居る。見えるよな、人の形には」

「そりゃ、見えるけど……」

部下が減ったことと、またしても芹真ではない他人が現れたことに対する失望からくる怒りに滾り、ニルチェルトは狐を掴んだ右手を掲げる。

「あれがセガだ。助けっぞ。
セガを持っているのがニルチェルト・エンデバーっていう、吸血鬼共の親玉だ。
戦闘力は中の中、戦闘機2つ程度だ。
あいつのSRは吸血鬼。んで、身体能力強化と自由飛行が大きな特徴。
もうひとつ――あいつだけの特殊能力がある」

「戦闘機2機って、相当なんじゃ――？」

兎に角、吸血鬼とトウコツは昔から意見が合わなかった。

「それよりも厄介な、アイツだけのＳＲオリジナル能力がアレだ」

話を聞いてもらえることもなく、戦闘機２機に匹敵する吸血鬼の親玉に目を向ける。するとニルチェルトは、右手に掴んだ逆様の狐に牙を立てた。

「時間制限付きの“ＳＲコピー能力”。
セガの野郎から血吸ったもんだから、火炎攻撃に気をつけな！
セガと同等の熱いヤツが操れるはずだ！」

疑問に苛まれている余地はなかった。一体どれだけの時間、血を吸った相手の能力を使用できるのか、それを言葉にして聞く前にトウコツは頭上の吸血鬼へ斬りかかり、ニルチェルトの放つ火炎が手にした拳銃を溶かして殺す。

（こいつをどうにかしないと、セガを救出することは不可能！）

（だが、ニルチェルト本人の力にセガの発火・生炎能力が加われば実質遠距離技を獲得することになって死角は急激に減る！
しかも、クソどものオマケ付きと来やがった！）

雑魚を躱して道を開こうと飛ぶトウコツを、四凶の前で無に等しくなることを理解した吸血鬼達は数の利と自慢の逃げ足で撹乱し、牽制してトウコツの突破口を塞ぐ。せめて後３体、配下を斬り落と

してからニルチェルトに取りかかるのがトウコツの算段であった。

「こっちに来い！　シキヨトキ！」

自ら翼を動かし、ニルチェルトは真っすぐトキへと迫る。

そもそも芹真を呼び込む為の作戦にセガが現れ、次に期待するも四凶が現れ、しかもトキという予想外の邪魔者まで付いてきた。敵の陣中半ばで謀反を始めたまでは良かったが、多く目的を達成もしていないのに余計な時間ばかりを浪費している。そんな現状にニルチェルトはトキを人質として敵中を混乱させながら四凶軍の合流艦隊を目指そうと目論んだ。

数の利と撹乱および、隙有らば致命傷を与えられる打撃力を有する部下たちに翻弄されるトウコツは、まさしくニルチェルトの思惑通りに手こずり、時間稼ぎと誘いと妨害を同時に行われていることに気付いて舌打ちした。

（いくらトキが居るからと言っても――！）

切っ先が銃火器の先端だけを捉え、逆に捕捉された頭部を撃ち抜かれそうになった所を上半身を横にずらすことによって危うくも躱す。

同時に、トキもニルチェルトの掴みを避ける。

「貴様程度小柄でも弾避けぐら――いヌッ！？」

首根っこを捕まえようとしたニルチェルトの手が掴んだ空間には、ウニ。
海で採れる棘皮動物のまさしくアレである。

（やばい！　スナック菓子みたいに握りつぶした！）

「何だコレは！？」

トキの居た空間に現れたウニと、代わって消えたトキの行為を侮辱と感じとり、吸血鬼は怒りと疑問を覚えた。

（時間に関係するＳＲとは聞いた……新人とも！）

これまで多くのＳＲを老若男女問わずに葬って来たニルチェルトは、例外無く新米ＳＲは秒殺していた。純粋な戦力差だけでなく、戦闘経験の有無などが作り出す決定的差を武器とし、時には相手に指一本触れさせる暇も与えずにその命を刈り取ったことさえある。

（これが新人――これで新人だっていうのか！？
キュウキめ、古い情報を寄越しやがったな！）

戦闘での慣れ方が既に新人のものではない。
ＳＲの使いどころが鬱陶しいほどに正しく、何よりも無駄のなさ

が新人のそれとは思えないほど少ない。
そのことにニルチェルトは驚いた。トウコツと言う障壁を前に、トキと言う新たな壁を認めなければならない現実がこの上なく気に入らなかったし、ここまで成長に脅威を覚えるＳＲは久しぶりだった。

（こんな……）

振りかえりざまに放つ蹴り足は、トキの側頭部を目掛けていた筈だが、かき分ける空気の抵抗だけが空しく伝わるのみ。
トキの反撃のワンツーパンチらしき微々たる打撃が脇腹に痒い。が、それよりもむず痒いのはトキの高速移動である。繰り出せば確実に側面か背後を取られ、蚊が刺すような攻撃を的確に、機械のように繰り返す。

（馬鹿な！　こいつは天才なのか！？）

救いはダメージが無いことのみ。
裏拳、ボディブロー、回し蹴り。どんなに力を込めて手足を伸ばし、振ってもトキには当たらず、怒りと反比例していた冷静が徐々にニルチェルトに錯覚をもたらした。
しかし、現実にトキは天才でなんかない。

（やっぱりこのＳＲは、パワーで攻めまくってくるタイプ！

ビビった瞬間にこっちが瞬殺される可能性は大！）

果敢に攻めながら、心は己の中に潜む恐れと互角の戦いを繰り広げていた。

吸血鬼との戦闘経験は皆無だが、筋力や行動の自由度を武器に闘ってくる相手との戦闘経験は、ある。

飛行できる相手の厄介さは身を以て知っているし、今はトウコツの力である程度自由に空を移動できる。機動力に関して言えば、決して不利ではない。

（パワーで崩せないなら、焦りを作って――って！？）

突如、拳足の嵐の中に炎が混じった。

が、低速世界の展開は一瞬。

予めこちらが回り込むであろう死角に炎を設置したニルチェルトに、トキは戦慄を覚えつつそれを押し殺した。

（相手も戦闘経験豊富なんだ！
やっぱり動きを予測されている！）

炎を躱し、懐に潜り込む。

リーチの短さを活かした打撃を繰り出すが、効いているようには思えなかった。鳩尾に討ちこんだはずの両手が、まるで膝でも突いているかのような感触に痺れる。鍛えようのない鳩尾でさえ、堅甲な骨を思わす丈夫さを持っているのだ。

（俺のすべきことは、セガの回収。倒すことじゃないなら……やるか）

常速に戻る最中、ニルチェルトの翼に高速創造した銃で衝撃を与えながら背後に回る。

目で追ってくるニルチェルトが右手に掴んでいるセガを鈍器とし、振り向きざまに勢い良く振ってくる。

回避は出来ない。ニルチェルトが振った反動でセガの体が崩壊する恐れがある。

それに破壊することも出来ない。物が金属や岩石なら破壊は選択肢として正しいだろうが、今目の前に迫っている凶器は生命であり、味方であり、救出対象である。

任務を続行する理由は、軍人でも警察でもないトキには有り得ない。ただ、SRだからという理由だけでここにいて、自分よりも強大な吸血鬼に立ち向かわざるをえない。それでも、目標や目的がそこにあるなら、それを黙って手中から逃す理由もないほどにトキは充実した人間ではなかった。

だからこそ、躊躇っていたこともあるし、訓練期間中にその反応は正しいと言われたことも留め具としてトキを踏みとどまらせていた。

（クロノセプター）

野球のバットのように高速で迫るセガと言う肉の凶器を飛んで回

避し、セガを飛び越えた瞬間に超低速世界を展開する。
トウコツが分け与えてくれた風は空中での自由に一役買ってくれていた。地上での跳躍と違い、自由意思で風が空中に足場を作ったり、自由落下を戻してくれたりと、普段は実現不可能な行動を現実にしてくれた。
だからこそ、思いついた攻撃でもあるし、セガの救出に対して超高難易度を感じなくもなったのだ。

（ニルチェルトさん、悪いけど片腕離すよ）

吸血鬼の正面に移動した後、トキの右手は吸血鬼の右肘に触れた。触れたモノ全体から平等に時間を奪う左手とは違い、右手のクロノセプターが現す脅威は“触発即滅”である。
音もなく、痛みもなく、右手で触れた個所だけが白で塗りつぶされたキャンパスの絵画が如き消滅を果たす。

「トウコツ！　セガを確保した！」

右手がニルチェルトの肉体を通過するにあたり、体温と血液の温かさに触れながら肩と手を分断してセガを解放することには成功した。
落下するセガの体を両腕で抱え、ついでに右手に獲得した時間を流し込んでセガの傷を癒す。
低速世界の終了と同時に大声でそれを告げた。

「アァ　ゞ!?」
『何ぃ!!?』

「こんな……こんな事、馬鹿な!」

静寂が一瞬。
トキの叫び声にトウコツや吸血鬼達、ニルチェルトら全員が一点に意を向け、その内容に驚き困惑した。
吸血鬼神から単身でセガを奪えないだろうとトウコツは予測しており、四凶の相手を務めていた吸血鬼たちはトキが粘りこそすれどいずれ掴まるだろうと予測していた。だが、最も予想の外から来た脅威に戦慄したのは、蚊ほどの攻撃しか繰り出せないとタカを括っていながら、現実に重傷を負ってしまったニルチェルト自身である。

「トキ!　こっから離――!」

「全員撤退!!」

トウコツの声をニルチェルトの声が掻き消す。
ニルチェルトの負傷は、右肘から先の消失である。切断された右手は未だにセガの足首を掴んでおり、そのセガは集合住宅の屋上付近に着地しようとしているトキに介抱されていた。
予想だにしなかったトキのミッション達成に、トウコツは我に返るまで数秒を要し、その間にニルチェルトは東部エリアから中央レーダー塔付近を通過する西部エリアへの非常逃走用ルートを進み始めていた。

「お前はセガを回復してやれ！　増援が来たら追って来い！
ホレ、ちっちぇ無線だ！」

足元に転がる小型通信機を耳にはめ込みつつ、建造物全体から時間を奪って回復に当てる。
号令一下で迷わず逃走を開始した吸血鬼達を、一人で追撃し始めたトウコツの小さな後ろ姿を見守り、トキは大きく深呼吸した。

（おげえぇ……）

吸血鬼達が去ってゆくのを黙認し、それまで押し殺していた恐怖や焦燥が全身に発汗と震えを呼んだ。

「あぁ、怖かった……」

気付けば涙目になっている自分に気付く。
それが恐怖から来たものなのか、或いニルチェルトの右腕を切断したことへの罪悪感か、果てまたセガと言う仲間を救えたことに対する安堵感なのか分からない。潮風に興奮した全身を冷やされながらも、落ち着いて頭の中を整理しようとしても混乱するばかり。そんな頭で考えても、トキ自身であろうとその涙が一体どんな感情から零れたものなのか理解できなかった。

―協会中央　会長室―

どんな感情で、一体何を眺めているのか。
協会長：オウル・バースヤードの背中に視線を注ぎながら、四凶のコントンはゆっくりと、割れた窓ガラスの大穴から潮風吹き込む会長室を進んでいた。

「どんな気分だ、お前の築いてきたモノ全てが水泡と化す光景は…
…クッハハハ！」

崩れたオールバックを左手で撫でつけて整えながら、こちらの存在を知覚しているはずの会長へと近付く。
愉快を装いながらもコントンの警戒は過去最大とも言えるレベルにまで高まっていた。どうしてか会長は反撃する気配もなく、言葉を返すと言った雰囲気、反応の素振りさえない。協会長の沈黙は今に始まったことではないとはいえ、ここまで逼迫した事態を前にして尚沈黙を貫くという姿勢が気に入らないし、理解できなかった。

「さて、舟は貰う。
異論が無いならそのまま黙っていろ。
俺がこの世界を混沌からリスタートさせる」

「……リスタート、それならとうの昔にやっている」

背を向けたまま、バースヤードは口を開いて戦場を見つめる。

「もしや気付いたのか、と一時は本気で懸念していたんだ。けど、残念だよ。結局この混沌を目指す君たちの謀反も、オリジナルでしかなかったのだから」

「ククッ、何を言っている？　ついに頭がイカれたか？」

大型拳銃をホルスターから抜き取り、その口をバースヤードの背に、心臓の真後ろに置く。

支配者を前に四凶は笑う。この大犯罪者が何を支配してきたのか、それを情報として独自に掴んだコントンは嗤う。

しかし、

「――断言しよう。コントン、君は失敗する」

口調の変化が人格の切り替わりを気付かせ、コントンはデザートイーグルを強く握った。

バースヤードの発言に対する怒りと、ふと浮上する不思議な予感が余裕を消し飛ばす。

「どうしてそう言える？」

「オリジナルだから、だと言っただろう」

「ならば、貴様もここで消え去るべきだろう、オリジナル」

「それは違う。この世界でコピーなんて滅多にいない。オリジナルの意図が別のオリジナルをコピーすることはあってもな。

――そもそも、初めからコピー体ということ自体が、コピーと言う概念を捻じ曲げている。そういった意味でもこの世界は完全なオリジナルだ。生産や疑似とはかけ離れている存在だ」

「理由になっていないぞ。

何故オリジナルは失敗しなければならない？」

「失敗を作るのがオリジナル――――逆に、その失敗を糧に成功へと辿り着くスペシャルが居るんだよ」

「……トキか？」

「――正確にはその“家系”よ」

「家系？　色世境に何が出来るというのだ？」

「――あの男ではない。が、あれもその家系」

「どういうことだ？」

「いいわよ、教えてあげる。但し――」

女性の声音に代わった会長が振り向く。拳銃などあって無いに等しいが、会長対策を終えているコントンには欠かすことのできないカードであった。

それを知ってか、バースヤードは振り向くことと口を動かす以外行動を表さない。

「聞く準備と覚悟は出来ているの？」
「ハッ！　覚悟が必要とは、何を今更――！」
「“極災色（ごくさいしき）”」

声を張り上げるコントンとは逆に、バースヤードの声はボリュームを落として言った。
風音こそ支配のＳＲで無音化されているが、それでもしっかりと耳を傾けなければならないほど会長の声は小さい。また表情はどこか寂しげでいながらも若干の怒りを含んでおり、それは滅多に見ることのできない協会長の負の感情。

「最初の世界で、崩壊を招いたのは彼らだったわ。
リスタートした世界でもその秩序や倫理を破壊したのは彼ら。
意図もせずに全ての支配や関係を断ち切るのが彼ら。
非道な話よ。
あなたが目を付けた色世という人間も全く彼らの系譜。
トキと、トキの名前を欲しがっている彼女もその系譜。
あなたが一度だけ会った、心に病気を抱えた女もその系譜。
私の世界は彼らによって砕かれた。
アレらは、
一つだったものを小さく別離させ、
個を小さすぎる集に変えて線を引き、
それらを同時に成立させた。
無限の矛盾を果てしなく繰り返し、
それだけのことをしながら根底だけを隠してしまう。

でも、あなたのように気付く存在は結束を固めることになるけど、そこに抱いた野望はどんな活力があっても、彼らには届かず、無限に有限は追いつけない。
無意識に絶望と希望の両極端をその終始を綴り繋いでは、形成の過程に相違を創り出す。
でも、
そんな世界にも“可能の連続性”を巡らせている。
……あなたには分かる？
この“禍央”が誰なのか。
さっきの反応だと知らないようね、極災色。
――色世色（しきよしき）を始めとするファーストリアル、最初の世界で四凶を極めた一族だ」

「……お前、それを現実と言うのか？」

「あぁ。
――本気で言うほどに悩んでいるのだ。正直なところ、この世界にもリセットの必要性が認められた。
――と、同時に試験的観察の余地も十二分に認められているのさ。それが今の色世三人と、古い色世一人」

バースヤードの口調が目まぐるしく変わる。
その変化は行動にも現れ、それまで静かだった男は自らのデスク目指して歩み、その上に置かれていた一冊のノートを手に取った。

「――色世の境（きょう）、色世の時（とき）、それから織夜の秋（とき）。
君の誤解はトキから始まり、アキで終わりを迎えている」

「俺が、誤解？」

「――コレ見ればわかるさ。
根源は“シキヨ”という術式にあって、それを力に変えるのがその後に続く名前。
そこに込められた意味と、実際に経験した時間が極災色をこの世界に示すんだ」

手渡されるノートを片手に、銃を向けたままノートを宙で開いて視線を移す。

「法則？」
「彼らは名前に色を持たない」

「……これか。
色世色“万に著す個別”
色世界（さかい）“線化具現”」
「これまでに確認された極災色は１１人。
うち現役は３人、隠遁が１人」

「隠遁――それはこいつか、色世事（シキヨコト）“根源隠蔽”。
こいつらは、つまるところ何なんだ？
俺たちのような四凶とはまるで別モノじゃないか。
根源隠蔽？
このコトという女が何を隠したって言うんだ。万に著す個別とは何だ、こいつらは詩人の集まりなのか？
生憎と――」

「彼らに目を付けられたのかな、ご愁傷様」

冥福でも祈るかのように、脱力して目を瞑るバースヤードの胸のあたりで、小さな爆発が起こった。

８０デシベル以上の音は無音化されるこの空間では、大型拳銃の泣き声も例外なく消音の対象になり、それは同時に暗殺を成功させやすい空間の生成に一役買ってしまう。

「だからこそ、お前がリセットしきれないそいつらも含め、俺が新しくこの世界をリスタートさせてやろうってんだよ」

衝撃に開いた眼は、正面の四凶を捉えたまま。震える体、恐ろしい寒気、その原因となっている胸の大穴に指を当てる。止めどなく溢れる血が、一生命であるバースヤードという人間の人格を切り替える。

怒りあらわに発砲してきたコントンは、間違いなく思い通りに動いている。ならば、ここで重要な分岐を与えるのが己の役目だと、激痛を胸にバースヤードは厳粛に心構えた。

「――いいだろう。起動まではいかなくとも、乗る為の特別手段なら教えてやろう。

――ただし、我々の中には君に賛同するものと、激しく反対する者達が、大差ある意見で陣営を分かたれている。

納得させてくれ。手負いだが、君を殺せるだけの力は残っているはずだ」

胸を二本指で撫でる。
それだけの動作でバースヤードは銃痕から始まる流血を止めた。

「つまり、闘えと？　死に体とか？」
「その死に体相手に君が死んだら、命と共に舟を諦めてくれ」

その断言に滑稽さを覚えずにはいられない。
これは笑える。
何で今日に限って協会長という人間は理解が易いのか。
そう思えるからこそ、これまでの努力に価値を見失ってしまう。

「ククククッ、有難う」

二人の会話が途切れたのは五秒後。
同時に動き出した二人の勝負は一瞬で、大差を以て勝負に幕を下ろした。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第５８話－

－Ｏｕｔｔａ　Ｃｏｎｔｒｏｌ－

セガの回収より６分が経過した時、協会支給の通信機に全域の戦況を知らせる通達が入った。各戦場の最前線で戦う者、その後ろに控えて準備を進める者、全員がその通信に耳を傾けて戦況の把握に努める。

（北部エリア、芹真の奮闘だと？
１人で戦線を押し返すとは……）

上空で集まった雲に夏色を急いで与えていたＭｒ．シーズンは北部の戦況に目を輝かせた。

殲滅行進と呼ばれる銀色狼、芹真の戦力が自分の予想を遥かに上回っていたことは、味方として戦っているこの状況下では好都合この上ない。

また、

（東部エリアの謀反はかなり計画されていたもののようだな）

通信機を拾ったアサは、姉妹らと共に中央へ後退しながら東部エリアの様子を直に観察しに行こうか悩んでいた。

もしもの話である。そこに緊急処理班や、戦力的に欠落してしまったそのエリアに、爆弾の一つでも置いて逃げ去ったとしたら。それは四凶にとって都合良く、協会にとって厄介な置き土産であろう。爆弾の一つくらい処理できないＳＲがいないという可能性も考えられなくはないが……

（南部エリアも東部エリアも、言ってしまえば四凶軍側の侵入を許したことになる。そこに毒棘が刺さっていないか確かめるべきか。もし見つかったとしたら大変な時間稼ぎを食らうことになる。しかし、西部エリアの混戦状況も気になるな……）

こっそり北部エリアから中央に撤退してきたアヌビスチェーンソーは、東部と西部のどちらに出向こうか迷い、口元を隠すバンダナを外して溜息をついた。

（南部エリアは四凶の１人、トウテツを討って士気が高騰しているか。数で押されているのにこの好転、後々大事に繋がらなければ良いが……）

協会司令塔、会長室前。
北部と南部の善戦、東部の沈黙、西部の大乱戦を耳にし、否定のSR：メイトスは可能性として来るべき不足に備え、一度意見を仰ごうと会長室に向かって歩んでいた。協会本部の戦力に対し、城塞艦がいかほどの戦果を望めるか考えた場合、ボルトやディマのリミッターを解除してしまえば巨大艦であろうが無きに等しい。それなのに四凶軍は遠目にも分かるほど自信に満ちて城砦を接岸させようとしている。

（確実に策だ。考えられるのは魔女二人のいずれかを誘き出し、催眠術や幻惑で無力化しようというものだろうか）

考えを巡らせるうちに暗く長い廊下の壁際に――色の違う壊れた扉から――壁の向こう側を覗ける空間に達する。
しかし、最悪の事態はメイトスが予測する二大魔女の無力化よりも、遥かに性質の悪い現実として視界から飛び込んできた。

（これは……！）

そこに転がる影に、その異様さにメイトスは思わず足を止めた。
うつ伏せに顔を隠す誰か。
一切の支配が解けた空間に、血で濡れた頭髪を潮風で乾かす横体のソレ。部屋中に飛散した赤は、先程までなかった色。

「誰だ？

命はあるか？」

本能によってブレーキが掛けていた足を、重くも一歩ずつ倒れ伏す男へ近付くために上げ進める。

ここで何があった、まさか協会長ともあろう者が敗れる筈はないだろう。そう思いながら慎重に近付くメイトスと、確認の一声に答えるかのよう頭部を動かし、伏していた顔を向けようと男はゆっくり動いた。

―西部エリア　海岸―

同時刻、西部海岸に四凶軍の城砦艦は乗り上げていた。

接岸したそれを見上げる防衛部隊の面々は、その呼称に間違いがないことを理解した。軍艦などの司令塔をシタデルと呼ぶことがあり、その由来が城砦というものに因るのだ。それが“城砦艦”となり、しかもそれが比喩でないことを直に思い知らされたとくれば、その呼称を否定することはできる者はいない。

「ミサイルが効かねぇ！」

「レーザーもダメだ！」

「見ろ！　反鏡の術文が刻まれているぞ！」

「遠距離攻撃が効かないぞ！　注意――！」

前線は更なる戦火に揺らめいた。
反撃の砲火は城砦艦の内側に存在する空間魔術師によって反らされ、乗り込もうとすれば銃眼とターレットからの弾幕で反撃、ターレットや大砲を潰そうにも、艦の前面に設えられた多数の装甲板による上陸突撃用デッキから繰り出される無数の火線により、防衛と反撃にあたっていたＳＲ達は物陰から移動することさえ儘ならない状況に陥っていた。

「隊長がやられたぞ！」
「全員逃げろぉ！　大砲が来るぞぉ！」

北部海岸と南部海岸の活躍による士気上昇もこの戦域では束の間。鉄壁の戦艦を前に士気も作戦も崩れていた。
勝機を見失って後退を始める防衛隊に、トドメの城砦艦からの近距離砲撃が突き刺さる。２連装５０ｃｍ砲を二門同時発射と言う脅威は、そこに上がる衝撃波と爆音、立ち上る爆炎と粉塵柱によって十二分に伝播した。

「突撃地点確保のための零距離砲撃装備ですか。
なるほど、ＳＲや策の存在ばかりに気を取られていた私たちに通常兵器で挑むことは奇策として効果大です。しかし……」

混乱した戦場に一人、降り立つ。
転がる屍には目もくれず、眼前の巨大な敵だけに意を集中して攻略法を練る。

すると、それまで慌てふためいていた多くの隊員が目を見張り、逃げ足を止め、逃げ腰を据え、向けることをやめた武器を再び持ち直し始めた。

「ジャンヌ、司令！？」
「何故ここに！」

防衛線を突破され、砲撃で設備を吹き飛ばされ、防衛部隊の撤退に合わせて歩兵の上陸が始まる。
ロープや梯子を使って甲板から降りてくる武装市民、突撃デッキから蟻の如く溢れ出る兵隊、戦車と共に展開されたスロープから降りてくる兵士らに混じる少数のＳＲ達。

「現時点よりこの方面の指揮は私が執ります！
各自、まずは５０メートル後退して下さい！　それが反撃のカギです！」

「え？」
「了解！」
「後退だ！」
「５０メートル後退しろ！」
「下がっていいのかよ！？」

「司令も早く！」

銃火器で装備した、元市民達が押し寄せる。

目には不思議な鈍い輝き。しかし、それが忠誠や己の欲を満たすためのものでないことは分かる。

（洗脳……これだけの人間を同時に操作するのは人間業ではない）

右手に剣、左手に盾、両腰に脇差とレイピアを一本ずつ携え、眼前の人波に集中する。

（数ヶ月前に報告を受けたアレが、この為の実験だというなら、効率よくこの群生を鎮めるために討つべきは――）

熱気と殺気が逆巻く人波。それを前に、防弾・防刃ベストのような防具一つ身に着けず、普段の仕事着である紺色スーツで柄を剣の握るジャンヌは冷静から冷徹へと自分を切り替える。

これを戦争と認め、互いが命を欲して武器を取る以上、己の中に存在する万遍の概念を消し飛ばし、殺人を覚悟する。

的確な一撃の為、改めて戦場の空気を肺一杯に吸い込み、左手の盾を体前に、右手の剣を肩と同じ高さに持ってきて腰を落とす。

「あなたですか」

ジャンヌと呼ばれる、英雄の名を継ぐ彼女が協会で司令官を務める理由は多い。

彼女が意図して上りつめた職位であること、協会長に最も信頼さ

れているという事、同じく協会に所属する多くの人間から様々な意味で注目されている存在であること。
しかし、何よりも武力という面での突出具合は欠かすことが出来ない。協会内に於いて、武力や集団での高い戦力を発揮するSR達で構成されるヒーローズの頂点に君臨しているのが彼女であり、元トウコツに染まりかけたというだけあり、武一片というわけでもない。

人波は確かにジャンヌの居た場所を飲み込んだはずだった。
が、彼女は兵隊たちの頭上を走ることによって人津波を回避し、同時に目標の人物を仕留めるに到っていた。

「な、何だぁあ!?」

後退しながらも司令の後ろ姿に不安を覚えていた防衛隊員の不安は、不気味という形で各々の心に衝撃を走らせていた。
人の津波が一瞬にしてドミノのように、押し寄せる四凶軍の大群は何の前触れもなく地面に伏していったのである。

「四凶軍のSRは簡易呪術者を護衛しています!
呪術者を討てば、その支配下にある洗脳市民達を解放し、無力化できます!　各自呪術者を探し、これを討って下さい!
但し――!」

たった今、ジャンヌが討った術者がそうであるように、またジャンヌの指示を受けた防衛隊員らが早速発見した術者も、その多くが

子供であった。
それも五体満足、どんなに年長でも二十歳未満、若ければ護衛のＳＲに肩車される１０歳前後の子供だっている。

「討つことが不可能なら最低でも護衛に就いているＳＲだけは排除して下さい！　護衛が剥がれたのなら術者の身柄を押さえるのは容易になります！」

「そうか、本部の設備には電波もＳＲも通さない軟禁室がある！」
「術者をそこにぶちこめば、この群生を止められる！」
「やれるぞ！」

「喋ってる場合か……」
「やってから喋れ！」
「数が多すぎてそれどころじゃないっての！」

「よっしゃ！
減らすぞテメェら！」

『トウコツ！？』

西部の士気と混沌が増す。
東部エリアより逃亡した吸血鬼一団を追い越し、トウコツは防衛部隊と合流したのだ。

「オラオラ、吸血鬼共も迫ってるんだぜ！」

「な……！」

西部海岸からは四凶軍、東部エリアからは裏切りの吸血鬼一団が、挟み撃ちにでもするような形で防衛部隊に迫った。

「あれがジャンヌだ！
討てば勝ったも同然だぞ！」
「あの女を撃て！」
「指揮系統を潰せるんだな！」

『やらせるかぁ！』
「司令に遅れをとるな！」

前線に咲く血の花が、爆炎に巻き上げられて雨と化す。
ジャンヌの斬撃が人波を一閃にて絶ち隔て、防衛部隊の砲撃と銃火が敵艦隊からの上陸部隊を血の海に沈める。一瞬で力なく倒れる人群れ、一斉に首を飛ばされる一群れ。　続く戦火に四凶は滑り込む。風に乗って殺戮の手を止めず、足は得物を弾くために止まらず、細胞から望む止まない斬撃の風は有象無象の密度を無差別に減らしていく。

「止まれ！」

そんな地獄とも言える戦場に、吸血鬼の一団は差し掛かった。
防衛部隊のＳＲらが吸血鬼に気付いたように、吸血鬼の一団も防

衛部隊の敵意に気付き、同時にニルチェルトは心の毒を口から零れないように堪えた。

（トウコツめ！　追撃を諦めたと思ったら我らを越していただけか！）

東部離脱後、火炎と銃撃と斬撃の足留めで姿を見せなくなったトウコツと思っていたニルチェルト。

不愉快に次ぐ不愉快に加えて右腕損失の重傷から下手な行動に出られないと進行を止めた。本当に腹立たしいのは、こちらを追い抜いておきながら今度はこちらに見向きもせず、接岸した城砦船から上陸し続ける雑兵の相手を楽しんでいて、尚且つ時折こちらに気付いたらしく目線を配ってくること。

（待てよ……何故俺たちを抜いてきた？）

大量失血から朦朧と揺らぐ意識の中で、ニルチェルトは敵の策を考えた。

トウコツがこちらを放っておいたのは何故か。失血死を悟って追撃をやめたのか、或いは待ち伏せの策があってソコへ誘い込む為に攻撃してこない、またはこちらに攻撃させるように立ち振舞っているのか。

「下の雑魚共を援護しろ。但し、罠の可能性がある」

「しかしボスは――！」

弾丸が掠め始めた空中で、吸血鬼達は窮していた。
下の上陸部隊を助けたい気持ちはある。そうすることによって、自分たちに注がれる銃弾は減るし、逃亡経路の確保にもなる。だが、彼らのリーダーであるニルチェルトの様態は確実に最悪へと向かっていた。色世時に奪われた右腕、その口から失われた大量の血液は既に致死量に達しており、そんな状態で追撃して来たトウコツ相手を足止めしていたのだ。体力的にも限界にあり、また作戦の悉くを上手く運べなかったこと、新米と言われていたトキに敗北したことなどで相当なストレスを抱き、精神的疲労も大きい。
失敗に次ぐ失敗、そして敗北から繋がるであろう死を前に、それを証明するかのように部下たちの前でニルチェルトは1人、気付かぬうちに高度を落としていた。

「ボス、ここでお別れします！
俺たちは下の部隊の援護に行ってきます！」
「ボスを頼んだぞ！」

ふと、高度の低下に気付いたニルチェルトは自分の瀕死に気付いた。
潮風に触れて痛む右腕の斬れ口からは、鈍い痛みと籠ったような熱しか感じない。急激に襲い来る倦怠感と眠気のような、過去に覚えのある恐ろしい感覚。死ぬ直前の体が覚えるあの温度が、今まさに認識の中にまで足を踏み入れている。

「馬鹿野郎！　ボスを護らなくてどうする！」

「護る為に行くんだよ！　俺たちは対空砲を潰す！」

論争を決着させた部下たちが二手に分かれるを見て、どこか安堵を覚えてしまう。勝手な行動を許すことは、統括する者としては見過ごせないが、まともに指揮できない現状では自分こそが足手纏いであることを理解している以上、部下たちの決して依存しようとせず、また素早い決断は有難味を覚えずには居られなかった。

この死に掛けを放棄してまで逃げるべきだろうが、新米古参問わずに弱き有翼達は護りの陣を築く。

（部下を大事にしていた良かった……というワケか）

両脇に滑り込んだ二人の部下に支えられ、ニルチェルトは自力での飛行を断念した。

「ボス！」
「負傷しているぞ！」
「対空砲だ！　下の対空陣地を潰すんだ！」
「ジャンヌが居るぞ！？」
「トウコツもだ！」

右脇から支えていた吸血鬼が対空砲で胴体を分断されるのと同時だった。北部、南部でサボタージュを終えた部下たちがそれぞれ西部の合流地点に到達した。自分たちがボスと慕う人物の負傷を知り、その逃走を助けようと急降下して防衛部隊へと攻撃を仕掛ける。

「来たぜ姐さん！」

頭上より迫る吸血鬼に気付いたトウコツが喚起を促し、大剣一本を吸血鬼目掛けて投擲する。

その最中、拡散する斬撃を横薙ぎに放ったジャンヌは通信機に大声で呼びかけていた。

「非武装派の方々聞こえますか！
始めて下さい、ウインド５！」

海岸からは途切れることなき大軍、背後と頭上から吸血鬼の一団。三方向に敵を置いた防衛部隊は後退を始める。ただ独り、トウコツだけは前線に残って暴れていた。

「来た！」

グレネードの雨を降らせる吸血鬼と、斬撃突風で血の雨を降らせるトウコツが同時に気付く。

空中での軌道が反れる。

潮風が変わった。

強く、それも空中で絶命した吸血鬼の死体が本来の落下予測地点を大きく外れるほどの強風が。

（この風はもしや、ナイトメア非武装派の……！）

吸血鬼達が異変に気付いた時、それは既に形成されていた。
開戦してから間もなく、数時間に渡って四凶軍の接岸を許さなかった“暴風”が再開したのである。

「良い風だぜ！　リデア・カレー！」
『私はカルバレーだ！！』

『隊長、四凶の軍勢は上手く嵌りましたよ！』

ＡＭ　０６：２５
現時点での数的優劣は開戦より一向に揺るがず、四凶軍の士気を高めることに一役買っていた。
しかし、個別にみた場合の士気の高さ・戦意の濃密、成功した作戦の数では圧倒的に協会が押していた。
どこに弾丸を放っても当たる状況ではあるが、それでも悉く四凶軍の策を阻害するは、協会とナイトメア非武装派による新生の連合である。望めなかったと思われた連携にも問題はなく、それが士気の高揚に一役買った。
今また、一つの作戦が嵌る。

（協会司令の前線介入とは……当然、四凶軍としては何としても討とうとし、殺到するだろう。
そこにリデアの虐殺暴風だ。

被害は少なく見積もっても数千から数万と言ったところか）

特急風司ことリデア・カルバレーが数時間に及んで集めた風は、海水を空高く巻き上げ、二足歩行を許さず、船を傾ける津波を生みだすほどの“超濃密台風”となって協会本部の各海岸に上陸した四凶軍を直撃した。

厚さ５ｋｍ、高さ２２ｋｍ、風速１３６ノット。この自然利用兵器を創り出すＳＲはリデア、その時に作られる風域を約８００ｋｍサイズから５ｋｍサイズに圧縮して台風の破壊力を高めているのがベクター・ケイノスである。

（しかし、これがキュウキの作戦なのか？
もっと知的な作戦で来ると思いきや、数を頼りに押し寄せるだけとは……何かあると見た方がよさそうだな）

台風の中に直径４ｃｍもの雹を混ぜながらＭｒ．シーズンは考える。

四凶軍の勢いは確かに激しい。

だが、本当に数だけで本部を制圧できると考えてるのだろうか。

台風の壁内に取り残された四凶軍を無力化させながらジャンヌもそれを考える。

（コントンが侵入したという話から、どこか四凶軍の動きが単調になった。

考えにくい可能性として、内部分裂が起こった。または結末を焦って単独突入した。

確かに、コントンというＳＲの力は未知数。これまでの検査を事あるごとに拒んでその詳細を知る者は協会には居ないと言っても間違いないし、私も知らない。ただ、強力であるということだけが断言できる唯一）

一瞬にして数千の命を巻き上げた暴風が、血に染まった海水と無数の金属を取り込んで陽光浴び、さながらルビーのような輝きを放って両軍に一種の恐怖を思い出させていた。

この戦争の主役はＳＲであること。　また、勃発の原因もＳＲであったこと。

（待って……まさか、これだけのことをしておきながらコントンの一件で“標的を変えた”ということはないわよね？）

「ハッーハッハッハッ！
良い子は台風の日に外出してはいけないものだ！」

本来人間にコントロール出来なかったモノの手綱を得る、あの瞬間の喜びの大きいことを例えるに人は小さ過ぎた。

しかし、現実に人間は制御不能を覆した時、人は喜び笑い、時に泣いては過去を嘆く。

「隊長、調子に乗りすぎです」

そして、一つの克服が次への自信へと繋がり、また新たな制御不

能な現実を克服するだろう。
だが、我々は忘れてはいけないことが、制御不能という事実の中に確とあるのだ。

「冷たい眼差しで見守ってやりな、ケイノス」

決して、人は全てを制御できるようになることはない。
有限な種である以上、無限とも言える障害を超えきることは有り得ない。
起源と期限である生死がその代表であるように、その二つを結ぶ“生”もそうであるように、個人制御できるは一個、意識を持った一生命体としての限界がそれなのだ。たった一人、多くても二から五人。

「常識的に考えて、その男にリミッターを戻す術など備わっているわけなかろう」

どこにでも転がっている『常識』は、例えば小説の中の分節かもしれないし、映画のワンシーンかもしれない。或いは漫画の一コマという可能性だって十二分にある。
無数に転がる常識を果たして誇ることが出来ようか。
先人達が制御不能を――感情や意志を表すために言葉や行動から始まり――乗り越えた数々を、我々は文化と呼び、それに頼りきってはいないだろうか。いま手にある、眼前にある常識の集合体は過去からの贈り物だという常識を、認識できる人間が果たして何に居ようか。

「隊長、あんまり無理すればまた今夜もシチューですよ」

「グヌッ！？

それはあまりにも酷な話ではないかな、ケイノス君！

この、瞬間的かもしれぬがそれなりの功労者に、よりにもよって口内炎患者にカスピ海を飲み干せと言っているものであるぞ！」

続く嵐の、内では蹂躙、外では逆転が起きていることも把握しきれず、ナイトメア非武装派の三人は笑顔で強風壁のコントロールを続けた。

リデアの暴風が不安定領域に安定して達した時、キュウキは二枚の切り札を城砦艦より投入した。

「行きなさい、コピープレイヤ」

第５８話－Ｏｕｔｔａ　Ｃｏｎｔｒｏｌ－（後書き）

ある者は絶望し、ある者は希望を得る。
それら感情に共通が芽生えることもあれば、結ばれた認識を一瞬にして分かつこともありうる。
戦況の打開に敵の撃破、味方の死や戦争の理由、目の前で立ち上る火柱の大きさや、死角で行われている虐殺の香り、それら戦場の感情事情が渦巻く時間帯に、協会やナイトメア非武装派、小規模集団に無所属の一部ＳＲ達は同時に気付いた。
その中で、最初に口を聞いたのはジャンヌ、

「会長……？」

西部海岸の四凶軍沈黙から直ぐ、真っ先に会長の異変に対応したのは防衛部隊であった。

「負傷しているぞ！」
「衛生兵！」

－ＡＭ　０６：３１－

戦況に余裕を作った西部海岸の防衛部隊は南北と、対吸血鬼、協会長救護に分かれ走った。
暴風の壁も持って１時間。
その間にどれだけの補給と備えが出来るかが大事、誰もがそれを

理解している最中に不安を抱いた。

「何があったんですか会長！？」

協会を小さな国とした時、その君主たる人物がまさに協会長：オウル・バースヤードなのである。そんな重要人物が何故、前線に居たわけでもなく全身に深手を負って前へと出て来たのか。

彼の右腕であるジャンヌは真っ先に質問した。傍らの医療班の声に負けぬ大声で。

「トウコツ！　頭上の吸血鬼を牽制頼みます！」

「任せろ！」

混乱の中に加わった混沌は、次第に個々へと負の感情を感染させゆく。

「コントンですか！？」

「……」

右腕粉砕骨折、両手十指欠損、内臓破裂、四つの大きな刺創と七つの貫通射創、腰部右側骨折、左足アキレス腱断裂等々、酷く目に付く傷だけでもそれだけあった。それにも関らずジャンヌの質問にはイエスを示す頷きが表された。

開戦以来最大とも言えるショックに絶望へと導く死神が部隊間の

中に降り立とうとした、そんな時に会長は口を開いた。

「コントンという男は、もう居ない……」

風を、暴風の喧しさを抜きにして言えば、確実にその瞬間は無音と化していた。

四凶軍の名を示す四凶とは四人。

内一人、トウコツだけは協会の側についている為、敵対している四凶は三人。

現時点で、協会をベースにナイトメア非武装派、小規模集団、無所属ＳＲ達によって連合された軍が討った四凶はトウテツ。

既に三分の一を失っている四凶軍に、重傷を負った会長は追撃の言葉を加えたのだ。

「コントンは……居ない」

「討ったのですか……！？」

その言に誰もが奮えた。

歓声が沈みかけていた各部隊の士気を最高潮まで高める。

満身創痍ながらに浮かべる会長の笑みに、救護ＳＲ達も腕の依りを尽くす。

「ジャンヌ、耳を」

「はい」

出血を止め、血液を補った会長の呼びかけにジャンヌは耳を貸す。この戦場における情報機密を考え、雰囲気的にも重要な話と見た救護ＳＲ達は少しだけ距離を置いて続行のサインを待った。

「“ノア”を使う」
「……ノアを、ですか？」

耳打ちされて伝った言葉に、重大と言う単語と非現実を覚える感が同時に浮かんだ。
協会本部設立、また協会長オウル・バースヤードと歩むと決めて以降、協会が所有する最終手段として覚えて欲しいとジャンヌはその名を教わっている。それがノアというモノ。
協会最後の切り札であり、全人類に対しての最終手段であると。

「それだけ四凶は危険だと？」
「今しかない」

しかし、ジャンヌが聞いたのは最終手段であるというレベルまでであり、詳細にどんな代物なのかを知らない。

「預けていた鍵を」
「はい、了解しました」

周囲の部隊に円陣を組ませ、ジャンヌは会長が所望する鍵と呼ばれる“鉱石らしきモノ”を取り出す。
会長の傍らで片膝立て、スーツの袖下に隠し持った短剣を自分の右肩に突き立てる。顔色一つ変えずに傷口から取り出したそれは、大きさ１ｃｍ程の針状の赤塗黒物。

「お約束通り、今日まで隠し通しました」
「ありがとう……」

手渡すその瞬間、西部海岸に新たな呼吸が二つ、疑問を抱きながら現れる。

（何だ……？）

僅か数秒の間に赤く染まった風の壁にばかり目を奪われていた色世トキ。
西部海岸に出来あがっている異様な陣形に目を止めた。中心に人影が二つ、但し人相まではハッキリと見えない。
何事かと近付くトキの眼前で突如、異様な雰囲気を醸し出していた円陣に異変が起こる。

ざわめきは、微かな悲鳴を隠そうとしていた。
掻き消されるかのようなその声を聞き、トキは低速世界を展開する。

（決闘？　それとも誰かやばい人が重傷なのか！？）

手中の武器を時間分解して回復に当てる準備を――だが、それよりも早く、大きな異変が起こった。

無音衝撃波。

円陣が中央から爆風のような風圧で吹き飛んだのである。
大の大人が軽々と宙に舞うほどの風圧を、トキは地面に伏すことで飛散する破片らの直撃を免れた。その圧は瞼や頬を叩く砂塵が凶器とも成りうるだけの破壊力を有しており、更に視界まで遮ってしまう。

（何だ一体……何が起こった！？）

同時、吸血鬼達を牽制していたトウコツも自分の足元で起こった異変に気付いた。激しく粉塵が巻き起こるほどの事態。
記憶に間違いがなければ、あそこに居たのは協会長と、

「まさか、ジャ――！」

懸念の結末をと、空中を下り始めたトウコツの視界で、風の障壁に巻き上げられていく粉塵の中に最悪の結末が、奇形となって出来

上がっていた。

「なッ――！？」
「どうし……！？」

円陣の中心だった場所には二人。
心臓を手刀で貫かれたジャンヌと、左手を彼女の血で汚したコントンの赤き恍惚嗤顔。

「こんな所に隠していたのか、オウル・バースヤード。悪いが貰うぜ。フッ、フフフ……ハハハッ！」

謎の爆発、協会長の消滅、コントンの出現。
急変する事態に防衛部隊の大勢は愕然とし、そんな中で二人のSRは、現れたソイツとその行為に対して激しい感情を露わにしていた。

第５９話－激変－（前書き）

拾い上げた手紙を読み通すと、価値の無いモノと判断したメイトスは散乱した廊下に捨てた。

協会内部。

コントンが侵入したという話を耳にし、その真偽を確かめようか悩んでいた矢先、偶然にも迷い込んだ司書室の中にその傷跡を見つけていた。四凶軍の誰もがまだ海岸で手間取っているというのに、ここだけ内乱でもあったかのような激しい破壊痕があった。壁に埋め込まれた書棚から無数の資料が散らばり、一部の棚は飛び血や銃弾によって汚れていた。

（コントン……あの男の目的も掴めんな）

司書室を出て、メイトスは当初の目的であった協会長室へと急ぐ。

今度は道を間違えない。

百数年生きていながら、未だに方向音痴な自分に毒を吐きつつ閑散とした廊下を進む。

第５９話－激変－

嵐の中で男は熱に駆られていた。
得意の闘志と、初めて出会う激情の怒炎に巻かれ、眼前の明確な敵へと剣先と銃口を向ける。

「テメェ！　なんて事をしやがる！」

もう一人、余計な口を開かず突撃する少年は、死角を狙って四凶に接近する。冷静を保っているようで、実のところは不安や疑問、加えて恐怖と怒りを綯い交ぜに己と四凶とに向き合っていたのだ。

（ジャンヌさんを、協会の司令官をずっと狙っていたのか！　一体、何処から現れたんだ！？）

前後から挟撃する二人を前に、オールバックを乱したコントンは笑顔で迎えた。不敵の笑顔でトウコツに銃口、背後に迫るトキへ時間緩制で対抗する。
展開される低速世界の中で、風と共に迫るトウコツに銃弾を放つ。通常時間速度が戻る頃には眉間を貫き、新たな死体がこの戦場に転がるだろう。
そう確信して背後のトキへ向き直るコントンの、

（トキが居ない！？）

背後、黄金の刃は迫った。
右耳を掠める。
次に黒刃白峰の剣、双剣の一振りである左手の畏天（いてん）による心臓目掛けた一突きを躱したコントンは、銃口を背後へ回り込んだトキへと向ける。発砲と同時にコントンはトウコツへ放った銃弾が消滅している事に気付き、同等速度で行動するトキに驚いた。

「俺に用事があるようだな！」
「あんたのリクエストは見つかったが、忘れて来た！」

「ハ……！？」

二連撃を躱す。
二連射を避ける。

全身のばねを利用し、上半身の運動だけで首を狙った軌道と手首を斬り落そうとする斬撃を躱す。
拳銃の射線上に一刀を置き、もう一刀で頸動脈、或いは肩か心臓を狙う。

目的がコイツに変わった今、殺さずにある程度削る必要はある。
最善の結果はここでコイツを仕留める事。そのためには、トウコツの助けが要る。

二人が同時に姿勢を変える。

ジャンヌを攻撃したことにより、執拗に追撃してくる可能性の高いトウコツが現状で大きな障害。
コントンを早いうちに抑えるためにもトウコツを今すぐにでも行動可能にしなくてはならない。

二挺目のデザートイーグルを抜いてトキとトウコツそれぞれに弾丸を放つ。
畏天を手放し、トウコツを中心に半透明の白色半球を展開する。

低速世界に散る火花は、コントンの弾丸を固定された時間空間に掴まれた畏天の刃が、その鋭利を失いがらも銃弾を弾き反らしたために起こったもの。　トキに向かった銃弾は躱され、コントンに向いた剣先と手中に作った拳銃の弾は、回避行動を強制させながら左手に持っている大型拳銃を盛大な火花と共に飛ばす結果となった。

通常時間が戻りくる中でトウコツとトキの二者から距離を取るコントンは、負傷した左手をかざして二人に静止の声を掛けた。

「ククククッ……コントンなど居、ない」

眼前にて落下を始める畏天の“柄”を、時間を取り戻してトキの展開した状況へ瞬時に対応するトウコツが口に銜(くわ)えて取る。右手のトゥーハンドソードを投げ放ち、左手の大剣と右手に移し持った畏天、更に全身に斬撃の風を纏ってコントンに追撃を掛けた。
トキも続く。
回転して迫る大剣をコントンは屈んで躱しつつ銃口を向ける。狙いはトウコツだが、それを阻害するために地面へと手を伸ばす。トキが足を止めて創造したモノは櫂(かい)、ボートを漕ぐために使うオール

とも呼ばれる長く重たい金属製に創造された棒である。櫂そのものに、デザートイーグルの大型弾頭を防ぐだけの強度はなくとも、平らな面に斜めから侵入して衝突する弾道を辿る銃撃は、完全に止められずとも軌道を反らすことは十分に可能だった。トウコツの右肺を狙った弾丸は櫂に反らされ当初目標を見失い、背後の地面に傷跡を刻む。

血眼になるほど憤激したトウコツが、射程圏内にコントンを捉える。

「やめろ――！」

笑顔を表面に出したまま、コントンが踵を返す。

行動表現に矛盾する言葉を放ちながら、再びデザートイーグルが火を噴く。が、正面からの対峙ではトウコツに分があり、見切られていたその銃撃、銃弾は右手の畏天に反らされてしまう。

ジャンヌを傷つけられたことに酷く怒りを覚える中、トウコツは片隅でトキが使っていた便利な“畏天の能力”に機嫌を回復しそうになっていた。

“カマイタチの能力が、剣を伝った”

握って初めて知るその剣の能力を――ＳＲの力を伝播し、刀身から放つ事が出来るという機能を――最大限に利用し、斬撃突風を横薙ぎに放ちながら、畏天自体の刃でコントンの顔面を狙い、もう一本の大剣で左肩狙いの袈裟を喰らわせる。

が、コントンもただでは喰らうわけがない。低速世界に入る事によってトウコツの斬撃各種から避難しつつ、再び銃撃の距離へと移る。だが、引き金の反応が皆無である事に気付き、斬撃突風が大型

拳銃を破壊していたことを知る。同じ低速世界に入って来たトキに視線を向けると同時に、原形を失ったデザートイーグルがグリップを残してコントンの手を離れる。

『トウコツ、トキ！　攻撃を、やめて下さい！』

トウコツに次なる投擲をさせまいと、トキを盾にするよう懐に飛び込んだコントンを注視しながら、二人は突然響いたジャンヌの声に耳を疑った。

『それはコントンじゃない！
ドールズ・フリーフォーム、というＳＲの“投影”です！』

鳩尾への肘打ちを喰らいながら、トキはジャンヌの言葉に困惑した。

こいつはコントンじゃない？

同時刻。
協会長室で完全否定のＳＲ：メイトスは、かつてない衝撃に見舞われていた。
ＳＲ界の頂点に立つオウル・バースヤードは、協会という巨大組

織を束ねる長であり、その絶大な力に信頼を寄せる者もいれば、恐怖を抱いて従う者も少なくはない。だが、事実として様々な感情を大勢の人間に与えるだけの影響力を持っている。

「何故貴様ほどの者が敗れた！？」

声を張り上げ、四肢を切断された協会長に否定の力を掛ける。

（この損害を否定する！）

いずれ殺害する対象であるオウル・バースヤードだが、メイトスにとって、また世界にとって今ここで逝去されるのは大変な問題である。なぜなら世界中の力あるＳＲ達が、それら個々の持つ強大な力に酔うことなく秩序の中に収まっているのは、協会長と言う絶対支配の力が彼らを抑止しているからに他ならない。協会と言う巨大組織の存在や、ナイトメアとの対立バランス、小規模集団との繋がりも然り。

それを束ねる男の死は、世界の暴走を意味するのだ。

「コントンに支配を掛けなかったのか！？」

分離していた四肢を、そもそも負傷自体がなかった事として繋ぎ戻され、神経に信号を通わせる。零れた血液までもが体内へと時間逆流した。

ほどなくして協会長の重傷自体が“無かった事”の完成に近付く。
が、完全ではない。
メイトスは力を残しつつ、協会長を完全には回復させない。メイトス自身が協会からは追われている立場にあり、表面上は協会と敵対関係にあるのだ。バースヤード個人との関係はそれほど深くもないが、決して皆無とも言えない中途半端な関係である。だから、半ばと少しだけの回復を施したのだ。
そもそも協会長という人間を信用しきっているわけではない。

「不可……」
「何？」

「……Ｏｕｔｔａ　ｃｏｎｔｒｏｌ」

会長がもらした制御不能という言葉に、肩を貸して会長を椅子に座らせようとする。
メイトスは眉間に皺を寄せて問いた。

「もう一度言え」
「奴は、支配しきれん……」

何処かへと消え去った静寂を惜しみつつ、メイトスはバースヤードの言葉に耳を傾ける。

「支配しきれないとはどういうことだ？」

「――お前と同じ。強力すぎるSRが特定の可能性と言う枠を、大きくはみ出しているからだ」

椅子に深く体を預けながら、協会長が大きく一息つく。

「それは、色世トキのようにか？」

「……そう。

現在の色世トキのように、だ。

彼の関わる所、未来へと繋がる道が先見出来なくなり、現実にそれが起こって予測不可能なアクシデントとサプライズが起こっている。

例えばコントンや、メイトス――君がその最もたる該当者だ」

視線をメイトスから外して割れた窓の外、閃光絶えぬ地獄を覆っている朝空へ向ける。

「ならば問う。二人の実力は、様々な状況を無限の未来へと繋げるほどの可能性を秘めているというのか？」

「認めたくないだろうが、事実はまさしくその通り」

視線を部屋の中に戻し、肘かけに置いた腕を上げて右手の甲を眼前に持ってくる。

潮風が生ぬるいような、冷たくもあるような。

これが現実のような、夢のような。

「……」
「信じられん。まさかコントンがお前に制御できぬほどの力を持っていたとは――」
果たして、力とは現実か。
「――なぁ、メイトス。
俺の独り言を聞いてくれはしないだろうか？」
「独り言、だと？」
「そうだ」
手首を翻して掌を見つめる。
どこか上の空な協会長を見つめ、メイトスはその独り言というものが始まるのを如何を答えることなく待った。
「この世界がニセモノだったら、お前はコントンのようにリセットボタンを世界の何処かに求めるか？
俺は、求めない。
俺と言う自我を持った個体は、今、此処で、こうして無数の文化に巻かれて、本来無意味であったはずの音を紡いでいる」
「偽物の世界だろうと、そこに自分が居るならその形や振動、熱や信号、自由と輪郭を否定する理由にはならん。

我思う故に我在り。
こんな有名すぎるフレーズを言わせたいのか？」

「独り言は素晴らしい。
勝手に解釈の可能性を与える事もできれば、心の中だけで蟠（わだかま）るだけだった違和感を輪郭化させてくれる。
例えば、完全支配という俺のＳＲ――それが何故コントンに効かなかったのか。支配無効だったＳＲは過去他にも居た。それなのにどうして、俺は今日まで完全支配であったのか。もしかすれば、俺自身がその理由を忘れていただけなのかもしれないし、思い出したくなかったからかもしれない」

「必ずしも相手するとは限らん」

仏神にでも祈るようにして両手を揃えて眺め続ける会長。
静かに、全身の力を抜いて立ち尽くすメイトス。

「本当にこれは偽物の世界か？」
「何を根拠に偽物の世界と言う？」

「現実にそう言う奴が居る」
「俺にそいつを否定せよと言いたいのか？」

「解釈は自由だ」
「ならば、判断材料となる言葉を所望しよう」

「それはない。
これは俺の独り言――でも、少し聞いて欲しい悩み。

“極災式”は俺だけでは手に負えない」

「――何？」

ゴクサイシキの単語にメイトスの眉が上がる。

「文明だけが進んでいた世界に、“ＳＲ”という力を齎した一族は強大だ」

「それは四凶と違うのか？」

「“四凶の形成”をしたのがソイツらだが……その言葉でも間違いと言えない」

「手に負えないとは？」

独り言ではなくなる。

「“極災色”は現在、３人」

「……コントンか？」

「いや、色世境、時、織夜秋の３人。中でも異色はトキ――彼はまだ、他の極災色と比べると小さな脅威ではあるが」

「小さい？　アレほどの力を持ちながら？」

「そう。肝心なのは――」

「――――ッ！！」

小さな呻きが漏れた。
静寂が不思議を煽る。
物理接触の摩擦音や人体の破壊音が今、確実に響いていなかった。

言葉を止めたメイトスが、己の腹を貫いた赤染まりの手と、そこに握られた刃物を見つける。
遅れてやってくる衝撃は、オウルが物理速度を超えた速度で行動をした証。
背後から伝う声を間近で聞かされつつ、拳を握りしめて激烈な痛みと身体の震えを堪える。

「トキほどの力でさえ、前例の極災色と比較すればその影響力は果てしない差も明確に、小さ過ぎるというのが現実。君とトキを比べるならば、世界の未来に与える影響など君は遥かトキに劣る」

「貴様……な……っ！」

呼吸さえ困難な状態で、メイトスは辛うじて膝を曲げることなく立ち続けた。
違和感を覚えたのだ。
いつもの協会長ではない。

「色世色の“万に著す個別”から始まり、

色世界の“線化具現”
色世平の“同時への発成”
“矛盾呑む因果”から世界に共通する本質を知らしめた色世繋、
それらを隠した色世事の“根源隠蔽”
カオスの中で希望を育んだ色世誠――その“乱流結束”――世界は幾度も死に、蘇生を繰り返すうちに、排他的概念を見出すが、それを捨てきることはできなかった。
後に続く、
色世夢の“活力と境界限度”が安定を見せかけた世界に更なる混乱を呼び込んだ。
絶望に続く希望など、いつでも小さい。
だが、その安堵感もただならぬ感染力を持つ。
“始終繋綴”色世岸は、私を安堵させてくれた数少ない人間にして、SRという異能力者の暴走を収めて統治（協会）の礎を築いた」

「なに……モノだ……！」

「何者でもいいのだ。
ただ、私はあいつらが気に入らない！
この世界も、前の世界も、これからの世界も――その真実を知りながら黙認している男も――このままで在ることは絶対に許さない！！」

赤に染まっていた腕が、胴体を貫いた凶手とその主が消える。
何事もなかったかのように存在がひとつ、忽然と消える。
残されたメイトスは、死出の半券を片手で抑え、この戦場で初めて片膝をつく。

（オウル・バースヤードだったのか、あれは？）

それとも、これまで隠れていた新たな人格が発現したのだろうか。

元々掴めない男の謎が更に深まってしまう。

（探さなくては……！）

しかし、決意と同時。困惑するメイトスの答えに近付く人間が居た。

前線で戦うトキとトウコツである。

二人は似通った疑問を抱きながらも、メイトスの一歩先を行く状況に遭遇していた。

―南西部エリア境界線付近―

『思い出しました！

そのコントンは本物のコントンではありません！“ドールズ・フリーフォーム”という、能力転写によって映されたＳＲです！』

「じゃあ、会長でもコントンでもないって言うのか――っていうか喋るな、ジャンヌ！

大人しくメディックを待て！」

『聞いてください！

ドールズ・フリーフォームというＳＲは既に亡者です！　昔、私が殺害しました！』

コントンの姿をしていた誰かがトキと格闘を繰り広げる。
一瞬足を止めたトウコツは耳を疑った。
ドールズ・フリーフォーム、他界しているSR、だが目の前にそれが居る。
容姿は紛れもなくコントンのそれだし、口調や雰囲気も、四凶仲間であったトウコツからは別人のものとは到底思えなかった。

「じゃあ、コイツはなんだ!?」

『間違いなくコントンではなく、そしてドールズ・フリーフォームであると断言できます!
その証拠はいくつかあります。まずは影、それから接触時の輪郭です!』

トキに加勢しようとしたところで、反撃の平手打ちがコントン――ドールズ・フリーフォームの目を掠める。
上体を反らした偽コントンの輪郭が、ほんの一瞬だけ歪み崩れたところをトウコツは確かに目撃した。

『ドールズ・フリーフォームというSRは“自分自身が変身”することは出来ない!
その代わりに、自分の記憶にある他人の像を誰か別の人間に“投映／着せ替える”事が出来る!』

「つまり、他人の皮を着せては取り替えられる――そういうことか!

どうすりゃいい！？」

『ドールを操っている本体を討つか、着ている他人と纏っている本体の両方を眠らせる事ができれば、ドールズの呪縛から解放することが出来ます！』

「トキ、そいつを眠らせろ！
俺は本体を探す！」
『トウコツ、おそらく本体は居ません！』

インカム越しに伝わるトウコツとジャンヌの怒声に耳を傾けながら、偽者らしきコントンの攻撃を躱すトキ。
なるほど、と納得する。本物とは程遠いという感触を手に、次弾の回し蹴りを屈んで避けつつ、軸足を打ち折るように右足を繰り出す。確かに危険度は高い相手だが、鳴り止まない警鐘の大きさと間隔の短さが連続して教えてくれる脅威の度合いは、本物の比ではなく低い。しかし、それでも警鐘が教えてくれる危険度、それを的確に読み取れる今、眼前のコントンが偽物であろうとも戦車や戦闘機に匹敵、或いはそれを上回る戦闘力を有していることに間違いはなかった。

低空に放った反撃の蹴り足を受けて体勢を崩す偽コントンが、咄嗟にデザートイーグルを取り出して防御の銃撃を見せる。
弾道上に右手を置く。銃弾をクロノセプターで消し、低速世界の中で偽コントンに追撃を仕掛ける。
桜色雪中で戦ったコントンなら難なく覆しているだろう低速世界だが、このコントンは低速世界に捕まったままであった。
仮にこのコントンが本物だったとして、常速世界の中でのみ抵抗を続ける意図がトキには分からない。

要求した黒い物体を受け取りたいが為に殺そうとしないのか、それとも何らかの理由で意図的に低速世界を展開しない、或いはできないのか。

（本物をコピーしているのなら、どうして能力を使わない？
それとも使えない？
まさか手加減？　そんなことが有り得るか？）

ドールズ・フリーフォームというＳＲがどんな力を秘めたＳＲなのかトキは知らない。インカム越しに会話するジャンヌとトウコツの大声に耳を傾け、戦いながら相手の情報を待った。

『ドールズ・フリーフォームを殺害したのは私です！
ナイトメア武装派に対して極秘裏に武器を提供していたので、粛清が必要と会長が判断し、私が実行隊として討伐にあたったのです』

「姐さんが動くってことは、相当強いＳＲなのか？」

『はい、記憶にある人間すべてを何体でも着せ替える事の出来るＳＲ――つまり、戦争中毒者がＳＲ本人の記憶中にあるのなら、それを老人にでも投影すれば戦争中毒者が新たに１人コピーされたことになりますし、更に増やすことも可能です。
ドールズ・フリーフォームというＳＲは、そうやって私設軍隊を所有していた“大学生”です。
最期を見届けたのが私ですから、疑問は多々あっても相手の能力に間違いはありません！』

どうやら絶望的に外道なＳＲがいることだけは理解できた。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第５９話－

－激変！　トキｖｓコピープレイヤ！－

ジャンヌの話に耳を傾ける振りをしながら、トウコツはトキと偽コントンの間に刃を差し込む。

ドールズ・フリーフォームの過去よりも、ジャンヌ本人が喋れる程にはダメージを受けていない――耐えているだけかもしれないが

――戦中に在って楽観や油断は許されないものの、全力での殺人は許可され、しかも大勢の人間に死を望まれる人間が、ＳＲが、例え偽物だろうと眼前にいる。しかも、ソイツはジャンヌに面倒臭い疑問を抱かせている最新の存在。ジャンヌの手足となって働くと覚悟を決めた以上、悩みの芽を刈り取ることも仕事であり、最優先突破事項にして、四凶のトウコツとして応えべき義務。

「トウコツ、トキ！」
「あいよ！」
「！？」

トウコツと同じように協会の司令官であり、またヒーローズを束ねる者として立ち上がったジャンヌが、飛来する斬撃を放ってドールズの足元を抉る。
十二分な距離を取ってそれを回避したドールズ・コントンをトキが追撃する。

「二人以外の者は四凶軍残兵を掃討してください！
本部へ、こちらジャンヌ！　負傷した者の収容準備と、防衛システムを起動してください、レベル３で！」

口と傷口から鮮血を零しながら、ジャンヌは負傷を思わせぬ速度で飛翔・拡張斬撃、拡大斬撃を一度ずつ放った。
暴風壁の中に取り残された数千の敵最前列――上陸艇・船から降りて港の地を踏んだ四凶軍――を横薙ぎの斬撃で刻み飛ばす。赤い飛沫が風に浚われ、風壁の混色に参加してゆく。

新たに駆けつけた防衛部隊の救護員によって緊急措置を受けるジャンヌだが、それでも深刻なダメージを受けた身体を休めることはない。

（あれが偽物のコントンだとしても、ドールズ・フリーフォームで投影されたコントンなら、その再現率は最低でも４９％、最悪７０％の再現率を誇る！）

トウコツだけでは勝てない。

トキが居てやっと止められるが、それでもドールズ・フリーフォームの犠牲者（なかみ）を殺さずに確保する為――確実に殺人処理した筈のドールズ・フリーフォームを、誰が使役しているのかを突き止めるためにも偽コントンを殺すわけにはいかない。

偽コントンがトキとトウコツの攻撃を凌ぎながらステージを変える。

南西丘陵部から南部倉庫エリアへ。キメラと化したトウテツが一切の障害物を飲み込んで平地へと均（なら）したシンプルな戦場へ。

「逃げるな！」

「逃げちゃ……いないさ！」

振り返っての銃撃を屈んで躱す。

低姿勢からのタックルで組みつこうとしたトキを跳び箱の要領で避けつつ、銃口を背中に向ける。

射撃。
が、銃弾はトウコツの投擲したクレイモアによって防がれる。
飛来して銃弾を防いだ大剣を、地面に落ちる前にトキは柄を取って踏ん張り、背後に移ったコントン目掛けて振る。
時計回り。
避ける。
上体を反らし、左足で大剣を握るトキの右手を蹴って武装解除。
同時に銃口をトウコツへ。
発砲、と同時に二人の同時攻撃が軸足と銃手に掛かる。銃弾はトウコツが投げ放った4本目のクレイモアと激突して双方が軌道を失う。蹴り飛ばした筈のトキのクレイモアはクロノセプターの分解・再構築の過程を一瞬で経過し、手を離れる瞬間に新たな得物を作りだすだけの時間を奪われており、一回転分の勢いを味方につけたトキが星黄・畏天の二振りを両手に構えて中と下、足腰の高さにて振るう。

「トキ！」

トウコツの一声。
もちろん、光撃のタイミングは分かる。
トウコツも今だと叫んだのだろう、数か月前なら実現できなかった攻撃だが、今なら――

「ああ、こいつを！」

やれる。

「違う！」
『後ろです！』

インカム越しにジャンヌの声が響くのと同時に警鐘が鳴る。
攻撃を中止して背後へ振り向いた途端、銀色の閃光が額を掠めた。

「ちがッ！！？」

辛うじて上体捻って躱す。
背後から襲いかかって通過して行った攻撃は――銀色の爪――ＳＲ界隈における芹真事務所の社長、芹真が得意とするまさにそれであった。
そして芹真だけが持つその武器は、まさしく芹真が放ったもの。

（芹真さん！？）

コピープレイヤも一瞬足を止める。
どうしてか、芹真がＳＲを僅かながらも解放した状態で攻撃を仕掛けて来たのだ。
その事態にジャンヌもトウコツも、混乱はせずとも多少ながら危機は感じていた。

（芹真、だよな！？）
（ドールズじゃない！　どうして芹真が……いや、それよりも！）

銀爪を並べての突きを放った芹真がトキの居た空間を通過し、高速で踵を返して再攻撃を仕掛ける。
と、同時にドールズ・コントンの手が迫った。
二者の狙いはトキ一択。
トウコツが間に入る時間はすでにないほど二人の攻撃は速い。

（止まれ……！）

しかし、それよりも低速世界。
トキの持てる最大の防御能力が発動した時点で状況は変わる。圧倒的不利を、不利へ。
低速世界の中で異常速度を失った二人の攻撃――ドールズ・コントンの掴みかかりと、芹真の銀爪左下よりの突き上げ――を、トキは冷静に受け止めた。
ドールズの右手グラップルを星黄の刃で攻防両立し、芹真の銀色斬撃を畏天の柔軟鋭利で受ける。それら二種の攻撃を両手の剣と身体の回転によって流し、芹真の背を蹴って体勢を崩す。それから裏拳を放つドールズの拳に被せるよう斬撃を狙って繰り出す。
フェイントにかかる。
刃をがっちり掴まれるのと同時に、早くも体勢を立て直した芹真が高速低姿勢で急接近した。
ドールズが懐へ入り込み、芹真が背後を突く。

（あれ……？）

攻撃してくる芹真に疑問を抱いていたトキだが、ここで大きな謎に気付いた。

（コーヒー臭くない！？）

そんな謎を抱きつつ、ドールズに掴まれた畏天の能力を発動する。

刃を通し、クロスセプターのネクストレベル――Ｌｖ．４：ＣＣ（クローズド・クロノ）――触れているモノの時間を一時凍結することにより、２対１の状況を一瞬だけ１対１に持ち込む。

凍結したドールズの手中から畏天を引き抜き、突撃してきた芹真のタックルを横に飛び退いて避ける。

停止したドールズにぶつかって跳ね返される芹真。

体当たりを避け、一秒の凍結に捕まったドールズと芹真から距離を取るトキだが、芹真を振り切ることができない。

凍結から醒めたドールズも冷静に追ってくる。

（逃げていたドールズ・フリーフォームがトキを狙い始めた）

（何故突然トキを？）

窮地と解釈できるトキの状況。その援護にトウコツが追いつく。

転がり落ちているマシンピストルを拾い上げ、零距離フルオートで芹真の背中へ弾丸を見舞う。効果がないことは分かっている。それでも、芹真の意識が“トキのみ”から“トキとその他”へ変えるこ

とには成功するだろうと確信があった。
こいつは脅威を追っている。
長年培ってきた嗅覚が直感させた。

トキの剣はドールズへ、トウコツの剣は芹真へ、それぞれ向かって弾き返される。

（こいつはコントンの偽物……もしや！）

解放。

（この芹真も偽物だ！　全く本人じゃねぇ！）

低速世界同士の衝突。
銀爪と靭尾が絡み合い。

弾丸以上のスピードで繰り出される斬撃と打撃の攻防に、時間と言う環境が絡み合う。
トウテツが横薙ぎに飲み込んで出来た完全なる平地で、銀色狼と長尾難訓がそれぞれの単純腕力を衝突させる。

変化はその中で発生した。

ドールズは、トキの持つ剣がクロノセプターやクロスセプターが刃を経由可能な代物と感付き、大雑把ながらも双剣を警戒しつつ、新たな拳銃を拾って近接格闘を挑む。近距離銃撃格闘を予測して双

剣を構えるトキだったが、しかし、ドールズ・コントンは突然“行動を停止”してしまう。その様子に驚きを隠せなかった。足を止めるだけではなく、視線や指の動き一つと言ったレベルでの動作を一切止めたのだ。呼吸が止まっていないことから意識があることは窺える。が、トキとしては理解に極まる行動だった。油断を誘っているのかもしれない。ともあれ、警戒して距離を取りつつ、脇目でトウコツの方を確認する。

「ハァッ!?」

その先にもう一つの変化が生じていた。
トキの視界に飛び込んだ映像はトウコツがクリーンヒットを貰い、空中に浮く瞬間であった。

（今度は藍!?）

芹真が消え、今度姿を現したのは見慣れた事務所員、黒髪の長髪を靡かせながら金棒を振り回す哭き鬼の藍。
トウコツを殴り飛ばした彼女は、再びトキへ向かって二振り金棒を唸らせた。

（芹真が消えて鬼が出た！
やっぱりコイツは本物じゃねぇ！　しかも……！）

空中で姿勢を整える。
紛れもない偽物だが、トウコツは本物同様の攻撃力と速度に押されている現実も認めた。
ある意味でドールズ・フリーフォームを凌ぐ危険度を持った何かが新たに参入。久々すぎる強敵の連続にペースが乱れ、攻防のタイミングに誤差が生じる。しかし、それも含めて血沸き肉踊る感覚が全身にしっかりと覚醒を喚起するのだ。

トウコツのSR覚醒は、芹真と同じ体形変化を現す。
脇目を振ったトキは空中で風を纏ったトウコツが、背後からドールズ・フリーフォームに仕掛ける姿を見て、ならばと標的を藍に変える。

「藍、君も偽物か!?」
『トキ、その質問は無意味です！　ドールズ・フリーフォームのコントンとは違って、そのSRは喋れていないみたいです！』

ジャンヌの指摘も空しく、トキは藍を攻撃出来ずに回避と牽制を続けていた。
同時、ドールズ・コントンに背後からの奇襲を察知されながらも、SRを対集団戦闘レベルに解放したトウコツの尻尾が右足に巻き付く。

「偽物に決まっんだろ、ドールズ・コントンみ――ッ！」

鋭い回し蹴りがトウコツの左頬に突き刺さり、言葉が途切れて意

識も一瞬飛びかける。
　また同時、トキの心臓目掛けて金棒が迫る。牽制しているつもりが、逆に追い詰められていた。トウコツが攻撃されないよう、ドールズとの戦闘に集中できるようにと、戦場で無意味な気遣いをしてしまったが故に己の危機に気付くのが遅れた。迷いと気遣いが判断を鈍らせ過たせた。

「その私は偽モノよ、トキ！」

　致命傷の被弾を予知した、当にその時だった。
　二振りの金棒が横から差し込まれた金棒によって止まり、攻撃の不自由に気付いた藍の偽者が間髪いれずに全身から自由を奪われたことを悟る。
　全身に巻き付いているものは、茨の蔓。
　狼狽する彼女を視界に置いたまま距離を取ったトキの横に、もう一人藍が着地し、ドールズ・コントンの飛び蹴りを金棒の十字で受け止め、そのまま押し飛ばす。

「あ……えっ、今度は本　物？」

「真偽を見極める手段なんて――！」

「オラアァッ！」

　右足に絡んだトウコツの尾が、藍に押し飛ばされたドールズ・コ

ントンの身体を引き寄せる。
銃と剣が向き合う。
得物に次いでコントンとトウコツ、二人の視線が交差する。弾丸が鋼と弾けて彼岸花を散らす。
その一瞬を狙い、トキと藍が同時にドールズ・コントンを挟み込む。

トウコツの大声と第三の手をとも言える尾を用いた攻撃に、完全に注意を反らされていたドールズ・コントンは、三方を囲まれて初めて追い詰められたことに気付く。
危地に立っていると感じたのは前後からの衝撃に、意識を闇の底に沈められる直前であった。ドールズ・コントンの背後から藍が、正面からトキが、拳による打撃で鳩尾と後頭部を強撃した。二人の衝撃を逃がさないようにとトウコツの尻尾がドールズ・コントンの身体をしっかり掴んで逃さなかった。

「ジャンヌ！　トキと哭き鬼がドールズを撃破！」
「こんなんで――？」
「こんなのが難しいものよ」

三人の前で白目を剥いたドールズ・コントンの輪郭が崩壊を始める。

「え――この人って？」
「は？」
「ちょ、マジか！？」

始めに会長の姿として現れ、医療班を謎の爆発で吹き飛ばした後コントンへと姿を変えたドールズ・フリーフォームは今、前後からの衝撃によって意識を失うとともにその再現力を完全に失った。代わりに現れるのが誰か。尋問が叶わないような人物だったら保護する以外に術はない。何故なら、ドールズ・フリーフォームというSRは赤子を軍人に化かすこともできるのだ。

「――会長？」

だが、ジャンヌやトウコツの予想に反し、中に覗いた顔は見紛うことなき重要人物。

“協会長本人”のもの。

仮定としてやられたフリをしているだけなのではと勘繰る面々の中、トキだけが一歩前に出る。

うつ伏せに倒れる会長の背中に触れ、時間を分け与える。

「本物です！」

警鐘はなかったのだ。つまり、完全に気を失っている。

会長からは。しかし、一瞬の安堵を吹き飛ばすように警鐘の連鳴が頭の中に強烈な焦りを煽る。

『本物ですって!?　まずい！』

ジャンヌがスーツのポケットに手を急がせる。同じように、藍もジーンズの後ろポケットに左手を運ぶ。
協会長がドールズの中身であることの何がまずいのか、通信機に呼びかける前にトキとトウコツに藍が注意を促した。

「耳を塞いで！」

直後、協会本部を隔絶する赤い風壁が強く、瞬間的に輝いた。
海の上にいるのに明確な地震のような震動にバランスを失いかけ、何事かと周囲に目を配る。

『すぐに、前線の者はただちにヘッドコートを装着してください！一時的な理由で会長が戦域の轟音処理を緊急解除することになりました！』

ジャンヌの叫び声が、戦場全体をノックする通常轟音と共に各々の耳に痛みを思わせながら大事を伝える。

「そういうことか！」

「しっかりトキ！」

「――っ！」

右耳に通信機をはめて反対側には耳栓を押し込んだ藍が、同じものをトキに施す。

突然の大音量と衝撃に脳を叩かれたトキは何がどうなったのか理解できずにいた。三半規管の麻痺もあって膝が折れ、藍の施した耳栓と通信機に両手を当てられて冷静を取り戻そうと努める。そんなトキとは対照的に、トウコツは興奮に3メートルもの尻尾を激しくうねらせていた。

（戦争にしては物足りないと思ったら会長の野郎、戦場全体のボリュームをコントロールしていたってワケか！

おそらく理由は……）

『轟音による指揮系統や前線員の集中力に問題が生じる可能性がありますので注意して下さい！』

兵器を知る人間は、ジャンヌのその言葉を聞いて“音響兵器”というものを思い出していた。

四凶軍の艦隊や歩兵による砲音や銃声に加え、ナイトメア非武装派のリデアとケイノスが創り出した超圧縮台風の摩擦音や人々の絞り出す阿鼻叫喚など、あらゆる『音』がぶつかり合って一種の混沌を作りだす。

『ちょ、ま……緊急緊急！　ねぇ、ちょっと！

魔女のボルト・パルダンが大音量で気絶しちゃったよ！』

会長の気絶が最初に影響を受けたのは、間違いなく協会側の最大火力でるボルト・パルダン。光の魔女であった。

『雪でも降らせるか？』

『やめて下さい、Ｍｒ．シーズン。

余計な行為はこの緻密な作戦に大きく影響し――危ないトキ！』

戦場の異変を誤魔化したジャンヌが叫ぶ。

誰もがそのインカムに違和感を覚えたが、トキとその周辺の者達にはその余裕がなかった。

（もう一人のコピープレイヤーが動き始めた！？）

芹真から藍へ変貌し、突然行動不能になっていたＳＲが、活動を再開していたのだ。

しかも今度は、ボルト・パルダンの姿で。

光撃までしっかりと再現しながら襲いかかって来た。光の剣を両手で。

（ちょ、待て！　無理過ぎるだろ！）

トキが行動しながらも目を見張った理由は二つ。

二振りで防御の構えを取った所でビームソードを防ぐことは出来ない。薙ぎ払うよう横に一線走る光撃を前に、トキは咄嗟に防御を

諦めて飛び退いた。その判断で星黄畏天の二振りは微塵の防御力も発揮することなく焼き断たれたが、代わりに直撃だけは免れることができた。焼け焦げた服の煤が風に浚われる中で、ボルトに扮した敵が相当な再現率を誇るＳＲであることを認めた。それがもう一つの理由である。最初に現れた時は芹真。直接戦ったことはないが、銀爪という武器を使うという話は聞いたことがある。戦闘スタイルがスピード重視であるということも。それから次は藍に変身した。金棒を使っての近接戦闘や単純な鬼の腕力はオリジナルである彼女のそれと大差がない。本人と全く変わらないパワー重視の戦闘スタイル。

三度目の今度はボルト・パルダンである。光撃を使ったり、自身を光で包むことで自由飛行したりと、本当にその再現率は高い。

（まるっきり本人だ……！）

何よりも、身長や筋肉の量、髪の長さから癖毛の付きやすい個所に至るまで再現されていた。三度、三パターンとも。

斬撃から射撃へと光線の性質が変わる。

ビームが地面に焼け痕を残しながら迫り、トキはそれを避けながら距離を縮める。反撃の糸口にならないものかと手元にＢｕｌ－５を創造して一発だけ発砲。結果は予想通り、右手から放たれるビームとは別に、左手から噴射されたビームソードが銃弾に触れて空中で蒸発させた。

「援護すっぞ、トキ！」

「華創実誕幻――！」

「来るな！」

掌から放たれるビームを右手のクロノセプターで防ぐ。
辛うじて叫んだ一言を最後に、余裕が一切合切消える。
頭上から数本のビームが一斉に放射。トキを中心に数メートル内が乱射光で焼け焦げる。

（落下光跡の絨毯爆撃バージョン……！　あれが本当に偽者だって言うの！？）

トキの静止を聞きいれた藍は偽ボルトの観察に努めた。確かに、偽者であろうとあのボルト相手に自分は足手纏いでしかない。助けに行ったところで逆に助けを受ける可能性は大。ならば、ここでトキの足を引っ張らない方法は偽者との対峙に集中させること、それから敵を見極めること。

（大概、コピータイプのＳＲはその変身対象に触れるなり言葉を交えるなりしないと、その姿を得ることはできない。
私や芹真に変身した所から、過去に接触した可能性のある誰かなのでしょうけど……一瞬でも本体の姿が見えれば！）

「おい、哭き鬼！
俺達で艦隊を減らすぞ！」

観察の構えを見せる藍の腕を、トウコツは引っ張って湾口へ向か

った。

「な……離しなさい！」

「うるせぇ！

俺達に出来る援護は、下の邪魔者共を片付けることくらいだろうが！

さっさと終わらせりゃいくらでも援護できんだろ！」

「藍姉様、その人に賛成です！」

「おう、私も異議なしだぁ！」

異議なしではなく、異議申し立て一切拒否である。

しかし、戦闘に於いては高確率で正しい選択を直感によって定めることができる姉を持つ藍としては、反論を挟む余地などなく、また偽者だとしても限りなくオリジナルに近い敵ボルトに立ち向かうのも気が引ける。本音を言うなら苦戦は必至だろうし、心苦しい。

協会ナイトメア非武装派連合の数的不利と言う状況下、個々が貴重な戦力と自覚して然るべきと姉のカンナは言って聞かせた。

「でも、トキにボルトは……」

藍の懸念に答えるかのように、偽ボルトのビームがトキの前髪を僅かだが焼き削ぐ。回避が遅れていたら頭頂を切断されていたかもしれない。

防御もままならないトキの元に駆けつけたい、せめて光に触れられる術を施してあげたい。だが、藍の願いは万力さえも握り砕くカ

ンナの握力によって束縛を受け、どんな抵抗を試みたところで無駄だと直ぐに悟った。

「それに、私らよりもずっと強力な味方が居るんだ。」
「私たちより？」
「アサ兄様に任せて私たちは前線を有利にしましょう」

トウコツとカンナを先頭に４人は走り、同時に彼らの願いはそれぞれ異なる方向へと事転を始めていった。
まず最初に起こった差異は、哭き鬼姉妹と長兄アサの思考からくる行動、その範囲である。

（色世時とボルト――ではない、あれは四凶の切り札か。
トウテツの中に、恐ろしい速度で他人を取り込む人間が居ると聞いたな。我を持たず、他人を得て、初めて人と成る個体。確か、呼称は“コピープレイヤ”とか）

二人の戦いを眺めるだけでアサは動こうとしなかった。姉妹の誰もがトキの応援を期待していた戦力筆頭だが、現実に彼は動かないし、そもそも大規模な攻撃に備えて下手に動けない。

それと同時に前線に大きな水柱が上がる。
ジャンヌを含め、大勢が視線を注いだその先では圧縮台風の防壁を弱性亜空間を纏った新たな城砦艦が突破して姿を現した。甲板に搭載する大砲を湾口部に向けて放ち、その衝撃で再編成したての防衛部隊を周辺士気ごと吹き飛ばす。

新たな衝撃波は、海に浮く人工島の上部へ隈なく伝った。
多くが狼狽する中、トキとボルトは風を受けながら攻防を再開する。理解の難しい放送を背景に。

『必聴！　これより、この放送を通じて各戦地に戦力選抜を発表する！
名前の上がった者は該当地区に赴き、直ちに戦闘を開始すべし！』

『ジャンヌより全員へ通達！
現在最高指揮権を有するミギス・ギガントの命令を傾聴し遂行！』

聞いたことのない男の声が、合流した非武装派のミギス・ギガントの作戦であることをジャンヌが無線に呼びかける。
それと同時に二本のビームが前後から襲いかかってきた。
躱してすぐに読み上げが始まった。

『北部エリア！
芹真事務所の芹真！
からす商会のギムレットとウラフ！
――ポルシカ！
アヌビス隊からチェーンソー、２ハンダー、アロー！
ヒーローズのペルセウス！
非武装派、シーズン！』

激しく振動する足元にバランスを崩しそうになりながら、踏ん張

ってボルトの懐を目指す。
せめてコイツの中身を知りたい。
知ることが攻略にも繋がるし、探している人物の居場所特定にもなる可能性だってなくはない。

（クロスセプターさえ届けば……！）

『東部エリア！
サーカスの陸橙谷アサ！
無所属のコルスレイ！
――ディマ！』

右から左側へ、横薙ぎに瞬間展開するビームソードを膝を折って避ける。一刀、二刀目が右膝の高さから脇腹目指して迫る。
左手でボルトの右手返しビームソードを時間凍結――実際は遅延が精一杯――右手でボルトの左手斬撃を遅らせる。

『南部エリア！
非武装派、リデア！
協会、セン！
――ジャンヌ！
哭き鬼のカンナ、スミレ！』

トキの右手を、体を光化することで躱し、すれ違いざまに脇腹へ一刀を走らせる。対してトキは攻撃がはずれるのと光撃が警鐘を鳴らすのと同時に前方へ重心を傾けて加速。右脇腹の背中よりを僅か

に焼かれて再びボルトとの距離を認識する。焦げた服が、皮膚が、伝わる痛みが敵の強さをダイレクトに感じさせる。額や背中に浮く汗は、外気温の高さと光撃のダメージだけが原因ではない。

警鐘が鳴るころに反応してもギリギリ間に合わない。それだけ光撃は速いのだ。文字通りの光速に対抗する手段は低速化しかない。

『西部エリア――協会のトウコツ、芹真事務所のトキとアイ！
以上、名前があった者は直ちに移動および戦線維持に努めよ！』

一瞬、自分の名前を呼ばれたような気がした。

偽ボルトとの間に空いた距離を、互いに認識し合って中距離戦になる前に先手を打つ。タイムリーダーを展開しての低速世界を移動。音すら重く鈍く伝わってくる世界の中を、トキは常速移動で以て偽ボルトとの距離を詰めた。しかし、偽者とはいえそれなりの再現率を誇る“コピープレイヤ”はボルトの低速世界境界をいとも容易く突破し、トキに近い時間域に入った。ほんの僅かだがボルトの速度が落ちる。落ちたと言っても素人が竹刀や木刀、身近な例えで更に言うなら、野球のバッドをスイングする時と然程変わらない速度での光撃に変わっただけだ。実際効果は微々たるもの。

だが、その僅かな差異がトキの自信に変わった。

低速世界の中でお互いを目指して、正面から、真っすぐに眼前の敵目掛けて走る二人。ここでボルトに変化が生じ、それを事前に察知していたトキは変化が完遂する前に左手を伸ばす。それを迎えるコピープレイヤの左手が、トキの同側手指と激突。トキは眼前に自分の姿を見た。

（本体は、コピープレイヤというＳＲ！）

“クロス”セプターが互いの情報を覗き合う。
名前は、シキヨトキ、コピープレイヤ。
国籍は、日本、不明。
年齢は、１８歳、不明。
目的は、コントン、強力な者全て。
ＳＲは、時間、再生再生（コピー＆プレイ）。
最大火力は、右手のクロノセプター、コピーボルトの“コウトウムケイ”。

（やっぱり、相手をコピーするＳＲなんだ！）

衝突した指の付け根が痛む中、両手に二振りの剣を創造する。

（星黄畏天！）

両者同時。
右手の刀剣による左上から振りかぶって放つ袈裟。
左手同士の激突を機に虚を突いて距離を取る――その間際に相手の動揺を誘う斬撃を見舞ったのだが、結果は左手同様。それぞれが右手に収めた二本の畏天が切っ先をぶつけ合って火花と鋼鉄の身を散らし毀す。角度も速度も力加減さえ同じ相手に、泥沼の展開が予想できた。フェイントをかけてみる。離れると見せかけて右足を踏ん張らせ、左足で前へ大きく一歩踏み出し、右手の返し刃を相手に向ける。狙いは肩。どちらか片方でも武装解除できれば状況を変え

ていくことに余裕ができるだろう。が、やはり同じ動きをするコピープレイヤに刃は届かない。再び黒刀の畏天同士が衝突、次の瞬間に繰り出す星黄の地面を切り裂きながらの逆袈裟も互いの刀身によって破壊速度を失う。

警鐘。

（止まれ！）

静止世界の展開と全くの同時だった。

姿を変えることで静止世界の、トキが望む静止対象の枠からコピープレイヤは抜け出して光撃を再開する。至近距離目潰し光線。

前傾して避ける。

再び距離を詰めた所でコピープレイヤが藍へと変身を遂げ、星黄畏天の上下段の左からの横薙ぎを金棒一本で受け止める。反撃は左手に握る金棒。

（こんなところで、時間を喰ってなんか！）

星黄畏天の刃に白い輝きが灯る。

「！？」

悪寒を覚えたコピープレイヤは再びトキの姿に変わる。

（俺の、動きをコピーするなら！）

同じ武器を手にし、動きを真似することでトキの攻撃を相殺しようと向かうコピープレイヤに、対抗の火炎を宿らせたトキはコピーにコピーで臨んだ。

星黄畏天の二振りが一つの武器として融合し、右手に長刀――方天画戟（うてんがげき）――を形成。もう一人の自分よりも、間違いなく速い。初撃は右から左へ、方天画戟の月牙（三日月状の刃）がコピープレイヤの左腕を狙って、左足の踏み込みと同時に大きく振られる。が、敵対する自分が創り出した星黄畏天の十字受けが月牙を受け流す。反撃に転じようとするコピープレイヤトキへ、二撃目の左から右への斬り払いを放って攻手を許さない。二度目の十字受けだが、姿勢は崩壊しているといっても差支えない程に乱れた。そこへ三撃目。右手一本で方天画戟を振り上げ、頭上から質量加速を利用した唐竹割りのような縦一閃。辛うじて防がれる。

（これは俺の動きじゃないぞ！）

頭の中に思い浮かべたものはゲームキャラクターの動き。

敵がどこまで真似をすることができるのか分からないからこそ、トキはこの方法を試した。自分の中にある、自分のものではない動き。

四撃目、もう一度左から右への斬り払いでコピープレイヤトキの持つ畏天が弾け飛んだ。胸にかすり傷を負いながらも星黄を握りな

おすコピープレイヤに追撃を加える。

（トレースできるものなら……！）

一回転しながらも手首と腕の動きにより、自分の頭上で方天画戟が全方位を斬撃軌道を定めるように振りつつ、その回転力を利用して五撃目を六撃目に繋げる。

四撃目で一歩、五撃目で更に一歩後退することを強制されたコピープレイヤは、完全に自分のペースを失っていた。そこへ迎える六撃目は、回転の勢いのままに、片腕で力強く振られる右上からの袈裟切り。

星黄を弾き飛ばす。

コピープレイヤにコピープレイヤーとして対抗する。コピープレイヤが現実のトキを模して戦うように、トキも現実に存在しながら現実にない人物たちの攻撃で模写と並ぶ。その違いは現実の人物か、或いは“ゲーム”の人物かというだけの違い。

（呂〇の通常攻撃６……やってみろ！）

『非戦闘員は直ちに退避せよ！
繰り返す！』

コピープレイヤの変身、トキの模倣キャラクター対象チェンジ。

芹真に変わって後ろへ大きく跳躍する。それをトキは影となって追いかける。あらゆる移動速度にＳＲとして加護や特権を得ているはずの芹真に、トキは傍目奇妙な高速移動で追い抜いた。

（シャ〇ウステップ！）

コピープレイヤの着地と同時、黒い何かを通過空間中に残して背後に回り込んだトキが新たなキャラクターの準備を始めていた。両足を適度に開いて腰を落とし、低い姿勢のままに右腕を奪取時間によって硬質化させ、肘や手首に回転の備え、足腰や肩には瞬発を発揮する信号を叩きつけ、強烈な打撃の反動を覚悟しながらコピープレイヤとの決着を望んだ。

（キ〇ングブ1――ッ！）

が、敵の落下地点を予想していたトキの意を突き、コピープレイヤは予め来ると分かっている強烈な打撃を擦り抜けることによって、無事トキの背後へと着地を果たした。

同時刻。

協会側の動きを知ったキュウキは一部の艦隊に後退命令を下していた。協会の前線部隊は部隊縮小を行い、特定のＳＲ以外には即時後退を命令したという。明らかに大量殺戮兵器か、それに類する兵器の使用を前提とした動きだ。ブラフという可能性も考えられなくはないが、数的優劣が未だ覆ることのない現状でそれはない。風の

障壁や防御に徹していた協会が攻勢に転じるとしたらもうじきだろうと、付けていた目星が現実になんらかの輝きを見せ始めた。鮮血と海水を吸って赤く染まった暴風の壁、その内側に大きな発光を確認できる。

（またアレか！）

舌打ちするキュウキの降り立った戦艦目掛け、攻撃を指揮している協会側のミギス・ギガントは躊躇いもなく殺戮の光を放つよう命を下していた。

「レーザー照射砲、全門一斉照射！
頼むぞ、ヴィラ・ホート・ディマ！」

『了解よ』

暴風壁の内側で光が一層明るさを増す。
そう感じた瞬間に、暴風の横っ腹にブラックホールを連想させる黒い空間が突如として現れた。四凶軍の誰もがそれに疑問を持つ――そんな思考よりも早く、協会の防衛設備であるレーザー照射砲：フォルトの閃光が黒い空間の奥から出現し、艦隊を蹂躙した。

「ディマか！」
「チームイカロスの制限解放を許可する！　上空より喰らいつけ！」

鋼に隠された海原上に鉄の雨が降り注ぐ。
艦隊が燃える。
火溜まりに囲われながらキュウキは奥歯を砕かんばかりの強さに締める。協会最高峰の航空戦力が、こんなに遅く出てくるとは思っていなかった。完全にタイミングを外された。ジャンヌがイカロス隊の投入するタイミングに自信を持っていた分だけ、過剰だった自身の自信を振り返って認めなければいけないのが腹立たしい。だが、対応は変わらない。
そんなジャンヌを千里眼で見つけたミギス・ギガントは微笑みを零して次の指示を飛ばす。

「対空砲火、予定通りイカロス共の翼を溶かせ！　奴らから空を奪い返せ！」

「対・対空砲火戦闘用意！
ジャンヌ、ペルセウス、ギムレットは最大能力を持って任意に地対空施設の破壊を開始！」

艦隊に上空から爆発物の暴風が襲いかかる。ミサイルやロケットランチャー等の重火器での攻撃の他に、協会自製のハンドクラスターガンによる広範囲焼痍爆撃、レーザーマーカーで合わせた照準に防衛海岸からのハープーン攻撃等、あらゆる兵器が四凶艦隊に少しずつ被害を与え、そのダメージは一秒増しに増大して行った。
上空と半壊している防衛海岸からの攻撃だけで相当な被害が出ているのだ。そこにレーザー砲台の照射も加わり、四凶艦隊は反撃らしい反撃も出来ずに海水を味わうこととなる。

（イカロスは囮ね。狙いは回復……でも、何だこの違和感は？）
（またキュウキが千里眼から消えた。どうやら専属のテレポーターをバックに付けているらしいな）

高射砲が空に向かって咆哮を上げる。
同時、各方面に展開した３人のＳＲが急いで高射砲搭載艦の破壊任務を開始した。

（ナイトメア非武装派に協会ナイトメアの連合を指揮できる人間は居ないのでは？
……待てよ……！
アイツか、ミギス・ギガント！）

（――ん？
新しい未来が見え……４分後に、倒壊！？）

混沌の中で二人の指揮官は同時に動揺した。
混乱を始める頭の中で、現状の打開策を導き出すべく各方面の細かな戦況把握に乗り出す。

四凶の艦隊を襲っているＳＲの攻撃は３種類。ジャンヌの拡散斬撃と拡張斬撃、ペルセウスの広範囲反射領域による銃撃反射、ギムレット：霊装銃士のカラビナーゴースト５０００挺同時射撃である。最も回避不可能な攻撃はジャンヌの斬撃、次いでギムレットのゴーストバレッツ、それからペルセウスの反射領域であった。ペルセウスのそれは自分たちから攻撃さえしなければ返ってくることはない

が、その選択肢が有り得ない状況である。
次の作戦の為にも制空権の掌握は必須。

「東部航空戦力を以て敵航空戦力を削れ！
西部航空隊は搭載艦ごと後退、十分な距離と判断した後各々の判断で出撃！　即時投入だけには注意せよ！」

「協会の全部隊に告ぐ、本部レーダー塔は１０分以内に倒壊の恐れがある。
レーダー塔直下にいる者は直ちに退避、司令室を“セントラルプール”に移す！　待機中のオペレーターは至急配置に就かれたし！
プールの準備が整い次第、現司令室を放棄。司令処をレーダー塔から地下中央のセントラルプールに移行する！」

風の壁が攻撃力を完全に失う、その瞬間にキュウキは閃光に駆られた。
今更ながら気付く敵の正体。これが協会との戦争ではなく、四凶を良しとしない者達との戦争であることを認め、奥歯を噛みしめてミギス・ギガントの可能性を自分に強く言い聞かせる。相手がいると分かっているなら対策はある。

「コピープレイヤ、私の声が聞こえている？　ボルトに変わってあの光撃を使いなさい」

焦りが消え、想定範囲内での策を命令する。
一方でミギスは四方の状況に注意を傾けていた。

「各戦線の状況はどうか？」
「東部は依然変わりなし！」
「南部は戦線の後退が始まりましたが、予定通りです」
「北部海岸は芹真の奮闘により戦線を、戦線を維持！」
「西部海岸も後退開始！　ただ、シキヨトキが敵ＳＲと交戦中！」

二人の頭脳が戦場に目を向ける。片や後方指揮を執り、片や前線指揮を執って大局を見極める。
色世トキは、コピープレイヤは、いまどんな状況か。

（色世時と交戦しているのか！）
（あれは……ボルト・パルダンの偽者！？）

二人のＳＲが互いに背中を向け合った状態から、一瞬で正面対峙、立ち位置の逆転を見せる。

「フォルトン！」
「アサ！」

静止の命が走る。

「トキを眠らせろ！」

「コピープレイヤを止めてくれ！」

だが、同時に二人はノーという回答を耳にする。

『現指揮者よ、悪いがそれは不可能だ……頭上のボルトを見てみろ』

『無茶言うな！　ボルトがどうなっているか知らないのか！？“抑える”ことも不可能に近いってんだ！　それをかなり遅らせているんだぞ！　俺がだ！』

トキとコピープレイヤ、両者の激突に注目していた二人の司令官が、同じタイミングで一人の魔女に注目を移す。

協会レーダー塔上空。

会長の気絶と共に、会長が展開していた遮音結界と防震結界が消滅した戦場で、ボルト・パルダンは突然襲ってきた大音量と空間振動の波に気を失っていた。そんな彼女に注目していた陸橙谷アサと、元ナイトメア非武装派にして現四凶軍特別部隊隊長を務めるフォルトン・ドラーズ――夢使いのＳＲ――は過去最強と呼ばれた魔女の覚醒を予言した。

『魔女は、闘志を残したまま夢に入ったぞ』

『協会が掛けた結界がもう殆どナイんだよ！』

気を失いながらもボルトの体は宙に浮いたまま。

そんな彼女を確認した指揮官二人は直ちに全生命への後退命令を発した。

『各員、いますぐ暗闇にッ――！』

またしても同時、二人は切り札の一枚とも言えるトキとコピープレイヤに気付く。あの二人はボルトに意を向けることもなく戦闘を続けていた。トキ対コピープレイヤトキの双剣同士の“殴り”合い。生命寿命からしてボルト・パルダンの恐ろしさを知らないものだと気付くキュウキ。ミギスも知識の無さが二人の激闘を続行させている要因だと到達した。

まさにそんな時だった。

「――今、すぐ逃げろぉぉぉ！！」

ミギスの叫びが、キュウキには聞こえたような気がした。

風の壁が消え、久々に直視する錯覚を覚える協会本部の中央にそびえ立つレーダー塔。

その建造物が、塔の中間にある司令室も含めて内部から爆発を起こし、上半分が木端と散る。

「嘘……」

唖然とするキュウキが通信機を、負傷しながらも前線に加わったジャンヌは拾ったクロスボウを手中から落とした。

「ミギス！」

多くの協会員が絶望を覚える瞬間であった。
風の結界を解いて間もなく中央レーダー塔、更に言うなら司令室が何の前触れもなく、炎も黒煙も上げずに吹き飛んだ。

「何だ！？」
「中央の高いのが吹き飛びました！」
「まさか、司令室が！？」

哭き鬼姉妹は意識を傾けつつも体は破壊の限りを続け、共に闘っていたトウコツは視線と意識をそちらに向けながら殺戮を行っていた。

「オオオオオオオッ！！！」

協会側の施設破壊。
四凶軍がそう勘違いして士気を高める前に、完全なる銀狼へと変態した芹真が金属の砲音を上回る咆哮を以て意気を殺してみせ、アヌビス達が戸惑う中で独り、四凶軍の侵攻を食い止めた。

そんな芹真と同じように、トキとコピープレイヤもボルトを気にすることなく剣を振う。それぞれ指揮官の命令も耳に入れず、意の向く方向のみに集中して戦意を立てる。

光の異変が始まったのは、剣舞を続ける二人の周辺からだった。

第５９話－激変－（後書き）

「こうとう、むけい」

それがヒミツの呪文だった。
魔法使いの住む家に入る時、欲に染まった存在に絶望した時、何かを見失った時、必ずその言葉が３人の中に漏れた。

「……類似する日本語で“荒唐無稽”」

ボルト、それからその弟子二人。
三人だけの秘密の言葉。

同時に、ボルト・Ａ・パルダンが持つ大量瞬殺の祝詞。
その恐ろしさを知っている数少ない人間がジャンヌ、それから直弟子であった侵食のＳＲ：コルスレイ。

「だが、先生にとっては……」

舞でも演じるかのような二人のＳＲを取り巻く光、その様子を見守りながらコルスレイは祈った。

どうか、苦しまず逝けますように。

そんな祈りを捧げる弟子が直下に居るとも知らず、寝起きのボルトはあくびのあとに不快な戦場の空気を嗅ぎ取り、眉をしかめてから呟いた。

「光刀無形（コウトウムケイ）」

第60話－Ｆｌａｓｈ，ｔｈｅ　ＧＯＬＤＥＮ　Ｔｉｍｅｓ－（前書き）

「皆、済まない」

ボルトの光撃開始と同時、吸血鬼ニルチェルト・エンデバーは海上の残骸に身を隠し、終わりの瞬間がやってくるのを静かに待っていた。

「あれからは、誰であろうと逃げ切れん。そういう光だ」

倒壊した協会本部中央レーダー塔の上空に光る魔法使い。
その姿に神々しさを覚えるものも居れば、悪夢を見て絶望に打ちひしがれる者もいて、ニルチェルトは後者であった。

第60話－Flash，the GOLDEN Times－

光刀無形。

ボルトが持つ、最大級の虐殺魔法。それは結界でもなく、詠唱魔法でもない、自然世界の歪曲そのものである。もっとも、数百年前の魔女狩りと呼ばれる事件の最後は、この術の発動に失敗して自らを歪め、ボルトという魔女は取り返しのつかない隙を晒し、幾重もの夢想結界に封じられてしまったのだが。

（マヌエラ、先生がまた一つの術を習得したみたいだ……）

ＡＭ　０６：５９．４６　－海上：四凶軍－

黒煙に太陽光を遮られていたはずの艦隊が、目も眩むほどの光に照らされていた。

多くが思考のクラッシュに見舞われる最中に誰かが叫んだ。

「日影に逃げろ！
光が襲って――」

血煙が陽光の中を赤く彩る。あまりにも突然過ぎる事態に誰もが首を傾げ、そして次の瞬間には大抵死ぬのだった。

「コウトウムケイ！？
魔女狩りの――あの時の攻撃か！」

それは文字通り“形を持たない光の剣”だった。

ある者は、対戦車銃の望遠画面とそこにデジタル表記される風向と距離を読んで狙撃の為に微調整を行なっている最中だった。最初にその者が失ったものは両腕。意識が負傷（いたみ）を捉えるよりも早く、次の瞬間には何かが新たな損失を刻んでいる。バランスが崩れているのは何故だろう。それに温かい。また、次の瞬間には高熱と寒気を、やっと激痛を胴体に覚わせる。間断なく、足首が体から離れ、眼球が音もなく斬れ飛び、引き金に掛かった指が、潮風に冷めたライフルが、何一つ理解することも抵抗することも出来ず、細切れの破片に化けていく。

ある者は、狙撃手の怪死を傍らで目撃し、上空のイカロス部隊を見上げた。頭上からの攻撃かと予測しての警戒行動だったが、銃口を空に向けた瞬間に男は頸動脈を両側、音も感触もなしに命を切断された。

また、ある者は前者二人の死を目撃してしまったが故に、只ならぬ恐怖に心を締め付けられていた。“何か”が起こっている。必要最低限と思える理解には到るものの、甲板の上に身を隠す場所などろくにないし、そもそも銃撃なのか斬撃なのか、或いは超能力や幻覚によるものなのか判別できない。踵を返して走り出そうとした瞬間に足首、バランスを崩して転び、直後に膝。足場に手が着くと同時に両腕が肩から斬り外された。生命としての最後の瞬間には首を飛ばされる。硬直を残して崩れる最後の瞬間、自分の回りで見えない何かによる大虐殺が行われている光景を目視して絶望に気付く。

自分は地獄に居たのかと。

「一体、どうなってるんだ！？」

誰かの叫びであった。

“影へと逃げろ”

それを実践しようと走り出そうとした者達や、殺戮を目の当たりに思考麻痺した者たち、その他大勢が無差別に殺されてゆく。見つからない攻撃、理解できぬ何かによって。

「これは協会の攻撃なのか！？」

大量殺戮に、大量破壊が混じり始める。

無数の破片に細断された金属と人だったものが、飛沫を立てて海中に没してゆく。

赤と黒、白と青。

「敵の飛ぶ斬撃とも違うようです！

いまレインヤードを見ましたか！？　駆逐艦が一瞬で細切　でッ！？」

叫び声さえも切り裂く。

一般人も、軍人も、洗脳の有無を問わずに四凶の軍勢は怯んだ。

「たった、一人の魔女に……！」

残虐を目の当たりにキュウキは汗を流した。協会の秘密書庫で目を通した協会の過去の“損害”、その中で最も甚大な被害を被った事件がボルト・パルダンの協会攻撃であった。その時に使われた最大の破壊魔法は、文献として残された僅かなものであり、あらゆる角度から集めた情報で完全に予測することしかができなかったが、たった今それを目の当たりにしてなるほどと、異質で凶悪な光撃だと現状を理解した。

―協会本部：非武装派、小規模集団、無所属―

四凶軍と同時に協会本部までもが攻撃されている事態に僅かな戸惑いを覚えた。人工島の住宅街で移動速度を緩めていた哭き鬼姉妹も、無差別攻撃が行われていることに気付いて戦慄を覚える。

「司令部が！」

「スミレ、急ぐぞ――！」

「駄目です！　今すぐ暗がりへ避難してください！」

南部戦線に選定されたＳＲ達が、直ちに撤退ないし防御を始める。各戦線が本格的に混乱を始めたのはそのあたりからだった。

皆が共通して何か得体のしれないモノの攻撃を受けているという

ことだけを理解し、あまりにも不規則に発現するその攻撃に多くの者が対応に迷った。
そんな逡巡が死へと直結する状況下、理不尽な光撃に晒されながらも生存し続ける者達は共通して行動に迷いがなかった。

「全員屋内へ退避するのだ！　四凶の軍勢も急いで隠れたまえ！」
「リデア、厚い雲を呼び寄せろ！　俺が雨雲に変える！」

ＡＭ　０７：００

南部戦線の高速対応に倣って他戦線でも防衛の陣が組まれるのと同時、東部エリアではディマが、南部ではリデア達が、それぞれボルトが始めた光刀無形に対して生存の意思で構えを取った。

「オオオオオオォォォッッ！！」

光の刃が人々を襲っている――それを理解しながら四凶軍を蹂躙し続ける獣がいた。

「芹真！　戻れ、戻るんだ！」

朝日と閃光を乱反射させ、銀色の体毛を放つ人狼が咆哮を上げて城砦艦へと突撃する。
銀狼と化した芹真の雄叫びに体を震わせながら、光撃に囲まれな

がらも抵抗する四凶軍の健気な姿勢に、協会の同方面部隊の誰もが止めに入りたい衝動に駆られた。光撃さえなければ、どこからやってくるかも分からない斬撃さえなければ。

『ジャンヌ司令、ミギス司令の生存を確認しました！』
『ついでに北部四凶軍のインスタントＳＲの数が激減！　無謀だが、芹真のおかげと言うほかありませんよ！』

特別に異様な熱を放つ北部エリア。
血粉野原に黄金と銀色が煌めく。
誰もが止めようと銀狼を睨むも、誰もが殺戮光の中で無事を保証できない。

「見ろ、芹真が……！」

２メートルもの巨体に光が集まる。
注目を集める殺戮銀狼に、無差別にも光は当然のように襲いかかった。
朝日に隠れて見分けることの出来なかった攻撃を、芹真に注目していた協会員らは辛うじて目撃し、それが光撃であることを初めて確信した。

（銀色の体毛に、光の方が跳ね返されている！？）
「そういや、日本の人狼に魔法や呪法を跳ね返す特異体質な連中がいるって聞いたが、まさか……！」

魔女の光撃さえものともしない狼が四凶軍艦隊へ飛び込む。
甲板上の殺戮は、船内まで伝わっていなかった。無傷の兵士達が艦内には無数に控えている。
が、芹真の鼻はそれを捉えており、それらを踏まえて突撃したのであった。そんな芹真の行動に、大部分のＳＲは驚いた。何故ならこの瞬間、芹真は協会の海岸に着岸した城砦艦と、その後方に続こうとしていた艦隊を一っ飛びに、しかも高速で飛び移っているのだ。最初に蹴ったのは城砦艦に搭載された５０ｃｍ砲の身。頑丈なそれを丁度の良い足場として約２キロメートルもの距離を一瞬にして縮める。
目立ち過ぎる跳躍は、注目と攻撃を一気に集める心構え。だが、ボルトの光撃があることを芹真は前提としており、それは現実に集中砲火を受けずに目論見通りの跳躍と成る。辛うじて高射砲、甲板に駆け込んだ兵士達の弾幕だが、数秒でボルトの光刀無形と芹真のアンチマテリアル・ハンドガンの圧倒的破壊力の前に掻き消え、発射点は消滅か崩壊の結末だけを迎える。

「ウゥゥオオオオオオオオッッ！！」

艦隊を蹴って、城砦艦に突進する。
覗く牙が熱を砕く。
横っ腹にはアンチマテリアルハンドガンの魔弾が大穴を、銀狼最大の武器である銀爪が砲身を深く抉る。
銀色の体毛で光刀無形を防ぎながら城砦艦の甲板を蓮根へと変え、艦内へと侵入。狭い艦内で銃撃と打撃と斬撃を織り交ぜながら殺戮を尽くし、自動追尾してくる光刀無形を艦内に伝播させる。金属の

内装を切り裂き、吹き飛ばし、再び光と水飛沫の世界へ。

（ボルトが目覚めたか！
タイミングとしては予想外だが、違う意味で最適だ。光撃の威力も想定範囲内！
この中で、藍もトキも戦っていることは分かる。この匂いに間違いはない！）

微かな匂いを乗せた風の中を跳び回る。
城砦艦から海面に浮かぶ残骸（一度の射撃）、そこから防衛海岸（逃げまどう四凶軍に高速大振りの斬撃一閃を喰らわせ）、小型高速艇（着地してエンジンへ魔弾を一発）、爆発を背後に後方艦隊のミサイル巡洋艦（足場として蹴ってミサイルを誘爆させ）、跳躍と殺戮を繰り返しながら北部海岸エリアに戻る。

（藍も、ボルトも、トキも、それぞれの理由で戦いに臨んでいる。
唯一関連性を持たない俺が、この戦争に参加する“言い訳／理由”は“獣”だという一点のみ！
だが、それしかないからこそ、それが絶対で、俺の本質なんだろう！
言葉など要らない、欲する破壊を己の為の身に行えばいい！）

誰もが芹真の高速戦闘に自分の戦争を忘れた。例外はあっても、それは視界にないという視野的問題であり、動体視力云々の問題ではない。別々の意味としての光が、戦場全体を明るみに晒した。光刀無形が見えない恐怖なら、芹真の爪痕が人々に思わすものは圧倒

と、そこから広がる希望の夢想。或いは悪夢。高速で四凶軍を削っていく銀色の狼はまさしく聖剣の輝きではないのかと、撤退した味方に裏返しの恐怖を与えていた。

しかし、一秒に3～6人のペースで戦闘を続ける芹真が、実の所落ち込んでいると誰が想像できようか。

そもそも、芹真はこの戦争への参加に否定的だった。

四凶軍を止めると言う共通認識さえなければ、粛清しようとした巨大組織と組む必要はなかったのだ。四凶軍に対し、協会の戦力は全員がSRという条件を除いても、前提根源として人間対人間であり、そこに文化的要素が無数に絡み合った場合、数的不利が絶対の協会に勝ち目は薄い。ハッキリと言うなら、協会長の気分次第といった曖昧なところ。

数で不利と傍目に見ても分かる現状に、ナイトメア非武装派のように勢力の垣根を越えて手を差し伸べるSRも界隈的に見れば決して少なくはなかった。誰もが四凶軍を見過ごせぬと、立派な大義名分を掲げている。芹真としても、四凶の支配する世界は協会長のコントロールする世界よりも醜悪なものになると見越せるという、そういう点では他のグループと同様ではあった。

空しさのような、怒りのような感情は拭いきれないが。

「ノォォォォオッ！」

それでは此処にいるのは、友人が協会所属だからか？

或いは、事務所の部下たちに負けたくないからだろうか？

銀狼の咆哮が阿鼻叫喚の戦場に一際強く、大きく、反響のし過ぎで味方にまで意識不明者を出す芹真の叫びには、ハッキリと苛立ちの色が混じっていた。

それを最初に聴き分けたのは、協会の誇る最高戦力であると同時に、ＳＲ部隊司令官であり協会長の秘書、また私的好奇心からＳＲの詳細に明るいジャンヌであった。北部エリアから轟き届く止めどない疑問を乗せた咆哮は、赤き芳香の中で彷徨に喉を震わせるまさしく獣の咆哮である。

（……銀狼が珍しく八つ当たり？

いや、むしろここまで大人しく無理をしてくれていたことの方が異常だったと捉えるべきね。どんなに戦闘センスが秀でた彼であろうと、好まぬ戦闘や求めぬ殺戮は、人の心に孤独と似た空しさを呼び起こす。

もし、芹真の四凶が“トウコツ”なら、彼のモチベーションをどうにか取り返して上げないと、いずれは自ら死地に飛び込んでいく！　どんなに強く、人脈が豊富で、状況判断力が奇跡掛かっていようと、彼は数百年を生きた我々のような老人ではない！）

光撃を躱しつつトウコツの走り去って行った方向を惜しげに見やるジャンヌは、芹真を立て直す方法に頭を回した。

トウコツの場合は直接、若干ながらも懇願気味に言って、褒美を言葉でもゴミでも用意してやれば喜んで実行してくれるが、同じ四凶属性を持つかもしれない芹真にそれらは必ずしも同じ効果は期待できず、むしろ逆効果につながる可能性の方が高い。逆上を誘うという意味では間違いないだろうが、現状以上の反感を売りたくはない。そもそも、ジャンヌ個人としてはボルト・パルダンに並んで敵に回したくない人物でもあるのだ。あらゆる組織集団の枠を超えて

人脈を有する彼は、その気にさえなれば四凶軍よりも少数だろうと、それでも確実な精鋭を揃えて協会に刃向う事だってできるはずだ。
有象無象などとは到底言えない集団の長ともなって。

（しかし、これまでの監視の中で芹真が見せた趣味と言えば……！）

ジャンヌの頭に浮かぶ報告書の内容は、豆、豆、豆。
彼が熱心な愛好家である――報告者によってはファナティストという場合も――という情報がジャンヌには強烈過ぎて他に何かなかったものかと、頭の回転数と、体勢を回避から退避へと切り替え光撃を避けつつ芹真の援護に最適な方法を探す。頭の片隅では何かが引っ掛かっていた。彼に関する、豆に次いで強烈だったはずの、何か。
僅かな混乱があることを認めながらジャンヌは思い出そうと必死に駆ける。芹真には“何か”あったはず。

程なくして、何度目かの大咆哮が戦場の悲鳴を上回った時、ジャンヌの通信機に連絡が入った。

『北部エリアの避難完了しました！
ただ“　デストロイマーチ　”が四凶軍を未だに攻撃中、っていうかもう一方的な虐殺ですよジャンヌ司令！
いくら四凶軍が相手とは言え、やり過ぎだと思います！』

「あっ……それです！」

報告で得た内容に、ジャンヌは目を大きく開いて納得した。
それだ。
二つ名や通り名という概念を嫌うジャンヌがすっかり忘れていた彼の通り名――デストロイ・マーチ。十四人の銀狼で展開される、アヌビス部隊さえ圧倒する“戦慄／旋律”戦法。

「セントラルプール聞こえていますか！
ジャンヌですが、北部の外部スピーカーを最大音量にして音楽を流して下さい！　なるべく激しく、変調的な楽曲で！」

そうインカムに叫ぶジャンヌの姿を目撃し、且つ芹真の事情を知らない者たちは、かつてない程理解不能なジャンヌの判断に不安を覚えるのであった。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔａｌ

－第６０話－

－Ｆｌａｓｈ，　ｔｈｅ　ＧＯＬＤＥＮ　Ｔｉｍｅｓ－

南西部エリアの更地では、未だに二人のＳＲが衝突を繰り広げていた。

誰の為でもなく己の為に、しかし、夢中になることは出来なくなっていた二人は、互いに鏡映しの姿で戦い続けた。低速世界を同時に展開することによって互いの攻撃と外部からの光撃を躱し、雌雄の決着を望み臨んだ。

そんな二人を新たに目撃した男が居た。

（トキが、二人!?）

目深に被った帽子で顔を隠すその男の名前はフィング・ブリジスタス。ホート・クリーニング店の幽霊店員でありながら、協会に一応所属のＳＲであり、ネクロフィリアであるという印象を周囲に植え付けた致命的な男である。

撤退を完了した南部南西エリアの広大な更地で、周囲の惨劇が目に付かんとばかりに戦い続ける二人のトキを眺めつつ、フィングはとある理解に及んだ。

（そうか、あの二人は“低速世界”を展開することでこの光撃の中

でも戦いを続けられているのか。
一度離れ離れになれば二度と戦わないかもしれないのに、二人は何故決着に固執している？
なんか確執でもあるのか？）

再生のＳＲであるフィングも、かつて一度だけ使用した色世時の姿を再生し、ある意味で戦争体現を忠実に行っている二人を止める為に駆けだす。確かに戦場は間違いなく、正確に、有るべき混沌を具現化していたと言っても過言でない程の渦に飲まれていた。人間同士の殺し合いを、力同士の衝突を、圧倒・逆転の転換で彩っていた戦場を――その戦場が――光撃は一変させた。

戦争さえも破壊するボルトの攻撃力は見事と言う外ないが、光撃に囲まれながらも白を求めて戦い続ける二人も見事と言える。

（あの二人にここでの戦争はまるで関係ない！　戦争を口実に私怨に駆られたケンカをしているに過ぎない！
やめさせな――！）

色世トキの姿を借りたフィングは、突如として襲いかかって来た頭痛の大波に他人の顔を歪ませた。
初夏の朝日があるとはいえ、まだ汗が自然と浮いてくる時間でもない。死臭が混じってはいるものの潮風もある。それでも額を大粒の体液が濡らしているのは、ＳＲ解放に伴う痛みが尋常でないからである。鼻の頭が熱くなり、耳の裏に何かが響く。押し寄せる痛みの波が脳にまで異常な熱を発生させ、フィングの身体に変化を現した。

（トキの低速世界なら、俺でもボルトの光撃を回避することが出来る！）

両手に拾ったサブマシンガンを強く握りしめて走る。

顔面を切り飛ばそうとする光撃を屈み、足元の死体と発生する光を飛び込んで躱す。前転して直ぐに次の光撃から、背中への袈裟切りを傾倒全速疾走で逃げ切り、サブマシンガンの射程圏内に二人を捉える。

――ところで、どっちが本物のトキだ？

全く同じ攻撃を繰り出しては互いに弾き合い、避け合う。武器まで同じだ。二振りの同剣が衝突によって折れようと、次の瞬間には折れたはずの黄金剣が復活している。

ＳＲでの変身時間に制限があるフィングにとって、この状況では逡巡さえ惜しまれ、低速世界の展開能力を失うことは即座に死因ともなり得る。

（……トキなら、銃弾くらい避けられる）

決断は二人を目掛けての発砲、厳密には乱射である。

足元から側頭部まで弾丸が散らばるよう、走りながらＵＺＩを持った腕を安定させずに引き金を絞り続けた。

もし、この戦場が正常だったらフィングの撒き散らす銃声は特筆すべき騒音とはならなかっただろう。だが、阿鼻叫喚さえ光刀無形

の刻印に消えた現戦場でサブマシンガンの銃声は非常に目立った。
撤退した協会の防衛部隊が引き返して双眼鏡で慌てて覗くほどに。

『!?』

全く同じ表情で介入が発生したことに気付くトキとトキ。
銃撃を差し込んでも真贋の区別がつかないことにフィングは舌打ちし、右手にナイフ、左手にジェリコを握って近接戦闘に入ろうとした。が、そんなフィングの近接介入が始まるよりも早く、二人は衝突を再開。フィングのボルテージを煽った。マシンガンの弾幕も、その後の攻撃の有無もなんのその。本当に二人は互いしか見つめ合わずに、盲目に殺し合いを続けていた。

（クッ……トキはここまで苛烈に戦いを求める子供だったのか!?）

ハンドガンとナイフを装備しているとはいえ、低速世界を高速に動き回る二人のトキに近付けないフィングは、光撃の隙間を縫って二人の隙を探った。
二人が星黄の刃を寝せて峰打ちを放つその時、フィングは二人の中間地点目掛け銃口を向けつつ足を上げる。
甲高い音が響く。
刀身を寝かせて衝突した二本の剣。
その交差点にフィングの銃弾は届いた。

（トキの、最近会得したらしい技さえ使えれば、トキが正常かどう

か調べられる！）

フィングが最も懸念しているのは、二人の戦いが自我に因るものではないという事態。何者かが遠方から二人の闘争心を煽ることによって、二人を戦力的に分散、或いは固定し、一部の戦局をプロデュースしているという、一種の策。

（心への扇動は気付き難いが、俺なら判断は容易だ！）

その為にはトキの力が要る。

協会長から得た情報では、今のトキは他人の時間を読み取る力があり、それはマインドコントロールなども見破れる可能性を秘めているらしい。

この現状を解く鍵になるかもしれないその力を、フィングは何としてでも手に入れたかった。だが、その為にはコピープレイヤと戦っているトキ本人に直接触れる必要があった。

「援護するぞトキ！」

ただ、

「！……え！？」

進行形で光を避けながら戦っているトキの頭の中は、フィングが思っていたよりも冷静に欠いていた。

自分の姿を模したコピープレイヤと戦い、その最中に援護の漢字二文字に反応して目を向けた先には、またしても自分の姿をした別の誰かが居たのだ。

「？！」
「！！」
「！？」

徒手と剣と拳銃が交る。

トキ（本人）が変則体勢から繰り出す双剣撃がトキ（ＣＰ）の双剣と盛大に火花を散らし、同時に放った後ろ蹴りはトキ（フィング）の銃口を反らす。

二組の双剣は弾け合い、トキ（フィング）の銃口はトキ（ＣＰ）へ。

そんな状況にトキ（ＣＰ）の二刀流がトキ（フィング）の銃とぶつかって口を上げてしまう。

入れ替わり立ち代わり混乱は増す。

どれがトキ（本物）だろう。

収まらない混乱した戦況はトキ（フィング）が照準には迷う助けになった。

銃口がトキ（ＣＰ）に向くよう叩き過ぎたトキ（本人）が本物のトキか、それとも銃口を――偶然かもしれないが――胴体に向くよう叩き上げたトキ（実はＣＰ）が本物か。

とりあえず割って入るトキ（フィング）。

新たに介入されたことに戸惑いを覚えるトキ（本人）、二人以上に混乱し、二振りの剣で両方に攻撃をかけ始めるトキ（ＣＰ）がそれぞれ絡み合い、見守る防衛隊員らに理解しがたい場面を公開した。

『ちょ、ねぇ、司令部！
南西エリアがヤバいかも！　トキが３人居るんだけど！』

耐えきれずに報告する誰か。

どう返答すればいいかも分からず、司令部はおろかジャンヌでさえ返答に詰まった。たまらず呼びかけてきたアリス・アンダーグラウンドの方こそ、どうしてこの戦場に居るものかと、トキが３人居ることよりも気になって仕方がない。

「……アリス・アンダーグラウンド、あなたは直ちに四凶軍艦隊の様子を探って下さい！」
『って、聞いてない！？
あのさ、私は協会所属なんかじゃ……！』

「だからこそです！　貴女にしか出来ないことをお願いしたいのです、アリス・アンダーグラウンド！」

ボルトの超広範囲殲滅魔法：光刀無形。
３人のトキ。
無策とも思えるキュウキの采配。
だが、混極まった戦場に於いて尚、策の気配を新たに匂わせる四

凶軍。

「四凶軍艦隊の中にテレポーターがいるはずです。可能な限り殺害して来て下さい！」

『な……！

私に人を殺せって言うんですか！？』

「殺害がベスト――ですが、貴女が望まないのなら殺害未遂でもいいので“牽制”でも構いません。言い方を変えれば、テレポーターとしての役割に集中できないようにプレッシャーを仕掛けて下さい。それで大きな問題点がひとつ解消できます」

『殺さなくてもいいんなら……』

誰もが走る。

光から逃げる者も、この混乱に乗じて前に進もうとする者も、好敵手を見つけて衝突に臨む者も、誰もが何らかを懸けて足を止めずに走った。

そんな中で光撃を受けない数人の異例――その内に含まれるアリス――がこの戦場の中に存在し、しかし、ジャンヌによって知覚された今となっては敵か味方の一括りでしかない。

「色世境（シキョウ）、あなたも居るのでしょう？

あなたの息子がいま、おそろしく強い敵と戦っています。

親として子供を助けるべきではないでしょうか？　あなたが多くの人々から施しや助けを受けたように」

『なぜバレた……！

アリス、やっぱり来るべきじゃなかったんだ！』

鏡の中の世界を自由に行き来できるＳＲ、色世境。その力に由来する名を鏡幻燦画（きょうげんさんかく）と言う。もっとも、キョウ自身が根っからのチキンであるため宝の持ち腐れではある。

持ち腐れと分かってはいるものの、アリスとキョウの力と関係を把握するジャンヌにとってこの二人は貴重な戦力であった。ボルトの光刀無形が支配する戦場で自由が利く数少ない戦力。しかも、堂々たる暗殺に向いたペアである。

（本当はトキの偽物を片付けてほしかったけど）

ジャンヌの本音を殺したのはトウテツであった。

キメラ化したトウテツが建造物ごと丸飲みし、完璧と言って差し支えないレベルに均していった場所で、南西エリア平坦地帯のど真ん中で３人のトキは戦っているのだ。ちょうどアリス、キョウが能力の関係上近付くことの出来ない戦場である。

「あなた達に依頼したことは、キュウキ討伐に直接繋がることよ」

『……キュウキ？』

『どう繋がるんですか？』

曇り染まり始める空の下。

ジャンヌは痛みに悲鳴を上げる身体に鞭打って直立姿勢をとり、

双肩の力を程よく抜いて深呼吸。
　ボルトの光撃はまだ日陰に届いていない。時間の問題だが、微かな猶予は間違いなくある。幸いにもまだ日は上ったばかりで、真上に光源が無いだけ都合はいい。方角によって影はまだ長い。南西エリアの平坦地や北部エリアの演習エリアなどを除いて、多くの場所にはまだ影は残っている。

「四凶軍の頭脳を潰します。
　そうすれば残るは雑兵に有象無象だけです。こんな、誰も望まないであろう戦争を早く終わらせるためにも、ご協力を願えないでしょうか？」

『その前に、トキを止めに行ってもいい？
　それやったら協力するからさ』
『……帰ってもいいかな？』

　戦争の決着は、キュウキの討伐にこそ掛かっているというのがジャンヌの考えだった。
　キュウキに到るまでの壁が厚いのも当然。しかし、無数の兵士よりもキュウキが繰り出す策の方が遥かに厄介であることも事実。個人の生死レベルではなく、戦局の優劣を左右する手腕を持つ彼女は間違いなく油断できない敵であった。下手をすれば一撃で優劣を覆される可能性もあり得る。

『キョウ！　トキの為だよ！？
　自分の子供にカッコいい所を見せてあげようよ！』
『でも、戦う事は……！』

「色世境、では貴方に特別報酬を約束しましょう。
テレポーター一人の排除・無力化、或いは牽制で２５０万。単位はあなたが決めて下さい。
それに加えて色世家の監視レベルを最低限にまで引き下げ、緊急事態発生時に於ける優先度をワンランク格上げします。
“ついで”に、あなたが抱える奨学金やローン、借金の類を全て協会で負担し、色世トキの学費を全額引き受けましょう。どうですか？」

『いやだ！
戦争は嫌いだ！　無理！
死ぬ！　死にたくない！』

『大丈夫よキョウ、死なないわ！
私が一緒にいるんだし、それにトキを解放出来れば死にかけてもすぐ治してもらえるじゃん！』

とりあえず、グダグダと泣きごとを大人げなく大放出した色世境が――大金目当てに輝いているアリスに――説得されたことを悟る。
後は彼が実際にどれだけの活躍を果たすかによってキュウキ討伐作戦の成功率が変わる。僅かでも上がればよし、現状から難易度を簡単に上げられはしないだろう。成功率が下がらなければ何でもいい。強いて言うならキョウとアリスは最適要因――では、あるのだがトキを助けてからというのが気になる。

『こちらセントラルプール！
四凶軍が前進を再開！　艦隊ごと突っ込んできます！』

ジャンヌの剣が光を集め始める。
舌打ちのひとつでも零したいのが本音だが、行動を起こさなければ変わらない現状で一秒たりとも無駄にしたくない故、あえて毒を堪えて右手に解放した力の半分以上を集中させる。

「セントラル、南西海岸の後退状況を教えて下さい」
『了解、南部エリアの後退は約８０％が完了。西部もほぼ同じです。ただ、中間地点の南西部で敵ＳＲと交戦中の色世トキを後退支援するか判断に迷っている部隊がいくつかあります』

「今すぐ後退するように伝達！
ミギス司令との連絡は？」
『伝達了解』
『ミギス・ギガント現司令との連絡は未だ回復しておりません！』

「通信が回復したら対艦隊戦メンバーを至急追加するように。
各海岸に四凶軍は確実に何らかの策を持って突撃しています。あらゆる事態に対応できるようにこちらは柔軟性で迎撃します。幸いにもボルトの光撃で僅かな時間が確保できていますので、その間に準備を急がせて下さい！
それからレッ……！　レーザー照射砲の機能を緊急停止。ボルトの光刀無形を助長することだけは避けて下さい。必ずです！」

『了解！』
『緊急停止、了解！』

必要最低限の指示を出した後にジャンヌは戦線へと踵を返す。
3人のトキと言う状況がどうしても気になる。1人が本物だと仮定して残り2人の内、確実に1人は四凶軍のSR。3人目がどちらの所属か、或いはどちらにも所属しないSRなのかでも戦いへの介入方法や止め方は変わってくる。

（早く撤退しないと、人数で劣る私たちの被害が拡大する速度は四凶軍の比ではない！）

ボルトの光撃が影の中に届かないうちに、影のある場所まで移動しなければ貴重な戦力を失う事になる。それだけは何としても避けたい。

右手に構えた剣を頭上に構える。
刀身に纏わせた光が、ボルトの光刀無形を、目で見難い光の刃を陽光の中に形成させずに飲み込んでゆく。
トゥーハンドソードを敵艦隊目掛けて横薙ぎに。そこへ収集した光を含め、SRとしての力を一気に解放する。
拡張斬撃。
ジャンヌが持つ広範囲斬撃技が、射線上に三人トキを巻き込んで飛んだ。

「色世時、避けて下さい！」

と、拡張斬撃を放ちながらジャンヌは警告する。
インカムで最初に反応するのが本物のトキだろうという目論みだ

ったが、

『!?』

奇跡的レベルで三人は同時に反応し、同じタイミングでジャンヌに顔を向け、寸分違わぬ速さで拡張し始めた斬撃を回避する。

違う意味で色々と粉砕。

どうして三人一緒に反応したのか、ジャンヌは理解が追いつかなかった。誰かが気を引いたわけでもないし、遠巻きの観察ながらも三人が必ずしもインカムを付けていないということが判明した。片耳に装着した二人と、未装備の一人。最低一人は引っ掛かって欲しい呼びかけではあった。そもそも、三人が三人とも色世時本人であることを自覚しているというのはどういうことか？　今の反応はそういう次元の早さだった。

しかし、問題はそんな三人が全く同じ方法で拡張斬撃を斬りぬけ、更に戦場を一瞬にして変えてしまったことにある。

『三人がポイントを変えました！』

「何処へ！？」

ジャンヌは呼びかける。

視界の中から一瞬にして消えた三人が何処に消えたのか、銃弾さえ見切る目を持ちながらその兆候が全く分からず見当もつかなかった。予備動作もなしに三人が完全に消えたところを見ると、トキが持つタイムリーダーが同時に発動したのだろう。

しかし、オペレーターから告げられた真実は、トキがこれまでにない距離を低速移動していた。
トキだけのものではないという可能性の浮上。それはこの戦場での常識でもあるはずだが、一瞬でも忘れていたことにジャンヌは気付く。

「セントラルプール、直ちに対魔結界を最大出力で発動！」
『了解！』
『現在、色世時は“商店街”で戦闘継続中！』

海岸に払っていた注意を、振り返って建物群へと向ける。言われてみれば、喧騒の中に交って聞きなれた金属同士の衝突音が聞こえてくる。剣戟と銃撃の交差は聞き取りづらいが間違いなく反響しこだましている。

「聞こえますかトキ！」

無返答。
その理由は十分に理解できる。

『監視カメラでトキを発見！』
「映像を私の携帯電話に送ってください」

リアルタイム通信機能を追加した改造ｉ■ｈｏｎを片手に、ジャ

ンヌは戦線へ振り返って遠距離斬撃を連続で繰り出す。
片手に携帯、片手に聖剣、スーツの上に申し訳程度の革製防具。

映像の中のトキ三人は市街地近接戦闘を展開していた。
ジャンヌお気に入りのベーカリーの前。まだ日陰が多く支配する、石造りの建物と遊歩道が並ぶ裏路地風味の洋食通り。

まず、トキ（フィング）がトキ（ＣＰ）と戦うトキ（本物）に触れようと拳銃を右手に、もう片方の手で接触を試みようとしていた。が、トキ（ＣＰ）と戦うトキ（本人）は新たに現れたトキ（フィング）の、自分の顔（もの）ではあるがその必死な形相に味方というイメージを抱けずに抵抗していた。

「くっ！」
「……！」
「ハッ、ハッ！」

トキ（本物）を早く後退させたいがために、闘争心を煽られていないかチェックしたいため直に触れたいトキ（フィング）。

そんな彼の意思を無視して二人は戦い続ける。

誰に煽られたわけでもない、眼前の敵を屈服させたいがためにと意気込んで。

「おいトキ！」

呼びかけてくるトキに、トキは応える。
触れようと伸びる手を刃で牽制しつつ、もう一人の自分が繰り出す剣戟を防ぐ。
武器を変える。
トキ（ＣＰ）は双剣のうち一振りを拳銃に変え、トキ（フィング）は両手に双剣を握り、本物のトキは二振りの剣を体内に時間分解して吸収し、素手でコピープレイヤに挑みつつ光撃ともう一人のトキ（フィング）を回避する。

（これは……気のせいじゃない！）
（――！？）
（これは、以前のトキとは大違いだ！）

トキ（Ｃｏｐｙ　Ｐｌａｙａｈ）の袈裟斬り、鋭利な刃を右手のクロノセプターで逆に断絶破壊し、左手で拳銃を掴んでソレ全体から時間を奪う。
強度を奪われたまま発砲し、その反動（リコイル）に自己崩壊するベレッタ。
二人の間に割り込むトキ（フィング）の双剣だが、二人の攻防に弾き出され、光撃によって連撃仲介の機会をなかなか得られない。

「変わってる」

小声でつぶやく。
トキ（本物）は気付いた。
それまで全く同じ、鏡映しのような攻撃ばかりを繰り出していた

トキ（ＣＰ）が、三人目の介入によって全く別種の攻撃を繰り出すようになっていた。介入前までは武装やタイミングまで殆ど同じだった行動が今では動きからタイミング、攻撃の種類どころか武器や表情まで異なる。
確信があった。
敵は自分のコピープレイヤーではない。

（俺の姿をしている“だけ”の他人だ！）

つまり仮装だ。

両掌で一人のコピープレイヤーを武装解除したトキ（本物）が、もう一人の自分へと奪取時間をぶつける。

フィングの望む後退案が、反してトキを二対一の現状へ変えてゆく。
対決は、トキが望み臨むもの。
それを助長するのは間違いなく、対抗意識をオーラとして纏うコピープレイヤ。

今あるズレを取り返させないために攻勢の気を締める。
装備を失ったコピープレイヤが今の姿を捨て“芹真の姿”を装備。
右手でのクロノセプトから逃れるために飛び退き、空振りで体勢を崩したトキへすぐさま跳びかかる。

飛迫した芹真（ＣＰ）は空中で身を回転させ、鋭い銀爪で斬りかかってきた。
右腕でそれを受ける。

銀色の爪が、右手の奪取領域に触れて甲高い音を発する。
クロノセプターで削りきれない。
思い出してみればコピープレイヤは他人の能力をコピーできる。
だから、タイムリーダーを使われて簡単に倒せないで今こうしているのだ。芹真というＳＲをコピーし、そのＳＲ最大の武器である銀爪もオリジナルと何ら変わらないから削りきれないのだろうと気付く。
対人対魔・対装甲用の爪に右手が弾かれる。
頭上を飛び越えたコピープレイヤに背後を取られまいと、真下を屈んで潜り抜ける。
入れ替わる二人の立ち位置。間に割って入ろうとしたトキ（フィング）がまたしてもボルトの光撃に阻まれていた。

右手、と見せかけて左手で芹真の手首を取る。
直後にコピープレイヤが変装し、藍に変わって鬼の力を手にした。
利き手でもない左手の握力で藍の腕力に敵うはずはないが、そんな不利をクロノセプターでイーブンにまで持っていくことは出来る。
しかし、実行速度は残念ながら藍の方が速い。
低速世界がちょうど切れたこともあって、時間を奪うよりも先に左手を操られて投げ飛ばされる。

低速世界を展開。
背中からベーカリーの石壁に激突し、破片と共に地面に着地する。
投げ飛ばされて直ぐに追いかけてくるトキ（フィング）を無視して横を擦りぬけ、真っ直ぐ投げ技を放った藍に突撃した。
腹部にダッシュパンチを一撃。
その直後に藍がまたしても同じ姿の強敵へと変わる。
後ろによろけながらも、初弾を食らったトキ（ＣＰ）が対抗して両手にサブマシンガンを創造し、至近距離で照準皆無の乱れ射ちを繰り出す。

石造りの中に銃声が木霊する。
全弾肉を捉えず硬質を抉り、散として乱舞する塵粉も時間に捕まっては、輪郭の有を失い一時の無へ止まる。
トキ（ＣＰ）の銃撃を、トキ（本人）はクロノセプターとコンパクト・クローズドクロノで直撃弾だけを阻止。そこへトキ（フィング）が低速世界の展開し、壁面を利用した三角飛びで光撃を回避しつつ、双剣でＵＺＩサブマシンガン二挺を左、右と順に斬り落とす。
コピープレイヤが藍に変わる。
トキ（フィング）の右手にもつ刃の返しが鬼の上げた左腕の筋肉によって止められる。金属疲労回復のために新造したマチェットクリの強度にも問題はあったが、問題はその行為で藍（ＣＰ）の破壊標的として認められたことが深刻だった。光撃を避けることでかなり神経を使っている現状で、行わなければいけない項目が増えるというのは余裕欠落の増大につながる。
多大な危機の最中、眼前に鬼の金棒が迫った。
間一髪、そこへトキ（本人）のクロノセプター。金棒から奪った時間で背中の痛みを中和する。
リーチを半分ほどにまで削られた理壊双焔破界（リカイソウエンハカイ）がトキ（フィング）の前髪を風圧で揺らす。直撃していたら頭部を打ち砕かれていただろう。或いは叩かれた瞬間に砕かれながら焼かれていたかもしれない。

（チッ、こうなったら！）

余裕を見失う直前のフィングは一か八か、トキの姿を一瞬だけ解除した。

「トキ、受け取れ！」

低速世界の展開と、それは同時だった。

（え……フィングさん、だったの！？）

一瞬だけ姿を晒すもう一人のコピープレイヤーはフィング・ブリジスタス。決して知らない人物ではなかった。芹真事務所と協定を結んだクリーニング店の幽霊店員にして、最近は全くと言っていいほど見かけないし、話しかけることもないハンズ・ブリジスタスの兄である。こんな顔だったか、という疑問をとりあえず今は押し殺しておく。

フィングの一声と共に空中に放たれる星黄畏天の二振り。

コピープレイヤが藍に化けている今なら、低速世界に入り込んでくる心配はないだろう。

好機。

同じ容姿、同じ行動、同じ能力を持ったコピープレイヤとの進展しない戦いが、今では恐ろしいほどに変移している。

「……っ！」

しかし、あくまで低速。

完全に静止した世界を展開しなかったトキは、言ってしまえば高速で動いているだけであって時間の流れから外れているワケではな

い。
それに気付いた藍（ＣＰ）は、攻撃時に生じる一瞬の隙を窺うため、全神経をトキ本人だけに向けて尖らせた。
もし、もう一人のトキだった男が双剣を本物に投げ渡さなかったら、この好機は有り得なかっただろう。双剣を投げ渡したからこそ生まれた隙と言っても過言ではない。
トキの動きが読める。
再びトキの姿を装う三人目。そいつが投げた二つの得物を、トキは真っすぐに目掛けて動いている。
鬼に変身したことで、筋力に任せた高速戦闘を臨めないだろうと諦めかけていたが、しかし現実は鬼の動体視力もなかなかレベルが高いことが分かった。トキが低速世界で切り返しや急制動したものなら一瞬だろうと生の目で捉えることが出来る。いまなら、ライフル弾だろうと問題はなく避けられる。

「間に合え、トキ！」

叫んだフィングが光撃に見舞われて弾き飛ばされる。
少し後悔していた。
トキの姿を一瞬でも解いたことで、鋭利且つ高熱の光撃を腹に受けてしまった。幸いだったのは、トキの姿を再装填することが僅かに早く、タイムリーダーで致命傷だけは辛くも避けられたことと、吹き飛ばされたおかげで室内の日陰に逃げ込めたことだ。

「……　サ　　セン　」

本物を殺すために、本物と同じ姿を装う――コピープレイヤは思った。色世トキが持つ時間展開、時間創造能力は非常に便利だし、使い方ひとつで必殺の威力を発揮する。それらを上手く使いこなすことが出来れば、オリジナルを超えることだって不可能じゃない。今日こそは、今度の相手こそ、名前と存在を、殺してからでも記憶ごと奪って完全な誰かを手に入れるんだ。その為にはトキを殺し、魔女を殺し、周りの邪魔者を全て片付ければいいんだ。

「あ――――！」

フィングを信じて空中に放たれた剣を掴み、接敵の歩を二歩刻む。その直後の、己の失態にトキは驚いた。

コピープレイヤが姿を一瞬で姿を変えた所を目撃し、視線を剣に戻し、敵が低速世界を展開する時。それに捕まりまいと相殺のタイムリーダーを発動……させたはいいが、その瞬間に突如としてバランスを崩して前のめりになった。

そう、トキは日常生活に於いて、自分がどうして毎日のように“何もない場所で躓く”のか、その原因を未だに究明できずに今日まで生きて来た（何度かソレが原因で死んではいるが）。

問題は、今日もその謎が絶好調に働いているということだ。

「お！」
「！？」
「あ！」

空中で掴んだ黒い刃の畏天が、コケたトキの右手に振り回されてトキ（ＣＰ）の顔面――左眉から左頬にかけて――に縦の斬り疵を与える。

掴み損ねて縦に回転を始めた黄金の星黄が――思わぬトキの前傾加速に虚を突かれ――完全に止まったコピープレイヤ・トキの頭上を通り越し、右アキレス腱へと綺麗に着地した。それはもうストン、と。

「さ……！」

その一瞬だけ、タイムリーダーの発動なしで世界が凍りついた気がした。

手に伝う肉を切り裂く感触、ずぶりと抜けた後ぶつかる熱持つ何か。

呆気なさが、トキの熱を冷ました。

自分が何をしていたのか。

今どんな状況にあるか理解できているか。

“ゲーム感覚”で行動して招いた結果は何か。

殺人である。

それを自らの手で、足で、身体で、確たる意思で実行したのだ。

（ここだ！）

斬撃と同時に動揺を露わに停止したトキの背後に、トキ（フィン

グ）の手が伸びる。
光撃を避けて到達したトキの背中に、元の姿に戻ったフィングがトキの技を“コピー”する。人間同士の時間経過によって蓄積された情報を交換できるというクロスセプター。それをコピーした所で再びトキの姿を借りてトキ本人の状態を確かめる。

（――――いた！　やっぱり二人の戦いを扇動しているＳＲが、トキの戦意を操る敵が！）

「だ、大丈夫か……？」

蹲いたトキ。
その拍子に双剣で顔を斬られ、そのまま顔面の高さから身体の高さに高度を落とした黒い刃に腹部を貫かれた――致命傷によって変身を強制解除された――コピープレイヤ。
戦いを止める為にトキに触れているフィング。

三者の頭上で複数の大きな爆発が起きる。
だが、三人ともそちらに目を向けるどころか、意すら介さず眼前の生命だけを見つめていた。

（クロノセプター、いますぐやれば間に合う！）

自分で明確な矛先を定めた敵に、事故的にダメージを与えてしまったことをトキは恐怖をした。
コピープレイヤの身体を貫いた双剣を時間分解する。

一種の錯乱でもあった。敵であるはずなのに死なれては困ると、その一念だけでクロノセプターの準備を始める。今すぐ時間を与えれば、コピープレイヤの被った傷も治せると、膝を追って頭を垂らし傷口を抑えてうずくまるコピープレイヤの両肩に手を置くトキ。

全く抵抗する素振りさえ見せないコピープレイヤは都合が良かった。損傷した臓器や、流れ出た血液を分解した双剣から、コピープレイヤの体内で創造・再構築する。

（……やっぱり、俺には無理だ！）

ここに来て確信する。

色世時という弱者に人は殺せない。

殺さないことが世の常と言う世界で育ったのだ。

あまりにも大き過ぎる抵抗に、僅かな経験と知識だけではその壁を超えることは出来ない。

偶然の殺人未遂さえ塗り替える力を持っている今だからこそ、過去の己と比較できぬ枷をそこに科しているのだろう。

破壊よりも創造のが気楽でいいと、恨まれるのは怖いし、眼前で誰かが死んで行くのは見るに堪えない。見たくなんかない。

（トキの強気が一瞬で弱気に反転した？

混乱しているのか？）

例え、この場では的でしかない命も、平時ならば尊ぶべき丁重に扱うべき価値を持つ。

この異常が終わってしまえば、終わることがあるのなら、全ての

命は略奪の意義を失う。

「へい、トキ――！」
「うおらぁぁぁッ！」

お前は攻撃されている、とフィングがトキに伝えようとした時。
それは交通事故のように起こった。
いきなり横から現れた鬼の、陸橙谷カンナがコピープレイヤを蹴飛ばし、フィングの首根っこを掴んで協会中央部へと投げ飛ばし、気力を落としているトキの肩を力強く掴んだ。

「ギャアー！」

フェードアウトしてゆくフィングの悲鳴にトキは目を動かした。
視線をコピープレイヤのうずくまっていた場所に戻せば、いまは誰もいないし何もナシ。多分蹴り飛ばされた方角を見れば、何か米粒のようなものが空を舞っているのが見え、それは現在進行形で遠ざかり、最終的には海面へと消えた。

「おはよう！　下がるぞ！」
「！？」

いきなり現れて、いきなりコピープレイヤを海の彼方へと蹴り飛ばした彼女。

哭き鬼三姉妹の長女、藍の姉にして、妹二人とは似ても似つかない性格を持つ陸橙谷カンナ。
理解が追いつかないトキの頭では彼女の言葉すら許容しがたく、しかし、抵抗は出来なかった。なぜなら、掴まれている肩が今でも握り砕かれそうで、正直に言うと現在進行形で血が滲み始めているほど強くグリップされているものだから、涙が吹き飛ぶほどに痛いのなんの。

「あんｔ――何なんすか！
いま居た人を蹴り飛ばすなんて――！」

「そんな事より聞いてくれトキよ！」

肩を解放されると同時、強く握られた拳を見せられてトキはカンナの後ろを走ることを強要された。
どうしてか、タイムリーダーを使ってもこの人を倒せる気がしない。

「お前今、敵のことを思い遣っていただろ？」
「悪いんですか！」

「もう阿呆かと、馬鹿かと！
海を見てみろ、海！
向こう一面が命（まと）だらけだろ！
その全部を救う気もねぇクセに、戦って気になった奴だけ救おうなんざ不公平だろう、ボケが！」

ボルトの光刀無形が侵光のレベルを上げる。

「だから、やるなら全部やる気で……っ！
植木鉢ぃ！」

「うぇ！？　植木……って、ってー！？」

商店街を走る最中、カンナは手近に落ちていた植木鉢を拾って、その名を叫びながらトキに投げ付けた。
屈んで躱す。
何事かとタイムリーダーで頭上を見上げて青ざめた。

光刀無形が、警鐘を促さずに発生していたのである。カンナの投げた植木鉢が、数瞬前までトキの頭部があった空間で切断されている。二人が走っていた場所は完全に陽光を避けた日陰の中であったのだ。それまでは日陰の中に避難することでどうにか光撃の刃をやり過ごせていたが、侵光レベルがランクアップした現状では日陰さえ安全圏とは言えなくなっていた。陽光の中と違って、日陰の中では光刀無形の発現がハッキリと目視できるものの、その発生速度は銃撃のそれと大差がない。

「ボルトの魔法がどんどん侵食していってんだよ！」

「この光は、やっぱりボルトのものなのか！」

肯定を示すカンナと共に急ぐ。
ひたすら真っ直ぐ走る彼女の背中を追いながらトキは聞いた。

「止めに行くぞ、トキ！」
「あ――エッ！？」

何処となく無謀ではないかと聞きたくなるようなことを平然と言った女性が、鬼であることを思い出してトキは反論を飲み込んだ。
しかし、彼女が鬼でなくてもトキは言葉を失っていただろうことを自覚する。冷静を取り戻して視線を配ると、不落という印象を与えていた協会本部中央にそびえ立っていた司令塔が倒壊していた。
大勢の味方は無事なのだろうか。そもそもあそこには作戦司令室的なものがなかっただろうか。

「急がないと全部殺されっぞ！
ほれ、そこ見ろ！　逃げ遅れの結果だ！」

首が赤い死体、胴体が上下で別離した死人、頭部だけ何処かに消失した死骸。
それら、防衛チームの死因は全てボルトの光撃である。
視界の端で新たに光撃の餌食となる防衛隊員を見る。

（アレも死体、これも死体……どこを見ても死体だらけか！）

「商店街のどっかに協会内へ入る入口がどうのこうの聞いたけど…

…！」

走りながら、カンナは言った。

「何ぉぉ処ぉぉぉだあぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！」

遠まわしに迷子だと。

光刀無形は避けるくせに、直線状の建造物は可能な限り破壊して突き進む。そんな掘削マシーンの如く走るカンナにトキは憐みを覚えた。同時、二人を監視カメラで追っていたセントラルプールのオペーレーターらは絶句していた。“この非常時に本部の設備を無駄に破壊するのはやめてくれ”と、誰もが絞り出せなかった言葉だが、目的の出入り口の真横を通過した二人を目撃したジャンヌがさすがに叱咤した。

インカムで怒られたことを伝えたトキの視界に、

（アレも死体――――って、動いた！？）

目を凝らして見ると額から流血している誰かが、カンナに投げ飛ばされた知り合いであったことに気付く。死体が動いたかと心拍を跳ねあがらせてしまったが、その正体が投げ飛ばされて協会シェルターの外壁に激突し、数秒ほど気を失った後、自力で立ち上がることになんとか成功したフィングであることに安堵した。

「フィングさん大丈夫ですか！」
「なんとか、な」

激しい痛みが尾を引く頭を押さえながら、鬼とトキに従って再生のＳＲも走り出す。
屋外では否応なしに光の相手を努めなくてはいけなくなる。その前に屋内へ逃げ込めれば……

『全員、結束しろ！』

光が影の中でも殺戮を初めて間もない時だった。
誰もが生死すら確かめられないだろうと諦めていた、ミギス・ギガントの声が戦場の協会に与する全ての人間に届いた。

『ジャンヌ、四凶は次の手を打って来たぞ！
こちらでの対抗策は、リデア……君だ！　風で、上を……！』

通信でなく生命として途切れかけている男の声に、光刀無形に怯え戸惑うばかりだった防衛隊員たちの目の色が変わる。トキや藍はミギスの言葉に視線を上空へと向け、そこに僅か違和感を覚わす光以外の輝く何かを見つけた。

（なんだ、あのキラキラは？）
（粉みたいなモノが降ってくる。あそこでへりか何か爆発したよう

ね）

『よく聞いてくれ、ジャンヌ司令。
敵の次策はあの粉だ。大量に、輸送機に搭載して、俺たちの頭上でばら撒きやがった。
この戦場全域に、全ての死者にあの粉が届くように、だ』

「まさか！
まだ――！」

トキ達の背中を見送り、逃げ遅れた防衛隊員を護衛していたジャンヌはソレの正体に思い当たった。
ミギス・ギガントが見抜いた四凶軍の策とは――これまでの無謀とも言える、数に任せた突撃も全てはこの為の布石と捉えるべきだった――完全に想定外だった。死体を大量生産することが目的だった作戦は、死体の数は多ければ多いほど四凶軍の有利に働く。
現状で、ボルトが暴走にも似た状態にある以上、四凶軍のそれを防ぐ明確な防御力は協会に残っていない。

『四凶は、隠し持っていたみたいだ。
全部焼却したつもりだった“魔薬：ゾンビパウダー”を！』

しかし、それらが降り注ぐ戦場で、視線を走り去るトキの背中に向けると、どうしてかジャンヌの中から絶望のビジョンは消え去った。
その前を走るカンナを見れば、不安と同時に大きな疑問が浮き上がった。

――あれ？
――彼女命令聞いてないの？
――どうしてこっちのエリアにいるの？

逆に、こちらの方面に来るよう指示した筈の哭き鬼姉妹の次女が何処にも見当たらない。

光撃が商店街を大きく焼き切る。
瓦礫が吹き飛ぶほどの圧力を有した光が巨大な爪痕を刻んだ。
そんな時だった。

『ジャンヌ司令、少しお話したいことがあります』

陸橙谷（リクトウヤ）の姉妹について疑問を抱いていたジャンヌに、長兄アサが通信を割り込んできた。

第60話－Flash，the GOLDEN Times－（後書き）

晴天を仰ぎながら痛みにもがく男がいた。倒壊した建物の残骸に下半身を圧迫されて身動きができず、全身に負った傷を抑えることすらままならない。

ジャンヌに代わり、指揮を執ろうなどと言うおこがましい行動の結果がこれなら、不満はないと男：ミギス・ギガントは必死に冷静を逃さんと努めた。

「ご機嫌如何か、ミギス・ギガント」

快晴の空に一人の男が現れる。

頭上を見上げたまま、光の魔女に目を向けたまま語りかけてくる男をミギスは知っていた。

「結晶……いや、コルスレイ。

この様を見て、平気だろうと、君はそう思うか？」

「思わないからこそ提案しようじゃないか」

直後、ミギスの下半身から自由を奪っていた大きな瓦礫が破砕した。そうしたのは魔法使い――コルスレイの使役する“侵食結晶”である。

「先生の光撃を抑えてみせよう。
代わりにだ、誰のものでも構わないからＳＲの死体が欲しい」

「それは、エリスの……蘇生を行うつもりか？
協会が黙ってはいないぞ？」

「知らん」

破砕の震動が傷に響く。
すでに恩を受けているこの状況でコルスレイを跳ね返すことは不可能だった。

「ボルトの光撃を止められるのか？」

「止められるワケないだろう。ただ、反らすことは出来るが」

光の魔女を見上げ、最後の弟子だった男は掌に黄金の結晶を創り出した。
それはコルスレイの通りの名のひとつでもある、能力である。

（黄金侵食？）

「まず、四凶軍を潰そうじゃないか。
これだけの死人がいれば、欲望には困るまい！」

自分よりも遥かに若造りな老人を見上げ、辛うじて上体を起こす。
その瞬間に魔法使いコルスレイの結晶が戦場全体に発生した。しかも同時多発で、その内数か所ではボルトの光刀無形に匹敵する攻撃となっていた。
巨大な黄金に船底を貫かれた戦艦が数隻沈む。

「光撃は俺が集める。お前たちは四凶軍を砕け」

風が吹き抜ける。
ゾンビパウダーを死人の少ないエリアに流そうと、風使いのリデアが生んだ南風がミギスの冷静を仰ぎ助けた。

(芹真事務所も、サーカスも、クリーニング店も、誰もが望む決着……確かに、今ならいける!)

千里眼が光る。
暗殺者が四凶軍艦隊の中を走る。
戦線を押し返そうとする部隊が居る。
防御設備を復活させんとする者達が願う。
それらを共に叶えんと、ミギス・ギガントは亡き指導者の誇りに誓い、立ち上がる。

「ナイトメア非武装派のミギスは、これより敵の策を射抜く!
各隊! 温かい死者の侵攻を全力で阻止せよ!

そいつらが止まるのも時間の問題だ！」

逆転の時を見た者たちの雄叫びが、熱が、人数で圧倒しているはずの四凶軍を上回る瞬間であった。

第６１話－終結－（前書き）

おはこんばんにちわ。
作者てきな生き物です。
今回はいつも以上に長くなったので、一話の中にチャプターを組み込んでみました。画面上だとどこまで読んだか非常に分かりにくかった――どこまで手直ししたか見失い、発見に一時間近くかかる程――そういう理由で今回は、

１．いつも以上に場面を区切った（つもり）、
２．加えてステージチェンジも気持ち多めで、
３．２の理由から登場キャラも混乱必至と言えるレベルで溢れてきます。
４．あと、本編で書ききれない過去のストーリーもいくつか出てきたり、読み手を突き離してしまうような会話もいくつかあります。

そこは作者の明確な力不足です。頑張って妄想をひとつの世界にまとめているつもりが、出来ていないという証拠です。

……というか、文字数の都合上細かな描写をカットしまくりです。ｏｒｚ肝心なとこも心を決めて斬、と抜けてます。ボルトとかボルトとかボルトとかボルトとか、コルスレイとか、

――――――

――――

――この戦争が終わったら

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ“Ｖｅｒｓｕｓ”の方でも書こうかな…

…どうしよう

まぁ、戦争が終わればの話なんだけどね！

何、見苦しい？

じゃあ、本編再開といこうじゃないか。

第６１話－終結－

動く死者。

そういった類いの運動体は、昨今の映画や漫画、ゲームなどのあらゆる娯楽メディア媒体で取り上げられるサブテーマである。共通する、死んだはずの人間が動き回り、或いは突如感染して死を迎えてゾンビの仲間入りを果たすという御決まり（ルール）を前提としたそれは、一種“死という現象”や死してなお動くという制止への、自然摂理への反抗とも見られる。それら矛盾に立ち向かう中で示唆される生きることの難しさや、生物としての本質、また生きる人間の絆など、とにかくドラマチックに、或いは爽快に展開されたテーマだ。

時には生きた人間の方こそ恐ろしい存在であると描写されることもあり、それは生きた人間なら誰しも気の狂いから予測不可能な行動に出ることがあり得るという可能性の戒訓でもあると言えよう。それら行動が本能に基づいているならば、ゾンビになろうがならなかろうが、人も結局のところ動物でしかないというわけだ。

「ゾンビパウダー！
まだ隠し持っていたの！？」

海水に濡れた死人、頭部を削られた死人、両腕を失った死人、胴体を蓮根にされた死人――ｅｔｃ，ｅｔｃ．．．

－ｓｔａｇｅ．０：Ｉｎ　Ｔｈｅ　Ｚｏｎｅ－

死体の波を目撃するのと同時、一度足を止めていたジャンヌは後退を再開した。
ボルトの光刀無形もそれを援護、同時に妨害するかのように襲いかかる。
海面下や海上、防衛海岸などから協会本部に殺到する死者の大軍。
その包囲網は確実に縮まっていた。
そもそも、

『狙撃隊、援護を！』
『やっている！　だけど……！』

迎撃が間に合わない。
銃撃による足止めが速効を成さないのだ。
相手は動く死体。
痛みに足を止めることも、怯むことも、悶えることも、表情を変えることさえない。
事切れた瞬間の顔（マスク）を装い、まだその肉に熱を残したまま一目散に協会中央部を目指して殺到する。破壊しまくった艦船の残骸を足場に、一度は水死体と果てた人間でさえ魔法の粉をその身に受けたならば、自らの足で立ち上がってくる。

『なんとかしてくれ、専門家ぁ！』

その窮地に防衛チームが加わり、銃弾による弾幕を張って援護を

始めるが効果は微々。
一拍遅れて、死者狩りの本職であるチームアヌビスが咆哮と共に死者波へと斬り込む。

（今までの無謀とも言える突撃はこのためだったのね……！）

拡散斬撃が視界のゾンビら半数以上を散々に斬り飛ばすが、恐れを知らないそれらは止まることがない。
そもそもが死体であり、終わりという終末を経ており、また知性ではなく動物本能的にしか動くことができないのだ。最初から人数差が開き過ぎているという現状も手伝い、更に広範囲攻撃の出来るメンバーが万全に揃っていない故に、協会側にその熱波を止めきることは至極困難であった。

『ジャンヌ司令、聞こえますか？』
「はい、誰ですか！」

撤退しながら、斬撃を放出しするジャンヌは自分を呼んでいる声に耳を傾けた。

『陸橙谷アサです。少々、実妹の藍に話したいことがあって“お借り”したいのですが、よろしいでしょうか？』
「却下です！」

『この現状を“打開する術”を授ける為でもですか？』

「……打開できる確率の見当があるならば」
『半々と言ったところでしょう』
「……」

拡張斬撃が波を一瞬だけ止める。
海上に防壁とも見てとれるほど盛大な水柱を生み出す威力を秘めた必殺の一撃。斬撃の殺傷範囲と速度・衝撃範囲を距離に比例して拡げる魔法の遠距離剣術。
だが、止まったのは一瞬だけ。

「許可します」
『助かります』

通信を終えたジャンヌは肩を上下して呼吸を整える。
拡散・拡張斬撃で体力を使い過ぎた。
コントンの一撃がなかったら、あと数発は放てただろう技だが。
それでもＭ９以下の装填数。

（やはり、腕が鈍っている）

光刀無形が死者の群れを刻む。狙撃が死者の足を破壊することで、辛うじて足止めに成功し始める。死者狩りのチームアヌビスはボルトに次ぐ戦果を上げ続ける。
だが、ボルトの光撃が全ての噛み合いに不調をもたらし、連携を

望むことが難しくなっていた。おそらく数十分は戦力になれないことを認め、ジャンヌというＳＲを戦力外リストにストック。自分の置かれた状況を正確に把握した彼女は先程連絡のあった鬼について深く思案した。

あれで本当に良かったのだろうか？

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第６１話－

－終結（Ｖｅｒｙ　Ｅａｓｙ～Ｎｏｒｍａｌ）－

－Ｓｔａｇｅ．１：ｔｈｅ　Ｉｎｄｉｇｏ　ｓｋｙ－

南西エリア。

「藍、ちょっと来なさい」

「……アサ、兄様!?

何故ここに、東部エリアを担当するはずじゃ!」

命令ではアサの維持すべき戦線は東部のはず。それがどうして反対側の西部エリアにいるのか。

正面から向き合って藍は気付いた。本来、協会に属していない哭き鬼がジャンヌや代行のミギスの指示に大人しく従う義理はない。芹真のように、己が力の限り破壊を振り撒いて戦争を終結させることは可能である。

アサという人間は、哭き鬼の一族の中でも特に石頭と言うことで一部の系列から嫌われていた。若くして族長になってからの風当たりを知っている藍は、一族以前に家族であり、兄弟であるためその一面は当然知っていた。別離していて、忘れていたが。

「些細なことだ。それに今、この戦場がどんな状況に転じようとしているか、君は理解しているかな?」

優しげな微笑みに、藍は一切の疑問を捨てて考える。

何か重大な事を察知した時、兄はいつも柔らかな表情を装う。不安を抱かせないためだろうが、その発生パターンや深刻度をある程度でも把握している立ち場としては逆効果。自分が戦場を把握できていなかったことを痛感させられるうえに、新たな司令では対応で

きないような事がこれから起こるのだと思わされると、自然に不安と緊張感が身体を臨時に向けて整えていく。

「頭上の粒子が見えるかい？
あれで死体が動き始める。到達の早い場所では既に発現している」

「死体が……動く？」

視線を外して物陰から飛び出し、海岸を観察――起き上がる死体や、身体の一部を欠いた者達が歩いている――した所で兄の言葉に息をのんだ。

「あれは、蘇生の術ですか！」
「おそらくゾンビパウダーだろう。前に焼却依頼を手伝ったことがある。まぁ、それは置いておこう。
いま肝心なのは“圧倒的数の不利”その状況で更に殺した敵が蘇りだしているということだ。
分かるか？
防衛線が押し切られるのも時間の問題だ。
結界部隊の疲労・防衛部隊の消耗、対して突撃を続ける敵に、殺しても蘇る大軍ときた」

まさしく絶望とも言える戦況。
更に言うなら、メイン司令部は崩壊し、ミギス・ジャンヌ両司令官は重傷を負いながらも辛うじて動いている程度。おまけにボルト・パルダンが覚醒し暴走に近い状態で無差別光撃を行っているのだ。

光撃で四凶軍も少しずつ減ってはいるが、それでも被害の割合は協会側の圧倒的不利。

「だが、僕と君とで半数を防ぐことは出来る。
残りは光の魔女と協会で防げるだろう」

「私と兄様――え？
それは、もしや……！」

ボルトの光刀無形が四凶軍のヘリを斬り墜とす。爆風に散る魔法の粉が戦場全域に広がり、温かな死体を温かくも動く死体へと変えていく。

「君の望みを叶える。
華創実誕幻の天段、その中でも最大の攻撃範囲と持続時間を誇る“ホウセンカ”それを教えよう」

兄の言葉に恐怖を覚えた。
かつて、幾度となく繰り返してきた質問、ホウセンカの会得について、アサはまともに取り合ったことすら一度もないのだ。本来アサは、戦闘術を嫌った。喧嘩好きの姉（カンナ）のせいで、仲介の為に力を付けていっただけであり、自ら力に頼ろうとしない。
だからこそ、怖い。
術を教えるという言葉は、どんな本心があってか。

「まず戸惑うな。
これが、君の最初にして最大の境界線だ」
「境界線？」

「藍、君が見た最初のホウセンカは誰のものだった？
父のものか？　それとも僕のものか？」
「えっ？　それは、アサ兄様の、です……」

「……やっぱりな」
「だめですか？」

「あぁ、駄目だ。俺が」
「？？？」

背後に回り込むアサ。
疑問を抱いたまま藍は質問を続ける。
何故そんなことを聞くのか、何故今なのか。何故、両脇に手を這わせて投げ飛ばすのか。

ノーモーションバックドロップ――但し、空中投げっぱなしによって西部境界エリアから一気に空中へ。放物線を描く身体が、早技で繰り出されるアサの固定術によって物理法則の枷を失い、何もないはずの空間で運動が止まる。
そこは、戦場が見渡せるほど何もない空中であり、何者の邪魔も受け付けない、陸橙谷アサの不動結界ないであることに気付いた。
戦場の轟音に耳が震えない、ボルトの光撃がこの空間だけを避けている、大気の震動さえ完全に届いていない。

「ＳＲをあまり解放するな。
僕もホウセンカを使う時は７０％程解放を抑える」
「解放しないのですか？」

「華創実誕幻の天段とは、本来鬼のＳＲである我らに使えるはずがない技なのだよ。それは分かるね？
哭き鬼の、しかもその中で会得出来るものはごく僅か。僕らのように幅広く使える者も居れば、スミレのように殆ど会得できぬ者、或いはカンナのようにオリジナルにアレンジを加えなければ使用出来ない者も居る。そもそも、使えない術を我らは使っているのだ。その効果が強大であればあるほど代償は大きく付く」
「……獄段のことでしょうか？」

久しぶりに交わす兄との言葉。
内容こそ初めてだが、その会話形式は過去に行ってきたものと差異なく、どことなく藍の心を落ち着けた。
二度と戻らないと思っていた人が目の前にいる。暗殺され、他界し、未来を閉ざされた――そう思っていた、そう認めながらもまた会いたいと思っていた――尊敬していた兄が。

「――何故、獄段と天段だけに使用制限が設けられているか教えようか？
あの二種は、己の人格を術に奉じて発動するものだ」
「人格？」

「そう、人格だ。
鬼の現実を抱えて生まれた我らが、本来鬼を殺すために培ってきた陰陽術を使う事自体が矛盾しているわけだが、鬼を殺すことで我

らはそれを会得できるに到った。それが華創実誕幻の秘密であり、我らＳＲと人間の切り替えが比較的容易に行える哭き鬼にしか陰陽術を扱えない理由でもある」

「……人格を奉じるって、それは自分を消しているということでしょうか？」

言い換えるなら個々人が生まれ持った内郭特徴や、成長で得た個性である。

「自覚症状はないか？

例えば、喜怒哀楽に乏しくなったり、異性や恋愛に関心を抱かなくなったり、そもそも他人に興味を持たなくなってしまったという経験。或いは、本来耐えられなかった孤独が、いまでは何にもないかのように、それだって当り前だろうと考えるようになっていないか？

以前欲していたモノがいまでは眼中にすら映らない、好き嫌いがなくなった、感情の起伏が滑らかになった、などだ」

「……」

云われて何項目かが当てはまることに藍は口をつぐんで驚いた。

「一見して冷静な人間として成長しているかのようにも思えるだろう。

だが、これは明らかな異常だ。

君は当てはまるものがなかったか？　あるハズだ。

華創実誕幻をもっとも欲した君が、今日までにどれだけ使ってき

たかは知らないが、人格に欠損が生じている可能性は１００以外に有り得ないんだよ。何故なら君の目標はホウセンカ。最も会得に大きな代償を要する術だったんだからね」

「確かに、当てはまるモノがありました。
でも、人格を失うほど使った記憶はありません」

あえて、反論してみる。
兄と会話している最中に気付いたことだが、私は兄ほどこの術の正体に詳しくはない。こんな場所で再開していなければ、お茶でも出しながらゆっくりと聞くところだが、如何せん時間に余裕がない状況である。悠長にはしていられない。

「自覚症状は大概気付き難いものだ」

だから、聞きたいことを聞く。

「アサお兄様は何を失ったのですか？」

平常時だったら、勇気を要して聞けないだろうことも、緊張感に包まれたこの場所でなら聞ける。

「……拡張意識だ」
「拡張？」

「言ってしまえば、自分から進んで未知へと開拓していく向上心や積極性といったものを失った」

そう。

アサは、一つの術を身につける為に、未来で最も役立つであろう向上心をなくしたのだ。

対して、自分が失くしたモノを口にして兄の反応を窺う。

「私は異性への関心を失いました」

「……そうか、それはどの程度だ？」

「異性の前で裸になっても恥とは思わない程……これは、やはり重症でしょうか？」

「完全死レベルだね、ソレは」

僕も人のことを言えはしないが、と小声でつぶやくアサが直ぐに本題へ話を戻す。

「しかし、命まで削れるというわけではない。

人間として致命的な欠陥の道を辿ることにはなるが、それを差し引いても天段の術は会得する威力があると僕は思う。特に戦いを必要とする君には不可欠なものだとも」

戦いを必要とする人生。それは間違いないし、否定する理由もな

ければ、今後曲げるつもりもない道しるべだ。

「抜け道は、天段と獄段だ。
獄段が人格を確実に犠牲とする段位に対し、天段は使用回数さえ守れば人格の損耗を抑えることができる段位だ。
もっとも、術者の違いで同じ術が必ずしも同じ段として習得できるという保証はない」

「それは、なんとか分かります」

陸橙谷の兄妹は全員が異なる術位を持っている。全く習得できなかったスミレ、父が開発してきた術のいくつかにアレンジを加えることでやっと使用できるようになったカンナ。苦もなく術を覚えられ、自ら新たに開拓していったアサ。誰よりも早く２０以上の術を会得し、多くの天段獄段を習得可能な状態にまで到った藍。
兄妹で共通する術はいくつかあるものの、必ずしも三人が同じということはない。
例えば、藍の持つ天段術：風毀塔（ふきのとう）は、アサにとっては三段の術：蕗薹（ふきのとう）であり、効果はそれぞれ昇降突風と睡湿塗濁であり、風と睡魔という異なる効力を持つ。故に、アサにとっての安全な術も、藍にとっては人格を大きく損なう猛毒となる術である可能性が十分に有り得るのだ。

「それを理解しているのであれば話は次項に移る。
君がホウセンカに託すものは何だ、という話になるわけだが」

「託すものですか……？」

言われて返答に詰まる。
ずっと会得を望んできた術だが、それに託すものと言われても意味が分からない。人格を犠牲にするという話でないことだけは分かるが、託すとは何を示すのかいまいち理解が追いつかない。

「何故、その術を必要とするのかと言えば分かるかな？
会得に動機が必要なのだよ。特に天段はね。
金棒……リカイソウエンハカイにも同じことはあっただろう。この術も願いを必要とし、発現の願望と結末への願望の二点が線で結ばれ、術者の発動依頼に応えられた暁に、ホウセンカは輪郭と破壊を叶える」

「意思ですよね？
何のためにそれを要するか」

リカイソウエンハカイ、それで理解できた。
藍の理壊双焔破界やアサの理界蒼炎把回、スミレの裏懐霜円刃回――どのハカイも個々がイメージする金棒が具現化したものであり、その根源にはその人の色が強く関係している。焼き尽くすことに特化した金棒や分子崩壊を招く金棒、音響攻撃を実現する金棒など、その種類は決して少なくはない。
肝心なのは、その金棒も会得できない鬼が居ると言うことだ。そして、その理由は簡単である。そもそも金棒を必要としない。素手での戦法に揺るぎない自信を持つ鬼の中で――哭き鬼４兄妹の中で――特に腕力に優れたカンナは未だに金棒を持たない（スミレから借りることはあるが）。

「この戦場を見たか、藍」
「はい」

海の上に浮かぶ人工島、協会本部。
視界いっぱいに洋上を埋めるよう包囲に包囲を重ねる四凶軍。
一部の隙もない戦場に入り込んできたイレギュラー達。
その中で、発生した人災・ボルト・A・パルダンの無差別光撃。

「ならば問う。
お前がホウセンカで果たしたいこととは何だ？
広範囲を長時間に渡って攻撃することで何が起こるか理解しているのか？」
「……はい」

私は協会の側に付いて戦っている。
芹真も一人で戦い、一つの戦線を押しとどめていた。ボルトだって、誰にも制御できない状態になってしまってはいるし、協会四凶の軍勢問わずに光撃を只管続けるだけだが、それでも協会の誰よりも四凶軍に損害を与えている。

「協会の勝利を望むか英雄気取りか？
それとも、誰でもない少数を勝利に導くための気まぐれか？
果てまた四凶という言葉を忌むあまり、嫌悪から目を反らしての八つ当たりか？

或いは、同じ異能力者というカテゴリーの中で、どうしても救いたい誰かの為か？」

「はい。私は――」

おそらく、それらのほとんどが当てはまるだろう。

地に足が付いていないと言われても間違いはなく、かといって定めるべき目標も少なくはないが、無限と言う訳でもない。

芹真のように活躍したい。パワーはあっても、広範囲を駆け巡るスピードを持っていない。ボルトのような攻撃術を持ってもいないし、仮に私に魔力があったとしても鬼に使いこなせるものか妖しい。下手をすれば自分を殺すだけだ。

私は、この戦場に来て何が出来ただろう。四凶軍の船舶や兵器を少し破壊し、特定の少数と戦っただけである。貢献したい、私の力を協会に知らしめたい。誰が協会を糺（ただ）そうとしていながらも協力しているのか、見せつけてやりたかった。それなのに、この戦場で私は地味だ。芹真のような超高速戦闘ができるわけでもない、ボルトのように便利な術もなく、カンナ姉様やスミレちゃんのように連携して戦う事もできない。トウコツのような嗅覚だけでの殺戮もできない、中途半端な腕力で金棒を振うだけ。

「ところで、色世時とはもう戦ったのか？」

「……え？」

突然に兄は言う。

「アイは昔から戦いを見るのが好きだったからね。君自身は気付いていないかもしれないが、君はどちらかと言えばカンナ寄りだ。それより、色世時とはもう戦ったのか？」

「それは……まだ」

色世時と、瓜二つの兄の顔を一度見て、視線を反らす。

そうだ。

まだ。

まだ、やっていないことがあった。

トキも、この戦場に来ている。

私ほどの力もなく、芹真ほどの速度維持も出来ず、ボルトのような広範囲攻撃など到底できない。

だが、そんなトキでも強敵と戦う事はできる。現在も交戦中らしいが、その直前には隊員たちの支援がどうのという通信も聞こえた。

タイムリーダー以外の取り柄がないトキが、だ。

訓練で数え切れないほど殺されていた少年が、今では多くの注目を受けている。

それは、大勢の敵を止めていたとか破壊を行ったという過程を経たというわけでは決してない。

自分の能力を全力で駆使しただけだ。

トキには時間を操ることができるんだ。人も、人の傷も、物も、壊れた物も、破壊創造自由自在。

時間さえ流れ続けていれば、何だって出来る。

「時間は決して多くないぞ」
「はい……あの、アサ兄様」
額に結晶の一角――ＳＲを解放しながら藍は呼吸を整えた。
「ホウセンカは後回しでもいいでしょうか？」
「……素晴らしい度胸をしているね。出来れば、納得できるワケが欲しい」
不満を満面の笑顔で示すアサに応えるよう、空中に展開された防護空間に光線が当たって弾け流れる。
爽やかな朝日が照らす空間を完全なる不快に仕上げている血の香りも気に障るが、会話を中断される間接的且つ外部的要因となったそれがアサの意を完全に引いた。いまの光撃で、自分たちがどんな状況の最中にあるかを思い出したアサはゆ、っくりと光撃の主へ視線を送って大きく一息吐いた。
「なるほど、先に止めてからでも四凶軍は料理できるというわけだね。
確かに同感だ。
彼女の協力を得られれば、未完成なホウセンカでも十分な戦果を期待できる」
「はい、そこで」

ボルトの協力を得る為に、まずアサの力を借りたい。
そう切り出した藍の眼前で蒼い炎が世界を揺らす。

「言うようになったね。異論はないが、回数に制限は儲けさせて貰うよ」
「はい、構いません」

反論は最初から諦めている。
アサと言う人間の頑固さは知っている。彼を制するには提示された条件を飲む以外、私に出来ることはない。逆に、それをこなせば兄は協力を渋らないし、こちらが期待以上の活躍をすれば特別な褒美を放つ可能性だってある。

「いいだろう。
僕に要求する君の姿には感心した。
君はボルトを止めろ、僕は勝手に君に術を施す」

頑固でなく“シスコンなのでは？”と今更ながら気付いて藍はほんの少しだけ肩の力を抜くことができた。

－Ｓｔａｇｅ．２：Ｂｌｏｏｄ　Ｓｉｌｖｅｒ－

北部エリア。

罪悪感は、悲鳴によって押し潰されていた。

猛りを経過した感情が到った領域は混乱とも言える危険域であり、冷静を見失って蜃気楼揺らめく自我は、戦闘本能の解放を手伝っている。飛び散る赤色も、暗闇に煌めく閃光も、無意味な抵抗の銃撃も、全てが破壊衝動の前には無意味。

銀色の体毛に弾かれる魔法の光よりも、死を恐れずに突撃して来る死んだはずの人間達の方がよっぽど愉快だ。その現象は物理的であり、非科学的で、それでも現実的且つ戦略的で、心の奥底ではこの作戦を立案したであろうキュウキに賛辞のひとつでも送ってやりたい気分だった。

光撃とアヌビスの砲撃を避けつつ、人の壁を破壊し続ける。

両手のアンチマテリアルハンドガンの一撃は、何重にして何十もの人型を軽く吹き飛ばせるが、その範囲はあくまで直線的であって壁の全面前進を阻止するには針ほどの心細さ。

それを脚力とバネで補う。

一っ飛びで百メートル近い距離を移動する。跳躍なのにその軌道はほぼ水平。その間に引き金を絞り、死者を数人力任せに掴んで投げ飛ばす。あまりの速度に空中分解する人体が、散弾の如く同じ死者の雪崩に細かな衝撃を与えた。

着地し、ミドルキックを放つ。直撃した死人が前者同様人肉散弾と化して波間に赤い飛沫を立てる。

対物魔銃を最前線に向けて速射する。横一線に穿たれる大穴は、人間が数人嵌ってやっと塞がる程のサイズであり、それが溝のように連なり、目論見どおりに死者達はそこでも足止めを食らった。思考もなにもない死者たちをトラップの類に嵌めることは容易だが、

その分数が多いから罠など有って無いようなもの。

「……？」

アヌビスが両脇の群れを抑える。ボルトの攻撃もあって、少人数であるにも関わらず死者の大群を止められている。

だが、いつまで保つ？

そんな泥濘の中で、芹真は異変に気付いた。

（……何故？）

一体の死人を頭頂から踏み潰して引き金を引きまくる。狙いはない。乱射でも無駄弾は有り得ない。なぜならこれだけの敵がいるのだから、どこに銃口を向けようと外れることは滅多にない。それこそ、空にでも撃たない限り。

しかし、芹真にとっての問題はそこではない。

ボルトの無差別攻撃よりも、アヌビス達の援護よりも、無駄弾の懸念よりも、いまこの戦場に流れている異変こそ大事であった。

（この曲は――）

協会本部全域に、突如として流れ出した音楽。

それは、あまりにも場違いであり、この惨状の中で最大限の嫌味とも取れた。

（“華麗なる大円舞踏”）

音楽が誰の為に流れているのか分からない。
四凶軍の死者達は無感動に前進を続けるだけだし、アヌビス達に到っては耳に親しくない曲調と執拗な人波に苛立ちを隠せずに声を荒げている。

だが、

（乗らせてもらう）

銀色狼が咆哮と共に、アヌビス達の視界から消える。

「あ――――！？
隊長、銀狼が！」

人間の目で辛うじて追えるほどの速度で、
体術と銃撃と飛翔を、
音楽に合わせて狼は踊った。

『セントラルプールから前線北へ！
音楽はこれでいいのか！？』

「いいぞ！」
「駄目だ！！！」

『こちらジャンヌ。
セントラルプール、いますぐ曲をチェンジ。ジャンルは問いませんから出来るだけ多種の楽器を使っていたり、曲調が速かったり、激しい曲を流して下さい！
それが――！』

爆音に通信が途絶える。
その直後、戦場に流れる音色ががらりと変わった。

『3■Gの“T○me of dy○ng”でどうだ！？』
「銀色の格闘能力が上がったみたいだが、でもなんかスピード落ちてる！」

アヌビス達はジャンヌからの密命で芹真の援護を承ってこのエリアに集結した。
芹真という狼が持つ最大の破壊力、それがデストロイマーチと呼ばれた戦闘方法である。

「しかし、ワケわかんねぇ曲流されるよりも合わせやすくていいぜ！」

『だったらリクエストしやがれ！
こちとら音楽にゃ暗ぇんだよ！』

逆切れするセントラルプールのオペーレーターにアヌビス達も怒声で応える。

「Ｎａ－ｇ○ｙａｈの“Ｇｏ○ｎｇ　■ｏｗｎ”！」
「Ｐａｕｌ　Ｅｌｓｔａｋ流せ！」
「いいや……！」
「スコット・ブ――痛ッ！」
「アートコアにしろ！」
「却下ぁ！」

趣味解放気味に叫び続けるアヌビスらの中で、

「“Ｂ．Ｙ．●．Ｂ．”」

一同が沈黙し、その曲名を言い放ったアヌビスチェーンソーは興味を失ったかの如く、大きな嘆息を漏らしてゾンビの波間へと斬り込んでいった。
オペ―レーターは応える。言われた曲名を検索に掛け、画面上に表示された下向きの矢印をクリックしてストリーミング再生。ボリュームを最大限にまで上げ、戦場の阿鼻叫喚に負けないよう、普段は埃を被っている音響スタジオＷＡＧＧ（協会製オリジナル）をフルに活用した。

程なくして、最大音量でラウドロックが戦場をノックし始める。
狼はその始まりに咆哮を交え、猛り巻く破壊衝動を最速と最高破壊力を以て人波の中に瞬いた。

「よし、銀狼のスイッチが完全に入ったぞ！
アレを活かすも殺すも俺たちのサポート次第だ、全員曲に合わせて攻撃を繰り出せよ！
それが銀狼の“デストロイマーチ”だ！
音楽に乗って無駄なき殲滅を踊り続ける超高難度連携わ――！」

「喋ってねぇで手を動かせよ隊長！
曲が速くて追うのがきついぞ！」

辛うじて、アヌビス達は芹真の速度に付いていけている。
問題はポジショニングと、ボルトの光撃を避けること、それから知らないうえにあまり気に入らない曲に合わせなければいけないということだった。

「だが、押し返しているぞ！
このペースで芹真を手伝え！」

言葉通り、芹真自身止められないリズムにボルトの暴走を他人事と言えない程に親近感を覚えた。
この戦場でこそ力を発揮できる。
抑え続けて来た怒りを、今日ここで晴らさせてもらう。そのつも

りでＳＲを解放し、耳を音楽の為だけに解放し、身体はリズムを刻んで破壊を実現する衝動に委ねる。

たったの一曲で、北部エリアの侵攻は止まりかけていた。

－Ｓｔａｇｅ．３：終結へのオープニング－

西部エリア、海上。

音楽が流れ始めたことに最初ははてなと首を傾げたサーカス団長ヒラリー・マトンも、北部海岸に殲滅舞踏をのぞけば納得せざるを得ない。芹真事務所の狼を動かすために流した曲だと理解した所で、サーカス団員全員に、直接頭に響く声をかける。

『皆、北部を手伝おう。
ぶっちゃけ、そこに敵も集中しているし』

『了解』『了解』
『異議なし』
『待たんか！　俺は反対だ！』

賛成の中に反対が一。

『どうしてだ、ポルシカ？
まさか万獣王の異名をとる君が銀色の狼に恐れを抱いている、とかじゃないよね？』
『動物的に、生理的に受け付けぬだけのことよ。恐れなどない』

反論したのはサーカスの髭もじゃ――もとい、動物使いであり自身も半獣と言うＳＲ、芹真事務所の銀狼に並ぶ破壊力を持つ筋肉老人。

『わかった、じゃあ君だけ先に帰っていてくれ。
ナナナ、亜空間をいくつか用意しておいてくれ』
『りょっかいりょっかい、わかってたよっと』

常に目隠しした細長男が空中をふらふらと歩いて北部へ向かう。

『ラブ兄妹、君たちは狙撃部隊の足場を手伝ってあげな。ステージにたくさんの綱を渡してやるんだ』
『はい』『はい』

全く同じ声音、背格好、タイミングの子供兄妹二人がどこからともなく取り出したロープを、何もない空中に渡して協会本部へ伸ばす。
それを滑り伝って移動する二人を見送りながら、ヒラリー・マトンは次々と指示を飛ばした。

『それでは』

ボルト・パルダンへと向く。

『父が世話になった魔女に挨拶してから合流するよ。
もちろん、光を纏ってね♪』

上機嫌を装いながらもヒラリー・マトンは不愉快極まりなかった。
大切な部下を各エリアの援護に向かわせたのも、向けようのない怒りを独りで発散し、それからその大本を解決しに行くためだ。

（あの、ボルト・パルダンが目覚めたまではいいが、寝惚け過ぎだって！
彼女の復活は予想の範疇だし、そもそも永遠結界なんて錬成できる魔法使いはもう存在しないし、術陣を組むことだって永久不能というルールをこの世に残されている以上、ボルトの結界も時間消滅を迎えたことは必至。遅いか早いかの違いだ！）

両手の指の隙間から無数のカードを潮風に遊ばせるよう零しながら、ヒラリー・マトンは十指を忙しなく蠢かせた。何もない場所でタイピングでもするかのような、関節の動きを確かめるかのような小さな運動。だが、それだけで足元のゾンビたちは絶大な被害を受けていたりする。

（しかし、面白くないな。
トウテツの敗北とキュウキの撤退が早過ぎるし、そもそもトウテツが協会の側に付くなんて……っていうか、四凶最後の1人はどこに行った？
何故コントンがもっとも大人しいんだ？　奴の目的が協会転覆なら協会長を狙うが、それも既に失敗に終わっているらしいし……遠目に見た感じだと、協会長は負傷で気を失ったみたいだが、アレで奴の目標達成なのだろうか？
そうだとしたら、奴の目的は協会長が普段から管理している最重要事項の何かだな。会長の管理下を離れない限り近付けない物、場所、者……まぁ、魔女に聞けば少しは発展する話かな）

指の隙間から零れたカードの総数８９９１枚、最後の一枚を見送りつつ両手に宝石を握るヒラリー・マトン。

（彼女の光撃を何度躱す必要が生じるか分からないが……これだけあれば足りるかな）

準備を終えたところで前進を始める。
いつも通り停滞したまま前進することも出来なくはないが、命の保証が約束されているのは前進の姿勢で臨む前進である。
それが終わりへの秘訣であるのだから。

－Ｓｔａｇｅ．４：退却の翼－

西部エリア海上。

選択は二つだった。後退か自害。

そしてキュウキが選んだのは後者、だが数秒後に前者へと変更し、最終決定は撤退と言う方針で固まった。

決断するや予備の後退作戦を発令。ＳＲを優先して後退させ、一般兵を前面に押し出し盾とし、退却の時間を稼ぐ。

（ボルトの、光刀無形さえなければあと三日間は攻め続けられたものを……）

例え、ボルトの姉を名乗るディマや秘蔵っ子のコルスレイがいても対応は十分に可能であり、防御の対策も万全で作戦展開に問題はない。

だからこそ、例外のボルトが発現した時点でこの戦争を捨てるのだ。

ボルト・パルダンとは、言ってしまえば光の使いである。

生きとし生けるものの視覚を制する自然界の一種、絶対と言える現象である光を自由自在に操れる。その矛先を無差別に向けた魔女が暴れまくっているのだ。しかも射程距離は水平線の果てまで効果があると聞いたことがある。一気に地球の裏側までテレポートしてやっと逃げられるくらいだろう。

（ふん……ここの処理を全て協会に押しつけるのも悪くはないか。それに）

風向きの変わった海上でキュウキは得体の知れない不安に駆られていた。

原因は分かる。

味方ではなくなりながらも、明確に敵対関係となったわけでもない、曖昧な男の存在がそれを煽っているのだった。

「まだ、コントンは何もしてはいない、か」

負け惜しみのように呟くキュウキが感じている悪寒は、それまでの人生で一度だけ経験した、臨死体験するほどの事故に遭遇した時の感覚に酷似していた。厳密には、似てこそいるものの、絶望の度合いは今回の方が上だろうと動物的直勘までもが告げる。

（……セントラルに到達した可能性は極めて高いわけね）

この戦争の目的は協会の転覆。その為には頂点に立つ協会長オウル・バースヤードを心身どちらか、或いは両方を制圧する必要があった。

コントンがそもそも四凶でなかったら素直に群の一駒として、ポーンとしてでも扱えただろう。それが出来ないのは、彼は同じ敵を見ながら四凶の括りにのみ存在した繋がりを利用し、しかし、単独と言う最大限の自由をここに来て行使したからに他ならない。言っ

てしまえば戦場での離反・別離。しかし、ＳＲの絶対数が不足している四凶軍にとってその欠落は見過ごし難い誤算であった。

（せめてコントンの目的さえ分かっていれば）

握り潰したトランシーバーを投げ捨てる。

今では叶わぬ夢に打ちひしがれ、キュウキは翼を畳んで甲板上で深呼吸をするのだった。

何にせよ、協会と四凶軍の決着はついた。持久戦に持ち込めなかった四凶軍は、有象無象の集団へと為り下がり、しかもリアルタイムに数を失っている。ボルト・パルダンの覚醒で被る協会側の被害が少なすぎることもあり、勝敗は火を見るより明らか。ＳＲのバリエーションに乏しい四凶軍に光撃乱舞を防ぐ手段はごく僅か。

「今回は、ここで退かせてもらうわよ……ジャンヌ」

忌々しげに協会本部を睨みつけながら、キュウキは隠し持っていた小さな通信機、ランニングというロゴの入った、切り札の一つを取り出した。

―Ｓｔａｇｅ．５：ｓｔａｒｒｙ　ｓｋｙ―

戦場に音楽が流れてから僅かな時間のうち、戦況は一転していた。
数で攻めていたはずの四凶軍が撤退の姿勢を見せ、その殿としてゾンビ群およびインスタントＳＲの部隊が物量任せの突撃や遠距離からの狙撃戦を主体に構えをとった。だが、対する協会は狙撃に対して全方位障壁魔術を駆使して遠距離攻撃を無力化し、ゾンビ群の肉津波を上位ランクＳＲの高速近接戦闘や広範囲攻撃などで押し返した。

北は銀狼とアヌビスに加えてアキやＭｒ．シーズン、リデアらが津波を破壊。東ではコルスレイの黄金侵食とディマの闇が創り出した影人形が動体を例外なく飲み込んで広がり続け、南部はトウコツ（南東）とジャンヌ（南西）という協会における最高ランクの猛者二人を指揮官とした無駄が見られない部隊単位での遊撃が展開されていた。
それら四方の中で、最も混沌としているのは西であった。哭き鬼の三女スミレを中心に、セブンスヘブン・マジックサーカスの団長：ヒラリー・マトンやベクターケイノスらがそれぞれの役割を的確にこなしながら最低限のチームワークで戦線へ貢献していた。

「理壊双焔破壊、生死繋綴（せいしけいてい）」

兄妹から離れて単騎突撃。
ゾンビの群れに臆することなく立ち向かう小さな彼女に、誰もが奮い立った。
鬼の片手は金棒、もう片手には日本刀が握られていた。

「二門（にもん）四扇（しせん）の点に、八谷六四納（はっこくむじな）の鏡、我大火の力と揺らめきの無垢

を捧げて双炎代し、生死の狭間を紅蓮に繋ぎ綴る熱へと夢想魂画す。
来たれ――」

光撃も恐れず、肉の津波を持てる最大の腕力で吹き飛ばしてゆく。
片腕を振るだけで十人以上が粉々に砕け飛ぶ。他エリアのパワー要員と同じように、ヒューマンミートショットガンである程度の範囲を攻撃するが、完全にそれで津波を止められるわけじゃない。

「――双焔生死繋綴（そうえんせいしけいてい）」

人津波が、無空から発した炎の壁と衝突する。
浄化の炎が熱だけで死者を止める。
が、圧倒的数を完全に止めきれない程には浄化火炎の効果速度も早くはなかった。
死体が死体を踏み越えて殺到する。その光景は、常人が見る分には卒倒するかもしれないし混乱するかもしれないほど、矛盾し現実離れした光景であった。

「速度が落ちた！」
「死体で壁を作るんだ！　そうすりゃゾンビどもの速度はもっと落ちるぞ！」

明確な援護を受けていないとはいえ、ボルト・パルダンの光撃も確実に四凶軍を喰いとめていた。
そこに上手く便乗できれば効率的な、理想とも言える防御態勢が

整う。直ぐにそれが実現されなかったのはボルトを制御できる人間が、そもそも存在しないという理由があった。しかし、ジャンヌやその他光撃に対して回避の術を持つＳＲのおかげでその問題はある程度なら解消された。ボルトの現状を変えることが出来ないのなら、こちらから光撃を避けるまで。力技ではあるが、四凶軍の減少速度はその力技を行使するにあたり、お釣りがくるほどに見返りがきた。

世界中の人間がここに殺到しているのに、海上と言う条件を除いても協会側に対処しきれる数ではないのに、今では優位にさえ立っている。

『ジャンヌ司令！』

優勢に立ったとはいえ、協会の被害も決して軽いものとは言えなかった。

それら数ある被害の中で特に大きく響いているのが、専用回線の断絶である。現在復旧中のその回線は、ジャンヌや協会長のみへと繋がる特別な思念回路であり、電波とは異なる原理で動作するそれは、傍受される心配が極端に少なく信頼度は高いと言える。が、代わりにそれを実現するＳＲが負傷すれば否応なしに回線は途絶し、使用不可能となってしまう脆さを持っている。

『緊急事態です！』

だから、普段は全員に伝わることのない緊急通信も、混沌としたこの戦場に更なる混乱をもたらす結果になるのだ。

『監視衛星が世界中で核ミサイルの発射を捉えました！
千里眼部隊からも同様の報告が入りました！』

当然の如く、誰もがその内容に言葉を失った。

『総数１１４６！
うち半数の５７３本が、全世界から準備されていた核ミサイルが、
“本部（ここ）”に向かってきます！』

それがキュウキの用意していた逃亡用の“捨て駒／作戦”だと即座に気付く人間は一人として居なかった。ジャンヌでさえ。それほどに衝撃的な事態なのだ。一発でも十分な威力を持つ、近代兵器最強とも言える代物が数百本もこの人工島目掛けて飛んできているというのだ。

『了解、なんとかします！
前衛部隊は前線を維持、或いは押し返してください！』

普通に会話を拾える状況でも、スミレの顔には焦り一つ、汗少し程度の変化しか浮かんでいなかった。
周りに炎を灯し過ぎた後悔しか心にはない。
核ミサイルが飛んでこようと、どうにか生きていられる自信があった。同じエリアで戦っているヒラリー・マトンを見かけたせいか

もしれない。或いは、協会にそのミサイルが向かっているからかもしれない。ＳＲだらけの場所にそんなもの撃ちこまれてもどうにか対処は出来るだろう。

「どうしようもないね、この状況だと」

が、そんな多くのＳＲが抱き始めていた、気付き始めていた楽観を、真っ先に破壊したのはサーカス団団長のヒラリー・マトン本人であった。

言われて多くの者が気付く。

僅かな休息を挟んでこそいるものの、今の協会が疲労していることに変わりはない。

つまり、ジャンヌからの具体的な指示がない場合、それは明確なゲームオーバーを意味してしまうのだ。

無意識暴力（ゾンビ）と光刀（まほう）無形、そして熱核兵器。

例え、協会総動員で迎撃したとしても、それらを全て無力化することは不可能であった。

……同時、には。

―Ｓｔａｇｅ．６：織夜秋ｖｓフォルトン・ドラーズ―

北西部。

第三防衛海岸に接したまま燃える城砦艦の甲板には二つの生命があった。

「お前……」

地を這う死にかけの五体不満足と、直立不安定な五体満足。
その視線、瞳は互いに向き合ってこそいるものの、必ずしも両者を捉えあっているという事はなかった。

「夢を見たことがないのか！？」

叫ぶ男の名前をフォルトン・ドラーズと言う。
元ナイトメア非武装派の夢使いであり、この戦争には四凶軍の特殊部隊隊長として、“ボルト・パルダン攻略部隊隊長”として参戦した――また、ＳＲ界隈において五指に入る幻想使いであり、精神干渉を得意とするＳＲである。
例えば、一週間に一度は染め変える髪の毛がこの戦場では異色極まるショッキングピンクだったり、ド派手なラメが施された場違い甚だしいスーツを着込んだりしているのも、彼のこの戦場での生存率の高さへの自信に因る間接的証明であった。隊長でありながら、部下にはボルト以外を狙え、などとチームヒュプノさえ拒む干渉スタイルも、自分の精神干渉力の高さを信じているが故。

「あるよ？」

ゆっくりと、彼女の死人のような目が向いた。

冷た過ぎる視線は軽蔑するわけでも、見下すわけでもなければ、生命としての価値を見出しているわけでもない。
無機質な殺人鬼。
それが夢幻術師の率直な感想だった。
フォルトンの催眠作用は、対象との距離が近ければ近いほど高い効力が期待できる性質のＳＲだ。その為に、未だ持ちこたえていた城砦艦にテレポーター伝手（づて）で潜ませてもらい、デッキの影から密かにボルトへとアクセスを試みていたのだ。が、そんなフォルトンの潜んだ城砦艦が、突如現れた一人の少女によって沈没寸前にまで破壊された。

（こいつは何者だ！）

失った右手首の断面を抑えて出血を止めながら、視線を上空へ向けている少女を睨む。
催眠念波を送っているのに一向に睡魔は起きないし、ハイレム催眠で行動を制御しようと挑むも効果がない。その事態にフォルトンは困惑してしまった。

「私が時になる。それが私の夢。
あなたの夢は？」

殺意もなく、淡々と物や者の破壊を展開するアキの内側を、せめてもの抵抗と思ってフォルトンは覗き込む。

（オリヤアキ17歳学歴なし）

黒い何かが真横で起こった爆発を飲み込み、まるで何事もなかったかのように爆風を飲み込んで忽然と消える。

（家族は母親の名前はコト父親不明住所不明（覚えていないという意味で）色世時に名前を奪われている）

情報が頭の中に流れ込んでくる。
止めどない痛みと怒りを堪え、意識を他人潜行に集中する。
どうせ死ぬんだ。
それならば、せめてキュウキの脅威になるであろうSRの情報を一人でも多く集めて彼女に贈らなくてはいけない。それがナイトメア非武装派を見限って彷徨っていた自分を仲間として迎えてくれた四凶への恩返しだ。

（母親に言われて日本に来た目的はトキの殺害名前の入手色世時とは……　……！？）

ある一面を覗いた後に情報が途切れる。
思わず目を見開くフォルトンの視界で、彼女の背後から迫ったゾンビ達が黒い半透明の球体に触れて消えた。見向きもせずに殺し続ける彼女に戦慄したのも確かだが、それ以上に深層記憶にわずか残っていた母親との会話がフォルトンに衝撃を叩きつけた。

（嘘だ、似て――――いや、よく見れば僅かに面影がある！）

破壊が広がる。

甲板が蓮根のように穴だらけになり、ゾンビも艦内に隠れていた生存者も、例外なく黒球に触れて絶命するか爆発に巻き込まれて焼け死ぬか、或いは落下し、溺れ、潰されて死んでいく。

（そうか、この娘は母親に騙されてここまで来たというワケか！）

最後の最後、フルパワーで覗きこんだ彼女の中に、とてもしっくりくる言葉を見つけてフォルトンの思考は完全に凍結する。

（お前が“全てに等しき死”という）

夢使いの最期を一瞥してアキは飛び去る。その胸の内はトキへの情熱と、与えられた自由に抱く恐怖で輝いているばかりであった。

協会に絶夢と謳われるほどの実力者であることを自慢に思っていたフォルトンにとって、初めて遭遇した数秒前の彼女には怒りを覚えることも出来た。だが、仄かに薄く黒い球状の何かに包まれた瞬間から生命の減少を止めることができなかった。その時点で敗北は決定していたのだ。濃色黒球による手足の消失と、傷口からの流血が死への加速を助けて、痛みに悶える時間は思いの外短かった。オリヤアキが残していったドーム状の半透明の黒い領域が、風前の灯

を吹き消さずに削いでゆく。

「光？」

（ＳＲ……）

最期の瞬間、彼女の居た場所に爆発とゾンビと海水の柱と、美しい朝日が映し出すオレンジ色の雲が、気のせいか見えた。黄金のような輝きと共に。

－Ｓｔａｇｅ．７：起衝転傑－

この戦争を理想形で終わらせる手段の中に“ボルト・パルダンの制御”という項目が両軍ともにリストインしていた。

その理由を今にして疑問に思う者などいない。光刀無形などと言う破天荒な虐殺技を放った魔女の力は明らかに並のＳＲを超越しており、協会に於いてさえも多くが逃げるか隠れるかの対抗手段を持たない。

「ボルト！」

そんな彼女には近付くことさえ困難なのだが、

「あ、お姉ちゃん」

惚けた眼のまま下界を見下ろしていたボルトに呼びかけたディマは、同じ魔女のSRでありながら異なる分野の魔法に特化した者である。同時に、血がつながっているわけでもないのに姉として光に慕われていた。

闇影の魔女と同時に、ボルトを師として仰いでいた過去を持つ男も空を駆る。彼女の前に立ち、改めて起床した“先生”を観察する。

「コルスレイも一緒なんて珍しいね」

柔らかな笑みを向けながらも、その両手は仄かに光り、殺戮陽光の操作を止めることはなかった。

一秒ごとに船が沈み、巨大な水柱が立ち上る。爆炎を誘発して恐怖を煽り、命を吹き飛ばして殺し、斬り飛ばして殺し、斬り落とし潰す、阿鼻叫喚に焼け焦げた戦場を地獄そのものへと変える。

ボルトを止める為、かつて敵同士だった二人の魔女が朝日の空をゆく。

「はい、おはようございます先生。朝食の準備は出来ています。一度休まれては如何でしょうか？」

「できてるの？

今日は何？」

「くるみと一緒に焼いたパン、それからレモンとミルククリームで作ったスープです」

崩壊したレーダー塔上空でボルトを前にしたコルスレイの手は、脳裏に蘇ってしまった忘れ去ろうとしていた過去に止まない痺れを覚え汗ばんでいた。ボルトの光撃を、先生であった実力者の魔法を、自分の黄金侵食で反らしている反動も少なからずあったが。言ってしまえば、彼女の光撃を、自分の手に集中させて他のＳＲの被弾を極力回避しているからであり、一手に光刀無形を受け止めているからというところが大きい。その手にボルトの力を受け止め、その異常な魔力量相手に冷や汗をかかずには居られなかった。

そんなコルスレイだけに任せるわけにいかないと、ディマもボルトを二度目の朝食へ誘う。

「そうね。コルスレイの用意したスープが冷める前に行きましょう」

「お姉ちゃん……でも、彼らが煩いとご飯が不味くなっちゃうし」

四凶軍艦隊の、前線部隊が城砦艦だけを残して消滅する。

寝ぼけているボルトが眉をひそめて言う。食事はハエを落としてから、清潔に楽しもうと。

「彼らはもう騒げないから十分よ。私が夜に落とすこともできるから、あなたは休みなさい」

「いいよ、いっつもお姉ちゃんにばかり大変なことさせているんだし。たまには私がやらないとダメだよ。
あ、ところで……」

光刀無形の勢いが落ちる。
コルスレイがボルトの肩に手を当て、もう片方の手で防御結晶を発動させる。四凶軍のこれまでの動向から、メンタルジャックの危惧からボルトを護るにはこれが最適な方法だとコルスレイは力を解放した。SR界で最高峰の攻撃力と範囲を誇るボルトだが、精神攻撃への防御力は界隈ワーストレベルと言える程に弱い。右手に生まれた小さな楕円宝石（オーバルブリリアント）のルビーは即座に対外魔法に反応し、左手に取り出した三角宝石（トリリアント）のルチルクォーツがこれを阻害し始めていた。早くも四凶軍の夢使いがボルトをメンタルジャックしようと接触を試みていたらしい。
光の魔女の頭が上手く働いていないのが敵の夢使いのせいなのか、それとも長い封印から解放されて間もないからか、そのどちらが真相なのかコルスレイには分からない。そして――

「エリスとマヌエラはもう起きている？」

先生の放ったその言葉は本当に寝ぼけての一言なのか、それともアクセスを阻害された夢使いの嫌がらせなのだろうか。
ボルトの言葉でコルスレイの心が暗がりに沈みかけることがディマには分かった。その理由もわかる。
ボルトの弟子は三人居た。三人とも、魔法使いを目指す者同士とは思えないほど仲が良かったのだ。マヌエラという少女は途中でボ

ルトの元を離れて私の所へ、エリスと言う少女は、

「マヌエラもエリスも死にました。先生の、光で……」

その事情を知っているからこそ、ディマは敢えてボルトを抱きしめる。

唯一生き残ったコルスレイの口から告げられる真実に、ボルトは光撃の一切を止めた。

「へ？」

今にも落ちそうだったボルトの瞼の奥から、はっきりと瞳が覗く。

それは抱かれたことによる驚きがもたらすものではない。

この場にいない二人の魔女の現実に、初めて夢から覚めて見開いた目が戦争と言う現実を捉えただけである。

「死んだ？」

軽く抱いた腕を通じてボルトの中に闇を流す。

彼女が圧倒的に不足しているであろう現実を、今この場で、夢から覚めたばかりの、現実を忘れた彼女に与える。

「先生、光を当てる人を間違えています」

「どうして？
どうしてエリス達が……？」

現実が彼女を侵攻する。
だが、それでいい。
ボルト・Ａ・パルダンに必要なものは絶望であり、全力の光撃を引き出すためには動機を抱えなくてはならない。制御を得るためにも悲しみを知る必要が不可欠。そしてその不幸は、彼女自身の過去と罪悪を認めさせることで補いきれるのだ。

「彼女たちの為にも休みましょう、ボルト」

「ねぇ、お姉ちゃん」

光として生き、その結果強烈な我を身に付けたボルトが、暗闇を飲み込むことで均等の取れた理性に辿り着く。もはや、朝日を全身に浴びているはずのボルトに先程までの眩しさはない。万物の消滅を当然とは言い切らず、終わりの一つ一つに感情を抱くほどにボルトは満たされた。

「分かっているはずよ、ボルト。
あなたの“敵”は、あなたとコルスレイ達の光によって消え去った。
残ったあなた達も自然の流れのうちに消えていこうとし、抗い、結果消し合ってしまった」

「先生、話があります」

あまりにも分かりづらい、ボルト・Ａ・パルダンの完全起床。

それに気付いた魔法使い二人は完全に第三者を無視した会話を展開した。

それを盗み聞きしていた否定のＳＲで自分の存在感を殺していたメイトスや、作戦を考案しつつも耳を傾けているミギス・ギガント、闇の中の光に魅かれる虫のよう夢遊が如く現れたヒラリー・マトン、更には諸々の盗聴器具で会話を拾ってしまったチームアヌビスとそのバックアップであるジャンヌ、セントラルプールの誰もが頭の上に共通した記号を浮かべた。

『？』

「……マヌエラを殺したのは覚えている、でもエリスが分からないの。

本当、なんでだろう……それと、お姉ちゃん。私はまだ“本当の敵”に触れてすらいないよ？」

「そう。

なら、本当の敵を炙り出す手段を潰さないために、光を集めましょう。

あなたが未だに近付くことさえできなかった敵なら、おそらくこの大きな戦闘も予測の範疇にあると見て間違いないでしょう。ところで、ボルト」

優しく告げるディマに、ボルトは輪郭に光を灯しながら聞き返す。

「……うん。いまこの話なら、聞かれた所で　“誰にも理解されないから大丈夫”　だよ」

（大丈夫じゃないわよ）

腹に力を入れて姉と慕うディマを安心させようとするボルトだが、それがかえって不安を煽いだ。

サーカスの団長やメイトス辺りは確実に真相を探ろうと接触して来るだろう。四凶軍と正面衝突しているにも関わらず、本当の敵は外にいると断言しているのだ。聞き込みなどという、そんな事態を避ける為にはそいつらから遠ざかり続けるか殺すかの二者択一である。なんせ、ボルトに近付くためだけに接触して来るなど目ざわりこの上ないし、そもそもディマ自身がボルトの言う本当の敵とやらを知らないし、触れるつもりもない。

「そう」

ディマの肯定と同時に彼らは現れた。

足元のレーダー塔倒壊部に立つ鬼とトキや、空中であるにも関わらず左右にアサと藍、それから背後のヒラリー・マトン。鏡の世界から覗き見るキョウとアリス。

「ボルト」
「光の魔女、ボルト・パルダンに相談があるんだけど」
最初に彼女を呼んだのはトキ、要件の有無を発したのはヒラリー・マトンだった。
「父がお世話になったね。この世界について本格的な話し合いを設けたいと思っているんだ」
「どんなの？」
マスク男の言葉でトキは口を閉じ、発言のタイミングを逃したことを自覚する。
「組織の垣根を越えた無限の会合だよ。四凶が今回狙ったモノと、そもそもこの世界に隠された矛盾、起点にして根源たるカオス。この世界に組み込まれたバグについてだ」
「いいけど、お願いはそれだけ？」
ボルトは覗き見る。
彼らが本当に望むものは、乱射光の停止であり、光の制御にある。すなわち、己の安全確保だ。
しかし、視線を移した先には違う感情もあった。
「藍ちゃん、あなたはこんな私にも、またご飯を作ってくれる？」

「こんなって、どんなのよ？
勿論作ってあげるわ。それより――」

「邪魔者の排除を手伝ってほしい」

藍の反対から声をかけて来たアサを無視しつつ、今度は視線と右手を足元のトキへと向けた。

「ねぇ、聞かせて。
私にこれ以上の時間が許されると思う？」

その問いは、ボルトの過去を知る者知らぬ者の類（たぐい）両者にあらゆる感情を抱かせた。

「ボルトの時間？」

光に包まれて浮かんだトキは、光刀無形の発生源に到着するや否や、どうにも回答に困る問いかけに頭を傾げた。
二人の問い応えを見守るアサは、時間を武器とするものの人間として未熟なトキの“回答不可”を予測し、藍はトキと同じ視点に立って考え、ヒラリー・マトンは面白い応えを予測する。
その面々の中で、コルスレイは昔のボルトと同期の死者達を思い出した。

明らかに大量殺戮という言葉を超越した破壊と殺人を重ねたボル

トは、死刑どころか終身刑ですら生ぬるい犯罪者とも言える。時代の都合にもよるが、殺した人数でひとつの国家を作ることだってできる程の魂を焼いてきたのだ。どんな理由があろうと彼女は犯罪者だ。

「別にいいんじゃないの？」

トキにとって問題はそこじゃなかった。

そもそもその過去を知らないということもあるが、知っていたとしてもトキはそれを重要視しない。

「私たくさん殺しているんだよ？」

「でも、たくさん救っているだろ？　帳消しくらいにはならないか？」

この場にあって、トキは現状を理解していなかった。

口から出る言葉は真剣を装いながらも実は出まかせで、とにかくボルトが寝起きっぽいからということと戦場にいるという緊張感から機嫌を取るようにと最大限に考えての発言であった。しかし、その中に僅か数パーセントほど事実が混じっていたりする。

「俺とか、藍とか、結構ボルトに救われていると思う。

色んなアドバイスしてくれるし、元気を見せてくれるし」

「ふふ、やっぱりトキはこの世界に生きていながら死んでいるんだ

ね。

じゃあ聞くけど、トキに全く関わっていなかったと仮定しても、私は生きていてもいいのかな？　人殺しに間違いはないし、国を滅ぼしたことだってあるんだよ？」

それが現実だと魔女は言うが、トキはどうしても侵略者や殺戮者としてのイメージをボルトに被せることが出来なかった。

「悪い、俺にはボルトはボルトでしかないんだ。光しか見えないんだ……」

それも現実だった。

トキは呟くように喋る。

最初に出会った芹真事務所のメンバーにして、自分をＳＲ界に招いた魔女。

どんな時でも絶望を忘れさせてくれ、どんな時でも輝き続けた希望の光。それがトキにとってのボルト・パルダンであった。何度命を救われ、何度窮地を助けられ、どれほどの言葉を貰い、心身共に変化する契機を与えられたのか。

「……そっか。私はまだ輝いていてもいいんだね？」

溜息と笑顔を同時に示すボルトへ、コルスレイが話しかける。

「先生」
「光は、全てと出会う最も平等たる存在、でしょ。大丈夫、覚――」
が、そこを先読みしていたボルトはコルスレイの言葉を遮り、そんなボルトの台詞を遮るように今度はヒラリー・マトンが言葉を投げかけて来た。
「ボルトさんボルトさん、生命の上に生命が成り立つなど、君だけの個性ではないよ。勘違いでなければまだ寝ぼけているということかな？」
「あなたの口からそんなことが告げられるなんて思ってもいなかったし、そもそもアナタがそれを口にしても説得力皆無だよ？」
光の魔女と道芸魔術師の交わらない視線が衝撃波を生み出す。
誰が見ても険悪以外のなにものでもない空気に、残念ながら空気読み取り機能が若干麻痺しているトキは質問で斬り込んだ。
「食物連鎖のこと？」
「うわぁ……」
「間違っていないけど、う～ん……」
「当たらずとも遠からず、しかし幻影なりけりと言ったところか」
「――――ま、まぁ、確かにシステムのことではあるよ、うん。それもそれで平等だし」

空気を読めとは言わないが、トキの的外れな一言でボルトはリアクションに窮した。
魔術師が言いたい事と、説得力がないといったのは単に上下関係の問題ではない。

「そうさ、トキ君。システムの中で僕らは間接的に破壊と殺人を繰り返している。
人間の命はそういった約束された罪と共に存在し得るんだ。生命である限り、その宿命から逃れることも出来ないし、特別に誰かがその枠から抜け出すということもない。必ず何かを犠牲に成立する“存在／時間”それが生命だよ」

トキの疑問に同情を抱くボルトと、明らかに何言ってんだコイツという目で見るカンナら。
しかし、今のボルトに飛びかけの会話は調度良かった。
沈み過ぎず、浮き過ぎず。
はからずしもトキとヒラリーの二人がその決定点を作ったことに気付き、ディマは光の魔法使い二人から離れて安堵の息を漏らした。

（もう、この空にいる理由はない）

「あ……それよりもボルト、手伝ってくれ！」

空をボルトに任せ、ディマは海底へと潜行する。

「周りのアレを片付けるのを？
それとも足元の彼らを助けるのを？」

「助ける！」「助ける方よ！」

「わかった」

光のメッセージとも言える意思を受け取った者達が、それぞれ最適と思える行動を取るか指示を待つかなりして応えた。
例えば芹真のように止まることなき者もいる中で、ゾンビを喰い止めつつもジャンヌからの指示を待つアヌビスらのような者もいたし、初夏の海上で巻き込まれまいと一目散に退散するトウコツのような者もいれば、トキや藍のように戦況の（正確にはボルトの）激変に振り回されて戦場をただただ走りまわる者達もいた。

「有難う、お姉ちゃん。
お姉ちゃんのおかげで感覚を掴めたよ、コウトウムケイ」

『結界部隊、ミサイル到達まであと2分！
最大出力で衝撃を防げ！』

海底の闇に届いた光線を受け取り、皮肉でも言われたものと受け取ったディマは、それでも静かに笑みを見せた。まるで感覚を掴む為に態（わざ）と暴走していたかのような態度は気に入らないが、いまはボルトよりも気になるモノが飛んでくることに意識を傾けて集中する。
イメージする物は、槍。

「ねぇ、ミギス・ギガントくん、全員に伝えて欲しいことがあるの。
“光は我らに有”って。
それから――」

崩れた司令塔に降り立ったボルトの言葉に、協会全体の士気は一瞬で最高潮に達した。

「お姉ちゃん、力を貸して――光刀無形」

朝日の差す青き晴天が、雲無き曇り空へと。
空の光が減ったと皆が気付くのは、ボルトの右手に光が集まっているという事を伝播によって伝えられてからだった。
間近で光を集めたボルトを見たアサは息を呑んだ。かつて、一度だけ刃を交えた魔女の本気を以てすれば、光を凝縮することも容易いのだと知らされ、重力さえ歪み始めた光球に眩暈を覚えた。どれだけの質量が収集されているのか見当もつかない。ただ、それが放たれたのなら核爆発どころでない破壊が展開されるであろう予測だけは容易にできた。

『良いけど、夜を創れる？』

「うん、いまやる」

腕を伸ばして右掌に光球を作ったボルトの目が、静かに閉じそれと同時に天を向いていた掌が、光球を手中に収めたまま下側へと返される。
その術こそ、本当の意味で戦場全体の度肝を抜いた。
一瞬にして朝夜が逆転したのだ。

『サテライト　フルムーン」

光と闇の魔女が同時にそれを発動する。
海岸に殺到していたゾンビの半数は、突如として消えた地面とその闇に呑まれ、残り半数は月食の如く闇狭間を走る白光によって惨殺される。
僅か数秒の明暗逆転。
しかし、それだけで戦争の決着はついたも同然となった。
後はボルトが余力消化に努め、ディマは侵入者排除に協会内部へと潜っていった。

「さて、トキ」

逝ってしまえば超虐殺。
それを軽々とやってみせたボルトに呆然としていたトキは、呼ばれたことに気付くまで数秒を要した。

「光刀無形――っと、皆の願いは叶えたよ。ミサイルも全部撃ち落としておいたから。

ところで、あなたには行って欲しい場所があるの」

「はぃ……え、全部？」

再び超広範囲虐殺魔法を唱えたボルトがトキへと向き直る。

思わず息を呑んだ。

これまでのボルトとは明らかに違うボルト。大人過ぎるのだ。身長はトキよりも高く、踵にまで届く長い金髪に哀愁を含んだ端整な顔つき、温かい日差しを連想させる白い肌。モデルのような体つきはどこか艶（なま）めかしく、それでいて高い気品を備えているように思えた。こんな時に不謹慎だろうかと疑問にも思ったが、とにかくいつものボルトとは思えない高級感が存在そのものにあった。

「行って欲しいって？」

意識がハッキリしてきたところで改めて向き合った少年にボルトは息を呑んだ。

「あ……うん」

この子に死を見つけた。

魔女狩りでも、魔術競争でも見つけられることのなかった己の死を、この少年は隠し持っていた。

自分よりも身長が低く、いかにも子供と言ったあどけなさが、学生の高学年ではあるだろうが、抜け切れないし隠せることもできて

いない青さが見られた。間違いなく子供のはずなのに、しかし、その内側に持つ器は彼の人格に対して大き過ぎる力であった。

「とっても強い敵だけど、トキにしか勝てないはず。援護は無理だし、下手すれば逆に殺されるかもしれない……それで、確認の為にもう一度聞くけど、そんな奴の所に行ってもらえる？」

「敵って、やっぱりＳＲ？」

「うん、ＳＲ。で、そいつを倒せば四凶軍はほぼ全滅」

「簡単に取る首ではない、ってことか。ラスボスみたいなもんか？」

「ラスボスどころか裏ボスレベルの敵だよ、レベルマックスで挑んで倒せるかどうかっていう次元だよ。ラスボス倒してアイテムコンプリートして、パラメーターがマックスにならなければ出現しません～、くらいの」

思わず吹いてしまうトキだったが、それでも否定はしなかった。ボルトはこう言っているのだ。超難易度高いステージが控えているけど、挑戦しますか、と。そして、その挑戦権は他の誰でもない自分にしかないと。

「本当は私が行くつもりだったんだけど――――」

向き合ったままボルトは右手の人差指で下を指す。

その動作にトキとボルトの会話を見守っていた一同が一斉に足元

の異変に気付いた。

「手遅れみたいなの」

次の瞬間、トキだけを残して戦場の時間が凍りついた。

「え？」

空気が、ではなく。

「皆――なん、どうして止まったんだ！？」

“戦場に流れる時間そのもの”が、だ。

第６１話－終結－（後書き）

「ボルト？」

突如訪れた静寂に、トキは口から出した名前を確かめるよりも、目で周辺へと忙しなく警戒の線を配ることで異変を確かめた。
戦場が止まっているのだ。
初めてでないこの感覚は、まさしくタイムリーダーによる静止世界の展開。
だが、自分の展開などでは勿論ないし、限界時間を深呼吸しながら待ってみたものの静止世界が低速世界へと移行することがない。

「何だ、これ！？」

『何だと思う、色世時』

ついにはトキの思考が止まる。
しかし、それは世界の制止と同じモノ原因でない。
一瞬の思考凍結を経て、全てが制止した世界に自分を除いて唯一響く声の主を判別する。
聞き覚えのあるコントンの、余裕に充ち満ちた低音。

「お前……何処にいる、コントン！」

振り返っても静寂。
空中の爆発や舞い散るゾンビの破片、それどころか水柱が撒き散らす飛沫の一滴に到るまでが止まった混沌たる世界にコントンの姿はない。

「姿を――って!?」

見上げてもコントンは居ない。コントンは。
代わりに、別のものが、その巨大がトキの視界を塞いだ。

『ならばココへ来い、俺はこの箱舟で待っている』

見上げた先ではそいつが巨大過ぎる口を開き、そして目覚めのあくびと言わんばかりに咆哮を上げた。

「はこぶね?」

理解できない何か。
それが視界と思考の中に飛び込んでくることにはもう慣れている。
だが、眼前の現象を既成概念とは違うと言われれば戸惑いはする。

『ククク、お前にはそう映らないだろうな。
だが、この生き物はれっきとした箱舟なのさ。箱舟としての機能、

その破片と残骸を飲み込むことで今日まで生きながらえた生物。こいつ自身が伝説的存在でありながら、更なる伝説を飲み込み、結果として協会の最奥に隠蔽されてきた生物兵器』

風さえない世界に、巨体の羽ばたく音が響いた。

「ドラゴン……？」

『秘龍“ノア”さ』

耳をつんざくような衝撃波が静止世界に広がる。

その瞬間、トキの現実が過去最大級の崩壊を見せた。

第６２話－Ｓａｖｅ／Ｏｕｔ－（前書き）

……あれ？

仕事行く前に投稿したはずなのに？

投稿したことに　なっていない　だと？

何ぁ故ぇ……？

遅くなってすみませんでした。

本当に……ｏｒｚ

――　ＩＮ　――

「あれが、協会の切り札……」

キュウキは一部の部隊に撤退撤回を命令した。

あの半球状の中で何かが起こっている。

確信ではないが、予感はあった。

今まさにコントンが世界に挑んでいる。

（……あれは？　時間が止まっている？）

協会本部をまるまる包み込む、僅かに色が暗い球状空間。
四凶軍は後退を始めていたことで辛うじて球状空間には触れていなかった。
キュウキはそこに珍しいものを見た。
停止した爆炎と、飛散していた途中だった炎上ヘリコプター。
重力さえ無視したその停滞は、明らかにＳＲの力によって成立した場面以外考えられない。

「キュウキより各翼へ、吸血鬼達を援護してあげなさい。
協会本部上空に出現したあれに辿り着くまで護衛し、到達以降各自の判断で進退を見極めよ」

それだけの口令で四凶軍の動きに変化が生じる。
各方面で部隊を指揮するキュウキ達が、四凶の令に従って鞘を捨てる。一度決めた撤退を諦め、今一度死地へ踏み込まんと艦隊を従える。

『了解！』

八色の声音に弱臆の響きはない。
四凶の言葉に絶対を見出したキュウキ達は、再度四凶軍を支える武将として協会包囲へ臨む。

（アレを掌握出来れば、コントンでなく私たちが……）

四凶、キュウキも戦場へと戻る。
ＳＲを解放し、虎爪と白翼を剥き出しに海面間近を飛行する。

（……この世界を再生できる！）

協会本部頭上に出現したそれを眺めながら、キュウキは最前線へと急ぐ。

第62話－Ｓａｖｅ／Ｏｕｔ－

まるで旅客機のような白い巨体のソレはゆっくりと目を開いた。
重たげな瞼の分かれ目から覗く黄金は、その大きさや形色からして人間の瞳とは何もかもが違うことなど火を見るよりも明らかである。

「何だアレ！」

世界は止まっていた。無数の動体も、幾つかの殺戮も、風景の中の限られた光と無限の光も区別なく止まっていた。その中で動けるトキは、自分が何か特別な事をしたわけでもなく動き続けられた事実に、すぐに気付けなかった。

「言っただろう、ノアさ。
さぁ、ここからお前は独りだ。お前が俺に用事があるように、俺もお前に用事がある。
何が言いたいかは分かるよな。ここまで来てみるんだ、ククククッ！」

限りなく死に近づいた世界を創っているのが上空のアレであることを最初に理解し、次いでそれを操っているのがコントンだと直感する。この戦場を止めたのは奴とあの巨大な龍（なにか）。本やゲームでよく取り上げられそうな胴長有翼のドラゴンは、しかしコントンが言うところのノアと呼ばれるものであり、伝説の代物を飲み込んだ伝説

で秘龍だとか呼称していた。

「待っている」

声が途切れる。

それまで、僅か数秒だけでも戦場に届いていた羽ばたきの音までもが消え、完全な無音が世界を包んだ。と、同時に突風のような無音無味無臭の何かがノアと呼ばれる龍を中心に、爆発の衝撃波のように小さな圧力の発生を感じさせた。

だが、それは爆発にて生じるような、ただの衝撃はではない。

「これは、クロノセプター！？」

左手に同じものを持つトキはすぐに気付いた。

透明で球状の何かがこの戦場を包んだわけだが、それは紛れもなくクロノセプターであり、つまりこの場所は既に搾取領域であり、時間に比例して奪取崩壊が始まる死地でもある。

ここに居たら全身から時間を奪われて消滅してしまう。

クロノセプターを自ら武器と認めて使ってきたトキだからこそ分かる。

ここは死地。

分かってはいるが――

（世界は止まっているのにコントンは動いている……ノアとかいう龍も。

原因はコントンの“時間抜け”だな！）

訓練を受けている最中に調べた敵の情報を思い出しながら走る。

この死地を『ジャイアントクロノセプター』と名付けた場合、完全に時間が止まっている“物／者”から時間を奪って崩壊という烙印を押すことが出来るのかと問えば、それは“可”である。しかし、その静止世界の中を自由意思を基幹に動く者からは殆ど時間を奪うことができない。例えばコントンの時間抜けやトキのタイムリーダーのような、本来あるべき時間を流れから抜け出せる者には顕著な影響が現れ難い。

つまり、あからさまな死地で動くことが出来るトキは抵抗を選択する余地もある。だが、止まった世界に含まれた芹真や藍、ボルト達は動くことも、始まっている死に何ら対抗することもできず餌食になってしまうのだ。

「まずは皆を助――！」

幸い、トキには時間共有技としてクロノ・クロスセプターがある。早い話が、時間の流れない世界に他人を引き込めばいいだけのこと。それだけでジャイアントクロノセプターは回避できる。その為には、止まった時間の中を自由に動ける者の時間を分け与える必要があり、トキはその術を持っていた。

「手伝おうか？」

突然の声に――誰もが写真に収められたと思われた世界で聞いた、コントン以外の他人の声に――思わず発砲した。

ＭＣＣ（瞬間的な時間による創造）で胴体を貫かれた男の顔から仮面がずれ落ちる（が、その下にも銀色仮面）。

焦りながらも、声を掛けて来たそいつが味方だと気付いたトキは銃を時間分解して回復の準備に慌てた。ピンポイントに心臓を撃ち抜いてしまったのだが、被弾した筈の魔術師は一滴の血も零さずにトキへ人差し指を立てて横に振って見せた。

「大丈夫、ダメージはない。
それよりも落ち着いて皆を動かしていかないか」

「どうして……何でひ■りマントさんは動けるんですか！？」

銀色仮面は笑顔で答える。

「私“ヒラリー・マトン”は、魔術師だからね。
タネも仕掛けもありませ～ん♪」

マジシャンだから、というどこか納得のいかない理由を前にトキは頷くしかなかった。

この中から多くの仲間を救うに独りでは圧倒的に時間が足りない。それを手伝うと言っているヒラリー・マトンの提案は実に魅力的で、同時に思わぬ助け舟であったことに裏がないものかという疑惑を少しでも思い出させてくれる起因となった。

「そうだ、君にはこれを進呈しよう」

改めて、ＳＲの世界は謎が多いと実感した。これまで会って来たＳＲも相当謎だったが、眼前のヒラリー・マトンというＳＲは一等謎が深い。

何故動けるのかという疑問もさることながら、この状況でいきなりサーカスのチケットを渡してくる魔術師の気が知れない。

「この戦争を生き抜く約束だよ。落ち着き、気が向いたらおいで。いつでも歓迎するから」

「さぁ、行こうか」

「は――ハ！？」

後ろを振り向き、そこにヒラリー・マトン。視線を前に戻せばそこにもヒラリー・マトン。一歩横にずれて前後にいた二人を同時に視界に収めて、前後ともにヒラリー・マトン。

少し理解する。

ヒラリー・マトンが二人、しかしこれにもタネどころか仕掛けもないのだろう、と。

「時間との勝負だろ？

時間を止められた者を動かせるのは、時間を自在に使える者だけだ。

例えば、トキ君のタイムリーダーはまさしくこの場において適材適所と言える力だと私は思うのだが？」

二人の魔術師が同時に言う。

いまこの場で必要な力は『読解く者』ではなく『統率する者』という意味だと。

そして二人（三人）は走る。

ヒラリー・マトンは外周、協会本部を取り巻く前線の者たちを救うと言い、トキはその逆、中心部にいる者たちを救うと決めて時間を練った。

『聞かせてくれトキ。

君が救いたいモノは何だ？　誰かなのか何かなのか、君が救いたいモノ如何でこの戦争に付くリボンの色は変わるぞ』

タイムリーダー。

トキが真っ先に時間を与えた者は藍であった。

時間凍結から解放され、時間停止世界に足を踏み入れた彼女は自分の目を疑った。

「これは……トキ、あなたなの？」

「違う。コントンだ！

詳しく説明する時間はないんだけど、とにかく時間が経てば皆が時間分解されてしまうんだ！　助けてくれ！」

右肩にトキの手が触れ、そこから時間と知識が流れ込んでくる。
日本刀と金棒を握り直した藍は黙って頷く。
次に時間を与えるべきは、

（手近なこの――――――――――俺！？）

トキは再び凍りついた。
自分とそっくりな顔をした人がいる。
ジャイアント・クロノセプターの事さえ忘れるほどの衝撃を受けつつも、左手のクロスセプターでその人物を探り――陸橙谷アサ――赤の他人であることを確認して冷静を取り戻した。世の中には自分と似た人が数人いるという言葉を思い出して自分を納得させるが、まさか自分と似た顔を持つ人物が亡くなったと思われていた藍の兄妹にいたとは夢にも思わなかったが、以前そんな話を聞かされたような、なかったような。

（……って、今はそれどころじゃない！）

時間凍結から二人目の鬼を解放する。

「いいか、藍――おっと？」

突然のステージチェンジに驚愕するアサを無視してトキは次へ。

「華創実誕幻三段：蒲公英（たんぽぽ）」

それと同時に藍はトキの援けに移った。
かつて対トウコツ戦で見せた分身の術文。思い出すトキの視界に、無数の分身体が飛び込む。

「皆は私に任せて！　あなたは上のあの大きいのを止めて！」

金棒が指すは秘龍。
秘策を懐に覗かせる藍の瞳に、トキは頷いた。

「……頼む！」

逡巡しながらも、トキは目的をコントンとノアを止めることの一点に絞る。

同時に数百人の藍が一斉に四方へと散開した。
トキのものでない時間異常は、多くのＳＲにとって黙認すら出来ない攻撃。
クロスセプターでトキからもたらされた敵の攻撃を理解した上で覚悟を決める。長居は破滅のみを意味し、悠長は力の消失を象る。

（芹真を探して、トキの言う時間凍結を解除すれば）

停止世界、時間凍結はＳＲの攻撃の一種であり、広範囲をカバーする範囲技でもあるらしい。

その空間を解除するには時間を操るしか方法がない――らしいのだが、トキのその判断を藍は別の視点から直感し、解決方法に辿り着いていた。

（トキのクロノセプターが時間凍結を破壊、分解して私は動けるようになった。アサお兄様も動けるようになったのは、凍った時間をトキの時間で破壊か、上書きしたから。

それはつまり、敵の“ＳＲ効果”さえ解決できれば時間を操れなくても時間凍結から救出することはできる！）

ＳＲがもたらす効果を打ち消す術なら、ある。

「理壊双焔破界、生死繋綴」

右手に炎の金棒を、左手に命筆の日本刀を構えてそれぞれの切先が左右へと向くよう水平に、胸の前で交差させる。長袖の先に隠した黒い術符を子・薬の二本指で取り出し、器用に二枚の術符を口元に運んで銜（くわ）える。

協会に一時的でも所属していた時は『如何なる敵を相手にしようと使ってはならない』と判断されて封印を強制された武装を解く。

「二黒混濁の生穴を交して円縛の腹への歪を綴り――」

早い話がノアという巨大な箱舟が放つＳＲを無力化すればいいだけだ。

横目で胴長の秘龍が口を大きく開けているところを目撃する。

「零纏寝侵たる命へと熱を繋がん、黎明と黄昏の狭間に焦がすこの身は鬼、槍と鎧に重んじたこの名は藍――」

中央塔から北部海岸へ向かいながら、演習場のど真ん中を突っ切りながら唱えた。

「共闘の魂をここに。

“其の辿るは、理を壊す位にありて、蒼界に破拠を掲げ、万に対して覇を飛檄した魂”」

哭き鬼の村が存在していた頃からでも、伝説的に語り継がれてきた武装。

「いまだけで良い、力を貸して。

理壊蒼媛覇界（リカイ　ソウエン　ハカイ）」

藍が持つ“大抵のＳＲを無力化できる手段”が鬼の金棒であった。
使う事に抵抗が大き過ぎる装備であり、しかし、それ以上の見返りを期待できる特別な武器。トキらしくいうなら、隠し武器・最強武装といったところである。

（敵のコントンはトキと同じ。遅くなった時間の世界を自由に移動できるＳＲ……私達ではどうしようもできない相手……）

どんなに強力な武器を装備した所で、時間の流れが違うコントンに太刀打ち出来るＳＲは存在しない。唯一トキを除いて。ならば、トキがコントンへ辿り着くまでの消耗を抑えることが自分たちの仕事なのだろうと、責任にも似た感覚を背負う。
トキという個体を護る為に、集団を創り出すことが出来る藍はこんな作戦を思いついたのだ。
まず、手始めにトキと一緒にレーダー塔上部倒壊地点へとやって来たカンナに、

「力を貸して」

理壊蒼媛覇界の金棒に整列した杭歯でケツバット。
ガラスが砕けるような音と共に長女であり、ウザいことこの上ない実姉カンナに通常時間を取り戻す。

（三時方向にアヌビス！）

（七時上空にイカロス発見！）
（北部……じゃなくて、一時方向に芹真さん！）

一斉に、分身体からの情報が直接本体の頭に送られてくる。

「一時方向、芹真さんを！」

藍は理壊蒼媛覇界をぶん投げた。四方八方へと散らばった分身体の、目的の人物を見つけた分身体へ。
投擲された理壊蒼媛覇界をキャッチした分身体が芹真の時間を解除。時間の止まった世界に入った銀狼は狼狽していた。

（七時方向に特級風司！）
（五時方向、アヌビス部隊！）
（中央部のジャンヌを忘れてるわ！）

芹真が戸惑いつつも変身を解く間にも作業は続く。
分身体たちの意見を、本体である藍がまとめる。

「中央、ジャンヌ！
媛をこっちに！」

本体の手に戻る蒼媛。

ジャンヌの肩を軽く叩いてあげるとカンナの時と同様にガラスの割れるような音がして時間が戻る。
視線を上げて今度はボルト。

「華創実誕幻、天段：風毀塔（フキノトウ）」

ボルトの踵に理壊蒼媛覇界を触れた瞬間に気付く。時間凍結から解放されたアサが大規模な術の準備をしていたことに。
協会レーダー塔の四方に術符、二か所に金棒を突き立てて術文陣を形成していた。

「あれ、藍ちゃん？
どうしてみんな止まっているの？」

理壊蒼媛覇界を投げ渡す。
ガラスの割れるような音が気のせいか増えていた。
ボルトへの返答を考えながらも藍が視線を巡らすと……

「皆、ここから離れて下さい」

いつの間にか、アサによって片腕で西部エリアに投げ飛ばされていたトキが、空中で四肢を暴れさせていた瞬間を目撃した。

「上のアレを押し上げます」

乱暴が過ぎる兄に何かを言うよりも早く、藍はその策に賛同して退避する。トキには悪いと思いつつも、戦場においてアサの有言してから実行するまでの速度が恐ろしく速いことを知っている藍に反論の余地はなかったのだ。

ジャンヌを抱えてカンナが、ボルトが、藍がレーダー塔から飛んで離れる。着地はボルトの光で飛行能力を授けられるから問題ない。

次の瞬間、レーダー塔のそこかしこから植物の根が生まれ、それが爆発的速度で成長し、互いに絡み合って巨大化を果たす。天へ天へと伸びていく巨大な樹木の根は、空中浮遊しているノアの胴に難無く絡み付き、その自由を奪う事には成功した。

「……？」

根は成長を続ける。

球状の空間、その効果空間中でジャイアント・クロノセプターが発動しているとして、球体の中心であるノアを上空に持ち上げてしまえば海面付近が球状の範囲内から外れないだろうかという推測から行った対応策なのだった。

が、ここで思わぬ誤算にアサは冷や汗を覚えた。

「なぜ……なぜ、止まらない？」

「？」

木の根は爆発的成長を続ける。
レーダー塔からその下層にまで伸食つつ、頭上のノアをどんどん上へ上へと押し上げる。

「すまない、どうやら僕の術が、操成の印を……奪われた」

「えッ――術を!?」

胴長の白龍がひときわ大きな声で雲の上から叫ぶ。
遥か下まで響くその音量と震動に、異常が加速を覚える。上下にしか成長を見せなかった木の根が横への成長を始めたのだ。

「レーダー塔が崩れる……あ!
セントラルプール、今すぐ退避してください!
緊急退……っダメ、繋がらない!」

カンナに肩を担がれた状態でジャンヌは全力を振り絞って叫んだ。
木の根が破壊する施設の轟音と粉塵が止まった世界の埋め立てを始めてしまう。だが、どんなに叫んだところで時間は凍っている。
目が覚めるころには、いつの間にか崩れた無数の瓦礫が何百何千人もの命を埋めているだろう。何が起こったのかも理解できずに死んでいく者達を、そのまま黙視していることにジャンヌは耐えられなかった。鉄の味が広がる口の違和感を殺してカンナの背中から拡散斬撃を放ち、もはや巨大樹木と化した根ごと、部下たちの頭上に降

り注ぐ瓦礫を少しでも吹き飛ばす。

『藍、お前は南東部をカバーしろ！』

「芹真さん！」

『時間凍結なんだって？

北は俺とアヌビス共で何とかする！』

『おう、こっちは任せ――！』

『はたらけ！！！』

『ナックル、そいつも解放の役に立つぞ！　起こせ！』

『そっちの役立たずじゃねえ！』

『チェーンソー、右の奴を起こせ！』

『む～ん』

『西部方面も助けはいらないよ～ん♪』

回復した芹真との通信に安堵しつつ、言われた通りに行動するため分身体たちに南東部へ移動してもらう。投擲と解放を進めるが、明らかに作業速度は間に合っていなかった。

北では芹真がアヌビス達を解放し、更にその作業を手伝えるＳＲを探しながら作業を進めていることがインカム越しに伝わって来た。激戦地区であった北部にバリエーション豊かな特殊ＳＲが揃っていることに不思議はない。

問題は、藍が担当している南東エリアだった。いくら分身体の数を増やした所で時間凍結を解除できるアイテムは一個。北部エリアのように解除能力者が多数いるわけではないのだ。分身体はカメラ的な役割しか果たせず、結局は藍独りで走りまわっているのと同義だ。

（このままでは……間に合わない！）

悪い事態の二つ並びに余裕を見失いかけていた。

トキから教えて貰った敵の超広範囲クロノセプター、それから誰が見ても明らかに不味い樹木の巨大化暴走。

クロノセプターだけでも相当時間が足りないのではないかと言う懸念に見舞われていたのに、それよりも被害表現が早い樹木を前に、つい弱音がこぼれそうになってしまった。

ジャンヌが斬撃を放ったり、アサが術の制御を取り戻そうと必死になったり、カンナが素手で時間凍結を解除できなかと試したり、誰もが激しく、空しく抵抗を続けてる。

そんな時だった。

『セントラル周辺、聞こえるか！
哭き鬼、いま援護するぞ！』

突如掛けられたインカム越しの声。

直後に響く大音声に、藍本人は南西エリアの海岸へと目を向け、思わずその現実を疑った。

「嘘……！」

前線に隠れていた伏兵部隊が、全員凍結から解放されて駆けつけ

てきたのだ。中央部を目指しながら時間凍結から解放し、それが出来ないＳＲは負傷者の救出や退路の確保に努めながら。

「ハッハッハッハァ！
感謝するぞ、オリヤアキ！」

「落ち着いて下さい隊長！　また固まっちゃいますよ！」

その方面から、ＳＲを無力化できるＳＲらが風に運ばれて一斉に樹木前線に辿り着く。

「だから彼女に教えたと言っただろう！
それで全てが解決する！」

「アレやアレが何かも分からないでホイホイ確信しちゃうからいつも酷い目に遭うんじゃないですか？　えぇ？」

「敢えて聞く耳持たんぞ、ケイノス君！
西南東エリアの全員に伝達！
海岸方面での作業を中断し、全て中央付近に集約せよ！
外側の安全は確保済みであるぞ！　繰り返す……！」

風使いの檄が飛ぶ。
中央近くで僅かに動く者たちの視線が、風使いの指した方角に向いた。中央で広範囲に影響する透明な球状凍結空間に対するかのように、皆の視線の先に映った半透明の黒球は、触れ合った瞬間、そ

の空間から時間凍結効果を破壊していった。
多く、誰にも理解できない凍結現象を、同じように、誰であろうと認められない死結現象が上回る。真黒な少女が発生させる“全てに等しき死”は、強大で絶大な攻撃さえも殺し切って見せる。

トキの名前を欲していた少女、オリヤアキ。
彼女の黒球が時間凍結さえも殺して見せたのだと理解し、藍はやっと眼前の援軍に信頼を覚えた。

それと同時に、アキの黒色球体の隣に対を成す、見覚えのある白色球体が出現した。

「全部動け！　クロスセプター！」
「トキは殺させない」

色世時の白が時間の流れを再開させ、織夜秋の黒が時間の束縛を破壊する。
そんな、

（フフッ、邪魔だな）

ノアの時間凍結から解放されていく世界を見下し、コントンは笑みを零した。
トキだけの為に生み出した凍結空間に招かれた招かれざる者達。
風に乗る者、凍結を受け付けぬ者、凍結を殺す者、自分の切り札に絡み付いてくる者。

目下優先排除すべきはトキと共に走る少女なのだが、すでに意識は思いついた遊びに変色しきっていた。足元の大樹は利用できる。

「来い“ライナーズフリーフォーム”」

数秒の変化を身につけ、コントンはカオスを創る。
最初にその変化に気付いたのは大樹の制御を取り戻そうとしていたアサであった。

「……根が、変化していく!?」

全くの不自然である。
アサの力によって本来発生しえない場所に根を張り、大樹と成ったそれは、ノアに制御を奪われ、更に何らかの力が加わって“螺旋回廊の塔”へと変化を遂げた。

（むっ……風向きが変わった？）
（螺旋式結界！）
（木に違う種類の魔力が流れた！）
（構造分解、いえ、線創りね）

中央から退避する者と中央へ向かう者。
風使いも、魔術師も、魔法使いも、それぞれ違う感性で同じ変化を悟った。外見からは何ら変化を窺えない大樹も、ＳＲというカテ

ゴリで括られた力の流れを感じ、或いは視覚として捉えることのできる者にとって、その変動は異常なレベルで行われていた。例えば、風使いのＳＲであるリデアからすれば、一瞬でカテゴリー５クラスのサイクロンを１０以上同時に発生させるだけの変動である。例えば、光をある程度手繰れるジャンヌにとって、樹木の変化に伴って流動した魔力量は、ボルト・パルダンの光刀無形ほどでないにしろ広範囲に強い影響力を及ぼしてしまうだけの衝撃力を有し、光撃を反らすことしか出来ないジャンヌにとって制御はおろか、手のつけようがそもそも出来ない変異であった。

「巨大樹の空洞には只の空気が流れているぞ！」

しかし、そんな強烈な異変を戦場の真っ只中で放った故に、神経を尖らせた者達に安全地帯を晒すことになる。

正確には“敢えて晒した”のであるが。

時間凍結を抜けても、ジャイアント・クロノセプターが解除されたわけでない現状、時間がないことに変わりはない。

「どうやって樹に取り付くんだ！」

集結するＳＲ達の中でトマホークアヌビスが叫ぶ。

対して複数の、火力に評定のあるＳＲらが実力行使と応えた。

『ぶち壊す！』

砲撃、打撃、斬撃、衝撃、その他魔法としか言いようがない諸々の攻撃。

四方から一斉に向けられた力に、大樹が激しく震動した。その震えを上方で待機していたコントンはその衝撃から下界の戦力を測った。

破壊力、歪曲、否定、あらゆる魔法と非現実が現実に風毀塔へ大穴を開ける。

幻想獣も、魔法使いも、使い手も、異端種も、挙（こぞ）って時間を削られ、1秒ごとに力を失っている。

「行けぇ！」
「行くぞ！」

その中で抗い輝くモノたちにコントンは感動を覚えた。

アヌビスと風使いが同時に叫ぶ。

突破口を難もなく開けるのは今しかない。時間の経過は許されない。かといって、止まることもできない。

「我々の手で決着を焼きつけるのです！」
「お姉ちゃん、これ気持ち悪い……」

会長をテレポーターに任せ、ジャンヌも立ち上がる。

ボルトも同様、不快極まる時間分解空間に晒され、目に見えない

レベルで勝手に人の体を分解するジャイアント・クロノセプターが気に食わない。
新たな根によって開いた４つの穴を塞がれそうになり、縮小した穴を拡張せんと新たな攻撃が飛来する。

「吹っ飛ばすぞ、理解霜円破界（りかいそうえんはかい）！」

粒子状にて、体内に溶けてしまった金棒（だったモノ）を具現化させたカンナが流変動する根を殴り壊す。四方に開く魔口に飛び込み、上へと視線を投げると、長い螺旋階段の果てにオレンジ色の空が見えた。

（空の色がおかしい！）

日の上がった太平洋の、青空がのぞき始めた時間である。
本来あった青が、螺旋の天頂に佇むは完全な夕焼けのオレンジに侵食されていた。

（横……四凶艦隊が反転している！）

誰もが螺旋の巨大オブジェに意を引かれている間、ジャンヌは踵を返して中央塔から離れ、視線を海へと向ける。
予想通り反転して攻撃を再開している四凶軍。

（外から時間凍結領域に入ってきた場合は、普通に動くことができるようね）

喧騒を片耳で捉えつつ、戻って来た強敵群を観察し、予備の通信機を立ち上げる。動ける者、対応できる者は四凶軍にも備えよ。それだけを伝えて自らは四凶軍へと拡散斬撃を放つ。

螺旋階段を上り始めていた者たちも気付く。

螺旋回廊に気を取られ過ぎていた。いつの間にか反転して来ている四凶軍を止めんとしているのがジャンヌと前線の僅かな生き残りのみ。

トキを助けるか、ジャンヌを助けるか。

「援護するぞ、シキヨトキ！」

「お供しますよ隊長！」

螺旋回廊を風に乗って走る魔法使い二人に続き、

「スミレ見っけ！　行くぞ！」

「はい、トキさんを助けましょう！」

鬼が、

「僕の術を乗っ取りやがって……！」

加速を与える。
４体の鬼が、先頭を行くトキへと渡す力は各々違った。

「トキ！」

凍結した時間世界をタイムリーダーで広げた低速世界のトンネルを突き進む。
音もろくに響かない空間で、トキが藍の呼びかけに気付いたのは時間を共有したが故だ。
反時計回りの螺旋回廊をすでに何周分も先に進んでいた時の足元に、一つ強力な武器が止まった。

（せいし、けいてい？）

クロスセプターで藍にクロノセプターの情報を教えた時に、交差するよう流れ込んできた情報からその名を口にしようとした。
生と死を繋げ綴る武装。
使用する者の命さえ左右してしまうほど反動の強烈な武装故に、持てる者が限られてくる得物であり、しかし、使いこなせば斬れないモノなど有り得ない一級武装という協会の太鼓判つきの日本刀。
いまの自分に使えるのか、疑問はそこにある。

しかし、カチンと頭に響いた音に思考は瞬時に切り替わった。
吹き抜けに差し込むオレンジ色だけが光源の木造螺旋回廊、その

壁から人の形をした木目の何かが、同じく木目の長槍を手に進路を防ぐよう歩み出た。

「おいアレ、ＤＦＦ（ドールズ　フリー　フォーム）じゃねぇか！」

叫んだカンナが、真横から出現した木目（ドールズ）の頭部を殴り壊す。

ドールズ・フリーフォームの名に、トキは市街地で戦った自分の姿をした敵を思い出しつつ疑問にぶつかった。アレがまたしてもここに来たのか、しかも大勢、ドールズとは同類がこれだけいるのか、と。

「……なワケあるか！

ベルベット・ドライバーはバッチリハッキリ首落としたんだぞ！」

タイムリーダー、真横のドールズへ生死繋綴の突きを見舞い、背後で槍を頭上に構えたドールを蹴って前進し、前方に立ちふさがった二対へ畏天と生死繋綴の斬撃を繰り出す。

水風船でも切り裂くかのような、そんな不思議な有るか無しかの奇妙な手応え。

（浅い、はずなのに効果が強い……！？）

ベルベット・ドライバー。

その名に別人であるという可能性を見出してトキは前進する。疑

問を打ち砕いてくれたのはベルベット・ドライバーという名前、それから生死繋綴である。刃が触れた瞬間に木目のそいつらは電池でも抜かれたかのように動きを止めてオブジェと化した。同じく時間を奪うこと、止めることでドールを無力化する畏天とは全く異なる力に、便利さと不思議さ両方の感を抱いた。

生死繋綴。生ける者に死を、死せる者に生を、動に静を、静に動を。反転を意思で自由自在に繰り出せるこの装備は、壁から出て来たドール達を止めるにこれ以上ないほどに相性が良い。

夕焼けの空を目指してトキは走る。

その後ろに続く者たちの多くは、壁から出現したドールズに思いの外苦戦していた。

ドールは全員が共通して同じ身長と重量であり、装備まで統一されていながら、戦闘に関するスペックは個性を持っていた。それが連携して襲いかかり、チーム戦に慣れていない協会ナイトメア連合の進行を阻んでいたのだ。

（頭を潰しても止まらない！）

スミレは片手の生死繋綴で数体を無力化しながら、もう一方に握った理壊奏淵破界でドール達の槍を受け流す。顔面と胴体への直突きを躱し、槍ごと打ち砕き、横薙ぎを振り下ろしで圧し折る。生死繋綴で切ったドールは止まるが、理壊奏淵破界の打撃では怯ませるのが限界だった。

同じように、

「うーん、困ったなー」

「隊長、こいつらってどうやって止まるんですか！？」
「銃が効かないぞ！」
「いいから避けて進め！」

銀色仮面の魔術師も（棒読み）、空間の魔法使いも（冷や汗）、防衛隊員も（狼狽）、アヌビスも（苛々）、ドールの対応に困っていた。

壁を形成される前に進みたいアヌビスが首なり腕なり脚なりを殴り飛ばし斬り落とし打ち砕き、急所と言う急所を突いて回るがそれでもドール達は止まらない。むしろ、五体に欠損を抱いてさえ攻撃速度が落ちないドールの厄介さに気付き、攻め方に悩む防衛隊員たちが気力で押され始める。

機動力を奪われる者や武器を奪われる者、最悪命を奪われる者が出た、その瞬間、

「ＳＲの力の流れが見える奴！
よく聞け、こいつらの背中かどっかに“力の糸”が見えたら、それを断て！
それが“ベルベット・ドライバーのＤＦＦ”だ！
糸を切っちまえば人形は動かねぇ！」

鬼は叫んだ。ドールの頭を握りつぶしながら。

「ほぅ……よかろう、ケイノス君！
これがベルベット・ドライバーのものと分かれば対応策はある！」

風使いはドールズを殴りつけながら（涙目になりながら）、術文を唱えて風を生み出す。

「身体の何処かにある受信機を曝け出そう！
“淑女の恥じらいを摘む風を不規則の第二命波に、肌を指す視線の圧化象限に導呼鳴運の時を酌んで漕ぎ着け、曝風（ばくふう）、轟け！”」

魔法風が、ドールの“フィルター／スカート”をめくり上げる。
共通する視線の構築の難しさを知っている者達は、魔法使いリデアが施した風の効力に目を見張った。それまで見えなかったモノが壁から伸びているのがハッキリと見えた。

（……これが鬼の言っていた糸か！？）
（もう一種類いる！　糸と刻印、これでこいつらは動いていたのわけね！）

「そこが見えりゃどうってこたねぇ！」

アヌビス・カイザーナックルがドールを殴り飛ばして消滅させる。
動きを止めるスイッチ或いは、動作因糸さえ視認できれば反撃の口を見つけるに手間はかからない。

「糸の人形は任せろ！」

ナックルを先頭にアヌビス達が続き、塞がれかけていた進路に突破口を開く。
ファランクスを抜けてトキを追う者達へ、刻印のドールが矛先を向ける。側面と背後から襲いかかる槍の切っ先を、

「だぁらぁあ！」

鬼の拳が打ち砕き、金棒がへし折り、流し、兎に角三体の哭き鬼が刻印ドールの攻撃を防いだ。そこへ更に奇銃を新たに装備した防衛部隊が近接援護射撃を見舞う。

「トップ、ゴー！」
「了解！」

隙無き連携で素早くドールの死角を取り、刻印へと魔弾を叩き込む。木目の肉体から刻印を撃ち抜いて魔力を腐退させ、槍を持ったドールズが文字通りの木偶人形へと化ける。

「次が来たぞ！」

第二波のドールズが今度は足元から奇襲を仕掛けてくる。
下半身への刺突斬撃を躱せない者が多く、先頭を行く者から狙われた為に再び進行が止まる。

「止まるんじゃねぇ、テメェら！」

真っ先に、最初に集中砲火を浴びたアヌビスが叫ぶ。

止まれば余計に時間と労力を支払わなければいけないが、それはこの場に在って差し出してはいけない代価だ。頭上にいる敵は四凶で、そこに辿り着けないことはすなわち戦争の敗北を意味する。また、辿りつけたところでコントンに対抗できるのはトキのみ。彼を護りきってコントンにぶつかってもらう事こそ協会ナイトメア連合の最善であり、それが戦争への勝利へと繋がっていくのだ。本望にはほど遠いが。

屍を越える気概で進む。

護るはトキ。

倒すはコントンでなく、コントンの放つ尖兵達。

無感情に振われる槍を避け、止め、砕き、道を開く。追いついてすらいないトキへと援護の手を差し伸べる為に。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第６２話－

－Ｓａｖｅ／Ｏｕｔ－

「……」

巨大な塔を駆け昇る者達。
その根元で、四凶軍が尖兵として放ったゾンビの殺到を防ぐ者達。
どちらが大事か、という思考よりも以前に、何故自分の覚醒を誰も促してくれないのか、という疑問に光の魔女は腹を立てていた。
起こしてくれた藍のコピー体に八つ当たりで閃光目潰しを食らわせつつ、戦場の現状を出来るだけ温情な心構えで臨場し、激情に近い起伏の感情を鎮める。それが達成された頃には、徐々に崩壊していく状況の逼迫状態に理解が追いついた。

（トキのクロノセプターみたいなのがあるんだ）

南部海岸。
防衛海岸と埠頭の狭間にゆっくりと着陸し、樹の塔とノアを見上げた。

ノアとは本来、この戦場で協会が切り札として温存しておくべき兵器ではなかったのか。あれはひとつの大きな“鐘”である。この世の終わりを呼ぶことも出来るし、新たな命の生誕を祝福することもでき、おおよそこの世界の事象現象の万理を叶え、或いは超えることができると言える鐘なのだ。それが今は本能に忠実な者の手によって、本来人が触れるべきでない鐘の舌がノアに共鳴をもたらし、渾沌の音色を大きく響かせようとしている。

それはそれで気に食わない。

「焼き落そうかな～？」

内容こそ殺伐としたボルトの言葉は嬉々としたその表情と相まって、偶然真横を通り掛かった味方に戦慄を思わせた。実際の所、協会に残された歴史を紐解いても、ボルト・パルダンと言う魔女は破壊の象徴でもあるかのように記録されているし、その記録通りの魔女がこの戦場に復活しかけているのも事実でもあった。ノアが視界に飛び込むまでは。

自分の年齢、始点を忘却するほどに長生きしてきたボルトだが、ノアほど脅威を感じ取れた存在は協会長以外に久しくない。光撃が通じない、逆に掴みきれない敵の力に死の予感を催されることなど、本当に指折り数えられるほどしかなく、ノアはその内の一本に入るだけの力を秘めた存在だ。焼き落す以上の光撃を以て挑まなければ逆に撃ち落とされる可能性だってあるのだ。

（トキ達は下からノアを目指すか……藍ちゃんも）

右手で空中に円を画きながら視線を周囲に配る。探していた姉は、早くもノアを止めるため自らに課した制限暗殻を解除していた。いつの間にか東部海岸の上空まで移動し、一切の妨害を受けることなく自らの体内に張り巡らせた結界紋様を消すディマ。ボルトは彼女へ、自分の意思を乗せた一条の光を差し込んだ。

（お姉ちゃん、私のリミッターも解いてくれない？）

（いいわよ）

その即答にボルトの思考はひび割れた。

ディマの反対を予想し、未来視までしていたのに、返って来た言葉はまるっきり正反対の響きである。用意していた『戦況を援ける……』から始まる反論も、チャージしていた艦隊を瞬時に焼き払えるだけの魔力循環も、多くが無駄な心配となってしまったことが妙に悲しかった。

が、これは本来自分の望み。

幻想と避けていた最短経路。

全てのリミッターを外されるということ。

『ボルト……四凶軍は私が止める。あなたはトキを助けなさい』

「いいけど、本当に外しちゃっていいの？　私の――」

最も世界を荒らして回った頃のフルパワー。それを封じ込めている、自分の四凶を“渾沌”たらしめている魔術を。

『会長の許可は予め得ています』
「え？　そうなの？」

ディマの魔法：闇文が、言葉と映像としてボルトの頭へと伝う。
会長への許可を促した人物が脳裏にチラつく。ナイトメア非武装派の特別顧問であり、実行部隊のリーダーであったマスター・ピースを四肢とするなら非武装派の頭脳はその人物であった。

「……って、テスタメントも介入していたんだ」
『言い訳は“未来予知の提供”だったそうよ。けど、今回ばかりは素直に受け取っておきましょう』

愚痴を零しながらも、いつの間にか自分の中で溶け始めていた制限紋様の消失を感じ取って、ボルトは笑みを零して光を集め始めた。
トキの援護に必要なモノ、それは光撃支援ではない。

「巡行――大声迎蒼、匐土帰暁、白削回刻、鳴静夜騎」

単純なシステムの復活。
数で圧されている協会の、減った分を元に戻す。それこそが最大の支援となる。

「差点輪鐘――緩境、亡烙、源煉、邨復」

数世紀ぶりに描く魔法陣は妙に違和感を覚えた。例えば、何年も鉛筆を握らなかった者が、何らかの機会で用具を手にし、自ら刻んだ流線止跳を見た時に覚える違和感に似ていた。自分の字はこんなものだったかと。

自分の力とはこんなものだったか、と。

「生塵色、捌雅牢――理斯功、弦命振」

白く発光する双円陣の中に三層、３２本の楔と２３の斑点、３３の区切りと２２の十字の輝き。

光の線が描く魔法は生命循環。但し、それは自然の摂理さえ吹き飛ばす超常現象である。

これまで破壊を繰り返してきたボルトに、本来の感触を確かめる術は実際に発動させてみる以外に方法がなかった。例え成功の保障がない魔法であろうとも。

そもそも中断する気など毛頭無いわけで、どんな結果を招こうと責任を取る自信がそもそもとしてあるのだから。

「与全之生源司光是叫。起立混沌下駆返、残光之限全尽切前戦動丹持」

だから、その術を使ったことをこの戦場の仲間であろう全員へ伝えた。

「みんな～、死んだ人全部生き返らせたよ～」

まず真っ先に、ボルトの報告に――四凶軍の手駒も全部生き返らせたよ（↑続報）――ブチ切れたのはアヌビス達であった。

「死魂復活だと……！」
「ボルト、てめぇ！！」
「また反理と犯すか！」
「重罪、死罪！」

「だからテメェら！
敵はそっちじゃねぇし、ダル忙しいのに枚数不利つくんじゃねぇ！」
「枚数はどのみち不利だ！
それは兎も角、刃向かって敵うはずもないボルトに向かっていくな！」
「トキに追いついてすらいないのに……足を止めてる場合じゃないでしょうが！」

内輪揉めするアヌビスの言葉通り、援護に回っているつもりの者達はトキの進む破壊標を辿るばかりというのが現状だった。
コントンとノアへの道を切り開く、そのつもりが逆に助けられて塔の中をただただ突き進み、トキへと追いすがろうとするばかり。
そうこうしている間にトキは螺旋階段の中腹ほどにまで近付いていた。皆がまだ3分、早い者でも4分に到達したばかりだというのに。
“早過ぎる！”
誰もがトキに、喜怒哀楽の程はあるが同じ感想を抱いていた。周

りが見えていない証拠でもあり、同時に色世時が協会長を始めとした多くのＳＲから注目を集めている理由を見出していた。が、

（トキ、そのペースではコントンに辿り着けても！）

藍には分かることがあった。芹真事務所屋上での訓練を見守って来た彼女の目には、トキが過去見せたことのないペースで戦って、そのペース相応に疲れ、視野が狭まり、行動の一つ一つに不安要素が現れ始めたのだ。その疲労がまるで自分のものであるかのように分かってしまう。それだけの消耗を、疲労を時間回復で補っているとはいえ、精神的余裕を完全に失っていることが見て取れた。

事務所の誰よりも体力がないトキが、協会ＳＲの誰よりも早くノアに辿り着くことは現実に可能だろう。だが、本題であるその後のことをまるで考慮していない。

「止まって、トキ！」

『色世時、突っ込み過ぎです！　自重して下さい！』

藍に続いてジャンヌの怒声がインカムを越して響く。

その忠告に、

「分――いや、先行する！」

警告の意図がなんとなく分かる。

トキは命令無視して螺旋階段を進む。
連携が取れていない、援護を無為にしている、信頼を自らの手で斬り捨てている。余計な損耗をしている。
分かっている。コントンと戦うなら万全を以て挑まなければいけないことも。
だが、コントンとの個人的な関係のせいで自分を助けようとしている者たちが傷つくかもしれない現実が恐い。

「それは違うよ、色世時」
「・・・・・・！？」

しかし……今は逆様のまま螺旋階段を全力疾走する（しかもタイムリーダーによる加速を得た状態で）こちらの左側面を並走浮遊する、銀色魔術師の笑みがあまりにも不気味で怖い。

「君が恐れているのは“責任と後悔”だ」

訓練期間中に、空中浮遊じみたことをする相手を見ていなければ絶対にリアクションしていただろう光景を真横に走り続ける。
少なくとも、ヒラリー・マトンと名乗っていた男は味方として戦ってくれている。彼が無数に投げ放つナイフは無駄なくドールの急所へと突き刺さり、無駄なく活路開拓に貢献していた。が、やはり無音で真横を並走される威圧感は拭いきれない不安のような、プレッシャーのようなものがある。特に一定距離で固定された注目など。

（……集中、集中！）

只管走る。

それしかない状況なのだが、

「君の母もそうだったな。止まることのない、マグロでさえ真っ青の突進突撃主義者。まさか、君もその類か、トキ？」

銀色魔術師がさりげなく作ってくれる余裕の所為で、高めていた集中力は瓦解しかけていた。どこか根底から戦意を削がれるような雰囲気を、ヒラリー・マトンというＳＲは醸し出している。

「あ、そうだ。君は高校が終わったらどうするつもりだい？」

「……」

掴めない男は、更に意図が掴めないような質問を繰り出してきた。あたかも自分の担任でもあるかのような、戦場には似つかわしくない台詞を。

返答はしない。

「――真面目な話をしよう。

トキ、君は今日までコントンという強大な敵を倒す為だけに頑張ってきたよね？

今日ここで決着を望み、過去との因縁禁忌を断ち、全ての負刻を

拭えたとしよう。それからの君はどこに在る？」

「……」

返答できない。

舌を噛んでもおかしくない運動をしながら、まして考え事をしながら戦えるほど器用ではない。倒し慣れたゲームの敵とは違い、常に異なった動きをする現実の敵にパターン攻撃など存在しないのだから、余裕など見つける余地がない。確実に倒し、確実に躱す為には眼前の事態に集中するしかない。

故に返答できない、というわけではない。即答を持ち合わせていないからしないだけだ。

「コントンを倒した後、君の未来は明るいのかな？
今まで通りの生活が約束されるものかな？」

「……くッ！」

低速世界の終了と共に脇腹を掠める槍斧の刺突。

両手の得物で武装解除と能力解除を同時に行い、一呼吸おいてタイムリーダーを再展開する。油断していれば余計なダメージを負ってしまう。

「この戦いが終わったら、芹真事務所にも別れを告げるかい？」

「すいませんが黙っててください！」

動は援護のはずなのに、言は嫌らしくも目的を揺るがす阻害の響きであった。しかし、ヒラリー・マトンの口は止まらずに疑問を吐き続け、謎を重ね掛けた。

「黙れるワケないだろう。この戦争のコントンの目的とキュウキの目的、両方に君の名が連なっている。私は知っているが、肝心なのは今現在この螺旋階段もどきの樹塔を上り続けている色世時という存在が、二人の四凶の思い描いたシナリオの中を走っているというのだぞ？」

ぴたりと止まる。

トキの展開した白色半球がドールズ達の時間を凍結するのと同時に、思考に凍結どころではない目的が何処かに吹き飛んで消えるほどの衝撃が走った。

「四凶のシナリオ？」

なぜ魔術師がそんなことを知っているのか、という疑問さえ浮かばないくらい動揺しているトキに、ヒラリー・マトンは告げた。

「そのシナリオから抜ける為にも、いま少しここで休んで“生き／行き”てみてはどうか、トキ君？」

「止ま……そうすることで、そのコントン達のシナリオってのは変

わるんですか？」
「いくらでも変えられるよ」
「ここで止まる……」
タイムリーダーを掛けて悔しさ噛み締め、ゆっくりと後ろを振り返る。ジャイアント・クロノセプターに包まれていながらもなんとか対応できる自分はまだしも、一方的に時間分解されていく他人を見ることが怖い。
クロノセプターという力の結末を知っているからこそ余計に直視したくない現実がある。あるだろう、しかし、それが勝手な思い込みだったと気付いたのは辛うじて後ろに追い付いてきた藍の、ＳＲを解放した姿を目撃してからだった。
「トキの突進力は凄いね。
マジシャンの僕も追いつくのがやっとだよ♪
でも、生きる為に必死で君を護ろうとする彼らの厚意を無為にするのはよくないと思うんだが」
目撃し、言われて、やっと自分が大勢に支えられていたことを思い出して、トキは止まない震えに襲われた。
「秘龍ノア、あれに到着するまでは大人しく護衛されていた方がいい。最初のルートブレイキングは外（たにん）が行い、外れたルートを内（きみ）が意思で綴っていけば器（シナリオ）を変えることはできる」

「……四凶のシナリオって、どうして俺がそのシナリオの中を動いているって分かるんです？」

「セーブポイントがあったからね」

ふとした些細な言葉、しかし聞き慣れた安全地帯の万名にトキは震えを忘れるに到った。

「セーブポイント？」

「そう。キュウキのシナリオもコントンのシナリオも、線でなく点で繋がっているからね。

数珠（じゅず）って知っているかい？　二人のシナリオはまさしくそれみたいなものでね、数や大きさこそ違えど、二人とも目的が“四凶の系統確保”と“無秩序の回復”で変わりはないんだ。小さな差異はあるけどね」

四凶の系統確保？

無秩序の回復？

必死に冷静を取り戻そうとするトキに、仮面の位置を親指で正したヒラリー・マトンが教える。

「僕がそれを知っているのは単にマジシャンだからだ。

しかし、問題はそこじゃない。

二人の最終目的が既存のシステムを新たなモノに変えるという事ではなく、本来の原子地点に近かりし時代の再来を目指しているんだ」

「？？」

「う～ん、何て言うか、あ、この世界の“リセットボタン”を押そうとしていたんだ。

セーブポイントというのはだな、彼らの修正期間とも言い換えることが出来るんだよ。あまりにも長い間胸にしまっておいた計画らしいからね、どうしても発案した時には予測できなかった誤差が生じるものだよ。計画の成功率を高める為にも誤差の修正は必要で、一応協会のＳＲとして登録されている彼らは潜入工作員のように事を荒立てないよう大人しく大人しく、大人ぁ～しくして活動再開の時期を見計らったり、準備を進めたりしていたんだ。

あ、因みに僕はこの戦争もある程度予測できたんだ☆」

種も仕掛けもなしに宙づりになっていたヒラリー・マトンがあらゆる物理法則を敵に回しつつ１８０度回転し、空中から螺旋階段へと移り来る。

「彼らは何が気に入らなくてこの世界を変えるのか？　何を証明したくてルートを探すのか？

君に心当たりはあるかい、色世トキ君。自覚もないまま一大事件の中心にいる君にはこの質問が必要だろう。

“彼らの気に障ることをしたか？　或いは何かを君が持っているのか？”」

「いや……あ、ノアの破片――」

母親から託された貴重品とも言えるソレを取り出そうとしたが、ヒラリー・マトンはそれを制止した。

「それは目的への手段だ」

そしてヒラリー・マトンの言葉に、得意とする背回と鋼の得物を手に“四凶”は答えた。

「御名答。俺の手段さ、そして死ね」

「……っ、危な！」

気付けば魔術師の右側頭部に銃口が押しつけられていた。トキが行った魔術師を護る為に必要な対処は殆ど同時である。引き金が引かれ、弾がバレルを通過する最中に右手のクロノセプターで銃身ごと時間分解する。

「コントン……何処から！」

銃弾が銀色の仮面を砕く。

反れた弾道を躱そうとしたマトンは、運悪くも自らの急所を弾道上に晒した。

「四凶は上から来たぞ、トキ」
「とっとと死ね、マジシャンが！」

トキの左右で二人のＳＲが交戦を認める。
デザートイーグルの銃口が向くのと、マトンの擦り合わせた手の間から無数のトランプが飛散乱舞するのと同時だった。遅れたことに気付きながらトキもそこへ混じる。

（いま確かにコントンの銃を破壊したはず……！）

これまでの訓練を思い出しながらも、それでも掴みきれない強敵の異常事態に寒気が止まらない。それはコントンだけでなく、確かに銀色仮面の下から流血し、額を撃ち抜かれたにも関わらず余裕綽々の身構えでコントンと対峙するヒラリー・マトンにも言えた。

「盛大に上がった幕の前で客に帰れと言う君は、本当に人間としてどうかしている……！」

銀色仮面の下の仮面の最下から覗く眼光がコントンを射抜く。
トキと同じく不気味さを抱かずにいられない魔術師は脅威だが、手のうちの切り札を思い出せば気味の悪さもたちまち消えてなくなる。

「Ｏｎｅｓｓａ，ｄａｗｎ　ｇａｒｄｅｎ」

コントンが笑みを思い出すのと同時に、トキの視界からヒラリー・マトンが消える。

「え――！？」

「Ｔｗｅｌｌａ，ｍｏｒｎｉｎｇ　ｂｒｅｅｚｅ」

また、何かが起こった。

まるで枯れ枝を折るかのような音と共に、世界が多色に塗り替えられていく。

暗色木目の螺旋階段は極災色の歪曲階段へと変化を遂げ、血潮の混風は掻き消えてひたすら息苦しいな無臭空間へと退行し、脳を激しく叩いていた無数の騒音は意識してみれば全てが死んでいた。

「Ｓｕｈｓｅｒ，ｄａｙｌｉｇｈｔ　ｔｒｉｐ」

トキは直感した。

これはコントンの攻撃だ。そして、始まっているその攻撃を回避できた者はいない。

直感を援けているものは経験、それから対策の為頭に叩き込んでおいた知識である。

（これは、イマル・リーゼの夢層と同じだ！）

「Ｆｏｗｕｚ――」

思い出すは夢層の戦い。
幾層にも差別化された夢と言う名の“高層ビル／結界”の中に閉じ込められているわけだ。

「――Ｎｉｇｈｔｍａｒｅ　Ｃｉｔｙ」

しかし、決定的な違いがあった。

第６３話－ミーナ－（前書き）

※今回の注意事項※
・Ｔｈｅ堂々脱線
・目標が一万文字以内の為、短め

手抜きとかじゃないんです。前々からやりたかっただけなんです。
はい……

第６３話－ミーナ－

「薄い？」

コントンが消えて１秒後だった。
何らかの攻撃を終えた四凶が展開した世界は、色と輪郭にテレビの砂嵐が掛かったかのような光景であり、しかし、全神経をフル稼働させてもコントンが攻撃を仕掛けてくる気配がない。視線を左右へ、周囲をぐるりと見回しても色世時という人間以外誰も見当たらない。

（取り残された？　精神攻撃ってやつか？）

自分より下の階へと視線を移す、無人。
螺旋を見つめても、無人。
しかし、トキの耳は足音をひとつ、拾って有人の証拠を探さんと模索を続けさせた。

（何処かに誰か居るけど、一体何処だ！？）

螺旋階段に木霊する足音は上下左右から反響してきている。
もしかすれば、同時に歩を刻んでいるだけで複数の敵が存在するのではないだろうか。そんな予感が頭をよぎった時だった。

「　」

冷たいモノが、冷気を放つ何かが背後から首筋に近付いてくるのを悪寒した。

「――うっ！」

それは火照り始めた体へ凍る直前まで冷やした物を当てた時の感覚に似ていた。背中に走る鋭い感覚が、身体へのダメージを予感させる。

極めて危険、避けろ。

武装切り替え。持ち柄分解、素手解放。

振り返りざまに、右手のクロノセプター掌底で向かい来る鋭利を殴る。

（あれ！？）

敵が居ない。

同時に、クロノセプターで分解できなかった、軽量剣だけが殴り上げられて宙を舞う。見覚えのないその形状は明らかに他人の物であり、自分以外の生命を証明する決定因子となっていた。

「弱い……」

女性の声、再び背後。

まるでコントンのような仕掛け方をしてくる敵の強大さを理解した。

常識的時間を抜けて行動するコントンのような能力者が、まだ四凶の軍勢にいたという事も驚きだ。

頭部に付きつけられた銃口と続く銃撃（スリーバースト）を躱し、その最中に気付く。

（こ……双剣！？）

先程殴り飛ばしたのと全く同じ形の剣が、軸足とした左足の甲を貫き、地面と縛り付けられている。

痛みに気付くと同時、銃撃の主は再び視界の外へ移った。

辛うじて服の裾だけを目撃することだけに成功する。

（右――いや！）

瞬時に左側の視界へと防御の腕を回し、銃撃と斬撃を防ぐ。

右腕の肘から先を切り飛ばされ、心臓への銃弾を反らした骨は砕かれ、脇を掠めた弾丸が皮膚と肉体に裂け目を入れる。

それだけで思い知らされることがあった。

（コントンより、少し早い！）

驚異的な速度で繰り出される、あえて急所を狙わない攻撃。
最初から首を刎ね飛ばすつもりでくるわけでもない敵の真意も気になるが、それよりも姿を見せようとしないことの方が気になった。
敵は誰だ、どんな姿をしている、武器や姿を見せてはいけない理由でもあるというのか。

次弾は背中、左掌に銃創を受けて直撃を避ける。
同時に聞こえた不思議なソレを、攻撃よりも優先して意識は拾う。

（……っ、数字！？）

振り返ると首筋に銀色の得物が当てられているのと、それを構えた攻撃の主である銀髪黒衣の女性が景色のあらゆる要素を吹き飛ばすほどの存在感を放ちながら視界に飛び込んできた。

（棍棒！）

対峙する彼女が前進すると思っていたトキだが、眼前で後退を始めたことに“長柄”を握った彼女の腕が引くことに、その武器が棍棒や槍の類ではないという事実に気付いた。
あれは刺突の武器ではない！

「止まれ！」

ほんの一瞬の空白を作って屈み、停止世界に介入してきた彼女の斬撃を紙一重で躱す。
頭上を通過したそれは、大鎌。

「なっ……！」

厳密には大鎌だったもので、たった今、トキの眼前でその得物は先に弾いた軽量剣が２本へとすり変わる。急接近からの一歩後退、そして再び近接と、相手の進離の速度にペースを失う。そんな自分を自覚しているからこそ、本命のコントンですらないこの女性に負けることが悔しく、そのまま延長線上にある敗北が輪郭を得るほどに見えてしまったからこそ、あらゆる汗を隠せない。

「くぅ！」

肘から先が軽くなった右腕で斬撃を防ぐ。しかし、即効力のある右腕を失ってろくな防御も叶わず、精一杯弾くように斬撃軌道を反らせた所で、三度踏み込んだ彼女の掌がバランスを失ったトキの体へと正確に伸びる。
身動きを封じる、そう思ったトキの思考を比喩なき電撃が走り抜き、必死の回転を妨害した。一瞬感じた喉への衝撃、それを圧倒的に上回って全身を駆け巡る無に近い刹那の感覚。それが電撃による攻撃だと気付けたのはすぐだった。それも、彼女のＳＲなのだろうと理解したのもほぼ同時。

問題は、その電撃を二回食らってしまったことだ。一撃目は呼吸器官の収束個所破壊のために喉、そして視界の直接破壊の為に顔面へと二撃目が続いたのだ。

「ぐあぁッ！」

それまで辛うじて耐えて来た右腕切断面の痛みに声が漏れる。

三撃目の電光が流血を焦がすほどの出力で断面に押しつけられた。クロノセプターで誤魔化してきたダメージも、即効性の望めない左腕だけではリカバリーしきれない。

暗闇の中で、悪あがきと分かっていながらも彼女から距離を取らなければと飛ぶ。

螺旋回廊を下へ、斜面を後ろへ。身を、受け身のことなど一切考えずに投げ出したが、それでも次なるダメージが体に刻まれる。

「ハッ……ぁ！」

着地は、視界を暗闇のまま地面に背中をワンバウンドさせてなんとか上下前後感覚を保ったままこなせた。が、膝をつくようにして体勢を保つトキの背後から鋭いモノが二本、感覚が完全に左右を取り戻す前に両肩を貫いた。

途切れそうになる意識が、涙に曇っているのかさえ分からない闇染めの視界で、意志の中枢へと訴えかける悔しさが――負けたくない、だが立ち上がることさえできない、力さえ失いかけている、何も見えなくなっている――あらゆる闇が、渾沌と渦巻いていた。ゴールになるべき敵が自分の頭上に控えていた。それを分かっていな

がら進めなくなる。

（こんな……チクショウ……）

分かっているからこそ、自分の生命がどれだけ危うい線上にあるのかを正確に把握できない、したくない。そう、只管悔しい。最後を前にして挫けたくない。努力を無駄にしたくない。決意が浪費だったという結末を受け入れたくない。

（こんな終わりって……！）

両脚にも激痛が走る。

慣れているという意味での違いはなくとも、両肩の痛みとは明らかに異なるその衝撃は銃弾によるものだった。

背後から膝を撃ち抜かれ、両肩は鋭い得物でもって地面に縫い付けられている。つまり四肢の自由を失ったという現実を、トキは押し寄せる証明（いたみ）とそれに反する意志のせめぎ合いの中、僅かながらも自らに迫った敗色を認めた。

「……」

静かな、起伏の無い声――いや、声じゃない何かが届く。

銀髪黒装束の女性から。

振動でも光でもない。

光の戻らぬ視線のまま顔を上げようとしたが、見えない女が突き付けた銃口に頭を抑えつけられる。

「お前……四凶……か？」

「……」

「違う？」

それは即答でも返答であり、

「　……　」

明確な異変でもあり、納得のし難い認識の変換要求でもあるようなないような響きで、

「あんた誰だ？　何が目的だ？」

通じない言葉に苛立ちが、圧倒的力量差に焦燥が、ただでさえ余裕を失った頭を冷静から遠ざけていった。

「あんたはッ――！」

天へと指差し女は動かなかった。
あまりにも突然過ぎ且つ理解できない行動に衝撃を受け、トキは思考を取り戻すだけの時間が空いたことに気付いた。そして、両目が見えないはずなのに、彼女が取った行動を理解できてしまうという摩訶不思議に。

（攻撃が……攻撃を止めているのか）

四肢を損傷して動けぬ的であるはずなのに、彼女は攻撃してこない。
1分あるかなしかの攻防で知った彼女の実力から測るに、この位置・姿勢の関係から彼女が反撃を一切受けることなく命を断つことは容易だろう。だが、それをしてこないのは、

「本気じゃないのか？」

聞いては見たが、回答は予想通りの静寂。ただ黙ってトキの前に立ち、冷たい瞳の奥に深く暗い闇を佇ませ、螺旋回廊を吹き抜ける昇風が繰り出す乱気に、それまで正確に掴めなかった長髪の銀色を泳がせている。僅かな変化と言えば、彼女が身につけている漆黒のコートが、一瞬だけ水色の波紋を見せ、肩口から先が分離して蛇のように彼女の腕を伝い、双手に収まる頃にはコートの一部だったものが今まさに両肩を貫いている双剣と同じ鋭利を象った。
しかし、彼女は攻めようとしない。

（どういう敵だ？
急所を的確に狙ったり、全く攻撃してこなかったり……通せんぼするつもりか？）

頭を垂らしたまま切創で汚れた左手を全力駆使して時間を集める。
この螺旋回廊は、異常と言えるほどの時間密度を秘めていた。一度のクロノセプターでオートバイの一台くらい余裕をもって作れるほどの、時間流動が。普段ならコップひとつが出来る程度のショートクロノセプターも、ここでは圧力鍋さえ創造できる。
それほど特濃な時間がこのステージ全体に流れているのだ。

（左腕、回復――）

最初に施す順序は、回復手段の完全確保と体を地面に縛り付けている剣の排除。

（右腕、再生＆……）

腕を切り飛ばされた時に落とした武器を拾う。
右手のクロノセプターと星黄、左手のクロスセプターと生死繋綴。

（筋力回復――！）

肩から取り除いた剣を黙って立ちはだかっているに投げ付ける。
二本も。
だが、物理法則に反して剣は何もないはずの空中で止まった。

（サイキック……彼女たちの世界で言う、コントローラーってやつか！　それもこの人、オールコントローラーとかいう類だな！）

手にした星黄を足元に突き立て、片膝ついて右手クロノセプターで武装時間を集める。
時間による加速をフェイクにでもしない限り突破できない。

（止まれ！）

トキの突撃とそれへの迎撃。その結果は、僅差で銀髪の彼女に軍配が上がる。
突き立てた星黄をすぐに持ち直してクラウチングスタートにも近い低姿勢から足元へ横薙ぎの斬撃を放つトキ。それを女は空中に留めていたトキの肩から返って来た二振りの軽量剣で阻害した。一本が剣筋を阻み、もう一本が刺突の為に顔面へと飛翔、危うくも頭部を反らすことで串刺しを免れる。
間は不味い。
それを悟ったトキは生死繋綴を、対抗の刺突で繰り出す。
奇襲は失敗に終わるが、そのおかげでトキは気付いた。今までの、訓練をも含めたあらゆる戦闘経歴の中で、眼前の銀髪無口ほど脅威だと感じた女性はいない。訓練の中で戦っていたからという理由も

ある。命のやり取りという意味ではこれまでと変わらないが、藍やボルト以上の脅威を隠せずにいるのは実戦と言う理由以外にもあるはずだった。

（敵……）

「　　」

声のような、振動も光もない意志が伝わってくる。

デッドオアアライブ。

短いそのメッセージが直接頭に響き、ふと気付いた。

トキの双剣と彼女の周囲を浮遊する双剣が激突する。それと同時にトキは彼女自身が手にした得物の射線から逃れながら、そのあまりにも冷めきった双眸を目撃する。

（まさか、この女性……！）

そう、髪の色さえ判別が難しいほど色の沈んだこの螺旋回廊の中、初めて覗いた彼女の瞳はあまりにも生気と言うものに欠いていた。まるで、

「お前……戦う気がないんだったらどけよ！！」

斬撃二つに銃撃が加わる。

弾道自体は見切れるが、問題は低速化を彼女自身が無力化できる

うえに、身につけている武装全ても彼女の能力の対象に入っているということ。つまり、弾丸は低速に捕まることなくトキの身体へと突き刺さっては貫いて行く。

「クロス、セプター！」

トキは、女の斬撃・銃撃両方からの防御を諦めて、唯一の身を差し出した。

右手で収集した全ての時間を回復に充て、コンマ1秒ごとに刻まれる銃痕と切創を高速で修復させ、痛みの信号を和らげることで、最短距離を辿り、名乗ることさえない彼女へと左腕を届けることに成功する。

（――興味がない）

（何だと!?）

時間を共有させるクロスセプター。

その力が最初に読み取った彼女の意志、彼女の気持ちが、無関心の一言だった。

この戦場にある勝敗や生死、世界の整調作用やバランスの重点、優先思想や意義など“全く異なる世界から来た彼女”には無意味なものでしかない。

（何者だ……！）

ストック時間で零距離から散弾銃の一撃を腹部へと叩き込む。
警鐘。
一瞬の間もなく、放たれた散弾は全て彼女の纏う漆黒のコートに弾かれて散った。

（死者に名乗る名前などない）

空中で独自に動いていた剣を一本手に取り、今度は拳銃：Ａｕｔｏ　９を空中へと放り投げる。
銃撃と斬撃が入れ替わる。
乱打が如き斬撃が、今度は銃撃に代わって乱射と成り、実に防ぎにくい角度からトキへ銃弾を送った。

脳天めがけて数発、辛うじて防ぐ。
内腿動脈、斬られた瞬間に高速再生。
右肩から右手に掛けた銃創、躱しきれないそれらを全て回復で賄う。
そうして、がら空きになった胴体へ次の攻撃が突きささった。

「がっ……！」

電撃と打撃。
間髪いれず同時に胸へ突き刺さったそれらは、物理衝撃の手応えは薄かったものの電気による衝撃は効果大であり、刹那の駆け引きが勝敗を分けるこの場で、全身への血液共有の要たる心臓の機能を

一時的にでも麻痺させたのだ。その影響がすぐに出る。眩暈と立ちくらみが一緒に襲いかかり、霞む視界情報のノイズを取り除かんと異常稼働する働く脳が、次弾に備えよという信号の発令に遅れる。

彼女の零距離射撃が膝を砕き、肘を貫き、内臓を滅多に穿つ。全身に隈なく刻まれる一方的攻防の証明に、どの痛みがどこから伝わってきたのかすら判別できないほど混乱していた。

「ここに」

正常を逸した意識が拾う彼女の言葉はあまりにも不可解だった。最初は、母が持ち逃げして隠した黒い破片の事かと思ったが、

「置いて行きなさい」

彼女が求めたモノはまるきり別にあった。

言いながらも大鎌を鉤爪へと変形させ、体を掬って投げ飛ばして見せる。

吹き抜けを飛び越す。ゆうに２０メートル以上は飛ばされていたと後から気付く。

諸々の感覚が戻る頃には――激突――自分の状況をよく理解できた。意識と呼吸の瞬間的遮断から隙を作られ、再び四肢を無力化され、得物と不可視の力のコラボレーションによって螺旋回廊の吹き抜けを飛び越え、限りなく岩石質に近い木目の壁に激突、冷温様々な破片を撒き散らしながら粉塵の中で途切れそうな意識を辛うじて繋ぎとめている。

殺される。

そう直感してしまった。

「あなたの」

そして、一飛びに吹き抜けを越えた彼女は眼前に立つや、

「死」

左掌を向けてきた。たったそれだけの動作で、ぼろ雑巾のように傷ついた四肢の首がセーブラインを無視して回り曲がる。

とどめは次だった。

音もなく鉤爪を大鎌に戻し、頭上に振りかぶってから心臓へとその切先を落とした。

「忘れるな」

何が痛いのか、何処が痛いのか。一度大きく痙攣してからというもの、感覚らしい感覚がつかめない。

壁と盛大な衝突を果たしてからというもの、痛覚までもが正常運転に戻っていた所為で新たな激痛に苛まれていた。彼女の声さえ半ば耳で拾えない程に。幸いだったのが、麻痺しきった痛覚が心臓への最も致命的な一撃を殆ど痛みとして伝えなかったことぐらいである。

「あなたは既に死人だった」

痛みが戻った次は寒さが認識できた。体内から温かい液体が零れていく時に伴う熱が、胸や背中を冷やして震えを促進させる。

冷た過ぎる刃が破った肉の壁を抜けて彼女の手元に戻る。朝の夕焼けの中に佇む彼女が、その一瞬だけ銀色を許された死神か何かのように見えた。

「これから戦う相手は強大か？」

「……」

意識が薄れていく。

重たい瞼が、鎮まる意識が。

こんな時でも頭の隅に浮かぶゲームオーバーのスペルが、自分の人種がどんなだったかを暗示しているような気がした。

「……そう」

このまま死ぬのだろう。

そう分かってしまったが故に、頷こうとしたがうまく伝えられた気がしない。

さっきまでは悔しいという感情もあった。

しかし、クロスセプターで彼女を知った今、圧倒的過ぎる戦闘力と覆しきれない経験差を見せつけられ叩きつけられてしまい、更に

は反撃も不可能と言う現状、残された選択肢は死を認めるしかない、その流れに従うしかない、終わりを受け入れるしかないのだ。

（無理ゲー過ぎる……）

「ならば、今のその感覚を最後と決めなさい」

敗北も引き分けも許されない敵を前に、冷たい手が背筋を這いあがってくる。

手足の感覚も痛みを忘れたかのように穏やかで、しかし眠っているかのように意識を汲んではくれない。

「アナタはここで“いつか来るべき死”を経験した」

そう、死ぬんだ。

人質同然と宣告されたクラスメイトをどうにか救わんと意気込み、母の守ろうとしたモノを貫かんとし、強くなる為に違う世界を生きる人々にまで助力してもらい、多くに支えられ、そしてそれをぶつけるために戦場へと乗り込んで来た。

「現実的に、これ以上の死はあるまい。創造はできるだろうが……」

目的に達していないのに首へと手を回している。ソレは心臓へと掛かり、理想を残したまま無念の刻印を捺し、零へと帰らんとする

肉体は熱に見放されていく。

（何の為に……今まで……）

この戦場に来てからも相当な危機を乗り越えて来た。
会長室でのコントン、続く織夜秋、ドールズ・フリーフォーム、木目の兵隊。

（その終わりが、これかよ……！）

途絶えかけ呼吸に、記憶が走馬燈の風に吹かれる。
僅かでも諦めで上塗りしていた悔しさが、途端に沸き上がる。
やはり、後悔せずにはいられない。
死ぬ瞬間にまで自分を押し殺せるほど器用な人間ではないし、そんなことをする理由も持ち合わせていない。

「時間と並び歩く少年――粗相ながらお前の死は、私が持っていこう」

彼女が何かを言っているけど聞き取れない。
きっと、主人公なんかにはなれない人間なんだろうと心底で思う。
頭が悪い上にかっこ悪い。
ゲームの為に引き篭もるし、現実も直視できない、やたら否定したがる軟弱者だ。

友達も少ないし、彼女もいない。入手方法だって分からない。そもそも関係性を億劫だと思うことだってある。

将来なりたいものでさえおぼろげだし、人間として建設的人格ではないと思う。

「――え？」

死ぬ間際にカッコいい台詞を残すこともできない。

「何だコレ？」

そもそも死ぬんだと思った瞬間に、何か知らんがステータスが完全回復している。そんな状況に付き纏われるているのが、現在の俺。色世時である。

「傷が、どうして……？」

断言できる、クロノセプターを使っていないと。

使いたくても、両腕両掌は目の前の彼女に潰されて発動できない。

ならば何故、突如として全身の傷が消えたのか。失った四肢まで、瞬きの間に元に戻っているし、武器も足元に揃っていた。何よりもハッキリとした違和感は、景色の中のノイズと白黒が完全に取り払われたことによって目撃された。

「だから立ちなさい。ここで支えを待ち、万全で臨むのよ。それが最善の作戦」

斬り飛ばされたはずの手を確認すると、まるで何事もなかったかのよう元通りになっていた。

痛みも残っていない、傷口さえ見つからない。

これは、彼女の仕業だろうか。

「あの……アンタは俺を殺さないのか？」

その質問への返答は無興味の一言。

少ししてから思い出す。彼女がこの世界の人間ですらないという情報が、クロスセプターで流れて来たことを。

上体を起こしたところで、手放していた武器を不可視の力で返される。受け取りつつ次の質問をかけた。

「……名前、教えてくれないか？」

大鎌が、彼女の漆黒のコートに溶けて消える。

「名前はない」

「いや、何かが見えた。

勝手で悪いかもしれないけど、あんたには名前が“あった”ハズだ」

武器を手に立ち上がり、改めて彼女の前に立つ。

自分よりも背が高く冷たい目をしてはいるが、どこか凛としたその顔立ちは、平和な時間と戦うことの虚しさを合わせて経験してきた齢を醸し出しつつ、戦火の真っ只中で誰よりも平穏を願っているかのような、どんな世界でも人間が関わっている以上戦争が絶えないという事実に直面した悲しさに、落胆の色をなんとか夕陽に隠していたような哀愁が見て取れた。

そう、見えなかったのは、無数の感情や記憶の奔流に流れ隠れた名前だけ。

彼女の経験してきた戦いも、喜怒哀楽も部分的に知ってしまったわけだが、肝心の名前だけは見つけられなかった。なぜなら、圧倒的矛盾の連鎖情報に押し潰された彼女、銀色の髪をした女性に流れる名前に関する時間は、戦慄を覚えるほどに大きな闇を抱えたままであったのだ。

しかし、

「あんたは、敵じゃない」

「味方でもない」

分かっている。

今のこれが“訓練”の一環であったことを解した。

決闘を目前にした、最終チェックかなにかであるということを。

「仲間を待ちなさい」

「あぁ、それまでにあんたの名前を教えてくれないかな？
頭が冷えたっていうか、ちょっと周りが見えていなかったっていうか……」

再度問うが、彼女は反らす。

「それよりも、味方のことを考えなさい。
先頭を走るあなたが後ろとの距離を開け過ぎるのは良くないことよ。分断されれば終わり」

言いながら彼女は頭上を指差す。コントンと、ノアがある頂上を。
視線を彼女に戻す。

「俺は色世時。あんたは“クリアスペース”の人だろ？」

「……」

握手を求めても彼女は反応しない。
感謝の意を込めて、真心からのありがとうを彼女の名前に乗せる為に差し出した手だが、そこに差し伸べられる熱は風の冷たさだけだった。

「あなたには無駄が多い」

「まぁ、はい。よく言われる」

「私の名前に気を取られるな。
頭上の敵と、階下の味方に気を配るべきよ」

「……分かってる。
だから、何て言うか、メリハリを付ける為にも、ありがとうって
言わせてくれ」

あなたの名前と共に。

「……」

「あ、もしかして名前に何かコンプ――」

彼女は名乗った。
ふとして遠慮に気付いたトキの配慮を、無碍にするかのように、
吹き飛ばすかのように。

「ミーナ」

「――レック……あ」

完全に間を外されたトキをよそに、銀色の髪を風に靡かせた漆黒
のコートに身を包んだ戦士は応える。

「元、第三特殊空師団：クリアスペース所属。
アタッカー“隊長”：ミーナ……アミナスキャル。
決して私の名を覚えるな。
一切の価値など無いのだからな」

「……はい、ありがとうございます」

瞼を落とし、彼女は踵を返す。

「負けてもいい。全力で立ち向かい、生き続けなさい」

逃げようとする自分に。
強大過ぎる敵に。
有り得ないとタカを括ってしまいたくなるような現実に。

トキが完全に時間を取り戻す時、ミーナは吹き抜けへと落ち、消えて行った。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

―第６３話―

―最終訓練：ＶＳ．ミーナ―

第６３話－ミーナ－（後書き）

見送りのつもりでミーナが降りて行った吹き抜けを覗くと、もう何処にも彼女の姿はなかった。
別の世界から来た住人。
今回が初めてではない。
これまで幾度か経験してきた。それも常に強者との遭遇を。

「死を置いて行け、か」

励まされたのだろうかという疑問を抱きながらも、落ち着いている自分に気付く。
もし、ミーナに遭遇する前の、戦場の熱に当てられた状態でコントンに挑んでいたらどうなっていただろうか。味方が足下に、周囲に沢山いるかと調子に乗って暴走のように走り続けていたら、最強の敵に足元を掬われなかっただろうか。
今なら分かる、気がする。

（俺は、戦争をしているのか）

だから彼女は現れた。
自分よりも明らかに戦争を知っていたミーナ。彼女のあまりにも冷めきった瞳が、おそらく感情の起伏も含め、何もかもが凍りついているのは戦争と言う異様な高熱にグリーンゾーンを見失い、ボー

ダーラインを崩され、常態を維持するべくあらゆる防衛概念がゲシュタルト崩壊を迎えておきながら、それでもなお現実という戦いを受け入れてしまったからである。
クロスセプターで見えたミーナの現実（かこ）はそれだった。

（ミーナさんは、戦う意志を強制された）

どこか、自分にも共通するものがある。おそらく彼女もそれを感じたのだろう。
クロスセプターでの時間操作は、相手と自分の時間を共有させることを骨頂とする。おそらく、伝わっているだろう。

（でも、俺は違う）

最初は強制に近い感じがあった。
自分が狙われていることを知り、でも芹真事務所と出会って憧れを持つようになった。強くなりたいと本気で願った。変われるかもしれないという予感に恵まれ、ちょっとだけ頑張ってみたら、嫌なことの方が圧倒的に多いけど、それでもちょっとだけだろうと報われた。
無駄にしてたまるか。

（俺は……）

生きて帰る。
日常を取り戻す。
まるで二次元媒体の帯に付いている煽りのようだが、つまるところそれが本題だ。
コントンに人質同然の見方をされているクラスメイトを助ける。
その為にコントンを討つ必要があるのだ。

「生きろって言うんだろ……さんざん死にまくっているのに」

以前ある呪術師に言われたことを思い出す。
例え独りであろうと生きてゆけ。
そうだ。生きてさえいれば、またどうにか頑張って何かをすることができる。
いまは独りじゃない。

（藍達は、下の木目に掴まっているのか！）

白黒剣と日本刀を握って軽く振り、階下を駆ける後続の援護に飛ぶ。
そこには仲間がいる。
引きこもりだとか、頭が幼いとか、日本語以外に喋れないとか、そういう概念に囚われずに援護してくれようとする人々が。

「止まれ！」

空中で叫ぶ。
木目の槍兵を斬り伏せると同時、眼帯をした魔法使いの周りを片付ける。

（あれ？）

ふと、この戦争とは全く関係の無い、些細な、しかし、振り返ってみれば恐ろしく重大な疑問にトキは気付いた。

（そう言えば……何で俺の言葉は、この人たちに通じるんだ？）

低速時間が解けると同時に、一度だけアイパッチしたアイルランド人魔法使いを見やる。

（……まぁ、後で考えよう）

時間が流れ始めると同時に、トキの出現は多くの味方に衝撃を与える。その合流は風毀之塔（フキノトウ）の半ばより若干上あたりでのことだった。

第６４話－Ｇａｒｄｅｎ　ｏｆ　Ｎｏａｈ－

（……いま、何か居たか？）

夕焼けの中でコントンは眼下の闇へと目を凝らしていた。
自分が招いていない何かがこの戦場にいたような気がした。が、しかし、確証もない不安に駆られている場合ではない。
目下、色世時の行動は実に興味深く、それら行動に伴う戦力は目を見張るばかりであった。ＳＲが言う分に違和感はあるものの“常識”では考えられない速度で成長を遂げている。約１年前に殺し、殺し損ねたと知り更に目覚めたと聞かされたのが半年前。その僅かな期間中にトキは、ただの学生ではなくなっていた。

（協会のブラックリストが頻繁に更新されるわけだ）

そう。
思い出してみれば芹真事務所と知り合った頃からトキは異様な地位にその名を連ねていた。自分の力を自覚さえしていないのに哭き鬼と同じＢクラスの注意人物として扱われ、一ヶ月が過ぎるかどうかという段階で既にＡクラスに重要監視対象として仲間入り。今に至っては最上級に名を連ねるほどの実力を備え、そして間違いない敵意を胸にここへ、自分に向かってきている。

（そんなに俺の命が欲しいか？
日常が恋しいか？）

嘲笑浮かべて下すが渾沌。
螺旋回廊へと新たな木偶人形を送り込む。四凶がイメージする障害を、秘龍に触れ続けている左手を介して具現を始める。
螺旋の吹き抜けに、翼を持った木目の短剣兵が舞い、回廊を駆ける者たちへと矢継ぎ早に襲いかかるが、あっという間に逆襲を食らい蹴散らされる。

（奴は、既に高さすら恐れていない……！）

最後の襲撃し損ねて空中浮遊していた有翼兵が頭部を潰される。
時間加速と身体強化で飛びかかって来たトキによって。
おそらくトキは人生最高の瞬間を無自覚に過ごしているだろう。
時間を自在に操れる男が、実につまらぬ理由のためだけにしか力を使わずにいる。ＳＲという力を利便として考えるなら、トキの使い方は無駄だらけと言えよう。しかし、それは逆に特定の状況での駆使に、特化とまでは言わずとも精通していることを意味する。

「ククフッッ！」

笑いと震えが止まらない。
完璧だ。トキは理想通りの成長を続けている。
四凶軍として参加していた時の目標である『次世代への四凶』の種は……渾沌の種は、確実に“色世時の中”に根付いた。キュウキやトウテツがそれらを見つけたかどうかは分からないが、兎に角四

凶が戦争にかけた本懐は遂げられている。
協会の誰もが自覚することなく、俺達四凶の勝利は確定しているのだ。
しかし……

「来てくれよ、トキ」

敢えてだ。欲を張るならトキの時間操作能力を知り尽くしたい。知から始まる把握が、彼からの奪取にも繋がるだろう。その上対策さえ万全に揃えば恐れるモノなど皆無となる。

右手に光を集めて閃球を成してトキへ向け放つ。
頭部を失った有翼兵の残骸にぶつかった閃球が炸裂して盛大な爆風と光を撒き散らす。しかし、トキは衝撃閃光弾に苦もなく対応していた。一介の学生とは到底思えない判断力で閃光を回避したのだ。

「爆風を背中に受けたか」

それは加速と同時に閃光に背を向けると言うこと。視界に闇が灯るのは間違いないが、直に白闇へ落とされるよりも遥かに軽度で済む。明暗の順応は古くより環境策として扱われてきた要素だ。そして、現代になってやっと対策が人工的に施せるようになった人体構造の虚を突いた戦略である。
銃声と共に巨大な弾丸が、右腕を茜空へと融解して消え去ったのはその直後だった。　否定しようのない油断を晒しているところへ飛来したそれが、トキの銃撃であると理解するまで時間はかからな

い。何せその射線を辿ると空中で爆風を背に受けて浮いていたトキが、対戦車ライフルを両手に出来る限りの照準合わせを行っていたのだ、スコープを通して天を覗いていたのだから。致命的な隙を目の前で晒してはいるが。

「はずれだ！」

「知ってるよ！」

落ちて行くトキの遠吠えを肴にノアへと意識を伝える。
次を仕掛ける。
すぐに具現化するな。
ここまで声が届くほど高揚しているとは。

「トキ、俺はお前が欲しいんだよ。他の誰でもない、お前以外は要らないんだ……」

造られた夕闇と自然の朝日が溶け合い始めた空を喰い、渾沌の意志を汲み取った秘龍はその体内に“無限／夢幻”の階層を構築し始める。
それこそが、四凶としてコントンが最後に提供するモノ。
始まりへの起因を創造する終わり。
繰り返すこともせずに続いてしまう世界を止めるシステム。

……その夢を成す為にはどうしてもトキが必要だった。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第６４話－

－Ｇａｒｄｅｎ　ｏｆ　Ｎｏａｈ－

「吹き飛ばせ！」
「言われずとも！」

怪突風が運ぶ斬撃と銃撃と打撃の壁が行く手を阻む全てを粉砕する。

「下からだ！」

「内側ぁ、足元に気をつけろ！」

「撃てえ！」

分断された集団のうち、先頭集団が道先を切り開いて後続部隊がそれを支援する。

「ぐわ！」

「刺されても止まるな！」

「今助ける！」

負傷しても戦い続ける者たちを、トキは癒して回る。だが、

「お前の目的はコントンだろ！　とっとと上のを止めてくれ！」

「その方が援護になる！」

味方に咎められ、阻まれ拒まれる。

「トキ！　ここは私とスミレちゃんでどうにかする！　上をお願い！」

無限にわき出る木目の兵隊を相手に、鬼が回復陣を張り巡らせて持ち堪えらせる。

「コッチに来い、色世時！」
「隊長は使えますよ、トキさん！」

手を引かれて先頭集団に組まれる。
すぐ背後を鬼の三姉妹に任せ、新たに阻害に割り込む木目兵を打ち砕く。
カマイタチの拳を叩き込む特級風司の後ろを走りながら、トキはもう一人の若い魔法使いから現実をぶつけられていた。

「僕らの為に後ろを引き受けてくれたのは、哭き鬼の彼女たちだけじゃないってことを自覚して下さい！」

槍兵が繰り出す足元への薙ぎ払いを、空間使いの魔法で圧縮し、斬撃が通過する空間を跳び越す。

「分かっているけど……！」
「高校生のクセに“けど”なんて使わないで下さい！」
「面白いことを言うな、ケイノス君！
ならば君はいつ言い訳を使うつもりなんだね！？」

前後の魔法使いの言葉に耳を貸しつつ、左右を走る四凶（トウコツ）と魔術師（マトン）

へ視線を配る。

「若いねぇ……」

「いいじゃねぇの！」

兜割にて木目を雑魚と切り捨てたトウコツが文字通り道を斬り拓く。

「その年で思った通りに動けないなんざ、石獄にブチ込まれているのと大差ねぇ！

もっとやりたいように動いてみな！　そうすりゃ万人だって救えるかもしれねぇぞ！」

四凶がそう叫んで聞かせる。災いを招く者が、救いありと言っていることに違和感はあったが、それでも間違いを言っているわけでないと認めた魔術師が頷き、眼帯の風使いも同調した。

「……じゃあ、隊長。僕も好きに力を使って良いんですよね？」

「あぁ構わんが、誰がセーブしろと言った？」

などというやり取りに背後の魔法使いがキレていた。

「隊長、覚えておいて下さい……」

「何をだ？」

私、色世時は素直に白状しようと思う……ていうかさせて。
怖っ！！？
後ろの人の殺気が人並み外れてるんだけど……振り向けないんだけど！？　“見たくない”ではなく“見えない”っていうレベルで、これはアレに近い、最近買った古いゲームの『サ●レントヒル４』のシン●アゴースト！居るだけでもの凄ンいプレッシャー！

「何をってそりゃあ、皆が手こずっているこの……」

風の流れが変わる。吹き抜けを上昇降下を繰り返していた流れが横へと、回廊へと反れる。
それが通路に吹き込んだかと触覚が知るのと同時だった。行く手を塞いでいた人形の動きがピタリと止まる。

「木偶人形ですが、ＳＲ（ちから）の流れが見える僕にとっては“敵”ですらないってことをです！！」

味方にキレながらも敵を正確に無力化する空間使いに、風使いが微笑み返す。

「覚えるまでもない！
君は間違いなく最強の空間使いになるであろう男だ！
この障害なき通り道がその証拠といえよう！」

但し趣味を除いて、と吹き抜けの空中を進む魔術師が呟いたが無視する。

「さぁ天辺が見えたぞ！」

警鐘、遠距離の敵。

（止まれ！）

一瞬の静止世界で飛来するモノを探す。

槍が数本とその奥には、これまでとはまったく異なる武器を装備した兵士がいた。銃火器。自分と魔術師は難なくその壁を突破できるだろうが、風以外の力を持たない眼帯のおっさんやその部下らしき青年にはキツイと思う。だから、急いで彼らの手を取るのだ。

自分の中の予備時間を分け与え、低速世界を通常速度で行動可能にする。

「お願いします！」

魔術師達を低速世界に招待してからトキは先行した。

必要最低限の敵を無力化しながら銃器兵の装備を――ＨＫ　Ｇ１１、ドイツ製のアサルトライフル――確認する。この程度の装備な

ら、彼らに任せても大丈夫だろう。そう信じて天上へ急ぐ。
空の明るみに照らされる暗闇が隅へと詰め込まれる。

その陽際は随分と暖かい夕焼けに包まれていた。
果たして海面からどれだけの高さがあるかも分からない高度にそびえる其処は、一切の柵もなく空へと続く樹木のみで築かれた塔頂。風は強いが、決して冷たくはない。そんな場所で樹に絡まれて身動きできない秘龍の白い巨体が、夕日を背に深い黒を見せ付けていた。その中から生まれてきたかのようにコントンは歩み出てきた。
有無もない大型拳銃の一撃。それを右手で難なく阻止する。

「ようそこ、現実世界へ」

素手に剣を創造して切っ先を向け、それを一瞬で拳銃に変えて引き金を絞る。
そのフェイントに掛かったものの傷は盾とした右手の小指が削ぎ飛ばされたことくらいである。

「こっちだ……フフフ！」

苛立ちを覚えて突進すると戸惑いを覚えるほどの笑みを向けたコントンの体がノアの体表へと触れ、まるで水面へと沈むがごとく秘龍の体内へと消えていく。躊躇わずにコントンの後を追ってノアの固そうな体表に触れ、コントン同様ノアの中へと消える。
トキの信頼を受けて、銃装兵の撃破に向いていた魔術師らが頂上にたどり着いたのはその時だった。

「消えた！？」
「ノアの箱舟に乗ったんだ！　僕たちも急ごう！」

魔術師がノアの、トキとコントンの消えたノアの前足辺りに走り寄って壁に触れ、抵抗もされずにノアの体内へと侵入を果たす。ヒラリー・マトンに続いてトウコツが飛び込み、

「我らも続くぞケイ――！」
「隊長危ない！」

ノアの表層に指先が触れる直前、ケイノスの作り出した圧縮重力空間がリデアの進入を止めた。
ストップをかけられたリデアが抗議の口先をケイノスへ向けようとした瞬間に、

『おおおおおおおッ！！』

ソレは通過した。
何かはよくわからなかった――少なくとも自由飛行の能力を持ったＳＲと、それに組み付いた銀色のＳＲ――が、間違いなく二人。
その絡み肉はノアの巨体に激突し、結果として内部への進入を果たしてしまったのだ。

「あれは、狼と吸血鬼か！　ケイノス君急ぐぞ！」
「了解です！」

ノア内部。“０５／５０”秒前。

いわゆる明順応という光度の推移に目を細めたトキが、周囲の光景に違和感を覚えたのはコントンの殺気を見失ってからだった。
何も考えずに突入したノアの内部は、およそ生物の体内とはかけ離れた構造をしていた。第一に明るさが肉の壁にあるまじき度合いなのだ。眩しさを覚えるほどの純白にて統一された輝く体内は、まるで病院のような施設でも連想させるような自然にはない明白であった。硬質的な光沢を放つ壁や地面も、プラスチックや金属のように冷え切っているわけでなく、どこかに熱源が見当たるわけもないのに温かみがあった。しかし、何よりもワケが分からないものは音響である。

「聞こえているな、色世時」

どこにも見当たらないコントンの声が、間近で会話している時のよう鮮明に聞こえた。生死繋綴を持ち替えてＭ５の銃口を見つからないコントンへと向けようと忙しなく動かす。何処から来るつもりだ。

「ここがノアの内部、かつて箱舟として存在していた物の現在の姿だ」

内部の造りは至ってシンプルだった。
学校の体育館室一つを丸々収めてしまうほどの中央通路が背骨のように走り、両端には大小二つの扉らしきものが見えた。その他にも片側三箇所に曲がり角があり、シメントリーである秘龍ノアの箱舟は都合８の部屋から構成されていることが見て取れた。中央通路の両端間は２００メートル前後の距離があった。

（どこだ？）

出入り口が見当たらない。
視線を目まぐるしく移しながら、最寄りの扉がある角へと走る。
小さく打たれていた警鐘が更に遠くなる。ここではないと確信しながらも、この通路にある扉の向こうには一体何があるのか、それが気になった。

「こっちだ」

中央通路の両端に構える扉二つのうち、大きな扉の方が音も無く開き始める。
そちらへ歩を向け、床から伝わる振動に緊張を思い出して大きく一呼吸。

『おおおおおおぉっ！！』

その背後を、もつれ合う二人のＳＲが通過して先ほど覗こうとした扉に激突し、姿を消したのは刹那の出来事だった。
何事かと振り返ってみたが、どうやら芹真さんの決闘らしい。こっちも援護に行けるほどの余裕があるわけではないから無事と勝利を祈るしかない。

『邪魔者が次々入ってきているようだな』
「入ってきちゃ都合が悪いのか？」

こっちの声が聞こえているかどうか分からない。どういう仕組みで声が伝わっているのかも分からないが、なんとなく直感で分かることがあった。

『ここはとても神聖な場所だ。穢れは少ない方がいい』

聞かれている、そして見られている。
こっちは未だにその姿を探しているというのに、向こうはいつでも襲い掛かることができるのだ。小刻みに打たれる警鐘がそれを裏付けているが、奇妙なことにコントンにしては告げられる危機の度合いが小さい。それが気になった。

（攻撃を仕掛けてこない？　誘われている？）

微塵の油断も見せないよう慎重に扉へと近づき、警鐘。大きな危険を示す震動が全細胞に行動を要求した。
大きい扉に最も近い曲がり角。
そこに差し掛かった瞬間にそいつは現れたのだ。

「動――っ!?」

銃口を現れた輪郭の頭部に向くよう腕を上げて引き金にかけた指を、発射する直前に止めた。

「あ!」

そこに現れたのは見覚えのある一人だった。最も初めの頃に出会った神出鬼没なＳＲであり、ホート・クリーニング店に所属する腕利きの青年、再生というＳＲを持つ錬金術師の兄。しかし、こんな場所で鉢合わせするとは微塵も想像出来なかった人物である。

「フィングさん、どうして？　戦争ですか、こんな所で？」
「そりゃそうだろう。色世時……トキだよな？　何でこんな所に入り込んでいるんだ？」

久しぶりに会う男、フィング・ブリジスタスは強張らせていた表情を解きつつ銃口を下げた。

倣って銃口を下ろすとフィングは開放した大扉を視界に入れて指差しする。
あそこはいつ開いたという質問に、分かりませんたった今ではと疑問混じりに答える。

「ここがどんな場所か分かってコントンを追ってきたのか？」
「どんな場所かは知りませんけど……この船？　竜？　こいつもＳＲなんですよね？」

頷くフィング。
その直後に中央通路の奥で爆発が起こった。怒号と銃声が入り混じるそれは、新たに突入してきた誰かが戦っている標しであり、この場所にも戦火が広がっている切迫の証明である。
黒煙を立てる爆発へと銃口を向け、フィングは進むように促してくる。

「確かにこのノアはＳＲの力を使うことができるが、ノア自身に力はないうえに自ら他人を害するだけの意思をもっていない！」

デザートイーグルを構えるフィングが後ろを見ていてくれてる間に前を警戒する。
自分の敵はコントンだ。
それ以外の敵をできるだけ任せるにしても、コントンが自分だけを狙ってくるほど律儀には思えない。逆の立場だったら、

（周囲の戦力から削って、それから本丸を討ち取る）

それも攻略法の１つだ。
奇襲をかけて周囲の戦力が機能する前に目的を達するのも手段だろう。それならそれで非情かもしれないが、フィングさんを巻き込まずに済むし、時間さえ掴めれば援護を期待できるだろう。
発砲。
フィングの銃声が後方に銃痕を作るのが分かる。

「木の兵隊みたいなのが来るぞ！」
「外に居た奴らですね！」

扉の中へと、急がない。
フィングの肩を引っ張り立ち位置を逆転させながらＭ５の銃口を木目兵に向ける。

「俺が引き付けます！」

木目の兵士が装備するＧ３ＫＡ４が一斉に火を噴く。
同時にフィングが背後から腕を取って立ち位置を元に戻した。

「いや、受けは俺がやる！」
（ちょ……って、なるほど再生（Ｒｅｓｔｒａｔｉｏｎ）か！）

木目兵が放つ、拳銃弾とは比較にならない破壊力を有した７．６２ｍｍ弾がフィングの身体に食い込む。
自らの身体を盾とするフィングの意図は分かる。
何故なら彼は“再生のＳＲ”だ。銃撃を受けた箇所から再生していく。早くも展開されるフィングの復活の再生に、攻撃の再生が始まる。

「銃を狙え！」
「はい！」

二丁の拳銃弾が的確に突撃銃を射抜く。
距離もあって百発百中とは行かないが、フィングにはそんなことお構いなしで銃撃を繰り返すことができたのだ。

（再生（Ｒｅｐｌａｙ）！）

空になるはずの弾倉が、フィングの再生能力で充填された過去状態に戻る。
デザートイーグルという銃の装填数を知っているからこそ思う、彼のＳＲはある意味で最もＳＲらしい、現実離れした力なのだと。
だけど、

「進むぞ！」

もし彼の力が敵側に回った場合は、その事態を最悪と呼べないだろうか。

無限に続けることのできる攻撃に、死に絶えることのない身体。繰り返しの許される能力を持った彼なら、きっと多くの人間を苦しめることができるだろう。

デザートイーグルから放たれる.５０ＡＥ弾が木目兵の頭部を消し飛ばす。背後から援護射撃を差し向けつつ部屋の中へ。

扉を通過すると中央通路とは対照的な漆黒の空間が突如として展開される。まるで部屋中を暗闇というカーテンで被せ隠すかのように。

「そっちの扉を動か――せって、勝手に動いた!?」

デザートイーグルを腰のホルスターに収納して脇下のホルスターから新たな拳銃（ジェリコ）を取り出し、片手で扉を閉めようとしたフィングだったが、それよりも早く大扉は自動で閉鎖を始めていた。反対側の扉を閉めようと走ったことが無駄になるのが少し腹立たしいが、

（何だろう、何か――あ）

腹立たしい事態に、トキは気付いた。

正確には予感が沸いた。予測が立った。

「ひとまずこれで安心か、トキ――」

大きく深呼吸して覚悟を決める。
扉の前でギリギリまで木目の兵士に銃撃を浴びせていたフィングの背後へと歩み、雑多に渦巻く思考の調整を図る。
そして銃口をフィングへ。

「ひとつ、聞いてもいいですか？」

扉が静まる。
それを見送って振り向いたフィングの表情は微動だにしなかった。

「どういうつもりだ？」

その言葉はこちらが聞きたいことであり、同時に否定しておきたい事態。全く考えたことのなかった真贋の通り像。
放たれた矢のように止まらず連想を続けた頭が、短時間での状況連鎖から反らしようのない過程を強く根付かせてしまった。

「大事なことです、今だけでいいですから応えてください」

強くグリップを握るフィングの得物に一度だけ目を落とす。
ジェリコ。
おそらく短絡的なことなのだろう。だが、逼迫している状況の中

で、トキがフィングに対して自分の妄想かもしれない予測を確認する、その手段として確実性を得るにはこれしか思いつかなかった。

「フィングさん……アンタは、何人まで再生できるんだ？」
「何人まで、というのは？」

暗闇の中にあって、二人を縁取る白光が減少を始める。
完全な暗闇が来る前にトキは問う。

「前にアンタのＳＲを見せてもらった時、アンタは俺や藍の姿に化けていた」
「数なら、１０を超えるが？」

風前の灯火が如く消え行く白光と、完全包囲を完成させる暗黒が二人を包む。
だが、二人の意識は暗闇さえ介さずに向き合い続けた。

「その中に――」
「なぁ、トキ。俺のことを疑っているのか？　俺の何を疑っているってんだ？」

微塵の光さえ鎮まる一瞬後にそれは起こった。周囲の闇全てが冷たさを想わす白へと反転し、視界に届かなかった大きな部屋という輪郭を持つ空間が認識のうちに飛び込んだ。部屋の、扉の反対側に

は機械のような何かが据えられている以外は見晴らしのいい室内である。その部屋の出現と代わってフィングが姿を消していた。

「ある、男の話をしよう」

コントンの声。

今度の明暗逆転には順応がなかった。

入れ替わってコントンの言葉が再開し、扉を背にして純白の円形をした部屋に四凶の姿を探す。

（居ないのに、やはり声だけが……！）

この部屋に身を隠す場所があるとすれば、扉の反対側にある巨大な機械のような物体の影くらいだろう。

「その男は、人類史上最も初めに生まれたＳＲであり、人類史上初めて世界を滅ぼした唯一の人間だ」

構えながら物陰へと歩を向ける。

「星一つをまるまる壊滅に追いやった男は酷く後悔し、地獄のような心境に陥ったそうだ」

跳ねるような鼓動と荒れる呼吸を抑え整えながら一歩一歩を慎重に進む。

「だが男はいつまでも地獄に身を置いておけるほど心を失ってはいなかった。数十億もの人間やそれ以外の生物や風景の全てを破壊しておきながらもな。そうして選んだ道が“再生”だったんだよ」

足を止める。

警鐘とコントンの言葉が耳に残ったからだ。

「お前がそうだっていうのか？
それとも、それはフィングというＳＲのことか？」

聞いてみるもののコントンは肯定も否定もせずに続ける。

「男の行った再生とは“２つ目の世界”を創ることから始まった。記憶の中にある地球を再生し、そこにあった生命システムを再生し、時代を、文明を、そして戦いまでも再生していった。だが、ただの繰り返しでは破滅という危惧すら再生のうちなんだ。それに男が気付いたのはまた新たに世界を再生してからしい。
つまり、俺たちの存在も既に再生されたことのある過去の繰り返しであり――」

「……おい！」

そろそろコントンに夢語りを止めて欲しかった。

「何を言いたいんだ！？」

姿も見せずに世界の再生について――ある男とは誰だ？――聞く気もないし、必要性も感じないことを丁寧且つ滑舌良好に語られても、どんなリアクションを取ればいいのか困るだけだ。返事の仕方に幅がない。

「……男が贖罪を決意して創り直した二つ目の世界では、二度目の人生という意味を込めて、最初の世界を滅ぼす原因となった異能力者たちの再現である異能力者、つまり我々の総称でもある“ＳＲ（セカンドリアル）”と設定した。

そうして創り直された世界の中で、ＳＲの暴走による犯罪や戦争を極力防止し、最初の世界と同じ終結を迎えないよう結成されたのが協会という一大組織だ。世界中のありとあらゆるＳＲを登録制という名の実質支配下に置き、ネットワークを拡張することによって更なる情報や人材を次々手中に収めていくことには成功した。ＳＲによる大きな戦争の早期終結、暴走の未然鎮圧、拡張しきった戦争への終止符。最大被害を打ち出したと言われる光の魔女の反乱や、そこから大きく乱れた世界でさえ調整して限りなく平和に近い状態に戻した手腕は、流石その道のＳＲと言わざるを得ないだろう」

何となく、コントンの言うその人物が協会長：オウル・バースヤ

ードなのだろうという予感がよぎった。

「だが、その“仮説Ｌｖ．　計画”という再生も、全てを支配しきることはできず、必ず不測の事態が発生して紆余曲折を繰り返して現在に到るワケだ。

フフフ、聞いて笑えよ。

彼の計画で最大の不測とは、極災色――その中でも特にコトとキシとお前が存在し始めたことにあるらしいぜトキ」

コントンが、部屋の中央に位置する機械らしきものの影からゆっくりと姿を現す。その姿はとても見慣れている筈なのに、どうしてか違和感が拭い切れない。

おそらく頭が混乱しているから記憶の中のコントンとうまくマッチングしないのだろう。だが、容姿への違和感よりも、今は反論すべきであろう言葉選びに頭の回転が追いつかずに悲鳴を上げているのだ。あまりにも聞き捨てならない。

「は？」

ようやく顔を見せたコントンは、いつも通り笑っていた。

悔しかったのが、その笑みにどうしてか安心を覚えてしまったのだ。

「何でそこで俺が出てくるんだ？」

「語弊を含めているからな、ククク！

強いて言うなら、この世界に大きな不安定を齎したのは最初の世界同様我々四凶と極災色らしい。つまりお前とその一族が、だ」

デザートイーグルを持って腕を上げる。

「あの男が今現在トキを含めた極災色をどう思っているかは知らないが、少なくともオリヤアキの出現とトキの覚醒が交差するこの時期を、決断の刻と予感して追い詰められていたことに間違いはないだろう」

「何だよそれ……よく分からねぇけど、まるで俺が原因で他人が迷惑しましたみたいな言い方じゃないか」

その通りだと言ってコントンは一歩踏み出す。互いの銃口を向け合ったままだが、口はコントンの一方だった。

「肝心なのは、当の本人が無自覚であるということ。言ってしまえばＳＲになったトキが生存しているという、言葉にすれば無自覚ということも相まって実にちっぽけで有り触れた生命の輪郭だけだが、しかし、あの男が見守る世界観にとって猛毒を打ち込まれたに等しく、予想だにしない方向へと流れが変わってしまうようだ」

それが現実だとも言う。

「黙れよ、そんな話が何だって言うんだ？」

眼前で歩みを止めたコントンが答える。

「お前の言葉はどれだけの現実を捉えている？」

コントンが消える。

ＳＲの解放、時元脱存だ。

「協会長の何を知らされている？

あの男はこの世界における最も大きな罪を背負った人物だ。そんな男のプロデュースする世界をお前たちは認めることができるのか？　本来あるべき自由も何も、全てが無意識のうちに支配されているかもしれない世界を受け入れることができるのか？

まるでコンピュータ言語で作られたプログラムのように流れを持ってしまったが故に、それを自我だ自由だと夢想して世界に対してなんら疑問を抱くこともなく流れ来る終わりさえも享受する。本当にそれでいいのか？」

撃鉄の硬質な動作音が背後で鳴る。

いきなり背後を取られたが、何とか慌てず静止時間を展開して距離をとる。

向きをリセットしようと行動したところ、その試みは驚くほど簡単に成功し、やはり拭えない違和感を感じ取った。追撃への備えは

無駄に終わり、銃を構えたまま立ち尽くすコントンは口ばかりを動かした。

「見るがいい」

コントンの意思と連動するかのように、白と部屋に線を灯す黒色以外の極彩があちらこちらに現れる。

それは、スクリーンもなしに放映される戦いの記憶であった。

「このノアは、協会長オウル・バースヤードが最初の世界から持ち込んだ欠片を飲み込んだ結果誕生した、全く新しい形の箱舟であり、予想外の存在の一つとも言える明確な脅威だ。

部屋中に浮かぶこの映像もノアの力の一つと言えるだろう」

「お前は、何を知っているんだ？　それで何がしたいんだ？」

誰かが飛んで空中に居た別の誰かが首を斬り飛ばされる、そんな最寄の映像に歩み寄って左手を差し出すコントン。

「知は、協会長の正体とその業。標は、彼の背負った罪の意識と我々という現実。そして、彼の決断を追い詰める者達の正体とその見極めだ」

触れた映像がシャボン玉のように弾けて消える。

入れ替わるように、増殖しつつ、またどこかに新たな映像が現れては短い像を繰り返す。

「とても重大なことを教えよう」
（聞きたくない）

コントンが視線を外す。
飛ぶ鳥の安息を自らの腕に提供するように、力を抜いた手をとある映像の前に捧げる。

「このノアにはな、世界を一瞬でリセットする機能が備わっているそうだ」
（……うわぁ）

いかにも、疑っていますという表情をコントンに見せてそのリアクションを待つ。

「実感が沸かないだろう？」
「沸かしたくもない」

「残念ながら、そうも言っていられないのが“現実”なんだよ」
「世界のリセットだって？　それを現実って言う証拠はあるのかよ？」

頷くコントンの銃口が出入り口である大きな扉の方へ向き、つられて視線を向けると新たな四凶の姿がそこにあった。
グリップの力を弛緩させる。緊張は不味い。

「何処だトキ、無事か！？」

大声で叫ぶトウコツだが、その態度はあまりにもおかしい。
こちらとトウコツの間に視線を遮るようなものは皆無。それなのに、コントンは臨戦態勢を解くこともなくずっとこちらの名前を叫んで視線を配りめぐらせては舌打ちしている。

「居たか！？」
「外れだ！　仕方ねぇ、ここで木目共を減らすぞ！」

トウコツに続いてノアの内部に突入してきたであろう防衛部隊の面々が銃器を掲げる。扉を盾にして廊下の木目兵士らと銃撃戦を展開する。

（どうして……）
「この部屋に居る限り、色世時という人間は見つかることがない。幾重にも掛けられた異層が五感情報に隔たりを識別させている。安心しろ、援軍が来ることも邪魔が入ることもない。お前が突入してくる前にそういうフィルターがかかるようノアの機能の一つを作動予約させておいたのだからな」

笑いながらコントンはつぶやく。フィルタ・ブラスターでもいれば話は違っただろうと、招くはずもないがと。

銃口をトウコツへ向けるのを見て、その射線上を立ち塞ぐ。

不安があるとしたらそれは銃弾にではなく、自分の体が銃弾をしっかり防げるのかという点だった。ノアによって認識されなくなっているらしいが、それは果たしてどのレベルまでなのだろうか。意識だけか、それとも輪郭さえ他人から見たらすでにないものなのか。もし盲点だけがノアの仕業ならトウコツを救えよう、だが思った以上に存在感を塗りつぶされていたら弾丸はトウコツを奇襲する。

「どの道無駄だよトキ。お前の言う証明をこれから行うんだ。四凶、トウコツ。デリート」

突然行われたそれは、一種の死刑宣告のようなものだった。

コントンがその名と、その存在に対する希望を口にしたところで振り返ってみると、扉の影から銃撃していたはずのトウコツが忽然と姿を消した。

「協会防衛部隊、東側所属チーム・モスコー隊長以下４名。デリート」

二度目の実行で扉の前は静寂に包まれた。

数量の不利を圧倒的火力で補っていた協会ＳＲ部隊が、一切の抵抗も見せることなく消え去ってしまったのだ。

「これで信じて貰えたかな？
オウル・バースヤードが行使したリセット、逆転した順序の中でこの舟に備わった超能力を……！」

「トウコツ達を消したのか！？」

「あぁ、見てわからなかったかな？
なら……」

新たな足音や怒声が中央通路から響く。
先ほどの面子よりも大所帯であり、しかしその中には聞き覚えのある声も混じっていた。

（まさか、哭き鬼の……ッ！）
「トキさん、援護しま――え！？」

部屋に飛び込んできたのは三女のスミレだった。

「ＳＲを探知できる者はこういう時に引っかかり易くて助かるな。
哭き鬼、えぇと、確か　スミレ　だったな……」

その瞬間に身体はコントンへと向かっていた。
イスラエル製のＢｕｌ５を乱射してコントンの顔面を、頭を潰してそれを言わせないようにする。

弾丸を大人しく受けないのが常識であるのだが、コントンはその銃弾をしっかりと受け、尚且つ接近するこちらに気付いてデザートイーグルの銃口を向けた。

「言わせねぇ！　そんなことして何になるって言うんだ！」
「アホ見たいに喚くな。何かになるからやるに決まってんだろう」

その一言に反論の言葉が浮かばなくなる。
誰だって何かがあるからこそ行動を起こすなり、思考を巡らせるものだ。目的もなく、意思も反映せずにそういった行為の逆側である無駄な行動に至る人間だって、間違いなく居る。しかし、コントンですら弁えているそれを俺は拒み、敢えて無駄へと繋がる行動を選択してきた。

「デリー……！」

Ｂｕｌ５をグロック１８Ｃへと変え、コントンの発言を阻む。
フルオート射撃を見舞ってもコントンに当てることが困難なのは重々承知の上。それでもスミレを消させない為にも手数による攻撃が不可欠だった。
顔面狙い、当たればラッキーだがまず当たるまい。

「何っ……？」

角度を変える。
微動だにしないコントンの側面へ回り込んで足元へ打ち込む。予想通りコントンは回避に出た。後方ステップによる跳躍、余裕を持った回避距離。
その位置取りに好機を見つけた。

（クロノ、クローズ！）

乱発した銃弾をコントンの左側面に残す。部屋の中央機材を背にしたコントンの反対側に回り込み、足元、頭上、前方へと新たに銃弾を放っては残し、正面へと回り込む。全ての退路を断ち、コントンを一秒でも早く追い詰める。

（停止空間か、やってくれるじゃない！）

時元脱存で包囲を抜け出す前に詰めを加速させる。弾丸包囲に加えて機械を背にしたコントンの四肢を封じるため、即興で創り出した長剣を投げつける。投擲に絶対の自信があるわけでないが、それでも剣は上手い具合に四肢を封じるよう紙一重でコントンに触れていた。

「おい、トキ……」

頬が緩む、そんなコントンの正面に立って彼の異様な態度に気付

く。
状況は明らかにこちらが有利、それなのにコントンは臆すことさえない。むしろ、こちらが優勢だと言わんばかりの笑みを見せ付けてくる。

「壊すなよ」
「何？」

デザートイーグルが向き、グロックを対面させる。引き金を絞る気配さえないものの、警鐘は強く鳴らされ続けていた。脅威を放っているそれが銃弾、それどころか銃器でさえないとなれば、コントンの時元脱存が展開されようとしているのであろうか。

「ここにある機械はノアの全機能。始まりの福音を司る原始の光影」

拘束が逆転する。隠せない動揺が身体機能を停止させる。

「誰でもない、オウル・バースヤードが証明した箱庭だ。
まめに記録していたことが仇になった計画“仮説Ｌｖ.”
“セカンドリアル”という呼称。
それらを統べた“協会”。
色世、佐倉、芹真、陸橙谷、風間、など特定の“系譜”に対する異常なまでの警戒意識。
優先して封印しておくべき魔女の容認。
その根底には、過去に世界を破滅させた裏打ちがあり、それを繰

り返さないための、あらゆる仮設が組み込まれて生かされている、実験されている世界がまさしく現在なのだ」

「世界の破滅って、そんな事……それをこの機械が？」

不可能である。

トキ自身がよく知っている画面の中の世界と違って、現実はとはやり直しが利かない、ありえない次元なのだ。死んだモノが蘇ってはいけない場所だ。だからこそ、エンターテイメントで復活というジャンルはイニシエーションの如く持て囃されるか、或いは現実的ではないと徹底的に否定される。神話へと昇華するか禁忌として遠ざけられるかして扱われる再生、やり直しの概念。

（リセット……！）

文明が仮想世界にもたらした機能であって、それは見方によっては実装された幻想の一つと捉えることができた。電話やインターネットのような通信技術、厳然たる自然の中に開拓された交通手段、収集された情報やその操作など、いずれを取ってもかつては幻想とされた、非現実とされてきた架空を今では文明と呼ぶ。

現代を代表する最も身近なリセットは、電子機器のメモリー関係だろう。

「ゲームやパソコンのようにやり直せる、それが世界に適用された時どんなことが起こるか分かるか？」

「神様の気分……いや、でも」

コントンは言う。
神を創ったのが人間である以上、その神になるべき人間という集合体の礎を創造した者こそ、真に崇拝されるべき存在だろうと。

「会長がそうだと？」
「しかし、彼は同時に世界を滅ぼした原因でもある。その結果として、この何度目かも分からない世界があるんだ。
言っておくが、会長が記していた計画名は最新のもので“仮説Ｌｖ．４”。
一度のリセットでこのレベルが上げられるとするなら、少なくともこの世界は４度目の歴史を迎えているということになる」

拘束から抜け出したコントンが一歩を踏み出し、右腕に触れていた剣を掴み抜く。

「そのリセット操作を行ったのがここ、ノアの箱庭だ」

視界からコントンが消える。
何とかスミレを消されずに済んだ。済みはしたが、その副作用としてコントンとの決着を早めた。望ましいとも望ましくないとも言えない状況だが、これまでの話で十分に撹拌された思考回路では鈍った判断しか下せないだろう。

（いや、今はどんなことを聞いても変わりはないと思う！）

コントンの話が強すぎた。

ここでどんな話が浮上しようと、頭の中は許容量を上回る疑問と疑念と言い知れぬ不安の数々に圧迫され、これまでに獲得してきた余裕の一切を失くす。

ペースを乱されたことを悟りつつ、コントンへ向けて待機させていた銃弾とそれらを留めている白色空間を吸収して余力を取り戻す。問題の精神的余裕は時間に任せるしかないのだが、その時間が余るとは考えられない上にコントンが与えるとも思えない。

「だから、俺は調査を始めた。この世界を創造したノアに搭載された機能を。

果たしてリセットだけがノアの全てなのかと疑問に思っていた俺に、こいつは見事に応えてくれたよ。リセットどころではないもっと別の、それも科学が絶対に及ぶことのない概念を覆す力の存在を」

「概念？　それって――」

カチリと、側東部に突きつけられた銃身を目で辿り、コントンではないＳＲを見つける。

フィング・ブリジスタス――は、コントンが現れる前とは一変して額に玉のような汗を浮かべながら告げた。心臓の当たりを抑えつつ、振るえ青ざめながら。

「時間だ……聞くな、トキ。お前は誘い　され、取り込ま　利

され　と――！」
「フィングさん？」

この箱庭から出て行け。
その意思をトキは確かに受け取っていた。コントンが何かを企んでいる、それを踏まえた上でここに居る。ここに来た、その為に恐れを抑えてきた。だから、もう何があろうと引くことはない。そんな態度を、混乱する頭を落ち着ける時間を稼ぐためにも、フィングに胸を張って見せ付ける。
落ち着け、落ち着け。

「いや」

落ち着くんだ。
もう、先延ばしにするつもりのない決着。僅かでも揺らいでいた心の波紋を全て消し去り、身体で表現するための準備を終えて迎える決戦の刻。
その相手はもう、目の前にいる。

「――コントン。
どちらがその身体の支配権を握っているか知らない。でもコントンという四凶は取り除かせてもらう」

「……あぁ、そうだそれでいい！
これが現実なんだよ！」

フィングの姿が変貌し、中から現れたコントンの意思と、コントンを見つけたトキの意思が正面から睨み合い、激突への消費予測を一線化させる。隠れもしない、逃げもしない、してはならない理由が有る。

そうして激突する二人。

「どういう……どうして、アイツがコントンだと？」

「意外か、メイトス？」

銃と剣を両手に顕在化させた二人の対決を、存在を消しつつ見守る男が二人いた。

肩を借りた協会長オウルと否定のＳＲメイトス。二人がここに居る理由は簡単だった。コントンが箱舟を操作する前に秘龍をスリープさせるためだ。しかし、二人が駆けつけた頃にはトキがコントンに銃を突き付けられていた。

「フィング・ブリジスタスがコントンだったのか！？」

「……まぁ、恐らくフィングがコントンを取り込んでしまったのだろう、事故的に。その可能性のほうが高い」

思わしくない事態を目の当たりに動揺するメイトスを見られて久しぶりに愉快な気分になる会長だが、面持ちは真剣そのもので決してその硬い表情は崩れなかった。

「信じられん。あれほど協会に忠を注いでいた男が、本心を晒せば戦争を引き起こした張本人だったなどと……」

「そうだろうな、私も気付けなかった。
だが、この戦場で奴に身体を貫かれていくつか気付くことが出来たよ。それを教えよう」

再生。

「何が奴の不思議なのだ？」
「まず第一に“再生のＳＲ”だ。
これがおそらく元凶にして四凶の源だったと思われる能力、フィングの四凶属性を深刻化させた要因だろう。彼に何が出来るか知っているか？」

肯定の縦首を示しつつ、銃撃剣戟を撒き散らす二人を見据える。

「蘇生・修復・時間回帰、だったか」
「もう一つ重大な再生がある。能力（ペースト）再生だ」

トキの銃撃がコントンの刃物を弾き飛ばす。

「……なるほど、言われてみれば」
「フィング・ブリジスタスはリスト内危険度は最上位のＳランクだ。

そのワケは自らの内に録画した映像の中の人物をいつでも再生でき、且つその他人の能力をビデオのリプレイのように行動制限されることなく自在に操れる。つまり、他人のＳＲをいつでも自由自在に引き出して展開できるという、極めて高い自由度を秘めているのがアイツの再生だ」

哭き鬼の姿を装ってアヌビスを退けた事例が、実質トキとフィングの出会いであると報告を受けたことを覚えている。そんな会長の脳裏に危険信号が走った。

「……メイトス、逃げるぞ」

「何？」

疑問を返してくるメイトスの反応は正しかった。ＳＲの、それも上位種と言える領域に達している男が二人並んでいるにも関わらず、その意思に伴う行動は純粋に逃亡を望んでいるのだから。しかし、そのワケを説明している時間はない。

「急げ！」

あまりの慌しさに最後トキを一瞥するくらいしかしてやれなかった二人が、大扉をくぐって中央通路に出た瞬間に多きな衝撃が室内から走った。爆撃にも似た撃震は、二人のＳＲの衝突によって生じた対立の関係証明だった。

「不味いな、システムが作動している」
「リセット装置か！？」

それもそうだが、もっと面倒なモノが二人の激突した衝撃によって誤作動か何かしたらしい。

「このシステムの防衛装置だ」
「ノアの……まさか、噂に聞いた白純――！」

言葉を遮ってメイトスが背後に向けて手をかざす。
銃弾。
バースヤードの背中目掛けて飛来したそれが何かに衝突することもなく消えてなくなる。

「そう“白純血神殿”だ。
侵入者をコールドスリープさせて強制保存するガードシステム！
どうしてか動き出している！」

全く予想だにしていなかったシステムの発動は、コントンが仕組んだ可能性も考えられた。それは中央回廊で繰り広げられる惨状――次々突入して来た後続部隊が孤立して戦っている――は、間違いなくノアによってもたらされているもので、その機能に見覚えがあるバースヤードは中央通路で堂々と孤立する部下達を、援護すらできないものと理解しながら見守るしかなかった。傷が深すぎる。か

といって無茶をしなければ部下が見殺しにされていくばかりだ。

「どうなっている？　何故お前の部下達は連携が取れない……！？」

眠っていたとは言え、トキとコントンの存在力に刺激された白純血神殿から、大きな扉の部屋から出てきた我等には彼の者達を目視することができた。

「煉層（れんそう）――おそらくコントンがその機能を使っているんだろう」

「……防衛システムの一つか！」

「あぁ、発動にはいくつか条件があるんだが、これは言ってしまえばフィルターなんだ。

例えば男女の違いで視界に特定の色や輪郭を投影させなかったり、おそらく今の場合のように、二人単位でしか味方を認識できなくする、といったことも可能だ」

「ほう“フィルター”なんだな」

頷く会長の前に立って銃撃を無力化する。

まるで未知、そんな戦場に立ちながらも絶望が微塵も働こうとしないのは、おそらく直感がこの現象を否定可能であると受けているからだろう。

「ならば私の番だな。

その“分断”を否定する」

四凶の乱。
その最終局面で否定の力を持つ男は動いた。
ＳＲの力を視覚化できるノアに突入した者達は風景の異変に気付く。まるで霧が突風に払われるかのように、視覚を制限していた何かが取り払われる感触を目の当たりにし、それまで逸れていた眼前の苦戦する友軍を見つける。

「――すみませんね、このお礼はいつか必ず」

言って頭を下げる会長をメイトスは鼻を一瞥をくれる。一瞬だけ視線を配ってから戦場に歩み出る。
バースヤードが言うように防衛システムが発動した以上悠長に構えては居られない。ならば、コントンとの対決に水を差さないためにも――いや、本当は自分が挑んでも勝ち目がない、だからトキに頼るしかない――いま自分達ができる支援を最大限に努める。例えば逃げ道の確保など、木目兵蠢く通路は決闘を終えるトキに突破するだけの余力が残っていなければ、歩むことさえ困難なほど乱雑を極めている。片付ける必要性は高いし、やる価値もある。

（トキ、お前と同じ敵に立ち向かうことはできないが、お前と共に同じ勝利を掴むことは出来る。一人じゃないんだ、生きて戻れ！）

役者の全てが動き出したいま、オウル・バースヤードもひとつの決断を前にしていた。この戦争の目的が自分の命から世界の命運へ

とシフトしたその瞬間から、幾度もその選択から逃げ出したくて目を反らしたい衝動に駆られ、それでも流されて逃げ出せない状況にまで追い込まれていまに至るのだ。

（白純血神殿に時間と進化の二大概念代行が取り込まれた……最悪だ、これでどちらかを選ばなくてはいけなくなる。それとも、コントンは僕にそうさせたかったのだろうか？

――可能性はあるな仮説Ｌｖ．４の一環として観察され続ける世界の結末を、コントンは否定し、我らを焦らすことで思惑の外へと世界を導かせようとしているのかもしれない。肝心なのは、

――俺達には選択の必要が生じた。観察された世界の結末を誘導してカオスを招こうとしているコントンを選ぶか、本来そこにあるべき流れの世界に生きようと望むトキを選ぶか。早い話が混沌とした世界か、それとも一時のものかもしれない平和世界を望むかだな。

――結局は挫折して渾沌か、執行猶予で流れる世界のどちらかを選ぶんだな）

オウル・バースヤード達は意見を重ねながらも、身体は白純血神殿に向けなおして扉を閉ざした。これで少なくとも白純血神殿の効力が中央通路に影響するまでの時間をある程度は稼げるだろう。その代わり、室内の防衛侵食速度は格段に上昇するだろう上に援護してやることも不可能だ。

「保って5分……」

バースヤードの中で意見の対立が始まる。

コントンの世界こそ、仮説Ｌｖ．４という実験に相応しい気鋭と野心がある。或いは、トキの選択こそ、かつての様な世界を破滅から救うのだろう等。バースヤードの中で多数のバースヤードが分かれて言い争う中、全く意見しようとしないバースヤードも当然存在しており、中立を選ぶ彼らは戦いをフェアに見守ることこそがトキの意見を酌んだ自然の流れでもあり、コントンの願望も叶うチャンスになりうるとして、静観を閉目にて主張した。

（問題は、コントンが源かフィングが源か。
もし前者なら、フィングはコントンを取り込んだつもりで取り込まれていたことになる。願望もコントンが舵を取るならある程度の命運予測はできる。だが、逆にフィングが再生の力の主導権を握っていたのなら、この世界に対して何かを望んでいるかも分からないフィングの願いがノアのリセットに影響することは実よ良くない事だ。自分の願望の為に多くの未来に補完予測のできない影響を及ぼす可能性が高い……）

混沌が先か、再生が先か。
勝利を掴むのは時間か進化か。

（……あれ？
待てよ、僕はコントンを進化と認識していた？
おい、これは誰の認識だ？）

扉越しに二人の戦いを感じ取りながらオウル・バースヤードは自らのうちに住まう数え切れない自分に問いた。

第６４話－Ｇａｒｄｅｎ　ｏｆ　Ｎｏａｈ－（後書き）

揺らめいていた黒煙が静止した海岸部を睨みながら、キュウキは戦場の大音量にかき消されないほどの大声で無線に叫んでいた。

「陣形の進捗は？」

『完了です！』

『完了しました！』

『ＯＫだぜ姉御！』

『完成しました、後はキュウキ様の意を通すだけです』

興奮に高ぶった部下の声に、キュウキは背筋に武者震いを走らせた。

協会の包囲から始まる、突撃と前線交代・後退、強攻と撤退・反転の繰り返しで、協会側の砂浜は予定通りに予想外の損害を被りながらも削ることに成功していた。この状況を作り出すまでに不確定要素が多過ぎて幾度不安に胸を締め付けられたか、それを思い出せば部下達が包囲の外側に完成させた魔方陣は、終戦への明確な勝利方程式に思え、勝者だけが座せる椅子のようにも思えた。

『やってくれ姉御！　まだ誰も使ったことのない歴史上最大規模の魔方陣、そいつで出来る魔法ってやつを！』

『キュウキ様の場所を確認！　千里眼部隊を送ります！』

「よし、施陣の完了した者は包囲に戻れ！
ここで終いにする。セットアップ！」

前線から引き、炎上する空母の甲板で協会本部に視線を向ける。
青空の下、初夏の朝日に照らされた太平洋海上に黒いフィルターがかかる。それは海面を一定の高さに押さえる層と上空の高さを制限する物理接触が可能な層の二つ、加えて四凶軍の前線部隊の残骸を包囲するよう四方に展開する層の計三枚。

「礼奏。時流の刻みに汚されぬ輪性をここに捧げる――朗々零落にて栄えし光輪の彩りを闇を抱き容れ、不敵蹂躙不適にして誤落伍の進腕掴みし蒼天の露を飲み、不戻退行の山谷と渺茫たる混進黎明の獄を逝くこの点醜の呼は――キュウキ」

部下の命を受けて駆けつけた千里眼部隊がキュウキを中心に八角の千里陣を敷く。望めば陣を形成する術者を介し、キュウキが千里眼を覗けるように準備が整う。この戦場全体を覆う魔方陣の準備も終わった。

「前奏“有力を無力”へ」

静止時間空間（ジャイアントクロノセプター）に包まれた協会本部の上空に、広がっていた青空を隠すように薄黒い空間がかかる。

「選択解奏“魔法使い”」

千里眼部隊の捉える映像がキュウキの頭に直接送られる。痛みを伴うのは情報量が多いからであり、しかしそれは、決定打を撃ち込むために必要な照準でもあった。

「演牢（えんろう）」

詠唱を終えると、四凶軍のキュウキ部隊が総動員して組み上げた魔方陣から淡い白光が確認された。

そして、

『おい！　見ろよ――！』

最初の標的となったのは、

「あれ？」

「どうしたんですかボルトさん！？」

最も高高度にて安全を確保し、広範囲光撃を行っている魔女だった。

その魔法が発動した時、ボルト・Ａ・パルダンは魔女からただの人間へと成り変わった。

自由飛行さえできない、ただ空を落ち行くだけの人間に。

「これが“ノアの箱庭”の力よ」

その戦果を千里眼で確認したキュウキが痛みを堪えて笑みを浮かべる。

これがキュウキの用意した最後の切り札であり、自らの袋小路でもあった。

第６５話－白純血神殿の戦い－（前書き）

※気付いたらまた長くなって（ｒｙ
四凶の乱、最終局面です。
ここまでの芹真事務所の状況。

トキ　：ノアの心臓部にてフィングと対峙
藍　：螺旋回廊にて木目兵を足止め、侵攻部隊への助勢
ボルト：魔女としての力が消滅
芹真　：※詳細は外伝に掲載予定

第６５話 ― 白純血神殿の戦い ―

初めて呼吸困難を体験したのは、生まれて数年も経たずに泳ぎ方も知らないうちに緩やかな長川に落ちた時だった。

（私を制圧した……！？）

どうしてか空中を落下するボルトは、初めて川で溺れた大昔のことを思い出しながら自分の力が霧散していくのを感じ取っていた。輪郭の消失を目撃し、そこに外部からの改竄が加えられている感触を確かめて驚いた。

（一体……それにこの効果速度は尋常な魔術じゃないよ！）

四肢からの消失が胴体に及び、ついには頭部へ至り、髪の毛の一本にまでボルトという魔法使いの存在が戦場から消滅してしまう。

「これは……カテゴリーアウト！？」

同じ頃、闇影の魔法使いであるディマも自分の魔女としての力が消えていくのを実感しながら、人の形を保っていられるうちにジャンヌへ無線を入れた。

「ジャンヌ、四凶軍の新しい攻撃を確認！」
『……このタイミングで？　その攻撃はどんなものか分かる？』

無線越しに聞き取れた彼女の声は明らかな焦燥の熱に荒れていた。
しかし、現実に起こっている攻撃を前にその反応は正しいだろう。

「間違いなく広範囲魔術でこれは――！」

何となく理解できるこの攻撃を、どう伝えようか迷っていたディマの両腕が霧散するように消える。

「これは、選択対象を結界内で――」
『ディマ？　応答してくださいディマ！？』

耳に掛かっていた無線機が落ちてしまった。周りの防衛部隊員らも自分の消滅に気付いて駆け寄ってくるが、例え腕利きの衛生兵でもこれには対応できようハズがない。何故ならこれは直接輪郭に訴えかける類の魔法なのだから。

「ジャンヌに伝えなさい。キュウキの書庫で見かけた魔法陣“ノアの箱庭”が発動していると！」

発音が出来なくなった刹那、伝えるべきことを言い残したディマはこの戦争の勝敗がいよいよ断言できなくなってきたことを予感し、如何にこの魔方陣を攻略するかが協会勝利の鍵であり、敗北回避の絶対条件だと思い知り、そして何よりもキュウキを舐めすぎていたことを気付かされて後悔した。

こうして協会が誇る二大魔法使いであるボルトとディマは、纏い・持ち得る全ての輪郭を失って戦場から姿を消した。

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第６５話－

－白純血神殿の戦い－

奇妙な空間であった。

視界に飛び込む部屋の色彩は白一色で統一されているのに、頭が理解してしまう部屋の模様は極彩色であった。最初に踏み込んだ時、この部屋は紛れもない深闇に包まれていたし、頭でもそれを照明が働いていない影の中として確かに認識していたのだ。

色彩認識の逆転はコントンにも起こっていた。部屋に飛び込んできたときは自身の輪郭が不自然白光に包まれていたのに、部屋が最初だけ白色を見せて以降四凶の色彩は純白で統一された。目は白を認識しつつも、脳の翻訳は色彩鮮やかなるカオスカラーであった。トキの姿もまるで絵画の中を動いているかのように距離感を掴ませてくれない。

（フフッ、しかし！）

（ちょっと待て！立体感が薄くて……ッ！）

非常に反撃し辛い近接格闘銃撃を紙一重で躱せてはいるものの、決定打に到る一撃を見舞うだけの隙を見つけることができない。もとよりコントンという数百年近い戦闘経験を持っている先輩に学生の自分が挑むこと自体無謀の極みと言えた。

「ハハハ、どうして敵の言葉を素直に受け止めているんだ？　やはり若いな！」

「なんでも笑ってやがれ！」

どうにか隙を作らんと僅か距離を開けたのと同時、事此処に到っ

てコントンは歪めていたその口からある告白をした。

「俺と一緒に正しい時間が流れていく世界を創らないか？」

「またお誘いかよ、断る！」

フルオート射撃でコントンの高速移動を追ってしまう。

スライドストップの一瞬前にコントンが急加速して背後を狙う。

させまいと飛び退きながら振り返り様に生死綴繋を振る。素手なら届かなかっただろう斬撃だが、コントンはそれを予測して次の行動に移っていた。スライディングキックによる体勢崩落である。

「四凶になったお前なら必ず考えて、遠い未来で必ずそのことに関して何らかの後悔を抱くだろうさ」

「俺が……なるか！」

空になったロングマガジンを時間分解し、余分な時間と一緒に合わせることでショートマガジンを創造するが、地面を滑るコントンは姿を変えることで弾丸を右手で掴み消して見せた。

（俺の姿かよチクショウ！）

コントンが再生して装ったＳＲはまさしく自身であった。

空中にある身体を大型拳銃の弾が捉える。

右太腿。

心に体にと続いた衝撃で体勢を崩してしまう。どうにか尻餅をつかんと踏ん張るが、右足の感覚を失ったも同然の状態でそれは叶わない。生死綴繋を支えの杖代わりにしても右半身は崩れてしまう。片膝からでも反撃は出来るが速度の時点で既に先後が成り立っていたのだ。

だから、矢継ぎ早に左足の踝（くるぶし）を撃ち抜かれ、右腕をトキ（コントン）の右手で切断された時には思考が真っ白に染まった。その武装解除は予想していたよりも遥か高速に行われ、やられたのだと認める頃には左手が踏みつけられ、こめかみにはデザートイーグルの銃口が至近距離で向けられていた。コントンが元の姿に戻っている。

「もしも、お前に用はないと言えばお前はどうする？」

両足が熱い、込み上げる吐き気も痛みが喚起したものに他ならない。

それでも目を伏せずに涙も堪えられたのは、意地でもコントンに弱みを見せたくなかったからだ。

「やってみろよ……！」

威勢がどれだけの効果をもたらすか分からない。ただ、譲れないものがあることだけは伝えたかった、知らしめたかった。

この状況でコントンは怯まないだろう。そう思っていた矢先だった。威勢の効果でも現れたのか、冷たい銃身がこめかみを離れて――デザートイーグルを持つ手が震えている？――銃口が次に定められたのはコントン自らの側頭部。まるで思いつめた自殺者のようで

ある。

「……」

気付けば踏みつけられていた左手が自由を取り戻していた。遅滞していた血液の循環が再開されるのを感じつつ、コントンの過去にも幾度か目にしてきた異常な行動を見守った。いつもと違うというのが分かる。特に彼の表情は、致命たる攻撃でも受けたかのように険しかった。精神疾患者のようにも見え、追い詰められている者の様にも見えて、とてもではないが武装解除を施したばかりの最も勝利に近かったはずの者の相貌とは思えなかった。

それが勝機なのかどうか賭けではあったが、対抗してトキも自身の首へと生死綴繋の鋭刃を突きつけて見せた。

「……！」

幸か不幸かというものの前に、やはり理解の追いつかないコントンの行動が刀身を握り止める。

鋭利な刀身に切り裂かれた皮膚の下から血液が筋を伸ばす。

ふと、その行動で自分に銃を向けつつこちらの刀を止めたコントンの事情に少しだけ気付いた。否、気付かずにはいられない、最早そういう状況だった。

（再生のＳＲ。

フィングの力、コントン、再生……フィングがコントンを再生し

ている？　それともコントンがフィングを再生している？）

必ずしも統一されていない意思が、もう一つの戦いが“フィング／コントン”の間で繰り広げられていたとしたら？

だが、これは一体どうすればいいのだろうか。

フィングという人物が敵でないことは分かる。アヌビスから助け出されてこの世界で生きていく最初の力を示してくれたのは他でもないフィングだ。しかし、そんな彼の中には仇敵に等しいコントンが居る。或いは逆かもしれない。

コントンだけを討てるのか？

ここに来て生まれた疑問は過去最大の問題だった。言ってしまえば二重人格のような彼は、意識としてフィングとコントンの二つが存在するのであって肉体は唯一であり、戦闘で破壊する主な対象とは精神もさることながら効率的に考えて肉体なのである。

（まずは右手を元通りにしないと、コントンに触れることができない……！）

そうだ、まずは敵を知らなくてはいけない。

左手の生死綴繋を突き刺して置き地面にクロノセプターを向けて時間を得る。螺旋回廊とは違いこの空間での時間回収率は極めて悪かった。普段ならバズーカの一つでも創れるほどの時間分回収を行ったにも関わらず、いま手元に集められたのは小指一本分を創り出す程度の時間しかない。

最悪なのはコントンがそれを目撃していたこと、しかし幸いなことにそれを彼は妨害しようとしなかった。

「諦めろ――」

そして、その会話が始まった。

「――フィング・ブリジスタス。
見ろ、トキのこのＳＲとしての急速変化を。
混沌たる私の目にすら並のＳＲとは写らない。こんなＳＲ見たことがない。似通った者は居た。
しかし、明らかに一国に匹敵する脅威として着実な流動に乗って向上を続けている。最早触れることすら難しく、近代兵器の粋を集めた暴力だってこいつの前には無力だろう」

一歩二歩と、コントンか或いはフィングが後退する。
何とか両足を元通りに戻す。
その時コントンは再び銃口を自分に向け、視線をこちらに固定しおぼつかない足で間を空けた。

「既にイデオロギーの外側に位置する俺達は、四凶という概念に拘る理由さえ持たない。
その上位種だって目指せる、現にそれほどの力を持っている、それなのに現実という共有レベルにすがり付いて変化を拒む……！」

更に後退していくコントンを見守りつつ立ち上がり、切り離された右手を拾い上げて時間を集める。

周囲に散らばっていた映像がコントン目掛けて集まり、内に消えていく度にコントンの輪郭は揺らいだ。

「例え、未来（シナリオ）を書き直した上で世界を昨日に巻き戻そうと、トキがこれほどの力を得たという現実だけは書き換えることができない。同じように俺とお前もな、フィング」

銃口が側頭部を離れてこちらを向くが引き金が絞られる気配がない。右腕の再生はすでに終わりかけているものの、正直に予測不可能な事態の連続にコントンとフィングの共存する個体がどのような結果の父母をぶつけてくるのか予測できなかった。

（フィングには殺意がないみたいだが、コントンはどうだ？既に目的を果たした～的なことを言ってはいたけど、本当に終わっているのか？）

誰かを殺したわけでもなし、何かを壊したわけでもなさそうな彼の目的が、本当に達成されたのかを確認する術がなかった。何せ四凶の種を残すなどというものが目的なのだから。

しかし、トキがそれを理解できないのも確認できないのも仕方がないことであった。

「一介の学生が兵器を上回り、あらゆる速度と並び、更には第二熱力学の法則をも覆す。極めつけは時間という流れから外れて行動するんだぞ？

これに驚異せず何を脅威と認めるか。いくらＳＲであろうと万能ではない、さればこそＳＲというカテゴリーを必要とし、そこに押し込めねばならぬ多種多様な特異人間が居るんだ」

生死綴繋を右手で拾い、格闘戦に備えて軽く左手を動かす。

とにかく敵を知りたい。

手段はある。クロス・セプターだ。時間を共有することによって相手の時間を読み取る技。こちらの情報も自動で交換する、与えるというデメリットもあるが、いま現在こちらに知られて困るような情報があるわけでもない。

「……それに、見ろ。トキは俺を殺してお前だけを救う、そんな考え事をしているみたいだぞ？」

震えながら喋るコントンの表情に、いつものような笑みがない。

再び銃口が、ゆっくりとこちらに向く。

その隙を見て走り出し、コントンへ殴りかかる。踏み込みながら左のフックでクロスセプター。

「ぐ……ぉっ！」

最初の一撃は何の障害もなしにコントンの胸へと突き刺さった。

驚くほど抵抗しないコントン／フィングは拳打の衝撃で後退まですするほど無抵抗である。

そして最初に流れてきた彼らの情報は感情であった。遣る瀬無さ

に苛立つのがコントン、絶望的状況に困惑しつつも諦観しているのがフィング。身体の主導権を握っているのは当然、コントンの方だったが、フィングの無気力が肉体行動にフィードバックしていた。

（何故彼が絶望しているんだ！　まさか、本当にコントンの目的が達成されたのか！？）

二撃目。

初弾の勢いをそのままに時計周りに回転しつつ生死綴繋で頭部へ斬撃、と見せかけて左ストレートを顔面に叩き込む。

やはりコントンは能力を使うことさえなく、顔面に拳を受けて尻餅をつく。

「え……！？」

三撃目の追撃――しかし、それが行われるより速く、コントンは視界の中から突如姿を消した。

時元脱存。

それの発動を警鐘が知らせた。

咄嗟に生死綴繋を右側面へ盾としてタイムリーダーを発動すると、金属同士の弾け合う短く硬質な音と衝撃が鼓膜を震わせた。

そして、

「何で！？」

初撃で絶望という眠りからフィングは目を覚ましていた。
――体を返せ！
二撃目で得た情報は、彼らの内部闘争。そのビジョンはコントンが身体の主導権をフィングに奪われる瞬間であった。

「どうしてそうなるんですか、フィングさん！？」

そう、いま頚動脈へ斬撃を見舞ってきたのもコントンではなく、フィング・ブリジスタスの行動であり意思であって、それはトキの思惑を打ち砕くに十分過ぎる威力を秘めた意志表現であった。

「聞いてくれ、トキ。
四凶は感染を免れることのできない、言ってしまえば“原始的な負の文化”だ」

フィングの姿を探す。
背後ではない、いやそれが得意なのはコントンか。

（……真上か！？）

音源さえ不特定な白純血神殿。その中で、トキは動物的勘で彼の姿を捉えた。
上下逆様に、まるで吊られているかのような体勢のままで、天井

に指先を向けて垂らした両手に武器を創造するその姿はまさしく自分自身。色世時の再生（コピープレイ）であった。

「コントンと呼ばれるＳＲを僕が取り込んだ――いや、正確には取り込ませることが目的だったんだよ、コントンは。

でもこれが現実さ。

世界は常に一人の人間の視界には飛び込まない。

必ず見えないところで変化が生じ、それら複数の、或いは無数の原因と結果が螺旋を描いて個人では発生し得ない巨大な因果を渦巻かせる。それらをイベントと呼称し、そこに強く関わる人間をキーパーソンと定めるなら、間違いなくＳＲの重要度は強くイベントに関わってくる。つまり……」

星黄と畏天の二振りが輪郭の形成を終えて、フィングの手に納まる。

自由落下から始まるフィングの攻撃は次の瞬間、自由落下という束縛を抜けて加速した。頭上からの斬撃と思わせて足元からの斬り上げ。

右手の生死綴繋で片方の攻撃軌道反らしつつ半身になり、斬撃二刀の隙間を潜り抜ける。鼻先を掠めていく刀身の熱に冷や汗を覚えながら左手でフィングを殴り離す。

「俺を殺す気なんですか？」

「それが未来の為になるならば厭わない。コントンの目的を潰す最後の手段でもある」

両手に生死綴繋を持ち直し、素人ながらに構えて見せる。対するフィングは構えることなく鼻血を拭いながら口ばかりを動かしていた。

「世界を零に戻した上で新たな混沌の種をそこに放り込む。それがコントンの目的だ。白純血神殿にはそれを成す機能が備わっている上に、ここは曲がりなりにもノアの箱舟としての機能が最も強い部屋でもあるんだ」

三撃目の拳がトキの中にもたらした情報が、まるで告白でもするかのようにフィングの身体を中心に部屋の随所へと飛び出し、投影される。呼応でもしているのか、目も眩むほど忙しなかった極彩色の壁が白一色に戻った。大小様々な画面が縦横無尽に飛び交う。白いスクリーンに再び浮かぶ画面だが、しかし内容は全て異なっており、どれ一つとして連続したシーンは存在しない。直接触れたトキにはすぐに理解できた。それがフィング・ブリジスタスの歩んできた道（かこ）なのだと。

一螺旋回廊一

同時刻。

無数に湧き出る木目の兵隊を相手に藍は奮闘していた。状況を整理しながら木目の剣兵の頭部を叩き潰し、槍先を金棒の回転で流して力任せの横薙ぎをお見舞いする。

（アサお兄様の術が制御を奪われている。
頭上のノアが飛翔を始めた。
四凶軍の新たな攻撃で消えたボルト。
吸血鬼の復活とそれを阻止しに行った芹真……）

小細工なしの力技で複数体を吹き抜けの反対側に打ち飛ばす。

（スミレちゃんとカンナ姉さまはトキの援護に行った。
ジャンヌやアヌビス達も前線に戻った。
……ノアへと通じなくなったこの回廊を死守する必要性があるの？）

敵はすでに触れることも出来ない場所へと移動している。数分前まではノアへと通じていたこの螺旋回廊にも重要性を見出すことは出来ただろう。しかし、ノアが上空へと羽ばたいていったいま、登頂に何もないこの風毀塔（フキノトウ）に攻略価値は見出せない。戦力の無駄遣いではないか。

（私もノアに向かうべきだった？）

焦りが両手に震えを起こし、両足は不安と何処からともなく沸きあがった怒りによって大きく歩調を乱していた。殴り飛ばし、殴り潰し、圧し折り、突き穿ち、無限に現れる木目の兵隊達を圧倒して

いく。どんなに数の利を得ていようと、現実に回廊の下へ下へと勢い押されているのは木目兵達の方だった。たった一体の鬼によってである。

「双炎転じて、奏淵！」

二本の金棒が纏っていた炎が爆ぜるように消え、変わって振動が金棒全身に走った。

腕を交差させて金棒同士が、金属の歯がぶつかり合うよう擦れ合うよう走らせ、その時に生じた破壊の衝撃音波が隊形を組んで挑まんとする木目兵達を瞬時に木偶とする。

だが、虚しい。まるで最果てを妄想でステージと飾り立て、ただ独りで延々と踊り続けているような気分だった。

「聞こえるか、藍」

「アサ兄様？」

吹き抜けの最下層に移動したはずのアサは言う。トキを援けに行けと。

「よく聞くんだ、僕はあの村で一度死んだ。その結果として、それまで疑問に思っていた所を自由に調査するだけの時間を得た。

その疑問というものが“協会長：オウル・バースヤードのＳＲ”だ」

「……はい」

誰もが不審を抱かない協会長の絶対支配。

だが、それが本当に完全なる支配なら、絶対の采配が本物ならばどうして予期しない事件が起こり、争いが生まれて混沌を世界に塗りたくるのか。それを必要悪とでも言うのだろうか。

鬼と狼の抗争を経て蘇生したアサは、確信に近いものを得ていたのだ。会長の能力は絶対支配などではないという可能性である。

「現実に会長が絶対干渉できるのはＳＲを持たないただの人間に限る」

「はい」

多くの場合、ＳＲやそれに覚醒しようとしている者は制御が難しい傾向にあるらしい。

「だから協会という集団組織があり、世界を監視する役割に終われ、ＳＲの関係する万事に対する切り札としてノアがあったのさ。華創実誕幻――」

しかし、会長という人物を弱者か強者かという二択で選ぶなら間違いなく後者であり、事実、現時点で超大にも等しい権力を握るのは間違いなく彼なのである。ノアを所有するという理由もあるが、最大点にして最大問題は誰も彼のＳＲを正確に把握できていないということだ。その点だけで言うならコントンやトキも間違いなく会

長クラスの能力者だとアサは心底で認めていたが、そこに協会という組織が絡んでくれば一枚でも二枚でも危険度は会長に軍配が上がるというものだ。

「おそらく、コントンの狙いは会長の権力を担うノアの強奪」

「その価値があの伝説の生き物にあると？」

肯定の返事を耳にした藍は、次いで発せられる魔法を紡ぐ音の並びに慌てて深呼吸する。

「天段：呼末凪（こまつなぎ）」

次の瞬間、暴風が鬼の身体を空中へと押し飛ばした。呼末凪（こまつなぎ）の殺人突風によってロケットよろしく空中へ打ち上げられた身体が、数秒と経たずにノアの眼前にまで舞い上げられていた。呼吸が難しいほど高速で移り行く空中で、両手の奏淵を右手に双焔、左手に奏淵という、より多くの局面に対応できる装備を整える。

（だから藍、お前はトキの援護に行け。コントンが望む世界は、万人にとって地獄だろう。

そうだな、簡単に言えれば――）

ノアとの衝突に備えて金棒で十字を組む。

だが、

（世界を救――）

ノアの表面に触れた瞬間、何の抵抗もなく、それもプールや海に飛び込むよりも無抵抗に身体はに箱舟沈んでいった。垂直に入り込んだ藍は、アサの声が途絶えたことに気付き、次いで自分が新たなる最前線に足を踏み入れたことを理解した。

―白純血神殿―

二人の決闘とも言えるコミュニケーションを見守りながら、オウル・バースヤードも内側の激しい議論に行動する余裕を一切失っていた。

今後の世界に必要なものは何か。

コントンの望む原始的な、欲望剥き出しのまま、裸のまま生死を迎える世界か。或いは、トキの意見でもあり、現実に多くの者が望むであろう自然の流れのまま行き着く世界の果てか、どちらを迎え容れるかでオウルの内で無数の人格が口論を重ねていた。

（そうだ。この世界にも死兆（オリヤ　アキ）が現れた以上、極災式との接触や“侵交／深交／信仰”を防ぐためにも、ここでリセットの腹を決めるべきだ）

確かに、ゴクサイシキ。ソイツらがこの世界に在る以上、かつて死を迎えた世界と類似した結末は免れないだろう。何度世界を創り直しても彼らは付き纏う。だが、今度ばかりは泣き寝入りするようなことはしたくない。悲観の必要がないと断言はできないが、もしかすれば過去になかったＳＲ（ちから）が生まれている可能性がここに来て浮上しているのだ。

（色世時が極災色である以上、それを覆すほどの可能性とは何だ？
現実に在り得るのか？
――有り得なくはないが、これまでの世界でも四凶の上位概念でもある極災式を覆した者は一人として現われなかった。
――そうだ、思い出せ。かの色世誠（シキヨマコト）でさえワールドエンドへのライニングを手伝っただけに過ぎない。その器さえ超えることの出来ない色世時が、
――しかも引き篭もるほど精神も未熟で不安定な者に、極災式という回避不能なイベントと属性をどうこうできるとは、天地がひっくり返っても思えないわ。
――故に我らはコントンの生存を望む！）

そう、世界の終わりを迎えることは簡単だ。
極災式が生き残っても、コントンが生き残っても、或いは私自らの手でリセットの道を選ぶコトだってできる。他者に譲るか自分で実行するか、違いがあるとすればそれら視点と、あとは早いか遅いかという時間の問題のみ。世界のリセットボタンは簡単に押せる。
何せ慣れているのだからな。

（――いいや、可能性は目の前にあるだろう！
――老人共の目には未来が見えていないらしいな。まぁ、確実とまで言えないあたりそっちに分があるんだろうから強気なんだろさ？
――厳密に言えば、世界死と可能性（オリヤ アキ シキヨ トキ）の接触時間はワールドエンド・ボーダーラインをとうに通過しているんだぞ。それでもまだ世界は死んでいない。世界はまだ続いている。
――ノアの外を見て御覧なさい。夏の空、海上の些凪、戦火の中でも光る生命、まだ全てが終わりを前にしているわけではない。可能性の中にまだ灯火は輝いていますよ。
――俺の話も聞いてくれ～。
――だから何度も言っているだろう！　簡単に死のうとすんな！）

フィング・ブリジスタスの見せ付ける記憶に隙を突かれたトキが、飛来したナイフを咄嗟に右手で庇い、フィングに新たな隙を与える。
その瞬間だった。

（なぁ、俺が決めても良かったのかな……？）

壁一枚越しに二人の決闘を見守るオウルの内で、その人格の登場にこれまで口論を重ねていた全人格が口を噤（つぐ）んだ。

（今まで意見を述べなかった俺だけどさ、それは自己の分裂具現を恐れてじゃないんだ……）

沈黙の原始人格、オール・バースヤード。

仮説Ｌｖ計画の創始者にして人類最初のＳＲ、そして最も初めに世界の死を見届け、それでいて繰り返される世界の死の中を生き延び続け、多種の記憶と感情を人格化させることによって精神崩壊を免れた“創造のＳＲ”である。

（極災式の許容と変遷に備えよう。既に手遅れの状況を静観するにはそれが最上の手）

背後のメイトスに意も向けず、オール・バースヤードは進む。
神殿の中で生死を賭けた二人の勝敗を見届けなくてはならない。
次の世界をどのように改善するべきか、二人の対決はそれを知る要因となるだろう。壊される前に創り直す必要性が生じるか、このまま目撃したことのない未来への線を残すか。

「バースヤード？」

締め切った扉を透過して抜ける背中にメイトスの声がかかる。
――そうだ。箱舟をシステム化したのは、理想の世界を創る為だ。
その責任を、私は最後まで放棄するわけにはいかない。

「どうするつもりだ始まりのＳＲよ！？」

止まらない戦いを見届けよう。
選択はその先だ。

全てが手遅れのいま、ここで出来ることは何もない。
何も、だ。
だから、せめてもの償いに責任を果たそう。
視線を未来へ、意思で己を戒律し、この身を選択の仕掛けに組み込もう。

「バランスなど有り得ない」

それだけを言い残して背中が消えていく。
白純血神殿へと。

「ハァ……ハァ……見えない」

フィングの記憶が規則性を持たない移動を続けている。眼前に迫った動画が煩わしいことこの上ない。

（俺は、何と戦うべきなんだ！？）

白純血神殿の中で、自分と同じ姿のフィングが怒涛の勢いで攻める。
多方向、多種、単雑複純織り交ぜ、嫌らしい間をも組み込むその戦闘スタイルは、明らかにこちらの知るコントンのそれとは異なった。多くの場合、時間という枠を抜けて背後を取り、そこから一気に畳み込むのがコントンの攻撃パターンであり、それだけなら既に

攻略法が確立しているといっても過言ではない。他ならぬ自分にも時間の流れを異常に移す術があるのだから。

だが、それらを展開したところで目的が霞んだいま、明確な意思のもとに攻撃を繰り出すことなどできない。

（フィングさんはどうして俺を攻撃しているんだ！）

コントンに憑代（よりしろ）とされ、身体の主導権を奪われていたと思われるフィングさんがどうして殺意を向けてくるのだろうか。

俺が四凶になりそうだから、だろうか。

「くぅ……っ！」

フルオートで放たれる９ｍｍ弾幕を躱しつつ、牽制射撃を見舞うが逆効果。同じ容姿、同じ能力を完全に完璧に腹立たしいほどブレなく再現するフィングは、難なく射線上から身を反らしつつこちらを中央装置へと追い詰める。

銃弾に混じって黄金剣がブーメランの如く回転力に押されて飛び掠めゆく。腰の左側に走る鋭い痛みに視界が狭まる。

痛い。だが、止まれば痛いどころではなくなる。本当の殺意を抱いて迫るフィングは、間違いなく息の根を止めるために動いている。本当はコントンの意思で動いているのではないかと疑いたくなるほどに。

掴み掛かりを打ち払いながらクロスセプター。やはり、意志はフィングのものでコントンは肉体制御に意志を注いでいるようだった。

（攻略法が見えない！）

苛立ちが募る。

隔靴掻痒たる状況に照準も定まらない。銃弾が服装を剥ぎ飛ばし、黒刀が肉を削いで流血を生み、繰り出される四肢は数度に一度、神経を逆撫でるような衝撃を骨の芯まで響かせる。それでも標的が分からないから攻めることができない。

クロスセプター。

情報を新しく入手しなくてはいけない。だが、一度始まった攻防の両者一方展開は容易にその流れを変えることが難しいほど進んでいた。銃撃戦のような時間空間間隔はなく、近接戦闘時のような間合いや読み合いさえない。反撃の糸口が皆無なのだ。

（止まれ、止まれ！）

静止世界を更新し続けてやっと追いつく防御。一秒に一発よりも尚早い間隔・感覚で迫るフィングのコピーアレンジ。時間による絶対障壁を展開し、こちらがそれに合わせて静止時間の上書きをすると同時に変身して攻撃、そしてタイムリーダー・リプレイにて先攻後攻を明確化される。

長いような短いような攻防に生じる亀裂は背中から始まった。

「終わりさ……」

背後に回り込もうとするフィングに振り向き様に左回りの斬撃を放つが、それは計算されていたらしくフィングは直前に放って静止時間の中に閉じ込めていた銃弾を解放した。
背中に突き刺さる金属の衝撃感に頭が白く濁る。続く衝撃が混濁の濃度をあげる。

「これが、俺に許された時間だ！」

覚えのある言葉に鼓動がひときわ大きく脈打った。焦りでもない、痛みでもない、怒りですらない鼓動に震える。
背中から手の甲に次なる斬撃が移る。肋骨を金棒で砕かれ、膝の骨盤を銀爪で穿たれ、右耳を光線で焼き切り落とされ、左腕を肘の所で時間分解される。この神殿に入って二度目のダウンであった。

「コントンに身体を奪われてどれだけ経つのか覚えていない」

額を伝う血筋が右目を濡らし潰す。音も良く聞こえない。体中の震えが止まらない。絶えかけの呼吸で必死に痛みを理解し、辛くもそれを元に意識を繋ぎとめてフィングを探す。
寒いような暑いような温度が気持ち悪い。
重たく感じる頭を上げると半分を暗黒に閉じた視界にフィングの怒りに満ちた顔と、一つの“映像／記憶”が飛び込んできた。

「この肉体の消滅は、コントンを巻き添えにできる結末を秘めている。

だが、コントンがそれを許さず、他者を己が器の中に取り込むことによって延命を重ねてきた。自分を殺す前に他人を殺してな。お前がこの肉体を破壊するか、僕が自害する以外にコントンを止める手段は無い。いずれも、現状では不可能だろうがな」

その像は夜闇に静まった家の中を映していた。月明かりによって浮かび上がるものはテーブルに突っ伏する者、火の気の無い暖炉の側にもたれかかる者、石壁の前で横たわる者、その映像を見ていた者の足元に転がる子供、最後に血まみれの家具の数々である。

「最善は、俺が未熟な四凶のお前を殺すことだが、未来のあるお前が俺を殺す事だって選択肢としてはマシだろう。
それ以外にコントンの残した不安を取り除く術はない」

「なぁ……あんたは何なんだ？
コントンなのか？
フィング・ブリジスタスなのか？」

「俺は――数え切れない罪を犯してきた罪人だ。
それ故にリセットを望む。
哭き鬼でも、妖精でも、グレムリンでも、色世時でも、リッパーでも、芹真でも、コントンでもない、俺がフィング・ブリジスタスで居られた時間を取り戻す……！　誰も殺さない普通の人生を、日の光を胸に浴びていける命を……！」

どうにか上体を持ち上げようとするが、うまく力が入らずに地面に横たわってしまう。

やはり戦闘経験の差は圧倒的だ。

（そんな……何度目の、何回死ぬ気なんだよ、俺は……！）

意思・闘志に反して身体が死んでいく感覚を思い出してしまう。
それが進行している、死に向かっている。
今度の相手は中身がコントンであっても、その意志はコントンではない。

「四凶にならず死んでくれ、トキ」

「嫌だよ……」

何で目に見えもしない、それも理解が追いつきもしないような、しかもしかもだ、未来が来なきゃ結果を見て振り返ることも出来ないような、まるで何かをやる前からこれはヤバいから諦めて最初からやらない方がいいと誘惑されているようなものだ。どうしてそんな事で殺されなきゃならねぇんだ。俺の選択意志はどうなるんだよソレ。
相手がコントンなら分かる。だが、どうしてフィングさんがそんなことを求めるんだ。
四凶とはそんなに拒絶するに値することなのか？　現実にあってはならないものなのか？　人種も職業も年齢も関係なしに警戒しなくてはいけないものなのか？

「止まれ」
「お――」

お前（フィング）は何を恐れている？
お前（コントン）は何を知っている？

――い、あ……れ？」

フィングに視界を潰された。
もう、何だ、誰に気の毒かさえ曖昧になってきた。
目を失ったとか四肢を切り落とされたとか、訓練や実戦を含めてそれら現実的重要性が麻痺しちまっているらしい。悪いけどさ、クロノセプターで目とかその他諸々失っても痛みがないんだ、精神的ダメージゼロなんだよ。

「クロス、セプター」

でも、次にフィングが施すそれは、対策訓練すらできなかった攻撃方法であった。
そこで久々に見た気がする余裕を持って表に出てきたコントンを彷彿させる笑みを。

「見せてもらおう。フィングとコントンの意志に於いて誓う。必ず

貴様のＳＲの本質を見抜き、触れ、完膚なきまでに封殺し、最期へと到らしめんと」

クロスセプターとは、相手の中に蓄積されたきた時間に触れ、直接ビジョンを覗き見る情報取得術。互いの時間を晒しあうことになる欠点を眼中から外したところで、相手の本質を知り得ることの出来る強力な手段でもあるのだ。時と場合によっては下手な諜報よりもずっと脅威になりえる。時間と共に蓄積されてきた記録、記憶、追憶。どの場面のどんな情報を読み取るかは、オリジナルであるトキにもコントロールできないが、戦闘中など、生命に関わる瞬間に高速回転を始める人間の時間は日常の中で読み取るよりも格段に速く、時と状況によっては1年分を2秒足らずで知ることもできるのだという程度は把握していた。

しかし、クロスセプターは口で説明するよりも遥かに扱いの難い技であった。それ相応のフィードバックがあり、それはトキとして気絶に到るほどの痛みを伴うこともあり、そんな危険を伴う術であると理解していないフィングとコントンの意志が最初にそれを向けてたのが今であり、施術の対象がよりにもよって術者本人であり、

「あがっ、ぐギャャァァッ！！？」

結果として得られた情報は限りなく性質の悪い、地雷と言っても差し支えない文明現象（ひきこもり）の一部であった。

ーノア内部　脊髄通路ー

木目と防衛部隊が戦闘を繰り広げる空間に突入した藍は、すぐにトキの姿を探して走り回った。行く手を阻む木目を砕き散らしつつ、複数の扉へと招く角を曲がり、部屋の一つ一つを確認しては冷や汗を流した。

（この部屋全部、何らかの意味や機能を持っている！）

まるで映画館である。

ある部屋は藍の心の現況を映像に例えて投影していたり、違う部屋では外の戦場全体を俯瞰視点で投影したり、またある部屋では最も忌まわしき過去を再生していた。それらが人の心を映しているものだということはすぐに理解できた。どの部屋の映像も、藍の頭の中にあるものと全く同じであったのだから。焦りがあることも確か、戦場全体図を頭に描いて出来うる限りの戦況推察を行っていたのも事実、そして戦争の結末が昔起こった兄の暗殺事件のような虚しく悲しい結末にならないよう最善を尽くすという決意もまた、藍のなかに渦巻いている真実である。

しかし、それら部屋の中に一つだけ、藍よりも先に飛び込んだ者達の心を映す部屋があった。

（山や街、平原なんかが映っていたけど……でも、あれは間違いなく芹真の記憶！

だって、異常なまでにコーヒーが映っているし、彼の視点なら納

得がいくものばかり……！）

狼の咆哮が空気を震撼させている。

ＳＲを完全開放したのであろう、その圧倒的存在感が放つ野生が脊髄通路にまで漂っていた。だが、その部屋には足を踏み入れることなく芹真の邪魔にならないよう務める藍は、最後に残っている大扉へと眼を向けて我が視野に飛び込んだモノを疑った。

実際に目撃する否定のＳＲ：メイトス。彼の経歴を文章でのみ知り得た藍は、彼を中心に形成された防衛陣を見た時は驚きを隠せなかった。

「哭き鬼の！？」

メイトスと目が合い、その間にある木目兵らを背後より強襲する。後ろより迫る藍に気付いて振り向いた木目兵を防衛部隊が撃ち貫き、防衛陣に集中する木目兵を藍が撲り散らした。

通路を確保したところでメイトスの脇に陣取った防衛隊員らが、新たに出現した武装木目兵に弾丸を見舞う。

「トキを、トキを知らない！？」

「奴なら中だ」

銃弾の直撃を否定しつつ、メイトスは指一本で銃撃という攻撃を否定して見せた。

「ありが――！」
「いかん、行くな！」

見えない圧力が全身を阻む。まるで不可視の壁にでもぶつかったように跳ね返されて藍は尻餅をつく。

「な、邪魔する気！？」
「そうではない！　死にに行くようなものだ、見過ごせるか！」

目に見えない否定意志の壁に護られた防衛隊の連携射撃が無駄弾なく木目らを削っていく。
否定の壁を張り巡らせたメイトスが、正面から襟首を掴みあげられる。
メイトス自身がここに留まる理由と、中に死があるというそのワケを、実に分かりやすく突きつけられた。

「分かるか？
会長が自ら世界の命運を決めようとしているのだ。お前も知っているかもしれない、この世界の真実を次の段階へ進めようというのだ。お前がそこに介在する資格があると思うてか！」

「トキを、人助けを捨てろというの……！」

その思いやりが混沌を呼ぶのだとメイトスは言う。

だが、ここでトキを見殺しにするつもりはない。世界の命運などに興味がないわけでもないが、それでも優先事項は戦友(トキ)だ。
メイトスには分かって貰えないだろう。私は戦争をしに来ているのではなく、どうしてもトキを連れて帰りたいだけだ。

「貴様……奴を好いているのか、或いは別に特別な感情があるのか!?」
「ないわ。でもこの魂は、戦う全ての味方を見捨てない、その為に長らえさせただけの価値しか持ち合わせていない！」

メイトスは再度言う。
それが哭き鬼であるお前の四凶であると。また、混沌が二つ渦巻いているそこへ行ったところで新たな濁流を形成するだけだと。
死であり、悪化であり、渾沌の深化である、と。

「自分の魂魄に、もう嘘をつかないと誓ったのよ。この命と鬼の力に於いて、意志の正すがままに鉄(くろがね)を振るうと！
それが私の戦いよ、トキを助ける！」

落胆に言葉を失ったメイトスから解放された手を側面に掲げ、両手に双焔を掴む。青い炎を纏わせた殺害のための、手加減無用装備。

「神殿の、奴らの戦いに……介入できるものならやってみるがいい。お前の速度では到底加われまい！」

背後から迫った吸血鬼を難無く裏拳で叩き落しながらメイトスは忠告した。
そして大扉を力ずくで（破壊という形で）開いた藍が、白純血神殿に一歩踏み入れたその瞬間にメイトスの警告を違う形で突きつけられた。

「これは……トキ？」

破壊した扉が次の瞬間には元通り閉まりきった。
純白の部屋に入った瞬間に脊髄通路の様子が見えなくなる。
メイトスがどんな表情でいるのか分からない。そもそも、廊下からこの部屋の様子もロクに見えなかったのだ。こちらの拍子が抜けたことは辛うじて悟られないだろう。
しかしだ、神殿なるこの場所で戦っていたのであろう二人の様子が奇妙だった。
左半身を殆ど無力化された状態で部屋の中央にある演台（？）にもたれかかるのは、見た目瀕死と判を下しても間違いのなさそうなトキであった。と、同時にコントン――何故敵もトキの姿をしている？――も右目と頭を両手で押さえて千鳥足を踏んでいた。

「クソ、クソォ！　何だこれは！？」

トキの姿をした敵――コピープレイヤ？　まさか、フィング・ブリジスタス？――がこちらに視線を向け、トキへと向き直る。

「失明だと？
何だこれは！？」
「クロノセプター」

呼吸も荒げて汗と共に焦りを露にする敵に、トキはまるで危機感もなく告げて立ち上がった。
感情の起伏を疑うほど冷め切った目のトキに悪寒が走る。

（そんな、瞬時に左の足と腕が元通りに！？）

これまで見たこともない力が働いていることに気付き、誰が援護を必要としているのか藍は一時でも忘れてしまった。あっという間に全身の傷が塞がっていた。嫌味にも思えることに、服装の欠損や血痕汚れまで完璧に消えていたのだ。
まるで痛みを感じていないかのように立ち上がるトキが、姿を戻したフィングと向き合って生死綴繋の切っ先を向ける。力を抜きつつも、その気配は万全へ意志を注いでいる。

「そうかゲーム、これはゲーム画面か！
よくも……よくも失明させてくれたな！この引き篭もり野郎が！」
「俺が引き篭もりなら、お前は死体大好き君だろう、確か」

二人揃って右手で右目を押さえ、相手の立ち姿を左目に納める。

フィングが今度はコントンに変わり、右手のデザートイーグルをトキ目掛けて連射。どこかふらついているトキを援護しようと、固まっていた身体を動かした――一歩――藍の視界から二人が消えた。

「え？」

直後に吹き回り始める風、風、鋭い振動。

身動きができなかった。

何かが自分の周りで起こっている。

おそらく姿を消したトキとコントン／フィングが何かをしている。

理解できるのはそこまでだ。加速の術を持っている藍でも、この場に至って思い知らされる。どんなに自分をクロックアップさせたところで二人に追いつくことは不可能だ、と。

（遠い！　速過ぎる！）

おそらく二人の衝突であろう空気の振動と乱流と微かな摩擦が、自分を中心に発生している。

助けに来たつもりで助けられているらしい。それを次の瞬間に飛び込んできた吸血鬼が証明してくれた。

「見つけたぞ！」

白純血神殿に新たな乱入者が現れる。それも藍同様に扉を力づく

で突破してくるような類のモノが。
翼を持った鬼が、金棒を持ったまま棒立ちしている鬼を見つけるなり空中より滑空して体当たりを食らわせた。
身体を部屋の中央に持っていかれる刹那、藍は目撃する。トキの持つ生死綴繋が、コントンの繰り出した二刀流を受け止め、右腕が槍状の兵装を飲み込む所を。目視できる停止に到った二人の戦いを。

「トキ、勝って！」

違う時間の流れで戦っているトキだが、黒翼広げて現れた吸血鬼の一撃を防いだ藍の言葉をしっかりと受け止めていた。
極超低速の白純血神殿が騒がしくなってきている。

（藍も頑張っているんだ、俺も……）

決意しながらだけど、少しだけ気分が良くなっていた。きっと調子に乗っているのだろう自分だけど、この感情だけは素直に受け止めたい。いつか一矢報いるものと決めていた相手に、予想外の反撃と善戦をしているんだ。コントンの時元脱存はもとより、コピープレイヤとの戦闘経験で掴めたことも若干ながら活きている。ＳＲを常時展開させておくコツも最初期に比べれば全く苦にはならない。
遠距離も近接格闘も今なら素人ながらに対応できる。コントンの時元脱存には相変わらずタイムリーダーの上掛けで対応できるし、フィングの再生による多様な戦闘形式も時間の武装具現と加速で防ぎ、反撃することだって出来る。

警鐘が強く鳴る。背後。
加速してコントンから離れ振り向き様に照準を合わせて銃撃。受けた弾痕がフィングの再生によってすぐに消えるが、精神的なダメージは回復しきれていないことが見て取れた。動きにもそれが反映されている。

「見えた」

自分のＳＲに出来ること。
圧倒的な戦力を有するコントンと十指以上の能力を可能とするフィングのペアを前にしても、臆病になることができないほどの自信を得た。自分の姿を装ったフィングの苦痛の叫びが、対抗心を芽吹かせて身体の主導権を奪ったコントンの怒りが、今まで失っていた自信と冷静を思い出させ、しかし何よりも重要にしてあまりにも基本的な現実を突き付けてくれた。

そう、彼らだって生命体なのだ。
終着地点は死であり、目の前に在る理由はそこへ向かっているからである。

（読まれている……どうしてこちらの動きがトキに読まれているんだ！？）

あまりにも当たり前すぎて、しかし彼らの持つ力がそれをどこかおぼろげにさせていたから全く違う生物として誤認識していたのだ。
それも勝手な誇大妄想にて、本来なら到達点として在るべきコント

ンの背中に不戦の敗北感を錯覚していた。だから、全力で立ち向かっていたつもりであろうと、そこに芯が通じるワケなどなく、故に温き抵抗であろうとそれまでが臆病者の人生であったトキは自らの行動に酔い、甘え、何よりも終着地点よりも遥か手前にある死を恐れて自らに安全圏を設けて変化を拒み続けてきた。

死が怖い。

人として。文明人として。

知的生命体として至極真っ当な本能であり、崇拝にも等しいある種の文化である。

それが故に、一度知った甘えは諦観までの境界線を遥か高みからの堕落招いてしまうのだ。

コントンだって生命だ。

フィングだって人間だ。

自分も例外じゃない。

ゲームオーバーはある。

逆に言えば、それを乗り越えた先のステージクリアだって、ちゃんと用意されている。

（フィングさん、コントン……さん）

現実と戦い続けてきた彼らは、しかしＳＲである。

先輩である彼らに対し、いま色世時という人間が示すべき礼節は何か。

真っ先に思い至ったものが存命、それから世界を乱さないように努めること。つまり、

「四凶になっても世界の平和を守り続けるように、どうにか頑張っ

て生きて見せます」

二人が加速する。

低速世界の展開。

対抗し、時元脱存でそれを突破。

「不可ｎ――！」

銃撃よりも速く静止世界の展開。

ゼロコンマ数秒後に突破。秒間にはまだ到らないものの、時間間隔は離され始めている。

「リプレイ！」

同じ姿に変わったコントンの繰り出す斬撃は双剣のシメントリークロス。

直感が無駄を避けろと警告を発している――かつてのトキとは違う――やられるぞ、と。

『クロ――！』

潜り抜けた斬撃の元、フィングの懐で右の拳を固める。

双剣を手放しつつ低速世界を展開、潜り込んだトキの頭頂部に腕を滑らせ、右手で心臓の裏側に狙いを定める。

ガチリ

そんな音をトキから拾いつつ――

耳に親しいその音をフィングから聞き取りつつ……

右手を頭部に当て――

右手を胸部に添え……

全霊を込めてフィング・コントンは叫ぶ。

善心を願って色世時は時間の手綱を握る。

「――ノ・セプター！」

「――ス・セプター！」

果たして、時間を吹き飛ばした二人の間に前後という概念は吹き飛んでいた。

――白純血神殿システムノア：通称“神机”――

勝敗の望めそうにない二人を見守りながらオールは演台に似たその装置の前に立ち尽くしていた。

白熱している戦いが鬱陶しい。

せめて一つの絶命を見届けた後に世界の改変を始めるつもりだっ

たが、いつまで経っても勝敗を決める一線を超えない二人に暇をもてあました体と意志が、全ての準備を調えようと動き出していた。

「保存開始」

次の世界に備える。

この二人のうちどちらか、或いは両人共に間違いなく次なる世界でも多大な影響力を持つ存在となるだろう。そんな危惧を見逃すわけにはいかない。場合によっては、勝敗に到らずとも彼らの存在を封じ込める必要性があった。

システム発動に伴う条件は、その傷都合は過度に近しくも理想の域を超えはしなかった。二人の戦闘が傷つけたノアの内部器官：白純血神殿。その壁には無数の弾痕穿たれ、床は刃物の爪痕が縦横無尽に走っていた。

（音と色と存在を支配してみたが、この感覚はまるで死だな。聞いてくれ、みんな）

これからこの部屋の中を全て凍結保存する。

トキとコントンはその戦闘が速ければ速いほど部屋中の変化に気付くのが遅れるだろう。二人の関係性も強く関わってくるだろうが、二人の間にある糸は実に堅く結ばれているらしい。

（そう糸のようにさ……マスターピース）

演台に見えたコンソールに両手を配置し、時間を無視して戦い続ける二人を見つめながら亡き後継者候補の一人を思い浮かべてオールは嘆息する。

理想的平和などない。

それはマスターピースという男の口癖であった。間違いなく若年と言える者が、組織の長たる椅子を有していたのも、そんな現実を知りながらも理想を幻想の隅に追いやらずに信じ続けた故である。協会にすら一目置かれる部隊を作り、組織化し、あからさまな脅威と成熟させた男の支配力は実に単純であり、それ故に誰よりも後継者として選び易く、信頼を置ける上に適任であった。

（人類は一体いつまで、この支配を必要とする？）

感情の果てに霞むものは、決して個体が到達できる場所ではなかった。零から始まり、無限を錯覚させるほど続く生死の繰り返し。その中に設けられる文明、必要とされてくる認識、意味や期待を込められて生産され、繰り出され繰り返される否定と変化の満干。

一つの死を見て繰り返さないと誓いながらも、創り直した世界の次なる障害に裁きを受け、深く沈んだ心を浄化する猶予もなく創造と絶望を繰り返す。それがオール・バースヤード達の歩んできた道である。人類はいつになったら次の段階へと覚醒するのだろうか。

自分の年齢や歴史というものに意味を見出せなくなって数世界、無限を思わす知人らの結末を見届けた結果心が死に底と隣り合い、創造という手段だけが希望となってしまい、その回数を重ねるごとに諦観と悲観がきつく首を絞めた。幾度繰り返そうが自滅してしまう人類、殺し合いを止めない種族を救うには個人の力はあまりにも小さすぎる。ＳＲであろうとなかろうと関係ない。

どうすればいいのか、どうすればある一定の“死線／示線”を超えられるか。

（戦争のない世界は有り得ないのだろうか？）

純白の部屋で唯一、影以外で黒色を示すコンソールを両手で操作し、時間凍結のプログラムをノアに命令する。即実行ではないが、実時間の流れからこの部屋を観察していた場合は即行と捉えられるだろう。元々時間の概念が世界で一番曖昧な場所なのであるから仕方がない。

いずれかが次の世界を変えてくれるだろう。良くも悪くも、今現在がターニングポイントであることに変わりはなく、変えようがなく、依然として希望と指すに相応しいものが存在しないのだ。

だから、時間凍結結界を発動準備を済ませた。

最低でも最悪を乗り切れるなら、絶望であろうと足を並べて歩む道を選ぶさ。

即時展開可能だが、問題はあの二人がそんな簡単に捉まるとは思えない点にある。回避は出来ないが、残された猶予で何をされるかは完全に予想不可能だ。

（――お～ぃ、結論からすりゃ、オレの話は聞いてくれないワケ？）

「ん？」

全ての意志に譲られていたと思っていた意思が、最重要期限を前にして停滞した。

オリジナルパーソンであるオールに問いかけるオウル・バースヤ

ードの彼は、最も若く、この世界の始まりと同時に産み落とされた人格であった。

（お前は確か、トキを導いた私だな。
――導くとかそんな大層なことしてませんて。山の中でお茶しただけさ。ちょっとミスマッチなティーパーティーだったがな。それよりいいのか、ここでトキを見殺しにしてもさぁ？）

ピタリと手を止め、真意を理解しかねる質問をのたまう人格に問い返す。

（いいのか、とはどういう意味だ。トキの死もフィングの死も大差ない。いずれからの混沌が未来に繋がるというだけの話だ。
――あぁ、なるほど。なるほどね、分かった分かった。アンタは偉そうに腰を据えていた“だけ”なんだな。それも深刻な情報不足に到るくらいの現実逃避をしてさぁ）

態とらしい嘆息をつくオウル。
記憶を共有することでオールはオウルの言う現実というものを叩き付けられる。

（深緑の中での接触で、貴様はトキの本質に触れたというわけか？
――本質とまでいかないが、それに近い願いを見たんだよ。そこから推測していってだな）

色世時のＳＲに深く興味を抱いていたのはこの世界を創造した最も若いオウルだけだった。そう、いまオリジナルパーソンと対峙する最も力なき人格がそうである。

（有り得るものか！　時間を操るＳＲ……それが派生、おまけだと!?

――正解。そしてな、トキ以外にも未来を託すに相応しい人間が、トキの周りに発生していることには気付いているか？）

オウルは言った。

色世時に関わった人間が、コントンなど比較にもならない速度で属性感染の最中にあったことを。だが、オールとてそれくらい感じてはいた。推測の域は出ていなかったが、コントンかトキのどちらかが深刻な感染源なのだと考え続けていた。しかし、決定的な違いは、二人が周囲に開花させる属性の違いにあるのだと、オウルは言って聞かせた。

「いいか、まずコントンのＳＲは四凶混沌であって、歴史的に見ても彼の純度を上回る凶は数えるほどしかいない。その純度が周囲に芽吹かせ、寄生させ、植えつける感性は悪性そのものだ。しかし、その悪性すら高純度感染故にそもそも何が悪かという基準さえあやふやにしちまう。例えば人を殺すことは悪いことなのか、仕方がないことなのか、それとも善いことなのか。こんな単純な問い、文化に親しいものなら子供でさえ答えられる」

命は大切、だから悪いことだと答えるかもしれない。いつか終わってしまうなら事故で殺されるも意思で殺されるも大きな違いなんてないから、仕方ないだろう、そういう脆いモノだといわれるかもしれない。或いは、生きていくのはお金が掛かるし無駄なことをたくさんしなくちゃいけない苦痛地獄だし、だらだら生きていても他人に迷惑なだけだ、だから不要な人間を殺すことは無駄の排除に繋がるんじゃないか、そう言い切る者だっているかもしれない。

「絡み合いの中で因果を限りなく負へと導く力がコントンなら」
（――ならば、トキの属性とはどう違うのだ？）

例えば、あるキャラクターが居ると仮定する。
そのキャラクターは物語の中盤で死という形で役目を終える、物語の主役の案内人的な役割だった。

「繋がっていくんだよ、トキのは」

何故そのキャラクターが死ななくてはならなかったのか。必要があるのか、あるとしたらそれは後々でどのような結果になって現れるのか、どのように絡んでくるのか、或いは思わせぶりな演出をしておきながらノーリアクション・ノーサプライズに終わるのか。
よし、物語を進めよう。
クライマックスを迎えるために進もう、どんな変革が待っているかもわからない未知であろうと、進歩を止める理由がない。進め、変われ、エンディングは遥か先にある、それを掴み、そのキャラクターの価値や評価を決めろ。それが、

「何といっても、奴は高難易度（ハード）プレイヤーだからな。ゲームも人生も、母親の性格に似てさ」

（――なるほどトキの前進や変化は年不相応な変化を与えるにしても、本人の価値がそもそも最低（ヘタレ）基準値に等しく、お前の維持してきたこの世界ではむしろ、若干でも平均的人間価値を下回っているわけだ）

有るか無しかの終わりまでストーリーに要素の絡みを要求するのがトキのバリエーションである。対するコントンはストーリーに展開を期待することもなく、示された題材を解いて流す程度にしか興味を抱かない。

つまり、興味の差が二人の属性の違いに色濃く影響しているのだ。その重点要因が希望的観測か絶望的観測かの違いでもあったりする。

真剣にオールは悩んだ。

確かに、色世時を侮り過ぎていたらしい。ふと視線を戻すと常速世界に戻っていたトキ二人が同じ姿勢、同じ武装のまま睨み合っているところだった。揃って満身創痍、ダメージは五分と言った様子だが、片方のトキは呼吸を荒げて汗を膝へと落とすほど疲弊していた。

（――結局何なのだ、色世時のＳＲとは。何が正体だ？）

「それを教えたら早まったことをしないか？　トキを生かしてくれるか？　彼は俺の大事なテストパーソンなんだ」

本音を開口したオウルの望みは唯一、トキに生き延びて欲しい。
ノアに保存するでも、コントンやフィングに殺されるでもなく、これからの人生を普通の人間として生きて、その果てに寿命を守ってからの別れを迎えて貰いたい。

（――まさか、絶対神判ではあるまいな？）

確信した。オールの絶望を取り払うには、やはりトキの力を教えてやるしかないと。

「いや――

“無限のＳＲ”

――それがトキの根底だ」

自信を持って教示したはいいが、それを聴いたオールは違う形で絶望を味わっていた。

第６５話 ― 白純血神殿の戦い ― （後書き）

「有り得るものか、なんてどの口が言うんだよ」

何故オリジナルがそういうのか、オウルにはいまひとつ理解できなかった。

「そもそも
“現実には起こり得ない、人の目では確認し得ない、知識の中だけにあって認識の外側にある概念を具現化した力こそＳＲである”
と、講釈伝播させたのは他ならない、オール・バースヤード。あんた自身だろが？」

更に絶望するオリジナルの放心にやりすぎたかなと反省するオウルだが、視線を戻すと自分に構っている余裕を見失うような事態が起きていた。

「ノア……え、何で“箱舟”が起動しているんだ？」

完全凍結機能がこの神殿全体に渡って起動していた。
部屋の随所に刻まれた傷口から、粘度の高い純白の血液が滲み出始めている。

「くそ……オリジナルめ、ホントに耄碌（もうろく）しやがってんじゃねぇのか！」

毒づきながら何とかシステムを止められないかとコンソールに目を落とすオウルだが、最もこのシステムの機能を把握できていない人格が我であることを弁えている故に、触ることさえ出来なかった。

「急げトキ！　全部ノアに飲み込まれちまうぞ！」

↓Ｎｅｘｔ　Ｌａｓｔ　Ｂａｔｔｌｅ（？）

第６６話－Ｇｏ　Ｂｅｙｏｎｄ！！－（前書き）

お久しぶりです。

仕事でやらかしまくっていたら、普段から遅筆であるのに更なる遅筆となりました、作者の鳥です。

とりあえず７０話くらいでＳＲＶを一旦区切ろうかな～と、どうにか画策していまして～

全然うまくいかなくて～

結局ダラダラ執筆練習と称して書き続けたせいで愛着というか、アレもしたいコレも死体という状況になってしまい、

その果てにエンディングを作れなくなっているのが現状で、

ひたすら消化不良確定の現状をどうにかしたいな～、と考えつつ、考えつつ、考えて、何も思い浮かばないという……　ｏｒｚ

前書きが長くなりましたが、もう少しだけ、現実と幻想のダンスパーティーにお付き合いください（どうにかあと３～４話くらいで終わらせて見せますから（汗））。

――　――　――　――　――　――

第６６話－Ｇｏ　Ｂｅｙｏｎｄ！！－

ここが終わりであることを知っていたら、きっと涙浮かべるほど切ない気持ちにはならなかっただろう。
彼女との別れは、波風の再来なしと信じていた私の心に貴重な衝撃をもたらすが、それを喜びと捉えることなどできなかった。

（ダメ、トキには回避できない……！）

白州唯の街における一般に総合病院という認識を一手に集めている楼塔病院は、しかし特定の人種にとって刑務所並みのセキュリティーを誇る安全地帯として水面下で名を馳せている施設でもあった。そんなＳＲが防御結界で固めた病室のひとつに、芹真事務所の準事務員である風間（カザマ）小羽（コハネ）は居た。
今日も最前線に身を置けない現状に歯噛みしながら、遥か遠い場所で暴走し始めているトキとコントンの戦闘を見守り、普段なら絞まりも緩みもしない精神が時化の狭間に放り投げられたかのように変動を続けた。
視力を失った瞼の裏に映る未来図は、トキのある部分の死を示したまま決定してしまい、予想だにしていなかったその結末に小羽はやり場のない怒りを抱いた。覆しようのない未来が待つ現実に絶望し、それでも、それでもどうにかして命を救いたいと考え続ける。

（私に出来るの？）

氷で作った模型飛行機を太陽に向かって投げ放つに等しい、結末を見ずともそれがどのような結果を招くかが手に取るように分かる。
そんな感覚であった。
風間小羽というＳＲの持つ力というのは。そもそも危惧すべき点が多く、しかも今回は芹真社長から直に参戦を見送るように釘を刺されている。

（でも……）

――もし、小羽がコントンを取り込んだら大変なことになる。それは分かるね？
分かります。
でも芹真さん、いま芹真事務所で四凶戦争に参加していないのが私だけという現実が悔しい。結局この力があるせいで私は外に出ることができない、誰かの助けになることもできない、この世のあらゆるモノを取り込んでしまうから、凶源の回避が人一倍難しい。だから具現化された四凶の居る戦場に入っていけない。さもなくば全ての元凶を取り込み、混ぜ合わせ、かつてないほどの凶源と、ソレからを溢れる哀落悲争がこの世を暗黒へと導くだろう。

（認めたくないんです、私だけが現実（そこ）に居られないなんてことが。
認めてもらっているようで本当は認めてもらえていないような今が。
トキでさえ立ち上がったのに、立ち向かっているのに、私だけが未だに無力なことが……だから、お願いです）

初めて出会った時に芹真さんと藍ちゃんが何て言っていたのか、いまでもハッキリと覚えている。それはある意味で人生最大の衝撃だったかもしれない一言――メイトスという男に対する切り札が君だ――初めて私の存在を必要としてくれたその一言があればこそ、ベッドの上での生活も苦に感じず受け入れることが出来たのに。

そう。

私は完全否定に対抗する能力者、完全受容のＳＲ。自らの身体を蝕むような他人の病気さえ無意識に取り込んでしまう、制御の始めが遅すぎた壊れモノのＳＲ。少しでも希望を与えてくれた芹真さんたちの力になろうと、他人のＳＲ能力を受容し、受用する領域に達したコピープレイヤー。

（私を戦わせてください、ヒトの助けになりたいんです……！）

状態の悪化した四肢は力さえ入らない非動物であっても、この意志を侵す病には幸いなことに罹患していない。

意志によって発動する類のＳＲであれば制御は易いが、あらゆるモノを取り込んで最早純性に欠いた能力は、素直に自分のものだと言い張る自信がない。それだけ穢れきってしまった力を宿した身ではどんな災厄を招くか、預言者の力を取り込んでおきながらも自ら測ることが叶わない。

（皐さんを……トキのお母さんを！！）

そこまで分かっていながら風間小羽は死を辞さない選択を決す。

元々長らえる理の中にあるまじき命だったのだ。いまさら捨てることに未練はない。それよりも、風間小羽が色世トキを生かした理由の一つである彼女が死ぬというなら、本来有り得なかった悪影響を世界に及ぼしてまで生き長らえた意味が大きく消失してしまう。

（せめて彼女の意志だけでも！）

私は彼女が好きだった。強くて優しく、そしてぶれることなく立ち塞がる全てを吹き飛ばし、絶望と希望の選択から一切の暗黒を消してみせる絶対の領域に君臨する審判。絶望の中でＳＲを育み身に着けた私には魂が揺らいだほど強烈な光を放つ存在だった。とうの昔に失明したはずの瞼の裏にまで姿を見せ付け、触覚を失った四肢に温もりと痛みを、聴覚には優しい言葉と音色を、味覚と嗅覚には持てる最大であろう愛と柔らかさを、総じて死体と指して語弊が生じない私に、生色を思い出させるほど私の中に蟠っていた闇を悉く忘れさせてくれたのだ。

そんな大事な恩人が死ぬ。

せっかくトキの中に生きているのだと知れたのに、間接的に再会できたというのに。

よりにもよって、確定と分かってしまう自分の中に“受け入れた／取り込まれた”正確無比な稀代の予知能力者のＳＲ、その片鱗のせいで見たくもない次が見えてしまったのだ。

「――解放」

まずはこの体をどうにかしないことには戦場に赴くこともままな

らない。
色世皐が宿生しているトキの延命は、彼女の救出も同然だ。敵がコントンである以上、戦いが膠着して長引くことなど有り得ないだろう。
ゆっくりとSRを解放していく小羽は、確実に四肢が自分の思うがまま駆動してくれる感触を覚えながら、頭の中では遥か彼方海の上で繰り広げられる一大決戦を俯瞰の景と捉えていた。上空に居るドラゴンのような巨大生物、低速の檻に捉まっている広範囲地区、船舶の残骸より形成された流骸海域、戦いの最前線、中央にそびえる巨大な樹、戦場全体を広く囲う超広範囲魔方陣。
広域の度を越えたその戦場に、小羽は的確にトキのSRを感じ取って映像を拡大侵攻させた。あらゆる摩訶不思議を跳ね返すノアの鱗を透して脳裏に届いた映像は、協会長に見守られた二人の対決であった。その対峙は想定のうちであったが、しかし、

「コントンが、押されている?」

そこに生じていた結果は風間小羽が予測していたビジョンの真逆であった。
映像がそこまで伸びる。
奇しくも風間小羽と同じ結論を描いていたコントン自身も、いま白純血神殿で明瞭な優位に立つトキを見上げながら逆転している現実に疑問を抱かずにはいられなかった。

(いま、何をやられたんだ!?)

相互の時間が往来し、クラッシュした時間が二人を吹き飛ばす衝撃波を生んだ所までは覚えている。その時、トキは自らもコピープレイヤとして立ち回ろうという気概を纏っていたこともクロノセプターで読み取れた。しかし、彼の演じる攻撃はまったくもって予想の範疇を逸脱していた。

弾け合ったあと、コントンが見たものは液状化して消えるトキだった。後方に飛ばされながらも上手く着地し、そこから時間による加護の加速を得て追撃してくるだろうと予測していた。それ予測があってこそ、まさか物理崩壊も同然にトキが液体と化すその光景は、これまでのトキはおろか時間をどのように扱えば自身の液体化が可能になるのか理解が追いつかない。しかも無色透明に加えて液体と消えたトキは影も形も残さないで視界から消えていたのだ。

その直後に前後左右に現れた、いつも通りの色世時の何事もなかったかのような、穏やかにさえ見て取れる表情に直感が危機を覚えて思わず左右と前方のトキを撃ち抜き、その場から前へと飛び込んで逃れた。左右のトキには双剣を一振りずつ突き刺し、前方にはデザートイーグルによる銃撃、背中のトキは間に合わないと直感できたから飛び退くことで嫌な予感を回避したわけだが、あと一呼吸分でも遅かったら行動不能に到る致命傷を負っていたであろう。背中を浅く切り裂いた日本刀：生死綴繋の冷たい感触が全身の汗を噴出させた。

更にトキの時間が続く。背後に残っていたトキがそのまま直進して追撃してきた。生死綴繋を頭上へと投げ放ち、両手に愛用している拳銃のＢｕｌ　Ｍ５とＳｐｈｉｎｘ３０００を創造して乱射しつつ、同時に分身体を左右と上方に走らせる。全てが本体ということは有り得ない。いや、それよりもさっきの液状化やこの分身は、いかなる時間の使い方をすればこんな魔法使いにも匹敵する怪奇を起こせるというのか。

デザートイーグルの銃口を急所に定めて正面から迫るトキを撃ち――霞と消える――次に左右のトキにも同様の攻撃を加え、最後に

残ったトキが生死綴繋を携えて上空より滑空斬撃を放つ。回避は容易でも、数少ない大きな隙を無駄にせんと銃口を合わせるコントンだが、射線と標的とが一致するまさにその瞬間、黒い煙のような何かを空中に残してトキは消えた。

（これがトキのコピープレイなのか！？）

全てが突拍子もなく行われ、しかし全てが精神的にも肉体的にも致命傷へと至らしめる布石であることがハッキリと感じられる。チェックメイトをかけられそうなのが自分で、それをかけようとしているトキは自らの行動をコピープレイヤになると自覚しているらしいが、その点がかえって腑に落ちなかった。ＳＲと出会ってハッキリ間もないと言えるトキが、芹真事務所の伝手であらゆるＳＲと交流して来たにしてもここまで特異なＳＲとの交流経験があるとはとてもじゃないが思えなかったのだ。芹真事務所で行われていたトキの訓練については何度か覗き見に行ったこともあるし、協会本部に提出された監視報告書を盗み見たこともあった。格闘戦から銃撃戦まで一通りこなしてきたトキは、普通ならありえないことに学生の身で、ＳＲ同士の戦いも何度か経験はしている。してはいるが、相手は大抵が雑魚も同然なＳＲばかりと聞いた。

仮に訓練相手を務めた者たちの動きを真似しているとしたら、そもそもトキはこれまで何度か見せた苦境・苦戦を演じていたということになり、それはわざと本気を出さずにいたと言うことになるが、それではこちらが用いたクロスセプターで得た本人の感情との間に殺意の温度差という矛盾が生じてしまう。かといって芹真事務所の仕事伝いで交戦したＳＲたちの中に特異性を持ったものが居なかった。ＳＲという個性の中で更に研磨された個性を持った人物はいたが、それでもトキが行使した力に該当もしくは類似する能力者はた

だの一人もいなかったのだ。
ならば、トキは一体誰の動きを再現しているというのか。

「なるほど“ゲームキャラ”か」

背後を取ったトキがコントンの後頭部へ放った打撃は、紙一重に躱され数本の頭髪をさらうだけに終わるものの、トキ自身の行動は更に連続した。オウルが見て分かるだけでも最低4キャラクターのアクションを完全に再現している。それらの連携に無駄はなく、実に自然な組み合わせでコントンを防戦一方の状況に追いやっていた。

（でもそれが現実でどこまで通じる？）

優勢は紛れもなくトキではあるのだが、それでも両者の武装を鑑みれば拭いきれない不安がトキを助けにいくべきだと囁き続けて判を惑わす。デザートイーグルと生死綴繋、その二つには決定的な違いがあった。双方人体への攻撃力は見る分に五分だが、戦力保有時間を見れば血糊さえ鮮血と蘇らせて滴らせる生死綴繋に、有効射程距離という点で見れば銃器であるデザートイーグルに軍配は上がる。問題はその分かりきった点の延長線上の概念で、デザートイーグルが通常兵器であるのに対し、生死綴繋はいわゆる妖刀とカテゴライズされる幻想を現実に変える特殊武装なのだ。そこに実戦経験値の差が加味され互いの武装が入れ替わった場合、一転してトキが死地に追いやられる可能性が十分に考えられる。現実に、コントンにはそれを成す力もあるのだ。

（フィング、それにトキ……ふざけやがって！）

コントンは敵を侮っていた自らを引き締め、イメージを水の中に沈めていく。そして冷静への喫水を満たしたところで反撃を仕掛けた。

鬼（アイ）の姿を装って右手にデザートイーグル、左手に炎の金棒・理壊双焔破界を構え、一瞬にして突撃してくるトキに背中を向ける。

（トキの分際で、だと！？）

（……なんだ！これは罠か、どっちだ！？）

背中を向けたコントンが銃口を未来位置へと向ける。

決闘の最中に見せた背中は、果たして斬り込むべきか逡巡したトキではあったが、ガチリと打たれた警鐘を信じ、コントンと交差する時には逆に防御の姿勢を取り、手遅れに到ってから気付いた。

銃口こそこちらの背中に向いたままだが、肝心の得物はホールドオープンしたままその身に高い熱伴わせていた。武装を生死綴繋の両手握りに切り替えて、消えた銃弾を視界の中に探す。流石に見つからないということはないし、白一色で統一されたこの部屋では金属の鈍い輝きはさした迷彩効果も発動し得ない。

それでも警鐘は、コントンの脇を潜り抜ける時よりも遥かに強く訴え掛けたのだ。

どうやら空中に放り投げられていたらしい弾丸は、突如として空中で一斉に向きを変えて標的を統一させ、そして撃鉄さえ存在しないはずの空中から、銃身やその代替すら成立しない条件で正確に左腕へと疾駆した。

「――ッ！」

痛みもさることながら、衝撃の方が遥かに大きい。

いくら怪異を見慣れてきたからといって、痛みを意図的に消すなど極端な変化は生じるものではないし、そもそも数百年の時を戦い抜いてきたコントンとは現実の捉え方が違うのだ。

銃口は間違いなくこちらに向いていた。それなのに銃撃がやってきたのはコントンの居た位置から更に後方の、それも上下からであった。

考える間もなくコントンが踵を返しながら金棒を振る。

（やっぱり反撃させちゃマズい！）

再び警鐘が危険を報せる。

片腕で刀を振り上げて下から金棒の軌道を反らす。次の瞬間に、コントンは自分と同じ姿に変わってデザートイーグルを手榴弾に時間分解して変換し、信管を抜いて手放した。

二人の中間地点に放たれた爆発物に、警鐘がより一層高い危険を告げる。

（……逃げたら、またコントンのペースに戻るか！）

その結論に至ったトキは、タイムリーダーを発動し、空中へ寝か

せるように置いた刀が落ちる前にと、手榴弾目掛けて右腕を伸ばした。その時響いた三度目の警鐘は、かつて死に直面する時のみ発動した強烈な予告であった。

（ヤベ……！）

コントンは、読んでいた。

いくら経験を積んだところで所詮は素人であり、学生であり、未熟である。

一度失くしかけたペースを餌に選択を違えさせる――それは賭けであったが、ペースを失いたくないのはコントンもまた同様だった。“体の主導権だけをフィングに奪われている”現状で、コントンにできることと言えば我が身と呼ぶに不遜なるこの身の行動速度を加減する以外にできることがなかった。

四凶の種を蒔けたのに、ここでその芽を刈り取ってはそもそも戦場の渦央に臨んだ意味が失せる。さっさと逃げるか大人しく殺されるか、とにかくトキがコントンとして成長する条件を満たせば全てが順調と言えたのに……

（フィング・ブリジスタス、やめろ！
トキほどの混沌、そうそう見つかりはしないぞ！
また戦争の手間が増えるだけだ！）

トキの右手を掴むのは、フィングが扮したトキの右手。

瞬時に交わされるクロスセプター。

二人の掌に挟まれた榴弾が火炎と衝撃を辛うじて漏らすが、現象

を時間として分解する掌、それも二人分に吸収された卵形の近代兵器は、僅かな破片を地面に残して二人の距離を文字通り爆発的に開けるのみに終わる。

「が……っ！」

吹き飛ばされて背中を擦るトキにコントンは舌打ちした。フィングの目論見を邪魔せんと火力を増大させた手榴弾が、自身の体に予想以上の負荷をもたらしてしまった。右腕の感覚が半分死んだ。間違いなくいまの爆発はクロノセプターで無理やり抑えるべきじゃなかった。

しかし、そんな意志を鑑みることもなく、体はひたすらに前進する。

トキが起き上がるよりも早く、タイムリーダーによって空中に寝かされるよう置かれた日本刀に手を伸ばし、本来コントンが熱望していた一振りの奇跡を手にする。

（なっ、ここで生死綴繋を取るなど！）

しかし、それはトキを生かしたい現状では全くもって最悪の事態であった。

あれは生を死に、死を生に、本来原因という線で結ばれる結果を、例えどんなに複雑な経過を未来に残していようと、必ず辿り着くべき結末を直ちに結決点化させるのだ。どんな現象、どんな輪郭、どんな色彩であろうと無差別に、全てを等しく、終始を無慈悲に斬り結ぶのだ。

金属であろうと、肉体であろうと、魂であろうとも差別はしない。

「くぅッ！」

クロスセプターで藍からその情報を事前に得ていた故に、トキはあらん限りの力で時間を纏うことによって生死綴繋の一撃を避けた――刃が透過していった？――どうにか肉体面での損傷を免れることには成功する。

元々藍は、生死綴繋を“除霊”に用いる最高霊装として使用してきた。彼女の記憶どおりに評価するなら、生死綴繋の物理攻撃力は金棒のそれらに大きく劣るそうだ。除霊や死人返しを可能とする奇跡的面と兵器としての平凡性こそが、生死綴繋の強みでもあると主張された。

無事に斬撃をやり過ごしたのと、上体を起こして次に二足を地面に立てたところで新たに現れた何者かの存在に気付く。

（なんで……？）

背後へと通り過ぎたコントンを追撃せんとし、地面に伏すように現れたその影にトキは蹴躓いた。

（……って、ヒト？　女性！）

藍ではなかった。ましてやボルトのような長髪を持っているわけ

でも、金髪を輝かせているわけでもなし。しかし、両手で押さえられた腹部より溢れ出る鮮血に濡れた短髪の黒髪は、ハッキリとトキの記憶に刻まれた、ある人物のものと一致した。
おそらく生死綴繋の斬撃が彼女を切り裂いたのだろうと、そう理解するのに時間はかからなかった。
腹部を押さえて蹲る彼女こそ、

「母さん！？」

目じりに涙を浮かべながら、血溜りにうずくめて汚れた顔半面さえ笑顔の為に総動員させる。
彼女こそ、色世皐（しきよさつき）その人だった。

（今更色世サツキを殺せたからといって、この世界の混沌は免れないまでに育っているんだ……！
どうして抵抗を続けるんだ、死にたがるんだ、フィング！　トキ！）

起き上がって母の体に手を伸ばしたトキの右手に、フィングの銃撃が突き刺さる。
次第に輪郭ごと色を失っていく色世サツキが、一瞬の苦悶に顔を浮かべるものの、次の瞬間には過日の彼女を知る誰もが見慣れた底抜けに明るい笑顔がトキを迎えた。

「バイバイ、トキ――」

衝撃で脱臼した指数本を僅かに回復させながら、再び手を伸ばそうとするが、遅かった。
時間を与えるだけの時間がなくなっていたのだ。

「――これから、ちゃんとした親離れになるから――」

最後の最後に仰向けになった色世皐が挙げた手は、とても小さく、しかしひまわりのように大きく指を広げられた力強い母親の手だった。

「――頑張れ！」

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｒｅａｌ／Ｖｉｒｔｕａｌ

－第６６話－

－Ｇｏ　Ｂｅｙｏｎｄ！！－

トキとコントンの対決が閉塞を形成する、まさにその隣で藍は吸血鬼2体を相手取っていた。

ただの吸血鬼のSRではない。協会の中でも一目置く吸血鬼勢力の頭領、ニルチェルト・エンデバー直属の親衛隊二人である。常識離れした怪力に加え、有翼種独特の空中機動はそれだけで危険の度合いを一回りも大きく膨らませている要素ではあったが、それでもニルチェルトの親衛隊は予想していたレベルの戦力として現実に収まっていた。

（遅い！）

再び視界からトキが消えたということが、つまりまだ戦えているということに気付いたのが十数秒前。

爆風を側面に受けつつも、より爆心に近かった吸血鬼を盾として残るもう一体に双焔を投擲して足を止める。

「奏淵（そうえん）！」

爆風から再帰した吸血鬼を、超音波でもって平衡感覚へ迎撃を入れる。

本来なら、吸血鬼は単純な腕力一つをとっても敵うことのない相手であった。しかし、戦場のこの局面に至って新たな力を得た藍は、それまで不可能だった戦法を実装し、思う存分発揮していた。それまでは切り替えに何らかの媒体を必要としていた金棒、リカイソウエンの瞬時切り替えがここに到って一切の媒体を要さず成功するようになれたのである。

思い返せば戦火の中で藍が得たものはこれが3つ目だった。兄との再会、天段：砲千華（ほうせんか）の取得、そしてリカイソウエンの神速移装。

（いける……いまなら吸血鬼を圧倒できる！）

対コントン戦に備えてきたトキの訓練を見守りながらも、訓練相手に不足していたからこそ藍はここに来て急激な変化を、兄との再会や姉妹との共闘も大きな要因ではあるが、それでも確実な成長を遂げたことを実感していた。

「クッ……小娘がぁあ！」

「刈り取れ！　俺が抑える！」

（トキを護る！）

それが、芹真事務所の家計簿を救済してくれたサクラ　ツツジという男からの依頼であった。そして、その一番槍、或いは盾を務め

よと命を受けたのが私だ。芹真は色世トキの事情と水面下の状況把握に努め、ボルトには牽制を、ワルクスには協会という巨大な情報源からの協力を得て、衝突もあったがどうにか護れてはいた。コントンに一度殺されかけるまでは。

「蒼媛（そうえん）！」

足元へのタックルと空中からの回し蹴りを、蒼き媛の力で強引に回避する。

鬼の体が突如として実体を失った。まるで霧のよう、それが吸血鬼が四肢に覚えた感触であった。両極から挟み込むようにして上下への同時攻撃を仕掛けるまではいつも通りであった。幾度もそうやって相手のペースを崩す布石や決定打として連携してきた二人だが、鬼の類相手に、まるで幽霊も同然の感触を食らうとは予想だにしていなかった。

（なじむ……蒼媛が、私を押してくれる！）

透過能力の発現は、体験してみると奇妙な後味があった。自分の体にぶつかるべき質量が、まるでスクリーンに投影されて映像という意味を成す光線のように、交差しておきながら決して衝突することがない。

果たして、光線たるは自分なのか相手なのか、湧き上がる模糊の中、哭き鬼の最高権威者にのみ継承される蒼媛は好機と震えだしていた。

金棒でありながら術者を意図的に強化させる蒼媛が、ＳＲを完全

解放した藍に更なる力を呼び込む。腕力差だけで大の大人と小学生程もあった両者の身体的決定点が、両手に蒼媛を構えた途端に劣勢を覆して膠着をも憚(はばか)らぬ関係へと変えていた。

「攻撃させるな！」

「分かって！！」

吸血鬼2体を正面に構えてそれぞれの拳撃を悉く蒼媛で叩き防ぐ。蹴り足には乱杭歯を突き立て、組み付きには蒼媛の前払いによる両腕の叩き落しと頭突きで迎撃を、その隙に迫ったローリングソバットを最大威力点に達する前に蒼媛の突きで蹴り足を止め、矢継ぎ早に脇腹を突こうと横から迫った突進を透過して躱す。

もつれ合った吸血鬼は、しかしすぐに翼を広げて自由度の高い空中で体勢を整える。翼を打ち込む左の吸血鬼を透過しつつ接近し、

「くッ！」

腹へと鋭く重い一撃を見舞う。背後から首筋に掛かった手も、再び透過して回避する。

結局吸血鬼の2人は哭き鬼に触れることすら敵わないまま、自慢のタフネスだけを武器に何度も撲りかかり、掴み掛かり、しかし一撃でも食らわせることなく空中へと避難して乱れた呼吸を整え始めた。

（いける、これが――！）

これが藍の“秘めたる／姫たる”力。

鬼という種族の中でも古き伝統や思想に囚われることなく、新たな風潮を望んで哭していた者たちを集めて生まれた哭き鬼という混血が拓いた結果である。それは闘争心盛んな鬼という生物の根本を否定するような在り方でもあり、見方を変えればその姿勢はむしろ人間の生みだした文化のまさにそれであり、鬼の界隈において生命の価値を見直す新たな風潮を呼び込む斬新な存在であった。戦争嗜好の黒鬼も、権謀術数な白鬼も、決闘・殴り込みが日常の赤鬼も、とにかくあらゆる鬼から例外なく自分達の種族を離れた鬼が集まり、その集団が今日の哭き鬼の祖となった。他の鬼種との決定的な違いは、まさしくその異種交配にあり、その経歴の中にはかつて陰陽の道を極めた者達から、鉄細工の職人、呪術師から教師という職種の、千差万別の、しかもただの人間との交差さえあった。

鬼が他の種と交流する役割を果たすための、力の衝突の場においてもその姿勢を維持するため、あらゆる力を前にしても輪郭を失わないための透過能力とオリジナル陰陽術。それらをダイレクトに表現する金棒が今まさに藍の手に収まる武装なのだ。

「こんなところで！」

牙を剥き出しに特攻を仕掛ける吸血鬼の顔面に、一切の予備動作を視認させない高速でもって鉄塊を打ち込む。速度だけを重視した一撃は、本来の金棒の質量に常識では有り得ない速度も加え、吸血鬼自慢の人骨さえ噛み砕く強靭な顎関節部を破壊し更に脳までその衝撃を届けた。続く鋭爪の先駆ける手刀と鉤手を透過して躱し、懐に飛び込んで思い切り金棒で股間の閉差点を殴り上げる。が、

（小娘……しかし、やはり攻撃の時は実体化するな！）

吸血鬼も素人ではない。

十字受けで止められた金棒を透過させ、掴み手を紙一重で避ける。

攻防の合間に生じる隙を気付かれた以上、吸血鬼の対応も変わるだろう。

次の瞬間には予想通りにカウンター狙いの臨戦態勢を見せ付けて吸血鬼は距離を保った。

一筋縄でいかないことは重々承知だが――

（トキ、急いで！）

脇目に見やる。

仰々しい装置はおそらく諜報で直前に得られた“システムノア”だろうと分かるが、部屋の床や壁、天井などに刻まれた戦闘痕から滲み出る白い液体は全く未知の物質であり、本能的に触れることを拒絶したくてたまらない。それどころか、今すぐにこの部屋から避難したい衝動があるくらいだ。戦闘を阻害しうる要因はシステムノアよりも、白い液体の方だと思えた。

（急がないと……足場がなくなるわ！）

液体の粘度は水のそれと比べれば高く、拡散速度は目に見えて遅

いものの、白い液体の圧倒的違和感はそもそも速度とは関係無しに本能へ逃げろ警告を叩きつけてくる。その上、トキとコントンの戦いは自身と吸血鬼の戦闘以上に周囲へ及ぼす影響が大きく、また多種にわたり、高速で随所に痕を刻んでは白液の漏水点を増していった。

「何……？」

ふと、高速戦闘を一段落させたらしいトキとコントンの中間、二人の狭間に見覚えの第三者が伏していることに藍は気付き、つい戸惑いを見せてしまう。その姿は紛れもなく協会のＳクラスブラックリストに名を連ねたことのある女性、色世サツキである。

藍が戸惑ったのは、個人としても少なからず因縁があるため。だが、しかし何よりも協会長やボルトと並んで負傷した姿を連想できなかった人物が深手を負い、それどころか今にも事切れんばかりの力無さで何事かトキに向けて話している。

（何故ここに彼女が！？）

色世サツキは死んだはずだ。

まさかノアの中に隠遁でもして、実は生きていましたとでもいうのだろうか。

――有り得ない。

色世サツキの死はＳＲ界に大きな波紋を呼び、彼女のシンパは躍起になってその真相を確かめ、揺るがしようのない現実だと打ちひしがれたというのに。かく言う藍も、少なからず衝撃を受けた人間

の一人である。リターンマッチ敵わぬ相手を想って沈んだ時期が間違いなくあった。

（絶対神判だと！？）

対峙しつつも吸血鬼とて意を払わずにはいられなかった。憶隅に見覚えのある怨敵に近似せし伏せ者は、過日の因縁当人であり、驚愕を呼ぶに容易いほど、しかし度し難いほどに死に体であった。

かつて絶対神判と恐れられた女が、いつの間にかこの戦場にいて、気付けば死傷を受けて蹲り、そんな様態でシキヨトキに話しかけている。一刻も早くトドメを刺すべきなのだろうが、僅かでも隙を見せた途端に哭き鬼の小癪な攻撃がペースを奪っていくだろう。いまある流れをこれ以上悪化させないためにも、状況の維持が最善である。そう理解できるものの、やはりもどかしい部分であった。

「ほう！　ほうほうほう、なるほど！
そんな所にしがみ付いていたというワケか、絶対神判！」

藍、吸血鬼と続き、コントン／フィングも彼女の存在に気付く。
トキを斬ったはずなのに気配が消えていなかったから振り向いてみれば、実に面白い事態だった。
呆然とするトキと彼女に体を向け直し、トキの背中に視線を注ぎながら右側へと歩みだす。

「絶対神判の力で己を他人のＳＲの一部とすることにより、極めて

限定された時間を得たということか」

トキには、敵がフィングなのかコントンなのか判別する余裕がなかった。

混乱の中で再会し、会話し、今度こそ完全なる別離になると悟った母を前にし、渾沌とした思考はついに凍結へと到る。

「だが、次はない」

仰向けになった彼女が伸ばす手をデザートイーグルで撃ち抜いて止め、更に心臓部へ一発見舞うと輪郭の消失は容赦なく加速した。

（まずいか？）

完全に停止したトキを前に、フィングの口体は止まらない。

表情を残した輪郭の最後の一片を踏み潰し、ガラス細工を散らすが如く色世サツキの消滅を見送った四凶は、茫然自失と腑抜けているトキに蹴り足を放つ。なんの変哲もないただの前蹴りだが、戦意を見失っているトキには十分過ぎる威力であった。真横から迫った蹴り足を受けることも躱すこともせず、トキはフィングのエネルギーを前に体勢を崩した。

（“殺し／生かし”甲斐がなくなったかな？）

戦場に飛び込んでからというもの、トキは激戦の中を何度も潜り抜けてきた。二十歳にも満たない、それも学生がだ。肉体的疲労をクロノセプターでどうにか賄えても、心的疲労を紛らわす術をトキは持ち合わせていないのだ。しいて言うならゲームではあるが、この場においてそれは望めはしない。そんな猶予もありはしない。

（母さんが、俺の中にいたってことか？）

蹴り飛ばされたトキの心に重く引っかかっているのは、消滅間際に母が見せた笑顔だった。

トキが目の前で母を失うのはこれが二度目であり、しかも二度とも母に護られたのだ。自分のせいだと、思い込まずにはいられない状況で。

「トキ、知っているか？

色世サツキに限らない、協会長に限らない、誰もが歩く罪人であり、それなのに誰もが幸せにならなくては満たされない――これが、人類が文明の中で築き上げてきた対凶思考にして四凶深化の要因にもなってきた事実であるのだと」

幸せのためにも欲望を。

願望の実現を幸せと指そう。

願いも欲も違いはない、必要性という母はとても文明的な親なのだ。

「・・・・・・」

停滞していた思考が僅かに、遅まきながらも回転を再開した頭で、トキは自身が血溜りの上で仰向けになっていることに気付いた。

ここにきて何度目の疲労感だろうか。

もう疲れた。

戦争での疲労が肉体よりも精神面での方が遥かに大きかっただなんて、ゲームの画面からは予想だにできなかった。仮眠も、栄養摂取も効果がないとは。

（そうだ、当分ゲームは戦争モノを買わないようにしよう、いやバトルもの全般控えよう）

たまにはパズルやテーブルゲームの類も悪くないかも。将棋やチェス、トランプなんかバリエーションが多く、人生ゲームや街や牧場の育成ゲームなんか長く打ち込めそうだ。そうでなければ、翼から借りたアダルトゲームというものも意外と面白いかもしれない。

「誰もが悪で、本質たる欲望の正当化こそが正義に他ならない！フフフ、聞こえているかトキ。ここに在って正義を持ち合わせていないのは、唯一シキヨトキという個体だけだぞ？」

ゆっくり、遅々ながらも回転数を上げていく頭が、触れたくない現実を塗り固めていく。

いつ以来という感覚もあり、日常茶飯事という感覚もある、寂寥と隣り合わせた浮遊感。
現実に居たはずなのに、まるで夢心地の只中。
ここに居る自分は何者か。
そもそも何者かとして成立しているのか。
輪郭は？
色彩は？
そもそも立体か？
疲れに焼ききれそうな思考回路が、ここに来てついに自棄てしまう。
何かが起こったことは理解できる、でもその内容を知りたくはない。
しかし、無情にも訓練したことによって冷静を取り戻すことに必死な思考回路は、現実に触れざるを得なかった。

「……ハハハッ……」

だから出す。
これも訓練で知ったことだった。
零か百ではなく、安定か不安定か。
それが変わるということ。
だから、出し切る。

「止まれ」

察したコントンが銃口を向けてくる。

視界の隅に映るは藍と、その対決者。
そして見えないはずの協会長を知覚。
次に手繰った時はノアの脈動だった。
対抗して時間凍結を抜けるコントン。

「なぁ、おい。コントン」

一瞬の静止世界。
それが脈打ち、世界を包む。
広がるその波紋に四凶は初めて怯んだ。
それは時間使いならざる力。
一度は憧れた力。

「お前倒すよ、もう限界だ」

立ち上がってすらいない、右手も指数本が折れ曲がったまま。
そんな状態のトキの言葉を耳で受け止めつつコントンは知る。
異常な流れの時間がこの空間にのみ展開し、流動していると。
いままでと明らかに違う。止まっているのに動き出している。

「何だ……！」

最初に悲鳴を漏らしたのは吸血鬼だった。ＳＲの完全解放に伴い
伸長した刺爪が、堅靭な両翼が、見えない力に固定されて身動きが

できなくなってしまったのだ。
そんな行動不能に陥った吸血鬼に気付いた藍は、突如として始まった現象を直感して解し、“一切の武装を放棄”して吸血鬼へと素手で殴りかかった。

（全ての武装が凍結――知っている、これは私も見たことがある！）

タイムリーダーの効果だ。
範囲は白純血神殿の全てだった。
トキが選んだモノは全ての武器。
凶器や兵器として認識される物。
カテゴライズされたそれらの時間を一時凍結した結果が、まさしく今である。
藍が最初に目撃したのは、初めてトキと顔を合わせた、本当に最初の最初だ。
あの時凍結したものは雨だった。
誰も凍結せず、雨だけが止った。
以前も今も、その中心にはトキ。
時間を統べる力の具現だ。

トキが選んだ時間だけが止る。

フィング・コントンも遅れながら直感したその力の波動に、悪寒を覚えた。
あれは確実に命を落とす布石だ。
この力は間違いなく四凶を深化させる。
上体だけを起こしたトキに向けていたデザートイーグルと生死綴繋を手放す。兵器武装への固執は吸血鬼の同轍を踏むこと間違いな

い。

「ちょっと待っててくれ――」

地面に両手をかざしたトキの視線はまっすぐコントンの姿をした、しかしフィングの思考によって動かされる四凶に注がれていた。

胸騒ぎがする。

トキが勝つという予感がある。

あるのに、それでも戻ってこないという、理解が及ばない時間が纏わりついてきた。

「藍、次の模擬戦で君に勝ちたいんだ」

自棄になって突撃を敢行した吸血鬼の、隙だらけの後頭部に一撃を見舞ってを気絶させる。

意表を突かれたが、それでもトキの言葉にはしっかりと私の名前が挙がっていた。

「……なにそれ、だったら帰ってくること！」

言い残して睨み合う二人から視線を外さないよう、吸血鬼を引きずりながら慎重に後ずさって出入り口を目指す。

強く火花を散らして視線を躱す二人に気圧されつつも、白い液体に触れさせないよう担ぐ。白い液体に取り囲まれる前に、足元に細

心の注意を払って大扉の前まで退避を終えたところで、二人の激突がいつの間にか再開していたことに――その速度、静けさ、攻撃方法に――驚愕する。

「トキ、お前のし――いいぞ、それでこそ殺し甲斐がある！
もっと思うがままに舞って見せろ！
叫んでみせろ！
闘って戦って！
生存続けてみせろ！
その果てに己の四凶を見極めて消失点を定めて苦しみ続けてゆけ！」

コントンの姿のまま、光を纏った右手から、光の魔女：ボルトが得意とする五指光線が伸びる。
外側から内側へ振りぬく右手の光線。
床や壁の白い液体を弾き飛ばして迫る切断ビームを、トキは左側から迫るその軌道上に黒い球体状の何かを数個出現させてやり過ごした。

（織夜秋の消滅小球か！）

祭壇の如く卓から見守るバースヤードは2人の繰り出す技に肝を抜かれた。
それらの攻撃が既知のものであるが故に、何故二人の繰り出す技が本来他人が持つのオリジナルを完全に再現して、まるで自分の能力であるかのように扱えているのか。答えは分かりきっているはず

なのに、お互いが巨大な器のようなＳＲであると知っているのに、それでもオリジナルパーソンという信仰を捨てきれないオウル・バースヤードも、元々人の子であったものだと実感すると同時に衝動に駆られて手を動かす。

そんなオウルを眼中にとめることなく二人の再現は続く。

（ノアのシステムモードはまだ辛うじていける！

リアルタイムスコープ：アナライザーアンセンテンス起動！）

無音にノアのシステムが二人のＳＲを追う。

この空間が神殿たるワケ、部屋そのものを一つのＳＲとして核構築することによりあらゆる機能を付加することのできる、言ってってしまえば万能部屋でもあるのだ。

（参照、協会データベース：レベルオールフリー。

フェースオーバー、ナノカテゴライザを回帰千進の連環に注す）

内にいるオウルの誰かが持つ支配の力を以てしても目撃できなかったトキの超高速回復、コントンかフィングのいずれかが繰り出している限りなくオリジナルに近い能力再生。それらの秘密を暴くために起動したシステムは、これまでに蓄積してきたＳＲに関する全データをマザーデータベースから引用して画面に表すものだった。

オウルの意志を汲み取ったアナライザーが、早速透過ディスプレイも同然の空中に二人の攻撃方法とそのオリジナル所有者を表示して知らせる。

・光撃（Ｌｉｇｈｔ　Ａｔｔａｃｋ）：ボルト・パルダン
・死結（Ｂｌａｃｋ　Ｅｎｄ）：オリヤ　アキ

画面から目を上げると次の再現が始まっていた。
光線を全て飲み込んだ黒い球体を、銀色の鋭利がトキの胸板もろとも貫通する。
しかし、それにすら怯まないトキは右手をコントンに向けてかざし、次の瞬間にはコントンの体が宙を舞っていた。

・銀爪（Ｄｕｓｔ　Ｓｉｌｖｅｒ）：セリマ　コウセイ
・念撃（ＰＫ）：ギュン・パクフォン

矢継ぎ早に繰り広げられる二人の、防御を思わせない攻撃の重ね合いが流血を初めとした損失を現し始める。
中空に投げ出されたコントンの右足と左腕に二刃が斬裂を刻む。

・呪具投擲（Ｓｏｕｌ　ｏｆ　Ａ　Ｗａｒｒｉｏｒ）：アヌビス　アックス

投擲斬撃と同時、コントンの体を深く抉った得物が混沌に沈み消える。鋭利がもたらした傷口はまたたくまに逆再生の如く閉じて消える。

・時間奪取（Ｃｈｒｏｎｏ　Ｃｅｐｔｏｒ）：シキヨ　トキ

二人の傷が同じ力によって消える。傷口だけは。
次の痛覚を先制刺激するのは、コンマ数秒の差でコントンが優れた。選択した得物は“空間”である。
突如発生する不可解な引力によって、トキは前のめりに体勢を崩し、急いで庇い手を出すがそれを予期してコントンは――同時にト

キも――手を打った。

・空間拡縮（Ｃｏｄｅａｄ　Ｓｐｈｅｒｅ）：ベクター・マウリシオ

初めて目撃する能力を駆使する二人に、そもそも他人のモノであるべき力を、さも当然と使い果たしている二人に、オウルは言葉を失って口を閉ざせずにいた。

体勢を崩したトキを、地面を突き破るようにして現れた結晶が赤と望んで待ち構えていることに気付いた。だがトキはその状況を免れようとする素振りを見せない。

トキが結晶の上に勢いよく飛び込み貫かれる瞬間、コントンは悪寒を覚え、そして下手な手を打ってしまったのではと予感し、まさにそれが的中したのである。

瞬きせず見守っていたオウルの目には、二人の位置状況が完全に逆転、入れ替わっていたという以外解しようのない光景が伝わった。

・反撃転（ＦｒｏｎｔＢａｃｋ　Ｒｅｖｅｒｓ）：ルイケ　カオリ

結晶の棘地獄に倒れこんだのがコントン、空中から崩れた姿勢のまま落下したのがトキ。

その位置反転の力をオウルやコントンが知らなかったのは、単純にコントンの記憶にはトキのクラスに現れた新米ＳＲがいなかったというだけの話だ。それだけではあるが、記憶の手繰り合いである対決の最中に於いて相手の知らない力とはそれだけでアドバンテージに――本来ならそうなってもおかしくはないはずだ――が、

・全身過食（Ｅｓｔ　Ｂｅｓｔ　Ｒｅｓｔ）：トウテツ

二人の引き出しする頭の中を把握しているわけでもないオウルには、更には当人たる二人にさえ決着が霞み始め、次の数手を打つ頃

には見失っていたことが薄々伝わってきた。
結晶の刺々しい輝きも、コントンの体に触れた瞬間に消えて無くなる。

・結晶侵食（Ｃｒｙｓｔａｌ　ｄａｙｓ）

追撃の銃弾さえも額に、表皮に触れた瞬間から消滅する。
トキが足場を取り戻す、コントンが伏していた床を離れる。
先制して牽制しようと咆哮するサブマシンガン：Ｖｚ６１を両手に取ったトキに、翼と爪を剥き出しに迫るコントンは怒りを込めて口撃を始めた。

・時間創造（Ｃｒｅａｔｉｖｉｔｙ　ｏｆ　Ｃｈｒｏｎｏ）：シキヨ　トキ
・凶翼虎口（Ｒａｎｇｅ－Ｒａｍｐａｇｅ）：キュウキ

「お前は四凶を極めなくてはならんのだ！」

叫び飛来するコントンを槍の薙ぎ払いでもって迎撃する。切っ先をコントンの飛空経路に合わせた、土壇場ながらも上々な一撃は、それでも掠りさえしないという予感が放ったトキ自身にあった。

・風重槍（ＣＵｌｌＴｕｒｅ）：トウコツ

左翼を差し出すコントンは白く面積の広い羽を視界閉塞の壁と変えた。
二人の間には翼一枚。
しかし、互いに相手を見失っておきながらも対決の進路は同時に

空中へ向かった。
一枚の障壁を貫く二人の右手はそれぞれ剣と銃を創造し、削りあい、衝突しあって、もつれ合いながら落下して地面を背に墜落して少し止まる。
互いの負傷には大差が生じていた。コントンが左腕をレンコンも顔負けなほど穴ぼこにされたのに対し、トキは両目を失い、更に右手の親指を除く四指を斬りおとされ、おまけに脇腹と太股にも決して浅くはない切れ筋が走っていた。

「勝手言うなよ、何で俺がなんなきゃいけないんだよ……」

先に立ち上がったトキの言葉に追撃の赤が記される。
その呼吸を紡いでいる心臓に刺突、それから首筋に細い線が一本。
とどめと言わんばかりの刺突が背中から腎臓と肝臓に向けて二撃。
血筋を空中に誘わないほどの高速で走った。
僅かによろめく。
だが、トキはそれ以上の挙動を微塵も見せずにコントンへと向き直る。或いは、それが限界という風にも、オウルとコントンには見えた。
それまでの高速戦闘を無秩序に放棄し、被弾し、明らかに劣勢へと追い込まれ、死淵に転がりつつあるはずなのに、その表情は血涙や脂汗に汚れていながらも穏やかだった。
それをコントンが今更不気味と思わない理由は、トキの両足がしっかりと白い液体に捕まっているのが視認できていたためだ。

「そうか、これがノアの血なんだ……」

つぶやくトキの言葉に、ここが秘龍の体内であることを再認識したコントンの背筋に悪寒が走る。
今すぐあれを止めろと、殺せと、何もさせるなと本能がつぶやく。

（進化して、深化していく……そうだな、コントンとはすなわち“変化・成長”とも言えるか！）

ひたすら見ることに集中し、参戦したい衝動を抑えるオウルは四凶の一部を僅かに理解する。
混沌こそ人が生きていくうえで欠かせない悪性でありながら、同時に最も親密すぎて意図することすら稀有な行為の核であるのだと。
文化文明が発達の可能性を秘めている世界でならば必ずしも発生しうる現象だと。

「終わったな」

宣言するコントンに、頷くトキ。

「あぁ、そうかい」

例えば、言葉。
子供は、大人にそれを習うが、教える大人も子供の頃には同じように人生の先人達に習い、そこには果てしない繰り返しや或いは試

行錯誤がある。
例えば、食事。
今はレトルトがある、昔は自然の中にある材を食した。更に大昔は毒物さえも食してきた。それらが直接人体に影響を及ぼすかどうか、果たしてその成果も無限の繰り返しの中で学習・研鑽した結果に得た文明である。
例えば、闘争。
徒手空拳から武器戦闘に到るまで、現代と古代ではその戦術や規則、規模や理由なども様々である。より効率化を研究し、試し、繰り返してきた結果として銃器や戦闘機、核兵器などという凶器さえも現実化している。
それら全て、原始的に始まったものは全て文明の中において変化を遂げ、進化を続け、数値や快適を求めた因果を成し、禍央たる暗闇に渾沌を隠す。進化にばかり目を向けるあまり、深化していく悪性に気付くことなく、そういう時代なのだと人は俯く。

「ならばそれ以上喋るな！！」
「じゃあ、お前も動くな」

変わるという未知、変えるという意志。
そのギャップから溢れる渾沌が未来に何かをもたらそうと、少なくともそれは人に関わらずにはいられない。
変わるということが、変えるという必要性が渾沌の源泉でもあるのだ。

（その一瞬が対決の決着か！）

視力を失ったトキの援護をしてやろうかと思い立ったオウルだが、コンソールから離し掛けた指を元の位置に戻す。

トキとフィングの意には反するが、若いオウル自身としては熟成していくトキの新たなる混沌の輪郭というものを見届けたいという衝動があった。両足を封じられ、視界を閉ざされ、体内循環器系と内臓に深刻な損傷、更には解消が難しい心的疲労が体力のそれと並んで致死量にあると十分に推測できる、間違いない絶体絶命に陥っているのだ。

そんな傍目に見ても有利はコントンにあるはずなのに、審判の如く見守っているオウルと、対峙するコントン当人の脳裏には、次に地面に伏すのは純粋な四凶たるコントンであるとうい色彩と輪郭を持った予感が来襲していた。

（分かる……コントンは、真後ろ！）

この場に及んで加速する力を手繰るトキには、視力を失っておきながら全てが見えている以上に知覚できていた。

新たに感じる力の触り心地は、日干しでふかふかになった布団も同然の柔らかさがあった。

その力は負荷という面で数時間の頭脳労働にも匹敵する疲労をもたらしたが、それでも全ての死角に対して万全の備えを取り、間違いなく迎撃するに十分な情報をもたらしてくれた。

（何を企んでいるトキ！　急がなきゃお前とコントンは……！）

（ククッ、何を企んでいようと最早手遅れだよ、フィング・ブリジスタス！

トキは白純血に浸かった。私に知覚できるだけでも、トキは足元から能力減衰、退行、異質化を始めている！　ＳＲとしての力が消滅するまでそう時間を要すまい！）

行動の時間を失ったトキを警戒しつつ、コントンは最も安全且つ確実と思われる方法で仕掛ける。

まず反時計回りに移動してトキの周りに信管を抜いた手榴弾を１２個、時間凍結空間に固定して第一の結界を形成した。

次に、複数種類の銃弾による包囲網を、同じように時間凍結空間を用いて結成する。拳銃弾のような小口径弾頭から長物に用いる大型弾、更にはバードショットから一榴弾のような各種散弾、対装甲用大型弾、それに加えてスローイングナイフ、弓の矢、投げ槍、棘付鉄球（フレイル）などで第二の結界を形成。

最後に第三の結界として、コントン自身が分身体を発し、都合４人のコントンでトキを四方から囲み、それぞれが異なる得物、異なる姿を装って万一の事態に備える。

（厄介なのは、瞬時に立ち位置を逆転させる能力。それだけが危ない！）

コントンとフィング、二人が揃って知らないトキのコピープレイ対象能力。

それを誤魔化せるかどうか、果たして確証はないが４人の包囲から視界を失ったトキが的確に本体と位置を逆転させることが出来るとは思えない。だから分身でトキを包囲し、言葉で撹乱しつつ一方的に終わりを突く。

それがコントンの戦略。

「逃げろトキ！」
「そして死ね！」
「生き続けろ！」
「やめろトキ！」

しかし、未知同士の戦いに変わっていたこの状況下、コントンの目論見は完全に外れていた。

（うん？　スピーカーでも作ったのか？）

四方から声が響いたと思った直後、コントンの結界が炸裂する。
最初は第三の結界。４人のコピープレイによる光撃と銀爪と斬撃突風とデザートイーグルによる銃撃。
次は第二結界、銃弾と投擲武器による全方位からの全包囲攻撃。
第一の結界は、前者二つの結界を後押しが如く、爆風は刃物や破片を撒き散らしていた。
頭上に４つの爆発、周囲に８つの爆発。
それら爆炎の圧に押されて加速した凶弾が、凶刃が、乱れ撃ちも同然に荒ぶる軌道で一切の退路を断ちつつ、本来なら絶望を通り越し、約束された結末たる死を叩きつける。
そんな状況が、僅か数センチ先まで迫っていた。

「これでも生きていられるのか！？」

爆風に、攻撃の余韻にオールバックの髪を乱しながら、額に玉のような汗を浮かべながらコントンは爆発の中心部に、いまだかつて知覚したことのないほど強大な生命力を感じ取っていた。自らに帰ってきた刃の破片が頬に突き刺さっていることをどうにか知覚するまで時間を要するほど、でたらめで感覚が麻痺するほどの波動が四凶に鳥肌を立てた。

「……悪い、生きている。生きていられるんだ、今の俺」

はたして爆炎の中に無傷で帰還していたトキは、負傷していた両目と身体機能の全てを回復した状態で佇んでいた。

・――ケイソクチュウ――

足元に弾痕がある、刃物の残骸もある。

・――該当ナシ：進化ノ可能性アリ――

爆炎の焦がした黒が見える、それらに混じってトキの両足を這い上がっていく白純血も見える。

・――判明：シキヨトキ、ネクストレベル――

動けないはずのトキを前に、コントンの意志は逃げ出していた。だが、体の主導権をフィングに奪われている今、その意志が体現されることはない。

見守るオウルも、違う意味で駆け出したかった。

・――派生源：Ｌｖ．０タイムリーダー

「どうやって……」

・↓　Ｌｖ．１：クロノセプター

「こっちも爆風で押し返した。ただそれだけだ」

・↓　Ｌｖ．２：クリエティビティ・オブ・クロノ
↓　Ｌｖ．３：クロスセプター
解析：時間の奪取と時間による創造が主な使用方法

「押し……フフフッ、馬鹿な弾丸ごと、爆風もありながらそんなことがあるのか！」

コントンを絶望に落とすために、フィングはあえてトキの解説を誘導する。

「出来るさ、やる気と勇気があれば」

・↓　Ｌｖ．４：クローズド・クロノ

解析：操作した時間の限定的空間遅延制御

「お前のそれを勇気とは言わん！
見えていたのか、仕掛けるタイミングが！？」
「いいや、見えなかったけど、感じることはできた。この力でね」

・↓Ｌｖ．５　．．．■

「見えるかコントン、この糸が。俺とお前を繋ぐ――」

「これは……アイツか！」

・Ｌｖ．５　クラシックケージ（Ｃｌａｓｓｉｃ　Ｃａｇｅ）．．．
■

「俺が死を見届けた、マスターピースって人から譲られた力だ！」

絶対糸配の先に終わりを感じる。
コントンは死を覚え、フィングは楽園への予感を実感していた。

「直接斬りにゆくべきだったのか！？」

驚愕を隠そうともしないコントンを睨み、トキは躊躇せずにそれを繰り出す。
もう次を与えない。
時間を許さない。
殺さず止める。
その為の力だ。
全ての元凶を覗く。
過去を丸裸にしてやる。
隠蔽されてきた現実の一切を知ってやる！

「手遅れだ、コントン！」

お互いの記憶情報を交換して得るクロス・セプター。その上位互換、相手の過去（とき）へと潜り込み、そこにある風景を間近で見守る、記憶という枠を超越した一種の時間遡航技。
“クラシック・ケージ”
不可視の糸を手繰ってコントンを引き寄せ、左手を衝突させる。
体の支配権を持たないコントンは無防備にその掌を顔面に受けていた。

（記憶に潜りこむ気か！）

トキもコントンも、回復の術に長けている現状で削り合いを続けたところで、永久に等しい時間が必要となってくる。
そんな全てが手遅れになる状況を招かないためにも、コントンを――出来るかどうか、言ってしまえば不安の方が勝る方法で――“

無限の形／再生”と“身体異常の脆さ／フィング”の心から切り崩していく。それが思いついた攻略法。

次の瞬間だった。

コントンが膝を折って幻覚の中に落ちていくのを、オウルは静かに見届けながら確信した。

駆ったのはコントンだが、勝ったのはトキだと。

意識が現実を離れていく二人の体が、ゆっくりと白純血に飲み込まれていくのを、男はただ静かに見守ることしかしなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6763a/

Second Real/Virtual

2011年9月1日23時44分発行